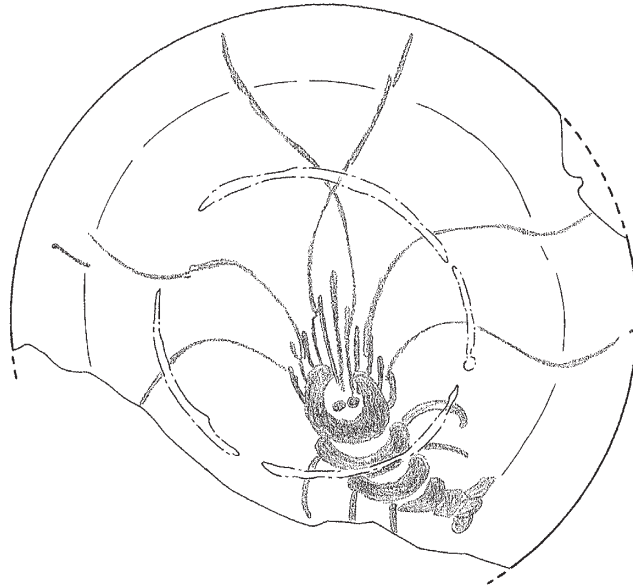


# 松坂城下町遺跡(第1～9次)発掘調査報告

## ～松阪市本町～



瀬戸・美濃海老文皿

2021（令和3）年3月

三重県埋蔵文化財センター











伊勢国松坂古城之図（正保城絵図、正保2～承応3年、国立公文書館蔵）

※ 右下が北、矢印先が調査地中央







松坂町絵図（享和以降、公益財団法人三井文庫蔵） ※右下が北、矢印先が調査地中央



5次S Z 550出土遺物



# 例 言

- 1 本書は、都市計画道路松阪公園大口線街路事業に伴う松坂城下町遺跡（第1～9次）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、三重県松阪市本町に位置する。
- 3 発掘調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から依頼を受けて実施した。発掘調査および整理作業の経費は、三重県県土整備部から執行委任を受けた。
- 4 発掘調査期間は平成20年（2008）4月14日～令和2年（2020）3月25日である。
- 5 第1～9次調査の発掘調査面積は、計2,270㎡である。
- 6 調査の体制は以下の通りである。  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課  
各次の調査担当は第I章を参照されたい。
- 7 本書の編集は森川常厚があたり、文責は目次及び文末に記した。遺物写真撮影は森川、櫻井が行った。
- 8 発掘調査および整理作業に際し、下記の諸氏や機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい。  
丸山真史、内川隆志、水本和美、中野環、松阪市教育委員会、松阪市文化財センター、公益財団法人三井文庫、東京大学総合博物館（敬称略、順不同）
- 9 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

# 凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000数値地図（「松阪」相当、(平成20年10月発行)、三重県共有デジタル地図（2017）の1:10,000（06PF1A・B）、1:2,500地形図（06PF212・214・221・223）を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（令和2年4月1日付三総合地第2号）。
- 2 標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。
- 4 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。  
SE：井戸 SK：土坑 SD：溝 Pit：柱穴 SX：不明遺構 SZ：不定形遺構
- 5 土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
- 6 遺物実測図の縮尺は1:4を基本とし、その他の縮尺を適宜用いた。
- 7 註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。
- 8 遺構一覧表、遺物観察表は各調査ごとに付した。
- 9 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
  - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
  - ・色調は標準土色帖の色名（「黄橙色」など）で記す。
  - ・土器の残存率は全周を12分割して示す（例：口縁部3/12）。1/12以下のものは「口縁部片」など。
  - ・出土砥石の粒度は、JIS研磨剤の規格に準拠するサンドペーパーに対比して示す。粒度は#40以下、80（粗目）、120、180（中目）、320、600（細目）、1000、2000以上（極細目）の8段階とした。
- 10 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。



- 11 中近世の土器・陶磁器の分類・編年と暦年代観は、註で特に断らない限り下記文献に従う。基本的に生産地の編年・分類により、補足的に消費地編年・分類を参照した。
- ・南伊勢系土師器 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2、三重県、2008年/伊藤裕偉「近世土師器の形態と編年」『高河原遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2015年。
  - ・肥前系陶磁器 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年。
  - ・京都・信楽系陶器 京焼:角谷江津子「同志社校地出土の京焼とその変遷」『同志社大学歴史資料館館報』第2号、同志社大学歴史資料館、1999年/信楽焼:畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版、2003年。  
なお、「京都・信楽系」の定義は東京大学埋蔵文化財調査室(1998)に従う。
  - ・瀬戸・美濃系陶器 大窯期:藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯、2002年/登窯以降:瀬戸市『瀬戸市史』陶磁史篇6、1998年。
  - ・常滑焼 愛知県『愛知県史』別編窯業3、2012年/大甕:扇浦正義「常滑大甕の編年的考察」『自證院遺跡』新宿区教育委員会、1987年/赤物:中野晴久「常滑窯の研究 近世赤物について」『知多古文化研究』10、1996年。
  - ・山茶碗 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3、三重県埋蔵文化財センター、1994年。
  - ・陶磁器全般 堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1、東京大学埋蔵文化財調査室、1997年/東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』1998年。
- 12 巻頭図版に掲載した城下町絵図の出典は以下のとおりである。
- ・「伊勢国松坂古城之図」(内閣文庫、独立行政法人国立公文書館蔵):国立公文書館デジタルアーカイブより引用
  - ・「松坂町絵図」(公益財団法人三井文庫所蔵):松阪市『松阪市史』別巻1 松阪地図集成、1983年より転載。掲載にあたり松阪市および公益財団法人三井文庫の許諾を得た。

# 目 次

I. 前言	(櫻井拓馬)	1
1. 調査に至る経緯		1
2. 調査の経過		1
3. 文化財保護法にかかる諸手続		1
II. 位置と環境	(櫻井拓馬)	4
1. 地形と地質		4
2. 城下町以前		6
3. 城下町以後		6
4. 近現代の松阪		10
5. 既往の発掘調査		12
III. 第1次調査		13
1. 層序と遺構	(森川常厚)	13
2. 遺物	( 〃 )	17
3. 木製品の樹種調査	(榊吉田生物研究所)	18
4. 小結	(森川常厚)	19
IV. 第2次調査	(森川常厚)	20
1. 層序と遺構		20
2. 遺物		25
3. 小結		60
V. 第3次調査	(櫻井拓馬)	27
VI. 第4次調査	(森川常厚)	34
1. 層序		34
2. 遺物		34
3. 小結		35
VII. 第5次調査		37
1. 調査の概要	(櫻井拓馬)	37
2. 基本層序	( 〃 )	37
3. 遺構	( 〃 )	41
4. 遺物	( 〃 )	47
5. 自然科学分析	(櫻井拓馬・(一社)文化財科学研究センター・環境考古研究会)	130
6. 小結	(櫻井拓馬)	177

VIII. 第6次調査	179
1. 遺構	(森川常厚) 179
2. 遺物	( 〃 ) 186
3. 樹種同定1	(株吉田生物研究所) 232
4. 樹種同定2	((一社)文化財科学研究センター) 233
5. 樹種同定3	(株パレオ・ラボ) 234
6. 付着物分析1	(株パレオ・ラボ) 236
7. 付着物分析2	(株吉田生物研究所) 239
8. 鉄成分分析	(日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所) 241
9. 小結	(森川常厚) 246
IX. 第7次調査	248
1. 遺構	(森川常厚) 248
2. 遺物	( 〃 ) 250
3. 木製品の樹種調査	(株吉田生物研究所) 270
4. 塗膜調査1	( 〃 ) 272
5. 塗膜調査2	( 〃 ) 272
6. 小結	(森川常厚) 274
X. 第8次調査	275
1. 遺構	(森川常厚) 275
2. 遺物	( 〃 ) 284
3. 塗膜分析	((一社)文化財科学研究センター) 330
4. 樹種同定1	( 〃 ) 339
5. 樹種同定2	(株吉田生物研究所) 342
6. 植物遺体同定	( 〃 ) 345
7. 材質調査	( 〃 ) 345
8. 小結	(水谷侃司・森川常厚) 346
XI. 第9次調査	348
1. 基本層序	(水谷侃司) 348
2. 遺構	( 〃 ) 349
3. 遺物	(森川常厚) 355
4. 樹種同定	((一社)文化財科学研究センター) 363
5. 小結	(森川常厚) 364
XII. 総括	365
1. 城下町の変遷と古環境	(櫻井拓馬) 365
2. 出土遺物の特徴	(櫻井拓馬・渡辺和仁) 372
3. 松坂城下町遺跡の特質	(櫻井拓馬) 382
4. 今後の課題と展望	( 〃 ) 382

## 挿 図 目 次

第1図	調査地点位置図……………	2	第40図	第5次調査出土遺物⑤	
第2図	地形分類図……………	5		SK524・SK525・SD526・SK527…	57
第3図	松坂城下町遺跡周辺の微地形……………	5	第41図	第5次調査出土遺物⑥ SK528・SK529	
第4図	遺跡分布図……………	7		・SK530・SK531・SK532・SK533・SD534…	58
第5図	松坂城下町全体図……………	9	第42図	第5次調査出土遺物⑦	
第6図	第1次調査区位置図……………	13		SD538・SK542・543…	59
第7図	第1次調査T1～T3平面図……………	14	第43図	第5次調査出土遺物⑧ SK542・543…	60
第8図	第1次調査T1～T3土層断面図……………	14	第44図	第5次調査出土遺物⑨	
第9図	第1次調査T4平面図……………	15		SK542・543・SK548・SD549…	61
第10図	第1次調査T4土層断面図……………	15	第45図	第5次調査出土遺物⑩ SD549・SZ550…	62
第11図	第1次調査出土遺物……………	16	第46図	第5次調査出土遺物⑪ SZ550…	63
第12図	溝状遺構想定図……………	18	第47図	第5次調査出土遺物⑫ SZ550…	64
第13図	第2次調査区位置図……………	20	第48図	第5次調査出土遺物⑬ SZ550…	65
第14図	第2次調査区平面図①……………	21	第49図	第5次調査出土遺物⑭ SZ550…	66
第15図	第2次調査区土層断面図①……………	21	第50図	第5次調査出土遺物⑮ SZ550…	67
第16図	第2次調査区平面図②……………	22	第51図	第5次調査出土遺物⑯ SZ550…	68
第17図	第2次調査区土層断面図②……………	22	第52図	第5次調査出土遺物⑰ SZ550…	69
第18図	第2次調査下部整地層等出土遺物①…	23	第53図	第5次調査出土遺物⑱ SZ550…	70
第19図	第2次調査下部整地層等出土遺物②…	24	第54図	第5次調査出土遺物⑲ SZ550…	71
第20図	第2次調査包含層等出土遺物……………	25	第55図	第5次調査出土遺物⑳ SZ550…	72
第21図	第3次調査区位置図……………	28	第56図	第5次調査出土遺物㉑ SZ550…	73
第22図	第3次調査1区・3区 遺構平面図…	28	第57図	第5次調査出土遺物㉒ SZ550…	74
第23図	第3次調査土層柱状図……………	29	第58図	第5次調査出土遺物㉓ SZ550…	75
第24図	第3次調査出土遺物①……………	30	第59図	第5次調査出土遺物㉔ SZ550…	76
第25図	第3次調査出土遺物②……………	31	第60図	第5次調査出土遺物㉕ SZ550…	77
第26図	第3次調査出土遺物③……………	32	第61図	第5次調査出土遺物㉖ SZ550…	78
第27図	第4次調査立会坑位置図……………	34	第62図	第5次調査出土遺物㉗ SZ550…	79
第28図	第4次調査土層柱状図……………	35	第63図	第5次調査出土遺物㉘ SZ550…	80
第29図	第4次調査出土遺物……………	36	第64図	第5次調査出土遺物㉙ SZ550…	81
第30図	第5次調査区位置図……………	38	第65図	第5次調査出土遺物㉚ SZ550・SZ551…	82
第31図	第5次調査土層柱状図①……………	39～40	第66図	第5次調査出土遺物㉛ SZ551…	83
第32図	第5次調査土層柱状図②……………	41	第67図	第5次調査出土遺物㉜ SZ551…	84
第33図	第5次調査遺構平面図①……………	43	第68図	第5次調査出土遺物㉝ SZ552…	85
第34図	第5次調査遺構平面図②……………	45	第69図	第5次調査出土遺物㉞	
第35図	ランランノイポマードの新聞広告…	51		3区Pit・1区整地層等…	86
第36図	第5次調査出土遺物①		第70図	第5次調査出土遺物㉟	
	SK501・SD502・SK503・SK509 ……	53		2区・3区整地層等…	87
第37図	第5次調査出土遺物② SK505・SK506		第71図	第5次調査出土遺物㊱ 3区整地層等…	88
	・SK508・SK510・SK511・SK512・SD515		第72図	第5次調査出土遺物㊲	
	・SK516・SK517・SK518…	54		4区・5区整地層等…	89
第38図	第5次調査出土遺物③ SK513…	55	第73図	第5次調査出土遺物㊳	
第39図	第5次調査出土遺物④			7区・8区整地層等…	90
	SK513・SK520・SK522・SK523…	56	第74図	第5次調査出土遺物㊴ 8区整地層等…	91

第75図	第5次調査出土遺物⑩ 8～12区整地層等…	92	第109図	第6次調査7区整地層出土遺物①…	198
第76図	第5次調査出土遺物⑪ 12区整地層等…	93	第110図	第6次調査7区整地層出土遺物②…	199
第77図	第5次調査出土遺物⑫ 攪乱・その他…	94	第111図	第6次調査8区・9区出土遺物…	200
第78図	第5次調査出土遺物⑬ 木製品…	95	第112図	第6次調査SK6028出土遺物①…	201
第79図	第5次調査出土遺物⑭ 木製品…	96	第113図	第6次調査SK6028出土遺物②…	202
第80図	第5次調査出土遺物⑮ 木製品…	97	第114図	第6次調査SD6032・6033出土遺物…	203
第81図	第5次調査出土遺物⑯ 木製品…	98	第115図	第6次調査11区出土遺物…	204
第82図	第5次調査出土遺物⑰ 木製品、金属製品…	99	第116図	第6次調査12区・13区出土遺物…	205
第83図	貝殻の計測点と切断面の模式図…	167	第117図	第6次調査14区出土遺物…	206
第84図	第5次調査 花粉・寄生虫卵ダイアグラム…	168	第118図	第6次調査15区出土遺物…	207
第85図	第5次調査 植物珪酸体分析結果…	168	第119図	第6次調査16区出土遺物①…	208
第86図	第5次調査 主要珪藻ダイアグラム…	169	第120図	第6次調査16区出土遺物②…	209
第87図	第5次調査 漆塗膜蛍光X線分析結果…	172	第121図	第6次調査17区出土遺物…	210
第88図	第5次調査 花形飾りのEPMAスペクトルⅠ…	173	第122図	第6次調査18区遺構出土遺物…	211
第89図	第5次調査 花形飾りのEPMAスペクトルⅡ…	174	第123図	第6次調査18区整地層他出土遺物…	212
第90図	第5次調査 花形飾りのFT-IRスペクトル…	175	第124図	第6次調査SK6057出土遺物①…	213
第91図	第5次調査 遺構の変遷…	178	第125図	第6次調査SK6057出土遺物②…	214
第92図	第6次調査区位置図…	179	第126図	第6次調査SD6058 ・SK6059出土遺物…	215
第93図	第6次調査2・3区平面図、 土層断面図…	180	第127図	第6次調査SD6060出土遺物…	216
第94図	第6次調査4～7・19・23区平面図、 土層断面図…	181	第128図	第6次調査20区・21区出土遺物…	217
第95図	第6次調査1・8～12・14・21区 平面図、土層断面・出土状況図…	183	第129図	第6次調査22区出土遺物…	218
第96図	第6次調査13・15～18・20区平面図、 土層断面図…	185	第130図	第6次調査23区出土遺物…	219
第97図	第6次調査22区平面図、土層断面図…	186	第131図	第6次調査各塗膜層の 赤外分光スペクトル…	237
第98図	第6次調査SD6001出土遺物①…	187	第132図	第6次調査付着物のスペクトル…	240
第99図	第6次調査SD6001出土遺物②…	188	第133図	第6次調査比較試料：漆…	240
第100図	第6次調査SD6001出土遺物③…	189	第134図	第6次調査比較試料：柿渋…	240
第101図	第6次調査SD6001出土遺物④…	190	第135図	鍛造剥片3層分離型模式図…	246
第102図	第6次調査1区出土遺物…	191	第136図	第7次調査区位置図…	248
第103図	第6次調査2区包含層出土遺物…	192	第137図	第7次調査6～9区土層断面図…	248
第104図	第6次調査2区造成土、 3区遺構出土遺物…	193	第138図	第7次調査区平面図、土層断面図…	249
第105図	第6次調査3区包含層出土遺物…	194	第139図	第7次調査1区・3区出土遺物…	251
第106図	第6次調査3区造成土、 4区上層土坑出土遺物…	195	第140図	第7次調査4区出土遺物…	252
第107図	第6次調査4区出土遺物…	196	第141図	第7次調査SE7007出土遺物①…	253
第108図	第6次調査5～7区出土遺物…	197	第142図	第7次調査SE7007出土遺物②…	254
			第143図	第7次調査SE7007出土遺物③…	255
			第144図	第7次調査5区・6区出土遺物…	256
			第145図	第7次調査SK7011出土遺物…	258
			第146図	第7次調査SK7012出土遺物…	259
			第147図	第7次調査SE7013出土遺物①…	260
			第148図	第7次調査SE7013出土遺物②…	261
			第149図	第7次調査SE7013出土遺物③…	262
			第150図	第7次調査SE7013出土遺物④…	263
			第151図	第7次調査7区・8区出土遺物…	264
			第152図	第7次調査 調査試料…	271

第153図	比較資料：漆	271	第191図	第8次調査3区造成土等出土遺物①	311
第154図	比較資料：柿渋	271	第192図	第8次調査3区造成土等出土遺物②	312
第155図	第7次調査黒色部のスペクトル	273	第193図	第8次調査3区造成土等出土遺物③	313
第156図	比較資料：漆	273	第194図	第8次調査3区造成土等出土遺物④	314
第157図	比較資料：柿渋	273	第195図	第8次調査3区造成土等出土遺物⑤	315
第158図	第8次調査区位置図	275	第196図	第8次調査SZ828出土遺物	316
第159図	第8次調査1区平面図	276	第197図	第8次調査SZ828、 4区包含層出土遺物	317
第160図	第8次調査1区土層断面図①	277	第198図	第8次調査蛍光X線分析結果Ⅰ	332
第161図	第8次調査1区土層断面図②	278	第199図	第8次調査蛍光X線分析結果Ⅱ	333
第162図	第8次調査2区・3区平面図	279	第200図	第8次調査蛍光X線分析結果Ⅲ	334
第163図	第8次調査2～4区平面図	280	第201図	第8次調査蛍光X線分析結果Ⅳ	335
第164図	第8次調査2区土層断面図	281	第202図	第9次調査区位置図	348
第165図	第8次調査3区土層断面図	282	第203図	第9次調査1区平面図、 土層断面図	348
第166図	第8次調査4区土層断面図	283	第204図	第9次調査2～4区平面図①、 SE911・SK915・SE905断面図	350
第167図	第8次調査SK801・SK802出土遺物	285	第205図	第9次調査2～4区平面図②、 SK904・SK916・SE901断面図	351
第168図	第8次調査SK803出土遺物①	286	第206図	第9次調査2区土層断面図	352
第169図	第8次調査SK803出土遺物②	287	第207図	第9次調査3区土層断面図	353
第170図	第8次調査1区遺構 ・包含層出土遺物	288	第208図	第9次調査4区土層断面図	353
第171図	第8次調査1区包含層出土遺物	289	第209図	第9次調査SE901・SE905出土遺物	354
第172図	第8次調査1区造成土、 焼土坑等出土遺物	290	第210図	第9次調査SE909・SE911出土遺物	356
第173図	第8次調査2区遺構出土遺物	291	第211図	第9次調査SK904・SK916・SK917 出土遺物	357
第174図	第8次調査SZ831出土遺物①	292	第212図	第9次調査包含層他出土遺物	358
第175図	第8次調査SZ831出土遺物②	293	第213図	第9次調査下層出土遺物	359
第176図	第8次調査SZ831出土遺物③	295	第214図	基本層序と調査地の微地形	365
第177図	第8次調査SZ831出土遺物④	296	第215図	松坂城下町東外縁部の町割と 背割下水・総堀	367
第178図	第8次調査SZ831出土遺物⑤	297	第216図	総堀推定復原図	368
第179図	第8次調査2区小穴出土遺物	298	第217図	松坂城下町東外縁部の土地変遷史	370
第180図	第8次調査2区包含層出土遺物①	299	第218図	松坂城下町東外縁部の遺構変遷図	371
第181図	第8次調査2区包含層出土遺物②	300	第219図	土器・陶磁器の組成	373
第182図	第8次調査2区造成土出土遺物①	301	第220図	主要陶器産地と消費地	377
第183図	第8次調査2区造成土出土遺物②	302	第221図	松坂城下町遺跡土器・ 陶磁器の変遷	378
第184図	第8次調査2区造成土出土遺物③	303	第222図	第5次調査出土具の構成	380
第185図	第8次調査2区造成土出土遺物④	304	第223図	近代の化粧品容器・統制陶器	381
第186図	第8次調査3区遺構出土遺物	305			
第187図	第8次調査SD827出土遺物	306			
第188図	第8次調査3区包含層等出土遺物①	308			
第189図	第8次調査3区包含層等出土遺物②	309			
第190図	第8次調査3区包含層等出土遺物③	310			

## 目 次

第1表 松坂城下町遺跡調査一覧…………… 3	第30表 第6次調査出土遺物観察表 …… 220～231
第2表 城下町絵図一覧…………… 8	第31表 第6次調査樹種同定結果1 …… 232
第3表 松坂城下町遺跡関連年表…………… 11	第32表 第6次調査樹種同定結果2 …… 233
第4表 第1次調査出土遺物観察表…………… 17	第33表 第6次調査樹種同定結果3 …… 234
第5表 第2次調査出土遺物観察表…………… 26	第34表 第6次調査樹種同定結果一覧…………… 235
第6表 第3次調査区一覧…………… 28	第35表 第6次調査分析対象一覧…………… 236
第7表 第3次調査 遺構一覧 …… 28	第36表 第6次調査生漆の 赤外線吸収位置とその強度… 238
第8表 第3次調査出土遺物観察表…………… 33	第37表 第6次調査赤色塗膜層の X線分析結果… 238
第9表 第4次調査出土遺物観察表…………… 36	第38表 第6次調査塗膜分析結果…………… 238
第10表 第5次調査区一覧…………… 38	第39表 第6次調査資料…………… 239
第11表 第5次調査 遺構一覧 …… 46	第40表 第6次調査漆製品の断面観察結果…………… 239
第12表 第5次調査出土遺物観察表…………… 100～129	第41表 第6次調査供試材の履歴と調査項目… 241
第13表 第5次調査 土壌分析試料一覧 …… 155	第42表 第6次調査供試材の化学組成…………… 242
第14表 第5次調査 花粉・寄生虫卵分析結果 …………… 156～157	第43表 第6次調査出土遺物の 調査結果のまとめ… 246
第15表 第5次調査 植物珪酸体分析結果 …… 157	第44表 第7次調査出土遺物観察表 …… 265～270
第16表 第5次調査 珪藻分析結果 …… 158	第45表 第7次調査木製品同定表…………… 270
第17表 第5次調査 種実同定結果…………… 159～160	第46表 第7次調査 調査試料 …… 271
第18表 第5次調査 動物遺体同定結果 …… 161	第47表 第7次調査漆製品の断面観察結果…………… 274
第19表 第5次調査 貝類同定結果（遺構別）… 162	第48表 第8次調査遺構一覧…………… 284
第20表 第5次調査 貝類同定結果（資料番号別） …………… 163～164	第49表 第8次調査出土遺物観察表 …… 318～329
第21表 第5次調査 貝類計測値…………… 165～166	第50表 第8次調査木製品樹種同定表①…………… 339
第22表 日周線による季節区分…………… 167	第51表 第8次調査木製品樹種同定表②…………… 343
第23表 ハマグリ の推定季節…………… 167	第52表 第8次調査植物遺体同定結果…………… 345
第24表 第5次調査 樹種同定① 結果一覧…………… 170	第53表 第8次調査材質調査資料の概要…………… 346
第25表 第3・5次調査 樹種同定② 試料・対象一覧… 171	第54表 第9次調査遺構一覧…………… 349
第26表 第3・5次調査 樹種同定② 結果一覧… 171	第55表 第9次調査出土遺物観察表 …… 360～362
第27表 第3・5次調査 樹種同定② 塗膜分析試料一覧… 171	第56表 第9次調査樹種同定結果…………… 363
第28表 第5次調査 樹種同定③ 試料・対象一覧… 176	第57表 第5次調査出土土器・ 陶磁器集計表… 374～375
第29表 第5次調査 樹種同定③ 結果一覧… 176	第58表 伊勢湾沿岸の主な貝出土例…………… 380



# 写 真 图 版

卷頭図版 1	城下町絵図	写真図版12	4区全景
卷頭図版 2	城下町絵図・出土遺物		4区土層断面
<b>第 1 次調査</b>			4区SK511検出状況
写真図版 1	調査前風景		4区SK511完掘状況
	調査後風景		5区SK512
写真図版 2	調査前風景		5区南側土層断面
	調査後風景	写真図版13	8区全景
写真図版 3	T 4 全景		8区東側土層断面
	木製品顕微鏡写真		8区SZ551貝出土状況
写真図版 4	陶器・磁器・土製品		8区西側土層断面
<b>第 2 次調査</b>			8区SK545
写真図版 5	立会調査風景		8区SK542検出状況
	15・16出土状況		8区SK521鉄滓出土状況
	土層		8区SK523
	土師器	写真図版14	9区調査状況
写真図版 6	陶器・磁器・瓦・石製品・木製品		9区土層断面
<b>第 3 次調査</b>			10区土層断面
写真図版 7	調査前風景		10区SK527
	1区全景		11区全景
	1区東壁		11区SK530
	2区東側調査状況		11区SK529断面
	2区中央北壁	写真図版15	12区全景
	3区SX301検出状況		12区SE535付近遺構検出状況
	3区東壁		12区SK536検出状況
写真図版 8	遺物		12区SZ550検出状況
<b>第 4 次調査</b>			12区SZ550貝出土状況
写真図版 9	No. 1		12区路床改良時立会状況
	No. 7	写真図版16	遺物①
	陶器・磁器	写真図版17	遺物②
<b>第 5 次調査</b>		写真図版18	遺物③
写真図版10	1区全景	写真図版19	遺物④
	2区土層断面	写真図版20	遺物⑤
	2区調査地全景	写真図版21	遺物⑥
	2区全景	写真図版22	遺物⑦
	3区調査状況	写真図版23	遺物⑧
	3区SD507・SK508	写真図版24	遺物⑨
写真図版11	3区SK506	写真図版25	遺物⑩
	3区SK505検出状況	写真図版26	遺物⑪
	3区SK503貝出土状況	写真図版27	遺物⑫
	3区SK509	写真図版28	遺物⑬
	3区SZ550遺物出土状況	写真図版29	遺物⑭
	3区P3	写真図版30	遺物⑮
	3区P1	写真図版31	遺物⑯
		写真図版32	遺物⑰



写真図版33	遺物⑱
写真図版34	遺物⑲
写真図版35	遺物⑳
写真図版36	遺物㉑
写真図版37	遺物㉒
写真図版38	遺物㉓
写真図版39	遺物㉔
写真図版40	遺物㉕
写真図版41	遺物㉖
写真図版42	遺物㉗
写真図版43	遺物㉘
写真図版44	遺物㉙
写真図版45	遺物㉚
写真図版46	花粉・寄生虫卵
写真図版47	植物珪酸体
写真図版48	珪藻
写真図版49	樹木種実
写真図版50	草本種実
写真図版51	動物遺体Ⅰ
写真図版52	動物遺体Ⅱ
写真図版53	動物遺体Ⅲ
写真図版54	樹種同定① 顕微鏡写真Ⅰ
写真図版55	樹種同定① 顕微鏡写真Ⅱ
写真図版56	樹種同定② 顕微鏡写真Ⅰ
写真図版57	樹種同定② 顕微鏡写真Ⅱ
写真図版58	樹種同定② 塗膜断面観察
写真図版59	樹種同定③ 顕微鏡写真Ⅰ
写真図版60	樹種同定③ 顕微鏡写真Ⅱ
写真図版61	樹種同定③ 顕微鏡写真Ⅲ
写真図版62	樹種同定③ 塗膜断面観察写真Ⅰ
写真図版63	樹種同定③ 塗膜断面観察写真Ⅱ
<b>第6次調査</b>	
写真図版64	5区SZ6020検出状況
	7区調査状況
	14区SK6036断面
写真図版65	土師器
写真図版66	陶器
写真図版67	陶器
写真図版68	陶器
写真図版69	陶器
写真図版70	陶器
写真図版71	陶器
写真図版72	陶器
写真図版73	磁器
写真図版74	磁器
写真図版75	磁器

写真図版76	磁器
写真図版77	磁器
写真図版78	磁器
写真図版79	瓦質製品
写真図版80	瓦・瓦質製品
写真図版81	瓦
写真図版82	木製品
写真図版83	木製品・石製品・獣骨
写真図版84	木製品顕微鏡写真
写真図版85	木製品顕微鏡写真
写真図版86	木製品顕微鏡写真
写真図版87	木製品顕微鏡写真
写真図版88	木製品顕微鏡写真
写真図版89	木製品顕微鏡写真
写真図版90	木製品顕微鏡写真
写真図版91	漆製品の塗膜構造と反射電子像
	試料No.349
	No.349付着部の断面
写真図版92	椀形鍛冶滓の 顕微鏡組織・EPMA調査結果
写真図版93	椀形鍛冶滓の 顕微鏡組織・EPMA調査結果
写真図版94	鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果
写真図版95	炉壁の顕微鏡組織・EPMA調査結果
写真図版96	鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果
写真図版97	椀形鍛冶滓の 顕微鏡組織・EPMA調査結果
<b>第7次調査</b>	
写真図版98	1区土層
	2区立会風景
	3区焼土層
	4区土層
	5区土層
	6区遺構検出状況
写真図版99	7区立会風景
	8区土層
	土師器・陶器
写真図版100	陶器
写真図版101	陶器
写真図版102	陶器
写真図版103	陶器・瓦質土器
写真図版104	磁器
写真図版105	磁器
写真図版106	磁器
写真図版107	磁器
写真図版108	瓦

写真図版109…………… 瓦・瓦質製品・石製品・木製品  
…………… 塗膜断面

写真図版110…………… 木製品顕微鏡写真

#### 第8次調査

写真図版111…………… 1区調査風景  
…………… SD822・829検出状況  
…………… 1区  
…………… 1区層序  
…………… SZ828断面

写真図版112…………… 土師器・陶器

写真図版113…………… 陶器

写真図版114…………… 陶器

写真図版115…………… 陶器

写真図版116…………… 陶器

写真図版117…………… 陶器

写真図版118…………… 陶器

写真図版119…………… 陶器

写真図版120…………… 陶器

写真図版121…………… 陶器

写真図版122…………… 陶器

写真図版123…………… 陶器

写真図版124…………… 陶器・磁器

写真図版125…………… 磁器

写真図版126…………… 磁器

写真図版127…………… 磁器

写真図版128…………… 磁器

写真図版129…………… 磁器

写真図版130…………… 磁器

写真図版131…………… 磁器

写真図版132…………… 磁器

写真図版133…………… 瓦・瓦質製品・石製品

写真図版134…………… 木製品

写真図版135…………… 木製品

写真図版136…………… 木製品

写真図版137…………… 木製品

写真図版138…………… 木製品・金属製品

写真図版139…………… 塗膜分析写真Ⅰ

写真図版140…………… 塗膜分析写真Ⅱ

写真図版141…………… 塗膜分析写真Ⅲ

写真図版142…………… 塗膜分析写真Ⅳ

写真図版143…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版144…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版145…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版146…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版147…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版148…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版149…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版150…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版151…………… 木製品顕微鏡写真

写真図版152…………… 木製品顕微鏡写真・種子

写真図版153…………… 種子・繊維製品

写真図版154…………… 繊維製品

#### 第9次調査

写真図版155…………… 1-1区土層

…………… 2区土層

…………… SK902検出状況

…………… SK902断面

…………… 2区調査風景

…………… 3区調査風景

…………… 3区土層

…………… SE911検出状況

…………… SE911断面

写真図版156…………… 土師器

写真図版157…………… 陶器

写真図版158…………… 陶器

写真図版159…………… 磁器

写真図版160…………… 磁器・ロクロ土師器

写真図版161…………… 山茶碗・瓦・石製品

写真図版162…………… 木製品・木製品顕微鏡写真

# I. 前 言

## 1. 調査に至る経緯

松坂城跡は昭和27(1952)年に県史跡、平成23年には主要部分が国史跡に指定され、指定地内の学術調査や学校用地内の工事に伴う発掘調査が行われてきたが、松坂城下町が埋蔵文化財包蔵地として周知されたのは平成20年3月のことである<sup>(1)</sup>。

本発掘調査の原因となった都市計画道路松阪公園大口線（主要地方道松阪久居線）街路整備事業は、当路線において渋滞の原因となっていたJR紀勢本線・近鉄山田線の踏切を立体交差（アンダーパス）化し円滑な都市交通の確保を図るとともに、道路全幅の拡幅・無電柱化・歩道整備により、緊急輸送道路としての機能強化及び歩行者等への安全確保を行うものである。事業期間は平成14年度から令和2年度で、最終的に松阪市本町から松阪市鎌田町までの延長約600mと、松阪公園大口線に直交する都市計画道路塚本垣鼻清生線（市道塚本春日線）の延長約250mが事業区間となった（第1図）。

このため、松坂城下町遺跡が埋蔵文化財包蔵地として周知された直後から、事業者である三重県県土整備部（松阪建設事務所）と保護協議を行い、破壊が避けられない部分について発掘調査を実施することになった。

## 2. 調査の経過

### （1）調査回数と一覧（第1表）

調査回数は松阪市教育委員会（現：松阪市文化課）との協議により、県調査で独立して付与することとし、平成20年度調査を第1次として、小規模な立会も含め実施年度ごとに回数を付与した。

### （2）調査の方法

調査対象の大半は道路側溝や電線・通信ケーブルを埋設する電線共同溝で、掘削幅が狭小なことから着工時の立会調査を実施した。調査初期（第1～2次）は土坑・ピット等の生活関連遺構が確認されていなかったが、調査が進み町屋の整地過程や遺構・遺物の状況が明らかになるにつれ、着工時の即時的

対応では調査・工事双方の進捗に支障をきたすこととなったため、第8次調査からは相応の体制を整え、着工前に重機・作業員の労務提供により発掘調査を実施した。詳細は、各次調査概要を参照されたい。

なお、全事業区間で道路本線の路床改良が実施されたが、上下水道等のインフラ整備による攪乱を受けていることから、事前に遺構の残存状況を確認した上で、調査対象から除外したところがある。

## 3. 文化財保護法にかかる諸手続

本発掘調査に伴う法規上の手続は以下の通り。第5次調査終了後、遺跡の範囲拡大について松阪市教育委員会と協議し、範囲変更手続を進めた。

### ①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

（土木工事等のための発掘に関する通知）

・平成22年8月2日付、松建第874号

（県教育長あて県知事通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知書」

### ②文化財保護法第100条第2項

（文化財の発見・認定通知）

・平成20年5月13日付、教委第12-4401号

・平成23年2月22日付、教委第12-4415号

・平成26年3月24日付、教委第12-4415号

・平成28年2月12日付、教委第12-4423号

・平成29年3月9日付、教委第12-4426号

・平成30年2月15日付、教委第12-4422号

・平成31年2月6日付、教委第12-4425号

・令和2年3月30日付、教委第12-4426号

（松阪警察署長あて県教育長通知）

「埋蔵文化財の発見について（通知）」

### ③遺跡の範囲変更

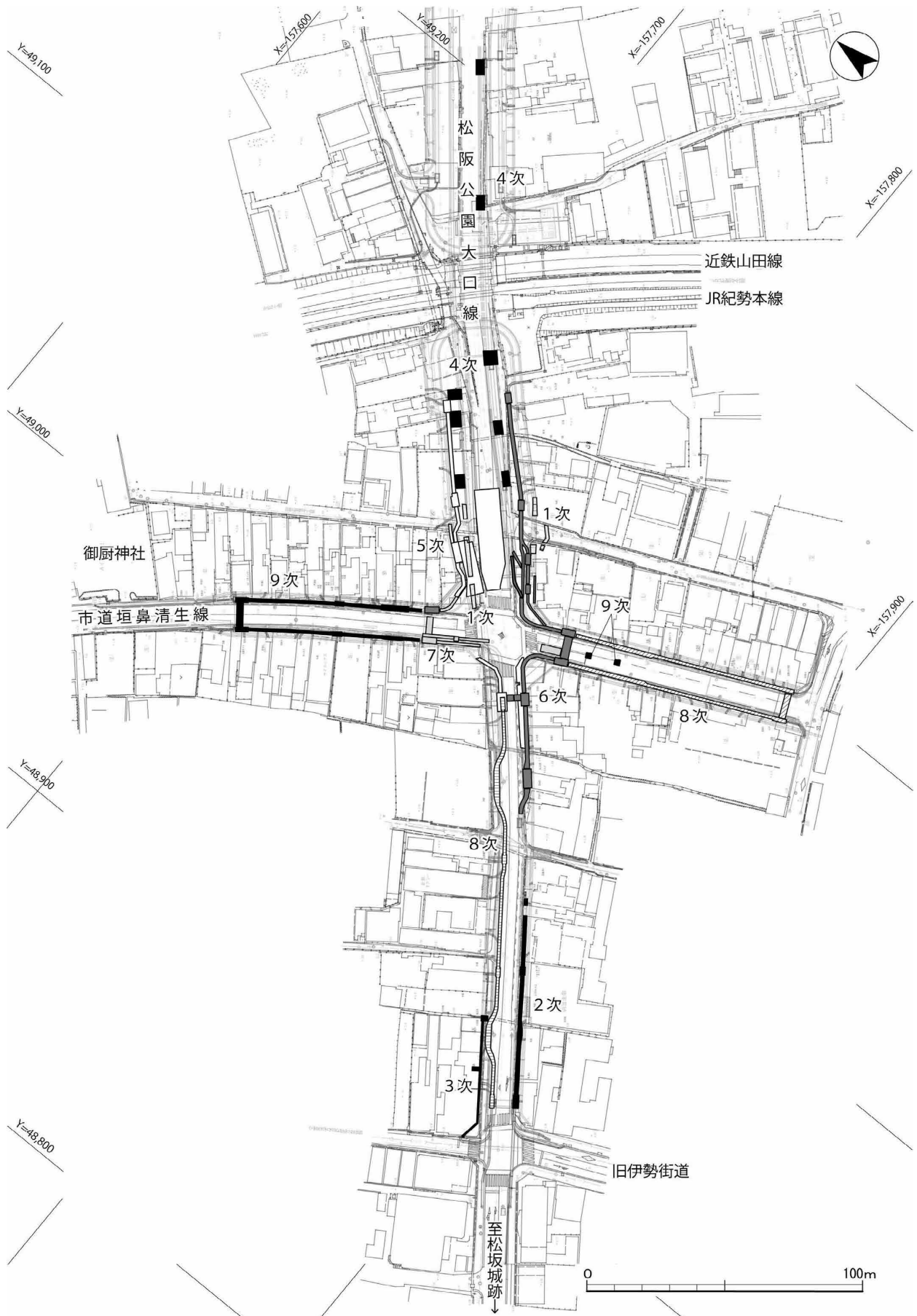
・平成28年2月5日付、教理第366号

（県教育長あて通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地（松坂城下町遺跡）の範囲変更について（通知）」

（櫻井）

### 〔註〕

（1）松阪市教育委員会『松阪市遺跡地図』2008年。



第1図 調査地点位置図 (1:2,000)

調査 回数	調査 年度	調査地 (旧町名)	調査 種類	調査原因	調査期間	調査 面積 (㎡)	主な成果	遺物 箱数	担当
1次	H20	松阪市本町 (外博労町)	本調査 (労務 提供)	道路側溝	20080414 ～20080422	73	城下町東外縁部で大溝状の落ち込みを確認。総堀関連遺構か。土師器・陶磁器・木製品(下駄)が出土。	1	竹田憲治 小濱学 伊藤文彦
2次	H22	松阪市本町 (本町)	工事 立会	電線共同溝	20101102 ～20101222	106	城下町の整地層、溝や杭(杭列)、建築部材を確認。整地層下層は16世紀後半頃、上層は16世紀後半以降から現代のもの。下層から城下町形成期の土器・陶磁器が出土。	3	伊藤裕偉
3次	H25	松阪市本町 (本町)	工事 立会	道路側溝	20130820 ～20130903	54	近世の便槽や土坑を検出、下層の湿地状の堆積層から漆器椀や下駄などの木製品が出土。17世紀以降の整地を経て、現在に繋がる町屋や街区が形成。	5	櫻井拓馬
4次	H26	松阪市本町 (外博労町)	工事 立会	道路建設 (路床改良)	20140508 ～20140515	140	城下町東外縁部(外博労町付近)の土地利用の変遷を確認。18世紀前半ごろまで湿地状の状態、19世紀前半ごろの整地を経て、近現代に繋がる町屋が形成。	1	伊藤裕偉
5次	H27	松阪市本町 (外博労町 博労町 紺屋町 工屋町)	工事 立会	道路建設 (路床改良) 道路側溝 電線共同溝	20150508 ～20160125	650	城下町東外縁部(外博労町付近)の土地利用の変遷を確認。下層の湿地状の堆積層から、木製品や貝・骨などの食物残渣、土器・陶磁器が大量に出土。18世紀前半までは湿地状の状態、18世紀中葉～末の埋没と整地を経て町屋が形成。	49	櫻井拓馬
6次	H28	松阪市本町 (外博労町 博労町 紺屋町 付近)	工事 立会	特殊桝 電線共同溝 道路側溝	20160511 ～20170128	425	外博労町～紺屋町付近の調査。下層から湿地状の堆積層確認(5次調査を迫認する結果)。旧紺屋町側では町屋の一部とみられるピットや土坑を複数確認。18世紀後半～19世紀代の土器・陶磁器(19世紀中心)、木製品が出土。JR・近鉄線路に近いところでは信楽焼汽車土瓶が出土。	40	渡辺和仁
7次	H29	松阪市本町 (博労町)	工事 立会	下水管 電線共同溝 路床改良	20170515 ～20180213	102	博労町～本町付近の調査。基本層序は、第6次調査で把握している層序とほぼ対応。井戸、土坑、落ち込み状の遺構、ピットなどを確認。時期は18世紀後半～19世紀前半ごろ。城下町の町屋の一部に伴うものと考えられる。	8	渡辺和仁
8次	H30	松阪市本町 (大手町 湯屋町 袋町)	本調査 (労務 提供)	電線共同溝	20180808 ～20190109	470	大手町・湯屋町・袋町付近の調査。近世の遺構は18世紀～19世紀にかけての溝・土坑・柱穴を確認した。城下町形成前の中世遺構・遺物もみられた。	38	中川明 水谷侃司
9次	R1	松阪市本町 (袋町 博労町)	本調査 (労務 提供)	電線共同溝 路床改良	20190527 ～20200325	250	博労町・外博労町付近の調査。遺構の多くは18世紀を中心とした近世のものであるが、城下町形成以前の平安後期～鎌倉時代の土坑・ピット等も確認。中世前期の集落域が明確になった。	17	水谷侃司 元座範子

第1表 松坂城下町遺跡調査一覧



## II. 位置と環境

### 1. 地形と地質

#### (1) 遺跡の位置

松阪市は南北に細長く伸びた三重県のほぼ中央に位置する。東は伊勢湾、西は旧飯高町の合併により、台高・高見山地を境に奈良県と接し、北は雲出川で津市、南は祓川・櫛田川中流で多気郡に至る。市の中心市街地は、現在の伊勢湾海岸線から約3km離れた標高約6～7mの低地部にあり、天正16年(1588)に築城された松坂城とその城下町(1)を母体として発展したものである。

松阪市の総人口は約16万人で三重県全体の9%を占め(平成27年国勢調査)、県中南勢地域の主要都市となっている<sup>(1)</sup>。

#### (2) 地形と地質(第2・3図)

**概要** 松阪市の西部は山地、中央部が丘陵で、段丘面は阪内川右岸にはわずかに丘陵の先端にみられる程度である。阪内川左岸には段丘化した扇状地が広がり、現在は穀倉地帯となっている。市の東側は伊勢湾岸の臨海平野である。

主要河川は市西部の山地から伊勢湾に流入し、北から雲出川、三渡川、阪内川、金剛川、櫛田川がある。松坂城のすぐ西側には阪内川が流れている。

**阪内川(坂内川)<sup>(2)</sup>** 阪内川は、白猪山(標高819m)に発する全長約21kmの二級河川である。流路沿いには自然堤防が発達するが、下流域でもさほど乱流せず伊勢湾に注ぐ。現在、流水はほとんどなく枯れ川となっており(写真1)、本居宣長は「川水す



写真1 現在の阪内川河床(松坂大橋付近)

くなく潮もささねば舟かよはず」(『玉勝間』)と記す。しかし一度降雨あれば氾濫し、近世史料中にも洪水関係記事が頻出する。また、城下町の御厨神社付近まで潮の干満があったようである<sup>(3)</sup>。伊勢街道には松坂大橋が架けられた。

**丘陵・段丘** 松坂城が所在する標高38mの独立丘陵「四五百森」(よいほのもり、写真2)は、中生代の花崗岩を基盤とし、縁辺に段丘堆積物がみられる。国土地理院の土地条件図によれば、四五百森の隣接低地に鮮新統・更新統は表出せず、約1km東側の清生町・平生町・駅部田町以东にみられるのみである。しかし、本道路改良事業の事前ボーリング調査<sup>(4)</sup>では、標高約0m(現地表下約5～6m)で更新統に達しており、沖積面に被覆された段丘面が一带に広がる可能性が高い。この松坂城周辺の埋没地形について、国土地理院の標高データを詳細にみると、以下の特徴が指摘できる(第3図)。

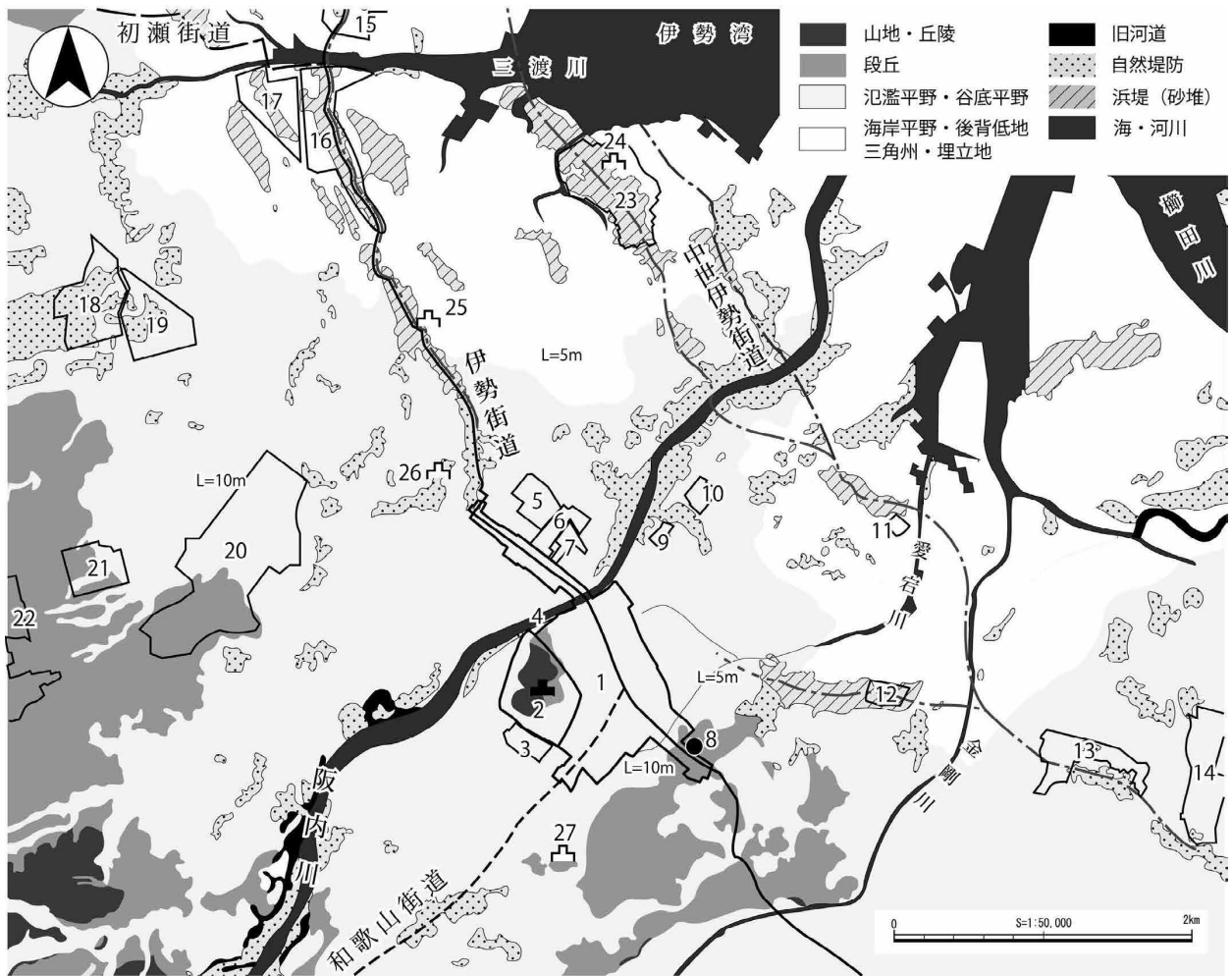
①標高10mを境に臨海側との高低差が顕著となる。

なお、標高10mラインを北西に辿ると、松阪市美濃田町、上ノ庄町(旧三雲町域)、嬉野田村町(旧嬉野町域)に至るが、青木哲哉氏は上ノ庄町付近の旧浜堤(砂碓)を縄文海進頂期の形成としており<sup>(5)</sup>、当該ライン付近に海進期以前の顕著な地形差があった可能性が高い。

②日野町・湊町付近は北東方向に微高地が張り出し、伊勢街道と和歌山街道の分岐点となっている。微高地と愛宕町付近の段丘との間が凹地となり、愛宕川が流れる。

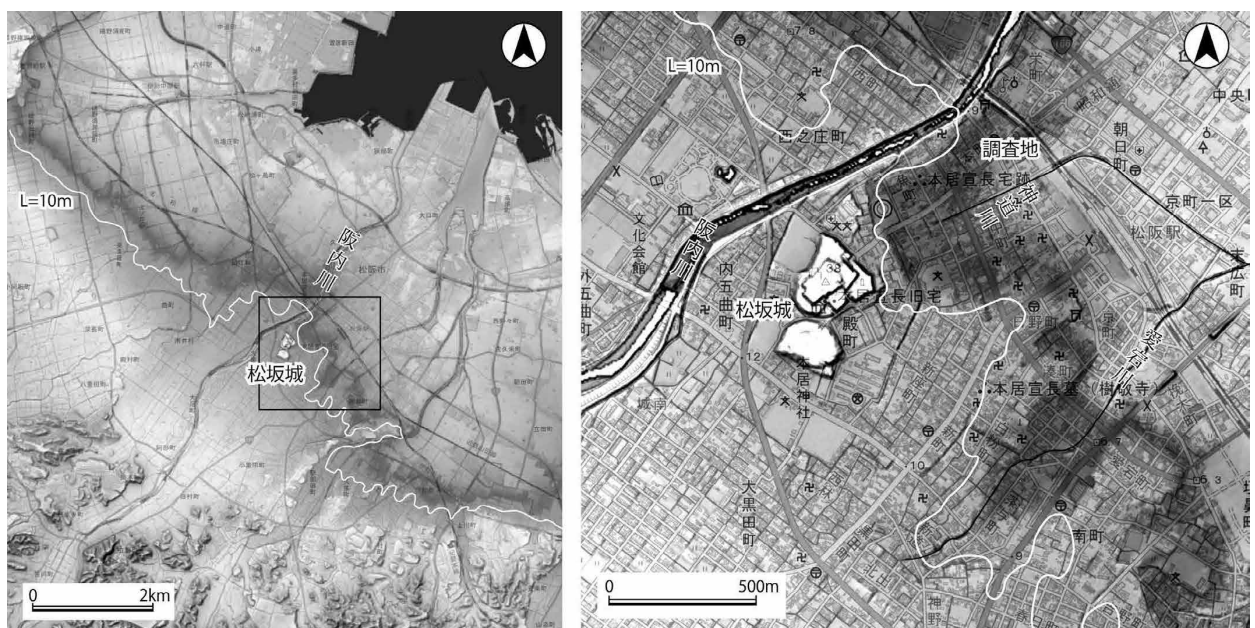


写真2 松坂城跡と四五百森



第2図 地形分類図 (1:50,000、平成29年国土地理院数値地図(土地条件)をトレース)

※遺跡番号は第4図と対応



第3図 松坂城下町遺跡周辺の微地形 (国土地理院基盤地図情報5mメッシュを「カシミール3Dスーパー地形」

で作図) ※暗色部は図左側明色部に対する凹地、白線は標高10mコンター



③魚町・本町・中町周辺は、東側を上記②、西側を阪内川の自然堤防で区切られた凹地であり、その中央に神道川（写真3）が流れる。

これらは、街道の立地や城下町の形成過程にも影響を与えていると予想され、発掘調査を通じて逐一検証していく必要がある。とりわけ、上記③は今回の発掘調査に関連して重要である。

**臨海平野** 後述のように、浜堤列が中・近世の伊勢街道と密接に関わる。阪内川から金剛川間の浜堤列は不明瞭であるが、わずかに松阪市高町、幸生町に浜堤の痕跡がみられる。

## 2. 城下町以前

### （1）弥生時代から古代まで

川井町遺跡、内五曲遺跡、幸小学校遺跡（第4図）の他、松坂城内でも弥生後期から終末期の遺物がみられる。松坂城周辺の弥生時代遺跡の立地は、前節の標高10mライン付近と関係が認められるようである。阪内川流域は古墳時代前期に高田2号墳、坊山1号墳、深長古墳など円墳の築造から始まり、5世紀には伊勢平野最大の前方後円墳である宝塚1号墳を輩出した。松坂城下町遺跡付近の段丘には、清生茶臼山古墳（円墳：直径30m）、垣鼻1号墳（円墳：直径34m）、大膳塚古墳、鈴ヶ森神社古墳などがあった（いずれも消滅）。松坂城跡の石垣には、周辺の古墳から集められた石棺部材が含まれ、城内の発掘調査でも若干の土器が確認されている。

古代には一帯は飯高郡に属し、古代伊勢道が松阪市駅部田町付近を通過していた。

### （2）中世伊勢街道とその周辺

伊勢平野の内陸側、主に段丘上を通過した規格直



写真3 神道川（中町）

線道である古代伊勢道に対して、11世紀頃には「浜路」と呼ばれる、伊勢湾岸の浜堤帯や湊津を結ぶルート（中世伊勢街道）が史料上に現れる<sup>6)</sup>。この伊勢街道は各所で細かく分岐したが、大きくは津市藤方（安濃津）から三渡川河口部（市庭）、松阪市松崎浦、松ヶ島（細頸）、郷津を経て多気郡明和町（斎宮）、伊勢市山田（外宮）、宇治（内宮）へ至る。

**城館の分布** この中世伊勢街道から阪内川を遡上すると、高見峠を経て奈良・和歌山へ至ることから、阪内川中流の大河内には北畠氏の重要拠点である大河内城、松阪市大阿坂には阿坂城跡が置かれた。他に久米城跡（25）、船江城跡（26）、黒田城跡（27）、山室城跡（28）、立野城跡（29）などの城館が、中世伊勢街道から阪内川の周辺に点在している。

**集落** 松坂城跡の周辺では、粥鍋遺跡（5）、上沖遺跡（7）、南出遺跡（9）、天神遺跡（10）など阪内川沿いに中世の遺物散布地が認められ、松坂城跡三の丸跡や本調査地でも平安末から鎌倉時代の遺構・遺物が確認されている。右岸の草山遺跡（30）では鎌倉・室町時代の集落が確認されている<sup>7)</sup>。

**神宮領** 「神宮雑例集」や「神鳳鈔」によれば、阪内川左岸の曲遺跡（20）周辺に勾御厨、松阪市五曲付近には五勾御園、阪内川河口部には平生御厨・若松御厨が存在したことが知られる。

### （3）松ヶ島城とその城下町

水陸交通の要衝である松ヶ島は、中世後期に北畠氏の拠点となり、北畠氏滅亡後の天正7年（1579）、北畠具豊（のちの織田信雄）が瓦葺の天守を備えた松ヶ島城（24）を築城する。小牧・長久手合戦の後には羽柴方の蒲生氏郷が入城し、領国支配のための城と城下町（23）、港の整備を進めた。城下には近江日野から商人を移すなど商工業の発展に努め、その基本施策は松坂城下町に引き継がれた。

## 3. 城下町以後

### （1）蒲生時代

元亀年間、潮田長助なる土豪が松坂の独立丘陵四五百森に城砦を築いたというが、松坂の本格的な開発は、天正後期の松坂城築城を待たねばならない。蒲生氏郷は、天正16年（1588）松ヶ島から松坂に移転、阪内川に接した四五百森に平山城を築いた。氏





1. 松坂城下町遺跡
2. 松坂城跡
3. 幸小学校遺跡
4. 内五曲遺跡
5. 粥鍋遺跡
6. 川井町遺跡
7. 上沖遺跡
8. 清生茶臼山古墳
9. 南出遺跡
10. 天神遺跡
11. 高町里遺跡
12. 幸生里遺跡
13. 堀町遺跡
14. 中坪遺跡
15. 小津遺跡
16. 市場庄遺跡
17. 中ノ庄遺跡
18. 上ノ庄北出遺跡
19. 上ノ庄宮ノ腰遺跡
20. 曲遺跡
21. 前沖遺跡
22. 伊勢寺遺跡
23. 城ノ腰遺跡(松ヶ島城下町)
24. 松ヶ島城跡
25. 久米城跡
26. 船江城跡
27. 黒田城跡
28. 山室城跡
29. 立野城跡
30. 草山遺跡
31. 浅堀木城跡

第4図 遺跡分布図 (1:50,000、平成14年国土地理院数値地図1:25,000に加筆)



郷は海岸沿いの伊勢街道を城下に引き入れるとともに、12箇条の「町中掟」により楽市の保障、殿町での見世棚の禁止、松ヶ島城下の強制移住と農民移住禁止を定めた。また近江日野、伊勢大湊の商人を招致し、それぞれ日野町、湊町を拓くなど、その後の商都松坂の基礎を築いた<sup>6)</sup>。

## (2) 服部・古田～藩政期

氏郷の会津転封後、天正19年(1591)服部一忠が松坂城主になり、文禄4年(1595)からの古田重勝・重治の城完成・統治を経て、元和5年(1619)以降、明治4年(1872)の廃藩置県まで紀州藩領となる。陣屋など松坂城内の普請は藩政期にも続けられた。

藩政下では城代の下に勢州奉行(両役)2人を置き、町奉行・船奉行、目付・物書代官・郡奉行等の役人が統治にあたった。

## (3) 松坂城下町の特徴

**範囲と規模** 松坂城下町は、久世兼由『松坂権輿雑集』(宝暦2、1752年)や森壺仙『宝暦咄し』(文化8、1811年起稿)などの地誌類<sup>9)</sup>、第2表の町絵図<sup>10)</sup>により構造や特徴が明らかである(第5図)。

城下町の範囲は、松坂城の北東から南東側で、伊勢街道筋で東西約2.5km、和歌山街道筋で南北約1kmにわたる。城下町の人口は元禄12年(1699)8,197人、明治8年(1875)10,813人といい、世帯数は宝暦年間で2,314軒、小津・長谷川・伊豆蔵等の江戸店持ち商家が50軒あった。

**街路と街道** 伊勢街道を基幹道路とし、平行する裏通りとして魚町通り、職人町通りが配された。街路は軍事上の備えから雷光形に屈折しており(写真4)、

「伊勢の松坂いつ着(来)てみても襷(飛驒)のとりよで襦(町)わろし」と蒲生飛驒守と街路をかけた戯歌が『松坂権輿雑集』に残されている。

伊勢街道に直行する主幹道路には大手通(大手道)、日野町で伊勢街道から分岐する新町通があり、新町通は紀州藩政下で和歌山街道(紀州街道)として整備された。街路の主要部分には門が設置された。

**背割下水と堀** 町屋の背後には背割下水とよばれる排水路を配し(写真5)、神通川を介して最終的に愛宕川へ排水する下水系となっていた。この背割下水は町割の境界でもあった。

城と城下を囲む総堀(惣堀)は、「伊勢国松坂古城之図」(以下「正保城絵図」という)に表現されている(巻頭図版1)。ただし、正保城絵図には必須であるはずの総堀規模の記載<sup>11)</sup>がないことには注意が必要である。また、元禄～享和以降の絵図表現では、総堀と他の背割下水との区別が困難となり、愛宕川や神通川に至る排水路系がより強調されている(巻頭図版2)。したがって、時代とともに総堀は位置、機能、規模等を変えていった可能性が高い。



写真4 屈折する街路(中町)

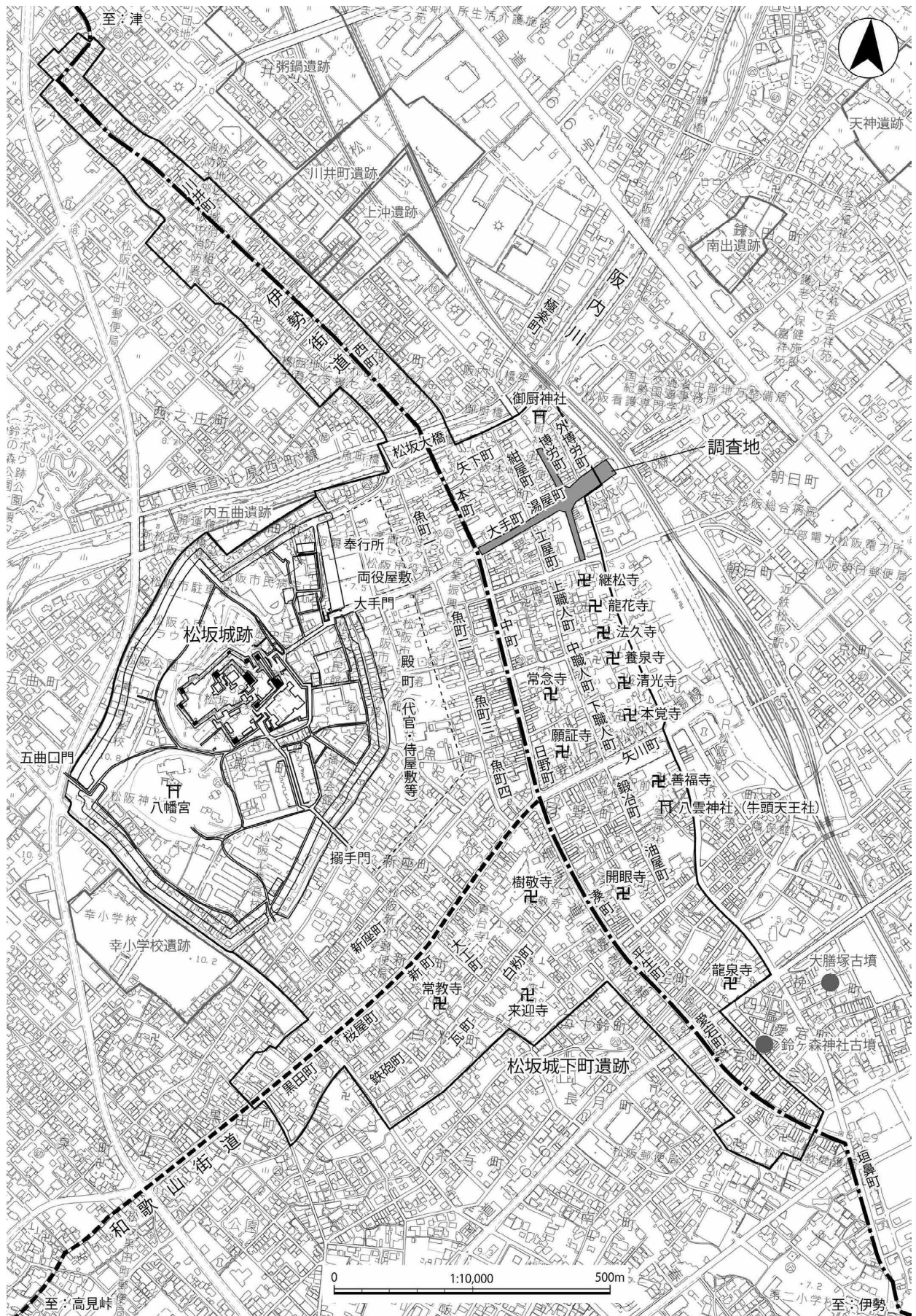


写真5 背割下水(魚町)

図名	成立年代
伊勢国松坂古城之図(正保城絵図)	正保3～承応3年
松坂古地図	元禄3年以前
勢州松坂之図	元禄～元文頃
伊勢松坂城下之図	元禄～元文頃
松坂町絵図	元禄～享和頃
松坂図(松坂権輿雑集絵図)	宝暦2年
松坂絵図(本居春庭写)	安永8年
松坂町之図	享和3年
松坂町絵図	享和以後
松坂町絵図	天保～嘉永頃
安政三年辰春全図	安政3年
松坂町絵図	慶応2年

第2表 城下町絵図一覧(註10文献より作成)





第5図 松坂城下町全体図 (1:10,000、三重県共有デジタル地図1:10,000に加筆、旧町名は主要なもののみ記入)



**町割** 城下は大きく侍屋敷（殿町）と町屋に二分されていたが、享保 - 寛保年間（1716-1744）の戸数比は侍屋敷81戸に対し町屋2,300戸で、近世城下町としては侍屋敷が異常なほど少ないという。殿町は町中掟で見世棚が禁止され、行政機能に特化していた。伊勢街道沿いの本町・中町や日野町・湊町には商人を集め、伊勢街道の背後に大工町・紺屋町や魚町を置いたが、次第に魚町・紺屋町にも江戸店持ち商人が集住するようになった。

城下町の南側・東側外郭には寺院群が計画的に集められ、戦時の防御線として備えられた。城下町の東側には八雲神社（牛頭天王社）、鬼門（北東側）にも須佐之男命を祀る御厨神社（写真6）を置いた。御厨神社周辺は夥しいススキに覆われ、夜は気味が悪く人も少ない状態であったという。一方で、博労町の御厨神社裏から鎌田稲荷（松阪市鎌田町）は屋台が立ち並び、賑わったようである（『宝暦咄し』）。**伊勢商人とその文化** 伊勢商人とは、江戸における伊勢国出身の江戸店持ち商人の総称であり、17世紀初頭から三都へ盛んに進出し、呉服や木綿・麻織物を中心に多様な商品や両替などを扱った。江戸では17世紀後半に三井高利が越後屋を開くとともに、木綿問屋としての伊勢商人の地位が高まっていった。日本橋周辺には木綿問屋が集住したが、伊勢商人の中でも松坂出身者が圧倒的に多かったといい<sup>(12)</sup>、江戸店の経営は奉公人に任せ、主人は国元に在住した。豪商たちはその経済力を背景に和歌や俳諧・茶の湯・香道等の文芸に親しみ、同好の士を集めて文芸サークルを作るなど、城下及び周辺地域の文芸・文化の醸成に大きな影響を与えた<sup>(13)</sup>。



写真6 御厨神社

#### （4）城下町の整備と拡充

城下には松ヶ島からの移転時に編成された本町・中町・平生町・日野町・湊町等と、侍屋敷跡・町廻地・小路・空地が町屋化した諸町があり、18世紀後半には全体が8町組47ヶ町の町組制度により掌握されるようになった。城下町外郭の寺院群も蒲生時代のみならず、慶長・元和期にかけて近江日野や周辺諸地域から松坂へ移転し、徐々に整備されていったものである。

城下町内部の充実とともに、外縁部の拡大もみられた。本調査地付近の外博労町は、元々町廻地であり、正徳元年（1711）に水車小屋が建てられた後「段々家造町並と成」という（『松坂権輿雑集』）。また『宝暦咄し』は、文政11年（1828）の事柄として、「二三年前より一統ふしんをする事大はやりとの町向何れも立派ニなる 横町うら丁いつれも出口はしばし迄昔とは大違イ」と記し、普請の多さと景観の急激な変化、城下町東外縁部に「うら丁」や「どぶ丁」が形成されていった様子を克明に伝えている。これらに加え、近世を通じたお陰参りの流行により、城下町の玄関口である川井町や愛宕町、垣鼻町は旅籠や遊郭として栄えていった。城下町から伊勢街道を北上すると三渡川河口部（松阪市六軒町）で初瀬街道に分岐するが、この付近も旅籠が立ち並び参宮客で賑わった。市場庄遺跡（16）では発掘調査が実施され、その一端が明らかにされている<sup>(14)</sup>。

#### （5）近世の災害

松坂城下町は安政元年（1855）の南海トラフ巨大地震、阪内川の氾濫、失火や放火による火災などで被災し、復興とともに町並みは変化していった。

主な災害関係記事<sup>(15)</sup>を年表にまとめた（第3表）。江戸時代の大規模な災害としては、延宝8年（1680）、元文元年（1736）の大火が特に被害規模が大きく、安政地震も大きな被害があった。安政地震では、土蔵の被害が全壊・半壊合わせて約500軒あり、幕末までに土蔵造が相当普及していたことがわかる。

## 4. 近・現代の松阪

松坂は明治22年（1889）の町村制施行時に「松阪」と改められた。明治26年（1893）大火、同年の参宮鉄道開通（宮川～阿漕間）と松阪駅開設、昭和26年

西暦	和暦	主な出来事（右寄せは主な災害関係記事）
1570	元亀1	潮田長助、四五百森に城を築く
1586	天正13	天正地震
1588	天正16	蒲生氏郷、四五百森に城を築き、松坂と改める。 松ヶ島から松坂に城下町を移転、12ヶ条の町中掟を公布
1591	天正19	服部一忠、松坂城主に
1595	文禄4	古田重勝、松坂城主に
1600	慶長5	関ヶ原の戦い
1604	慶長9	慶長東海・南海・西海地震
		慶長～元和期、城下の寺院開基・建物が集中する
1619	元和5	松坂が紀州藩に移入、代官預りとなる
1644	正保1	大風のため、松坂城天守閣倒壊
1673	延宝1	三井高利が江戸に越後屋を開店
1680	延宝8	新川井町で放火、川井町・西町・矢下町・正円寺・紺屋町まで570軒焼失
1686	貞享3	江戸での伊勢商人の地位高まる
1687	貞享4	大風雨、西町1丁目から4丁目まで浸水
1690	元禄3	新座町より出火、新町・日野町・垣鼻村まで類焼
1707	宝永4	宝永地震
1711	正徳1	亀屋徳兵衛控地に水車屋初めて建つ（外博労町開発の始まり）
1716	享保1	新座町より出火、樹敬寺・来迎寺焼失、殿町火事
		享保-寛保年間、城下に侍屋敷81戸、町屋2300戸という
1728	享保13	中町より出火、職人町・横町・寡町・鍛冶町・櫛屋町・油屋町等類焼
1736	元文1	松坂大火、本川井町・西町・極楽町・博労町・紺屋町・大手町・矢下小路・工屋町・継松寺門まで延焼、御厨神社他寺社をはじめ1200軒焼失
1738	元文3	愛宕町火事、菅相寺角から竜泉寺角まで焼失
1747	延享4	洪水、大手町・西町・川井町・町作浸水、死者30人
1752	宝暦2	久世兼由『松坂権輿雑集』成稿
1773	安永2	大洪水、大橋北方は半分流落、橋詰めの民家・土蔵は地形とともに流失
1792	寛政4	大洪水、殿町代官所浸水、奉行所の門流出
1796	寛政8	平生町より出火、愛宕町・垣鼻町49軒焼失
1811	文化8	森壺仙『宝暦咄し』起稿
1828	文政11	この頃、「一統ふしんをする事大はやり」（『宝暦咄し』）
1854 1855	嘉永7 安政元	伊賀上野地震（6月）、明地・寺社・大橋河原へ避難小屋を建てる。 安政（嘉永）東海・東南海地震（11月）、松坂では全壊の家49軒・土蔵20ヶ所、半壊の家440軒・土蔵478ヶ所、寺院も破損
1856	安政2	坂内川筋五曲堤切れ洪水、川井町・魚町・本町・塩屋町・平生町浸水
1859	安政6	坂内川大洪水、西町・川井町浸水
1870	明治3	元川井町大火、西町に延焼、136軒焼失
1893	明治26	参宮鉄道開通（宮川～阿漕間） 松阪駅開設 松阪大火、1318戸が罹災
1944	昭和19	東南海地震
1951	昭和26	松阪大火、700戸余類焼

1650, 1705, 1717, 1721, 1771, 1803, 1830, 1856, 1867年 お蔭参り流行

第3表 松坂城下町遺跡関連年表（註15文献より抜粋し作成）

(1951) 大火、その後の高度経済成長を経て町並みは変化したが、第二次大戦中の大規模な空襲を受けておらず、街路や背割下水は現在まで概ね踏襲され、市街地の中に伝統的な景観が残る（写真7）。

城下町に残る江戸時代の建造物（寺院建築を除く）としては、主屋中心部と大蔵が江戸中期に遡る旧長谷川家住宅（殿町・魚町、国指定）、江戸後期の旧小泉家住宅主屋（魚町、国登録）、旧小津家住宅（県指定）がある。これらとともに、本町・魚町通りには、伝統的な切妻平入・棧瓦葺・2階建ての町屋や、その要素を残した大正・昭和の建築がよく残っている<sup>(16)</sup>。この他、近代建築としては原田二郎旧宅（幕末以降、市指定）、料理旅館の八千代（大正～昭和、国登録）などが市中に現存し、町並み保存や景観保全が図られているが、平成28年（2016）に白粉町の旧松阪水力電気本社（大正初期、洋風建築）が老朽化のため取り壊されるなど、近代由来の景観も徐々に失われつつある。

## 5. 既往の発掘調査

史跡整備等に伴う松坂城跡の発掘調査に加え、段丘上に立地する松坂城三の丸跡は、松阪工業高校の施設改修に伴い数回の調査が行われ、土塁の基底部分と堀、溝、柱穴、整地跡が確認されている<sup>(17)</sup>。

城下では、民間開発にかかる範囲確認調査や工事立会が増えてきているが、その後発掘調査に至った例はない。魚町・殿町の長谷川氏旧宅（県史跡及び名勝）の整備、原田二郎旧宅の整備<sup>(18)</sup>、市公共施設建設計画、本町の三井店跡公園整備に伴う範囲確認調査や部分的な調査があるのみで、本格的な発掘調査は本報告分が初めてとあってよい。（櫻井）



写真7 伝統的な町並み（魚町通り）

## [註]

- (1) (公財) 三重県市町村振興協会『三重県市町要覧（令和元年度版）』2019年、及び松阪市HPによる。
- (2) 本書では、近世の地名として「松坂」「坂内川」の表記を用いる。
- (3) 平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983年。
- (4) 三重県松阪地方県民局建設部『松阪公園大口線単街路整備地質調査業務委託報告書』2000年。
- (5) 青木哲哉「三雲町の地形環境」『三雲町史』第1巻通史編、三雲町、2003年。
- (6) 伊藤裕偉「海岸線の変動と交通環境」『環境の日本史』2、吉川弘文館、2013年。
- (7) 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査報告』1985年。
- (8) 松ヶ島城・松坂城・松坂城下町については、註3文献/三重県教育委員会『三重の近世城郭』1984年/門暉代司「城下町「松坂」の概要」『旧長谷川家住宅調査報告書』松阪市教育委員会、2014年を参照した。
- (9) 久世兼由『松坂権輿雑集』/森壺仙『宝曆咄し』（松阪市『松阪市史』第9巻史料編、1981年所収）。
- (10) 松阪市『松阪市史』別巻1（松阪地図集成）、1983年。
- (11) 千田嘉博「正保城絵図の製作と特色」『図説正保城絵図』新人物往来社、2001年。
- (12) 門暉代司「伊勢商人の歴史」『旧長谷川家住宅調査報告書』松阪市教育委員会、2014年。
- (13) 門暉代司「長谷川家史料からみた松坂城下の茶の湯」『長谷川家資料調査報告書』松阪市教育委員会、2018年。
- (14) 三重県埋蔵文化財センター『市場庄遺跡発掘調査報告』2017年/同『市場庄遺跡（第2次）発掘調査報告』2020年。
- (15) 松阪市『松阪市史』別巻2（索引・年表）、1985年。
- (16) 松阪市教育委員会『旧長谷川家住宅調査報告書』2014年。
- (17) 三重県埋蔵文化財センター『松坂城三の丸五曲口発掘調査報告』1996年/同『松坂城跡、久居城下町遺跡（第9次）・東鷹跡古墳発掘調査報告』2010年。
- (18) 松阪市文化財センター『城・城下町の暮らし』2013年/同『氏郷の城と町ー松阪の誕生と発展』2016年。

### Ⅲ. 第1次調査

調査区は、T1～T4の大きく4ヶ所に分かれ、城下町総構の外郭に相当する位置である。

#### 1. 層序と遺構

##### (1) T1

既存の道路を横断する調査区である。現道下は厚い碎石に加え、上下水道やガス管による攪乱が激しく詳細は不明である。調査区西端では深さ90cmでオリーブ灰色土の検出面に至る。この層は東進するに連れて深さを急激に増しており、溝状遺構の西岸を検出しているものと思われる。溝状遺構の埋土は上下2層に分かれるが、遺物の多くは上層の黒褐色粘質土からの出土である。

##### (2) T2

T1の北東側5mに位置する。調査区東端では厚さ1mに及ぶ表土の下が明黄褐色粘土の検出面である。この層は西進するに連れて徐々に深さを増すこ

とから、溝状遺構の東岸を検出したものと考えられる。溝状遺構の法面は、検出面からの深さ60cmまでは緩やかに傾斜するが、それ以下では急傾斜となり、底に至る。深さは検出面から1mであるが、若干の傾斜が残っており溝状遺構の中心部ではもう少し深くなる可能性がある。埋土は下層が細砂、上層が粘質土であるが、遺物の出土はT1と同様に上層からの出土が多い。上層のオリーブ黒色粘質土層の下端の一部には貝の堆積もみられる。また、急傾斜となる法面下半で、法面に沿うように立つ木杭を検出した。法面崩落を防止する施設の残存かも知れない。

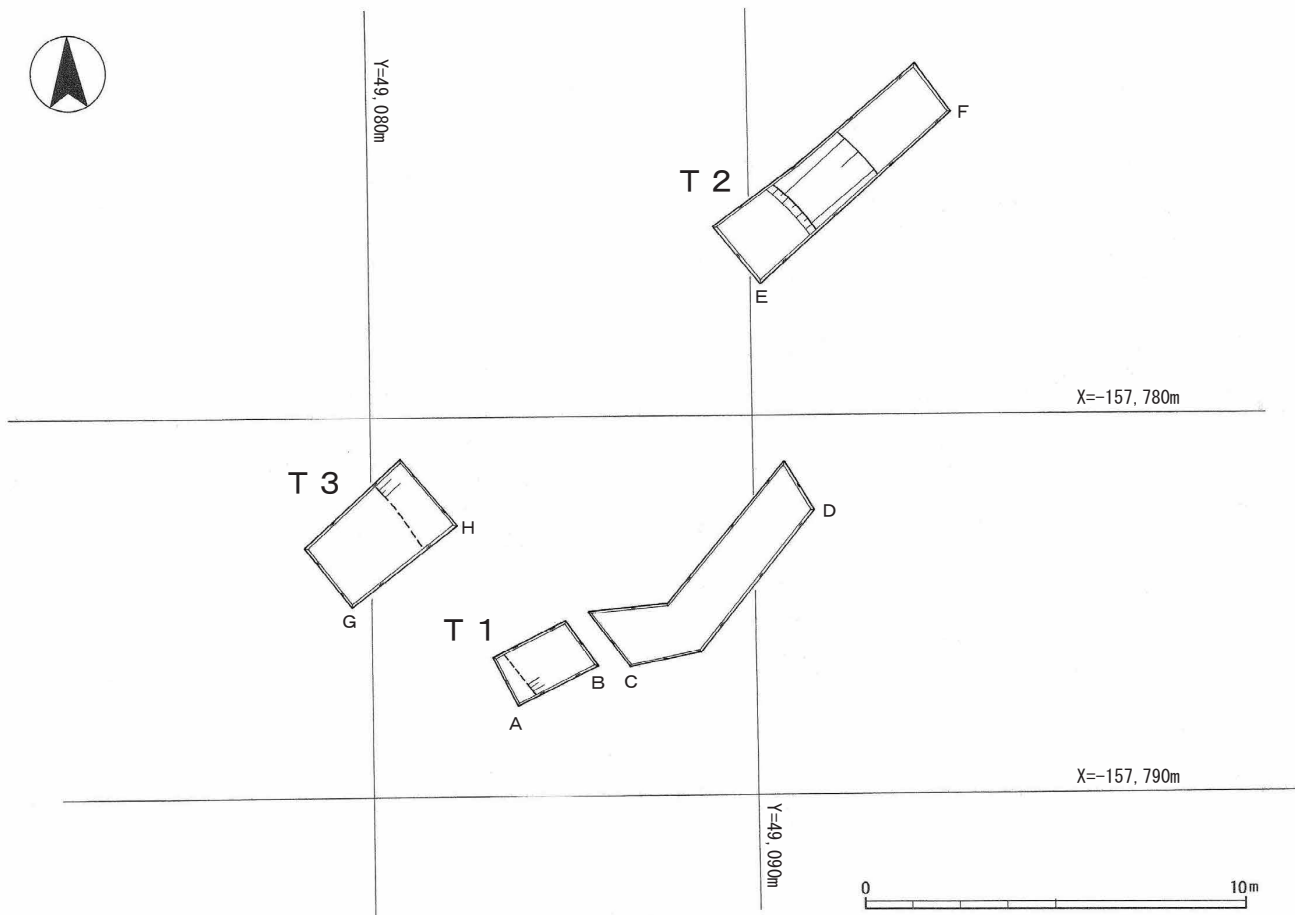
##### (3) T3

T2から10mの間隔を置いた南西側に位置する調査区である。表土は他の調査区より薄く、40cm程度で、その下の厚さ20cmのにぶい黄橙色粘質土の下が検出面である。検出面は黒褐色土で地表からの深さは60cmである。溝状遺構の西岸を検出したが、T1

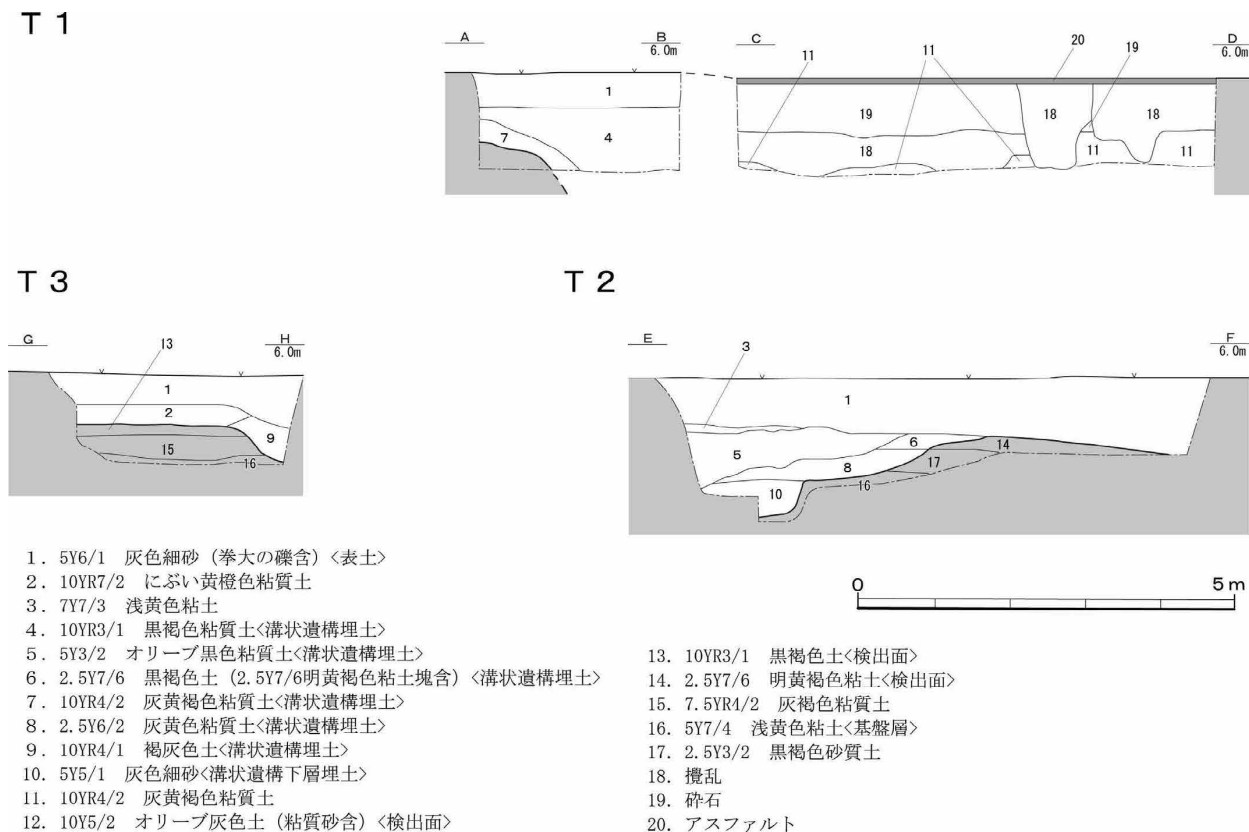


第6図 第1次調査区位置図 (1:1,000)





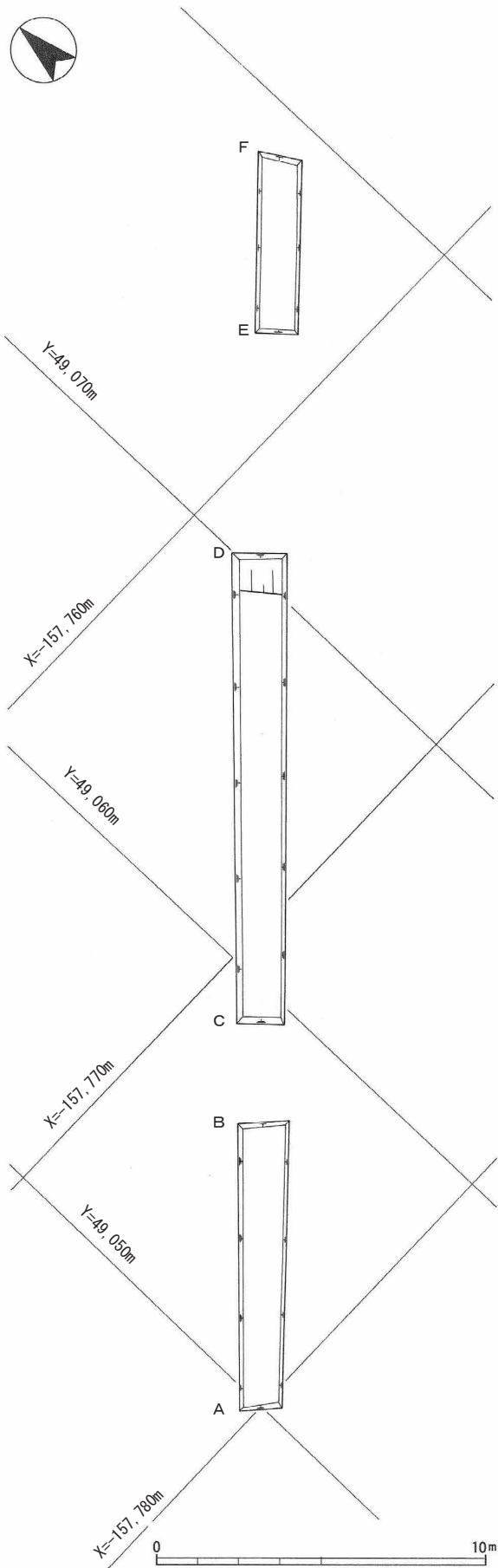
第7図 第1次調査T1～T3平面図 (1:200)



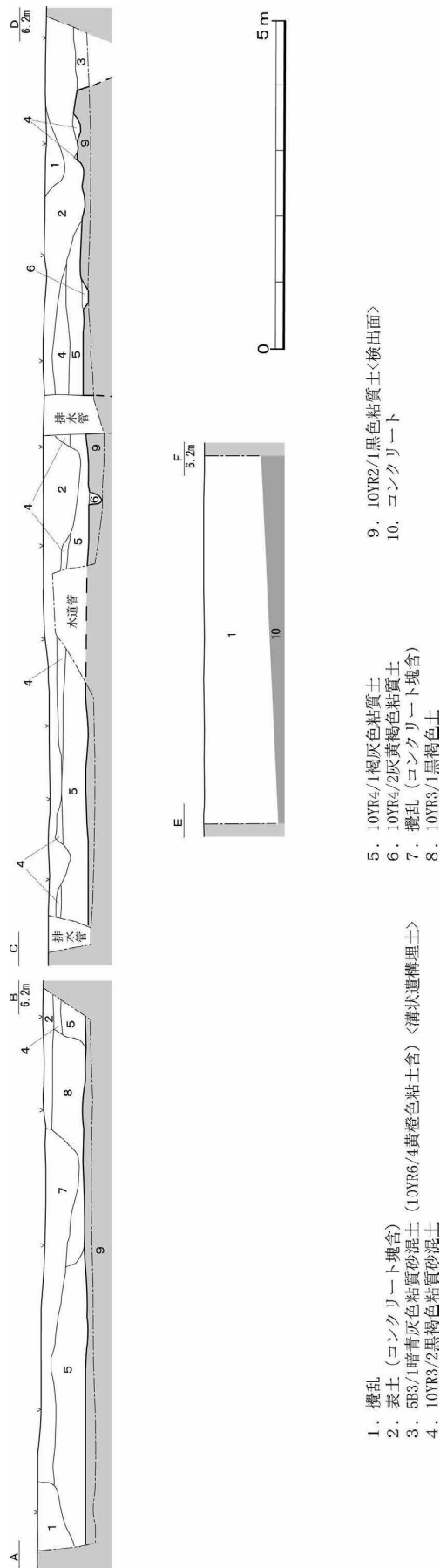
第8図 第1次調査T1～T3土層断面図 (1:100)

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 5Y6/1 灰色細砂 (拳大の礫含) &lt;表土&gt;</li> <li>2. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土</li> <li>3. 7Y7/3 浅黄色粘土</li> <li>4. 10YR3/1 黒褐色粘質土&lt;溝状遺構埋土&gt;</li> <li>5. 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土&lt;溝状遺構埋土&gt;</li> <li>6. 2.5Y7/6 黒褐色土 (2.5Y7/6明黄褐色粘土塊含) &lt;溝状遺構埋土&gt;</li> <li>7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土&lt;溝状遺構埋土&gt;</li> <li>8. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土&lt;溝状遺構埋土&gt;</li> <li>9. 10YR4/1 褐灰色土&lt;溝状遺構埋土&gt;</li> <li>10. 5Y5/1 灰色細砂&lt;溝状遺構下層埋土&gt;</li> <li>11. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土</li> <li>12. 10Y5/2 オリーブ灰色土 (粘質砂含) &lt;検出面&gt;</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>13. 10YR3/1 黒褐色土&lt;検出面&gt;</li> <li>14. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土&lt;検出面&gt;</li> <li>15. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土</li> <li>16. 5Y7/4 浅黄色粘土&lt;基盤層&gt;</li> <li>17. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土</li> <li>18. 攪乱</li> <li>19. 碎石</li> <li>20. アスファルト</li> </ul> |
|---|---|



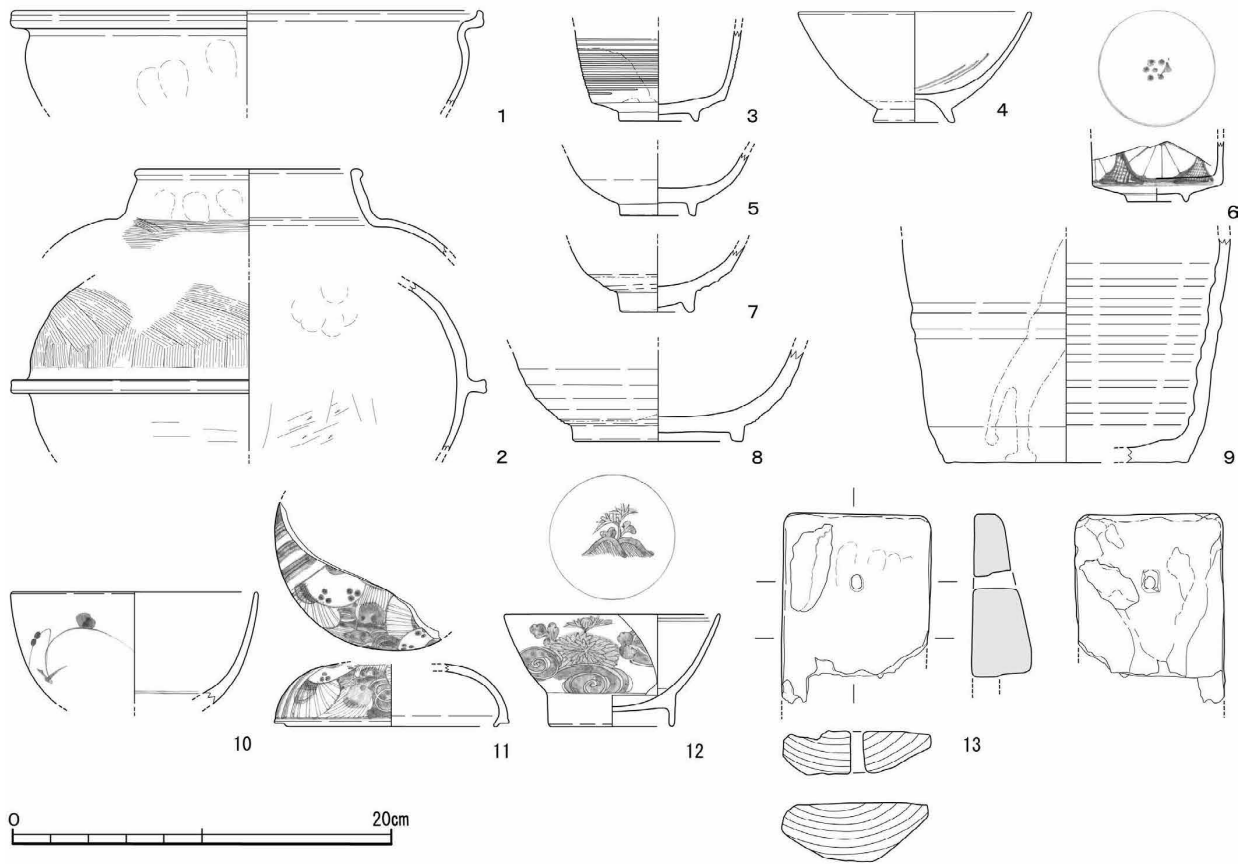


第9図 第1次調査T4平面図 (1:200)

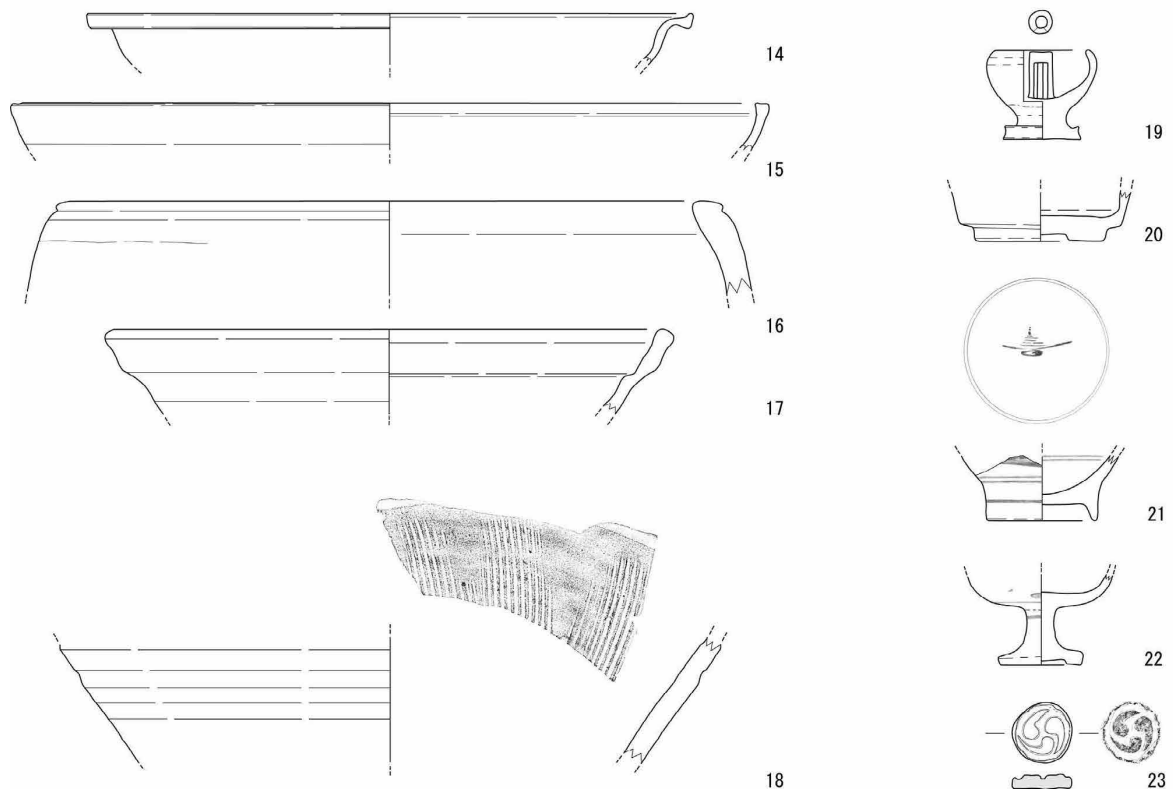


第10図 第1次調査T4土層断面図 (1:100)

溝状遺構



表土



第11図 第1次調査出土遺物 (1:4)

で検出した溝状遺構の延長上にあたる。法面の傾斜はT2の東岸と異なり、比較的急傾斜である。

#### (4) T4

T2・T3から北西方向に約20m離れて並行する調査区であるが、調査区は3分割されている。最も北側の調査区は厚さ1mの攪乱土の下に厚いコンクリートが施されており、調査が不可能であった。他の調査区の状況から判断すれば、遺構はこれにより消滅しているものと考えられる。

他の調査区では、攪乱の激しい表土ではあるが、その下に黒褐色粘質砂混土が地表下20~40cmまで分布する。その下に厚さ40cm程度の褐色粘質土があり、検出面である黒色粘質土に至る。地表から検出面までは60~70cm、標高は5.2mほどである。中央の調査区の北端部で、この検出面を切る暗青灰色粘

質砂混土がある。T1・T3で検出した溝状遺構西岸の延長状にあたり、これも溝状遺構の可能性が高い。

出土遺物は比較的少なく、大半が表土からの出土である。図示できなかったが、黒褐色粘質砂混土から山茶碗の小片、表土からは土師器の小片が出土しており、若干ではあるが、城下町形成以前の遺物も認められる。

## 2. 遺物

調査区が狭小なこともあり、出土遺物は比較的少ないが、近世の陶磁器類や土師器等が出土している。

### (1) 溝状遺構出土遺物

上層と下層に大きく分かれ、7・13が下層、他は上層からの出土である。7は天目茶碗で、高台部周辺は無釉となる。13は欠損しているもの下駄であ

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	004-03	土師器	鍋	T2		オリーブ黒色粘質土	口縁部1/12	25.0	-	-	灰黄褐10YR6/2	外面に煤付着
2	005-01	土師器	茶釜	T2		オリーブ黒色粘質土	口縁部2/12 鏝2/12	12.0	鏝25.1	-	黒褐2.5Y3/2	口縁部と体部接合できず。鏝以上にも煤付着。
3	002-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	T2		オリーブ黒色粘質土	高台部完存	-	高台4.2	-	灰白2.5Y8/1	塗り分け碗。口縁部外面から内面に灰釉、他は鉄釉。
4	006-03	陶器	碗	T2		オリーブ黒色粘質土	口縁部2/12 高台部10/12	12.3	高台3.0	5.9	灰白2.5Y8/1	高台周辺錆釉及び口鏝、他は灰釉。
5	005-04	陶器 (肥前)	碗	T2		オリーブ黒色粘質土	高台部6/12	-	高台4.1	-	灰6/	刷毛目碗。蛇ノ目釉剥。
6	002-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	T1		黒褐色粘質土	高台部完存	-	高台3.3	-	灰白2.5Y7/1	太白焼。煎茶碗。外面に菊花文、見込みに6弁花文。
7	003-04	陶器	鉢	T2		オリーブ黒色粘質土	高台部2/12	-	高台9.0	-	浅黄2.5Y7/3	内外面灰釉、高台無釉。
8	006-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	T2		灰色細砂	高台部完存	-	高台4.0	-	灰白5Y8/1	天目茶碗。内外面鉄釉、高台無釉。
9	003-01	陶器	鉢	T1		黒褐色粘質土	底部4/12	-	12.8	-	灰白2.5Y8/2	鉄釉、化粧掛け。
10	002-06	磁器 (肥前)	碗	T2		オリーブ黒色粘質土	口縁部2/12	13.1	-	-	灰白N8/	波佐見くらかわんか碗。染付。外：草花文、内：圏線。
11	002-01	磁器 (肥前)	蓋	T2		オリーブ黒色粘質土	口縁部4/12	21.4	-	-	灰白N8/	染付。
12	002-04	磁器 (肥前)	碗	T1		黒褐色粘質土	口縁部2/12 高台部8/12	11.4	高台6.7	5.95	灰白N8/	広東碗。染付。外面：菊花流水文、内：圏線+草花文。
13	001-01	木製品 (キリ)	下駄	T2		灰色細砂	5/12	幅7.8	高台6.7	残長10.0	-	
14	004-02	土師器	焙烙	T3		表土	口縁部1/12	32.0	-	-	にぶい黄橙10YR6/4	
15	004-04	土師器	焙烙	T3		表土	口縁部1/12	40.0	-	-	にぶい橙7.5YR6/4	
16	005-02	陶器 (常滑)	鉢	T4		表土	口縁部1/12	35.2	-	-	灰黄褐10YR4/2	
17	004-01	陶器 (瀬戸)	播鉢	T4		表土	口縁部1/12	35.2	-	-	灰黄2.5Y7/2	
18	003-02	陶器 (瀬戸)	播鉢	T3		表土	体部2/12	-	-	-	淡黄2.5Y8/3	
19	005-03	陶器 (瀬戸・美濃)	乗燭	T3		表土	口縁部1/12 底部完存	5.0	4.1	4.7	灰白8/	鉄釉
20	003-03	磁器 (肥前)	香炉	T3		表土	底部完存	-	高台6.9	-	灰白2.5Y7/1	灰釉
21	002-05	磁器 (瀬戸・美濃)	碗	T4		表土	高台部10/12	-	高台5.9	-	灰白N8/	広東碗。染付。外面：圏線、内：圏線+「寿」
22	006-01	磁器 (肥前)	仏飯具	T4		表土	脚部完存	-	高台4.5	-	灰白N8/	染付。
23	004-05	土製品	泥面子	T3		表土	完形	径3.15	-	厚0.85	にぶい橙7.5YR7/3	巴文型押し

第4表 第1次調査出土遺物観察表

ろう。

1・2は土師器で、1は鍋、2は茶釜である。2は体部片と口縁部片が接合しなかったが、同一個体で相違ない。1・2とも外面に厚く煤が付着しているが、2は鏝より上部まで付着が激しい。

3～5・6～9は陶器で、3～6は椀である。3は高台周辺に鉄釉、他を灰釉で塗り分けるが、内面は氷裂地となっている。外面には比較的細い沈線を多数巡らせ、釉のため不明確だが、底部外面はロクロケズリ、高台は削り出しとおもわれる。4は体部が直線的に開く椀であるが、高台の内側を播鉢状に削り取る特異な形態を呈し、類例を見ない。黄茶色を呈する灰釉を施すが、口縁端部や高台周辺は錆釉である。内面下端に鏤絵により山水または草木を描く。5は非常に精緻な胎土で、淡緑色を発する灰釉に白泥の刷毛目を描く。見込みは蛇ノ目釉剥となる。6の見込みには6弁の花が手書きにより描かれている。

8・9は鉢とした。8は濃黄茶色の灰釉を施すが、削り出しの高台周辺は無釉である。9は内外面に鉄釉を施し、さらに黒色を呈する鉄釉を化粧掛けしている。

#### (2) 表土出土遺物

出土遺物は、溝状遺構と同じ様相である。14・15は土師器で、14は焙烙、15は口縁部の形状が異なる

が、焙烙になるものと思われる。ただし、両者とも外面に煤の付着は認められない。

16～19は陶器で、16は鉢、17・18は播鉢である。18の播目は3.6cmに11本の櫛により搔き上げられる。19は乗燭で、鉄釉を施すが、脚下部は無釉となる。

20～22は磁器で20は底部片であるが香炉と思われる。蛇ノ目凹型高台で灰釉を施すが、接地面以内は無釉となる。21は広東椀で、見込みには「寿」と思われる吉祥文字を記す。22は仏飯具であるが、脚部下端は蛇ノ目凹型高台風を呈する。こちらは接地面のみが無釉となる。

23は巴文を型押しする泥面子である。型の直径は2.8cmで巴文を彫り込んでいる。型より若干大きい直径3cmの円形を呈するが、正円とは言い難い歪なもので、反対側には指頭圧混が明瞭に残る。(森川)

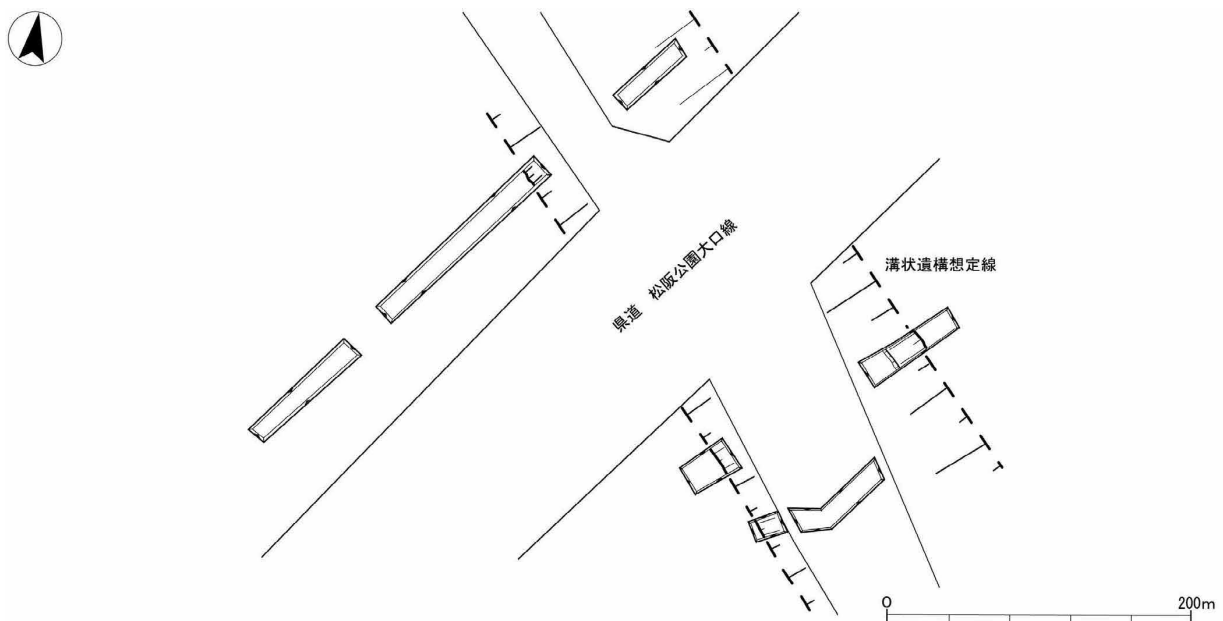
### 3. 木製品の樹種調査

#### (1) 試料

試料は三重県松坂城下町遺跡から出土した服飾具1点である。

#### (2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。



第12図 溝状遺構想定図 (1:500)

### (3) 結果

樹種同定結果と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

ノウゼンカズラ科キリ属キリ (*Paulownia tomentosa* Steud.)、(遺物No. 13)、(写真図版 1)

環孔材である。木口では大道管(～300 $\mu$ m)が単列ないし多列で孔圏部を形成している。孔圏外への移行は緩やかで数個複合して散在する。軸方向柔細胞は顕著で周囲状、翼状、連合翼状、帯状を呈する。柾目では道管は単穿孔と内腔にチロースを有する。道管放射組織間壁孔は小～中型である。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～500 $\mu$ mからなる。軸方向柔細胞、木繊維ともに階層状である。キリは古くから全国で栽培されており、特に東北、関東北部、新潟、岐阜で盛んである。原産地は不明。

(榊吉田生物研究所)

### [参考文献]

- ・ 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」  
雄山閣出版 (1988)
- ・ 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)  
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」  
京都大学木質科学研究所 (1999)
- ・ 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」  
保育社 (1979)
- ・ 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)  
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料  
第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)
- ・ 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料  
第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

### [使用顕微鏡]

Nikon DS-Fi1

## 4. 小結

今回の調査では、全ての調査区で溝状遺構の岸を検出している。T2で東岸、他では西岸を検出しており、今回の調査区内では、幅約15m、南東から北西方向に直線状に延びる大溝と考えられる。溝の形状は比較的急傾斜であるが、T2では上層が溝の肩が不明確なほどの緩やかな傾斜で、溝とするに疑問の残る結果となっている。しかし、その検出位置は絵図面に描かれる松坂城総構に相当することから、その可能性を視野に入れるべきであろう。(森川)

## IV. 第2次調査

調査区は、県道松阪公園大口線の南東側路肩及び歩道部分である。この道は松坂城跡の大手門から北東へと延びる「大手町」であったもので、大手門から250mほどで参宮街道と交差する。この交差点付近から北東方向へ延長約70mが調査区である。

調査区の大半は幅1m未満の狭小なものであることに加え、市街地の主要街路ということもあり、長時間開削状態を保つことは困難で、日々開削と復旧を繰り返しながらの調査となった。したがって、土層断面図に不連続な部分や運動性に欠ける部分が生じているが、あえて後日の解釈を加えずに、調査時点の観察のままを報告している。

また、城寄りから1m刻みで1～72地点を設定し、遺物の出土位置等を記録した。

### 1. 層序と遺構

全体に標高5m前後で低位段丘面の黄灰色粘土層が確認でき、その上に黒色土（黒ボク）または黒色粘土の堆積が見られた。これらの層上から現地表面までの約1.5mが城下町の整地土にあたる。整地土

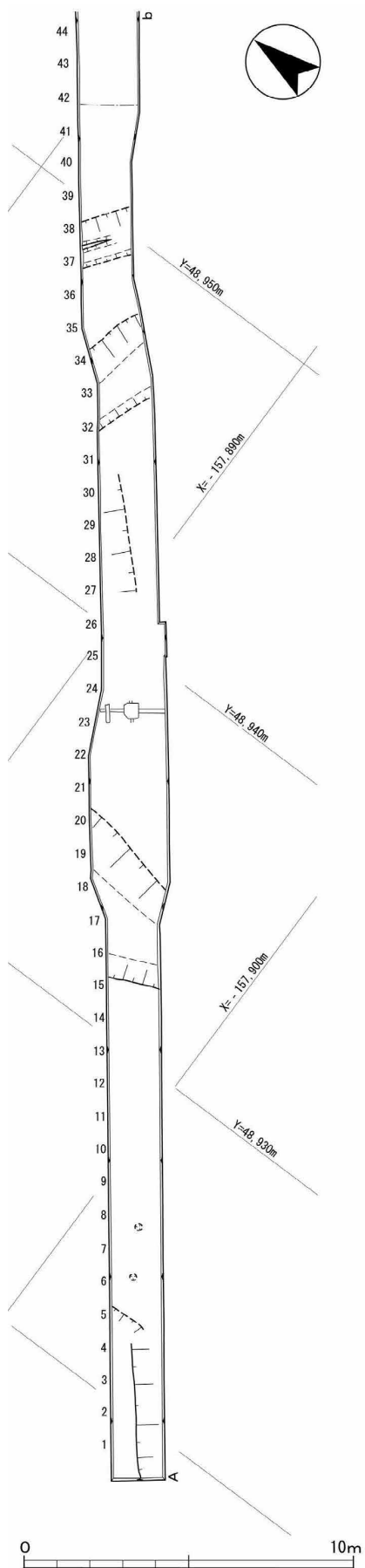
は大きく2層に分かれ、下部層は城下町形成時にあたる16世紀後葉頃、上部層はそれ以降で、昭和前期頃までの整地土や焼土面（昭和前期）なども見られる。

既述したように、調査区が狭小なため遺構の性格を明確に把握することはできなかったが、方向を違える数条の落ち込みを確認した。上部整地層に対応するものから下部整地層以前のものまで多様である。注目すべきものとして、下部整地土層ないしはそれ以前と考えられる杭（杭列）のほか、柱状の部材（16）が直立状態で、黒色粘土層等を貫く状態で出土している。下端は若干尖り気味に加工され、掘形は確認できず、柱材の下に加重を受けるための横材や栗石なども確認できなかった。しかし、撃ち込まれたものならば原位置を保つことになる。この材にはホゾ穴が2カ所に設けられており、そのひとつには貫状の材（15）が貫通していた。地中梁の様相を呈するが、直行するホゾ穴には貫通する角材は残存していない。この様な状況からも原位置を保っているものかどうかを含め不明確な要素が多い。

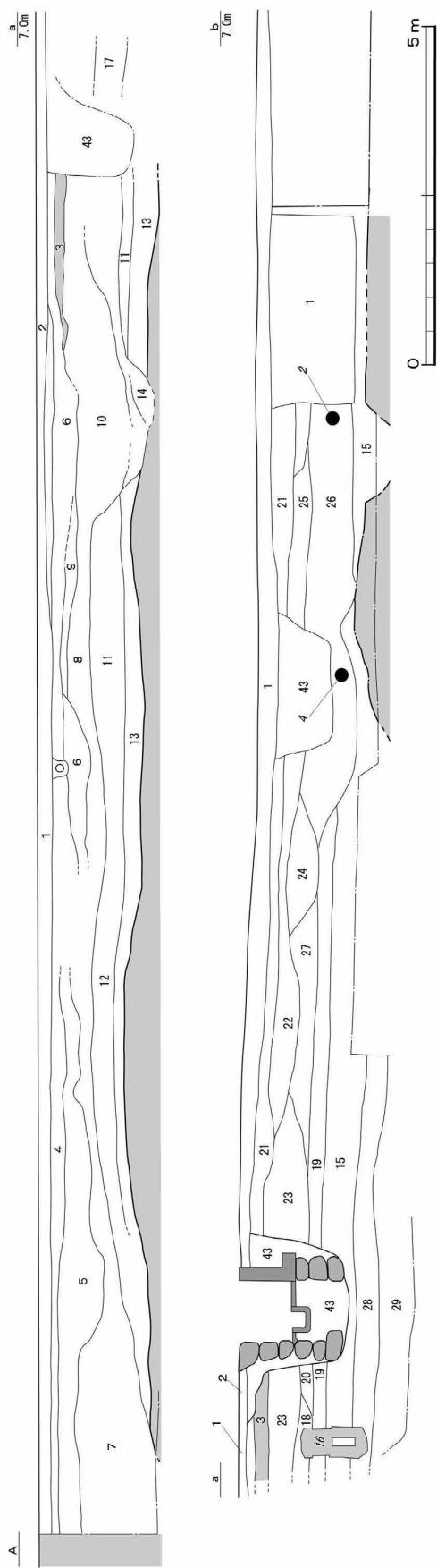


第13図 第2次調査区位置図 (1:1,000)





第14図 第2次調査区平面図① (1:200)



第15図 第2次調査区土層断面図① (1:100)

- |                      |               |                       |                  |
|----------------------|---------------|-----------------------|------------------|
| 1. アスファルト、コンクリート、碎石等 | 10. 砂と粘土の混じり  | 20. 砂と灰色粘土の混じり        | 29. 青灰色粘土～粘土質シルト |
| 2. 焼土                | 11. 灰色粘土質シルト  | 21. 黄灰色土と灰褐色土の混り<整地層> | 30. 黄灰色粘土        |
| 3. 三和土               | 12. 黒灰色粘土質シルト | 22. 混雑粗砂              | 43. 攪乱           |
| 4. 焼土混土              | 13. 黒色土       | 23. 黄灰色粘土と灰色粘土の混り     |                  |
| 5. 褐色粘土質シルト<整地層>     | 14. 黒灰色粘土     | 24. 黄灰色粘土と灰色粘土と中砂の混り  |                  |
| 6. 黄灰色粘土質シルト         | 15. 黒色粘土      | 25. 淡緑灰色粘土<整地層>       |                  |
| 7. 灰黄色中～細砂           | 16. 砂礫        | 26. 褐灰～淡褐色粘土          |                  |
| 8. 褐灰色粘土質シルト<整地層>    | 17. 砂         | 27. 灰色混雑粘土            |                  |
| 9. 中砂                | 18. 砂         | 28. 緑灰色粘土質シルト         |                  |



## 2. 遺物

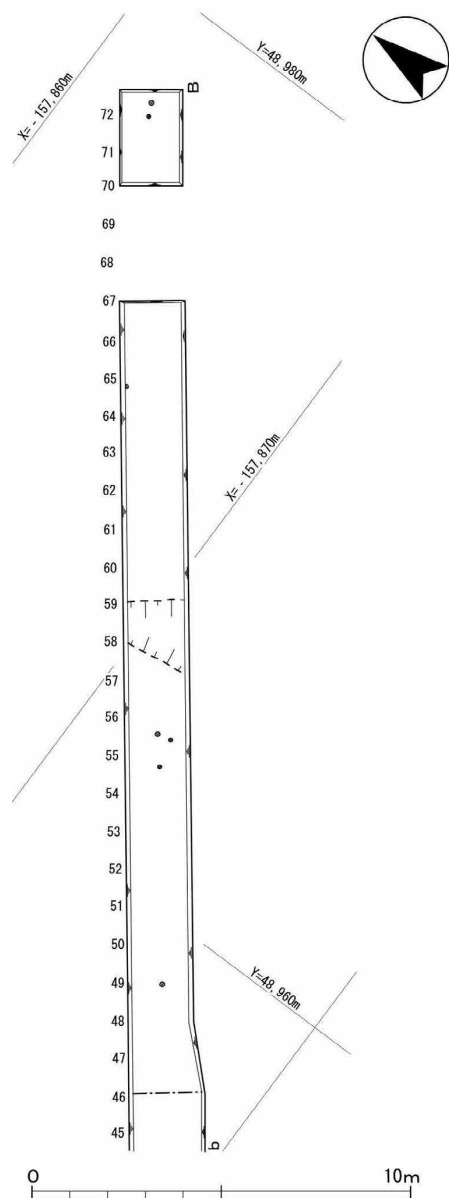
### (1) 下部整地層等出土遺物

下部整地層と考えられる層をはじめ、下位の層位から出土したものである。

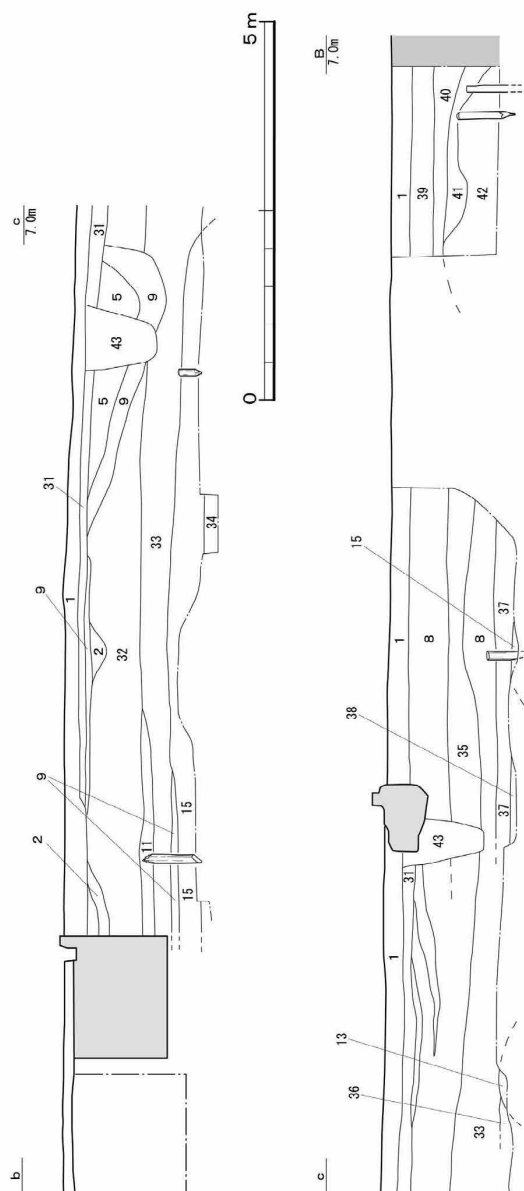
1～4は土師器で、1～2は皿、3も皿と思われるが、高台が付くかもしれない。5・6は鍋、4は壺としておく。1の底部外面と口縁部の境付近には強い圧痕が巡っており、粘土が伸びた時に生ずる子細な亀裂がある。型押しの際の圧痕であろうか。4は体部に口縁部が接合しなかったが、同一個体と判断できる。鍋と同様に底部外面にヘラケズリ、他にハケメを施す。

7～12は陶器で、7・8は天目茶椀である。8は内反り高台で、淡い錆釉を施す。9は灰釉を施した折縁皿である。見込み及び底部に輪状トチンの付着がある。見込みに菊花文を施す類例は豊富であるが、その様子はない。代わって、口縁部内面に菊花文が押印される。菊花文は1列縦隊で、20個程度で一周すると思われる。10・11は練鉢、12は甕である。10は内面に使用による擦り減りが見られる。一方、11は口縁部に煤が付着しており、鍋に転用された結果かもしれない。

14は鉄製品で、直角に折れ曲がっているものの犬釘と思われる。13も上半が欠損しているが、同様なものと思われる。



第16図 第2次調査区平面図② (1:200)

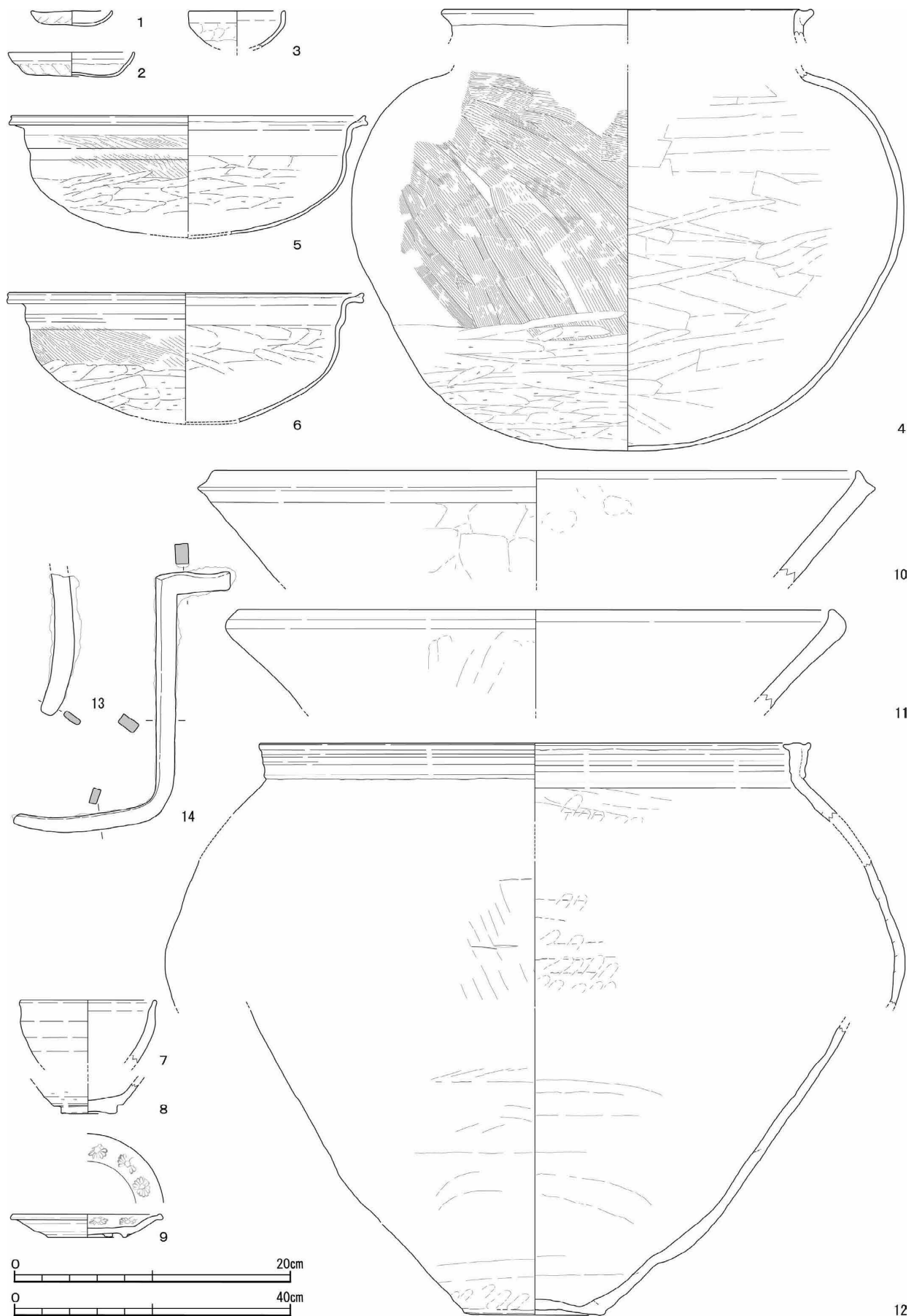


第17図 第2次調査区土層断面図② (1:100)

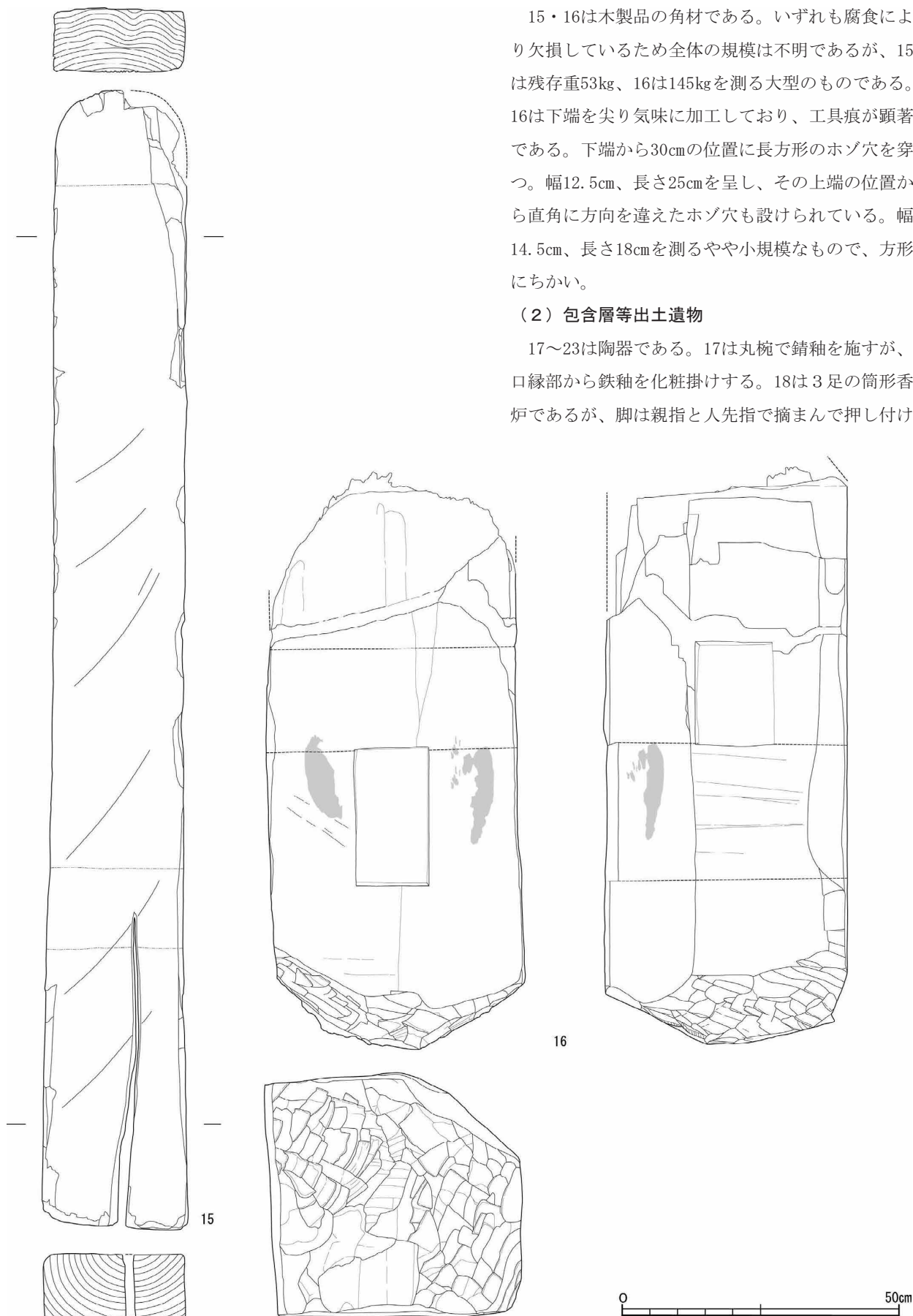
- 37. 暗灰色砂質シルト
- 38. 褐灰色中砂
- 39. 褐灰色砂質シルト
- 40. 褐灰色粘質混砂シルト
- 41. 黄灰色砂
- 42. 青灰色粘土質シルト
- 43. 攪乱

- 15. 黒色粘土
- 31. 灰褐色粘土質シルト<整地層>
- 32. 暗褐色粘土質シルト<整地層>
- 33. 淡緑灰色砂質シルト(田耕作土状)
- 34. 淡褐色粘土
- 35. 淡灰色粘土質シルト<整地層>
- 36. 淡緑色砂質シルト

- 1. アスファルト、コンクリート、碎石等
- 2. 埴土
- 5. 褐色粘土質シルト<整地層>
- 8. 褐灰色粘土質シルト<整地層>
- 9. 中砂
- 11. 灰色粘土質シルト
- 13. 黒色土



第18図 第2次調査下部整地層等出土遺物① (12=1:8、他は1:4)



15・16は木製品の角材である。いずれも腐食により欠損しているため全体の規模は不明であるが、15は残存重53kg、16は145kgを測る大型のものである。16は下端を尖り気味に加工しており、工具痕が顕著である。下端から30cmの位置に長方形のホゾ穴を穿つ。幅12.5cm、長さ25cmを呈し、その上端の位置から直角に方向を違ったホゾ穴も設けられている。幅14.5cm、長さ18cmを測るやや小規模なもので、方形にちかい。

## (2) 包含層等出土遺物

17～23は陶器である。17は丸椀で錆釉を施すが、口縁部から鉄釉を化粧掛けする。18は3足の筒形香炉であるが、脚は親指と人先指でつまんで押し付け

第19図 第2次調査下部整地層等出土遺物② (1:10)

たような無造作な貼り付けである。底部外面は露胎、内面は錆釉風となる。外面は鉄釉と思われるが、黄瀬戸釉風の色調部と鉄釉状の色調部が交互に縞模様を呈している。19・20は鉢であるが、19は口縁部外面に沈線を1条巡らす。20は3足をもつものと考えられるが、脚の接合を含め全体的に雑な仕上げである。21・22は練鉢、23は甕である。21の内面は練鉢としての使用のためか摩耗しているが、口縁部内面に煤の付着があり、煮炊具としても使用されたかもしれない。

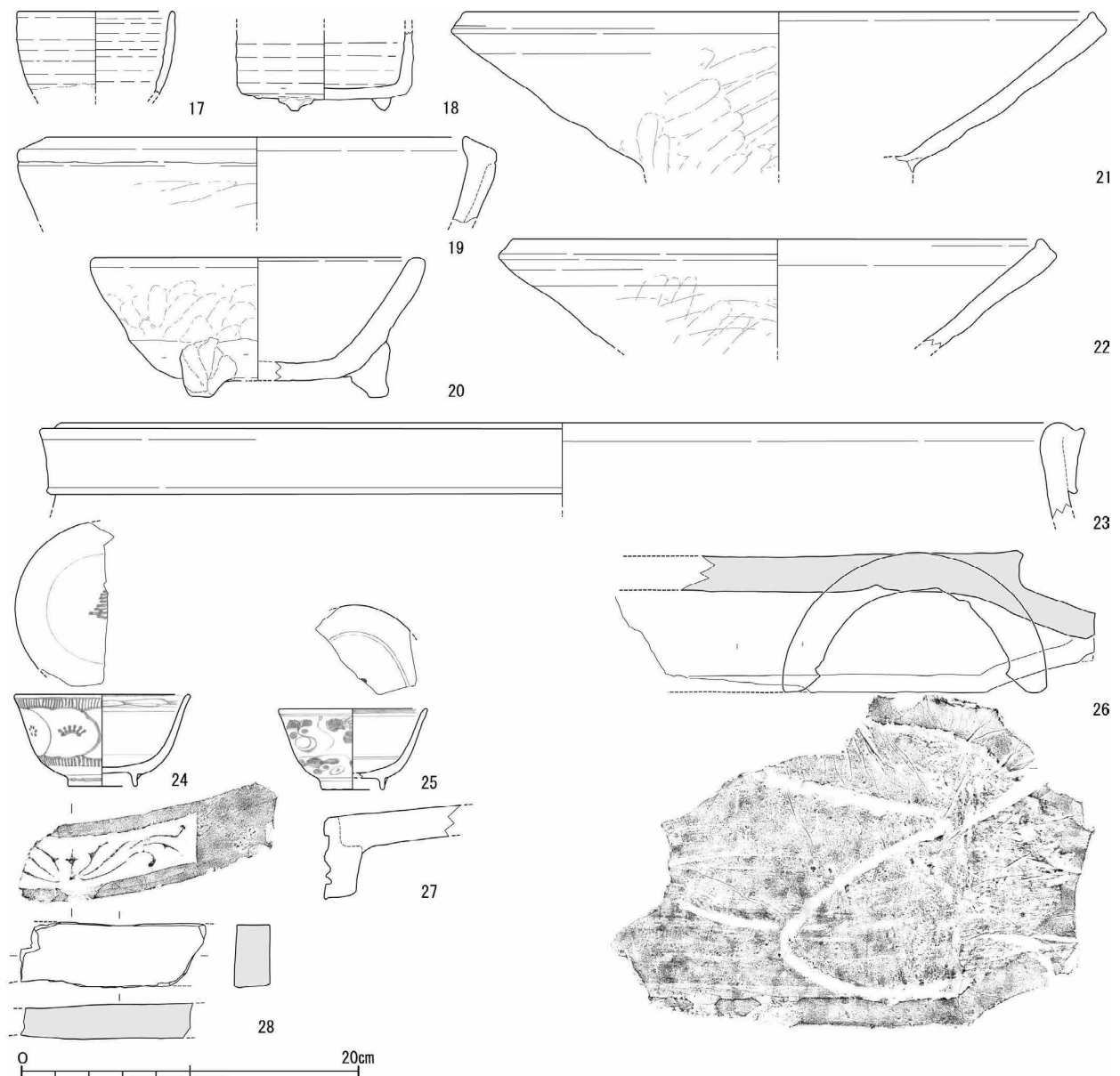
24・25は磁器である。両者とも呉須により絵付けし、高台や見込みに圏線を描く。24は外面を幾つか

に区画し、6弁花文と如意雲風の文様を筆書きにより描いている。見込みの文字は「寿」であろうか。25の外面は唐草文を基調とする。

26・27は瓦、28は砥石である。26は丸瓦で酸化焼成され、燻は施されない。凹面には太い吊紐痕が明瞭である。紐の山の部分は交差するが、結び目があるようにも見える。

### 3. 小結

今回の出土遺物は近世のものが大半であるが、一部に中世に遡るものも見られる。なかでも下部整地層からの出土遺物に残存が比較的良好なものが散見



第20図 第2次調査包含層等出土遺物 (1:4)



される。6の土師器鍋は器高が減じているものの焙烙形態には至っておらず、16世紀の内に収まるもの<sup>(1)</sup>と考えられる。12は口縁部との接合は出来なかったが、体部下半から底部にかけて完存している。口縁部の形態は常滑の12型式を示しており、16世紀後半位置づけられる<sup>(2)</sup>。その他、9の折縁皿は大窯期後半の器形<sup>(3)</sup>であり、完形の2をはじめとする土師器皿類に近世に普遍的な赤色のものはない。16世紀後半は松坂城築城の時期にあたり、城下町が形成されつつある頃である。調査区は、参宮街道より東側の「大手町下ノ丁」と呼ばれる城からより離れた位置にあるが、城下町形成時期の遺物が比較的良好な残存状況で出土したことは注目される。

なお、『勢州松坂之図』をはじめ古図には参宮街道との交差点からやや北東で大手筋を横切る小さな

水路が描かれているものがあり、現況でも小さな水路が調査区を横断している。15・16の部材は、組まれた状態でこの付近から出土している。この水路に架けられていた橋または水路の護岸等に伴う可能性がある。(森川)

[註]

- (1) 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史資料編 考古2』三重県 平成20年3月31日
- (2) 中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学 知多半島総合研究所 1994年
- (3) 愛知県瀬戸市『瀬戸市史陶磁史篇四』平成5年9月30日

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	004-04	土師器	皿	—	62	下部整地層	口縁部7/12	5.9	—	1.05	浅黄橙 10YR8/4	口縁部に煤付着。底部外面に型押し の圧痕あり。
2	004-03	土師器	皿	—	37	褐灰～淡褐灰色 粘土	完形	9.2	—	1.2	浅黄橙 10YR8/3	
3	006-01	土師器	皿	—	63	暗灰色砂質シル ト	口縁部3/12	7.0	—	—	にぶい橙 7.5YR7/3	台付皿
4	011-01	土師器	壺	—	34	褐灰～淡褐灰色 粘土	口縁部2/12	29.0	体部 40.0	—	にぶい橙 7.5YR6/4	
5	004-02	土師器	鍋	—	66	下部整地層	口縁部2/12	25.6	—	8.8	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤付着
6	004-01	土師器	鍋	—	66	下部整地層	口縁部9/12	25.9	—	9.6	にぶい橙 7.5YR6/4	外面煤付着
7	004-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	—	62	下部整地層	口縁部2/12	10.0	—	—	灰白 2.5Y7/1	天目茶椀。内外面鉄釉。
8	005-01	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	—	66	下部整地層	高台部ほぼ完存	—	高台 4.0	—	灰黄褐 10YR4/2	天目茶椀。内面鉄釉、高台周辺弱 い錆釉。内反り高台。
9	005-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	—	62	下部整地層	口縁部3/12	11.6	高台 5.7	1.7	灰白 2.5Y8/1	折縁皿。灰釉。内面に菊花文。内 外面に輪状トチン痕。
10	007-02	陶器 (常滑)	練鉢	—	62	下部整地層	口縁部1/12	49.0	—	—	橙 5YR6/6	内面に使用痕
11	008-02	陶器 (常滑)	練鉢	—	62	下部整地層	口縁部1/12	45.0	—	—	にぶい橙 7.5YR5/4	口縁部に煤付着。
12	003-01	陶器 (常滑)	甕	—	16	落ち込み上部	口縁部5/12 底部完存	80.0	22.3	—	暗褐 7.5YR3/4	外面錆釉。
13	012-02	金属製品	大釘?	—	—	落ち込み下部	上半欠損	広幅 1.4	狭幅 0.4	残長 10.0	—	
14	012-01	金属製品	大釘?	—	—	落ち込み下部	完形	広幅 1.4	狭幅 0.9	長 28.0	—	
15	001-01	木製品 (ケヤキ)	角材	—	—	黒色粘土	上半欠損	広幅 25.0	狭幅 11.9	残長 205.6	—	紐目
16	002-01	木製品 (ケヤキ)	角材	—	23	黒色粘土	上半欠損	広幅 46.3	狭幅 44.1	残長 104.0	—	2方にホゾ穴。橋脚部材。
17	006-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	—	19～22	包含層	口縁部2/12	9.4	—	—	灰白 2.5Y8/2	丸椀。鉄釉、化粧掛けあり。
18	006-03	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	—	19～22	包含層	4/12	胴部 10.5	7.8	—	灰白 2.5Y8/2	3足筒形香炉。鉄釉。
19	008-03	陶器 (常滑)	鉢	—	19～22	包含層	口縁部小片	28.4	—	—	橙 5YR6/6	口縁部外面に沈線。
20	006-04	陶器 (常滑)	鉢	—	19～22	包含層	口縁部2/12 底部3/12	19.8	9.8	8.3	明赤褐 5YR5/4	3足。口縁部内面に煤付着。
21	007-01	陶器 (常滑)	練鉢	—	19～22	包含層	口縁部1/12	38.9	—	—	橙 7.5YR6/6	口縁部内面に煤付着。
22	006-05	陶器 (常滑)	練鉢	—	19～22	包含層	口縁部1/12	33.1	—	—	橙 5YR6/6	
23	008-01	陶器 (常滑)	甕	—	64	上部整地層	口縁部小片	62	—	—	灰 5Y4/1	
24	005-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	—	23・24	整地層	口縁部4/12 高台部6/12	10.4	高台 4.1	5.45	灰白 8/	染付。
25	005-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	—	23・24	整地層	口縁部2/12 高台部4/12	8.8	高台 3.8	4.8	灰白 8/	染付。端反椀。
26	009-01	瓦	丸瓦	—	17	焼土	6/12	幅 16.0	厚 2.3	残長 28.4	橙 7.5YR7/6	酸化焼成。
27	010-01	瓦	軒平瓦	—	17	焼土	2/12	—	—	残長 8.0	暗灰 N3/	内外面燻。均整唐草文。
28	007-03	石製品 (砂岩)	砥石	—	19～22	包含層	3/12以下	幅 3.8	厚 2.1	残長 11.2	灰白 10YR8/1	微細粒砂岩。

第5表 第2次調査出土遺物観察表

## V. 第3次調査

第3次調査は、伊勢街道一背割下水に挟まれた長短冊形の町屋と、大手道との境目にあたる。『宝暦咄し』中の街並図（宝暦頃～文政11年）によれば、「小津」（山城屋）の屋敷に相当する<sup>(1)</sup>。

調査は、道路側溝と集水桝設置部分を対象とし、調査区は工事種ごとに1～3区とした（第6表）。

調査は2013年8月20日から同9月3日まで行った。

### （1）基本層序（第23図）

基本層序と各層の対応は、第23図を参照されたい。

I：現代整地層・構造物（アスファルト等）

II：近代整地層 焼土を多く含む黒褐色砂質土である。焼土は明治・昭和大火由来であろうが、出土遺物がなく年代特定には至らなかった。

III：近世整地層① 粘砂や粘質土を主体とし、礫が多く混じる箇所がある。17世紀から19世紀までの遺物を含む。2区では本層上面で近現代の土管や便器が認められた。

IV：近世整地層② 均質な砂を主体とする層。一定、遺物を含むことから整地層としたが、洪水堆積の可能性もある。17世紀の遺物を含む。3区のみ、IV層上面で近世遺構を検出。

V：湿地状堆積または整地層 非常に軟弱なシルトで、上部は16世紀末～17世紀の陶磁器や木製品を包含する。下部の黒褐色シルトは遺物を含まず、他次調査で確認した基盤層上の黒色土（古土壌）に対応する可能性が高い。

VI：基盤層 軟弱な黄褐色系粘土質シルト～粘土。

### （2）遺構（第21図、第7表）

1区 現存の背割下水と大手道の合流点にあたるが、現地地表下60cmまでは現代の攪乱を受けており、近世の背割下水を検出することはできなかった。

現地地表下95cm以下（4層）は湿地状の軟弱なシルトとなり、貝片や杭片がみられた。

2区 調査地の大半が攪乱ないし近世遺構内にあたり、石積や完形の平瓦を立て並べる箇所があったが、調査区の狭小さから遺構の詳細は明らかにできなかった。大手道との位置関係から、旧道路側溝であった可能性が考えられる。埋土から近世の陶磁器が出土

した。また、瓦には棧瓦は含まれない。

この他、北壁で常滑赤物の甕（便槽）と現代の陶製便器が合わさった便所を確認した（写真図版7）。

3区 町屋の東半にあたる。下水工事による攪乱を受けるが、5層上面で常滑甕便槽（S X301）、17世紀代の常滑甕を含む土坑（S K302）を検出した。攪乱内から別個体の常滑甕底部が出土しており、調査区内に少なくとも2基の常滑甕便槽があったとみられる。

現表下75cmから湿地状の軟弱なシルトとなった。

### （3）遺物（第24～26図）

近世整地層①（基本層序III層）の遺物は、肥前系磁器IV期末～V期（18世紀末～19世紀前半）を下限とする（1・3）。近世整地層②（基本層序IV層）は焙烙（18）、常滑片口鉢（19）がある。19は櫛状工具で細かい摺目を付けており、17世紀に下るものか。

湿地状堆積（基本層序V層）には中世末の南伊勢系鍋（10）、12型式の常滑片口鉢（14・17）などがある。9は1700年前後に多い鶴首瓶。他に横櫛（15）やほぼ完形の漆器碗（16）、菊丸瓦（13）がある。常滑製品はいずれも赤物で、片口鉢は伊勢街道付近の2・3次調査に多くみられる。28～30は甕。28はS K302出土の常滑赤物甕で、17世紀代のもの。29・30は便槽の使用痕（付着物）がある。

31～36は2区出土の平瓦。凹面はナゲ調整するが、凸面は台圧痕や離れ砂を残したものが目立つ。

### （4）小結

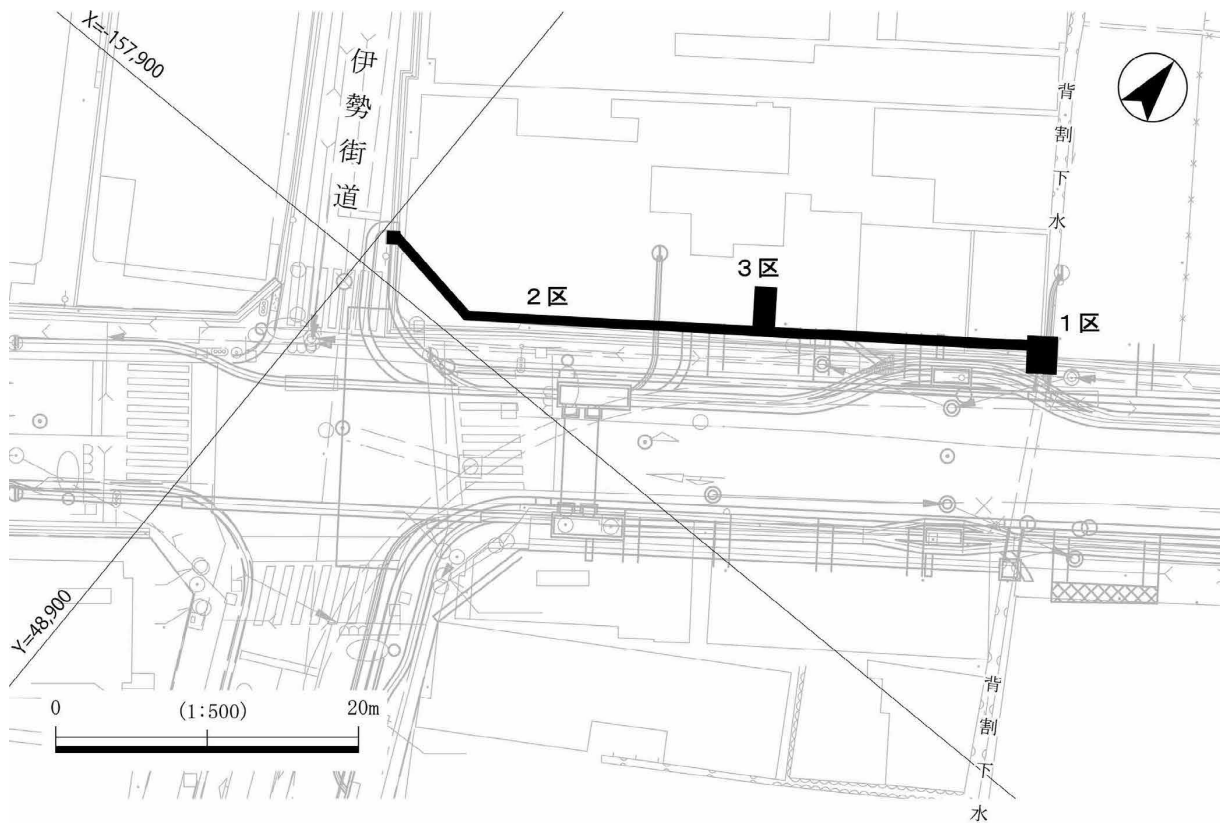
調査の結果、湿地状地が中世末以降埋没・整地され、17世紀には町屋化、現在に至る過程が明確になった。町屋化以降は複数の常滑便槽がみられた。

城下に現存する近世町屋では、通り庭を抜けた敷地奥側に便所や土蔵を配しており<sup>(2)</sup>、当地もこれに類した町屋であったと推測される。（櫻井）

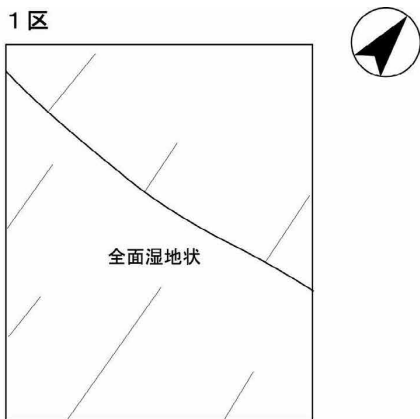
### 【註】

（1）松阪市『松阪市史』第9巻史料編、1981年。

（2）松阪市教育委員会『旧長谷川家住宅調査報告書』2014年。

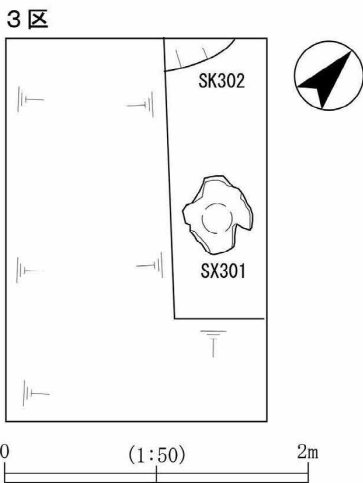


第21図 第3次調査区位置図 (1:500)



調査区	施工内容	備考
1区	集水桝	GL-165cmまで掘削
2区	側溝	GL-85~115cmまで掘削 大半が旧道路側溝に該当か
3区	宅地引込	GL-140cmまで掘削

第6表 第3次調査区一覧

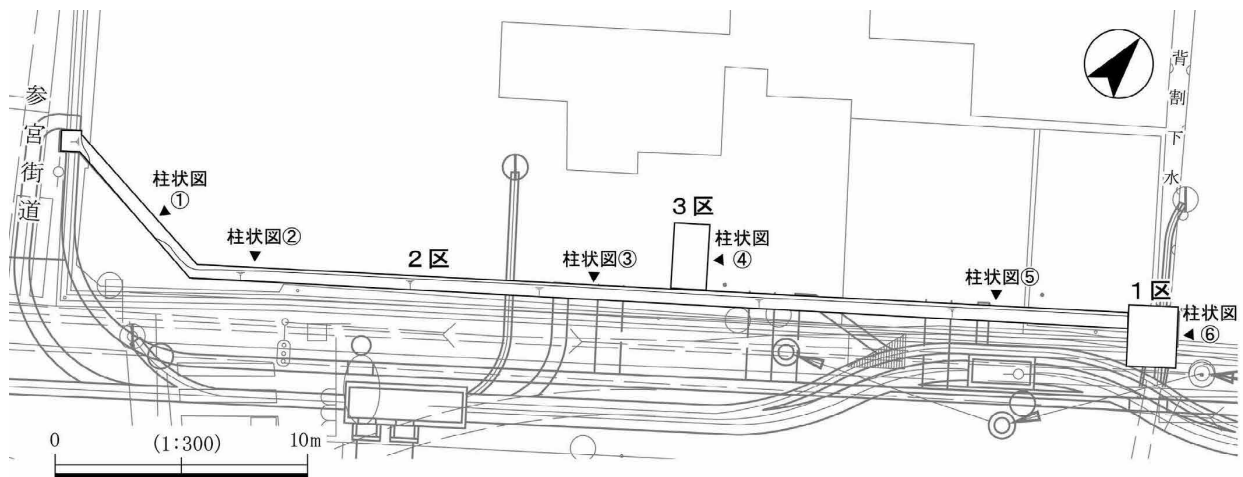


遺構番号	調査区	旧番号	層位時期	規模 (m)			主な出土遺物	備考
				長 (径)	幅	深		
SX301	3区	SX1	5層 上面 検出	0.5	-	0.1	銭貨 (甕に付着)	常滑甕の 便槽
SK302	3区	SK1	5層 上面 検出	0.5	-	0.75 以上	常滑甕 2個体分	

第7表 第3次調査 遺構一覧

第22図 第3次調査1区・3区 遺構平面図 (1:50)

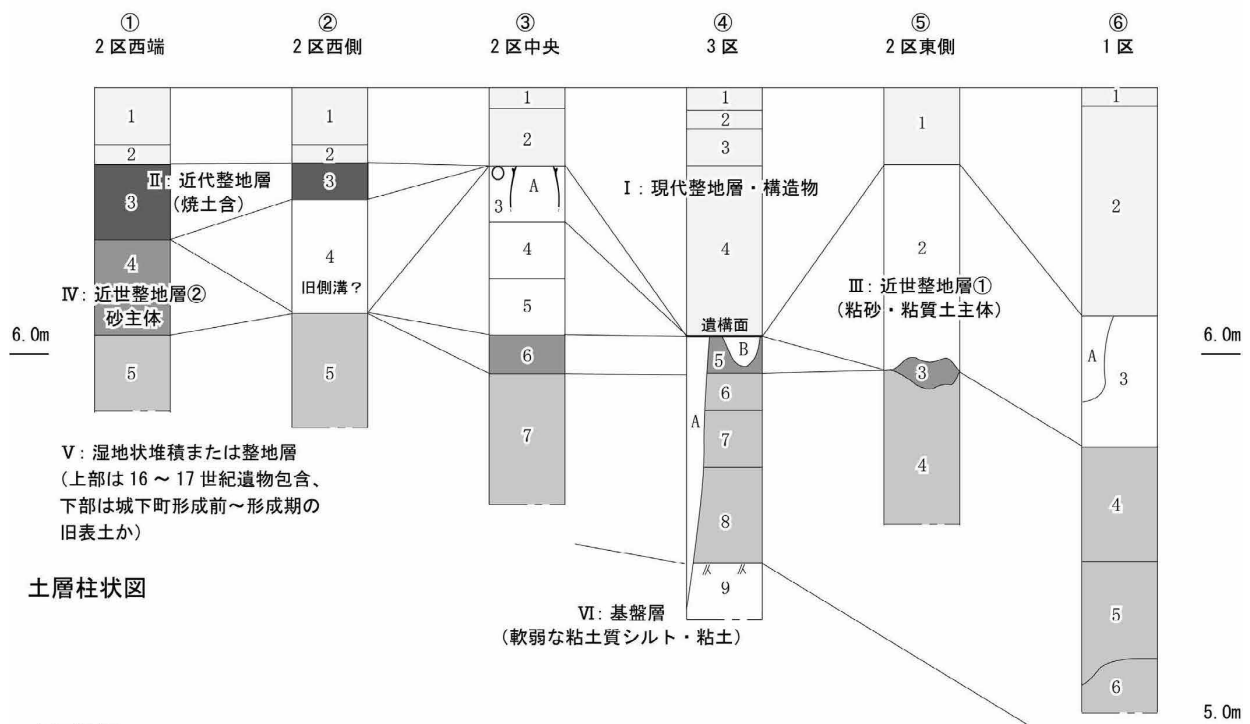




土層位置図

7.0m

7.0m



土層柱状図

土層注記

① 2区西端

1. 住宅塀の土台
2. 碎石
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土
4. 10YR5/6 黄褐色粗砂
5. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト

② 2区西側

1. 住宅塀の土台
2. 碎石
3. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (焼土・炭多含)
4. 10YR4/4 褐色粘土 (瓦多含) [旧側溝か]
5. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト

③ 2区中央

1. アスファルト
2. 碎石
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (壁土等多く混)
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘砂 (径5cm大礫多く混)
5. 10YR4/1 褐灰色粘砂 (黄褐色土ブロック多く混)
6. N5 灰色極粗砂
7. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト (縮まり弱)
- A. [近現代遺構] (便槽・土管)

④ 3区

1. アスファルト
2. 碎石
3. 現代盛土
4. 近現代盛土 (ゴミ、明治陶器含)
5. 2.5Y7/3 浅黄色粗砂
6. 10YR2/1 黒褐色粘土質シルト
7. 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト (縮まり弱)
8. 10YR2/1 黒褐色粘土質シルト (縮まり弱)
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 (縮まり無) [基盤層]
- A. [SK302] B. [SX301]

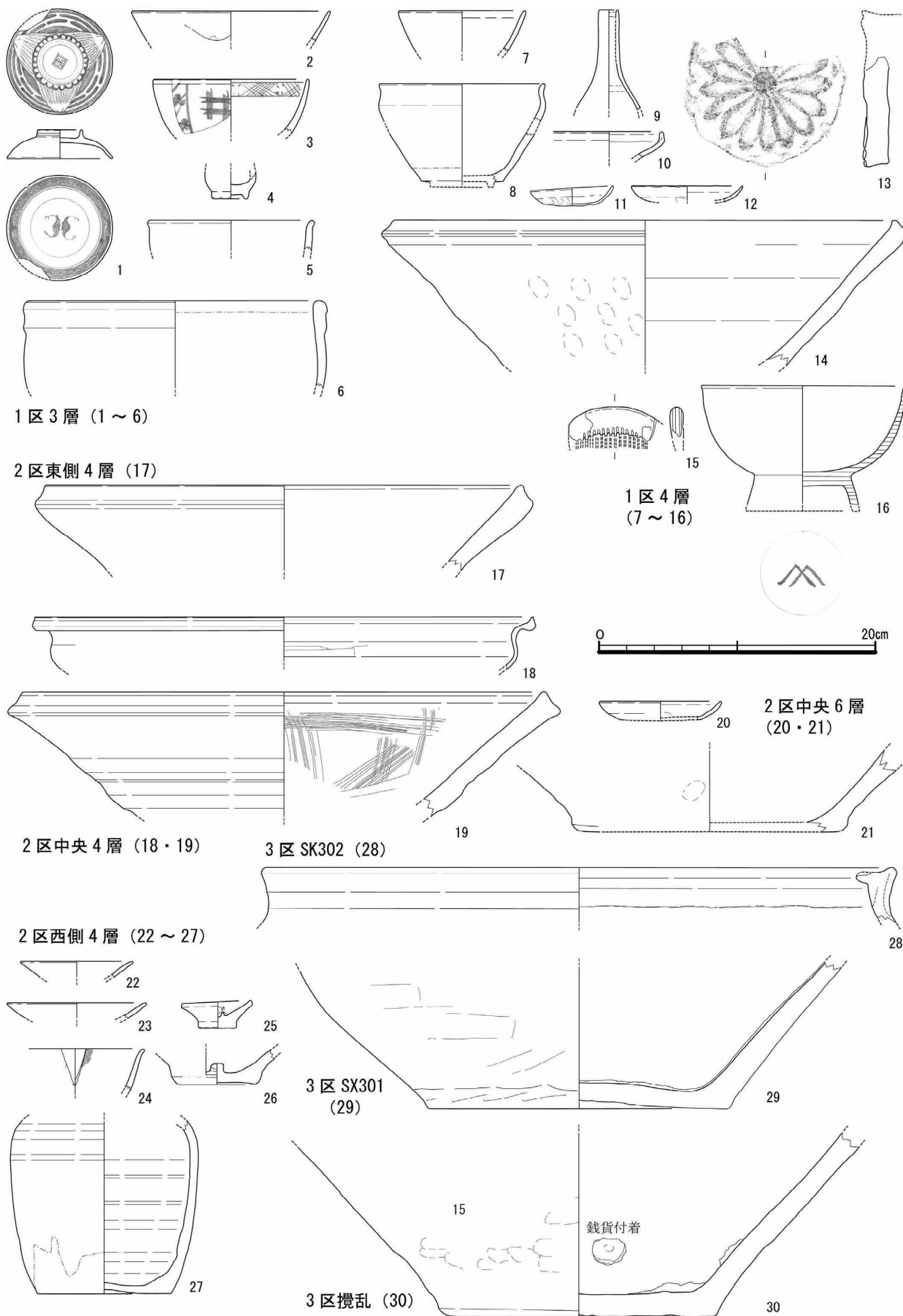
⑤ 2区東側

1. 現代盛土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (砂多く混)
3. N5 灰色砂層 (局所的)
4. 5Y4/2 灰色粘土質シルト (砂混、縮まり無)

⑥ 1区

1. アスファルト
2. 碎石
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (砂多く混、縮まり弱、19c 遺物包含)
4. 5Y4/2 灰色粘土質シルト (グライ化、縮まり無、貝片・杭片含)
5. N3 暗灰色粘土 (縮まり弱)
6. 10YR3/2 黒褐色粘土 (縮まり弱)
- A. [近現代土坑]

第23図 第3次調査土層柱状図 (1:20)



第24図 第3次調査出土遺物① (1:4)

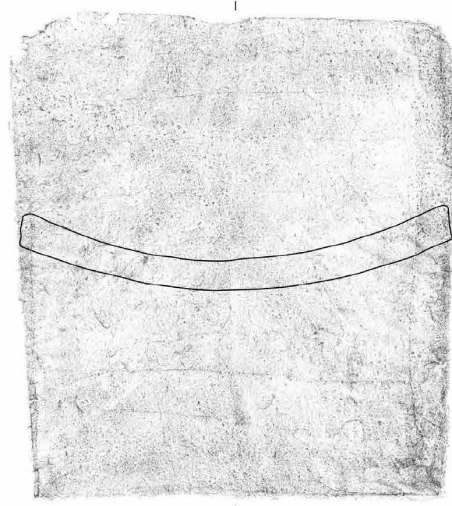




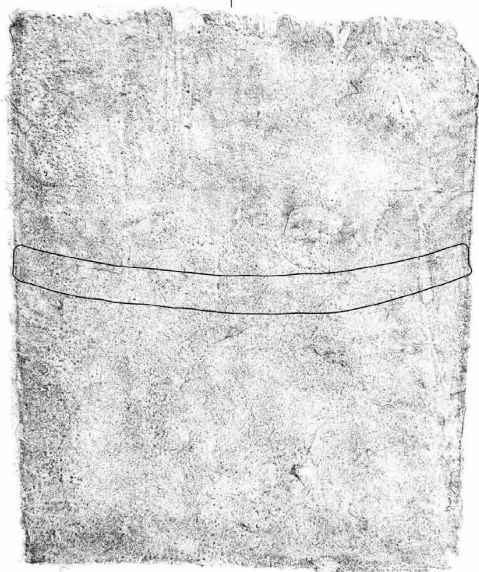
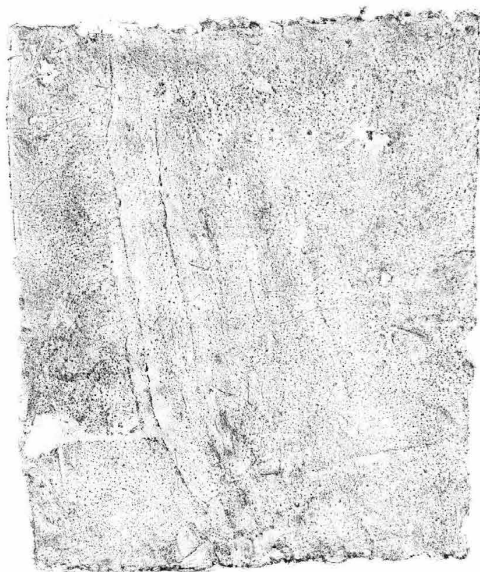
2区西側4層  
(31 ~ 33)



31



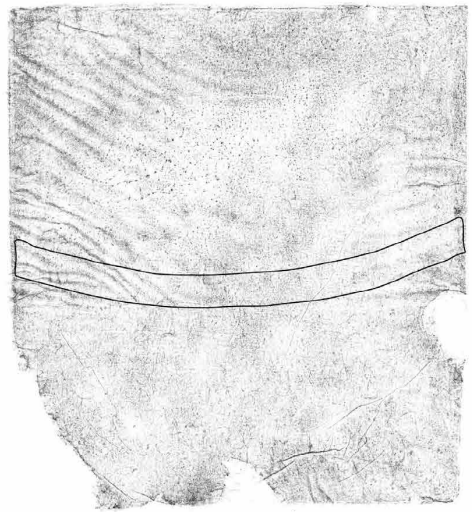
32



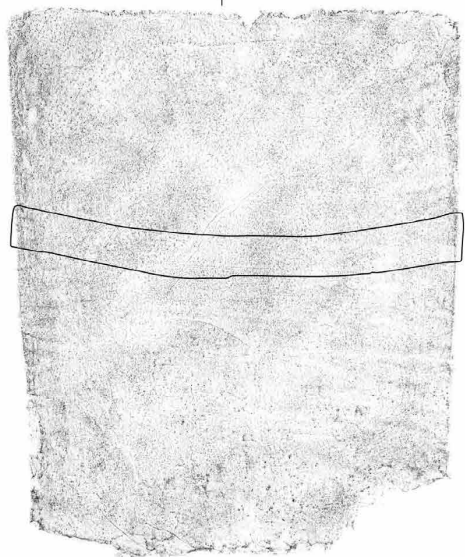
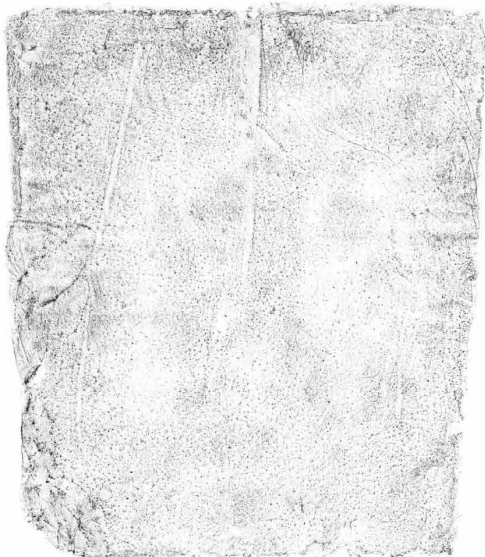
33

第25図 第3次調査出土遺物② (1:4)



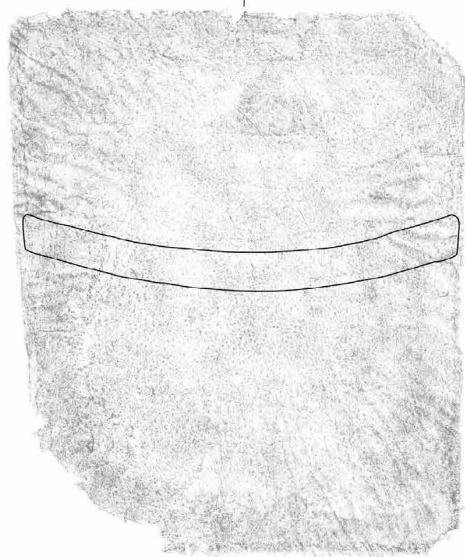
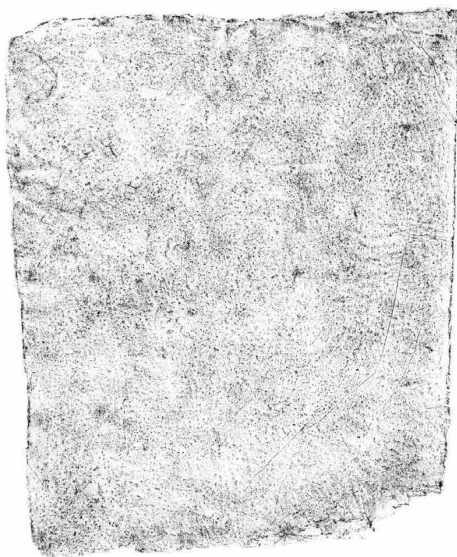


34



35

2区西側4層(34~36)



36

第26図 第3次調査出土遺物③(1:4)

①土器・陶磁器・瓦

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1	003-01	磁器 染付 (肥前)	蓋	1区	3層 にぶい黄褐色粘質土	11/12	7.6	3.1	2.1	白	高台内に二重方形枠+変形字
2	003-03	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	3層 にぶい黄褐色粘質土	口縁部1/12	14.2	-	2.2	灰白	
3	003-02	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	3層 にぶい黄褐色粘質土	口縁部2/12	11.1	-	3.9	灰白	四方襷文
4	003-05	磁器 (肥前)	油壺	1区	3層 にぶい黄褐色粘質土	底部8/12	-	2.5	2.0	灰白	
5	002-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	3層 にぶい黄褐色粘質土	口縁部1/12	11.7	-	2.0	にぶい赤褐	鉄釉
6	001-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	1区	3層 にぶい黄褐色粘質土	口縁部1/12	21.0	-	6.3	黒	鉄釉
7	003-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	4層 灰色粘土質シルト	口縁部1/12	9.0	-	3.0	灰白	灰釉
8	001-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	1区	4層 灰色粘土質シルト	口縁~胴部1/12	11.8	-	7.5	黒	鉄釉、底部は露胎
9	003-07	磁器 (肥前)	瓶	1区	4層 灰色粘土質シルト	口縁部12/12	1.3	-	7.2	灰白	鶴首瓶
10	002-04	土師器 (南伊勢)	鍋	1区	4層 灰色粘土質シルト	口縁部小片	-	-	1.9	黄灰	
11	002-03	土師器 (南伊勢)	皿	1区	4層 灰色粘土質シルト	2/12	6.0	-	1.8	にぶい橙	
12	002-02	土師器 (南伊勢)	皿	1区	4層 灰色粘土質シルト	口縁部1/12	8.0	-	1.0	灰白	
13	001-02	瓦	軒丸瓦	1区	4層 灰色粘土質シルト	瓦当	径11.5	-	厚1.8	暗灰	
14	001-01	陶器 (常滑)	鉢	1区	4層 灰色粘土質シルト	口縁~胴部1/12	36.2	-	10.6	にぶい橙	赤物(軟質)
17	002-07	陶器 (常滑)	鉢	2区東側	4層 灰色粘土質シルト	口縁部2/12	34.4	-	6.2	浅黄橙	赤物(軟質)、内面煤付着
18	006-01	土師器 (南伊勢)	焙烙	2区中央	4層 黄灰色粘砂(礫混)	口縁部1/12	36.0	-	3.8	にぶい黄橙	
19	004-01	陶器 (常滑)	鉢	2区中央	4層 黄灰色粘砂(礫混)	口縁~胴部2/12	37.8	-	9.0	にぶい赤褐	赤物、櫛状工具による摺目
20	002-05	土師器 (南伊勢)	皿	2区中央	6層 灰色粗砂	1/12	8.8	-	1.4	にぶい橙	
21	002-06	陶器 (常滑)	鉢	2区中央	6層 灰色粗砂	底部1/12	-	18.8	5.9	にぶい橙	赤物(軟質)、使用による摩耗
22	006-04	土師器 (南伊勢)	皿	2区西側	4層 褐色粘質土	口縁部1/12	8.0	-	1.2	橙	
23	006-03	土師器 (南伊勢)	皿	2区西側	4層 褐色粘質土	口縁部2/12	10.0	-	1.1	橙	
24	003-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	口縁部小片	-	-	3.0	灰白	灰釉、呉須がけ
25	003-06	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	11/12	4.9	2.6	2.0	灰白	灰釉
26	006-02	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	2区西側	4層 褐色粘質土	底部12/12	-	6.6	2.5	橙	薄い錆釉
27	004-02	陶器 (瀬戸・美濃)	壺	2区西側	4層 褐色粘質土	底部12/12	-	9.6	12.5	灰白	灰釉
28	014-01	陶器 (常滑)	甕	3区	SK302	口縁部2/12	68.0	-	6.0	橙	赤物、風化著しい
29	015-01	陶器 (常滑)	甕	3区	SX301	底部11/12	-	21.5	10.5	赤褐色	赤物、内面付着物(便槽か)
30	005-01	陶器 (常滑)	甕	3区	攪乱	底部6/12	-	19.6	13.3	にぶい黄橙	内面付着物(便槽か) 銭貨付着
31	007-01	瓦	平瓦	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	隅欠損	長29.8	幅24.3	厚2.2	黄灰	凹面ナデ、凸面台圧痕・離れ砂
32	012-01	瓦	平瓦	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	ほぼ完形	長26.3	幅23.3	厚1.7	灰	凹面ナデ、凸面ナデ
33	008-01	瓦	平瓦	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	ほぼ完形	長30.3	幅24.2	厚2.0	暗灰	凹面ナデ、凸面台圧痕
34	011-01	瓦	平瓦	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	ほぼ完形	長26.7	幅24.0	厚1.8	灰	凹面ナデ、凸面ナデ
35	010-01	瓦	平瓦	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	ほぼ完形	長29.3	幅24.8	厚2.3	黄灰	凹面ナデ、凸面台圧痕・離れ砂
36	009-01	瓦	平瓦	2区西側	4層 にぶい黄褐色粘質土	ほぼ完形	長28.7	幅23.0	厚2.1	暗灰	凹面ナデ、凸面ナデ

②木製品

遺物番号	実測番号	器種	調査区	遺構 層位	法量 (cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕、継手等) 保存処理
					長/径	幅/高	厚			
15	016-01	横櫛	1区	4層 灰色粘土質シルト	6.4	2.0	1.0	-	板目	腐食著しく樹種同定不可能 保存処理済
16	016-02	漆器椀	1区	4層 灰色粘土質シルト	14.7	8.7	1.5	ケヤキ	横木	全面朱漆、高台内に文様 保存処理済

第8表 第3次調査出土遺物観察表



## VI. 第4次調査

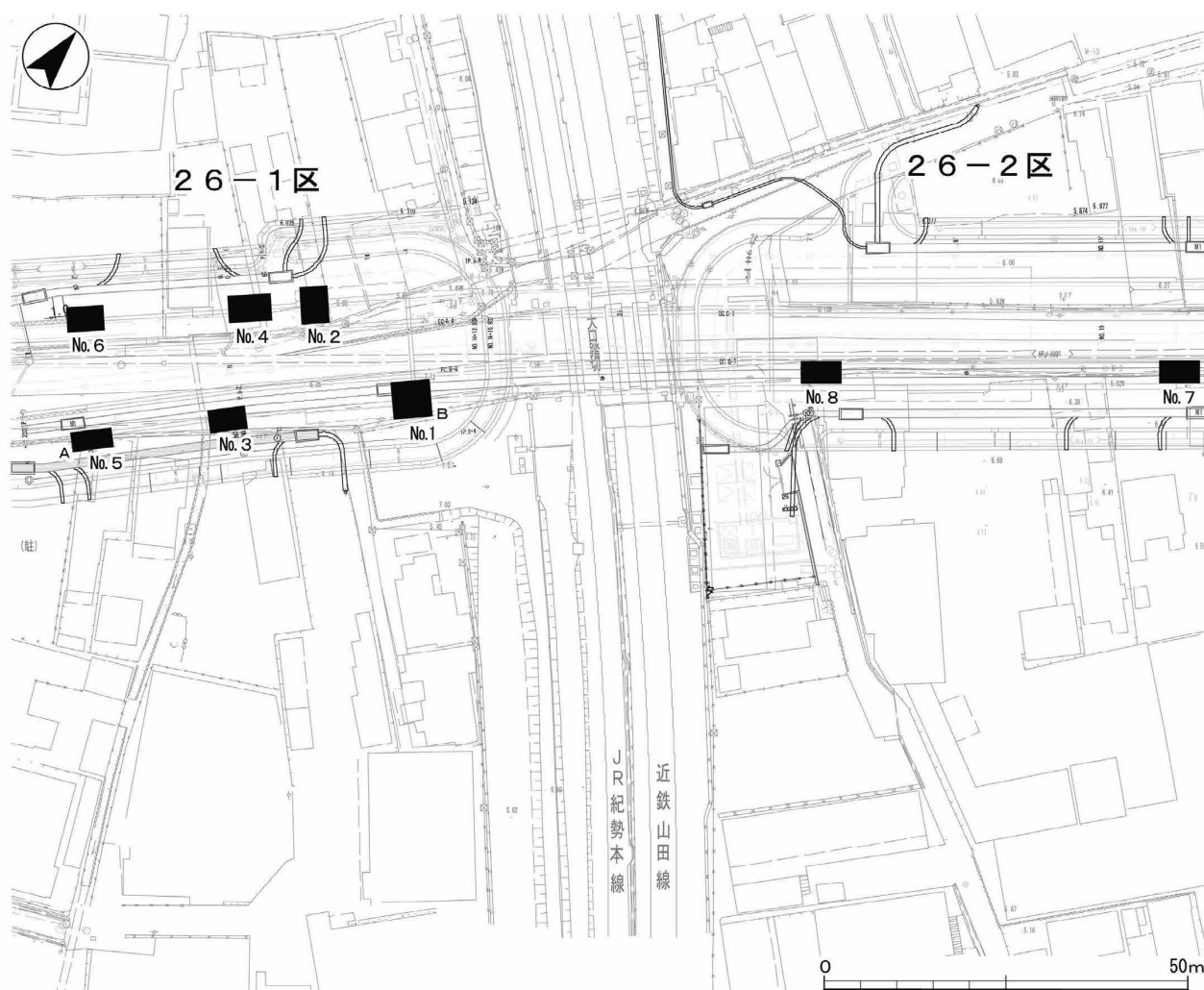
対象地は松坂城跡から東進する大口道沿いで、城下町の東縁辺部にあたる。近鉄線路を挟んだ両側で工事立会を実施し、線路の手前側を26-1区、向こう側を26-2区とした。両地区ともに湿地帯の様相を呈し、遺構は確認できなかった。26-2区では近世遺物の出土もなく、平安時代末～鎌倉時代の土師器や山茶碗の小片が出土したに止まる。

### 1. 層序

26-1区の層序の概略である。基本層序は第1層：近現代整地層、第2層：黄褐色粘質土（18世紀後葉～19世紀前半整地層）、第3層：暗オリーブ灰色細砂シルトおよび砂層（18世紀代）、第4層：オリ

ブ黒色粘土（ブロック土含む）、第5層：浅黄～オリーブ灰色粗砂混粘土・シルトである。第5層は当地の基盤層で、湿地性の状態を示す。第4層は対象地南東部で限定的に見られる。ブロック土を含むため、人工的な埋め立てによる層の可能性もあるが、ブロックの混入状態からは、洪水に伴う層である可能性も高い。第3層は湿地性の土、第2層は部分的に粗砂層を挟んでおり、水流（洪水）のあったことを示している。1層は近現代の盛土で、その上部では被熱のある瓦を多く含んでいた。昭和の松阪大火によるものかも知れない。

基盤となる第5層は北東側、言い換えれば海側へ進むにつれて、その標高を減じている。No.5からNo.



第27図 第4次調査立会坑位置図 (1:1,000)



1 までの約50mで50cmの落ち込みである。その上に乗る第3層も連動して落ち込んでいく様子が見られ、両者とも湿地状を呈している。第2層は海側へ進むほど厚さを増しており、その上面では30cm程度の落ち込みに緩和されている。

## 2. 遺物

図示した遺物の大半は近世のもので、1～10が26-1区で、全て線路側のNo.1及びNo.2からのものである。

1は土師器の皿としたが、小片であるものの口径は相当大きなものとなる可能性がある。鍋や茶釜等の可能性も排除しきれないが、口縁端部の形態からは皿が妥当なところである。外面が瓦質に焼成しており、瓦質土器の可能性も残る。

2～6は陶器で、2は徳利、3も同様な壺の底部と思われる。2の外側3方に「駅部田」、「浪田屋」、もうひとつは「黒部四十式」または「黒部四十屋」か「黒部四十物」等、判読に苦しむ。4は壺または鉢の底部で、内面が錆釉状になり、外面は氷割文風を呈している。5は土瓶と思われるが、小片のため注口は不明である。6は挿鉢であるが、焼膨れによる歪みがある。

7～10は磁器で、全て染付である。7・8は蓋、9・10は皿で、10は菊花皿を呈する。10を除き、見込みや高台に圏線を巡らしている。7の内外面には吉祥文字の「壽」を描き、外面には農具等を図案化した絵柄を配置する特異なものである。8は内面に山水、外面にアザミと蝶であろうか。9には山水、10の見込みに描かれるのは富士山、帆掛舟、菊花と

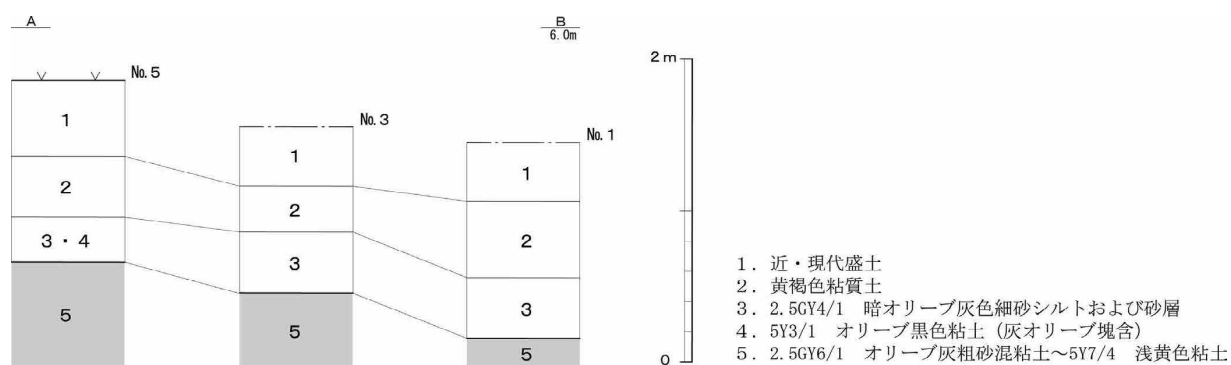
思われる。

11・12は26-2区からの出土であるが、いずれも小片である。11は土師器の皿で外面は未調整、12は山茶碗で体部の丸味を残す。両者とも他のものとは大きく時期を違え、平安時代末から鎌倉時代にかけてのものである。

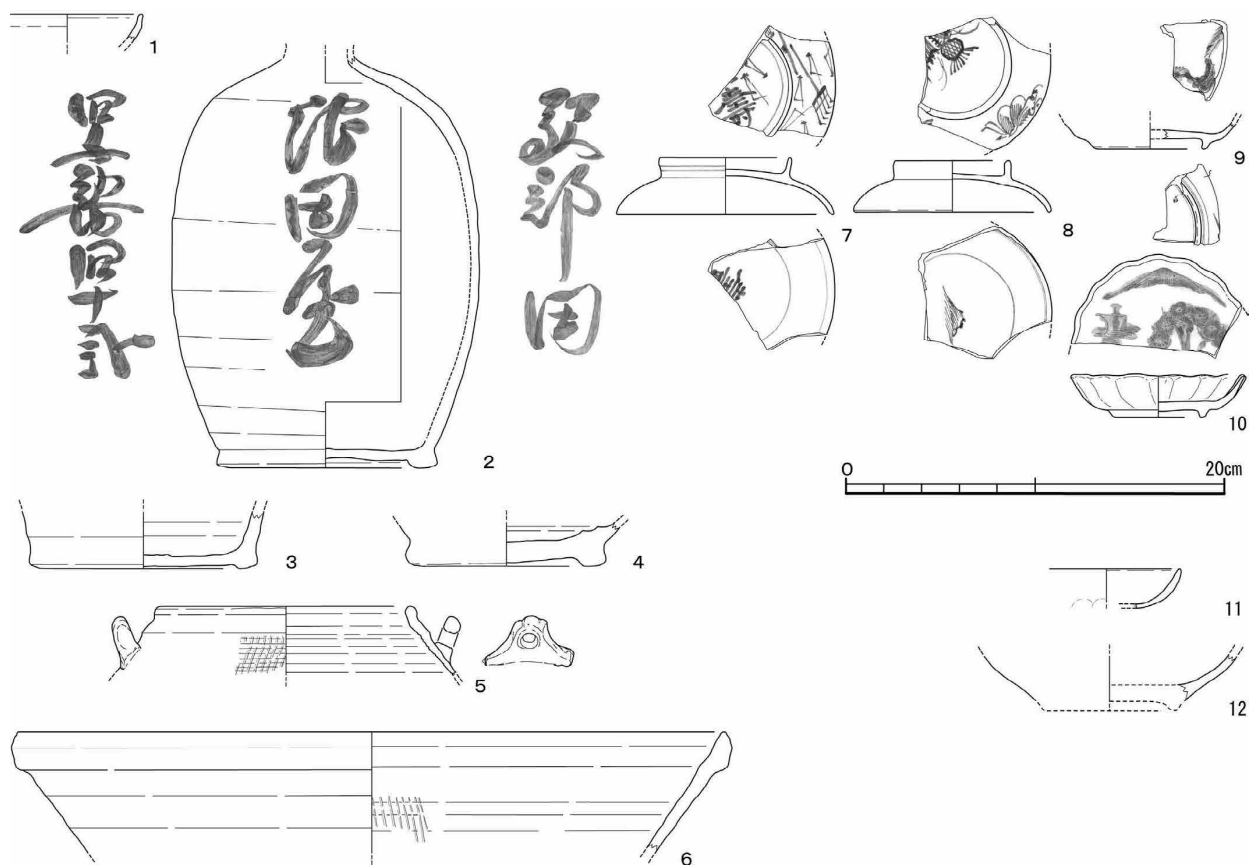
## 3. 小結

挿鉢（6）をはじめ、第3層から出土した遺物は18世紀に遡る。この第3層は既述したように湿地性の土壌で、海に向かって自然に傾斜する。その上に乗る第2層はその傾斜を緩和し、土質も異なることから整地された土壌の可能性もある。図示した遺物の多くはこの第2層からの出土で、19世紀まで降る可能性をもつ。したがって、今回の対象地は18世紀代までは湿地状の状態で推移し、19世紀には整地が始まっており、近現代の土地利用へと繋がるものと考えられる。なお、26-2区に至っては、近世遺物の出土もなく、城下町に暮らす人々の活動範囲外であったようである。

（森川）



第28図 第4次調査土層柱状図 (1:50)



第29図 第4次調査出土遺物 (1:4)

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	001-06	土師器	皿?	26-1区	No.1	第2層	口縁部小片	-	-	-	褐灰 10YR4/1	外面が瓦質に焼成している。
2	002-01	陶器	徳利	26-1区	No.1	第1層	口縁部欠損	-	高台 10.0	-	灰白 2.5Y8/2	外面3方に屋号等の表記。「駅部田」・「浪田屋」・「黒部四十屋」。透明釉。
3	001-02	陶器	壺	26-1区	No.1	第2層	高台2/12	-	高台 10.2	-	灰白 2.5Y7/1	透明釉。
4	001-01	陶器	壺?	26-1区	No.1	第2層	高台7/12	-	高台 8.2	-	浅黄 5Y7/3	灰釉。外面水割文風、内面錆釉状。
5	003-05	陶器 (伊賀)	土瓶	26-1区	No.2	第2層	口縁部1/12以下	13.1	-	-	灰白 2.5Y8/2	透明釉。
6	001-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	26-1区	No.1	第3層	口縁部1/12	37.4	-	-	黄灰 2.5Y5/1	鉄釉。焼膨れによる歪みあり。
7	003-01	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	26-1区	No.1	第2層	つまみ部3/12	つまみ 6.8	11.4	3.0	白 9/	染付。内外面に「壽」、外面に幾何学文。
8	003-02	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	26-1区	No.2	第2層	つまみ部6/12	つまみ 6.0	10.2	2.7	白 9/	染付。内外面に花蝶山水。
9	003-03	磁器	皿	26-1区	No.1	第2層	高台3/12	-	高台 5.6	-	白 9/	染付。内外面に山水。
10	003-04	磁器	皿	26-1区	No.1	第1層	口縁部5/12 高台6/12	9.3	高台 4.5	2.3	白 9/	染付菊皿。内面に風景。
11	001-05	土師器	皿	26-2区	No.7	立会坑1 灰色シルト	口縁部小片	-	-	-	にぶい橙 5YR7/4	
12	001-04	山茶椀	椀	26-2区	No.7	立会坑1 灰色シルト	体部下半2/12	-	-	-	灰白 2.5Y7/1	

第9表 第4次調査出土遺物観察表

## VII. 第5次調査

### 1. 調査の概要

#### (1) 調査区の位置 (第30図)

第5次調査は、県道松阪公園大口線・市道垣鼻清生線の交差点付近の道路側溝・電線共同溝と竪坑・路床改良部分を対象とした立会調査である。第1次・4次・6次・7次調査地が隣接する。市道垣鼻清生線を挟んだ北東側は旧町名の博労町・外博労町、南西側は博労町・湯屋町・工屋町に相当し、大手道に面した城下町東外縁部にあたる。

調査区は工事着手順に1～12区と名付けた(第10表)。調査は平成27(2015)年5月8日に開始し、平成28(2016)年1月13日に終了した。

なお、本次調査区のうち、8区は本工事前の準備工であり、同一地点を6次調査で再度調査している。

#### (2) 遺構検出・掘削

工事にあわせ整地層・堆積層を重機(バックホー)で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。電線共同溝・竪坑工事は工事範囲が狭小で、かつ掘削深度が2m以上に達することから、重機掘削と並行して壁面に軽量鋼矢板を打設しながら、延長2～3mピッチで工事が進められた。このような状況から、遺構は下層掘削中や土層精査中に把握したことが多い。

調査地は近現代のインフラ整備による攪乱が多く、連続的な土層の把握が困難であることや、遺構面が複数確認されたことから、基本層序や整地層ごとの遺物相の把握を第一として、土層の残りが良い地点から柱状図を作成することにした。

#### (3) 記録・図化

遺構実測は調査員による手測りである。遺構平面図は1/20または1/50、土層柱状図は1/20で作成し、適宜その他の縮尺を適用した。これらの図面に加えて現場の作業日誌も当センターで保管している。遺構・遺物写真は、デジタルカメラで撮影した。

遺構番号は、現地調査時は調査区別の通し番号としたが、報告書作成にあたり第5次調査の5を冒頭に付し、2桁の通番を組み合わせたものに訂正した。

ピットは調査区別の通し番号とした。遺構番号の新旧対照は遺構一覧表に記した。

#### (4) 出土遺物の整理

出土遺物は出土年月日と遺構・層位の区別を行い、調査区ごとに取りあげているが、工事立会という性格上、遺物の破片すべてを遺漏なく回収できたわけではない。整理作業終了後は報告書掲載遺物およびその参考資料(A遺物)と未掲載遺物(B遺物)に区分して保存した。保存処理は、A遺物に限定して行った。金属製品はA遺物の全てを保存処理対象としたが、木製品は箸や木っ端などが大量に出土したため、器種・用途が明確で、かつ残りの良いものを報告・保存処理対象としている。

### 2. 基本層序

基本層序は以下のとおりである。基本層序と各層の対応は、第31・32図を参照されたい。

#### I：現代整地層・構造物

アスファルトや砕石等。

#### II：近代整地層

炭や焼土、壁土等の夾雑物を多く含む灰黄色系の砂質土である。明治・昭和の大火に伴う炭・焼土層は確認できない。明治以降の遺物を含む。

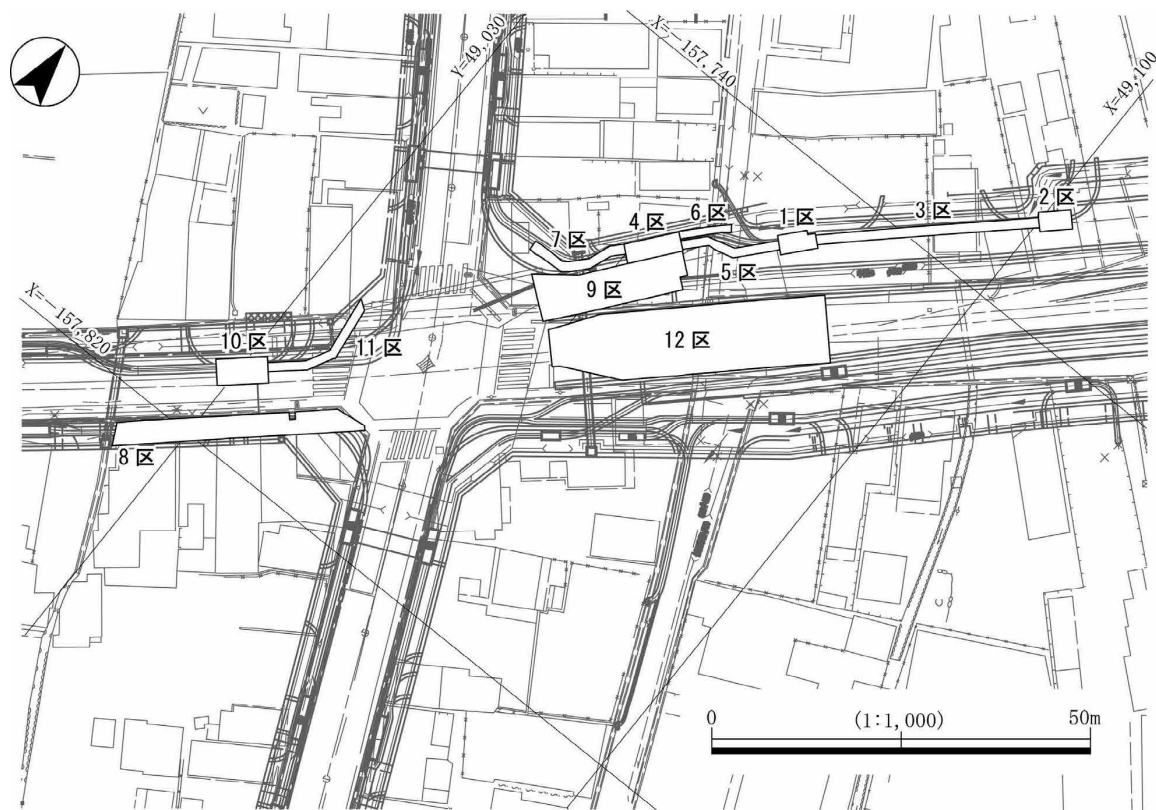
#### III：近世整地層①

炭や焼土などの夾雑物を含む灰黄色系砂質土で、三和土や硬く締まる箇所があり、町屋として度々整地されている。層中に18世紀後半から19世紀前半までの遺物を含み、細分層中・層間に近世の遺構が認められる。また、18世紀後葉から19世紀初頭の遺物を含む局所的な整地層(粗砂層)があり、遺構の時期を知る上で重要な鍵層となる。

#### IV：近世整地層②

均質な砂や砂質シルトを主体とする層で、洪水堆積ないしそれを母材とした整地層である。特に、8区では4層と5層の境目付近に遺物が集中しており、堆積物(シルト)は浮遊、遺物は底面を転動したと考えられる。

調査地北東側では湿地状地であるS Z 550埋没後

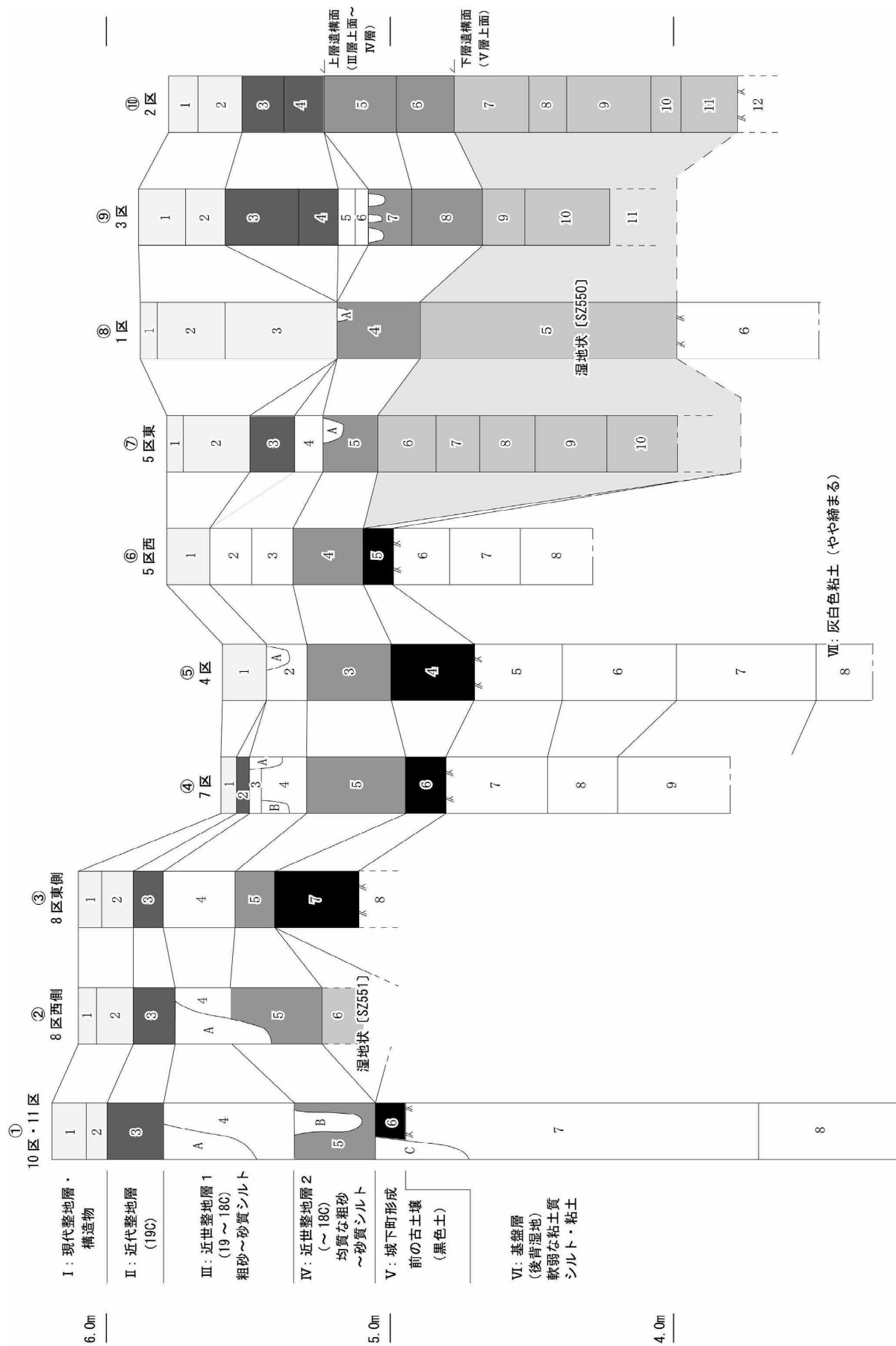


第30図 第5次調査区位置図 (1:1,000)

調査区	施工内容	主な遺構	備考
1区	竪坑	常滑甕埋設、湿地状落ち込み	GL-240cmまで掘削、上層遺構完掘
2区	竪坑	湿地状落ち込み	GL-200cmまで掘削、上層遺構完掘
3区	電線共同溝	土坑・溝・ピット・湿地状落ち込み	GL-160～200cmまで掘削、上層遺構完掘
4区	竪坑	常滑甕埋設、杭列	GL-230cmまで掘削、上層遺構完掘
5区	電線共同溝	土坑・杭列・湿地状落ち込み	GL-180cmまで掘削、上層遺構完掘
6区	電線共同溝	土坑	GL-180cmまで掘削、上層遺構完掘
7区	電線共同溝	土坑・井戸・溝	GL-180cmまで掘削、上層遺構完掘
8区	路床改良	土坑・ピット・湿地状落ち込み	本工事前の表層土壌改良、GL-85cmまで掘削、大半の遺構は検出までに留まる（本工事は6次調査で対応）
9区	路床改良	土坑・溝・湿地状落ち込み	GL-85cmまで掘削 大半が上下水道等の攪乱
10区	竪坑	土坑・ピット	GL-300cmまで掘削、上下層遺構完掘
11区	電線共同溝	土坑	GL-200cmまで掘削、上層遺構完掘 北半は埋設管等多く、良好なデータ取れず
12区	路床改良	土坑・溝・湿地状落ち込み	南半はGL-60cmまで、北半は110cmまで、SZ550内は部分的にGL-190cmまで掘削、大半が上下水道等の攪乱

第10表 第5次調査区一覧





第31図 第5次調査土層柱状図① (1:20、柱状図位置は遺構全体図と対応、土層番号は調査区ごとに付与)

## 土層注記

### ① 10区・11区

1. アスファルト
  2. 砕石
  3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (明治陶器含)
  4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (焼土・漆喰片・褐色土ブロック含)
  5. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (4層に比べ粘性高)
  6. 5PB3/1 暗青灰色粘質土 (黒ボク土が変質) (古土壌)
  7. 10YR6/6 明黄褐色粘土 (軟弱)
  8. 5Y6/4 オリーブ黄色粘砂 (極粗砂混、軟弱)
- A. 2. 5Y5/3 にぶい黄色極粗砂 [SK548] [基盤層]
- B. 焼土 [SK527]
- C. 10YR3/1 黒褐色粘砂 (僅かに貝を含む) [SK553]

### ②③ 8区

1. アスファルト
  2. 砕石
  3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (炭・焼土多、よく締まり  
東側は三和土状、明治～19c遺物含、)
  4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (炭・焼土多、締まりやや弱)
  5. 2. 5Y4/2 暗灰黄色粘砂 (18c遺物多、  
締まり弱、7層との境界に炭・焼土多)
  6. 2. 5Y3/1 黒褐色粘砂 (締まり弱、貝等遺物多) [SZ551]
  7. 10YR3/1 黒褐色粘質土 [古土壌、土壌分析  
サンプル採取]
  8. 7. 5YR5/4 にぶい褐色粘土 [基盤層]
- A. 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂 (18～19c遺物含) [SK542・543・548]

### ④ 7区

1. 砕石
  2. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質土  
(三和土状で硬い、明治遺物含)
  3. 7. 5YR5/6 明褐色粗砂
  4. 7. 5Y5/3 にぶい褐色粘質土
  5. 2. 5Y3/2 暗灰黄細砂
  6. 7. 5Y3/1 黒褐色粘質土 [古土壌]
  7. 2. 5Y6/3 にぶい黄色粘土 (軟弱)
  8. 5Y6/1 オリーブ灰色粘土 (軟弱)
- A. [SK514] [基盤層]
- B. [SK519]

### ⑤ 4区

1. 砕石
  2. 2. 5Y6/2 灰黄色砂質土
  3. 2. 5Y3/2 暗灰黄色細砂
  4. 7. 5Y3/1 黒褐色粘質土 (古土壌)
  5. 2. 5Y6/3 にぶい黄色粘土 (軟弱)
  6. 5G6/1 オリーブ灰色粘土 (軟弱)
  7. 2. 5Y8/6 黄色粘土 (軟弱)
  8. 5Y7/2 灰白色粘土 (やや締まる)
- A. [SK511] [基盤層]

### ⑥ 5区西

1. 砕石
  2. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂質土
  3. 2. 5Y4/2 暗灰黄色砂質土
  4. 5Y5/2 灰オリーブ色極細砂
  5. 7. 5Y3/1 黒褐色粘質土 (古土壌)
  6. 7. 5Y6/6 橙色粘土 (軟弱)
  7. 2. 5Y5/2 暗灰黄色粘土 (軟弱)
  8. 5G6/1 緑灰色粘土 (軟弱)
- [基盤層]

### ⑦ 5区東

1. アスファルト
  2. 砕石
  3. 2. 5Y6/4 にぶい黄色粗砂
  4. 5Y5/1 灰色砂質土 (よく締まる、焼土含)
  5. 2. 5Y5/1 黄灰色砂質シルト (粗砂混)
  6. 2. 5Y5/1 黄灰色粗砂
  7. 10YR4/1 褐灰色粘土 (遺物多)
  8. 2. 5Y3/1 黒褐色粘土質シルト
  9. 2. 5Y3/1 黒褐色粘土
  10. 10B66/1 青灰色粘土質シルト
- A. [SK512] [SZ550]

### ⑧ 1区

1. アスファルト
  2. 砕石
  3. 現代盛土
  4. 5PB4/1 暗青灰色粗砂
  5. 2. 5Y3/1 黒褐色粘砂 (壁面崩落の  
恐れあり細分できず)
  6. 10Y6/2 オリーブ灰色粘土 [基盤層]
- A. [SK501]

### ⑨ 3区

1. 砕石
  2. 現代盛土
  3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
  4. 2. 5Y5/2 暗灰黄色細砂
  5. 2. 5Y5/1 黄灰色砂質土  
(よく締まる。三和土か)
  6. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂
  7. 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂
  8. 5Y5/2 灰オリーブ色極細砂
  9. N5 灰色粘砂
  10. N4 灰色粘砂
  11. 10YR3/1 黒褐色粘砂 (遺物多)
- A. [ピット・土坑] [SZ550]

### ⑩ 2区

1. 砕石
  2. 現代盛土
  3. 2. 5Y5/3 黄褐色粗砂
  4. 2. 5Y4/1 黄灰色粗砂
  5. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト  
(黄褐色土ブロック混)
  6. 5Y5/2 灰オリーブ砂質シルト
  7. N4 灰色砂質シルト (締まり無、遺物無)
  8. N3 暗灰色粘砂 (遺物多)
  9. 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト (締まり無)
  10. N3 暗灰色粘砂 (遺物多)
  11. 2. 5Y5/1 オリーブ灰色粘土 (締まり無、  
貝含む)
  12. 2. 5Y5/1 オリーブ灰色粘土 [基盤層]
- [SZ550]

に形成され、18世紀中葉から後半の遺物を含む。本層の上面で焼土を多く含むピットや土坑を多数検出（認識）している。調査区南西側ではS Z551埋没後に形成され、18世紀後半の遺物を含む。

なお、8区では基本層序IV・V層間に薄い焼土・炭層を確認した。

V：城下町形成前の古土壤

縮まりのない黒色土で、中世前期の遺物をわずかに含み、中世末から近世の遺物は含まない。古環境把握のため、8区東側で本層の土壤サンプルを採取し分析を実施したところ、アカマツ二次林形成前の古土壤であり、8区周辺がやや乾燥した草地環境であったことが示唆された（5節）。

VI：基盤層

軟弱な黄褐色・緑灰色系粘土質シルト～粘土で、表層以外は阪内川の伏流水の影響で強グライ化している。水分を多く含み極めて軟弱である。自然湧水は少ない。8・9次調査では、本層上で平安～鎌倉時代の遺構を検出している。

### 3. 遺構（第33・34図、第11表）

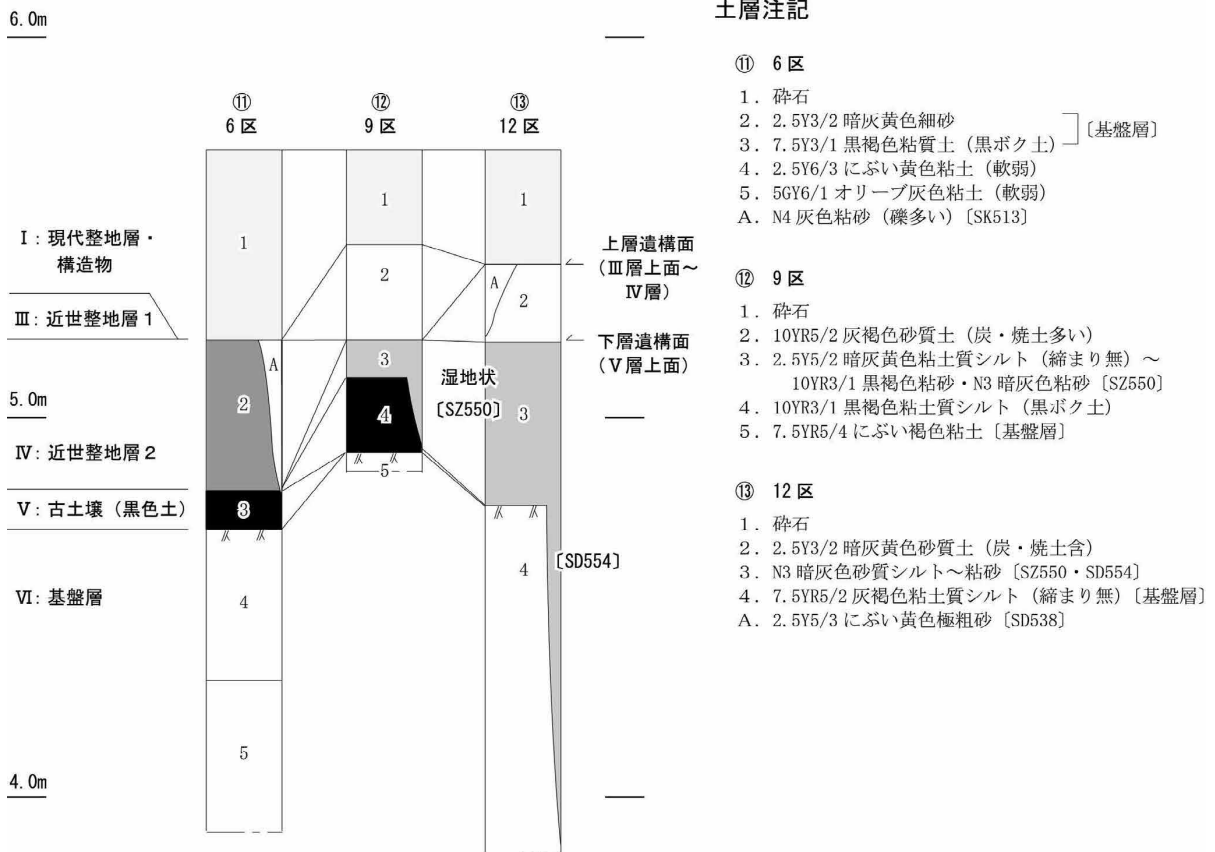
ここでは遺構の概略を記すに留める。各遺構の規模などの詳細は、遺構一覧表を参照されたい。

#### （1）遺構の概要

本次調査の遺構は、基本層序III・IV層（近世整地層①②）を切り込む遺構（土坑・ピット中心）と、基本層序V層上ないしIV層下で検出できる遺構（湿地状落ち込み・溝）に大別され、それぞれ上層遺構、下層遺構と呼称する。

上層遺構は、IV層上から切り込む古相の一群と、III層上～中から切り込む新相の一群に細別しうる。前者には焼土が多く含まれ、被熱した陶磁器もみられる。また、細長長方形の塵芥処理坑が複数あることから、付近一帯で生じた元文元年（1736）大火後の片付け関連遺構を含む可能性がある。後者（新相）の遺構群には便槽や瓦・貝廃棄土坑などがある。

下層遺構は、不定形土坑や溝、湿地状の落ち込みである。いずれも黒褐色～暗灰色粘砂を埋土とし、



第32図 第5次調査土層柱状図②（1:20、柱状図位置は遺構全体図と対応、土層番号は調査区ごとに付与）

貝や木製品、種実などの有機質遺物が多く含まれる。町屋に伴う便槽やピット、土坑は確認できない。

遺構の様相は、市道垣鼻清生線（旧博労町街路）を境にした東西で大きく異なる。調査地の北東側（1～7区、9・12区）は、町廻地が次第に町屋化したもので、湿地状落ち込みであるS Z 550が広がり、正保城絵図にある総堀推定線との関連が考えられる。また、S Z 550の埋没・整地後に上層遺構が形成されている。

南西側（8・10・11区）ではS Z 551が広がり、埋没・整地を経て町屋関連遺構が明確になるが、S Z 550とS Z 551の埋没時期は若干差がある。

## （2）調査地北東側（1～7、9・12区、第33図）

大手道北側の1～7、9区は旧町名の博労町・外博労町に相当する。12区の南半は大手道の南側にあたり、『宝暦咄し』や絵図等で「どぶ町」と記された箇所である。

### ①上層遺構

**S K 501・S K 505・S K 511** 常滑甕の埋甕で、S K 505（遺物62）・S K 511（63）は便槽である。

**S D 502** 外博労町裏側（北東側）の背割下水であろう。18世紀中葉～後半の陶磁器や常滑土管が出土。

**S K 503** 直径0.8mの小土坑である。アサリ73点・ハマグリ27点・ヤマトシジミ18点がまとまって出土しており、外博労町の町屋で消費された貝の様相をよく示す。他に18世紀代の陶器が出土した。

**S K 506・508・509・512・536、S D 507** 焼土・炭や被熱した磁器・瓦を多く含む遺構で、埋土全体が暗赤褐色を呈する。このうち、S K 506・S K 536は長さ約2.5m、幅約0.7mの隅丸長方形で、いわゆる塵芥処理坑であろう。これら焼土等を含む遺構の出土遺物は概ね17世紀末から18世紀中葉に収まり、元文大火後の片付け関連遺構が含まれるとみられる。

なお、S K 536はS D 554埋没後の遺構である。

**S K 514・516・517・541** 博労町街路に近い7区から9区西側には、直径2m前後の円形土坑が多くみられた。同様の遺構は7次・9次調査にもみられる。S K 517は深さ1.5m以上あり、井戸の可能性が高い。付近にはS E 519があり、他の土坑も井戸の可能性がある。S K 514・516から18世紀の陶磁器が出土した。

**S E 519** 7区で確認した井戸で、深さは2m以上

ある。大部分が攪乱により失われていたが、井戸側は結構積み上げで、上部の結構は抜き取られていた。

**S K 533、S D 534、S E 535**（写真図版15） いずれも12区で確認したもので、S D 554埋没後に形成された遺構である。総堀の埋没後、付近が「どぶ町」の町屋となったことがうかがえる。

S K 533は貝廃棄土坑で、アサリ12・ハマグリ22・サザエ2点がみられた。S D 534は、南西―北東方向の溝で、ごく一部を確認したのみであるが、溝主軸に直交する方向に底板を並べていた。元禄から享和以降の町絵図には、博労町から大手道を縦断し神道川へ至る背割下水が描かれており、これと対応する可能性がある。S E 535は早桶を据えた水溜で、底板（1561）はスギ製である。S K 533・S D 534から17～18世紀の陶磁器が出土した。

**S D 538** 12区西側で検出した溝で、黄色粗砂で埋没する。付近には同様の黄色粗砂が広がっていた。局所的な整地跡とみられ、18世紀後半の遺物を含む。

**その他の遺構** 4区から7区にかけて杭列や建物の礎石を確認した。

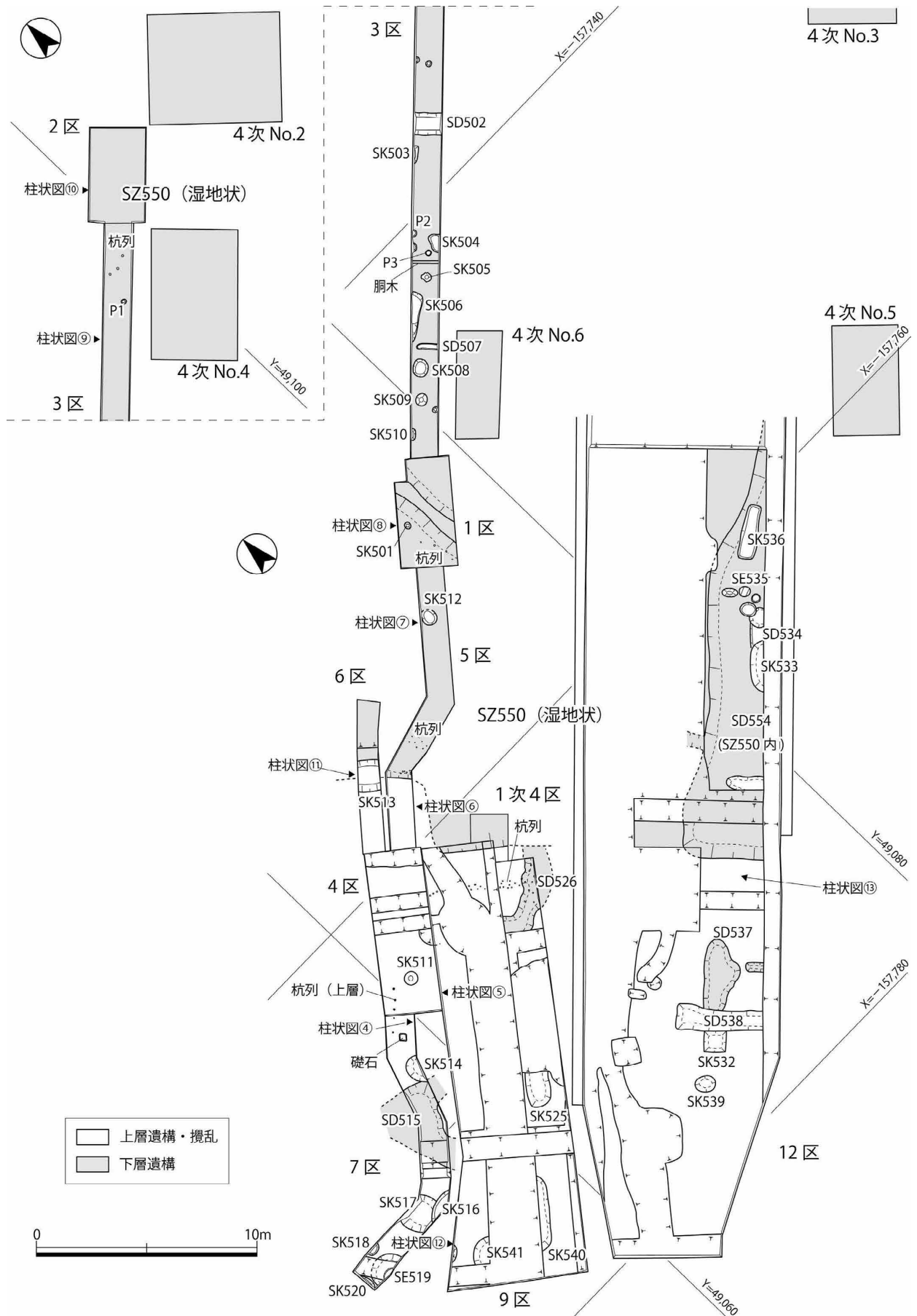
### ②下層遺構

**S Z 550・S D 554** 1～3区、5・6・9・12区で検出した湿地（沼地）状の落ち込みである。S Z 550の西側肩は5・6・9区・12区で確認し、9区東端では護岸の杭列がみられる。この西側肩は、博労町と外博労町を画する下水・街路の延長線上にあり、正保城絵図の城下町外郭線＝総堀推定線とも概ね合致するが、西側肩から少なくとも40m以上東側に湿地が続いており、対岸肩の立ち上がりは明確でない。4次調査でも付近一帯が湿地状であることを確認している。なお、1区、2区、5区も杭列がみられる。

埋土は軟弱な黒褐色系粘砂や粘土質シルトで、有機物を多く含む淀んだ湿地（沼地）であったとみられる。土壤分析の結果から、陸生珪藻が優占する湿地であり、生活排水や糞便が日常的に流れ込む環境だったことが示唆された（5節）。S Z 550は最終的に砂や砂質シルトで埋没するが（2区・5区）、S Z 550直上の整地層も暗色化・軟化していたため、最終埋没期の埋土と埋没直後の整地層を厳密に区別することは困難であった。

S Z 550の深さは1区・2区で約1mである（第





第33図 第5次調査区遺構平面図① (1:250) 調査地北東側 (1~7区・9区・12区)

31図)。1区では底面が二又の溝状を呈する。12区(3層)は全体が深さ約40cmと比較的浅い。12区に隣接した6次調査でも、標高約4.7m付近で基盤層に達しており、大手道の南側がより浅い傾向がある。

12区南東側は、S Z 550西肩ラインに直交した長さ約20mの堀状(コの字状)となり、深さは1m以上であった(S D 554)。S D 554は第1次調査の溝状遺構、第6次調査のS D 6001と一連のものともみられる。また、この形状から、付近は大手道と総堀が交差する陸橋部(虎口)であった可能性が高い。また、この陸橋部を被覆する12区3層は、総堀埋没後の堆積ないし整地層であると考えられる。

このように、大手道の南側は明瞭な総堀が存在したとみられるが、大手道の北側は総堀の平面プランが不明瞭であった。調査区の制約や近現代の攪乱により東肩部が認識できなかった可能性が高いが、城下町と低地部の境界にあった湿地(沼地)を整形し、総構の一部に取り込んだ可能性も考えておきたい。

なお、正保城絵図では、総堀の内側に「田開」とあり、空閑地や防御用の土塁が存在した可能性があるが、それらの痕跡は確認できなかった。

出土遺物は17世紀～18世紀前葉の土器・陶磁器、木製品などである。陶磁器は集中的に廃棄された状況はなくやや散発的に出土したことから、破損の都度投棄したようである。木製品は白木の箸が特に多い。他に下駄、鏡箱や曲物底板、指物・道具や建築部材の木端が多くみられた。

埋土には貝、種実を中心に動植物遺体(食物残渣)が多く含まれていた(5節)。1区で土囊1袋分(約4kg)の埋土を回収し、水洗と選別を行ったところ、ウリや魚骨などの微細な種実や小型動物遺体が認められた。貝は種類ごとに集中する地点があり、一定量まとめて廃棄したようである。貝はハマグリ、アカガイ、サザエが中心で、アワビ類・カキが続く。シジミ・アサリといった小型の二枚貝は少ない。なお、アワビ・カキは、貝の特性上殻の残りが非常に悪く、最小個体数が少なくなっているが、アワビの破片は多く出土したことを特記しておく。貝の組成は5節、第Ⅶ章に示した。

こうした遺物の様相から、城下町東外縁部の湿地が生活残渣の廃棄場となっていたことが知られる。

また、上層遺構や整地層との関係から、大手道の北側ではS Z 550は18世紀前葉で概ね埋没し、以降、当地は外博労町の町屋となったと考えられる。一方、大手道の南側では、S D 554埋没後の18世紀中葉以降に「どぶ町」の町屋関連遺構が形成されるとともに、付近全体の埋没・整地により総堀と虎口の機能を失ったとみられる。なお、総堀の虎口を被覆する12区3層は、18世紀後葉の遺物を一定含んでおり、一帯の埋積・整地と貝や陶磁器の廃棄が、町屋化のちも進行していたと推測される。

当該遺構と総堀との関係については、第1・4・7次調査の成果も踏まえ、第Ⅶ章で再論したい。

**S D 515・S D 526・S D 537** S Z 550西側肩付近には不定形な小溝がみられ、S Z 550への排水を企図したものであろう。S D 526内には護岸の杭列がある。18世紀前半から中葉の遺物が出土した。

### (3) 調査地南西側(8・10・11区、第34図)

6次調査4・7・14・19・20区に接し(6次4・20区は8区と一部重複)、旧町名の博労町・湯屋町・工屋町・袋町に相当する。博労町・湯屋町にあたる10・11区では、18世紀を通じて遺構がみられるが、工屋町・袋町にあたる8区は18世紀後半から19世紀前半の遺構が中心である。

**S K 521～523・544** 8区中央で検出した土坑群である。S K 521は鉄滓の廃棄土坑で、周辺にも鉄滓が多くみられた。6次調査で確認した鍛冶関連遺構と一連の遺構であろう。S K 522は瓦・漆喰の廃棄土坑。18世紀後葉から19世紀の陶磁器が出土した。

**S K 529・527・531** S K 506などと同じく、焼土・炭や被熱した磁器・瓦を多く含む遺構で、埋土全体が暗赤褐色を呈する。S K 529は隅丸長方形の塵芥処理坑で、17世紀末から18世紀中葉の被熱した陶磁器、被熱瓦などが出土した。S K 531も17世紀末から18世紀前半の陶磁器がみられ、これらは元文大火後の片付け関連遺構の可能性もある。一方、大手道の南側にあたる8区では、同種の遺構はなかった。

**S K 542・543・548** 黄色系粗砂で埋没する不定形な大型の土坑ないし溝で、遺構周辺にも同様の粗砂がみられた。いずれも局所的な整地跡と考えられる。調査地北東側の12区S D 538も同様の遺構であろう。8区のS K 542・543は当初一連の遺構と認識してお

り、遺物はまとめて取り上げている。11区のSK548は深さ1.4mで、SK528・533を切る。各遺構から18世紀後半から19世紀初頭の陶磁器が出土した。

**S Z 552** 8区南側で電柱移設のために重機掘削した際、表土直下で幕末から明治初め頃の陶磁器がまとまって出土したものである。

## ②下層遺構

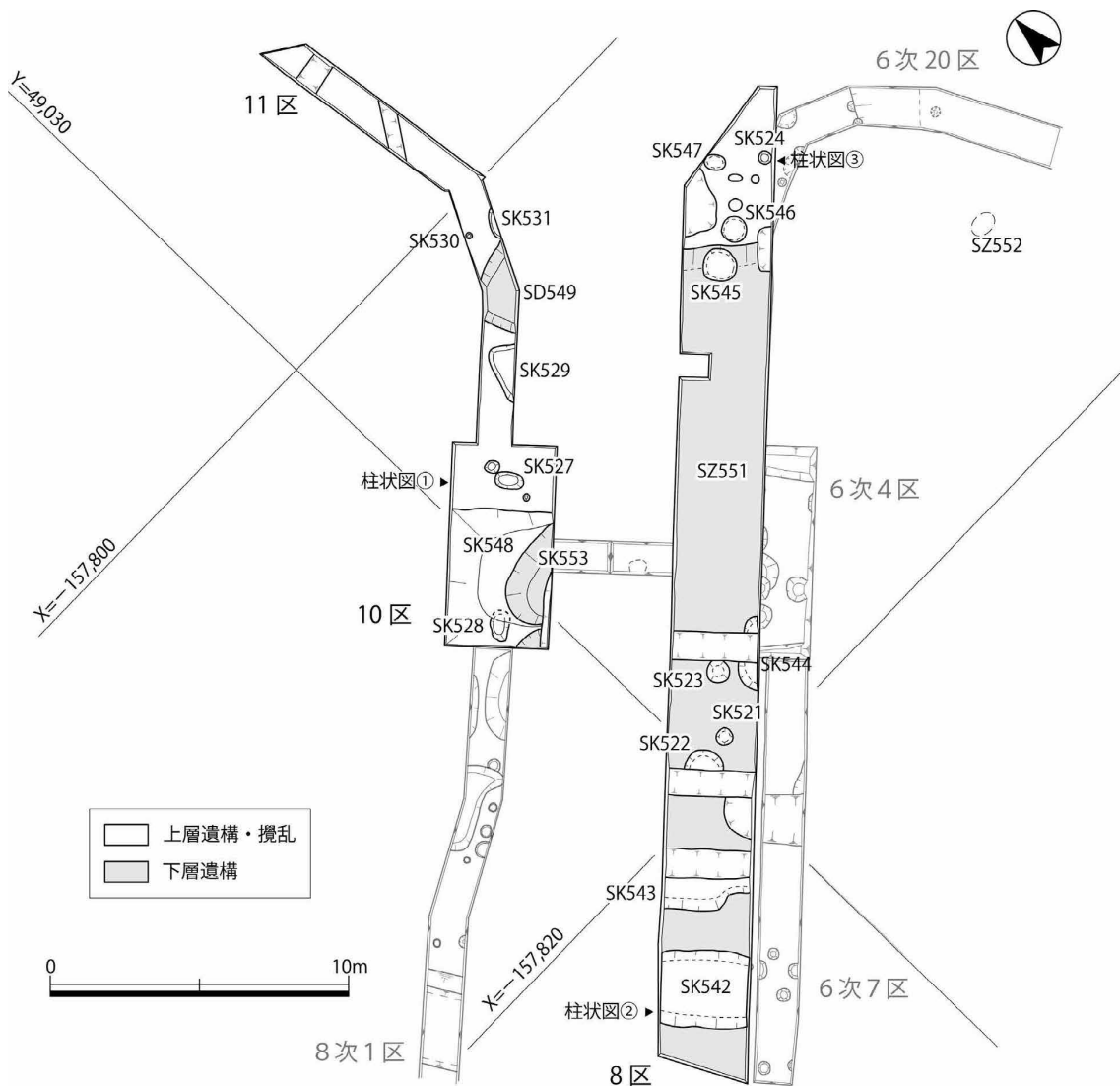
**S Z 551** 8区全体で検出した落ち込みで、基本層序V層の古土壌を切り込んでいる。埋土はSZ550等と同様の軟弱な黒褐色粘砂で、本次調査ではこれ以深の掘削を行っていないが、6次調査では、本次検出面から深さ30cmほどで基盤層（基本層序VI層）に達し、6次調査では下層でSD6010・SK6057・SD6058等、18世紀代の遺構を確認している。

出土遺物は17～18世紀の陶磁器の他、貝が多くみ

られた。SZ551は瀬戸馬の目皿など18世紀後葉から末頃の陶磁器が中心であり、大手道南側の12区3層（SZ550）や8次SZ828・831と類似している。

SZ551は、洪水等を契機として浅い窪地（湿地）の埋積ないし整地が進む中で、陶磁器や貝等の食物残渣が投棄されていったものと考えられる。SZ551と直上の整地層（基本層序IV層）、SK542・543・548など上層遺構との時期差はほとんどないことから、SZ551の埋没（堆積）と上層の整地、上層遺構の形成が18世紀後葉～19世紀初頭の短期間に進行したと推測される。

**SD549・SK553** 10・11区で検出した不定形な溝ないし土坑である。埋土は黒褐色系粘砂で、SD549は6次SD6058と接続する可能性がある。SD549からは貝の他、18世紀後半の陶磁器や瓦が出土した。



第34図 第5次調査遺構平面図② (1:250) 調査地南西側 (8区・10区・11区)

遺構 番号	調査区	旧番号	層位 時期	規模 (m)			主な出土遺物	備考 (切り合いは古→新)
				長 (径)	幅	深		
SK501	1区	-	上層	0.3	-	0.1	常滑甕底部	常滑甕埋設、1区4層掘削中に認識
SD502	3区	SD1	上層	1.2	1.0	0.35	肥前染付青磁碗、瀬戸梅文皿、京都・信楽半球碗 (18C中葉～後半)、常滑土管	
SK503	3区	SK2	上層	0.8	-	0.2	貝 (小型)、瀬戸・美濃播鉢 (18C前半～中葉)、碗	貝廃棄土坑、下層の貝と比較できる良い資料
SK504	3区	SK3	上層	0.8	-	0.16		
SK505	3区	SK4	上層	0.3	-	0.1	常滑甕底部	常滑甕埋設
SK506	3区	SK5	上層	2.2	-	0.2	肥前磁器碗・皿 (18C前半)、漆器碗	埋土5Y3/2暗赤褐色土、焼土多い。火災塵芥処理坑か
SD507	3区	SD6	上層	0.9	0.2	0.02	なし	焼土多い
SK508	3区	SK7	上層	0.8	-	0.08	瀬戸・美濃播鉢、肥前陶器輪赤皿 (17世紀末～18世紀前半)	焼土多い
SK509	3区	SK8	上層	0.5	-	0.05	土師器皿	焼土多い、壁土含む
SK510	3区	SK9	上層	0.5	-	0.09	瓦質五徳	
SK511	4区	SK1	上層	0.6	-	0.3	常滑甕底部	常滑甕埋設
SK512	5区	SK1	上層	0.6	-	0.05	瀬戸・美濃鉢	焼土多い
SK513	6区	SK1	上層	1.4	-	0.4	瀬戸・美濃德利・播鉢・磁器 (19C中葉)、常滑甕、棧瓦	大型土坑、6区2層上面で検出。埋土N4灰色粘砂 (礫多量)
SK514	7区	SK1	上層	1.3	-	1.7以上		7区3層上面から切り込む遺構。完掘できず。埋土明黄褐色粘土 (角礫多い)。遺物少なく時期不明、近現代か?
SD515	7区	SD2	下層	1.5以上	-	1.1以上	土師器、瀬戸・美濃丸碗、肥前磁器碗 (17C後半～18C前半)、鉄鍋	SD515→SK514、7区6層上面で検出した二段の不定型な溝。未完掘。埋土：N5灰極細砂、遺物量は少ない
SK516	7区	SK3	上層	1.6	-	0.5	肥前 (波佐見) 青磁皿、肥前銅緑釉皿 (17C後半～18C前半)	SK517→SK516、7区3層を切り込む遺構だが、遺物は古い様相、埋土：にぶい褐色、焼土多い
SK517	7区	SK4	上層	1.7	-	1.5以上	肥前染付青磁碗 (18C後半)	7区4層を切り込む遺構。未完掘、井戸か? SK517→SK516 埋土：にぶい褐色～青灰色粘質土 (黄褐色粘土ブロック混)
SK518	7区	SK5	上層	0.6	-	0.2	瀬戸・美濃産磁器染付、赤絵端反碗、陶胎染付広東碗 (18C末～19C初頭)	調査区断面で認識、7区3層を切り込む遺構 埋土：灰色砂質土
SE519	7区	SE6	上層	1.7	-	2.0以上	結桶部材	7区4層を切り込む遺構。結桶積上げ井戸で、上部は抜き取られている。水道管の攪乱に切れ掘削できず、詳細不明。埋土：褐色～青灰色粘質土
SK520	7区	SK7	上層 明治?	0.9	-	0.55	瀬戸・美濃播鉢	壁面付近で確認、7区3層を切り込む遺構。詳細不明
SK521	8区	SK1	上層	0.5	-	0.05	鉄滓	4層～5層上面で認識 鉄滓集中 (廃棄土坑)、付近は鉄滓多い
SK522	8区	SK2	上層	1.3	-	-	瀬戸・美濃播鉢、常滑甕	瓦・漆喰廃棄土坑、検出のみ
SK523	8区	SK3	上層	0.8	-	0.2	瀬戸・美濃湯呑碗、常滑甕 (18C末～19C初頭)	4層～5層上面で認識
SK524	8区	SK4	上層	0.4	-	0.15	常滑甕、瀬戸馬の目皿 (18C末～19C初頭)	埋土：灰黄褐色土
SK525	9区	SK1	上層	1.6以上	1.0	-	土師器皿・焙烙、瀬戸・美濃碗・有耳壺・灯火具 (17C末～18C前半)	埋土：暗灰色シルト、検出のみ
SD526	9区	SD2	下層	-	0.9	-	肥前磁器皿・碗 (18C後半)、常滑甕、軒平瓦	埋土：暗灰色シルト、不定形な溝で付近に杭列多数、検出のみ
SK527	10区	SK1	上層	1.0	0.5	0.2	肥前磁器皿 (18C、被熱)	10区5層を切り込む遺構。火事塵芥処理坑か、周辺ビットも焼土多い
SK528	10区	SK2	上層	1.0	0.6	0.65	染付椀	10区5層を切り込む遺構。SK528→SK548 埋土：灰色粘砂
SK529	11区	SK1	上層	1.9	-	0.9	肥前 (波佐見) 輪赤皿、瀬戸・美濃播鉢、常滑甕 (17世紀末～18世紀前半)、被熱磁器・瓦	焼土、瓦 (被熱)、隅丸長方形の火事塵芥処理坑か
SK530	11区	SK2	上層	0.2	-	-	常滑甕底部	常滑甕埋設
SK531	11区	SK3	上層	-	1.0以上	1.0	肥前陶器碗 (17C末～18C)、瀬戸・美濃皿・半脚甕	調査区断面で確認、11区5層を切り込む遺構。 焼土・炭多い、火事塵芥処理坑か
SK532	12区	SK1	上層	1.0以上	1.0	-	瀬戸・美濃柿壺蓋、常滑甕	埋土：褐色粘質土 (焼土含む) SD538→SK532
SK533	12区	SK2	上層	2.2	-	-	小型貝、瓦質風炉、瀬戸・美濃播鉢・平碗 (17C後半～18C)	埋土：暗灰色砂質土 (炭多い)。SD554・SZ550→SD534→SK533 小型貝の廃棄土坑
SD534	12区	SD3	上層	-	0.6以上	0.05	肥前磁器碗、瀬戸・美濃摺鉢 (18C前半)	幅15cmの板を溝底に板を敷き並べる。箱溝か? SD554・SZ550→SD534→SK533
SE535	12区	SE4	上層	0.4	-	0.05	早桶底板	早桶の底 SD554・SZ550→SE535
SK536	12区	-	上層	2.5	0.8	0.05	棧瓦	隅丸長方形、埋土：灰黄褐色砂質土 (焼土多い)。SD554・SZ550→SK536 底面は黒褐色で硬く締まる。塵芥処理土坑か?
SD537	12区	-	下層	3.2以上	1.6	-		埋土：暗青灰色シルト SD537→SD538
SD538	12区	-	上層	4.0以上	0.9	-	瀬戸・美濃摺鉢皿・播鉢、肥前染付青磁・筒形碗 (18C中葉～後半)、土師器焙烙	埋土：にぶい黄色極粗砂 (貝含む) SD537→SD538
SK539	12区	-	上層	1.0	0.7	-		瓦廃棄土坑
SK540	9区	-	上層	3.2	-	-		埋土：暗灰色土、検出のみ
SK541	9区	-	上層	1.3	-	-		埋土：暗灰色土、検出のみ
SK542	8区	-	上層	-	2.6	0.5以上	肥前染付青磁・筒形碗等、瀬戸・美濃碗・陶胎広東碗・梅文皿・播鉢、常滑甕 (18C末～19C初頭)	8区4層を切り込む遺構。局所的な整地層か 埋土：にぶい黄色極粗砂、遺物は遺構周辺の粗砂とともに、SK543と合わせて取り上げ
SK543	8区	-	上層	-	1.1以上	-		
SK544	8区	-	上層	2.5	-	0.1		埋土：黄色土
SK545	8区	-	上層	1.0	-	-		4層上で検出、焼土・瓦含む、検出のみ
SK546	8区	-	上層	0.9	-	0.05		2層上面で検出、底面中央が赤化
SK547	8区	-	上層	0.7	-	-		埋土：灰黄褐色土
SK548	10区	-	上層	4.5以上	-	1.4	肥前磁器蓋 (18C中葉～後半)	10区4層を切り込む遺構。 埋土：2.5Y5/3にぶい黄色極粗砂、SK553→SK528→SK548
SD549	11区	SD4	下層	2.7	-	0.8	瀬戸・美濃饗茶碗・灯明皿、肥前磁器皿・染付青磁碗 (18世紀後半)、肥前陶器碗、丸瓦	11区6層を切り込む遺構。埋土：暗青灰～黒褐色粘砂 (貝含む) 6次SD6058に接続か?
SZ550	1・2・3・5・6・12区	-	下層	-	-	1.0以上	陶磁器、木製品、貝など動物遺体多数	広範囲の落ち込み、局所的に底が溝状を呈する
SZ551	8区	-	下層	-	-	-	陶磁器、木製品、貝など動物遺体多数	広範囲の落ち込み状。
SZ552	8区隣接	土器集中	-	-	-	-	瀬戸・美濃德利・鍋、瓦質風炉・五徳、信楽鍋等 (19C後半)	電柱移設時に確認した、表土直下の陶器集中
SK553	10区	-	下層	3.0	-	0.5		10区6層を切り込む遺構。西側にも同様の落ち込みあり 埋土：10YR3/1黒褐色粘砂 SK553→SK528→SK548
SD554	12区	-	下層	19.0以上	2.5以上	0.9以上	陶磁器、木製品、貝など	SZ550内で確認した溝状遺構。1次調査大溝、6次SD6001と一連の遺構か、調査時、遺物はSZ550 (12区3層) として取り上げ SD554→SK533・SD534・SE535・SK536

第11表 第5次調査 遺構一覧



## 4. 遺物

第5次調査の出土遺物は土器・陶磁器・瓦・石製品・鉄製品・木製品などで、総量はコンテナ換算で49箱、267.5kg（整理前、木製品を除く）である。

遺物の時期は戦国期から江戸時代に及び、わずかに鎌倉時代のものも含む。近代の遺物も重要なものは図示した。以下、土器・陶磁器（瓦・土製品・石製品含む）、木製品、金属製品の順に、遺構・層位ごとの概要を記す。その際、時期決定のしやすい陶磁器を中心に記述し、遺物の時期は生産地の年代観で示す。各遺物の製作技法などの詳細は、遺物観察表（第12表）に記した。

なお、本次主要遺構の土器・陶磁器組成は第Ⅻ章にも示したので合わせて参照されたい。

### （1）遺構出土土器・陶磁器

**S K 501**（第36図） 1は埋設された常滑甕の底部。便槽の使用痕はなく水甕であろう。

**S D 502**（第36図） 上絵付のある京都・信楽系の半球碗（2）、肥前磁器Ⅳ期後半の染付青磁（11）、瀬戸・美濃登窯第8小期の梅文皿（3）、呉須絵の皿（4）など、18世紀中葉から後半の陶磁器がみられる。常滑は土管（16）、17世紀代の甕（18）がある。15は飾瓦である。

**S K 503**（第36図） 土師器焙烙・茶釜（19～23）、瀬戸・美濃掛け分け碗（24）、口縁が短く立ち上がる18世紀前半～中葉の播鉢（25）がある。

**S K 505・S K 510・S K 511・S K 512**（第37図）

43は瓦質の五徳である。62・63は常滑甕底部。62は内面の付着物があり便槽として使用されている。

**S K 506**（第37図） 36は外面に「福」字、37は肥前磁器Ⅳ期中皿で18世紀前半。38は被熱する。

**S K 508**（第37図） 39は瀬戸・美濃登窯第2段階の摺絵皿、40も同形の灰釉皿とともに被熱する。41は肥前陶器Ⅳ期の輪禿皿である。17世紀末～18世紀前半の遺物群である。

**S K 509**（第36図） 土師器小皿（26～30）がまとめて出土している。28は油煙が付着する。

**S K 513**（第38・39図） 瀬戸・美濃産磁器（73～75、77、79）、瀬戸・美濃徳利（87～91）を中心とし、播鉢は縁帯が消失した登窯第11小期である。瓦

は棧瓦（108）を含む。常滑甕（105・106）は19世紀に盛行するE～F類。19世紀中葉の遺物群である。

**S D 515**（第37図） 44・45は瀬戸・美濃の丸碗で登窯第2段階のもの。53は肥前磁器碗でⅣ期前半か。17世紀後半～18世紀前半の遺物群。

**S K 516**（第37図） 55～57は肥前（波佐見Ⅳ～Ⅴ-1期）の青磁皿、58は肥前陶器Ⅲ期の銅緑釉皿で、砂目積みの痕がある。55・57・58は被熱している。17世紀後半～18世紀前半の遺物群。

**S K 517**（第37図） 64は肥前磁器Ⅳ期後半の染付青磁筒形碗で、見込みにコンニャク印判の五弁花。

**S K 518**（第37図） 瀬戸・美濃産磁器染付（66・69）や陶胎染付の広東碗（68）を含む。67は赤絵の端反碗である。18世紀末～19世紀初頭の遺物群。

**S K 523**（第39図） 122は瀬戸・美濃の湯呑碗、常滑甕はE類。18世紀末～19世紀初頭の遺物群。

**S K 525**（第40図） 焙烙（133～137）が一定出土している。小皿（126・127）は灯明皿。瀬戸・美濃産陶器は天目茶碗（138）、丸碗など登窯第2段階のもの。17世紀末～18世紀前半の遺物群。

**S K 527**（第40図） 144・145は肥前（波佐見Ⅴ期前半）磁器の輪禿皿で、いずれも被熱している。144のコンニャク印判は大きい。17世紀末～18世紀中葉。

**S K 524**（第40図） 147は瀬戸馬の目皿で底面に墨書がある。常滑甕は19世紀前半のE類。18世紀末～19世紀初頭の遺物群である。

**S D 526**（第40図） 肥前磁器Ⅳ期の皿（150）・碗（152）に常滑甕D類が伴う。18世紀後半。

**S K 529**（第41図） 158・159は肥前（波佐見Ⅴ-1期前半）磁器の輪禿皿で、ともに被熱している。161は瀬戸・美濃播鉢で、登窯第6小期。常滑甕（163・164）は18世紀前半のC類。17世紀末～18世紀中葉の遺物群である。

**S K 528**（第41図） 瀬戸・美濃播鉢（165）は登窯第4～5小期で17世紀後半。

**S K 531**（第41図） 185は肥前陶器Ⅳ期（17世紀末～18世紀）の皿または碗で、見込みを蛇の目釉剥ぎとする。長崎・現川製品に類似する。186は瀬戸・美濃の皿か。187は半胴甕。

**S K 532**（第41図） 瀬戸・美濃柿釉の壺ないし土瓶の蓋がまとめて出土している（175～177）。

**S K533** (第41図) 171は瓦質土器の風炉。瀬戸・美濃播鉢(172)は登窯第4～5小期。174は瀬戸・美濃の半球碗である。

**S D534** (第41図) 183は肥前磁器Ⅳ期の碗で、見込みにコンニャク印判の五弁花と、高台内に「大明年製」。184は瀬戸・美濃登窯第6～7小期の摺絵皿。ともに18世紀前半～中葉である。

**S D538** (第42図) 瀬戸・美濃陶器は登窯第7小期の摺絵皿(192)や播鉢(201)が主であるが、206の播鉢はやや古手のもの。肥前磁器はⅣ期後半の染付青磁(195)、筒形碗(197)がある。土師器焙烙(198)は底の浅いもの。18世紀中葉～後半の遺物群。

**S K542・543** (第42・43図) 207～246は肥前磁器。コンニャク印判をもつ丸碗(210・221)もあるが、碗は肥前Ⅳ後半～Ⅴ期初めの染付青磁(228～230)・筒形碗(235～240)・小丸碗(231)が主体となり、猪口(226・227)、広東碗(212)や端反碗(207)と同時期の丸碗(219・220・224)もみられる。232～234は白磁(色絵素地)の小杯・猪口。241～243は染付皿、244～246は青磁の皿・鉢または香炉で、244・246は蛇の目凹型高台である。

陶器は京都・信楽系の小物や鍋・土瓶類は少なく、肥前産陶器もみられない。瀬戸・美濃製品は登窯第8・9小期の腰鍔茶碗(248・249)や鎧茶碗(250～253)を中心に、鉄絵や呉須絵のある湯呑碗や丸碗(254～263)が多くみられる。陶胎の広東碗(264・265)は一定量あるが、瀬戸・美濃産磁器はみられない。268は登窯第9小期の梅文皿。播鉢(289～293)も第9小期。常滑甕は19世紀に盛行するE型式(310～313)。18世紀末～19世紀初頭の良好な資料である。

**S K548** (第44図) 肥前磁器Ⅳ期後半の碗蓋(315)が出土している。18世紀中葉～後半。8区4層にこれと同文の碗(1304)がみられる。

**S D549** (第44・45図) 瀬戸・美濃陶器は小振りの湯呑形態の鎧茶碗(320)、志野丸皿(321)、灯明皿(326)がある。肥前磁器はⅣ期前半のコンニャク印判・蛇の目釉剥ぎの丸碗(329)、コンニャク印判・渦「福」のある皿(331)や、Ⅳ期後半の青磁染付碗(328)など。他に、肥前陶器碗(322)、京焼風陶器の碗(323)、切欠高台の中国磁器皿(324)、丸瓦(332)が出土している。18世紀中葉～後半までの遺

物がみられ、近在するS Z 551と様相が似ている。

**S Z 550** (第45～65図) 取り上げ地点・層位ごとに図示しているが、遺物の時期や器種構成は概ね共通している。遺物の年代的上限は城下町形成期の16世紀末～17世紀初頭で、瀬戸・美濃大窯4期から登窯第1段階の天目茶碗や灰釉丸皿、常滑12型式の甕や片口鉢などがみられる。白天目・織部はごく少なく、志野丸皿も少ない。磁器は初期伊万里など肥前Ⅱ期(～17世紀中葉)の国産磁器に、明代青花、明末～清初の景德鎮などの輸入磁器が伴う。

遺物の主体は、瀬戸・美濃登窯第2段階(17世紀後葉～18世紀前半)の陶器で、肥前Ⅲ期～Ⅳ期初め(17世紀後半～18世紀初頭)の磁器を伴う。磁器丸碗や中皿には上手のもの、径8～10寸の大皿が一定みられる。色絵は少ないが、白磁(色絵素地)がみられる。陶器は瀬戸・美濃の湯呑形態の丸碗・腰鍔茶碗・糸目碗が非常に多く、皿や鉄絵鉢など径8寸以上の供膳具も目立つ。肥前陶器は刷毛目碗や銅緑釉・二彩・三島手・刷毛目の皿・鉢など、内野山北窯を中心とした肥前陶器Ⅲ～Ⅳ期(17世紀後半～18世紀)の製品がみられる。京焼風陶器は、瀬戸・美濃の湯呑碗と同径の碗を主体とし、若干の半球碗(平碗)が伴う。これらは高台内印銘などから肥前産とみられるが、底部に鍔釉がけするなどバリエーションがある。常滑製品は17世紀後半～18世紀前半に盛行する甕B・C類の他、火鉢などいわゆる赤物が普及する。一方で中世～近世初頭にみられた調理具としての片口鉢は少なくなっている。土師器はすべて南伊勢系で、中北勢系や尾張等からの搬入品も認められない。瓦は本瓦葺きのものが大半で、棧瓦普及前の様相を示す。

18世紀中葉以降の遺物は希薄である。肥前磁器Ⅳ期後半(1740年頃～)以降の筒形碗やⅤ期(1780年頃～)の広東碗はみられない。ただし、S Z 550西側上層の5区東6層や12区3層には青磁染付碗(762)、小丸碗(582)などⅣ期後半の磁器がわずかにあり、瀬戸・美濃製品は登窯第3段階第8小期(18世紀後葉)に相当する播鉢(942～946)などが12区3層に一定ある。これらは、上層遺構との関係から、埋没最終段階から埋没後の整地(上層遺構の混入含む)に伴うものと考えられる。

以下、調査区・層位ごとの様相を記す。

**1区5層** (第45・46図) 346は磁器色絵油壺でⅡ期のもの。筒形香炉(343)は優品で中国産かもしれない。丸碗はコンニャク印判(338・340)、「大明年製」(337・338・345)など。341は白磁、342は肥前Ⅳ期の染付青磁碗。358～363は肥前京焼風陶器である。366は火襷が顕著で強く焼締まる。備前製品か。瀬戸・美濃陶器は丸碗(352～357)が多い。367は黄瀬戸筒形香炉で登窯第7小期。372～374は播鉢で、372は口縁部が短く屈折し立ち上がる、18世紀前半のもの。常滑甕(377)はC類。378～411は南伊勢系土師器で、皿は口径6～8cm、10cm、12cm大の3種があり、口径に関わらず灯明皿が一定量含まれている。鍋・焙烙は407・411のようにやや深いものが目立つ。

**2区8～11層** (第47・48図) 412～420は瓦である。このうち、412・413・417は極めて強く被熱し、赤変硬化している(写真図版24)。

磁器は染付皿(421)、青磁皿(422)、被熱した皿(423)、白磁小杯(427)がある。425は青花皿、426は径8寸の皿で、ハリ支えがなく景德鎮である。427は瓦質製品。435は肥前陶器の二彩鉢である。瀬戸・美濃製品は大窯4期～登窯第1段階の天目茶碗(428・429)、登窯第6小期の播鉢(437)、登窯第6～7小期の灯火具(434)などがある。常滑甕は17～18世紀前半のB(444)・C類(443)。火鉢(441・442)は内面に煤が付着する。464は硯で、強く被熱したため変形・発泡している。

**3区11層** (第49～51図) 肥前磁器碗は466・468・470などⅢ期末からⅣ期初めの丸碗が多い。皿は蛇の目凹型高台の青磁皿(477)、粗製の輪禿皿(479)、上手の皿(484)などがある。瀬戸・美濃製品は登窯第2段階の丸碗や掛け分け碗、香合等の蓋(499)、第6小期までの折縁皿(554)、鉢(555)、第5～6小期の播鉢(556～558)がみられる。肥前陶器はⅢ～Ⅳ期で、京焼風陶器(500～504)や刷毛目碗(505～508)、輪禿皿(509)、鉢は二彩(559)・刷毛目(560)・三島手(561)など。南伊勢系土師器(510～550)は皿、鉢、羽釜、焙烙がある。566は粘板岩製の硯である。常滑製品は真焼の壺(562)や赤物火鉢(563・564)がある。瓦(567～578)は棧瓦を

含まない。軒平瓦569は関西系の均整唐草文をもつ。

**5区東6～9層** (第51～55図) 最上層の6層は5区S Z 550の中でも新しい様相を示し、肥前磁器は崩れ渦「福」の皿(579)、小丸碗(582)などを若干含むが、それ以外は下層の9層まで大きな差はない。肥前磁器はⅢ～Ⅳ期が主体で、「宣徳年製」の鉢(580)、青磁の脚付き皿(732)がある。皿は砂目積み初期伊万里(606)、上手の皿(610)、中央白抜き意匠の皿(731)など、肥前Ⅱ～Ⅲ期のものが特筆される。肥前陶器は刷毛目鉢(625)や京焼風陶器(658～663)などで、659は印銘「小松吉」、662は「清水」である。660・661・663は底部を錆釉掛けとする。瀬戸・美濃製品は丸碗類の他に型紙摺りの鬘盥(589)、有耳壺(590・620)、向付(655)、八角の鉄絵皿(656・657)などがある。播鉢は口縁部が短く屈曲する登窯第5～6小期のもの。常滑製品は真焼の壺(627)、甕は18世紀のB類が多く(597・628・683)、いずれも内面に白い付着物がみられる。他に、堺・明石系播鉢(678)や焼塩壺の蓋(706)も注目される。733は砂岩製の荒砥石である。

**12区3層** (第55～65図) 調査時はS D 554とその周辺の湿地状堆積の遺物を一緒に取り上げている。肥前磁器はⅢ～Ⅳ期前半が主体であるが、Ⅳ期後半の染付青磁(762)や菊花散らし(765)、方形枠に変形字の皿(784)など他の地点に比べて新しい様相がみられる。碗760・761、皿787は青磁、769～778は白磁ないし色絵素地である。776は赤絵、773は口錆を施す。788は17世紀後半以降の芙蓉手皿で、6次調査3区出土の破片(167)と同一個体である。783は明代の青花、786・792は明末の景德鎮である。Ⅲ～Ⅳ期の鉢(789・791・795)や向付(794)もみられる。793・796・797は青磁、798～800は染付の香炉で、800は袴腰形。

801は渥美産の山茶碗。瀬戸・美濃製品は登窯第1～第2段階の天目茶碗(802～812)、登窯第2段階の丸碗(813～839)が多く、掛け分け碗(845・846)や糸目(847)を若干伴う。皿は梅文皿(853～855)や摺絵皿(856・857・858)がやや新しい様相をもち、瀬戸・美濃陶胎染付皿(782)もみられるが、灰釉丸皿(877～881・884)は登窯第1段階、折縁皿や鉄絵鉢は登窯第5小期までに収まる。菊皿

(861)の他、四方隅切り(870)・角皿(885)、盤状の鉢または皿(865・919)、志野丸皿(868)などバラエティに富み、8寸以上の皿や1尺以上の鉄絵鉢など大径の供膳具が一定みられる。884は灰釉丸皿で、見込みの海老文は髭を誇張して大きく描く。893は杉形茶碗で、高台は三角形、底部は砂目積みの目跡がみられ、内面は茶筌摺りで著しく摩耗する。他に汁次(894)、片口鉢などの調理具、筒形香炉(901~906)・仏飯器(910・911)・灯火具(913)などがある。929・937~953は播鉢で、942・943・946など登窯第8小期前後のものがみられる。950・952は内面だけでなく底部外面も著しく摩耗している。特に952は底部が丸みをもつまで摩耗しており、底部を石臼の上半のように用いた可能性が考えられる(写真図版33)。

肥前陶器は京焼風陶器(848~852)、三島手鉢(926)や銅緑釉の刷毛目皿(928)、刷毛目碗(931~933)、灰釉碗(934~935)がある。852は火入れまたは鉢。923は瓦質火鉢または風炉。930は備前播鉢である。

954~991は常滑製品で、赤物の片口鉢(954~957・964)、火鉢または火消壺(959~973)がある。974~991は甕で、975は中世末の12型式、その他は17~18世紀のB・C類が多く、18世紀後半頃のD類(979・988)もみられる。983は内面付着物がある。

992~998は陶器・瓦転用の加工円板で、径3cm大、5cm大がある。999~1003は瓦で、軒丸瓦や道具瓦など。1004~1076は南伊勢系土師器である。

**S Z 551** (第65~67図) 肥前磁器はIV期後半の染付青磁1084~1087が主体で、17~18世紀前半のものもみられる。1086はコンニャク印判、「渦福」がある。1090は明代の青花、1092は型打皿の良品である。瀬戸・美濃製品は、登窯第8小期の筒形香炉(1110)、播鉢(1115・1116)や馬の目皿(1124)などがある。17世紀代の丸皿や天目茶碗もみられる。1101は白天目で、本次調査では唯一のもの。1125は常滑甕転用の加工円盤である。常滑製品は甕や火鉢などで、甕(1135~1137)は17世紀後半から18世紀前半のもの。1141は内面に付着物がある。平瓦1147は被熱し赤変硬化している。遺物の時期は18世紀後葉から末を下限とする。

**S Z 552** (第68図) 肥前磁器を基本的に含まず、

瀬戸・美濃製品と伊賀・信楽製品を中心とした遺物群である。瀬戸・美濃は徳利が多く、灯明皿(1153)、登窯第11小期の播鉢(1168)などがある。伊賀・信楽産の鍋・土瓶が一定みられるが、軟質焼成のものは瀬戸・美濃製品との区別が難しく、釉の透明度が高く、堅緻で飛鉋など特徴的なものを伊賀・信楽製品として報告する。土師器は図示していないが、鍋の破片のみで皿は出土していない。1170は瓦質の風炉で、脚の外面には亀甲状のスタンプ文がある。1171は三足の瓦質五徳で、風炉とセットで用いられたものか。天目茶碗1148や輪禿皿1152など18世紀以前の遺物も含むが、大半は19世紀中葉の遺物である。

**その他ピット** (第69図) 1173~1179は3区上層のピット出土遺物で、1173・1176・1178・1179はPit3からまとまって出土した。1173・1174は瀬戸・美濃登窯第8小期前後の梅文皿である。1175は掛け分け碗、1176は肥前陶器IV期の銅緑釉輪禿皿、1179は肥前磁器IV期前半の丸碗で、いずれも18世紀代の遺物である。

## (2) 整地層等の土器・陶磁器

**1区** (第69図) 3層は瀬戸磁器染付(1183)、灯明皿(1187)、播鉢(1191)、萬古急須(1185)など、幕末~明治の遺物がみられる。4層は瀬戸・美濃の甕(1193)や丸碗(1196)など18世紀代の遺物である。瓦は棧瓦を含まない。

**2区** (第70図) 5層は瀬戸・美濃登窯第8~9小期の播鉢(1206)、土師器は蓋・茶釜がある。茶釜1200は南伊勢系土師器に比べ厚手で羽がなく、底部が平らで口縁部が軽く外反する。このタイプはS Z 550など下層遺構にはなく、他に7区2・3層(1295・1296)など基本層序II~III層にみられる。南伊勢以外の土師器かもしれない。皿1201は平安末~鎌倉時代のもの。石臼1209は磨り面が著しく摩耗する。

**3区** (第70~71図) 3・4層は明治の遺物(1210・1211・1212・1222)を含む。1230は信楽の窯道具で、強く焼締まり自然釉がかかる。茶の湯や花入れに用いられたものか。他に棧瓦(1221・1232)がみられる。7層は碗1233や梵字文のある小碗(1234)が肥前磁器IV期末~V期初めとやや新しい様相を示すが、8層にかけてS Z 550とほぼ同様の遺物がみられる。8層は肥前白磁碗(1248)、瀬戸・美濃腰鍔茶碗



(1249)、常滑甕底部(1252)などがある。1251は中世の土師器鍋である。

**4区**(第72図) 2層は短い脚付きの鍋または土瓶(1258)、棧瓦(1260)、3層では瀬戸・美濃花入(1266)、登窯第8小期前後の播鉢(1265)などがある。花入(1266)は内面に棒状の錆が集積している。高師小僧のように植物茎の周囲に鉄分が凝固した可能性もあるが、重量があることから釘などの廃棄容器であったと考える(写真図版39)。

**5区**(第72図) 西2・3層はIV期の肥前磁器が多いが、明治期の瀬戸磁器の赤絵1269もみられる。1274は雁振瓦である。東3・4層は信楽の灰釉端反碗碗(1270)など19世紀の遺物を含む。播鉢(1273)は有高台のもの。西4層は肥前陶器の銅緑釉輪禿皿(1275)、印銘「中村金」の京焼風陶器(1276)など、18世紀前半までの遺物がみられる。

**7区**(第73図) 2・3層から陶胎染付の広東碗(1278)、薄手の焼塩壺(1282)などが出土した。

**8区**(第73～75図) クロム使用の1320、瀬戸磁器1321・1322・1324・1329・1331、信楽産の灰釉端反碗1336、土瓶1340など明治期を含む19世紀の遺物が3層にみられる。4層は、18～19世紀前半の遺物が中心である。1297は磁器の水滴で獅子頭をかたどる。土師器1293・1294は口縁部の外反が強く、茶釜の蓋の可能性が高い。茶釜(1295・1296)は2区5層の1200と同じく厚手、球胴で羽のないタイプ。常滑甕(1298)は19世紀前半のE類。瀬戸・美濃製品は銭甕(1358)の他、鉢類(1354・1361など)が多くみられた。1354は練鉢の底部で、高台を円板状に加工している。

4層下部としたもの(1299～1319)は、5層との境界付近に集中していた遺物群である。常滑甕(1315・1316)、瀬戸・美濃灰釉丸皿(1311)など17～18世紀前半の遺物もみられるが、肥前磁器は筒形碗(1306)、315と同文の蓋付碗(1304)などIV期後半の遺物が年代的下限であり、直下のS Z 551と遺物の様相が類似している。1317は均整唐草文の軒棧瓦である。平瓦(1318)は二次的な被熱で赤変硬化している。

**9区**(第75図) 2層から、肥前磁器IV～V期の蓋碗(1362・1363)や大皿(1366)、瀬戸・美濃汁次

(1364)、練鉢(1367)などが出土している。

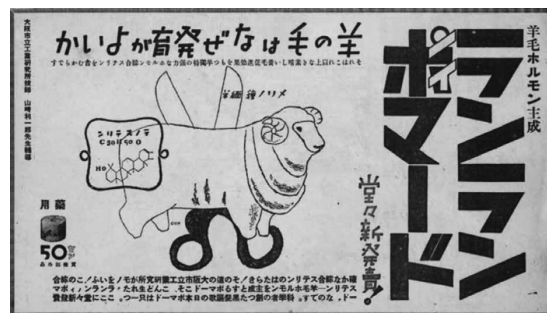
**10区**(第75図) 4層から、瀬戸・美濃練鉢(1372・1374)、徳利(1369・1371)、常滑火鉢(1373)などが出土している。

**11区**(第75図) 3層では菊皿(1376)・折縁の灰釉皿(1377)など17世紀代のものがみられる。1378は瀬戸・美濃の鉄釉鉢で三足のもの。5層からは輪花のある山茶碗(1381)が出土。

**12区**(第76図) 肥前IV期後半～V期初めの磁器碗蓋(1393)が年代的に新しい様相を示す。他に瀬戸・美濃の型打ち菊皿(1397)、折縁鉢1396や播鉢は登窯第6小期前後である。直下のS Z 550の状況を反映して18世紀代の遺物が多くみられる。

**攪乱・その他**(第77図) 1411～1440は12区の工事中に採集されたもので、12区3層由来のものであろう。登窯第1段階の丸皿(1430・1431)など17世紀代のものや、肥前小丸碗(1411)、同形の糸目碗(1422)など18世紀後半の遺物が注目される。1423は843よりやや小振りの杉形茶碗か。1429は小型の花入れである。

1448は8区北東端の近現代攪乱から出土した陶器製のポマード容器(ランランノイポマード)である。日中戦時下で板ガラス以外のガラス製品が統制された頃のいわゆる代用品で、外面にコバルトで「RANRAN NEU POMADE」とプリントされ、灰黄色の釉がかかる。底部は軽い上げ底で露胎。ランランノイポマード(福田源商店製)は、先行品のランランポマードを改良した新製品で、昭和13年(1938)5月26日大阪朝日新聞、同年6月23日名古屋新聞夕刊に新発売の広告が掲載されており(第35図)、発売年が特定できる<sup>(1)</sup>。



第35図 ランランノイポマードの新聞広告(註1)  
昭和13年(1938)6月23日名古屋新聞夕刊

### (3) 木製品 (第78～82図)

木製品は大半がS Z 550から出土したもので、製品の他、ノコギリで切断した材の木端や破片が投棄されていた。約500点を回収し、このうち用途が明確で比較的残りのよい110点を遺構・層位ごとに図示している。器種は箸、漆器碗など食器類、しゃもじ、下駄、指物・曲物・結物の部材などがある。

**S Z 550 (第78～82図)** 調査区・層位ごとに図を提示したが、遺物の様相は大差なく器種別にみる。

#### a) 箸

114点を回収し、完形品やそれに近い45点を図化した(1452～1464、1473～1479、1484～1499、1521～1529)。すべて白木で塗箸はない。

寸胴箸が多く、両端が細い両口箸(1454・1455など)も一定みられるが、片口箸は寸胴箸との区別に迷うもの(1458・1487)が若干あるにすぎない。長さは寸胴箸が8寸(24cm)前後で、両口箸は26cm前後とやや長めである。側面は面取りで断面四角形や八角形となるものが多く、断面円形のもの(1463・1524・1527)は少ない。先端が焦げたものが数点みられる。箸先はあまり摩耗しておらず、比較的短期間の使用で廃棄されたと推測される。

樹種はスギまたはヒノキで、図示したものに限りていえば、スギは寸胴箸のみ、ヒノキは各種の箸に用いられている。

#### b) 食器

漆器の碗・碗蓋や剝物の皿(1508)がある。樹種はサクラ属やトチノキなどで、木取りはいずれも横木取り板目である。下地結合剤には漆液を用い、漆や朱漆を2度以上塗布して仕上げている。漆器製作技術の詳細は5節(自然科学分析)を参照されたい。

#### c) 容器部材

曲物底板や側板・蓋、桶・樽の部材、樽・徳利の栓などがある。曲物はヒノキが多用され、桶・樽の底・蓋板はスギもみられる。曲物蓋は側面が有段で側板を付けるタイプ(1468など)と、無段で椀皮の取手や孔のあるタイプ(1511・1551など)がある。1517は側面に木釘・鉄釘がみられ、箱の部材か。ノコギリの挽き割り製材の痕が残り仕上げは粗い。1518は桶または樽側板で、外面に屋号を記している。曲物底板1510は墨書がある。

1505～1507・1533は栓で、寸胴形の1507・1533は樽用、先端がやや細い1505・1506は徳利用かもしれない。1543は栓孔のある樽蓋板。

1520・1559は柄鏡用の鏡箱底板で、1559は漆塗りである。いずれもヒノキ製である。

#### d) その他の道具

1483は金箔張りの花形飾りでヒノキ製。仏像の蓮華座に似るが、背面の加工が粗いことや背面に柄がみられることから、建築等の飾りと判断した。1500は指物部材でヒノキの木胎に朱漆・金泥で模様を描く。1470も指物部材か。1501は糸巻の部材である。

1502～1504・1548は連歯下駄で、1502・1503は左足の圧痕が残る。1504は焼印がある。1549は17世紀後葉以降に普及する差歯の陰卵下駄である。サイズからみて子ども用か。

1509は木札で墨書がある。1514は2ヶ所穿孔のある円形板材で、大坂城下町等で双六の駒台とされるものに類似する。1532はしゃもじである。他に、1466・1471・1472・1546・1566など用途が不明瞭な板材や部材がある。1466は中央に軸孔と縁辺に小孔が巡る。和傘などの部材かもしれない。1481は楔、1465は井戸など結物のタガを締める竹製の楔である。1519は粗く面取りした棒材。

**その他の遺構 (第82図)** 1560はS K 506出土漆器碗、1561はS E 535の早桶底板で、木取りの異なるスギ板を2枚木釘で結合している。

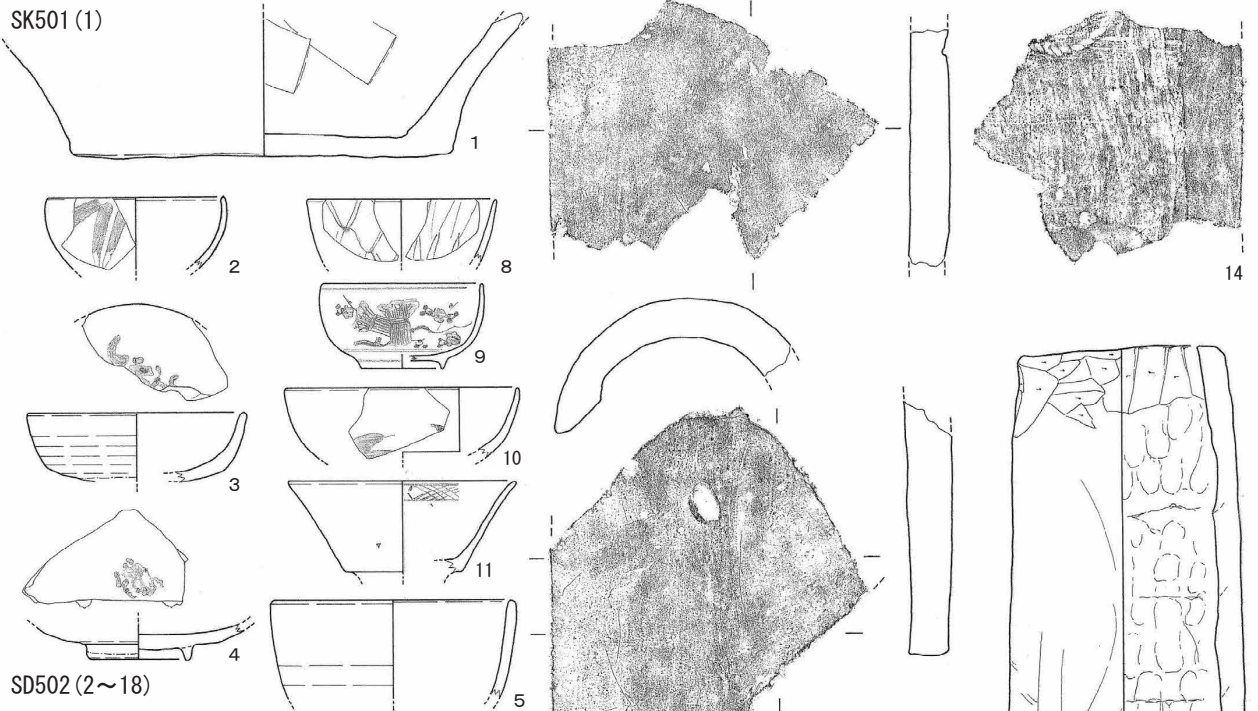
#### (4) 金属製品 (第82図)

**S Z 550** 1565は肩付・断面八角形の煙管雁首で、17世紀後半に盛行するタイプ。1566は真鍮製の吸口で、真鍮で継目を蠟着している。1567は銅製の鈴。1568は平底の鉄鍋底部である。鉄釘(1569～1574)は意匠性の高い頭巻釘が多くみられ、数寄屋建築などに用いられたものが含まれよう。

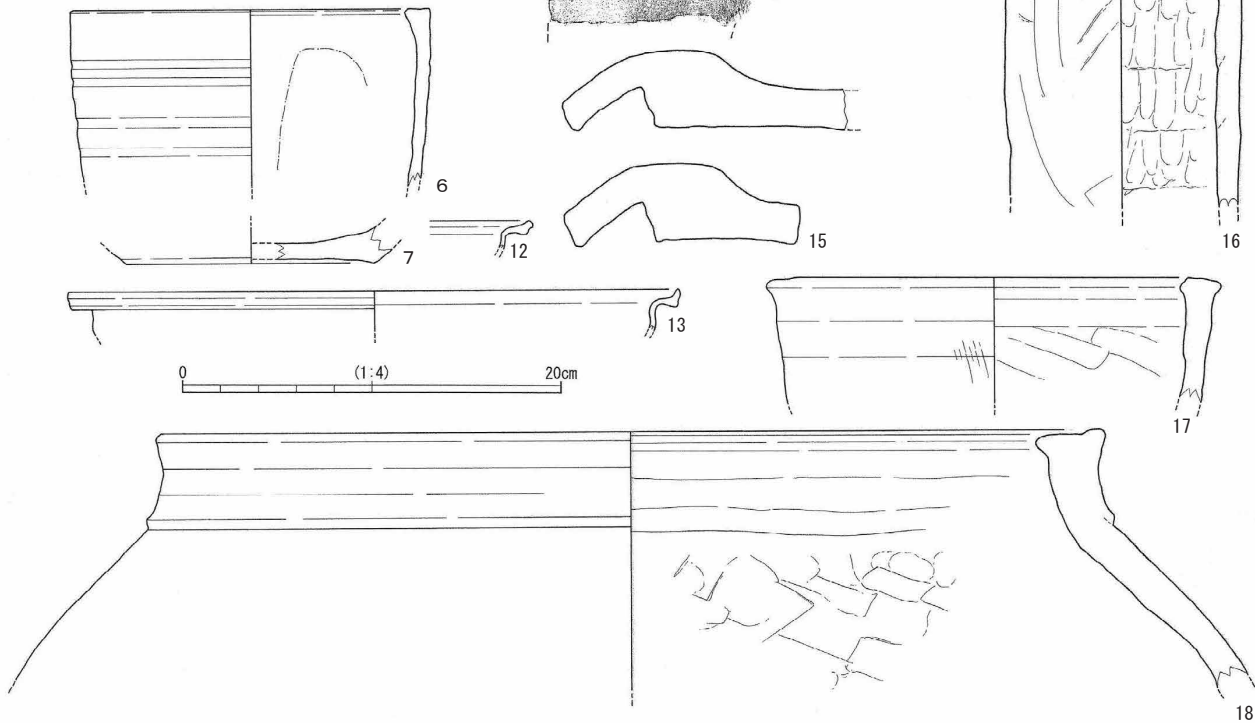
**その他の遺構等** 1562はS D 515出土の鉄鍋で、口縁部が短く外反し、1568に比べやや深手のもの。1563は3区4層出土の小型柄鏡で銘「人見重次作」、茶の湯の灰道具(箒・塵取り)を意匠とする。青銅鏡で、成分分析結果は観察表を参照されたい。人見(藤原和泉守)重次を称する鏡師は京都・大坂にみられる<sup>(2)</sup>。1564は8区3層出土の匙である。

(櫻井)

SK501 (1)

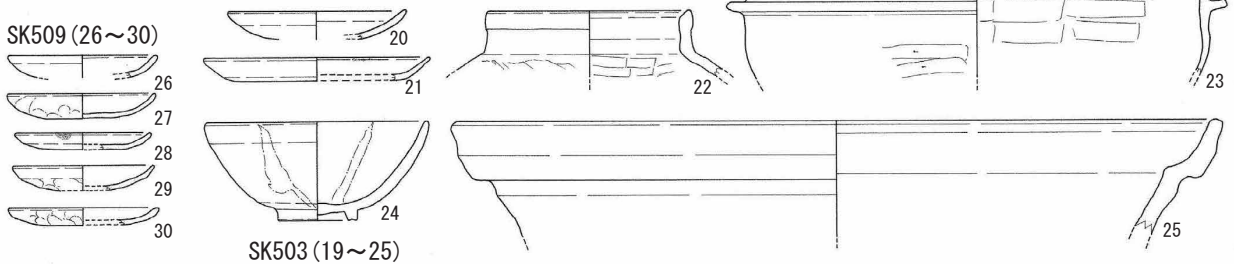


SD502 (2~18)



0 (1:4) 20cm

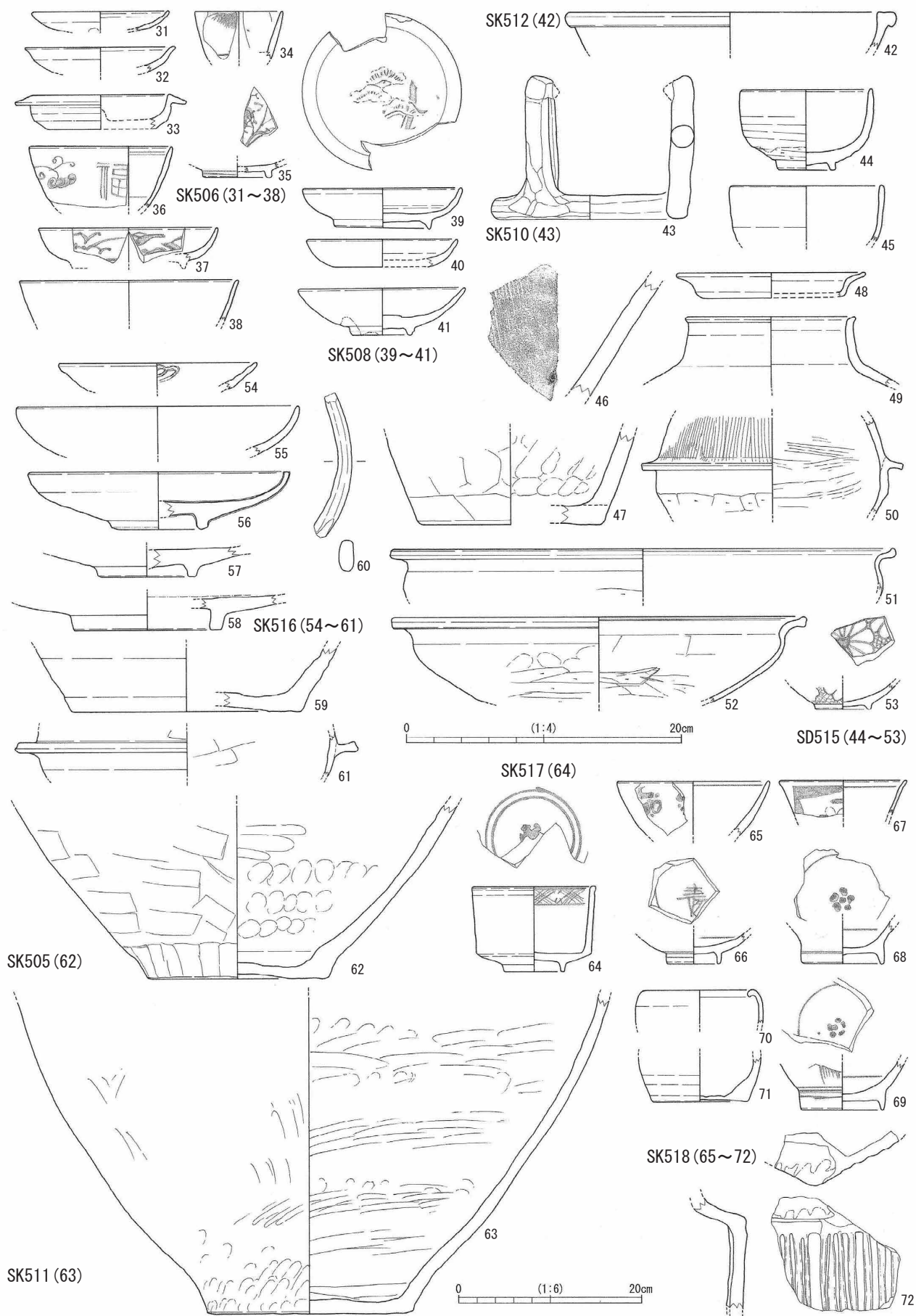
SK509 (26~30)



SK503 (19~25)

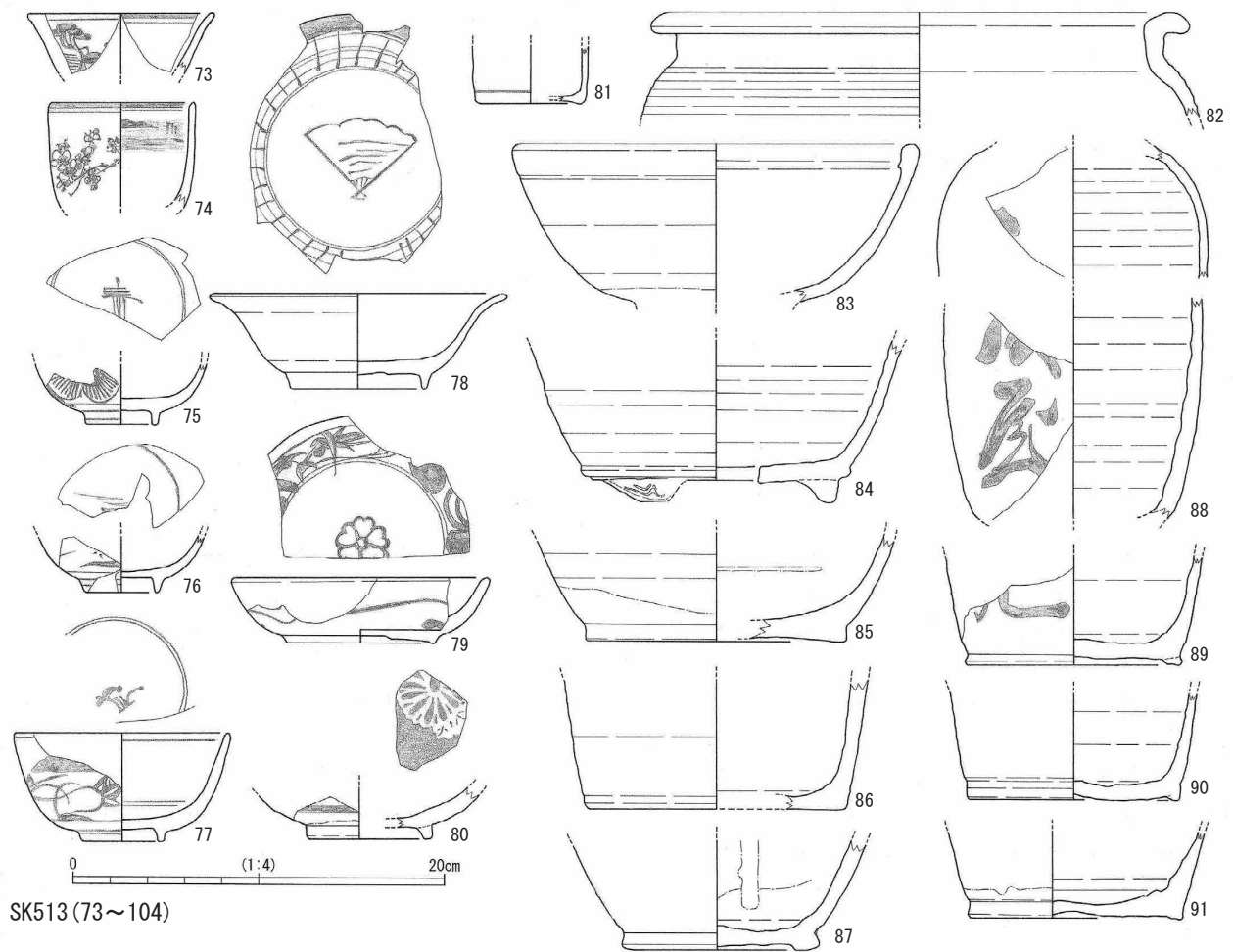
第36図 第5次調査出土遺物① SK501・SD502・SK503・SK509 (1:4)



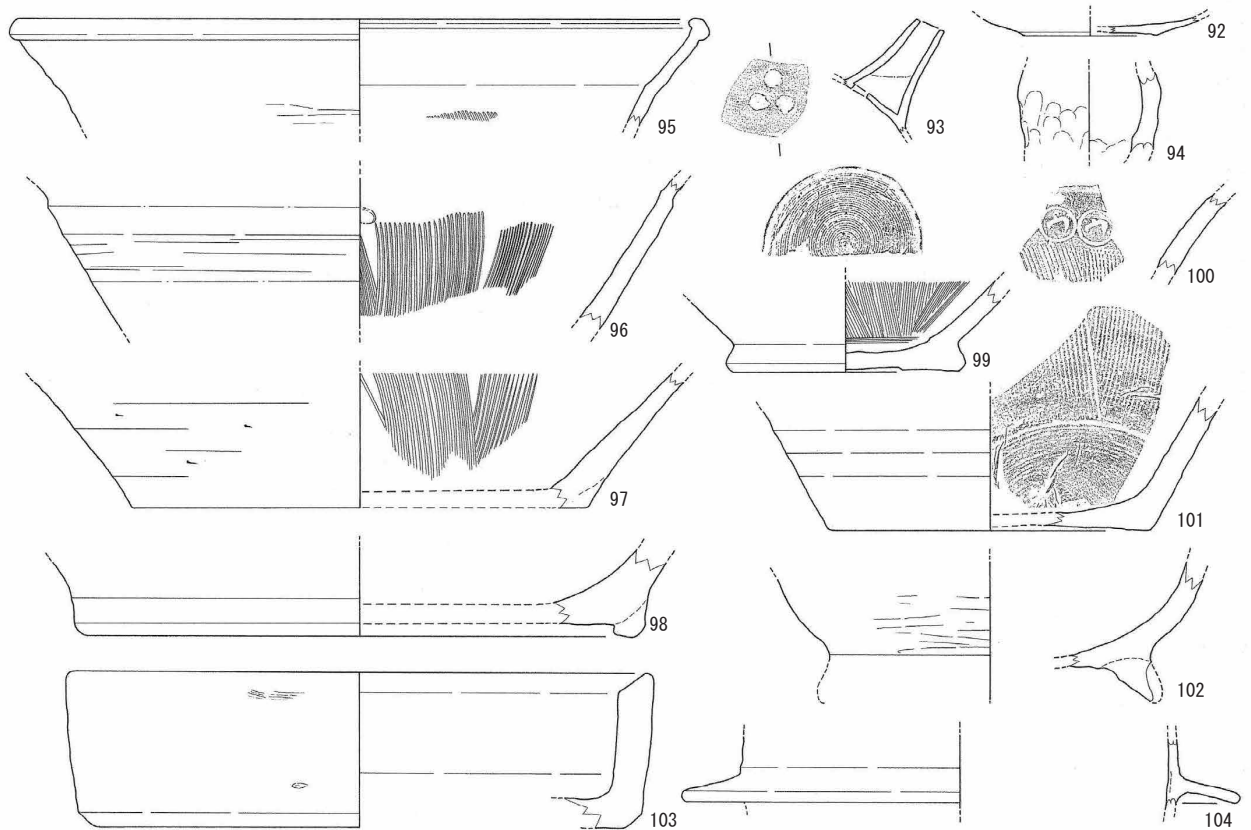


第37図 第5次調査出土遺物② SK505~512・SD515・SK516~518 (1:4、62・63は1:6)

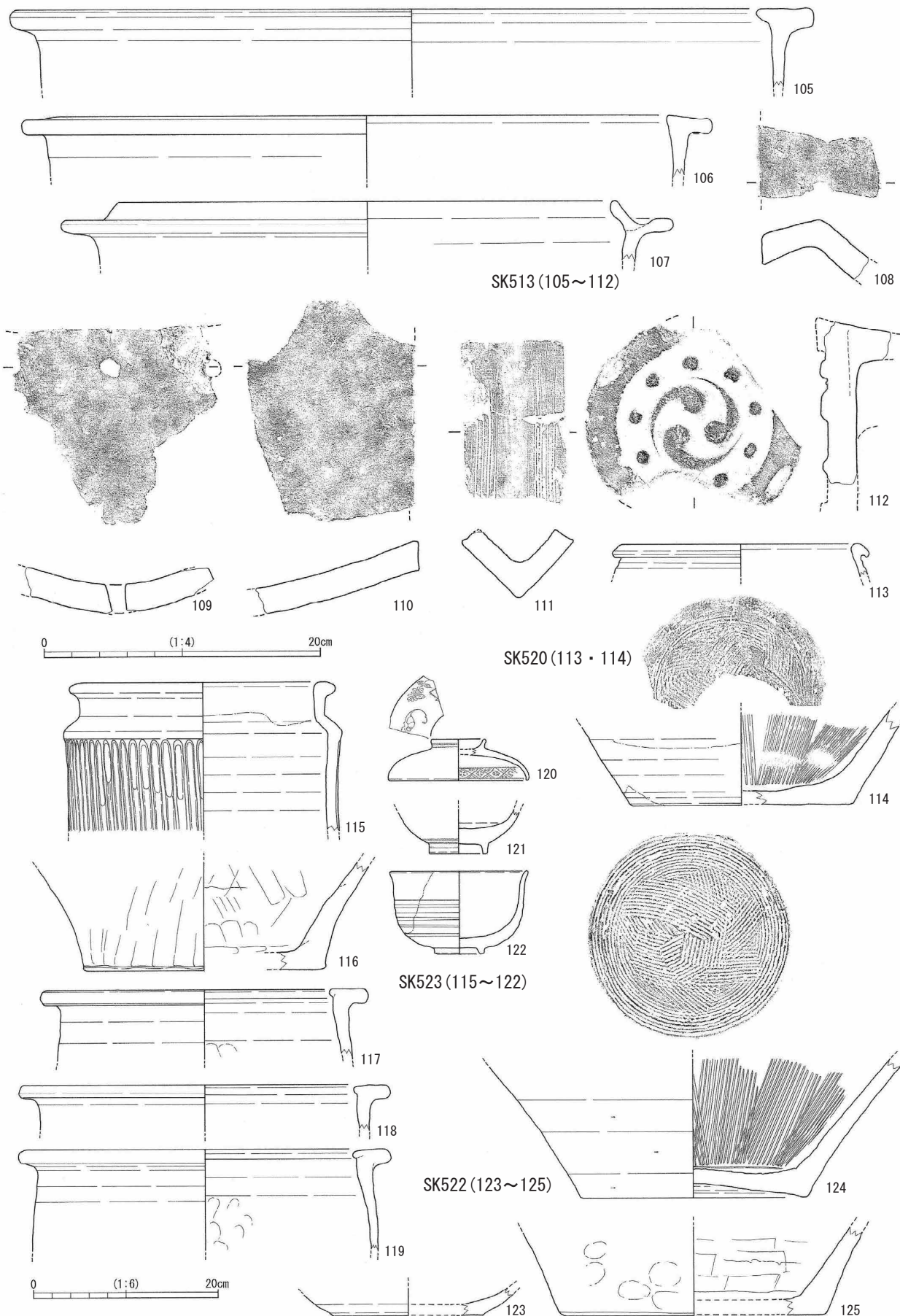




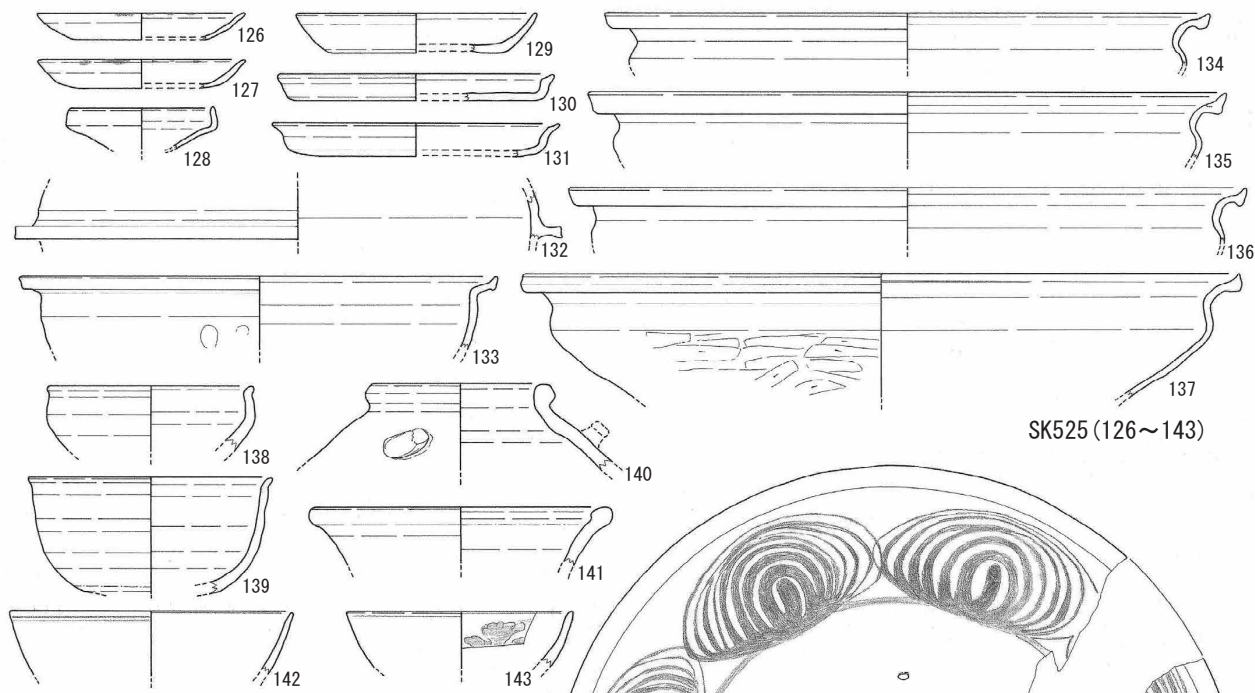
SK513 (73~104)



第38図 第5次調査出土遺物③ SK513 (1:4)

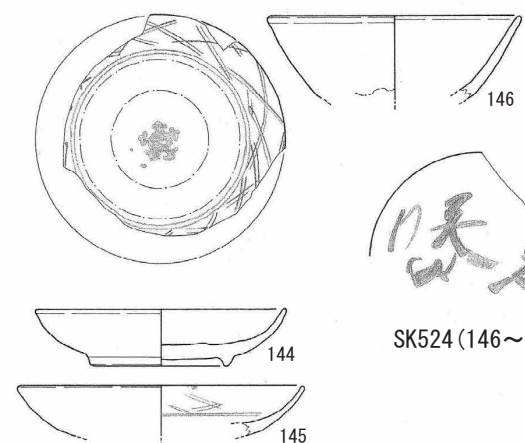


第39図 第5次調査出土遺物④ SK513・SK520・SK522・SK523 (1:4、105~107・117~119は1:6)

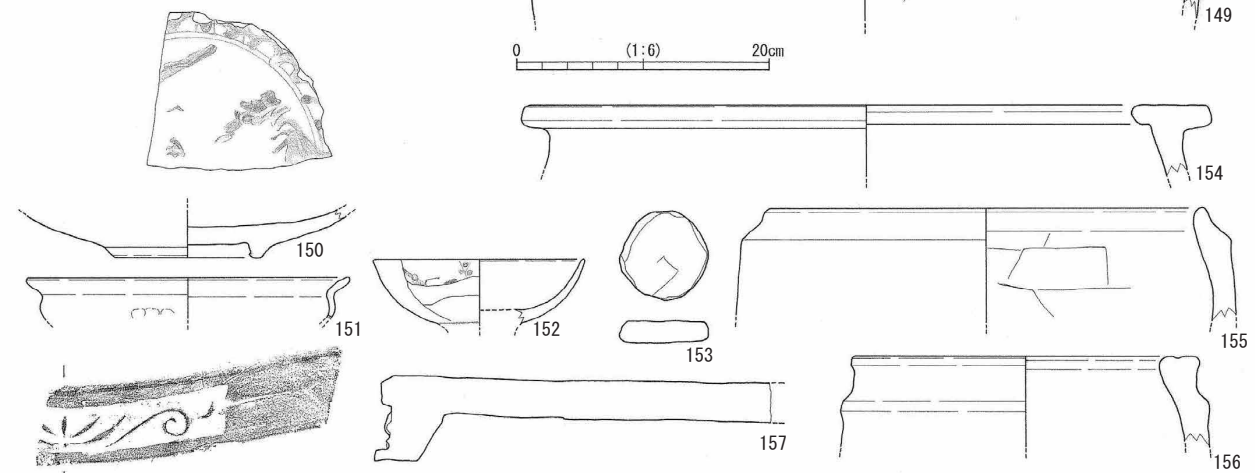


SK525 (126~143)

SK527 (144~146)

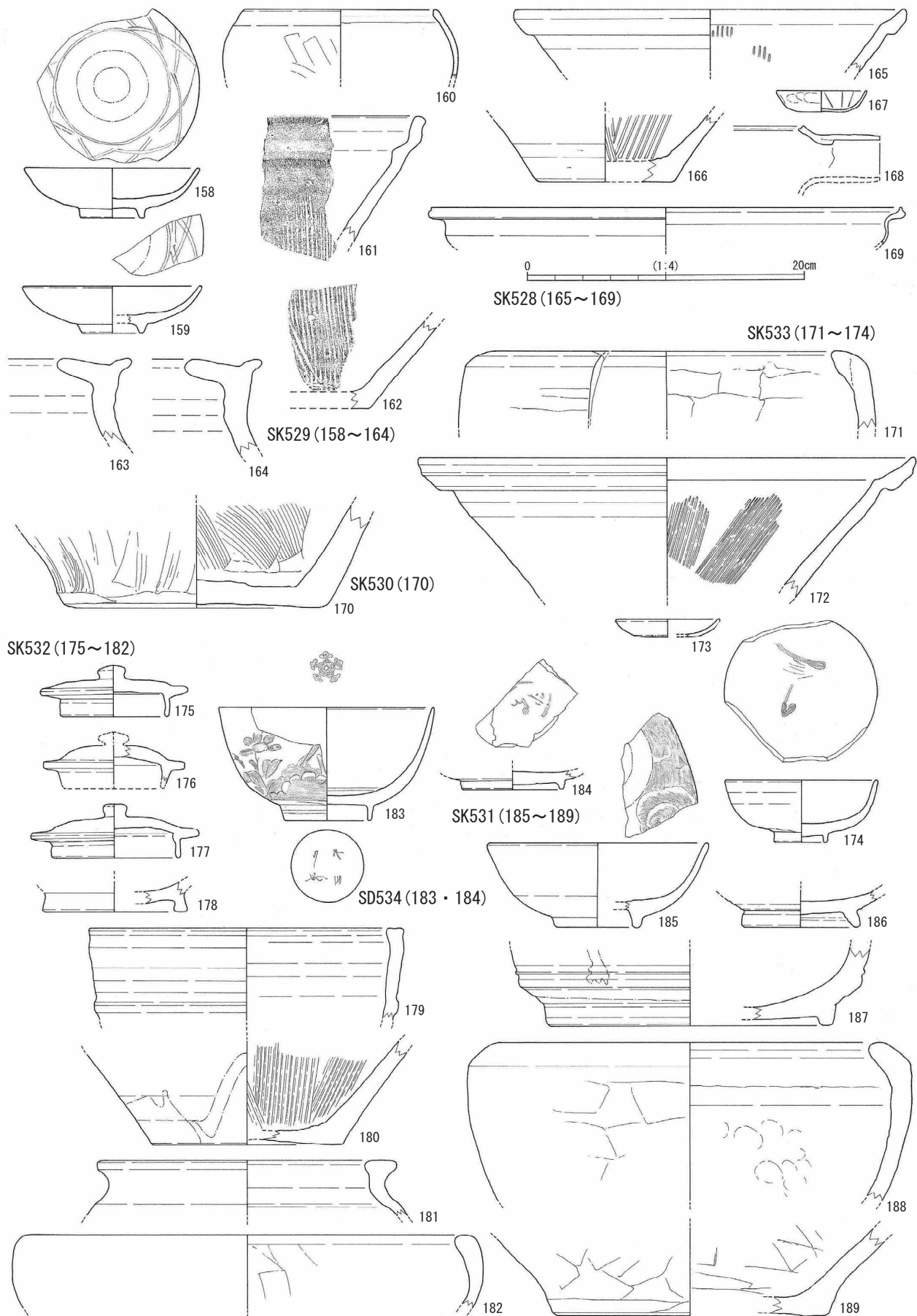


SD526 (149~157)



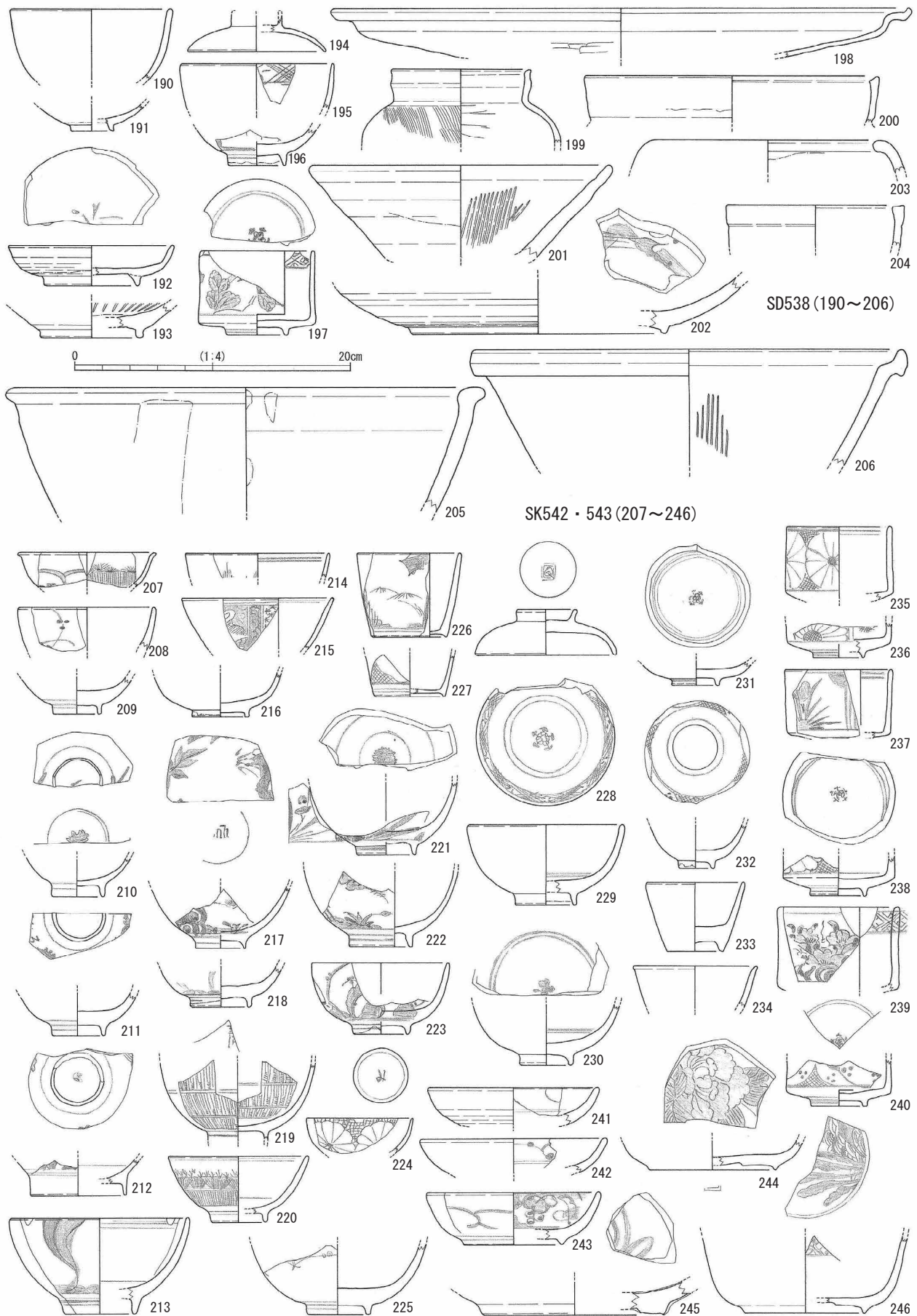
第40図 第5次調査出土遺物⑤ SK524・SK525・SD526・SK527 (1:4、148・149は1:6)



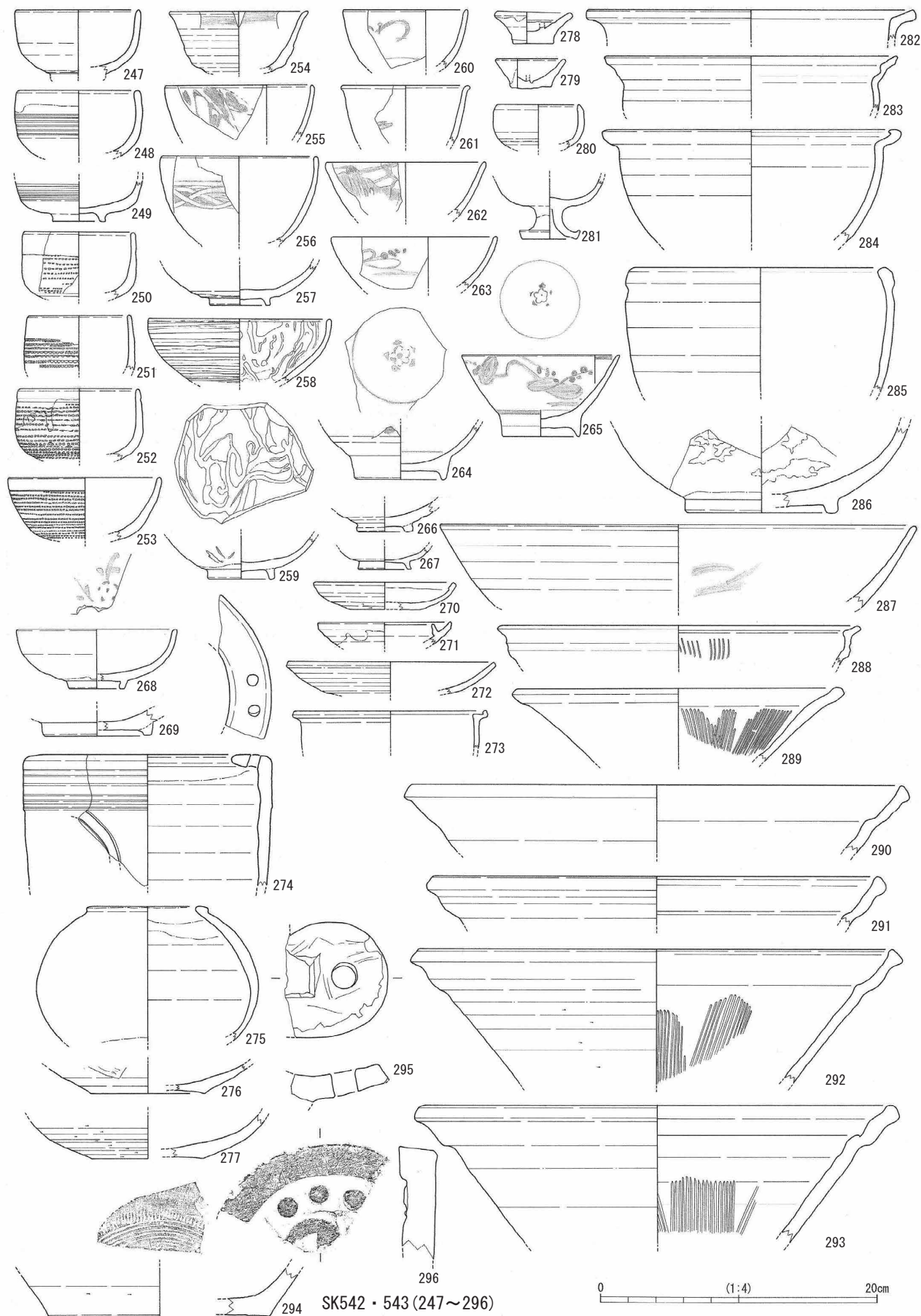


第41図 第5次調査出土遺物⑥ SK528・SK529・SK530・SK531・SK532・SK533・SD534 (1:4)

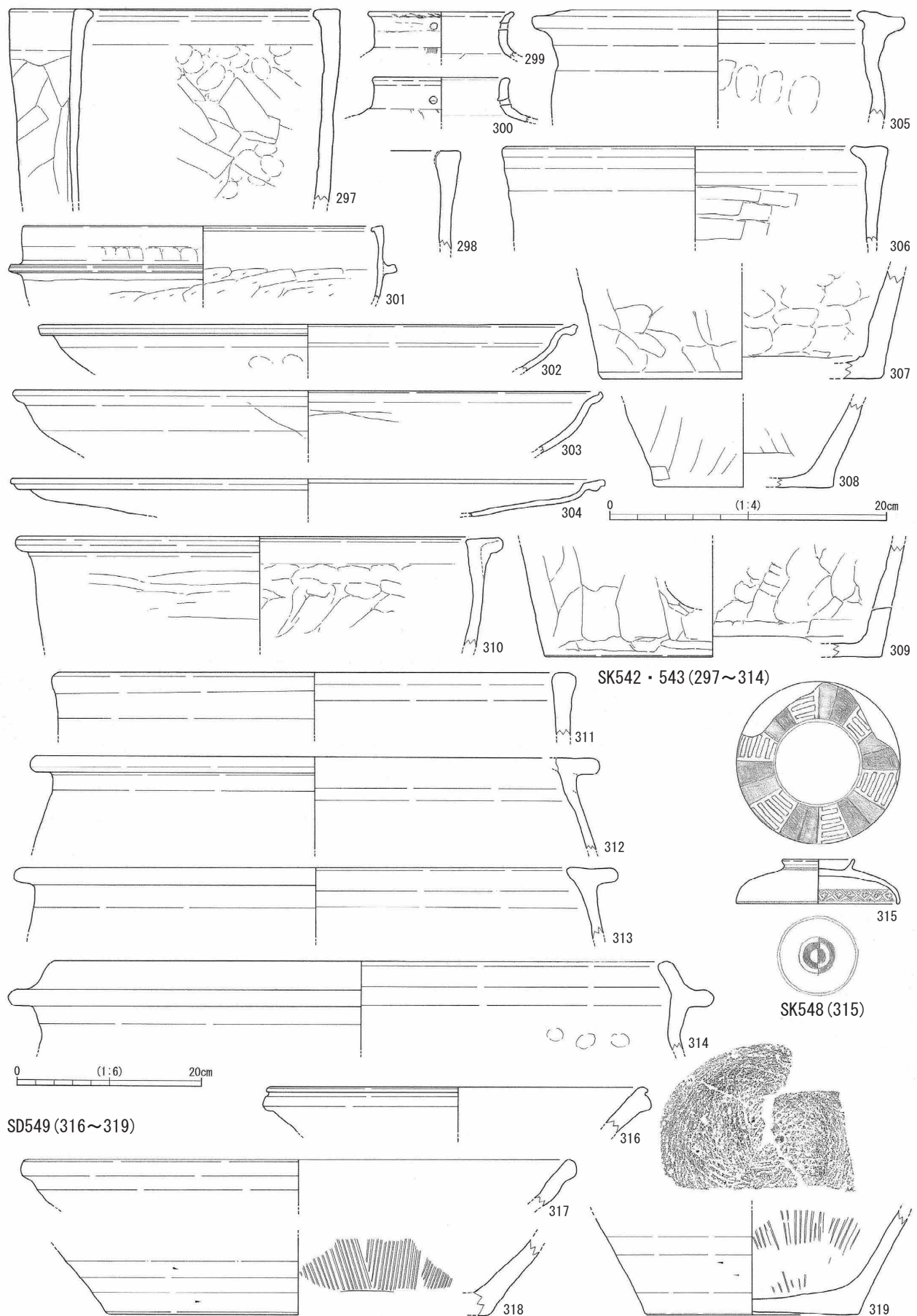




第42図 第5次調査出土遺物⑦ SD538・SK542・543 (1:4)

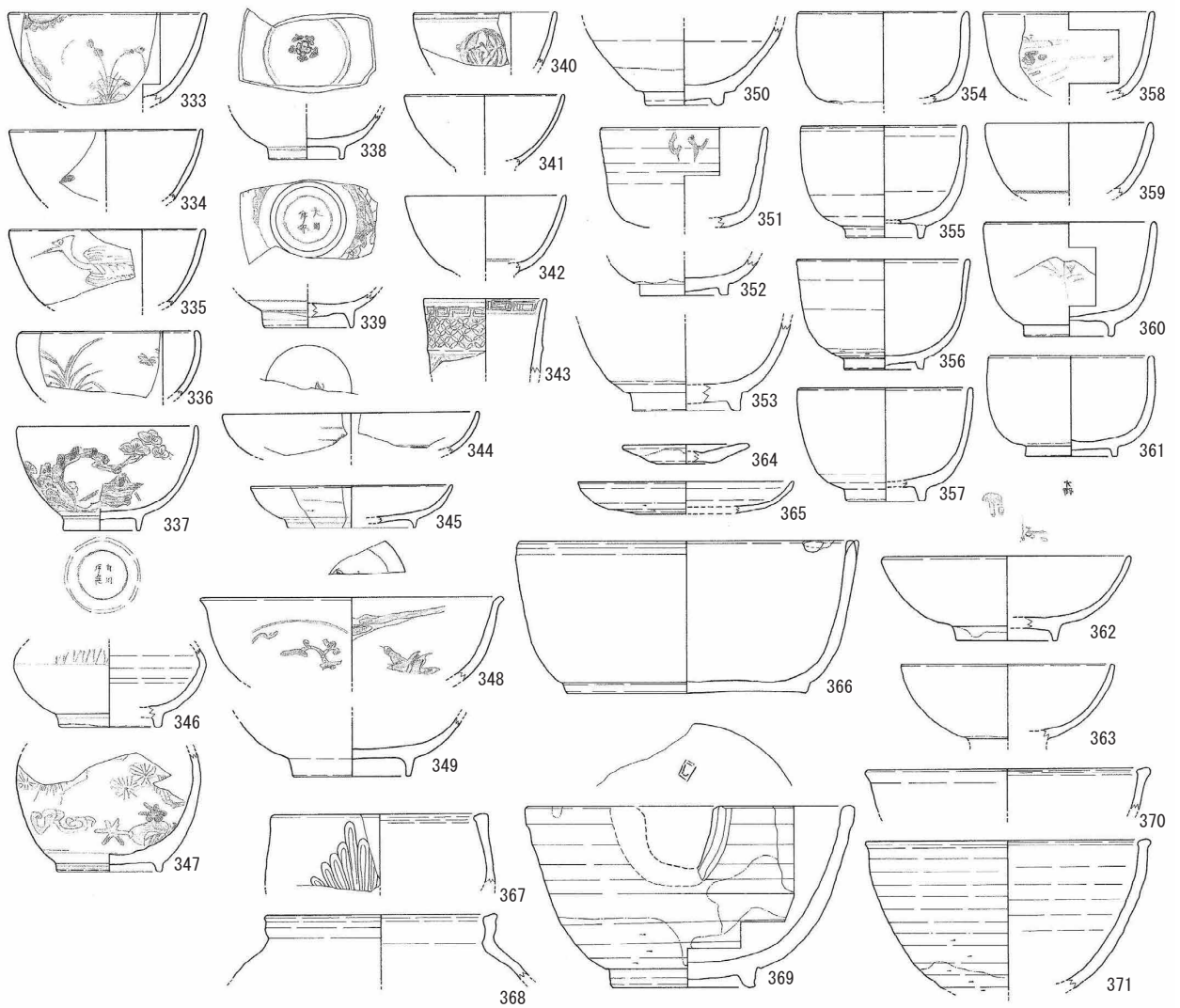
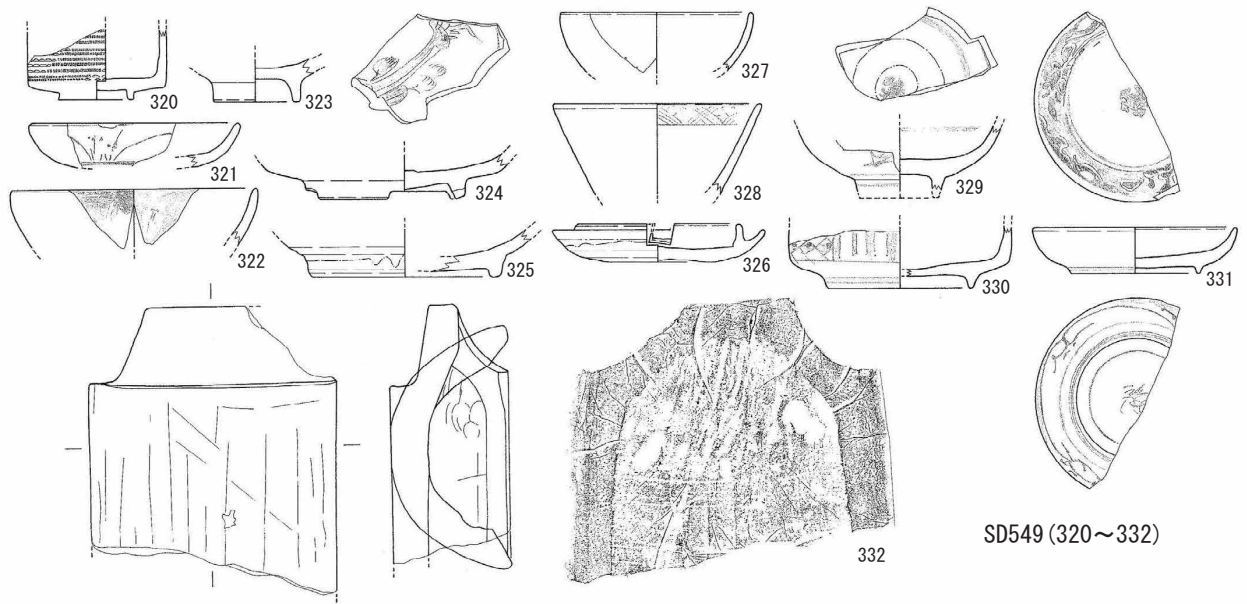


第43図 第5次調査出土遺物⑧ SK542・543 (247~296) (1:4)



第44図 第5次調査出土遺物⑨ SK542・543・SK548・SD549 (1:4、310~314は1:6)



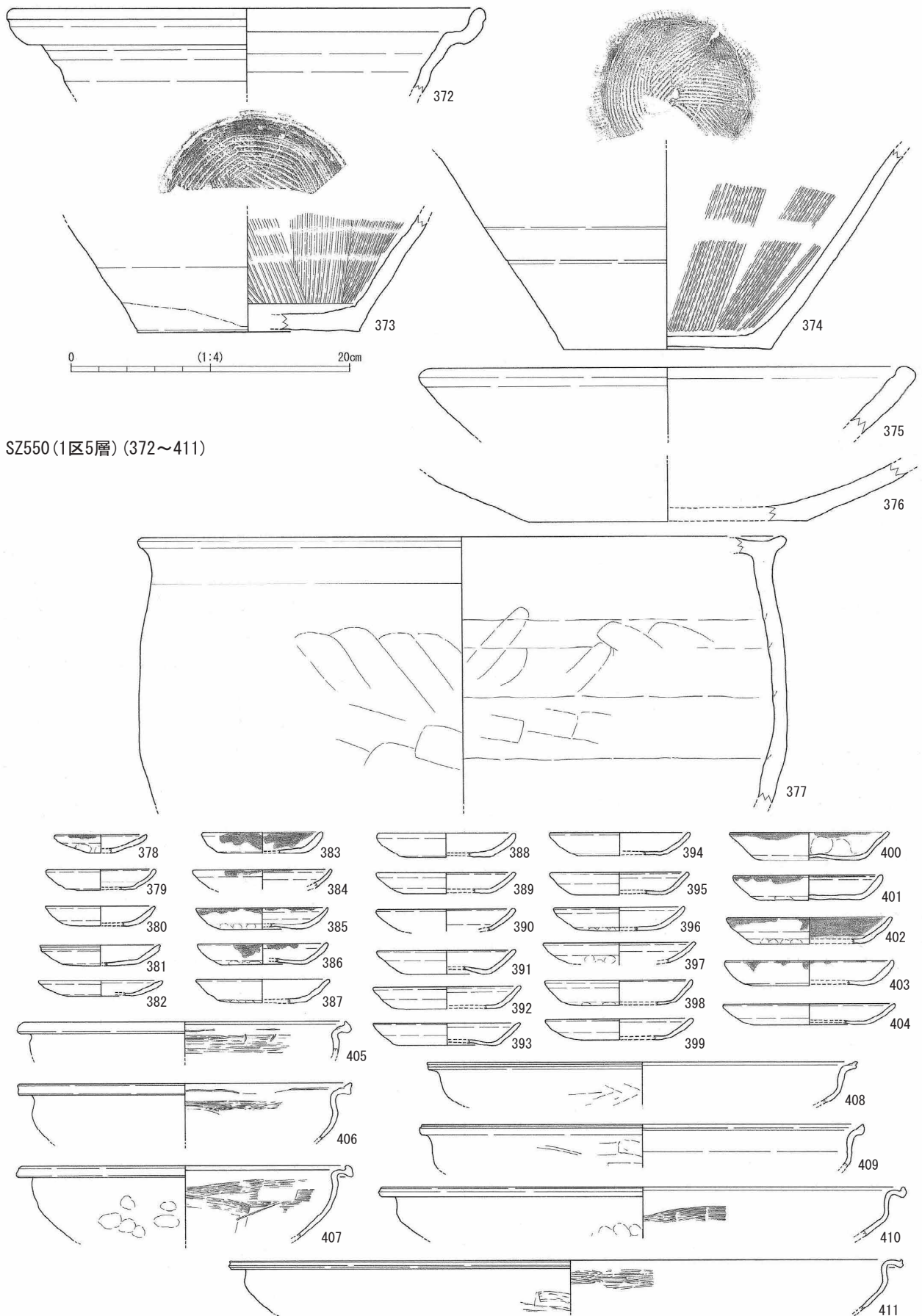


SZ550 (1区5層) (333~371)

0 (1:4) 20cm

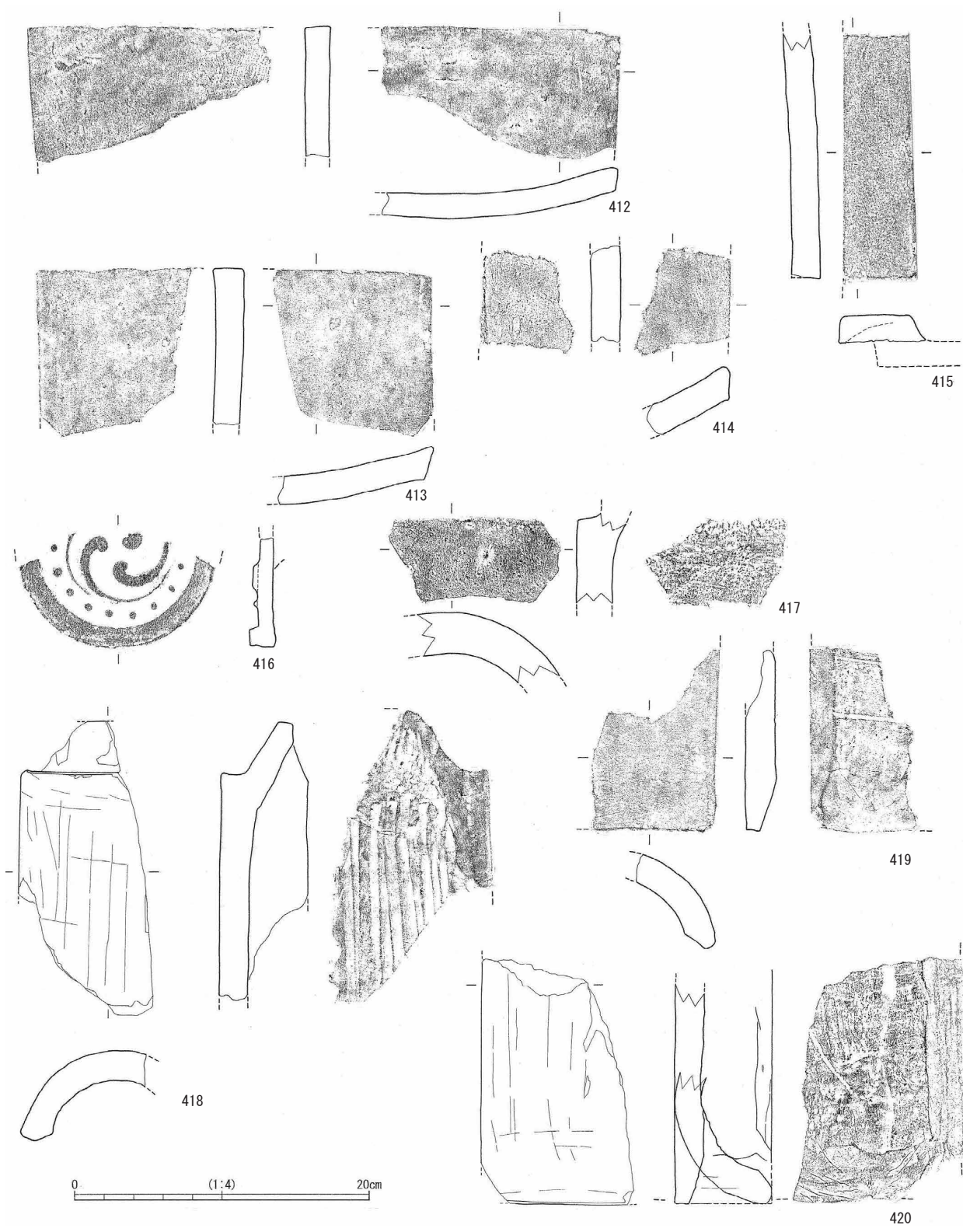
第45図 第5次調査出土遺物⑩ SD549・SZ550 (1:4)





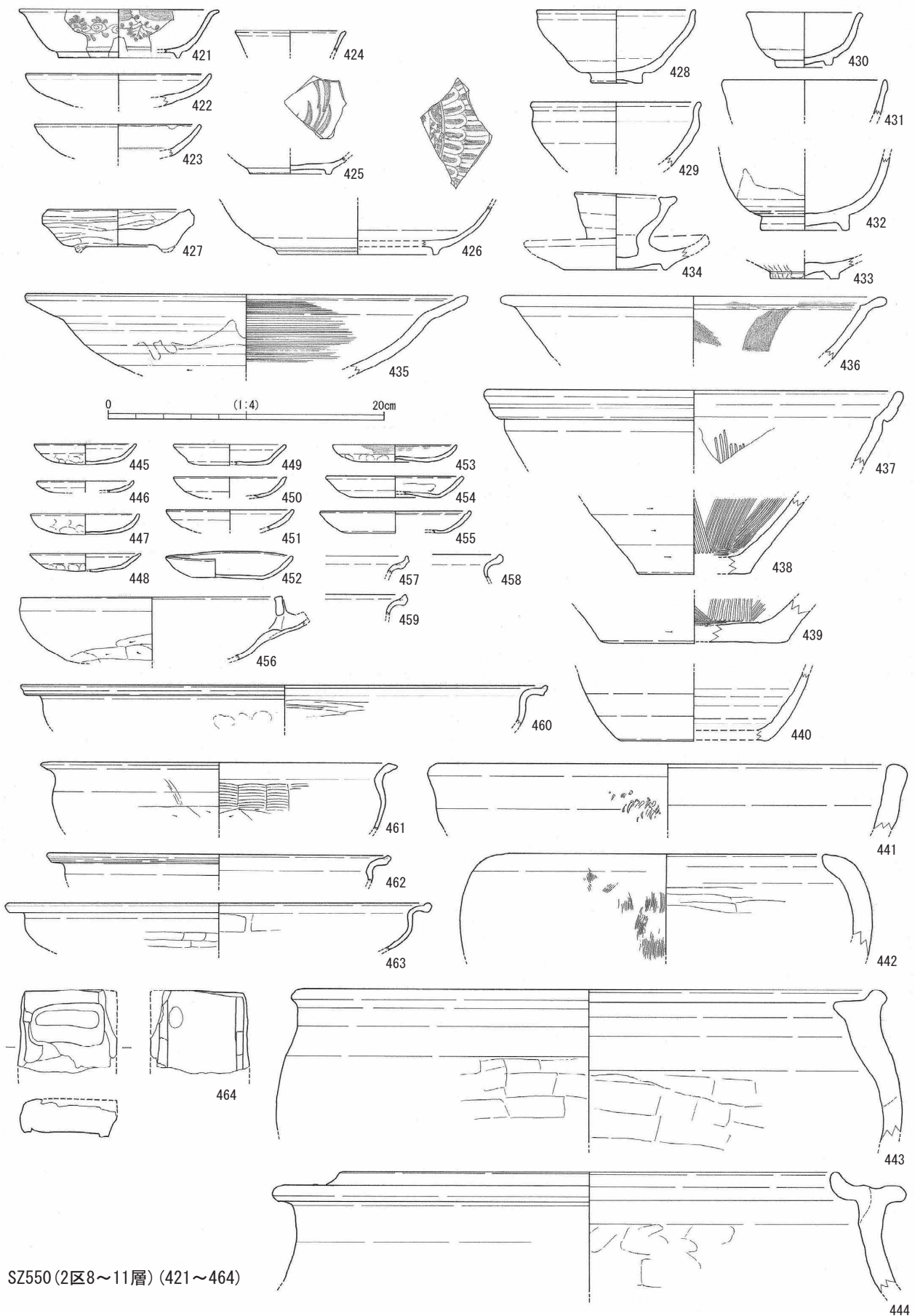
SZ550 (1区5層) (372~411)

第46図 第5次調査出土遺物① SZ550 (1:4)



SZ550 (2区8~11層) (412~420)

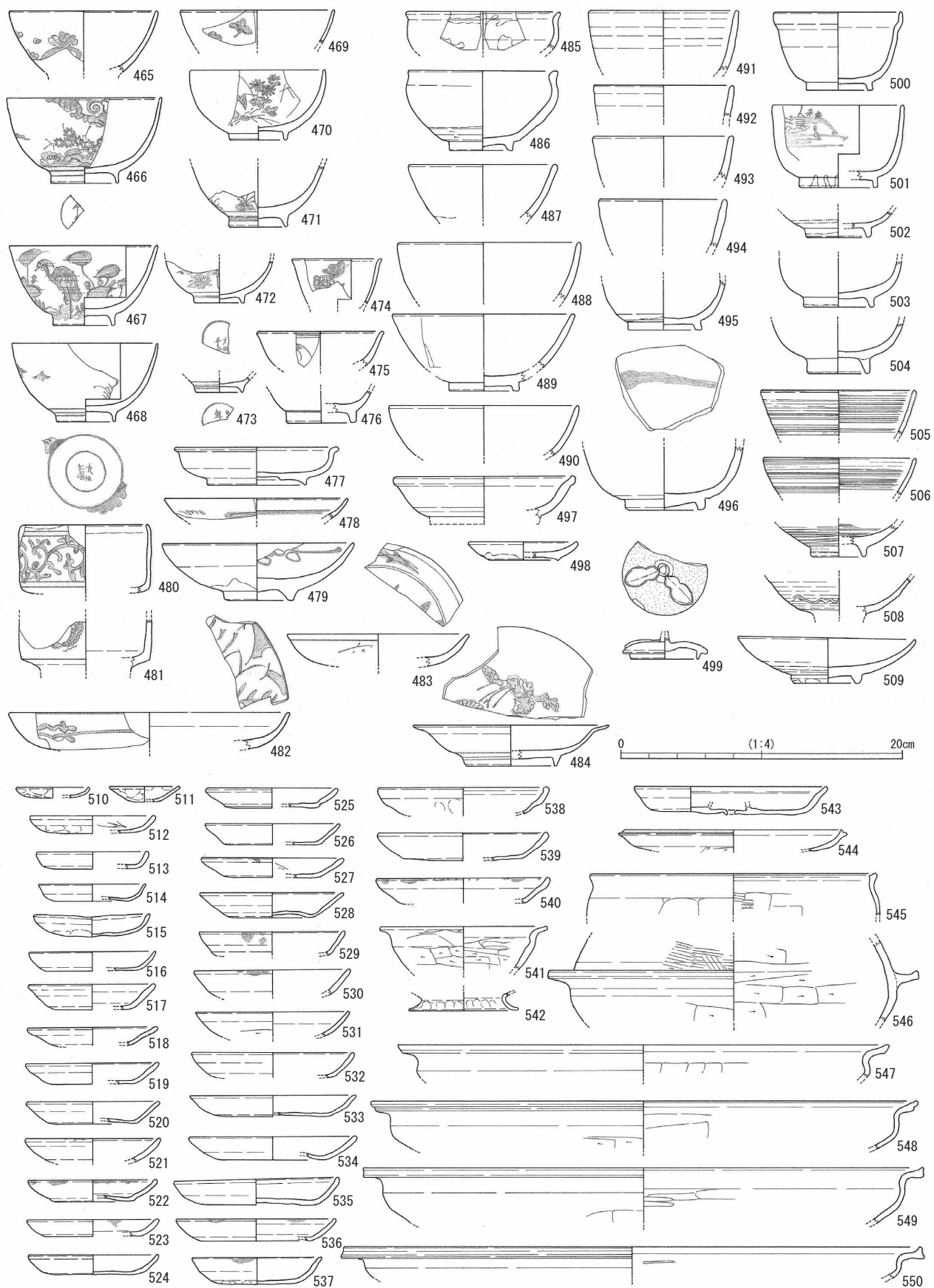
第47図 第5次調査出土遺物⑫ SZ550 (1:4)



SZ550 (2区8~11層) (421~464)

第48図 第5次調査出土遺物⑬ SZ550 (1:4)

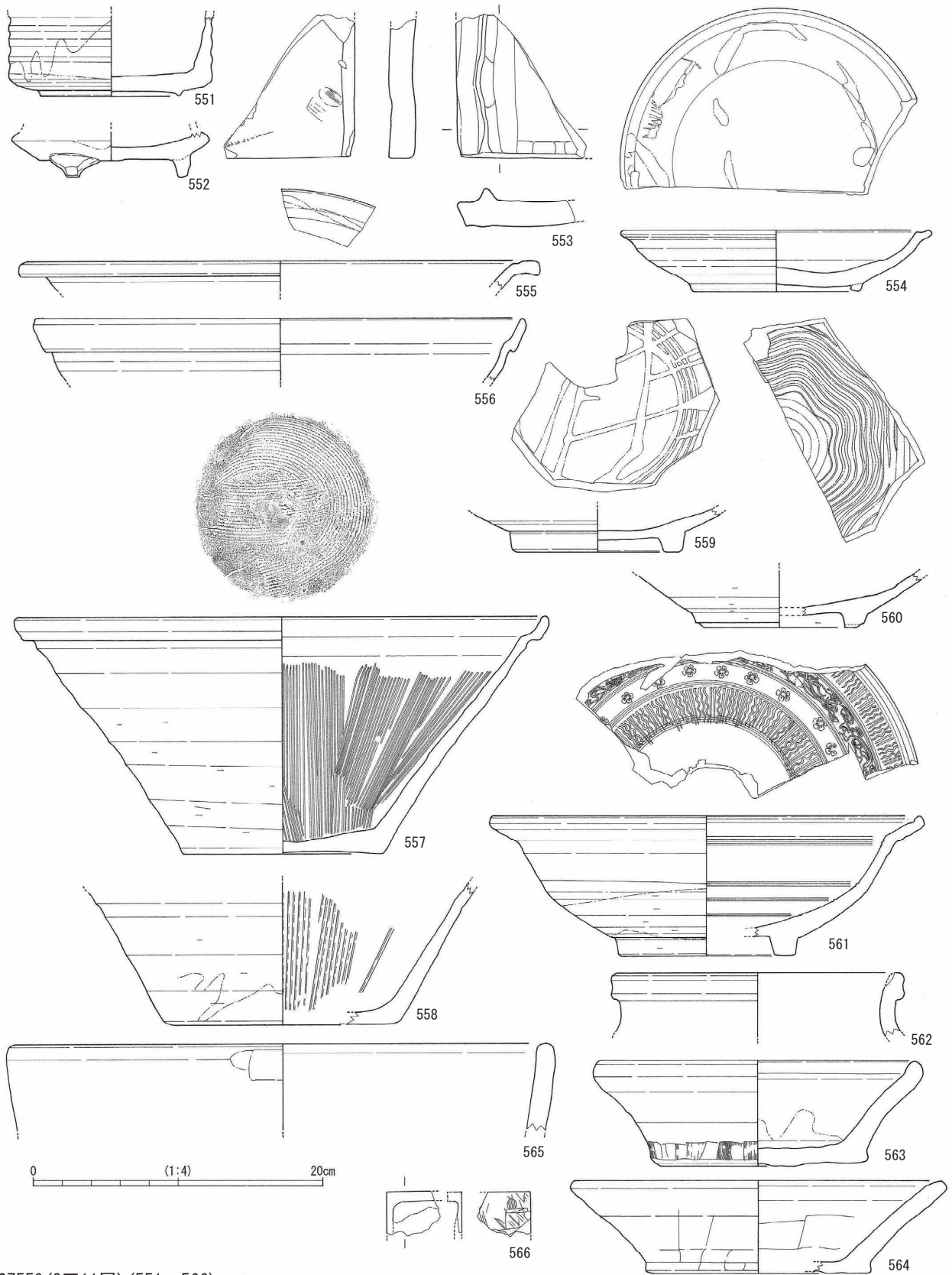




SZ550 (3区11層) (465~550)

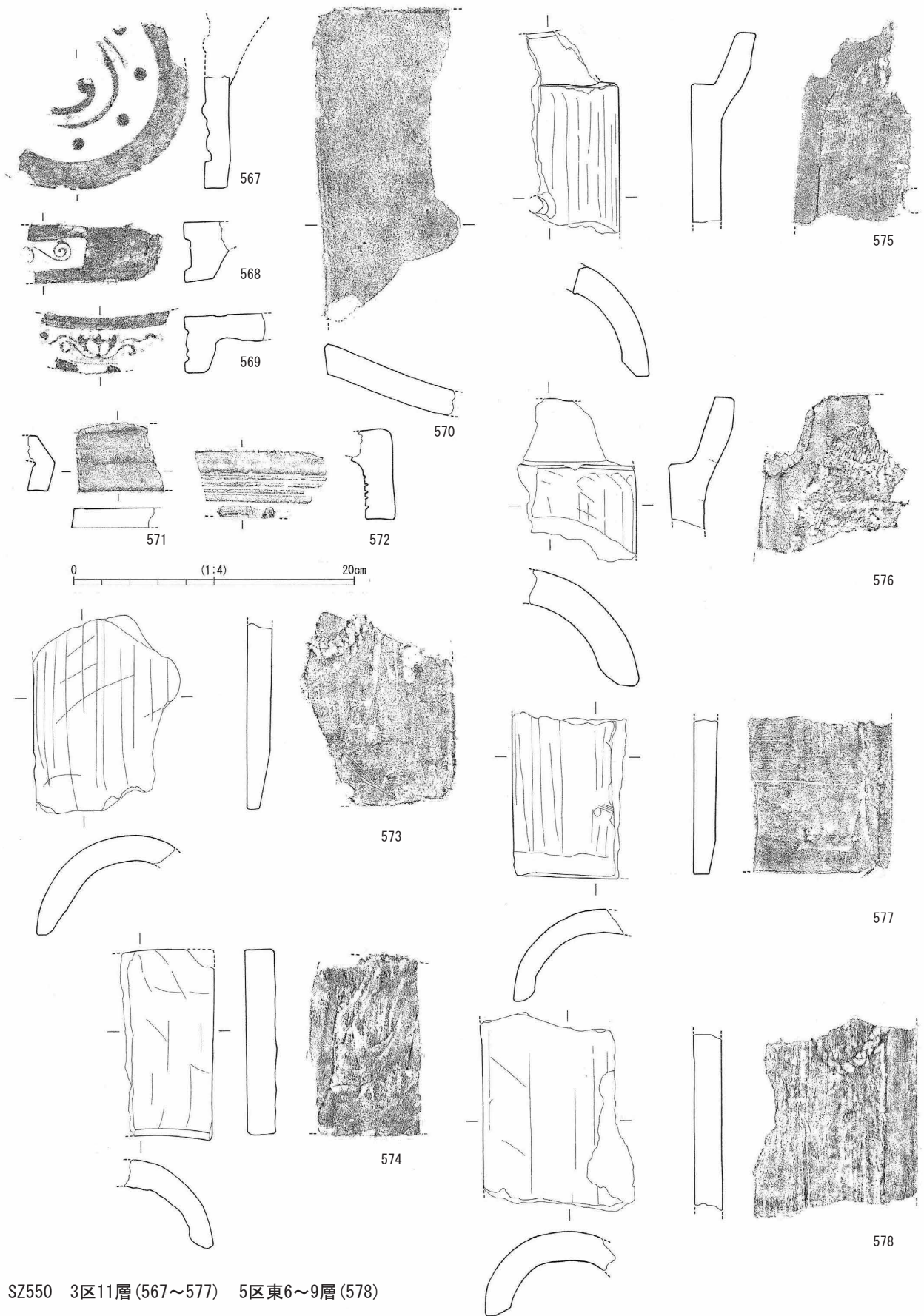
第49図 第5次調査出土遺物⑭ SZ550 (1:4)



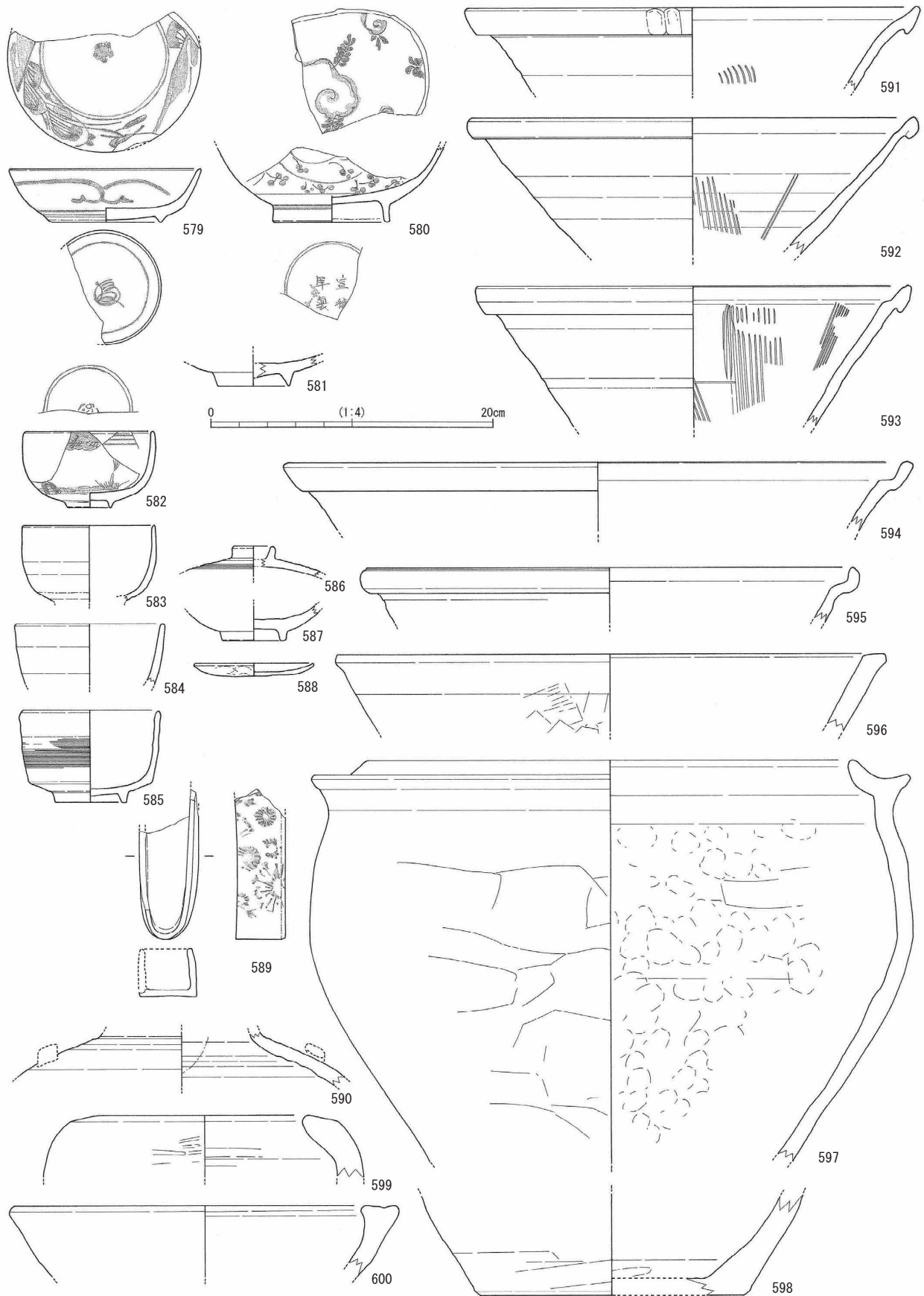


SZ550 (3区11層) (551~566)

第50図 第5次調査出土遺物⑮ SZ550 (1:4)



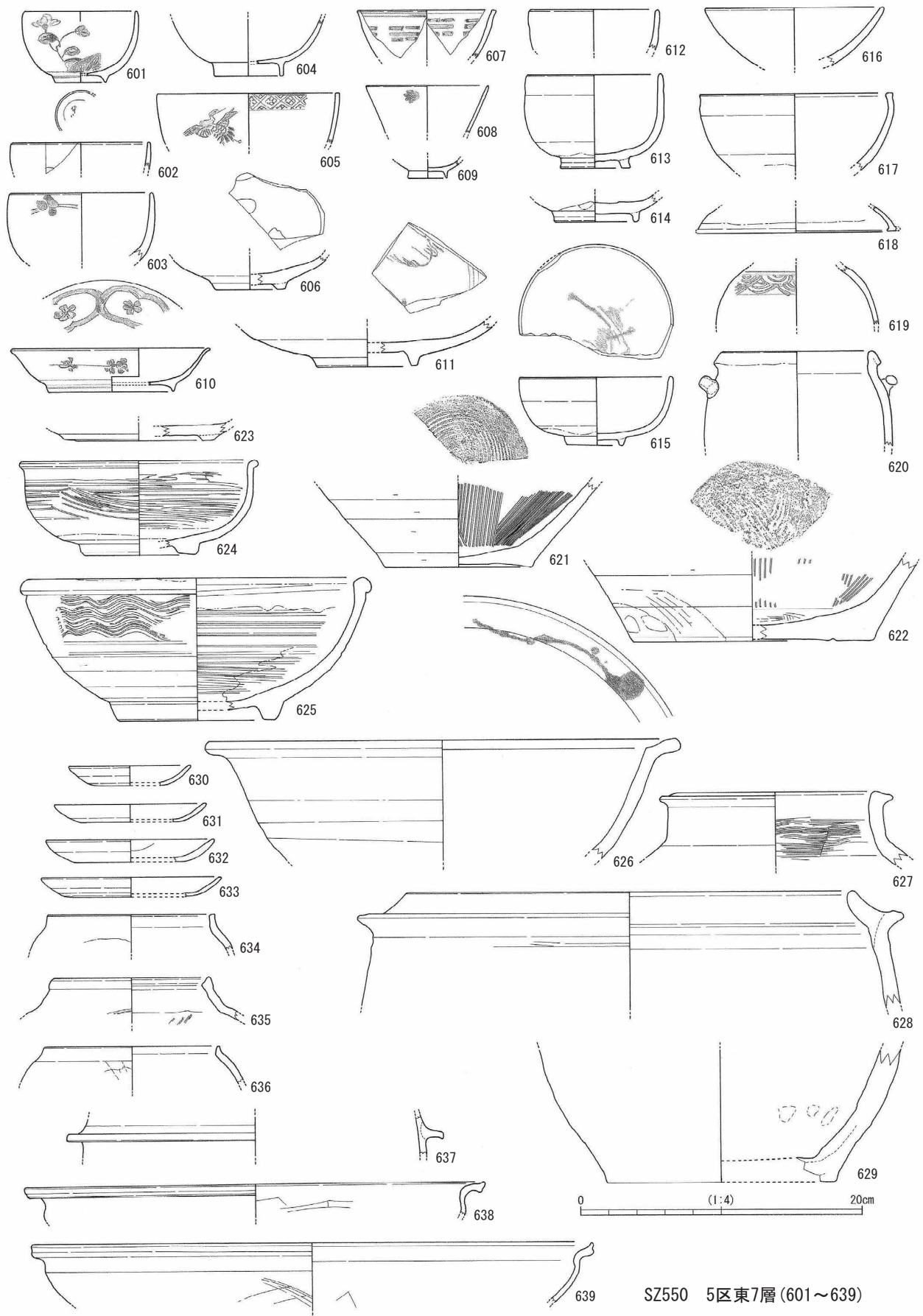
第51図 第5次調査出土遺物⑩ SZ550 (1:4)



SZ550 5区東6~7層(579~600)

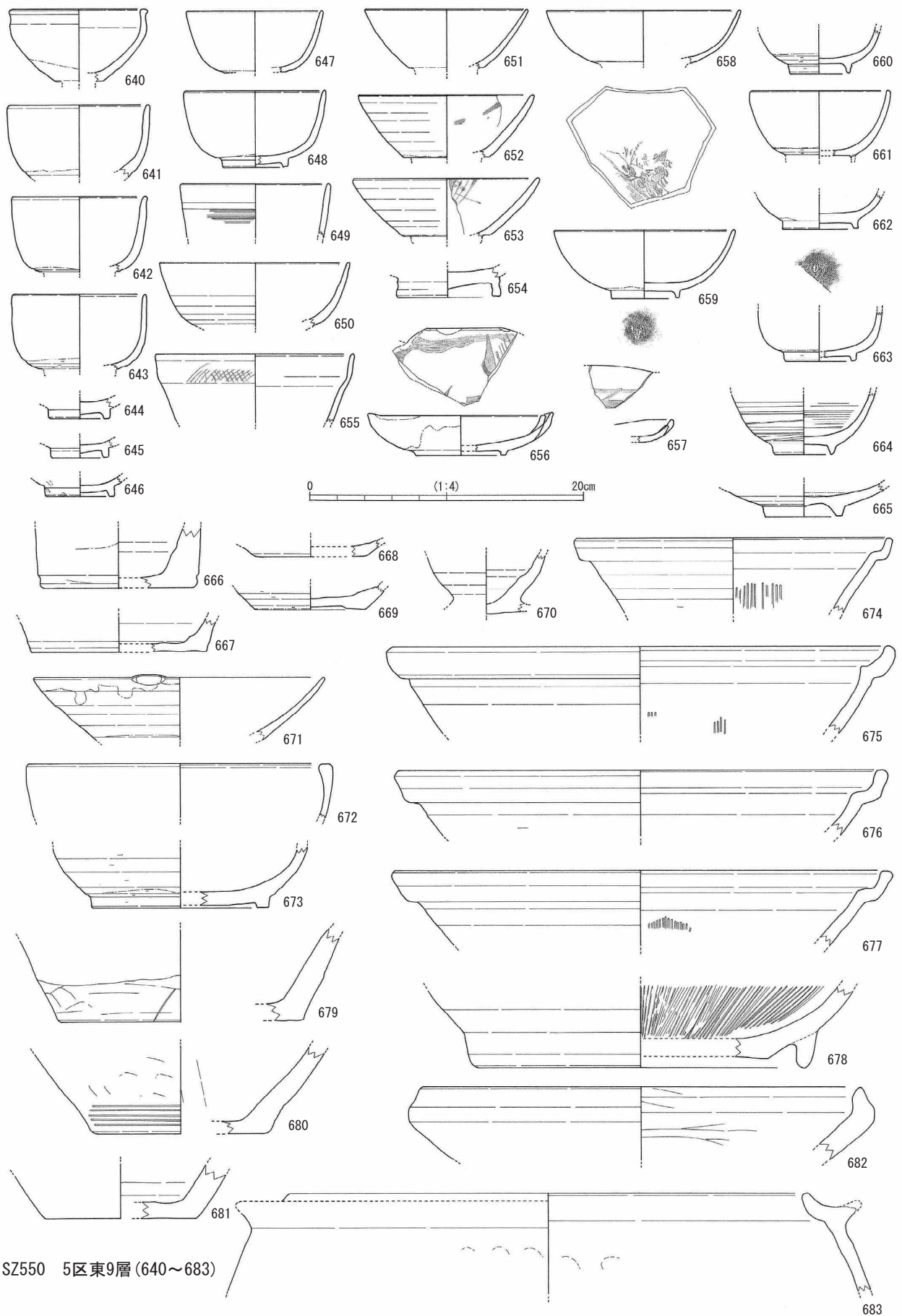
第52図 第5次調査出土遺物① SZ550 (1:4)



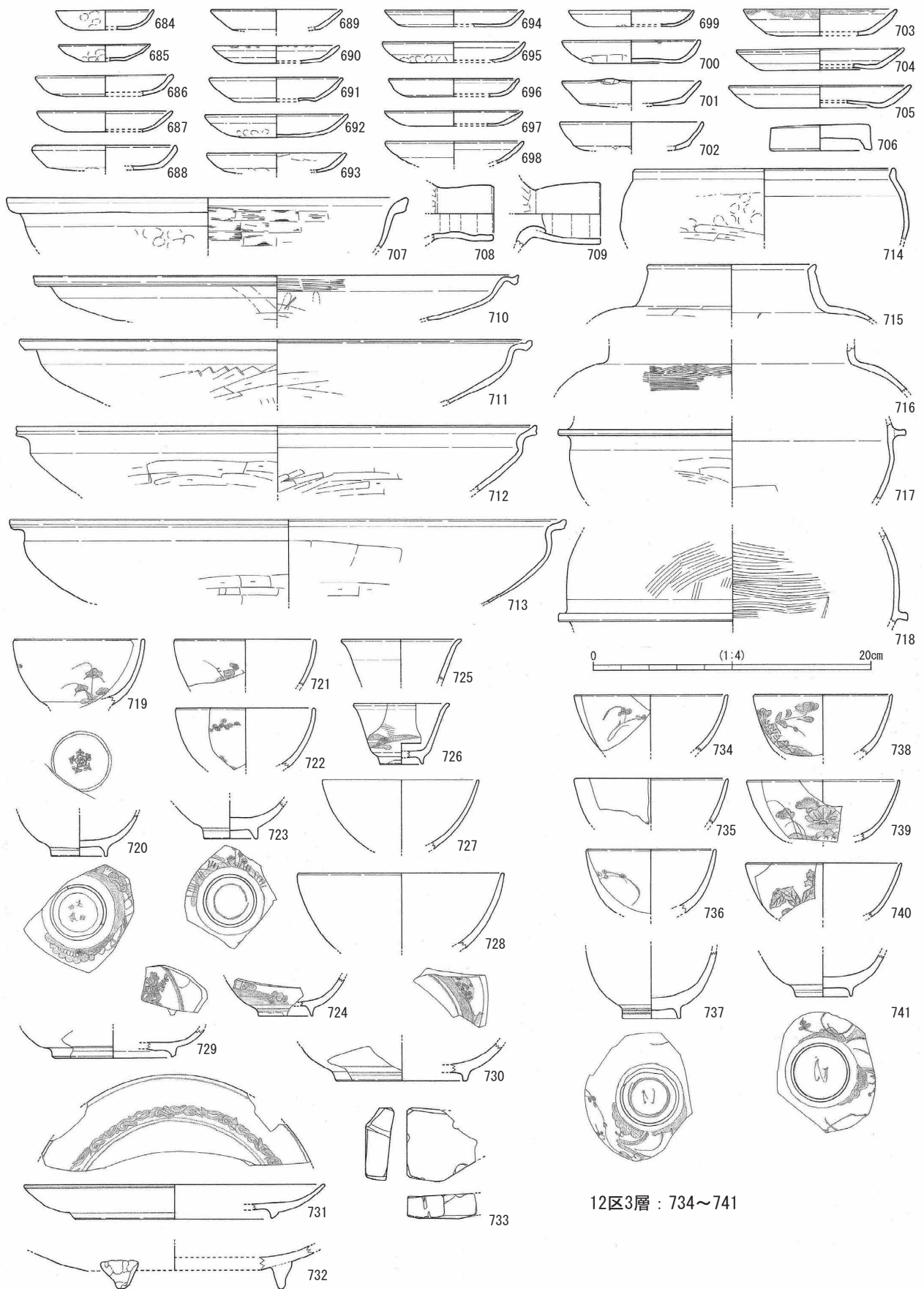


第53図 第5次調査出土遺物⑱ SZ550 (1:4)



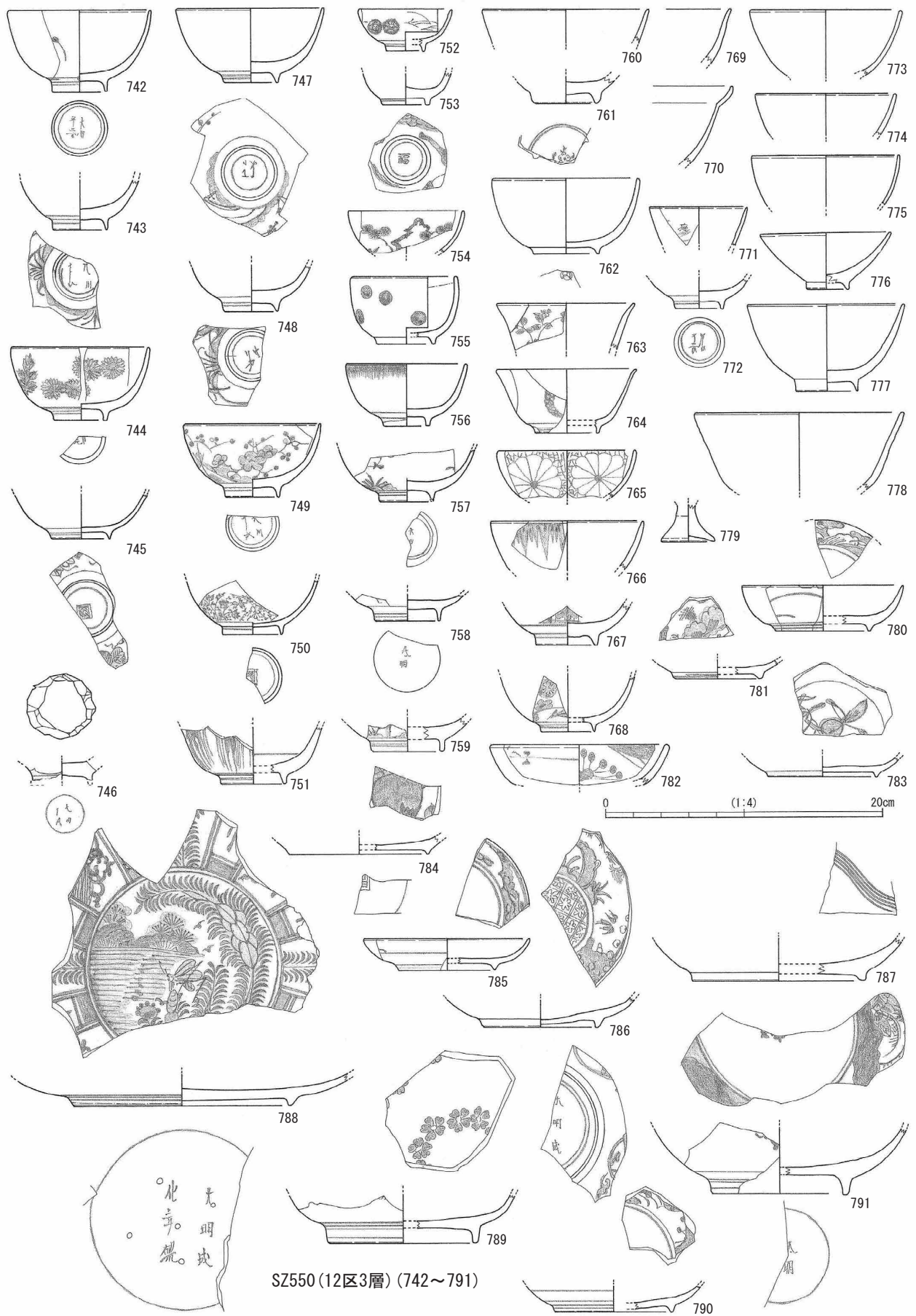


第54図 第5次調査出土遺物⑨ SZ550 (1:4)



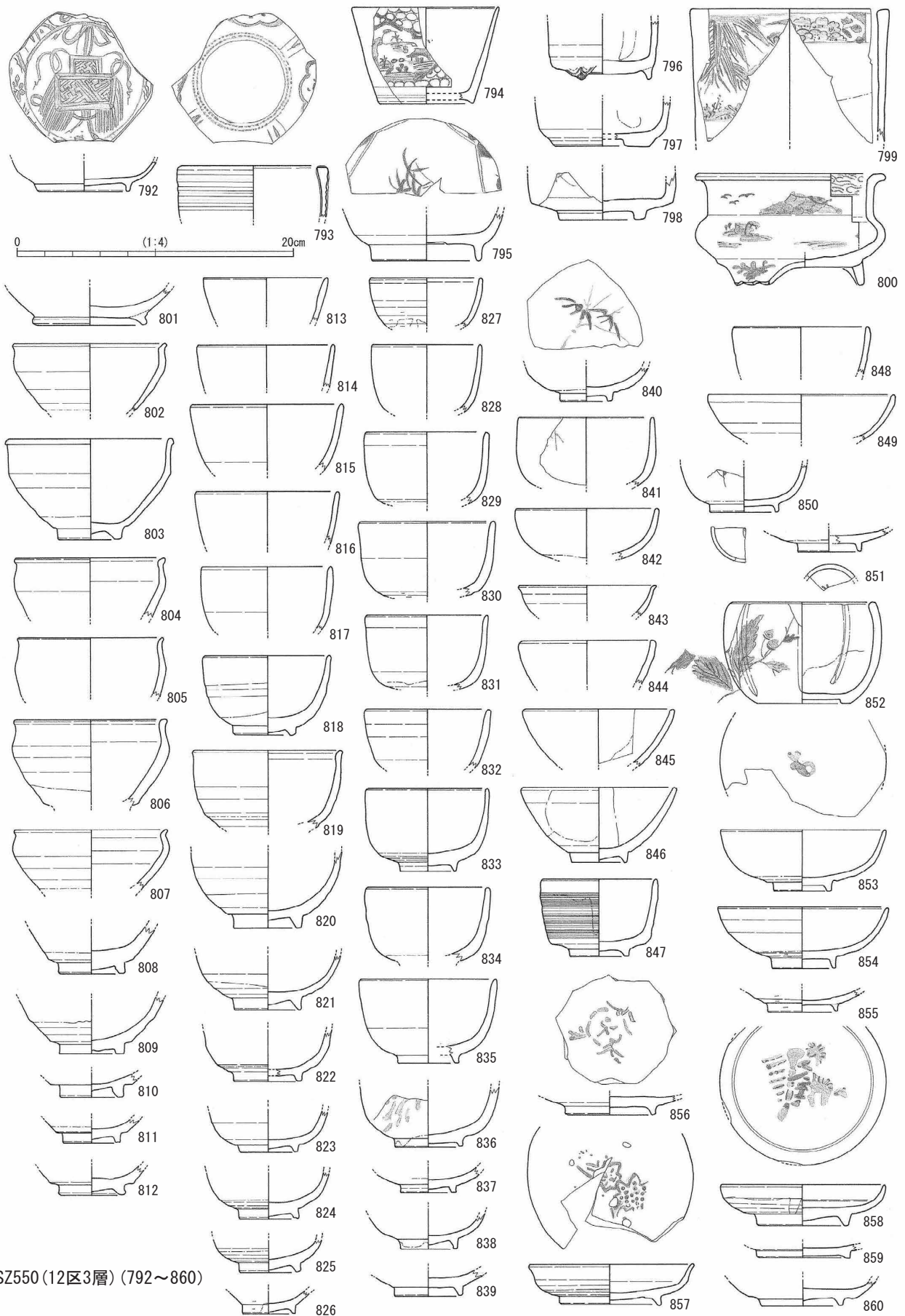
SZ550 5区東9層 : 684~733

第55図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)



第56図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)



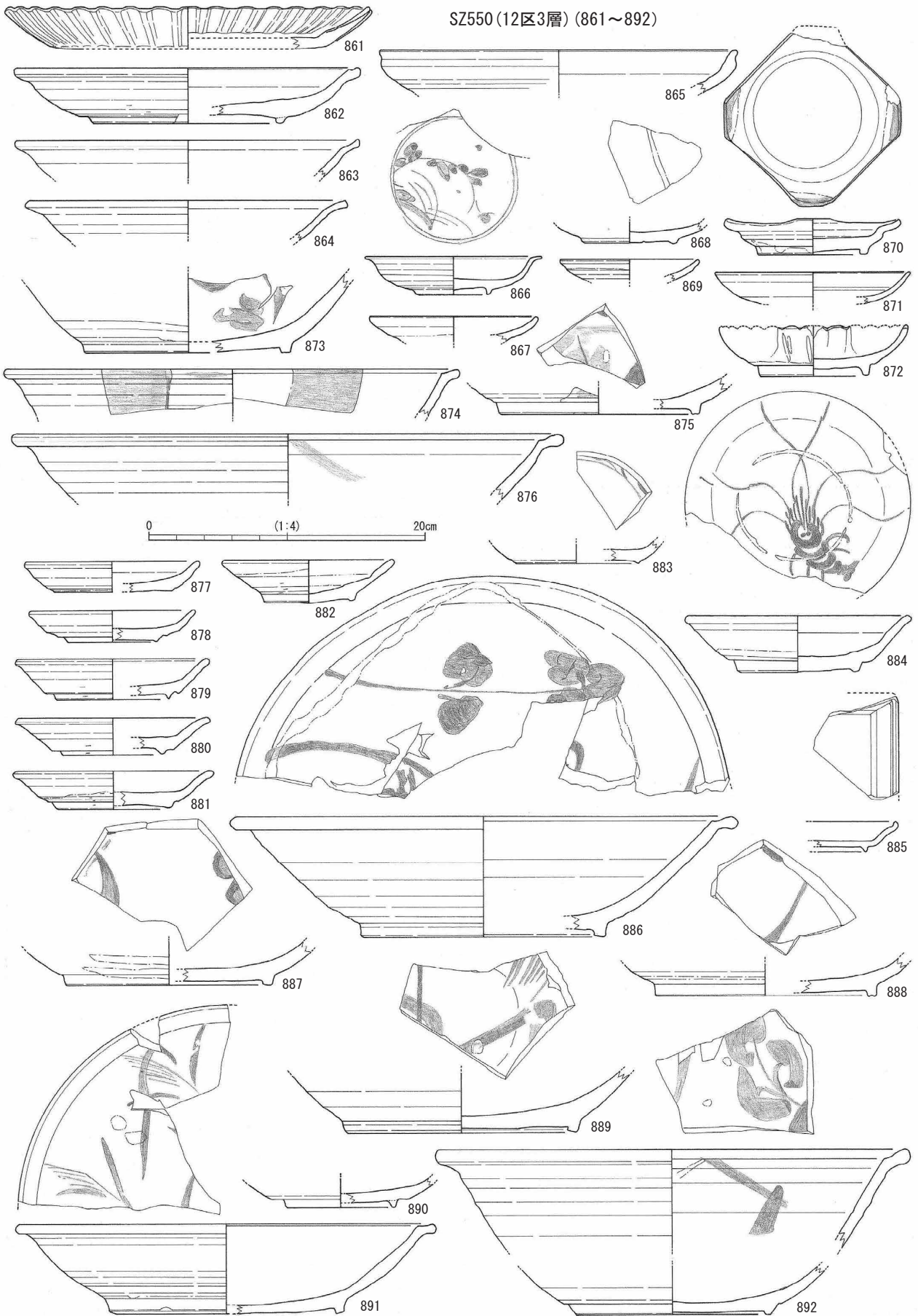


SZ550 (12区3層) (792~860)

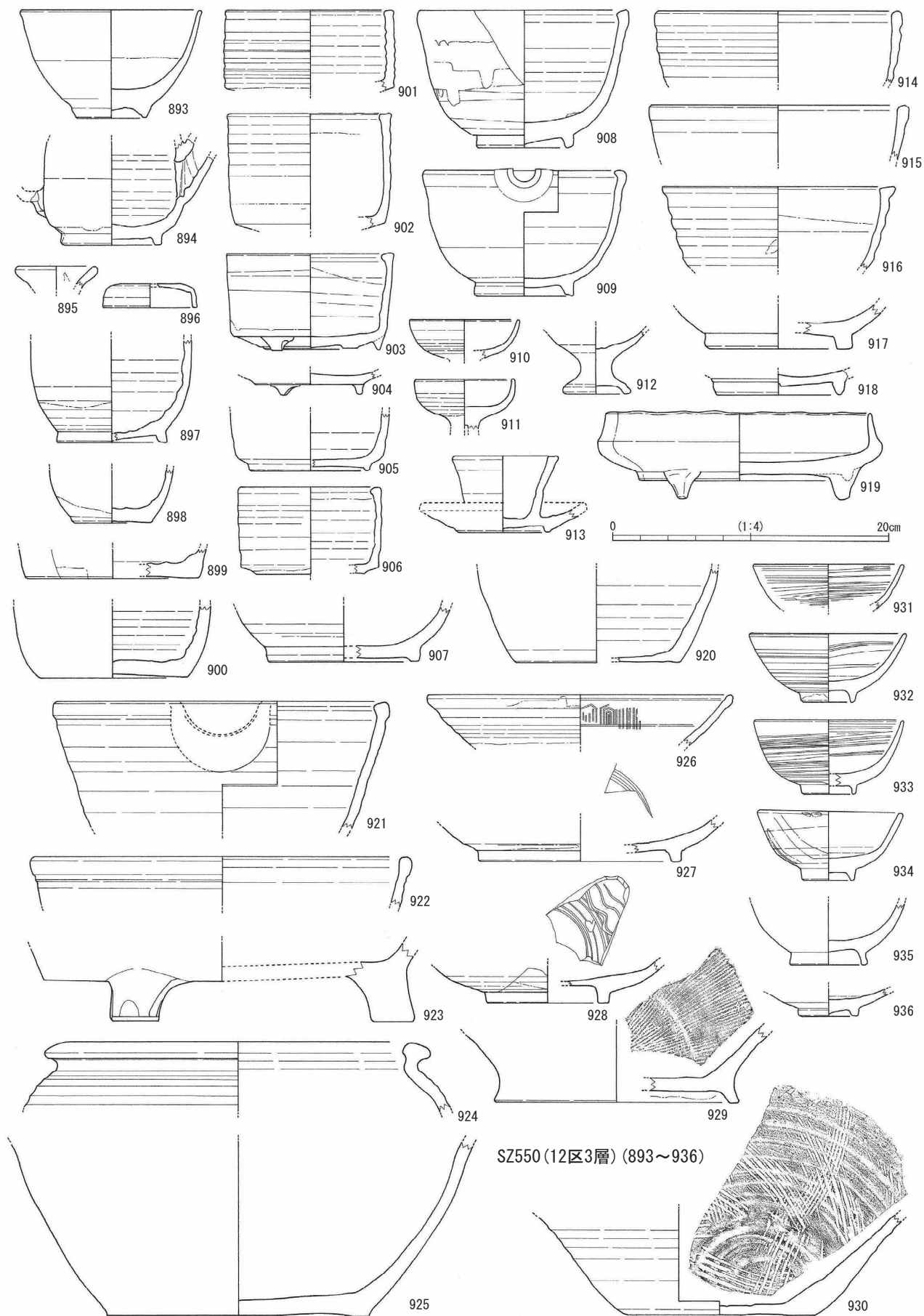
第57図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)



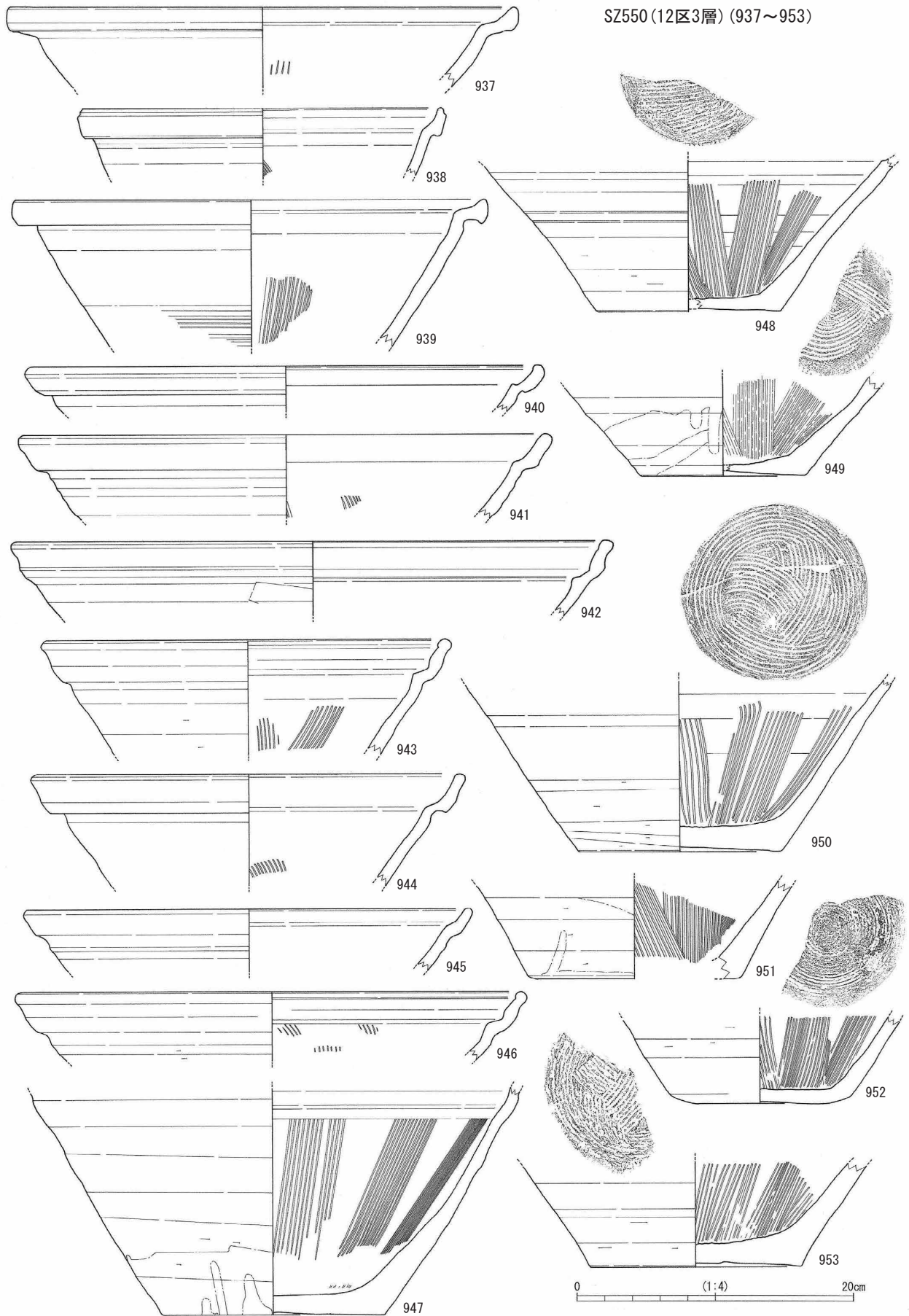
SZ550 (12区3層) (861~892)



第58図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)

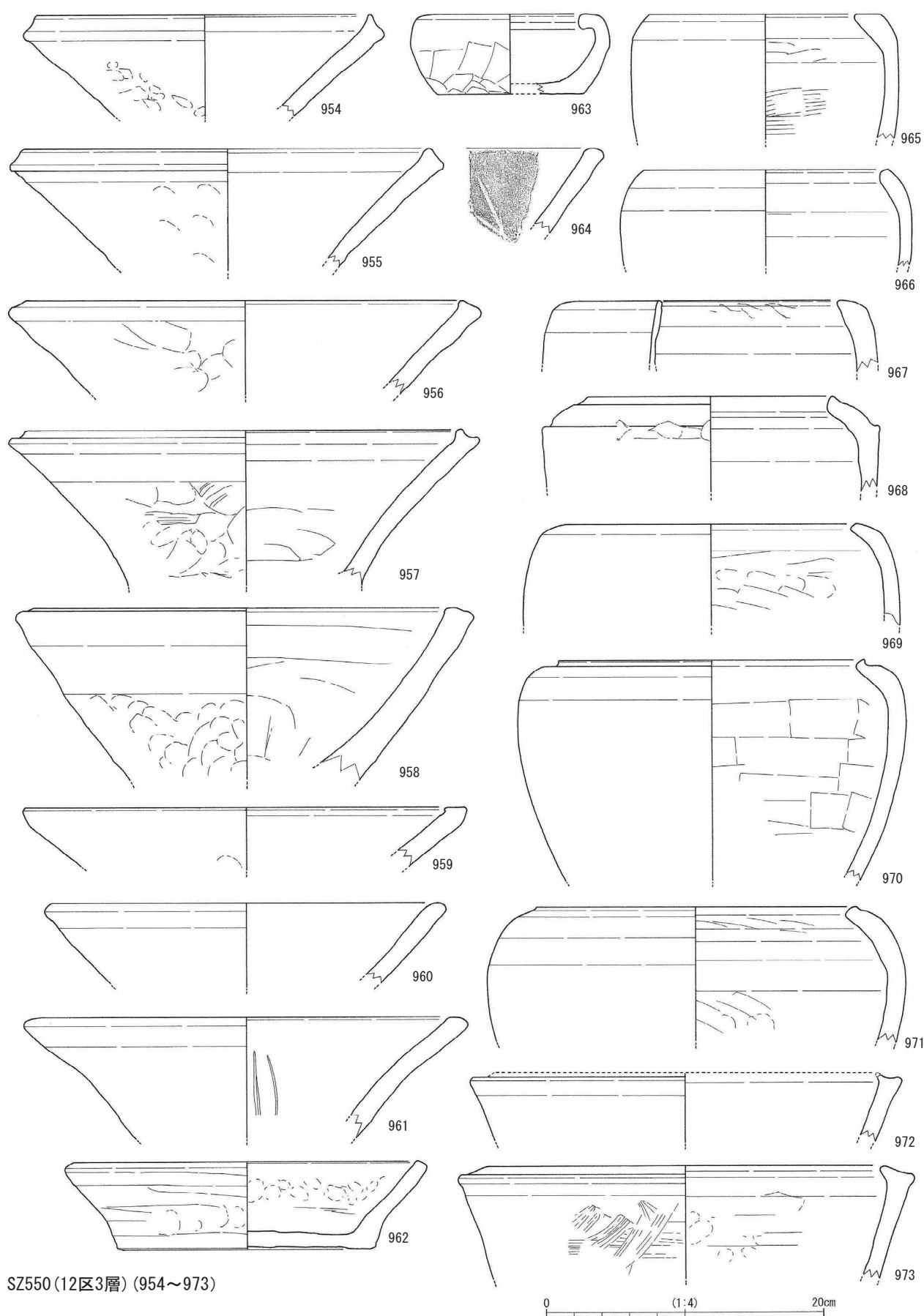


第59図 第5次調査出土遺物④ SZ550 (1:4)



第60図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)

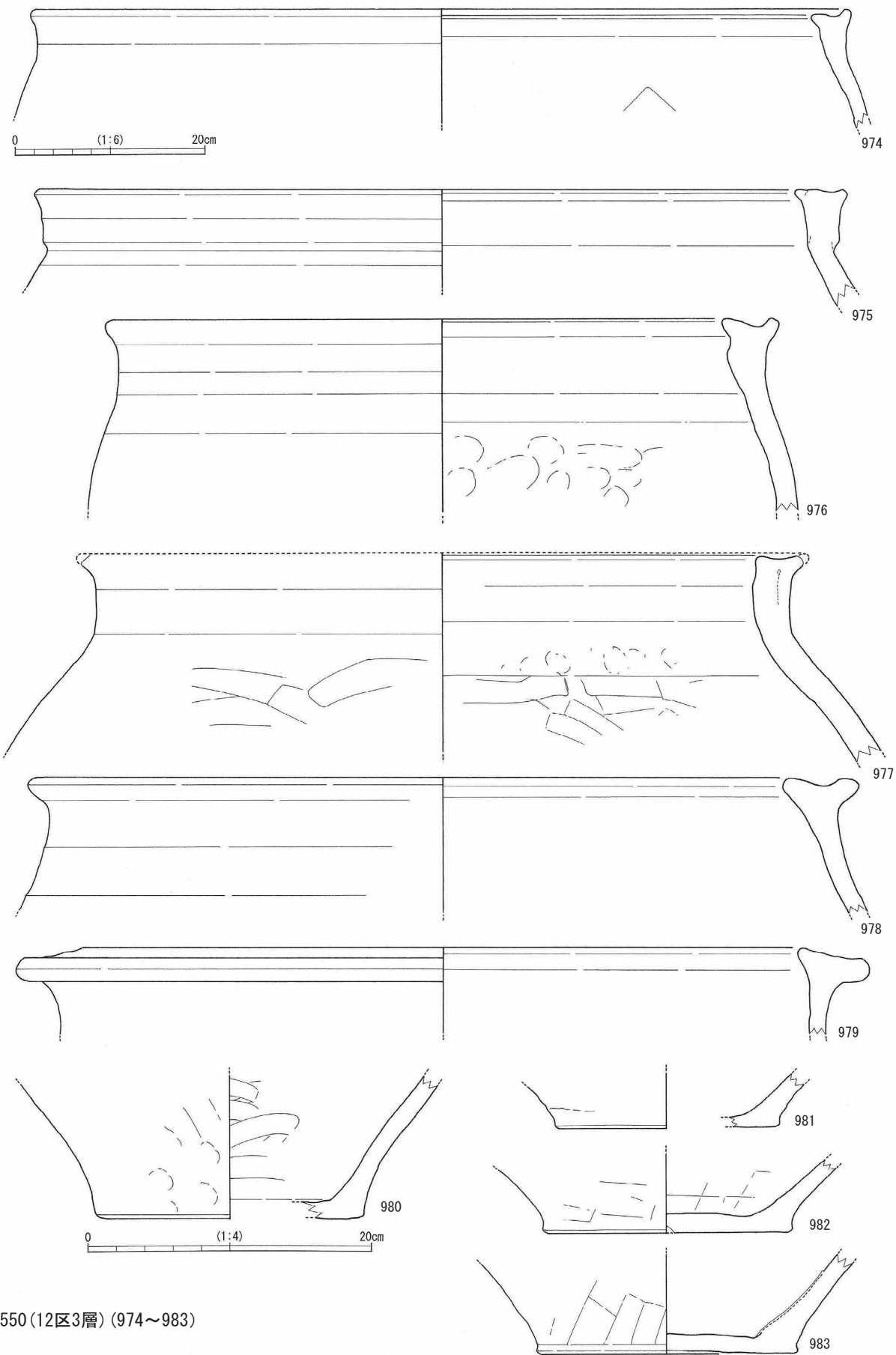




SZ550 (12区3層) (954~973)

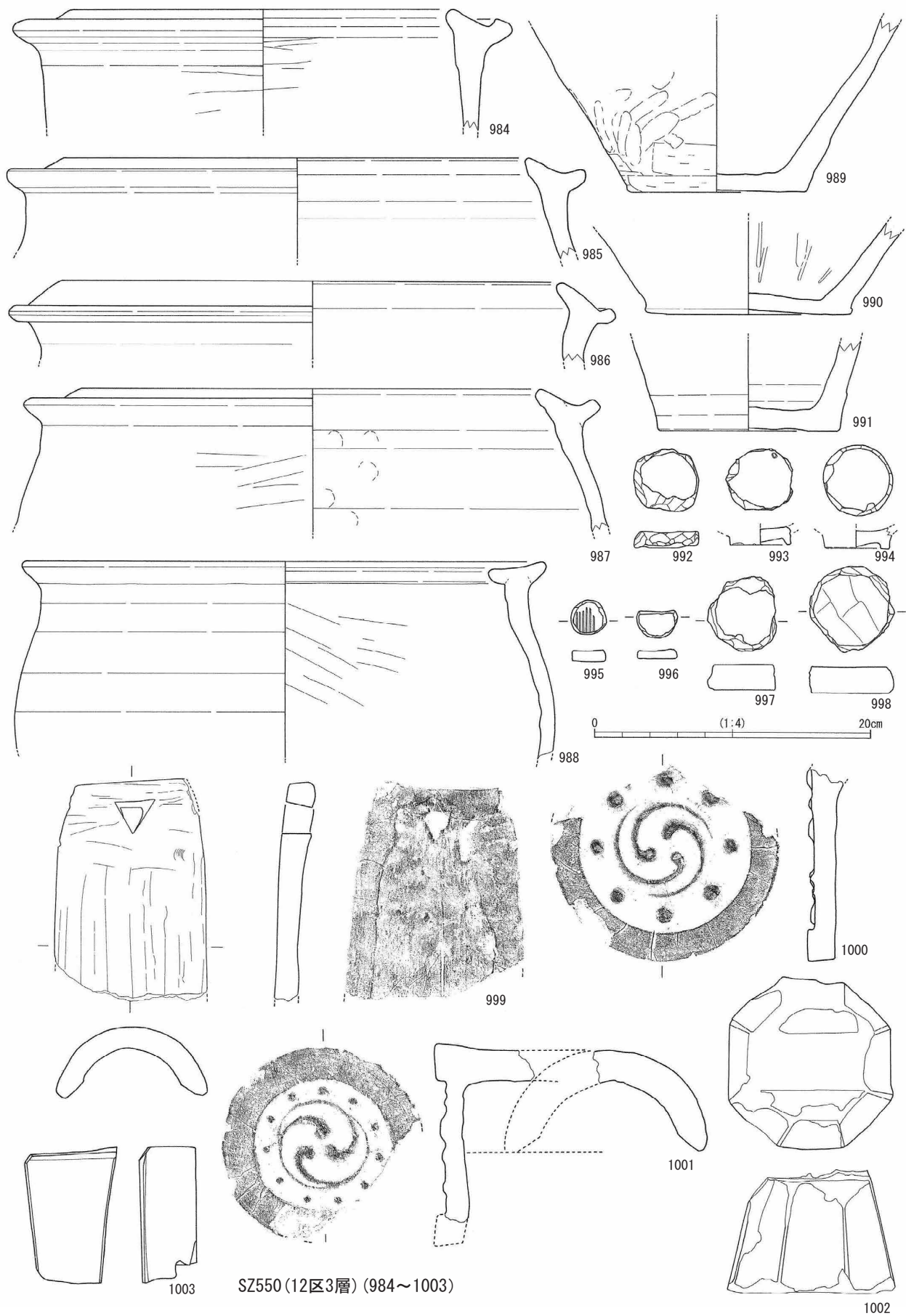
第61図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)



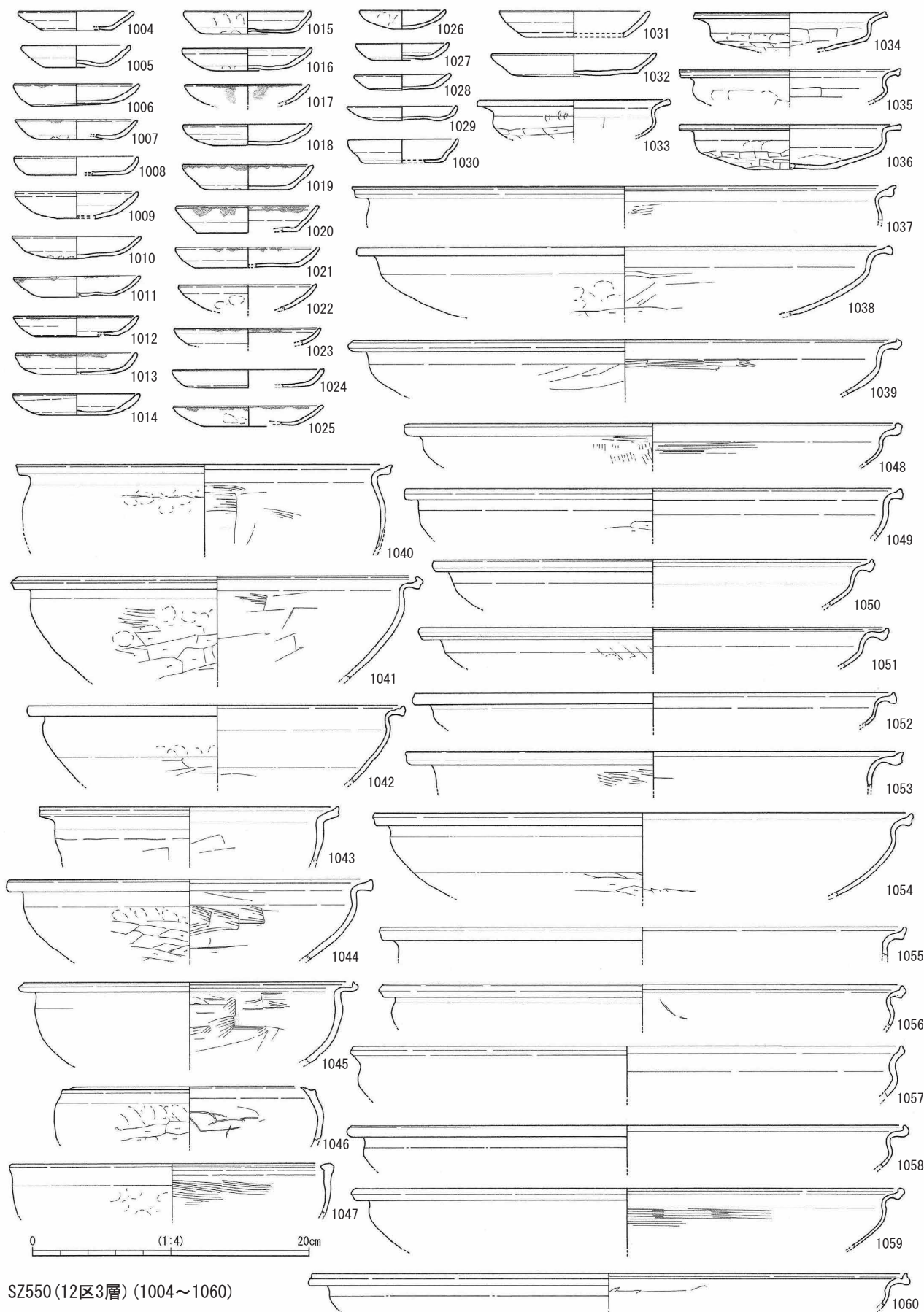


SZ550 (12区3層) (974~983)

第62図 第5次調査出土遺物⑦ SZ550 (1:4、974は1:6)

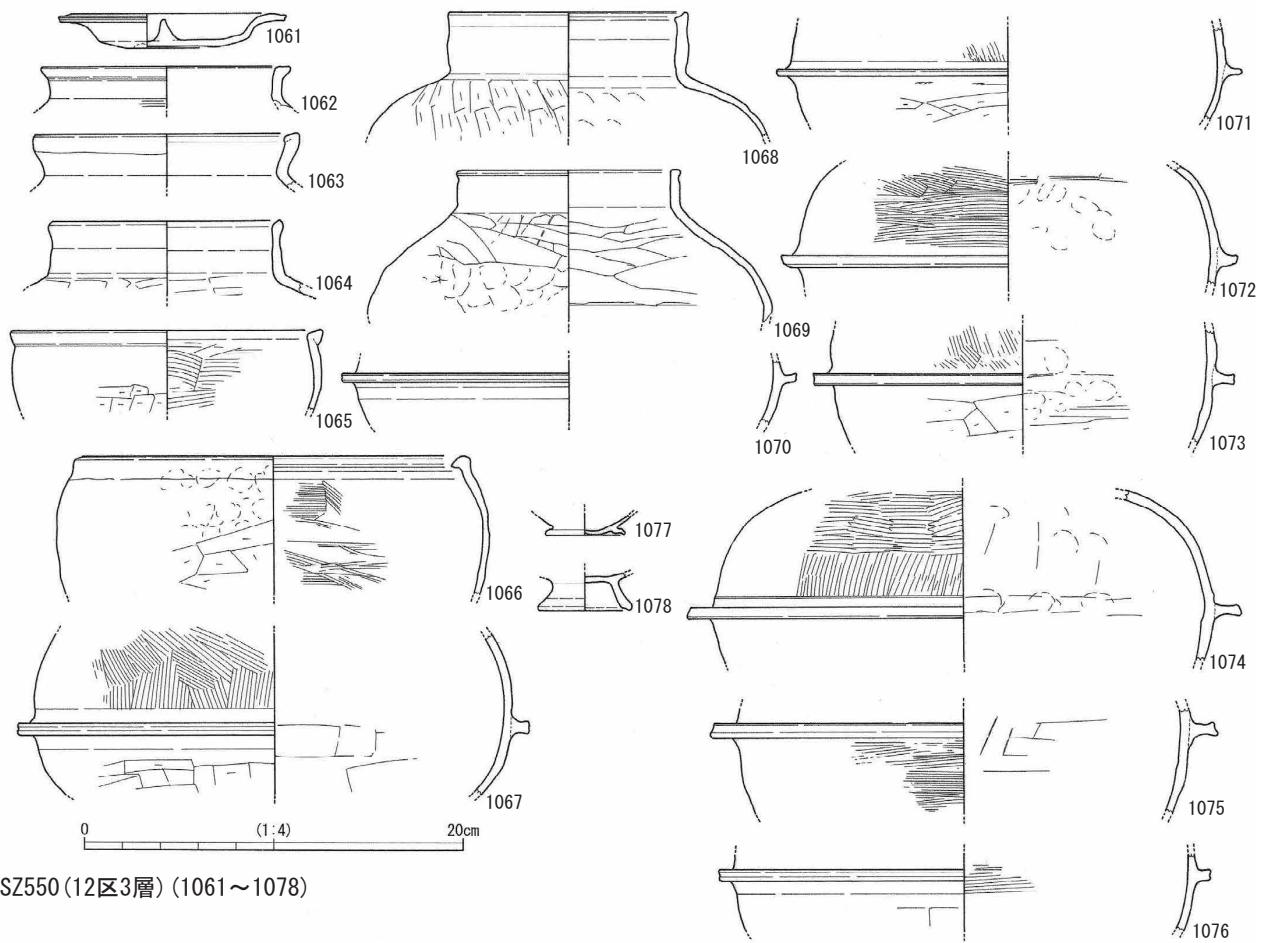


第63図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)

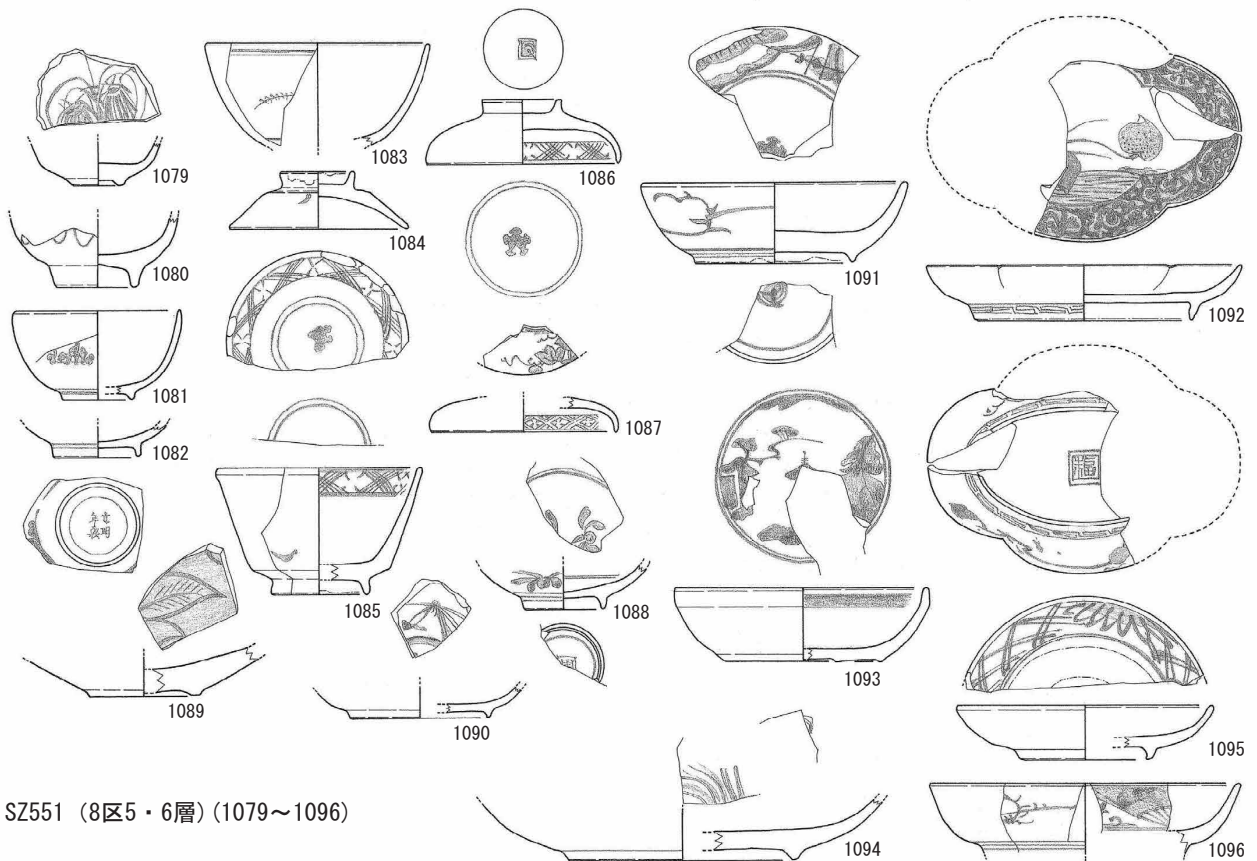


SZ550 (12区3層) (1004~1060)

第64図 第5次調査出土遺物② SZ550 (1:4)



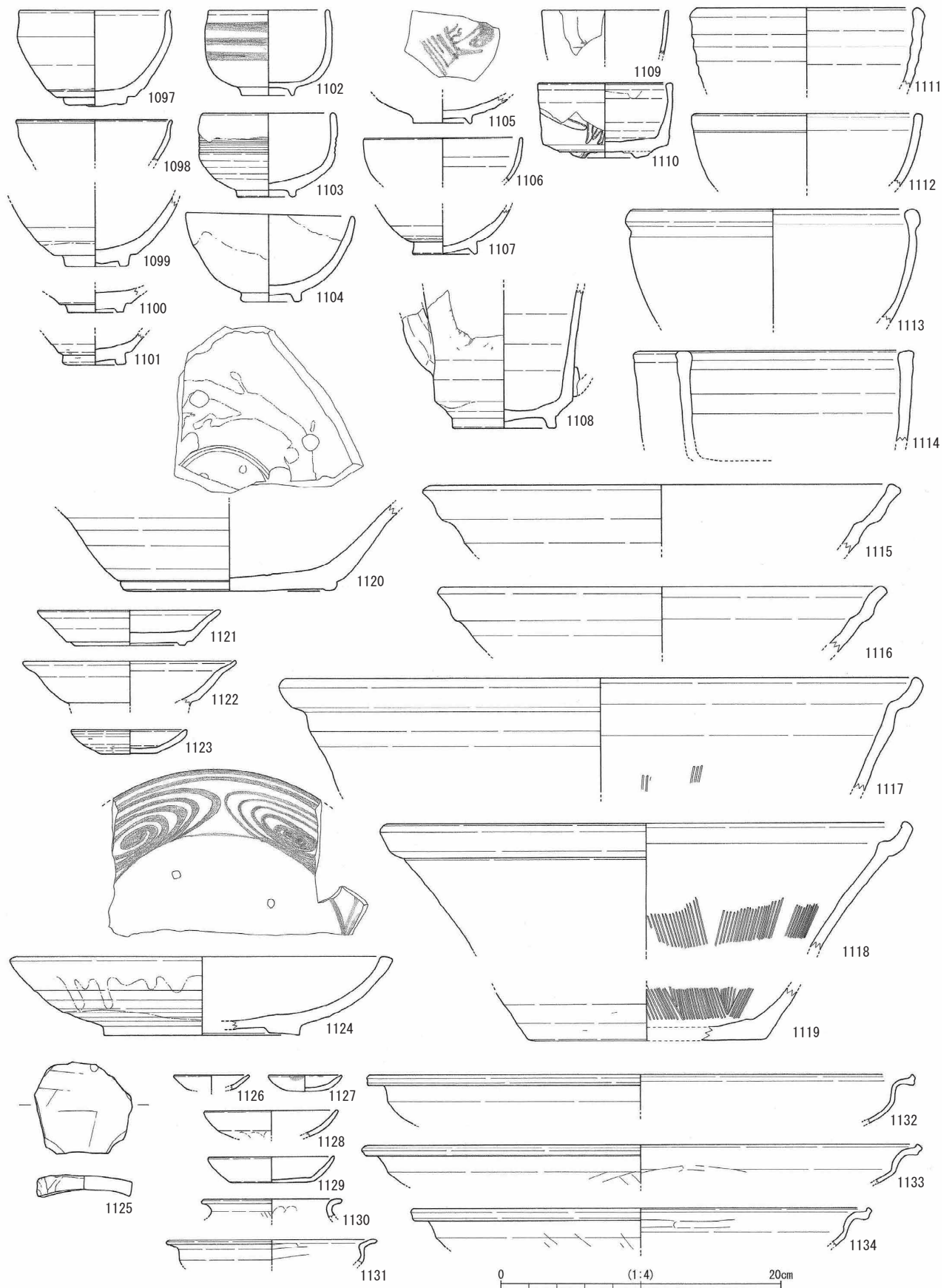
SZ550 (12区3層) (1061~1078)



SZ551 (8区5・6層) (1079~1096)

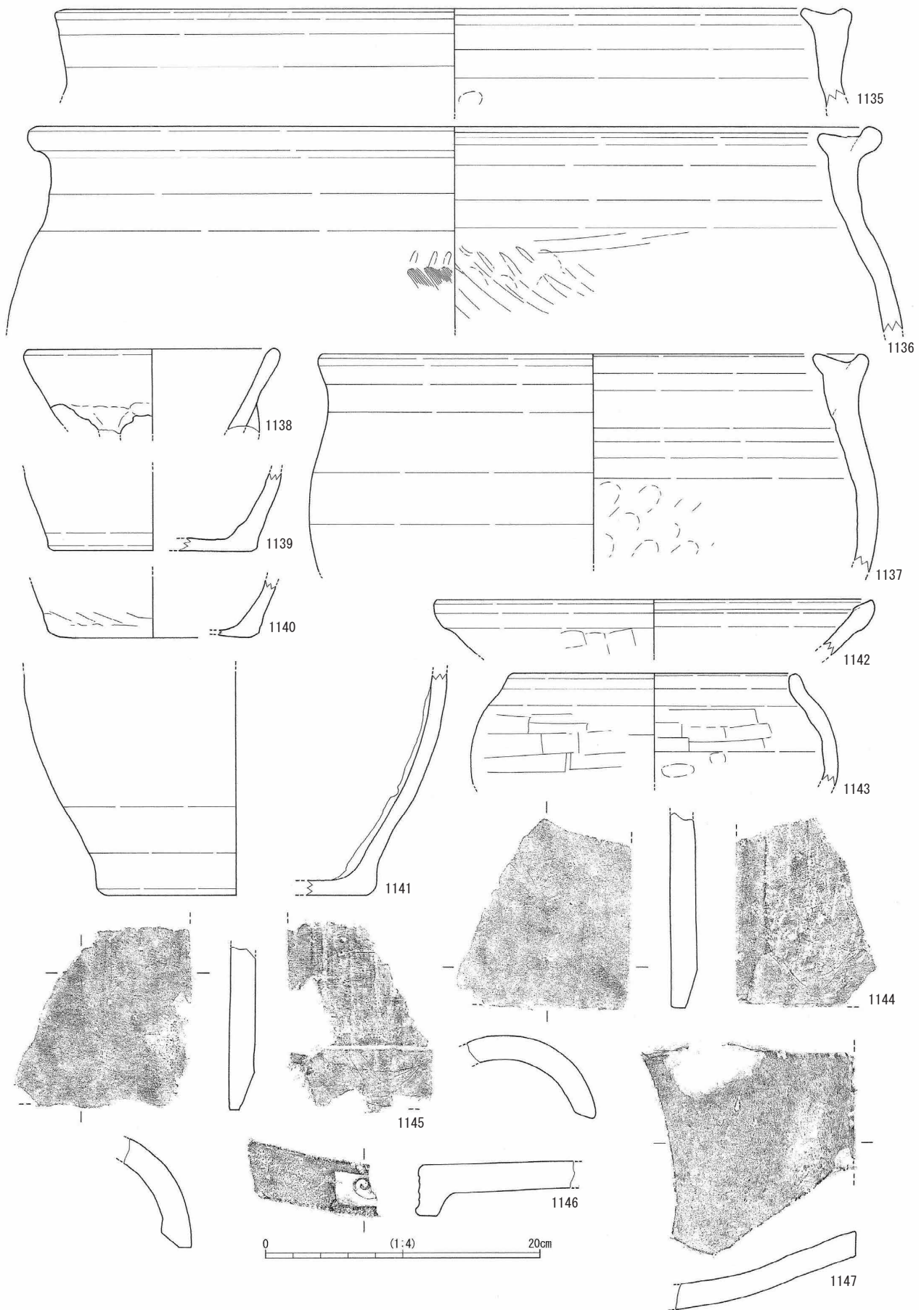
第65図 第5次調査出土遺物⑩ SZ550・SZ551 (1:4)



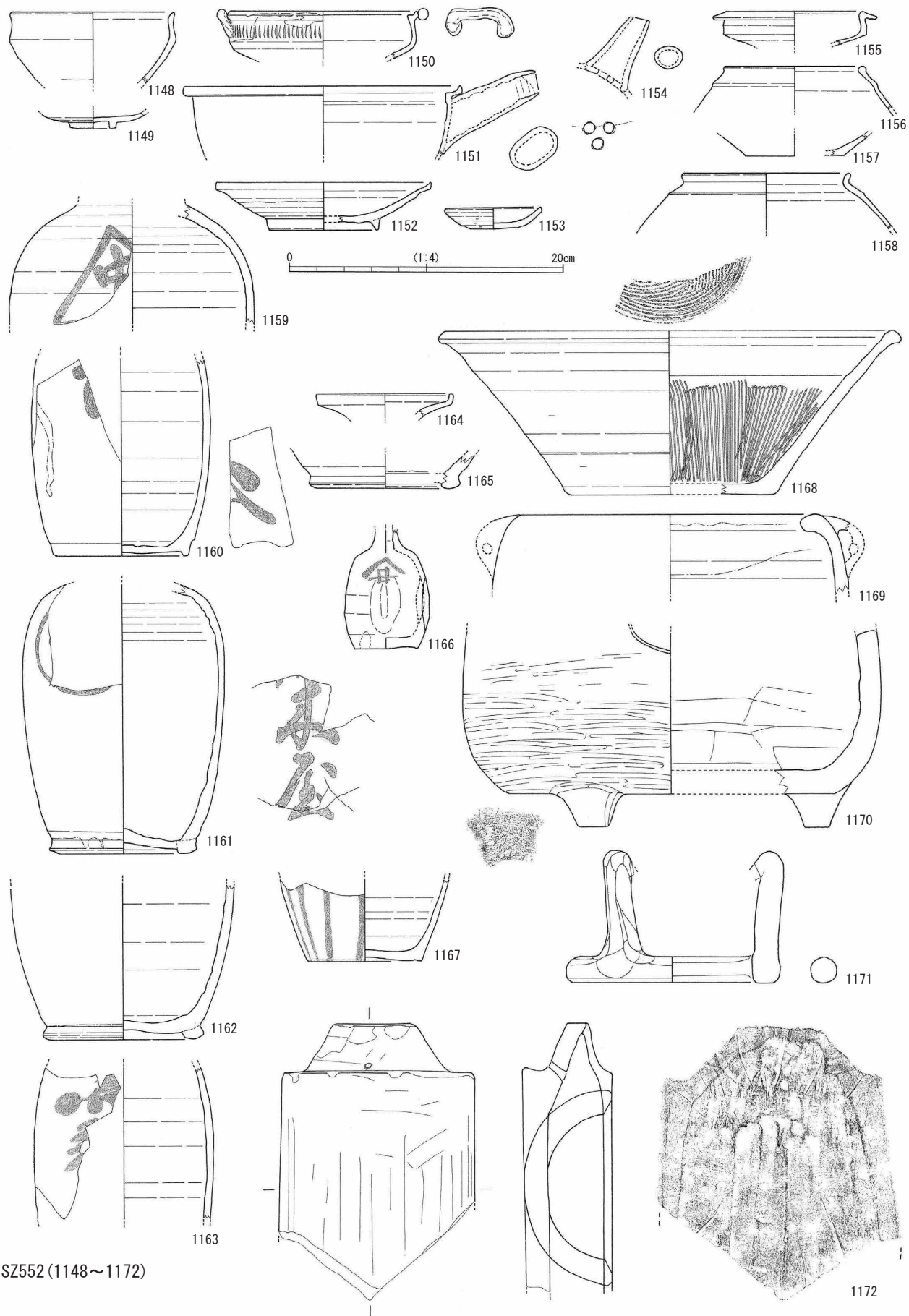


SZ551 (8区5・6層) (1097~1134)

第66図 第5次調査出土遺物③ SZ551 (1:4)



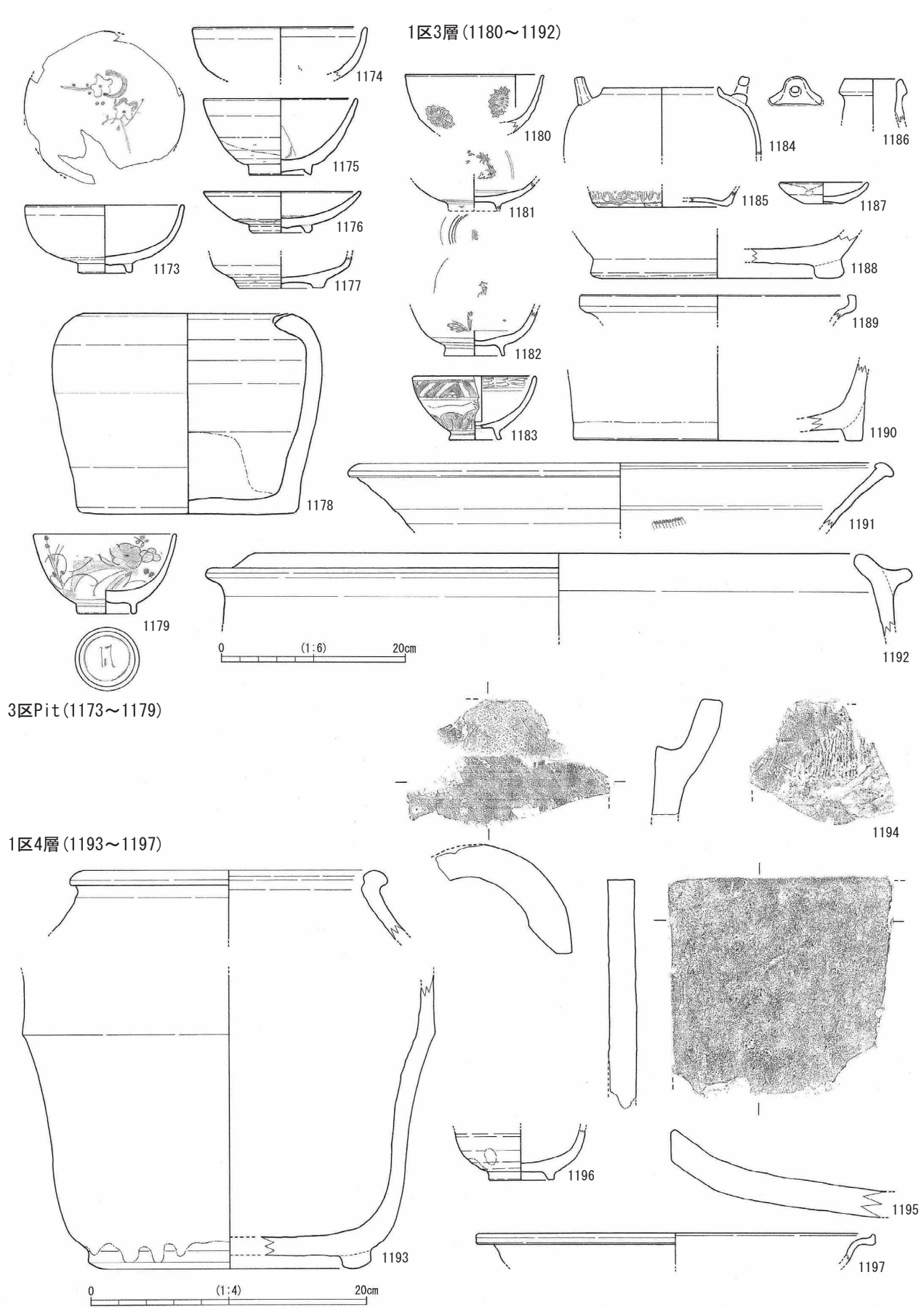
第67図 第5次調査出土遺物② SZ551 (1:4)



SZ552 (1148~1172)

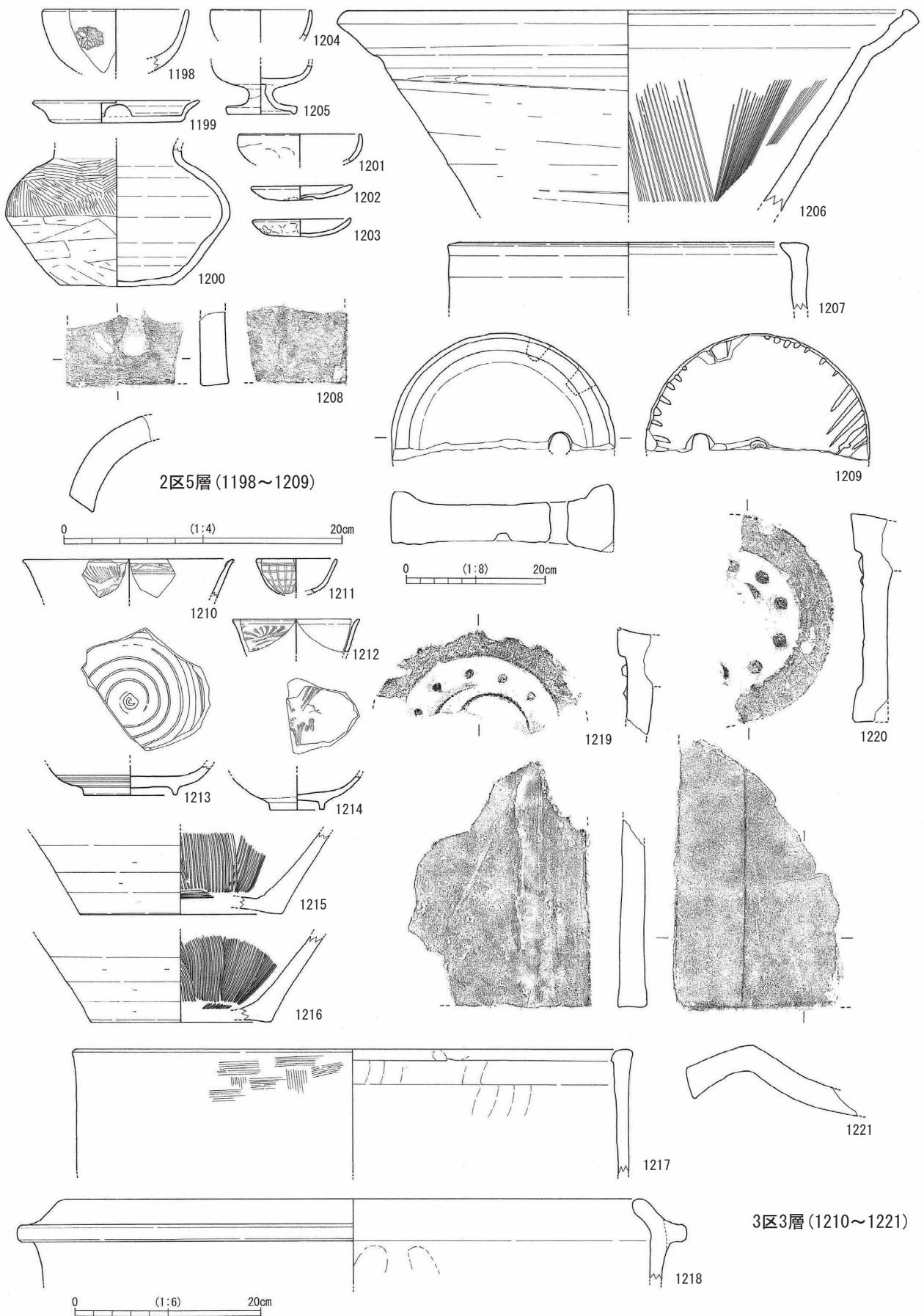
第68図 第5次調査出土遺物③ SZ552 (1:4)



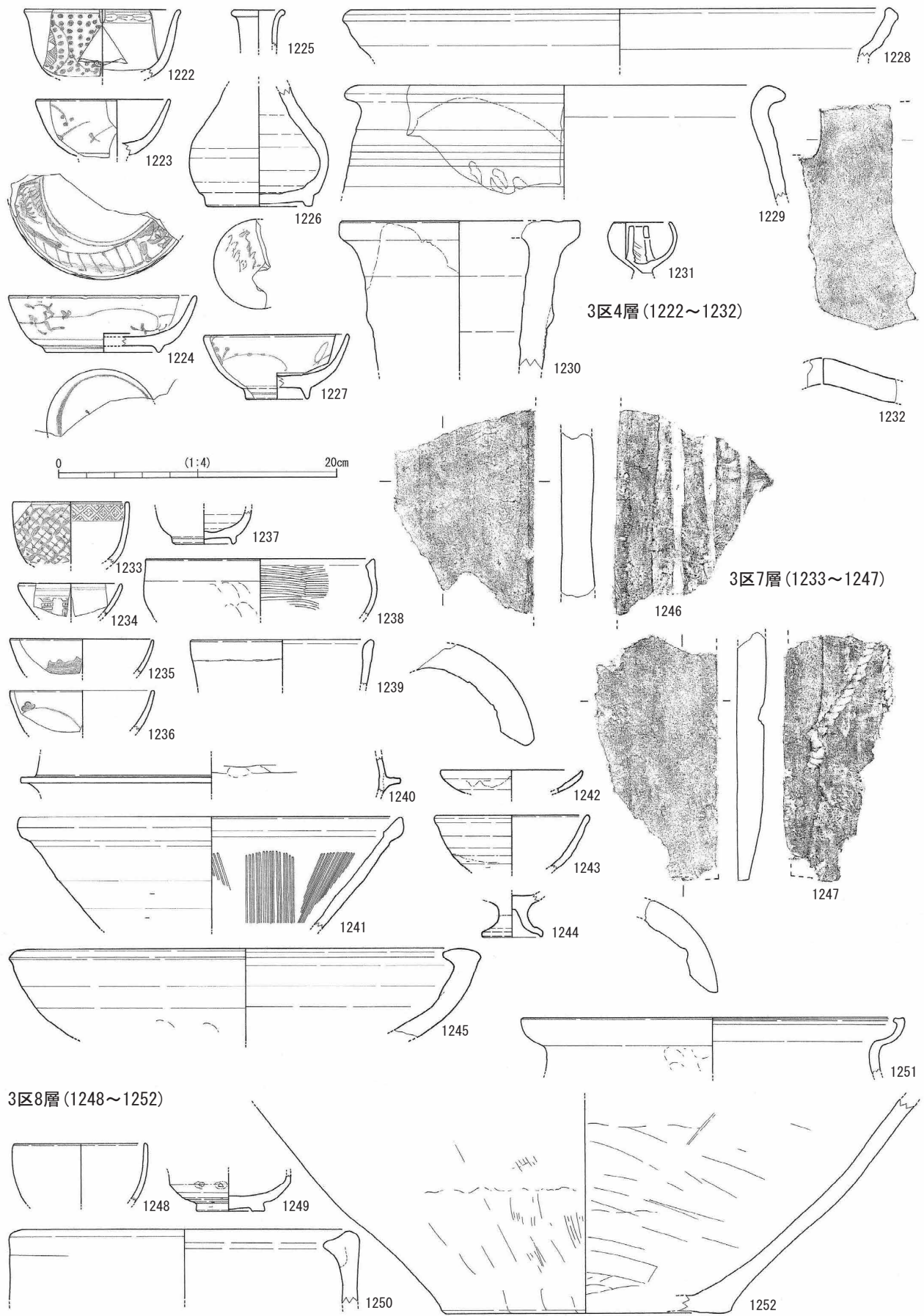


第69図 第5次調査出土遺物③ 3区Pit・1区整地層等 (1:4、1192は1:6)



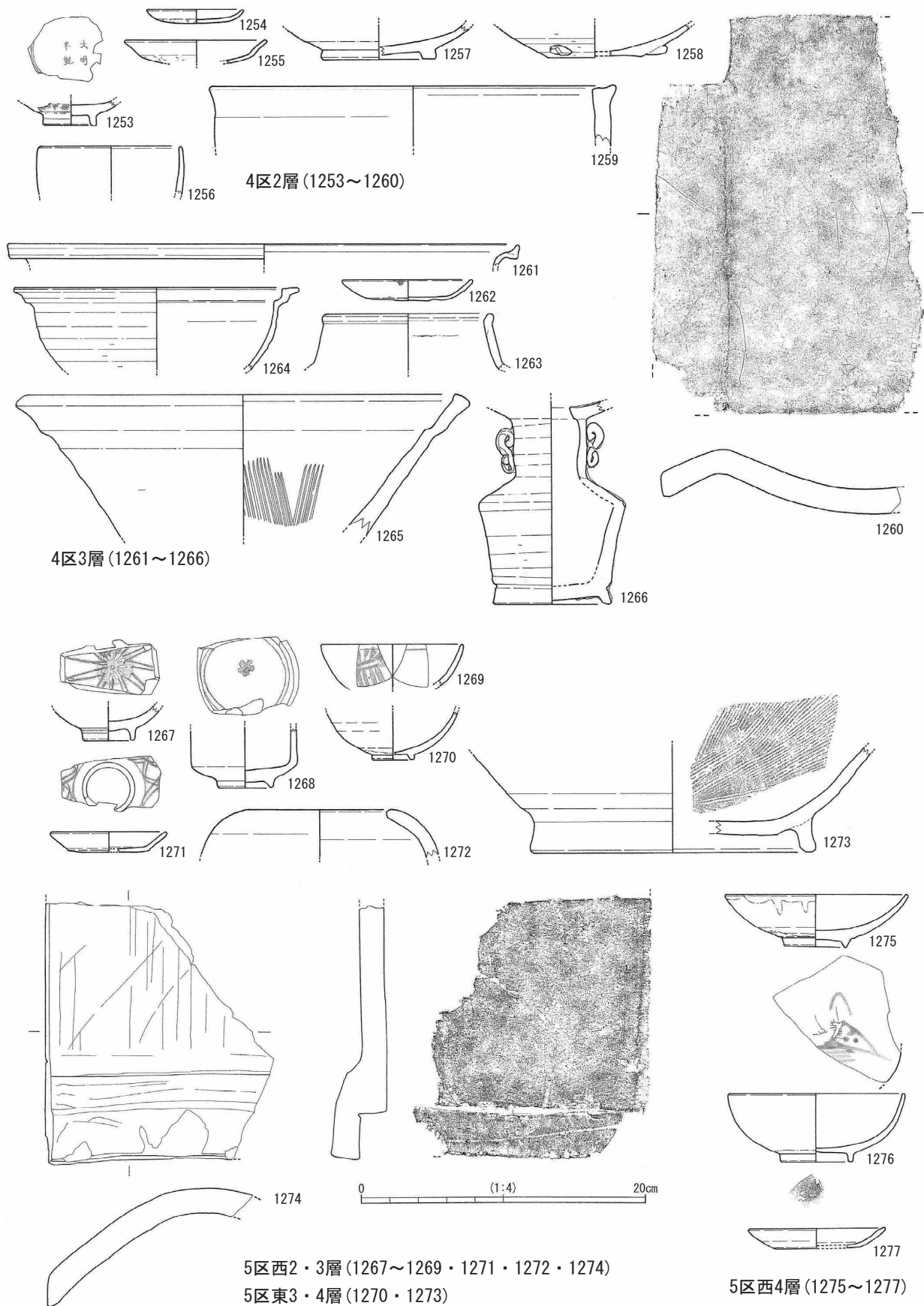


第70図 第5次調査出土遺物③ 2区・3区整地層等 (1:4、1217・1218は1:6、1209は1:8)



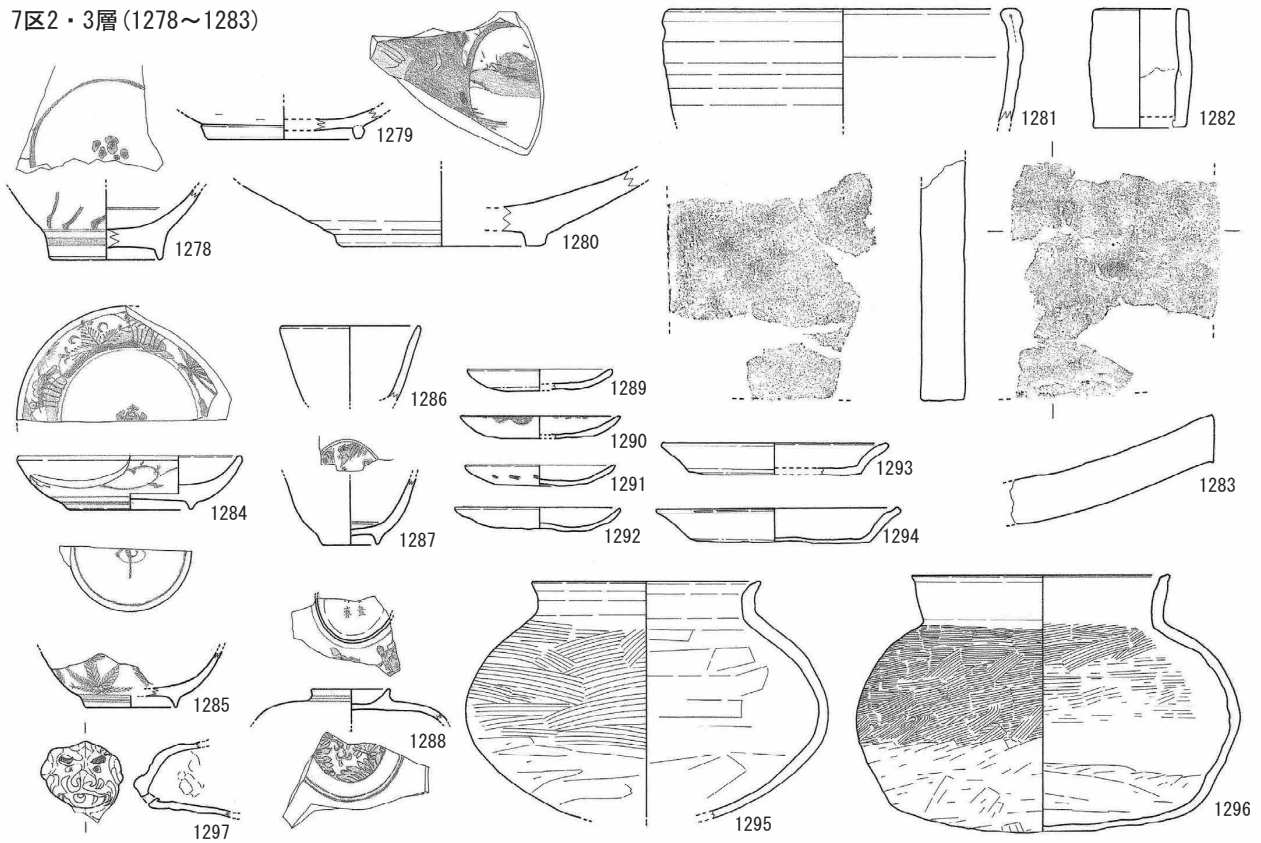
第71図 第5次調査出土遺物③ 3区整地層等 (1:4)



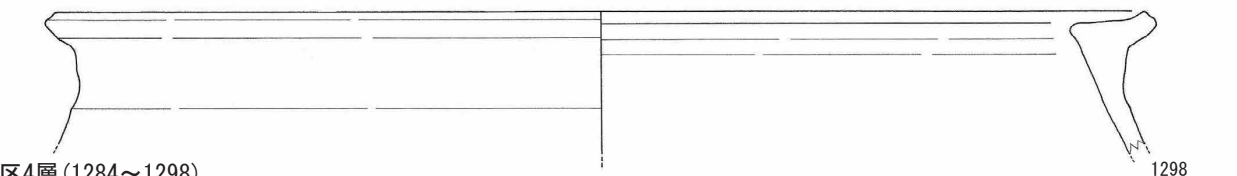


第72図 第5次調査出土遺物⑦ 4区・5区整地層等 (1:4)

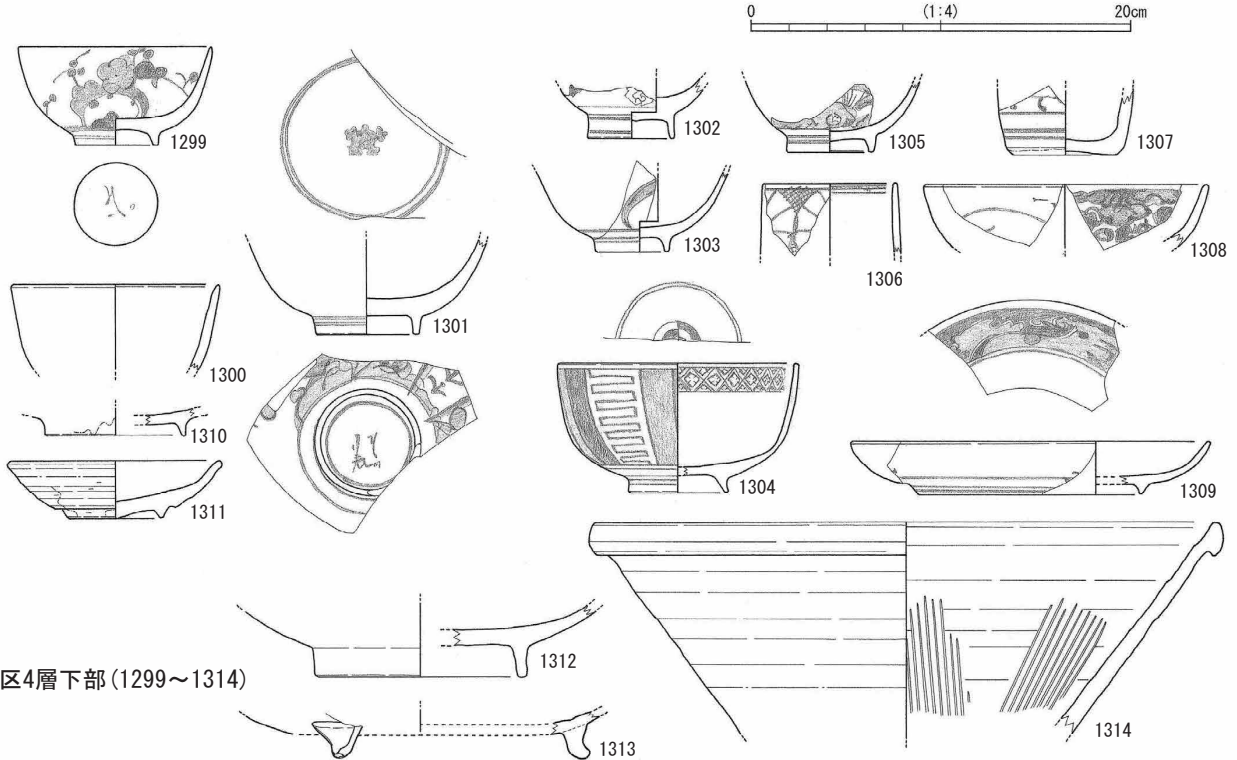
7区2・3層(1278~1283)



8区4層(1284~1298)

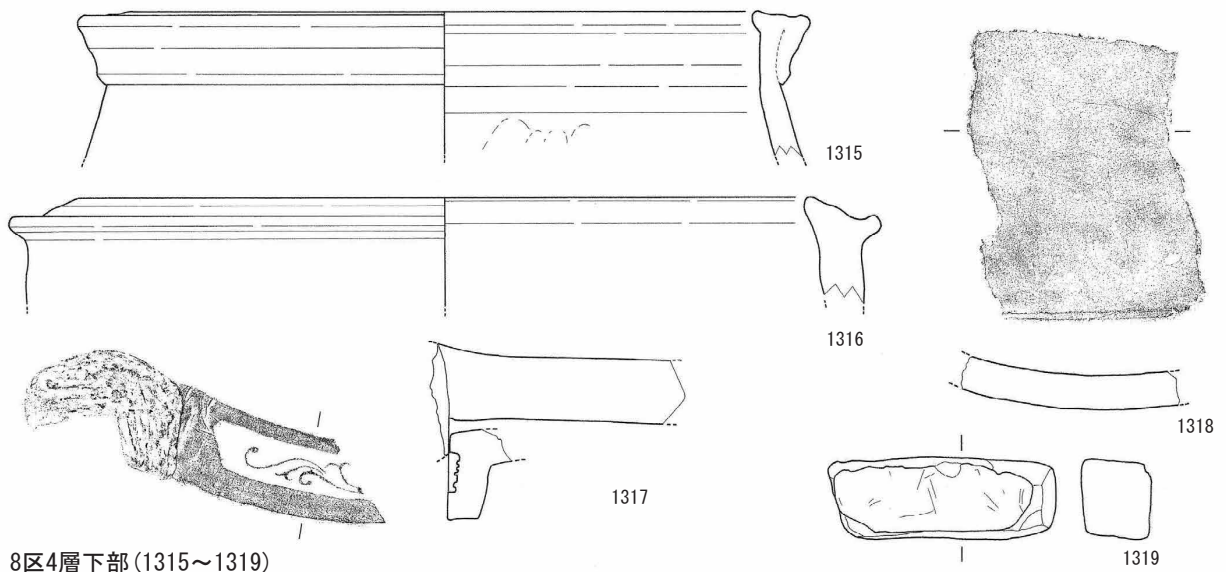


8区4層下部(1299~1314)

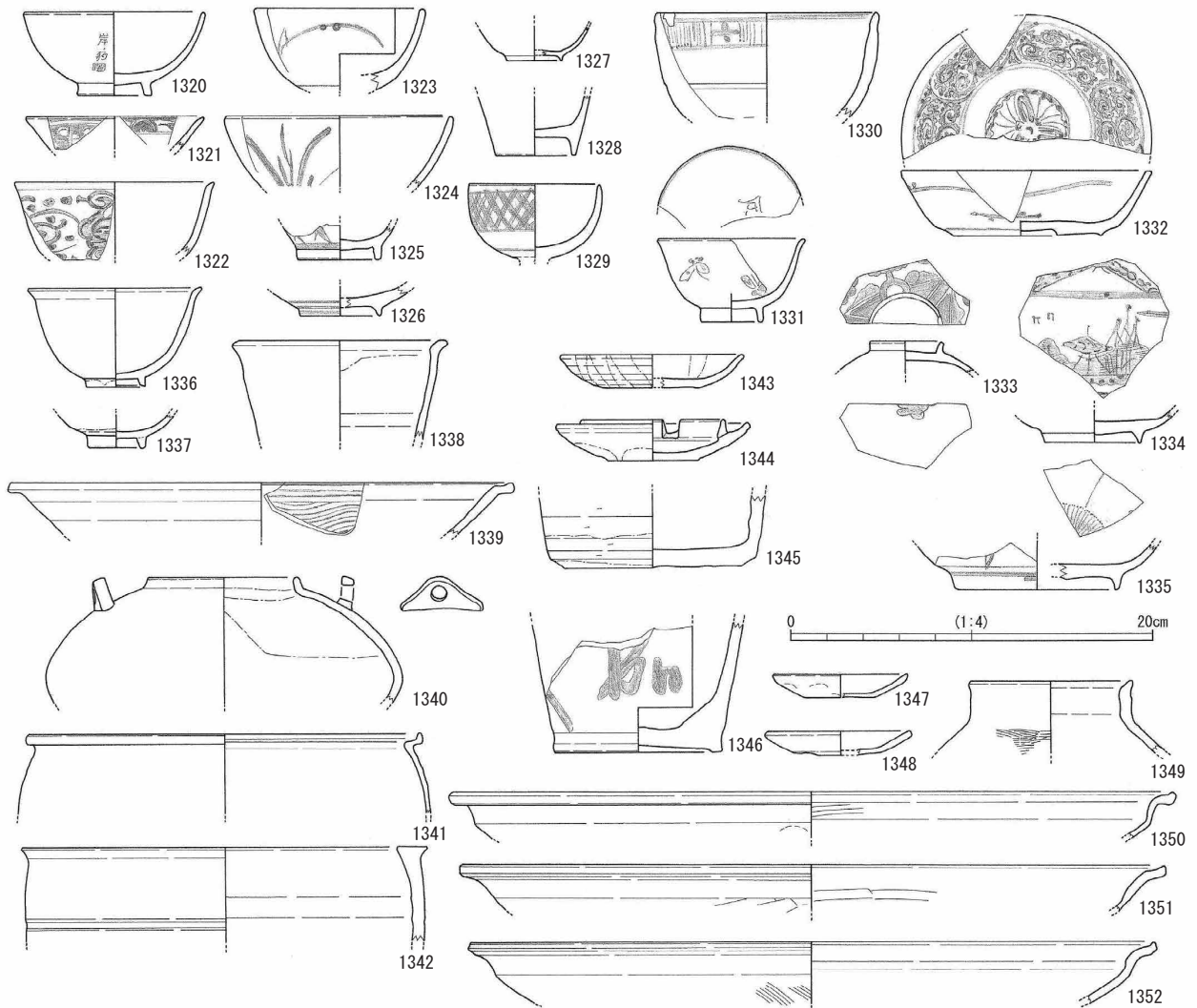


第73図 第5次調査出土遺物③ 7区・8区整地層等 (1:4)



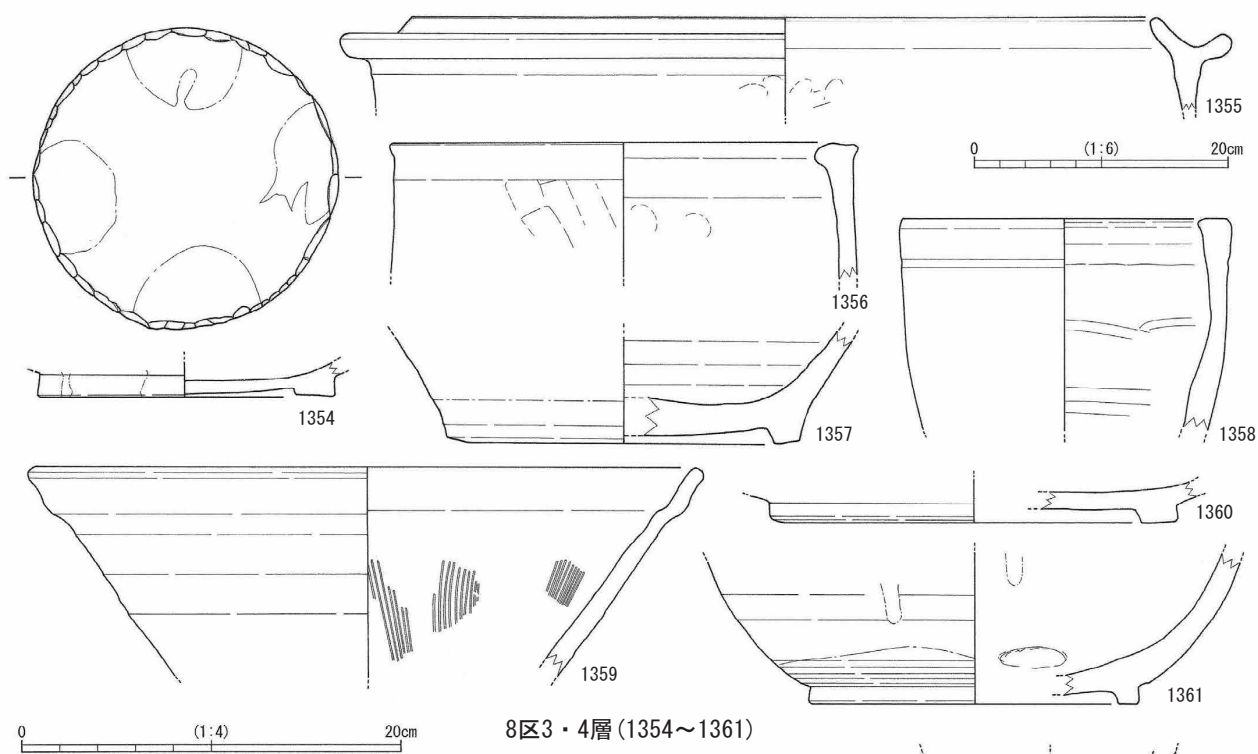


8区4層下部 (1315~1319)

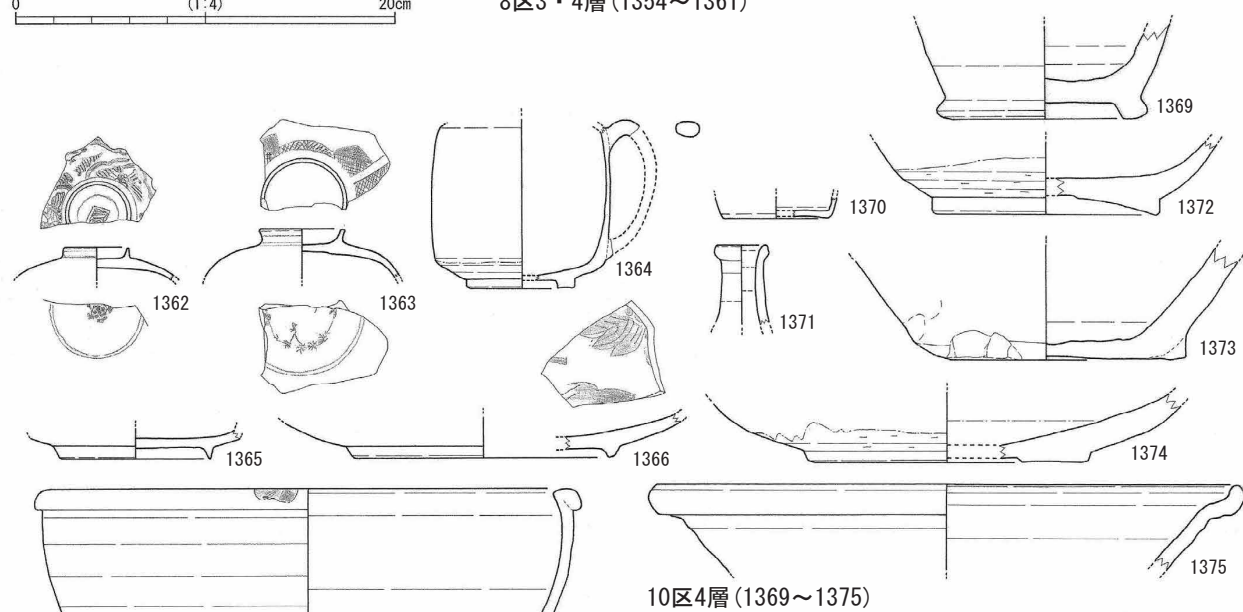


8区・4層 (1320~1353)

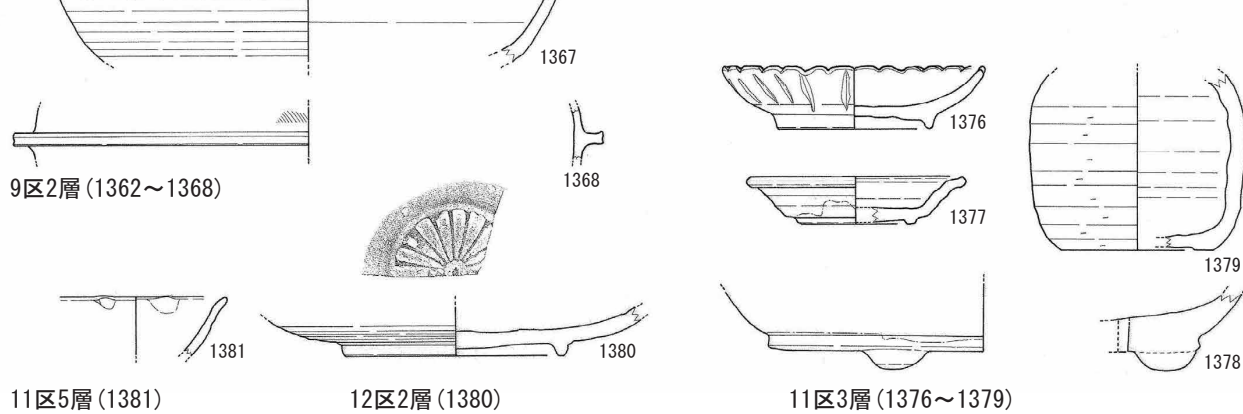
第74図 第5次調査出土遺物⑨ 8区整地層等 (1:4)



8区3・4層(1354~1361)



10区4層(1369~1375)



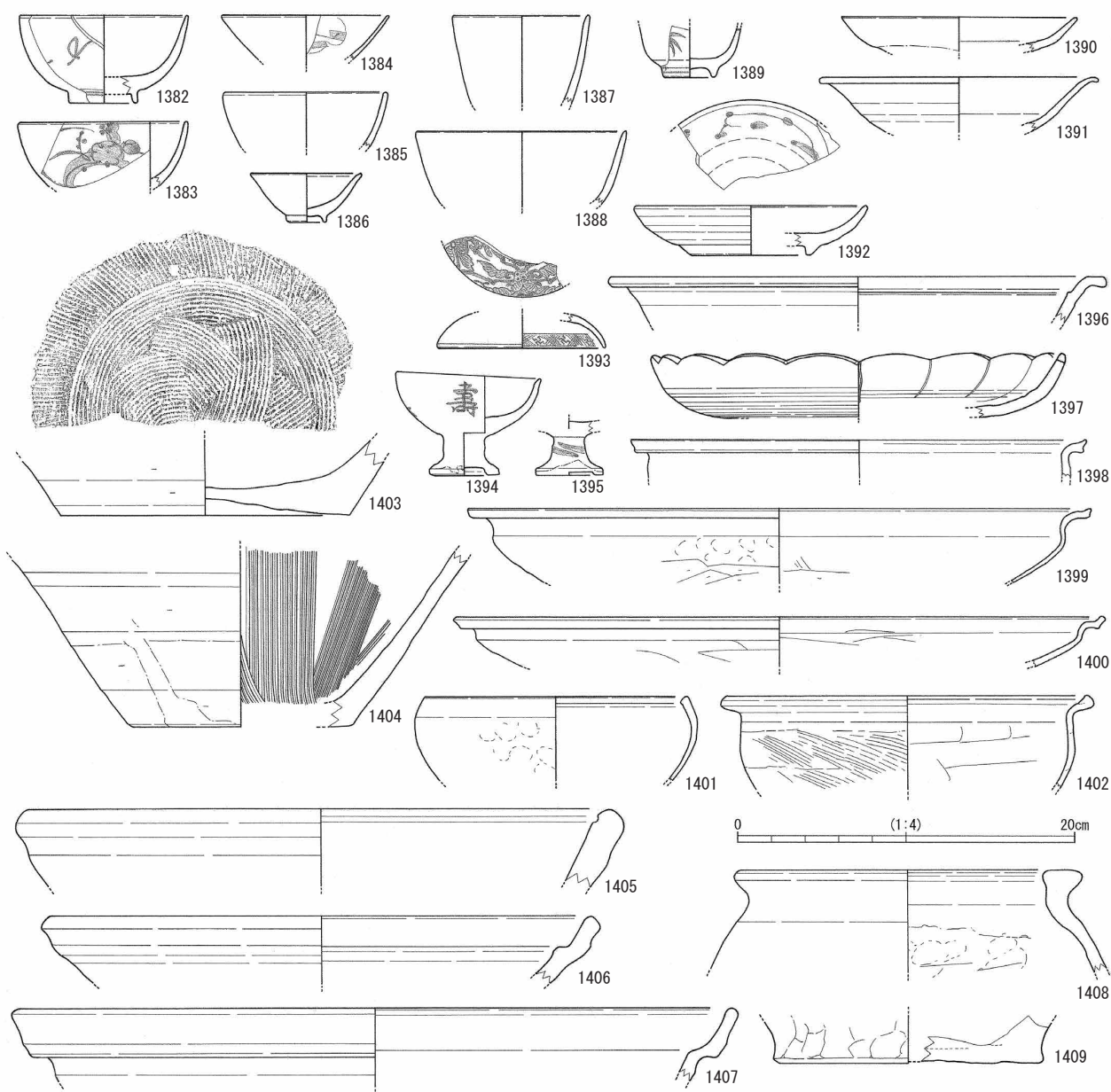
9区2層(1362~1368)

11区5層(1381)

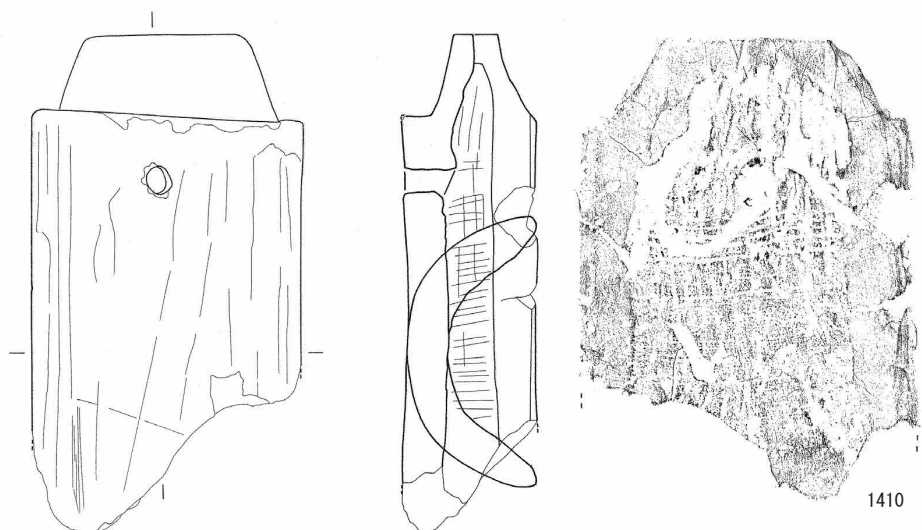
12区2層(1380)

11区3層(1376~1379)

第75図 第5次調査出土遺物④ 8~12区整地層等 (1:4、1355は1:6)

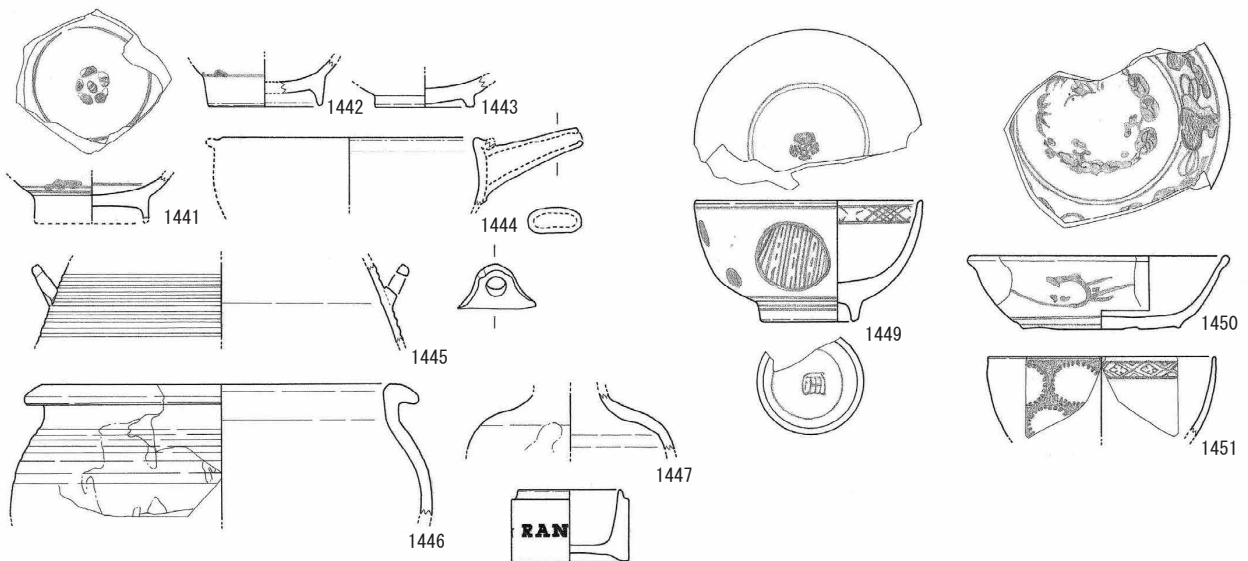
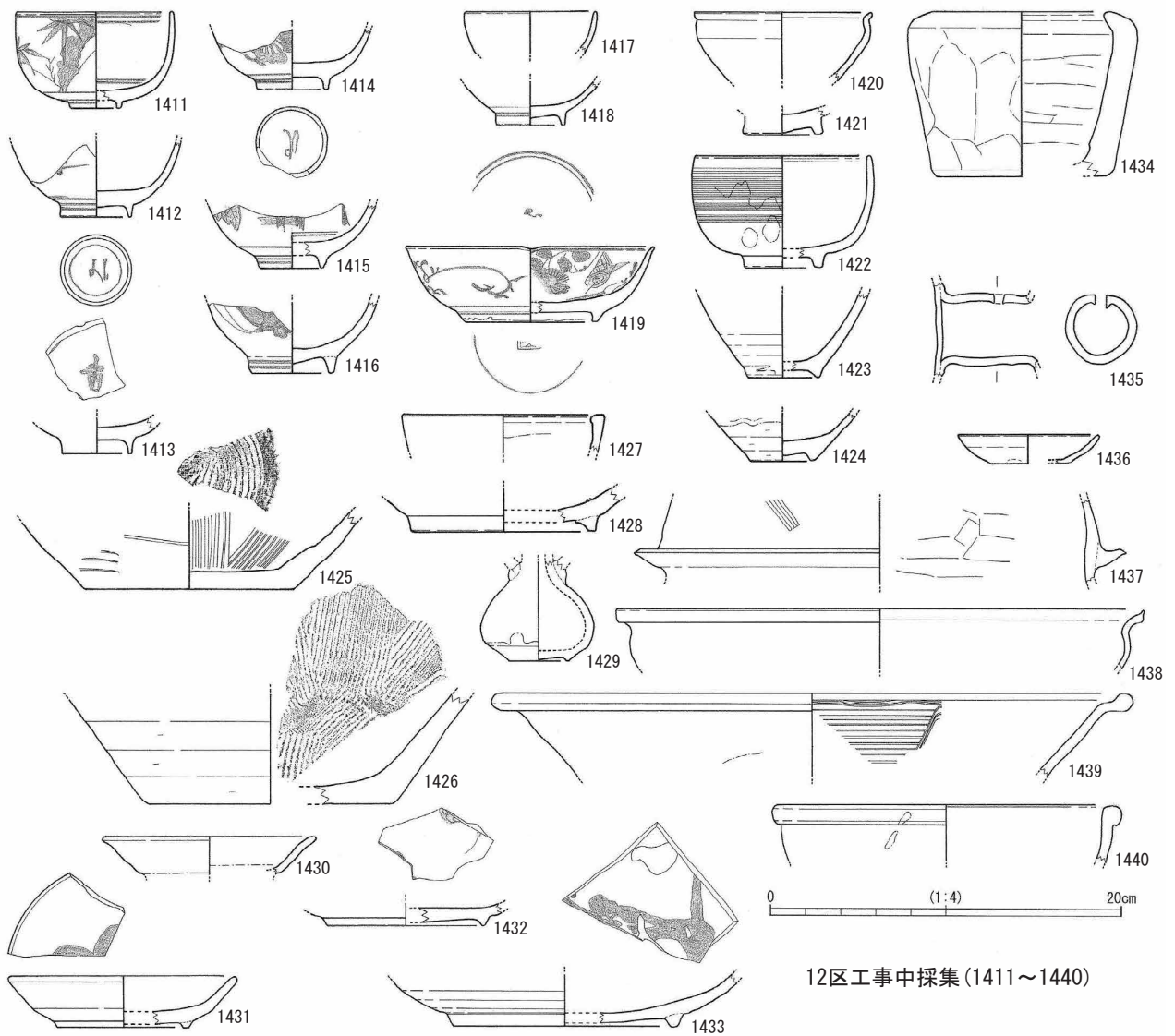


12区2層 (1382~1410)



第76図 第5次調査出土遺物④ 12区整地層等 (1:4)



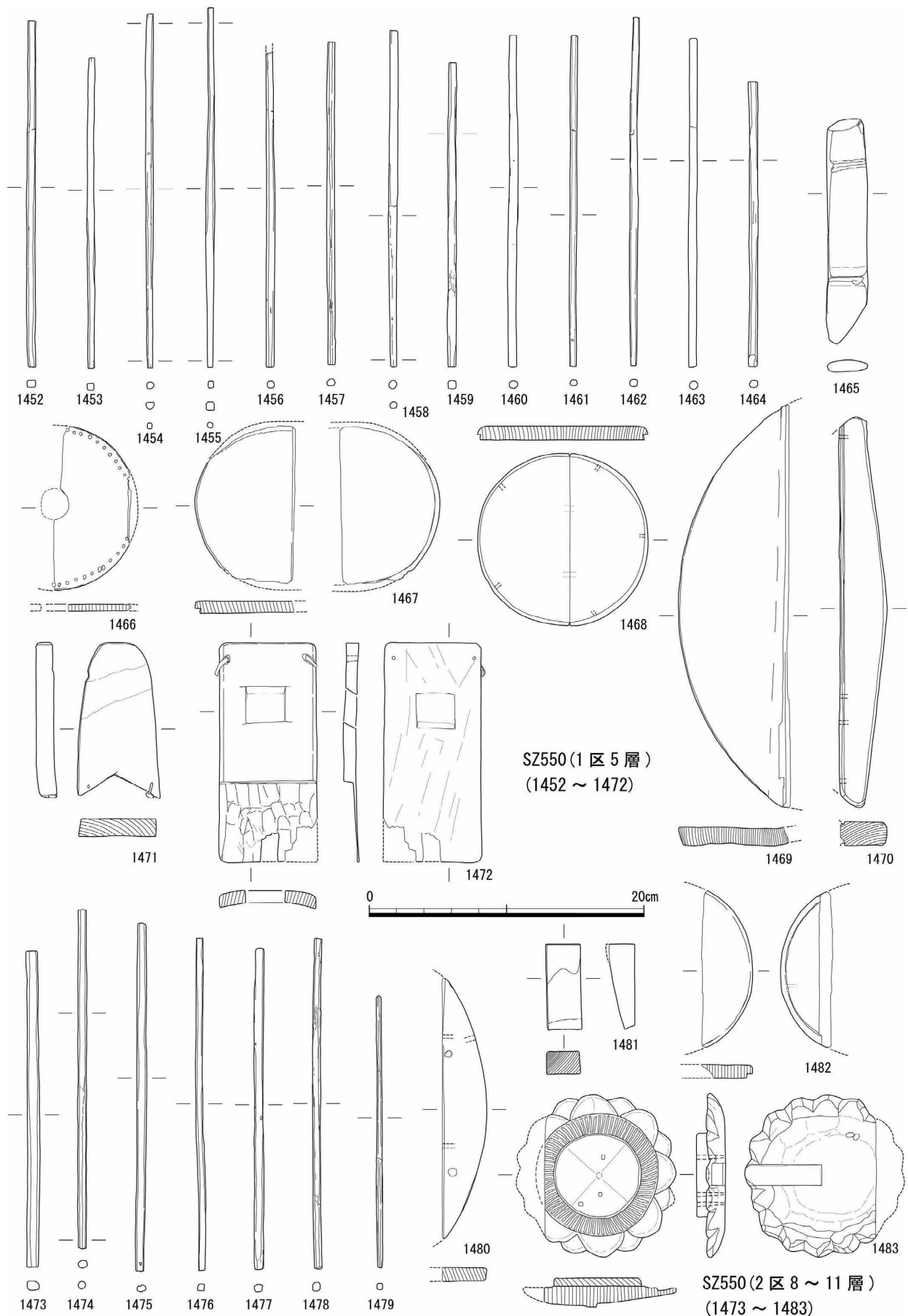


攪乱・その他(1441~1451)

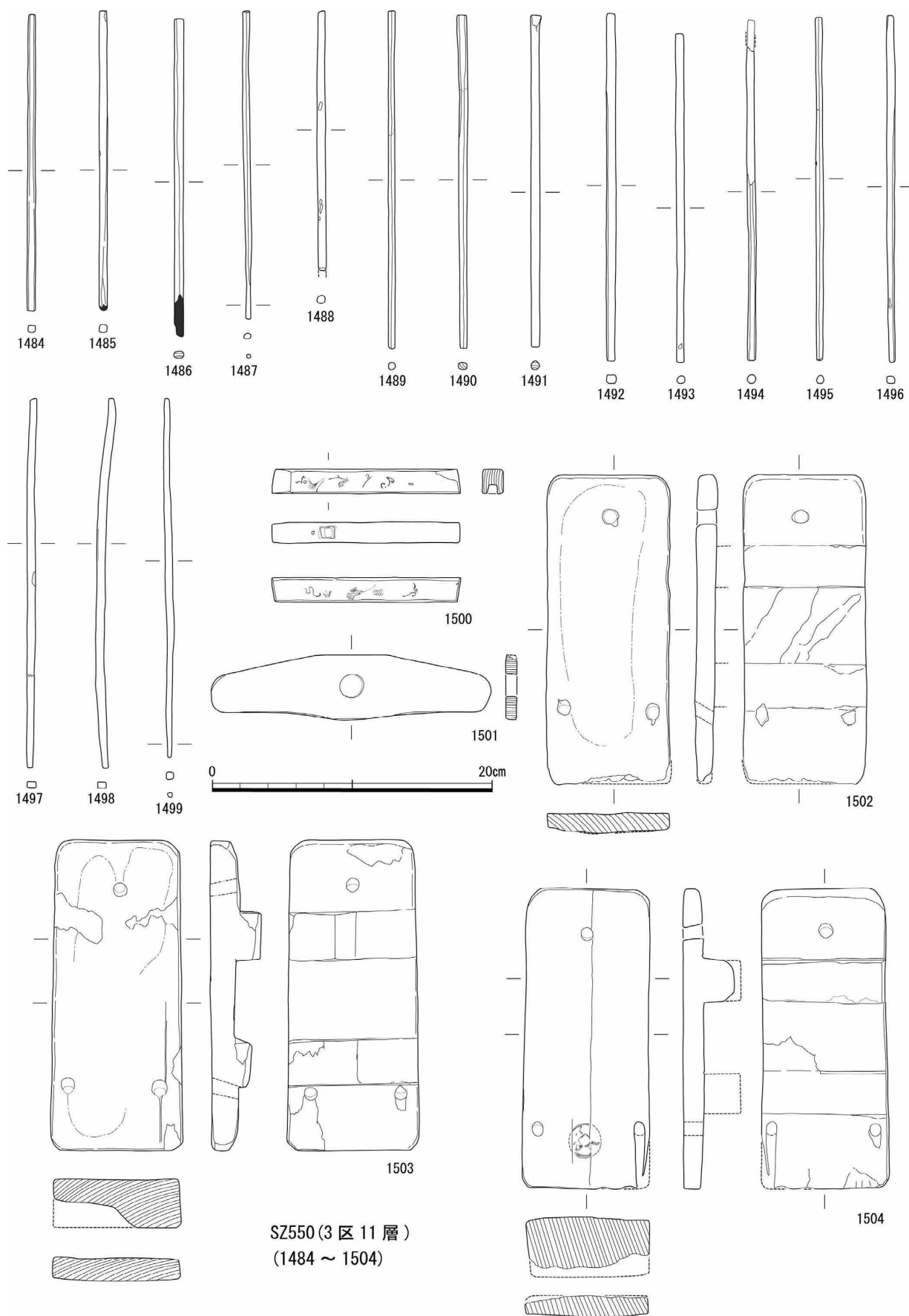
★ RANRAN NEU POMADE 1448

第77図 第5次調査出土遺物④ 攪乱・その他 (1:4)

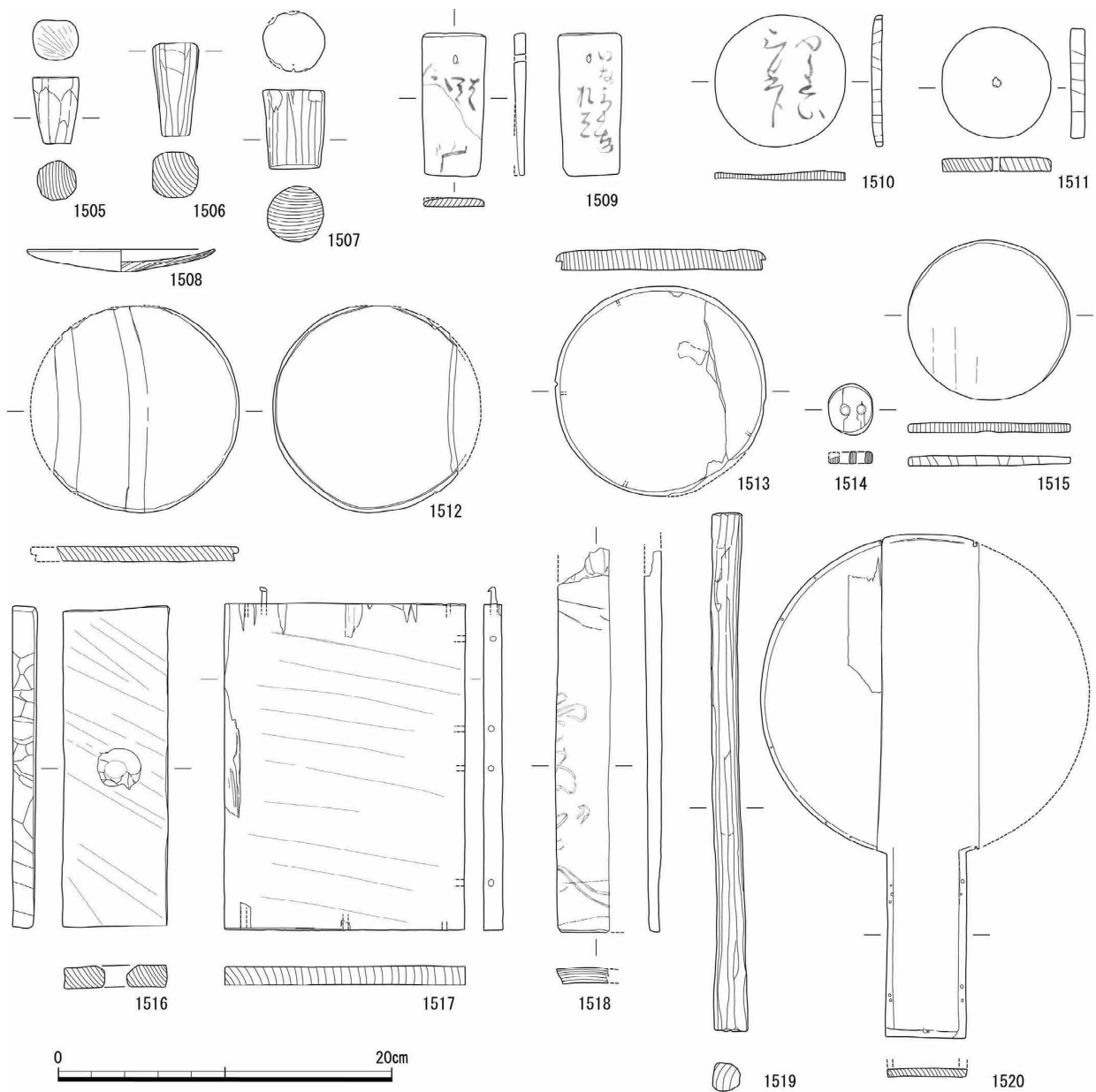




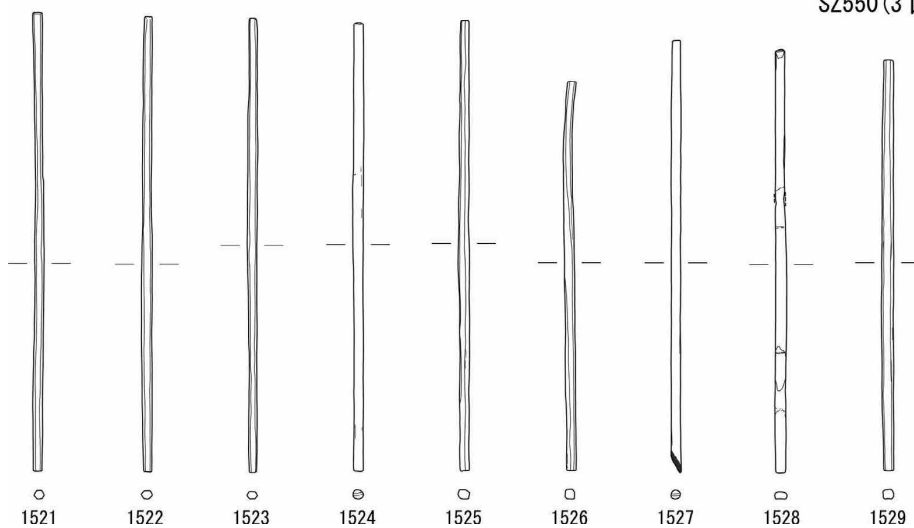
第78図 第5次調査出土遺物④ 木製品 (1:4)



第79図 第5次調査出土遺物④ 木製品 (1:4)

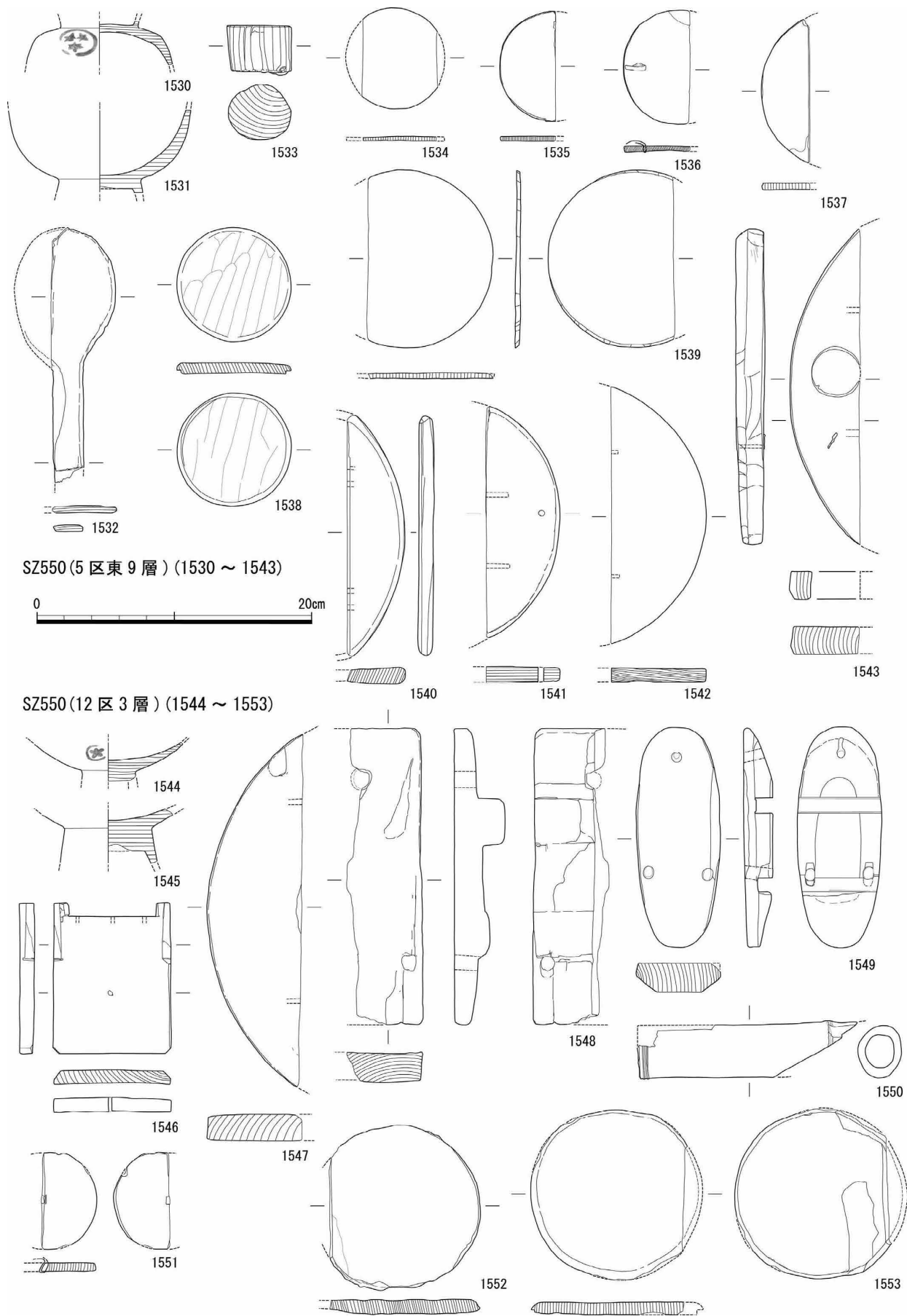


SZ550(3区11層)(1503~1518)



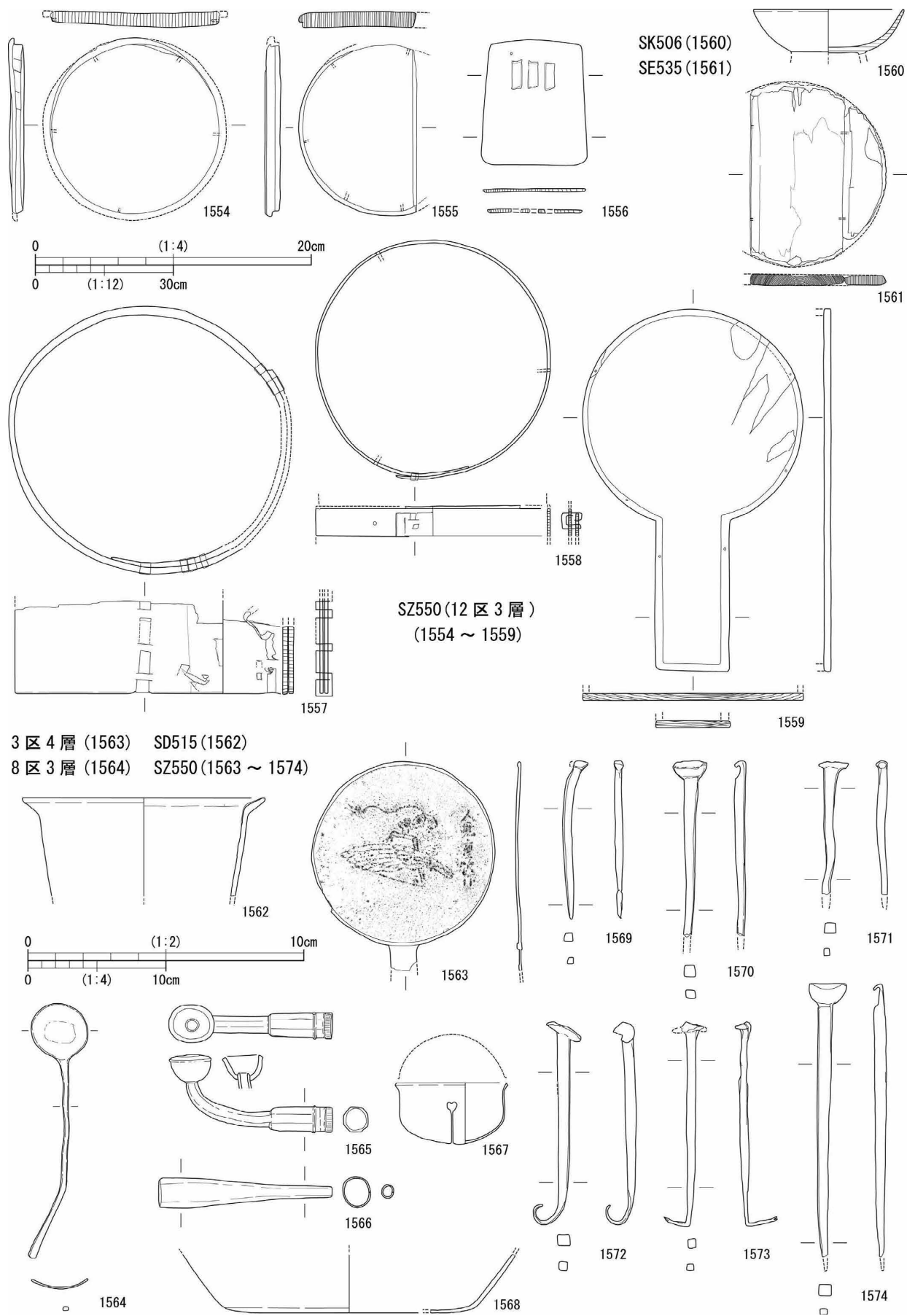
SZ550(5区東9層)  
(1521~1529)

第80図 第5次調査出土遺物④ 木製品 (1:4)



第81図 第5次調査出土遺物④ 木製品 (1:4)





第82図 第5次調査出土遺物⑦ 木製品 (1:4、1561は1:12) 金属製品 (1:2、1562・1564・1568は1:4)

①土器・瓦・土製品・石製品

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1	033-01	陶器 (常滑)	甕	1区	SK501	底部 8/12	-	20.0	7.2	橙	
2	072-06	陶器 (京都・信楽)	碗	3区	SD502	口縁～胴部 1/12	9.2	-	3.7	灰白	半球碗 灰釉、土絵付(金・赤)
3	072-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SD502	口縁～底部 1/12	11.4	-	3.6	灰白	梅文皿 灰釉、見込みに呉須・鉄絵
4	072-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SD502	底部8/12	-	5.0	2.0	灰白	梅文皿 灰釉、見込みに呉須絵
5	073-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SD502	口縁～胴部 1/12	12.6	-	5.1	灰白	灰釉
6	068-01	陶器 (瀬戸・美濃)	半胴甕	3区	SD502	口縁～胴部 2/12	18.8	-	9.4	褐	鉄釉
7	083-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	3区	SD502	底部 1/12	13.0	-	1.9	灰白	
8	073-03	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SD502	口縁～胴部 1/12	9.9	-	3.3	灰白	内外面に二重網目文
9	073-05	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SD502	4/12	8.4	4.2	4.5	灰白	外面に梅樹文
10	073-02	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SD502	口縁～胴部 1/12	12.2	-	3.7	灰白	
11	073-04	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SD502	口縁～胴部 1/12	12.0	-	4.9	明オリーブ 灰	朝顔形、染付青磁、内面に四方禪文
12	075-02	土師器	焙烙	3区	SD502	口縁部小片	40.4	-	1.5	にぶい橙	
13	074-04	土師器	鍋	3区	SD502	口縁部 1/12	24.2	-	2.2	橙	
14	078-01	瓦	丸瓦	3区	SD502	約1/3	-	-	厚2.0	灰	凸面ナデ、凹面コビキB、吊り紐
15	080-01	瓦	飾瓦	3区	SD502	約1/2	-	-	厚4.0	暗灰	ナデ
16	077-01	陶器 (常滑)	土管	3区	SD502	-	長 30.8	幅 12.4	厚1.2	橙	先端を面取り
17	072-01	陶器 (常滑)	火鉢	3区	SD502	口縁部 1/12	20.6	-	6.6	灰褐	内面煤付着
18	076-01	陶器 (常滑)	甕	3区	SD502	口縁～肩部 1/12	48.6	-	13.7	にぶい 黄橙	真焼
19	074-05	土師器	焙烙	3区	SK503	口縁部 1/12	38.0	-	2.4	にぶい橙	
20	072-03	土師器	皿	3区	SK503	口縁～胴部 1/12	9.4	-	1.5	橙	
21	083-01	土師器	皿	3区	SK503	2/12	12.0	-	1.2	浅黄橙	油煙付着
22	082-03	土師器	茶釜	3区	SK503	口縁～肩部 4/12	10.6	-	3.5	浅黄橙	
23	082-02	土師器	茶釜	3区	SK503	胴部2/12	26.4	-	6.5	にぶい橙	
24	073-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SK503	口5/12 底部11/12	11.6	4.0	5.2	にぶい 赤褐	柿釉・灰釉掛け分け
25	082-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	3区	SK503	口縁～胴部 1/12	40.0	-	6.0	灰褐	錆釉
26	082-04	土師器	皿	3区	SK509	1/12	7.8	-	1.2	にぶい橙	
27	085-01	土師器	皿	3区	SK509	12/12	7.7	-	1.3	橙	
28	085-02	土師器	皿	3区	SK509	口縁～底部 3/12	7.0	-	0.9	橙	油煙付着
29	085-03	土師器	皿	3区	SK509	口縁～底部 1/12	7.4	-	1.3	にぶい橙	
30	085-04	土師器	皿	3区	SK509	口縁～胴部 2/12	7.8	-	0.9	橙	
31	082-05	土師器	皿	3区	SK506	口縁～底部 1/12	9.8	-	1.4	にぶい橙	
32	083-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SK506	口縁～胴部 1/12	10.8	-	1.8	黒	鉄釉
33	083-03	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	3区	SK506	口縁～胴部 1/12	10.0	-	2.5	黒	鉄釉
34	182-03	磁器 染付 (肥前)	小杯	7区	SK506	口縁～胴部 1/12	6.4	-	3.5	灰白	
35	084-03	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SK506	底部2/12	-	4.6	1.1	灰白	
36	084-01	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SK506	口縁～胴部 3/12	10.2	-	4.4	明緑灰	外面に「福」
37	084-02	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SK506	口縁～胴部 1/12	12.8	-	2.5	灰白	
38	083-06	磁器 白磁 (肥前)	碗	3区	SK506	口縁～胴部 1/12	15.8	-	2.8	灰白	
39	084-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SK508	7/12	11.4	6.8	3.0	灰白	摺絵皿、被熱 灰釉、呉須
40	083-07	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SK508	口縁～胴部 1/12	10.1	-	2.0	灰白	丸皿 被熱ないし焼成不良
41	083-05	陶器 (肥前)	皿	3区	SK508	口11/12 底部8/12	12.0	4.2	3.4	灰	蛇の目釉剥ぎ 灰釉
42	138-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SK512	口縁部 1/12	23.4	-	2.8	淡黄	灰釉
43	087-03	瓦質土器	五徳	3区	SK510	3/12	14.4	-	10.4	灰白	
44	178-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	7区	SD515	口9/12 底部11/12	9.2	4.0	5.9	褐	柿釉
45	178-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	7区	SD515	口縁～胴部 1/12	10.8	-	4.0	褐	鉄釉
46	177-05	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	7区	SD515	胴部小片	-	-	-	にぶい 赤褐	錆釉
47	178-02	陶器 (常滑)	鉢	7区	SD515	底部2/12	-	13.0	6.5	灰褐	
48	177-04	土師器	蓋	7区	SD515	口縁～底部 3/12	13.4	-	1.8	にぶい褐	
49	177-03	土師器	茶釜	7区	SD515	口縁～肩部 3/12	12.0	-	5.2	灰褐	
50	178-01	土師器	茶釜	7区	SD515	胴部2/12	19.0	-	7.0	橙	
51	177-02	土師器	焙烙	7区	SD515	口縁部1/12	36.2	-	3.5	にぶい褐	
52	177-01	土師器	鍋	7区	SD515	口縁～底部 1/12	29.8	-	6.2	にぶい橙	

第12表-1 第5次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
53	178-05	磁器 染付 (肥前)	碗	7区	SD515	底部3/12	-	3.9	2.0	白	菊花文散らし
54	180-05	磁器 白磁 (肥前)	皿	7区	SK516	底部3/12	14.4	-	1.9	灰	口錆
55	181-01	磁器 青磁 (肥前)	皿	7区	SK516	口縁~胴部 1/12	20.4	-	3.5	明緑灰	被熱
56	178-06	磁器 青磁 (肥前)	皿	7区	SK516	口1/12以下 底部3/12	18.8	6.0	4.2	明緑灰	
57	180-06	磁器 青磁 (肥前)	皿	7区	SK516	底部3/12	-	6.8	2.1	明緑灰	
58	180-03	陶器 (肥前)	皿	7区	SK516	底部3/12	-	10.6	2.5	青灰	胎土目積み 被熱
59	180-02	陶器 (信楽)	甕	7区	SK516	底部1/12	-	16.4	4.6	灰白	
60	180-04	陶器 (瀬戸・美濃)	瓶	7区	SK516	把手	-	-	-	灰白	汁注か 灰釉
61	180-01	土師器	茶釜	7区	SK516	底部2/12	-	-	3.2	にぶい橙	
62	081-01	陶器 (常滑)	甕	3区	SK505	胴~底部 12/12	-	18.6	18.7	橙	内面付着物
63	110-01	陶器 (常滑)	甕	4区	SK511	底部12/12	-	22.3	34.2	にぶい橙	内面付着物
64	181-02	磁器 染付 (肥前)	碗	7区	SK517	口縁部1/12 底部6/12	8.8	4.2	6.2	明緑灰	筒形碗、染付青磁、内面四方禰文 見込みにコンニャク印判 (五弁花)
65	182-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	7区	SK518	口縁~胴部 1/12	11.0	-	4.0	灰白	灰釉、呉須
66	181-04	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	7区	SK518	底部5/12	-	3.8	2.2	灰白	見込みに「寿」
67	083-08	磁器 赤絵 (瀬戸・美濃)	小杯	3区	SK518	口縁~胴部 2/12	9.0	-	2.5	灰白	
68	190-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	7区	SK518	底部11/12	-	5.6	3.0	灰白	広東碗 (陶胎染付) 見込みに五弁花
69	181-03	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	7区	SK518	底部8/12	-	6.0	3.5	灰白	広東碗 見込みに五弁花
70	183-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	7区	SK518	口縁部2/12	7.6	-	2.4	黒褐	鉄釉
71	182-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	7区	SK518	底部5/12	-	6.8	3.3	暗赤褐	鉄釉
72	182-01	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	7区	SK518	胴部3/12	-	-	-	明緑灰 暗青灰	上野釉 内面煤付着
73	176-02	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	6区	SK513	口縁部3/12	10.0	-	3.2	灰白	端反碗
74	175-03	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	6区	SK513	口縁~胴部 4/12	7.6	-	5.7	灰白	湯呑碗
75	176-03	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	6区	SK513	底部8/12	-	3.8	3.2	明緑灰	見込みに「寿」
76	175-04	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	6区	SK513	底部5/12	-	4.0	3.0	灰白	
77	176-01	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	6区	SK513	4/12	11.4	4.4	4.9	明緑灰	
78	175-01	磁器 染付 (肥前)	鉢	6区	SK513	底部12/12	15.6	7.2	5.15	明緑灰	見込みに扇文、目跡 4ヶ所 蛇の目凹形高台
79	174-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	6区	SK513	1/12	13.8	-	3.5	灰白	陶胎染付 蛇の目凹形高台
80	176-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	6区	SK513	底部3/12	-	6.5	2.8	褐灰	型紙摺り 外面灰釉、内面鉄釉
81	175-02	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	底部1/12	-	5.4	-	灰白	
82	168-01	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	6区	SK513	口縁部3/12	26.9	-	5.6	にぶい 赤褐	柿釉
83	174-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	6区	SK513	口縁~胴部 1/12	21.1	-	8.5	灰 オリーブ	灰釉
84	172-04	陶器 (瀬戸・美濃)	植木鉢	6区	SK513	胴~底部 2/12	-	13.4	8.8	赤	錆釉
85	174-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	6区	SK513	底部3/12	-	13.8	5.8	灰白	灰釉
86	174-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	底部3/12	-	13.7	7.0	にぶい 赤褐	柿釉
87	172-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	胴~底部 12/12	-	10.6	6.0	灰	内：錆釉 外：灰釉
88	173-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	肩3/12 胴部4/12	-	-	-	灰白	灰釉 屋号あり
89	173-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	底部12/12	-	11.4	8.0	灰白	灰釉 屋号あり
90	172-03	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	胴~底部 6/12	-	11.3	5.8	灰	灰釉
91	172-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	6区	SK513	底部6/12	-	11.4	4.8	褐	灰釉
92	174-06	陶器 (信楽)	土瓶	6区	SK513	底部2/12	-	7.0	1.0	橙	灰釉、外面煤付着
93	175-05	陶器 (瀬戸・美濃)	土瓶	6区	SK513	注口部	-	-	-	灰白	灰釉
94	175-06	土製品	不明	6区	SK513	胴部片?	-	-	4.0	にぶい橙	指頭痕顕著
95	170-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	口縁~胴部 1/12	35.6	-	5.5	赤褐	錆釉
96	169-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	胴部3/12	-	-	8.0	赤褐	錆釉
97	169-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	胴~底部 1/12	-	24.0	7.0	赤褐	錆釉
98	169-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	底部2/12	-	28.9	4.5	にぶい 赤褐	錆釉
99	170-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	底部6/12	-	12.0	4.7	赤褐	錆釉
100	171-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	口縁部小片	-	-	-	暗赤褐	口縁部内面下に印刻「ウ」
101	171-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	6区	SK513	底部2/12	-	17.0	7.0	にぶい 赤褐	錆釉
102	168-03	瓦質土器	鉢	6区	SK513	底部3/12	-	-	7.5	黒	
103	160-03	瓦質土器	火鉢	6区	SK513	底部2/12	30.1	27.8	8.2	暗灰	
104	168-02	瓦質土器	羽釜	6区	SK513	鏝部3/12	-	-	3.5	黒	
105	196-01	陶器 (常滑)	甕	6区	SK513	口縁部 1/12	84.8	-	8.5	にぶい 黄橙	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
106	163-01	陶器 (常滑)	甕	6区	SK513	口縁部	64.8	-	6.8	橙	
107	164-01	陶器 (常滑)	甕	6区	SK513	口縁部	53.2	-	6.7	にぶい褐	
108	162-02	瓦	棧瓦	6区	SK513	小片	-	-	厚1.8	灰	
109	162-01	瓦	平瓦	6区	SK513	-	-	-	厚2.0	灰	穿孔2ヶ所、棧瓦の可能性あり
110	161-01	瓦	平瓦	6区	SK513	-	-	-	厚2.0	暗灰	凹面ナデ、凸面台圧痕
111	160-04	瓦	飾瓦	6区	SK513	-	-	-	厚1.6	暗灰	刻み、被熱
112	166-01	瓦	軒丸瓦	6区	SK513	-	-	-	厚2.6	暗灰	巴文
113	190-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	7区	SK520	口縁部 2/12	17.3	-	2.0	淡黄	灰釉
114	197-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区	SK520	底部5/12	-	15.4	6.8	黒褐	錆釉、底部外面も摩耗
115	237-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK523	口縁～胴部 2/12	17.2	-	10.8	灰白	灰釉、上野釉がけ
116	231-03	陶器 (常滑)	甕	8区	SK523	底部3/12	-	17.0	8.0	黄灰	
117	231-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK523	口縁部 2/12	34.0	-	7.5	黄灰	
118	233-03	陶器 (常滑)	甕	8区	SK523	口縁部 1/12	38.8	-	4.9	褐灰	
119	231-02	陶器 (常滑)	甕	8区	SK523	口縁～胴部 1/12	39.0	-	11.0	褐灰	
120	228-03	磁器 染付 (肥前)	蓋	8区	SK523	2/12	10.0	4.0	3.0	灰白	内面四方襷文
121	227-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK523	底部12/12	-	4.0	3.2	灰白	蛇の目釉剥ぎ
122	228-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK523	口縁部2/12 底部12/12	9.8	3.2	6.0	灰白	灰釉、口縁に呉須釉がけ
123	227-04	陶器 (瀬戸・美濃)	壺	8区	SK522	底部1/12	-	10.8	2.9	灰褐	錆釉
124	232-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK522	底部11/12	-	16.3	10.0	にぶい 赤褐	錆釉
125	228-02	陶器 (常滑)	甕	8区	SK522	底部2/12	-	18.4	6.4	赤橙	
126	254-06	土師器	皿	9区	SK525	2/12	10.8	-	1.4	橙	油煙付着
127	254-08	土師器	皿	9区	SK525	1/12	10.8	-	1.5	にぶい 黄橙	油煙付着
128	254-05	土師器	台付皿	9区	SK525	口縁部 2/12	7.6	-	2.2	灰白	
129	254-04	土師器	皿	9区	SK525	1/12	12.6	-	2.1	橙	
130	254-07	土師器	蓋	9区	SK525	3/12	14.4	-	1.5	橙	
131	254-03	土師器	蓋	9区	SK525	2/12	15.0	-	1.7	灰黄褐	
132	255-01	土師器	茶釜	9区	SK525	胴部1/12	-	-	2.7	にぶい 橙	
133	254-01	土師器	鍋	9区	SK525	口縁～胴部 1/12	25.0	-	3.9	にぶい 黄橙	
134	253-04	土師器	焙烙	9区	SK525	口縁部 1/12	31.8	-	2.8	にぶい 黄橙	
135	253-03	土師器	焙烙	9区	SK525	口縁～胴部 1/12	33.4	-	3.5	にぶい 橙	
136	253-02	土師器	焙烙	9区	SK525	口縁部 2/12	35.6	-	2.9	にぶい 橙	
137	253-01	土師器	甕	9区	SK525	口縁～胴部 2/12	37.8	-	6.5	灰白	
138	255-05	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	9区	SK525	口縁部 1/12	10.8	-	3.5	黒	鉄釉
139	255-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	9区	SK525	口縁～胴部 1/12	12.8	-	6.1	黒	丸碗 鉄釉
140	256-02	陶器	有耳壺	9区	SK525	口縁部3/12	9.0	-	4.6	灰白	鉄釉
141	255-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明具	9区	SK525	口縁部2/12	15.4	-	3.0	黒褐	鉄釉
142	256-01	磁器 染付 (肥前)	碗	9区	SK525	口縁部1/12	15.0	-	3.2	明緑灰	
143	256-03	磁器 染付 (肥前)	碗	9区	SK525	口縁部1/12	11.8	-	2.4	灰白	
144	268-04	磁器 染付 (肥前)	皿	10区	SK527	9/12	13.0	7.0	3.0	灰白	蛇の目釉剥ぎ コンニャク印判 (五弁花)
145	270-04	磁器 染付 (肥前)	皿	10区	SK527	口縁部1/12	13.0	-	2.6	灰白	被熱?
146	268-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	10区	SK527	口縁部1/12	13.0	-	4.4	灰黄	灰釉
147	201-01	陶器 (瀬戸・美濃)	大皿	8区	SK524	口6/12 底部8/12	34.1	16.5	7.0	灰白	馬の目皿 底部に墨書あり
148	204-04	陶器 (常滑)	甕	8区	SK524	口縁部1/12	40.6	-	6.9	灰褐	真焼
149	200-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK524	口縁部1/12	59.2	-	9.8		
150	268-01	磁器 染付 (肥前)	皿	9区	SD526 暗青灰色シルト	底部6/12	-	7.8	2.5	灰白	打ち欠きあり
151	254-02	土師器	鍋	9区	SD526	口縁～胴部 2/12	17.0	-	2.2	にぶい 橙	
152	256-04	磁器 染付 (肥前)	碗	9区	SD526	口縁～底部 2/12	11.0	-	3.5	灰白	
153	271-04	土製品	加工円板	9区	SD526 暗青灰色シルト	完形	径 4.7	-	厚1.1	にぶい 褐	常滑甕を転用、側縁研磨 34.2g
154	269-05	陶器 (常滑)	甕	9区	SD526	口縁部1/12	36.0	-	3.8	にぶい 橙	
155	269-04	陶器 (常滑)	火鉢	9区	SD526	口縁部2/12	23.0	-	6.0	にぶい 赤褐	
156	269-01	陶器 (常滑)	甕	9区	SD526 暗青灰色シルト	口縁部1/12	18.0	-	4.8	暗オリーブ	真焼
157	266-01	瓦	軒平瓦	9区	SD526 暗青灰色シルト	-	-	-	-	灰	
158	278-01	磁器 染付 (肥前)	皿	11区	SK529	口3/12 底部12/12	12.5	4.5	3.6	明緑灰	蛇の目釉剥ぎ 被熱?



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
159	277-08	磁器 染付 (肥前)	皿	11区	SK529	口縁～底部 2/12	12.8	4.5	3.4	明緑灰	蛇の目釉剥ぎ 被熱?
160	274-06	土師器	鉢	11区	SK529	口縁～胴部 1/12	13.6	-	5.0	褐灰	
161	275-05	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	11区	SK529	口縁部小片	-	-	9.0	黄灰	錆釉
162	275-06	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	11区	SK529	底部小片	-	-	6.3	黄灰	
163	275-03	陶器 (常滑)	甕	11区	SK529	口縁部小片	-	-	6.3	黒褐	真焼
164	275-04	陶器 (常滑)	甕	11区	SK529	口縁部小片	-	-	6.9	褐灰	真焼
165	271-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	10区	SK528	口縁部1/12	-	-	4.5	褐	錆釉
166	274-05	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	10区	SK528	底部1/12	-	9.4	5.0	褐	錆釉
167	269-02	土師器	皿	10区	SK528	5/12	6.4	-	1.5	橙	歪み大
168	275-01	土師器	十能	10区	SK528	把手	-	-	-	橙	
169	269-03	土師器	焙烙	10区	SK528	口縁部1/12	34.0	-	2.7	橙	
170	272-03	陶器 (常滑)	甕	11区	SK530	底部12/12	-	20.0	7.4	明赤褐	
171	279-05	土器	風炉	12区	SK533	口縁部1/12	24.8	-	5.7	にぶい 黄橙	胎土に微細な金雲母多く含む
172	283-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SK533	口縁～胴部 1/12	35.8	-	10.0	明赤褐	錆釉
173	279-04	土師器	皿	12区	SK533	口縁～底部 2/12	7.4	-	1.3	にぶい 橙	
174	282-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SK533	口縁部5/12 底部12/12	10.9	3.5	4.5	灰白	梅文皿(平碗) 見込みに呉須絵
175	283-03	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	12区	SK532	ほぼ完形	7.5	-	3.7	暗赤褐	柿釉
176	279-03	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	12区	SK532	2/12	-	-	-	褐	柿釉
177	283-02	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	12区	SK532	ほぼ完形	9.0	-	3.9	暗赤褐	柿釉
178	279-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SK532	底部4/12	-	10.0	2.2	にぶい 黄 褐	鉄釉
179	279-01	陶器 (瀬戸・美濃)	半胴甕	12区	SK532	口縁～胴部 1/12	12.6	-	6.6	にぶい 黄 灰	鉄釉
180	282-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SK532	底部3/12	-	13.6	7.4	暗赤褐	錆釉
181	282-02	陶器 (常滑)	壺	12区	SK532	口縁～頸部 1/12	20.4	-	4.0	暗赤灰	
182	282-01	陶器 (常滑)	火鉢	12区	SK532	口縁部1/12	-	-	5.3	にぶい 赤褐	
183	300-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SD534	口縁部1/12 底部12/12	15.4	6.0	8.2	灰白	見込みコンニャク印判(五弁花) 高台内銘「大明年製」
184	279-06	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SD534	底部4/12	-	7.2	1.4	灰白	摺絵皿(鉄絵) 灰釉
185	278-03	陶器 (肥前)	碗	11区	SK531	口縁～底部 1/12	15.6	6.0	6.2	黒	蛇の目釉剥ぎ 灰釉
186	277-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	11区	SK531	底部6/12	-	8.2	2.7	明オリブ 灰	鉄釉
187	272-02	陶器 (瀬戸・美濃)	半胴甕	11区	SK531	底部2/12	-	20.0	5.5	にぶい 赤褐	柿釉に鉄釉流し掛け
188	272-01	陶器 (常滑)	火鉢	11区	SK531	口縁～胴部 1/12	25.4	-	11.5	明赤褐	内面強く被熱(還元色)
189	326-03	陶器 (常滑)	甕	11区	SK531	底部1/12	-	19.4	6.4	にぶい 黄	
190	290-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～胴部 2/12	11.4	-	5.0	灰白	灰釉
191	290-03	陶器 (京都・信楽)	碗	12区	SD538 にぶい黄粗砂	底部1/12	-	3.0	1.9	灰白	灰釉
192	285-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口1/12 底部5/12	11.8	6.6	2.9	浅黄	摺絵皿(鉄絵) 灰釉
193	289-07	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SD538 にぶい黄粗砂	底部3/12	-	7.0	2.5	淡黄	灰釉
194	286-03	磁器 白磁 (肥前)	蓋	12区	SD538 にぶい黄粗砂	4/12	9.8	-	2.5	灰白	
195	285-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～胴部 1/12	10.9	-	3.1	明緑灰	染付青磁
196	290-06	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SD538 にぶい黄粗砂	底部3/12	-	4.0	2.6	灰白	蛇の目釉剥ぎ
197	284-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口1/12 底部6/12	8.0	4.2	6.1	灰白	筒形碗、見込みコンニャク印判(五弁 花)、四方櫛文
198	284-01	土師器	焙烙	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～胴部 1/12	41.6	-	3.5	橙	
199	289-04	土師器	茶釜	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～肩部 3/12	10.0	-	5.2	橙	
200	289-02	土師器	茶釜	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁部1/12	21.0	-	3.2	にぶい 橙	
201	284-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～胴部 2/12	21.6	-	6.7	にぶい 赤褐	錆釉
202	287-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SD538 にぶい黄粗砂	胴～底部1/12	-	18.2	4.0	灰白	鉄絵鉢 灰釉
203	289-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁部1/12	15.8	-	3.3	黒	鉄釉
204	288-04	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁部1/12	12.6	-	3.0	灰白	灰釉
205	286-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～胴部 1/12	33.4	-	9.0	灰白	灰釉に緑釉がけ
206	288-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SD538 にぶい黄粗砂	口縁～胴部 2/12	31.0	-	8.4	灰褐	錆釉
207	218-05	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	9.8	-	2.5	灰白	
208	217-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	9.6	-	3.2	灰白	
209	214-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部5/12	-	3.4	2.6	灰白	
210	214-02	磁器 染付 (肥前)	小碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部6/12	-	3.5	2.7	灰白	見込みコンニャク印判
211	214-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部7/12	-	3.7	3.1	明緑灰	高台内に崩し字

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
212	220-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部4/12	-	7.0	2.6	灰白	広東碗
213	222-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 2/12	12.8	-	7.0	明緑灰	外面ねじ花文
214	217-02	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部1/12	10.3	-	1.7	灰白	
215	221-05	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	10.8	-	4.8	白	広東碗か
216	216-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部7/12	-	4.0	3.1	灰白	
217	224-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部6/12	-	3.5	4.5	明緑灰	見込みに源氏香文
218	216-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部4/12	-	4.2	3.0	灰白	
219	221-06	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	胴～底部 3/12	-	4.4	5.5	白	外面梵字文、見込みに「壽」
220	220-07	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	2/12	10.0	3.9	4.8	白	
221	218-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	胴～底部 8/12	-	4.1	5.2	灰白	見込みにコンニャク印判
222	221-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	胴～底部 6/12	-	4.5	5.5	白	
223	214-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口2/12 底部12/12	9.8	4.0	5.2	明緑灰	高台内に文様
224	213-05	磁器 染付 (肥前)	仏飯器	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 4/12	7.6	-	2.0	灰白	菊花文散らし
225	213-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部12/12	-	4.6	5.0	灰白	蛇の目輪剥ぎ
226	221-09	磁器 染付 (肥前)	猪口	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	2/12	7.4	-	6.1	白	
227	221-07	磁器 染付 (肥前)	猪口	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部3/12	-	5.2	3.0	白	菊花文散らし
228	217-01	磁器 染付 (肥前)	蓋	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	8/12	10.0	-	3.3	明オリーブ 灰	染付青磁、コンニャク印判 (五弁花)、 四方禪文、二重方形枠に満「福」
229	218-02	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口1/12 底部4/12	11.0	4.3	5.8	明オリーブ 灰	染付青磁
230	215-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	胴～底部6/12	-	3.6	4.4	灰白	染付青磁、見込みに五弁花
231	217-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部10/12	-	3.2	1.7	灰白	小丸碗、見込みにコンニャク印判 (五 弁花)
232	220-06	磁器 白磁 (肥前)	小杯	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部12/12	-	2.5	3.1	灰白	
233	223-03	磁器 白磁 (肥前)	小杯	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	2/12	7.0	4.0	5.0	灰白	
234	204-03	磁器 青磁? (肥前)	小杯	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	4.8	-	3.0	明オリーブ	貫入多い
235	221-08	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 2/12	7.4	-	5.4	灰白	筒形碗、菊花文散らし
236	214-05	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部4/12	-	3.6	2.5	灰白	筒形碗、菊花文散らし
237	216-05	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	1/12	7.7	-	5.0	灰白	筒形碗
238	216-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部12/12	-	3.8	2.8	灰白	筒形碗、見込みに五弁花
239	225-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 2/12	8.6	-	5.8	明緑灰	筒形碗、内面四方禪文
240	216-02	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部3/12	-	4.0	3.4	灰白	筒形碗、見込みに五弁花、菊花文散ら し
241	221-02	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	12.2	-	2.7	白	
242	218-06	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	13.4	-	2.5	灰白	
243	221-03	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 1/12	12.4	7.2	3.8	白	
244	215-04	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部3/12	-	9.0	2.1	灰白	染付青磁、蛇の目回形高台、高台内に 二重方形枠
245	219-07	磁器 青磁 (肥前)	皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部1/12	-	13.2	2.4	明緑灰	陰刻花文、蛇の目回形高台か
246	224-02	磁器 染付 (肥前)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部4/12	-	8.8	5.6	明緑灰	染付青磁、蛇の目回形高台
247	202-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 1/12	8.8	-	4.6	褐	柿釉
248	202-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	8.6	-	4.8	黒褐	腰銘茶碗、外：鉄釉、内：灰釉
249	202-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部4/12	-	3.8	3.0	黒	櫛描(糸目)、外：鉄釉、内：灰釉
250	202-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	7.8	-	4.7	黒	鎧茶碗、鉄釉
251	202-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	7.2	-	4.0	黒褐	鎧茶碗、鉄釉
252	221-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 3/12	8.3	-	5.1	浅黄	鎧茶碗、外：黄釉、内：緑釉
253	188-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 1/12	10.8	-	4.5	オリーブ黄	鎧茶碗、外：灰釉、内：緑釉
254	216-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 1/12	9.8	-	4.4	灰白	灰釉、口縁部に須臾釉
255	203-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	10.4	-	3.7	灰白	灰釉、上絵付で笹文(京焼風)
256	203-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	11.0	-	6.2	灰黄	灰釉、鉄絵
257	219-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部6/12	-	4.3	3.0	灰白	灰釉
258	220-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 2/12	13.0	-	4.5	オリーブ黄	刷毛目碗、灰釉
259	215-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部12/12	-	4.5	3.0	淡黄	刷毛目碗、灰釉
260	188-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 2/12	8.8	-	4.2	灰白	陶胎染付
261	203-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	9.0	-	4.2	白	陶胎染付
262	218-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	11.4	-	4.0	灰白	陶胎染付
263	213-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	11.8	-	3.7	灰白	陶胎染付
264	220-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部12/12	-	6.4	4.0	灰白	陶胎染付、広東碗、見込み五弁花

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
265	210-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部6/12 底部12/12	11.2	5.4	5.9	灰白	陶胎染付、広東碗、見込み五弁花
266	222-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部9/12	-	3.4	2.1	灰白	灰釉
267	202-04	陶器 (信楽)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部5/12	-	3.8	1.6	灰白	灰釉
268	203-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	3/12	11.3	3.9	4.3	灰白	半球碗 見込みに呉須・鉄絵
269	219-06	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部2/12	-	7.6	1.8	にぶい黄	黄釉
270	202-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部2/12 底部4/12	10.0	5.0	1.95	暗赤褐	錆釉
271	225-04	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	9.5	-	1.6	にぶい 赤褐	錆釉
272	219-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	2/12	14.8	-	2.5	黒褐	錆釉、内面のみ施釉
273	203-04	陶器 (信楽)	鍋	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部2/12	13.8	-	2.8	灰オリーブ	灰釉、焼成堅緻
274	188-05	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	12.2	-	9.5	にぶい黄	黄釉
275	188-01	陶器 (瀬戸・美濃)	土瓶	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 4/12	8.8	-	9.7	にぶい橙	灰釉
276	188-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鍋または 土瓶	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部3/12	-	8.2	2.1	浅黄	底部煤付着
277	219-03	陶器 (瀬戸・美濃)	甕か	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部1/12	-	8.0	3.1	灰黄	
278	203-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	完形	5.2	2.9	2.4	浅黄	灰釉
279	203-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部6/12 底部12/12	4.8	2.9	2.2	灰白	灰釉
280	220-05	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 4/12	5.8	-	3.2	浅黄	灰釉
281	203-01	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	胴～底部 2/12	-	4.0	4.3	灰白	灰釉
282	219-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部1/12	23.4	-	2.2	淡黄	灰釉
283	204-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部2/12	21.0	-	4.0	褐	鉄釉
284	227-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 3/12	20.6	-	8.1	暗褐	鉄釉
285	215-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	18.0	-	9.0	灰白	灰釉
286	222-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部2/12	-	17.0	6.2	浅黄	灰釉
287	220-01	磁器 青磁 (肥前)	鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	34.2	-	6.0	明オリーブ 灰	陰刻花文
288	224-04	陶器 (信楽)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部1/12	25.8	-	2.9	暗赤灰	鉄釉、焼き締まる
289	222-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 3/12	23.2	-	5.2	褐灰	錆釉
290	225-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	35.4	-	4.9	褐灰	錆釉
291	194-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部1/12	32.0	-	3.5	褐	錆釉
292	204-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	34.2	-	9.7	褐	錆釉
293	187-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	33.8	-	10.0	暗赤褐	錆釉
294	193-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部3/12	-	15.8	3.5	褐	錆釉
295	202-01	瓦	道具瓦	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	-	-	幅 8.2	厚1.8	灰	孔あり
296	228-01	瓦	軒丸瓦	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	-	-	-	厚2.6	灰	
297	193-01	瓦質土器	火鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	23.5	-	14.0	にぶい橙	
298	193-03	瓦質土器	火鉢?	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁部小片	長 10.3	幅 7.9	厚1.8	にぶい 黄橙	平面方形か
299	219-02	土師器	羽釜	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部2/12	10.4	-	3.3	橙	
300	219-01	土師器	茶釜	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部2/12	9.6	-	3.2	橙	
301	187-02	土師器	茶釜	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	25.8	-	5.3	橙	
302	186-03	土師器	焙烙	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 1/12	38.6	-	3.4	明褐	
303	225-02	土師器	焙烙	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 1/12	42.4	-	4.5	にぶい橙	
304	223-02	土師器	焙烙	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～底部 2/12	42.8	-	2.7	橙	
305	184-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部3/12	21.2	-	7.8	赤灰	真焼
306	227-01	陶器 (常滑)	火鉢	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 1/12	27.0	-	7.0	灰黄褐	
307	194-02	陶器 (常滑)	火鉢 または壺	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部2/12	-	20.0	7.8	にぶい橙	
308	224-03	陶器 (常滑)	火鉢 または壺	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部4/12	-	12.4	6.2	橙	
309	194-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	底部2/12	-	24.2	8.2	橙	
310	195-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部1/12	51.4	-	11.8	黄灰	真焼
311	223-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁部1/12	55.0	-	6.8	にぶい 黄橙	
312	230-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～胴部 2/12	61.0	-	10.0	褐灰	
313	226-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～頸部 1/12	63.0	-	7.6	にぶい 黄橙	
314	209-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SK542・543 にぶい黄色砂	口縁～頸部 1/12	66.0	-	9.5	にぶい 黄橙	
315	275-02	磁器 染付 (肥前)	蓋	10区	SK548 にぶい黄色砂	9/12	11.6	-	3.2	灰白	内面四方櫛文
316	276-03	陶器 (常滑)	片口鉢	11区	SD549 暗青灰色粘砂	口縁部1/12	27.0	-	3.3	淡橙	
317	276-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	11区	SD549 暗青灰色粘砂	口縁部1/12	39.2	-	3.3	にぶい 赤褐	錆釉

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
318	276-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部1/12	-	27.2	5.5	暗赤褐	錆釉
319	300-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部5/12	-	15.0	7.6	にぶい 赤褐	錆釉
320	277-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部12/12	-	3.9	3.6	暗黄褐	筒形碗(鍍茶碗)、外:黄釉、内:鉄釉
321	277-07	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	11区	SD549 暗青灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	10.9	-	2.3	灰白	志野、鉄絵
322	277-03	陶器 (肥前?)	碗	11区	SD549 暗青灰色粘砂	口縁部1/12	12.8	-	3.0	暗 オリーブ	刷毛目碗
323	277-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部10/12	-	4.5	2.2	浅黄	灰釉、畳付のみ露胎
324	281-02	磁器 染付 (中国?)	皿	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部3/12	-	8.6	2.3	白	切り欠き高台
325	277-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部6/12	-	9.6	2.5	にぶい 黄褐	灰釉、蛇の目釉剥ぎ
326	278-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	11区	SD549 暗青灰色粘砂	10/12	8.5	-	2.0	にぶい 赤褐	錆釉
327	281-01	磁器 染付 (肥前)	碗	11区	SD549 暗青灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	10.0	-	3.1	明緑灰	
328	280-03	磁器 染付 (肥前)	碗	11区	SD549 暗青灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	11.0	-	4.8	オリーブ灰	朝顔形、染付青磁、内面四方禪文
329	280-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SD549 暗青灰色粘砂	底部4/12	-	4.8	-	灰白	蛇の目釉剥ぎ、見込みにコンニャク印判 (五弁花)
330	277-05	磁器 染付 (肥前)	鉢	11区	SD549 暗青灰色粘砂	底部5/12	-	7.4	3.2	明緑灰	
331	281-04	磁器 染付 (肥前)	皿	11区	SD549 暗青灰色粘砂	6/12	10.6	6.8	2.4	白	口錆、見込みにコンニャク印判(五弁 花)、高台内銘「福」
332	299-02	瓦	丸瓦	11区	SD549 暗青灰色粘砂	1/2	-	-	厚2.0	灰	凸面ナデ、凹面コビキB
333	043-06	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	11.0	-	5.0	灰白	
334	043-05	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	10.8	-	4.0	白	
335	043-07	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	10.8	-	4.3	白	外面に鳥文
336	045-03	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	10.0	-	3.5	白	
337	036-06	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	4/12	10.0	4.3	5.9	灰白	高台内銘「大明年製」
338	045-06	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.2	2.4	明緑灰	見込みにコンニャク印判(五弁花)、高 台内銘「大明年製」
339	045-07	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	底部4/12	-	5.0	1.9	灰白	高台内銘あり
340	045-04	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	8.0	-	3.0	白	コンニャク印判
341	043-02	磁器 白磁 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	8.8	-	4.0	白	色絵素地か
342	043-03	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	8.8	-	4.3	白	染付青磁
343	042-03	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部3/12	6.8	-	4.2	灰白	筒形の碗ないし小杯、雷文、中国産?
344	043-04	磁器 染付 (肥前)	皿	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	14.3	-	2.3	白	
345	045-05	磁器 染付 (肥前)	皿	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 1/12	11.3	7.0	2.4	白	口錆、高台内銘「大口□□」
346	042-02	磁器 赤絵 (肥前)	油壺	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	胴~底部 3/12	-	5.4	4.5	灰白	赤絵
347	054-02	磁器 染付 (肥前)	徳利	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	胴~底部 12/12	-	5.8	6.7	灰白	
348	036-03	磁器 染付 (肥前)	鉢	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	16.8	-	4.7	灰白	
349	043-01	磁器 白磁 (肥前)	鉢	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	6.5	3.2	白	色絵素地か
350	047-09	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	胴~底部 12/12	-	4.0	4.4	黒褐	鉄釉
351	041-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	9.2	-	5.6	灰白	灰釉、呉須絵
352	044-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	底部8/12	-	4.9	2.0	褐	柿釉
353	044-06-1	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	底部4/12	6.0	-	-	褐	鉄釉にウノフかけ
354	044-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	9.4	-	5.1	にぶい 赤褐	柿釉
355	047-10	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	5/12	9.0	4.0	6.3	暗褐	鉄釉、高台畳付のみ露胎
356	044-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部7/12	9.5	4.4	5.2	にぶい 赤褐	柿釉
357	044-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部3/12	9.6	4.4	5.4	黒褐	鉄釉、高台畳付のみ露胎
358	041-04	陶器 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	9.4	-	4.8	灰白	京焼風 灰釉、鉄絵(山水)
359	041-03	陶器 (肥前?)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	9.2	-	4.1	淡黄	京焼風 口錆、灰釉、底部は錆釉
360	041-02	陶器 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	6/12	9.5	4.8	6.4	灰白	京焼風 灰釉、高台畳付のみ露胎、外面に鉄絵
361	041-01	陶器 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	11/12	9.0	5.0	5.7	灰白	京焼風 灰釉、底部は露胎、高台内に印銘あり
362	036-05	陶器 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	6/12	13.7	5.6	4.7	浅黄	京焼風 平碗、灰釉、内面鉄絵
363	040-06	陶器 (肥前)	碗	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	11.8	-	4.2	灰白	京焼風 平碗、灰釉(高台は露胎)
364	045-08	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	5/12	7.0	2.8	1.1	暗赤褐	錆釉、内面のみ施釉
365	047-04	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 1/12	12.0	-	1.8	にぶい 橙	錆釉、内面のみ施釉
366	055-01	陶器	鉢	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	5/12	18.7	13.4	8.6	暗赤褐	備前か、焼成堅緻で火禰顕著、底部に スタンプ状の記号あり、小さい片口あり
367	045-02	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部3/12	11.6	-	4.0	明黄褐	黄瀬戸香炉
368	045-01	陶器 (瀬戸・美濃)	壺	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	12.8	-	3.7	黒褐	肩衝蓋、鉄釉
369	055-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	3/12	18.1	7.7	10.2	灰白	片口鉢、灰釉に緑釉がけ、目跡2ヶ所
370	044-06-2	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢または 香炉	1区	SZ550(1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	15.6	-	-	褐	黄釉にウノフかけ



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
371	044-05	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	15.8	-	8.3	黒褐	鉄釉
372	048-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部 2/12	33.6	-	6.1	暗赤褐	錆釉
373	054-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	底部4/12	-	16.0	8.4	極暗赤褐	錆釉
374	069-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	胴~底部 7/12	-	14.8	14.4	暗赤褐	錆釉
375	048-02	陶器 (常滑)	鉢	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部 1/12	34	-	4.9	灰赤	真焼
376	035-02	陶器 (常滑)	甕または鉢	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂最下部	底部1/12	-	20.0	4.2	赤褐	真焼
377	052-01	陶器 (常滑)	甕	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	45.8	-	19.2	暗赤灰	真焼
378	046-06	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	6.4	-	1.3	にぶい橙	油煙付着
379	050-03	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	7.7	-	1.5	にぶい橙	
380	046-07	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	7.8	-	1.4	橙	
381	040-03	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	3/12	8.5	-	1.5	にぶい 橙	
382	046-08	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	8.8	-	1.1	にぶい 黄褐	
383	046-12	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	8.4	-	1.5	にぶい橙	油煙付着
384	046-03	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	1/12	9.8	-	1.3	橙	油煙付着
385	047-05	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	3/12	9.4	-	1.5	にぶい橙	油煙付着
386	046-05	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	3/12	9.2	-	1.7	にぶい橙	油煙付着
387	051-02	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	9.3	-	1.7	橙	
388	051-05	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	9.7	-	1.7	橙	
389	047-03	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	3/12	9.6	-	1.5	にぶい橙	
390	046-01	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	1/12	9.6	-	1.6	にぶい橙	
391	046-04	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	9.8	-	1.7	にぶい橙	
392	047-08	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	1/12	10.4	-	1.6	にぶい橙	
393	046-09	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	5/12	10.4	-	1.7	にぶい橙	
394	051-04	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	9.8	-	1.6	にぶい橙	
395	046-11	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	9.8	-	1.6	にぶい橙	
396	047-06	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	9.2	-	1.7	にぶい橙	
397	047-07	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	10.8	-	1.5	にぶい橙	
398	046-02	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	10.4	-	1.8	にぶい橙	
399	046-10	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	4/12	10.4	-	1.5	にぶい橙	
400	040-01	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	11/12	11.0	-	2.0	にぶい 黄橙	油煙付着
401	040-02	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	完形	10.5	-	1.8	橙	油煙付着
402	047-02	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	4/12	11.6	-	1.9	にぶい橙	油煙付着
403	051-03	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	11.9	-	1.8	橙	油煙付着
404	047-01	土師器	皿	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	2/12	12.2	-	1.5	にぶい橙	
405	049-03	土師器	鍋	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~頸部 2/12	23.2	-	3.3	褐灰	
406	049-02	土師器	鍋	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	23.8	-	4.2	にぶい褐	
407	049-01	土師器	鍋	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	23.4	-	5.4	灰黄褐	
408	048-04	土師器	焙烙	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	31	-	3.0	にぶい橙	
409	048-03	土師器	焙烙	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	31.6	-	3.0	にぶい橙	
410	050-02	土師器	焙烙	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	37.6	-	3.5	にぶい 黄橙	
411	049-04	土師器	焙烙	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	48.7	-	3.6	にぶい橙	
412	057-02	瓦	平瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/4	-	-	厚1.7	にぶい橙	強く被熱して赤化、凹面ナデ、凸面台 圧痕
413	057-01	瓦	平瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/6	-	-	厚2.2	にぶい褐	強く被熱して赤化、両面ともナデ
414	067-02	瓦	平瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	小片	-	-	厚2.0	にぶい 黄橙	軟質
415	051-01	瓦	飾瓦	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	小片	-	-	-	暗灰	接合部刻み
416	059-01	瓦	軒丸瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/2	-	-	厚1.8	黄灰	范の木目痕顕著
417	064-01	瓦	丸瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	玉縁部片	-	-	厚2.6	にぶい 赤褐	強く被熱して赤化
418	056-01	瓦	丸瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/3	-	-	厚2.0	暗灰	凸面ナデ、凹面叩き
419	058-01	瓦	丸瓦	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/6	-	-	厚2.0	灰	凸面ナデ、凹面コビキB
420	050-01	瓦	丸瓦	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	1/4	-	-	厚1.8	暗灰	凸面ナデ、凹面コビキB
421	060-04	磁器 染付 (肥前)	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/12	14.3	8.5	3.5	灰白	
422	062-06	磁器 青磁 (肥前)	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部3/12	13.4	-	2.2	緑灰	蛇の目釉剥ぎ
423	063-02	磁器 青磁 (肥前)	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	11.8	-	2.3	灰白	口錯、強く被熱

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
424	062-07	磁器 白磁 (肥前)	小杯	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	7.8	-	1.5	灰白	
425	063-01	磁器 染付 (中国)	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	5.8	1.2	明緑灰	青花
426	063-04	磁器 染付 (中国)	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	11.2	3.5	灰白	景德鎮
427	063-05	瓦質土器	火鉢?	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	3/12	10.2	6.6	3.0	灰黄	
428	062-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	3/12	11.2	3.6	5.3	にぶい 赤褐	鉄釉、底部は切高台でうすい錆釉がけ
429	062-02	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	12.0	-	4.7	暗褐	鉄釉
430	062-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗または鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	5/12	8.0	3.8	3.8	黒褐	鉄釉
431	062-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗または鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	11.6	-	2.6	オリーブ灰	上野釉
432	062-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	胴~底部12/12	-	6.0	5.2	灰黄	灰釉
433	062-08	陶器 (肥前)	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	5.0	1.5	緑灰	蛇の目釉剥ぎ、内：銅緑釉、外：透明釉
434	069-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明具	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	4/12	7.1	7.4	5.6	暗赤褐	鉄釉
435	067-01	陶器 (肥前)	鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	31.6	-	5.5	灰	刷毛目、鉄釉・緑釉がけ
436	061-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	27.2	-	4.5	灰白	灰釉、鉄絵
437	066-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	29.8	-	5.5	灰褐	錆釉
438	066-03	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	8.0	5.5	暗赤褐	錆釉
439	066-02	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	12.3	3.2	灰褐	錆釉
440	063-03	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	10.0	5.0	灰褐	錆釉
441	065-01	陶器 (常滑)	火鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	33.4	-	4.8	にぶい 黄褐	
442	065-03	陶器 (常滑)	火鉢	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	23.0	-	7.3	橙	
443	061-01	陶器 (常滑)	甕	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	41.6	-	11.0	にぶい 赤褐	
444	065-02	陶器 (常滑)	甕	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	35.6	-	8.8	にぶい 橙	
445	067-05	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	4/12	7.3	-	1.5	にぶい橙	
446	066-07	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	2/12	7.0	-	0.8	にぶい 黄褐	
447	067-04	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	3/12	7.8	-	1.5	にぶい橙	
448	064-03	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	4/12	7.8	-	1.3	にぶい 橙	
449	067-06	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	2/12	8.1	-	1.5	にぶい橙	
450	066-06	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	4/12	8.0	-	1.5	明赤褐	
451	067-08	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/12	9.1	-	1.5	灰黄	
452	066-05	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	ほぼ完形	9.0	-	1.3~ 2.0	にぶい橙	
453	064-02	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	5/12	8.8	-	1.2	灰黄褐	油煙付着
454	067-03	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	3/12	9.8	-	1.1	橙	
455	067-07	土師器	皿	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁~底部 1/12	10.8	-	1.6	にぶい 黄橙	
456	072-02	土師器	片口鉢 または十能	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	18.8	-	4.6	橙	
457	075-01	土師器	焙烙	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部小片	42.6	-	1.3	にぶい橙	
458	075-04	土師器	焙烙	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部小片	33.6	-	1.7	にぶい橙	
459	075-03	土師器	焙烙	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部小片	34.6	-	1.5	にぶい橙	
460	066-04	土師器	焙烙	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	38.0	-	2.9	にぶい 黄褐	
461	074-02	土師器	鍋	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	24.6	-	4.8	にぶい橙	
462	074-03	土師器	鍋	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	24.6	-	2.0	黒	
463	074-01	土師器	焙烙	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	30.6	-	3.5	黒	
464	073-07	石製品	硯	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	1/2	長 6.0	幅 7.0	厚2.4	-	強く被熱し発泡・割れ、粘板岩か
465	116-03	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 5/12	10.4	-	4.4	明緑灰	
466	116-05	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部4/12 底部1/12	11.0	4.6	6.1	灰白	鳥文
467	115-06	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部4/12 底部3/12	10.4	4.2	5.7	灰白	高台内銘「□□年製」
468	116-04	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部5/12 底部8/12	10.4	4.0	5.6	明緑灰	高台内銘「大明年製」
469	114-05	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	10.8	-	2.5	灰白	
470	118-07	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部6/12	9.5	3.9	5.0	灰白	
471	116-02	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	胴~底部8/12	-	4.0	4.4	灰白	
472	114-06	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	胴~底部3/12	-	3.4	3.0	灰白	高台内銘「大明年製」
473	114-07	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部5/12	-	3.2	1.1	灰白	高台内銘「大口年□」
474	114-03	磁器 染付 (肥前)	小杯	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 4/12	6.2	-	3.2	灰白	貫入顕著
475	114-02	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	8.8	-	3.5	灰白	
476	108-07	磁器 赤絵 (肥前)	油壺	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部1/12	-	4.8	2.3	灰白	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
477	102-04	磁器 青磁 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4/12	11.4	6.8	2.7	明緑灰	蛇の目凹形高台
478	116-01	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	13.0	-	1.5	灰白	
479	111-02	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4/12	13.5	4.5	4.1	灰白	蛇の目釉剥ぎ
480	116-06	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁～底部 2/12	8.8	-	4.8	明緑灰	筒形碗
481	114-04	磁器 染付 (肥前)	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部4/12	-	-	3.8	灰白	コンニャク印判
482	115-03	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	19.8	-	2.6	灰白	口錯
483	115-04	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	12.8	-	2.2	灰白	
484	115-05	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12 底部5/12	13.8	6.4	2.9	灰白	
485	115-01	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	10.8	-	2.7	灰褐	鉄釉
486	107-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部4/12 底部12/12	10.4	4.3	5.7	黒褐	鉄釉
487	086-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区) 灰色粗砂	口縁～ 胴部1/12	10.4	-	3.8	灰白	灰釉
488	112-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁～ 胴部1/12	15.8	-	3.3	灰白	灰釉
489	106-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部4/12	12.8	4.8	5.5	灰白	灰釉・黄釉掛け分け
490	106-04	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	13.4	-	3.6	浅黄	京焼風、灰釉
491	113-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	10.5	-	4.3	褐	柿釉
492	113-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	9.8	-	2.4	褐	柿釉
493	113-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	9.7	-	3.0	褐	柿釉
494	114-10	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	8.8	-	3.4	灰褐	鉄釉
495	112-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部10/12	-	5.2	3.5	灰白	灰釉
496	113-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	5.2	4.5	にぶい 赤褐	柿釉
497	112-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	12.6	-	3.0	浅黄	丸皿、灰釉
498	114-08	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	3.8	2.4	1.8	灰白	灰釉
499	108-04	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	8/12	4.6	-	1.5	オリーブ黒	緑釉
500	112-04	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4/12	9.0	4.8	5.6	浅黄	京焼風、口錯、灰釉、高台皿付のみ露胎
501	108-06	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	9.2	5.4	5.9	浅黄	京焼風、灰釉、鉄絵(楼閣山水)、高台は露胎
502	113-02	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	4.2	1.9	浅黄	京焼風、灰釉、高台は錯釉
503	108-05	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	胴～底部9/12	-	4.8	3.5	にぶい黄	京焼風、灰釉、高台皿付のみ露胎
504	106-05	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部6/12	-	4.0	3.5	浅黄	京焼風、灰釉、高台皿付のみ露胎
505	108-01	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	10.8	-	3.2	灰白	刷毛目
506	108-02	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	10.6	-	2.6	灰白	刷毛目
507	113-03	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	3.7	2.2	にぶい 黄褐	刷毛目
508	107-04	陶器 (肥前)	碗	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	胴部1/12	-	-	2.6	オリーブ黄	灰釉
509	107-02	陶器 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	9/12	12.5	4.4	3.4	緑灰	内：銅緑釉、外：透明釉、蛇の目釉剥ぎ
510	121-09	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	5.0	-	0.8	にぶい褐	
511	121-08	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	4.8	-	1.1	橙	
512	121-02	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	8.6	-	1.3	にぶい橙	
513	121-03	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	7.8	-	1.2	にぶい 黄橙	
514	121-04	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	7.6	-	1.2	橙	
515	118-03	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	完形	8.2	-	8.2	橙	
516	121-05	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	8.9	-	1.4	橙	
517	118-04	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	8.8	-	1.8	橙	
518	121-01	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	9.2	-	1.3	にぶい 黄橙	
519	120-04	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	9.4	-	1.5	にぶい褐	
520	120-03	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	9.3	-	1.6	橙	
521	120-10	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	9.5	-	1.6	にぶい 黄橙	
522	119-03	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4/12	9.0	-	1.6	橙	油煙付着
523	119-04	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	9.2	-	1.2	にぶい橙	油煙付着
524	121-10	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4/12	9.2	-	1.4	にぶい橙	油煙付着
525	120-11	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	9.2	-	1.4	にぶい橙	
526	119-07	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	9.4	-	1.5	にぶい 黄橙	
527	120-09	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	10.0	-	1.4	にぶい 黄橙	
528	120-02	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4/12	10.2	-	1.8	にぶい 黄橙	
529	120-08	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	10.3	-	1.6	にぶい橙	

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
530	121-07	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	11.0	-	1.9	にぶい 黄橙	油煙付着
531	118-05	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	10.6	-	1.8	明赤褐	
532	120-07	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	11.9	-	1.7	橙	
533	120-06	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	11.8	-	1.5	にぶい橙	
534	119-06	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	11.8	-	1.7	にぶい橙	
535	120-01	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	ほぼ完形	11.6	-	2.2	にぶい橙	
536	119-05	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	11.2	-	1.5	にぶい橙	
537	128-04	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	9.0	-	1.9	灰黄褐	油煙付着
538	121-06	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	12.0	-	2.0	にぶい橙	
539	120-05	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	11.8	-	2.0	にぶい橙	
540	119-02	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	2/12	12.2	-	1.7	にぶい橙	油煙付着
541	118-02	土師器	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	11.8	-	3.1	いぶい褐	
542	114-09	土師器	台付皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	台部4/12	-	7.6	1.3	灰黄褐	
543	119-01	土師器	蓋または 灯火具	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	6/12	13.5	-	2.0	橙	焼成前穿孔あり
544	118-06	土師器	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/12	15.4	-	1.5	灰白	
545	117-05	土師器	鍋	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	20.2	-	3.0	にぶい 黄橙	
546	118-01	土師器	茶釜形 鍋	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	胴部1/12	26.4	-	5.9	にぶい橙	
547	117-04	土師器	焙烙	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	34.8	-	2.3	にぶい橙	
548	117-03	土師器	焙烙	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	38.6	-	3.5	にぶい橙	
549	117-02	土師器	焙烙	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	39.8	-	4.0	にぶい橙	
550	117-01	土師器	焙烙	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	41.0	-	2.2	にぶい橙	
551	111-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	胴~底部3/12	-	9.6	5.5	灰白	灰釉
552	111-04	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	9.6	3.0	オリーブ褐	脚付、鉄釉
553	107-01	土製品 または瓦	不明	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	-	-	-	厚1.8	赤	強く被熱した瓦の可能性あり
554	093-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	5/12	21.0	11.4	4.2	灰白	折縁皿、灰釉、二彩 (鉄釉・緑釉)
555	112-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	35.0	-	2.0	浅黄	折縁鉢、灰釉、緑釉がけ
556	100-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	33.6	-	4.4	褐	錆釉
557	104-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	36.6	13.8	16.4	灰褐	錆釉
558	106-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部2/12	-	14.6	9.9	暗赤褐	錆釉、底部摩耗している
559	111-01	陶器 (肥前)	皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部5/12	-	11.2	3.0	にぶい 赤褐	二彩 (鉄釉・緑釉)
560	103-03	磁器 (肥前)	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	底部4/12	-	10.4	3.9	褐灰 黄灰	刷毛目
561	167-01	陶器 (肥前)	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部6/12	29.4	11.9	9.7	灰褐	三島手
562	103-01	陶器 (常滑)	壺	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	19.5	-	4.4	褐灰	真焼
563	105-01	陶器 (常滑)	火鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3/12	21.6	15.0	7.3	にぶい 赤褐	
564	106-01	陶器 (常滑)	火鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 1/12	25.2	14.6	6.4	にぶい 赤褐	
565	101-03	陶器 (常滑)	鉢	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	38.0	-	6.0	にぶい 赤褐	
566	102-05	石製品	硯	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	小片	長4.0 幅3.0	厚0.6	-	暗灰	粘板岩、裏面に細かい線刻あり
567	099-02	瓦	軒丸瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/2	-	-	厚1.8	暗灰	巴文
568	098-02	瓦	軒平瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	小片	-	-	厚4.0	暗灰	唐草文
569	098-03	瓦	軒平瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	小片	-	-	厚4.0	暗灰	唐草文
570	096-01	瓦	平瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/3	-	-	厚2.0	灰	ナデ
571	100-02	瓦	飾瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	小片	-	-	厚1.3	暗灰	
572	101-02	瓦	袖瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	小片	-	-	厚2.0	灰白	接合部刻み
573	100-01	瓦	丸瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/6	-	-	厚1.8	灰黄	凸面ナデ、凹面コビキB
574	095-01	瓦	丸瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/6	-	-	厚2.0	暗灰	凸面ナデ
575	109-01	瓦	丸瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/6	-	-	厚1.8	暗灰	凸面ナデ
576	101-01	瓦	丸瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/6	-	-	厚2.4	にぶい 黄橙	凸面ナデ
577	095-02	瓦	丸瓦	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	1/6	-	-	厚1.6	灰	凸面ナデ、凹面コビキB
578	144-01	瓦	丸瓦	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	1/6	-	-	厚2.0	灰	凸面ナデ、凹面布目、吊り紐痕
579	140-01	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粘砂	6/12	13.5	7.6	3.8	灰白	見込みにコンニャク印判 (五弁花)、高 台内に渦「福」
580	139-06	磁器 染付 (肥前)	鉢	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粘砂	胴~底部5/12	-	8.0	5.3	灰白	高台内「宣徳年製」
581	125-01	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部6/12	-	5.1	2.1	灰白	内：蛇の目釉剥ぎ
582	145-03	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粘砂	6/12	9.0	3.0	5.4	灰白	小丸碗、見込みにコンニャク印判 (五 弁花)



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
583	139-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	口縁～底部 1/12	9.2	-	5.3	灰白	灰釉
584	145-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	口縁～胴部 2/12	10.4	-	4.3	灰白	灰釉
585	125-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	6/12	9.5	5.1	6.5	暗赤褐	筒形碗 (糸目)、灰釉・錆軸掛け分け
586	145-06	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	底部3/12	-	2.6	2.1	浅黄	灰釉
587	139-03	磁器 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	底部12/12	-	4.2	2.5	灰白	内：蛇の目軸剥ぎ
588	145-04	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	2/12	8.4	-	0.9	橙	油煙付着
589	125-03	陶器 (瀬戸・美濃)	髮盤	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	6/12	-	-	3.5	灰白	型紙摺り
590	145-01	陶器 (瀬戸・美濃)	有耳壺	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	肩部小片	-	-	3.5	にぶい 黄褐	鉄軸
591	138-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	口縁～胴部 1/12	31.8	-	5.9	にぶい 赤褐	錆軸
592	122-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	31.4	-	9.7	暗赤褐	錆軸
593	124-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	30.6	-	9.9	暗赤色	錆軸
594	124-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～頸部小片	44.0	-	4.4	暗赤色	錆軸
595	123-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～頸部 1/12	34.4	-	3.9	にぶい 赤褐	錆軸
596	143-03	陶器 (常滑)	片口鉢	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	口縁部1/12	39.4	-	5.5	にぶい 黄橙	内面摩耗
597	126-01	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 1/12	34.2	-	28.5	にぶい 赤褐	内面白色の付着物
598	123-02	陶器 (常滑)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部3/12	-	18.5	7.1	橙	内面煤付着
599	143-01	陶器 (常滑)	火鉢	5区	SZ550 (5区東6層) 黄灰色粗砂	口縁部1/12	14.6	-	4.3	にぶい 黄橙	
600	123-01	陶器 (常滑)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁部2/12	27.0	-	5.0	にぶい 橙	
601	132-03	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁部2/12 底部4/12	8.0	3.6	5.1	白	高台内「□□年製」
602	133-04	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁部1/12	9.7	-	2.0	灰白	
603	133-06	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 1/12以下	10.0	-	4.9	灰白	
604	133-08	磁器 白磁 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	胴～底部6/12	-	4.9	4.0	白	
605	133-02	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	13.0	-	3.7	白	内：四方禪文
606	134-05	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部4/12	-	4.8	2.4	明緑灰	砂目積み、初期伊万里
607	133-03	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 3/12	7.7	-	3.4	白	
608	134-06	磁器 染付 (肥前)	小杯	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 4/12	8.8	-	3.3	明青灰	
609	131-04	磁器 白磁 (肥前)	小杯	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部12/12	-	2.8	1.3	灰白	
610	133-01	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～底部 2/12	14.0	9.0	3.1	白	
611	137-01	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部2/12	-	7.0	2.7	明青灰	
612	133-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	9.0	-	2.9	暗赤褐	柿釉
613	136-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁部1/12	9.4	5.0	6.7	暗褐	柿釉
614	134-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部12/12	-	5.9	2.0	灰白	輪赤皿、灰釉
615	134-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁部6/12	10.7	4.1	4.9	灰白	呉須絵 (山水)
616	134-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	12.8	-	4.2	浅黄	灰釉
617	134-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 1/12	13.7	-	5.6	黒褐	鉄軸
618	136-04	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	小片	-	-	1.7	灰白	灰釉
619	133-05	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	胴部2/12	-	-	4.2	淡黄	灰釉、鉄絵
620	137-03	陶器 (瀬戸・美濃)	有耳壺	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 4/12	16.0	-	6.8	暗褐	錆軸、ウノフがけ
621	130-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	胴～底部5/12	-	10.5	6.1	黒褐	錆軸
622	130-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部3/12	-	17.0	6.0	明赤褐	錆軸
623	132-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部3/12	-	10.9	1.2	浅黄	灰釉
624	129-05	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	4/12	16.7	8.0	6.8		刷毛目
625	132-01	陶器 (肥前)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口2/12 底部3/12	24.0	11.1	10.2	灰白	刷毛目
626	135-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	33.4	-	8.5	灰白	鉄絵鉢、灰釉
627	129-06	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～肩部 3/12	14.0	-	5.3	黒褐	真焼
628	131-02	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～胴部 1/12	31.4	-	8.3	暗赤灰	内面付着物
629	132-02	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	底部2/12	-	16.0	9.5	明赤褐	真焼
630	135-02	土師器 (南伊勢)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	4/12	8.7	-	1.4	灰黄	
631	135-03	土師器 (南伊勢)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	1/12	10.8	-	1.3	にぶい 橙	
632	137-02	土師器 (南伊勢)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	1/12	11.9	-	1.6	にぶい 黄橙	
633	137-06	土師器 (南伊勢)	皿	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	1/12	12.8	-	1.5	灰白	
634	137-05	土師器 (南伊勢)	茶釜	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～肩部 1/12	14.2	-	2.6	にぶい 橙	
635	131-03	土師器 (南伊勢)	茶釜	5区	SZ550 (5区東7層) 褐灰色粘砂	口縁～肩部 2/12	11.0	-	3.2	にぶい 褐	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
636	137-04	土師器 (南伊勢)	鉢	5区	SZ550 (5区東7層) 褐色粘砂	口縁~肩部 1/12	12.4	-	2.8	にぶい橙	
637	136-02	土師器 (南伊勢)	茶釜	5区	SZ550 (5区東7層) 褐色粘砂	胴部1/12	27.0	-	2.3	にぶい橙	
638	138-02	土師器 (南伊勢)	焙烙	5区	SZ550 (5区東7層) 褐色粘砂	口縁部1/12	32.8	-	2.3	灰黄褐	
639	136-01	土師器 (南伊勢)	焙烙	5区	SZ550 (5区東7層) 褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	40.0	-	4.8	にぶい橙	
640	148-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	9.4	-	5.5	黒褐	鉄釉
641	151-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	10.0	-	5.2	灰白	灰釉
642	150-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 2/12	9.6	-	5.5	褐	柿釉
643	150-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 3/12	9.5	-	5.5	にぶい 赤褐	柿釉
644	147-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部5/12	-	4.2	1.5	褐	柿釉
645	147-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.0	1.3	黒褐	柿釉
646	147-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.8	1.4	褐	柿釉
647	148-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 1/12	9.8	-	4.4	褐	柿釉
648	148-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口2/12 底部5/12	10.2	4.6	5.6	にぶい 赤褐	柿釉
649	150-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	10.6	-	4.0	暗褐	筒形碗、糸目、灰釉・錆釉掛け分け
650	151-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 1/12	13.8	-	4.7	浅黄	灰釉
651	148-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 2/12	11.8	-	4.3	褐	柿釉
652	151-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 1/12	12.6	-	4.5	灰白	灰釉、鉄絵
653	151-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 2/12	13.4	-	4.2	灰白	灰釉、鉄絵
654	150-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	7.6	2.1	暗褐	鉄釉
655	150-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	14.4	-	5.0	浅黄	灰釉
656	148-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口3/12 底部2/12	13.2	6.6	3.1	灰黄	八角形、鉄絵
657	148-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	20.8	-	-	灰黄	皿、鉄絵
658	151-04	陶器 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~底部 2/12	14.0	-	3.8	灰黄	京焼風、灰釉
659	149-02	陶器 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口2/12 底部12/12	13.0	5.0	推定 5.0	浅黄	京焼風、灰釉、鉄絵 (山水)、高台内 印銘「小松吉」
660	151-02	陶器 (肥前?)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部6/12	-	4.4	3.2	にぶい黄	京焼風、灰釉、底部に錆釉 (豊付は露 胎)
661	150-07	陶器 (肥前?)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	9.8	-	5.0	明黄褐	京焼風、口錆、灰釉、底部に錆釉
662	149-01	陶器 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部7/12	-	5.4	2.6	にぶい黄	京焼風、灰釉、高台内印銘「清水」
663	151-01	陶器 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	5.0	3.6	にぶい黄	京焼風、灰釉
664	150-02	陶器 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	胴~底部 12/12	-	4.5	4.4	灰	刷毛目碗
665	149-03	陶器 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	5.7	2.4	緑灰	蛇の目釉剥ぎ、内:銅緑釉、外:透明 釉
666	145-02	陶器 (瀬戸・美濃)	徳利	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	10.8	4.3	黒褐	錆釉
667	147-04	陶器 (瀬戸・美濃)	徳利	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	12.4	2.5	暗褐	焼締まる、鉄釉
668	147-03	山茶碗	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	7.2	1.2	灰白	
669	149-05	陶器 (瀬戸・美濃)	甕?	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	8.0	1.7	にぶい 赤褐	銭甕か、柿釉
670	148-04	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	-	4.2	黒褐	鉄釉
671	152-01	陶器 (肥前)	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	21.0	-	-	褐灰	内:銅緑釉、外:透明釉、輪花
672	153-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	-	-	3.9	灰白	灰釉
673	149-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部4/12	-	12.8	4.4	灰白	灰釉
674	147-02	陶器 (瀬戸・美濃)	搦鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	22.8	-	5.5	にぶい 赤褐	錆釉
675	146-03	陶器 (瀬戸・美濃)	搦鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	36.0	-	6.4	暗褐	錆釉
676	146-02	陶器 (瀬戸・美濃)	搦鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	35.4	-	4.8	にぶい 赤褐	錆釉
677	146-01	陶器 (瀬戸・美濃)	搦鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	36.0	-	5.5	灰褐	錆釉
678	147-01	陶器 (堺・明石)	搦鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	23.8	6.0	赤	
679	142-02	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	17.2	6.6	にぶい 赤褐	
680	142-01	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	12.0	6.4	灰赤	
681	143-04	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	11.0	3.9	灰	
682	143-02	陶器 (常滑)	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部1/12	32.0	-	5.3	灰黄褐	
683	142-03	陶器 (常滑)	甕	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	38.0	-	7.2	赤灰	内面白色付着物
684	157-01	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	7.0	-	1.4	にぶい橙	
685	156-05	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	4/12	6.4	-	1.2	にぶい橙	
686	157-08	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	1/12	9.8	-	1.5	にぶい橙	
687	157-06	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	9.6	-	1.5	にぶい 黄橙	
688	155-02	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	10.1	-	1.8	にぶい褐	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
689	155-03	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	9.2	-	1.5	にぶい橙	
690	157-02	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	9.0	-	1.3	にぶい橙	油煙付着
691	157-05	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	9.6	-	1.7	灰黄褐	
692	156-04	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	10.2	-	1.6	にぶい橙	
693	155-04	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	10.0	-	1.4	にぶい橙	
694	158-02	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	1/12	10.0	-	1.2	にぶい橙	
695	157-10	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	10.2	-	1.5	にぶい 黄橙	
696	157-04	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	5/12	9.2	-	1.3	にぶい 黄橙	油煙付着
697	157-09	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	10.0	-	1.1	にぶい橙	
698	157-07	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	9.8	-	1.6	灰黄褐	
699	157-03	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	1/12	9.0	-	1.2	灰黄褐	油煙付着
700	158-01	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	11/12	9.8	-	1.7	にぶい褐	油煙付着
701	155-01	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	9.9	-	1.8	にぶい橙	
702	155-05	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	10.3	-	2.0	にぶい橙	
703	157-11	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3/12	11.0	-	1.9	橙	油煙付着
704	158-03	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	12.0	-	1.5	灰黄褐	
705	158-04	土師器	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	13.0	-	1.6	灰黄褐	
706	148-05	土器	焼塩壺 蓋	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	6/12	7.0	-	1.9	にぶい橙	内面布目
707	156-02	土師器	鍋	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	28.8	-	3.6	オリーブ黒	
708	158-06	土師器	十能	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	把手	-	-	-	にぶい橙	
709	158-05	土師器	十能	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	把手	-	-	-	にぶい 黄橙	
710	159-03	土師器	焙烙	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	34.9	-	3.3	にぶい橙 灰褐	
711	159-02	土師器	焙烙	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	36.8	-	4.6	にぶい橙 黒褐	
712	156-01	土師器	焙烙	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	37.2	-	4.8	黒	
713	159-01	土師器	焙烙	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	40.0	-	6.0	にぶい橙 黒褐	
714	156-03	土師器	鉢	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 1/12	18.6	-	5.2	灰黄褐	
715	160-01	土師器	茶釜	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~頸部 3/12	11.8	-	4.0	浅黄橙	
716	160-02	土師器	茶釜	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	頸部1/12	-	-	3.5	灰褐	
717	161-02	土師器	茶釜	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	胴部1/12	-	-	5.6	黒褐	
718	159-04	土師器	茶釜	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	胴部1/12	-	-	6.7	にぶい橙	
719	153-02	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	-	-	4.8	明緑灰	
720	154-02	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	4.0	3.0	明緑灰	見込みにコンニャク印判 (五弁花)、高 台内銘「大明年製」
721	153-03	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部2/12	-	-	3.3	灰白	
722	153-04	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	-	-	4.3	灰白	
723	154-03	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部12/12	-	3.8	2.7	灰白	
724	154-01	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部3/12	-	3.8	2.6	灰白	
725	152-05	磁器 白磁 (肥前)	小杯	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁部5/12	8.5	-	3.0	灰白	
726	153-05	磁器 染付 (肥前)	小杯	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部5/12	6.8	3.1	4.4	灰白	
727	152-03	磁器 白磁 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 3/12	11.2	-	5.0	白	口錯
728	152-04	磁器 白磁 (肥前)	碗	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	口縁~胴部 2/12	14.8	-	5.4	白	
729	154-05	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	8.3	2.0	明緑灰	
730	154-04	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部2/12	-	9.2	2.4	灰白	
731	152-02	磁器 染付 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	2/12	-	-	2.5	灰白	中央白抜き意匠
732	149-06	磁器 青磁 (肥前)	皿	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	底部1/12	-	-	3.1	明オリーブ 灰	脚付の皿
733	145-07	石製品	砥石	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	ほぼ完形	長 5.0	幅 5.0	厚 2.0	-	#120、砂岩
734	383-01	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	11.0	-	4.1	灰白	
735	383-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	11.0	-	3.3	灰白	
736	384-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部3/12	9.2	-	4.6	灰白	
737	385-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部4/12	-	-	4.9	灰白	高台内銘「大明」
738	385-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部3/12	9.8	-	4.4	灰白	
739	385-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	11.0	-	4.3	灰白	
740	385-01	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	11.0	-	3.9	灰白	
741	311-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	4.2	3.0	灰白	高台内銘「大明」

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
742	382-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	10.0	3.4	5.9	灰白	高台内銘「大明年製」
743	384-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	3.8	3.6	灰白	高台内銘「大明年製」
744	379-06	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.8	3.8	5.3	灰白	高台内銘「□□年製」
745	384-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部7/12	-	4.2	3.2	明緑灰	二重方形枠に滴「福」
746	379-04	土製品	加工円盤	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	完形	長	-	厚	明緑灰	33.85g、磁器染付を転用、高台内銘「大明年製」
747	385-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12 底部12/12	10.6	4.0	5.4	灰白	高台内銘「大明年製」
748	384-01	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部7/12	-	3.8	3.3	明緑灰	高台内銘「大口年製」
749	383-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	6/12	10.0	3.8	5.3	明緑灰	高台内銘「大口年製」
750	383-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	4.4	3.9	灰白	二重方形枠に滴「福」
751	310-01	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	4.6	4.1	灰白	
752	322-01	磁器 染付 (肥前)	小杯	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	6.7	-	3.0	灰白	コンニャク印判
753	324-03	磁器 染付 (肥前)	小杯	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	3.4	2.2	明緑灰	高台内に「福」
754	322-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 4/12	8.2	-	3.0	明緑灰	
755	379-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	7/12	7.3	4.2	4.9	灰白	
756	379-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口1/12 底部7/12	8.6	3.3	4.5	灰白	
757	309-06	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	-	3.8	3.6	灰白	高台内銘「大明□□」
758	310-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部8/12	-	4.6	2.0	灰白	高台内銘「大明」
759	310-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	5.0	2.4	灰白	
760	365-06	磁器 青磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	12.0	-	2.5	明オリーブ 灰	
761	363-06	磁器 青磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部6/12	-	4.2	1.9	明緑灰	
762	380-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	10.4	4.6	5.5	明緑灰	染付青磁、見込みに五弁花、高台内銘 滴「福」
763	324-06	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	9.8	-	3.3	灰白	
764	309-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～底部 1/12	10.0	6.3	4.6	灰白	
765	324-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部3/12	9.9	-	3.5	明緑灰	菊花文散らし
766	309-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 1/12	10.8	-	3.5	灰白	
767	283-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	底部12/12	-	4.2	3.0	灰白	
768	384-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	3.8	4.0	明緑灰	
769	365-05	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部小片	-	-	4.0	灰白	
770	367-04	磁器 白磁 (肥前)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	-	-	5.6	灰白	口錯
771	309-05	磁器 染付 (肥前)	小杯	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	7.0	-	2.8	灰白	
772	383-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部8/12	-	3.4	2.2	明緑灰	高台内銘「大明年製」
773	324-01	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 3/12	10.8	-	4.5	白	口錯
774	365-04	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	10.0	-	3.0	灰白	
775	309-01	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	10.6	-	3.6	灰白	
776	286-02	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	口縁部4/12 底部3/12	9.4	2.8	4.1	灰白	内面に赤絵
777	366-01	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	11.2	4.5	6.3	灰白	暗灰色粘砂
778	324-02	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 3/12	15.0	-	5.6	白	
779	322-03	磁器 (肥前)	仏飯器	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	脚部12/12	-	3.7	2.7	明緑灰	
780	383-06	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	11.6	6.8	3.3	灰白	
781	311-02	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	3.2	1.4	灰白	
782	380-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	12.6	-	2.9	灰白	陶胎染付(太白手)
783	382-03	磁器 染付 (中国)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部4/12	-	7.8	1.5	灰白	青花
784	311-03	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	10.2	1.2	灰白	二重方形枠に変形字
785	311-01	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	12.0	7.0	2.3	灰白	
786	380-04	磁器 染付 (中国)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	8.4	2.2	明青灰	景德鎮、見込みに凹み、高台内銘「大 明成□□□」
787	365-03	磁器 青磁 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	12.4	-	3.0	オリーブ灰	高台内釉剥ぎ、錆釉
788	327-01	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部8/12	-	15.8	2.3	明青灰	芙蓉手、6次3区の167皿と接合、ハリ支 え跡5ヶ所、高台内銘「大明成化年製」
789	382-01	磁器 染付 (肥前)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	10.6	3.5	灰白	
790	310-04	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	8.4	2.0	灰白	
791	321-01	磁器 染付 (肥前)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	4.9	4.9	明緑灰	高台内銘「大明□□」
792	314-03	磁器 染付 (中国)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	6.4	2.2	明緑灰	景德鎮、見込みに凹み
793	366-03	磁器 青磁 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	10.2	-	3.8	明オリーブ 灰	
794	310-05	磁器 染付 (肥前)	猪口	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12 底部2/12	10.6	6.8	7.0	明緑灰	



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
795	323-02	磁器 染付 (肥前)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	7.8	3.4	明緑灰	蛇の目凹形高台
796	375-02	磁器 青磁 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部6/12	-	7.4	3.8	オリーブ	三足
797	366-05	磁器 青磁 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	6.8	3.2	灰白	蛇の目凹形高台
798	321-02	磁器 染付 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	6.0	3.4	明オリーブ 灰	
799	322-05	磁器 染付 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	14.0	-	9.5	明緑灰	
800	303-04	磁器 染付 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	3/12	13.4	-	8.1	白	袴腰形
801	363-01	山茶碗 (瀬美)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部10/12	-	7.5	2.6	灰白	
802	317-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	11.0	-	4.8	黒	鉄軸
803	369-02	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	11.7	4.4	7.3	黒褐	鉄軸
804	333-04	陶器	天目茶碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部2/12	10.6	-	4.2	黒褐	鉄軸
805	307-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	10.4	-	4.2	黒	鉄軸
806	365-02	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	11.0	-	6.1	黒	鉄軸
807	363-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	11.0	-	4.2	黒	鉄軸
808	363-02	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部10/12	-	4.6	3.5	黒	鉄軸
809	365-01	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部9/12	4.7	-	4.2	黒	鉄軸
810	307-06	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部4/12	-	4.5	1.7	黒	鉄軸
811	305-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部9/12	-	4.1	1.7	灰白	灰釉、白天目
812	317-05	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	4.5	2.1	黒	鉄軸
813	306-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	9.0	-	3.1	灰白	灰釉
814	306-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	9.8	-	3.0	灰白	灰釉
815	370-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	10.8	-	4.8	にぶい 赤褐	柿釉
816	369-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	14.0	-	3.8	暗赤褐	柿釉
817	369-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	9.4	-	4.6	にぶい 赤褐	柿釉
818	319-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部9/12 底部12/12	9.0	4.0	5.7	灰白	灰釉
819	317-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	10.7	-	5.6	黒	鉄軸
820	369-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部10/12	-	4.8	5.5	暗褐	鉄軸
821	378-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	4.8	3.9	灰オリーブ	灰釉
822	317-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴~底部3/12	-	5.8	3.7	にぶい 赤褐	柿釉
823	369-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	4.1	3.0	にぶい 赤褐	柿釉
824	305-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部7/12	-	4.2	3.4	灰白	灰釉
825	333-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部9/12	-	4.2	2.4	灰白	灰釉
826	377-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	3.9	1.7	オリーブ黄	灰釉
827	377-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 4/12	8.0	-	3.5	灰白	灰釉
828	368-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	7.8	-	5.0	にぶい 赤褐	鉄軸
829	370-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 4/12	8.7	-	5.2	にぶい 赤褐	柿釉
830	377-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	9.6	-	5.4	灰白	灰釉
831	370-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	8.7	-	5.3	にぶい 赤褐	柿釉
832	370-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	8.8	-	4.2	暗赤褐	柿釉
833	372-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部4/12 底部12/12	8.6	3.8	6.0	褐	柿釉
834	370-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	8.6	-	5.3	にぶい 赤褐	柿釉
835	370-01	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口2/12 底部1/12	9.7	4.3	6.1	にぶい 赤褐	柿釉
836	377-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	4.9	4.3	灰白	灰釉
837	370-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	4.0	1.8	にぶい 赤褐	柿釉
838	379-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	4.0	2.6	オリーブ黄	灰釉
839	377-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部9/12	-	4.9	1.8	灰黄褐	灰釉
840	378-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	3.6	2.5	灰白	灰釉、鉄絵・呉須絵
841	377-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	9.8	-	5.0	灰白	灰釉、呉須絵
842	305-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	10.2	-	3.6	灰白	灰釉
843	307-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	9.8	-	2.2	暗赤褐	柿釉
844	370-06	陶器 (瀬戸・美濃)	丸碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	9.4	-	3.2	にぶい 赤褐	柿釉
845	368-06	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	10.7	-	4.1	灰白	鉄軸・灰釉掛け分け
846	368-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	7/12	11.0	4.0	5.4	にぶい 赤褐	柿釉・灰釉掛け分け
847	285-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	口5/12 底部12/12	8.2	4.2	5.6	暗赤褐	筒形碗、糸目、錯軸・灰釉

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
848	306-05	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	9.6	-	3.4	浅黄	京焼風、口錯、灰釉
849	317-08	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	13.3	-	3.2	灰黄	京焼風、灰釉
850	283-05	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	底部2/12	-	4.9	3.4	灰白	京焼風、灰釉、印銘あり
851	305-05	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	4.5	1.6	灰白	京焼風、灰釉
852	380-05	陶器 (肥前)	火入	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口1/12 底部6/12	12.0	6.6	7.3	灰白	京焼風、灰釉、鉄・呉須絵
853	375-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口5/12 底部12/12	11.8	4.0	4.4	明オリーブ 灰	梅文皿、灰釉、呉須絵
854	377-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口5/12 底部12/12	12.2	4.6	4.9	灰	梅文皿、灰釉、呉須絵
855	376-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部9/12	-	5.0	1.5	灰白	輪壳皿、灰釉
856	305-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部9/12	-	6.0	1.3	灰白	摺絵皿 (呉須)、灰釉
857	375-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口9/12 底部6/12	12.2	7.2	3.0	灰白	摺絵皿 (鉄絵)、灰釉
858	375-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口8/12 底部12/12	11.8	6.4	3.0	灰白	摺絵皿 (鉄絵)、灰釉
859	305-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部10/12	-	6.4	1.0	灰白	灰釉、見込みに目跡3ヶ所
860	379-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	5.8	1.7	灰黄	灰釉
861	367-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	26.0	-	3.1	灰黄	灰釉
862	376-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口1/12 底部2/12	24.6	13.6	4.0	浅黄	灰釉
863	377-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	24.7	-	2.7	灰白	灰釉
864	378-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	22.8	-	1.7	明オリーブ 灰	灰釉
865	373-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	25.8	-	3.0	にぶい 赤褐	錯釉
866	302-04	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部6/12 底部12/12	12.7	5.1	2.8	灰白	
867	376-09	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	12.0	-	1.8	灰白	灰釉
868	368-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	6.6	1.5	にぶい 赤褐	柿釉・灰釉掛け分け
869	307-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	9.8	-	1.5	にぶい 赤褐	柿釉
870	323-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	ほぼ完形	12.8	7.2	3.5	灰白	灰釉
871	317-07	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 小片	-	4.0	2.2	灰オリーブ	緑釉
872	333-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口1/12 底部4/12	13.5	7.8	3.6	にぶい黄	黄釉
873	387-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	14.8	5.7	灰オリーブ	灰釉、鉄絵
874	373-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	32.6	-	3.3	暗赤褐	柿釉・灰釉掛け分け
875	304-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	14.2	2.7	浅黄	鉄絵鉢、灰釉
876	287-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	口縁~胴部 1/12	39.0	-	4.8	灰白	鉄絵鉢、灰釉
877	333-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	1/12	12.4	8.4	2.2	灰白	丸皿、灰釉
878	378-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	11.7	6.4	2.2	灰白	丸皿、灰釉、底部に目跡
879	376-06	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~底部 2/12	13.6	8.2	2.9	灰白	丸皿、灰釉
880	376-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~底部 3/12	13.6	7.3	2.7	オリーブ黄	丸皿、灰釉
881	376-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	13.8	7.8	2.7	浅黄	輪壳皿、灰釉
882	376-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口3/12 底部12/12	12.2	6.0	3.2	灰白	輪壳皿、灰釉、見込み凹み
883	333-06	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部1/12	-	8.8	1.6	灰白	陶胎染付 (太白手)
884	364-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部7/12 底部12/12	15.8	8.2	4.1	浅黄橙	鉄絵海老文、灰釉、見込みに重ね焼き痕
885	321-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	-	-	2.2	淡黄	灰釉、方形、型打ちの布目
886	330-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口4/12 底部3/12	35.6	17.4	8.7	淡黄	鉄絵鉢 (二彩)、灰釉
887	304-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	14.8	3.2	灰白	鉄絵鉢、灰釉
888	304-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	15.8	2.8	灰白	鉄絵鉢、灰釉
889	316-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	16.5	4.4	にぶい 黄橙	鉄絵鉢、灰釉
890	304-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	7.8	2.2	灰白	志野?見込みに鉄釉で三重圏線
891	386-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	30.0	16.0	6.5	灰黄	鉄絵鉢、灰釉
892	388-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口1/12 底部5/12	34.0	14.0	12.0	浅黄	鉄絵鉢、灰釉
893	332-01	陶器 (瀬戸・美濃)	茶碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口3/12 底部12/12	13.0	5.0	7.8	灰黄	平形茶碗、高台三角形、砂目積み、灰釉、内面著しく摩耗
894	306-06	陶器 (瀬戸・美濃)	汁注	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部7/12	-	6.9	7.6	極暗赤褐	鉄釉
895	369-05	陶器 (瀬戸・美濃)	徳利	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	5.6	-	1.6	褐	柿釉
896	373-04	陶器 (瀬戸・美濃)	茶入蓋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	4/12	6.8	-	1.8	黒褐	鉄釉
897	374-04	陶器 (瀬戸・美濃)	徳利	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴~底部3/12	-	7.8	7.3	オリーブ褐	鉄釉、底部錯釉
898	374-02	陶器 (瀬戸・美濃)	壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	5.4	3.8	赤黒	鉄釉
899	374-01	陶器 (瀬戸・美濃)	壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	12.4	2.1	にぶい 赤褐	鉄釉
900	346-04	陶器	徳利	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部8/12	-	10.6	5.2	灰赤	強く焼き締まる

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
901	373-03	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	11.9	-	5.6	黒褐	鉄釉
902	317-01	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	11.6	-	8.4	にぶい 赤褐	柿釉
903	387-03	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	4/12	12.0	-	6.9	灰黄	灰釉、三足
904	334-06	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部5/12	-	8.0	1.6	にぶい褐	鉄釉、三足
905	306-02	磁器 青磁 (肥前)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	8.6	4.2	明オリーブ	底部錆釉
906	374-03	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	10.1	-	6.3	にぶい 黄褐	鉄釉
907	368-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	10.8	4.0	黒褐	鉄釉
908	387-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	6/12	-	6.7	10.0	灰白	灰釉、緑釉がけ
909	371-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口10/12 底部11/12	14.0	7.0	9.1	橙	片口鉢
910	376-07	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	7.8	-	2.7	灰白	灰釉
911	376-08	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 6/12	7.1	-	3.5	黄灰	灰釉
912	309-04	磁器 (肥前)	仏飯器	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	-	4.6	灰白	
913	316-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口1/12 底部7/12	7.4	6.4	5.5	褐	鉄釉
914	374-05	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	17.4	-	5.2	灰白	灰釉
915	303-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	18.4	-	4.0	灰白	灰釉
916	306-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	16.6	-	6.0	灰白	灰釉、緑釉がけ
917	368-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部7/12	-	10.0	3.4	にぶい 赤褐	柿釉
918	380-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部6/12	-	9.0	1.8	灰白	灰釉、内面釉剥ぎあり(皿の可能性)
919	371-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	6/12	19.4	12.4	6.6	灰黄	灰釉・柿釉掛け分け、三足
920	306-07	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	11.8	6.8	暗赤褐	錆釉
921	371-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	23.8	-	9.2	暗赤褐	片口鉢、鉄釉
922	333-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	27.1	-	3.5	浅黄	灰釉
923	319-01	瓦質土器	火鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部小片	-	-	5.7	灰	三足
924	343-01	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	25.0	-	4.6	暗褐	鉄釉
925	320-01	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	19.0	12.7	褐	柿釉
926	307-01	陶器 (肥前)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	22.0	-	3.6	暗灰色	三島手
927	378-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	14.4	3.0	淡黄	灰釉
928	307-02	陶器 (肥前)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	8.6	3.0	暗オリーブ 褐	刷毛目、緑釉
929	303-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	17.6	5.5	褐	錆釉、有高台
930	314-02	陶器 (備前)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	13.4	7.4	にぶい 赤褐	摺目ランダムな放射状、焼き締まる
931	366-04	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	10.8	-	3.2	黒褐	刷毛目
932	367-02	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	11.1	3.6	5.0	灰褐	刷毛目
933	366-02	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	10.8	3.6	5.4	灰黄褐	刷毛目
934	367-01	陶器 (肥前)	碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	9/12	10.4	3.6	5.0	黄灰	白土がけ
935	333-03	陶器 (肥前)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部12/12	-	5.4	4.5	灰黄褐	刷毛目
936	317-06	陶器 (肥前)	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部9/12	-	4.0	1.9	オリーブ灰	蛇の目釉剥ぎ、内：銅緑釉、外：透明 釉
937	314-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	36.6	-	5.8	灰褐	錆釉
938	341-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	26.0	-	4.9	暗褐	錆釉
939	340-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	34.0	-	10.6	褐	錆釉
940	341-04	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	37.0	-	3.3	褐	錆釉
941	340-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	38.0	-	6.1	褐	錆釉
942	341-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	42.8	-	5.5	にぶい 赤褐	錆釉
943	302-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	28.8	-	8.4	にぶい 赤褐	錆釉
944	341-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	30.8	-	8.1	赤褐	錆釉
945	340-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	32.0	-	4.5	褐	錆釉
946	302-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	36.2	-	5.0	明赤褐	錆釉
947	328-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	胴~底部 12/12	-	16.0	16.5	暗褐	錆釉、内面著しく摩耗
948	337-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	13.2	11.0	灰褐	錆釉
949	285-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	底部5/12	-	11.6	7.2	暗赤褐	錆釉
950	336-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	14.6	12.4	にぶい 赤褐	錆釉
951	302-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	14.0	7.1	褐	錆釉、底部外面も摩耗
952	338-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部4/12	-	9.0	6.3	にぶい 赤褐	錆釉、底部外面も著しく摩耗
953	338-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部5/12	-	15.2	7.5	褐灰	錆釉

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
954	318-01	陶器 (常滑)	片口鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	24.0	-	7.3	赤灰	内面摩耗
955	346-01	陶器 (常滑)	片口鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	29.0	-	8.5	灰褐	内面摩耗
956	315-02	陶器 (常滑)	片口鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	30.4	-	6.6	橙	内面摩耗
957	326-01	陶器 (常滑)	片口鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	31.0	-	11.2	褐灰	内面摩耗
958	315-01	陶器 (常滑)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	30.4	-	12.4	にぶい橙	内面へラ描き
959	345-02	陶器 (常滑)	火鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	31.7	-	4.2	にぶい橙	
960	345-03	陶器 (常滑)	火鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	-	-	5.8	にぶい 黄橙	
961	352-02	陶器 (常滑)	火鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	29.6	-	8.5	灰黄褐	
962	326-02	陶器 (常滑)	火鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	24.8	17.8	6.3	にぶい橙	
963	342-03	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~底部 3/12	14.4	-	5.8	にぶい 赤褐	
964	353-03	陶器 (常滑)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部小片	-	-	6.0	赤	内面摩耗、摺目
965	345-01	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	16.6	-	9.0	褐灰	
966	344-04	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	17.4	-	7.0	灰褐	
967	344-01	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	18.6	-	5.1	橙	
968	316-01	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	17.4	-	6.5	明赤褐	
969	344-02	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	20.8	-	7.3	にぶい 赤褐	
970	318-02	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 3/12	22.0	-	15.8	にぶい橙	
971	344-03	陶器 (常滑)	火消壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	23.0	-	9.7	にぶい橙	
972	346-02	陶器 (常滑)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	30.6	-	-	褐灰	
973	303-01	陶器 (常滑)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	28.4	-	8.0	黄灰	内面煤付着
974	347-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	84.8	-	12.5	赤褐	
975	351-01	陶器 (常滑)	大甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	56.0	-	8.2	橙	
976	372-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	46.2	-	13.5	にぶい橙	
977	325-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂		約51	-	14.58	灰褐	
978	348-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	56.2	-	19.5	褐灰	
979	301-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗青灰色粘砂	口縁部1/12	50.6	-	6.0	にぶい橙	
980	353-02	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	18.0	10.0	にぶい橙	
981	345-04	陶器 (常滑)	片口鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部2/12	-	15.0	3.8	橙	内面著しく摩耗
982	346-03	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	17.0	5.2	灰白	
983	349-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	17.8	7.0	にぶい 赤褐	内面白色付着物、便槽か
984	301-02	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗青灰色粘砂	口縁部1/12	27.2	-	8.7	灰黄褐	
985	353-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	33.6	-	7.3	にぶい褐	
986	351-02	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	36.3	-	5.7	暗赤灰	真焼
987	352-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	33.5	-	10.2	にぶい褐	
988	313-01	陶器 (常滑)	甕	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	37.4	-	14.2	にぶい橙	
989	329-01	陶器 (常滑)	甕	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	胴~底部 12/12	-	13.0	12.5	褐灰	内面煤付着
990	316-02	陶器 (常滑)	鉢	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部3/12	-	11.9	6.8	明赤褐	
991	349-02	陶器 (常滑)	壺	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部12/12	-	12.8	6.5	にぶい 赤褐	
992	342-02	土製品	加工円板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	完形	径 4.6	-	厚 1.1	にぶい 赤褐	常滑甕を転用
993	378-05	土製品	加工円板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	完形	径 4.3	-	厚 1.2	灰白	瀬戸・美濃碗を転用、27.9g
994	312-04	土製品	加工円板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	完形	径 4.5	-	厚 1.5	暗褐	瀬戸・美濃碗を転用、44.0g
995	302-05	土製品	加工円板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	完形	径 2.5	-	厚 0.9	黒褐	瀬戸・美濃挿鉢を転用、側面研磨、 6.6g
996	334-05	土製品	加工円板	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	1/2	径 3.0	-	厚 0.7	暗褐	瀬戸・美濃碗を転用、側面研磨、4.7g
997	301-04	土製品	加工円板	12区	SZ550 (12区3層) 暗青灰色粘砂	完形	径 5.5	-	厚 1.8	暗灰	瓦を転用、47.3g
998	301-03	土製品	加工円板	12区	SZ550 (12区3層) 暗青灰色粘砂	完形	径 6.2	-	厚 2.0	にぶい橙	瓦を転用、73.4g
999	350-01	瓦	丸瓦	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/2	-	-	厚 1.6	灰	釘穴 (三角形)
1000	343-02	瓦	軒丸瓦	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	瓦当1/2	径1 6.6	-	厚 2.0	暗灰	巴文
1001	331-01	瓦	軒丸瓦	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	-	径1 4.4	-	厚 2.0	灰	巴文、珠文11
1002	339-01	瓦	道具瓦	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	-	-	幅1 2.2	-	灰	
1003	342-01	瓦	道具瓦	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	-	-	幅 6.6	厚 4.0	暗灰黄	
1004	356-07	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	8.2	-	1.35	にぶい橙	
1005	322-04	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	4/12	7.8	-	1.6	にぶい橙	
1006	353-06	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.0	-	1.6	浅黄	油煙付着



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1007	308-04	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	8.8	-	1.4	にぶい橙	油煙付着
1008	356-03	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	8.8	-	1.3	にぶい橙	
1009	308-05	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	8.8	-	1.9	にぶい橙	
1010	352-03	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	ほぼ完形	9.6	-	1.6	褐灰	
1011	372-03	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	9.0	-	1.4	灰黄褐	油煙付着
1012	356-02	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	8.9	-	1.4	にぶい橙	油煙付着
1013	356-01	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	8.6	-	1.5	にぶい橙	油煙付着
1014	355-05	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.2	-	1.5	灰白	
1015	352-05	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.0	-	1.6	にぶい 黄橙	
1016	308-06	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.2	-	1.6	にぶい橙	
1017	308-09	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	8.8	-	1.4	灰黄褐	油煙付着
1018	354-07	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.2	-	1.5	にぶい橙	
1019	352-04	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	9.8	-	1.8	灰黄褐	油煙付着
1020	353-05	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5/12	10.3	-	1.9	にぶい 黄橙	油煙付着
1021	352-06	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	10.3	-	1.4	にぶい橙	油煙付着
1022	308-07	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	9.8	-	1.8	にぶい橙	
1023	308-08	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	10.6	-	1.2	にぶい橙	油煙付着
1024	356-08	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	11.0	-	1.3	にぶい橙	
1025	363-05	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	10.5	6.5	1.45	にぶい褐	油煙付着
1026	356-06	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	1/12	6.1	-	1.3	にぶい橙	
1027	355-06	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	6.6	-	1.2	にぶい橙	
1028	356-05	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	6.8	-	1.1	にぶい橙	
1029	356-04	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	6/12	7.8	-	1.1	橙	
1030	323-01	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	7.9	-	1.7	にぶい橙	
1031	324-04	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	2/12	10.8	-	1.9	灰白	
1032	354-06	土師器	皿	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	3/12	11.8	-	1.6	橙	
1033	354-04	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	13.6	-	2.6	灰白	
1034	354-03	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	13.6	-	2.8	灰黄褐	
1035	354-02	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	15.8	-	2.4	にぶい 黄橙	
1036	354-01	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	4/12	15.8	-	3.2	にぶい橙	
1037	357-03	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	39.2	-	2.5	にぶい褐	
1038	357-02	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	38.2	-	5.0	黒褐	
1039	357-01	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	39.2	-	4.0	灰褐	
1040	358-02	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	27.0	-	6.0	にぶい褐	
1041	357-04	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	28.8	-	7.5	にぶい 赤褐	
1042	361-01	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	27.2	-	5.5	にぶい橙	
1043	284-02	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色シルト	口縁~胴部 1/12	21.4	-	4.0	橙	
1044	358-01	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 2/12	26.2	-	5.7	にぶい 黄橙	
1045	358-03	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	23.8	-	6.0	灰黄褐	
1046	358-05	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	16.4	-	4.0	灰白	
1047	358-04	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	23.0	-	3.7	黒褐	
1048	361-03	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	35.4	-	2.9	にぶい橙	
1049	360-01	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	35.8	-	3.5	暗灰黄	
1050	308-02	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	31.8	-	3.4	にぶい橙	
1051	312-03	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	33.6	-	2.7	灰黄褐	
1052	308-01	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~頸部 1/12	34.8	-	1.4	にぶい橙	
1053	361-02	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	35.8	-	2.5	にぶい橙	
1054	362-01	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	38.8	-	6.0	にぶい褐	
1055	313-03	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	37.8	-	2.2	にぶい 黄橙	
1056	361-04	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	37.5	-	2.9	にぶい橙	
1057	362-02	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	39.6	-	3.7	灰褐	
1058	362-03	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	40.0	-	3.0	にぶい橙	
1059	362-04	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁~胴部 1/12	39.5	-	4.3	にぶい橙	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1060	361-05	土師器	焙烙	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部1/12	43.0	-	2.4	にぶい 黄橙	
1061	353-04	土師器	蓋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	9/12	12.2	-	1.8	にぶい 黄橙	
1062	354-05	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	13.0	-	2.1	にぶい 黄橙	
1063	313-02	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁部2/12	13.8	-	2.8	にぶい 橙	
1064	308-03	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～肩部 3/12	12.0	-	4.0	にぶい 橙	
1065	360-03	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 1/12	16.2	-	4.3	にぶい 黄橙	
1066	360-02	土師器	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～胴部 1/12	20.0	-	7.4	灰黄褐	
1067	355-01	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部3/12	-	-	8.5	橙	
1068	312-02	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～肩部 3/12	12.4	-	6.5	にぶい 橙	
1069	360-04	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	口縁～肩部 3/12	11.0	-	8.0	にぶい 橙	
1070	355-03	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部1/12	-	-	3.3	にぶい 橙	
1071	359-02	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部1/12	-	-	4.9	にぶい 黄橙	
1072	359-03	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部1/12	-	-	6.4	にぶい 黄褐	
1073	359-04	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部1/12	-	-	6.1	にぶい 橙	
1074	312-01	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部3/12	-	-	9.0	にぶい 橙	
1075	359-01	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部1/12	-	-	5.5	灰黄褐	
1076	355-02	土師器	茶釜	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	胴部1/12	-	-	4.0	にぶい 橙	
1077	363-04	土師器	台付碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部1/12	-	4.1	1.0	灰黄	
1078	355-04	土師器	台付碗	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底部11/12	-	4.8	2.0	浅黄橙	
1079	243-03	磁器 染付 (肥前)	小杯	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部9/12	-	2.5	2.2	白	
1080	243-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.2	3.7	明緑灰	網目文
1081	239-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口1/12 底部5/12	8.6	3.6	4.7	灰白	
1082	243-08	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.5	1.6	白	高台内銘「大明年製」
1083	243-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 2/12	11.6	-	5.4	白	
1084	244-01	磁器 染付 (肥前)	碗蓋	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	7/12	9.4	3.7	3.1	明オリーブ 灰	染付青磁、コンニャク印判(五弁花)、 四方禪文
1085	244-02	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部4/12 底部5/12	10.6	5.0	6.7	明オリーブ 灰	染付青磁、朝顔形碗、コンニャク印判 (五弁花)、四方禪文
1086	229-02	磁器 染付 (肥前)	碗蓋	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	ほぼ完形	10.0	4.2	3.4	明オリーブ 灰	染付青磁、朝顔形碗、コンニャク印判(五 弁花)、四方禪文、二重方形枠に渦「福」
1087	244-04	磁器 染付 (肥前)	碗蓋	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	1/12	9.8	-	1.8	灰白	四方禪文
1088	243-07	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部5/12	-	4.0	2.2	白	方形枠に変形字
1089	250-06	磁器 青磁 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部2/12	-	5.8	2.5	明緑灰	陰刻花文、高台畳付のみ露胎
1090	243-05	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部2/12	-	7.2	1.6	白	
1091	244-03	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部3/12	13.8	4.2	4.2	灰白	コンニャク印判(五弁花)、渦「福」
1092	245-01	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	6/12	16.6	11.6	3.0	白	口錯、高台内に二重方形枠「福」
1093	245-02	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口8/12 底部10/12	13.2	8.3	3.9	明オリーブ 灰	染付青磁、蛇の目凹形高台、渦「福」
1094	250-01	磁器 青磁 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部2/12	-	11.5	3.2	緑	底部蛇の目削ぎ、錯軸
1095	243-02	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	4/12	13.4	6.3	2.85	白	蛇の目削ぎ
1096	243-06	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	16.4	-	3.7	白	
1097	250-02	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12 底部12/12	10.5	3.7	6.9	黒褐	鉄軸
1098	248-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	11.0	-	3.9	にぶい 赤褐	柿軸
1099	239-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	胴～底部10/12	-	2.2	5.0	暗赤褐	鉄軸
1100	250-05	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.0	1.6	黒褐	鉄軸
1101	247-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.0	2.3	灰白	白天目、灰軸
1102	264-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口11/12 底部12/12	8.95	3.6	6.1	灰白	灰軸、鉄絵
1103	264-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口5/12 底部12/12	9.3	3.9	6.0	灰白	腰錯茶碗、灰軸・鉄軸
1104	264-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	10/12	11.7	3.9	6.3	灰白	灰軸、呉須付け掛け
1105	239-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部12/12	-	4.05	2.0	淡黄	平碗、灰軸、呉須絵
1106	235-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	11.2	-	3.1	灰白	灰軸
1107	250-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部9/12	-	4.3	3.2	黒	鉄軸
1108	266-02	陶器 (瀬戸・美濃)	汁注	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部12/12	-	7.2	9.8	灰白	灰軸
1109	239-05	陶器 (肥前)	碗	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部小片	8.8	-	3.2	淡黄	京焼風、灰軸、鉄絵(山水)
1110	249-04	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	4/12	9.4	-	5.3	明黄褐	黄瀬戸、三足
1111	250-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	15.6	-	5.6	黒褐	鉄軸
1112	249-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	15.4	-	5.2	灰白	灰軸

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1113	249-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	19.8	-	8.1	灰白	灰釉
1114	248-04	陶器 (瀬戸・美濃)	風炉	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	19.4	-	6.5	灰褐	柿釉
1115	241-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	32.8	-	4.9	にぶい 赤褐	錆釉
1116	248-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	31.2	-	4.5	褐灰	錆釉
1117	247-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	45.0	-	8.0	灰褐	錆釉
1118	264-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	37.0	-	9.1	褐	錆釉
1119	247-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部2/12	-	16.0	3.6	褐	錆釉、底部外面も摩耗
1120	252-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部3/12	-	14.5	6.2	灰白	灰釉、緑釉がけ
1121	249-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	5/12	13.8	2.8	2.5	灰オリーブ	灰釉
1122	248-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	15.0	-	3.0	灰白	灰釉
1123	247-04	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 灰黄褐色～粘質土	6/12	8.0	-	1.7	褐	錆釉
1124	251-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部2/12 底部4/12	26.1	14.0	5.6	灰白	馬の目皿
1125	247-03	土製品	加工円板	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	完形	長 7.0	幅 6.4	1.0	暗赤褐	常滑甕を転用、76.2g
1126	251-06	土師器	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	2/12	5.2	-	1.0	橙	油煙付着
1127	251-05	土師器	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	4/12	5.1	-	1.2	橙	油煙付着
1128	251-04	土師器	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	2/12	9.4	-	-	灰黄	
1129	251-03	土師器	皿	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	3/12	8.9	-	1.8	にぶい橙	
1130	252-04	土師器	鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	9.7	-	1.4	にぶい橙	
1131	252-03	土師器	鍋	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部2/12	14.5	-	1.8	浅黄橙	
1132	242-02	土師器	焙烙	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	38.8	-	3.5	にぶい褐	
1133	251-01	土師器	焙烙	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 1/12	39.4	-	2.8	にぶい 黄橙	
1134	252-02	土師器	焙烙	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	37.4	-	3.8	橙	
1135	246-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部3/12	58.6	-	7.1	橙	
1136	236-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部2/12	60.4	-	15.0	にぶい 赤褐	
1137	237-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	32.6	-	15.9	にぶい 赤褐	
1138	241-03	陶器 (常滑)	火鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁～胴部 3/12	17.9	-	6.0	橙	内面煤付着
1139	241-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部4/12	-	14.4	5.7	浅黄橙	
1140	239-02	陶器 (常滑)	片口鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	底部2/12	-	11.6	4.4	橙	内面摩耗
1141	265-01	陶器 (常滑)	甕	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	胴～底部5/12	-	18.8	16.2	灰白	内面付着物、便槽か
1142	246-02	陶器 (常滑)	鉢	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	31.6	-	4.0	橙	
1143	249-02	陶器 (常滑)	火消壺	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	口縁部1/12	20.4	-	8.1	橙	
1144	259-01	瓦	丸瓦	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	1/6	-	-	幅1.9	灰	凸面ナデ、凹面コビキB
1145	260-01	瓦	丸瓦	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	1/6	-	-	幅1.9	にぶい橙	凸面ナデ、凹面コビキB、燻し無い(か)赤変
1146	240-01	瓦	軒平瓦	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	1/6	-	-	幅1.8	暗灰	
1147	242-01	瓦	平瓦	8区	SZ551 (8区5・6層) 暗灰黄～黒褐色粘砂	1/4	-	-	幅1.8	橙	赤変している
1148	207-05	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	11.8	-	5.0	にぶい 赤褐	鉄釉
1149	212-04	陶器 (信楽)	皿	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	底部6/12	-	3.4	1.2	灰白	
1150	191-02	陶器 (信楽)	鍋	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 3/12	13.6	-	3.5	赤褐	灰釉、飛鉋
1151	191-01	陶器 (瀬戸・美濃)	行平鍋	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	20.0	-	-	灰白	
1152	208-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口1/12 底部3/12	15.6	-	3.5	灰白	
1153	192-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	完形	6.9	3.6	1.5	褐	
1154	212-02	陶器 (信楽)	土瓶	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	注口部	-	-	-	灰白	
1155	208-02	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 3/12	9.8	-	2.5	灰白	
1156	208-01	陶器 (信楽)	土瓶	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁部3/12	10.0	-	3.0	灰白	灰釉、飛鉋
1157	212-05	陶器 (瀬戸・美濃)	土瓶	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	底部2/12	-	7.2	1.5	にぶい 黄橙	底部煤付着
1158	207-02	陶器 (瀬戸・美濃)	土瓶	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁部2/12	12.0	-	4.0	浅黄	灰釉、飛鉋
1159	212-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	肩～胴部3/12	8.0	-	8.7	灰白	外：灰釉、内：鉄釉、「中」
1160	211-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 7/12	-	9.4	-	灰白	灰釉
1161	185-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	肩～底部 12/12	-	10.8	19.6	灰白	灰釉
1162	198-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	胴部～底部 12/12	-	10.5	11.2	灰白	外：灰釉、内：鉄釉
1163	211-03	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	胴部3/12	-	-	-	灰白	灰釉
1164	212-03	陶器 (瀬戸・美濃)	花入	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁部4/12	9.8	-	1.7	黒褐	鉄釉
1165	207-03	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	底部1/12	-	9.6	2.4	灰白	灰釉

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1166	185-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	ほぼ完形	-	4.7	8.6	灰白	灰釉、呉須で屋号
1167	210-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	胴~底部12/12	-	8.2	6.0	褐	柿釉に鉄釉流し掛け
1168	210-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12 底部4/12	32.6	14.6	12.0	にぶい 赤褐	錆釉、底部外面も摩耗
1169	213-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	口縁部2/12	19.0	-	5.8	灰白	上野釉、灰釉、錆釉、信楽にも類似品 (火鉢)あり
1170	198-01	瓦質土器	風炉	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	底部4/12	-	-	14.5	黒	三足、外面ミガキ、足に亀甲状にスタ ンプ
1171	212-06	瓦質土器	五徳	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	1/6	15.6	-	9.6	灰黄	
1172	199-01	瓦	丸瓦	8区	SZ552 (土器集中) 灰黄褐色砂質土	1/2	-	幅 14.0	厚 1.8	にぶい 黄橙	凸面ナデ、凹面コビキB後叩き、燻し弱 い
1173	068-03	陶器 (瀬戸・美濃)	梅文皿	3区	Pit3	口縁部2/12 底部12/12	11.4	3.3	4.9	灰白	灰釉、鉄絵、呉須絵
1174	085-05	陶器 (瀬戸・美濃)	梅文皿	3区	Pit1	口縁部~胴部 2/12	12.4	-	3.6	灰白	灰釉、呉須絵
1175	085-08	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	Pit3	口縁部2/12 底部6/12	11.0	4.5	5.5	褐	柿釉、灰釉掛け分け
1176	085-07	陶器 (肥前)	皿	3区	Pit3	口縁部5/12 底部12/12	11.3	3.0	4.2	灰黄	蛇の目釉剥ぎ、内:銅緑釉、外:透明 釉
1177	085-06	陶器 (京都・信楽)	鉢	3区	Pit2	底部6/12	-	6.0	2.2	灰黄	灰釉、内面に目跡、胎土精良で硬い
1178	105-02	陶器 (常滑)	火消壺	3区	Pit3	3/12	15.0	11.4	14.6	灰	
1179	093-02	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	Pit3	口縁部5/12 底部12/12	10.2	4.1	5.8	灰白	
1180	037-01	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	1区3層 盛土	口縁部2/12	10.0	-	4.2	灰白	コンニャク印判(菊花)
1181	036-04	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	1区3層 盛土	底部3/12	-	3.5	2.3	灰白	高台内方形枠に変形字
1182	037-02	磁器 染付 (肥前)	碗	1区	1区3層 盛土	底部4/12	-	4.5	3.2	灰白	
1183	036-01	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	1区	1区3層 盛土	2/12	8.8	10.4	4.6	灰白	
1184	036-02	陶器 (萬古)	急須	1区	1区3層 盛土	口縁~胴部 4/12	8.2	-	5.0	赤褐	
1185	038-02	陶器 (萬古)	急須	1区	1区3層 盛土	底部4/12	-	9.5	1.2	にぶい 赤褐	
1186	037-04	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	1区	1区3層 盛土	口縁部3/12	4.0	-	3.2	淡黄	灰釉
1187	037-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	1区	1区3層 盛土	9/12	6.3	2.8	1.5	灰白	灰釉
1188	040-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	1区	1区3層 盛土	底部1/12	-	16.8	3.2	灰白	鉄釉、見込みに目跡
1189	035-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	1区	1区3層 盛土	口縁部1/12	19.0	-	1.8	灰白	灰釉
1190	038-01	陶器 (瀬戸・美濃)	植木鉢	1区	1区3層 盛土	底部2/12	-	21.0	6.2	淡黄	灰釉
1191	035-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区	1区3層 盛土	口縁部小片	37.8	-	4.7	にぶい 赤褐	錆釉
1192	053-01	陶器 (常滑)	甕	1区	1区3層 盛土	口縁部1/12	65.3	-	8.8	褐灰	
1193	034-01①	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	1区	1区4層 暗青灰色粗砂	口縁部2/12 底部6/12	21.1	18.0	29.0	青黒	内:灰釉、外:鉄釉、底部内面に目跡
1194	042-01	瓦	丸瓦	1区	1区4層 暗青灰色粗砂	1/6	長 8.2	幅 10.0	厚 2.8	灰黄	凸面:ナデ、凹面:布目、燻し無し
1195	039-01	瓦	平瓦	1区	1区4層 暗青灰色粗砂	1/4	長 16.6	幅 16.0	厚 3.1	暗灰	凹面ナデ、凸面台圧痕
1196	040-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	1区	1区4層 暗青灰色粗砂	胴~底部12/12	-	4.8	3.7	灰白	腰錆茶碗、外:鉄釉、内:灰釉
1197	035-03	土師器	焙烙	1区	1区4層 暗青灰色粗砂	口縁~胴部 1/12	28.7	-	2.2	にぶい 橙	
1198	060-02	磁器 染付 (肥前)	碗	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	口縁~胴部 2/12	10.2	-	4.5	灰白	コンニャク印判
1199	059-03	土師器	蓋	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	3/12	11.8	8.8	1.6	橙	
1200	068-02	土師器	茶釜	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	胴部~底部 11/12	-	8.0	10.3	浅黄橙 橙	
1201	059-05	土師器	皿	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	1/12	8.6	-	2.0	灰白	中世
1202	059-04	土師器	皿	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	11/12	7.1	-	1.1	にぶい 黄橙	
1203	051-06	土師器	皿	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	完形	6.9	-	1.2	橙	
1204	060-03	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	口縁部小片	7.0	-	2.0	褐	鉄釉
1205	060-01	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	2区	2区5層 灰黄褐色砂質シルト	底部12/12	4.8	3.5	-	明オリーブ 灰	灰釉
1206	070-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区	2区5層 灰黄褐色砂質シルト	口縁~胴部 3/12	40.3	-	14.5	暗赤褐	錆釉
1207	059-02	陶器 (常滑)	火鉢	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	26.0	-	4.7	にぶい 黄橙	
1208	058-02	瓦	丸瓦	2区	2区5層 灰褐色砂質土	小片	-	-	厚 2.0	灰	
1209	071-01	石製品	石臼	2区	2区5層 灰黄褐色砂質土	1/2	径 32.0	-	厚 9.4	-	砂岩、使用痕顕著
1210	089-06	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	口縁部1/12	15.0	-	2.8	灰白	端反碗
1211	088-07	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	小杯	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	口縁~胴部 1/12	5.6	-	2.5	灰白	
1212	088-04	磁器 赤絵 (瀬戸・美濃)	碗	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	口縁~胴部 1/12	9.0	-	2.3	灰白	
1213	088-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	底部7/12	-	6.6	2.1	浅黄	灰釉、刷毛目
1214	089-05	陶器 (肥前)	碗	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	底部6/12	-	3.9	2.3	浅黄橙	京焼風、灰釉、鉄絵(山水)
1215	086-06	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	胴~底部2/12	-	14.4	5.9	にぶい 赤褐	錆釉、底部外面も摩耗
1216	086-05	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	胴~底部3/12	-	12.8	6.2	にぶい 赤褐	錆釉
1217	092-01	陶器 (常滑)	甕	3区	3区3層 灰黄褐色砂質土	口縁~胴部 1/12	59.2	-	13.2	橙	天地不明、井戸側の可能性もあり
1218	091-01	陶器 (常滑)	甕	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	口縁~胴部 1/12	61.2	-	8.8	赤橙	



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1219	089-02	瓦	軒丸瓦	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	1/2	-	-	-	暗青灰	接合部刻み
1220	089-01	瓦	軒丸瓦	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	1/2	-	-	-	灰	接合部刻み
1221	079-01	瓦	棧瓦	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	1/6	-	-	1.8	暗灰	
1222	088-05	磁器 染付 (瀬戸・美濃)	碗	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	口縁～胴部 1/12	11.2	-	5.2	明青灰	端反碗
1223	097-03	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	2/12	9.5	-	4.0	灰白	
1224	103-02	磁器 染付 (肥前)	皿	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	4/12	13.4	8.0	4.1	灰白	
1225	089-04	磁器 (肥前)	瓶	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	口縁部2/12	3.6	-	2.7	灰白	
1226	105-03	陶器 (瀬戸・美濃)	瓶	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	6/12	-	7.4	8.6	灰白	灰釉、底部に墨書
1227	097-02	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	4/12	10.2	4.2	4.6	灰白	
1228	090-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	口縁部小片	39.6	-	4.0	褐	錆釉
1229	090-02	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	口縁～肩部 1/12	29.5	-	8.2	黒	柿釉に鉄釉流し掛け
1230	090-04	陶器 (信楽)	焼台	3区	3区3層 暗灰褐色砂質土	口縁～胴部 3/12	17.0	-	10.7	暗赤褐	自然釉顯著、強く焼き締まる
1231	090-03	陶器 (瀬戸・美濃)	灯火具	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	1/12	-	-	3.6	灰黄	灰釉
1232	102-01	瓦	棧瓦	3区	3区4層 灰黄褐色砂 質シルト～細砂	1/6	-	-	厚1.8	灰	隅切り欠き
1233	089-03	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	3区7層 黄褐色粗砂	口縁～胴部 2/12	8.2	-	4.5	灰白	四方襷文
1234	088-08	磁器 染付 (肥前)	小杯	3区	3区7層 黄褐色粗砂	口縁部1/12	7.3	-	2.4	灰白	梵字文
1235	097-05	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	口縁部2/12	10.3	-	2.5	灰白	
1236	097-04	磁器 染付 (肥前)	碗	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	口縁部2/12	10.3	-	3.0	灰白	
1237	097-06	磁器 染付 (肥前)	瓶	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	底部6/12	-	4.2	2.4	明緑灰	
1238	098-04	土師器	鉢	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	口縁～胴部 1/12	16.3	-	4.1	にぶい橙	
1239	087-02	土師器	茶釜	3区	3区7層 にぶい黄褐色粗砂	口縁部2/12	12.8	-	3.3	にぶい橙	
1240	102-02	土師器	茶釜	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	胴部1/12	27.4	-	2.5	にぶい褐	
1241	087-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	3区7層 にぶい黄褐色粗砂	口縁～胴部 1/12	27.4	-	8.0	灰褐	錆釉
1242	088-01	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	3区	3区7層 黄褐色粗砂	口縁～胴部 1/12	10.0	-	1.6	褐	錆釉
1243	102-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	口縁～胴部 1/12	10.9	-	4.0	褐	柿釉
1244	088-02	陶器 (瀬戸・美濃)	仏飯器	3区	3区7層 黄褐色粗砂	脚部12/12	-	4.2	3.0	灰	灰釉
1245	097-01	陶器 (常滑)	火鉢	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	口縁～胴部 2/12	31.2	-	6.2	にぶい橙	
1246	099-01	瓦	丸瓦	3区	3区7層 黄褐色粗砂	1/6	-	-	厚2.5	暗灰	凸面ナデ、凹面コビキB後叩き
1247	098-01	瓦	丸瓦	3区	3区7層 にぶい黄褐色細砂	1/6	-	-	厚2.5	灰白	凸面ナデ、凹面布目、コビキB、吊り紐痕
1248	086-03	磁器 白磁 (肥前)	碗	3区	3区7層 灰色極細砂～砂質シルト	口縁～胴部 1/12	9.4	-	4.2	白	
1249	086-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	3区	3区7層 灰色極細砂～砂質シルト	底部12/12	-	4.6	2.7	暗赤褐	腰錆茶碗、外：錆釉、内：灰釉
1250	088-06	陶器 (常滑)	火鉢	3区	3区7層 灰色極細砂～砂質シルト	口縁部1/12	23.8	-	4.9	橙	
1251	086-01	土師器	鍋	3区	3区7層 灰色極細砂～砂質シルト	口縁～頸部 1/12	27.4	-	4.0	にぶい 黄橙	中世II期
1252	094-01	陶器 (常滑)	甕	3区	3区7層 灰色極細砂～砂質シルト	胴～底部3/12	-	20.3	15.4	灰黄褐	
1253	129-03	磁器 染付 (肥前)	碗	4区	4区3層 黒褐色極細砂	底部7/12	-	3.6	1.7	白	見込みに「大明年製」、破損後打ち欠き
1254	128-06	土師器	皿	4区	4区2層 灰黄色砂質土	6/12	6.8	-	1.0	橙	
1255	128-05	土師器	皿	4区	4区2層 灰黄色砂質土	口縁～底部 4/12	9.8	-	1.6	橙	
1256	128-07	陶器 (京都・信楽)	碗	4区	4区2層 灰黄色砂質土	口縁～胴部 1/12	10.0	-	3.2	にぶい橙	灰釉
1257	128-08	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	4区	4区2層 灰黄色砂質土	底部3/12	-	7.9	2.4	浅黄	灰釉
1258	129-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鍋	4区	4区2層 灰黄色砂質土	胴～底部	-	6.5	2.3	淡黄	小さい足付き、底部煤付着
1259	129-01	陶器 (常滑)	火鉢	4区	4区2層 灰黄色砂質土	口縁部1/12	28.0	-	4.2	にぶい橙	
1260	127-01	瓦	棧瓦	4区	4区2層 灰黄色砂質土	2/3	28.0	-	厚1.9	暗灰	隅切り欠き
1261	128-01	土師器	焙烙	4区	4区3層 暗褐色極細砂	口縁部1/12	35.7	-	1.5	橙	
1262	129-04	土師器	皿	4区	4区3層 褐灰色粘砂	9/12	9.0	-	1.5	橙	油煙付着
1263	128-02	土師器	茶釜	4区	4区3層 暗褐色極細砂	口縁部2/12	11.4	-	4.0	にぶい橙	
1264	128-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	4区	4区3層 暗褐色極細砂	口縁～胴部 1/12	18.8	-	5.8	暗赤褐	錆釉
1265	122-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	4区	4区3層 暗灰色粘砂	口縁～胴部 2/12	30.0	-	10.0	暗赤褐	錆釉
1266	166-02	陶器 (瀬戸・美濃)	花生	4区	4区3層 黒褐色粘砂	胴～底部 12/12	-	8.0	14.3	褐	鉄釉、内部に鉄塊状の錆、鉄漿容器か
1267	140-02	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	5区西2・3層 暗灰黄色砂質土	底部10/12	-	3.6	2.4	明緑灰	二重網目文
1268	140-03	磁器 染付 (肥前)	碗	5区	5区西2・3層 暗灰黄色砂質土	胴～底部9/12	-	3.6	4.2	オリーブ灰	筒形碗、染付青磁、見込みにコンニャク印判 (五弁花)
1269	139-04	磁器 赤絵 (肥前)	碗	5区	5区西2・3層 暗灰黄色砂質土	口縁～胴部	10.0	-	3.0	灰白	
1270	139-02	陶器 (京都・信楽)	碗	5区	5区東3・4層 暗灰褐色砂質土	胴～底部4/12	-	2.9	3.4	灰白	灰釉
1271	138-06	土師器	皿	5区	5区西2・3層 暗灰黄色砂質土	1/12	8.0	-	1.4	橙	

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1272	138-04	陶器 (常滑)	火消壺	5区	5区西2・3層 暗灰黄色砂質土	口縁部1/12	10.0	-	3.4	橙	
1273	141-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	5区	5区東3・4層 にぶい黄色粗砂	底部1/12	-	19.4	7.4	暗赤灰	錆釉、有高台
1274	165-01	瓦	雁振瓦	5区	5区西2・3層 暗灰黄色砂質土	1/4	-	-	1.8	暗灰	
1275	139-05	陶器 (肥前)	皿	5区	5区西4層 灰オリープ粗砂	口5/12 底部9/12	12.8	4.3	3.7	浅黄	蛇の目釉剥ぎ、内：銅緑釉、外：透明釉
1276	141-03	陶器 (肥前)	碗	5区	5区西4層 灰オリープ粗砂	口1/12 底部6/12	12.2	5.0	4.8	淡黄	京焼風、平碗、灰釉、鉄絵(山水)、高台内印銘「中村金」、高台は露胎
1277	138-05	土師器	皿	5区	5区西4層 灰オリープ粗砂	口縁～底部 1/12	9.4	-	1.4	にぶい橙	
1278	190-04	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	7区	7区2・3層 灰黄色砂質土	底部6/12	-	5.8	3.5	灰白	広東碗、陶胎染付
1279	189-09	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	7区	7区2・3層 灰黄色砂質土	底部3/12	-	8.0	1.6	灰白	しのぎあり、灰釉
1280	182-05	磁器 染付 (肥前)	皿	7区	7区2・3層 にぶい褐色粘質土	底部1/12	-	10.4	4.0	灰	被熱
1281	189-05	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	7区	7区2・3層 灰黄色砂質土	口縁～胴部 2/12	18.2	-	6.0	灰白	灰釉
1282	190-02	土製品	焼塩壺	7区	7区2・3層 灰黄色砂質土	4/12	4.0	-	6.3	にぶい橙	
1283	183-01	瓦	平瓦	7区	7区2・3層 暗灰黄色砂質土	1/6	-	-	幅2.2	にぶい橙	被熱か、酸化色
1284	195-02	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土	口3/12 底部5/12	11.6	6.4	2.8	灰白	コンニャク印判(五弁花)、渦「福」
1285	191-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土	底部4/12	-	4.7	3.0	白	
1286	189-10	磁器 白磁 (肥前)	小杯	8区	8区4層 灰黄褐色砂質土	口縁部3/12	7.2	-	4.0	灰白	
1287	190-05	磁器 染付 (肥前)	小杯	8区	8区4層 灰黄色砂質土	胴～底部4/12	-	3.0	3.5	明緑灰	染付青磁
1288	190-07	磁器 染付 (肥前)	蓋	8区	8区4層 灰黄色砂質土	6/12	4.2	-	1.6	灰白	高台内銘「富貴長春」
1289	189-01	土師器	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土	10/12	7.6	-	1.2	橙	
1290	189-06	土師器	皿	8区	8区4層 灰黄褐色砂質土	4/12	8.3	-	1.2	橙	油煙付着
1291	189-07	土師器	皿	8区	8区4層 灰黄褐色砂質土	2/12	7.8	-	1.1	橙	
1292	189-04	土師器	皿	8区	8区4層 灰黄褐色砂質土	11/12	8.7	-	1.2	橙	
1293	189-03	土師器	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土	3/12	11.6	-	1.7	橙	
1294	190-03	土師器	皿	8区	8区4層 灰黄褐色砂質土	6/12	12.7	-	1.8	浅黄橙	
1295	211-02	土師器	茶釜	8区	8区4層 灰黄色砂質土	5/12	12.0	-	12.5	橙	
1296	184-02	土師器	茶釜	8区	8区4層 灰黄色砂質土	ほぼ完形	13.5	-	13.6	橙	
1297	191-04	磁器 青磁 (肥前)	水滴	8区	8区4層 灰黄色砂質土	1/2	-	4.4	-	灰白	獅子、型押し成形して中央で接合、眉は鉄釉
1298	192-01	陶器 (常滑)	甕	8区	8区4層 灰黄色砂質土	口縁部1/12	57.4	-	7.5	黒褐	真焼
1299	229-01	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	完形	10.0	4.4	5.2	明緑灰	
1300	234-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	口縁～胴部 4/12	10.8	-	4.5	灰白	灰釉
1301	213-02	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	胴～底部10/12	-	5.3	5.0	灰白	見込みにコンニャク印判(五弁花)、高台内銘「大明年製」
1302	206-05	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部12/12	-	4.5	3.0	灰白	割口を意図的に打ち欠いている
1303	206-07	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部5/12	-	3.9	4.2	白	
1304	237-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	6/12	12.5	5.0	6.9	灰白	四方禪文
1305	206-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部7/12	-	4.5	3.5	白	
1306	208-04	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	口縁～胴部 2/12	7.0	-	3.6	白	筒形碗、菊花文散らし
1307	206-06	磁器 染付 (肥前)	徳利	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部9/12	-	-	3.5	白	
1308	205-04	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	2/12	14.8	-	3.2	灰白	
1309	205-05	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土	口縁～胴部 1/12	18.6	11.8	2.8	灰白	中央白抜き意匠
1310	235-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部3/12	-	7.2	1.5	浅黄	灰釉
1311	235-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	口2/12 底部3/12	11.0	5.0	3.0	灰オリープ	灰釉、見込みに重ね焼き跡
1312	234-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部6/12	-	10.8	3.9	灰白	灰釉
1313	235-04	陶器 (瀬戸・美濃)	脚付皿	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	底部1/12	-	-	2.5	オリープ黄	三足か、灰釉
1314	235-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	口縁～胴部 2/12	32.8	-	11.2	褐	錆釉
1315	233-01	陶器 (常滑)	甕	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	口縁部1/12	33.0	-	7.6	にぶい褐	
1316	233-02	陶器 (常滑)	甕	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	口縁部1/12	38.6	-	5.5	にぶい橙	
1317	238-01	瓦	軒棧瓦	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	1/6	-	-	2.0	灰	唐草文
1318	234-01	瓦	平瓦	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	1/4	-	-	厚1.9	明赤褐	凹面ナデ、凸面台圧痕、被熱し赤変
1319	234-04	石製品	砥石	8区	8区4層 灰黄色砂質土 (下層粘砂直上)	完形	長 12.0	幅 4.4	厚3.7	-	泥岩、307g、砥面3面、#1000
1320	261-04	磁器	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口2/12 底部5/12	9.8	4.0	4.6	灰白	クロムで「岸ノ駒」
1321	205-06	磁器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁部小片	9.8	-	1.9	白	
1322	205-02	磁器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	11.0	-	4.1	白	
1323	258-03	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁～胴部 3/12	9.2	-	4.5	明緑灰	
1324	258-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁～胴部 2/12	12.4	-	3.8	灰白	灰釉、鉄絵

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1325	206-03	磁器 染付 (肥前)	油壺	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	底部7/12	-	-	1.9	灰白	
1326	261-05	磁器 染付 (肥前)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部5/12	-	4.4	1.6	明緑灰	
1327	207-04	磁器 白磁 (肥前)	小杯	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	底部5/12	-	3.0	1.8	白	
1328	263-04	磁器 白磁 (肥前)	小杯	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部12/12	-	4.2	3.3	灰白	
1329	257-04	磁器 白磁 (肥前)	仏飯器	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	2/12	7.2	-	4.0	灰白	
1330	257-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁～胴部 2/12	12.1	-	5.8	灰白	灰釉、鉄絵
1331	206-01	磁器 赤絵 (瀬戸・美濃)	小杯	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	5/12	8.0	3.4	4.6	白	口紅、赤絵、金泥
1332	205-01	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	6/12	13.9	8.3	3.6	白	蛇の目凹形高台
1333	261-06	磁器 染付 (肥前)	蓋	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部1/12	-	3.8	1.7	灰白	
1334	205-03	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	底部12/12	-	5.2	1.8	白	山水
1335	206-02	磁器 染付 (肥前)	皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	底部2/12	-	8.7	2.5	白	
1336	263-03	陶器 (信楽)	小碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁部11/12 底部12/12	9.5	3.3	5.5	灰白	端反碗、灰釉、貫入顕著、焼き締まる
1337	257-05	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部11/12	-	3.0	1.8	灰白	灰釉
1338	207-06	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	11.0	-	5.5	暗赤褐	柿釉
1339	255-02	陶器 (肥前)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁部1/12	27.6	-	2.9	黄褐	刷毛目
1340	261-03	陶器 (信楽)	土瓶	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁～胴部 4/12	8.2	-	7.0	灰白	灰釉、貫入顕著、焼き締まる
1341	207-01	磁器 (瀬戸・美濃)	行平鍋	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	21.6	-	4.5	灰白	灰釉
1342	262-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁部1/12	22.2	-	5.2	灰褐	鉄釉
1343	260-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	6/12	10.0	-	1.8	にぶい 赤褐	錆釉
1344	259-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	7/12	10.4	-	2.3	にぶい 赤褐	錆釉
1345	192-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	8区4層 灰黄褐色砂質土	底部4/12	-	9.8	4.0	黄褐	鉄釉
1346	267-03	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部12/12	-	9.2	7.2	灰白	灰釉、呉須で屋号
1347	187-04	土師器	皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	2/12	7.3	-	1.3	橙	
1348	189-02	土師器	皿	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	6/12	7.9	-	1.3	橙	
1349	189-08	土師器	茶釜	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～頸部 2/12	8.8	-	4.0	橙	
1350	186-02	土師器	焙烙	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	39.8	-	2.5	にぶい橙	
1351	187-01	土師器	焙烙	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	38.8	-	2.5	にぶい橙	
1352	186-04	土師器	焙烙	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	38.6	-	3.4	にぶい橙	
1353	186-01	土師器	焙烙	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	44.0	-	2.6	にぶい橙	
1354	263-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部12/12	-	15.3	1.8	灰白	灰釉、見込み釉剥ぎ4ヶ所
1355	262-01	陶器 (常滑)	大甕	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁部1/12	58.0	-	7.3	にぶい 赤褐	
1356	258-04	陶器 (常滑)	火鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁部1/12	24.3	-	7.1	にぶい橙	内面煤付着
1357	267-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部4/12	-	16.4	6.0	にぶい 赤褐	柿釉
1358	263-02	陶器 (常滑)	火鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	口縁～胴部 2/12	17.0	-	11.2	明赤褐	
1359	240-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色粘質土	口縁～胴部 2/12	34.8	-	11.0	にぶい 赤褐	錆釉
1360	261-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部1/12	-	21.2	2.2	灰白	灰釉、目跡
1361	261-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	8区	8区3・4層 灰黄褐色砂～粘質土	底部2/12	-	17.0	8.0	灰白	灰釉、緑釉がけ
1362	270-02	磁器 染付 (肥前)	蓋	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	7/12	3.4	-	1.7	灰白	見込みにコンニャク印判(五弁花)、高 台内二重方形枠に溝「福」
1363	270-01	磁器 染付 (肥前)	蓋	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	6/12	4.5	-	3.5	灰白	
1364	273-02	陶器 (瀬戸・美濃)	汁注	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	胴～底部9/12	-	5.6	8.9	褐	柿釉、焼き締まる
1365	271-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	底部7/12	-	-	1.6	浅黄	灰釉
1366	268-02	磁器 染付 (肥前)	皿	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	底部1/12	-	13.6	2.2	灰白	
1367	267-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	27.0	-	9.6	灰白	灰釉、緑釉がけ
1368	271-02	土師器	羽釜	9区	9区2層 灰黄褐色砂質土	胴部小片	-	-	2.7	橙	
1369	274-02	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	底部6/12	-	9.6	5.0	オリーブ黄	灰釉
1370	274-08	磁器 (肥前)	欄德利	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	底部5/12	-	9.6	1.1	明緑灰	
1371	275-07	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	口縁部6/12	2.8	-	4.1	にぶい 赤褐	錆釉
1372	274-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	底部5/12	-	11.6	4.0	淡黄	灰釉、見込み釉剥ぎ2ヶ所
1373	273-01	陶器 (常滑)	火鉢	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	底部4/12	-	10.0	6.0	橙	内面煤付着
1374	274-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	底部5/12	-	14.0	3.7	灰白	石皿、灰釉、見込み釉剥ぎ
1375	274-04	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	10区	10区4層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	30.6	-	4.5	にぶい 赤褐	錆釉
1376	281-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	11区	11区3層 灰黄褐色砂質土	3/12	13.6	8.0	3.3	灰オリーブ	灰釉
1377	279-08	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	11区	11区3層 灰黄褐色砂質土	口4/12 底部5/12	11.2	5.8	2.5	灰白	輪壳皿、灰釉

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1378	280-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	11区	11区3層 灰黄褐色砂質土	底部1/12	-	22.3	3.1	黒	三足、鉄釉
1379	280-01	陶器 (瀬戸・美濃)	德利	11区	11区3層 灰黄褐色砂質土	胴～底部3/12	11.2	-	9.3	浅黄	灰釉
1380	280-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部4/12	-	11.6	2.6	褐	錆釉、菊花文を押印
1381	281-05	山茶碗 (渥美)	碗	11区	11区5層 灰色粘砂	口縁部小片	-	-	3.1	灰黄	輪花
1382	335-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	1/12	10.0	3.8	5.2	灰白	
1383	335-01	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部3/12	10.0	-	3.9	灰白	
1384	334-08	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 3/12	10.0	-	2.6	白	
1385	334-09	磁器 白磁 (肥前)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	9.6	-	3.2	白	
1386	335-04	磁器 白磁 (肥前)	小杯	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	4/12	6.5	2.2	3.4	白	
1387	334-01	磁器 青磁 (肥前)	小杯	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	8.0	-	5.2	明緑灰	
1388	334-02	磁器 青磁 (肥前)	碗	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	12.4	-	4.4	灰オリーブ	
1389	334-04	磁器 染付 (肥前)	小杯	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部12/12	-	3.1	3.0	明オリーブ	
1390	334-07	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	14.0	-	2.0	明緑灰	染付青磁か
1391	297-03	磁器 青磁 (肥前)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	15.8	-	3.2	灰	
1392	335-02	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～底部 3/12	13.6	7.0	3.9	灰白	蛇の目釉剥ぎ
1393	334-03	磁器 染付 (肥前)	蓋	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部3/12	9.9	-	2.0	白	四方禪文
1394	332-02	磁器 染付 (肥前)	仏飯器	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口6/12 底部12/12	8.6	4.2	5.7～ 6.2	藍	外面に「壽」
1395	333-08	磁器 染付 (肥前)	仏飯器	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部4/12	-	4.0	3.2	白	
1396	297-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	29.0	-	2.8	灰オリーブ	折縁鉢、灰釉
1397	297-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 1/12	24.0	-	3.8	褐	錆釉
1398	296-03	土師器	鍋	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	25.8	-	2.2	にぶい 黄橙	
1399	296-02	土師器	焙烙	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	口縁～胴部 1/12	36.8	-	4.4	にぶい橙	
1400	296-01	土師器	焙烙	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	口縁～胴部 1/12	38.2	-	3.0	にぶい橙	
1401	295-05	土師器	鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁～胴部 2/12	15.4	-	5.0	橙	
1402	297-01	土師器	鍋	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	口縁～胴部 3/12	21.4	-	5.5	にぶい 黄橙	
1403	299-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部7/12	-	17.2	4.5	褐	錆釉
1404	295-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	胴～底部3/12	-	12.8	11.5	暗褐	錆釉、底部外面も摩耗
1405	296-04	陶器 (常滑)	鉢	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	口縁部1/12	34.6	-	4.5	明赤褐	
1406	289-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	口縁部1/12	32.0	-	4.0	褐	錆釉
1407	295-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	口縁部1/12	42.2	-	4.3	にぶい 赤褐	錆釉
1408	295-04	陶器 (常滑)	甕	12区	12区2層 暗灰黄色砂質土	口縁～肩部 3/12	19.8	-	6.2	褐灰	
1409	296-05	陶器 (常滑)	甕	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	底部3/12	-	15.2	2.4	明赤褐	
1410	298-01	瓦	丸瓦	12区	12区2層 灰黄褐色砂質土	1/2	-	14.2	2.2	灰白	凸面ナデ、凹面コヒキB、吊り紐痕
1411	294-03	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	口5/12 底部2/12	8.8	2.8	5.5	灰白	
1412	294-02	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	底部12/12	-	3.8	4.3	灰白	
1413	293-06	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	底部3/12	-	3.8	2.0	灰白	
1414	290-05	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	底部9/12	-	4.0	4.5	明緑灰	
1415	290-07	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	底部3/12	-	3.5	3.6	灰白	
1416	293-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	胴～底部9/12	-	4.6	4.0	明緑灰	
1417	289-06	磁器 染付 (肥前)	仏飯器	12区	工事中採集	口縁～胴部 2/12	7.4	-	2.4	灰白	
1418	291-06	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	工事中採集	底部12/12	-	4.0	2.5	灰白	
1419	294-01	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	工事中採集	口2/12 底部5/12	14.0	7.6	4.3	灰白	見込みにコンニャク印判(五弁花)、高 台内二重方形枠に渦「福」
1420	291-05	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	工事中採集	口縁～胴部 1/12	10.0	-	4.0	黒褐	鉄釉
1421	291-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	12区	工事中採集	高台	-	4.6	1.5	黒褐	鉄釉
1422	291-03	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	工事中採集	1/12	10.0	4.3	6.5	灰白	外：灰釉、内：鉄釉
1423	291-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	12区	工事中採集	胴～底部5/12	-	4.0	4.7	にぶい 黄橙	平茶碗、灰釉
1424	288-05	陶器 (瀬戸・美濃)	壺	12区	工事中採集	底部10/12	-	3.6	2.8	にぶい 黄橙	鉄釉、底部錆釉
1425	293-05	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	工事中採集	底部2/12	-	12.0	4.5	褐	錆釉
1426	288-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区	工事中採集	底部3/12	-	14.0	6.3	暗赤褐	錆釉
1427	288-03	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	12区	工事中採集	口縁部2/12	11.4	-	2.1	灰白	灰釉
1428	293-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	工事中採集	底部2/12	-	10.6	2.5	浅黄	灰釉
1429	294-05	陶器 (瀬戸・美濃)	花入	12区	工事中採集	底部12/12	-	3.5	5.5	褐	鉄釉
1430	290-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	工事中採集	口縁～胴部 1/12	11.8	-	2.1	灰白	灰釉



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高		
1431	293-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	12区	工事中採集	口縁～底部 2/12	12.8	-	2.9	浅黄	鉄絵丸皿、灰釉溶け悪い
1432	290-04	磁器 染付 (肥前)	皿	12区	工事中採集	底部1/12	-	8.6	1.3	灰白	被熱
1433	293-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	工事中採集	底部2/12	-	12.8	3.0	浅黄	鉄絵鉢、灰釉
1434	295-01	陶器 (常滑)	火鉢	12区	工事中採集	口縁～胴部 1/12	9.8	9.7	9.4	褐	
1435	291-01	土師器	十能	12区	工事中採集	把手	-	-	-	灰黄	
1436	289-05	土師器	皿	12区	工事中採集	口縁～胴部 1/12	8.0	-	1.7	にぶい橙	
1437	292-03	土師器	羽釜	12区	工事中採集	罅部1/12	-	-	5.0	灰黄褐	
1438	292-02	土師器	焙烙	12区	工事中採集	口縁部1/12	30.0	-	3.3	にぶい橙	
1439	292-01	陶器 (肥前)	鉢	12区	工事中採集	口縁～胴部 1/12	36.0	-	4.7	灰白	刷毛目
1440	292-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	12区	工事中採集	口縁部小片	20.0	-	3.2	灰オリーブ 褐	鉄釉
1441	141-02	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	5区	攪乱	底部12/12	-	5.5	2.5	明緑灰	広東碗、陶胎染付
1442	294-04	磁器 染付 (肥前)	碗	12区	攪乱	底部4/12	-	6.0	2.5	明緑灰	広東碗
1443	279-07	陶器 (瀬戸・美濃)	碗	11区	攪乱	底部5/12	-	5.2	1.6	灰オリーブ	灰釉
1444	179-04	陶器 (瀬戸・美濃)	行平鍋	6区	攪乱	1/12以下	13.4	-	-	淡黄	灰釉
1445	179-05	陶器 (瀬戸・美濃)	土瓶	5区	攪乱	肩部1/12	-	-	4.0	灰白	灰釉
1446	179-03	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	6区	攪乱	口縁～胴部 1/12	19.0	-	7.0	にぶい 赤褐	柿釉に鉄釉流し掛け
1447	174-05	陶器 (瀬戸・美濃)	徳利	6区	攪乱	肩部小片	-	-	3.0	灰白	灰釉、鉄釉で屋号
1448	388-02	陶器	ポマード 容器	8区	攪乱	完形	5.4	6.2	3.8	灰白	福田源商店「ランランノイポマード」(昭和13年発売)、ロゴはコマルトでプリント
1449	257-01	磁器 染付 (肥前)	碗		不明	8/12	11.8	4.7	6.4	明緑灰	見込みにコンニャク印判(五弁花)、高台内方形枠に変形字
1450	258-01	陶器 染付 (肥前)	皿		不明	8/12	13.4	8.0	3.9	明緑灰	蛇の目凹形高台
1451	257-02	磁器 染付	碗		不明	口縁部1/12	11.8	-	4.2	灰白	四方禪文

## ②木製品

遺物番号	実測番号	器種	調査区	遺構 層位	法量 (cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕、継手等)
					長/径	幅/高	厚			
1452	007-01	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	25.1	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1453	007-02	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	22.5	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1454	007-03	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	25.5	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1455	007-04	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	26.1	0.7	0.6	ヒノキ	割材	
1456	007-05	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	22.8	0.6	0.5	スギ	割材	
1457	007-06	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	23.4	0.6	0.5	スギ	割材	
1458	007-07	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	24.4	0.6	0.6	ヒノキ	割材	
1459	007-08	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	22.1	0.6	0.6	ヒノキ	割材	
1460	007-09	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	24.1	0.7	0.6	ヒノキ	割材	断面円形
1461	008-01	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	24.0	0.5	0.4	スギ	割材	
1462	008-02	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	25.3	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1463	008-03	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	23.8	0.7	0.6	スギ	割材	断面円形
1464	008-04	箸	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	20.7	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1465	018-05	楔	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	16.2	3.0	0.9	タケ	-	
1466	019-03	曲物底板?	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	12.0	-	0.5	コウヤマキ	柁目	傘などの部材の可能性あり
1467	025-04	曲物蓋	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	12.0	-	1.0	ヒノキ	柁目	
1468	020-03	曲物蓋	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	12.5	-	1.0	ヒノキ科	柁目	
1469	022-02	曲物底板	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	29.3	7.9	1.3	ヒノキ	柁目	
1470	021-03	板材	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	23.5	3.3	1.8	ヒノキ	柁目	木釘穴4ヶ所、指物部材か
1471	019-02	板材	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	11.3	6.0	1.5	ヒノキ	柁目	ノコギリで切断、鉄釘1ヶ所
1472	028-01	板材	1区	SZ550 (1区5層) 暗青灰色粗砂	16.0	7.1	1.1	ヒノキ	柁目	綴皮2ヶ所
1473	005-01	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	23.0	0.9	0.7	ヒノキ	割材	
1474	005-02	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	24.6	0.7	0.5	ヒノキ	割材	
1475	005-03	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	25.3	0.7	0.5	ヒノキ属	割材	
1476	005-04	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	24.1	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1477	005-05	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	23.3	0.7	0.5	ヒノキ科	割材	
1478	005-06	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	24.0	0.6	0.6	ヒノキ	割材	
1479	005-07	箸	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	19.8	0.5	0.5	ヒノキ	割材	

第12表-2 第5次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	器種	調査区	遺構層位	法量 (cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕、継手等)
					長/径	幅/高	厚			
1480	025-03	曲物底板	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	31.0	-	1.0	ヒノキ	榫目	孔2ヶ所
1481	026-06	楔	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	6.1	2.4	1.9	モミ属	割材	端部ノコギリ痕
1482	029-02	曲物蓋	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	13.0	-	1.0	ヒノキ	榫目	
1483	004-01	花形飾り	2区	SZ550 (2区8~11層) 暗灰色粘砂	11.8	9.6	2.1	上: スギ 下: ヒノキ	上: 追榫目 下: 榫目	2部材組み合わせ、金箔・金粉 (ぬぐい消し粉蒔技法)、釘穴4ヶ所
1484	001-01	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	21.1	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1485	001-02	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	21.3	0.5	0.5	ヒノキ	割材	先端焦げ
1486	001-06	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	22.6	0.6	0.5	ヒノキ	割材	先端焦げ
1487	002-07	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	21.9	0.5	0.6	ヒノキ科	割材	
1488	001-03	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	18.4	0.6	0.5	ヒノキ	割材	断面円形
1489	002-01	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	24.0	0.5	0.5	スギ	割材	
1490	002-02	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	24.8	0.7	0.7	ヒノキ科	割材	
1491	001-04	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	23.6	0.6	0.6	スギ	割材	断面円形
1492	001-08	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	24.7	0.6	0.6	ヒノキ	割材	
1493	001-05	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	23.4	0.7	0.5	スギ	割材	
1494	002-03	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	24.2	0.6	0.6	ヒノキ	割材	
1495	002-06	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	24.5	0.5	0.6	ヒノキ科	割材	
1496	001-07	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	24.7	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1497	002-04	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	26.3	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1498	002-05	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	26.3	0.7	0.4	ヒノキ属	割材	
1499	002-08	箸	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	25.6	0.5	0.5	ヒノキ	割材	
1500	021-02	指物部材	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	13.5	1.5	1.8	ヒノキ	割材	漆塗り蒔絵、釘穴2、ホノ1
1501	013-03	糸巻	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	19.9	4.6	0.8	ヒノキ科	榫目	
1502	011-01	下駄	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	22.0	8.7	2.0	ヒノキ科	追榫目	連歯下駄 (歯は欠損)、左足用
1503	009-01	下駄	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	22.1	9.4	-	ヒノキ属	割材	連歯下駄、左足用
1504	012-01	下駄	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	22.4	9.1	3.2	ヒノキ科	割材	連歯下駄 (歯は欠損)、焼印あり
1505	028-03	栓	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4.0	-	3.6	ヒノキ	割材	粗く成形、端部ノコギリ痕
1506	018-04	栓	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	5.6	-	2.7	ヒノキ	割材	粗く成形
1507	024-02	栓	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	4.8	-	3.8	スギ	割材	
1508	013-02	刎物皿	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	径11.2	高1.2	-	トネリコ属	横木取り 板目	
1509	010-05	木札	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	8.5	3.8	0.7	ヒノキ科	榫目	両面に墨書「いなう五寺 札走」「六人 四人 合」、孔1ヶ所
1510	010-04	曲物底板	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	7.9	-	0.6	ヒノキ科	榫目	墨書「やう良い □□□□」
1511	018-01	曲物底板	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	6.6	-	0.9	モミ属	榫目	孔あり
1512	024-03	曲物蓋	3区	SZ550 (3区11層) 灰色極細砂〜砂質シルト	12.4	-	0.8	ヒノキ	追榫目	
1513	020-01	曲物蓋	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	12.6	-	1.2	ヒノキ科	榫目	
1514	017-04	円形板材	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	3.1	-	0.7	ヒノキ	榫目	2孔、双六の駒台に類似
1515	010-01	曲物底板	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	9.6	-	0.5	ヒノキ	榫目	
1516	018-02	板材	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	19.3	6.3	1.5	モミ属	追榫目	粗く穿孔
1517	027-01	箱部材	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	19.6	1.1	1.1	モミ属	榫目	木釘穴10ヶ所、鉄釘
1518	010-03	桶側板	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	23.0	3.2	1.0	ヒノキ	板目	屋号等を削り込み墨入れ「馬鳥□□」
1519	022-01	棒	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	31.1	2.7	1.7	マツ属	割材	粗く面取り
1520	020-02 029-01	鏡箱底板	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	19.2	-	1.0	ヒノキ	榫目	
1521	006-07	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	24.3	0.5	0.5	スギ	割材	
1522	006-06	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	24.1	0.6	0.4	スギ	割材	
1523	006-05	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	24.0	0.5	0.4	スギ	割材	
1524	006-08	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	23.7	0.5	0.5	スギ	割材	
1525	006-04	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	23.8	0.6	0.6	スギ	割材	
1526	006-02	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	20.6	0.6	0.5	ヒノキ	割材	
1527	006-03	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	22.8	0.5	0.5	スギ	割材	端部焦げ
1528	006-09	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	22.4	0.6	0.4	ヒノキ科	割材	
1529	006-01	箸	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	21.7	0.7	0.5	ヒノキ	割材	
1530	015-01	漆器椀蓋	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	-	-	-	トチノキ	横木取り 板目	2ヶ所に紋様、外: 黒漆、内: 赤漆
1531	015-02	漆器椀	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	-	-	-	モクレン属	横木取り 板目	赤漆
1532	026-05	しゃもじ	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	18.5	4.7	0.5	スギ	板目	

遺物番号	実測番号	器種	調査区	遺構層位	法量 (cm)			樹種	木取り	特記事項 (加工痕、継手等)
					長/径	幅/高	厚			
1533	026-04	栓	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	3.6	-	4.6	スギ	割材	端部ノコギリ痕
1534	029-03	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	7.3	-	0.3	ヒノキ	榫目	
1535	026-02	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	8.0	4.0	0.3	ヒノキ	榫目	
1536	026-01	曲物蓋	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	8.3	4.8	0.5	ヒノキ	榫目	綴皮あり
1537	026-03	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	10.4	3.5	0.5	ヒノキ	榫目	
1538	010-02	曲物蓋	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	8.3	-	0.8	ヒノキ	榫目	
1539	021-01	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	13.0	-	0.4	ヒノキ	榫目	
1540	020-04	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	25.2	-	1.2	ヒノキ	榫目	楕円形
1541	025-02	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	19.0	-	1.2	スギ	板目	孔あり
1542	025-01	曲物底板	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	19.5	-	1.0	ヒノキ	板目	
1543	024-01	樽蓋	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	30.8	-	3.5	スギ	榫目	栓孔あり、鉄釘1、木釘穴2
1544	019-01	漆器椀	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	底径 3.9	-	-	サクラ属	横木取り板目	赤漆、紋様あり
1545	015-04	漆器椀	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	-	-	-	トチノキ	横木取り板目	外：黒漆
1546	016-03	建築部材?	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	9.9	8.6	1.1	カヤ	追榫目	木釘穴3ヶ所、中央に釘穴、工具や箱等の部材の可能性あり
1547	019-04	曲物底板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	15.6	-	2.0	ヒノキ	追榫目	容器内面側に染み
1548	023-01	下駄	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	21.5	5.5	3.7	ヒノキ	割材	連歯下駄
1549	013-01	下駄	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	16.0	6.1	2.1	ヒノキ科	榫目	差歯(歯は欠)、漆ごく一部に残る
1550	018-03	鞘?	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	-	-	-	タケ	-	または火吹き竹か
1551	017-02	曲物底板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	7.0	-	0.6	ヒノキ	榫目	中央に綴皮
1552	017-03	曲物底板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	12.0	-	1.1	ヒノキ	榫目	
1553	016-01	曲物蓋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	12.5	-	1.0	ヒノキ科	榫目	
1554	016-02	曲物蓋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	12.5	-	0.9	ヒノキ	榫目	
1555	017-01	曲物蓋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	12.4	-	1.1	ヒノキ	榫目	
1556	029-04	板材	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	9.0	7.8	0.2	ヒノキ	榫目	一部漆残存、釘穴1ヶ所
1557	014-01	曲物側板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	20.0	-	0.4	ヒノキ	榫目	
1558	028-02	曲物側板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	17.0	-	0.2	ヒノキ	榫目	
1559	003-01	鏡箱底板	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	26.3	16.0	0.5	ヒノキ	横木取り板目	漆塗り、木釘穴6ヶ所
1560	015-03	漆器椀	3区	SK506	径10.8	3.0	-	トチノキ	横木取り板目	外：黒漆、内：赤漆
1561	030-01	桶底板	12区	SE535	40.0	-	2.5	スギ スギ	中柵目 榫目	2部材組み合わせ

### ③金属製品

遺物番号	実測番号	種類	器種	調査区	遺構・層位	法量 (cm)			特記事項
						長/径	幅/高	厚	
1562	032-01	鉄製品	鍋	7区	SD515	口径 17.6	器高 11.0	0.4	
1563	031-07	銅製品	柄鏡	3区	3区4層 にぶい黄橙細砂	面径 6.6	-	0.2	青銅製、「人見重次作」、箒と塵取り(灰道具)、蛍光X線：Cu77.28, Sn0.44, Pb20.25, Zn0.39, その他1.63(wt%)
1564	031-01	銅製品	匙	8区	8区3層 灰黄褐色砂質土	18.5	4.1	0.3	
1565	031-02	銅製品	煙管	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5.9	-	1.2	雁首
1566	031-06	銅製品	煙管	3区	SZ550 (3区11層) 黒褐色粘砂	6.3	-	1.1	吸口、真鍮製
1567	031-03	銅製品	鈴	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	4.0	-	0.1	銅製、蛍光X線：Cu98.94, Sn0.14, Pb0.26, Zn0.58, その他0.08(wt%)
1568	032-02	鉄製品	鍋	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	18.0	4.0	0.4	
1569	031-05	鉄製品	釘	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	5.7	0.5	0.3	
1570	031-04	鉄製品	釘	12区	SZ550 (12区3層) 暗灰色粘砂	6.4	1.2	0.4	頭巻釘
1571	032-05	鉄製品	釘	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	4.8	1.1	0.3	
1572	032-04	鉄製品	釘	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	7.3	1.2	0.4	
1573	032-06	鉄製品	釘	5区	SZ550 (5区東9層) 黒褐色粘砂	7.4	0.8	0.3	
1574	032-03	鉄製品	釘	1区	SZ550 (1区5層) 黒褐色粘砂	9.9	1.3	0.4	頭巻釘

第12表-3 第5次調査出土遺物観察表

## 5. 自然科学分析

### (1) 分析の種類と対象

今回の調査では、松坂城下町東外縁部の湿地状の堆積層や、城下町期の町屋から現代に至るまでの遺構が確認された。なかでも湿地状堆積（S Z 550）からは、16世紀末～18世紀前半（戦国～江戸時代）を中心とした大量の陶磁器や木製品、動植物遺体が出土している。また、基本層序V層は城下町形成前の古土壌（黒ボク土起源）とみられ、第8・9次調査では本層下の黄褐色系シルト上で平安後期から鎌倉時代の遺構・遺物を検出したことから、8区7層の土壌を分析に供し、古環境の変化に関するデータを得ることを目指した。なお、分析報告の層名・遺構名・遺物番号は報告書に合わせ修正している。

#### ①古環境分析

下層の湿地状堆積（S Z 550・S Z 551）を中心とした、花粉、寄生虫卵、植物珪酸体、珪藻分析、種実・動物遺存体同定、貝殻成長線分析を実施した。分析目的は以下のとおりである。

- ・城下町の食性・生活誌（動植物遺体・樹種同定）
- ・湿地状堆積の性格と城下町の環境（花粉、寄生虫卵、植物珪酸体、珪藻分析）
- ・城下町形成前の古環境（古土壌の花粉、植物珪酸体、珪藻分析）

委託先：一般社団法人文化財科学研究センター

「松坂城下町遺跡（第5次）における自然科学分析」（花粉、寄生虫卵、植物珪酸体、珪藻分析、種実・動物遺存体同定、貝殻成長線分析）

#### ②樹種同定・漆塗膜分析

木製品の樹種同定・漆器の漆塗膜分析は、保存処理時を含め2社に委託した。なお、委託発注の都合上、結果には3次調査の木製品2点を含む。同定結果は遺物観察表に反映した。また、樹種同定の顕微鏡写真は、樹種ごとに抜粋して掲載する。

分析の委託先と内容は以下のとおりである。

委託先：環境考古研究会

「平成28年度松阪公園大口線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（松坂城下町遺跡）にかかる出土木製品保存処理業務委託」（保存処理を実施した箸45点の樹種同定）

委託先：一般社団法人文化財科学研究センター

「平成28年度松阪公園大口線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（松坂城下町遺跡）にかかる出土木製品保存処理等業務委託」（保存処理を実施した木製品18点の樹種同定・漆塗膜分析）

委託先：一般社団法人文化財科学研究センター

「松坂城下町遺跡（第5次）における樹種同定と塗膜分析」（木製品47点の樹種同定・漆塗膜分析）

#### ③金属遺物の成分分析

鏡や煙管など一部の金属製品は、三重県総合博物館において蛍光X線による材質分析を実施し、結果は遺物観察表や文中に反映させた。（櫻井）

### (2) 花粉、寄生虫卵、植物珪酸体、珪藻分析、種実・動物遺存体同定、貝殻成長線分析

一般社団法人文化財科学研究センター

#### ①試料

分析試料は16～18世紀、江戸時代の遺構面より採取された試料である。詳細は第13表に示す。

#### ②花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。同時に寄生虫卵分析を行うことにより、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいは便所遺構を確認することも可能である。しかし、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。しかし、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、庭園などの狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸上の堆積物が分析に適さないわけではない。

#### i) 方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す



- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）
- 5) 水洗後サンプルを2分する
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 検鏡は、プレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡（Nikon OPTIPHOT-2）によって300~1000倍で行う

基本的にアセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）を参照して、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

## ii) 花粉分析結果

**分類群** 出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉20、シダ植物胞子2形態の計42である。これらの学名と和名および粒数を第14表に示し、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第84図に示す。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示す（写真図版46）。同時に寄生虫卵も観察したが、検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

### 〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、グミ属

### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

### 〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

### 〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

**花粉群集の特徴** それぞれの地点において、花粉構成と花粉組成の特徴を記載する（第84図）。

#### 1) 試料29（8区7層）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、76%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科の出現率が高く、タンポポ亜科、キク亜科、セリ亜科、アリノトウグサ属-フサモ属が伴われる。樹木花粉では、クリを主に、コナラ属コナラ亜属、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、スギが低率に出現する。

#### 2) 試料30（1区5層〔S Z 550〕）

草本花粉が75%、樹木花粉が22%を占める。イネ科に伴われるイネ属型が高率に出現することで特徴づけられ、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科が伴われる。他にソバ属、ササゲ属、ベニバナが出現する。樹木花粉では、マツ属複雑管束亜属を主にスギ、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属、カバノキ属が低率に出現する。

## iii) 寄生虫卵分析結果

**分類群** 分析の結果、出現した寄生虫卵は4分類群である。これらの学名と和名および粒数を第14表に示し、1cm<sup>3</sup>中の寄生虫卵数を第84図に示す。また、出現した分類群は顕微鏡写真に示す（写真図版46）。以下に出現した分類群の特徴を示す。

#### 1) 回虫 *Ascaris lumbricoides*

回虫は比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmであり、楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

#### 2) 鞭虫 *Trichuris trichiura*

卵の大きさは50×30μmであり、レモン形あるい

は岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

### 3) 横川吸虫－異形吸虫類

*Metagonimus yokogawai*－*Heterophyes*

卵はおよそ $27 \times 17 \mu\text{m}$ であり、短楕円形または卵形、一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。日本各地でみられる横川吸虫や、瀬戸内海沿岸に多く、その他海に近い地域にかなり広く見られる有害異形吸虫は、中間宿主が異なるだけで発育史をはじめ形態なども良く似ている。横川吸虫ではアユ、有害異形吸虫ではボラなどの生食により魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡においては、小蓋がとれたり、堆積環境や薬品処理などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくく、異形吸虫類とする。

### 4) 不明虫卵 Unknown eggs

卵の大きさは約 $100 \times 55 \mu\text{m}$ で淡黄色で、一端に小蓋があるが、欠落している。肝蛭卵に似るが、やや小さい。

**寄生虫卵群集の特徴** 試料29（8区7層）からは、寄生虫卵も明らかな消化残渣も検出されないが、試料30（1区5層〔S Z 550〕）からは $1 \text{ cm}^3$ 中に $1.3 \times 10^2$ 個検出され、出現した寄生虫卵は、中間宿主を必要としない回虫卵、鞭虫卵と、アユやシラウオなどの中間宿主を必要とする横川吸虫－異形吸虫類卵であった。また、消化残渣とみなされる物質もみられる。

### iv) 花粉・寄生虫分析から推定される環境

#### ・試料29（8区7層）の時期

花粉分析の結果から、堆積地の周囲は、乾燥した環境を好むヨモギ属を主にタンポポ亜科、キク亜科などの雑草やイネ科の雑草が生育する、やや乾燥した草地の環境が推定される。寄生虫卵は検出されず、周辺の植生を反映していると考えられる。周辺には、乾燥を好むクリ、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹とシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹の二次林が分布する。アカマツ二次林成立以前の時

期であると推定される。

#### ・試料30（1区5層〔S Z 550〕）の時期

イネ属型、イネ科、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科の草本の出現率が高く、ソバ属、ササゲ属、ベニバナなどの草本も検出される。これらの草本はいずれも食用となり、アカザ科－ヒユ科やベニバナは薬用に利用される植物である。寄生虫卵密度も比較的高く、消化残渣とみなされる残滓もみられる。以上から、人の糞便が堆積に多く混じっており、生活汚染程度より寄生虫卵密度は高く、投棄されたり、糞便成分を多量に含む生活排水の堆積であると考えられる。

検出した花粉は種実類に付着していたとみられ、イネ（コメ）では籾殻の中に多量に花粉が残存し付着していたため、アブラナ科は花芽を含めて摂食するため反映されたとみなされる。イネ、アブラナ科、ソバ、ササゲ属（アズキやササゲなど）が摂食され、アカザ科－ヒユ科が薬用に、ベニバナは薬用ないし口紅に使われたなどが考えられる。

寄生虫卵の検出から、回虫、鞭虫が生水や汚染された生野菜、または完全に熱を通さず調理され汚染された調理器具などから感染し、人口密度が高いことにより蔓延したとみられる。一方、横川吸虫－異形吸虫はアユやシラウオ、沿岸の海水魚の生食から感染するため、これらの摂食が唆される。これらのことから、当時これらの食材を用いた食料が食べられ、排出された糞便の成分が生活排水として流れ込み堆積したとみなされる。

周辺はマツ属複維管束亜属の樹木が多く、アカマツ二次林が成立する。他に、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属の二次林が分布する。試料29（8区7層）とは、森林植生が大きく異なり、試料30（1区5層〔S Z 550〕）は、アカマツ二次林成立以後の時期である。

### ③植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉

山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

#### i) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu$ mのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作製
- 7) 検鏡(Nikon OPTIPHOT-2)・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

#### ii) 分析結果

**分類群** 検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第15表および第85図に示す。主要な分類群について顕微鏡写真を示す(写真図版47)。

[イネ科]

イネ、イネ(穎の表皮細胞由来)、シバ属型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

その他

#### 植物珪酸体の検出状況

##### ・試料29(8区7層)

ネザサ節型が多量に検出され、イネ、シバ属型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、マダケ属型、樹木(その他)なども認められた。イネの密度は1,300個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g(状況により3,000個/gとする場合もある)を下回っている。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が卓越している。

##### ・試料30(1区5層[SZ550])

イネ、ネザサ節型が比較的多く検出され、イネの籾殻(穎の表皮細胞)に由来する植物珪酸体、シバ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、マダケ属型なども認められた。イネの密度は4,000個/gと比較的高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、イネが優勢となっている。

#### iii) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

試料29(8区7層)の堆積当時は、メダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類を主体として、シバ属、ススキ属、ウシクサ族なども生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺では何らかの形で稲作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと考えられる。

試料30(1区5層[SZ550])の堆積当時は、メダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類をはじめ、シバ属、ウシクサ族なども生育する比較的乾燥した

環境であったと考えられ、調査地点もしくはその周辺では何らかの形で稲作が行われていたと推定される。

なお、各試料で検出されたイネについては、周辺で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては、敷き藁や堆肥、建物の屋根材や壁材、藁製品（俵、縄、ムシロ、草履など）および燃料など多様な用途が想定される。各試料で認められたマダケ属には、マダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。

#### ④珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

##### i) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗 (5 ~ 6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡 (Nikon OPTIPHOT-2)、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ~ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

##### ii) 結果

**分類群** 試料から出現した珪藻は、貧塩性種 (淡水生種) 54 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。分析結果を第 16 表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイア

グラムを第 86 図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe (1974) の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した (写真図版 48)。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

*Achnanthe anceolata*, *Achnanthes minutissima*, *Amphora montana*, *Cocconeis disculus*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella sinuata*, *Cymbella turgidula*, *Eunotia minor*, *Fragilaria capucina*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema spp.*, *Gyrosigma spp.*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula elginensis*, *Navicula laevisissima*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Navicula veneta*, *Navicula spp.*, *Neidium alpinum*, *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia clausii*, *Nitzschia debilis*, *Nitzschia palea*, *Nitzschia spp.*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia obscura*, *Pinnularia schoenfelderii*, *Pinnularia subcapitata*, *Rhopalodia gibberula*, *Surirella angusta*

##### 珪藻群集の特徴

それぞれの地点において、珪藻構成と珪藻組成の特徴を記載する (第 86 図)。

##### ・試料 29 (8 区 7 層)

珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されないが、わずかに陸生珪藻の *Pinnularia borealis*、好流水性種の *Gomphonema parvulum* などが出現する。

##### ・試料 30 (1 区 5 層 [S Z 550])

陸生珪藻が 64%、流水不定性種が 29%、真・好流水性種が 6% を占める。陸生珪藻では、*Amphora montana* の出現率が高く、次いで *Achnanthes minutissima* が多い。他に *Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia schoenfelderii* が出現する。流水不定性種では、*Navicula veneta*、*Nitzschia palea*、15 μm 以下の小型の *Nitzschia spp.*、*Cymbella silesiaca* の出現率がやや高い。真・好流水性



種では、沼沢湿地付着生種の*Navicula elginensis*が出現する。

### iii) 珪藻分析から推定される堆積環境

#### ・試料29 (8区7層)

珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。

#### ・試料30 (1区5層 [S Z 550])

陸生珪藻の割合が高く、多少の湿り気があれば、土壌表層や石やコケの表面などにも生育可能な耐乾性の高い*Amphora montana*が優占する。このことから堆積地は概ね湿った土壌の環境であり、流水不定性種が約3割を占めることから、湿地から不安定な浅い水域の環境であったと考えられる。出現率の高い種は、好塩性種で、好アルカリ性種、汚濁について広適応性の種が多く、生活排水などの塩分を含む排水が堆積したものと考えられる。

### ⑤種実同定

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。そのため、堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等と同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

#### i) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡 (Nikon SMZ745T) で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

#### ii) 結果

分類群 樹木14、草本20の計34分類群が同定される。学名、和名および粒数を第17表-1に、試料No.ごとを第17表-2に示し、主要な分類群を写真図版49・50に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

[樹木]

カヤ *Torreya nucifera* S. et Z. 核 (破片)

イチイ科

茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon*  
毬果 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z.

核 (完形・半形・破片) ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

核 (半形) クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

コナラ属コナラ亜属

*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 幼果 ブナ科  
幼果は黒褐色で鱗片に覆われた殻斗に包まれている。

コナラ属 *Quercus* 果皮 (破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

ウメ *Prunus mume* S. et Z.

核 (完形・半形) バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

モモ *Prunus persica* Batsch

核 (完形・半形・破片) バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus*

核 バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC.

種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある。

センダン

*Melia azedarach* var. *subtripinnata* Miq.

核 (完形・破片) センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

モチノキ *Ilex integra* Thunb.

果実・種子 モチノキ科

種子は浅赤黄色で楕円形を呈し、V字状の溝があり、縁は鋭く、光沢はない。鋭い隆条や凹凸が多く、粗面。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

カキノキ属 *Diospyros*

種子 (完形・破片) カキノキ科

黒褐色で非対称的の広倒卵形を呈し、扁平である。直線状の腹面は稜をなす。

〔草本〕

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

コムギ *Triticum aestivum* L. 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈する。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的の四角い形を呈し、短い。

ムギ類 (オオムギ-コムギ) *Hordeum-Triticum*

炭化果実 イネ科

オオムギもしくはコムギと思われるが、発泡しているためムギ類とした。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形を呈し、扁平である。果皮は柔らかい。

ツユクサ属 *Commelina* 種子 ツユクサ科

茶褐色で楕円形を呈し、一端は切形である。表面には「一」字状のへそがあり、切形の端まで達する。一側面にくぼんだ発芽孔がある。

ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面には縞状の模様がある。断面は三角形である。

ミゾソバ *Polygonum thunbergii* S. et Z.

果実 タデ科

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

タデ属サナエタデ節

*Polygonum* sect. *Persicaria* 果実 タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。

キンポウゲ属 *Ranunculus* 果実 キンポウゲ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面はやや粗く、コルク質である。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

ナス科 *Solanaceae* 種子

黄褐色で円形を呈す。表面にはやや大きい網目模様がある。

トウガン *Benincasa hispida* Cogn.

種子 (完形・破片) ウリ科

卵倒形を呈し、扁平。周辺部の縁は平行に一段高くなる。

ウリ類 *Cucumis melo* L.

種子 (完形・破片) ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。藤下によると小粒種子 (雑草メロン型)、中粒種子 (マクワウリ・シロウリ型)、大粒種子 (モモルディカ型) がある。

カボチャ *Cucurbita moschata* Duch.

種子 (完形・破片) ウリ科

茶褐色で扁平楕円形を呈し、周縁部はやや肥厚する。肥厚した表面は繊維状である。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl.

種子 ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

ベニバナ *Carthamus tinctorius* 果実 キク科

淡褐色で倒卵形を呈し、背腹両面は狭倒卵形で両側面と背腹両面の正中線は稜をなす。着点は斜切形となる。

キク亜科 Asteroideae 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。

#### 種実群集の特徴

##### ・3区11層〔S Z 550〕(試料No.24、No.25、No.27)

樹木種実のヤマモモ1、コナラ属果皮片1、モモ1、サクラ属サクラ節1、サンショウ40、モチノキ1、カキノキ属1、草本種実のムギ類7、スゲ属1、ヒユ属1、ナス7、カボチャ2、ウリ類498が同定された。

##### ・5区8～9層〔S Z 550〕(試料No.22、No.17)

樹木種実のカヤ7、マツ複雑管束亜属2、ヤマモモ2、オニグルミ1、コナラ属コナラ亜属幼果1、ウメ7、モモ2、サクラ属サクラ節3、サンショウ143、センダン2、ブドウ属1、カキノキ属10、草本種実のオオムギ3、コムギ2、ムギ類2、スゲ属1、ツユクサ属1、ソバ4、ミゾソバ7、タデ属1、タデ属サナエタデ節3、キンボウゲ属1、イヌホウズキ17、ナス44、ナス科1、トウガン14、カボチャ3、ウリ類781、ヒョウタン類2、ベニバナ86、キク亜科2が同定された。

##### ・12区3層〔S Z 550〕(試料No.23、No.26)

樹木種実のウメ1、センダン4、草本種実のムギ類1が同定された。

#### iii) 種実同定から推定される植生と農耕

##### ・3区11層〔S Z 550〕(試料No.24、No.25、No.27)

草本種実が多く、栽培植物が多い特徴を有する。ウリ類が多く、ムギ類、ナス、カボチャは食用になる栽培植物である。他に水生のスゲ属、乾燥した雑草のヒユ属がわずかにあり、周囲の環境が示唆される。樹木種実ではサンショウが多く、香辛料として食用にもなるが、人為環境にも多い樹木である。他にも食用になる樹木が多く、ヤマモモ、サクラ属サクラ節、カキノキ属も食用にもなる。またモモは栽培植物である。モチノキは山野、集落近くにも生育する照葉樹である。

##### ・5区8～9層〔S Z 550〕(試料No.22、No.17)

3区11層と傾向は似るがより種実が多く、草本種

実の栽培植物が多い。中でもウリ類が多く、ベニバナ、ナスが多い。ウリ類、ナス、トウガン、ソバ、ヒョウタン類、カボチャ、オオムギ、コムギ、ムギ類は栽培植物である。ベニバナも栽培植物であるが、種実から油が絞られ、花弁は染色に用いられる。スゲ属、ミゾソバ、タデ属サナエタデ節は水生植物であり、湿地から浅い水域に生育し、タデ属、キンボウゲ属、イヌホウズキ、キク亜科は畑や集落のやや乾燥した人為地に生育する。ツユクサ属は道沿いや林縁の湿地に生育する。

樹木種実では、香辛料になり人為地周辺に生育するサンショウが多い。ヤマモモ、オニグルミ、サクラ属サクラ節、ブドウ属、カキノキ属は食用にもなり、ウメ、モモは食用になる。センダンは暖地の海辺や山地に生育し、植栽もされる落葉高木である。コナラ属コナラ亜属は温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹で、日当たりの良い山野に生育する。

##### ・12区3層〔S Z 550〕(試料No.23、No.26)

樹木種実のウメ、草本種実のムギ類は栽培植物でもあり食用になる。樹木種実のセンダンは暖地の海辺や山地に生育する落葉高木である。

#### ⑥動物遺存体同定

一般に日本の国土は、火山灰に由来する酸性土壌に広く覆われ、温暖化と湿潤な気候ともあいまって動物遺存体の保存状態には恵まれない。そのため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物質の遺物は分解される。動物遺存体が出土する遺跡は、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的であり、近年は湿地環境の遺跡や遺構から多くの動物遺存体が報告される。近年では、近世遺跡から出土する動物遺存体の分析も活発になっており、京都・大阪・江戸の大都市における食生活や動物利用が明らかになりつつある。

##### i) 方法

試料を肉眼で観察し、形態の特徴について、貝類図鑑(奥谷2000など)、現生骨格標本と比較して種類や部位などの同定を行った。

##### ii) 結果

**分類群** 同定した動物遺存体の学名を以下に示し、和名および粒数を第18表に示し、貝類の個体数を第19表に、一覧表を第20表に示し、ハマグリ計測値を第21表に示す。主要なものを写真図版51～53に示

し、動物遺存体の詳細は以下に記載する。

〔同定種名表〕

軟体動物門 Mollusca

腹足綱 Gastropoda

古腹足目 Vetigastropoda

ミミガイ科 Haliotidae

ミミガイ科の一種

Haliotidae gen. et sp. indet.

サザエ科 Turbnidae

サザエ Turbo cornutus

タニシ科 Viviparidae

タニシ科の一種

Viviparidae gen. et sp. indet.

カワニナ科 Pleuroceridae

カワニナ Semisulcospira bensoni

タマガイ科 Naticidae

ツメタガイ Glossailax didyma

新腹足目 Neogastropoda

アッキガイ科 Muricidae

アカニシ Rapana venosa

斧足綱 Bivalvia

フネガイ目 Arcoida

フネガイ科 Arcidae

アカガイ Scapharca broughtonii

フネガイ科の一種

Arcidae gen. et sp. indet.

カキ目 Ostreoida

イタボガキ科 Ostreidae

マガキ Crassostrea gigas

マルスダレガイ目 Veneroida

バカガイ科 Mactridae

バカガイ Mactra chinensis

シオフキ Mactra veneriformis

シジミ科 Corbiculidae

ヤマトシジミ Corbicula japonica

マルスダレガイ科 Veneridae

カガミガイ Phacosoma japonicum

アサリ Ruditapes philippinarum

ハマグリ Meretrix lusoria

脊椎動物門 Vertebrata

硬骨魚綱 Osteichthyes

カサゴ目 Scorpaeniformes

コチ科 Platycephalidae

コチ科の一種

Platycephalidae gen. et sp. indet.

スズキ目 Percidae

スズキ科 Percichthyidae

スズキ Lateolabrax japonicus

アジ科 Carangiae

アジ科の一種

Carangiae gen. et sp. indet.

タイ科 Sparidae

タイ科の一種

Sparidae gen. et sp. indet.

サバ科 Scombridae

カジキ亜目 Xiphoidei

カジキ亜目の一種

Xiphoidei fam., gen. et sp. indet.

マグロ属の一種 Thunnus sp.

哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ Canis familiaris

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ Equus caballus

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ科 Bovidae

ウシ Bos Taurus

## 動物遺存体の特徴

### ・貝類

1区 5層〔S Z 550〕からハマグリ（左20右27）47点、ヤマトシジミ（左7右6）13点、サザエ9点（うち蓋2点）、アワビ類とアカガイ（右）2点ずつ、計73点が出土した。

2区 8～11層〔S Z 550〕からハマグリ（左37右29）66点、アカガイ（左10右7）17点、アサリ（左2右3）5点、サザエ4点（うち蓋1点）、タニシ



科、アカニシ、シオフキ（左）、ヤマトシジミ（右）1点ずつ、計96点が出土した。

**3区** SK503からアサリ（左23右50）73点、ハマグリ（左14右13）27点、ヤマトシジミ（左7右10不明1）18点、シオフキ（左2右1）3点、ツメタガイ1点、計122点が出土した。また、11層〔SZ550〕からハマグリ（左14右17）31点、サザエ5点（うち蓋3点）、アサリ（左）とアカガイ（左1右2）3点ずつ、アワビ類、フネガイ科（左右不明）、バカガイ（左）、ヤマトシジミ（左）1点ずつ、計46点が出土した。なお、フジツボの破片も出土。

**5区** 8～9層〔SZ550〕からハマグリ（左95右87）182点、アサリ（左51右43）94点、バカガイ（左15右15）30点、サザエ19点（うち蓋2点）、ヤマトシジミ（左5右5）10点、シオフキ（左6右2）8点、タニシ科5点、アワビ類、カワニナ科、フネガイ科（左右不明）、マガキ（左右不明）、カガミガイ（左）1点ずつ、計353点が出土した。また、7層〔SZ550〕からアサリ（左3右2）、ハマグリ（左1右4）5点、アワビ類、サザエ、カワニナ科1点ずつ、計13点が出土した。

**8区** 5層〔SZ551〕からハマグリ（左56右59）115点が出土した。6層〔SZ551〕からアサリ（左17右17）34点、ハマグリ（左11右6）17点、バカガイ（左）1点、計52点が出土した。また、5・6層〔SZ551〕からハマグリ（左3右3）6点、サザエ、ツメタガイ、アカニシ、アカガイ（左）1点ずつ、計10点が出土した。

**12区** SK533からハマグリ（左11右11）22点、アサリ（左5右7）12点、サザエ2点、シオフキ（左）1点、計37点が出土した。SD534からアカニシ、アサリ（左）、ハマグリ（右）1点ずつ、計3点が出土した。3層〔SZ550〕からハマグリ（左8右6）14点、アサリ（左3右3）6点、アカニシ5点、タニシ科4点、ツメタガイ3点、アカガイ（左）2点、アワビ類1点、サザエ1点、カワニナ科1点、計37点が出土した。

#### ・魚類

**3区** 11層〔SZ550〕からサワラの椎骨、ヒラメの下尾骨1点ずつ、計2点が出土した。

**5区** 8～9層〔SZ550〕からコチ科の前鰓蓋骨

（右）と椎骨、アジ科の歯骨（右）、スズキ属の鋤骨、タイ科の鋤骨、カレイ科の舌顎骨（左）と椎骨1点ずつ、計7点が出土した。

**12区** 3層〔SZ550〕からマグロ属の椎骨1点が出土した。

#### ・哺乳類

**5区** 8～9層〔SZ550〕からウマの肩甲骨（右）、ウシの大腿骨（右）1点ずつ、計2点が出土した。

**12区** 3層〔SZ550〕からイヌの橈骨が1点出土した。

#### iii) 考察

最も多く出土したのはハマグリ278個体、次にアサリ148個体を数え、この2種で8割弱を占める。その他サザエ34個体、ヤマトシジミ24個体、アカガイ15個体などが続く。貝類の大部分は海水産の二枚貝であり、淡水産はタニシ科、カワニナ科が含まれる程度である。干潟で獲得できるものが多く、岩礁性のものは少ない。城下町近郊の沿岸環境を反映する可能性もあるが、水産物流通が発達した近世であることを考慮すると、食用価値が高いものが選択的に消費された結果ともみられる。

魚類は、コチ科、アジ科、タイ科、サワラ、ヒラメと内海でも漁獲できるものであるが、2mを超えると推測される大型のカジキ類、マグロ類は外洋魚であり、沖合での漁獲が推測される。哺乳類のウマ、ウシ、イヌはいずれも家畜であり、ウマやウシは解体痕が見られ、生きている間は乗馬、荷物の牽引などに使役され、最終的には解体され、皮や肉を資源として利用したと考えられる。

#### ⑦貝殻成長線分析

本遺跡より出土した貝類9点について貝殻成長線分析を用いて、近世における貝採取季節を推定した。なお、試料はハマグリ *Meretrix lusoria* である。出土遺構は、いずれも18世紀中葉～後半頃とされるSK503 (No.7) とSK533 (No.14) である。資料の出土層位や帰属年代の詳細は報告書に順ずる。

#### i) 方法

- 1) 殻頂から腹縁までの正中線を記入した後、ダイヤモンドカッターを用いて貝殻を切断
- 2) 切断した試料を樹脂で包埋し、固化後、耐水ペーパーで切断面を研磨

3) 希塩酸によるエッチングを行った後、酢酸エチルを滴下し、Bioden R.F.A レプリカフィルム(100×100×0.127 mm)に成長線を転写

4) 貝殻成長線分析のレプリカ法は、常法(Koike, 1980)を用いた。転写したフィルムをプレパラートに挟み込み、貝殻成長線分析の観察用プレパラートとした。

5) 検鏡は生物顕微鏡(Nikon OPTIPHOT-2)を用いて40~200倍下で観察を行った。

貝類の採集(死亡)時季は、縁辺に最も近い冬輪(最終冬輪)から縁辺までの日周線の本数(最終日周線)がその後に生存した日数を表していることから、これを計算し求めている。冬輪は、2月~3月初旬頃と推定されている。多くの日本産二枚貝の場合(ホタテガイなど除く)、毎年繰り返し観察される成長不良な部分は、冬季における成長部分と考えられることから冬輪と認定して、その中心が日本沿岸において海水温度の最も低くなる2月15日に近接すると推定されている(Koike1980)。

よって、採集時季は、(2月15日)+(日輪の本数)=(貝の死亡日)として算出し、それを四季の二分割程度の大別当てはめ直してから採集季節の推定に利用している(Koike1980、第22表)。

## ii) 結果と考察

**サンプルの状態** サンプルの状態は、極めて不良であり、分析前の抽出作業でも難航した。特に採取季節を示す貝殻の腹縁(縁辺)の欠損が著しい。また腹縁が残存していた個体でも切断面の成長線は不良であり、転写できない個体がある。再三の前処理により最終的には9点中6点が検鏡できた。

1年目の冬輪群は、摩耗や欠損のため確認できず、年齢や成長速度の推定に至らなかった。ただし、貝殻のサイズや最終冬輪の位置を踏まえると、1歳から2歳の若齢個体と思われる。

**推定季節** 推定できた個体6点は、主に春季であった(第23表)。春季前半4点が最も多く、春季後半1点、冬輪中心1点を確認した。貝採集は、冬輪の形成し始める冬季の終わりから春季の終わりまで確認できた。±20日の誤差を踏まえると、概ね春季の採取と推定される。

## iii) まとめ

松坂城下町遺跡(第5次)より検出した18世紀中葉~後半頃とされるSK503(No.7)とSK533(No.14)より得られたハマグリ9点の貝殻成長線分析を行い、近世における貝採取活動の季節を検討した結果、貝採取活動は概ね春季に集中する。また、1歳から2歳の若齢個体と思われる。

## ⑧総括

### i) 8区7層(試料29)の層準の環境

堆積地は、乾燥した環境を好むヨモギ属を主にタンポポ科、キク亜科やイネ科のシバ属、ススキ属、ウシクサ族の雑草およびメダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類が生育し、周辺の植生を反映していると考えられやや乾燥した草地の環境であった。なお、近隣地では稲作が行われていた。周辺には、乾燥を好むクリ、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹とシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹の二次林が分布し、アカマツ二次林の成立はみられない。

### ii) 1区5層[SZ550](試料30)の層準の環境

堆積地は陸生珪藻が優占し、湿地の環境であった。寄生虫卵がやや密度高く検出され、食用または薬用となる植物の残滓とみられる草本花粉が主要をなし、糞便投棄されるかその成分が流れ込む状況であった。また、好塩性種で、好アルカリ性種、汚濁について広適応性の珪藻が多く、塩分を含む生活排水の流れ込みが考えられる。周囲にはメダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類をはじめ、シバ属、ウシクサ族なども生育する比較的乾燥した環境が分布していた。なお、近隣地では稲作が行われていた。周辺はマツ属複雑管束亜属の樹木が多く、アカマツ二次林が成立し、他にコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属の二次林が分布する。

### iii) 1区5層[SZ550](試料30)の遺体群集から復原される食生活

イネ(コメ)が多く食べられ、アブラナ科の野菜類も多く食べられる。他にソバ属、ササゲ属(アズキ、ササゲなど)が食べられていた。アカザ科-ヒユ科は薬用が考えられる。ペニバナは薬用か口紅由来も考えられるが果実が検出されており、より直接的な由来も考えられる。回虫卵、鞭虫卵の検出から、周囲は人口密度がやや高いため、汚染度が高い。吸虫類の感染から、沿岸の海水魚またはアユやシラウ

オの生食ないし不完全調理の摂食が示唆される。肝吸虫卵は検出されず、コイ科の魚類はほとんど食用とされていない。

#### iv) 種実類の特徴

3区11層〔S Z 550〕(試料No.24、No.25、No.27)、5区8～9層〔S Z 550〕(試料No.22、No.17)、12区3層〔S Z 550〕(試料No.23、No.26)で種実同定を行った結果、食用となる種実類が多く、穀類としてはオオムギ、コムギのムギ類、ソバ、野菜類としてはウリ類、ナス、トウガン、カボチャ、他に幼果は食用になるヒョウタン類が同定され、これらは栽培され食べられていた。12区3層〔S Z 550〕(試料No.23、No.26)からはベニバナが検出され、油を搾取することはできるが、種実の検出が珍しい。樹木でも食用になるものが多く、特にサンショウが多いため香辛料として利用されていたとみられる。栽培樹木ではモモ、ウメが同定された。他にヤマモモ、オニグルミ、サクラ属サクラ節、ブドウ属、カキノキ属は採取され食べられていた。

スゲ属、ミゾソバ、タデ属サナエタデ節の水生植物は堆積地に生育し湿潤な環境を示し、タデ属、キンボウゲ属、イヌホウズキ、キク亜科の乾燥を好む畑や集落域の草本は、近接する周囲からもたらされ、ツルクサ属は道沿いや林縁の環境を示唆する。樹木種実のモチノキ、センダン、コナラ属コナラ亜属は周囲に生育していたか植栽されていたとみられる。

#### v) 動物遺体の特徴と貝殻成長線分析

貝類では、ハマグリとアサリが多く8割弱を占める。他にサザエ、ヤマトシジミ、アカガイの海水産が多く、タニシ科、カワナ科の淡水産が少し含まれる。魚類ではコチ科、アジ科、タイ科、サワラ、ヒラメとの内海で漁獲できるもの以外に、外洋魚の2mを超えると推測される大型のカジキ類、マグロ類が同定され、食用価値が高いものが選択的に消費されたと考えられる。また、哺乳類では解体痕が見られるウマ、ウシのほかイヌが同定され、ウシ・ウマは解体され、資源として利用されたと考えられる。

ハマグリ貝殻成長線分析を行った結果、1歳から2歳の若齢個体が多く、また貝採取活動が概ね春季に集中することが示され、近世における貝採取活動の季節のデータが得られた。

謝辞

成長線分析について、岡山理科大学生物地球学部の富岡直人先生にご指導頂いた。記して感謝の意を表します。

#### [参考文献]

- 中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p. 82-102.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p. 187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p. 21-30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p. 231-245.
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構—藤原京七条一坊—, 奈良国文化財研究所, p. 14-15.
- 金原正明 (1999) 寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p. 151-158.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.
- Hustedt, F. (1937-1938) *Systematische und ologische Unt*

ersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer · H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae · 1-4.

Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.

渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI<sub>po</sub>, pH耐性能. 内田老鶴圃, 666p.

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版, p. 131-139.

金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナルNo. 409, ニューサイエンス社, p. 15-19.

南木陸彦 (1991) 栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p. 165-174.

南木陸彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.

吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナルNo. 355, ニューサイエンス社, p. 2-14.

藤下典之 (1982) 菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について. 唐津市文化財調査報告第5集 菜畑遺跡, 唐津市教育委員会, p. 455-463.

藤下典之 (1992) 出土種子からみた古代日本のメロンの

仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について. 考古学ジャーナル p. 354, ニュー・サイエンス社, p. 7-13.

奥谷喬司 (2000) 日本近海産貝類図鑑, 東海大学出版会

Koike, H. (1980) 'Seasonal dating by growth line counting of the clam, *Meretrix lusoria*', "The university museum, The university of Tokyo, Bulletin" 18: pp. 1-104.

[作業従事者]

花粉分析・珪藻分析：金原正子（一般社団法人文化財科学研究センター）

植物珪酸体分析：杉山真二（一般社団法人文化財科学研究センター）

種実同定：金原美奈子（一般社団法人文化財科学研究センター）

貝類同定・動物遺存体同定：金原美奈子（一般社団法人文化財科学研究センター）、丸山真史（東海大学）

貝殻成長線分析：金原美奈子（一般社団法人文化財科学研究センター）、畑山智史（埼玉大学大学院）

### （3）樹種同定①

「平成28年度松阪公園大口線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（松坂城下町遺跡）にかかる出土木製品保存処理業務委託」（箸45点分）

環境考古研究会

本報告では、松坂城下町遺跡（第5次）より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

#### ①方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。



## ②結果

第24表に結果を示し、写真図版54・55に同定された分類群の顕微鏡写真（抜粋）を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

### 1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

### 2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直かつ肌目緻密で強靱なうえ、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築などに広く用いられる。

### 3) ヒノキ属 *Chamaecyparis*

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は1分野に2個存在するが、腐朽のため不明瞭である。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上からの特徴からヒノキ属に同定される。ヒノキ属にはヒノキ、サワラが含まれ、本州、四国、九州、屋久島に分布する。材は概して木理通直かつ肌目緻密で強靱なうえ、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築などに用いられる。

### 4) ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は腐朽のため観察できない。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキ科に同定される。ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロ属などが含まれる。本州、四国、九州、屋久島に分布する。大木になるものが多く通常高さ3～40m、径1mに達する。材は概して木理通直かつ肌目が緻密で強靱なうえ、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築などに用いられる。

## ③所見

同定の結果、松坂城下町遺跡（第5次）より出土した箸は、スギ13点、ヒノキ25点、ヒノキ属2点、ヒノキ科5点であった。ヒノキ属、ヒノキ科は腐朽のため、分類の階級が大きくなったが、ヒノキとほぼ同じである。

スギ、ヒノキは温帯域に分布し、スギは特に温帯中間域の多雪・多雨地帯で純林を形成する針葉樹であり、ヒノキは本来温帯中部の火山土地帯に多い。スギは木目がやや粗く、ヒノキは木目が細かいが、双方とも、木理直通で大きな材がとれる良材であるため、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。三重県におけるスギの同定例としては、曲物や刳物などの容器類、建築部材、井戸材が多く、江戸時代後半のものとしては桑名城下町遺跡（江戸時代後半）の棺材などがある。律令期以降、中部太平洋側では様々な用途に多用されている。なお、ヒノキの箸の出土例としては愛知県菟安賀遺跡（江戸時代後半）があげられる。

以上から、松坂城下町遺跡（第5次）より出土した箸には、いずれも木理直通で加工工作が容易なスギとヒノキの針葉樹が用いられ、特に肌目が緻密で保存性が高いヒノキが最も多く使われる。本遺跡で同定された樹種はいずれも温帯に分布するものばかりであり、当時の遺跡周辺地域からか、流通等によってもたらすことができたと考えられる。

## [参考文献]

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用

材データベース. 海青社, 449p.

植田弥生 (2001) 菟安賀遺跡出土木製品の樹種同定. 菟安賀遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第93集, (財) 愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター, p. 78-83.

植田弥生 (2002) IV面墓出土木製品の樹種同定. 桑名城下町遺跡発掘調査報告書 萱町93 (法盛寺) 地点, 桑名市教育委員会, p. 46-56.

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第1号. 植生史研究会, 242p.

#### (4) 樹種同定・漆膜分析②

「平成28年度松阪公園大口線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (松坂城下町遺跡) にかかる出土木製品保存処理等業務委託」 (保存処理を実施した木製品18点)

一般社団法人文化財科学研究センター

##### ①樹種同定

###### i) 試料

試料は、松坂城下町遺跡 (江戸時代) より出土したNo.1~18の木製品計19点であり、試料の詳細は第25表に示す。No.14花形飾りについてはNo.14-1花形飾り (丸)、No.14-2花形飾り (花) の2点に分けて同定を行う。

###### ii) 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柁目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡 (Nikon OPTIPHOT-2) によって40~1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

###### iii) 結果

第26表に結果を示し、写真図版56・57に主要な分類群 (抜粋) の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠

となった特徴を記す。

1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

スギ科 No.14-1、18

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl.

ヒノキ科 No.5、8、10、11、14-2、15

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、緻密かつ強靱で、耐朽性・耐湿性も高く、建築などに広く用いられる。

3) ヒノキ属 *Chamaecyparis* No.1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。分野壁孔は1分野に2個存在するが、分野壁孔の型は不明瞭である。

以上の特徴からヒノキ属に同定される。分野壁孔が1分野に2個存在するが、分野壁孔の型が不明瞭なものはヒノキ属とした。ヒノキ属にはヒノキやサワラが含まれる。材は木理通直かつ肌目緻密であり、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築など広く用いられる。

4) ヒノキ科 *Cupressaceae*

No.2、3、4、6、7、9、16、17

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やか

で、晩材部の幅はきわめて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は腐朽のため観察できない。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高を示す。

以上の特徴からヒノキ科に同定される。ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロ属などが含まれる。本州、四国、九州、屋久島に分布する。大木になるものが多く通常高さ40m、径1mに達する。材は木理通直かつ肌目緻密であり、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築など広く用いられる。

#### 5) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino

ニレ科 No.13

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の方形細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ20～25m、径0.6～0.7mぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

#### 6) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 No.12

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。道管内部にはチロースが著しい。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

#### iv) 所見

同定の結果、松坂城下町遺跡より出土した木製品

は、スギ2点、ヒノキ6点、ヒノキ属1点、ヒノキ科8点、ケヤキ1点、トネリコ属1点であった。スギはNo.14-1の花形飾り(丸)、No.18のしゃもじに使われていた。ヒノキはNo.5の曲物蓋、No.8の曲物底板、No.10、No.11の鏡箱底板、No.14-2の花形飾り(花)、No.15の桶側板に使われていた。ヒノキとスギは、木理直通で大きな材がとれる良材であり、加工工作が容易であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。特にヒノキは保存性が高い。ヒノキ属はヒノキかサワラか区別のつかないもので、No.1の下駄に使われていた。ヒノキ科はNo.2からNo.4の下駄、No.6、No.7の曲物蓋、No.9の曲物底板、No.16の木札、No.17の板状具に使われていた。ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロ属などが含まれ、材はいずれも木理通直かつ肌目緻密で加工工作が容易なため、多様な用途に用いられる。ケヤキはNo.13の漆器椀に使われていた。材は重硬かつ強靱で従曲性に富み、耐朽性・保存性が高く水湿にもよく耐え、木地や建築部材、土木材などに用いられる。東海地方では愛知県の清洲城下町遺跡(戦国時代から江戸時代初期)などからケヤキの漆器椀が出土している。トネリコ属はNo.12の刳物皿に使われていた。材は概して重硬かつ強靱で割裂性が大きく、建築部材、土木材、下駄などに用いられる。また、中世以降、東海地方においてトネリコ属は挽物の椀や皿などの容器類にはよく用いられるが、トネリコ属の刳物皿が出土した例は珍しい。

以上から、下駄、容器類の蓋・底板、桶側板などの板状の木製品には、木理通直で割裂性に優れ、律令期以降多用されるヒノキ、ヒノキ科が使われ、花形飾り(丸)やしゃもじには加工工作が容易なスギが使われていた。また、漆器椀、刳物皿には重硬かつ強靱であるが、形が整えやすく木目が美しく現れるケヤキ、トネリコ属が使われていた。本遺跡で同定された樹種はいずれも温帯に広く分布する樹木ばかりであるが、当時の遺跡周辺地域から流通によってもたらされたものであろう。

#### ②漆膜分析

松坂城下町遺跡出土木製品の漆製品については断面の顕微鏡観察を行い、また金箔製品については断面の顕微鏡観察およびEPMA分析、赤外分光分析を行

い、構造および製作工程の考察を行う。

#### i) 試料

分析試料は、松坂城下町遺跡出土漆器椀、鏡箱底板、花形飾りより採取された漆膜及び金箔膜である。試料より木胎も含め2mm角程の破片を採取した。なお、これらは樹種同定に用いられた漆器製品と同一試料である。試料詳細は第27表に示す。

#### ii) 方法

##### 1) 断面観察

蛍光X線分析を行った後、高透明エポキシ樹脂（ボンドEセット：コニシ株式会社）を使用して試料を包埋し、カミソリで薄片を作製し、厚さ数 $\mu\text{m}$ になるまでカーボランダム・アランダムで研磨する。最後に顕微鏡観察を行いながら $\#4000$ の耐水紙やすりで研磨をして調整した。完成した試料を光学顕微鏡および落射顕微鏡で観察した。

##### 2) 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器はOLYMPUS製ハンドヘルド蛍光X線分析装置 DELTA DP-2000 Premiumを使用した。測定条件は励起用X線ターゲットがRh、管電圧および管電流はSoilモードで計測し、ビーム1が40kVおよび60 $\mu\text{A}$ 、ビーム2が40kVおよび40 $\mu\text{A}$ 、ビーム3が15kVおよび25 $\mu\text{A}$ （軽元素測定時は15kV）である。装置の測定部径は10mm、計測時間はSoilモードが90秒で、大気雰囲気下で測定した。

##### 3) EPMA分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器は奈良教育大学地学実験室の電界放出型電子プローブマイクロアナライザ（FE-EPMA）JXA-8500F（JEOL製）を使用した。測定条件は励起用X線ターゲットがRh、管電圧は15kVおよび電流は50nAである。装置の測定部径は2から5 $\mu\text{m}$ 、計測時間は20分で、真空状態で測定した。測定に際して炭素（C）を蒸着させている。

##### 4) 赤外分光分析

フーリエ変換赤外分光光度計（FT-IR）を用いて測定を行う。機器は、パーキンエルマー FrontierG old 赤外分光光度計を使用した。測定条件は分解能は4 $\text{cm}^{-1}$ 、波数範囲は4000-500 $\text{cm}^{-1}$ 、積算回数10回、検出器はDTGS、光源はDownward-Lookingである。

#### iii) 結果

##### 1) No.10鏡箱底板（遺物番号1559）

###### ・断面観察

鏡箱底板は全体に暗赤色である。漆膜断面の顕微鏡による断面観察を行った（写真図版58-1）。

下位より赤色層、漆層が観察された。赤色層は光学顕微鏡では不透明であり観察できず、落射顕微鏡によって観察した。赤色層は層厚13~56 $\mu\text{m}$ で、2 $\mu\text{m}$ 以下の赤色鉱物粒子が観察された。なお、粒子が細かいため粒子の間に空隙が観察されない。漆層は層厚7~18 $\mu\text{m}$ で、粒子のない透明な層である。観察された大部分が約18 $\mu\text{m}$ の厚さで均一に層をなすが、湾曲する部分や層厚が薄い部分が観察される。

###### ・蛍光X線分析：側面赤色部（第87図-1）

鉄（Fe）のピークとともに、低くカルシウム（Ca）などが検出された。

##### 2) No.13漆器椀（遺物番号3次-16）

###### ・断面観察

漆器椀は全体に赤色である。漆膜断面の顕微鏡による断面観察を行った（写真図版58-2）。

下位より下地層、漆層II、漆層I、赤色層の4層が観察された。下地層は層厚15~57 $\mu\text{m}$ で、約2 $\mu\text{m}$ ×1.5 $\mu\text{m}$ 以下の多角形の鉱物粒子が見られる。なお、鉱物粒子の空隙には漆成分が観察される。漆層IIは層厚5 $\mu\text{m}$ ~11 $\mu\text{m}$ で、粒子のない透明な層である。漆層Iは層厚4 $\mu\text{m}$ ~9 $\mu\text{m}$ で、粒子のない透明な層である。赤色層は層厚29 $\mu\text{m}$ ~33 $\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察され、その径は1 $\mu\text{m}$ 以下で均一ある。

###### ・蛍光X線分析：側面赤色部（第87図-2）

水銀（Hg）のピークとともに、リン（P）、硫黄（S）、鉄（Fe）などが検出された。

##### 3) No.14花形飾り

花形飾りは蓮弁部の上面が金箔に覆われ、また金箔の上には赤色の半透明の付着が見られた。また側面には一部赤色の色彩が見られた。上面の金色部では顕微鏡による断面観察、EPMA分析、FT-IR分析を行い、側面の赤色部では顕微鏡による断面観察、蛍光X線分析を行った。

###### ・断面観察

漆膜断面の顕微鏡観察を花飾りの金色部と側面赤色部の2箇所で行った。



金色部（写真図版58-6）：下位より下地層、漆層Ⅱ、金色層Ⅱ、漆層Ⅰ、金色層Ⅰの5層が観察された。下地層は層厚17～40 $\mu\text{m}$ で、約2 $\mu\text{m}$ 以下の丸みを帯びた炭粉粒子が見られる。なお、炭粉粒子に空隙がほとんど観察されない。これは粒子が極めて細かいためであると考えられる。漆層Ⅱは層厚6～26 $\mu\text{m}$ で、粒子のない透明な層である。金色層Ⅱの層厚は約2 $\mu\text{m}$ と一定の厚さであるが、一部厚みがあり18 $\mu\text{m}$ で粒子や空隙は観察されない。漆層Ⅰは層厚約19 $\mu\text{m}$ で、粒子のない透明な層である。金色層Ⅰは層厚2～7 $\mu\text{m}$ で粒子や空隙は観察されない。金色層はどちらも落射顕微鏡では光沢が見られるが、金色層Ⅰが観察されないプレパラートもしばしばあった。なお、金色層Ⅱでは層が一定の厚さのまま湾曲するプレパラートがあるため、箔である可能性が高い。

側面赤色部（写真図版58-8）：下位より下地層、漆層、赤色層Ⅱ、赤色層Ⅰの4層が観察された。下地層は層厚19～70 $\mu\text{m}$ で樹木の組織に類似する粒子が観察された。なお、下地の空隙には漆成分が観察される。漆層は層厚7～13 $\mu\text{m}$ で、粒子のない透明な層である。赤色層はどちらも光学顕微鏡では不透明であり観察できず、落射顕微鏡によって観察した。赤色層Ⅱは層厚21 $\mu\text{m}$ で、赤色層Ⅰは層厚17 $\mu\text{m}$ である。赤色層ではどちらも鉍物粒子が観察されるが、赤色層Ⅱの方が鉍物粒子が細かく明度が高い。

・EPMA分析：金色部（第88・89図）

下地層では炭素（C）、酸素（O）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）、アルミニウム（Al）、ナトリウム（Na）が検出された。漆層Ⅱでは炭素（C）、酸素（O）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）が検出された。金色層Ⅱでは金（Au）、炭素（C）、O（酸素）が検出された。漆層Ⅰでは炭素（C）、酸素（O）、硫黄（S）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）が検出された。金色層Ⅰでは金（Au）、炭素（C）、酸素（O）が検出された。蒸着に炭素（C）を利用しているため、全ての測定域から検出されるが、金色層ではあまり検出されず漆層、下地層からは明らかに炭素（C）が検出されている。

・赤外分光分析：金色部（第90図）

下地層、漆層Ⅱ、漆層ⅠのIRスペクトルでは、

カルボン酸の特徴である2400～3600 $\text{cm}^{-1}$ の幅の広い吸収帯、パラフィン炭化水素由来の2926 $\text{cm}^{-1}$ および2854 $\text{cm}^{-1}$ の吸収帯、芳香族の特徴となる700～1600 $\text{cm}^{-1}$ で見られる複数の吸収帯が確認できた。現代に利用される生漆および強制乾燥をさせた漆のIRスペクトルでは若干のピークシフトが見られるが、カルボン酸の特徴である2400～3600 $\text{cm}^{-1}$ の幅の広い吸収帯、パラフィン炭化水素由来の2923 $\text{cm}^{-1}$ および2853 $\text{cm}^{-1}$ の吸収帯、芳香族の特徴となる700～1600 $\text{cm}^{-1}$ で見られる複数の吸収帯が確認できる。試料と現代の漆サンプルでは複数の吸収帯において、ほぼ合致したスペクトルが得られ、試料は全て漆液が利用されている。なお、生漆より強制乾燥させた漆にスペクトルの傾向が類似する。

・蛍光X線分析：側面赤色部（第87図-3）

水銀（Hg）のピークとともに、リン（P）、硫黄（S）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）などが検出された。

#### iv) 考察

1) 松坂城下町遺跡における塗膜分析の結果、鏡箱底板では赤色層、漆層の2層が、漆器碗では下地層、漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色層の4層が、花形飾りの金色部では下地層、漆層Ⅱ、金色層Ⅱ、漆層Ⅰ、金色層Ⅰの5層が、花形飾りの側面赤色部では下地層、漆層、赤色層Ⅱ、赤色層Ⅰの4層が観察できた。

2) 鏡箱底板では下地層がなく、木胎の上には赤色層が観察された。赤色層では極めて細かい鉍物粒子が観察された。なお、光学顕微鏡の観察では赤色層に光が透過せず、落射型顕微鏡によって赤色層の観察が可能になったことから、赤色層は極めて細かい赤色鉍物粒子によって構成され光を透過しなかったと考えられ、そのため赤色層では空隙が認められない。鉄（Fe）の検出から、赤色層はベンガラ（鉄鉍石から不純物を取り除き焼成などを繰り返し得られる顔料）を利用していることがわかる。ベンガラは縄文時代から日本で利用されるが、日本における顔料としてのベンガラの製造は1700年代と新しい。展色剤は鏡箱の顔料分析の事例は極めて少ないため現時点では不明であるが、漆器碗の場合には透き漆を利用することが多く、仏像の彩色には膠を利用することが多い。最上層では粒子のない透明な漆層が観察された。下地層が観察されないことから、粒子

の細かい赤色鉱物に透き漆を混和した顔料を木胎に直接塗布したと考えられ、その上に最後に漆を塗布している。

3) 漆器碗の下地層では鉱物粒子が観察され、鉱物粒子の空隙には漆成分が観察された。これは鉱物粒子を用いた下地であり、溶剤に漆液を利用したものと考えられる。鉱物粒子を利用した漆の下地は縄文時代前期の鳥浜貝塚で発見されるが、日本では9世紀前半頃を中心に多く見られ、7世紀頃の仏教伝来に伴って導入された技法の1つと考えられている(岡田文男1995)。なお、下地に鉱物粒子を利用する場合、珪藻土からなる地の粉と砥の粉が利用される場合が多い。地の粉と砥の粉では粒子の大きさが異なり、地の粉よりも砥の粉の方が細かい鉱物粒子であることが多い。そのため、本試料に利用された下地は砥の粉に漆液を混ぜた砥の粉漆下地の可能性が高い。また、下地層が1層、漆層が2層であり、11世紀以降の塗りの回数を少なく簡略化した技法に類似する。しかし、簡略化した漆器には下地層に安価な炭粉と柿渋を利用した炭粉漆下地が多いが、本試料の下地層は砥の粉漆下地であるため高価である。漆層II、漆層Iはいずれも粒子のない透明な漆層であり、層厚は薄く均一である。赤色層では赤色粒子が観察され、径は1 $\mu\text{m}$ 以下であり、水銀(Hg)と硫黄(S)の検出から、赤色層は水銀朱(辰砂などを砕いた顔料)を利用していることがわかる。

4) 花形飾りの金色部の下地層では炭粉が観察され、また赤外分光分析の結果から漆が利用されていることがわかっているため、これは混和材に炭粉と下地結合剤に漆液を利用した炭粉漆下地である。炭粉に漆液を混ぜる炭粉漆下地は古くは縄文時代から用いられており平安時代中頃まで主流とされる技法である(四柳2002)。炭粉の粒子は極めて細かいものが利用され、松の木を焼いてできた煤をから作られる油煙である可能性もある。漆層II、漆層Iはいずれも粒子のない透明な漆層であるが漆層IIでは層厚が不均一で、漆層Iでは層厚が均一である。これは漆層IIを塗布した後に漆層Iを塗布するまでの段階で木胎と下地層の凹凸を平坦にしたためであると考えられる。金色層II、金色層Iはどちらも断面観察では粒子や空隙が観察されず、またEPMAの結果か

ら金色層からは金(Au)が高いピークで検出され銀(Ag)や銅(Cu)が検出されないため、銀と銅を混ぜて製箔しやすくした金箔とは異なり純金箔や純金粉と考えられる。仏像などに漆を膠着剤として金箔を貼付ける技法として漆箔があるが、花形飾りの金色部は2層の金箔および金粉で作製されている。現在では京都において、膠着剤として漆を塗った上に金箔を貼付け、その上に再度膠着剤として漆を塗るかもしくは金箔の上に直接金粉を蒔くぬぐい消し粉蒔きという技法が仏像や位牌の製作技法に伝わっている。ぬぐい消し粉蒔きは金箔に限らず、艶をおさえたむっくりとした重厚な輝きに仕上げる方法である。花形飾りの金色部はこの技法に則った方法で製作された可能性が高い。

花形飾りの側面赤色部の下地層では樹木の組織に類似した粒子が観察され、また空隙には漆成分が観察されたことから木材を粉末にしたものに漆を混ぜて作製する木屎漆を下地に利用している可能性がある。漆層は粒子のない透明な漆層であり薄い。その上に赤色層II、赤色層Iが均一な厚さで観察された。赤色層ではいずれも鉱物粒子が観察されるが、赤色層IIの方が赤色層Iの鉱物粒子よりも極めて細かく、明度が高い。水銀(Hg)と硫黄(S)の検出から、赤色層は水銀朱(辰砂などを砕いた顔料)を利用していることがわかる。なお、光学顕微鏡の観察では赤色層に光が透過せず、落射顕微鏡によって赤色層の観察が可能になったことから、赤色層は極めて細かい水銀朱によって構成されるため空隙が認められなかったとわかる。なお、展色剤は不明であるが漆の可能性が高い。

#### v) まとめ

鏡箱底板は木胎を製作した後、鉄鉱石から作製したベンガラを塗布し、その上に漆を塗布して作製された。

漆器碗は木胎を製作した後、砥の粉に漆液を混ぜた砥の粉漆下地で下地塗りを行い、漆を2層(漆層II・漆層I)塗布し、水銀朱に漆を混ぜた朱漆を塗布する方法で作製されている。なお、1度目の漆(漆層II)を塗った段階で碗表面の凹凸をなくすために表面を平坦に削るもしくは研磨することで整えた可能性がある。中世以降に見られる漆の塗りが少

ない技法を用いているが、下地には炭粉漆下地ではなく高価な砥の粉漆下地を利用しており下地は古くから行われてきた方法に則って製作されている。

花形飾りは木胎を製作したのち、上面の金色部では下地に炭粉漆下地で下地塗りをを行い、漆を1層(漆層Ⅱ)塗布しこの段階で屈み箱表面の凹凸をなくすために表面を平坦に削るもしくは研磨することで整えた可能性がある。そして金箔(金色層Ⅱ)を貼り、そしてまた漆を1層(漆層Ⅰ)塗布し、金箔もしくは金粉(金色層Ⅰ)を貼付け仕上げ、金箔や金粉は純金を利用している。なお、ここでは京都に伝わるぬぐい消し粉蒔き技法に則り仕上げられたと考えられる。また側面では、下地に木屎漆を利用し、薄く漆を塗布した上に赤色顔料として粒度の異なる水銀朱を2回塗布して製作されている。

なお、鏡箱底板のベンガラおよび花形飾り側面の水銀朱は材料を極めて細かく磨砕して作製されており、漆器碗の水銀朱の製造工程とは違いが見られる。

#### 謝辞

ぬぐい消し粉蒔きの技法に関しては、京都の五明金箔工芸に質問をして回答いただき技法を教えてくださいました。

#### [参考文献]

- 伊東隆夫・山田昌久(2012)木の考古学. 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 北野信彦(1995)清須城下町出土漆器資料の製作技法. 清洲城下町遺跡Ⅴ, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集, (財)愛知県埋蔵文化財センター, p. 124-139.
- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.
- 島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.
- 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第1号. 植生史研究会, 242p.
- 岡田文男(1995)古代出土漆器の研究—顕微鏡で探る材

質と技法—. 京都書院, 191p.

高田潤(2003)ベンガラの歴史と材料科学的研究. チルチンびとNo. 23, 風土社, p. 84-85.

四柳嘉章(2002)漆の技術と文化—出土漆の世界—. あらたな世界へ—いくつもの日本Ⅱ, 岩波書店, p. 249-267.

四柳嘉章(2006)漆Ⅰ, ものと人間の文化史131-I. 法政大学, 252p.

四柳嘉章(2006)漆Ⅱ, ものと人間の文化史131-II. 法政大学, 435p.

[作業従事者]

金原正子, 金原裕美子

#### (5) 樹種同定・漆膜分析③

「松坂城下町遺跡(第5次)における樹種同定と漆膜分析」(保存処理を実施した木製品46点、他1点)  
一般社団法人文化財科学研究センター

#### ①樹種同定

##### i) 試料

樹種同定試料は、松坂城下町遺跡(第5次)より出土した曲物蓋、曲物側板、桶底板、楔、栓、漆器碗などの木製品計47点である。なお、遺物番号1561(試料No.25)には大小2点の桶底板が含まれていたため、それぞれに枝番25-1、25-2を付けた。また、漆膜分析試料は、遺跡より出土した漆器碗5点と指物部材1点より採取された漆膜、計6点である。漆器碗から木胎も含め2mm角程の破片を採取した。分析試料の詳細を第28表に記す。

##### ii) 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柎目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

##### iii) 結果

第29表に結果を示し、写真図版59~61に同定された分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.

## イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射柔細胞が分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する常緑高木で通常高さ25m、径0.9mに達する。材は均質緻密かつ堅硬で弾力があり、また保存性が高く水湿にもよく耐え、弓などに用いられる。

## 2) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は5種であり、モミ以外は亜寒帯種であるため、温帯性のモミが考えられる。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが加工が容易で、現在では多用される。

## 3) マツ属 *Pinus* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅は比較的厚い。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属に同定される。マツ属には、ヒメコマツなどの単維管束亜属とクロマツ、アカマツなどの複維管束亜属があり、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚の有無で同定できるが、本試料は保存状態が悪く放射仮道管内壁部分の十分な観察ができなかったため、マツ属までの同定に留まる。マツ属の材は概して重硬で水湿によく耐え、広く用いられる。

## 4) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急

で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

## 5) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の特徴からコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径0.8mに達する。材は木理通直かつ肌目緻密で強靱なうえ、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、特に耐水湿材として用いられる。

## 6) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl.

### ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直かつ肌目緻密で強靱なうえ、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築などに広く用いられる。

## 7) ヒノキ科 *Cupressaceae*

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は腐朽のため観察できない。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキ科に同定される。ヒノキ科に



はヒノキ、サワラ、アスナロ属などが含まれ、本州、四国、九州、屋久島に分布する。大木になるものが多く通常高さ3～40m、径1mに達する。材は概して木理通直かつ肌目が緻密で強靱なうえ、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築などに用いられる。

#### 8) モクレン属 *Magnolia* モクレン科

小型の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互壁孔は階段状である。繊維状仮道管はしばしば薄い横隔壁で仕切られている。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性放射組織型で、1～3細胞幅であるが2細胞幅のものが多い。

以上の特徴からモクレン属に同定される。モクレン属にはホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する常緑または落葉の高木ないし低木である。材は耐朽性・保存性が低いが、軽軟で加工工作が容易であり、建具、漆器木地、彫刻などに用いられる。

#### 9) サクラ属 *Prunus* バラ科

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型である。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。材はやや重硬で保存性が高く加工工作が中庸であり、建築材、器具などに用いられる。

#### 10) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume

##### トチノキ科

小型でやや角張った道管が単独ないし放射方向に2～数個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。道管放射組織壁孔は小型で密に分布する。放射組織はすべて平伏細胞からなる単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の特徴からトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ15～20m、径0.5～0.6mに達する。材は耐朽性・保存性が低いが軟らかく緻密であり、容器などに用いられる。

#### iv) 所見

同定の結果、松坂城下町遺跡（第5次）より出土した木製品は、ヒノキ29点、スギ6点、モミ属4点、トチノキ3点、カヤ1点、マツ属1点、コウヤマキ1点、ヒノキ科1点、モクレン属1点、サクラ属1点であった。なお、枝番を付けた試料No.25-1、25-2はいずれもスギであった。

最も多いヒノキは曲物蓋、曲物側板、曲物底板、栓、下駄、建築部材、板材、円形板材、指物部材の多くの器種に使われ、ヒノキ科は曲物蓋に使われている。ヒノキやヒノキ科の材は木理通直かつ肌目が緻密で強靱なうえ耐朽性・耐湿性が高い良材であり、東海地方では古墳時代以降、建築材、曲物、箸など様々な用途に多用される。次に多いスギは曲物底板、桶底板、栓に使われている。スギは木目がやや粗いが、木理通直で加工工作が容易なうえ大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。モミ属は曲物底板、楔、板材に使われている。モミ属は耐朽性・保存性が低いが、軽軟で加工工作が容易な材である。カヤは建築部材（もしくはカンナ台などの工具台）に使われている。カヤはやや重硬で弾力に富み、割裂性が大きく加工工作が容易なうえ保存性が高い材である。全国的にカンナ台の出土例は珍しいが、東京都の千駄ヶ谷五丁目遺跡（江戸時代後半）ではスギまたはヒノキ科のカンナ台が出土している。なお、現在においてカヤなどの針葉樹がカンナ台の用材として利用されることは少なく、カシ（アカガシやシラカシ）などの重硬かつ強靱な広葉樹が使われる。マツ属は棒に使われている。マツ属は概して重硬で水湿によく耐える材であり、土木材や建築材に適している。コウヤマキは曲物底板に使われている。コウヤマキはやや軽軟で加工工作が容易なうえ耐湿性に優れている材であり、現在では桶や流し台などに利用される。なお、三重県では六大A遺跡（弥生時代後期から室町時代前半）などにおいて、ヒノキ、

スギ、モミ属、カヤ、マツ属、コウヤマキなど針葉樹の木製品が多く出土している。モクレン属、サクラ属、トチノキは漆器碗に使われている。モクレン属やトチノキは耐朽性・保存性が低いが軟らかく切削・加工が容易な材で、サクラ属はやや重硬で保存性が高く加工工作が中庸な材である。モクレン属、サクラ属、トチノキはいずれも碗などの挽物として現在でも利用される樹種である。なお、三重県における碗の同定例は少ないが、桑名城下町遺跡（江戸時代後半）からもトチノキの碗が出土している。

以上から、松坂城下町遺跡（第5次）より出土した曲物蓋、曲物側板、曲物底板、栓、建築部材、板材などの木製品には、概して木理通直で加工工作が容易な針葉樹が使われており、特に肌目が緻密で耐朽性・耐湿性が高いヒノキが多用されている。また、漆器碗には現在でも碗などの挽物によく利用されるモクレン属、サクラ属、トチノキの広葉樹が使われている。本遺跡で同定された樹種はいずれも温帯に広く分布する樹種であり、当時の遺跡周辺地域から流通等によってもたらされたと考えられる。

## ②漆膜分析

松坂城下町遺跡（第5次）出土漆器製品の漆膜について、断面の顕微鏡観察を行い、製作工程の考察を行う。

### i) 方法

#### ・断面観察

蛍光X線分析を行った後、高透明エポキシ樹脂（ボンドEセット：コニシ株式会社）を使用して試料を包埋後、カミソリで薄片を作製し、厚さ数 $\mu\text{m}$ になるまで耐水性の紙やすり（＃240、＃800、＃1500、＃4000）で研磨する。完成した試料を光学顕微鏡および落射顕微鏡で観察した。

### ii) 結果

#### ・試料No.42漆器碗（写真図版62-1・2）

漆器碗は全体に黒色で、碗外面では薄く黒色で模様が施されている。なお、外面の試料採取は模様部分から行った。漆膜断面の顕微鏡観察を漆器碗の外面と内面の両方で行った。

外面：下位より下地層、漆層Ⅱ、赤色漆層、漆層Ⅰの4層が観察される。下地層は層厚 $18\mu\text{m}\sim 40\mu\text{m}$ で、 $4\mu\text{m}\times 18\mu\text{m}$ の棒状の粒子や粗い多角形の炭粉粒子

が見られる。炭粉の空隙には漆が観察される。漆層Ⅱは層厚 $5\mu\text{m}\sim 9\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。赤色漆層は層厚約 $32\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $1\mu\text{m}$ 以下で均一である。漆層Ⅰは層厚約 $1\mu\text{m}$ で透明で黄色を呈し、表面は粒状の塊になった漆が見られ平坦ではなく黒色粒子がわずかに確認される。

内面：下位より下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察できる。下地層は層厚 $8\mu\text{m}\sim 31\mu\text{m}$ で、約 $2\mu\text{m}\times 5\mu\text{m}$ の粗い多角形の炭粉粒子が見られる。炭粉の空隙には漆が観察される。漆層は層厚 $4\mu\text{m}\sim 8\mu\text{m}$ で、下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。赤色漆層は層厚 $33\mu\text{m}\sim 38\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $1\mu\text{m}$ 以下で均一である。

#### ・試料No.43漆器碗蓋（写真図版62-3・4）

漆器碗は外面が黒色で、内面が赤色である。なお、外面の試料採取は模様部分から行った。漆膜断面の顕微鏡観察を漆器碗の外面と内面の両方で行った。

外面：下位より下地層、漆層Ⅲ、漆層Ⅱ、漆層Ⅰの4層が観察される。下地層は層厚 $66\mu\text{m}\sim 110\mu\text{m}$ で、 $30\mu\text{m}$ を超える尖度の高い細長い炭粉粒子が多い。炭粉の空隙には漆が観察される部分もある。漆層Ⅲは層厚 $5\mu\text{m}\sim 9\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。漆層Ⅱは層厚 $25\mu\text{m}\sim 27\mu\text{m}$ で透明な黄色を呈し、 $1\mu\text{m}$ 以下の黒色粒子がごくわずかに観察される。漆層Ⅰは層厚約 $3\mu\text{m}$ で透明でやや赤色を呈する。

内面：下位より下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察できた。下地層は層厚 $77\mu\text{m}\sim 93\mu\text{m}$ で、棒状の細長い粒子や $10\mu\text{m}\sim 26\mu\text{m}$ の粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察された。漆層は層厚約 $5\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる炭粉粒子が含まれる。赤色漆層は層厚 $21\mu\text{m}\sim 26\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $1\mu\text{m}$ 以下で均一である。

#### ・試料No.44漆器碗（写真図版62-5・6）

漆器碗は全体に赤色である。漆膜断面の顕微鏡観察を漆器碗の外面と内面の両方で行った。

外面：下位より下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察される。下地層は層厚 $31\mu\text{m}\sim 51\mu\text{m}$ で、尖度が高

い多角形の炭粉粒子が見られるが大きい物で約 $6\mu\text{m}\times 34\mu\text{m}$ ある。なお、炭粉の空隙には漆が観察された。漆層は層厚 $13\mu\text{m}\sim 18\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる炭粉粒子が含まれる。赤色漆層は層厚 $23\mu\text{m}\sim 25\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $1\mu\text{m}$ 以下で均一ある。

内面：下位より下地層、漆層、赤色漆層の3層が観察できる。下地層は層厚 $31\mu\text{m}\sim 77\mu\text{m}$ で、約 $1\mu\text{m}\times 14\mu\text{m}$ の尖度の高い細長い棒状の炭粉粒子が見られる。炭粉の空隙には漆が観察される。漆層は層厚 $12\mu\text{m}\sim 14\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。赤色漆層は層厚 $62\mu\text{m}\sim 65\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $2\mu\text{m}$ 以下で均一である。

・試料No.45漆器碗（写真図版62-7・8）

漆器碗は外面が黒色で、内面が赤色である。漆膜断面の顕微鏡観察を漆器碗の外面と内面の両方で行った。

外面：下位より下地層、漆層Ⅳ、漆層Ⅲ、漆層Ⅱ、漆層Ⅰの5層が観察される。下地層は層厚 $70\mu\text{m}\sim 101\mu\text{m}$ で、約 $3\mu\text{m}\times 11\mu\text{m}$ の粗い多角形の炭粉粒子が見られる。炭粉の空隙には漆が観察される。漆層Ⅳは層厚 $9\mu\text{m}\sim 12\mu\text{m}$ で透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。漆層Ⅲは層厚約 $10\mu\text{m}$ で透明で明るい黄色を呈する。漆層Ⅱは層厚約 $8\mu\text{m}$ で透明で明るい黄色を呈し、赤色粒子がわずかに観察される。漆層Ⅰは層厚約 $9\mu\text{m}$ で、透明だが下層よりやや赤く、黒色粒子がわずかに確認される。

内面：下位より下地層、漆層Ⅱ、赤色漆層、漆層Ⅰの4層が観察できる。下地層は層厚 $48\mu\text{m}\sim 62\mu\text{m}$ で、約 $1\mu\text{m}\times 16\mu\text{m}$ の尖度が高く細長い炭粉粒子が見られる。炭粉の空隙には漆が観察される。漆層Ⅱは層厚 $17\mu\text{m}\sim 18\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。赤色漆層は層厚 $25\mu\text{m}\sim 31\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $1\mu\text{m}$ 以下で均一である。漆層Ⅰは層厚 $1\mu\text{m}\sim 2\mu\text{m}$ で透明で黄色を呈し、表面は粒状の塊になった漆が見られ平坦ではない。

・試料No.46漆器碗（写真図版63-9・10）

漆器碗は外面が黒色で、内面が炭化している。漆

膜断面の顕微鏡観察を漆器碗の外面と内面の両方で行った。

外面：下位より下地層、漆層Ⅲ、漆層Ⅱ、漆層Ⅰの4層が観察される。下地層は層厚 $63\mu\text{m}\sim 133\mu\text{m}$ で、約 $3\mu\text{m}\times 10\mu\text{m}$ の棒状の粒子や粗い多角形の炭粉粒子が見られる。炭粉の空隙には漆が観察される。漆層Ⅲは層厚 $9\mu\text{m}\sim 15\mu\text{m}$ で、透明で明るい赤色を呈し下地層からの混入とみられる少量の炭粉粒子が含まれる。漆層Ⅱは層厚 $30\mu\text{m}\sim 42\mu\text{m}$ で透明で黄色を呈し黒色粒子がわずかに確認される。漆層Ⅰは層厚約 $2\mu\text{m}$ で、黒色粒子がわずかに確認される。

内面：下位より下地層？の1層が観察できる。下地層？は層厚 $63\mu\text{m}\sim 108\mu\text{m}$ で、約 $1\mu\text{m}\sim 24\mu\text{m}$ の不定型な炭粉が見られ、炭化のため下地の炭粉かどうかは定かではない。炭粉の空隙には漆が観察されない。

・試料No.47指物部材（写真図版63-11・12）

指物部材は長方形の形をしており、長辺の2面に暗い赤色が塗られ、金色で模様が施されている。なお、試料採取は模様部分から行った。

下位より漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色漆層、金色層の4層が観察された。漆層Ⅱは層厚約 $18\mu\text{m}$ で透明で黄色を呈する。漆層Ⅰは層厚約 $34\mu\text{m}$ で透明で黄色を呈する。赤色漆層は層厚約 $7\mu\text{m}$ で赤色粒子が観察されその径は $1\mu\text{m}$ 以下で均一ある。金色層は光学顕微鏡下では光が透過せず約 $3\mu\text{m}$ の間に $2\mu\text{m}\sim 3\mu\text{m}$ の黒色が観察されるのみであったため、落射顕微鏡での観察を行った。金色層は金色に光を反射する粒子であるが層状ではなく粒子が赤色漆層の上に点在することがわかり、金粉であると見られる。

### iii) 考察

1) 松坂城下町遺跡（第5次）における漆器製品の漆膜分析の結果、漆器碗ではすべての下地層が炭粉下地であり、漆層は赤色漆層をあわせて4層から2層まで観察できた。漆の装飾を施された角材では、漆層Ⅱ、漆層Ⅰ、赤色漆層、金色層の4層が観察できた。

2) すべての漆器碗の下地層の炭粉の空隙には漆成分が観察された。これは混和材に炭粉と下地結合剤に漆液を利用した炭粉漆下地である。炭粉に漆液を混ぜる炭粉漆下地は古くは縄文時代から用いられており平安時代中頃まで主流とされる技法である（四

柳2002)。角材では下地が観察されなかった。

3) 漆器碗の下地層直上の漆層はいずれも透明で明るい赤色を呈しており、下地層からの混入と考えられる炭粉粒子が観察された。この漆層はいずれも上面が平らであり、これは炭粉漆下地の上に漆を塗布し、漆が乾いた後に漆の表面を平坦に削ったまたは研磨したためと考えられる。この後に塗布する漆や赤色漆は均一な層を呈する。

4) 赤色漆層は試料No.42漆器碗、試料No.43漆器碗蓋、試料No.44漆器碗、試料No.45漆器碗、試料No.47指物部材で観察された。赤色漆層の中では径1 μm以下の赤色粒子が観察され、粒子の大きさや色合いから水銀朱（辰砂などを砕いた顔料）と見られ、それに展色剤として漆を混ぜた朱漆と考えられる。

5) 試料No.42漆器碗外面模様部分、試料No.43漆器碗蓋外面模様部分、試料No.45漆器碗外面黒色、試料No.46漆器碗外面黒色では、漆層の中にわずかに黒色粒子が観察された。漆製作の中で黒色漆は3種類あり、漆そのものの色合いで黒色漆とするものの他に、炭粉を混ぜた黒色漆、鉄粉を混ぜ酸化させることで黒色にし布で漉して鉄粉を回収した黒色漆があり、炭粉や鉄粉を添加することで漆黒になるとされている。今回の分析では蛍光X線分析を実施していないが、粒子の大きさや粒状であることからこれらの黒色粒子は鉄由来の粒子と見なされる。なお、試料No.42漆器碗外面模様部分、試料No.43漆器碗蓋外面の模様部分では漆層が極めて薄く、1層のみであるため薄い黒色が表現されており、試料No.45漆器碗外面黒色、試料No.46漆器碗外面黒色は腕全面を黒色にするために黒色粒子を含む漆を2度塗布するなど、色合いの調整を行っていることがわかる。

6) 試料No.47指物部材では下地がない理由として、木胎が針葉樹のヒノキであり、漆が施されている面がいずれも板目面であるため年輪による凹凸の影響が少なかったことが考えられる。また、漆層Ⅱと漆層Ⅰの間にわずかな空洞を示す線が観察されるため、漆層Ⅱを塗布したのちに平坦に削った可能性がある。金色層は金粉である可能性が高く、金を粉末状にして漆や膠に混ぜて溶かした金泥で模様を施したと考えられる。

#### iv) まとめ

本遺跡の漆器碗は木胎を製作したのち、炭粉に漆液を混ぜた炭粉漆下地で下地塗りを行い、漆を1層塗布した後に乾かし表面の凹凸を削るもしくは研磨している。試料No.44漆器碗はその後朱漆を塗布するのみであるが、他の漆製品は2度以上漆や朱漆を塗布して仕上げている。なお、黒漆や外面の模様は漆に酸化させた鉄粉成分を添加して作った漆黒漆を利用して彩色されている。中世以降の漆器製品は下地結合剤に柿渋を用い、漆の塗りが1・2回と少なくすることで安価で作業工程を簡略化させた漆器製品が多いが、本遺跡では下地結合剤には漆液を用い、またほとんどの漆器碗で漆の塗りの工程が簡略化されておらず、高級な漆器製品であったと言える。

試料No.47指物部材はヒノキで木胎を製作したのち、漆を2度塗るが1度目の塗布ののちに平坦に削った可能性がある。そして全体に朱漆を薄く塗り、金泥で模様を施してある。

#### [参考文献]

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土木製品用材データベース。海青社、449p.
- 金原正明（2002・2003）樹種同定。一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）、三重県埋蔵文化財調査報告115-16・17、三重県埋蔵文化財センター、p.18-22.
- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.
- パリノ・サーヴェイ（1997）木製品の用材と製作技法。東京都渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口RCビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書 本文編（第1分冊）、東京都渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会、p.326-366.
- パリノ・サーヴェイ（2002）木製品・種子製品の同定。桑名城下町遺跡発掘調査報告書 萱町93（法盛寺）地点、桑名市教育委員会、p.57-60.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研



究特別第1号. 植生史研究会, 242p.

岡田文男 (1995) 古代出土漆器の研究－顕微鏡で探る材質と技法－. 京都書院, 191p.

四柳嘉章 (2002) 漆の技術と文化－出土漆の世界－. あらたな世界へ いくつもの日本Ⅱ, 岩波書店, p. 249-267.

四柳嘉章 (2006) 漆Ⅰ, ものと人間の文化史131-Ⅰ. 法政大学, 252p.

四柳嘉章 (2006) 漆Ⅱ, ものと人間の文化史131-Ⅱ. 法政大学, 435p.

[作業従事者]

樹種同定、塗膜分析：金原裕美子、渡辺英明（一般社団法人文化財科学研究センター）

調査区	層位	試料No.	花粉	寄生虫卵	植物珪酸体	珪藻	種実	動物遺存体	貝類
5次-1区	5層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	9 30	○	○	○	○			○
5次-2区	8～11層 (暗灰色粘砂) [SZ550]	8							○
5次-3区	SK503	7							○
5次-3区	SK506	21						○	
5次-3区	11層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	6, 15, 24, 25, 27, 28					○	○	○
5次-5区	7層 (褐灰色粘砂) [SZ550]	2, 18						○	○
5次-5区	8～9層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	3, 4, 5, 17, 22					○	○	○
5次-8区	柱状図③-7層 [基本層序V層]	29	○		○	○			
5次-8区	5・6層 (暗灰黄～黒褐色粘砂) [SZ551]	16							○
5次-8区	5層 (暗灰黄色粘砂) [SZ551]	11							○
5次-8区	6層 (黒褐色粘砂) [SZ551]	12							○
5次-12区	SD534	10							○
5次-12区	SK533	14							○
5次-12区	3層 (暗灰色粘砂) [SZ550]	1, 13, 19, 20, 23, 26					○	○	○

第13表 第5次調査 土壤分析試料一覧

分類群		8区	1区
学名	和名	7層	5層 [SZ550]
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Podocarpus</i>	マキ属		3
<i>Abies</i>	モミ属		1
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	4	31
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	6	8
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ		1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	8
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	4
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	31	1
<i>Castanopsis</i>	シイ属	9	3
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	11	11
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	6	5
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		2
<i>Ilex</i>	モチノキ属		1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	1	
<i>Elaeagnus</i>	グミ属		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	
Leguminosae	マメ科	2	1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		1
Gramineae	イネ科	108	72
<i>Oryza type</i>	イネ属型		130
Cyperaceae	カヤツリグサ科	8	3
<i>Allium</i>	ネギ属	1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		3
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		19
Caryophyllaceae	ナデシコ科		3
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	1	
Cruciferae	アブラナ科		30
<i>Vigna</i>	ササゲ属		2
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属	14	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	
Apiodeae	セリ亜科	15	
Solanaceae	ナス科		5
Lactuoidae	タンポポ亜科	40	1
Asteroideae	キク亜科	22	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	151	5
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ		3
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	4	6
Trilate type spore	三条溝胞子	34	7
Arboreal pollen	樹木花粉	73	81
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	361	281
Total pollen	花粉総数	437	363
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.2	6.6
		×10 <sup>4</sup>	×10 <sup>3</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	5	5
Fern spore	シダ植物胞子	38	13

第14表-1 第5次調査 花粉・寄生虫卵分析結果

分類群		8区	1区
学名	和名	7層	5層 [SZ550]
Helminth eggs	寄生虫卵		
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>	回虫卵		4
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵		1
<i>Metagonimus yokogawai-Heterophyes</i>	横川吸虫卵 - 異形吸虫類卵		1
Unknown eggs	不明虫卵		1
Total	計		7
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度		1.3 ×10 <sup>2</sup>
Stone cell	石細胞	(-)	(-)
Digestion rimeins	消化残渣(?)	(-)	(+)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal・woods fragments)	(×10 <sup>5</sup> )		
未分解遺体片		0.7	11.3
分解質遺体片		124.8	15.0
炭化遺体片 (微粒炭)		4.7	8.5

第14表-2 第5次調査 花粉・寄生虫卵分析結果

分類群		地点・試料	8区	1区
学名			7層	5層 [SZ550]
イネ科	Gramineae			
イネ	<i>Oryza sativa</i>		13	40
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	<i>Oryza sativa (husk Phytolith)</i>			7
シバ属型	<i>Zoysia type</i>		13	7
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>		7	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		20	7
タケ亜科	Bambusoideae			
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		46	13
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		613	121
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		26	7
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		33	27
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>		7	7
未分類等	Others		86	81
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin		13	7
棒状珪酸体	Rod-shaped		112	47
未分類等	Others		40	27
樹木起源	Arboreal			
その他	Others		13	
植物珪酸体総数	Total		1041	397
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出				
イネ	<i>Oryza sativa</i>		0.39	1.19
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>		0.08	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		0.53	0.16
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		2.94	0.58
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		0.20	0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		0.10	0.08
タケ亜科の比率 (%)				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		14	18
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		78	67
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		5	6
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		3	9
メダケ率	Medake ratio		92	85

第15表 第5次調査 植物珪酸体分析結果

分類群	8区	1区
	7層	5層 [SZ550]
貧塩性種 (淡水生種)		
<i>Achnanthes lanceolata</i>		3
<i>Achnanthes minutissima</i>		45
<i>Amphora copulata</i>		1
<i>Amphora montana</i>		112
<i>Bacillaria paradoxa</i>		1
<i>Caloneis bacillum</i>		1
<i>Cocconeis disculus</i>		2
<i>Cocconeis placentula</i>		2
<i>Cymbella naviculiformis</i>		1
<i>Cymbella silesiaca</i>		6
<i>Cymbella sinuata</i>		2
<i>Cymbella tumida</i>	1	
<i>Cymbella turgidula</i>		2
<i>Epithemia adnata</i>		1
<i>Eumotia minor</i>	1	1
<i>Fragilaria capucina</i>		2
<i>Frustulia vulgaris</i>		3
<i>Gomphonema parvulum</i>	2	1
<i>Gomphonema spp.</i>		2
<i>Gyrosigma spp.</i>		2
<i>Hantzschia amphioxys</i>		11
<i>Melosira varians</i>		1
<i>Navicula atomus</i>		1
<i>Navicula clementis</i>		1
<i>Navicula confervacea</i>		2
<i>Navicula contenta</i>		4
<i>Navicula cryptotenella</i>		4
<i>Navicula elginensis</i>		6
<i>Navicula gallica</i>		1
<i>Navicula kotschyi</i>		1
<i>Navicula laevissima</i>		2
<i>Navicula mutica</i>		16
<i>Navicula pupula</i>		3
<i>Navicula spp.</i>		4
<i>Navicula veneta</i>		27
<i>Neidium alpinum</i>		2
<i>Nitzschia amphibia</i>		3
<i>Nitzschia clausii</i>		2
<i>Nitzschia debilis</i>		3
<i>Nitzschia palea</i>		17
<i>Nitzschia spp.</i>		12
<i>Pinnularia appendiculata</i>		1
<i>Pinnularia borealis</i>	4	1
<i>Pinnularia interrupta</i>		1
<i>Pinnularia lagerstedtii</i>		1
<i>Pinnularia microstauron</i>		1
<i>Pinnularia obscura</i>		2
<i>Pinnularia schoenfelderi</i>		9
<i>Pinnularia schroederii</i>	1	1
<i>Pinnularia subcapitata</i>		3
<i>Pinnularia viridis</i>	1	
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1	1
<i>Surirella angusta</i>		3
<i>Surirella ovata</i>		1
合 計	11	338
未同定	1	8
破片	30	93
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	2.4 × 10 <sup>3</sup>	3.0 × 10 <sup>5</sup>
完形殻保存率 (%)	28.6	78.8

第16表 第5次調査 珪藻分析結果



分類群		部位	3区	5区	12区
学名	和名				
Arbor	樹木				
<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	カヤ	種子(破片)		7	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	毬果		2	
<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核		1	
		(半形)	1		
		(破片)		1	
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核 (半形)		1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	幼果		1	
<i>Quercus</i>	コナラ属	果皮(破片)	1		
<i>Prunus mume</i> S. et Z.	ウメ	核		6	1
		(半形)		1	
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1		
		(半形)		1	
		(破片)		1	
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ属サクラ節	核	1	3	
<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.	サンショウ	種子	40	143	
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>Subtripinnata</i> Miq.	センダン	核		2	3
		(破片)			1
<i>Ilex integra</i> Thunb.	モチノキ	種子	1		
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子		1	
<i>Diospyros</i>	カキノキ属	種子	1	9	
		(破片)		1	
Herb	草本				
<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	果実		3	
<i>Triticum aestivum</i> L.	コムギ	果実		2	
<i>Hordeum-Triticum aestivum</i>	ムギ類	炭化果実	7	2	1
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	1	1	
<i>Commelina</i>	ツクサ属	種子		1	
<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	ソバ	果実		4	
<i>Polygonum Thunbergii</i> S. et Z.	ミゾソバ	果実		7	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実		1	
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	果実		3	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	1		
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	果実		1	
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子		17	
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	7	44	
<i>Solanaceae</i>	ナス科	種子		1	
<i>Benincasa hispida</i> Cogn.	トウガン	種子		12	
		(破片)		2	
<i>Cucurbita moschata</i> Duch.	カボチャ	種子	1	3	
		(破片)	1		
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	466	707	
		(破片)	32	74	
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子		2	
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ	種子		86	
Asterioideae	キク亜科	果実		2	
Total	合計		562	1156	6
Unknown	不明	(破片)			2
	備考		芽3 サナギ2	ウロコ1 芽2	

第17表-1 第5次調査 種実同定結果

分類群		部位	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26	No.27	No.17
学名	和名		5区	12区	3区	3区	12区	3区	5区
Arbor	樹木								
<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	カヤ	種子(破片)	3						4
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	毬果	2						
<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核							1
		(半形)				1			
		(破片)							1
<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核 (半形)	1						
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	幼果	1						
<i>Quercus</i>	コナラ属	果皮(破片)						1	
<i>Prunus mume</i> S. et Z.	ウメ	核	6	1					
		(半形)	1						
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核			1				
		(半形)	1						
		(破片)	1						
<i>Prunus</i> sect. <i>Pseudocerasus</i>	サクラ属サクラ節	核	2			1			1
<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.	サンショウ	種子	72			39		1	71
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>Subtripinnata</i> Miq.	センダン	核	1				3		1
		(破片)					1		
<i>Ilex integra</i> Thunb.	モチノキ	種子				1			
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子							1
<i>Diospyros</i>	カキノキ属	種子	8			1			1
		(破片)							1
Herb	草本								
<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	果実							3
<i>Triticum aestivum</i> L.	コムギ	果実							2
<i>Hordeum-Triticum aestivum</i>	ムギ類	炭化果実				7	1		2
<i>Carex</i>	スゲ属	果実						1	1
<i>Commelina</i>	ツユクサ属	種子							1
<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	ソバ	果実							4
<i>Polygonum thunbergii</i> S. et Z.	ミゾソバ	果実							7
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実							1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	果実							3
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子				1			
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	果実							1
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子							17
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子				7			44
<i>Solanaceae</i>	ナス科	種子	1						
<i>Benincasa hispida</i> Cogn.	トウガン	種子	7						5
									2
<i>Cucurbita moschata</i> Duch.	カボチャ	種子	3					1	
		(破片)						1	
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子	556			427		39	151
		(破片)	74			29		3	
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子	2						
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ	種子	27						59
Asteroidae	キク亜科	果実							2
Total	合計		769	1	1	514	5	47	387
Unknown	不明	(破片)					2		
	備考		ウロコ1 芽2			芽3		サナギ2	7500g

第17表-2 第5次調査 種実同定結果

No.	地区	層位	備考	大分類	小分類	部位	部分	左右	備考	計測
28	3区	11層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	22m付近サンプル	硬骨魚綱	ヒラメ	下尾骨		-		
			23m付近サンプル	硬骨魚綱	サワラ	椎骨	尾椎	-		
			23m付近サンプル	硬骨魚綱	不明	椎骨				
なし	12区	3層 (暗灰色粘砂) [SZ550]		哺乳綱	イヌ	橈骨	近位部-遠位端		Bd19.06	
18	5区	7層 (褐色粘砂) [SZ550]		哺乳綱	ウマ	肩甲骨	近位部-遠位端	右	内側前縁中央付近にハツリ5箇所 (下→上方向にハツリ)	GLP76.69LC52.55 BG40.17SLC55.19
				哺乳綱	ウシ	大腿骨	近位部-遠位部	右	骨幹部から遠位部よりに肉削ぎ痕、 ハツリ、筋粗面発達	
20	12区	3層 (暗灰色粘砂) [SZ550]		硬骨魚綱	マグロ属	椎骨	尾椎	-	1m以上	椎体横径38.41 縦径33.22
17	5区	8~9層 (黒褐色粘砂) [SZ550]		硬骨魚綱	ヒラメ	前上顎骨		左		
				硬骨魚綱	スズキ属	鋤骨		-	切断? 正中方向	
				硬骨魚綱	コチ科	前鰓蓋骨		右		
				硬骨魚綱	コチ科	椎骨		-		
				硬骨魚綱	タイ科	鋤骨		-	マダイ?、20cm以下	
				硬骨魚綱	カレイ科	舌顎骨		左		
				硬骨魚綱	カレイ科	椎骨		-		
				硬骨魚綱	アジ科	歯骨		右	極小	
				硬骨魚綱	不明	角骨			2点	
				硬骨魚綱	不明	主上顎骨				
				硬骨魚綱	不明	椎骨				12点、被熱白色変化1点、切断1点
				硬骨魚綱	不明	主上顎骨?				
	硬骨魚綱	不明	鰓蓋骨?							
	硬骨魚綱	不明	不明				1.55g、多数			
21	3区	SK506		硬骨魚綱	カジキ類	腹椎	椎体	-	2m以上、切断(ぶつ切り)	

第18表 第5次調査 動物遺体同定結果

遺構名	アワビ類		サザエ		タニシ科	カワナナ科	ツメタガイ	アカニシ	フネガイ科	アカガイ		マガキ	ハカガイ		シオフキ		ヤマトシジミ		アサリ		カガミガイ		ハマグリ		フジツボ
	殻	破片	殻	蓋						左	右		破片	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
1区	2		7	2							2												20	27	
2区			3	1	1			1		10	7	○			1					2	3		37	29	
3区							1								2	1	7	10	1	23	31		14	13	
5区	1		2	3					1	1	1	2	○	1					3				14	17	○
	1	○	17	2	5	1			1		○			15	15	6	2	5	5	51	43	1	95	87	
8区	1		1			1					○								3	2			1	4	
																							56	59	
12区																									
	1		1		4	1	3	5		2	○								3	3			8	6	
合計	6		42		10	3	5	8	2	25		1		32	13		43		214		1		533		
	6		34		10	3	5	8	2	17		1		17	10		24		119		1		287		

第19表 第5次調査 貝類同定結果 (遺構別)



No.	地区	層位	種類	左	右	-	計	備考
1	12区	3層 (暗灰色粘砂) [SZ550]	アカガイ アカガイ?破片 アカニシ アサリ アワビ カワニナ科 タニシ科 ツメタガイ ハマグリ	1   3    8	   3    6	  16 3  1 1 4 2	1 16 3 6 1 1 4 2 14	
2	5区	7層 (褐灰色粘砂) [SZ550]	アカガイ?破片 アサリ アワビ 破片 カワニナ科 サザエ ハマグリ	 3   1	 2   4	9  1 1 1 1	9 5 1 1 1 5	
3	5区	8~9層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	アカガイ?破片 アサリ アワビ 破片 カワニナ科 ヤマトシジミ 種類不明 タニシ科 バカガイ ハマグリ	1   4   5 17	2   4   3 13	1  4 1  1 2	1 3 4 1 8 1 2 8 30	同一個体2組
4	5区	8~9層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	アサリ アワビ カガミガイ サザエ サザエ 蓋 シオフキ タニシ科 バカガイ ハマグリ	2  1   1 8 21	1      8 15	   1 5 1 2	3 1 1 5 1 1 2 16 36	棘有       同一個体3組
5	5区	8~9層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	アサリ アワビ 破片 マカキ サザエ サザエ 蓋 シオフキ ヤマトシジミ タニシ科 バカガイ ハマグリ フネガイ科	48     5 1  2 57	40     2 1  1 59	2 1 12 1  7 2 1 6 116 1	88 2 1 12 1 7 2 1 6 116 1	棘有 内3点被熱       同一個体2組
6	3区	11層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	アカガイ アカガイ?破片 アサリ サザエ タニシ科 バカガイ ハマグリ ヤマトシジミ	1  3   1 12 1	2      15	 7  1 8	3 7 3 1 8 1 27 1	棘有
7	3区	SK503	アサリ シオフキ 種類不明 ツメタガイ ハマグリ ヤマトシジミ	23 2 3  14 7	31 1 2  13 10	   1	54 3 5 1 27 18	同一個体1組

第20表-1 第5次調査 貝類同定結果 (資料番号別)

No.	地区	層位	種類	左	右	-	計	備考
8	2区	8～11層 (暗灰色粘砂) [SZ550]	アカガイ	10	7		17	内3点穿孔有        同一個体1組
			アカガイ			6	6	
			アカニシ			1	1	
			アサリ	2	3		5	
			サザエ			3	3	
			サザエ蓋			1	1	
			シオフキ	1			1	
			タニシ科			1	1	
			ハマグリ	37	29		66	
			ヤマトシジミ		1		1	
9	1区	5層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	アカガイ		2		2	棘有
			クロアワビ			2	2	
			サザエ			7	7	
			サザエ 蓋			2	2	
			ヤマトシジミ	7	6		13	
			ハマグリ	20	27		47	
10	12区	SD534	アカニシ			1	1	
			アサリ	1			1	
			ハマグリ		1		1	
11	8区	5層 (暗灰黄色粘砂) [SZ551]	ハマグリ	56	59		115	同一個体5組
12	8区	6層 (黒褐色粘砂) [SZ551]	アサリ	17	17		34	同一個体1組
			バカガイ	1			1	
			ハマグリ	11	6		17	
13	12区	3層 (暗灰色粘砂) [SZ550]	アカガイ	1			1	同一個体 棘有
			アカニシ			2	2	
			サザエ			1	1	
			ツメタガイ			1	1	
14	12区	SK533	アサリ	5	7		12	棘有 同一個体2組
			サザエ			2	2	
			シオフキ		1		1	
			ハマグリ	11	11		22	
15	3区	11層 (黒褐色粘砂) [SZ550]	アカガイ?破片			1	1	複数あり
			アワビ			1	1	
			サザエ			1	1	
			サザエ 蓋			3	3	
			ハマグリ	2	2		4	
			フジツボ					
16	8区	5・6層 (暗灰黄～黒褐色粘砂) [SZ551]	アカガイ	1			1	
			アカニシ			1	1	
			サザエ			1	1	
			ツメタガイ			1	1	
			ハマグリ	3	3		6	

第20表-2 第5次調査 貝類同定結果 (資料番号別)

No.	出土位置	種類	左右	殻高 (mm)	殻長 (mm)	殻厚 (mm)
5	5区 8~9層 黒褐色粘砂 [SZ550]	シオフキ	左	37.29	39.94+	32.50 22.23
		シオフキ	右	25.73	29.39	
		シオフキ	右	27.12	30.18	
		バカガイ	左	29.91	41.16	
		バカガイ	右	34.49	46.03	
		シジミ	左	14.49	16.05	
		シジミ	左	18.46	21.74	
		アサリ	左	32.22	36.81	
		アサリ	左	28.40	36.07	
		アサリ	左	27.18	32.66	
		アサリ	左	24.26	30.56	
		アサリ	左	22.79	28.36	
		アサリ	左	21.08	24.88	
		アサリ	左	29.21	35.99	
		アサリ	左	24.95	32.36	
		アサリ	左	26.23	33.87	
		アサリ	左	25.39	32.04	
		アサリ	左	20.68	28.75	
		アサリ	左	23.74	29.98	
		アサリ	左	19.81	25.21	
		アサリ	右	29.01	35.81	
		アサリ	右	29.42	34.61	
		アサリ	右	27.41	33.85	
		アサリ	右	27.44	34.75+	
		アサリ	右	22.82	30.15	
		アサリ	右	26.80	35.97	
		アサリ	右	28.86	34.89+	
		アサリ	右	27.61	34.53	
		アサリ	右	24.80	32.08	
		アサリ	右	25.29	33.49	
		アサリ	右	18.90	26.27	
		アサリ	右	20.26	25.13	
		アサリ	右	18.58	25.17	
		アサリ	右	13.28	17.91	
		ハマグリ	1組	51.04	65.16	
		ハマグリ	1組	35.76	42.69	
		ハマグリ	左	40.06	47.84	
		ハマグリ	左	40.61	49.99	
		ハマグリ	左	42.14	51.41	
		ハマグリ	左	36.57	42.90	
		ハマグリ	左	30.99	36.55	
		ハマグリ	左	34.10	42.46	
ハマグリ	左	24.12	27.86			
ハマグリ	右	45.14	55.75+			
ハマグリ	右	44.62	54.62+			
ハマグリ	右	38.47	47.83			
ハマグリ	右	42.42	50.68			
ハマグリ	右	34.58	42.39			
ハマグリ	右	35.94	44.60			
ハマグリ	右	32.91	42.06			
ハマグリ	右	35.57	44.18			
ハマグリ	右	35.16	43.38			
ハマグリ	右	31.36	39.24			
ハマグリ	右	33.62	40.84			
ハマグリ	右	31.83	38.48			
ハマグリ	右	27.06	32.27+			
ハマグリ	右	27.18	33.79			
ハマグリ	右	21.70	26.15			
14	12区 SK533	ハマグリ	1組	21.91	24.94	13.29 24.32
		ハマグリ	1組	37.31	48.04+	
		ハマグリ	左	29.26	34.79	
		ハマグリ	左	28.54	34.45	
		ハマグリ	右	31.09	37.30	
		ハマグリ	右	29.25	35.81	
		ハマグリ	右	29.18	33.73	
		ハマグリ	右	26.78	32.71	
		ハマグリ	右	27.53+	31.56	
		ハマグリ	右	25.02	30.20	
		ハマグリ	右	22.13	27.29	
アサリ	左	22.28	28.32+			
13	12区 3層 暗灰色粘砂 [SZ550]	サザエ	-	-	78.87	
		ツメタガイ	-	-	59.11	
		アカニシ	-	-	70.54	
		アカニシ	-	-	83.43	

No.	出土位置	種類	左右	殻高 (mm)	殻長 (mm)	殻厚 (mm)
11	8区 5層暗灰黄色 粘砂 [SZ551]	ハマグリ	1組	20.14	24.13	12.56 12.27 15.33 16.34 15.52
		ハマグリ	1組	20.77	24.45+	
		ハマグリ	1組	25.59	31.16	
		ハマグリ	1組	26.17	31.08	
		ハマグリ	1組	26.63	31.63	
		ハマグリ	左	16.57	19.03	
		ハマグリ	左	20.39	24.05	
		ハマグリ	左	20.59	23.87	
		ハマグリ	左	18.71	21.47	
		ハマグリ	左	20.65	23.14	
		ハマグリ	左	16.53	20.07	
		ハマグリ	左	18.52	21.30	
		ハマグリ	左	21.22	24.92	
		ハマグリ	左	22.99	27.73	
		ハマグリ	左	24.99	28.96	
		ハマグリ	左	23.94	28.49+	
		ハマグリ	左	20.71	24.63	
		ハマグリ	左	26.32	29.96	
		ハマグリ	左	22.41	26.36	
		ハマグリ	左	23.94	26.36+	
		ハマグリ	左	25.81	30.41	
		ハマグリ	左	24.67	29.61	
		ハマグリ	左	21.32	24.03	
		ハマグリ	左	23.06	27.17	
		ハマグリ	左	23.22	27.10	
		ハマグリ	左	25.62	30.90+	
		ハマグリ	左	23.92	27.54	
ハマグリ	左	25.09	30.60			
ハマグリ	右	16.42	18.83			
ハマグリ	右	18.38	21.27			
ハマグリ	右	19.56	22.98			
ハマグリ	右	18.94	22.66			
ハマグリ	右	22.09	26.22			
ハマグリ	右	19.96	23.32			
ハマグリ	右	21.12	24.44			
ハマグリ	右	25.99	31.13			
ハマグリ	右	20.85	25.10			
ハマグリ	右	23.25	26.38			
ハマグリ	右	22.74	27.40+			
ハマグリ	右	27.02	32.77+			
ハマグリ	右	23.92	27.09			
ハマグリ	右	20.53	23.50			
ハマグリ	右	22.82	27.09			
ハマグリ	右	22.34	25.72			
ハマグリ	右	28.22	-			
ハマグリ	右	23.64	28.99			
ハマグリ	右	23.96	27.85			
ハマグリ	右	21.64	26.29+			
ハマグリ	右	26.13	30.30			
ハマグリ	右	23.16	27.55			
ハマグリ	右	20.97	24.21			
ハマグリ	右	22.45	26.72			
ハマグリ	右	21.15	24.77+			
16	8区5・6層 暗灰黄~ 黒褐色粘砂 [SZ551]	ハマグリ	左	22.43	25.39	
		ハマグリ	左	27.66	32.90	
		ハマグリ	右	26.50	32.27	
		ツメタガイ	-	-	57.56	
		アカニシ	-	-	113.93	
12	8区 6層 黒褐色粘砂 [SZ551]	ハマグリ	左	32.10	39.37+	
		ハマグリ	左	28.50	33.69	
		ハマグリ	左	29.32	35.05	
		ハマグリ	右	29.21	35.19+	
		アサリ	左	20.76	25.17	
		アサリ	左	22.70	30.07	
アサリ	右	21.52	29.77			
2	5区7層 褐色粘砂 [SZ550]	ハマグリ	右	34.55+	41.03	
		アサリ	右	17.19	22.33	

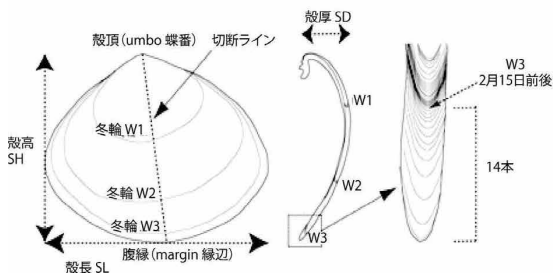
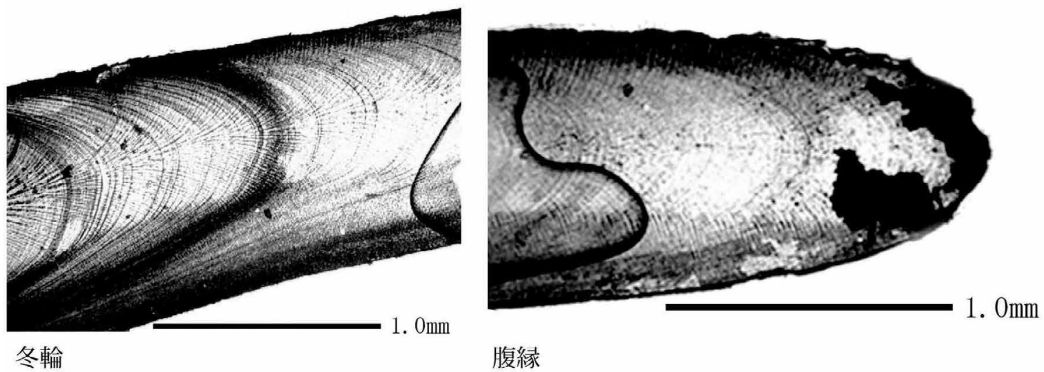
第21表-1 第5次調査 貝類計測値

No.	出土位置	種類	左右	殻高 (mm)	殻長 (mm)	殻厚 (mm)
5	5区 8~9層 黒褐色粘砂 [SZ550]	シオフキ	左	37.29	39.94+	32.50 22.23
		シオフキ	右	25.73	29.39	
		シオフキ	右	27.12	30.18	
		バカガイ	左	29.91	41.16	
		バカガイ	右	34.49	46.03	
		シジミ	左	14.49	16.05	
		シジミ	左	18.46	21.74	
		アサリ	左	32.22	36.81	
		アサリ	左	28.40	36.07	
		アサリ	左	27.18	32.66	
		アサリ	左	24.26	30.56	
		アサリ	左	22.79	28.36	
		アサリ	左	21.08	24.88	
		アサリ	左	29.21	35.99	
		アサリ	左	24.95	32.36	
		アサリ	左	26.23	33.87	
		アサリ	左	25.39	32.04	
		アサリ	左	20.68	28.75	
		アサリ	左	23.74	29.98	
		アサリ	左	19.81	25.21	
		アサリ	右	29.01	35.81	
		アサリ	右	29.42	34.61	
		アサリ	右	27.41	33.85	
		アサリ	右	27.44	34.75+	
		アサリ	右	22.82	30.15	
		アサリ	右	26.80	35.97	
		アサリ	右	28.86	34.89+	
		アサリ	右	27.61	34.53	
		アサリ	右	24.80	32.08	
		アサリ	右	25.29	33.49	
		アサリ	右	18.90	26.27	
		アサリ	右	20.26	25.13	
		アサリ	右	18.58	25.17	
		アサリ	右	13.28	17.91	
		ハマグリ	1組	51.04	65.16	
		ハマグリ	1組	35.76	42.69	
		ハマグリ	左	40.06	47.84	
		ハマグリ	左	40.61	49.99	
		ハマグリ	左	42.14	51.41	
		ハマグリ	左	36.57	42.90	
		ハマグリ	左	30.99	36.55	
		ハマグリ	左	34.10	42.46	
		ハマグリ	左	24.12	27.86	
		ハマグリ	右	45.14	55.75+	
		ハマグリ	右	44.62	54.62+	
		ハマグリ	右	38.47	47.83	
		ハマグリ	右	42.42	50.68	
ハマグリ	右	34.58	42.39			
ハマグリ	右	35.94	44.60			
ハマグリ	右	32.91	42.06			
ハマグリ	右	35.57	44.18			
ハマグリ	右	35.16	43.38			
ハマグリ	右	31.36	39.24			
ハマグリ	右	33.62	40.84			
ハマグリ	右	31.83	38.48			
ハマグリ	右	27.06	32.27+			
ハマグリ	右	27.18	33.79			
ハマグリ	右	21.70	26.15			
14	12区 SK533	ハマグリ	1組	21.91	24.94	13.29 24.32
		ハマグリ	1組	37.31	48.04+	
		ハマグリ	左	29.26	34.79	
		ハマグリ	左	28.54	34.45	
		ハマグリ	右	31.09	37.30	
		ハマグリ	右	29.25	35.81	
		ハマグリ	右	29.18	33.73	
		ハマグリ	右	26.78	32.71	
		ハマグリ	右	27.53+	31.56	
		ハマグリ	右	25.02	30.20	
		ハマグリ	右	22.13	27.29	
アサリ	左	22.28	28.32+			
13	12区 3層 暗灰色粘砂 [SZ550]	サザエ	-	-	78.87	
		ツメタガイ	-	-	59.11	
		アカニシ	-	-	70.54	
		アカニシ	-	-	83.43	

No.	出土位置	種類	左右	殻高 (mm)	殻長 (mm)	殻厚 (mm)
11	8区 5層暗灰黄色 粘砂 [SZ551]	ハマグリ	1組	20.14	24.13	12.56 12.27 15.33 16.34 15.52
		ハマグリ	1組	20.77	24.45+	
		ハマグリ	1組	25.59	31.16	
		ハマグリ	1組	26.17	31.08	
		ハマグリ	1組	26.63	31.63	
		ハマグリ	左	16.57	19.03	
		ハマグリ	左	20.39	24.05	
		ハマグリ	左	20.59	23.87	
		ハマグリ	左	18.71	21.47	
		ハマグリ	左	20.65	23.14	
		ハマグリ	左	16.53	20.07	
		ハマグリ	左	18.52	21.30	
		ハマグリ	左	21.22	24.92	
		ハマグリ	左	22.99	27.73	
		ハマグリ	左	24.99	28.96	
		ハマグリ	左	23.94	28.49+	
		ハマグリ	左	20.71	24.63	
		ハマグリ	左	26.32	29.96	
		ハマグリ	左	22.41	26.36	
		ハマグリ	左	23.94	26.36+	
		ハマグリ	左	25.81	30.41	
		ハマグリ	左	24.67	29.61	
		ハマグリ	左	21.32	24.03	
		ハマグリ	左	23.06	27.17	
		ハマグリ	左	23.22	27.10	
		ハマグリ	左	25.62	30.90+	
		ハマグリ	左	23.92	27.54	
ハマグリ	左	25.09	30.60			
ハマグリ	右	16.42	18.83			
ハマグリ	右	18.38	21.27			
ハマグリ	右	19.56	22.98			
ハマグリ	右	18.94	22.66			
ハマグリ	右	22.09	26.22			
ハマグリ	右	19.96	23.32			
ハマグリ	右	21.12	24.44			
ハマグリ	右	25.99	31.13			
ハマグリ	右	20.85	25.10			
ハマグリ	右	23.25	26.38			
ハマグリ	右	22.74	27.40+			
ハマグリ	右	27.02	32.77+			
ハマグリ	右	23.92	27.09			
ハマグリ	右	20.53	23.50			
ハマグリ	右	22.82	27.09			
ハマグリ	右	22.34	25.72			
ハマグリ	右	28.22	-			
ハマグリ	右	23.64	28.99			
ハマグリ	右	23.96	27.85			
ハマグリ	右	21.64	26.29+			
ハマグリ	右	26.13	30.30			
ハマグリ	右	23.16	27.55			
ハマグリ	右	20.97	24.21			
ハマグリ	右	22.45	26.72			
ハマグリ	右	21.15	24.77+			
16	8区5・6層 暗灰黄~ 黒褐色粘砂 [SZ551]	ハマグリ	左	22.43	25.39	
		ハマグリ	左	27.66	32.90	
		ハマグリ	右	26.50	32.27	
		ツメタガイ	-	-	57.56	
		アカニシ	-	-	113.93	
12	8区 6層 黒褐色粘砂 [SZ551]	ハマグリ	左	32.10	39.37+	
		ハマグリ	左	28.50	33.69	
		ハマグリ	左	29.32	35.05	
		ハマグリ	右	29.21	35.19+	
		アサリ	左	20.76	25.17	
アサリ	左	22.70	30.07			
アサリ	右	21.52	29.77			
2	5区7層 褐色粘砂 [SZ550]	ハマグリ	右	34.55+	41.03	
		アサリ	右	17.19	22.33	

第21表-2 第5次調査 貝類計測値





第83図 貝殻の計測点と切断面の模式図

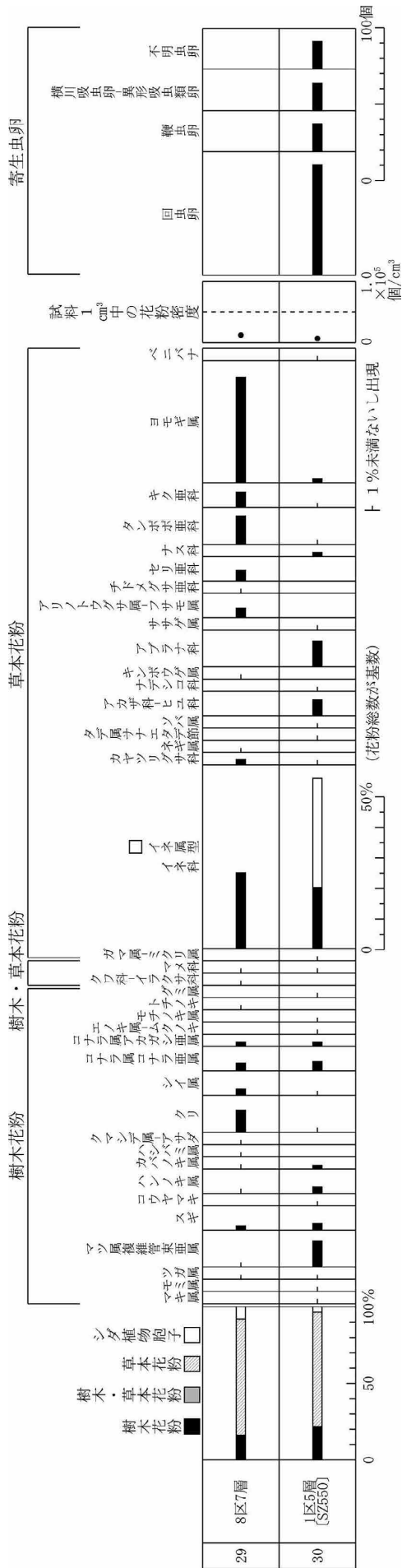
日周線数	月日	時季	主な行事
0 - 45	2月15日 ~ 3月31日	春季前半	雛祭 (3月3日)
46 - 90	4月1日 ~ 5月15日	春季後半	端午 (5月5日)、立夏 (5月6日頃)
91 - 135	5月16日 ~ 6月29日	夏季前半	夏至 (6月21日頃)
136 - 180	6月30日 ~ 8月13日	夏季後半	立秋 (8月7日頃)
181 - 225	8月14日 ~ 9月27日	秋季前半	
226 - 270	9月28日 ~ 11月11日	秋季後半	立冬 (11月7日頃)
271 - 315	11月12日 ~ 12月26日	冬季前半	冬至 (12月22日頃)
316 - 365	12月27日 ~ 2月14日	冬季後半	元日 (1月1日)、立春 (2月4日頃)

Koike, 1980などを基に作成した。旧暦1月1日は、毎年1月22日頃～2月19日頃までを移動する。

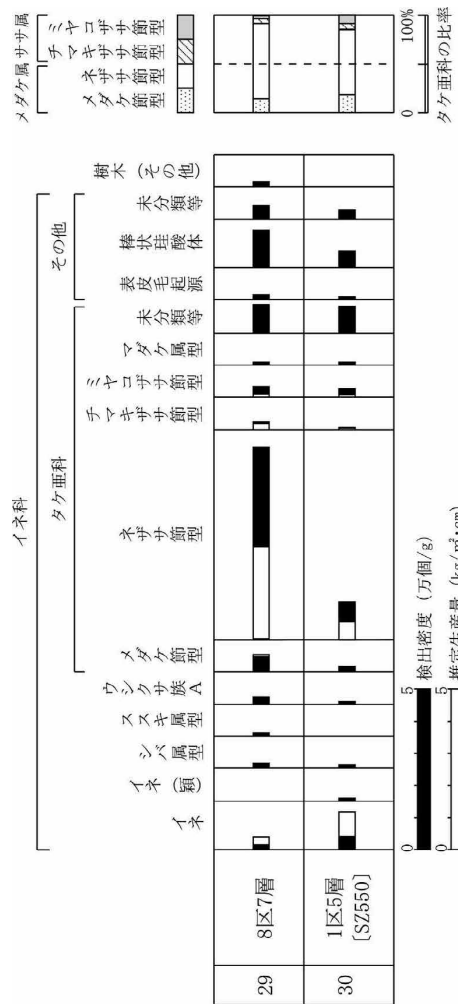
第22表 日周線による季節区分

地区	遺構、試料No	時代時期	最終日周線	推定日	推定季節
3区	SK503 No.7	18世紀中葉～後半	25	3月11日	春季前半
			分析不可 分析不可		
12区	SK533 No.14	18世紀中葉～後半	84	5月9日	春季後半
			分析不可		
			6	2月21日	春季前半
			15	3月1日	春季前半
			冬輪		
			30	3月16日	春季前半

第23表 ハマグリノ推定季節

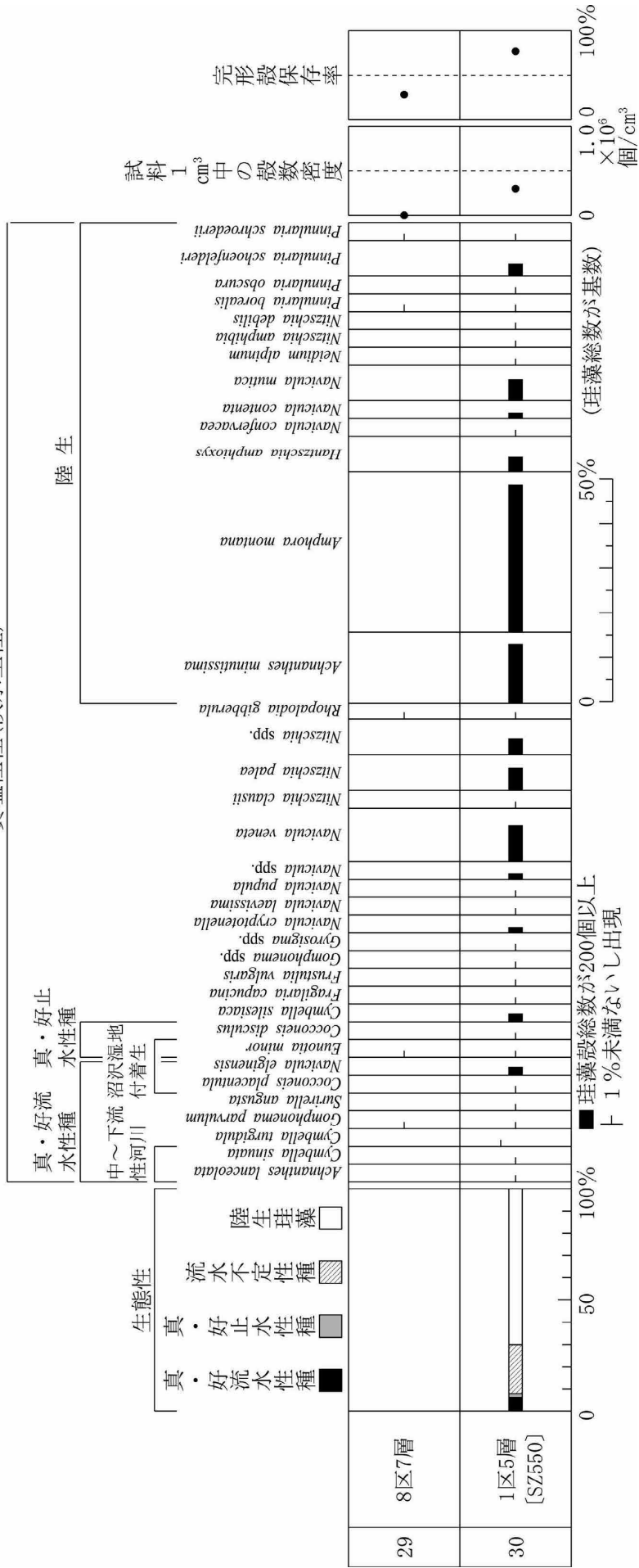


第84図 第5次調査 花粉・寄生虫卵ダイアグラム



第85図 第5次調査 植物珪酸体分析結果

貧塩性種(淡水生種)



第86図 第5次調査 主要珪藻ダイアグラム

資料No.	遺物番号	名称	結果 (学名/和名)
1	1484	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
2	1485	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
3	1488	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
4	1491	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
5	1493	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
6	1486	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
7	1496	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
8	1492	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
9	1489	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
10	1490	箸	Cupressaceae ヒノキ科
11	1494	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
12	1497	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
13	1498	箸	<i>Chamaecyparis</i> ヒノキ属
14	1495	箸	Cupressaceae ヒノキ科
15	1487	箸	Cupressaceae ヒノキ科
16	1499	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
17	1473	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
18	1474	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
19	1475	箸	<i>Chamaecyparis</i> ヒノキ属
20	1476	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
21	1477	箸	Cupressaceae ヒノキ科
22	1478	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
23	1479	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
24	1529	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
25	1526	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
26	1527	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
27	1525	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
28	1523	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
29	1522	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
30	1521	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
31	1524	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
32	1528	箸	Cupressaceae ヒノキ科
33	1452	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
34	1453	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
35	1454	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
36	1455	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
37	1456	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
38	1457	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
39	1458	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
40	1459	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
41	1460	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
42	1461	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
43	1462	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ
44	1463	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
45	1464	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ

第24表 第5次調査 樹種同定① 結果一覧



No.	遺物番号	器種	樹種同定	漆膜分析	赤外分光分析	顔料元素分析
1	1503	下駄	○			
2	1502	下駄	○			
3	1504	下駄	○			
4	1549	下駄	○			
5	1538	曲物蓋	○			
6	1513	曲物蓋	○			
7	1468	曲物蓋	○			
8	1515	曲物底板	○			
9	1510	曲物底板	○			
10	1559	鏡箱底板	○	○		
11	1520	鏡箱底板	○			
12	1508	剝物皿	○			
13	3次-16	漆器椀	○	○		
14	1483	花形飾り	○	○	○	○
15	1518	桶側板	○			
16	1509	木札	○			
17	1501	糸巻	○			
18	1532	しゃもじ	○			

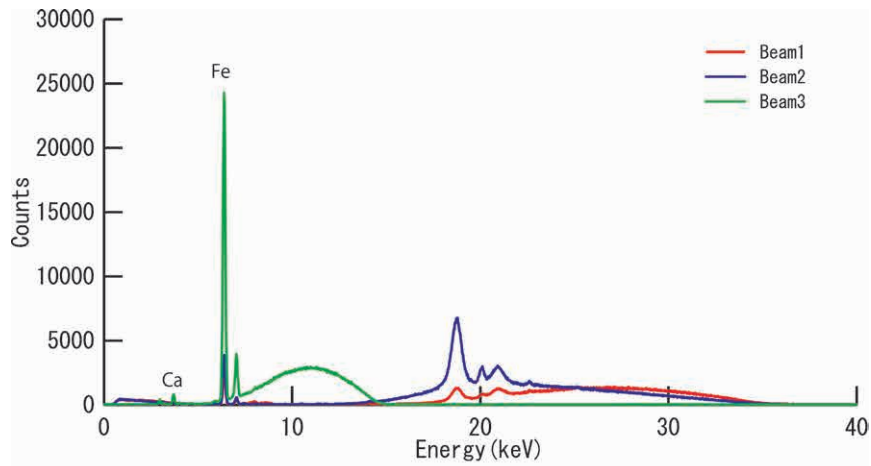
第25表 第3・5次調査 樹種同定② 試料・対象一覧

No.	遺物番号	器種	結果（学名／和名）	
1	1503	下駄	<i>Chamaecyparis</i>	ヒノキ属
2	1502	下駄	Cupressaceae	ヒノキ科
3	1504	下駄	Cupressaceae	ヒノキ科
4	1549	下駄	Cupressaceae	ヒノキ科
5	1538	曲物蓋	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
6	1513	曲物蓋	Cupressaceae	ヒノキ科
7	1468	曲物蓋	Cupressaceae	ヒノキ科
8	1515	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
9	1510	曲物底板	Cupressaceae	ヒノキ科
10	1559	鏡箱底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
11	1520	鏡箱底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
12	1508	剝物皿	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
13	3次-16	漆器椀	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
14-1	1483	花形飾り（丸）	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
14-2	1483	花形飾り（花）	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
15	1518	桶側板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
16	1509	木札	Cupressaceae	ヒノキ科
17	1501	糸巻	Cupressaceae	ヒノキ科
18	1532	しゃもじ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ

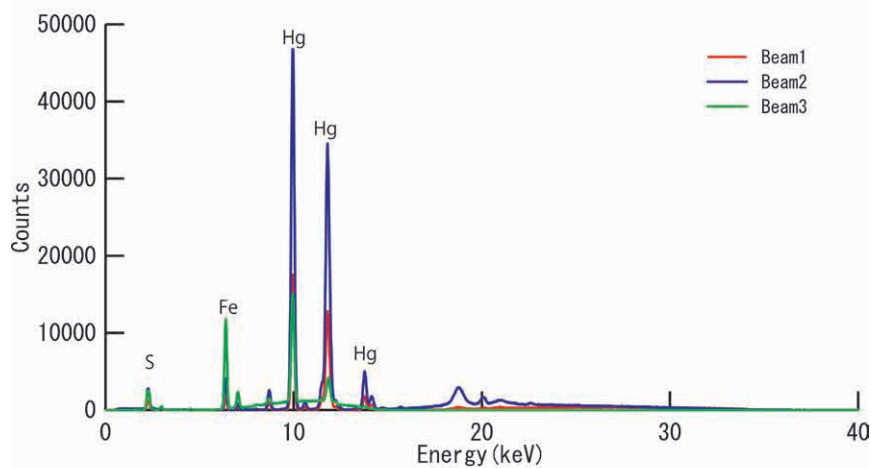
第26表 第3・5次調査 樹種同定② 結果一覧

No.	遺物番号	器種名	木胎樹種（学名／和名）	
10	1559	鏡箱底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
13	3次-16	漆器椀	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
14	1483	花形飾り（花）	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ

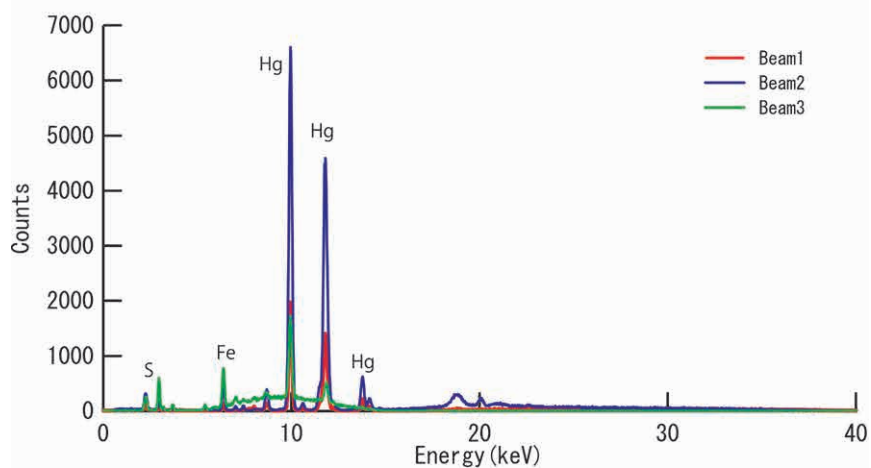
第27表 第3・5次調査 樹種同定② 塗膜分析試料一覧



1 10 鏡箱底板 主要元素：Ca、Fe

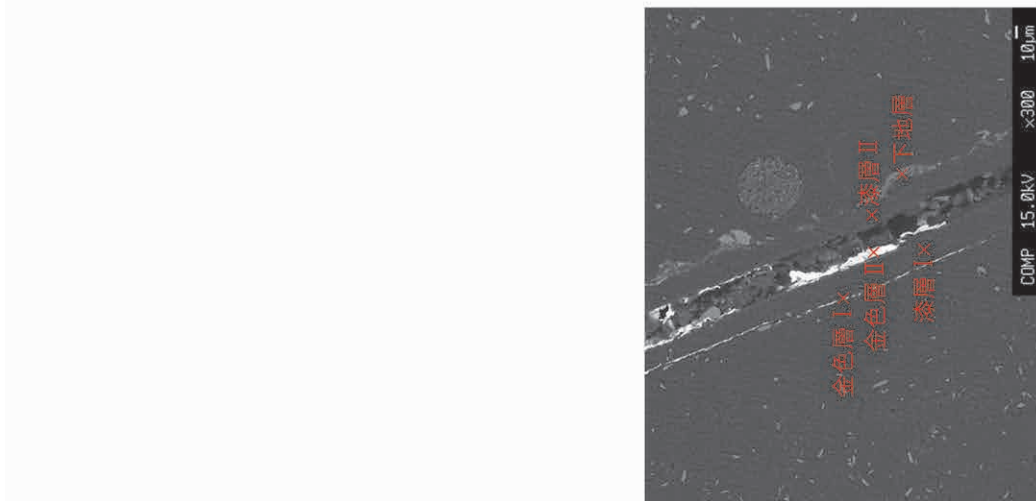


2 13 漆碗 主要元素：P、S、Fe、Hg

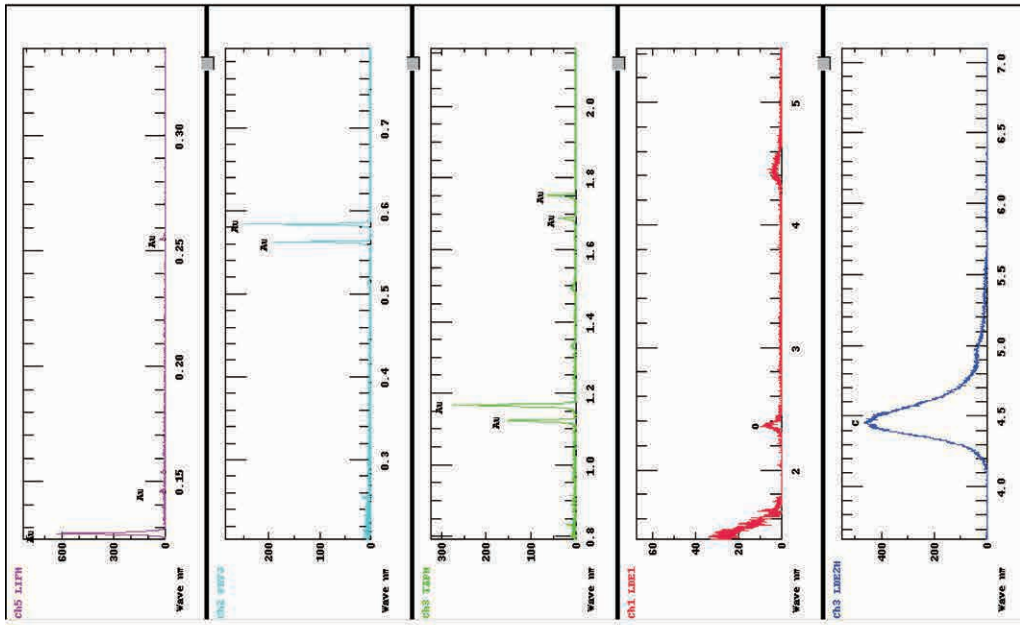


3 14 花形飾り側面赤色部 主要元素：P、S、Ca、Fe、Hg

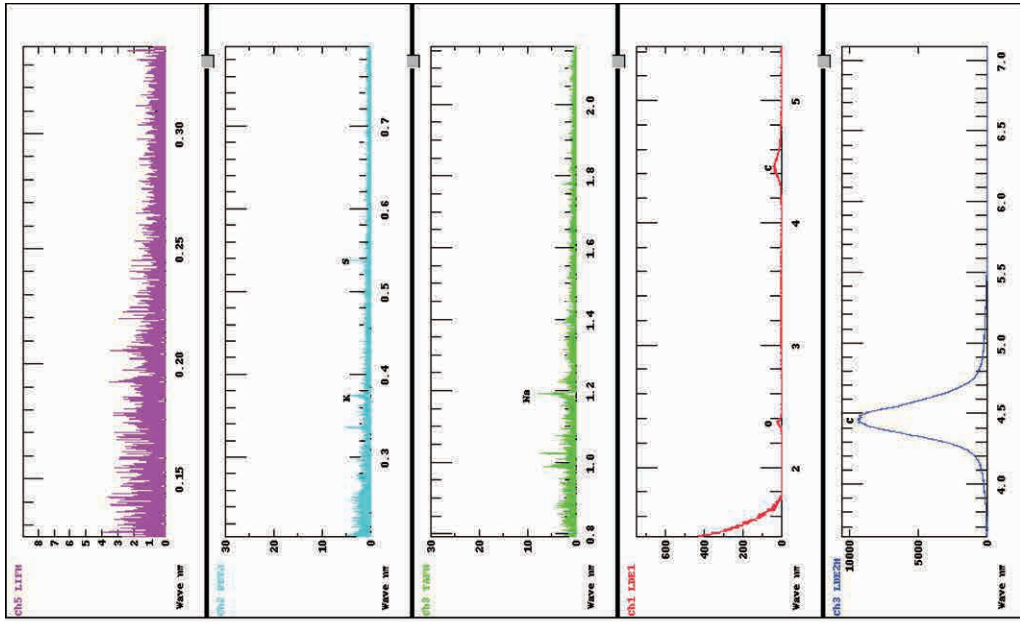
第87図 第5次調査 漆塗膜蛍光X線分析結果



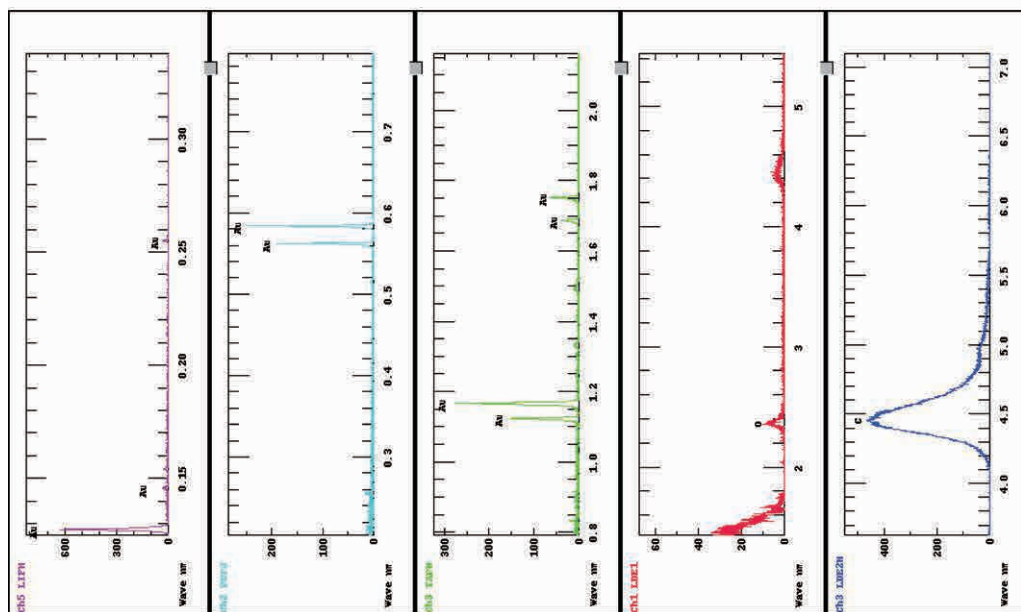
1 測定箇所 (電子顕微鏡) 50 μm  
 第88図 第5次調査 花形飾りのEPMAスペクトル I



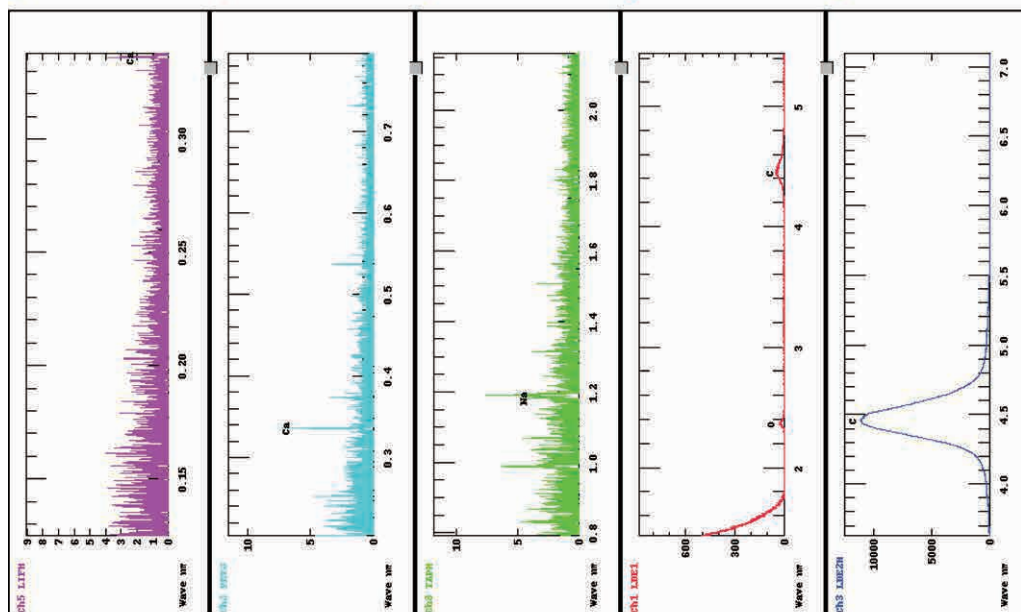
2 14花形飾り 金色層 I



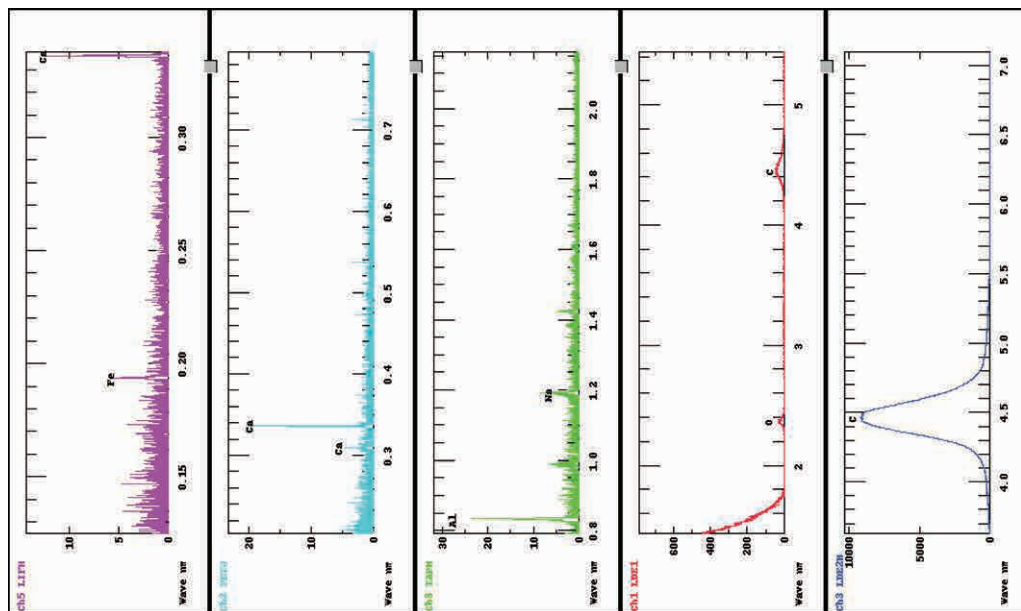
3 14花形飾り 漆層 I



4 14花形飾り 金色層II



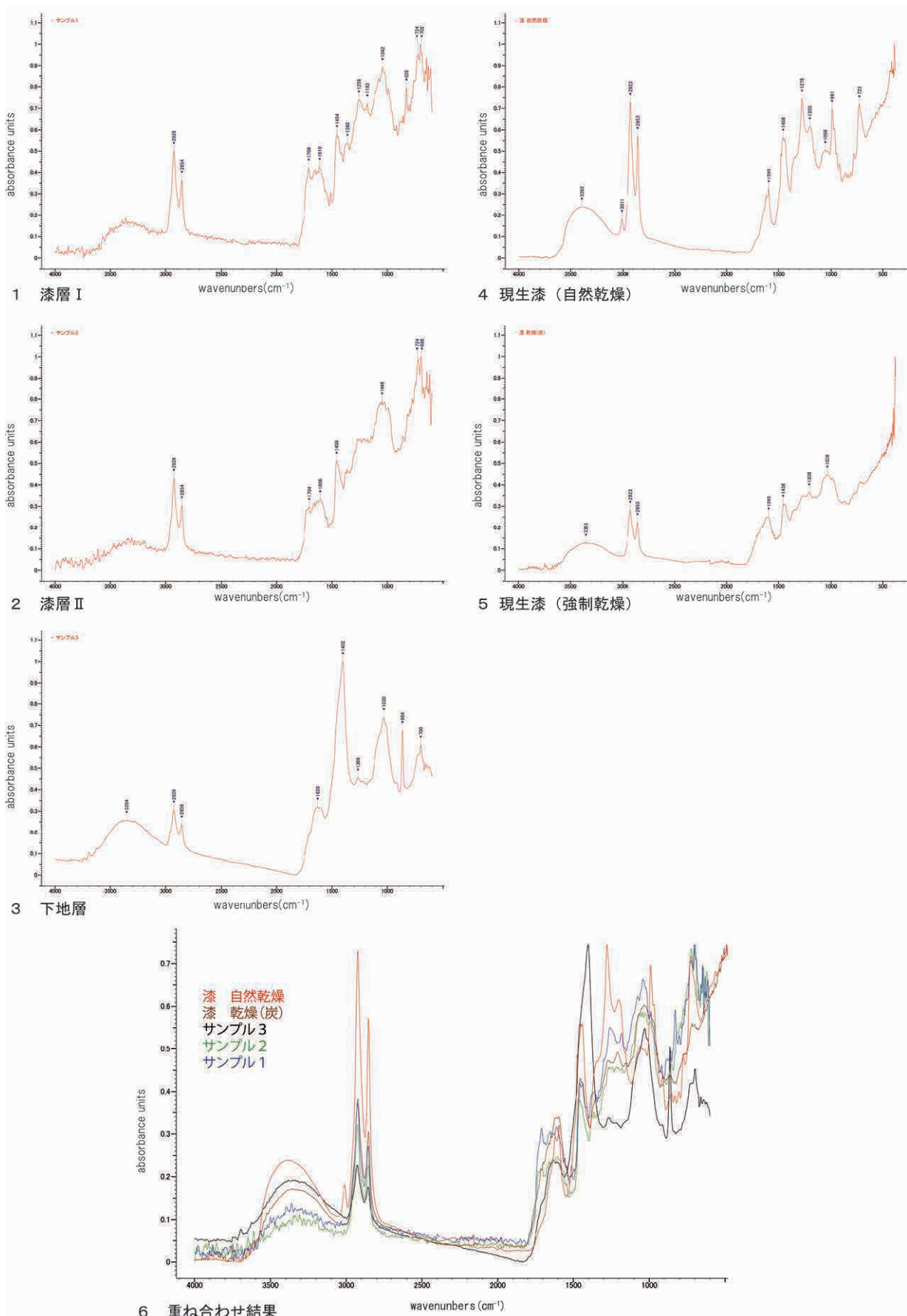
5 14花形飾り 漆層II



6 14花形飾り 下地層

第89図 第5次調査 花形飾りのEPMAスペクトルII





第90図 第5次調査 花形飾りのFT-IRスペクトル

試料No.	遺物番号	器種	調査区	遺構名	漆膜
1	1552	曲物底板	12区	SZ550	
2	1553	曲物蓋	12区	SZ550	
3	1467	曲物蓋	1区	SZ550	
4	1482	曲物蓋	2区	SZ550	
5	1512	曲物蓋	3区	SZ550	
6	1557	曲物側板	12区	SZ550	
7	1558	曲物側板	12区	SZ550	
8	1480	曲物底板	2区	SZ550	
9	1554	曲物蓋	12区	SZ550	
10	1547	曲物底板	12区	SZ550	
11	1555	曲物蓋	12区	SZ550	
12	1551	曲物底板	12区	SZ550	
13	1511	曲物底板	3区	SZ550	
14	1520	鏡箱底板	3区	SZ550	
15	1469	曲物底板	3区	SZ550	
16	1466	曲物底板？	1区	SZ550	
17	1540	曲物底板	1区	SZ550	
18	1539	曲物底板	5区	SZ550	
19	1536	曲物蓋	5区	SZ550	
20	1534	曲物底板	5区	SZ550	
21	1541	曲物底板	5区	SZ550	
22	1542	曲物底板	5区	SZ550	
23	1535	曲物底板	5区	SZ550	
24	1537	曲物底板	5区	SZ550	
25-1	1561	桶底板(小)	12区	SE535	
25-2	1561	桶底板(大)	12区	SE535	
26	1543	樽蓋	5区	SZ550	
27	1481	楔	2区	SZ550	
28	1507	栓	3区	SZ550	
29	1506	栓	3区	SZ550	
30	1505	栓	3区	SZ550	
31	1533	栓	5区	SZ550	
32	1548	下駄	12区	SZ550	
33	1519	棒	3区	SZ550	
34	1546	建築部材？	12区	SZ550	
35	1472	板材	1区	SZ550	
36	1516	板材	3区	SZ550	
37	1517	板材	3区	SZ550	
38	1470	板材	1区	SZ550	
39	1471	板材	1区	SZ550	
40	1556	板材	12区	SZ550	
41	1514	円形板材	3区	SZ550	
42	1544	漆器椀	12区	SZ550	○
43	1530	漆器椀蓋	5区	SZ550	○
44	1531	漆器椀	5区	SZ550	○
45	1560	漆器椀	3区	SK506	○
46	1545	漆器椀	12区	SZ550	○
47	1500	指物部材	3区	SZ550	○

第28表 第5次調査 樹種同定③  
試料・対象一覧

試料No.	遺物番号	器種	結果(学名/和名)	
1	1552	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
2	1553	曲物蓋	Cupressaceae	ヒノキ科
3	1467	曲物蓋	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
4	1482	曲物蓋	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
5	1512	曲物蓋	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
6	1557	曲物側板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
7	1558	曲物側板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
8	1480	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
9	1554	曲物蓋	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
10	1547	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
11	1555	曲物蓋	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
12	1551	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
13	1511	曲物底板	<i>Abies</i>	モミ属
14	1520	鏡箱底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
15	1469	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
16	1466	曲物底板？	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
17	1540	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
18	1539	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
19	1536	曲物蓋	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
20	1534	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
21	1541	曲物底板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
22	1542	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
23	1535	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
24	1537	曲物底板	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
25-1	1561	桶底板(小)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
25-2	1561	桶底板(大)	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
26	1543	樽蓋	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
27	1481	楔	<i>Abies</i>	モミ属
28	1507	栓	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
29	1506	栓	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
30	1505	栓	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
31	1533	栓	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
32	1548	下駄	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
33	1519	棒	<i>Pinus</i>	マツ属
34	1546	建築部材？	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
35	1472	板材	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
36	1516	板材	<i>Abies</i>	モミ属
37	1517	板材	<i>Abies</i>	モミ属
38	1470	板材	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
39	1471	板材	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
40	1556	板材	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
41	1514	円形板材	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ
42	1544	漆器椀	<i>Prunus</i>	サクラ属
43	1530	漆器椀蓋	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
44	1531	漆器椀	<i>Magnolia</i>	モクレン属
45	1560	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
46	1545	漆器椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
47	1500	指物部材	<i>Chamaecypris obtusa</i> Endl.	ヒノキ

第29表 第5次調査 樹種同定③ 結果一覧

## 6. 小結

### (1) 遺構の変遷

5次調査では、基盤層（基本層序VI層）から現代までの堆積が厚く、整地層や遺構の動向、古環境の変遷を細かく知ることができたので、遺構の変遷を詳しく示しておきたい（第91図）。

#### ①調査地北東側

博労町から外博労町に相当する調査地北東側では、湿地状地であるS Z 550が17世紀から18世紀前葉にかけて広がり、総堀が存在していた。それらの埋没後、町屋に関連する土坑やピット（上層遺構）が確認できる。文献では、外博労町は18世紀初頭から徐々に町屋化したと伝えられ、これと合致するものである。元禄以降の絵図類でも総堀が改変され、町屋地となったことが確認できる。

18世紀中葉以降の火災に関連する遺構の存在も特筆される。これらは出土遺物や層序から、元文大火の関連遺構を含むと推定した。ただし、5次以外の調査も含め鍵層となりうる明確な焼土層が確認されていないため、焼土を含む遺構の時期や性格、分布範囲、その後の整地による遺構・焼土層の消失について、今後も絶えず検証していく必要がある。

「どぶ町」にあたる12区南半では、S D 554の埋没後に土坑や早桶の水溜等が作られており、18世紀中葉頃には町屋化したことがうかがえる。この町屋化以降、18世紀後葉にも一帯の埋積と陶磁器等の廃棄（12区3層）が進んでおり、18世紀後半に度々生じた洪水の影響が想定される。町屋化以降も湿地状地化と周辺の整地が進められたと推測される。

#### ②調査地南東側

博労町・紺屋町・袋町等にあたる調査地南東側は、地形が神通川へ向かって落ち込んでいく凹地にあたる。付近では下層遺構が18世紀中葉頃までに形成され、基本層序IV層や湿地状堆積S Z 551の埋積が18世紀後半から19世紀初頭までに進み、その後町屋関連遺構が明瞭となる。遺構の変遷過程としては、「どぶ町」付近（12区）や8次調査2～4区と概ね共通するようである。

以上のように、18世紀後半～末においても、阪内川の洪水堆積と湿地状地の形成、遺物投棄と埋没、

その後の整地と町屋復旧という過程が、城下町の各所で進行したとみられ、その背景には18世紀後半に度々生じた大洪水の影響があったと考えられる。19世紀に入り、地盤高の上昇は落ち着いたようである。

### (2) 出土遺物

S Z 550から、特に17～18世紀前半のまとまった量の陶磁器や、貝や魚骨、種実を中心とした食物残渣、木製品などが得られた。これらは松坂城下町の遺物組成や食性、古環境を知る上で基軸となる資料といえよう。陶磁器は武家地にみられるような上手のものや香炉・茶道具が含まれており、伊勢商人の裕福さの一端が表れている。食物残渣の内容からも食用価値の高いものが選択されたことがうかがえた。陶磁器・貝組成などの細かい分析は、第Ⅶ章で改めて論じているのでそちらを参照されたい。

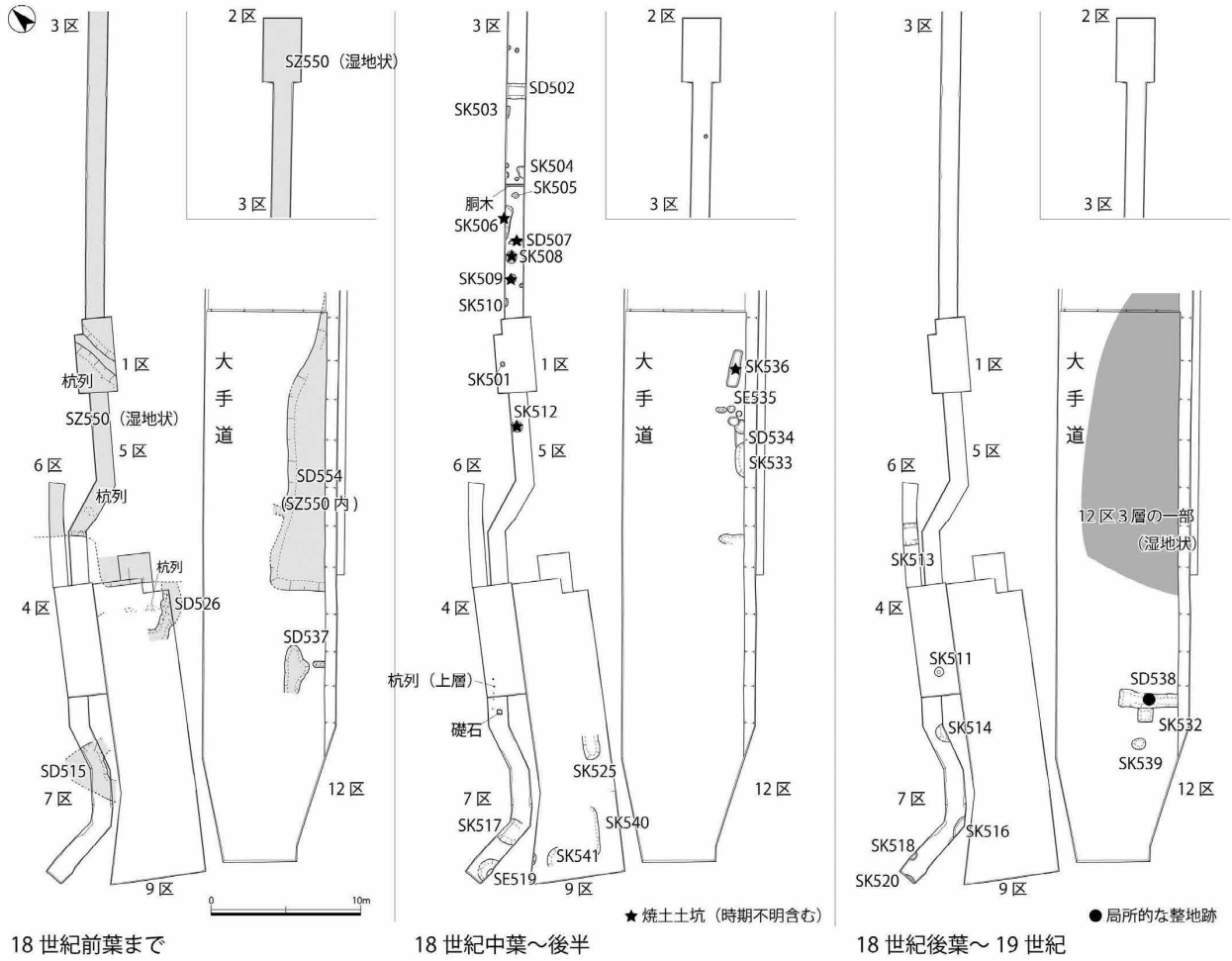
自然科学分析では、土壌分析から城下町形成前と形成後の古環境を比較するデータが得られ、城下町形成後に周辺環境への負荷が格段に大きくなったことが改めて確認された。（櫻井）

### [註]

(1) 東京大学総合研究博物館画像アーカイブス「日本の新聞広告3000（明治24～昭和20年）」より引用。引用にあたり東京大学総合研究博物館の許可を得た。

(2) 重次銘の鏡出土例について、内川隆志氏（国學院大学）の教示を得た。

調査地北東側（博労町・外博労町・「どぶ町」）

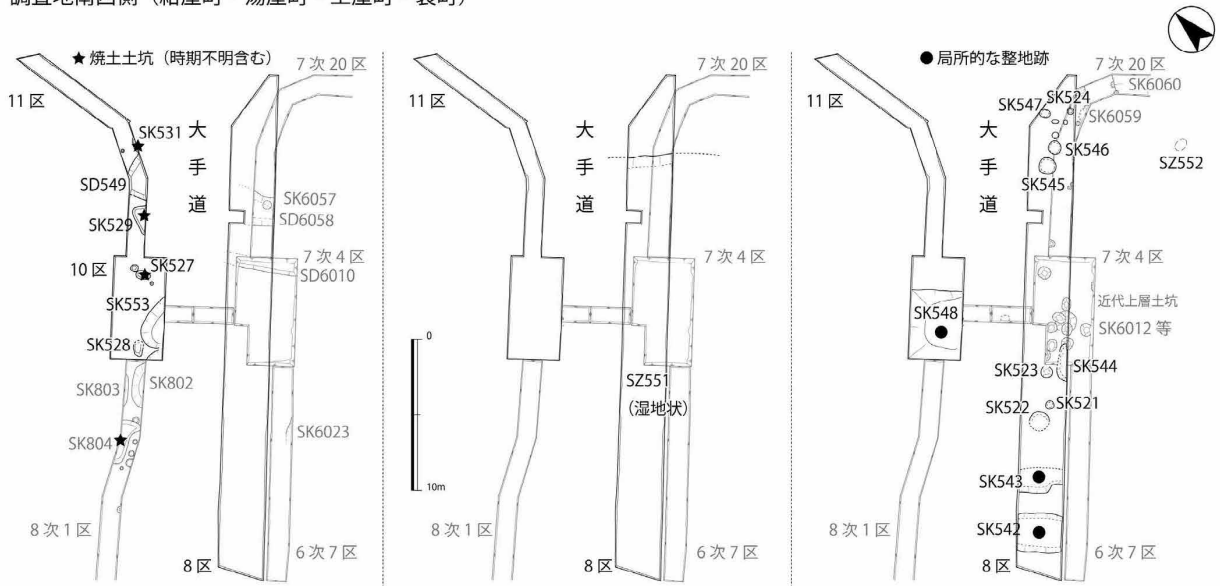


18世紀前葉まで

18世紀中葉～後半

18世紀後葉～19世紀

調査地南西側（紺屋町・湯屋町・工屋町・袋町）



18世紀中葉まで

18世紀後葉～末

18世紀末～19世紀

第91図 第5次調査 遺構の変遷 (1:500)



## VIII. 第6次調査

対象地は松坂城跡から東進する大口径沿いで、享和以後（19世紀）の「松坂町絵図」などによる湯屋町・博勞町・外博勞町の範囲に該当する。調査区の大半は幅1m前後の狭小なものであるが、県道松坂公園大口径線に沿って、北東から南西へ延長150m以上に及ぶ。

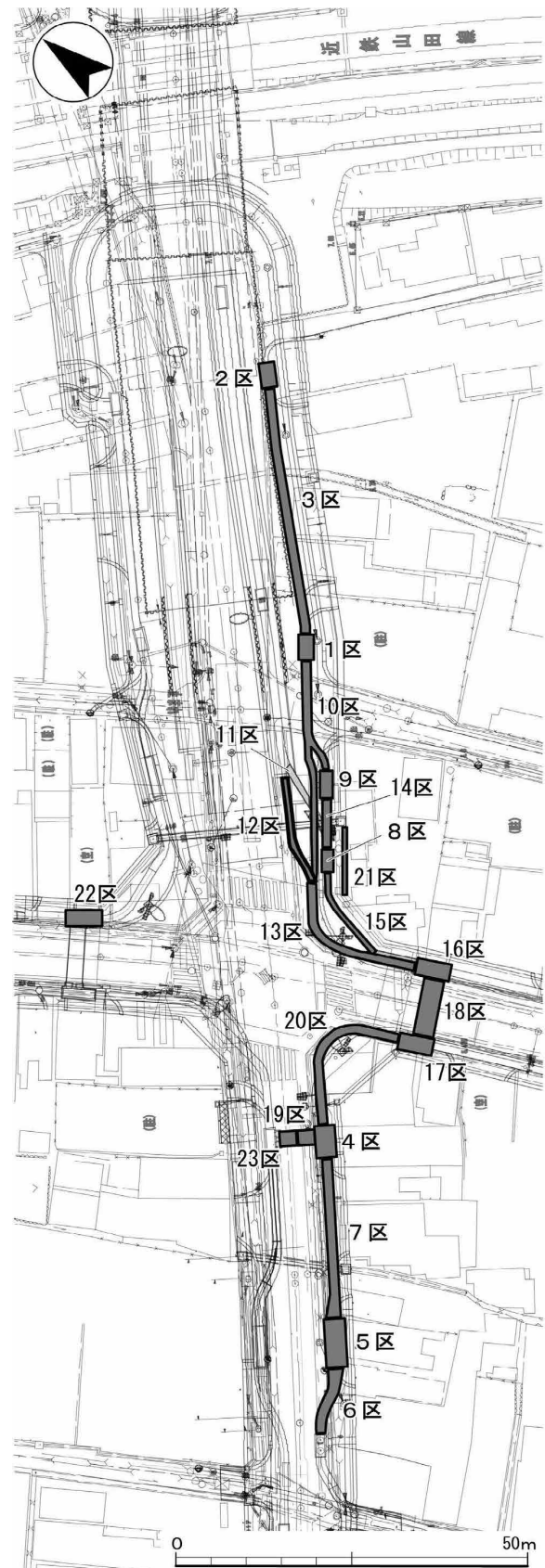
### 1. 遺構

**1区**（第95図） 3×6mのグリッド状の調査区で、外博勞町に相当する場所である。北東部に位置する調査区で、北東辺は3区に、南西辺は10区に接続する。地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆い、地表下1.8mのオリーブ黄色シルト層上面で遺構検出を行った。しかし、遺構はその上層の湿地性のシルト層上面から切り込んでおり、結果的にS K6002・6003は痕跡程度の検出に止まっている。

S K6002は近代の攪乱坑、S K6003はそれに先行する土坑であるが、詳細は不明であるものの後述するように18世紀の可能性が高い。S D6001は第1次調査2Tで検出した溝状遺構の延長部に位置するが、第1次調査と異なり、溝の法面は急傾斜である。深さは検出面から30cmであるが、前述した湿地性のシルト層からは1.2mを測る。埋土には18世紀代の陶磁器・瓦・木製品・貝類が多量に含まれていた。なお、底部に木杭と横桟で構成される構造物（S Z6065）を確認した。調査区の土留施設と重複した位置にあり、詳細な記録は残せなかったが、S D6001の土留施設の可能性がある。

**2区**（第93図） 最も北東端に位置する2×4mのグリッド状の調査区で、外博勞町に相当する場所である。地表から1mほどはアスファルトや現代の造成土が覆い、さらにその下に厚さ10cmほどの先行造成土が残る。このため本来の地層は確認できないが、その下は湿地性の堆積となり、地表からの深さ1.9mで灰オリーブ色粘土の検出面に至る。調査区のおよそ半分を占める攪乱坑の他は遺構の検出はなかった。

**3区**（第93図） 2区と1区を繋ぐ幅約1m、延長37mに及ぶトレンチ状の調査区である。2区と同様



第92図 第6次調査区位置図（1:1,000）

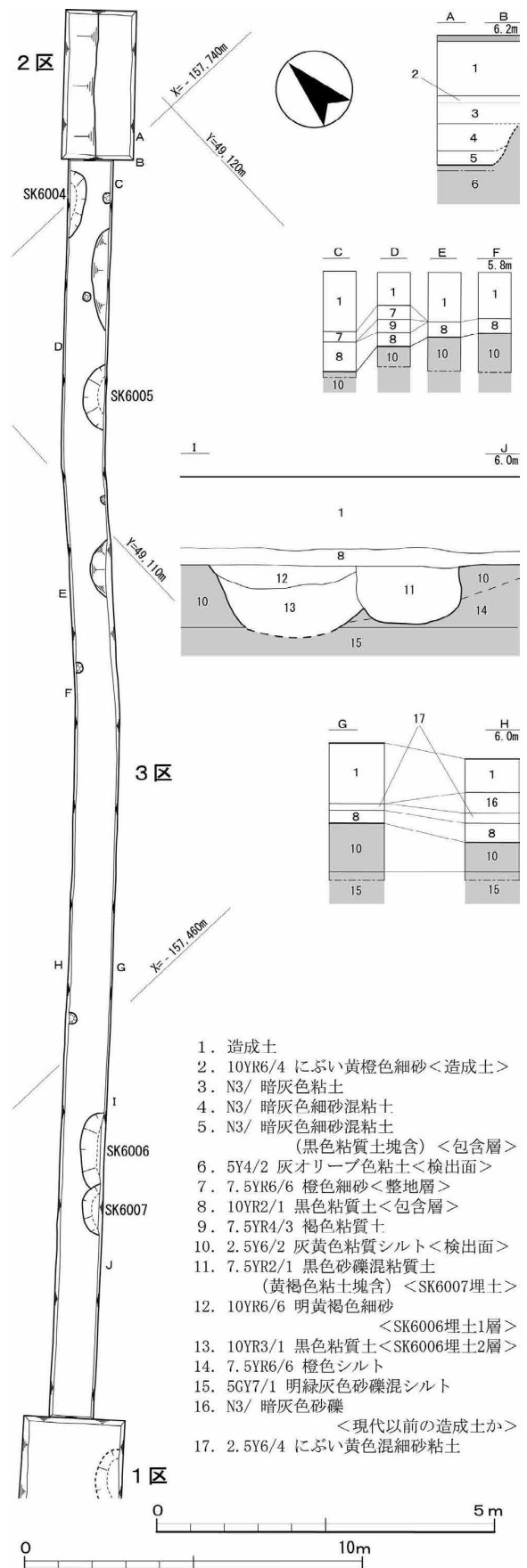
に地表から50cm～1mに碎石を含む客土、一部に先  
行造成土が残り、その下が、湿地性の堆積となる。  
ただし、検出面までの深度は2区より浅く、1m前  
後である。直径1.5mから2mを測る大型の円形で  
検出面からの深さ1mに及ぶ土坑を4基検出したが、  
その性格は不明である。

**4区**（第94図） 4×7mのグリッド状の調査区で、  
博勞町に相当する場所である。北東辺に20区、北西  
辺に19区、南西辺に7区が接続する。地表から80cm  
ほどはアスファルトや現代の客土が覆い、地表下1.1m  
の橙色から黄橙色シルト層上面で遺構検出を行った。  
検出面上には厚さ10cmの黒褐色砂質土があり、さらに  
遺物を包含する灰褐色粘質土が残存する部分もある。

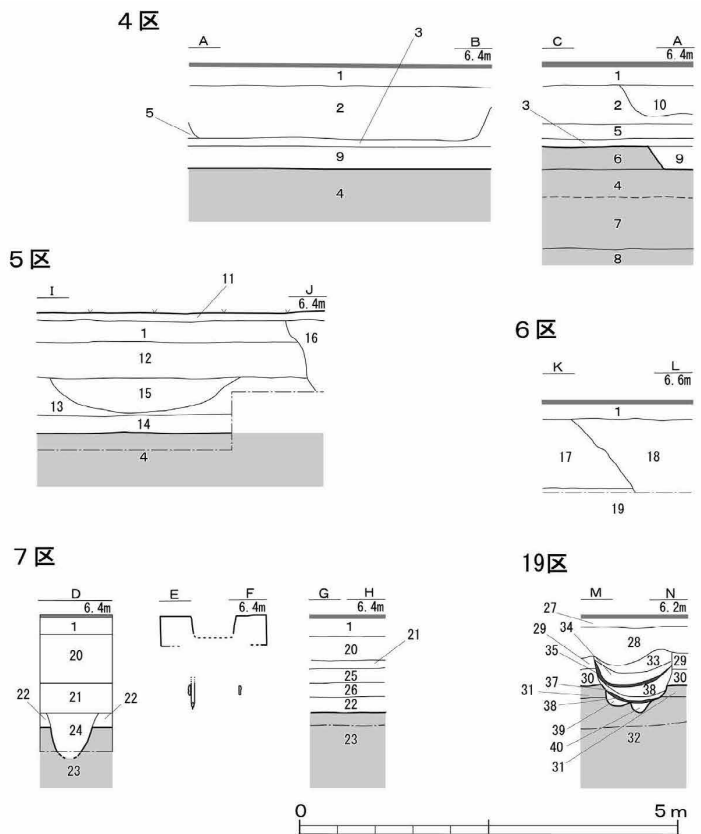
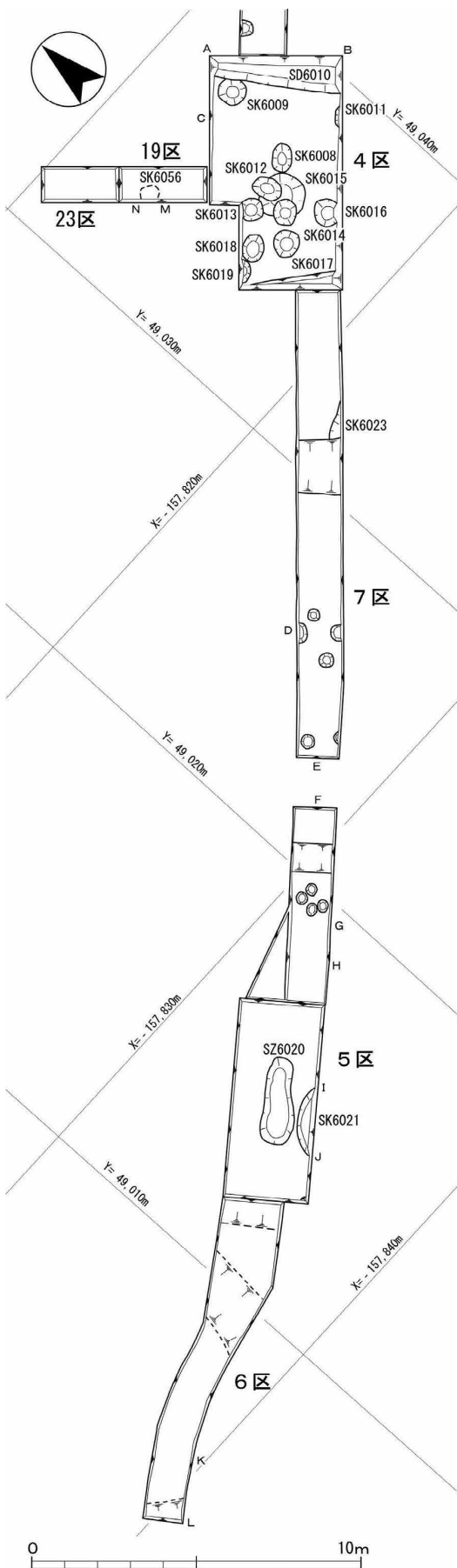
直径80cm程度の土坑を多数検出した。その内、S  
K6013及びSK6014には陶器の甕が正立状態で埋設  
されていたと記録される。しかし、図示できたもの  
は217のみであり、いずれに属するものかは不明で  
ある。一方、220は包含層出土と記録されるが、両  
土坑のいずれかのものである可能性が高い。SK  
6013とSK6014に設置された甕が217と220であると  
決着したいところではあるが、両土坑のどちらかの  
出土とする陶器鉢も2個体あり、単純ではない。他  
に、同様な規模の土坑が8基あり、これらも本来は  
甕が埋設されていた可能性が高い。これらの甕の所  
属は不明確なままで、錯誤の修正は困難であるが、  
217と220は、これらの土坑群のいずれかに所属する  
ものである可能性は極めて高い。これらの土坑群は、  
南西部に集中する傾向はあるが、整然と並ぶ様子は  
ない。時期的には後述するように18世紀代と考えら  
れる。

なお、北東端ではSD6010の南西岸を検出したが、  
対応する岸が20区で検出されておらず、疑問が残る。

**5区**（第94図） 2.5×6mのグリッド状の調査区  
で、湯屋町に相当する場所と思われる。北東辺に7  
区、南西辺に6区が接続する。他の調査区と同様に  
地表から80cmほどはアスファルトや現代の客土が覆  
う。その下に厚さ60cmほどの整地層があり、薄い黒  
褐色シルト層を経て4区と同じ無遺物の黄褐色シル  
ト層に至る。土坑状の遺構2基を検出したが、両者  
とも整地層を切り込んでいる。SZ6020の埋土は焼  
土や炭化物を含んでいる。



第93図 第6次調査2・3区平面図(1:200)、  
土層断面図(1:100)



1. 碎石
2. 7.5YR3/1 褐色混礫砂質土<近現代造成土>
3. 10YR2/2 黒褐色砂質土
4. 10YR5/8 黄褐色シルト
5. 7.5YR5/2 灰褐色粘質土
6. 7.5YR6/8 橙色シルト
7. 5G6/1 緑灰色シルト
8. 5G7/1 明緑灰色細砂
9. SD6010埋土
10. 7.5YR3/1 黒褐色砂質土<上層土坑>
11. 表土
12. 7.5YR4/6 褐色混礫砂質土<近現代造成土>
13. 10YR6/2 灰黄褐色シルト<整地層>
14. 10YR2/2 黒褐色シルト (黒褐土)
15. 10YR4/4 褐色砂質土<SK6021埋土>
16. 攪乱
17. 10YR3/4 暗褐色混礫細砂 (粘質土塊含) <近現代造成土>
18. 10YR2/2 黒褐色砂質土<攪乱>
19. 10YR4/6 褐色細砂<整地層>
20. 10YR4/4 褐色砂礫<現代造成土>
21. 10YR7/4 にぶい黄橙色細砂<整地層>
22. 10YR3/1 黒褐色シルト
23. 10YR7/8 黄橙色シルト
24. 7.5Y2/1 黒色シルト
25. 10YR3/4 暗褐色混礫砂質土
26. 10YR4/2 灰黄褐色シルト<包含層>
27. 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
28. 2.5Y4/2 暗灰黄色混礫砂シルト
29. 10YR4/2 灰黄褐色混細砂シルト
30. 10YR4/1 褐灰色混細砂シルト
31. 10YR2/1 黒色シルト
32. 10YR4/4 褐色シルト
33. 10YR4/3 にぶい黄褐色混粗砂シルト (炭含) <SK6056埋土>
34. 10YR3/2 黒褐色混粗砂シルト (焼土塊・炭含) <SK6056埋土>
35. 10YR1.7/1 黒色シルト (炭含) <SK6056埋土>
36. 7.5YR2/2 黒褐色混粗砂シルト (焼土塊・炭含) <SK6056埋土>
37. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト (赤褐色土塊含・硬化) <SK6056埋土>
38. 10YR2/3 黄灰褐色粘土<SK6056床>
39. 10YR5/1 褐灰色シルト
40. 10YR3/2 黒褐色シルト (褐色シルト塊含)

第94図 第6次調査4・7・19・23区平面図 (1:200)、土層断面図 (1:100)



**6区**（第94図） 南西端の調査区で湯屋町に相当する場所である。幅1～2m、延長10mのトレンチ状の調査区で、北東端は5区に接続する。5区で認められた地表下約1.1mの整地層上面で遺構検出を試みたが、攪乱も多く、遺構は皆無であった。それ以下については湧水が激しく、断念せざるを得なかった。

**7区**（第94図） 南西部の調査区で博勞町から湯屋町に相当する場所である。幅1m、延長22mのトレンチ状の調査区で、4区と5区を繋ぐ。他の調査区と同様に地表から70～90cmほどはアスファルトや近現代の客土が覆う。その下に19世紀の遺物を含む整地層と思われる層があるが、検出した遺構は整地層の下から切り込んでいる。このため19世紀を遡る可能性が高い。10基の小穴があるが、分布に粗密があり、建物として並ぶ様子はない。

**8区**（第95図） 2×4mのグリッド状の調査区で、博勞町に相当する場所と思われる。北東辺は14区に、南西辺は15区に接続する。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆う。地表下1.9mの灰白色砂礫まで掘削したが、小穴を2基検出したに止まる。ただし、客土直下の褐色粘土や明黄褐色粘土から切り込むものも調査区断面で確認している。その内、SK6024は土坑側面から多くの貝が出土している。

**9区**（第95図） 2×4mのグリッド状の調査区で、外博勞町または博勞町に相当する場所と思われる。北東辺は10区に、南西辺は14区に接続する。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆う。地表下1.7mの灰オリーブ褐色粘土まで掘削したが、遺構はその上層の明黄褐色粘土から切り込んでいる。したがって、痕跡程度や調査区断面での確認となった。ただし、SK62025は近代以降の攪乱坑の可能性がある。

**10区**（第95図） 1区から南下し、幅1m、延長30mに及ぶトレンチ状の調査区で、途中で分岐し9区へ、南端は13区へ接続する。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆う。地表下1.6～1.9mまで掘削したが、土層監察の結果、遺構は客土直下から切り込んでいる。このため、客土により攪乱される以前の状況は不明で、本来の遺

構が切り込む層は不明である。

SD6001は1区で北岸を検出していたが、今回南岸が検出でき、幅3mの溝となった。したがって、第1次調査で検出した溝状遺構との関連は微妙である。南隣のSK6028は土坑としているが、調査区内では幅8mの溝状を呈する。その南岸は第1次調査3Tで検出した溝状遺構の南岸の延長上に位置する。SD6001と一体として第1次調査の溝状遺構の延長と解釈する可能性を残す。地表下1.9mまで確認したが、底には至らない。陶磁器、木製品を多く含む層があり、確認できた最下層の青黒色シルト層には貝の堆積がある。SD6033は幅2mの溝で、深さは60cmを確認したが、底に至らない。12区のSD6032と一連のものと指定される。

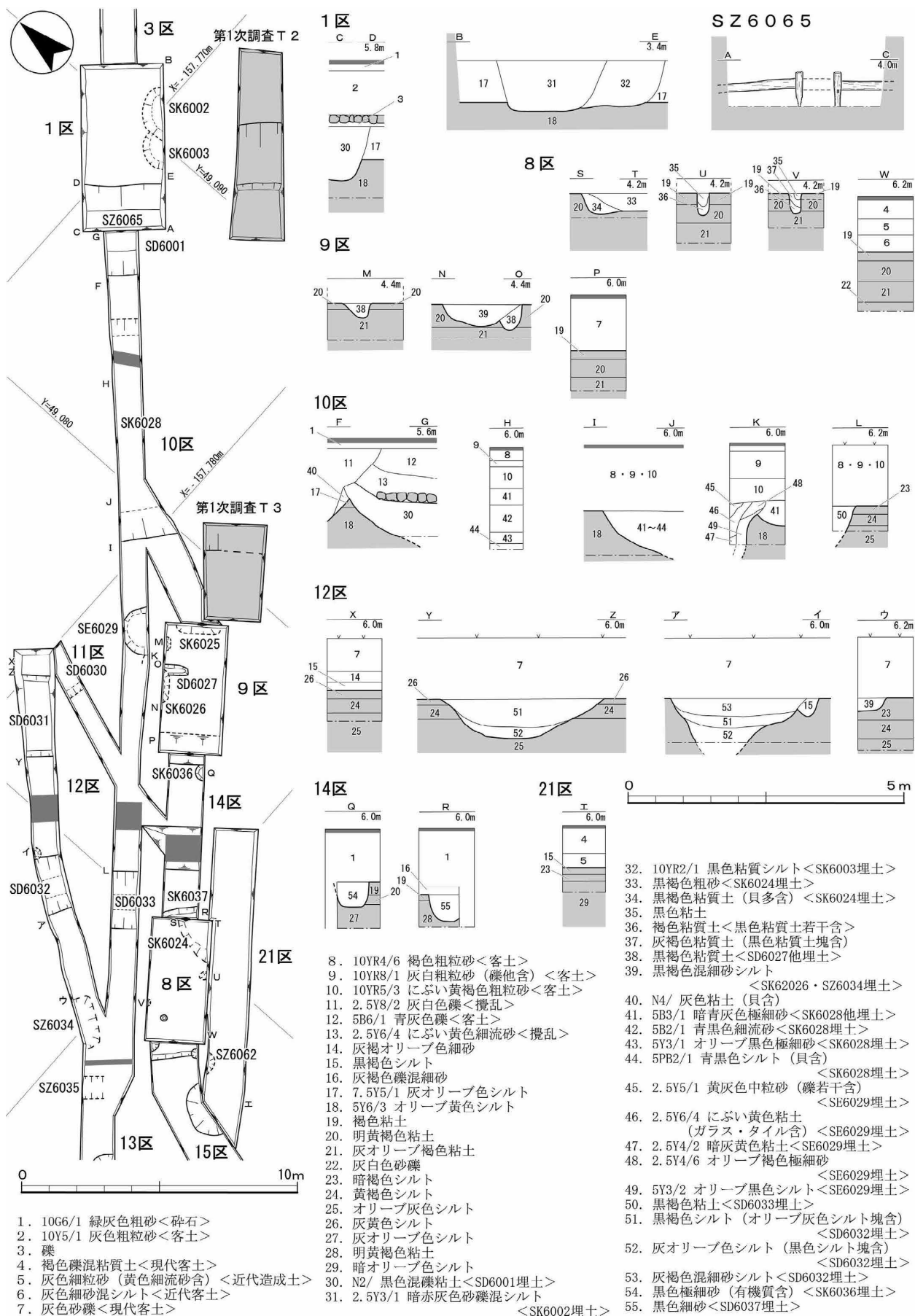
**11区**（第95図） 10区から派生し12区の北端に至る幅1m、延長4mの溝状の調査区である。湧水等のため詳細な記録は残せなかった。SD6030は調査区断面で確認した溝で、12区のSD6031の延長上にあたる。しかし、さらに東側の10区では検出されておらず、大きく蛇行するものか、土坑状のものか断定できない。溝内からは土師器や陶器等、比較的多くの遺物が出土し、18世紀代の遺構とすることができる。

**12区**（第95図） 10区の北側に並行する幅1m、延長14mのトレンチ状の調査区で、南西端は10区とともに13区に接続する。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆うが、北東側はやや薄い。地表下1.5～2.0mのオリーブ灰色シルト層まで掘削したが、遺構は客土直下から切り込んでいる。したがって、痕跡程度や調査区断面での確認となったものも多い。

SD6031は幅3mの溝で、11区のSD6030に繋がるものと思われるが、その先の10区では検出されておらず、多少の疑問が残る。深さは70cmで埋土は上下2層に分かれるが、両者ともシルトである。壁は非常に緩やかである。SD6032は幅2mの溝で、10区のSD6033に繋がる。埋土は3層に分かれるもののSD6031と同様なものである。SZ6034は落ち込み状のもので人為的なものでない可能性がある。SZ6035は溝状にもみえるが、不明確なものである。

**13区**（第96図） 10区と12区の合流地点から南西方





第95図 第6次調査1・8~12・14・21区平面図(1:200)、土層断面・出土状況図(1:100)

向に延び、直角に向きを変えて16区に繋がる調査区である。幅1m、延長18mのトレンチ状の調査区であるが、他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆う。地表下1.7~2.2mまで確認したが、検出した遺構は近代から現代の造成土直下から切り込んでおり、本来の切り込み位置は確認できない。S D6043は溝としたが、不定形で延長部にあたる15区では検出されていない。したがって人為的でない落ち込みかも知れない。

**14区** (第95図) 8区と9区を繋ぐ幅1m、延長6mのトレンチ状の調査区で、途中で11区が接続する。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆う。地表下1.6~1.8mまで確認したが、灰オリーブ色シルト層の下は確認できない。S K6036は客土直下の褐色粘土から切り込んでいるが、本来の切り込み位置は客土による攪乱のため不明である。S D6037は地表下1.2mの褐色粘土から切り込む深さ50cmの溝である。しかし、隣接する10区や21区で検出されておらず疑問である。8区のS K6024の一部としても、21区での検出はない。

**15区** (第96図) 8区から南下し13区の北東側に繋がる幅1.5m、延長6mのトレンチ状の調査区で、途中で11区が接続する。他の調査区と同様な近現代の客土が覆うが、地表から50cm程度の薄い個所もある。その地点では、地表下80~90cmで検出面となる明黄褐色粘土に至る。土坑や溝を検出したが、S D6038は14区で検出したS D6037を対岸とすれば、幅5mの溝となる。ただし、既述したように隣接する調査区で延長部を確認できず、疑問は残る。S K6039・6056からは鉄滓が出土している。椀形を呈しており、S K6056からは炉壁や炉壁が付着した鉄滓も出土している。後述する分析結果から、鍛造鉄器が周辺で製作されていたと考えられ、その一部には刃金(高炭素鋼)が含まれる。

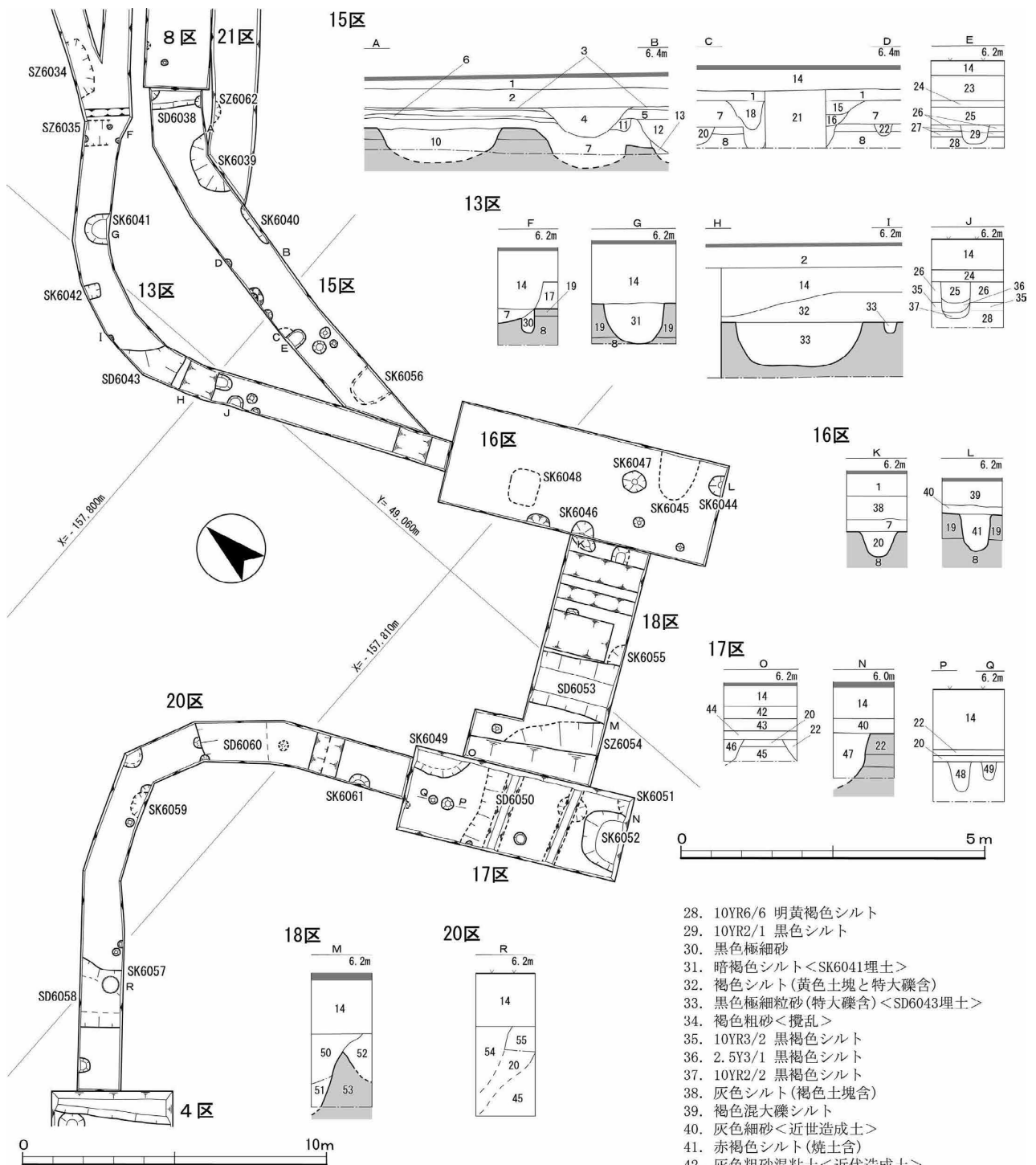
**16区** (第96図) 南東端の調査区で2.8×7.2mのグリット状の調査区で、博勞町に相当する場所である。北西辺に13区、南西辺に18区が接続する。地表下60cmから1mで検出面に至るが、この深度の差は近現代の造成等が及ぶ範囲の差である。数基の土坑を検出したが、S K6044の埋土には焼土の可能性のある小粒を含む。

**17区** (第96図) 南端の調査区で、北東辺に18区、北西辺に20区が接続する。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや現代の客土が覆う。調査区端で検出した大型の土坑S K6049・6052のうちS K6052は、その直下から切り込んでいる。しかし調査区中央部の小穴2基は、客土下の薄い2層のシルト層の下から切り込んでいることが確認できる。S K6052が本来は小穴と同様な状況であったのかは不明とせざるを得ない。一方、S K6049は小穴より1層上から切り込んでおり、層的には後出である。調査区中央部で確認した落ち込みは18区のS Z6054と一連のものであろう。

**18区** (第96図) 南端の調査区で博勞町に相当する場所である。16区と17区に接続し、幅3×8mを基本とする比較的まとまった調査区であるが、上下水道等により大半が攪乱されている。そのなかで検出できたS D6053は北西方向に延びる幅2mの溝で、深さは切り込む層から1.8mを確認している。埋土は上層が細砂、下層はシルトで貝類を含み、出土遺物から18世紀の遺構とすることができる。土坑状の落ち込みS Z6054は17区の落ち込みと一連のものであろう。

**19区** (第94図) 4区から県道を横断する方向に延びる幅1m、延長3mのトレンチ状の調査区である。博勞町に相当する場所と思われるが、大手口から北上する道路上でもある。既存施設による攪乱のため遺構の検出は不可能であったが、調査区南西壁の土層断面観察によりS K6056が確認できた。直径1mの円形を呈するものと推測され、深さは60cmほどである。底部は薄い粘土層で、その上に赤褐色土塊を含む硬化面となっている。埋土には焼土や炭を含み、特に埋土中央部は厚さ5cmほどの炭層が分布する。炭層は、そのまま土坑壁に張り付き、肩部まで分布する箇所もあるが、土坑壁に焼土化はみられない。

**20区** (第96図) 4区と17区を直角に屈曲しながら繋ぐ幅1m、延長20mのトレンチ状の調査区である。他の調査区と同様に地表から1mほどはアスファルトや近現代の客土が覆う。S D6058は幅2mの溝で北西方向に延びる。この溝が埋没後にS K6057が掘削される。陶器の大型甕を2段に積み重ね、その下に桶を設置する。桶は幅20cm程度の板を32枚結び付



1. 黄色細砂<客土>
2. 褐色混大礫シルト<客土>
3. オリーブ褐色極細砂
4. 暗褐色シルト  
(オリーブ褐色土塊・黄色土塊含)
5. 灰褐色細砂
6. 灰色シルト(炭化物含)
7. 灰色シルト<SK6040埋土他>
8. 明黄褐色粘土
9. 灰オリーブシルト
10. 黒褐色細砂(有機物含)<SK6039埋土>
11. 灰色細砂(褐色土塊含)
12. 灰色シルト(黄色土塊含)
13. 暗灰色シルト
14. 造成土

15. 灰色混礫シルト
16. 黄色砂
17. 褐色シルト
18. 暗灰色シルト
19. 褐色粘土
20. 黒色シルト<SK6046埋土他>
21. 褐色砂+黄色細砂+灰色シルト<攪乱>
22. 黒色シルト
23. 10YR6/1 褐灰色混礫シルト<客土>
24. 10YR5/3 にぶい黄褐色混細砂シルト  
<近世造成土>
25. 10YR5/1 褐灰色混細砂シルト  
<近世整地土等>
26. 10YR4/1 褐灰色混細砂シルト
27. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト

28. 10YR6/6 明黄褐色シルト
29. 10YR2/1 黒色シルト
30. 黒色極細砂
31. 暗褐色シルト<SK6041埋土>
32. 褐色シルト(黄色土塊と特大礫含)
33. 黒色極細粒砂(特大礫含)<SD6043埋土>
34. 褐色粗砂<攪乱>
35. 10YR3/2 黒褐色シルト
36. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
37. 10YR2/2 黒褐色シルト
38. 灰色シルト(褐色土塊含)
39. 褐色混大礫シルト
40. 灰色細砂<近世造成土>
41. 赤褐色シルト(焼土含)
42. 灰色粗砂混粘土<近代造成土>
43. 黄褐色細砂<近代造成土>
44. 灰色混細砂シルト<近代造成土>
45. 黄褐色シルト
46. 灰色混砂礫シルト<SK6049埋土>
47. 黒褐色混細砂シルト<SK6052埋土>
48. 黒色シルト(粘土塊含)
49. 黒灰色混細砂シルト
50. 10YR3/3 暗褐色細砂<SD6053上層埋土>
51. 2.5Y2/1 黒色砂礫混シルト(貝含)  
<SD6053下層埋土>
52. N3/ 暗灰色シルト<SZ6054埋土>
53. 10YR8/6 黄褐色シルト
54. 灰褐色シルト(黄褐色土塊・粗砂含)  
<SK6057埋土>
55. 灰褐色粗砂混シルト<近世造成土>

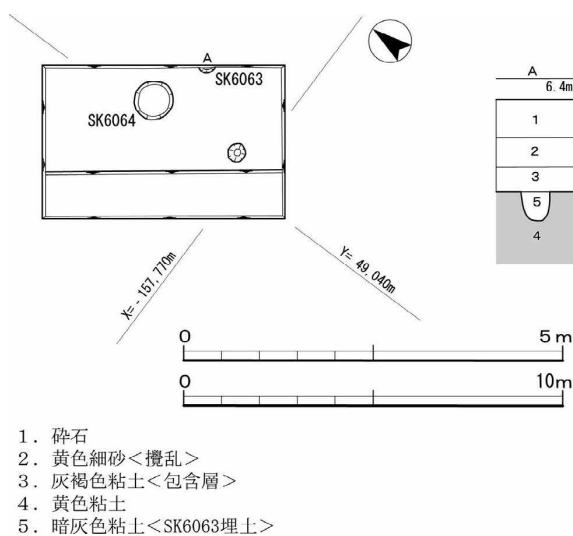
第96図 第6次調査13・15~18・20区平面図(1:200)、土層断面図(1:100)



け、直径50cmの円筒を形成している。このような状況から上層を陶器の甕、下層を桶を用いて枠とする井戸と考えられる。地表下1.1mで甕の上部、1.8mで桶の上部に至るが、井戸の底は確認できなかった。出土遺物から18世紀の遺構とすることができる。S D6060は溝の北西岸を検出したものであるが、対応する岸は検出できておらず、溝とすることに疑問が残る。埋土上層には近代に下る陶器が出土しており、大型のイヌ科やネコの大腿骨も含まれる。

**21区** (第95図) 8区及び14区の南東側に並行する幅1m、延長11mの調査区で南西端は15区に接続する。地表から80cmほどはアスファルトや現代の客土で、その下の黒褐色シルトが検出面に相当するものである。念のために地表下1.2mまで確認したが、遺構は検出できなかった。唯一、土坑状のS Z 6062があるが、人為的なものか疑問である。近隣の調査区で検出した溝や土坑の延長部も確認できていない。

**22区** (第97図) 他の調査区とは北方に30mほど離れた調査区で、第7次調査に近接する。4×6mのグリッド状の調査区で、博労町に相当する場所と思われる。他の調査区と同様に地表から1mほどは碎石や現代の攪乱土が覆う。地表下1.2mの黄色粘土上面で遺構検出を行ったが、調査区の過半を電気及び水道施設による攪乱を受けている。2基の土坑と小穴を検出したに止まる。S K6063からは完形の曲



第97図 第6次調査22区平面図 (1:200)、

土層断面図 (1:100)

物が出土しており、井戸であった可能性が大きく、出土遺物から18世紀の遺構とすることができる。

**23区** (第94図) 4区から県道を横断する方向に延びる19区の延長上で幅1m、延長2mのトレンチ状の調査区である。博労町に相当する場所と思われるが、大手口から北上する道路上でもある。既存施設による攪乱のため遺構の検出は不可能であった。

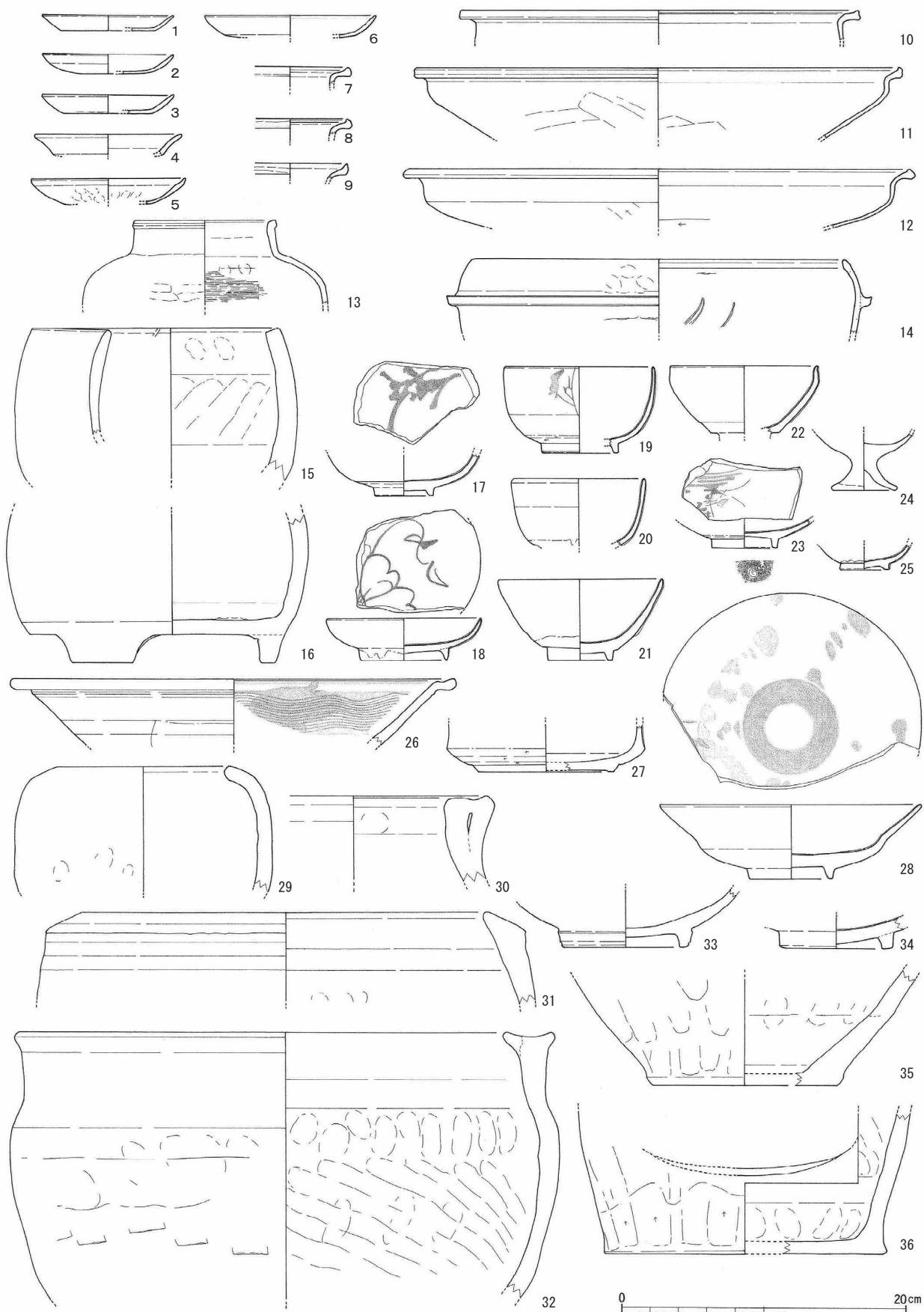
## 2. 遺物

**S D6001出土遺物** (第98～101図) 土師器、陶磁器、瓦、木製品等多くの遺物が出土している。1～14は土師器で、皿、焙烙、茶釜、羽釜がある。皿は口径10cm程度の小型のものが大半であるが、6は口径11.8cmを測るやや大型のものである。ただし、残存度が低いため確証を欠く。1・3は底部が平坦であるが、個体差かもしれない、3は焼成不良のためか、淡茶色を呈する部分がある。1の口唇部には油煙が付着し、灯明皿として使用されたようである。4も煤が付着した結果と考えられるが、黒光りを呈する。使用頻度が高いためとすれば、他とは用途が異なる可能性も生じる。口縁部が外反し、丁寧な仕上げで、他のものと異なる。焙烙等にも煤の付着が見られ、使用の痕跡が伺える。14は、指により押え付けるように非常に短い鏝を貼り付ける。鏝上部には指頭圧混、下部には粘土の接合痕が明瞭に残る。

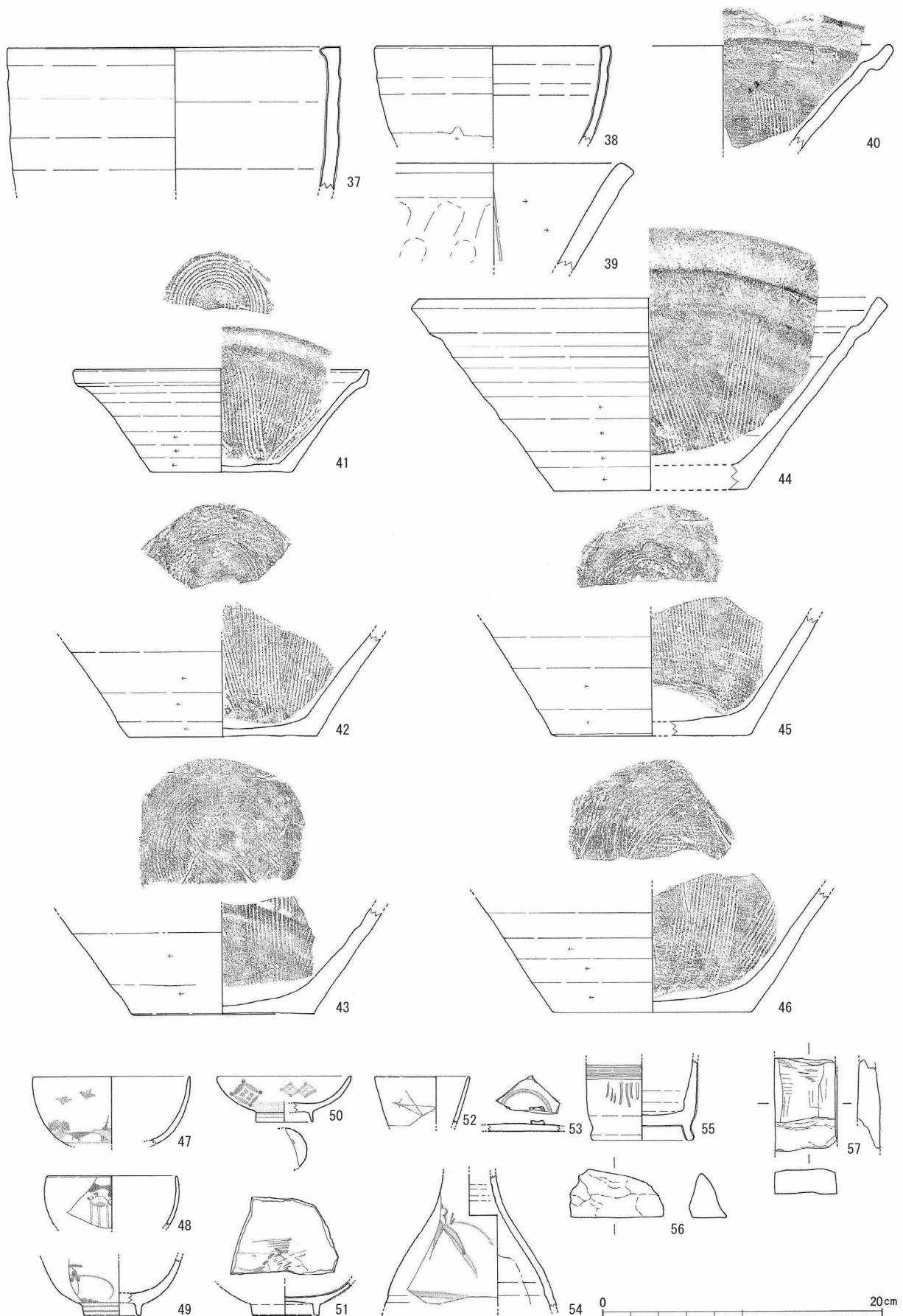
15・16・62は瓦質土器であるが、15と16は同一個体の可能性が高い。底部は平坦で方形の脚が付く。3方として図化した、4方の可能性もある。体部には口縁部から切り欠きを設け、煙出しとしている。煙出しの幅は欠損のため不明であるが、数は4ヶ所と推定できる。内面には黒色の付着物がある。62は方形の容器の底部である。四周に高台を貼り付けるが、半円形の切り欠きを設けている。一応、火鉢としておく。

17～46・51は陶器で碗皿類、火入、仏飯具、鉢甕類等多様な器種がある。碗皿類は瀬戸・美濃系が主体であるが、33は肥前系、23・51は京焼風陶器(肥前)で、23の底部外面には「木下弥」の印銘がある。17～19は呉須釉により絵柄を描き、21は灰釉と鉄釉を塗り分ける。22も鉄釉に柿釉を化粧掛けし、底部は露胎である。26は内面から口縁部外面にかけて灰





第98図 第6次調査SD6001出土遺物① (1:4)



第99図 第6次調査SD6001出土遺物② (1:4)

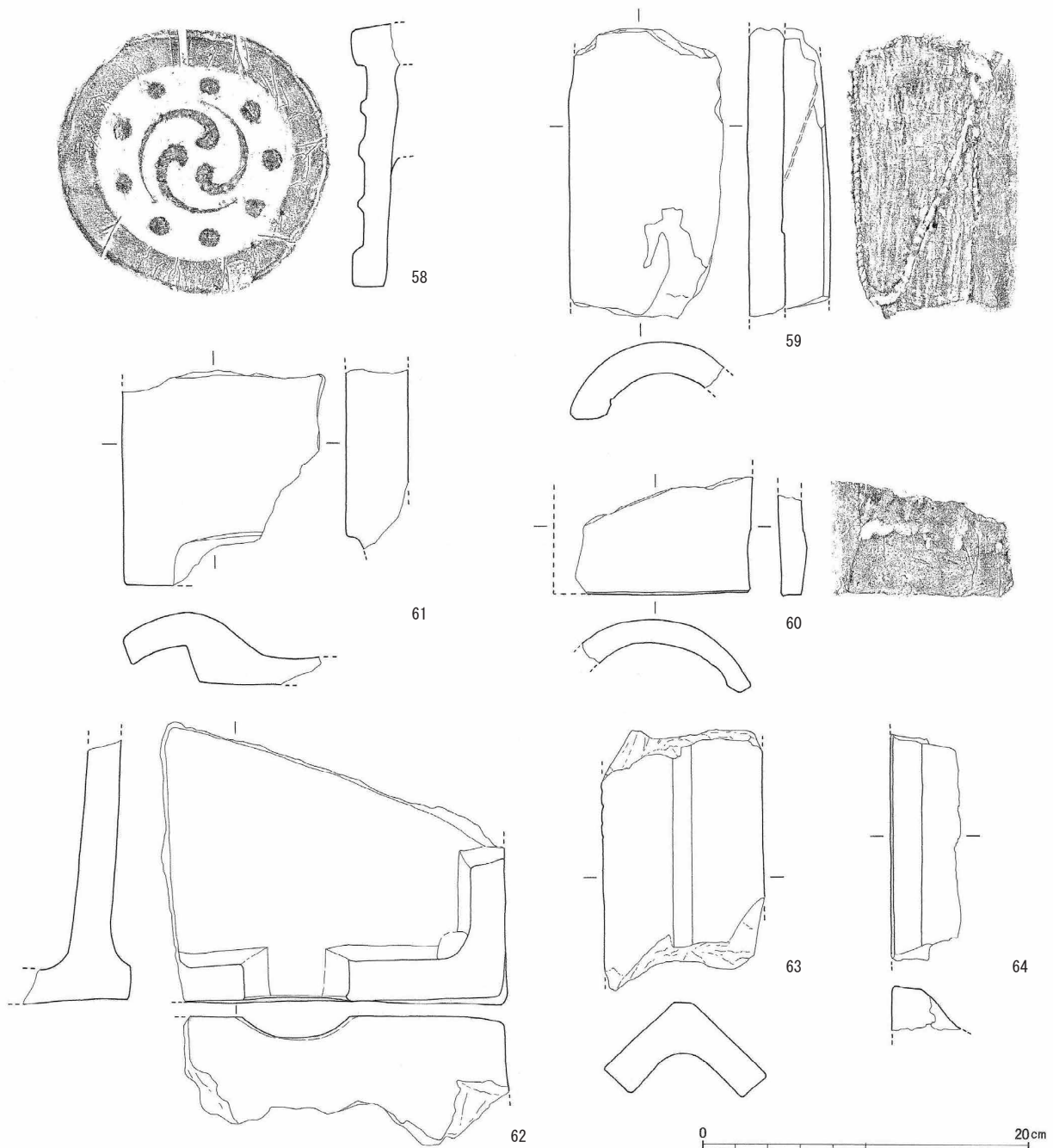
釉を施し、内面に白化粧土の刷毛目を描くが、内面の一部は飴色となっており、鉄釉の化粧掛かもしれない。28は内面を蛇ノ目釉剥するが、鉄漿を施す。播鉢は瀬戸・美濃系で、多くのもが出しているが、使用による極度の摩滅が目立つものがある。

47～50・52～55は磁器で、椀皿類が多い。椀皿類は肥前系の染付であるが、54の徳利は瀬戸・美濃系、55は青磁の香炉である。48の絵柄は濃緑色と淡赤色の2色を使い分けており、時期が大きく降るものか。

57は砥石、56は用途不明の土塊としたが、甕等の剥離片かも知れない。

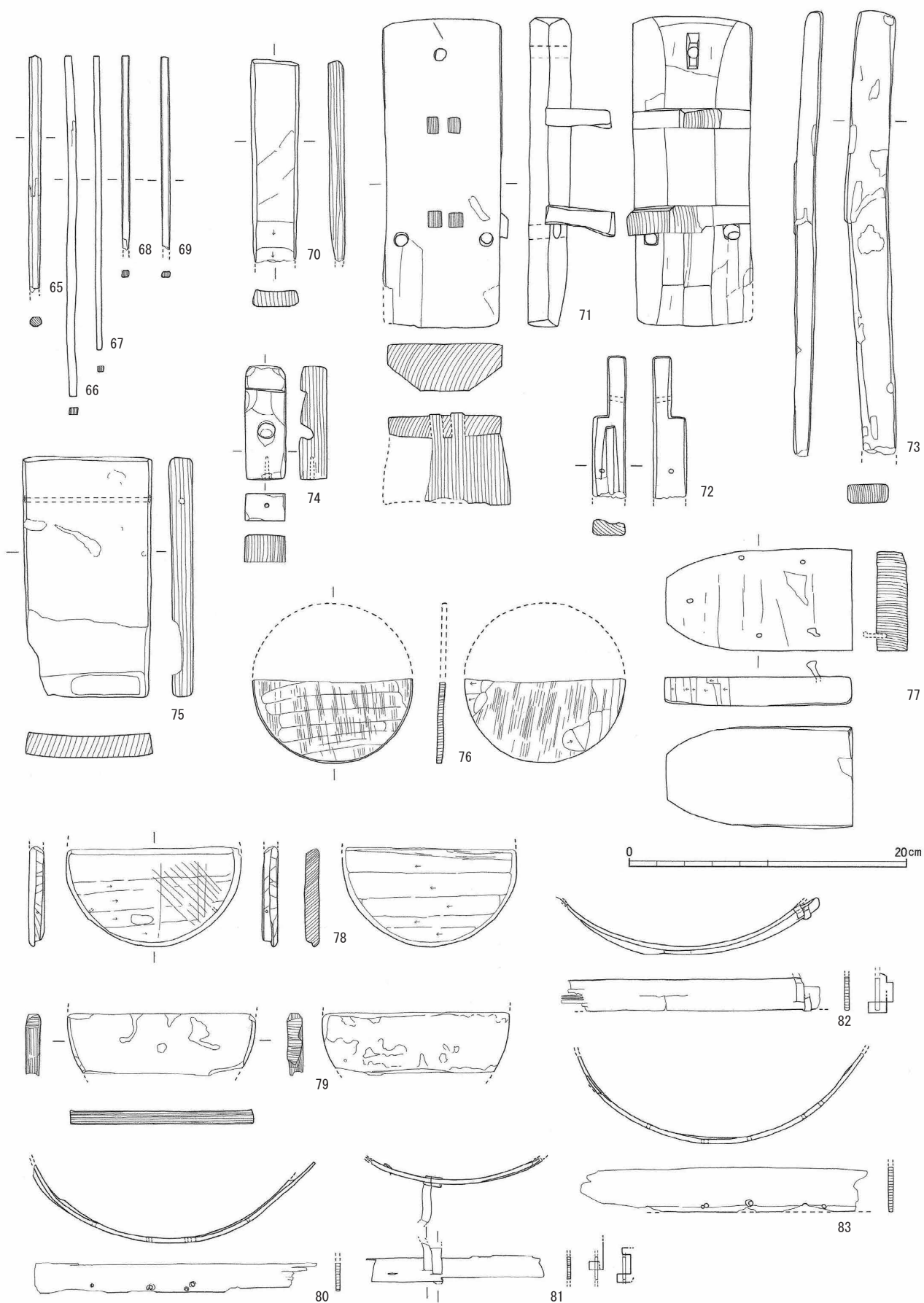
58～61・63・64は瓦で、58～60は丸瓦、61は棧瓦、63は冠瓦、64は小片であるが、水返し付きの平瓦か。58は瓦当部が完存しており、巴文であるが内圈線は無い。59の内面には吊紐痕が明瞭であるが、吊紐頂点付近に欠損があり結び目の有無は不明である。

65～83は木製品で、箸、下駄、曲物、部材等がある。材質はヒノキまたはヒノキ科に属するものである。



第100図 第6次調査S D6001出土遺物③ (1:4)

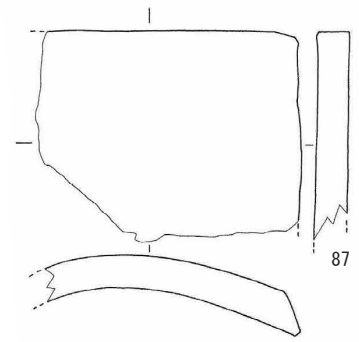
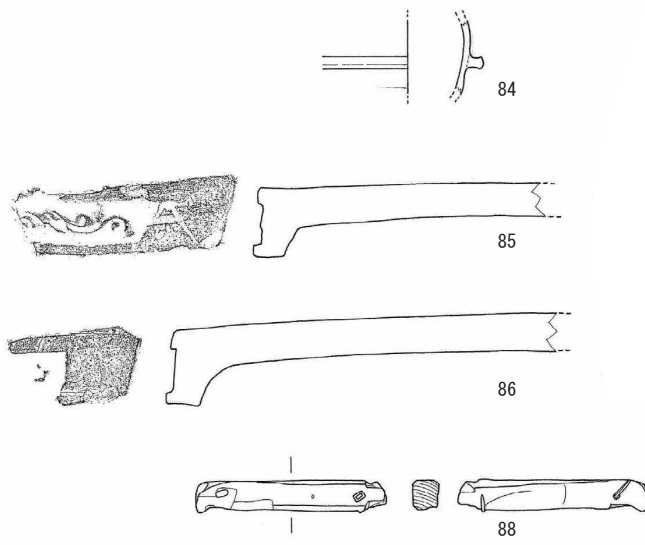




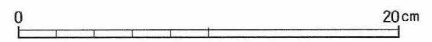
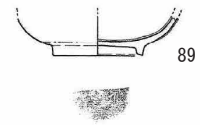
第101図 第6次調査S D6001出土遺物④ (1:4)



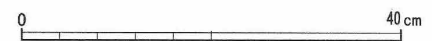
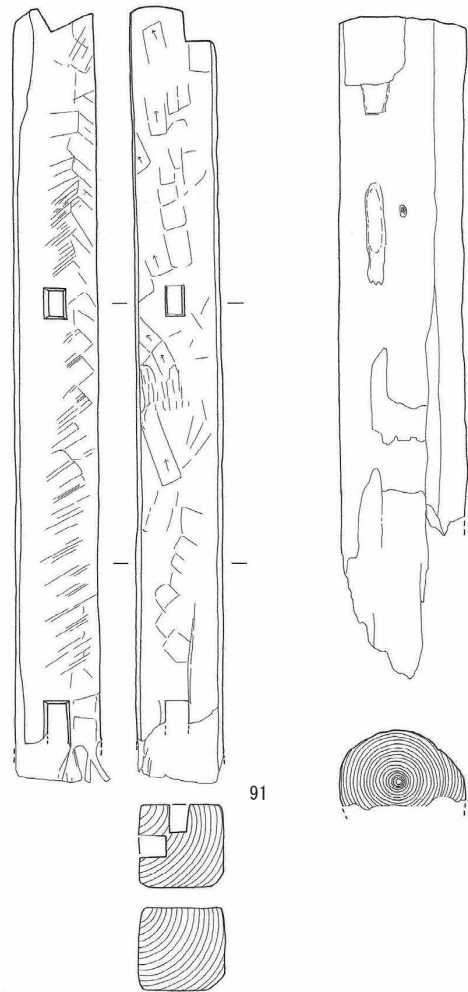
SK6002



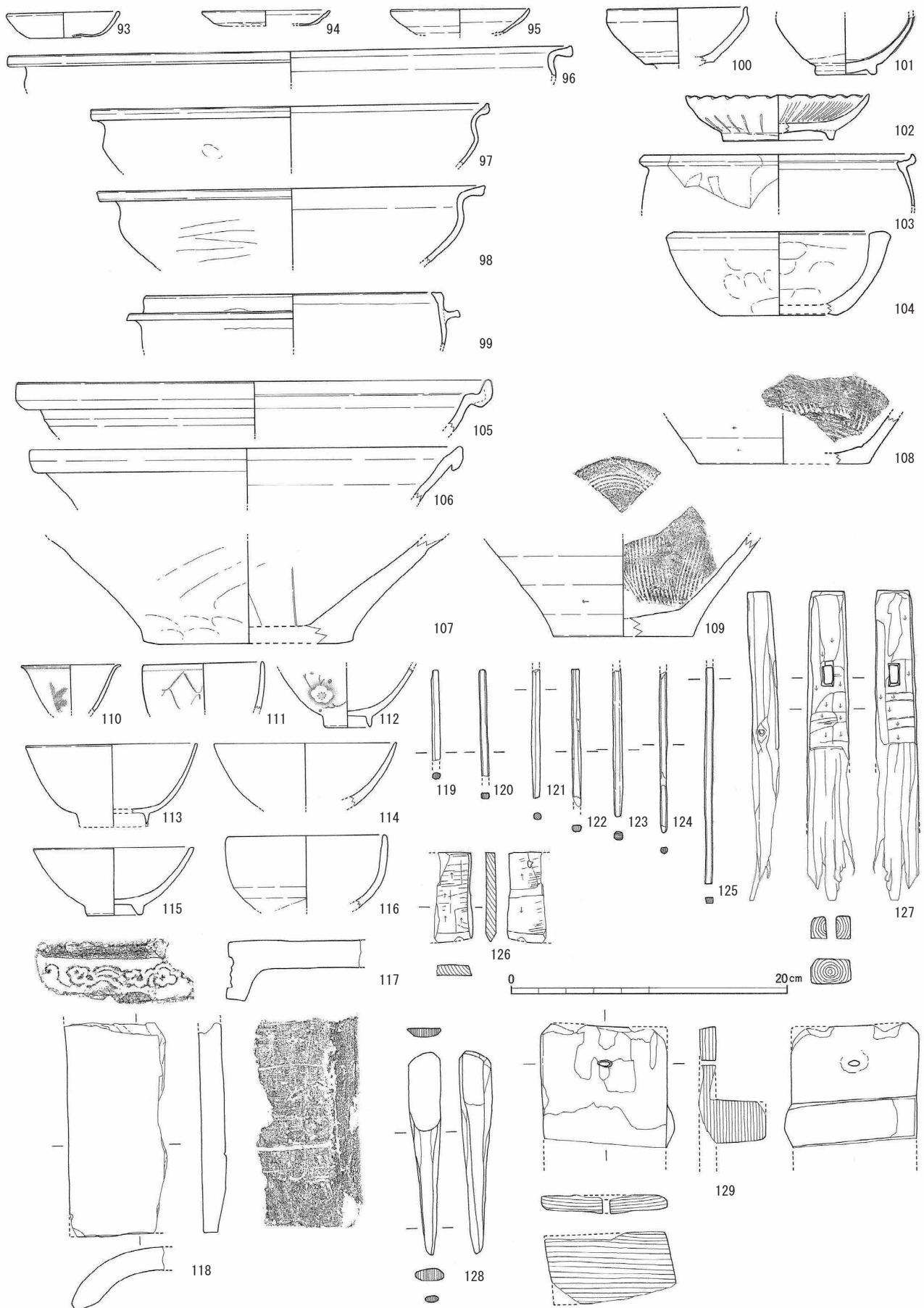
SK6003



SZ6065



第102図 第6次調査1区出土遺物 (84~89=1:4、90~92=1:8)



第103図 第6次調査2区包含層出土遺物 (1:4)

るが、72の建具材のみマツ科ツガ属である。部材や曲物等の木取は桎目である。79には漆が塗布される。後述するように、拭き漆や木地呂塗りのような、木目の見える塗膜であったと考えられる。

**S K 6002・6003出土遺物** (第102図) S K 6002とS K 6003は重複する土坑である。86・87はS K 6002、89はS K 6003からの出土であるが、84・85・88はS K 6002出土としているが、重複部分からのものである。小片のため不明確なものもあるが、84は瓦質土器の茶釜、85・86は軒瓦、87は熨斗瓦、88は木製品の建具材、89は陶器の椀である。瓦質のものに燻不良のものが多く、84・86・87は黄橙色系の色調を呈する。89は山水文が描かれていないが、京焼風陶器の椀と考えられ、底部外面に印銘を施す。欠損のため部首かどうかは不明であるが、「木」が読み取れる。

**S Z 6065出土遺物** (第102図) 90~92はS D 6001の土留施設と思われる部材であるが、90はツガ属、91はヒノキ、92はサワラで材質は多様である。90・

91にはホゾ穴があり、転用材であることを示している。材質が多様であるのもこのためと思われる。

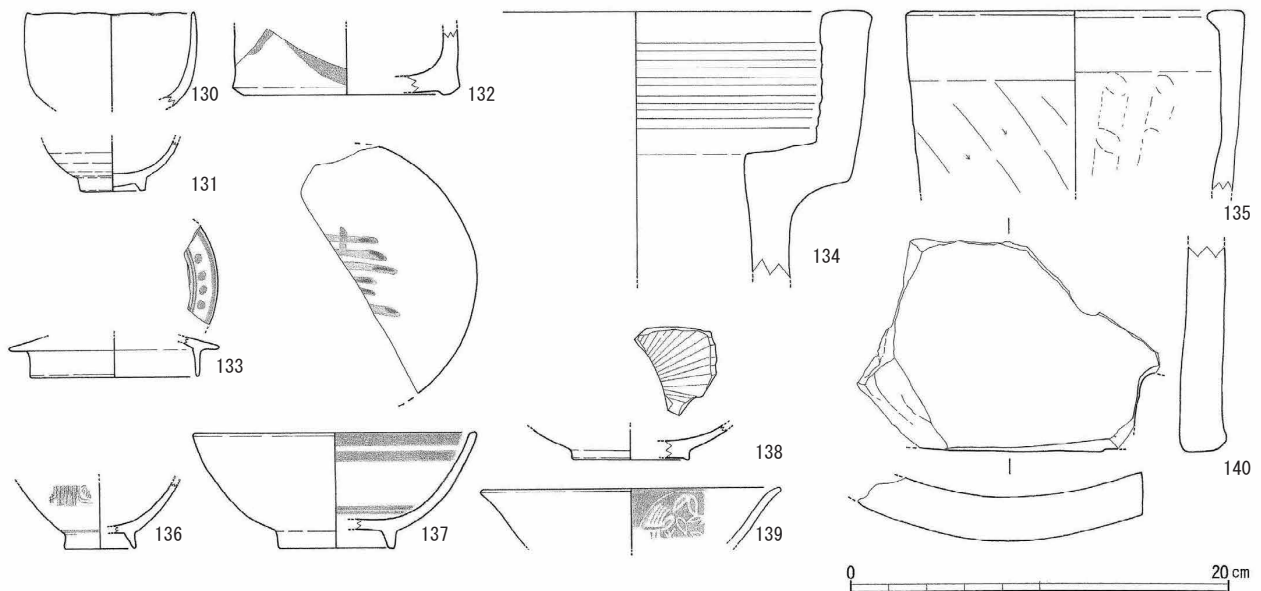
**2区包含層出土遺物** (第103図) 黒色粘質土塊を含む検出面直上の層から出土したものである。土師器、陶磁器、瓦、木製品の多様な遺物が出している。

近世のものが中心であるが、106・107は室町時代に遡る。特に107の播鉢は1本単位の播目で播鉢として出現期にちかいものである。その他、土師器皿93・94も室町時代に遡る可能性がある。

天目茶椀(100・101)の底部は露胎であるが、100は柿釉が施され黄橙色を呈するものである。磁器には染付のものと無文のものがある。111は網目、110には松葉が描かれる。112にも梅花が描かれるが、花芯を淡い赤色で表現している。115は無文としたが、体部外面に不自然な汚れがあり、金箔で吉祥文字等を描いたものが剥離した可能性がある。これら115・112は近代に下るものかもしれない。

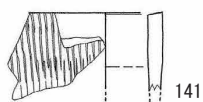
木製品には箸・下駄等があるが、箸の材質はヒノキである。129の下駄は一木造の連歯下駄で材質は

## 2区 造成土



## 3区

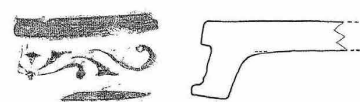
SK6004



SK6006



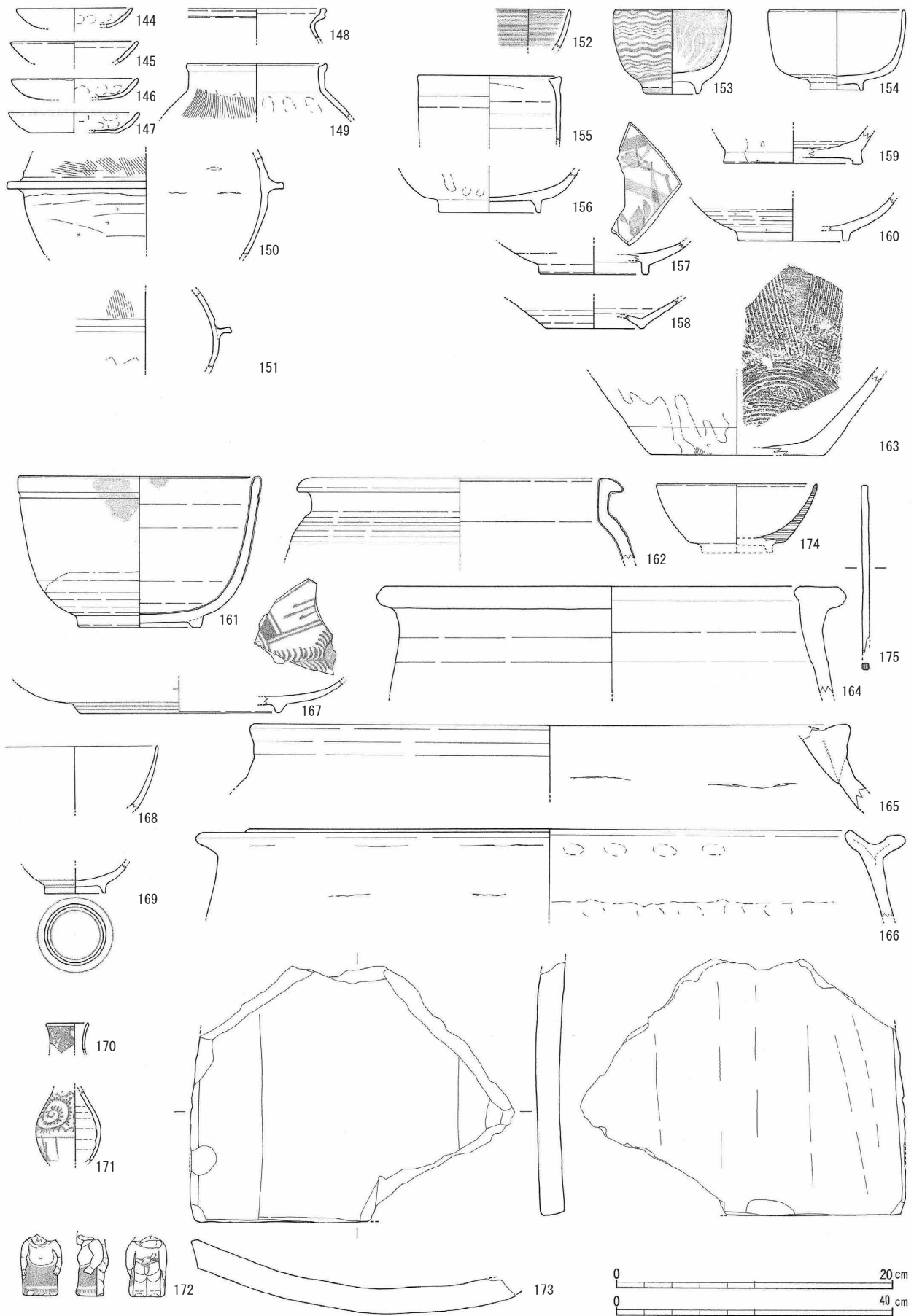
SK6007



142

143

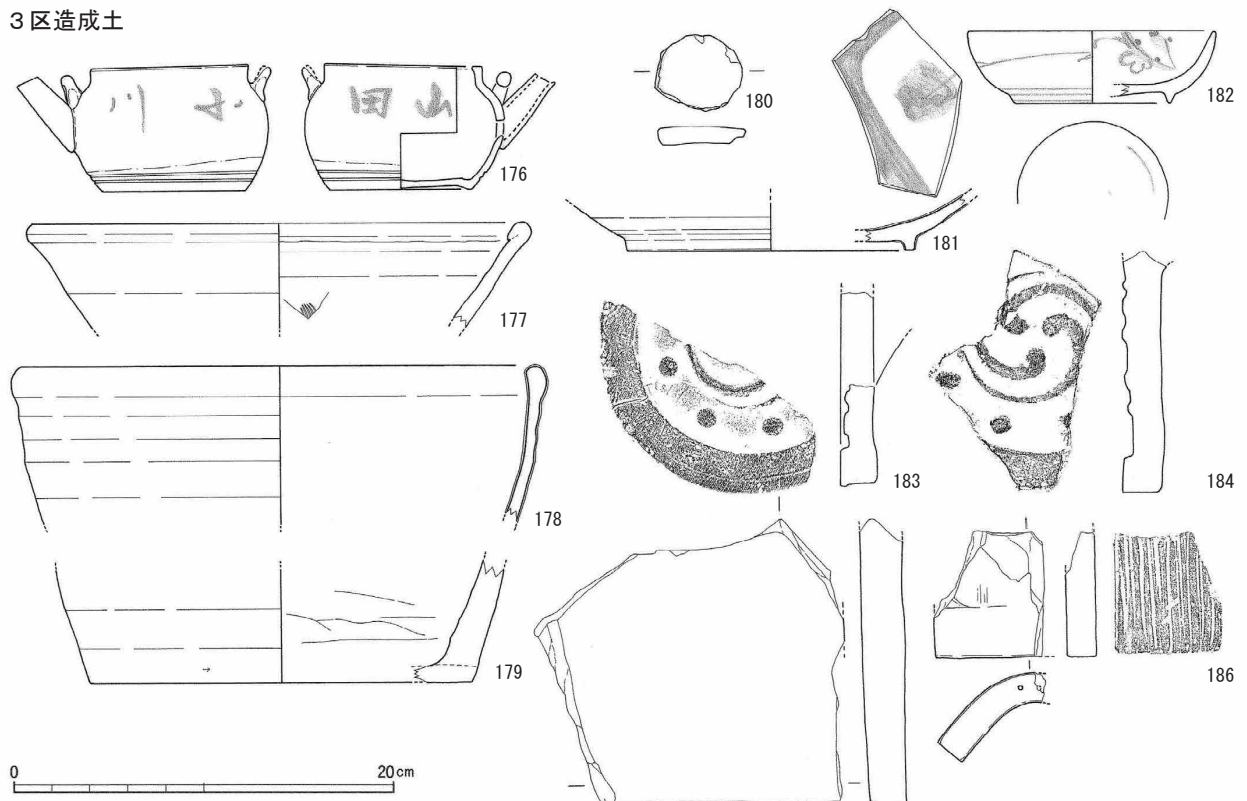
第104図 第6次調査2区造成土、3区遺構出土遺物 (1:4)



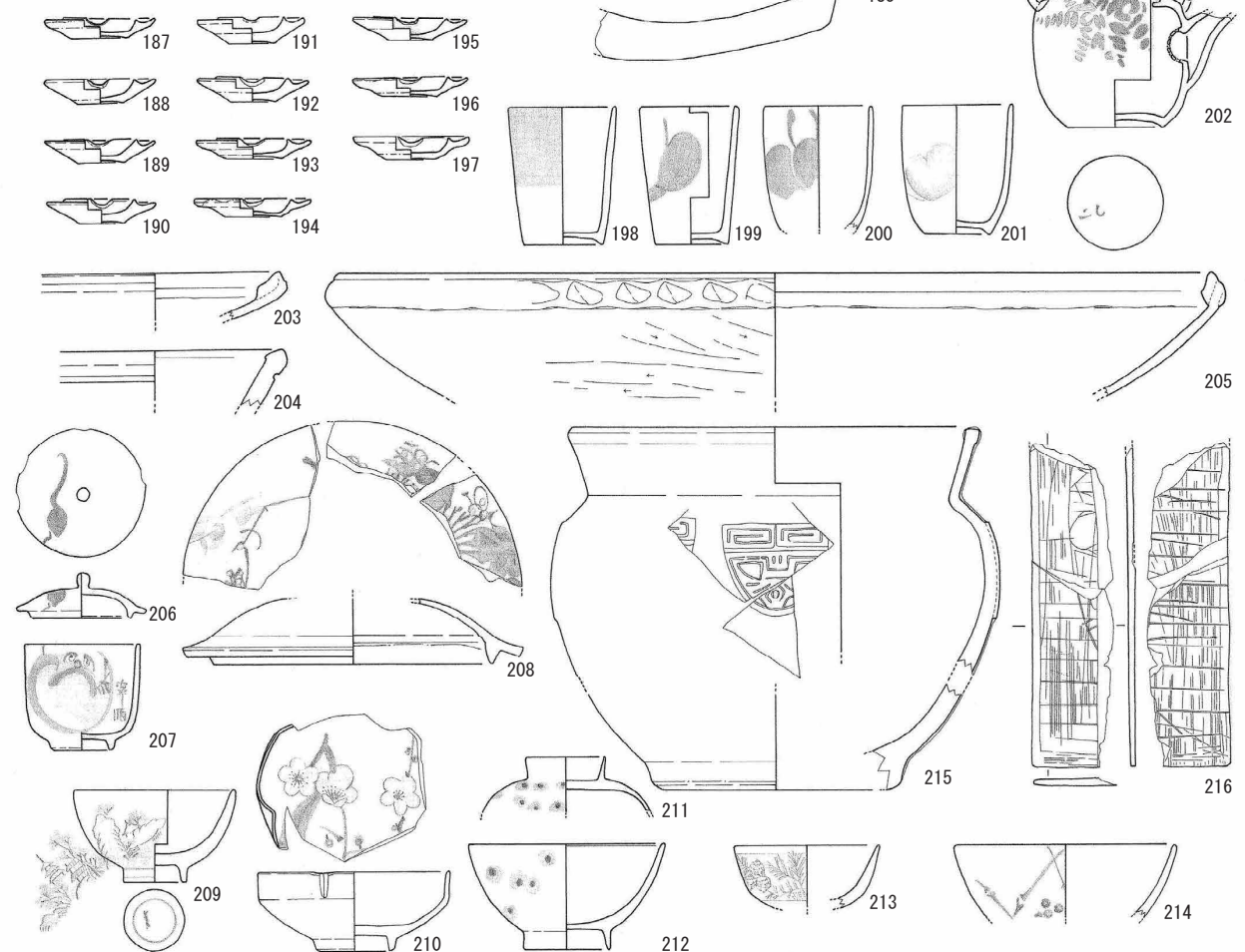
第105図 第6次調査3区包含層出土遺物 (165・166=1:8、他は1:4)



3区造成土

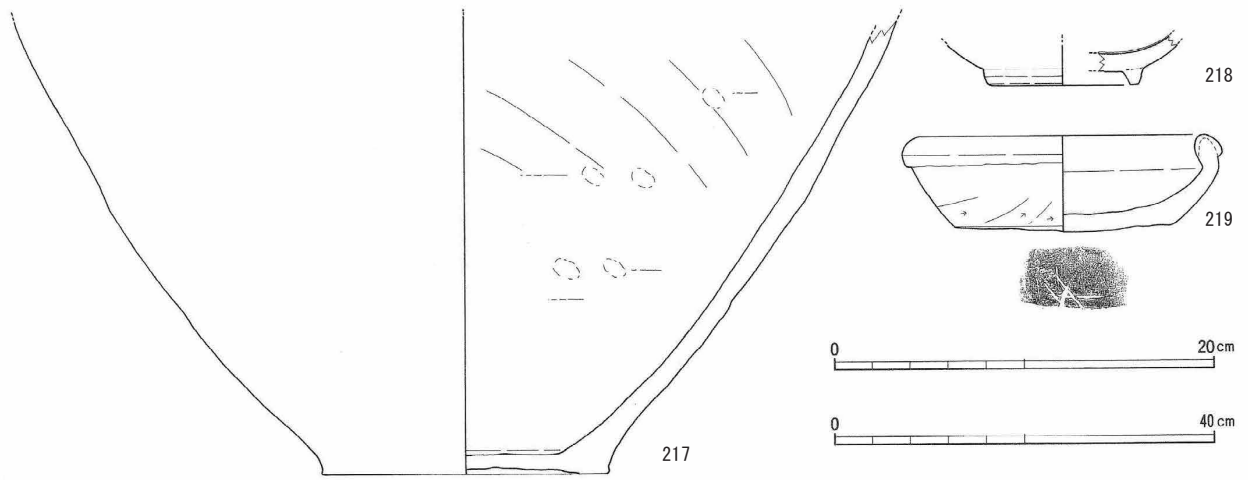


4区上層土抗

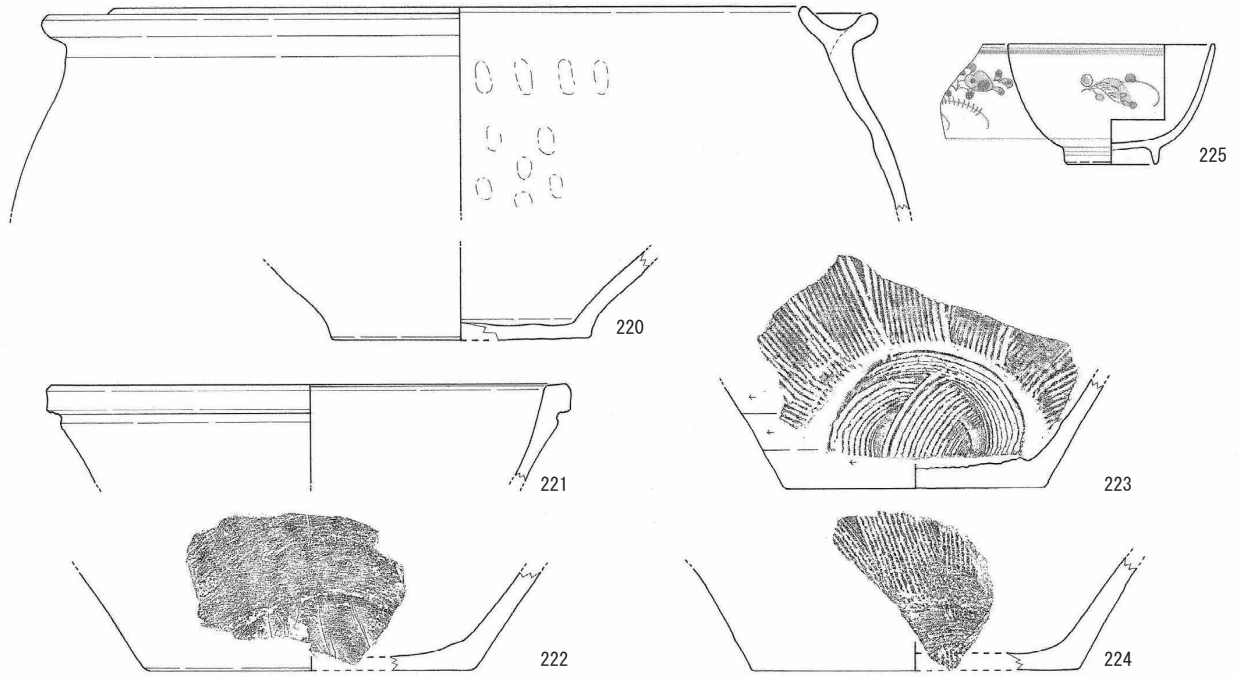


第106図 第6次調査3区造成土、4区上層土抗出土遺物 (1:4)

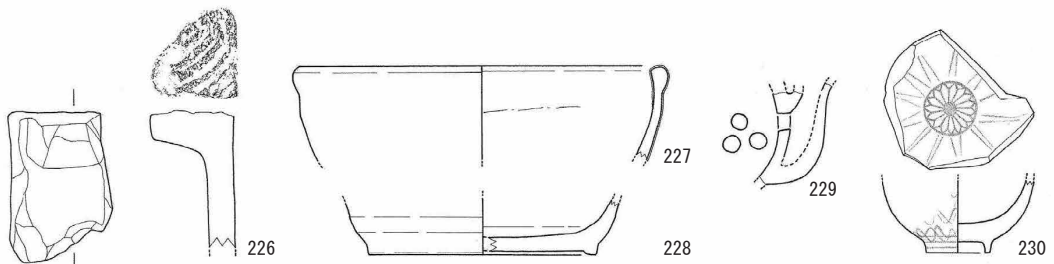
SK6013・6014



包含層

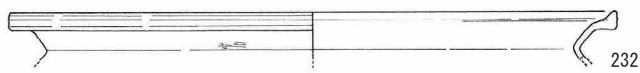
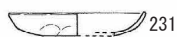


造成土

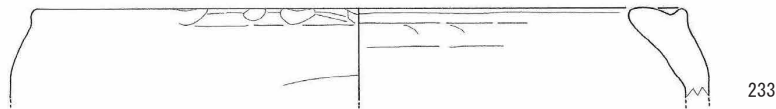


第107図 第6次調査4区出土遺物 (217・220=1:8、他は1:4)

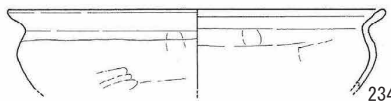
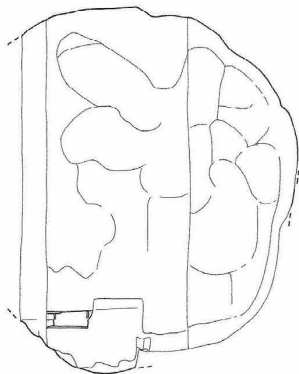
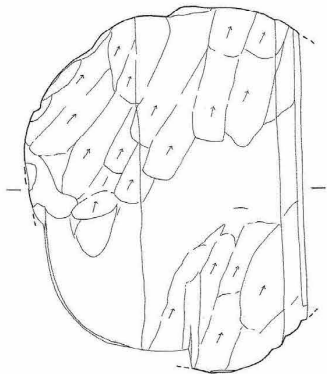
5区 SZ6020



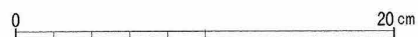
5区 造成土



5区 包含層



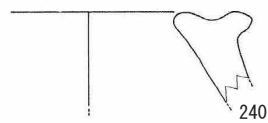
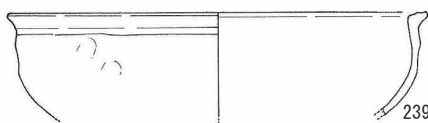
6区



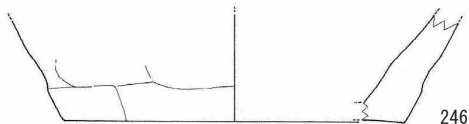
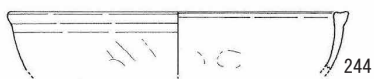
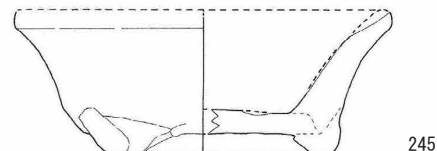
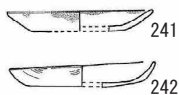
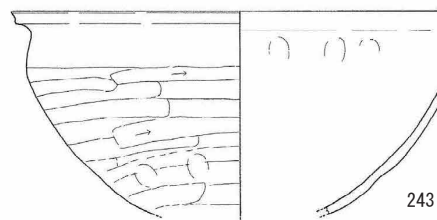
7区 SK6023



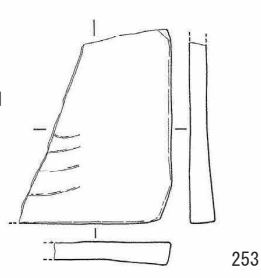
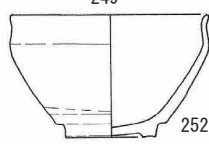
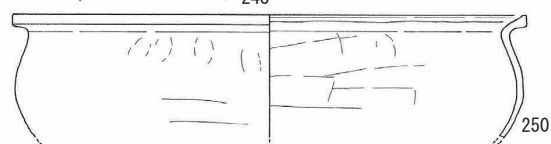
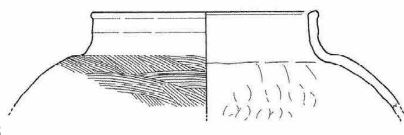
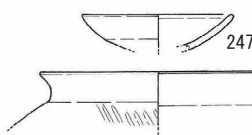
7区 Pit2



7区 包含層



7区 造成土



第108図 第6次調査5～7区出土遺物 (1:4)

オニグルミである。堅く狂いが少ないといわれる材質のため、採用されたものであろう。

**2区造成土出土遺物（第104図）** 現代の造成土に含まれていた遺物である。このため近世を降る疑いのある遺物も散見される。130～135は陶器である。130の口縁端部は弱い輪花状の凹凸が巡る。133の蓋は陶器ではあるが、絵柄は染付である。

136～139は磁器で、瀬戸・美濃系が占める。140は切込みをもつ平瓦としたが、図が前後逆かも知れない。椀瓦の可能性もあるが、比較的厚く酸化焼成である。

**3区遺構出土遺物（第104図）** 141は陶器で、一応火入としておく。142は軒丸瓦、143は軒平瓦で、142の巴文には内圏線が無く、連珠は小型である。

**3区包含層出土遺物（第105図）** 144～151は土師器で、144～147は皿、148は小片のため不明確ではあるが、焙烙と思われる。149～151は茶釜であるが、151は鏝以下に煤が付着するのに対し、150は鏝を超えて上部まで付着している。

152～166は陶器で、椀、皿、壺、甕等器種は多様である。152・156は白泥土により刷毛目を描くもので、肥前系である。153も同様な手法で、肥前系かも知れない。165・166は大型の甕であるが、口縁端部外面に外帯をもつが、164では外帯と口縁部が一体となり、口唇部は扁平な面を呈する。

167～172は磁器で、肥前系と瀬戸・美濃系が混在する。172をはじめ、瀬戸・美濃系には近世を大きく降るものが含まれる。

174は木製の椀、175は箸、173は瓦である。椀はトチノキを横木取して製作されている。炭粉渋下地に内面に透明漆、外面は赤色漆が塗布されている。

**3区造成土出土遺物（第106図）** 近現代の遺物を含む層で、陶器、磁器、瓦がある。176～181は陶器

である。176は小型の土瓶で、汽車土瓶であろう。

JR参宮線伊勢市駅は改称される前、「山田駅」と称しており、「山田」と記されるのは駅名と思われる。180は加工円盤としたが、破断面の様相は一樣でなく、偶然円形状に破断した可能性も残る。

磁器は182のみで、内外面に圏線とともに蔓草系の絵を描く。

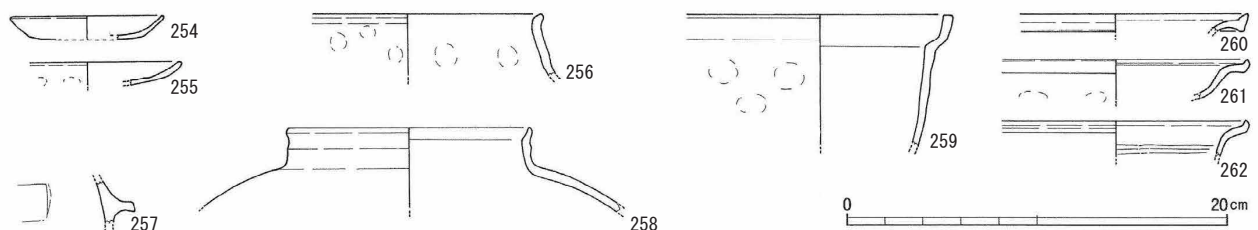
183～186は瓦である。瓦当部は巴文で、内圏線は認められない。186は冠瓦としておく。内面にヘラによる掻き取り状の平行線がみられる。先端部には小さな方形孔が、1cm間隔で2ヶ所に空けられているが、欠損状況から本来は3～4ヶ所に空けられたものと推測される。焼成前に空けられたもので、深さは1.5cmに及ぶ深いものである。何らかの固定のためのものと思われる。

**4区上層土坑出土遺物（第106図）** 土坑から一括して出土したもので、図示したものは全て近現代のものである。陶器、磁器、石製品がある。199～201はリングの絵柄で、一揃いのもの、211と212は蓋と椀が対になる。

**S K 6013・6014出土遺物（第107図）** 図示したものは全て陶器である。いずれの土坑に属するものかは不明となってしまったが、217は土坑に据えられていたものである。

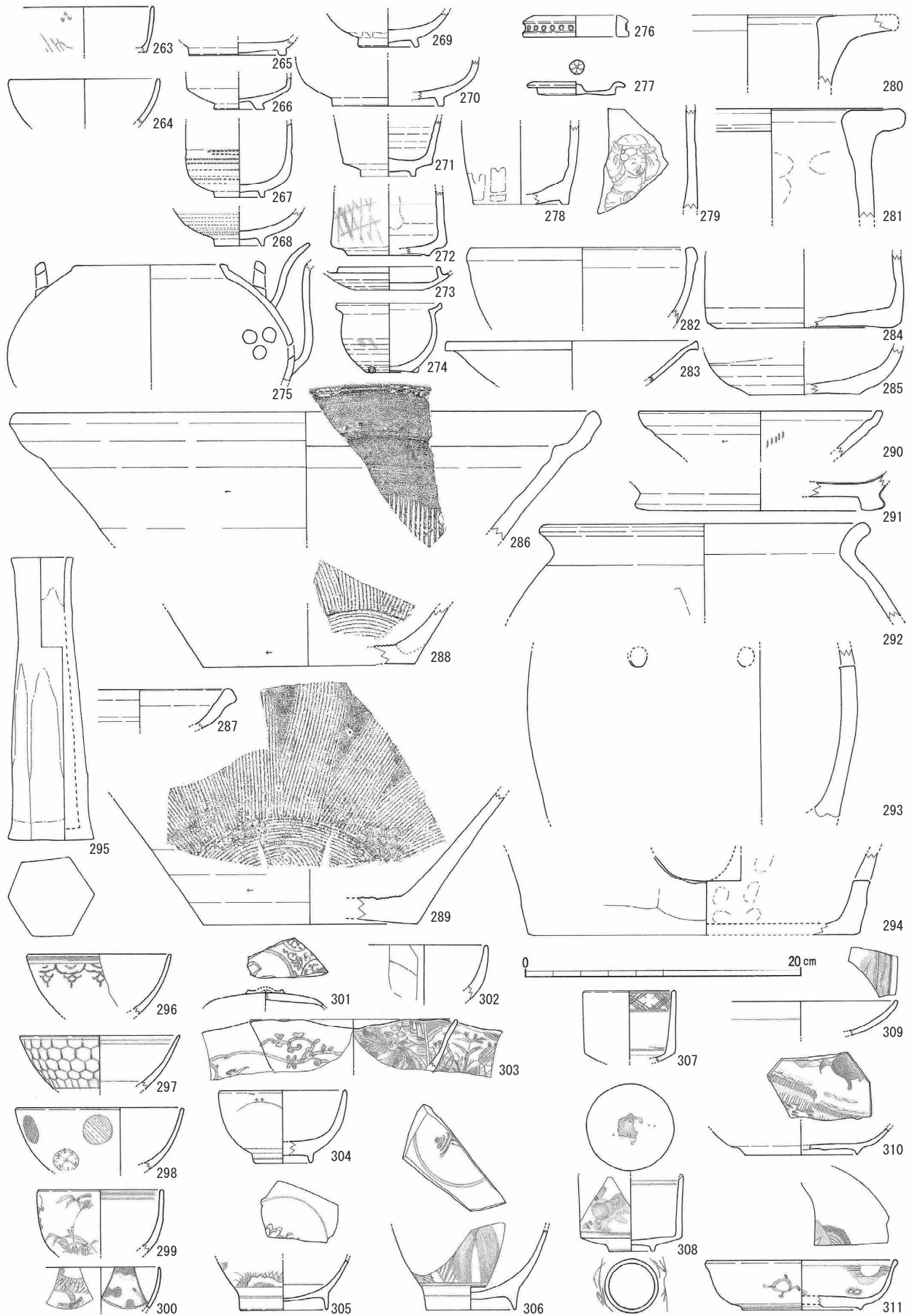
**4区包含層出土遺物（第107図）** 図示したものは全て陶器である。221は内面に煤が付着しているため、火鉢としておく。222～224は挿鉢であるが、222・224は使用により内面が摩滅している。特に222は挿目が消滅するほどの深い摩滅である。それらに対して、223は摩滅がみられない。225は陶器の染付で草花文を描く。

**4区造成土出土遺物（第107図）** 226は瓦質で、七輪の五徳部分の小片とした。頂部には滑り止めの溝



第109図 第6次調査7区整地層出土遺物① (1:4)





第110图 第6次調査7区整地層出土遺物② (1:4)

が同心円状に刻まれる。227～229は陶器である。釉の発色がやや異なるものの227と228は同一個体の可能性が高い。230は磁器の椀で二重網目文が描かれる。

**S Z 6020出土遺物** (第108図) 231は土師器の皿、232は鍋であるが、両者とも小片である。このため、232は焙烙の可能性もある。

**5区造成土出土遺物** (第108図) 233のみである。陶器の甕と思われる。口縁端部は内傾するが、突帯状に直立する部分を併せもつ。直立部分には指による押圧が加えられ、緩やかな刻目を呈する。

**5区包含層出土遺物** (第108図) 234は土師器の鍋、235は土師器の台付皿としたが、小片のため不明確である。非常に薄い器壁で内面に薄く煤が付着する。236はヒノキ材で容器の底板であるが、腐食が進んでいる。

**6区造成土出土遺物** (第108図) 図示できたものは磁器の猪口 (237) のみである。染付により山水を描く。

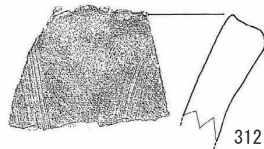
**S K 6023出土遺物** (第108図) 図示できたものは、陶器の甕 (238) のみである。小片のため詳細は不明であるが、非常に堅緻に焼成されている。

**7区小穴出土遺物** (第108図) 土師器の鍋 (239) と陶器の甕 (240) があり、両者は同一の遺構から出土したものである。

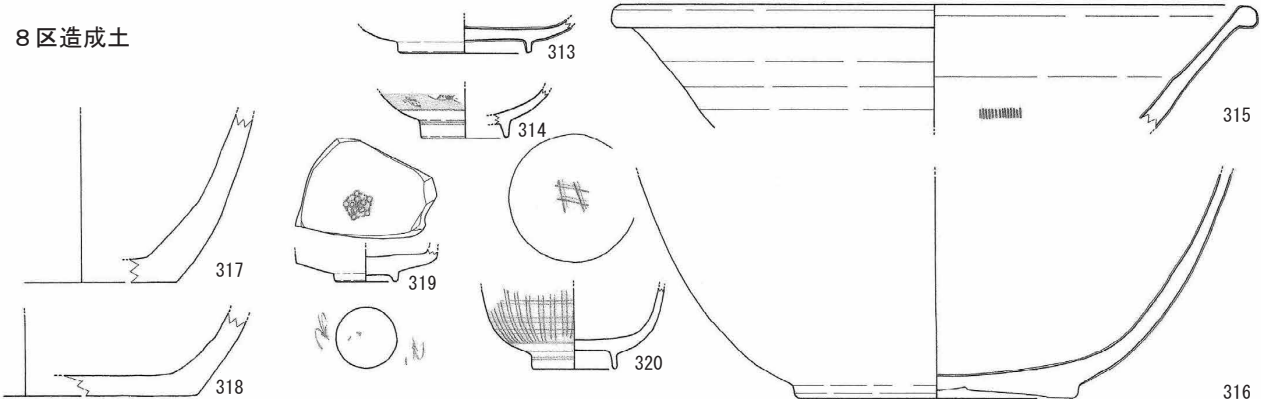
**7区包含層出土遺物** (第108図) 土師器の皿 (241・242)・鍋 (243)、瓦質土器の鍋 (244)、陶器の鉢 (245・246) がある。244は小片のため不明確で、土師器の焼成不良かも知れない。245は短い脚が付くものであるが、小片のため脚数は不明である。一応、3脚として図化している。241の口縁部、243の体部、246の内面には煤の付着があり使用の状況が伺える。246は鉢としたが、体部に比べて底部が薄く、煮炊目的の器種かも知れない。

**7区整地層出土遺物** (第109～110図) 多くの土師器及び陶磁器類が出土している。254～262は土師器である。小片のため器形が不明確なものもあるが、254・255は皿、256～258は茶釜、259は鍋、260～262

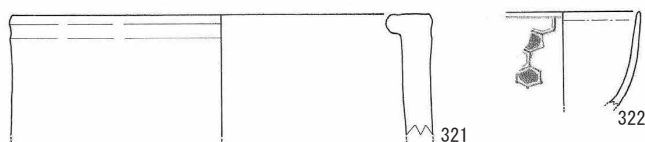
SK6024



8区造成土



SK6025



第111図 第6次調査8区・9区出土遺物 (1:4)

は焙烙である。259の外面には厚く煤が付着し、262の頸部内面には棒状工具によるヘラミガキ状の痕跡がある。

263～295は陶器である。264・266～269・271・272は椀、263・265・270は皿である。267は刺突文を巡らす鎧椀であるが、灰釉と鉄釉を塗り分ける。268も同様であるが、内面は銅緑釉を想定させる緑色である。両者とも高台接地面のみ露胎とする。270は内外面を氷割文に仕上げ、272の外面には鉄釉による幾何学文を描いている。273は灯明受皿、274は小型の行平鍋か。体部下端の3方に器を安定させるための粒状の脚が付く。275は土瓶、276は器種不明であるが、托としておく。内外面ともに銅緑釉が施され、外面に浮文を巡らす。277は水注等の蓋、278・279・282～285・291は鉢、280・281は甕である。277の摘みは五弁花状を呈する。280は小片のため不明確であるが、方形の可能性がある。286～289・290は播鉢、295は花瓶、293・294は火窓があり、風炉と思われる。293の内面には煤が厚く付着する。292は壺状の口縁部片であるが、内面に厚く煤が付着しており、これも風炉と考えられる。

296～311は磁器で大半が肥前系であるが、300は清朝写しである。307は染付青磁、305・306は広東椀である。310・311は蛇ノ目凹型高台を呈する。

**7区造成土出土遺物**（第108図） 現代造成土の混入遺物である。土師器には皿（247）、茶釜（248・249）、鍋（250）があり、陶器は251・252ともに天目茶椀で、両者とも底部外面は露胎である。253は一応砥石としておく。粒子のやや粗い砂岩である。

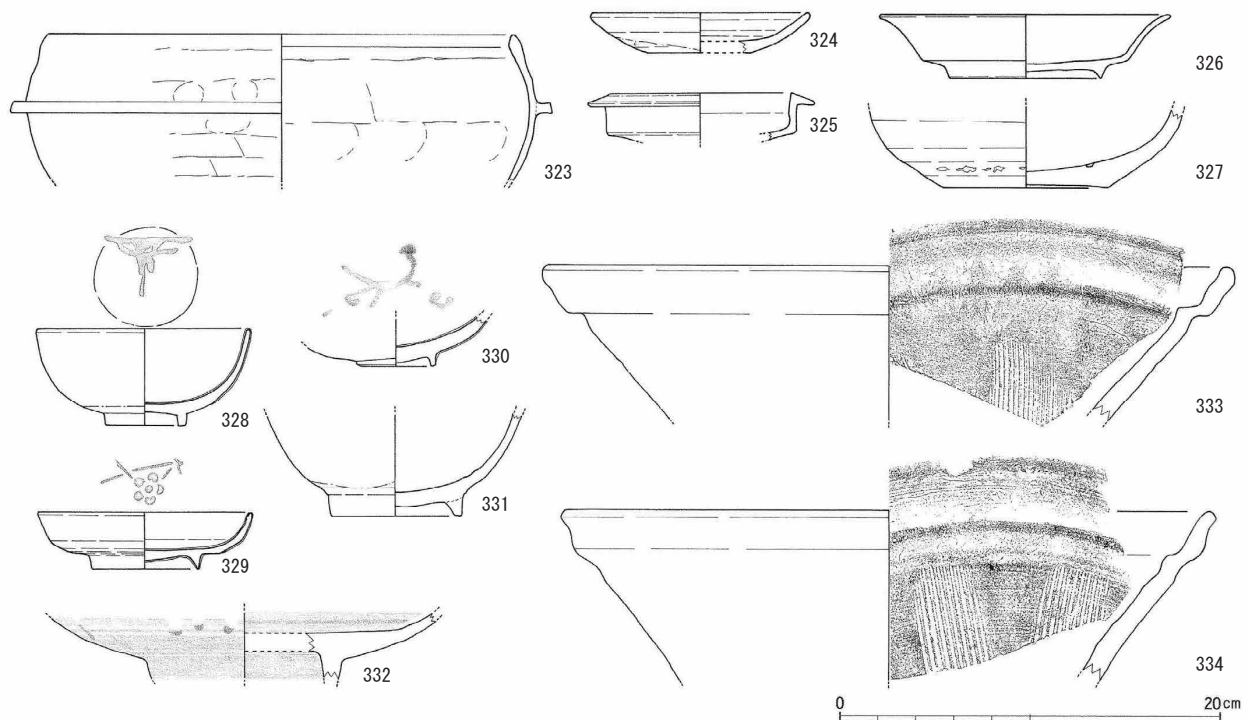
**SK6024出土遺物**（第111図） 図示できたものは312の陶器播鉢のみである。播目は非常に鋭利な工具で引掻くように施している。

**8区造成土出土遺物**（第111図） 陶器と磁器がある。313は陶器の皿で、高台接地面のみが露胎となる。内外面は弱い氷割文を呈する。315は陶器の播鉢、316は鉢、317・318は捏鉢である。316の内面には重ね積み用のハマグリ痕が5ヶ所に残る。

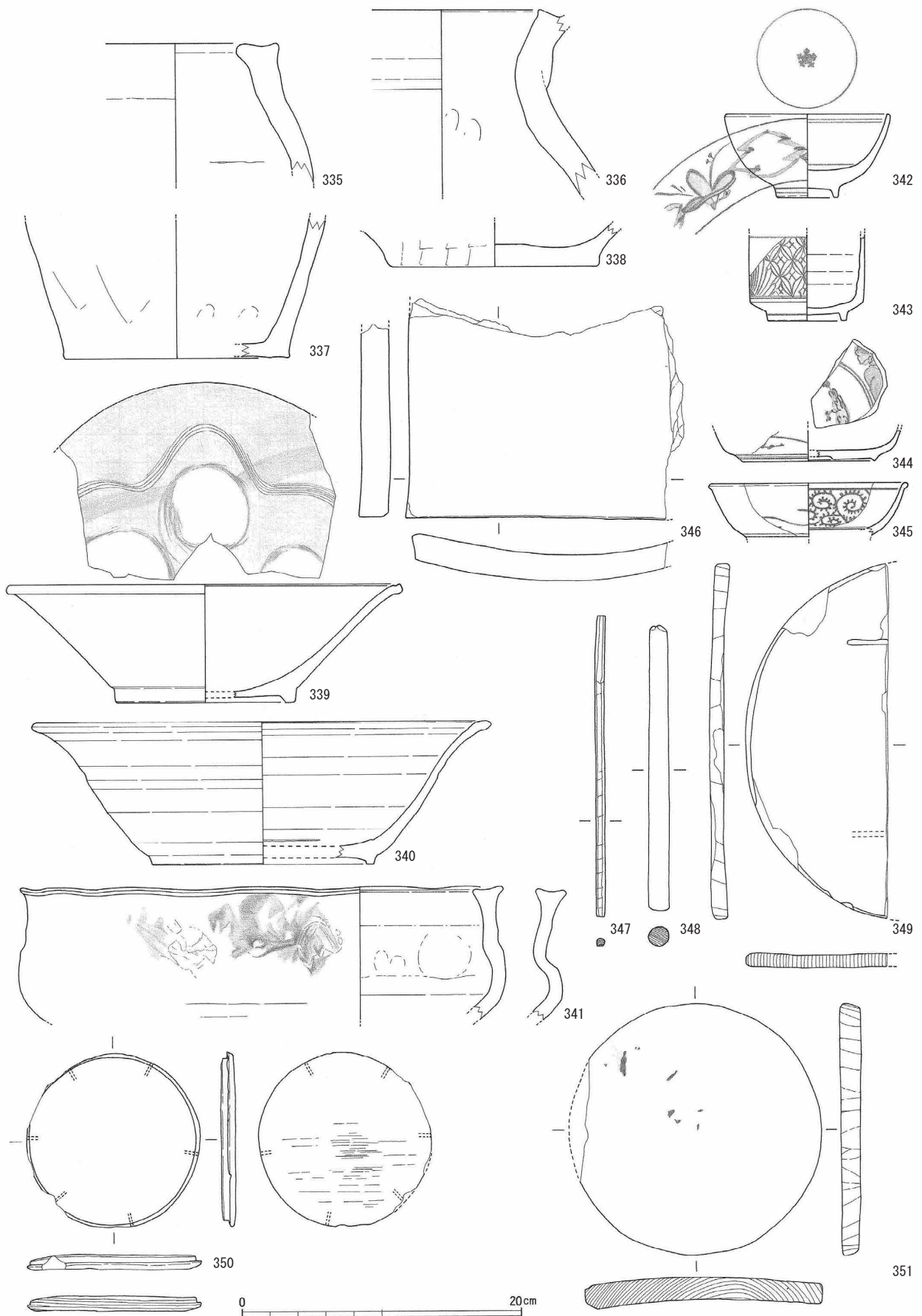
**SK6025出土遺物**（第111図） 図示できたものは陶器の321と磁器の322であるが、両者とも小片で不明確な部分が多い。321は火鉢としておく。

**SK6028出土遺物**（第112～113図） 陶器、磁器、木製品等比較的多くの遺物が出土している。323は土師器で唯一図示できた羽釜である。鏝以下に厚く煤が付着している。

陶器には、蓋（325）、椀（328・330・331）、皿（324・326・329・332）、鉢（327・339・340）、播鉢（333・334）、甕（335～338）、花器（341）があり、食器、調理器、貯蔵器等多様である。椀皿類では瀬



第112図 第6次調査SK6028出土遺物① (1:4)



第113図 第6次調査SK6028出土遺物② (1:4)



戸・美濃系が中心と思われるが、332は唐津の刷毛目皿である。呉須釉により絵柄を描くものもあり、326・328・330の内外面は弱い水割文となる。339の見込みには、重ね焼きのためのハマグリ痕が5ヶ所に認められる。341は鉢状の形態を呈し、一応花器としておく。轆轤拳骨形と呼ばれる特異な成形のもので、やや時期が降るか。

342～345は磁器で、全て食器類である。草花、七宝、蛸唐草等の絵柄が施され、344の底部は蛇ノ目凹型高台を呈する。

347～351は木製品であるが、348は用途不明の棒状部材である。材質はヒノキが多いが、349はアスナロ、351はツガである。349の表面には柿渋が塗布されており、351にも黒色の付着物が若干みられる。おそらく同様に柿渋が塗布されていたものであろう。

**SD6032・6033出土遺物** (第114図) 10区のSD6033と12区のSD6032は一連の溝である可能性が高いため、両者をここで扱う。352～354は土師器、355～358は陶器である。356と357は同一個体と考えられるが、357には底がなく、井戸枠として製作されたものであろう。358は陶器であるが、立方体を呈

する。表面を燻しているが、2面は光沢がでるほどに磨かれている。一応、樽としておく。

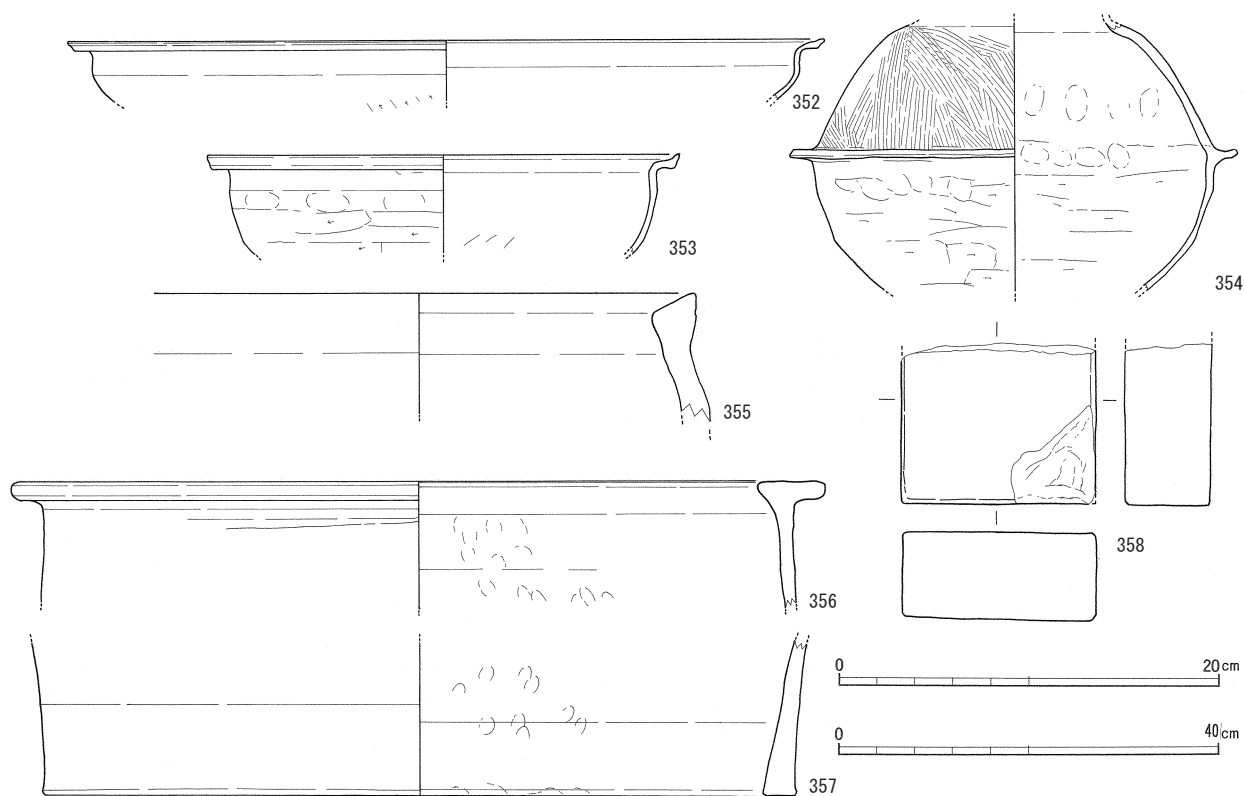
**SD6030出土遺物** (第115図) 土師器、陶器、磁器、瓦、木製品がある。359～362は土師器の皿、363～366は焙烙で、365・366の外面上には煤が付着し、使用の痕跡を示す。

367は陶器の蓋、368は椀、369は壺、370は土瓶としたが、小片のため不明確で、鍋や鉢類かも知れない。これらの陶器は鉄釉や灰釉が施されているが、体部下半から底部は露胎となる。371は陶器の挿鉢、372～374は陶器の甕であるが、373・374は小片からの図化のため正確を欠く。

375は磁器の椀としたが、口径に性格を欠き、もう少し口径が大きい皿とすべきかも知れない。376は軒平瓦、377は丸瓦、378は木製の箸で、377にはゴザ状圧痕がみられる。

**11区造成土出土遺物** (第115図) 土師器の鍋(379)、陶器の甕(381)、磁器の小椀(380)があるが、全体の形状が明確なものは380のみである。

**SD6031出土遺物** (第116図) 382は土師器の皿、383は鍋、384は陶器の蓋、386は椀である。386は内



第114図 第6次調査SD6032・6033出土遺物 (356・357=1:8、他は1:4)

外面に黄瀬戸釉を施すが、体部下半から底部外面は  
 錆釉となる。385は磁器であるが、瓶の蓋であろう  
 か。上面に文様が赤色で描かれる。387も磁器で、  
 底裏銘と思われる二重方形枠がある。388は木片で  
 あるが、先端が炭化している。火つけ木と思われる。  
**12区造成土出土遺物**（第116図） 図示できたもの  
 は陶器と磁器である。389・390・393は陶器の甕、  
 391・392は播鉢、394・395は磁器の小椀である。397  
 は花と花束のようなものを組み合わせたものを描き、  
 底部外面には小片のため不明ではあるが、吉祥文字  
 と思われる。

**S Z 6035出土遺物**（第116図） 図示できたものは  
 木製の底板（398）のみである。腐食が激しいが、  
 大型の桶の底板と思われ、木釘で固定されていたよ

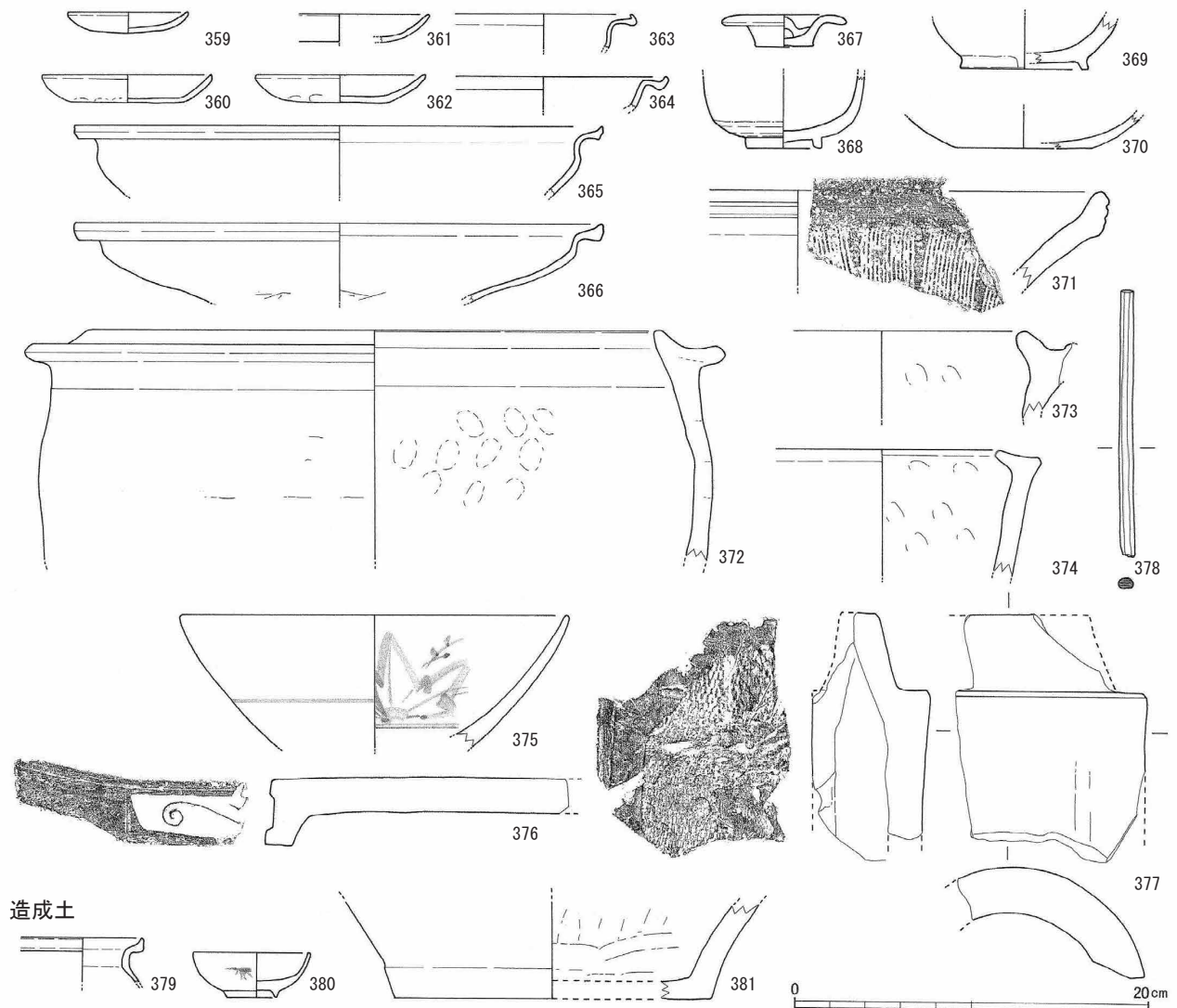
うである。

**S D 6043出土遺物**（第116図） 図示できたものは  
 陶器の皿（396）と加工木（397）である。396の見  
 込みは輪状に釉が禿ており、直接重ね焼のためと思  
 われる。397はノミで柄穴のような加工がされてい  
 るが、全体の形状が不明で用途も不明である。

**13区造成土出土遺物**（第116図） 整地層、攪乱土  
 として取り上げた遺物もあるが、出土層位が不明確  
 なため、全てここで扱う。399～404は陶器で、399  
 は拳骨形と呼ばれる特異な形態である。405～408は  
 磁器である。406は染付青磁椀で五弁花文はコンニャ  
 ク印判である。407の底部外面には「太明年製」と  
 記される。

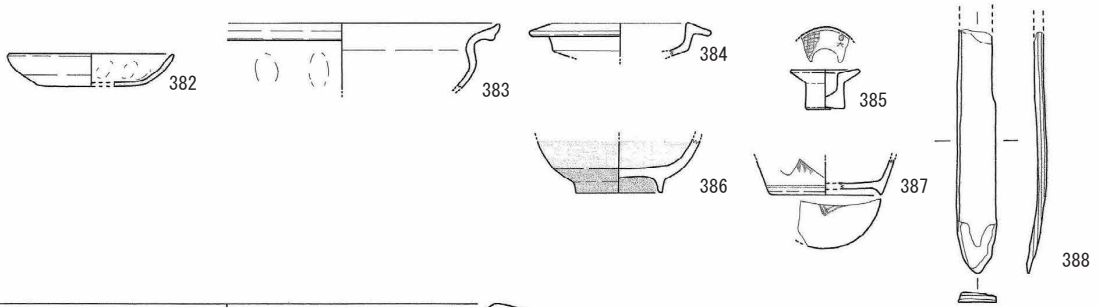
**S K 6036出土遺物**（第117図） 陶器（409～410）、

SD6030

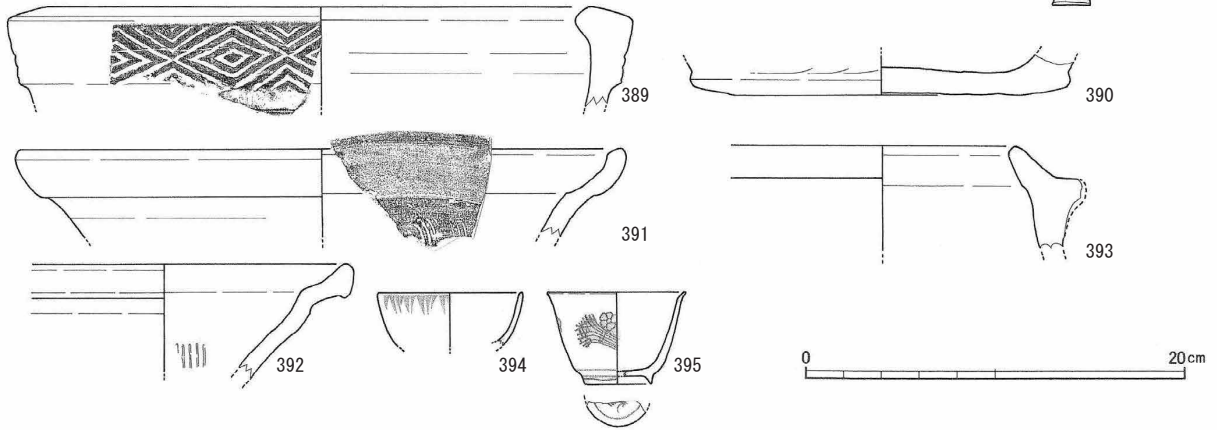


第115図 第6次調査11区出土遺物（1:4）

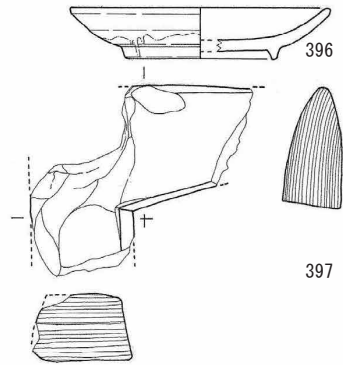
SD6031



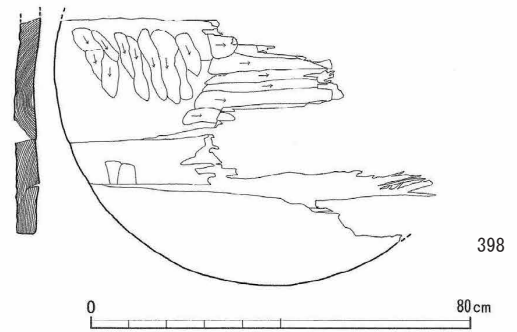
12区造成土



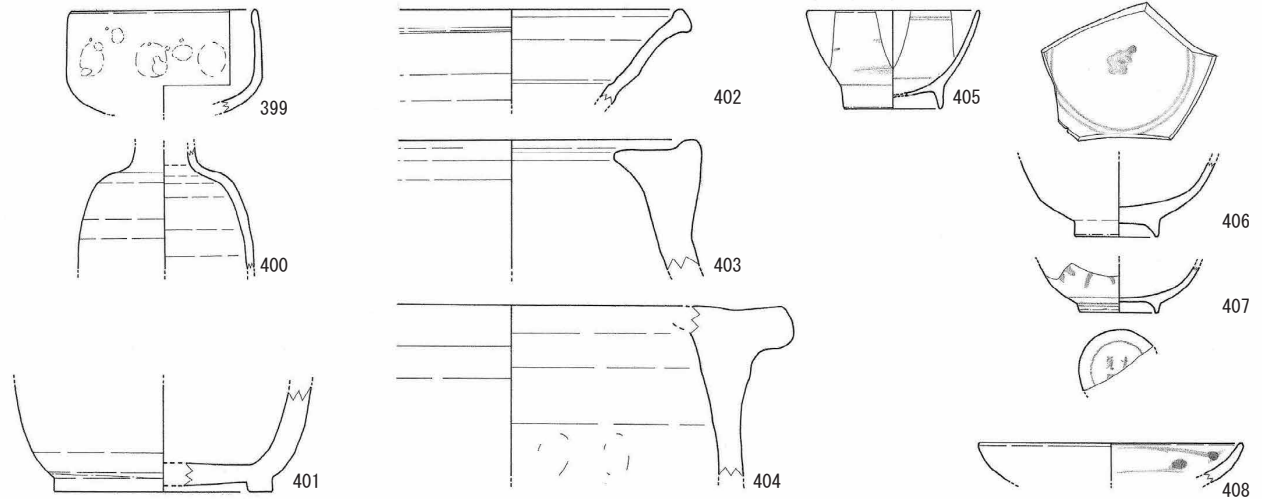
SD6043



SZ6035



13区造成土



第116図 第6次調査12区・13区出土遺物 (398=1:16、他は1:4)

磁器（411・412）、木製品（413・414）がある。陶器の底部は露胎となり、409は内外面に氷割文がみられる。412は底部にも文様があり蓋の可能性はあるが、器高が高いため椀としておく。413はヒノキの曲物の底板、414は短い棒状を呈する。アカガシ亜属の堅い材のため、栓としておく。

**S D 6037出土遺物**（第117図） 416は土師器の茶釜、415は皿、417は陶器の甕である。416の外面の煤は鏝以上に及んでいる。418は小片のため不明とせざるを得ないが、火鉢または火舎の類と推測される。雲気文または宝文を浮き彫りにする。

**14区灰褐色礫混細砂出土遺物**（第117図） 図示できたものは磁器の椀（419）のみである。外面に草文、底部に吉祥文字を描く。

**15区Pit2出土遺物**（第118図） 図示できたものは陶器の挿鉢（424）のみである。内外の泥漿は濃く、鉄釉状を呈する。

**S D 6038出土遺物**（第118図） 420は陶器の甕、422は磁器の椀を円盤に加工している。底部外面に描かれるのは吉祥文字であろうか。421は瓦質で注口状の形態であるが、内面の様子から閉じていたものと思われる。鬼瓦の一部かも知れない。

**S K 6039出土遺物**（第118図） 図示できたものは陶器（425～430）と磁器（431・432）である。425

は鉄釉に灰釉を水玉状態に化粧掛けしているように見えるが鉄釉の変色かも知れない。432の五弁花文はコンニャク印判による。

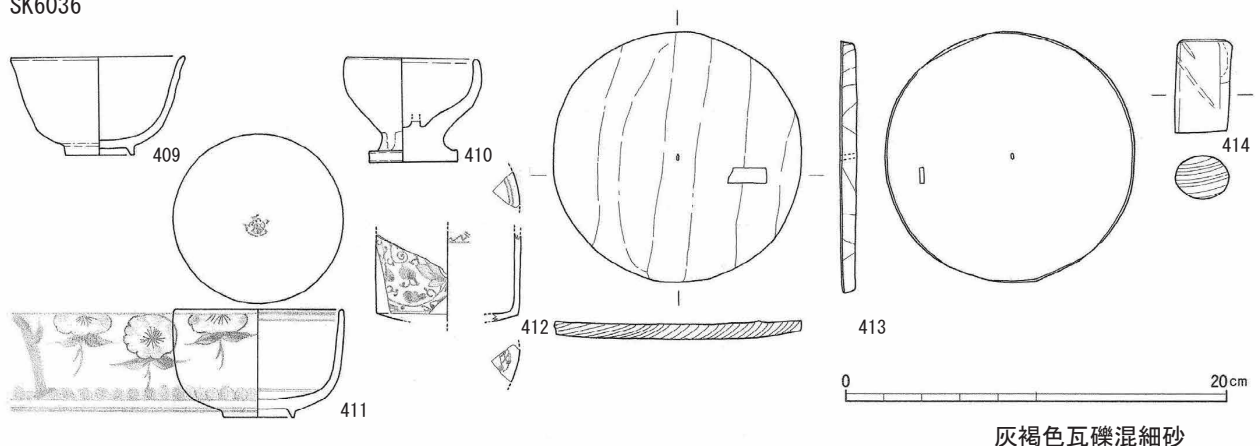
**S K 6040出土遺物**（第118図） 図示できたものは陶器の皿（423）のみである。高台の接地面以外は、灰釉が施される。

**S K 6056出土遺物**（第118図） 433・434は土師器の皿、陶器の椀（438）、鍋（435）、鉢（436・437）、磁器の椀（439～442）がある。435は行平鍋の底部であろうか。3方に小型の粘土塊が貼り付き、器の安定に寄与している。437は黄瀬戸釉に銅緑釉を化粧掛けする。438とともに内外面が氷割文を呈している。440は底部外面に「とや」と仮名書されるが、呉須釉の発色がなく、白濁色を呈している。

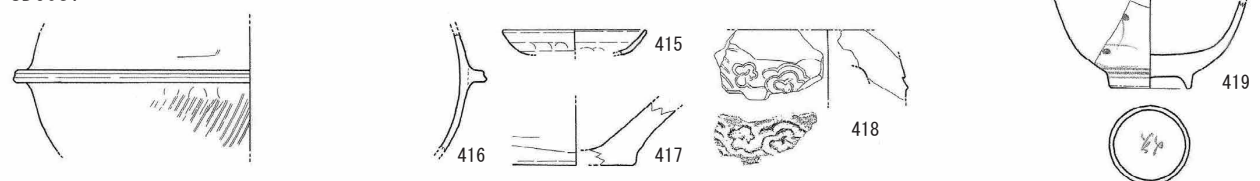
**15区近世整地層出土遺物**（第118図） 443は土師器の焙烙、446・447は陶器の皿、444・448は甕である。445は陶器で、小片のため不明確であるが、内部に厚く煤が付着することから火舎とした。口縁部に指による緩やかな刻目を施している。449・450は磁器で、449は変形文字を基にした絵柄を連続させる。450は染付青磁で、外面は二重方形枠に吉祥文字の変形を描く。

**15区近現代造成土出土遺物**（第118図） 451は陶器の甕、452は磁器の椀、453・454は皿である。454は

SK6036



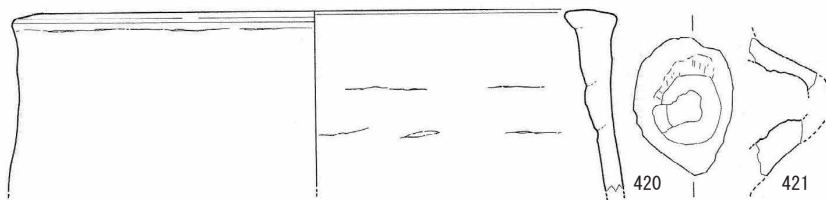
SD6037



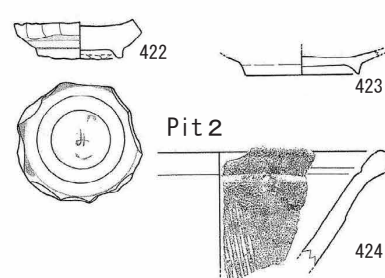
第117図 第6次調査14区出土遺物（1:4）



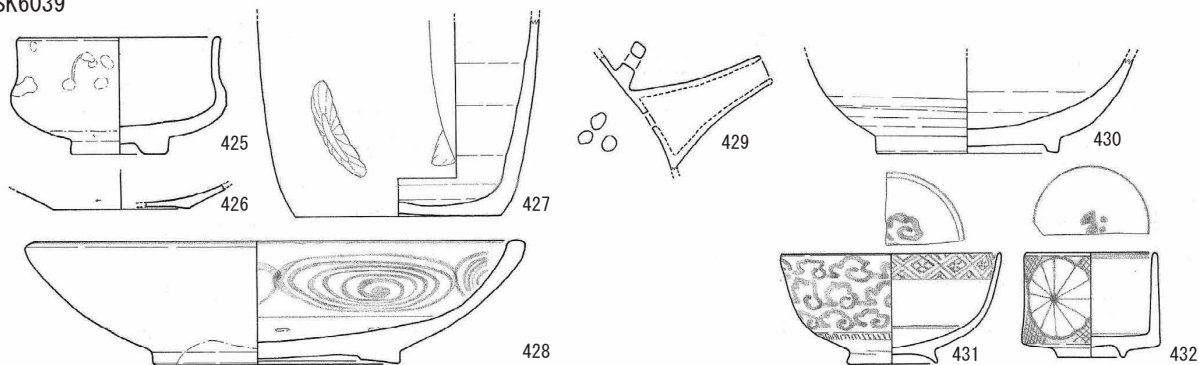
SD6038



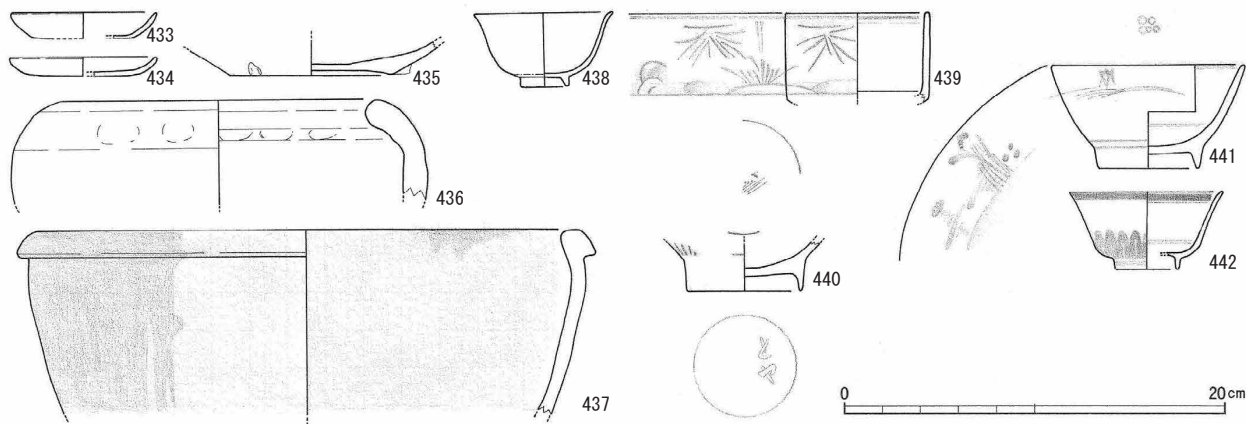
SK6040



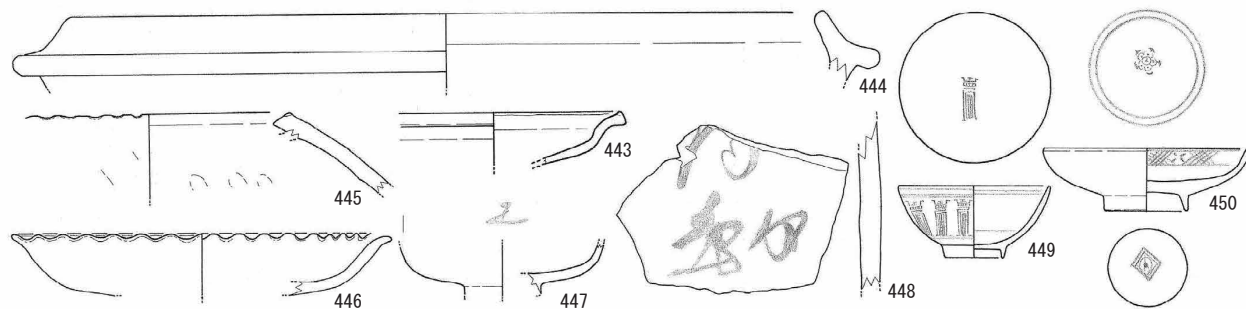
SK6039



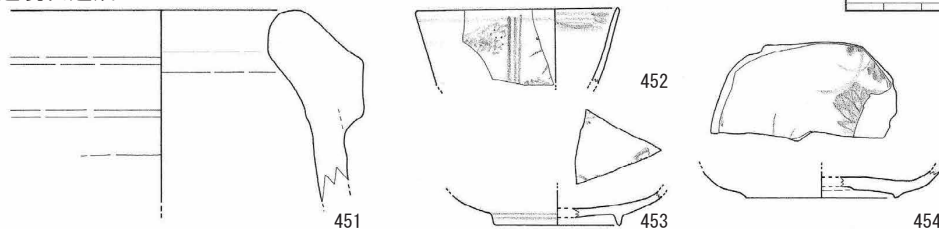
SK6056



近世整地層



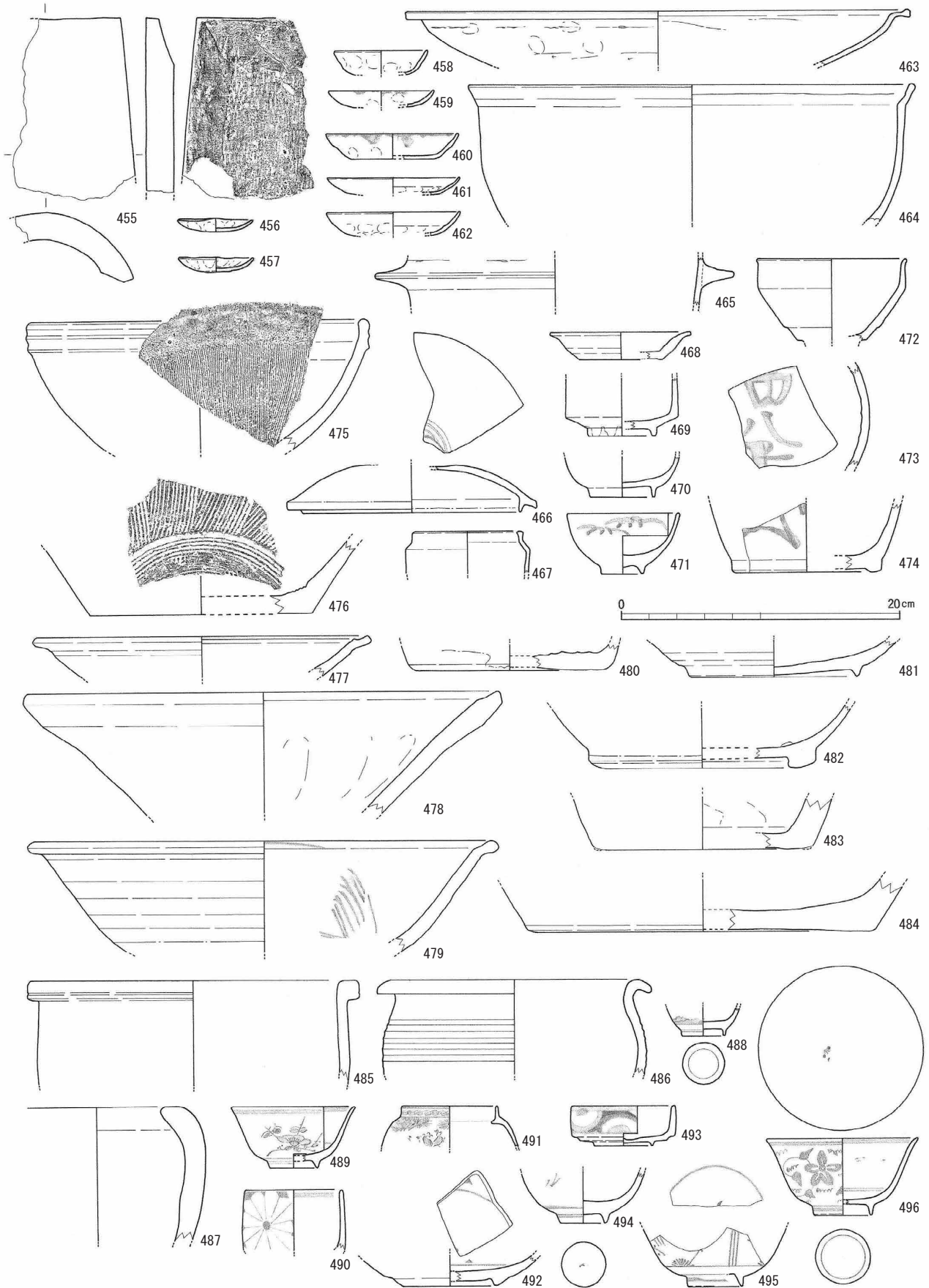
近現代造成土



第118図 第6次調査15区出土遺物 (444・445=1:6、他は1:4)

SK6044

包含層



第119図 第6次調査16区出土遺物① (1:4)

蛇ノ目凹型高台を呈する。

**S K 6044出土遺物** (第119図) 455は丸瓦、456・457は土師器の皿である。455には燻が施されず、酸化焼成で仕上げている。

**16区包含層出土遺物** (第119～120図) 各層から出土した遺物をここで扱う。458～462は土師器の皿で、459・460は口縁部が油煙の付着があり、灯明皿である。463は土師器の焙烙、464は鍋である。464は内外面に炭化物が付着するが、特に外面に厚く付着する。465は羽釜であるが、瓦質と思われる。

466は陶器の蓋であるが、内面は灰釉、外面は染付となる。467は陶器の壺、468・481は皿、469・470・472は椀、473・474は徳利、475・476は播鉢、477～480・482・484は鉢、483・486は甕、485・487は火鉢である。467は口縁上端部が露胎となり、468の内外面は氷割文を呈する。470は京焼風陶器と思われるが、山水文は描かれない。478の内面は使用による摩滅が激しい。482の内面にはトチンが付着し、480には別個体片が付着している。

471は青磁の椀としておく。釉の濃淡で草文を描く。488は磁器の猪口、489・490・494～496は磁器の椀で染付である。491は磁器の急須、492・493は皿である。492の内面は蛇ノ目釉剥ぎとなり、外面は高台接地面のみが露胎である。

497・499は瓦、498は砥石である。499は小片であるが、角椀伏間瓦と思われる。

**S K 6049出土遺物** (第121図) 図示できたものは陶器の皿(500)と磁器の猪口(501)である。500は鉄絵を描き透明釉を施す。やや時期が下るか。

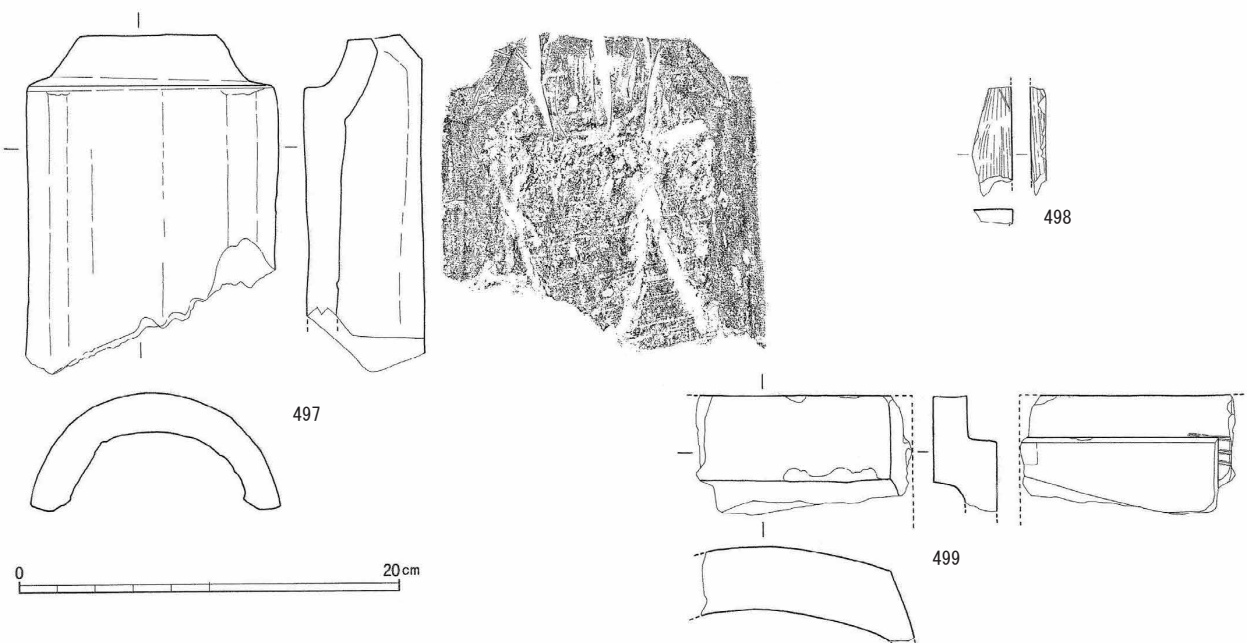
**S D 6050出土遺物** (第121図) 505は土師器の皿であるが、時期的に平安時代後半まで遡るか。506は陶器の鉢であるが、残存が劣悪である。507・508は磁器である。508は小型の壺で油壺か。509・510は丸瓦、511は小片のため不明な部分が多い。道具瓦の小片の可能性もあるが、椀瓦としておく。509にはゴザ圧痕があり、509は酸化焼成している。

**S K 6052出土遺物** (第121図) 502は土師器の皿である。口縁部に僅かに油煙が付着することから灯明皿と思われる。503は天目茶椀、504は軒平瓦で、503の底部は露胎である。

**17区造成土出土遺物** (第121図) 512・522は瓦質製品である。両者とも器形は不明であるが、512は火鉢と考えられる。522は袖瓦の形態に似るが、谷深が皆無で疑問である。祠等の床面であろうか。小さな穿孔があり、焼成後のものと思われる。この意味するところも不明である。後述する545と特徴が似る。

514・515は陶器である。513は円盤状の土製品で

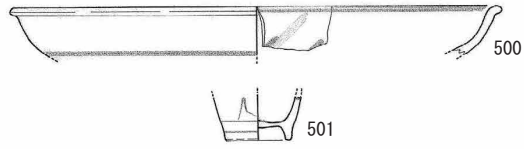
## 包含層



第120図 第6次調査16区出土遺物② (1:4)



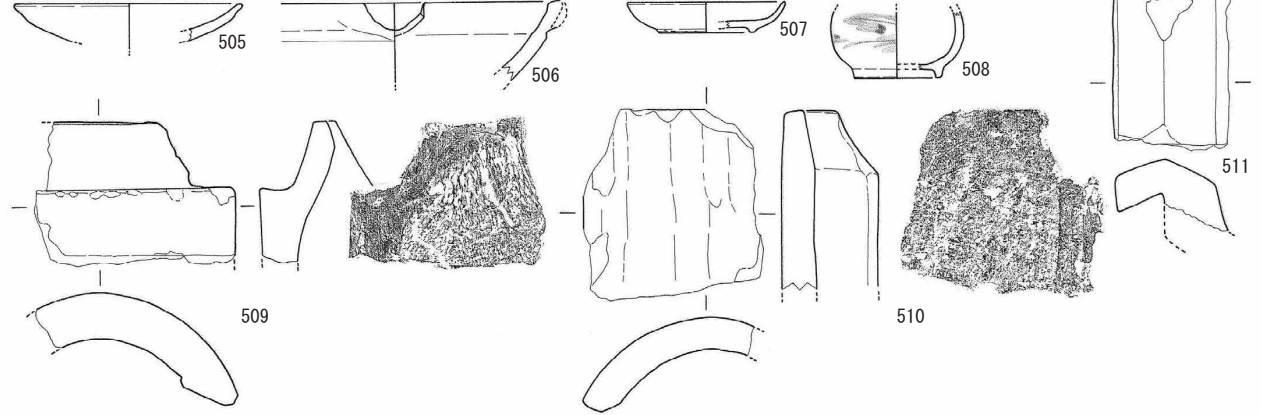
SK6049



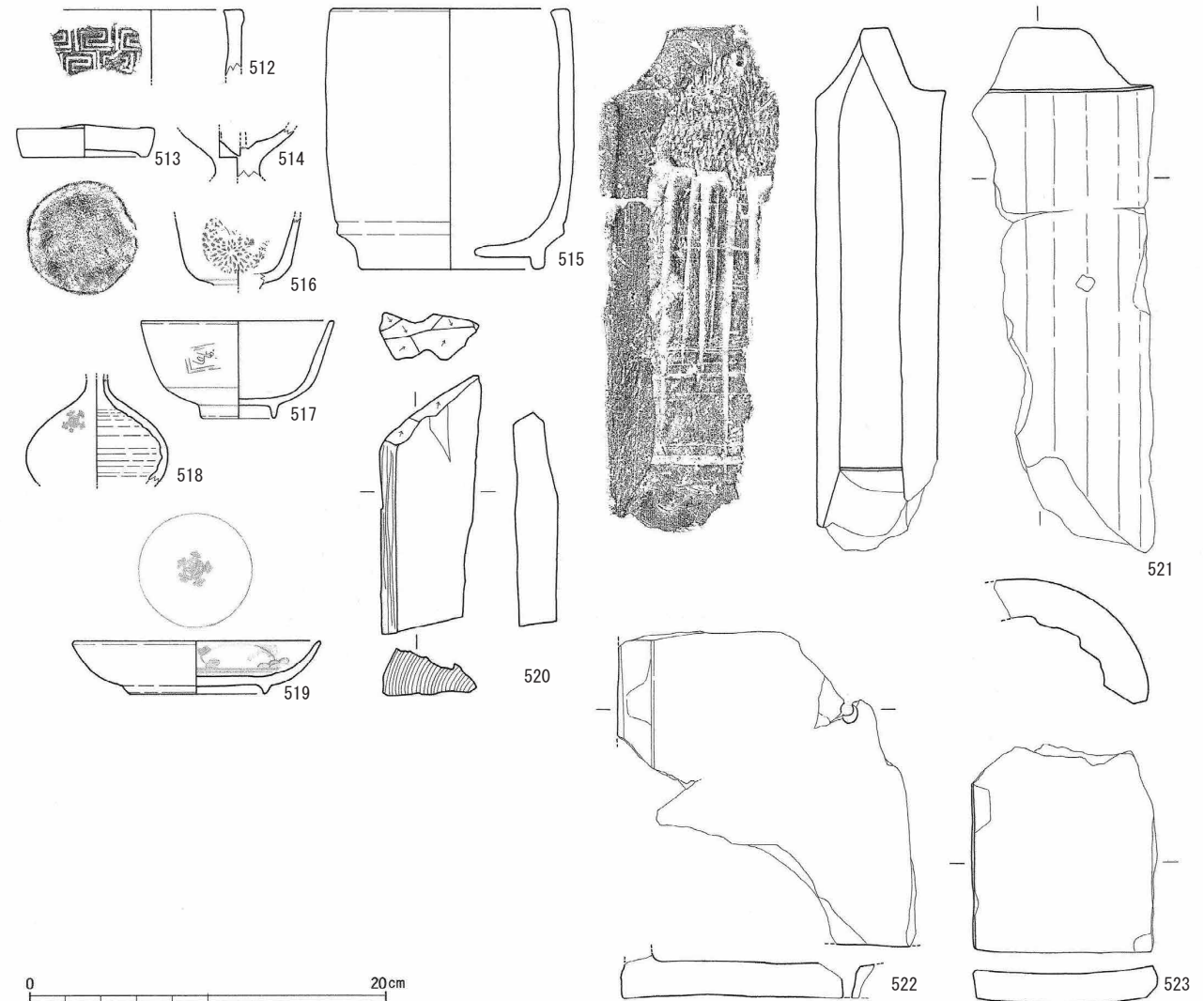
SK6052



SD6050



造成土



0 20cm

第121图 第6次調査17区出土遺物 (1:4)



ある。焼塩壺の蓋としておく。515は鉢であるが、後に底部を穿孔し、植木鉢に転用したものと思われる。

516～519は磁器である。518は肩部にコンニャク印判による五弁花文を5方に配置する。519の内面は蛇ノ目釉剥ぎを呈する。

520は木製の割材、521・523は瓦であるが、521の内面には角材状のタタキ痕が明瞭である。522は瓦質製品であるが、全体の形状は不明である。道具瓦の一種の可能性もあるが、穿孔が1ヶ所確認できる。

**SD6053出土遺物** (第122図) 524は土師器の焙烙、525～531は陶器である。532は瓦であるが小片のため不明な部分が多い。椀瓦片としておく。527は香

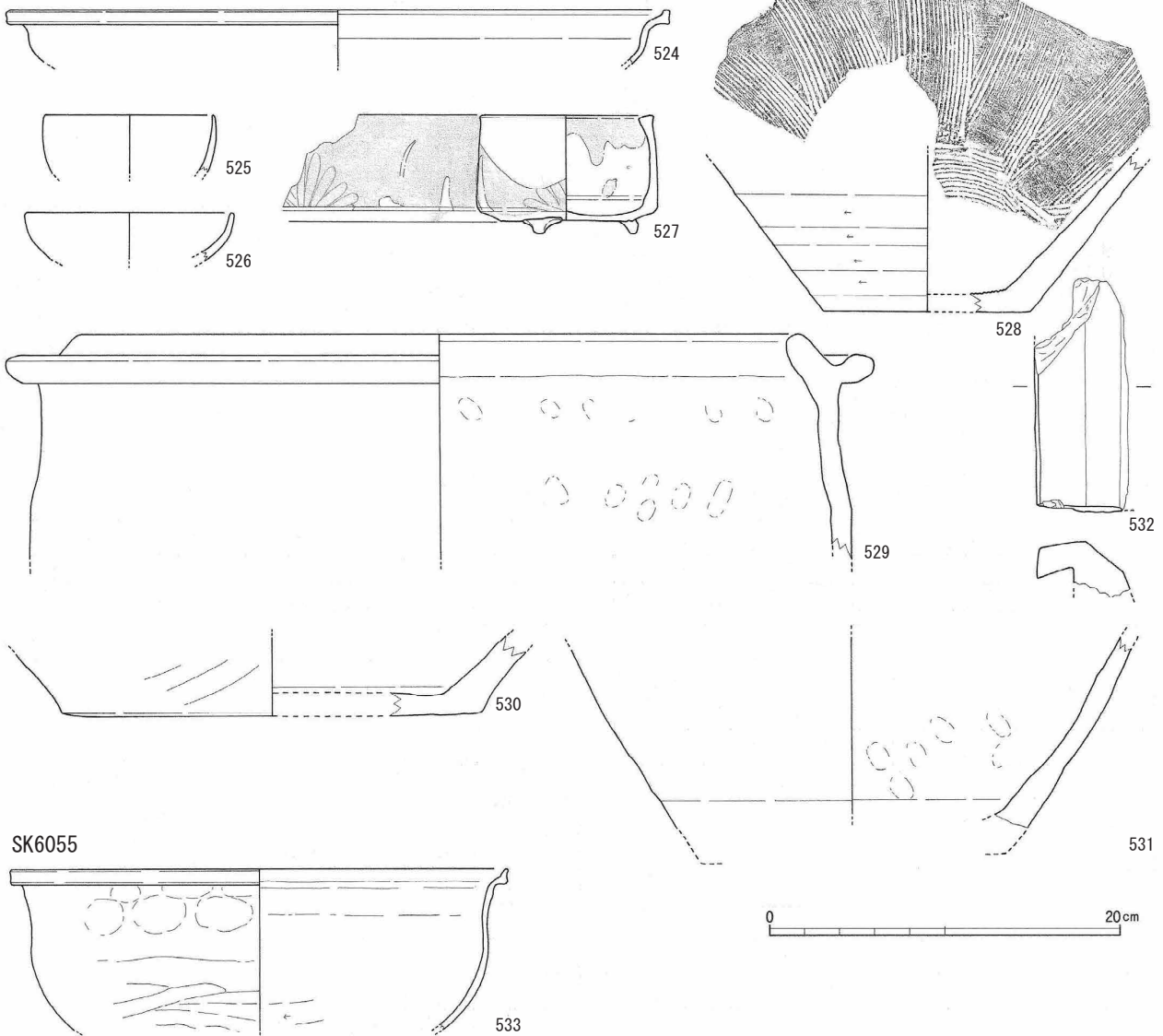
炉とした。外面に削り菊花文を施し、白泥を化粧掛けしている。

**SK6055出土遺物** (第122図) 図示できたものは土師器の鍋(533)のみである。調整にハケメは使用されず、外面に煤が付着する。

**18区整地盛土層他出土遺物** (第123図) 各層から出土した遺物を一括してここで扱う。534～541は陶器である。537と538は類似した形態であるが、537の内面には煤が厚く付着することから火舎とした。540は器壁が厚く、粗製の皿状の形態を呈するが、内面に厚く煤が付着する。皿としては不自然である。

542～544は磁器、546は瓦である。545も瓦質であるが、反りのない形状から瓦とすれば熨斗瓦の一種

SD6053



第122図 第6次調査18区遺構出土遺物 (1:4)

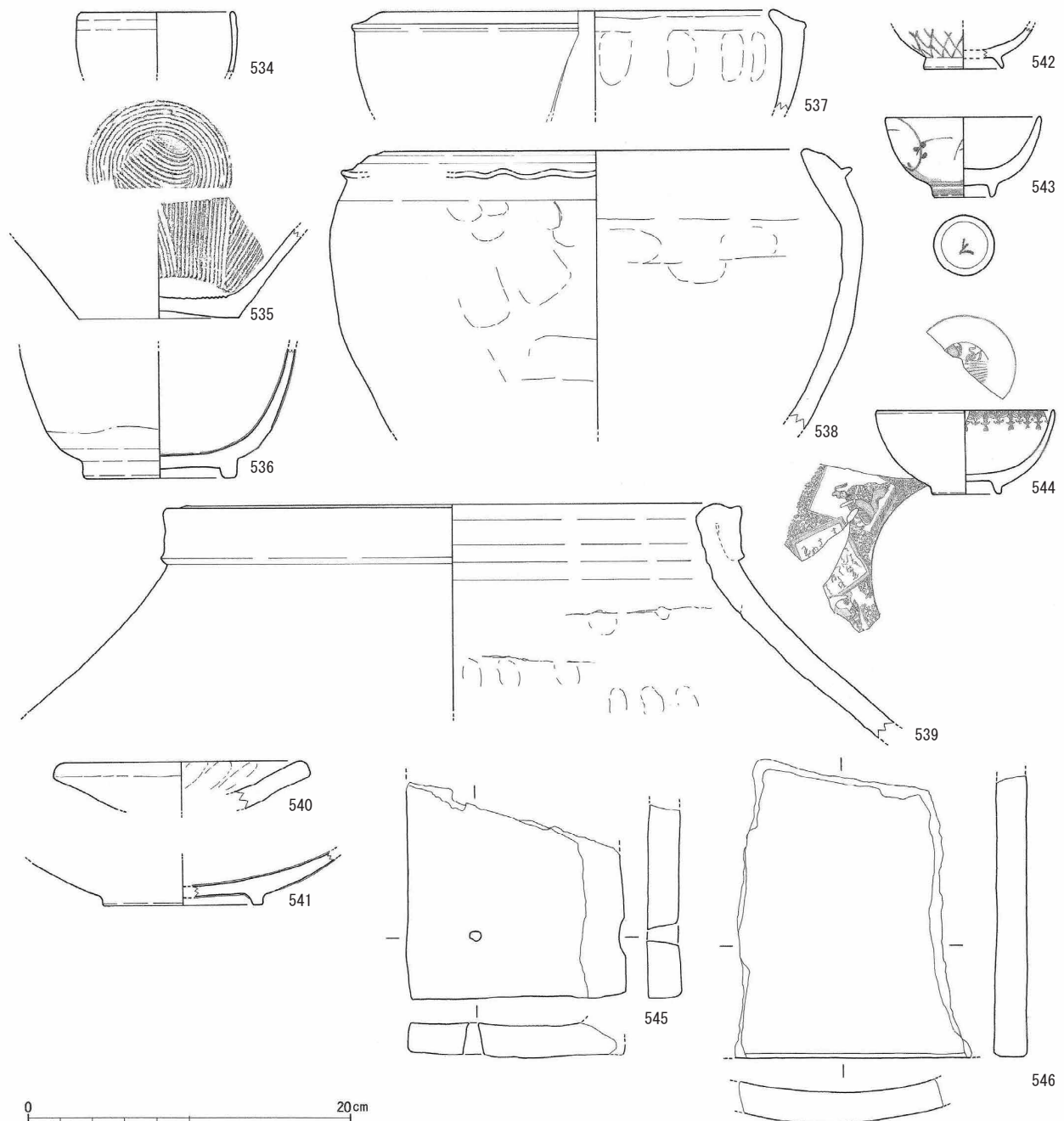
かも知れない。焼成後に穿孔されていることや形状が既述した522と共通する。

**S K6057出土遺物**（第124～125図） 磁器の椀皿類をはじめ比較的多くの遺物が出土したことに加え、残存度の高いものが多い。

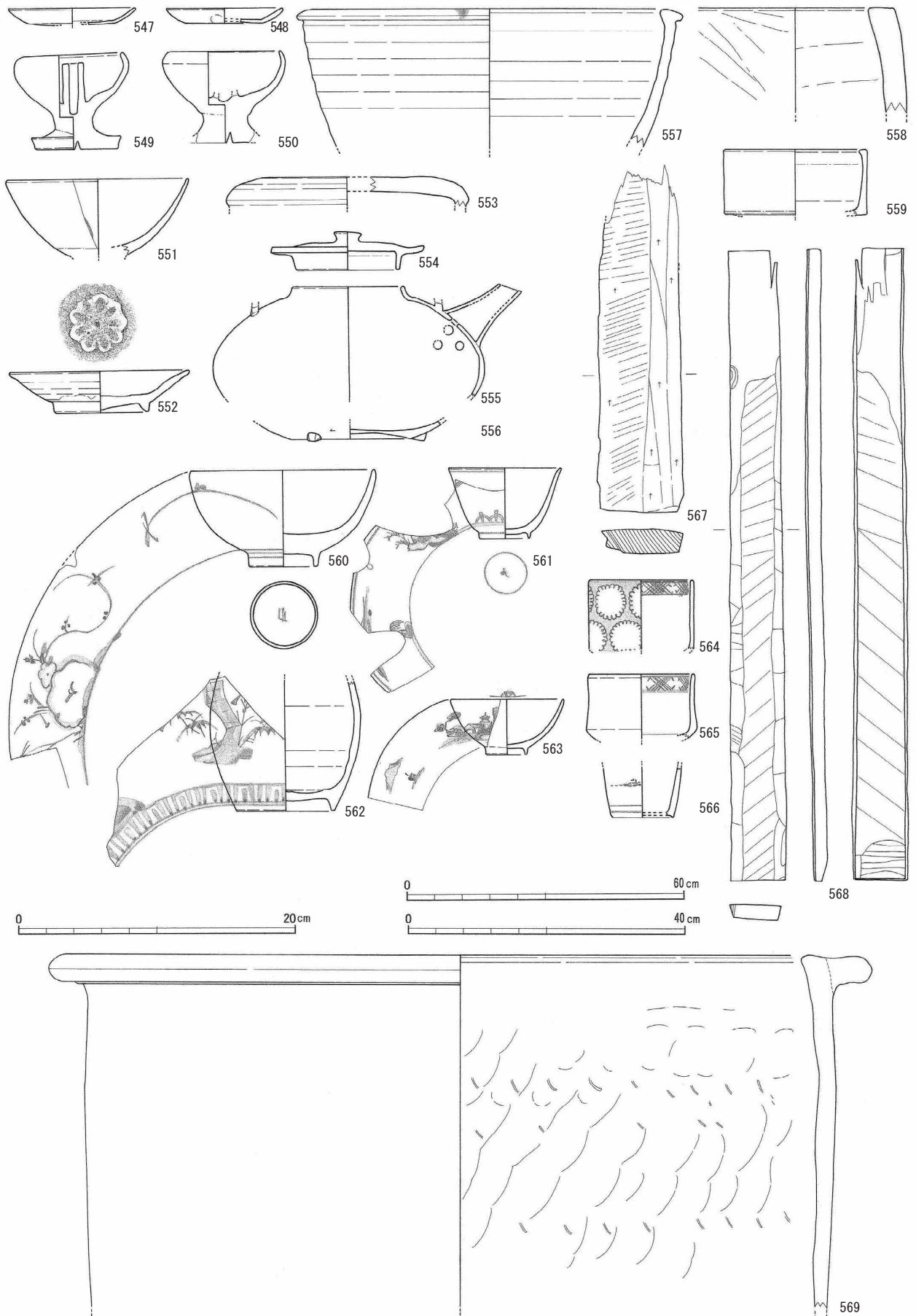
土師器は皿のみで547・548がある。油煙の付着はなく灯明皿に限定できない。

549・550・552～559は陶器である。553は蓋としたが、その場合、天井部外面が露胎となり疑問である。

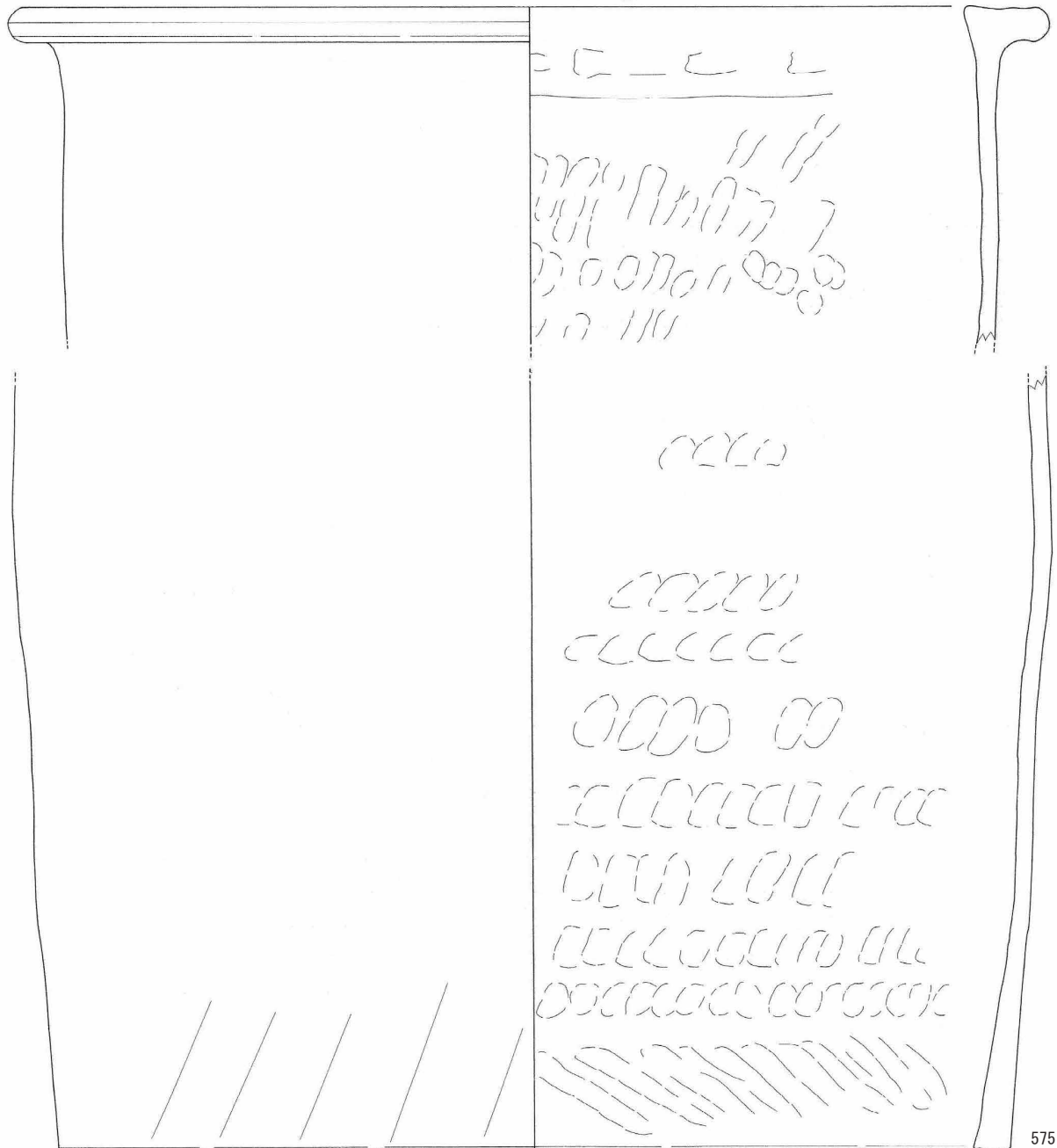
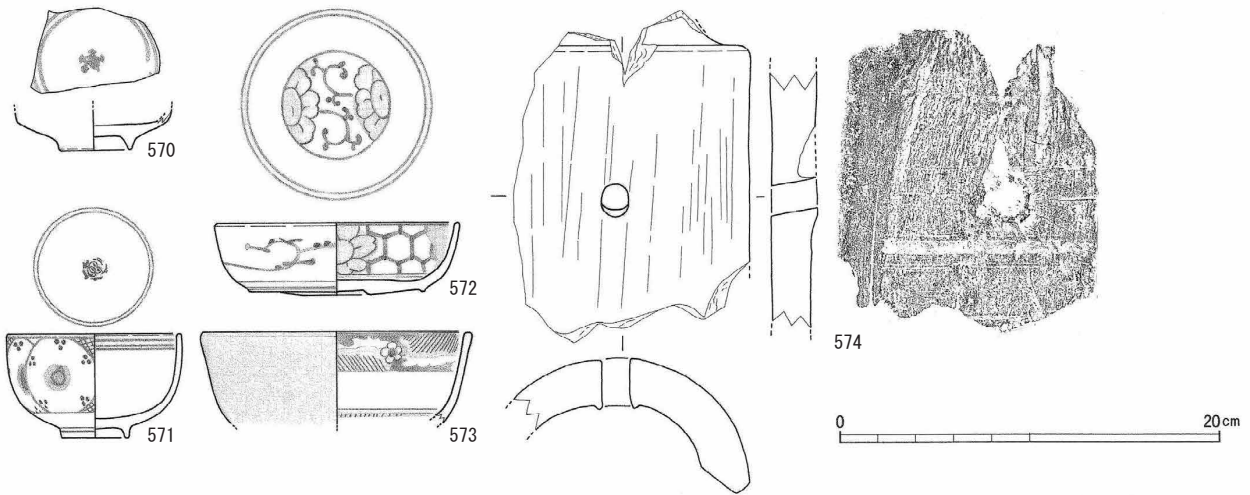
壺等の底部の可能性もある。552は見込みに削り菊花文を施し、蛇ノ目釉剥ぎを呈する。569・575も陶器で、常滑産と考えられる。575は口縁部片と体部下半片が接合できなかったが、同一個体と思われる。両者とも甕と類似した形態であるが、575で明白のように底部が無い。口縁部に突出する縁帯も甕に類似するが、上端部は水平に仕上げられている。おそらく積み重ねて井戸枠として機能するものと考えられる。



第123図 第6次調査18区整地層他出土遺物 (1:4)



第124図 第6次調査SK6057出土遺物① (567=1:12、568=1:8、他は1:4)



第125図 第6次調査SK6057出土遺物② (1:4)



560～566・570～573は磁器で、565・570・573は染付青磁である。確認できるものは全て肥前系と思われる。570の五弁花文はコンニャク印判による。551は陶器とするには胎土が緻密で、白磁としたが、灰釉または透明釉を施した陶器の可能性もある。葉文の一部が残存する。

574は丸瓦、567・568は部材である。574の釘穴は焼成前に設けられ、内面にはゴザ圧痕が残る。

**S D 6058出土遺物** (第126図) 576は土師器の焙烙、577は茶釜、578は陶器の皿である。578の内面には鉄釉が泥漿風に施される。

**S K 6059出土遺物** (第126図) 図示できたものは陶器と瓦で、土師器や磁器はない。579～581は陶器の甕または鉢である。いずれも鉄釉を泥漿風に施す。580・581の内面にはトチン痕が残る。

582～585は瓦である。燻が施されるが、584は一部燻が不良で酸化焼成している。

**S D 6060出土遺物** (第127図) 上下2層に分かれ、上層には近代に下るものを含む。一方、下層には中

世に遡る遺物が散見される。

586は図示できた唯一の土師器で、鍋とした。589～592は瓦質土器で、589は内外面に厚く煤が付着する。590と591は同一個体の可能性がある。

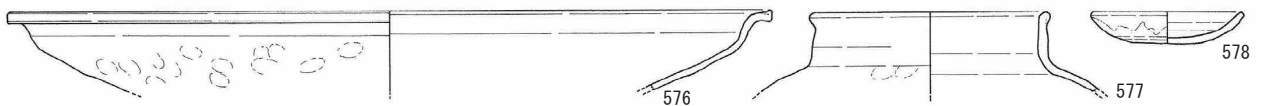
587・588・593～605は陶器である。595の外表面には煤が付着する。土瓶か鍋の底部で、行平鍋の底部かも知れない。599の蓋は灰釉が施されているが、釉が薄いため僅かに白色を呈するに止まる。

606～613は磁器、614は青磁、615は軒丸瓦、616は丸太材である。608は小片のため詳細は不明であるが赤色で文様を描く。他は、614を除き全て染付であるが、607は外表面に赤色を加えている。

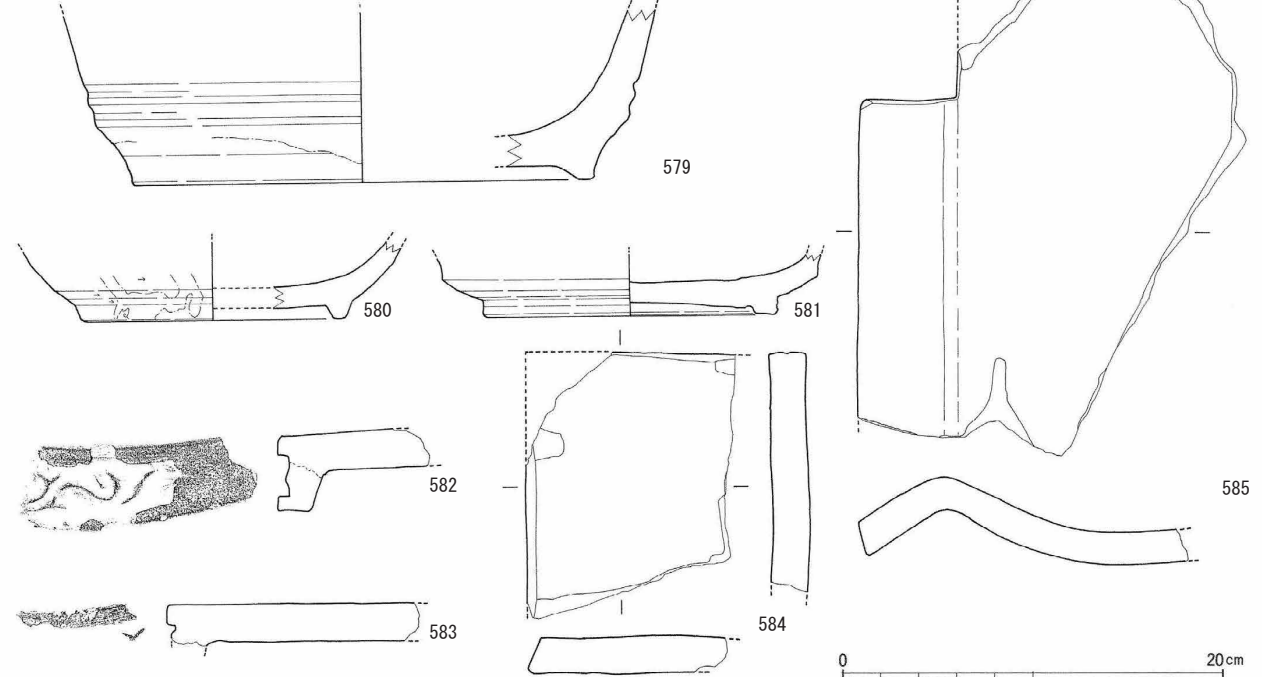
**S K 6061出土遺物** (第128図) 617は瓦質土器の焜炉、618は陶器の甕、620・621は磁器である。磁器は両者とも肥前系で、620には「右」と底裏銘がある。

**20区包含層出土遺物** (第128図) 図示したものは627を除き陶器である。627は磁器の皿で、輪花を設けている。626は鉄絵で蔓草を描くが、花は呉須釉、実は白泥により彩色している。

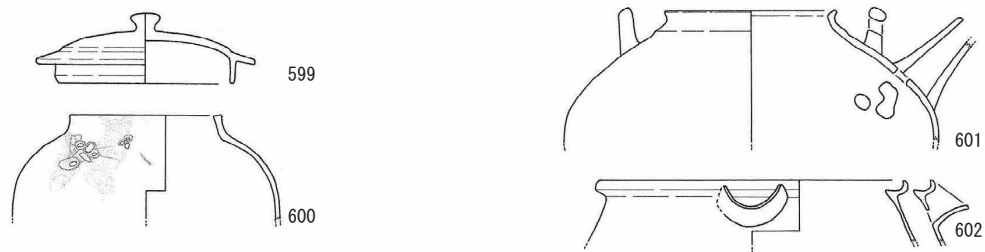
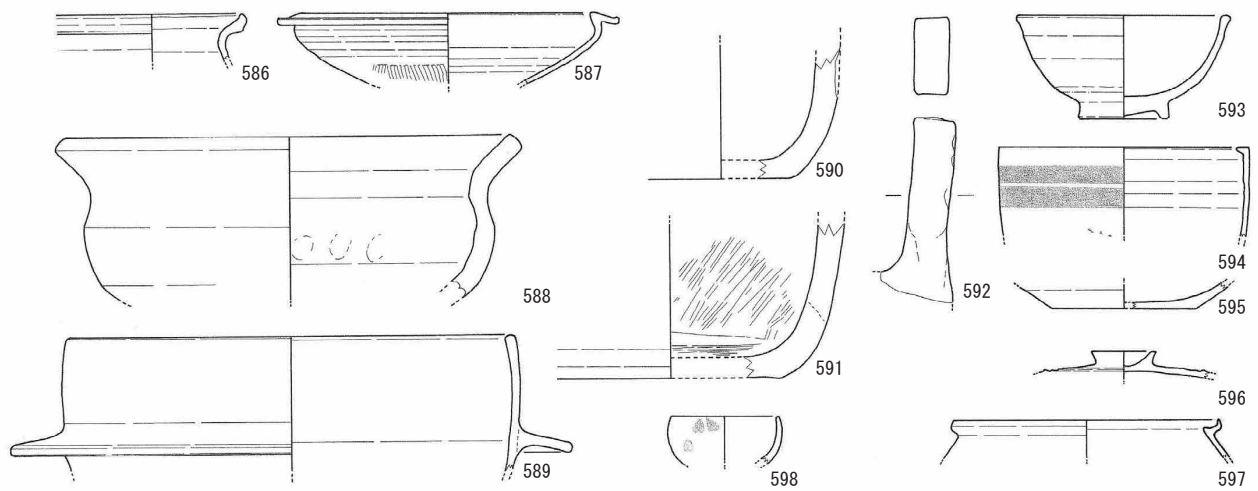
SD6058



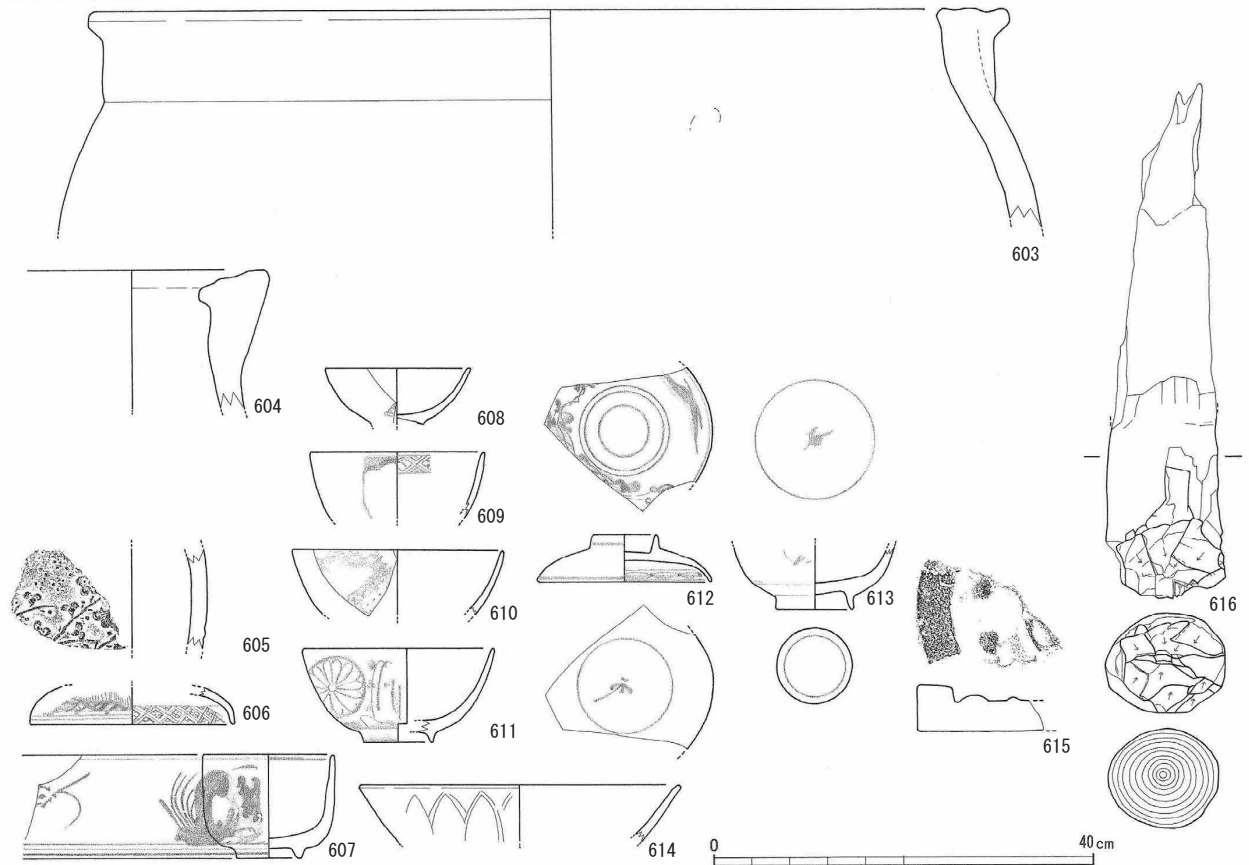
SK6059



第126図 第6次調査SD6058・SK6059出土遺物 (1:4)

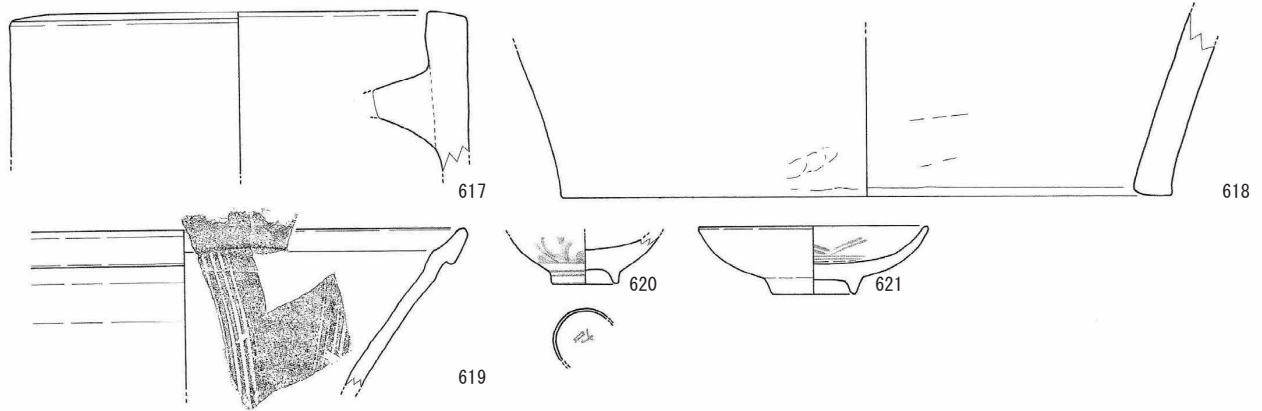


0 20cm

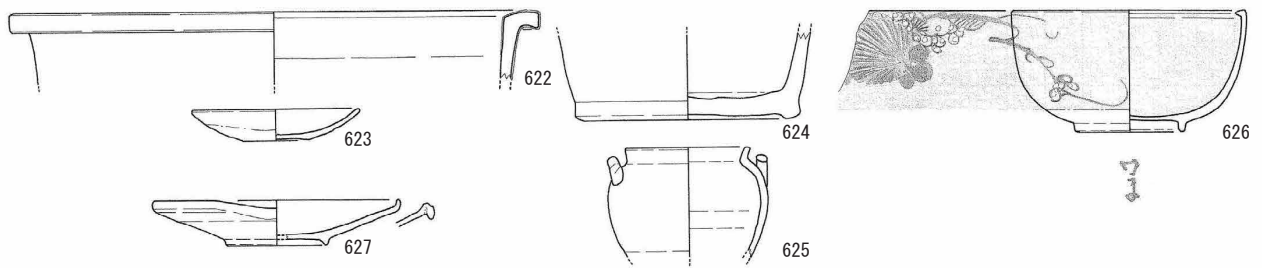


第127図 第6次調査SD6060出土遺物 (616=1:8、他は1:4)

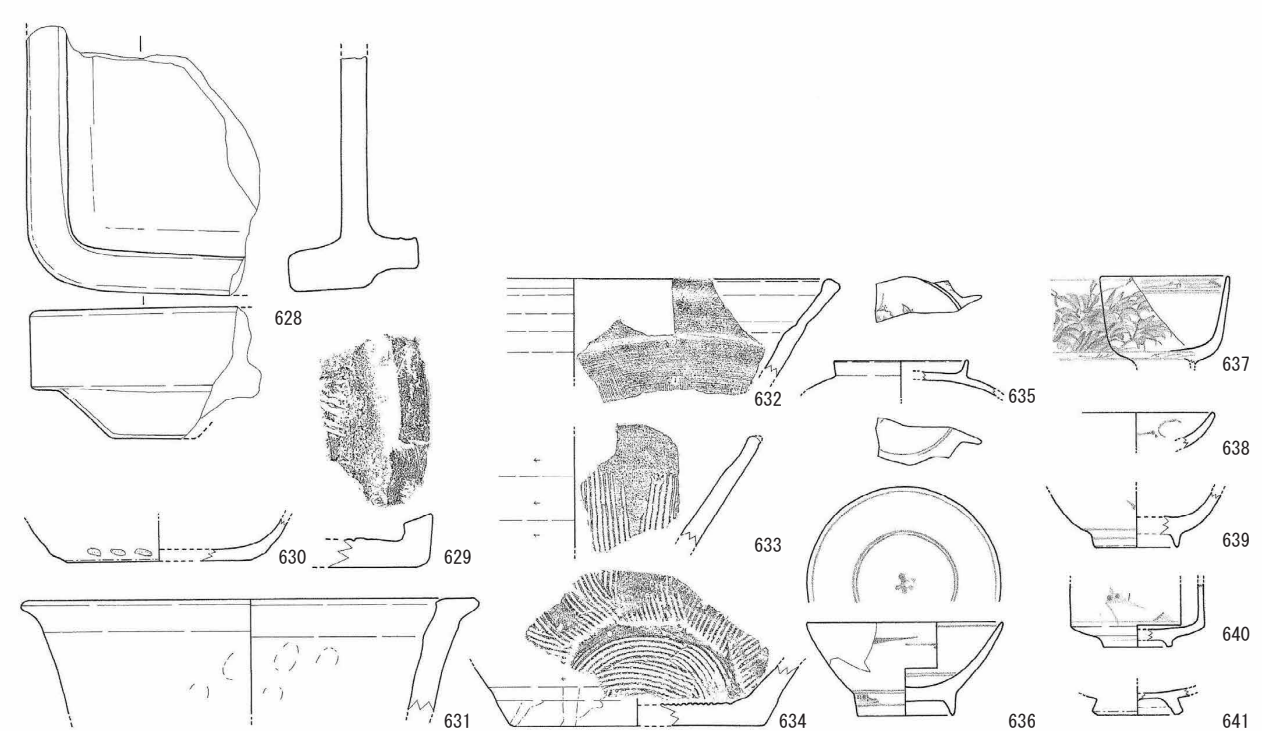
SK6061



20区包含層

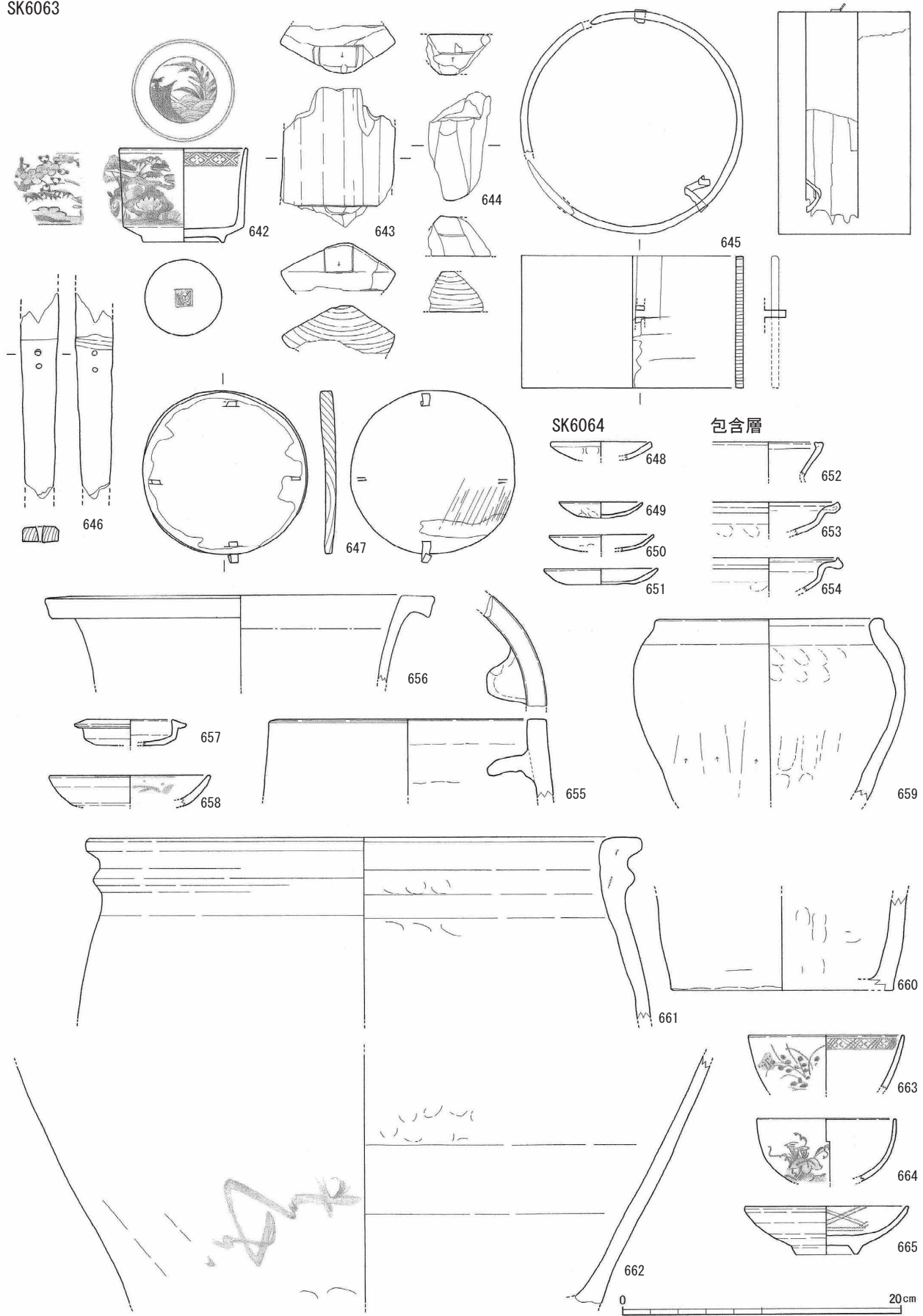


21区造成土



第128図 第6次調査20区・21区出土遺物 (1:4)

SK6063

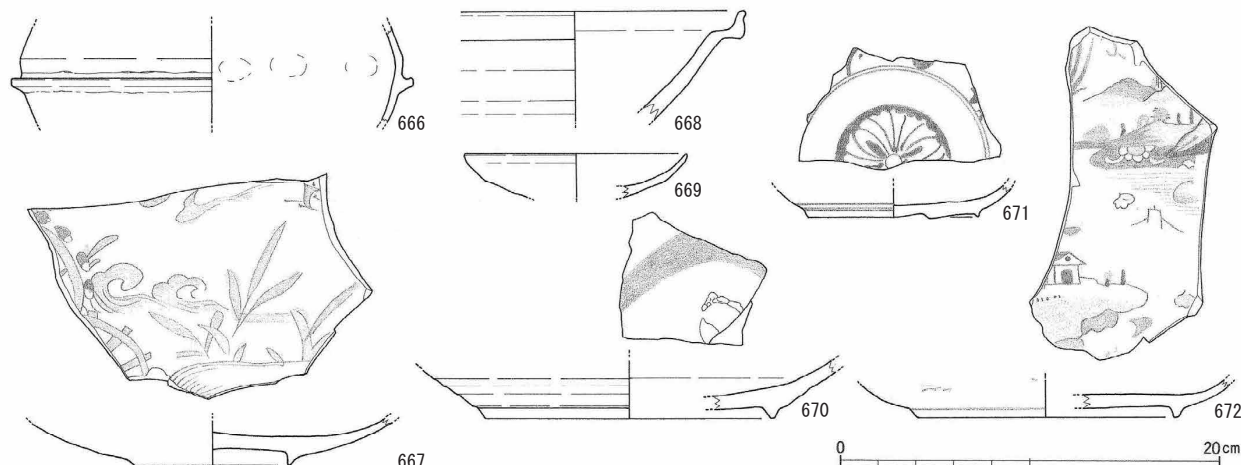


第129図 第6次調査22区出土遺物 (1:4)



近世造成土

近代造成土



第130図 第6次調査23区出土遺物 (1:4)

21区造成土等出土遺物 (第128図) 図示できたものは628を除き陶器と磁器である。628は瓦質製品である。方形の皿状を呈するものと推測され、各隅に長方形の脚が付くものと推測できる。

629は陶器甕の底部を呈するが、剥離痕があり本来の形状は不明である。底部片とした場合には、外面が平滑に仕上げられており疑問である。逆転して蓋の可能性もあるが確証を得ない。630～634・641は陶器で、椀 (641)、壺 (630)、鉢 (631)、挿鉢 (632～634) があるが、小片のため不明確なものも多い。

635～640は磁器の椀皿類であるが、637は後世に下るものである。636の五弁花文はコンニャク印判で施される。

**S K 6063出土遺物 (第129図)** 642は磁器の椀、643～647は木製品である。642は、35m離れた21区と22区の破片が接合したものである。底裏銘は、二重方形枠に草書体の「福」を示したものである。木製品の内、645・647は曲物であるが、他は加工材の小片である。646は木釘で何かに固定されていたものである。

**S K 6064出土遺物 (第129図)** 図示できたものは土師器の皿 (648) のみであるが、小片のため詳細

は不明である。

22区包含層出土遺物 (第129図) 649～651は土師器の皿、652は鍋、653・654は焙烙である。皿の口縁端部、鍋等の外面に炭化物の付着は認められず、使用の痕跡は顕著でない。

655は瓦質土器、656～662は陶器である。655は小片ではあるが、瓶掛け状の突起があることから焔炉とした。658は赤褐色の発色で山水文を描き、662の体部外面には草書体の墨書がある。甕が横倒しの状態で書かれたものと思われ、風化により薄くなっているものの3文字程度確認できる。

663～665は磁器の椀皿類である。663・665は草文を描くが、664はアサガオを基にしている。665の二重格子文は淡緑色の発色で、蛇ノ目釉剥ぎを呈する。

23区近世造成土出土遺物 (第130図) 666は土師器の茶釜、667は磁器の皿である。667は当遺跡出土の中では古相を示すもので、17世紀中頃以前に遡る。

23区近代造成土出土遺物 (第130図) 668は播目が確認できないが、小片のためと思われ挿鉢とした。669・670は陶器の皿、671・672は磁器の皿である。671は染付であるが、発色不良で濃緑色の絵柄を呈する。672は染付に赤色を加えているが、近代に下るものである。 (森川)

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	012-02	土師器	皿	1区		SD6001	3/12	9.2	6.4	1.1	灰褐 7.5YR6/3	口唇部に煤付着。
2	012-05	土師器	皿	1区		SD6001	口縁部 4/12	9.2	—	1.4	にぶい橙7.5YR7/4	
3	012-01	土師器	皿	1区		SD6001	2/12	9.2	6.2	1.3	橙 7.5YR7/6	口縁部が淡茶色に変色。
4	012-06	土師器	皿	1区		SD6001	口縁部 2/12	10.4	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	外面に煤付着。
5	012-03	土師器	皿	1区		SD6001	口縁部 2/12	10.8	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
6	012-04	土師器	皿	1区		SD6001	口縁部 1/12	11.8	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
7	012-07	土師器	焙烙	1区		SD6001	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	外面に煤付着。
8	012-09	土師器	焙烙	1区		SD6001	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい橙5YR7/4	外面に煤付着。
9	012-08	土師器	焙烙	1区		SD6001	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	外面に煤付着。
10	012-10	土師器	焙烙	1区		SD6001	口縁部 1/12	28.0	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	外面に煤付着。
11	013-01	土師器	焙烙	1区		SD6001	口縁部 1/12	34.0	—	—	にぶい褐7.5YR6/3	外面に煤付着。
12	013-02	土師器	焙烙	1区		SD6001	口縁部 1/12	35.2	—	—	にぶい黄橙10YR7/2	外面に煤付着。
13	013-03	土師器	茶釜	1区		SD6001	口縁部 3/12	9.8	—	—	黄灰2.5Y5/1	内面黒変。
14	014-01	土師器	羽釜	1区		SD6001	口縁部 1/12	26.0	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	鏝以下に煤付着。
15	018-01	瓦質土器	風炉	1区		SD6001	口縁部 1/4	17.2	—	—	灰N6/	16と同一個体？
16	018-02	瓦質土器	風炉	1区		SD6001	底部 5/12	—	18.0	—	灰N4/	15と同一個体？内面に付着物あり。
17	016-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	1区		SD6001	底部 完存	—	高台 4.2	—	灰白5Y8/2	透明釉＋呉須釉。
18	016-06	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	1区		SD6001	3/12	10.9	高台 6.2	3.0	灰白5Y8/1	透明釉＋呉須釉。
19	016-04	陶器 (瀬戸・美濃)	湯呑	1区		SD6001	2/12	10.4	高台 5.4	6.1	灰白2.5Y8/2	透明釉＋呉須釉。
20	015-06	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	1区		SD6001	口縁部 2/12	9.2	—	—	灰白5Y8/1	柿釉。
21	016-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	1区		SD6001	11/12	11.4	高台 4.4	5.7	灰白2.5Y8/1	鉄釉と灰釉の塗り分け。
22	016-01	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	1区		SD6001	口縁部 2/12	10.2	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉＋柿釉の化粧掛け。
23	016-07	陶器 (肥前)	皿	1区		SD6001	底部 2/12	—	高台 4.6	—	灰白5Y8/1	灰釉。京焼風陶器。印銘「木下弥」。
24	015-03	陶器	仏飯具	1区		SD6001	底部 10/12	—	高台 4.5	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
25	016-03	陶器	湯呑	1区		SD6001	底部 12/12	—	高台 3.5	—	灰白5Y8/1	鉛釉。
26	015-01	陶器	皿	1区		SD6001	口縁部 2/12	31.2	—	—	褐灰10YR6/1	灰釉。白泥によるハケメ。
27	015-05	陶器	火入	1区		SD6001	底部 2/12	—	高台 9.6	—	灰白5Y8/1	透明釉。
28	065-01	陶器	皿	10区		SD6001	7/12	18.4	高台 5.8	5.3	灰白2.5Y8/2	灰釉。
29	064-04	陶器	火鉢	1区		SD6001	口縁部 2/12	12.0	—	—	褐灰7.5YR4/1	
30	010-02	陶器 (常滑)	甕	1区		SD6001	口縁部 1/12以下	—	—	—	明褐灰5YR7/1	
31	014-02	陶器 (常滑)	甕	10区		SD6001	口縁部 1/12	28.8	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	
32	010-01	陶器	甕	1区		SD6001	口縁部 4/12	37.6	—	—	橙2.5YR6/6	
33	065-02	陶器 (肥前)	鉢	10区		SD6001	底部 9/12	—	高台 8.6	—	明赤褐2.5YR5/6	鉄釉＋白土化粧。
34	064-06	陶器	鉢	10区		SD6001	底部 10/12	—	高台 7.2	—	灰白5Y8/1	灰釉。
35	072-02	陶器 (常滑)	甕	10区		SD6001	底部 3/12	—	13.0	—	にぶい赤褐5YR5/4	
36	011-02	陶器	風炉	1区		SD6001	底部 8/12	—	19.9	—	灰黄2.5Y7/2	
37	011-01	陶器 (瀬戸)	鉢	1区		SD6001	口縁部 1/12	23.8	—	—	灰白2.5Y7/1	鉄釉。
38	015-02	陶器	鉢	1区		SD6001	口縁部 2/12	16.7	—	—	灰白2.5Y8/1	
39	011-03	陶器 (常滑)	捏鉢	1区		SD6001	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい赤褐5YR5/3	
40	066-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	10区		SD6001	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/2	播目16条。
41	006-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区		SD6001	3/12	20.8	10.2	7.4	灰白2.5Y8/2	播目18条。
42	007-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区		SD6001	底部 4/12	—	13.6	—	にぶい赤褐5YR4/3	播目14条。
43	008-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区		SD6001	底部 完存	—	12.8	—	暗褐7.5YR3/3	播目15条。
44	009-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区		SD6001	2/12	32.8	13.8	13.8	にぶい赤褐2.5YR4/3	播目18条。
45	007-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区		SD6001	底部 5/12	—	13.6	—	暗赤褐5YR3/2	播目19条。
46	006-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区		SD6001	底部 6/12	—	13.8	—	灰黄2.5Y7/2 にぶい赤褐5YR4/3	播目18条。
47	064-07	磁器 (肥前)	椀	10区		SD6001	口縁部 1/12	11.2	—	—	白9/	染付。外面に山水。
48	017-03	磁器	湯呑	1区		SD6001	口縁部 1/12以下	9.2	—	—	白9/	透明釉＋緑釉等。
49	017-06	磁器 (肥前)	椀	1区		SD6001	底部 4/12	—	高台 3.9	—	灰白N8/	染付。外面に草木。
50	065-04	磁器 (肥前)	皿	10区		SD6001	4/12	9.4	高台 4.0	3.3	白9/	染付。外面に幾何学文。
51	017-01	陶器 (肥前)	椀	1区		SD6001	底部 7/12	—	高台 4.8	—	灰白5Y8/2	灰釉。京焼風陶器。内面に山水。
52	017-05	磁器 (肥前)	猪口	1区		SD6001	口縁部 2/12	6.7	—	—	白9/	染付。外面に松葉。
53	017-04	磁器 (肥前)	蓋	1区		SD6001	底部 1/12以下	—	—	—	灰白N8/	染付。外面に團縁2条。
54	017-02	磁器 (瀬戸・美濃)	徳利	1区		SD6001	底部 2/12	—	—	—	灰白N8/	染付。外面に葉文。
55	015-04	青磁	香炉	1区		SD6001	底部 4/12	—	高台 7.1	—	灰白7/	
56	014-03	土師器	不明土塊	1区		SD6001	完存	幅 6.7	厚 2.7	3.5	にぶい橙7.5YR7/3	

第30表－1 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
57	013-04	石製品 (泥岩)	砥石	1区		SD6001	—	幅 4.4	厚 1.8	残長 6.7	灰白5Y7/2	
58	001-01	瓦	軒丸瓦	1区		SD6001	瓦当部ほぼ完存	幅 16.3	—	—	N21黒	左巻三つ巴。連珠9個。
59	003-01	瓦	丸瓦	1区		SD6001	1/5以下	—	—	4.6	灰N5/	
60	002-02	瓦	丸瓦	1区		SD6001	1/10以下	—	—	4.4	灰N5/	
61	002-01	瓦	棧瓦	1区		SD6001	1/12以下	—	—	4.4	灰N4/	
62	005-01	瓦質土器	火鉢	1区		SD6001	1/12以下	—	—	—	N3/暗灰	方形。
63	001-02	瓦	冠瓦	1区		SD6001	4/12以下	幅 9.8	残長 14.4	5.8	灰N6/	
64	004-01	瓦	水返し付 平瓦	1区		SD6001	1/12以下	—	—	—	N3/暗灰	熨斗瓦または冠瓦の一種か。
65	1006-01	木製品 (ヒノキ)	箸	1区		SD6001	11/12以下	幅 0.9	厚 0.7	残長 17.3	—	芯去削出。
66	1002-03	木製品 (ヒノキ)	箸	1区		SD6001	完形	幅 0.6	厚 0.5	長 24.7	—	
67	1002-04	木製品 (ヒノキ)	箸	1区		SD6001	完形	幅 0.4	厚 0.4	長 21.4	—	
68	1002-05	木製品 (ヒノキ科)	箸	1区		SD6001	8/12以下	幅 0.5	厚 0.5	残長 14.1	—	
69	1002-06	木製品 (ヒノキ)	箸	1区		SD6001	8/12以下	幅 0.6	厚 0.4	残長 14.0	—	
70	1012-01	木製品 (サワラ)	椀	1区		SD6001	11/12以下	幅 3.4	厚 1.2	残長 14.8	—	榫目。
71	1001-01	木製品 (ヒノキ)	下駄	1区		SD6001	11/12	幅 8.5	長 22.5	6.3	—	
72	1011-02	木製品 (ツガ属)	建具材	1区		SD6001	—	幅 2.4	厚 1.2	残長 10.3	—	追榫目。
73	1007-01	木製品 (ヒノキ)	棒状具	1区		SD6001	—	幅 2.9	厚 1.4	残長 32.3	—	榫目。
74	1004-02	木製品 (ヒノキ)	建具材	1区		SD6001	完形	幅 2.9	厚 2.0	長 8.25	—	芯去削出。
75	1011-01	木製品 (ヒノキ)	部材	1区		SD6001	—	幅 2.4	厚 1.2	残長 17.6	—	榫目。
76	1004-03	木製品 (ヒノキ)	底板	1区		SD6001	6/12	幅 11.6	厚 0.5	—	—	榫目。
77	1014-02	木製品 (ヒノキ)	部材	10区		SD6001	完形	幅 7.4	厚 2.1	長 13.5	—	鋸痕。
78	1005-01	木製品 (ヒノキ)	蓋	1区		SD6001	6/12	幅 12.5	厚 1.1	—	—	追榫目。
79	1005-02	木製品 (ヒノキ)	曲物底板	1区		SD6001	8/12以下	幅 13.6	厚 1.1	—	—	黒漆、漆。榫目。
80	1008-02	木製品 (ヒノキ)	曲物枠板	1区		SD6001	2/12以下	幅 2.0	厚 0.3	残長 20.4	—	榫目。
81	1008-04	木製品 (サワラ)	曲物枠	1区		SD6001	1/12以下	幅 1.7	厚 0.2	残長 12.8	—	榫目。
82	1008-03	木製品 (サワラ)	曲物枠	1区		SD6001	1/12以下	幅 2.3	厚 0.3	残長 18.7	—	榫目。
83	1008-01	木製品 (ヒノキ)	曲物枠	1区		SD6001	2/12以下	幅 3.2	厚 0.3	残長 20.8	—	榫目。
84	020-02	瓦質土器	茶釜	1区		SK6002 SK6003重複	体部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	燻不良。
85	019-01	瓦	軒平瓦	1区		SK6002 SK6003重複	3/12以下	—	—	—	暗灰N3/	
86	019-02	瓦	軒平瓦	1区		SK6002	3/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	燻不良。
87	018-03	瓦	熨斗瓦	1区		SK6002	4/12以下	—	—	4.4	にぶい黄橙10YR6/3	
88	1007-02	木製品 (ヒノキ)	建具材	1区		SK6002 SK6003重複	—	幅 1.2	厚 1.6	残長 10.0	—	芯去削出。釘付着。
89	020-03	陶器	椀	1区		SK6003	底部 6/12	—	高台 4.8	—	灰白2.5Y8/1 灰黄2.5Y6/2	印銘。
90	1010-01	木製品 (ツガ属)	部材	1区		黒色粘土	6/12以下	幅 11.4	厚 10.8	残長 88.7	—	
91	1009-01	木製品 (ヒノキ)	部材	1区		黒色粘土	6/12以下	幅 9.1	厚 8.8	残長 83.0	—	
92	1009-02	木製品 (サワラ)	杭	1区		黒色粘土	6/12以下	幅 13.6	—	残長 69.9	—	芯持丸木。
93	024-05	土師器	皿	2区		黒色土	口縁部 1/12	8.0	—	2.8	灰7.5Y5/1	
94	021-06	土師器	皿	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 2/12	9.1	—	1.1	にぶい黄橙10YR7/3	
95	021-05	土師器	皿	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 2/12	10.0	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	
96	023-02	土師器	焙烙	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 2/12	40.6	—	—	灰黄2.5Y7/2	外面に煤付着。
97	026-01	土師器	鍋	2区		黒色土 上下混	口縁部 1/12	28.8	—	—	灰黄褐色10Y6/2	外面に若干煤付着。
98	026-02	土師器	鍋	2区		黒色土	口縁部 1/12	28.0	—	—	にぶい黄橙10YR6/2	外面に煤付着。
99	021-08	土師器	羽釜	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 1/12	21.4	—	—	灰黄褐色10YR6/2	
100	024-07	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	2区		黒色土	口縁部 2/12	10.0	—	—	にぶい黄橙10YR 7/4	柿釉
101	021-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶碗	2区		黒色粘土 混細砂	底部 6/12	—	高台 4.2	—	灰白N8/ 黒10YR7/1	
102	022-07	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区		黒色粘土 混細砂	3/12	13.2	高台 7.8	3.3	灰白5Y7/1 オリーブ黄5Y6/3	菊皿。灰釉。
103	021-01	陶器	鍋	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 2/12	19.3	—	—	淡黄2.5Y8/3	行平鍋。鉄釉に黄瀬戸釉を化粧掛。
104	021-02	陶器	鉢	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 2/12	15.0	—	6.1	にぶい赤褐5YR5/4	外面に煤付着。
105	023-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 1/12	34.2	—	—	灰白2.5Y7/2	
106	025-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区		黒色土	口縁部 2/12	31.2	—	—	灰白2.5Y8/2	
107	022-01	陶器	播鉢	2区		黒色粘土 混細砂	底部 2/12	15.2	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	播目1条。内面に炭化物付着。
108	021-07	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区		黒色粘土 混細砂	底部 2/12	12.0	—	—	灰黄2.5Y7/2	
109	025-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区		黒色土	底部 2/12	10.0	—	—	灰白10YR8/2	播目13条。
110	022-06	磁器 (肥前)	小杯	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 1/12	7.0	—	—	灰白N8/	染付。外面に松葉。
111	025-04	磁器 (肥前)	椀	2区		黒色土 上下混	口縁部 1/12	8.6	—	—	灰白N8/	染付。外面に網目。
112	022-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		黒色粘土 混細砂	底部 6/12	—	高台 3.2	—	灰白N8/	染付2色。外面に梅花。

第30表-2 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
113	022-02	磁器 (肥前)	椀	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 1/12	12.4	高台 4.8	—	灰白N8/	透明釉。内面に付着物。
114	022-03	磁器 (肥前)	椀	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 1/12	13.0	—	—	灰白N8/	透明釉。
115	022-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		黒色粘土 混細砂	底部 12/12	11.4	高台 4.0	4.9	灰白N8/	透明釉。文様剥離か。
116	021-04	陶器	椀	2区		黒色粘土 混細砂	口縁部 1/12	11.3	—	—	灰白5Y8/1	透明釉。
117	024-01	瓦	軒平瓦	2区		黒色粘土 混細砂	3/12以下	—	—	—	暗灰N3/	スタンプ文。
118	023-03	瓦	丸瓦	2区		黒色粘土 混細砂	4/12以下	—	—	4.4	灰N4/	
119	1006-05	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	4/12以下	幅 0.6	厚 0.4	残長 6.7	—	芯去削出。
120	1006-06	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	4/12以下	幅 0.6	厚 0.4	残長 7.8	—	芯去削出。
121	1006-08	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	4/12以下	幅 0.5	厚 0.5	残長 9.4	—	芯去削出。
122	1006-02	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	5/12以下	幅 0.6	厚 0.45	残長 10.0	—	芯去削出。
123	1006-03	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	5/12以下	幅 0.65	厚 0.6	残長 10.9	—	芯去削出。
124	1006-09	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	5/12以下	幅 0.5	厚 0.4	残長 11.8	—	芯去削出。
125	1006-07	木製品 (ヒノキ)	箸	2区		黒色粘土 混細砂	6/12以下	幅 0.5	厚 0.4	残長 15.8	—	芯去削出。
126	1012-02	木製品 (サワラ)	椀	2区		黒色粘土 混細砂	完形	幅 2.8	厚 0.8	長 6.6	—	柀目。
127	1003-01	木製品 (ヒノキ)	部材	2区		黒色粘土 混細砂	—	幅 3.0	厚 1.9	残長 22.6	—	芯去削出。
128	1002-02	木製品 (サワラ)	ヘラ状工 具	2区		黒色粘土 混細砂	完形	最大幅 2.5	最大厚 0.9	長 14.8	—	
129	1003-02	木製品 (オニグルミ)	下駄	2区		黒色粘土 混細砂	6/12以下	幅 9.2	高 5.4	残長 9.1	—	一木造連歯下駄。歯厚3.2。柀目。
130	024-03	陶器	椀	2区		排土	口縁部 2/12	8.7	—	—	灰黄2.5Y7/2	外面緑釉・内面黄瀬戸釉。口縁部 若干輪花風。
131	024-06	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		造成土2層 クラッシャー下	底部 完存	—	高台 2.9	—	淡黄2.5Y8/3	
132	024-04	陶器	德利	2区		造成土2層 クラッシャー下	底部 3/12	—	高台 10.8	—	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
133	024-02	陶器	蓋	2区		造成土2層 クラッシャー下	口縁部 2/12	8.8	—	—	灰黄2.5Y7/2	染付。
134	028-03	陶器	甕	2区		造成土2層 クラッシャー下	口縁部 1/12以下	—	—	—	黒10YR2/1	鉄釉。
135	028-02	陶器	火鉢	2区		造成土2層 クラッシャー下	口縁部 2/12	17.0	—	—	黒10YR2/1	鉄釉。
136	026-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		排土	底部 3/12	—	高台 3.6	—	白9/	染付。
137	024-08	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		造成土2層 クラッシャー下	3/12	14.8	高台 6.0	6.1	灰白5Y8/1	内面染付。外面鉄釉。
138	025-03	磁器 (瀬戸・美濃)	菊皿	2区		造成土2層 クラッシャー下	底部 3/12	—	高台 6.0	—	白9/	透明釉。
139	026-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		造成土2層 クラッシャー下	口縁部 1/12	15.6	—	—	白9/	呉須釉。
140	028-01	瓦	平瓦	2区		造成土2層 クラッシャー下	4/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	酸化焼成。切込み付。
141	036-03	陶器	半筒形火 入	3区		SK6004	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白2.5Y8/2	
142	037-01	瓦	軒丸瓦	3区		SK6006	5/12以下	—	—	—	灰N4/	右巻三つ巴・連珠10残。
143	037-02	瓦	軒平瓦	3区		SK6007	1/12以下	—	—	—	灰N4/1	均整唐草文。
144	031-03	土師器	皿	3区		黒色粘土	口縁部 2/12	8.3	—	—	にぶい黄橙10YR7/2	
145	031-01	土師器	皿	3区		黒色粘土	口縁部 4/12	9.0	—	—	橙7.5YR7/6	
146	033-01	土師器	皿	3区		造成土	口縁部 3/12	9.0	—	—	橙5YR7/6	
147	031-02	土師器	皿	3区		黒色粘土	口縁部 2/12	9.3	—	1.5	にぶい橙5YR7/4	
148	032-03	土師器	焙烙	3区		黒色粘質土	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰褐7.5YR7/4	
149	032-02	土師器	茶釜	3区		黒色粘質土	口縁部 3/12	9.9	—	—	にぶい橙5YR7/4	
150	031-04	土師器	茶釜	3区		黒色粘土	鑄部2/12	鑄 20.0	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	
151	029-03	土師器	茶釜	3区		造成土	鑄部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
152	034-03	陶器 (肥前)	椀	3区		黒色粘質土	口縁部 1/12以下	—	—	—	褐灰7.5YR6/1	刷毛目椀。鉄釉+白泥。
153	032-09	陶器	湯呑	3区		排土	4/12	8.3	高台 3.8	6.1	黄灰2.5Y5/1	鉄釉+白泥。
154	034-01	陶器	椀	3区		黒色粘土	9/12	9.6	高台 3.8	5.8	灰白5Y8/1	透明釉。内外面水割文。
155	034-02	陶器	香炉	3区		黒色粘質土	口縁部 2/12	10.2	—	—	灰白2.5Y8/2	黄瀬戸釉。
156	032-01	陶器 (肥前)	皿	3区		黒色粘土	底部 3/12	—	高台 7.3	—	灰白5Y7/1	鉄釉+白泥。
157	034-07	陶器	皿	3区		黒色粘質土	底部 3/12	—	高台 7.8	—	灰白5Y7/2	染付。草木文。
158	034-05	陶器	急須	3区		黒色粘質土	底部 2/12	—	7.2	—	灰白5Y8/1	
159	034-04	陶器	壺	3区		黒色粘質土	底部 4/12	—	高台 9.8	—	灰白2.5Y8/1	鉛釉。
160	032-04	陶器	椀	3区		黒色粘質土	底部 3/12	—	高台 7.8	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
161	036-02	陶器	鉢	3区		黒色粘土	3/12	17.4	高台 8.8	11.0	灰白5Y8/1	灰釉。
162	036-01	陶器 (常滑)	壺	3区		黒色粘質土	口縁部 1/12	21.4	—	—	灰白5Y8/1	鉄釉。
163	035-01	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	3区		黒色粘質土	底部 3/12	—	12.4	—	灰白2.5Y8/2	描目17条。
164	035-02	陶器 (常滑)	甕	3区		黒色粘質土	口縁部 1/12	32.8	—	—	橙2.5YR6/6	
165	038-02	陶器 (常滑)	甕	3区		黒褐色礫混シルト	口縁部 2/12	35.0	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	造成土直下。
166	038-01	陶器 (常滑)	甕?	3区		黒色粘土	口縁部 1/12	66.0	—	—	橙7.5YR7/4	
167	031-06	磁器 (肥前)	皿	3区		黒色粘土	底部 1/12	—	高台 14.6	—	灰白2.5Y8/1	染付。草花文。
168	032-05	磁器	椀	3区		黒色粘質土	口縁部 1/12以下	—	—	—	白9/	

第30表-3 第6次調査出土遺物観察表



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
169	031-05	磁器 (肥前)	椀	3区		黒色粘土	底部 12/12	—	高台 4.4	—	白9/	染付。
170	032-06	磁器 (瀬戸・美濃)	鉢子	3区		黒色粘質土	口縁部 4/12	3.0	—	—	白9/	染付。
171	032-07	磁器 (瀬戸・美濃)	瓶	3区		黒色粘質土	5/12	胴最大 4.8	—	—	白9/	染付。
172	032-08	磁器 (瀬戸・美濃)	人形型	3区		黒色粘質土	頭部欠損	—	—	—	白9/	透明釉＋鉄釉。
173	038-03	瓦	平瓦	3区		黒褐色礫混シルト	4/12以下	—	—	5.2	灰白5Y7/1	
174	1002-01	木製品 (トチノキ)	漆椀	3区		黒色粘土	1/12	11.6	高台 5.0	5.0	—	横木取り。 内：黒漆、外：赤漆。
175	1006-04	木製品 (ヒノキ)	箸	3区		黒色粘土混細砂	5/12以下	幅 0.6	厚 0.4	残長 12.1	—	
176	030-01	陶器 (信楽)	土瓶	3区		造成土	完形	8.4	7.6	6.6	黄灰2.5Y5/1	汽車土瓶。灰釉。
177	033-03	陶器	播鉢	3区		造成土	口縁部 2/12	26.0	—	—	灰白2.5Y8/2	
178	029-01	陶器	捏鉢	3区		造成土	口縁部 1/12	27.2	—	—	灰白2.5Y7/1	黄瀬戸釉。
179	029-02	陶器 (常滑)	甕	3区		造成土	底部 1/12	—	20.0	—	橙5YR6/6	
180	033-02	陶器	加工円盤	3区		排土	完形	4.0~4.4	厚 0.8	重 21.45g	浅黄2.5Y7/3	灰釉。
181	034-06	陶器	皿	3区		灰色細砂	底部 2/12	15.2	—	—	灰白2.5Y8/2	灰釉＋鉄絵。
182	029-04	磁器 (肥前)	皿	3区		造成土	全体 1/12	12.8	8.0	3.85	灰白10Y8/1	染付。内面草花文、外面蔓草。
183	033-04	瓦	軒丸瓦	3区		排土	瓦当 4/12	瓦当 15.5	厚 2.0	—	灰5Y4/1	巴連珠文。
184	027-01	瓦	軒丸瓦	3区		造成土	瓦当 2/12	瓦当 12.8	厚 2.1	—	灰N6/	右巻三つ巴連珠文。
185	027-02	瓦	棧瓦	3区		造成土	3/12	—	—	谷深 2.2	灰N6/	
186	035-03	瓦	冠瓦	3区		灰色細砂	2/12以下	—	—	4.6	黄灰2.5Y6/1	
187	039-03	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.7	3.1	1.0	にぶい橙7.5YR7/4	灰釉。
188	039-02	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.6	2.4	1.3	淡黄2.5Y8/3	灰釉。
189	039-04	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.6	2.4	1.2	浅黄橙10YR7/4	灰釉。
190	039-09	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	11/12	5.7	2.3	1.3	浅黄橙10YR8/4	灰釉。
191	042-05	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		溝埋土	10/12	5.5	2.4	1.4	にぶい黄橙10YR7/4	灰釉。
192	039-06	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.7	2.3	1.3	淡黄2.5Y8/3	灰釉。
193	039-10	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	6/12	5.9	2.9	1.1	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
194	039-01	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	6.0	3.0	1.0	浅黄2.5Y7/3	灰釉。
195	039-05	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.8	2.3	1.2	灰白2.5Y8/2	灰釉。
196	039-08	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	11/12	6.0	2.9	0.9	灰白5Y7/2	灰釉。
197	039-07	陶器 (京都・信楽)	灯明皿	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	6.1	2.6	1.3	浅黄橙10YR8/4	灰釉。
198	043-04	陶器	湯呑	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.6	4.2	7.3	灰白5Y8/1	転写。
199	044-02	陶器	湯呑	4区		上層土坑 近現代土坑	7/12	5.0	3.8	7.3	灰白5Y8/2	転写。
200	043-05	陶器	湯呑	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 5/12	5.6	—	—	灰白5Y8/1	転写。
201	044-01	陶器	湯呑	4区		上層土坑 近現代土坑	全体 7/12	5.8	5.4	6.9	灰白2.5Y8/2	転写。
202	045-01	陶器	土瓶	4区		上層土坑 近現代土坑	全体 11/12	5.5	5.0	7.0	灰白2.5Y8/2	転写。
203	040-03	陶器	鉢	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
204	040-02	陶器	鉢	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	
205	040-04	陶器	鉢	4区		上層土坑 近現代土坑	全体 3/12	46.0	—	—	橙2.5YR6/8	
206	044-03	陶器	蓋	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	5.2	—	2.4	灰白2.5Y8/2	転写。
207	044-04	陶器	湯呑	4区		上層土坑 近現代土坑	完形	6.0	高台 2.9	5.6	灰白2.5Y8/2	転写。
208	041-01	陶器	蓋	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 7/12	14.6	—	—	灰白5Y7/2	染付。
209	043-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 3/12	8.4	高台 3.3	4.9	白9/	転写。
210	043-01	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	4区		上層土坑 近現代土坑	全体 3/12	10.0	3.6	4.2	白9/	転写。
211	044-05	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	4区		溝埋土	全体 5/12	—	つまみ 4.2	—	白9/	転写。
212	044-06	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	4区		上層土坑 近現代土坑	全体 5/12	10.4	高台 4.5	5.6	白9/	転写。
213	042-07	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 2/12	7.6	—	—	白9/	転写。
214	042-06	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 2/12	11.6	—	—	白9/	転写。
215	040-01	磁器 (瀬戸・美濃)	壺	4区		上層土坑 近現代土坑	口縁部 2/12	21.3	高台 12.0	19.2	白9/	青磁。
216	041-03	石製品 (粘板石)	石板	4区		上層土坑 近現代土坑	1/12以下	幅 4.3	厚 0.4	残長 17.1	暗灰3/	建築資材。残重54.4g。
217	047-01	陶器 (常滑)	甕	4区		SK6013 SK6014	底部 完存	—	22.7	—	浅黄橙7.5YR8/3	
218	041-04	陶器 (常滑)	鉢	4区		SK6013 SK6014	底部 1/12	—	高台 8.0	—	灰白2.58/2 浅黄5Y7/3	灰釉。
219	041-02	陶器 (常滑)	鉢	4区		SK6013 SK6014	全体 6/12	15.1	11.5	5.1	にぶい赤褐5YR4/3	
220	046-01	陶器 (常滑)	甕	4区		黒褐土	口縁部1/12 底部2/12	45.2	20.0	—	にぶい黄橙10YR7/4	
221	046-02	陶器 (常滑)	火鉢	4区		灰褐土 上	口縁部 1/12	27.2	—	—	橙5YR6/6	内面に炭化物付着。
222	046-04	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	4区		灰褐土 上	底部 2/12	—	17.0	—	灰褐5YR4/2	播目4本/cm。内面激しく摩滅。
223	046-06	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	4区		灰褐土 上	底部 6/12	—	13.4	—	にぶい赤褐5YR4/4 灰白2.5Y8/2	播目13本/単。
224	046-03	陶器	播鉢	4区		灰褐土 上	底部 1/12	—	17.2	—	灰褐5YR4/2	播目15本/単。内面激しく摩滅。

第30表－4 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
225	046-05	陶器	椀	4区		灰褐土 上	全体 6/12	10.7	高台 4.7	6.4	白9/	染付。草花文。
226	042-03	瓦質土器	七輪	4区		造成土	五徳部一部残	—	—	—	灰N4/	
227	042-01	陶器	鉢	4区		造成土	口縁部 1/12	19.2	—	—	淡黄2.5Y8/3	黄瀬戸釉。
228	042-02	陶器	鉢	4区		造成土	底部 3/12	—	高台 12.0	—	淡黄2.5Y8/3	黄瀬戸釉だが、発色不良。
229	042-04	陶器	土瓶	4区		造成土	注口部一部残	—	—	—	浅黄2.5Y7/3	鉄釉。
230	043-02	磁器 (肥前)	椀	4区		灰褐土 上	底部 12/12	—	高台 3.4	—	白9/	染付。二重網目文+菊花文。
231	048-01	土師器	皿	5区		SZ6020	口縁部 2/12	7.2	3.8	1.2	浅黄橙7.5YR8/4	
232	048-06	土師器	鍋	5区		SZ6020	口縁部 1/12	32.0	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
233	049-03	陶器 (常滑)	甕	5区		造成土	口縁部 1/13	28.4	—	—	灰褐5YR4/2	
234	048-05	土師器	鍋	5区		黒褐土	口縁部 2/12	19.8	—	—	橙5YR7/6	
235	048-02	土師器	台付皿	5区		黒褐土	高台基部完存	—	—	—	灰白10YR8/2	内面に若干炭化物付着。
236	1004-01	木製品 (ヒノキ)	底板	5区		黒褐土	10/12	径 19.3	厚 1.0	—	—	
237	050-06	磁器 (肥前)	猪口	6区		暗褐色造成土	全体 3/12	5.4	高台 3.4	4.4	白9/	染付。山水文。
238	061-03	陶器	甕	7区		SK6023	口縁部 1/12以下	—	—	—	黒褐10YR3/1	
239	061-02	土師器	鍋	7区		Pit2	口縁部 2/12	22.0	—	—	灰黄褐10YR6/2	
240	061-04	陶器 (常滑)	甕	7区		Pit2	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
241	053-10	土師器	皿	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 3/12	7.5	—	1.1	橙2.5YR6/6	
242	060-04	土師器	皿	7区		暗褐色シルト	口縁部 2/12	7.5	—	1.1	にぶい黄橙10YR7/4	
243	061-01	土師器	鍋	7区		黒褐色シルト	口縁部 2/12	24.0	—	—	にぶい橙7.5YR7/3	外面に厚く煤付着。
244	060-05	瓦質土器	鍋	7区		暗褐色シルト	口縁部 1/12	17.6	—	—	灰N5/	
245	060-03	陶器 (常滑)	鉢	7区		暗褐色シルト	底部 5/12	—	脚間 11.8	—	橙2.5YR6/6	3足は仮定。
246	063-01	陶器 (常滑)	鉢	7区		黒褐土	底部 2/12	—	18.0	—	明赤褐2.5YR5/6	内面に炭化物付着。
247	048-03	土師器	皿	7区		暗褐色礫混シルト	口縁部 3/12	8.0	—	—	橙7.5YR7/6	
248	048-04	土師器	茶釜	7区		暗褐色礫混シルト	口縁部 2/12	12.4	—	—	灰白10YR8/2	
249	049-02	土師器	茶釜	7区		暗褐色礫混シルト	口縁部 5/12	12.0	—	—	浅黄橙10YR8/3	
250	049-01	土師器	鍋	7区		暗褐色礫混シルト	口縁部 1/12	27.2	—	—	浅黄橙7.5YR8/3	
251	050-04	陶器	天目茶椀	7区		暗褐色礫混シルト	底部 12/12	—	高台 3.6	—	灰白2.5Y8/2 黒褐10YR2/3	鉄釉。
252	054-01	陶器	天目茶椀	7区		暗褐色礫混シルト	全体 4/12	10.2	4.8	6.5	灰白2.5Y7/1	鉄釉。
253	049-04	石製品 (砂岩)	砥石	7区		暗褐色礫混シルト	3/12以下	残幅 8.0	厚 0.9	残長 10.3	灰白10YR8/1	
254	053-09	土師器	皿	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12	7.9	—	1.2	橙5YR6/6	
255	053-08	土師器	皿	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR7/6	
256	053-05	土師器	茶釜	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
257	053-07	土師器	茶釜	7区		整地区 橙色細砂	全体 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
258	053-06	土師器	茶釜	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12	12.6	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
259	053-01	土師器	鍋	7区		整地区 橙褐色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	暗灰N3/	外面に厚く煤付着。
260	053-04	土師器	焙烙	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
261	053-03	土師器	焙烙	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰褐7.5YR4/2	
262	053-02	土師器	焙烙	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい褐7.5YR5/3	
263	055-06	陶器	皿	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白2.5Y8/2	呉須釉+鉄釉。
264	055-05	陶器	椀	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 2/12	10.8	—	—	淡黄2.5Y8/3	灰釉。
265	050-01	陶器	皿	7区		褐色整地土	底部 6/12	—	高台 7.0	—	灰白2.5Y8/1	灰釉。
266	054-08	陶器	椀	7区		整地区 橙色細砂	底部 4/12	—	高台 3.6	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
267	055-04	陶器	椀	7区		整地区 橙褐色細砂	底部 6/12	—	高台 3.6	—	灰5Y6/1	灰釉+鉄釉。 鏝椀。
268	055-03	陶器	椀	7区		整地区 橙色細砂	底部 完存	—	高台 3.6	—	灰白5Y8/2	銅緑釉+灰釉。 鏝椀。
269	054-02	陶器	椀	7区		整地区 橙色細砂	底部 完存	—	高台 3.9	—	灰白2.5Y8/2	柿釉。 丸椀。
270	054-06	陶器	皿	7区		整地区 橙褐色細砂	底部 2/12	—	高台 8.0	—	にぶい黄橙10YR7/3	灰釉。内外面水割文。
271	050-02	陶器	椀	7区		褐色整地土	底部 3/12	—	高台 4.0	—	灰白5Y8/2	灰釉。
272	050-03	陶器	椀	7区		褐色整地土	底部 4/12	—	高台 6.0	—	浅黄橙7.5YR8/4	灰釉+鉄釉。
273	055-07	陶器	灯明受皿	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 2/12	7.2	4.9	1.7	灰白5Y7/1	鉄釉。
274	055-08	陶器	鍋	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 2/12	7.4	3.3	5.0	灰白2.5Y8/2	灰釉。ミニチュア行平鍋。
275	057-01	陶器	土瓶	7区		整地区 橙褐色細砂	口縁部 3/12	10.4	—	—	灰白2.5Y8/2	柿釉。
276	056-02	陶器	托	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 4/12	6.0	7.6	1.6	灰白2.5Y8/2	銅緑釉。
277	054-05	陶器	蓋	7区		整地区 橙色細砂	口縁部 4/12	7.2	5.6	1.0	灰黄2.5Y7/2	柿釉。
278	054-07	陶器	鉢	7区		整地区 橙褐色細砂	底部 2/12	—	高台 6.8	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
279	056-03	陶器	鉢	7区		整地区 橙色細砂	小片	—	—	—	灰白5Y8/1	銅緑釉。童子を浮彫。
280	060-02	陶器 (常滑)	甕	7区		整地区 橙褐色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙7.5YR7/6	方形か。

第30表-5 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
281	060-01	陶器 (常滑)	甕	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
282	055-02	陶器	鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 2/12	16.0	—	—	灰黄2.5Y7/2	胎軸。
283	055-01	陶器	鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	18.0	—	—	灰黄2.5Y6/2	灰軸。
284	056-01	陶器	鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 4/12	—	12.8	—	灰黄2.5Y7/2	鉄軸。
285	054-03	陶器	鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 1/12	—	8.0	—	灰白2.5Y8/2	柿軸。
286	085-04	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	42.0	—	—	にぶい赤褐2.5YR4/3	
287	058-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	淡黄2.5Y8/3	
288	058-04	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 1/12	—	15.4	—	灰白2.5Y8/2	
289	058-05	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 4/12	—	15.6	—	灰褐5YR4/2 にぶい橙7.5YR7/4	播目17本/単。
290	058-03	陶器	播鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	17.4	—	—	淡黄2.5Y8/3	
291	054-04	陶器	鉢	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 1/12	—	高台 8.0	—	灰白2.5Y8/2	柿軸。
292	059-03	陶器 (常滑)	風炉	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	23.0	—	—	橙5YR6/6	内面に炭化物が厚く付着。
293	059-04	陶器 (常滑)	風炉	7区		整地層 橙褐色細砂	体部 2/12	胴部 24.0	—	—	橙7.5YR6/6	内面に炭化物が厚く付着。
294	059-02	陶器	風炉	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 1/12	—	23.2	—	にぶい黄橙10YR7/4	
295	059-01	陶器	花瓶	7区		整地層 橙褐色細砂	完形	3.5	20.5	6.0	浅黄2.5Y7/3	灰軸。
296	052-01	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	10.2	—	—	白9/	染付。連弧文。
297	051-07	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	11.6	—	—	灰白10Y8/1	染付。亀甲文。
298	051-08	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 3/12	12.0	—	—	灰白5Y8/1	染付。丸文。
299	050-05	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 2/12	9.0	—	—	白9/	染付。草文。
300	051-02	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	白9/	染付。清朝写し。
301	051-04	磁器 (肥前)	蓋	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12	—	—	—	白9/	染付。唐草文。
302	052-04	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 4/12	—	—	—	灰白2.5GY8/1	染付。
303	051-06	磁器	皿	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 3/12	14.8	—	—	白9/	染付。外：唐草文、内：草花文。
304	052-02	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	全体 1/12	9.0	高台 4.0	5.3	灰白N8/	染付。草文。
305	052-03	磁器 (肥前)	椀	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 4/12	—	高台 6.3	—	灰白N8/	広東椀。染付。外：草文、内：花 文。
306	050-07	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	7区		褐色整地土	底部 2/12	—	高台 6.4	—	白9/	広東椀。染付。外：葉文、内：吉 祥文字。
307	052-05	磁器 (肥前)	湯呑	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 3/12	6.4	—	—	灰白N8/	染付青磁。四方樽。
308	052-06	磁器 (肥前)	湯呑	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 12/12	—	高台 3.3	—	白9/	染付。外：草花文、内：五弁花文。
309	051-01	磁器 (肥前)	皿	7区		整地層 橙褐色細砂	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白5GY8/1	染付。
310	051-03	磁器 (肥前)	皿	7区		整地層 橙褐色細砂	底部 4/12	—	高台 8.2	—	白9/	染付。風水文。
311	051-05	磁器 (肥前)	皿	7区		整地層 橙褐色細砂	全体 2/12	13.6	高台 8.5	3.6	白9/	染付。外：室、内：風水月。
312	063-02	陶器	播鉢	8区		SK6024	口縁部 1/12以下	—	—	—	明赤褐2.5YR5/6	
313	064-05	陶器	皿	8区		造成土	底部 12/12	—	高台 6.6	—	灰白2.5Y8/2	黄瀬戸軸。
314	063-04	磁器 (肥前)	椀	8区		造成土	底部 3/12	—	高台 4.4	—	白9/	染付。
315	063-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区		造成土	口縁部 1/12	33.2	—	—	灰白2.5Y8/2	
316	062-01	陶器	鉢	8区		造成土	底部 11/12	—	14.4	—	灰白10YR8/2	灰軸。5ヶ所に積重用ハマグリ跡。
317	064-02	陶器 (常滑)	捏鉢	8区		造成土	底部 1/12以下	—	—	—	灰褐5YR5/2	
318	064-01	陶器 (常滑)	捏鉢	8区		造成土	底部 1/12以下	—	—	—	橙7.5YR7/6	
319	063-05	磁器 (肥前)	椀	8区		造成土	底部 完存	—	高台 3.2	—	灰白2.5Y8/2	染付。内：五弁花文。
320	066-02	磁器	椀	8区		造成土	底部 7/12	—	高台 4.4	—	白9/	染付。外：格子、内：斜格子。
321	064-03	陶器 (常滑)	火鉢	9区		SK6025	口縁部 1/12	22.0	—	—	明赤褐5YR5/6	
322	065-03	磁器 (肥前)	椀	9区		SK6025	口縁部 1/12以下	—	—	—	白9/	染付。外：亀甲。
323	072-01	土師器	羽釜	10区		SK6028	口縁部 1/12以下	24.5	—	—	灰褐7.5YR4/2	鏝以下に煤付着。
324	068-04	陶器	皿	10区		SK6028	口縁部 2/12	11.4	5.4	2.1	灰白2.5Y7/1	鉄軸。
325	068-03	陶器	蓋	10区		SK6028	口縁部 2/12	9.6	—	—	灰白5Y8/2	灰軸。
326	071-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	10区		SK6028	高台 3/12	15.1	高台 8.0	3.4	灰白5Y8/1	灰軸。
327	071-02	陶器	鉢	10区		SK6028	底部 完存	—	8.7	—	灰白5Y8/1	灰軸。三又トチン痕。
328	071-03	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	10区		SK6028	全体 11/12	11.0	高台 4.2	5.2	灰白5Y8/1	灰軸＋呉須軸。内：山水。
329	070-04	陶器	皿	10区		SK6028	全体 4/12	11.2	高台 5.6	3.0	灰白2.5Y7/1	灰軸＋呉須軸。内：梅花。
330	070-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	10区		SK6028	底部 完存	—	高台 4.2	—	灰白7.5Y8/1	灰軸。内：山水。
331	068-02	陶器	椀	10区		SK6028	底部 完存	—	高台 6.7	—	灰白2.5Y8/2	黄瀬戸軸。三又トチン痕。
332	068-01	陶器 (唐津)	皿	10区		SK6028	底部 3/12	—	高台 10.3	—	にぶい黄橙10YR7/3	内外ハケメ。
333	075-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	10区		SK6028	口縁部 2/12	36.0	—	—	暗褐7.5YR3/4	播目20本/単。
334	075-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	10区		SK6028	口縁部 2/12	34.0	—	—	暗褐7.5YR3/4	播目10本/単。
335	074-03	陶器	甕	10区		SK6028	口縁部 1/12以下	—	—	—	褐灰10YR4/1	
336	073-02	陶器	甕	10区		SK6028	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰褐5YR4/2	

第30表－6 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
337	074-01	陶器	甕	10区		SK6028	底部 2/12	—	16.0	—	褐灰10YR5/1	
338	074-02	陶器 (常滑)	甕	10区		SK6028	底部 完存	—	14.6	—	にぶい黄橙10YR7/4	
339	071-01	陶器	鉢	10区		SK6028	全体 4/12	28.0	高台 12.7	8.5	灰白5Y8/2	灰釉。
340	067-01	陶器	鉢	10区		SK6028	口縁部 1/12	32.3	高台 15.7	10.2	灰N5/	灰釉。
341	067-02	陶器	花器	10区		SK6028	口縁部 2/12	34.2	—	—	灰白5Y8/1	灰釉+銅緑釉+鉄釉。轆轤拳骨形。
342	070-01	磁器 (肥前)	椀	10区		SK6028	全体 6/12	11.5	高台 4.3	6.0	灰白N8/	染付。外：草花、内：五弁花文。
343	070-06	磁器 (瀬戸・美濃)	湯呑	10区		SK6028	底部 完存	—	高台 5.0	—	白9/	染付。菊花、七宝。
344	070-02	磁器 (肥前)	皿	10区		SK6028	底部 2/12	—	高台 9.4	—	白9/	染付。外：唐草、内：草花。
345	070-03	磁器 (肥前)	皿	10区		SK6028	口縁部 1/12	13.7	—	—	白9/	染付。外：蔓草、内：蛸唐草。
346	073-01	瓦	平瓦	10区		SK6028	6/12以下	残幅 19.9	残長 15.7	谷深 1.6	灰5Y7/1	
347	1016-01	木製品 (ヒノキ)	箸	10区		SK6028	完形	0.6	—	長 21.6	—	
348	1013-02	木製品 (ヒノキ)	棒状部材	10区		SK6028	完形	1.4	—	長 20.4	—	
349	1017-01	木製品 (アスナロ)	曲物底板	10区		SK6028	完形	最大幅 10.2	厚 1.0	長 25.5	—	木釘穴痕。柿渋塗布。
350	1015-02	木製品 (ヒノキ)	曲物底板	10区		SK6028	完形	12.5	厚 1.0	—	—	6ヶ所に木釘穴痕。
351	1015-01	木製品 (ツガ)	曲物	10区		SK6028	ほぼ完形	18.0	厚 1.6	—	—	黒色の付着物あり。
352	083-01	土師器	焙烙	12区		SD6032	口縁部 1/12	39.8	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	SD6033と同一遺構。
353	084-06	土師器	鍋	12区		SD6032 上層	口縁部 1/12	24.6	—	—	黄灰2.5Y6/1	
354	082-02	土師器	茶釜	12区		SD6032	全体 6/12	口径 23.8	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	SD6033と同一遺構。
355	077-01	陶器 (常滑)	甕	10区		SD6033	口縁部 1/12以下	—	—	—	黒褐10YR2/3	SD6032と同一遺構。
356	076-01	陶器 (常滑)	井戸枠?	10区		SD6033	口縁部 2/12	63.4	—	—	橙5YR7/8	SD6032と同一遺構。
357	076-02	陶器 (常滑)	井戸枠?	10区		SD6033	底部 6/12	—	59.8	—	橙5YR7/8	SD6032と同一遺構。
358	077-02	陶器	?	10区		SD6033	4/12以下	幅 10.3	厚 4.7	残長 8.5	灰N4/	重さ608.6g。SD6032と同一遺構。
359	078-06	土師器	皿	11区		SD6030	口縁部 3/12	6.8	—	1.2	橙7.5YR7/6	
360	078-05	土師器	皿	11区		SD6030	口縁部 11/12	9.6	—	1.6	にぶい橙7.5YR6/4	
361	078-07	土師器	皿	11区		SD6030	口縁部 2/12	—	—	1.6	にぶい黄橙10YR6/3	
362	078-04	土師器	皿	11区		SD6030	口縁部 9/12	9.6	—	1.6	橙5YR6/6	
363	079-03	土師器	焙烙	11区		SD6030	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	
364	078-08	土師器	焙烙	11区		SD6030	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい黄褐10YR5/3	
365	079-02	土師器	焙烙	11区		SD6030	口縁部 1/12	30.0	—	—	黒N2/	外面に煤付着。
366	079-01	土師器	焙烙	11区		SD6030	口縁部 1/12	30.0	—	—	黒N2/	外面に煤付着。
367	080-01	陶器	蓋	11区		SD6030	全体 7/12	5.0	3.4	1.8	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
368	079-06	陶器	椀	11区		SD6030	底部 完存	—	高台 4.2	—	灰白2.5Y7/1	灰釉。
369	079-05	陶器	壺	11区		SD6030	底部 5/12	—	高台 7.2	—	灰白5Y8/1	鉄釉。
370	079-04	陶器	土瓶	11区		SD6030	底部 2/12	—	7.6	—	灰白5Y8/1	鉄釉。
371	078-01	陶器	播鉢	11区		SD6030	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙7.5YR6/6	播目13本/単。
372	081-01	陶器 (常滑)	甕	11区		SD6030	口縁部 1/12	32.0	—	—	橙5YR6/6	
373	078-02	陶器 (常滑)	甕	11区		SD6030	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	
374	078-03	陶器 (常滑)	甕	11区		SD6030	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	
375	080-02	磁器 (肥前)	椀	11区		SD6030	口縁部 1/12	22.0	—	—	白9/	染付。草花文。
376	081-02	瓦	軒平瓦	11区		SD6030	4/12以下	残幅 16.0	—	—	暗灰N3/	唐草文。
377	082-01	瓦	丸瓦	11区		SD6030	4/12以下	残幅 10.6	厚 2.6	6.4	黒5Y2/1	コザ状圧痕。
378	1016-02	木製品	箸	11区		SD6030	9/12以下	0.8	—	残長 15.3	—	
379	083-02	土師器	鍋	11区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
380	083-03	磁器 (肥前)	小椀	11区		造成土	底部 完存	6.5	高台 2.7	2.6	白9/	染付。草本文。
381	083-04	陶器 (常滑)	甕	11区		造成土	底部 1/12	—	18.0	—	明赤褐2.5YR5/6	
382	084-05	土師器	皿	12区		SD6031 黒褐色シルト	口縁部 3/12	8.7	—	1.7	にぶい橙7.5YR6/4	
383	085-01	土師器	鍋	12区		SD6031 黒褐色シルト	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
384	084-04	陶器	蓋	12区		SD6031 上層	口縁部 2/12	7.2	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	錆釉。
385	084-02	磁器	蓋	12区		SD6031 上層	全体 3/12	3.5	2.0	2.1	白9/	色絵。
386	084-03	陶器	湯呑	12区		SD6031 上層	底部 6/12	—	高台 4.5	—	灰白2.5Y8/2	黄瀬戸釉+錆釉。
387	084-01	磁器 (肥前)	小杯	12区		SD6031	底部 3/12	—	高台 5.7	—	白9/	染付。二重方形枠+文字。
388	1017-02	木製品	つけ木	12区		SD6031 黒褐色シルト	8/12以下	幅 2.1	厚 0.5	残長 12.9	—	
389	085-02	陶器	甕	12区		造成土	口縁部 1/12	28.5	—	—	赤褐10R4/4	
390	086-03	陶器 (常滑)	甕	12区		造成土	底部 2/12	—	20.2	—	明赤褐2.5YR5/6	
391	085-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区		造成土	口縁部 1/12	31.8	—	—	にぶい赤褐5YR4/3	
392	058-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	12区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	淡黄2.5Y8/3	

第30表-7 第6次調査出土遺物観察表



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
393	086-01	陶器 (常滑)	甕	12区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙2.5YR6/6	
394	084-07	磁器 (瀬戸・美濃)	小椀	12区		造成土	口縁部 2/12	7.5	—	—	灰白7.5Y8/1	染付。
395	084-08	磁器 (肥前)	小椀	12区		造成土	全体 3/12	7.2	高台 3.5	4.9	白9/	染付。宝文。
396	088-02	陶器	皿	13区		SD6043	全体 3/12	13.6	高台 7.4	2.7	灰白N7/	灰釉。
397	1014-03	木製品	加工木	13区		SD6043	3/12以下	幅 10.0	厚 3.6	残長 11.9	—	
398	1020-01	木製品	底板	13区		SZ6035	5/12	92	厚 4.4	—	—	木釘。
399	089-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	13区		近世整地層 灰褐粗砂シルト	口縁部 3/12	9.6	—	—	灰白2.5Y8/1	鉄釉。拳骨形。
400	089-03	陶器 (瀬戸・美濃)	瓶	13区		近世整地層 灰褐粗砂シルト	全体 1/12以下	—	—	—	灰白5Y7/1	鉄釉。
401	089-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	13区		砂層攪乱	底部 4/12	—	高台 11.6	—	灰白N8/	鉄釉。
402	090-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	13区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	
403	090-02	陶器 (常滑)	甕	13区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙2.5YR7/6	
404	086-02	陶器 (常滑)	甕	13区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙2.5YR6/6	
405	088-06	磁器 (肥前)	椀	13区		砂層攪乱	全体 2/12	9.0	高台 5.2	5.2	白9/	広東椀染付。雲文。
406	088-05	磁器 (肥前)	椀	13区		砂層攪乱	底部 完存	—	高台 4.3	—	灰白N8/	染付青磁。五弁花文。
407	088-04	磁器 (肥前)	椀	13区		砂層攪乱	底部 4/12	—	高台 4.2	—	白9/	染付。大明年製。
408	088-03	磁器 (肥前)	皿	13区		砂層攪乱	口縁部 2/12	13.8	—	—	灰白N8/	染付。草花文。
409	087-01	陶器	椀	14区		SK6036	全体 2/12	9.2	高台 3.6	5.2	灰白8/	灰釉。
410	087-03	陶器 (瀬戸・美濃)	乘燗	14区		SK6036	ほぼ完形	6.8	4.7	5.5	灰白7.5Y7/1	鉄釉。台付たんころ形。
411	087-02	磁器	椀	14区		SK6036	全体 11/12	8.8	高台 3.8	5.7	白9/	染付。花文。
412	087-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	14区		SK6036	全体 1/12以下	—	—	—	白9/	染付。唐草文。
413	1013-01	木製品 (ヒノキ属)	曲物 底板	14区		SK6036	完存	13.2	厚 0.8	—	—	
414	1016-03	木製品 (アカシヤ亜属)	栓	14区		SK6036	完存	幅 3.1	厚 2.3	残長 4.9	—	
415	087-05	土師器	皿	14区		SD6037	口縁部 3/12	7.6	—	—	にふい、黄橙10YR7/3	
416	088-01	土師器	茶釜	14区		SD6037	全体 1/12以下	口径 25.0	—	—	にふい、橙7.5YR7/3	外面鏝以上まで煤付着。
417	087-07	陶器 (常滑)	甕	14区		SD6037	底部 1/12以下	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	
418	087-06	陶器	—	14区		SD6037	全体 1/12以下	—	—	—	灰白10YR8/1	器形不明。雲気文。
419	089-01	磁器 (肥前)	椀	14区		灰褐色礫混細砂	高台完存	—	高台 4.2	—	灰白8/	染付。草文+吉祥文字。
420	092-03	陶器 (常滑)	甕	15区		SD6038	口縁部 1/12	31.9	—	—	にふい、橙5YR7/3	
421	092-04	瓦質土器	—	15区		SD6038	全体 1/12以下	—	—	—	灰N4/	器種不明。
422	092-02	磁器 (肥前)	加工円盤	15区		SD6038	完形	径 6.6	—	2.0	灰白7.5Y8/1	重82.3g。磁器椀を加工。染付+吉祥文字。
423	093-05	陶器	皿	15区		SK6040	底部 6/12	—	高台 6.0	—	灰白N8/	灰釉。
424	093-06	陶器	播鉢	15区		P1t2	口縁部 1/12以下	—	—	—	黄灰2.5Y5/1	鉄釉。
425	095-02	陶器	椀	15区		SK6039	底部 完存	10.4	高台 4.9	6.2	灰白5Y8/1	鉄釉+灰釉の化粧掛け。
426	093-03	陶器	土瓶	15区		SK6039	底部 2/12	—	7.2	—	にふい、黄橙10YR7/2	灰釉。
427	095-03	陶器	鉢	15区		SK6039	底部 完存	—	10.9	—	灰白5Y7/1	鉄釉または泥漿。
428	095-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	15区		SK6039	底部 完存	25.4	高台 12.8	6.6	灰白2.5Y8/1	馬の目皿。灰釉+鉄絵。
429	093-04	陶器	土瓶	15区		SK6039	注口部完存	—	—	—	灰白2.5Y7/1	灰釉。
430	131-01	陶器	鉢	15区		SK6039	底部 完存	—	高台 9.6	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
431	093-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	15区		SK6039	全体 3/12	11.4	高台 4.5	5.8	白9/	染付。雲気+四方罽。
432	093-01	磁器 (肥前)	湯呑	15区		SK6039	全体 3/12	6.8	高台 3.5	5.6	灰白N8/	染付。菊花文+五弁花文。
433	091-09	土師器	皿	15区		SK6056 最下層	口縁部 2/12	7.6	—	—	橙7.5YR6/6	
434	091-08	土師器	皿	15区		SK6056 最下層	口縁部 3/12	7.6	—	1.0	橙7.5YR6/6	
435	094-02	陶器	鍋	15区		SK6056	底部 7/12	—	8.6	—	灰白2.5Y8/2	行平鍋。
436	094-01	陶器 (常滑)	鉢	15区		SK6056	口縁部 1/12	16.6	—	—	オリーブ黒5Y3/1	
437	094-03	陶器	鉢	15区		SK6056	口縁部 2/12	28.5	—	—	灰白5Y8/1	黄瀬戸釉+銅緑釉化粧掛け。
438	091-10	陶器 (信楽)	椀	15区		SK6056	全体 4/12	7.2	高台 2.2	3.9	灰白2.5Y8/2	灰釉。
439	091-13	磁器 (肥前)	椀	15区		SK6056	口縁部 10/12	7.4	—	—	灰白8/	染付。草花文。
440	091-11	磁器 (肥前)	椀	15区		SK6056	底部 5/12	—	高台 6.0	—	白9/	広東椀染付。山水文+仮名文字。
441	091-14	磁器 (肥前)	椀	15区		SK6056	口縁部8/12	10.0	高台 5.2	5.5	灰白5Y7/1	広東椀染付。山水文+五弁花文。
442	091-12	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	15区		SK6056	全体 5/12	8.0	高台 3.2	4.1	白9/	染付。菊弁文。
443	096-02	土師器	焙烙	15区		近世整地層下層 暗褐シルト直上	口縁部 1/12以下	—	—	—	にふい、橙7.5YR6/4	
444	091-01	陶器 (常滑)	甕	15区		近世整地層上層 灰褐粗砂シルト	口縁部 2/12	60.0	—	—	橙5YR6/6	
445	091-02	陶器 (常滑)	火舎	15区		近世整地層上層 灰褐粗砂シルト	全体 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	内面に厚く炭化物付着。
446	091-04	陶器	皿	15区		近世整地層上層 灰褐粗砂シルト	口縁部 3/12	20.0	—	—	灰白2.5Y8/1	菊皿。灰釉。
447	091-05	陶器	皿	15区		近世整地層上層 灰褐粗砂シルト	全体 1/12	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	灰釉+呉須釉で描文字。
448	091-03	陶器	甕	15区		近世整地層上層 灰褐粗砂シルト	全体 1/12以下	—	—	—	にふい、橙7.5YR6/6	外面に墨書。

第30表-8 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
449	091-06	磁器 (肥前)	椀	15区		近世整地層上層 灰褐粗砂シルト	全体 3/12	8.0	高台 3.0	3.8	白9/	染付。変形文字連続文。
450	091-07	磁器 (肥前)	皿	15区		近世整地層下層 暗褐シルト直上	口縁部 3/12	10.8	高台 4.2	3.3	灰白N8/	染付青磁。四方襟+五弁花文+吉祥変形文字。
451	096-01	陶器 (常滑)	甕	15区		近現代造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR7/6	
452	096-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	15区		近現代造成土	口縁部 1/12	10.6	—	—	白9/	染付。草花文。
453	096-04	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	15区		近現代造成土	底部 2/12	—	高台 6.6	—	白9/	染付。
454	096-05	磁器	皿	15区		近現代造成土	底部 5/12	—	8.0	—	白9/	染付。草花文。蛇ノ目凹型高台。
455	100-03	瓦	丸瓦	16区		SK6044	3/12以下	—	—	2.5	にぶい橙7.5YR7/4	酸化焼成。
456	100-01	土師器	皿	16区		SK6044	口縁部 6/12	5.5	—	1.0	橙5YR7/6	
457	100-02	土師器	皿	16区		SK6044	口縁部 7/12	5.2	—	1.1	にぶい赤褐2.5YR5/4	
458	100-04	土師器	皿	16区		包含層	口縁部 1/12	6.6	—	—	浅黄橙10YR8/4	
459	104-05	土師器	皿	16区		包含層	口縁部 1/12	7.6	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	灯明皿。
460	104-04	土師器	皿	16区		包含層	口縁部 2/12	9.5	—	1.8	にぶい橙7.5YR7/4	灯明皿。
461	100-05	土師器	皿	16区		褐色土	口縁部 1/12	9.5	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	
462	100-06	土師器	皿	16区		褐色土	口縁部 1/12	9.5	—	—	橙7.5YR6/8	
463	101-02	土師器	焙烙	16区		褐色土	口縁部 1/12	36.0	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
464	098-01	土師器	鍋	16区		表土 (砂混り)	口縁部 2/12	32.0	—	—	黒5Y2/1	内外面に煤付着。
465	107-01	瓦質土器	羽釜	16区		包含層	銚部 1/12	銚径 26.0	—	—	暗灰N3/	
466	106-04	陶器	蓋	16区		包含層	口縁部 2/12	15.7	—	—	灰白2.5Y8/2	外面：透明釉+呉須釉の描画。内面：灰釉。
467	104-03	陶器	壺	16区		包含層	口縁部 2/12	7.4	—	—	灰黄2.5Y7/2	鉄釉。
468	098-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	16区		表土 (砂混り)	全体 3/12	10.0	6.0	2.0	灰白5Y7/1	灰釉。
469	097-05	陶器	椀	16区		包含層	底部 3/12	—	高台 4.8	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
470	097-03	陶器	椀	16区		包含層	底部 3/12	—	高台 4.6	—	淡黄2.5Y8/3	灰釉。京焼風陶器。
471	104-02	磁器	椀	16区		包含層	全体 12/12	7.9	高台 2.9	4.4	オリーブ灰2.5GY7/1	青磁。草文。
472	104-06	陶器	天目茶椀	16区		包含層	口縁部 2/12	10.5	—	—	灰白5Y8/1	鉄釉。
473	098-03	陶器	德利	16区		表土 (砂混り)	全体 1/12以下	—	—	—	灰白2.5Y7/1	灰釉。文字「西八口」。
474	106-03	陶器	德利	16区		包含層	底部 1/12	—	高台 10.2	—	灰白7.5Y8/1	灰釉。文字「口」。
475	103-02	陶器	播鉢	16区		包含層	口縁部 2/12	23.7	—	—	にぶい赤褐5YR4/3	播目22本/単。
476	103-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	16区		包含層	底部 3/12	—	16.0	—	淡黄2.5Y8/3	播目14本/単。
477	100-08	陶器	鉢	16区		褐色土中	口縁部 1/12以下	23.8	—	—	灰白5Y7/1	灰釉。
478	101-01	陶器 (常滑)	捏鉢	16区		包含層	口縁部 2/12	33.9	—	—	赤褐5YR4/6	内面摩滅。
479	105-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	16区		包含層	口縁部 1/12以下	37.8	—	—	淡黄2.5Y8/3	灰釉+鉄絵草文。
480	103-04	陶器	鉢	16区		包含層	底部 2/12	—	13.0	—	灰白5Y8/1	鉄釉。
481	098-02	陶器	皿	16区		表土 (砂混り)	底部 2/12	—	高台 11.8	—	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
482	103-03	陶器	鉢	16区		包含層	底部 2/12	—	高台 13.8	—	灰白N8/	柿釉。トチン痕。
483	101-03	陶器 (常滑)	甕	16区		褐色土	底部 2/12	—	15.8	—	明赤褐2.5YR5/6	
484	104-01	陶器	鉢	16区		包含層	底部 2/12	—	23.8	—	灰白2.5Y8/1	柿釉。
485	097-01	陶器	火鉢	16区		包含層	口縁部 2/12	24.0	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	
486	098-04	陶器	甕	16区		表土 (砂混り)	口縁部 1/12	18.0	—	—	灰白2.5Y8/2	柿釉+鉄釉化粧掛。
487	097-02	陶器	火鉢	16区		包含層	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白2.5Y8/2	京焼風陶器。
488	099-02	磁器 (肥前)	猪口	16区		表土 (砂混り)	底部 12/12	—	高台 3.0	—	白9/	染付。
489	104-07	磁器 (瀬戸・美濃)	小椀	16区		包含層	底部 6/12	8.8	高台 3.4	4.4	白9/	染付。梅花文。
490	099-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	16区		表土 (砂混り)	口縁部 2/12	6.8	—	—	灰白N8/	半磁器。染付。菊花文。
491	097-06	磁器 (瀬戸・美濃)	急須	16区		包含層	口縁部 3/12	6.8	—	—	白9/	染付。草花文+渦文。
492	106-01	磁器 (肥前)	皿	16区		包含層	底部 3/12	—	高台 6.8	—	灰白N8/	染付。
493	097-04	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	16区		包含層	口縁部 4/12	7.2	高台 4.2	2.9	白9/	染付。
494	099-01	磁器 (肥前)	椀	16区		表土 (砂混り)	底部 4/12	—	高台 3.2	—	灰白7.5Y8/1	染付。
495	106-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	16区		包含層	底部 1/12	—	高台 3.8	—	白9/	染付。半菊唐草文。
496	099-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	16区		表土 (砂混り)	全体 3/12	10.8	高台 4.0	5.6	白9/	染付。花蔓草文。
497	102-01	瓦	丸瓦	16区		褐色土	6/12以下	幅 13.2	残長 17.8	6.2	灰N4/	
498	100-07	石製品 (泥岩)	砥石	16区		褐色土	1/12以下	幅 3.1	厚 0.8	残長 5.8	にぶい橙5YR7/3	残存重12.0g。
499	107-02	瓦	伏間瓦	16区		包含層	1/12以下	—	—	—	灰N4/	角浅伏間瓦。
500	107-03	陶器	皿	17区		SK6049	口縁部 1/12以下	25.4	—	—	灰白5Y8/1	透明釉+鉄絵。
501	107-04	磁器 (肥前)	猪口	17区		SK6049	底部 5/12	—	3.4	—	灰白10Y8/1	染付。
502	109-06	土師器	皿	17区		SK6052	口縁部 4/12	7.1	—	—	にぶい橙5YR6/4	灯明皿。
503	109-05	陶器	天目茶椀	17区		SK6052	底部 8/12	—	高台 4.6	—	灰白5Y7/1	鉄釉。
504	109-07	瓦	軒平瓦	17区		SK6052	1/12以下	—	—	垂長 4.2	灰N4/	唐草文。

第30表-9 第6次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
505	109-01	土師器	皿	17区		SD6050	口縁部 1/12	11.7	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
506	109-04	陶器	片口鉢	17区		SD6050	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白2.5Y7/2	灰釉。
507	109-03	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	17区		SD6050	全体 3/12	8.2	高台 5.0	1.6	白9/	透明釉。
508	109-02	磁器 (肥前)	壺	17区		SD6050	底部 3/12	—	高台 4.5	—	灰白7.5Y8/1	油壺。染付。
509	108-01	瓦	丸瓦	17区		SD6050	2/12以下	—	—	6.0	灰N4/	ゴザ圧痕。
510	108-03	瓦	丸瓦	17区		SD6050	2/12以下	—	—	5.1	にぶい黄橙10YR7/2	酸化焼成。
511	108-02	瓦	棧瓦	17区		SD6050	2/12以下	—	—	—	灰白10YR8/1	
512	111-02	瓦質土器	火鉢	17区		造成土 路床細砂直下	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	雷文押型。
513	110-04	土製品	蓋	17区		造成土 路床細砂直下	完形	7.6	—	1.8	にぶい橙7.5YR6/4	下面に布目痕あり。
514	110-03	陶器 (瀬戸・美濃)	乗燭	17区		造成土 路床細砂直下	脚柱部完存	—	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
515	111-01	陶器	鉢	17区		造成土 ベース直上	全体 4/12	13.2	高台 10.0	14.7	灰白10YR8/2	植木鉢に転用。鉄釉。
516	111-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	17区		造成土 路床細砂直下	全体 3/12	—	—	—	白9/	染付。転写。
517	112-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	17区		造成土 ベース直上	全体 9/12	10.8	4.0	5.5	白9/	色絵。
518	112-01	磁器 (肥前)	瓶	17区		造成土 ベース直上	全体 8/12	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	油壺。染付。五弁花文。
519	111-04	磁器 (肥前)	皿	17区		造成土 路床細砂直下	全体 3/12	13.8	高台 7.6	3.0	灰白8/	染付。蔓草文+五弁花文。蛇ノ目 刺ぎ。
520	1014-01	木製品	割材	17区		造成土 ベース直上	完形	最大幅 5.5	最大厚 3.7	長 14.5	—	
521	118-01	瓦	丸瓦	17区		造成土 ベース直上	6/12以下	—	—	—	灰白7.5Y7/1	
522	110-01	瓦質製品	—	17区		造成土 路床細砂直下	2/12以下	—	—	—	にぶい褐7.5YR6/3	穿孔。
523	110-02	瓦	熨斗瓦	17区		造成土 ベース直上	6/12以下	残幅 10.4	—	残長 11.8	にぶい黄2.5Y6/3	
524	115-01	土師器	焙烙	18区		SD6053下層 粘砂層	口縁部 1/12	37.4	—	—	にぶい褐7.5YR5/3	
525	115-02	陶器	椀	18区		SD6053下層 粘砂層	口縁部 2/12	9.6	—	—	灰白10YR7/1	鉄釉。
526	115-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	18区		SD6053	口縁部 2/12	11.7	—	—	灰白5Y8/1	灰釉。
527	115-04	陶器 (瀬戸・美濃)	香炉	18区		SD6053下層 粘砂層	底部 6/12	9.6	7.6	6.8	灰黄2.5Y7/2 黄褐10YR5/6	筒形香炉。削り菊花文。鉄釉+白 泥化粧掛け。
528	114-02	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	18区		SD6053下層 粘砂層	底部 3/12	—	11.8	—	にぶい赤褐5YR4/3	描目18本/単。
529	113-01	陶器 (常滑)	甕	18区		SD6053上層 砂層	口縁部 2/12	40.8	—	—	橙5YR6/6	
530	114-01	陶器	甕	18区		SD6053下層 粘砂層	底部 2/12	—	24.0	—	赤褐2.5YR4/6	
531	113-02	陶器 (常滑)	甕	18区		SD6053上層 砂層	全体 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
532	114-03	瓦	棧瓦	18区		SD6053 下層	2/12以下	—	—	—	灰N4/	
533	116-01	土師器	鍋	18区		SK6055	口縁部 2/12	28.3	—	—	にぶい橙7.5YR7/3	
534	116-03	陶器	椀	18区		整地盛土 暗褐色細砂	口縁部 1/12	9.3	—	—	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
535	120-03	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	18区		排土	底部 6/12	—	10.0	—	淡黄2.5Y8/3	17本/単。
536	117-04	陶器	鉢	18区		整地盛土 暗褐色細砂	底部 3/12	—	高台 9.2	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉+白泥化粧掛け。
537	117-03	陶器	火舎	18区		整地盛土 暗褐色細砂	口縁部 1/12	24.1	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	内面に炭化物付着。
538	117-02	陶器 (常滑)	火鉢	18区		整地盛土 暗褐色細砂	口縁部 1/12	26.1	—	—	灰5Y4/1	
539	117-01	陶器 (常滑)	甕	18区		整地盛土 暗褐色細砂	口縁部 2/12	32.6	—	—	灰赤2.5YR4/2	
540	119-03	陶器	皿	18区		近代造成土	口縁部 2/12	14.5	—	—	橙2.5YR6/6	内面に厚く炭化物付着。
541	116-02	陶器	皿	18区		整地盛土 暗褐色細砂	底部 3/12	—	高台 9.8	—	灰白7.5Y7/1	灰釉。
542	120-01	磁器	椀	18区		近代整地層	底部 1/12	—	高台 4.8	—	白9/	染付。網目文。
543	120-02	磁器 (肥前)	椀	18区		排土	全体 4/12	9.4	高台 3.7	—	灰白7.5Y8/1	染付。蔓草文+「上」。
544	120-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	18区		近代整地層	底部 3/12	10.9	高台 4.0	—	白9/	転写。
545	119-02	瓦製品	—	18区		整地盛土 暗褐色細砂	2/12以下	—	—	—	灰白N8/	穿孔。
546	119-01	瓦	平瓦	18区		整地盛土 暗褐色細砂	—	—	—	—	灰白2.5Y7/1	
547	131-02	土師器	皿	20区		SK6057	口縁部 2/12	9.2	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
548	068-05	土師器	皿	20区		SK6057	口縁部 3/12	8.3	5.4	1.0	にぶい橙7.5YR6/4	
549	129-06	陶器 (瀬戸・美濃)	乗燭	20区		SK6057	完形	7.2	5.8	6.8	灰白5Y8/1	鉄釉。
550	129-05	陶器 (瀬戸・美濃)	乗燭	20区		SK6057	口縁部 11/12	8.0	—	6.6	灰白2.5Y8/1	鉄釉。
551	129-01	白磁	椀	20区		SK6057	口縁部 3/12	13.0	—	—	灰白5Y8/1	
552	129-03	陶器	皿	20区		SK6057	全体 10/12	12.8	高台 6.5	3.0	淡黄2.5Y8/3	灰釉+白泥化粧掛け。
553	129-02	陶器	蓋	20区		SK6057	全体 1/12	—	—	—	灰白5Y8/2	灰釉。
554	129-04	陶器	蓋	20区		SK6057	全体 11/12	—	7.3	2.8	灰白5Y8/1	柿釉。三又トチン痕。
555	130-01	陶器	土瓶	20区		SK6057	口縁部 10/12	8.0	—	—	灰白5Y8/2	灰釉。
556	130-02	陶器	土瓶	20区		SK6057	底部 5/12	—	8.6	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
557	131-03	陶器	鉢	20区		SK6057	口縁部 2/12	25.6	—	—	灰白2.5Y8/1	黄瀬戸釉+銅緑釉化粧掛け。
558	069-03	陶器 (常滑)	井戸枠	20区		SK6057	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白7.5YR8/2	
559	068-06	陶器	香炉	20区		SK6057	底部 2/12	10.0	—	—	灰白2.5Y8/2	黄瀬戸釉。
560	127-03	磁器 (肥前)	椀	20区		SK6057	全体 9/12	13.2	高台 4.8	7.0	灰白N8/	染付。花唐草文+吉祥文字。

第30表-10 第6次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類(産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構層位	部位残存度	法量 (cm)			色調(外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
561	127-01	磁器(肥前)	椀	20区		SK6057	全体6/12	8.1	高台3.6	5.1	白9/	染付。山水文+吉祥文字。
562	127-04	磁器(肥前)	花瓶	20区		SK6057	底部9/12	—	高台7.0	—	白9/	染付。竹文+日足文。
563	127-02	磁器(肥前)	椀	20区		SK6057	全体6/12	8.1	高台2.9	4.0	白9/	染付。楼閣山水文。
564	128-03	磁器(肥前)	椀	20区		SK6057	口縁部4/12	7.4	—	—	白9/	染付。雪輪文+四方襷文。
565	128-01	磁器(肥前)	椀	20区		SK6057	口縁部5/12	7.5	—	—	灰白N8/	染付青磁。四方襷文。
566	069-01	磁器	猪口	20区		SK6057	底部6/12	—	4.3	—	白9/	染付。草文。
567	1016-04	木製品	加工材	20区		SK6057	—	幅6.3	厚1.8	残長75.2	—	
568	1018-01	木製品	部材	20区		SK6057	完存	幅7.8	厚2.3	長90.4	—	
569	146-01	陶器(常滑)	井戸杵	20区		SK6057	口縁部2/12	57.0	—	—	にぶい、褐7.5YR6/3	
570	069-02	磁器(肥前)	椀	20区		SK6057	底部9/12	—	高台3.8	—	灰白N8/	染付青磁。五弁花文。
571	128-02	磁器(肥前)	椀	20区		SK6057	全体8/12	9.0	高台3.5	5.5	灰白N8/	染付。丸文+格子文。
572	128-05	磁器(肥前)	皿	20区		SK6057	全体3/12	12.7	高台9.2	4.8	灰白N8/	染付。亀甲文+花唐草。
573	128-04	磁器(肥前)	皿	20区		SK6057	口縁部2/12	14.2	—	—	灰白N8/	染付青磁。梅花文+放射状文。
574	133-01	瓦	丸瓦	20区		SK6057	6/12以下	—	—	7.2	暗灰N3/	釘穴。焼成前穿孔。
575	147-01	陶器(常滑)	井戸杵	20区		SK6057	口縁部1/12	60.8	57.4	—	灰褐10YR5/2	口縁部と底部接合せず。
576	121-01	土師器	焙烙	20区		SD6058	口縁部2/12	40.0	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	外面に煤付着。
577	121-02	土師器	茶釜	20区		SD6058	口縁部2/12	12.2	—	—	にぶい黄橙10YR6/3	
578	121-03	陶器(瀬戸・美濃)	皿	20区		SD6058	完形	7.8	3.5	1.7	淡黄2.5Y8/3	鉄釉。
579	132-01	陶器(常滑)	甕	20区		SK6059	底部1/12	—	24.2	—	浅黄橙10YR8/3	鉄釉。
580	135-03	陶器	鉢	20区		SK6059	底部4/12	—	高台13.3	—	浅黄2.5Y7/3	鉄釉。トチン痕。
581	135-04	陶器	甕	20区		SK6059	底部4/12	—	高台15.2	—	にぶい黄橙10YR7/3	鉄釉。トチン痕。
582	135-02	瓦	軒平瓦	20区		SK6059	2/12以下	—	—	垂長4.0	灰N4/	唐草文。
583	135-01	瓦	軒平瓦	20区		SK6059	1/12以下	—	—	—	暗灰N3/	
584	134-02	瓦	平瓦	20区		SK6059	3/12以下	—	—	—	暗灰N3/	一部燻不良。
585	134-01	瓦	棧瓦	20区		SK6059	7/12以下	—	—	谷深2.8	暗灰N3/	
586	122-01	土師器	鍋	20区		SD6060上層 灰色粘砂	口縁部1/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	
587	122-04	陶器	鉢	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部4/12	15.1	—	—	橙7.5YR6/6	灰釉。外面に煤付着。
588	122-03	陶器(常滑)	鉢	20区		SD6060上層 灰色粘砂	口縁部2/12	23.4	—	—	にぶい赤褐2.5YR5/4	
589	121-06	瓦質土器	羽釜	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部2/12	23.2	鏝径29.7	—	黒N2/	内外面に厚く炭化物付着。
590	121-05	瓦質土器	火入	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	底部1/12以下	—	—	—	暗灰N3/	
591	121-04	瓦質土器	火入	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	底部1/12以下	—	—	—	灰N4/	
592	124-07	瓦質土器	五徳	20区		SD6060 黒色シト	2/12以下	—	—	—	灰白2.5Y7/1	
593	125-05	陶器	椀	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	全体9/12	11.0	高台4.6	5.5	灰白2.5Y7/1	灰釉。
594	123-05	陶器	香炉	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部1/12	13.1	—	—	灰白2.5Y8/2	透明釉+鉄絵。
595	124-04	陶器	鍋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	底部3/12	—	7.6	—	灰白2.5Y8/2	
596	124-05	陶器	蓋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	摘み部ほぼ完存	—	—	—	にぶい、黄橙10YR7/2	灰釉。
597	124-01	陶器	鍋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部2/12	14.0	—	—	浅黄橙10YR8/3	行平鍋。灰釉。
598	125-04	陶器	小杯	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	口縁部1/12	5.6	—	—	灰白5Y7/1	色絵、赤・金。
599	124-06	陶器	蓋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	全体3/12	9.2	—	3.7	灰白2.5Y8/2	灰釉。
600	124-02	陶器	土瓶	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部2/12	8.0	—	—	にぶい、黄橙10YR7/3	透明釉+呉須釉+銅緑釉。
601	125-01	陶器	土瓶	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部7/12	8.8	—	—	灰白2.5Y8/1	銅緑釉。
602	124-03	陶器	鍋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部1/12	16.0	—	—	灰黄2.5Y7/2	行平鍋。
603	126-01	陶器(常滑)	甕	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	口縁部2/12	47.6	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	
604	125-02	陶器	甕	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	口縁部1/12以下	—	—	—	灰黄褐10YR6/2	
605	122-02	陶器	火鉢	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	全体1/12以下	—	—	—	にぶい、橙7.5YR6/4	浮彫梅花文。
606	123-03	磁器(肥前)	蓋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部2/12	10.7	—	—	白9/	染付。外：雲文、内：四方襷文。
607	122-05	磁器(瀬戸・美濃)	椀	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	底部12/12	6.9	高台3.4	5.5	白9/	染付。草木文。
608	122-07	磁器(肥前)	紅猪口	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	底部3/12	7.6	—	—	白9/	色絵、赤。
609	123-02	磁器(肥前)	小碗	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部1/12	9.1	—	—	白9/	染付。四方襷文。外：色絵、赤・青。
610	122-06	磁器(肥前)	椀	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部2/12	11.0	—	—	灰白8/	染付。
611	126-02	磁器(肥前)	椀	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	底部3/12	10.0	高台3.6	5.0	灰白8/	染付。丸文+菊蔓草文。
612	123-01	磁器(瀬戸・美濃)	蓋	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	口縁部3/12	9.1	高台3.3	2.4	白9/	染付。山水文+蔓草文。
613	126-03	磁器(瀬戸・美濃)	椀	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	底部3/12	—	高台4.0	—	白9/	染付。
614	125-03	青磁(龍泉)	椀	20区		SD6060下層 近世造成土ベース	口縁部2/12	16.8	—	—	灰白5Y7/1	連弁文。
615	123-06	瓦	軒丸瓦	20区		SD6060上層 黒シト混灰色粘砂	1/12以下	—	—	—	灰白N7/	左巻三巴連珠。
616	1019-01	木製品	丸太	20区		SD6060	6/12以下	11.0	—	残長54.3	—	

第30表-11 第6次調査出土遺物観察表



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
617	132-03	瓦質土器	焜炉	20区		SK6061	口縁部 2/12	20.0	—	—	灰N4/	
618	132-02	陶器 (常滑)	甕	20区		SK6061	底部 1/12	—	32.0	—	橙7.5YR7/6	
619	131-04	陶器	播鉢	20区		SK6061	口縁部 1/12以下	—	—	—	浅黄橙10YR8/4	播目3本/cm。
620	131-05	磁器 (肥前)	椀	20区		SK6061	底部 6/12	—	高台 3.4	—	灰白8/	染付。草花文+「右」。
621	131-06	磁器 (肥前)	皿	20区		SK6061	全体 2/12	12.0	高台 4.4	3.6	灰白8/	染付。草文。蛇ノ目釉剥ぎ。
622	136-05	陶器	鉢	20区		近世造成土 SK6059直上	口縁部 1/12以下	28.0	—	—	灰白5Y8/1	灰釉。
623	136-04	陶器	皿	20区		近世造成土	口縁部 3/12	8.7	3.6	1.6	灰白5Y8/1	灰釉。
624	136-02	陶器	壺	20区		近世造成土	底部 8/12	—	高台 11.8	—	灰白5Y8/2	灰釉。
625	136-06	陶器	壺	20区		暗褐色砂 地山直上黒色シルト	口縁部 6/12	6.5	—	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
626	136-01	陶器	椀	20区		近世造成土 地山直上灰褐色粘砂	底部 完存	12.2	5.8	6.4	淡黄2.5Y8/3	鉄釉。鉄絵蔓草文。裏底銘。
627	136-03	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	20区		近世造成土	口縁部 2/12	12.7	高台 5.4	2.4	白9/	透明釉。輪花。
628	137-01	瓦質土器	槽	21区		ベース直上	4/12以下	—	—	—	暗灰N3/	4脚。
629	139-07	陶製品	—	21区		近代造成土	—	—	—	—	黄灰2.5Y4/1	
630	139-03	陶器	壺	21区		ベース直上	底部 2/12	—	9.6	—	灰白2.5Y8/2	うのふ釉。
631	138-02	陶器 (常滑)	鉢	21区		ベース直上	口縁部 1/12	23.4	—	—	にぶい橙7.5YR7/3	
632	137-04	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	21区		排土	口縁部 1/12以下	—	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	播目6本/cm。鉄釉。
633	137-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	21区		近代造成土 ベース直上	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	播目4本/cm。鉄釉。
634	137-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	21区		近代造成土	底部 5/12	—	13.0	—	灰白2.5Y8/2	播目14本/単。鉄釉。
635	138-06	磁器 (肥前)	蓋	21区		ベース直上	口縁部 2/12	摘み径 6.9	—	—	白9/	染付。草花文。
636	138-07	磁器 (肥前)	椀	21区		排土	底部 6/12	10.3	高台 5.0	4.9	灰白8/	広東椀染付。山水文+五弁花文。
637	139-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	21区		近代造成土 ベース直上	口縁部 2/12	6.7	—	—	白9/	転写。
638	138-05	磁器 (肥前)	皿	21区		排土	口縁部 1/12以下	—	—	—	白9/	染付。蔓草文。
639	138-04	磁器 (肥前)	椀	21区		排土	底部 3/12	—	高台 4.2	—	白9/	染付。蔓草文。
640	138-03	磁器	椀	21区		近代造成土 ベース直上	底部 3/12	—	高台 3.5	—	白9/	染付。草文。
641	139-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	21区		近代造成土 ベース直上	底部 6/12	—	高台 4.3	—	灰白2.5Y8/1	灰釉。
642	142-07	磁器 (肥前)	椀	22区		SK6063	全体 6/12	9.0	高台 5.8	6.8	白9/	染付。山水文。裏底銘「福」。東へ 35m離れた21区造成土出土と接合。
643	1021-02	木製品	部材	22区		SK6063	6/12以下	幅 8.3	厚 3.1	残長 10.1	—	
644	1021-01	木製品	加工材	22区		SK6063	—	幅 4.5	厚 2.9	長 7.9	—	
645	1022-02	木製品	曲物	22区		SK6063	ほぼ完形	16.0	厚 0.4	9.5	—	
646	1021-03	木製品	加工材	22区		SK6063	6/12以下	幅 2.7	厚 1.1	残長 14.8	—	木釘。
647	1022-01	木製品 (アスナロ亜属)	曲物 底板	22区		SK6063	完形	11.7	厚 1.1	—	—	擦痕。
648	141-03	土師器	皿	22区		SK6064	口縁部 1/12	7.2	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	
649	141-05	土師器	皿	22区		包含層	口縁部 2/12	6.0	—	1.2	橙5YR7/6	
650	141-04	土師器	皿	22区		包含層	口縁部 2/12	7.6	—	—	橙5YR7/6	
651	141-06	土師器	皿	22区		包含層	全体 3/12	8.0	5.0	1.1	橙5YR7/6	
652	139-06	土師器	鍋	22区		包含層	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	
653	139-05	土師器	焙烙	22区		包含層	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰褐7.5YR4/2	
654	139-04	土師器	焙烙	22区		包含層	口縁部 1/12以下	—	—	—	橙5YR7/6	
655	141-02	瓦質土器	焜炉	22区		包含層	口縁部 2/12	18.8	—	—	灰N4/	
656	142-02	陶器	鉢	22区		包含層	口縁部 1/12	23.2	—	—	灰白2.5Y8/1	灰釉。
657	142-01	陶器	蓋	22区		包含層	全体 3/12	6.2	4.8	1.9	灰白2.5Y8/2	灰釉。
658	142-03	陶器	皿	22区		包含層	口縁部 1/12	11.6	—	—	灰白10YR7/1	赤絵。
659	138-01	陶器	鉢	22区		包含層	口縁部 2/12	15.6	—	—	赤灰2.5YR4/1	
660	140-02	陶器	甕	22区		包含層	底部 2/12	—	15.8	—	赤灰2.5YR4/1	
661	141-01	陶器 (常滑)	甕	22区		包含層	口縁部 1/12	39.4	—	—	赤灰2.5YR4/1	
662	140-01	陶器 (常滑)	甕	22区		包含層	全体 1/12以下	—	—	—	橙7.5YR7/6	体部外面に墨書。
663	142-06	磁器 (肥前)	椀	22区		包含層	口縁部 3/12	11.0	—	—	灰白5Y8/1	染付。外：草文、内：四方禪文。
664	142-05	磁器 (肥前)	椀	22区		包含層	口縁部 1/12	9.8	—	—	灰白5Y8/1	染付。草花文。
665	142-04	磁器	皿	22区		包含層	全体 2/12	11.6	高台 4.4	3.5	灰白8/	染付。二重格子文。蛇ノ目釉剥ぎ。
666	144-04	土師器	茶釜	23区		近世造成土	口縁部 1/12	鏝径 21.2	—	—	浅黄橙10YR8/3	
667	143-01	磁器 (肥前)	皿	23区		近世造成土	底部 6/12	—	高台 8.2	—	灰白8/	染付。草文。
668	143-02	陶器	播鉢	23区		造成土	口縁部 1/12以下	—	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
669	144-03	陶器	皿	23区		近代造成土	口縁部 2/12	11.7	—	—	灰白2.5Y8/2	銅緑釉。
670	144-02	陶器	皿	23区		近代造成土	底部 1/12	—	高台 15.3	—	淡黄2.5Y8/3	灰釉+銅緑釉。トチン痕。
671	144-01	磁器 (肥前)	皿	23区		造成土	底部 6/12	—	高台 9.0	—	灰白5Y8/1	染付。丸文。蛇ノ目型高台。
672	143-03	磁器	皿	23区		造成土	底部 4/12	—	13.6	—	白9/	染付+色絵。赤・金の2色を加える。

第30表-12 第6次調査出土遺物観察表

### 3. 樹種同定 1

#### (1) 試料

試料は三重県松坂城下町遺跡(第6次)から出土した食器具1点、容器5点、雑具1点、用途不明品2点の合計9点である。

#### (2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### (3) 結果

樹種同定結果(針葉樹3種、広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

**マツ科ツガ属** (*Tsuga* sp.) (遺物No. 351) (写真図版85) 木口は採取出来なかった。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はスギ型、ヒノキ型で1分野に2~4個ある。細胞壁には数珠状末端壁がある。上下両端には放射仮道管がある。板目では放射組織はすべて単列であった。ツガ属はツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。

**ヒノキ科ヒノキ属** (*Chamaecyparis* sp.) (遺物No. 77, 347, 348, 350, 413) (写真図版84No. 77, 347, 348、写真図版85No. 350、写真図版86No. 413) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

**ヒノキ科アスナロ属** (*Thujaopsis* sp.) (遺物No. 349, 647) (写真図版85No. 349、写真図版86No. 647) 木口は採取出来なかった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

**ブナ科コナラ属アカガシ亜属** (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) (遺物No. 414) (写真図版86) 放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管(~200 $\mu$ m)が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1~3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

(汐見 真 株 吉田生物研究所)

#### [参考文献]

- ・ 林 昭三 『日本産木材顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所 1991
- ・ 伊東隆夫 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I~V』

No.	実測番号	品名	樹種
77	1014-02	板状部材	ヒノキ科ヒノキ属
347	1016-01	箸	ヒノキ科ヒノキ属
348	1013-02	棒状部材	ヒノキ科ヒノキ属
349	1017-01	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
350	1015-02	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属
351	1015-01	曲物底板	マツ科ツガ属
413	1013-01	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属
414	1016-03	栓	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
647	1022-01	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属

第31表 第6次調査樹種同定結果 1

京都大学木質科学研究所 1999

- ・ 島地 謙・伊東隆夫 『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版 1988
- ・ 北村四郎・村田 源 『原色日本植物図鑑木本編 I・II』 保育社 1979
- ・ 奈良国立文化財研究所 『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』 1985
- ・ 奈良国立文化財研究所 『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』 1993

[使用顕微鏡]

- ・ Nikon DS-Fi1

## 4. 樹種同定 2

### (1) はじめに

本報告では、松坂城下町遺跡（第6次）より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

### (2) 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### (3) 結果

第32表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

**ヒノキ** *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科  
樹種No.66、67、69、175、71-1、71-2、71-3  
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直かつ緻密で、耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築などに広く用いられる。

**サワラ** *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科  
樹種No.128 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射柔細胞の分野壁孔はやや大きく、ヒノキ型であるがスギ型の傾向を示すものもあり、1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直かつ緻密である。ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

**ヒノキ科** Cupressaceae 樹種No.68 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材であ

樹種No.	名 称		結 果 (学名/和名)	
66	箸		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
67	箸		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
68	箸		Cupressaceae	ヒノキ科
69	箸		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
71-1		台	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
71-2	下駄	差歯(前)	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
71-3		差歯(後)	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
128	へら		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
175	箸		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ

第32表 第6次調査樹種同定結果 2

る。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射柔細胞の分野壁孔は腐朽のため観察できない。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキ科と同定される。ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロ属などが含まれる。本州、四国、九州、屋久島に分布する常緑高木で、通常高さ3～40m、径1mに達する。材は木理通直かつ緻密で耐朽性・耐湿性が高い良材であり、建築など広く用いられる。

#### (4) 所見

同定の結果、松坂城下町遺跡（第6次）の木製品はヒノキ5点、サワラ1点、ヒノキ科1点であった。なお、樹種No.71の下駄については、台、差歯（前）、差歯（後）のいずれもヒノキであった。

ヒノキは箸、下駄に使われており、サワラはへらに使われている。いずれも、材は木理通直で弾力があり、特に保存性が高い良材であるが、サワラの方がより耐湿性が高い。また、箸に使われているヒノキ科には、ヒノキやサワラのほか、アスナロ属などが含まれ、概して耐朽性・耐湿性が高く、大きな材もとれる良材である。いずれも温帯を中心に分布する常緑高木で、ヒノキは特に温帯中部に多い。

以上から、松坂城下町遺跡（第6次）の木製品はいずれも針葉樹であり、保存性が高く木理通直かつ緻密で加工がしやすいヒノキ、サワラ、ヒノキ科が使われていた。東海地方において、ヒノキ、サワラなどのヒノキ科は、律令期以降、様々な用途に多用される樹種である。本遺跡で同定された樹種はいずれも温帯に広く分布するものであり、当時の遺跡周辺地域で採取できると考えられる。

((一社)文化財科学研究センター)

#### [参考文献]

- ・ 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース．海青社，449p.
- ・ 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
- ・ 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
- ・ 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.
- ・ 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別第1号．植生史研究会，242p.

## 5. 樹種同定3

### (1) 試料と方法

試料は、溝跡であるSD6001や土坑であるSK6002などから出土した木製品29点である。発掘調査所見では、18世紀～19世紀代の木製品と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

### (2) 結果

同定の結果、針葉樹ではツガ属とヒノキ、サワラの3分類群、広葉樹ではオニグルミとトチノキの2分類群がみられた。ヒノキが最も多く20点で、サワラが5点、ツガ属が2点、オニグルミとトチノキが各1点であった。同定結果を第33表に、一覧を第34表に示す。

樹種/器種	くさび	一木下駄	曲物			漆椀	箸	建具材	建築部材	棒状具	杭	加工材	合計
			蓋	側板	底板								
ツガ属								1	1				2
ヒノキ			1	2	3		8	3	1	1		1	20
サワラ	2			2							1		5
オニグルミ		1											1
トチノキ						1							1
合計	2	1	1	4	3	1	8	4	2	1	1	1	29

第33表 第6次調査樹種同定結果3



次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

**ツガ属** *Tsuga* マツ科 写真図版90 1a-1c(No. 90)

仮道管と放射仮道管、放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列である。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

ツガ属には温帯に分布するツガと亜高山帯に生えるコマツガがある。材の性質は似ており、比較的硬で、切削はあまり容易ではないが、水湿に耐える。

**ヒノキ** *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真図版90 2a-2c(No. 76)、3c(No. 83) 仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列

である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

**サワラ** *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真図版90 4a-4c(No. 82)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1～6細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

**オニグルミ** *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino クルミ科 写真図版

試料No.	実測番号	調査年度	遺構名	層位	器種	樹種	木取り	備考
65	1006-01	H28-1	SD6001	黒色粘土	箸	ヒノキ	芯去削出	
70	1012-01	H28-1	SD6001	黒色粘土	くさび	サワラ	柁目	
72	1011-02	H28-1	SD6001	黒色粘土	建具材	ツガ属	追柁目	
73	1007-01	H28-1	SD6001	黒色粘土	棒状具	ヒノキ	柁目	
74	1004-02	H28-1	SD6001	黒色粘土	建具材	ヒノキ	芯去削出	
75	1011-01	H28-1	SD6001	黒色粘土	加工材	ヒノキ	柁目	
76	1004-03	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物底板	ヒノキ	柁目	
78	1005-01	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物蓋	ヒノキ	追柁目	
79	1005-02	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物底板	ヒノキ	柁目	黒漆塗
80	1008-02	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物側板	ヒノキ	柁目	
81	1008-04	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物側板	サワラ	柁目	
82	1008-03	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物側板	サワラ	柁目	
83	1008-01	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物側板	ヒノキ	柁目	
88	1007-02	H28-1	SK6002	暗赤灰シルト	建具材	ヒノキ	芯去削出	釘付着
90	1010-01	H28-1	—	黒色粘土	建築部材	ツガ属	角材	橋脚か
91	1009-01	H28-1	—	黒色粘土	建築部材	ヒノキ	角材	橋脚か
92	1009-02	H28-1	—	黒色粘土	杭	サワラ	芯持丸木	
119	1006-05	H28-2	—	黒色粘土混細砂	箸	ヒノキ	芯去削出	
120	1006-06	H28-2	—	黒色粘土混細砂	箸	ヒノキ	芯去削出	
121	1006-08	H28-2	—	黒色土	箸	ヒノキ	芯去削出	
122	1006-02	H28-2	—	黒色粘土混細砂	箸	ヒノキ	芯去削出	
123	1006-03	H28-2	—	黒色粘土混細砂	箸	ヒノキ	芯去削出	
124	1006-09	H28-2	—	黒色土	箸	ヒノキ	芯去削出	
125	1006-07	H28-2	—	黒色粘土混細砂	箸	ヒノキ	芯去削出	
126	1012-02	H28-2	—	黒色粘土混細砂	くさび	サワラ	柁目	
127	1003-01	H28-2	—	黒色粘土混細砂	建具材	ヒノキ	芯持削出	
129	1003-02	H28-2	—	黒色粘土混細砂	一木下駄	オニグルミ	柁目	連歯
174	1002-01	H28-3	—	黒色粘土	漆椀	トチノキ	横木取り	内面：黒漆、外面：赤漆
236	1004-01	H28-5	—	黒褐色土	曲物底板	ヒノキ	柁目	

第34表 第6次調査樹種同定結果一覧

90 5a-5c (No. 129) やや大型の道管が単独ないし 2～3 個複合してまばらに散在し、晩材部では道管径が減じる半環孔材である。軸方向柔細胞は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4 列となる。

オニグルミは北海道から九州まで広く分布し、河岸や湿潤な平地の肥沃なところに生育する落葉高木の広葉樹である。材の堅さ、重さは中庸で、切削等の加工は容易である。

**トチノキ** *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科  
写真図版90 6a-6c (No. 174) 小型の道管が単独ないし 2～3 個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

### (3) 考察

建具材と建築部材はツガ属とヒノキであった。ツガ属とヒノキは木理通直で真っ直ぐに生育する樹種である。ヒノキは加工性が良いが、ツガ属はやや重硬で加工性があまり良くなく、水湿に強いという材質を持つ (伊東ほか, 2011)。ヒノキは、江戸時代頃の建築部材では多く利用されており、ツガ属は東京都内の江戸城関連の遺跡などで確認されている (伊東・山田編, 2012)。

曲物蓋と曲物底板、箸、棒状具、加工材はヒノキであった。真っ直ぐで加工性が良いという特徴を生かした利用であったと考えられる。また、曲物側板はヒノキとサワラ、くさびと杭はサワラであった。サワラは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良くて水湿に強いという材質を持つ (伊東ほか, 2011)。これらの木製品も、加工性の良さや水湿に対する強さを生かした木材利用であったと考えられる。

愛知県の清洲城下町遺跡や名古屋城三の丸遺跡から出土したくさびには、コウヤマキやヒノキ、アスナロ属といった針葉樹が多く利用されており (伊東・山田編, 2012)、針葉樹を利用するという傾向は一致する。また杭については、岐阜県可児市の柿田遺跡から出土した鎌倉時代～江戸時代頃の杭に、多様な針葉樹や広葉樹が利用されている例がある (伊東・山田編, 2012)。

一木下駄は、オニグルミであった。オニグルミは加工性の良い樹種である (伊東ほか, 2011)。三重県の桑名城下町遺跡では江戸時代後半の下駄にヒノキとサワラ、アスナロ、クリが確認されている (伊東・山田編, 2012)。

漆椀は、トチノキであった。トチノキは軽軟な樹種で、加工性が非常に良い樹種である (伊東ほか, 2011)。三重県の桑名城下町遺跡では江戸時代後半の椀にトチノキが多く確認されている (伊東・山田編, 2012)。 (小林克也 (株) パレオ・ラボ)

### [引用文献]

- ・ 平井信二 (1996) 木の大本科—解説編—。642p, 朝倉書房。
- ・ 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社。
- ・ 伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—。449p, 海青社。

## 6. 付着物分析 1

### (1) はじめに

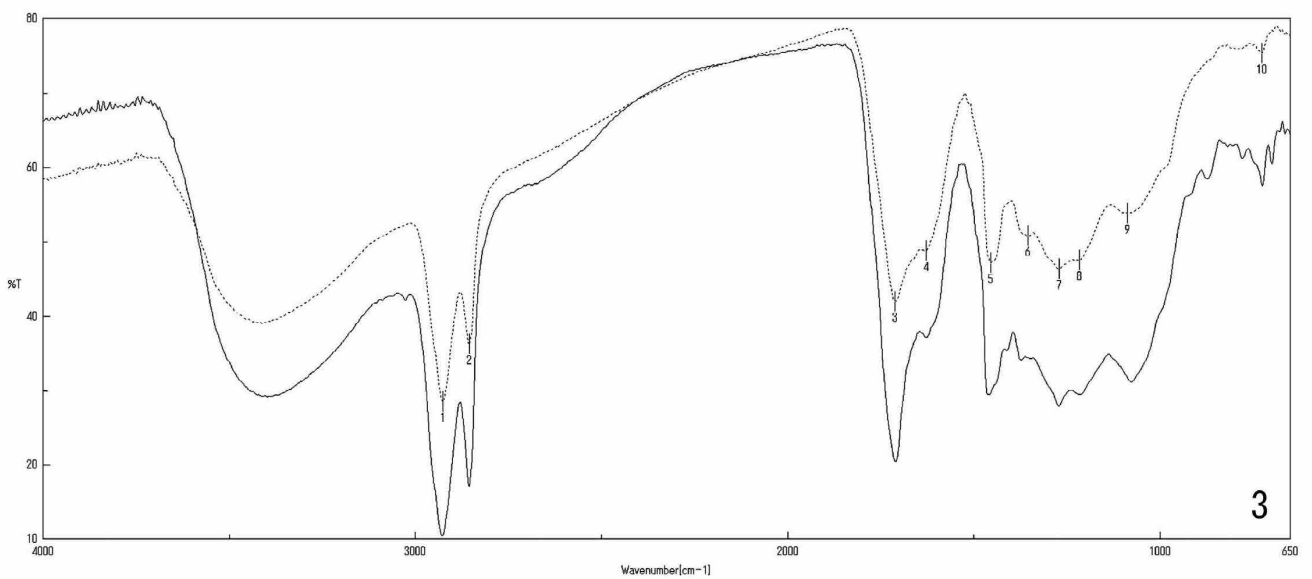
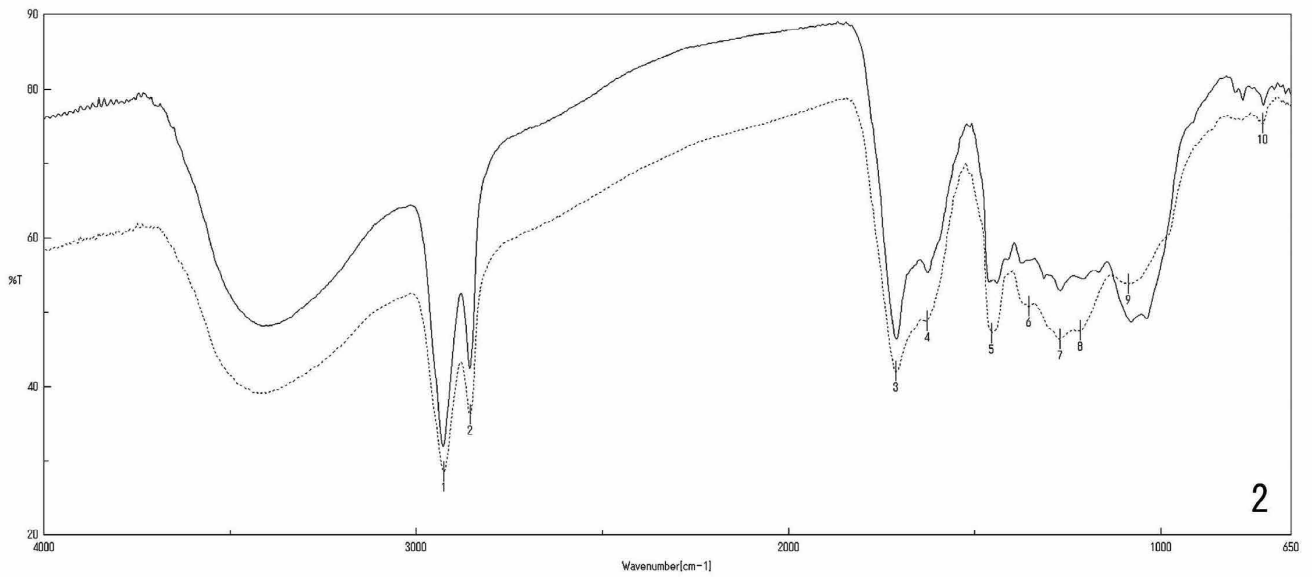
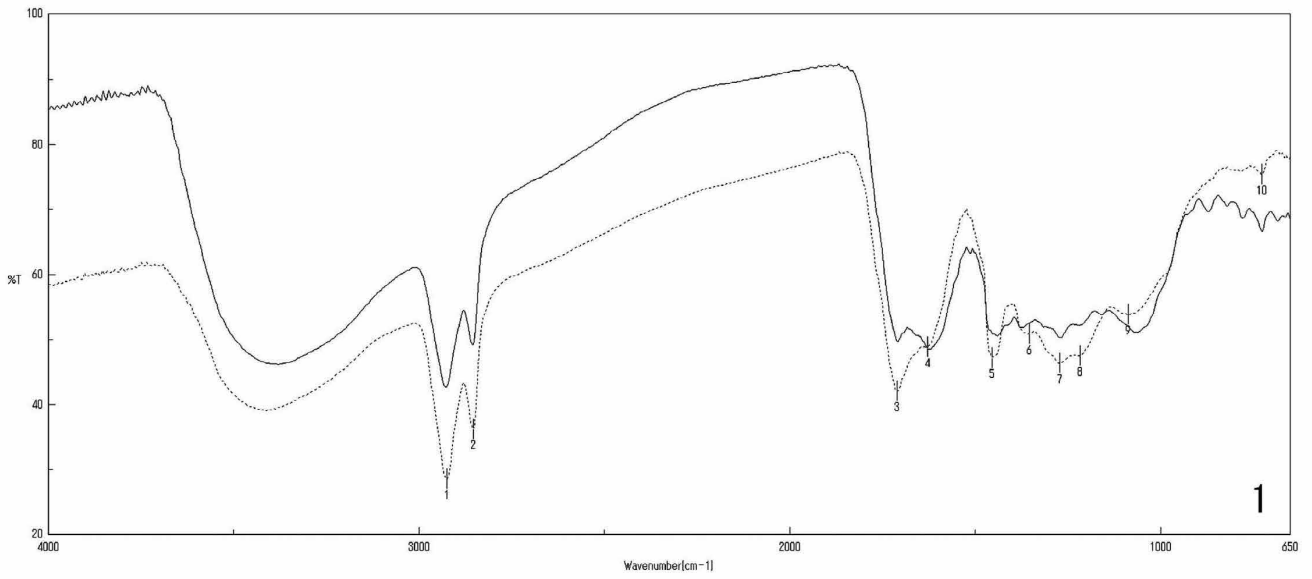
松坂城下町遺跡より出土した漆製品について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

### (2) 試料と方法

分析対象は、第6次調査で出土した近世の漆製品2点である (第35表)。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。分析にあたっては、小林が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原

試料 No.	実測 番号	調査 年度	出土 遺構	出土 層位	器種	樹種	木取り	特徴	塗膜 分析面
79	1005-02	H28-1	SD6001	黒色粘土	曲物底板	ヒノキ	柱目	両面黒色	片面
174	1002-01	H28-3	—	黒色粘土	椀	トチノキ	横木取り	内面黒色、外面赤色	両面

第35表 第6次調査分析対象一覧



1. 試料 No. 79    2. 試料 No. 171 内面    3. 試料 No. 171 外面

第131図 第6次調査各塗膜層の赤外分光スペクトル (実線：塗膜層、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置)

が顕微鏡観察・X線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析 (FT-IR) を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜表面から少量削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光 (株) 製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆の吸収スペクトルと比較・検討した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約50 $\mu$ m前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡 (日本電子株式会社製JSM-5900LV) による反射電子像観察を行った。さらに、赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置 (同JED-2200) による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約20 $\mu$ m前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

### (3) 結果および考察

写真図版91に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。第131図に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率 (%R)、横軸は波数 (Wavenumber (cm<sup>-1</sup>); カイザー) である。各スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す (第36表)。また、第37表に赤色塗膜層等のX線分析結果を示す。

以下に、塗膜の分析結果について述べる。各塗膜の特徴は第38表にまとめた。

[試料No. 79 (曲物底板黒色塗膜)]

No.	器種	採取塗膜	下地	塗膜層	
79	曲物底板	黒色塗膜	無し	1層	透明漆層
174	椀	内面黒色塗膜	炭粉渋下地	2層	透明漆層 2層
		外面赤色塗膜	炭粉渋下地	2層	赤色漆層 2層 (極微量のベンガラ)

第38表 第6次調査塗膜分析結果

塗膜薄片では、木胎a層、透明漆層c層が観察された (写真図版91-1a、1b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール (ウルシ) の吸収の一部 (吸収No. 6~No. 8) がみられるほか、漆などの有機物にみられる炭化水素の吸収 (吸収No. 1およびNo. 2) が明瞭にみられ、漆と同定された (第131図-1)。下地は観察されず、木材組織に直接漆が塗られていることから、拭き漆や木地呂塗りのような、木目の見える塗膜であったと考えられる。

[No. 174 (椀の内面黒色塗膜、外面赤色塗膜)]

内面の塗膜薄片では、木胎a層、炭粉と柿渋からなる下地b層、透明漆層c1、c2層が観察された (写真図版91-2a、2b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール (ウルシ) の吸収の一部 (吸収No. 6~No. 8) がみられるほか、漆などの有機物にみられる炭化水素の吸収 (吸収No. 1およびNo. 2) が明瞭にみられ、漆と同定された (第131図-2)。

外面の塗膜薄片では、木胎a層、炭粉と柿渋からなる下地b層、赤色漆層c1、c2層が観察された (写真図版91-3a、3b)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール (ウルシ) の吸収の一部 (吸収No. 6~No. 8) がみられるほか、漆などの有機物にみられる炭

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

第36表 第6次調査生漆の赤外吸収位置とその強度

No.	塗膜層	C	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
174	c2層	86.17	1.37	1.24	11.21
	c1層	90.95	—	—	9.05

第37表 第6次調査赤色塗膜層のX線分析結果



化水素の吸収（吸収No. 1 およびNo. 2）が明瞭にみられ、漆と同定された（第131図-3）。c1層、c2層では、極微量の赤色微粒子が観察された。椀外面はかなり暗めの赤色であり、少量の赤色顔料によってこのような色調となっていると考えられる。赤色漆層のX線分析では、鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）が検出されており（第37表）、赤色顔料としてベンガラの使用が考えられた。

#### （４）おわりに

松坂城下町遺跡から出土した漆製品について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、試料No. 79は下地がなく、木材に直接漆が塗布されていた。試料No. 171は、内外面に炭粉渋下地が観察され、内面には透明漆が2層、外面にはベンガラを極少量用いた赤色漆が2層塗られていた。

（竹原弘展・藤根 久・米田恭子・小林克也（株）パレオ・ラボ）

## 7. 付着物分析 2

#### （１）はじめに

三重県松阪市に所在する、松坂城下町遺跡から出土した曲物底板1点には付着物が見られた。その材質を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。機器分析では、物質は赤外線照射すると、構成する分子構造に因って物質ごとに特有の赤外線吸収スペクトルを示す。その調査が行える赤外分光（FT-IR）分析を行った。

#### （２）調査資料

調査した資料は、第39表に示す近世の底板1点である。

#### （３）顕微鏡観察

**調査方法** 第39表の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗

膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

**調査結果** 塗膜断面の観察結果を、第40表と以下の文章に示す。

塗膜構造：下層から、木胎、柿渋？が観察された。木材組織の上に淡褐色を呈する付着物の断面が見られた。層の様子は、漆とは異なる。

#### （４）赤外分光（FT-IR）分析調査

**調査方法** 第39表の資料本体の付着物部分から数mm四方の破片を採取して、パーキンエルマー社製、FT-IR分析装置Spectrum Oneを用いて、付着物の材質を調査した。

**調査結果** 分析データを示し、比較資料の漆と柿渋と比較検討を行い、その結果を記す。

調査試料の付着物は、波数：3277.1、1634.1、1539.1、1024.2等の赤外吸収領域に特徴的な透過率の変化が確認される。比較資料との検討の結果、比較資料：柿渋の赤外吸収領域の位置やスペクトルとも近似を示している。このことから調査試料は柿渋と推察される。

#### （５）摘要

松坂城下町遺跡から出土した、曲物底板にみられた付着物を調査した。断面観察によると、漆器の断面にみられるような、下地、塗膜という構造は見られなかった。木胎の上に何かが付着したように見られた。付着物の色調は、柿渋の色調に比較的近かった。

赤外分光分析の結果から、分析データは漆のスペクトルよりも柿渋のそれに近かった。

（株）吉田生物研究所

#### 【参考文献】

- ・ 小川俊夫「うるしの科学」共立出版 2014

No.	品名	写真No.	概要
349	曲物底板	1	片面に黒色の付着物がみられる曲物の底板。

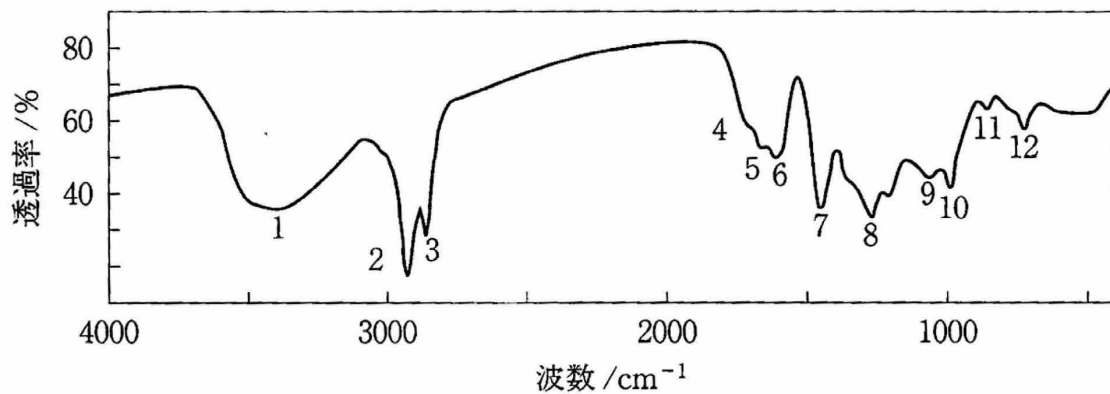
第39表 第6次調査資料

No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造（下層から）
				構造
349	曲物底板	内面？	349	柿渋？

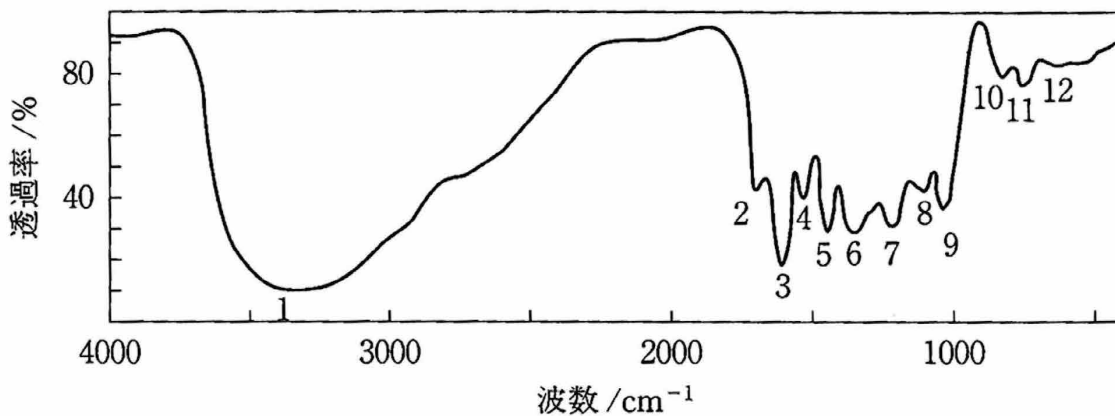
第40表 第6次調査漆製品の断面観察結果



第132図 第6次調査付着物のスペクトル



第133図 第6次調査比較試料：漆（「うるしの科学」より）



第134図 第6次調査比較試料：柿渋（「うるしの科学」より）

## 8. 鉄成分分析

### (1) いきさつ

松坂城下町遺跡は三重県松阪市本町に所在する。第6次調査地区の19世紀代の土坑から、鉄滓が多量に出土した。そこで地域周辺での鉄器生産の実態を検討するため、出土遺物を分析調査した。

### (2) 調査方法

#### ① 2-1. 供試材

出土鍛冶関連遺物6点(第41表)の調査を実施した。

#### ② 2-2. 調査項目

**外観観察** 鉄滓の外観的な特徴を記載した。

**マクロ組織** 試料を端部から切り出した後、断面をエメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで順を追って研磨し、断面の全体像を撮影した。

**顕微鏡組織** 光学顕微鏡で試料断面を観察した後、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。

**ビッカース断面硬度** ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試料は顕微鏡用を併用し、荷重50gfで測定した。ビッカース硬さは測定箇所(136°の頂角をもったダイヤモンド)を押し込んだ時の荷重と、それにより残された窪み(圧痕)の対角線長さから求めた表面積から算出される。

**EPMA調査** EPMA(日本電子製機 JXA-8230)を用いて、鉄滓の鉱物組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧:15kV、照射電流(分析電流):2.00E-8A。

**化学組成分析** 出土鉄滓の化学成分分析を行った。測定元素と分析法は以下の通りである。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化珪素(SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K<sub>2</sub>O)、酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)、酸化クロム(Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、五酸化リン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO<sub>2</sub>):ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法:誘導結合プラズマ発光分光分析。

### (3) 調査結果

#### ① MTS-1: 椀形鍛冶滓

**外観観察** 大形で厚手の椀形鍛冶滓(688.7g)である。ほぼ完形で長軸片側(写真左側)の中央が窪んでいる。その周囲は黒色ガラス質滓(炉材・羽口等の粘土溶融物)で、羽口下側と推定される。滓部の色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。上面は中央が瘤状に突出している。微細な木炭痕が散在しており、木炭破片も複数付着する。下面は弱い流動状で、部分的に炉壁粘土が付着する。炉壁には短く切ったスサや真砂(花こう岩の風化砂)を多量に混和している。

**マクロ組織** 写真図版92①に示す。左上の明灰色部は鍛冶滓、右下の暗灰色部はガラス質滓(粘土溶融物)である。

**顕微鏡組織** 写真図版92②③に示す。②は鍛冶滓部分の拡大である。滓中の多角形結晶は、灰褐色部はマグネタイト(Magnetite:FeO・Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)、暗灰色部はマグネタイトとヘルシナイト(Hercynite:FeO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)の中間の組成の固溶体と推測される。また③右側は表面に付着した鍛造剥片<sup>(1)</sup>の拡大である。

**ビッカース断面硬度** 写真図版92②の灰褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は544、571Hvであった。マグネタイトの文献硬度値(約500~600Hv)の

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器 反応	調査項目					備考
					大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ	顕微鏡	ビッカース 断面硬度	EPMA	化学分析	
MTS-1	松坂城下町 (第6次)	15区 SK6039	椀形鍛冶滓	19c代	78×120×82	688.7	なし	○	○	○	○	○	
MTS-2		14区 SK6039	椀形鍛冶滓		93×119×23	323.8	なし	○	○	○	○	○	
MTS-3		15区 SK6056	鍛冶滓(炉壁付)		116×60×72	404.9	なし	○	○	○	○	○	
MTS-4			炉壁		63×60×21	33.6	なし	○	○	○	○	○	
MTS-5			鍛冶滓(炉壁付)		48×42×26	54.4	なし	○	○	○	○	○	
MTS-6			椀形鍛冶滓		100×96×50	303.2	なし	○	○	○	○	○	

第41表 第6次調査供試材の履歴と調査項目

範囲内で、マグネタイトと推測される<sup>(2)</sup>。

**EPMA調査** 写真図版92④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。写真下側の灰褐色多角形結晶は特性X線像では、鉄 (Fe) に強い反応がある。一方、多角形結晶中央の暗灰色部は、特性X線像ではアルミニウム (Al) に強い反応がある。定量分析値は70.4%FeO-15.4%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-4.0%MgO-1.6%MnO-1.2%TiO<sub>2</sub> (分析点1)、47.8%FeO-38.9%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-7.0%MgO-1.2%MnO (分析点2) であった。ともにマグネタイト (Magnetite : Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) とヘルシナイト (Hercynite : FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) の中間の組成の固溶体であった。また右上の暗灰色部は滓中に混在する砂粒で、特性X線像では、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K)、ナトリウム (Na) に反応がある。定量分析値は11.6%K<sub>2</sub>O-4.3%Na<sub>2</sub>O-17.5%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-61.9%SiO<sub>2</sub> (分析点3) であった。アルカリ長石 (Alkali feldspar) と推定される。写真中央の暗色結晶は、特性X線像では、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K) に反応がある。定量分析値は19.7%K<sub>2</sub>O-22.9%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-55.0%SiO<sub>2</sub> (分析点4) であった。オルソクレース (Orthoclase : KAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>) と推定される。

**化学組成分析** 第42表に示す。全鉄分 (Total Fe) 51.84%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.09%、酸化第1鉄 (FeO) 39.34%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 30.27%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は24.00%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) の割合は1.50%と低い。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.26%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.19%、銅 (Cu) も<0.01%と低値であった。

当鉄滓は主に鉄酸化物と炉壁粘土の溶融物 (SiO<sub>2</sub>主成分) からなり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>、V) は低減傾向が顕著であった。この特徴か

ら、当鉄滓は鉄材を熱間で鍛打加工した際の反応副生物 (鍛錬鍛冶滓) に分類される。

② MTS-2 : 椀形鍛冶滓

**外観観察** 大形でやや偏平な椀形鍛冶滓の約1/2破片 (323.8g) と推測される。上面は中央が浅く窪んでいる。下面はきれいな皿状で、淡褐色の鍛冶炉床土が付着する。着磁性はあるが、金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。表面には微細な木炭破片や鍛造剥片が付着する。また上下面とも被熱した小礫や炉材 (羽口粘土) の破片が点在する。

**マクロ組織** 写真図版93①に示す。右上の暗灰色部はガラス質滓 (粘土溶融物)、中央の明灰色部は鍛冶滓である。下側は鍛冶炉床土である。土砂中には、微細な鍛冶滓破片や鍛造剥片が多数混在する。

**顕微鏡組織** 写真図版93②③に示す。②は表面に付着した鍛造剥片の拡大である。③は滓部の拡大で、白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>) が晶出する。

**ビッカース断面硬度** 写真図版93③の硬度を測定した。硬度値は407、419Hvであった。ウスタイトの文献硬度値 (約450~500Hv) よりもやや軟質であるが、結晶の色調と形状、後述するEPMA調査の結果から、ウスタイトと推測される。

**EPMA調査** 写真図版93④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。滓中の微細な明白色粒は、特性X線像では鉄 (Fe) にのみ強い反応がある。定量分析値は98.7%Fe (分析点6) であった。金属鉄である。滓中の白色樹枝状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は95.3%FeO (分析点7) であった。ウスタイト (Wustite : FeO) と推定される。微細な淡灰色柱状結晶は、特性X線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は55.4%FeO-6.4%CaO-3.0%MgO-31.9%Si

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化燐 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO <sub>2</sub> )	造滓成分 Total Fe	TiO <sub>2</sub> Total Fe	
MTS-1	松坂城下町 (第6次)	15区 SK6039	椀形鍛冶滓	19c代	51.84	0.09	39.34	30.27	15.26	5.75	1.01	0.49	1.38	0.11	0.19	0.26	0.01	0.044	0.18	0.35	<0.01	<0.01	24.00	0.46296	0.00502	
MTS-2		14区 SK6039	椀形鍛冶滓		35.42	0.59	25.18	21.82	23.58	6.18	3.74	1.13	2.80	0.35	0.54	0.28	0.01	0.108	1.70	1.13	<0.01	0.24	<0.01	37.78	1.06663	0.00791
MTS-3		15区 SK6056	鍛冶滓 (炉壁付)		47.24	0.13	33.93	29.65	16.27	5.29	3.29	1.60	1.58	0.43	0.49	0.26	0.01	0.039	0.65	0.53	<0.01	0.02	<0.01	28.46	0.60246	0.0055
MTS-4			炉壁		11.67	0.19	4.87	11.00	49.60	21.83	2.60	2.55	2.54	0.66	0.31	1.02	0.09	0.009	0.41	0.36	0.02	<0.01	0.01	79.78	6.83633	0.0874
MTS-5			鍛冶滓 (炉壁付)		43.66	0.12	42.31	15.23	23.76	8.86	2.62	1.55	2.01	0.27	0.21	0.46	0.02	0.031	0.28	0.21	0.01	<0.01	<0.01	39.07	0.89487	0.01054
MTS-6			椀形鍛冶滓		45.86	0.07	20.37	42.83	16.12	5.08	1.40	0.67	0.88	0.33	0.11	0.34	0.02	0.077	0.16	1.41	0.01	0.01	<0.01	24.48	0.5338	0.00741

第42表 第6次調査供試材の化学組成



O<sub>2</sub> (分析点8)であった。ファヤライト (Fayalite : 2FeO・SiO<sub>2</sub>) で、ライム (CaO)、マグネシア (MgO) を少量固溶する。また素地の定量分析値は40.6%SiO<sub>2</sub>-17.6%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-11.3%CaO-7.8%K<sub>2</sub>O-1.8%Na<sub>2</sub>O-1.4%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-20.2%FeO (分析点9)であった。非晶質硅酸塩である。

**化学組成分析** 第42表に示す。全鉄分 (Total Fe) 35.42%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.59%、酸化第1鉄 (FeO) が25.18%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 21.82%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) は37.78%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) の4.87%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.28%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.54%、銅 (Cu) は0.24%と高値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と炉壁粘土の溶融物 (SiO<sub>2</sub> 主成分) からなり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>、V) は低減傾向が顕著であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

### ③ MTS-3 : 鍛冶滓 (炉壁付着)

**外観観察** 大形で厚手の鍛冶滓破片 (404.9g) と推定される。表面の広い範囲で茶褐色の錆が付着する。着磁性もあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。側面1面は直線状の破面で気孔は少なく緻密である。下面にはスサを多量に混和した炉壁片が付着する。炉壁粘土中には微細な鍛造剥片が複数付着する。

**マクロ組織** 写真図版94①に示す。素地の灰褐色部は鍛冶滓である。下面側の暗灰色部は炉壁粘土で、内部には微細な鍛冶滓破片や鍛造剥片が付着する。

**顕微鏡組織** 写真図版94②③に示す。②は滓部の拡大である。白色粒状結晶はウスタイト大形の灰褐色不定形結晶はマグネタイトと推測される。また③右下は炉壁粘土中の鍛造剥片の拡大である。

**ビッカース断面硬度** 写真図版94②の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は494 Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内で、ウスタイトと推測される、また大形の灰褐色不定形結晶の433Hvであった。粒状結晶よりもやや軟質であるが、結晶の色調と形状、後述するEPMA調査の結果から、ウスタイト

またはマグネタイトないしはその混晶と推測される。

**EPMA調査** 写真図版94④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。灰褐色不定形結晶の素地部分の定量分析値は92.2%FeO-2.4%MgO (分析点10)であった。マグネタイト (Magnetite : FeO・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) で、少量マグネシア (MgO) を固溶する。また格子状の暗色部の定量分析値は78.6%FeO-9.5%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-1.8%MgO-1.8%TiO<sub>2</sub> (分析点11)であった。この箇所はアルミナ (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) の割合が高い。マグネシア (MgO)、チタニア (TiO<sub>2</sub>) も少量固溶する。

さらにもう1視野、滓部の反射電子像 (COMP) を写真図版94⑤に示す。暗色結晶は特性X線像では、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K) に反応がある。定量分析値は27.2%K<sub>2</sub>O-31.6%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-40.0%SiO<sub>2</sub> (分析点12)であった。オルソクレーズ (Orthoclase : KAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>) と推定される。また微細な淡灰色結晶の定量分析値は32.9%FeO-16.6%CaO-3.6%MgO-1.1%MnO-32.2%SiO<sub>2</sub>-6.8%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-2.5%K<sub>2</sub>O-1.4%Na<sub>2</sub>O-1.7%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> (分析点13)であった。結晶はライム (CaO) の割合の高いオリビン [Olivine : 2(Fe,Ca)O・SiO<sub>2</sub>] で、定量分析値は周囲のガラス質滓 (非晶質硅酸塩) の影響を受けたものと推測される。

**化学組成分析** 第42表に示す。全鉄分 (Total Fe) 47.24%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.13%、酸化第1鉄 (FeO) が33.93%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 29.65%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 28.46%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) の割合は4.89%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.26%、バナジウム (V) が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.49%、銅 (Cu) 0.02%であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と炉壁粘土の溶融物 (SiO<sub>2</sub> 主成分) からなり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>、V) は低減傾向が顕著であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

### ④ MTS-4 : 炉壁

**外観観察** 強い熱影響を受けて、内面がガラス質化した炉壁片 (33.6g) である。内面表層には茶褐色の錆が付着しており、弱影响着磁性もあるが金属探知器反応はない。炉壁粘土部分は淡褐色～橙色で、短

く切ったスサを多量に混和している。

**マクロ組織** 写真図版95①に示す。暗灰色部はガラス質滓（粘土溶融物）、中央の明灰色部は鍛冶滓である。また下面側の黒灰色部は炉壁粘土である。

**顕微鏡組織** 写真図版95②③に示す。②は内面表層のガラス質滓部分の拡大で、滓中の微細な明白色粒は金属鉄である。③は鍛冶滓部分の拡大である。左上の白色結晶はウスタイトと推定される。さらに淡灰色柱状結晶ファヤライト、暗灰色多角形結晶ヘルシナイトが晶出する。

**ビッカース断面硬度** 写真図版95③の白色結晶の硬度を測定した。硬度値は438Hvであった。ウスタイトの文献硬度値よりもやや軟質であるが、結晶の色調と形状、後述するEPMA調査の結果から、ウスタイトまたはマグネタイトないしはその混晶と推測される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は707Hvであった。ファヤライトの文献硬度値（約600～700Hv）と近似した値であり、ファヤライトと推定される。

**EPMA調査** 写真図版95④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。写真上側の暗灰色粒はガラス質滓中の砂粒である。9.4%Na<sub>2</sub>O—7.9%CaO—1.6%K<sub>2</sub>O—25.3%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>—59.2%SiO<sub>2</sub>（分析点14）であった。斜長石（Plagioclase）と推定される。淡灰色結晶の定量分析値は40.0%FeO—16.5%MgO—4.2%CaO—2.8%MnO—32.5%SiO<sub>2</sub>（分析点15）であった。マグネシア（MgO）の割合の高いオリビン〔Olivine：2（Fe, Mg）O・SiO<sub>2</sub>〕である。

さらにもう1視野、滓部の組成を調査した。写真図版95⑤に反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶の定量分析値は95.5%FeO（分析点16）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。また暗灰色結晶の定量分析値は62.2%FeO—31.7%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>（分析点17）、53.3%FeO—41.6%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>（分析点18）であった。前者はマグネタイト（Magnetite：FeO・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）とヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）の中間の固溶体、後者はヘルシナイトと推定される。

**化学組成分析** 第42表に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は11.67%と低めであった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.19%、酸化第1鉄（FeO）が4.87%、酸化第2鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）11.00%であった。造滓成分（SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O）の割合は79.78

%と高く、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は5.15%であった。砂鉄（含チタン鉄鉱）に含まれる二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）は1.02%、バナジウム（V）が0.02%であった。また酸化マンガン（MnO）は0.31%、銅（Cu）<0.01%であった。

当遺物は内面表層に鍛冶滓が付着する炉壁破片であった。化学分析ではチタニア（TiO<sub>2</sub>）がやや高めであったが、滓中に明瞭な鉄チタン酸化物の結晶はみられなかった。炉壁や羽口粘土でも高いものは1%前後チタニアが含まれる。このため当炉壁中のチタニアも粘土中の微細な含チタン鉄鉱による可能性は考えられる。

#### ⑤ MTS-5：鍛冶滓（炉壁付着）

**外観観察** 小形の鍛冶滓破片（54.4g）である。内面表層には茶褐色の鉄錆が付着しており、弱い着磁性もあるが金属探知器反応はない。微細な木炭破片や鍛冶剥片が複数付着する。側面1面は破面で、気孔は少なく緻密である。また下面には炉壁が薄く付着する。炉壁粘土部分は淡褐色～橙色で、短く切ったスサを多量に混和している。

**マクロ組織** 写真図版96①に示す。写真左上や下側の暗灰色部はガラス質滓（粘土溶融物）、明灰色部は鍛冶滓である。

**顕微鏡組織** 写真図版96②③に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、灰褐色不定形結晶マグネタイト、淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の非常に微細な暗灰色結晶はヘルシナイトと推測される。

**ビッカース断面硬度** 写真図版96③の灰褐色不定形結晶の硬度を測定した。硬度値は506Hvであった。マグネタイトの文献硬度値の範囲内であり、マグネタイトと推定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は619Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内、ファヤライトと推定される。

**EPMA調査** 写真図版96④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶の定量分析値は95.2%FeO—1.3%TiO<sub>2</sub>（分析点19）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。暗灰色多角形結晶の定量分析値は41.4%FeO—3.7%MgO—51.9%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>（分析点20）であった。ヘルシナイト（Hercynite：FeO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）で、少量マグネシア（MgO）を固溶する。また暗色結晶

の定量分析値は19.8%K<sub>2</sub>O-23.5%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-58.6%SiO<sub>2</sub> (分析点21)であった。オルソクレース (Orthoclase : KAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>) と推定される。

さらにもう1視野、滓部の組成調査を実施した。写真図版96⑤に反射電子像 (COMP) を示す。淡灰色盤状結晶の定量分析値は62.4%FeO-3.1%CaO-2.5%MgO-30.0%SiO<sub>2</sub> (分析点22)、46.5%FeO-20.1%CaO-31.0%SiO<sub>2</sub> (分析点23)であった。結晶はファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>)、外周部はライム (CaO) の割合の高いオリビン [Olivine : 2(Fe, Ca)O·SiO<sub>2</sub>]であった。

**化学組成分析** 第42表に示す。全鉄分 (Total Fe) 43.66%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.12%、酸化第1鉄 (FeO) が42.31%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 15.23%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 39.07%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) 4.17%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.46%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.21%、銅 (Cu) <0.01%と低値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と炉壁粘土の溶融物 (SiO<sub>2</sub>主成分) からなり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>、V) は低減傾向が顕著であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### ⑥ MTS-6 : 椀形鍛冶滓

**外観観察** やや大形で完形の椀形鍛冶滓 (303.2g) である。広い範囲で黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆が付着する。土砂中には木炭破片や、鍛造剥片が多量に含まれている。上面は比較的平滑な流動状で、側面端部に1箇所黒色ガラス質滓がみられる。羽口先端の溶融物と推測される。下面は微細な木炭痕による凹凸が著しい。

**マクロ組織** 写真図版97①に示す。写真右上は鍛冶滓、中央の暗灰色部はガラス質滓、不定形明灰色部は錆化鉄部である。また滓中には微細な木炭破片が多数混在する。

**顕微鏡組織** 写真図版97②③に示す。②は錆化鉄部の拡大である。針状セメントタイト (Cementite:Fe<sub>3</sub>C) の痕跡が残存する。過共析 (C>0.77%) 組織の高炭素鋼であったと判断される。③は鍛冶滓部分の拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色

柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

**ビッカース断面硬度** 写真図版97③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は427Hvであった。ウスタイトの文献硬度値よりもやや軟質であるが、結晶の色調と形状、後述するEPMA調査の結果から、ウスタイトと推測される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は639Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される。

**EPMA調査** 写真図版97④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は94.8%FeO (分析点24)であった。ウスタイト (Wustite : FeO) と推定される。暗灰色多角形結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、アルミニウム (Al) に強い反応がある。定量分析値は44.7%FeO-2.6%MgO-48.7%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> (分析点25)であった。ヘルシナイト (Hercynite : FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) で、マグネシア (MgO) を少量固溶する。淡灰色盤状結晶は鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は62.8%FeO-3.6%CaO-2.2%MgO-30.7%SiO<sub>2</sub> (分析点26)であった。ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO<sub>2</sub>) で、ライム (CaO)、マグネシア (MgO) を少量固溶する。暗色結晶は特性X線像では珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K) に強い反応がある。定量分析値は19.2%K<sub>2</sub>O-23.6%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-58.6%SiO<sub>2</sub> (分析点27)であった。オルソクレース (Orthoclase : KAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>) と推定される。また素地部分の定量分析値は37.6%SiO<sub>2</sub>-12.1%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-13.9%CaO-2.3%K<sub>2</sub>O-4.5%Na<sub>2</sub>O-1.5%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-28.5%FeO (分析点28)であった。非晶質珪酸塩である。

**化学組成分析** 第42表に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.86%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.07%、酸化第1鉄 (FeO) が20.37%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 42.83%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) 24.48%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は2.07%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.34%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.11%、銅 (Cu) も0.01%と低値であった。

当鉄滓も主に鉄酸化物と炉壁粘土の溶融物 (SiO<sub>2</sub>

主成分) からなり、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO<sub>2</sub>, V) は低減傾向が顕著であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### (4) まとめ

松坂城下町遺跡 (第6次調査地区) の土坑 (19世紀代) から出土した、鍛冶関連遺物を調査した。その結果、周辺地域では鉄材を熱間で加工して、鍛造鉄器が製作されていたと考えられる。

鉄滓5点 (MTS-1~3, 5, 6) は、主に鉄酸化物と粘土溶融物からなり、鍛錬鍛冶滓に分類される。炉壁 (MTS-4) の内面にも同様の鍛錬鍛冶滓が確認された。さらに複数の鉄滓表面に微細な鍛造剥片が付着していた。これらは熱間で鉄材を鍛打加工していたことを示す遺物群である。

また椀形鍛冶滓 (MTS-6) 中の銹化鉄には、過共析 (C>0.77%) 組織の痕跡が確認された。少なくとも一部の鍛冶原料は、硬さや焼き入れ性を要求される利器の刃先に向いた、高炭素材 (「刃金 (鋼)」であったと推察される。

(鈴木瑞穂 日鉄住金テクノロジー ㈱ 八幡事業所)

#### [註]

(1) 鍛造剥片は、鍛造剥片は、熱間で鍛打したときに剥離・飛散した、鉄素材の表面の鉄酸化膜を指す。俗に鉄肌 (金肌) やスケールとも呼ばれる。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)、大部分は内層ウスタイト (Wustite: FeO) の3層から構成される。

(2) 日刊工業新聞社『焼結鉄組織写真および識別法』

1968

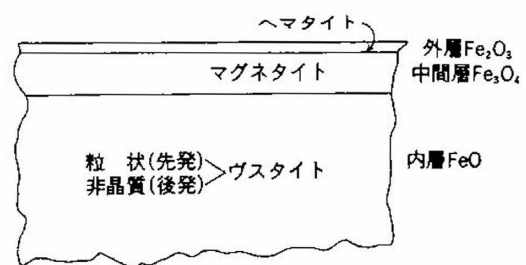
ウスタイトは約450~500Hv、マグネタイトは約500~600Hv、ファイヤライトは約600~700Hvの範囲が提示されている。

## 9. 小結

第6次調査の範囲は狭小ではあるものの延長150mに及ぶ。出土遺物は、当然のことながら大半が近世のもので、近現代に下るものが混じる。なお、若干ではあるが、中世に遡るものも散見された。城下町以前の集落の存在が想定されるが、この時期に遡る遺構は確認できていない。

近世の遺物では、22区出土の陶器甕がA類に分類され、17世紀に遡るものとされる<sup>(1)</sup>が、他にこの時期まで遡るものは明確ではない。また、瓦類では、58のように内圏線が認められない巴文の軒丸瓦、378・571のようにゴザ圧痕が認められる丸瓦は、17世紀に遡れない<sup>(2)</sup>。この様な状況から出土遺物の大半は18世紀以降のもので、17世紀の様相は不明確とせざるを得ない。

15区のS K 6056からは広東椀 (441・442) が出土している。広東椀は18世紀末~19世紀前半に盛行するとされ<sup>(3)</sup>、S K 6056は19世紀に下る。これ以外には明確に19世紀に下る遺構は特定できないが、広東椀は、7区、13区、21区で出土している。陶器甕で



第135図 鍛造剥片3層分離型模式図

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)							所見	
						Total Fe	塩基性成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	造滓成分	ZrO <sub>2</sub>		Cu
MTS-1	(第6次)	15区 SK6039	椀形鍛冶滓	19c代	滓部: M+H+Or、ガラス質滓 (斜長石)、鍛造剥片付着	51.84	1.50	0.26	<0.01	0.19	24.00	<0.01	<0.01	鍛錬鍛冶滓
MTS-2		14区 SK6039	椀形鍛冶滓		滓部: W+F、ガラス質滓、鍛造剥片付着	35.42	4.87	0.28	<0.01	0.54	37.78	<0.01	0.24	鍛錬鍛冶滓
MTS-3		15区 SK6056	鍛冶滓 (炉壁付)		滓部: W+M+H+F+Or、鍛造剥片付着	47.24	4.89	0.26	<0.01	0.49	28.46	<0.01	0.02	鍛錬鍛冶滓
MTS-4			炉壁		滓部: W+H+F、ガラス質滓 (斜長石)、微小金属鉄粒	11.67	5.15	1.02	0.02	0.31	79.78	0.01	<0.01	鍛冶滓の炉壁片 (鍛錬鍛冶滓付着)
MTS-5			鍛冶滓 (炉壁付)		滓部: W+M+H+F+Or、ガラス質滓	43.66	4.17	0.46	0.01	0.21	39.07	<0.01	<0.01	鍛錬鍛冶滓
MTS-6			椀形鍛冶滓		滓部: W+H+F+Or、銹化鉄部: 過共析組織痕跡	45.86	2.07	0.34	0.01	0.11	24.48	<0.01	0.01	鍛錬鍛冶滓 (銹化鉄部: 高炭素鋼)

W:Wustite (FeO), M:Magnetite (FeO·Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), H:Hercynite (FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), F:Fsyalite (2FeO·SiO<sub>2</sub>), Or:Orthoclase (KAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>)

第43表 第6次調査出土遺物の調査結果のまとめ



E類とされる19世紀に下るもの<sup>(4)</sup>は3区と13区、播鉢で19世紀前半に下る第9小期のもの<sup>(5)</sup>が21区で出土している。これら19世紀に下るものは、調査区北東部に多い傾向がある。

1区のS D6001、S K6003、4区の土坑群、7区のS K6023、11区のS D6030、18区のS D6053、井戸と思われる20区のS K6057、21区のS K6063からは、印銘をもつ京焼風の陶器碗、染付青磁碗、コンニャク印判による五弁花文等、18世紀に盛行する<sup>(6)</sup>陶磁器の碗皿類が認められる。陶器甕でも、B～D類に分類される常滑系の陶器甕<sup>(7)</sup>等、18世紀に盛行あるいは編年されるものである。したがって、これらの遺構は18世紀に相当する時期と考えられる。

S D6001からは比較的多くの遺物が出土しているが、前述したように18世紀に盛行する特徴をもつものが主体を成す。しかしこの溝は、第1次調査の溝状遺構の延長上に位置付けられるものである。溝状遺構の埋土上層からは広東碗が出土しており、19世紀まで下る可能性がある。このことからS D6001は18世紀に中心をおきながらも19世紀まで埋没せずに機能していた可能性がある。

4区の土坑群のうち、S K6013とS K6014には陶器甕が正立状態で据えられていたと記録される。217はS K6013かS K6014のものであるが、体部上半を欠損している。もう一つは、包含層出土とされる220が、その可能性が大きい。18世紀の時期と前述したが、既述したように錯誤が生じており、これらの甕は14区で多数検出された同様な土坑のいずれかのものとするに止める。

大型の甕を正立状態に据えた使用例として、当地は紺屋町に近く、藍甕を想定したいところである。しかし、郡山城下町の紺屋跡の調査では藍甕は整然と並んで配置されている<sup>(8)</sup>。この事例を見るまでもなく、整然と配置するのは当然の結果と考えられる。S K6013・6014・6016の3基は並んで配置されるように見えるが、この3基だけを特別視することも疑問であり、全体的には乱雑な配置である。一方、根来寺遺跡では半地下式倉庫に設置された様相が確認されている。しかし、大甕の用途について、油、味噌、酒等の諸説があり、確定していない<sup>(9)</sup>。建物が不明確な今回の調査においては、甕を棺とした墓地

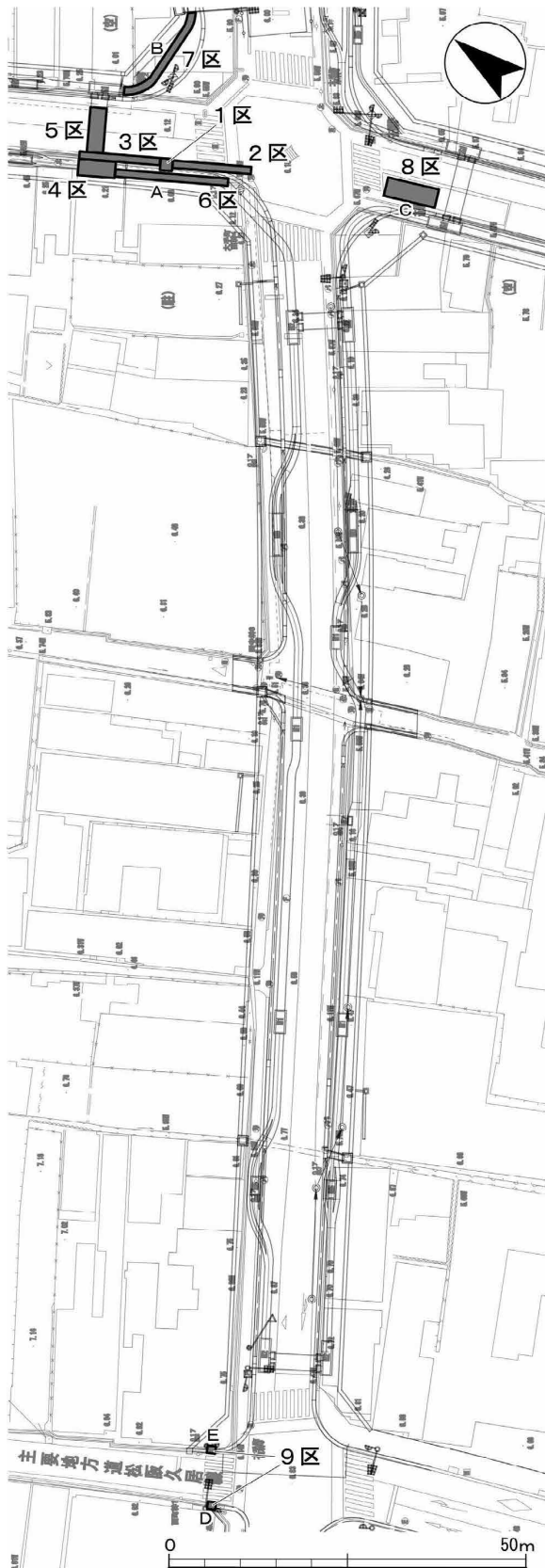
の可能性もあり、さらに混沌とする。水甕や便槽とした場合、建物の建替え等に伴う位置変更が近接地で頻繁に行われたことになり、やや現実味に欠ける。いずれにしても決定力に欠け、現状では多様な可能性があるものとしておかざるを得ない。

最後に、15区のS K6039及び19世紀としたS K6056から出土した鉄滓等により、近辺で鍛造鉄器が製作されていた可能性が生じた。なかでも原料の一部に刃金に向けたものがある。それが刀か日用品の刃物かは識別できないが、このような鍛冶施設が城下町としては外縁部に位置していた可能性が生じてきたのである。(森川)

#### [註]

- (1) 東京都新宿区教育委員会『自證院遺跡』1987
- (2) 小林健一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我』法隆寺昭和資材帳編纂所1989年5月20日
- (3) 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 平成元年10月5日
- (4) 前掲(1)に同じ
- (5) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業2』愛知県 平成19年3月31日
- (6) 前掲(3)に同じ
- (7) 前掲(1)に同じ
- (8) 山川均ほか『郡山城下町旧奥野家(紺屋跡)発掘調査報告』大和郡山市教育委員会 1999 ほか
- (9) 佐伯和也ほか『根来寺遺跡』公益財団法人和歌山県文化財センター 平成24年3月

## IX. 第7次調査



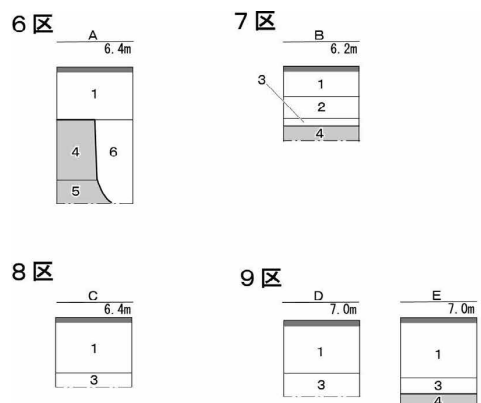
第136図 第7次調査区位置図 (1:1,000)

調査地は、本町東交差点と本町交差点の2箇所に大きく分かれている。享和以後（19世紀）の「松坂町絵図」などによれば、今回の立会地点はおおよそ博労町と本町の範囲に該当する。工事立会は、掘削深度が深い電線共同溝及び特殊柵の設置部分等と本町東交差点路床改良部分で行った。

### 1. 遺構

基本層序は、各調査区とも概ねⅠ層：アスファルト・砕石（現路面及び造成土）、Ⅱ層：灰黄褐色～褐灰色粗粒砂混シルト（旧造成土及び整地土）、Ⅲ層：黒褐色～灰褐色シルト（旧表土）、Ⅳ層：黄褐色～灰黄色シルト、Ⅴ層：オリーブ褐色砂礫混シルトである。これら基本層序は、第6次調査で把握した層序とほぼ対応する。

1区（第138図） 2×2mのグリッド状の調査区で、博労町に相当する場所である。北西辺に3区、南東辺に2区が接続する。地表から80cmほどはアスファルトや近現代の客土が覆う。地表下1.1mの褐灰色シルト層上面で遺構検出を行った。調査区の中央部を下水道管が横断することに加え、湧水が激しいこともあり、不明確な溝SD701を検出したに止まる。



1. 砕石
2. 灰黄褐色～褐灰色粗粒砂混シルト<造成土・整地土>
3. 黒褐色～灰褐色シルト<旧表土>
4. 黄褐色～灰黄色シルト
5. オリーブ褐色砂礫混シルト
6. SE7013埋土



第137図 第7次調査6～9区土層断面図 (1:100)

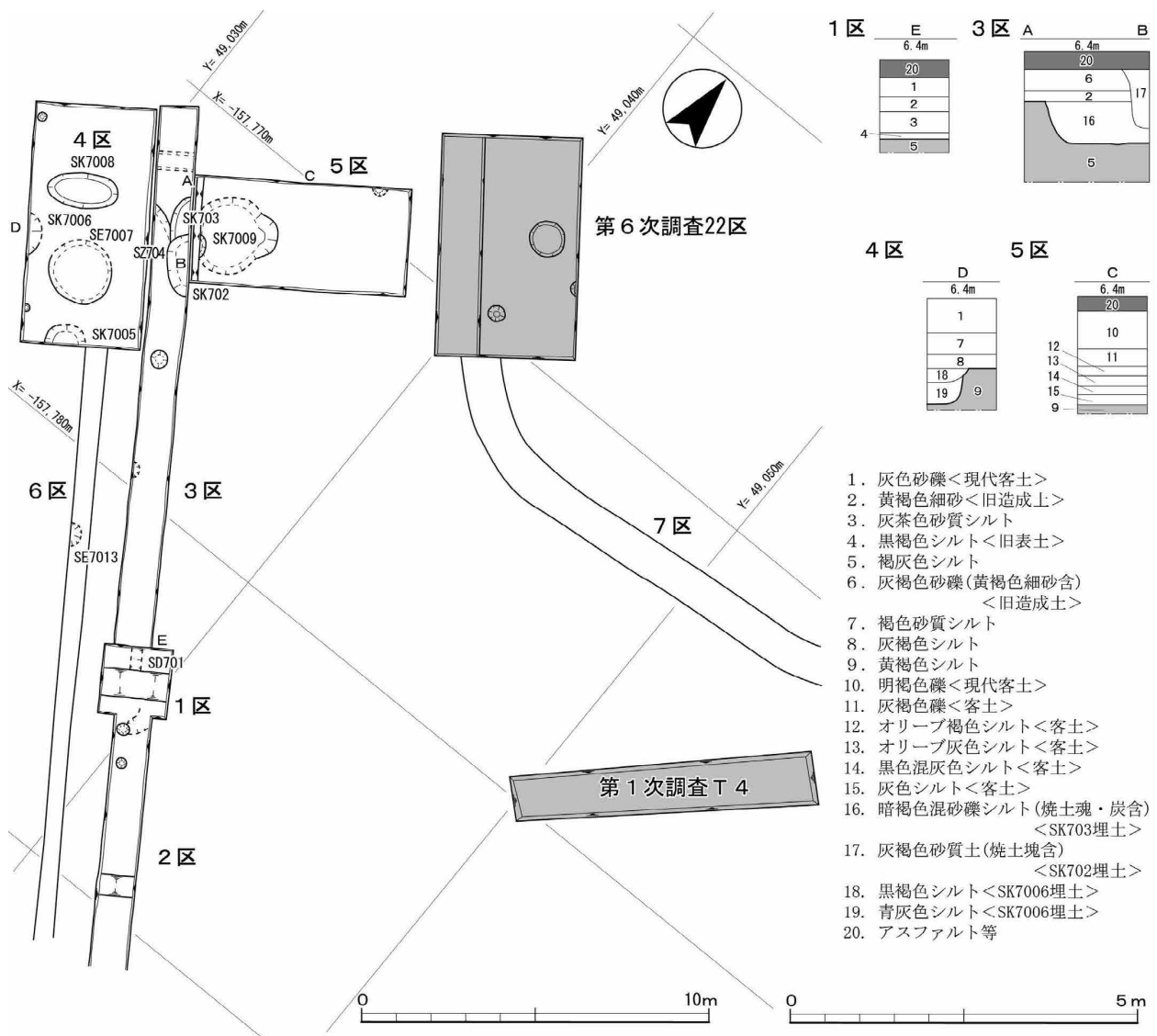
2区（第138図） 1区から南東方向に延びる幅1m、延長8mのトレンチ状の調査区である。1区近くで小穴を2基検出したのみである。なお、図化していないが、さらに4mほど延長し、遺構が無いことを確認している。

3区（第138図） 1区から北西方向に15mほど延びる幅1mのトレンチ状の調査区で、途中、4区と5区の間を貫通する。検出面までの深さは他の調査区より浅く、地表から60cmほどである。北西端付近で3基の土坑の重複する土坑を検出した。その内、SZ704は落ち込み状の不明確なものである。SK702及びSK703は直径2mの円形を呈するものと思われる。両者とも炭や焼土塊を含み、SK703からは陶磁器類や瓦片が出土している。ただし、SK702

は路床直下から切り込んでおり、明らかに後出のものである。他に小穴や溝状の落ち込みを検出している。

4区（第138図） 3.4×7mのグリッド状の調査区で、博労町に相当する場所である。北東辺に沿うかたちで3区が接する。地表から1mほどで黄褐色の安定したシルト層に至り、この層の上面で遺構検出を行った。

SE7007は直径1.8mの円形を呈する井戸と思われるが、枠は残存していない。また、切り込む層位は確認できず、検出面下2mまで確認したが、底も確認できなかった。土師器、陶磁器、瓦、アワビの殻等の多様な遺物が多量に出土している。SK7005及びSK7006は直径1.2mの円形を呈する土坑と考えられる。SK7006が検出面から切り込むのに対し、



第138図 第7次調査区平面図（1:200）、土層断面図（1:100）

S K 7005はそれより高位から切り込んでいる。比較的同時出土の遺物の出土があり、加工痕のある鹿角も出土している。

**5区** (第138図) 3×6mのグリッド状の調査区で、現道を横断する。南西辺に沿うかたちで3区が接する。北東辺の先は第6次調査の22区である。現道下ということもあり、それに伴う客土は厚さ80cmに及ぶ。地表から約1.4mで安定した黄褐色シルト層に至るが、近世の遺構は確認できない。S K 7009は直径2mに及ぶ不整形の土坑であるが、造成土からの切り込みであり、焼土塊を含む。

**6区** (第138図) 6区は2区及び3区の南西側を並行する。現道から70cmで安定した黄褐色シルト層に達し、この上面で遺構検出を行っている。S K 7011やS K 7012からは比較的同時出土の遺物の出土があり、S E 7013からは焼けた鹿角を含む多量の多種多様な遺物が出土している。しかし、詳細な調査記録が作成できなかったため、これらの位置関係を明示することができない。

**7区** (第138図) 7区は第6次調査22区から南東側の交差点に向けて延びる調査区で、現道下70cmで旧表土と考えられる黒褐色シルト層に達する。その下が安定した黄褐色シルト層で、この上面で遺構検出を行ったが、多少の遺物が出土したに止まった。

**8区** (第136図) 8区は7区の反対側で、第6次調査20区の横である。工事により影響のある現道下1mまで確認したが、遺構検出面に到達しなかった。

**9区** (第136図) 第9区は南西に170m離れた伊勢街道と大手筋との交差点で、伊勢街道の両側に分かれる小規模な調査区である。工事による影響深度が浅く、簡単な層序を確認したに止まるが、北側では現道下1mで安定した黄褐色シルト層を確認している。

## 2. 遺物

### (1) 1区出土遺物 (第139図)

出土遺物は少なく、図示できたものは陶器(1)と磁器(2)である。陶器は常滑系の甕、磁器は肥前系の蓋で、風水に木賊を描く。

### (2) 3区出土遺物 (第139図)

陶磁器類を中心に出土しているが、S K 703から

比較的同時出土があり、瓦の出土が目立つ。

3は土師器の皿、4～6は陶器、7・8は磁器、9は青磁である。5は鉢としたが、口縁端部上面に摩耗がみられ、上下逆か焔炉として使用されたものかもしれない。6は口縁部と底部が接合できなかったため器高は不明である。底部内面の4ヶ所に砂目が残る。4と共に底部外面は露胎となる。9は短い脚が付くが、1ヶ所を確認できるのみである。3ヶ所と仮定して図化している。底部外面は蛇ノ目釉剥となる。

**S K 702出土遺物** 10・11を図示したが両者とも陶器で、近代以降の可能性もある。10は鉄釉としたが、判然とせず、自然釉の可能性もある。

**S K 703出土遺物** 12～16は陶器で、12は椀、13は鬘皿、15は挿鉢、16は甕である。14は筒形椀にちかい形状であるが、口縁部内面に蓋受けをもつ。外面に灰釉を施すが、鉄釉で草花文を描く。12も施釉されるが、灰釉か黄瀬戸釉か迷う発色である。内外面は若干氷割文を呈する。

17は唯一図示できた磁器で、広東椀の形態を呈する。外面の絵柄は風水に加え貝に類似した奇妙な絵柄を連続させている。

18～22は瓦、24は砥石で、瓦は酸化焼成のものが目立つ。23は瓦質製品で塙の一種か。側面を垂下させ、この面をヘラミガキで丁寧に整えており、この面を正面したものと考えられる。

### (3) 4区出土遺物 (第140～143図)

比較的多くの遺物が出土しているが、特にS E 7007から多量の遺物が出土した。

25～31の内、30がS Z 7008出土の他は近世造成土からの出土である。25は土師器皿、26～30は陶器とした。26は京都・信楽としたが、胎土は磁器的である。見込みの風水文は発色不良を呈する。京都・信楽を模倣したものかも知れない。29は口縁部に煤が付着することから、焔炉として使用された可能性がある。30は須恵器の鉄鉢に似た形状を呈するが、還元状態から陶器と判断した。口縁部と体部は接合できなかったが、図上で合成した。31は染付青磁であるが、内面が青磁となっている。

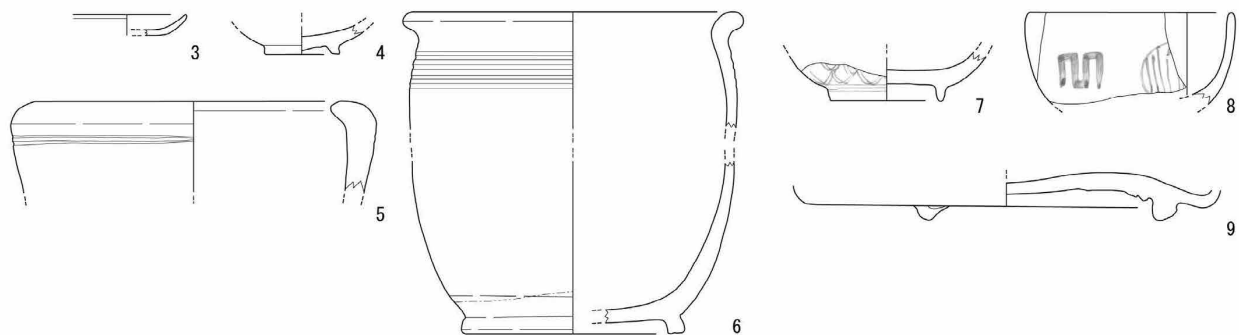
**S K 7005出土遺物** 32～34は土師器で、32は蓋、33・34は皿である。35も蓋であるが、陶器で上面に灰釉



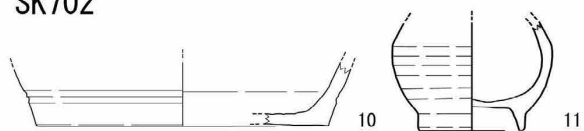
1区



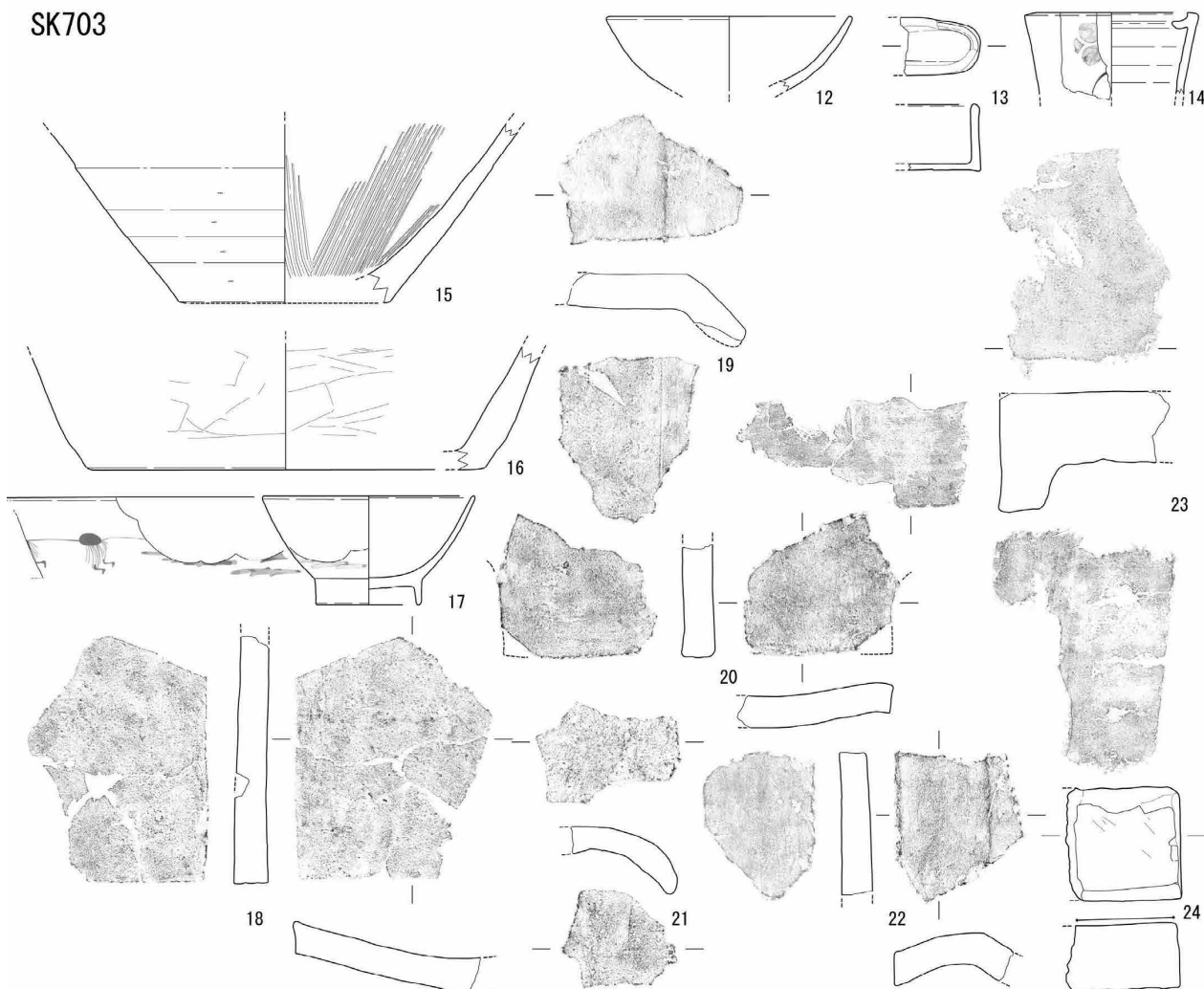
3区



SK702

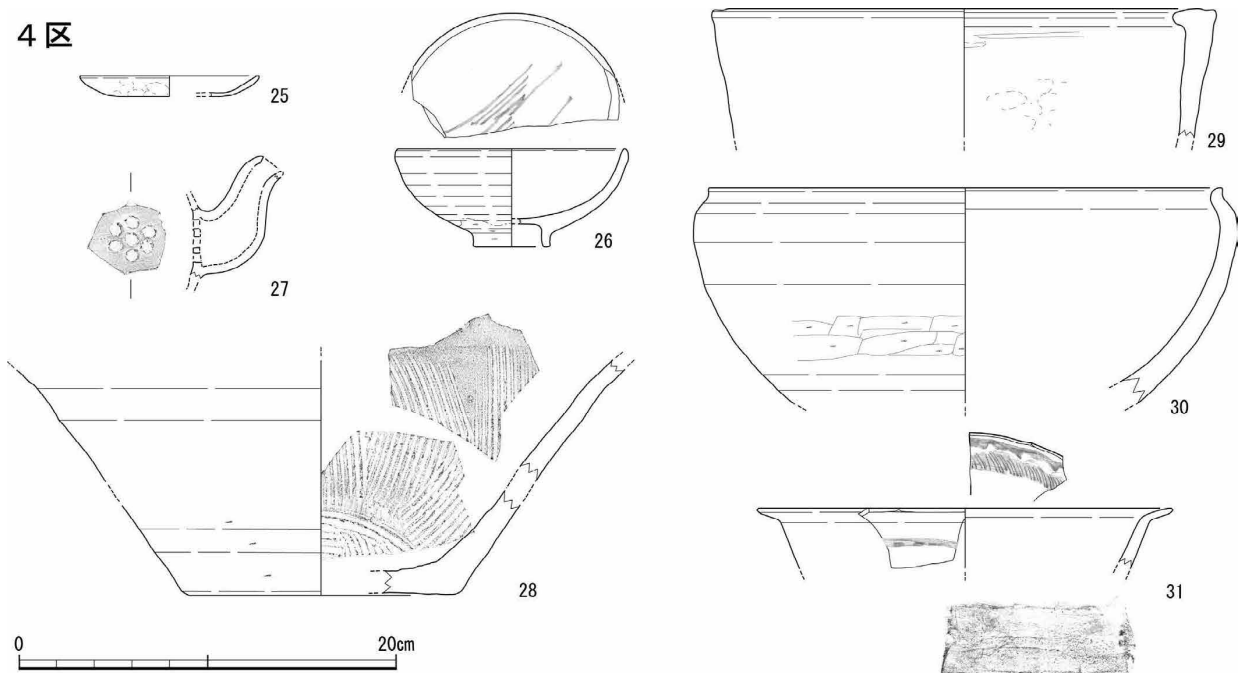


SK703

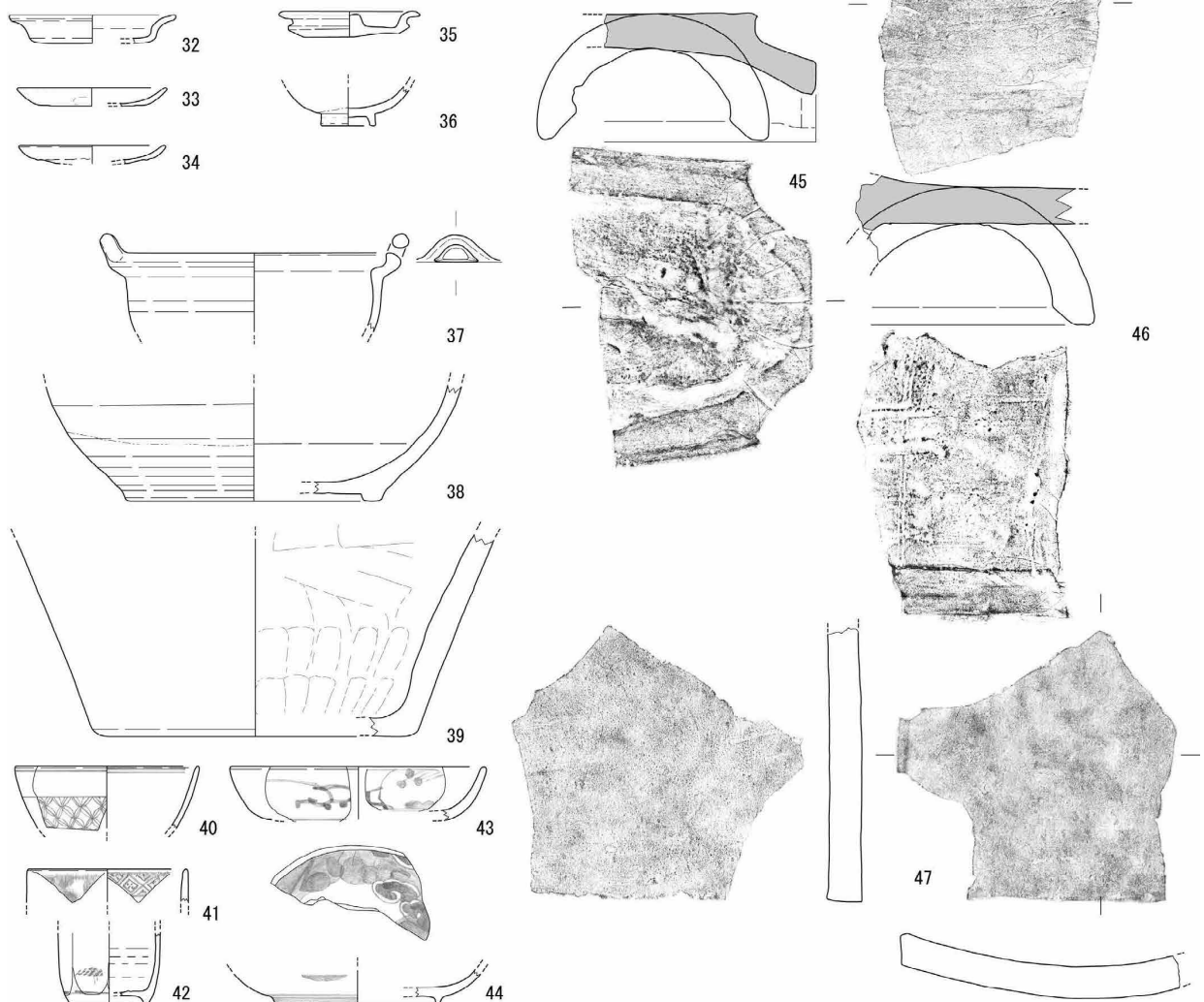


第139図 第7次調査1区・3区出土遺物 (1:4)

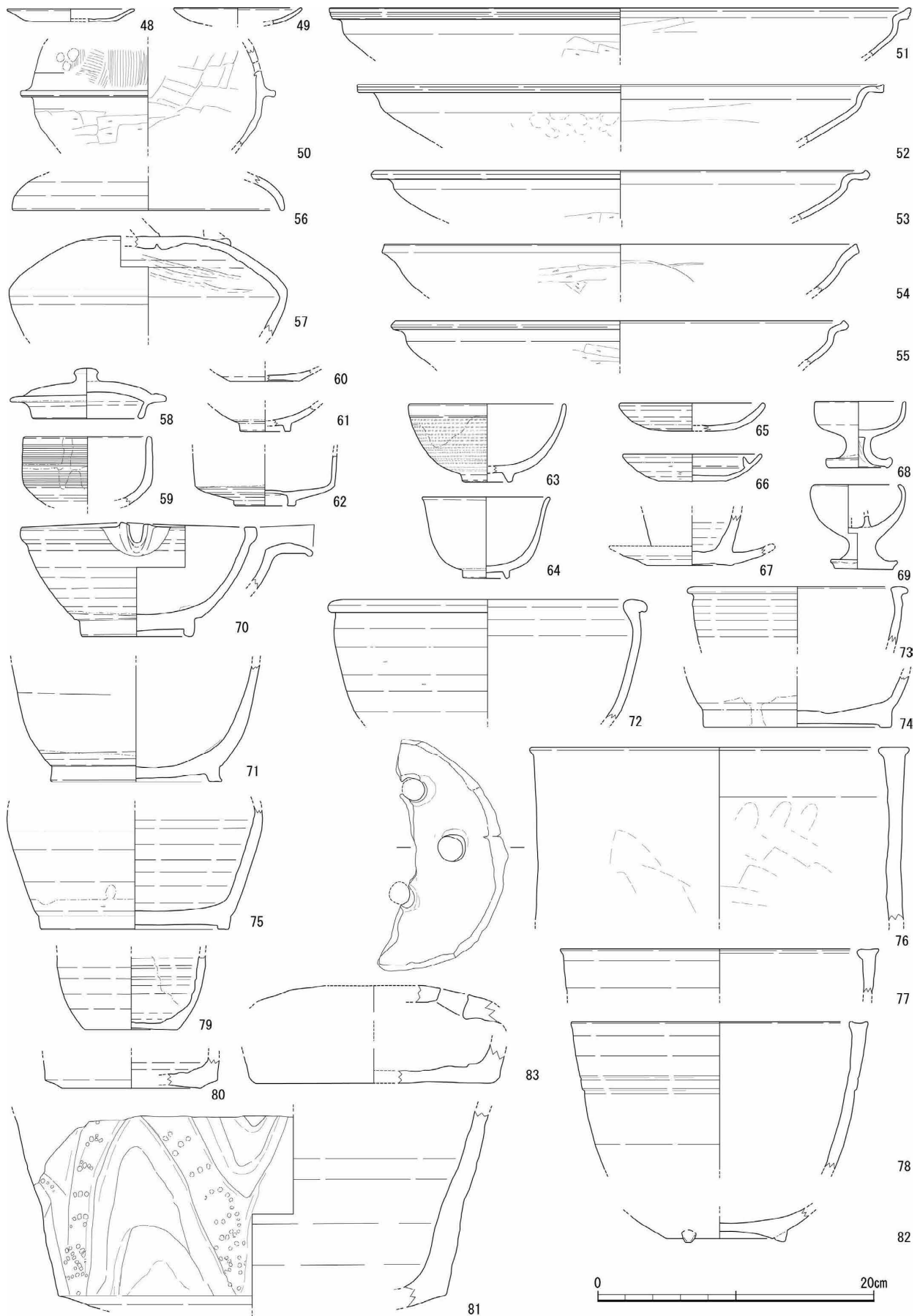
4区



SK7005



第140図 第7次調査4区出土遺物 (1:4)

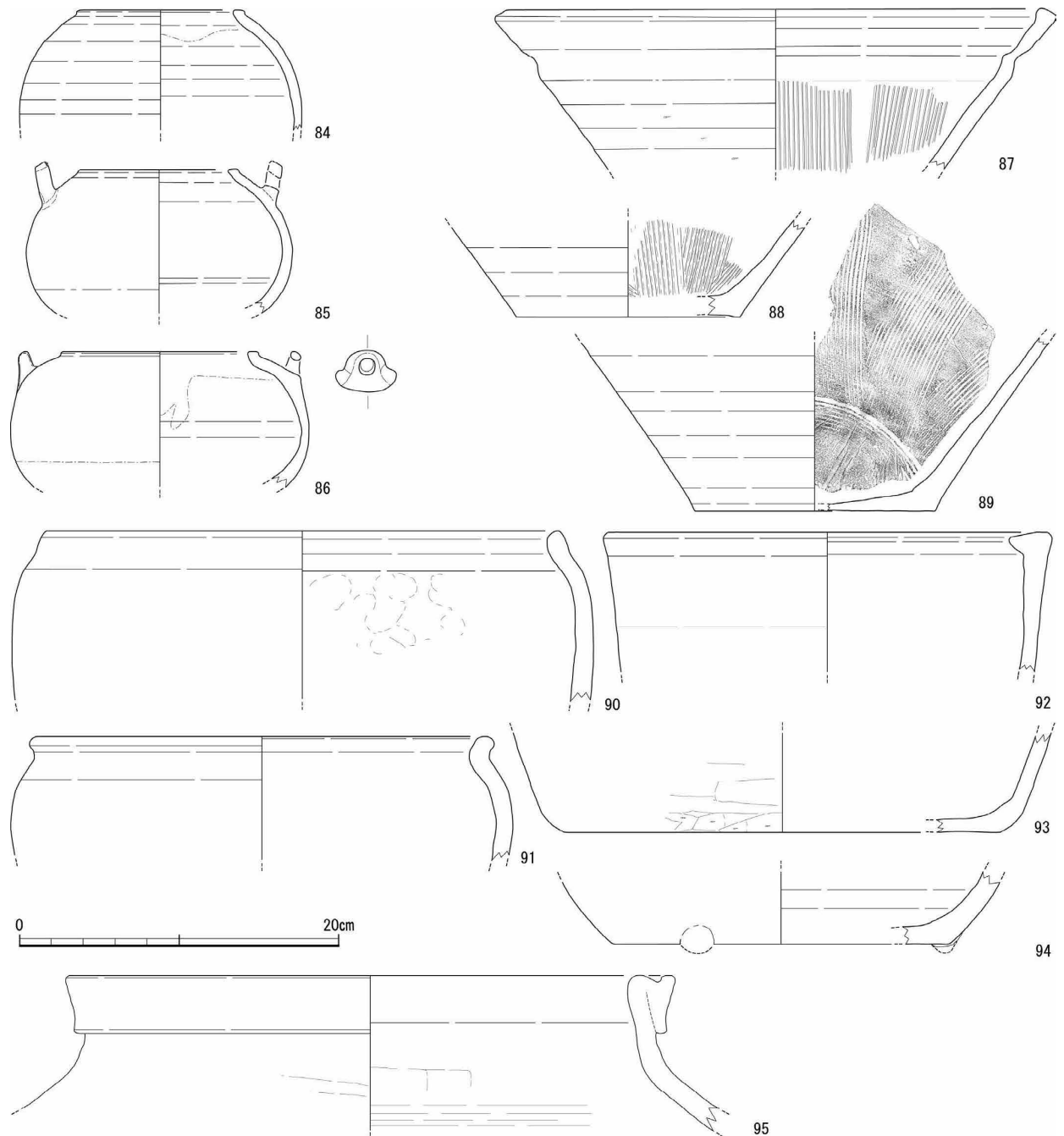


第141図 第7次調査SE7007出土遺物① (1:4)

を施すが、下面は露胎となる。36も陶器の椀で京都・信楽系であるが、内面の山水文は認められず、弱い水割文を呈している。37は陶器の鍋、38は鉢、39は甕で、37・38には鉄釉が施されているが、38の底部は露胎となる。40～44は磁器で、幾何学文や草木、雲文を描いている。42は猪口としたが、幅2cm程度のへらにより縦方向に面取りし、八角形に仕上げている。45～47は瓦で、45・46は丸瓦、47は平瓦である。46は軒丸瓦であるが、瓦当部が剥離している。

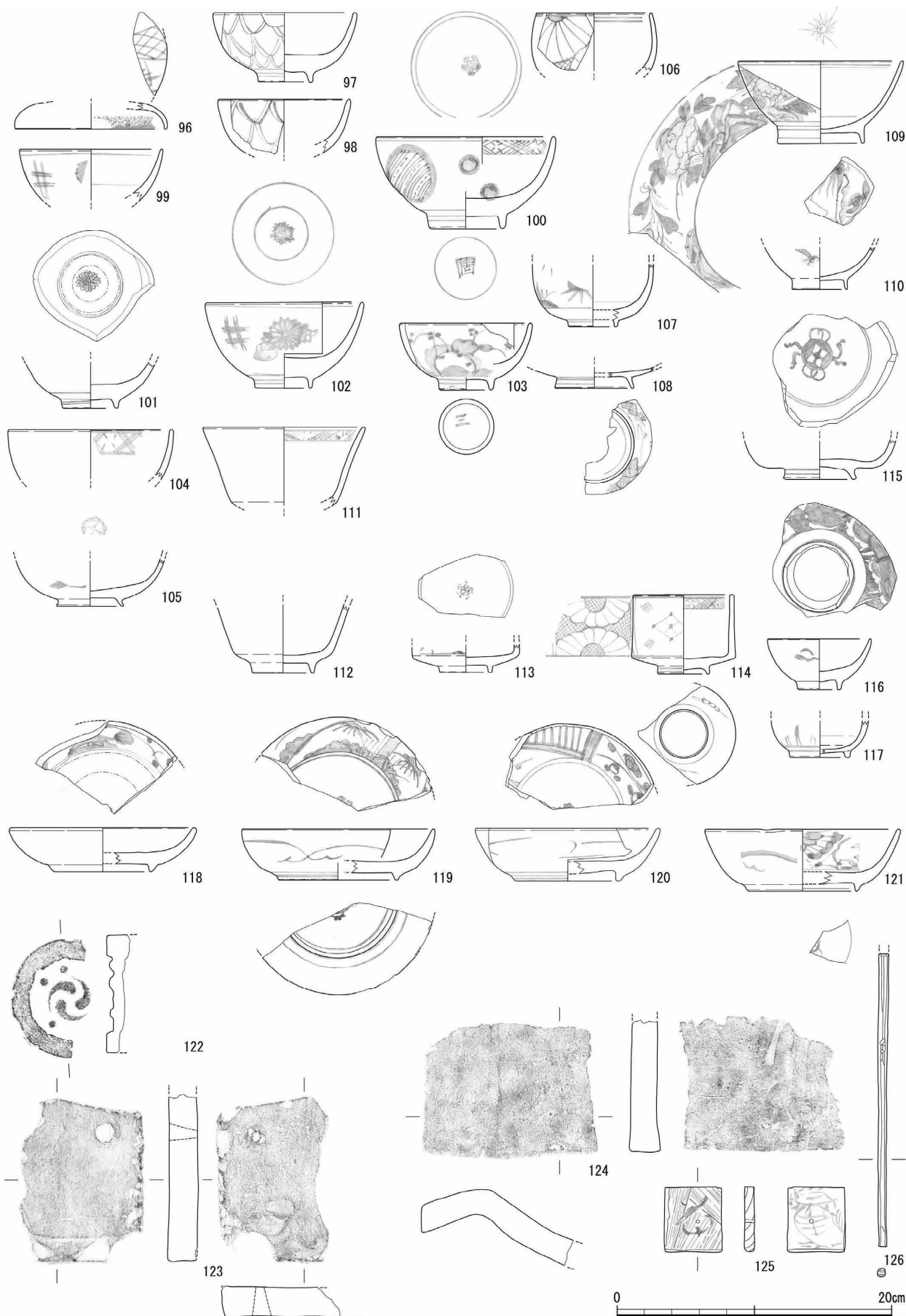
**SE7007出土遺物** 井戸埋土から土師器、陶磁器、木製品等、多くの遺物が出土している。

48～55は土師器で、48・49は皿である。50は茶釜の形態を呈するが、体部上半に円形の穿孔がある。穿孔は欠損のため2ヶ所を認めるに止まるが、本来は3ヶ所であるものと推測され、当該部分の器壁が剥離している。この状況から注口が剥離した可能性は濃厚で、土瓶とした。鏝の上部まで厚く煤が付着しており、高頻度で火に掛けられていたものである



第142図 第7次調査SE7007出土遺物② (1:4)





第143図 第7次調査SE7007出土遺物③ (1:4)

う。51～55は焙烙である。口縁端部を折り返し、上方に摘まみ上げる形態を呈するが、53・55はその傾向が弱く、54は単純に外に面をもつ形態である。全てにおいて、外面の煤の付着は弱い。

56～95は陶器で、58は土瓶の蓋、56も確証はないが蓋と思われる。57は把手が付くもので、器高が高い蓋である。59・61～64は椀である。施釉されるが、底部外面は露胎となる。59は灰釉と鉄釉を塗り分けており、63も同様である。しかし、釉の発色は不良で、灰釉は濃緑色、鉄釉は淡茶色で色斑が目立つ。64は内外に灰釉を施すが、両面とも氷割文を呈する。60は底部片であるが皿と思われ、65～67は灯明皿関連の器である。鉄釉を施すが、67は濃黄色に発色し、黄瀬戸釉とした。65・66の鉄釉は、泥漿として一部底部にまで及んでいる。

68・69は仏具で、68は仏飯具、69は乗燭である。前者は灰釉、後者は鉄釉を施す。70～81は鉢としたが、79は瓶かもしれない。80の外面には煤が付着し、鉢とするに疑問が残る。70は片口をもつが、施された灰釉は発色不良となっている。72・73は半球状の形態であるが、76～78は筒状の形態である。前者は

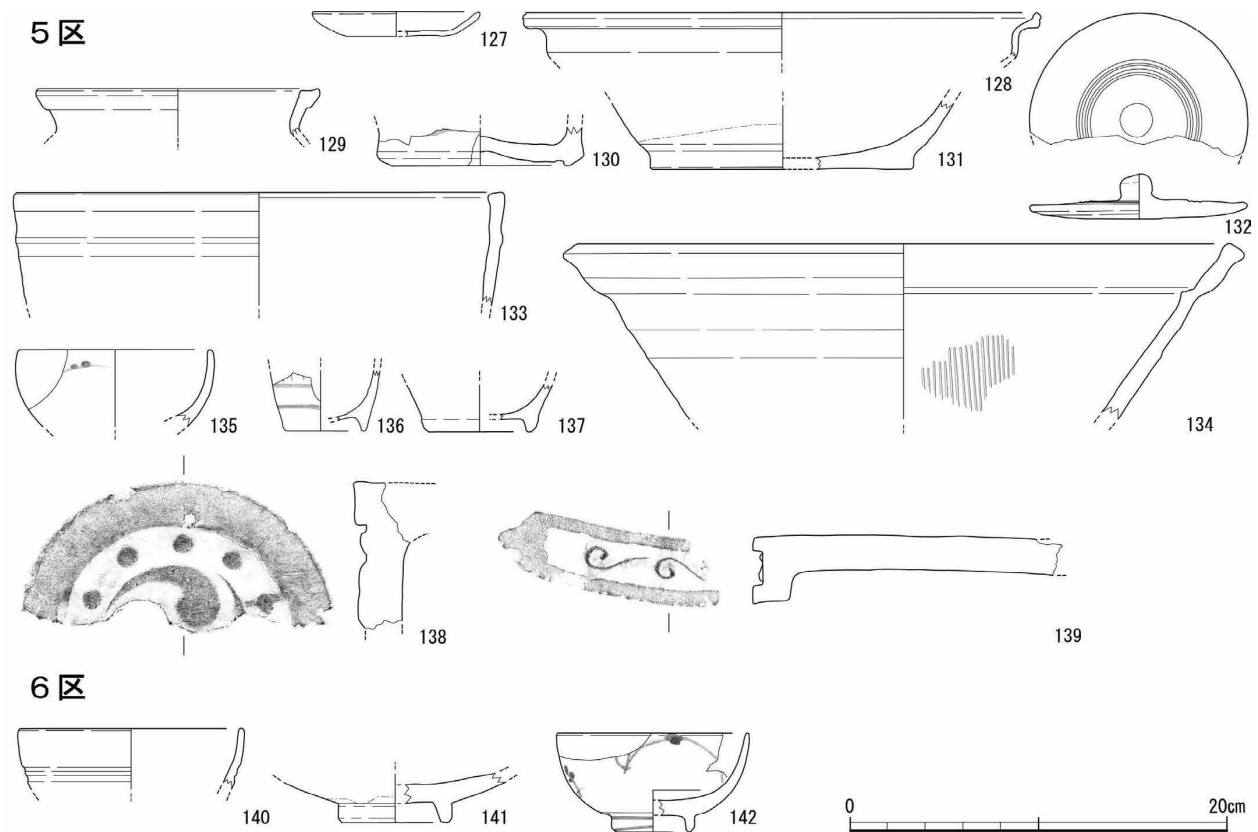
灰釉、後者には鉄釉が施され、形態により釉葉を区別している。81は瀬戸・美濃系で、水甕と呼ばれるものである。

82は底部の3方に豆粒状の脚を付け、器の安定に寄与するもので、行平鍋と思われるが、内面に鉄釉が施される。外面には煤が付着しており、直接火に掛けられたようである。

83は風炉としておく。底部片と蓋片があり、蓋には5個の空気孔が開けられている。無釉で、調整は未調整のままの雑な仕上げである。特に空気孔は下から上に突き上げるように開けられており、その際に生じた粘土の隆起もそのままとなっている。

84～86は土瓶である。いずれも外面に鉄釉が施される。施釉は口縁内面まで及び、84・85は泥漿風にハケメ痕が残る。85と86では把手の形状が若干異なり、86には針金が付けられている。

87～89は挿鉢、90～95は甕としたが、95は中世に遡るもので、混入遺物である。89は器壁が薄くなるほど使用により摩滅している。91・93の内面には付着物が残る。94の底部は微妙な粘土の隆起がある。他にも粘土が剥離した痕跡もあり、あたかも低い豆



第144図 第7次調査5区・6区出土遺物 (1:4)

粒状の脚を3方か4方にもつ状況を呈する。しかしその状況は微妙なものであり、ここでは一般的な甕の底部としておく。

96～121は磁器で、96は蓋、97～116は椀であるが、108は皿かもしれない。全て染付であるが、104・111・112は染付青磁である。肥前系が大半であるが、瀬戸・美濃系としたいものもあるが、確証がない。器形は多様で、広東椀や筒形椀もみられる。見込みには五弁花文や菊花文を施すものがあり、五弁花文はコンニャク印判と思われる。ただし、113は手描きの五弁花文である。100・103には裏銘が確認できる。100は朱の変形文字を二重四角で囲うものであるが、二重四角は省略気味である。118～121は皿とした。椀と同様に全て染付で、見込みに五弁花文を施すものも多い。118の内面は蛇ノ目釉剥となる。

122～124は瓦で、124は棧瓦である。122は小型の瓦当片である。確証はないが、小菊瓦としておく。123は反りがなく、熨瓦とした。釘穴を設けている。

125・126は木製品で、両者とも材質はスギである。126は箸で、大型のため菜箸と思われる。125は木片で、鋸により方形の板に加工している。両面に墨書があるが、何を表したのかは不明である。片方は鳥のようにも見え、他方は文字のようにも見える。

#### (4) 5区出土遺物 (第144図)

土師器 (127・128) ・陶器 (129～134) ・磁器 (135～137) ・瓦 (138・139) がある。129は陶器の壺とした。断面観察によると内部まで熱が十分届いていないようである。無釉でもあり、土師器の可能性も残る。131の内面には重ね焼きの蛤痕が残る。

#### (5) 6区出土遺物 (第144～150図)

土坑・井戸を中心に多くの遺物が出土している。特にSE7013から袖瓦を含む多量の遺物が出土している。

140は陶器の椀、141は皿、142は磁器の椀である。140は口縁部に灰釉、それ以下を鉄釉で塗り分ける。141は磁器と迷う精緻な胎土で、濃緑色を呈する銅緑釉を施すが、見込みは蛇ノ目釉剥となる。

**SK7011出土遺物** 土師器 (143) ・陶器 (144～151) ・磁器 (152) ・瓦 (153～156) ・木製品 (157) がある。143は吊手の付いた鍋である。吊手部が2ヶ所として図化した。孔は吊手部に1ヶ所のみで安

定を欠く。吊手部は3～4ヶ所の可能性も大きい。

147は柿釉を施すが、見込みに胎土目を残す。151は鍋としたが、受部をもつ。蓋を受けるためか、羽釜のように竈に掛けるものかは不明である。煤の付着が無いと前者の可能性が高いものと思われる。157は用途不明の板材である。片方断面に切欠きを設ける。

**SK7012出土遺物** 158は陶器の蓋であるが、無釉で平安時代のロクロ土師器に酷似する。高温で焼成されており、陶器とした。159は施釉陶器の椀であるが、外面に鉄釉で蔓草状の文様が描かれるようである。160は陶器の壺としたが、灰釉か黄瀬戸釉か迷う。内面に鉄釉の雫が落ちていることから、黄瀬戸釉と推測される。161・162は陶器の甕であるが、161は無釉、162は柿釉を施す。162には砂目が残る、おそらく4ヶ所に設けられたものである。169も陶器甕と同様なものであるが、井戸枠として製作されたものと思われる。

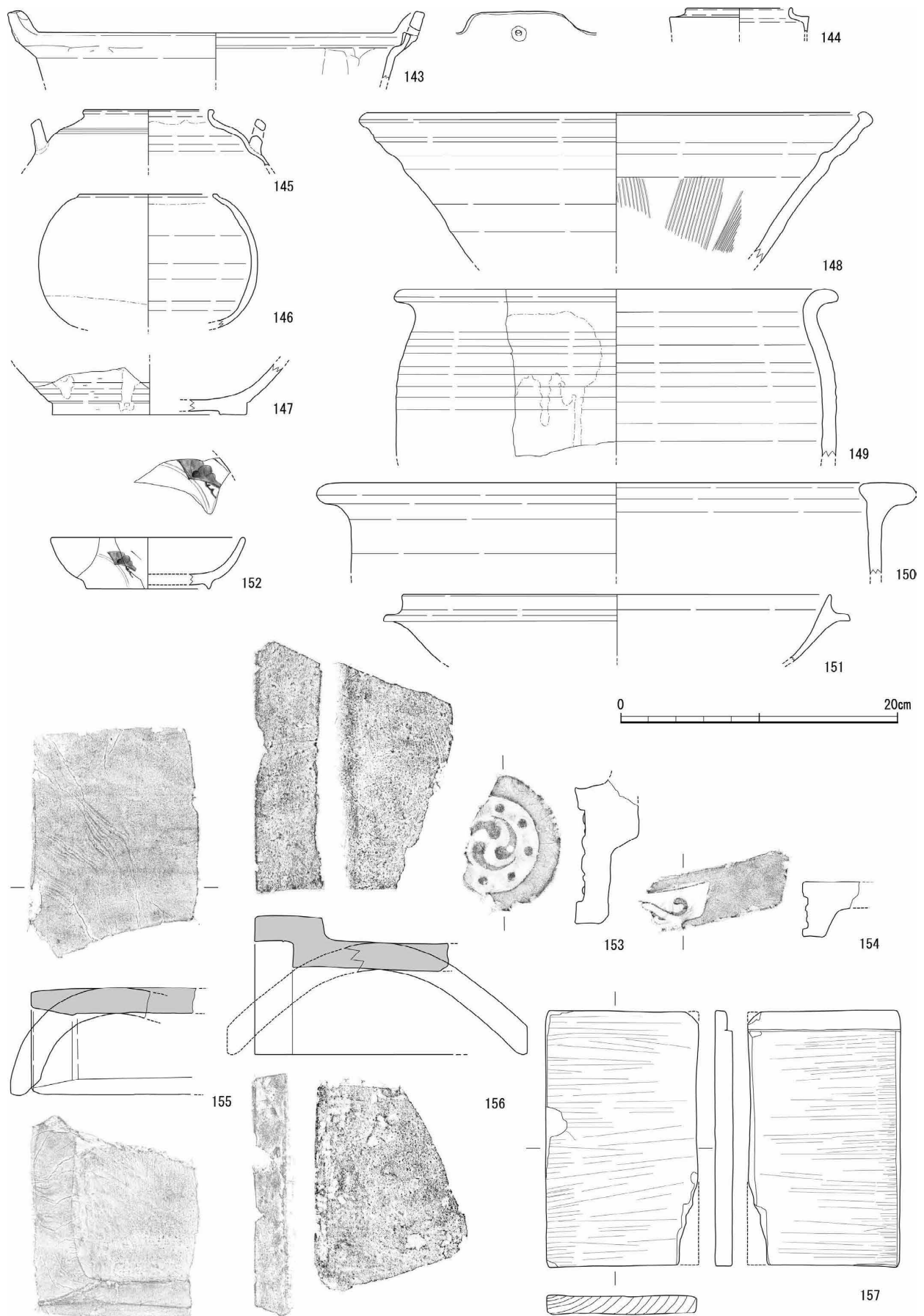
163～165は磁器の椀である。164の五弁花文はコンニャク印判、165は手描きと思われる。164の裏銘は、変体字を二重枠で囲ったものであろうが、二重枠は崩れており、文字との判別が困難である。

168は下駄で、材質はクリ、表面には柿渋の下地に漆が塗布されている。166・167は瓦で、167は釘穴をもつ。166は棟込瓦で菊花文を施す。

**SE7013出土遺物** 170～176は土師器で、170～173は皿、174～176は焙烙である。172は煤の付着があり、灯明皿として利用されたものである。173の内面には、口縁部と底部の境に棒状工具による一周の強いナデを施す。焙烙には煤の付着がない。

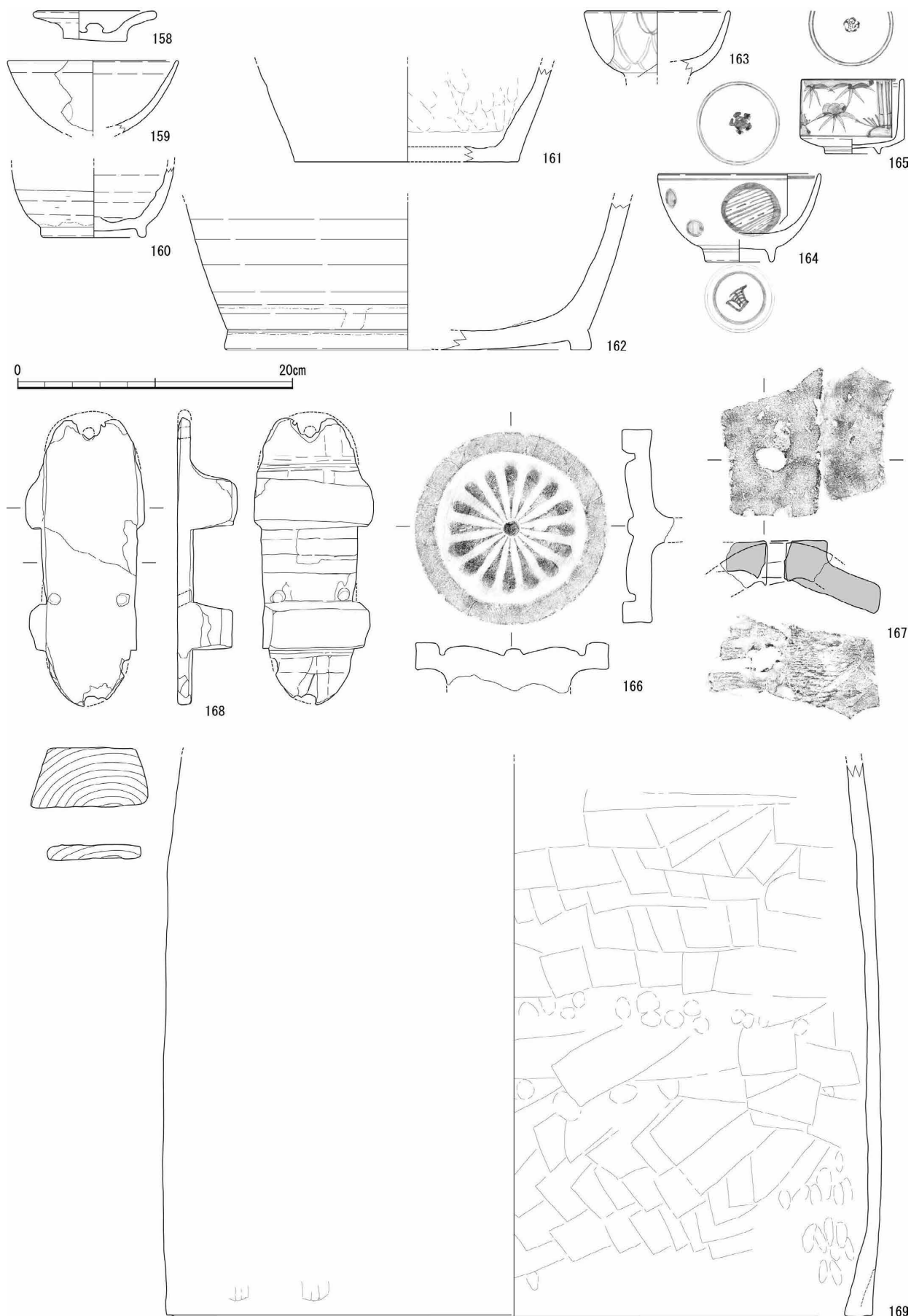
177～215は陶器であるが、178・179は山茶椀で明らかに混入遺物である。177は無釉の壺である。土師器と近似するが、高温で焼成されているため陶器とした。180～184は施釉陶器の椀皿類である。180・184は陶器の染付で、雲文や蔓草文を描くが、184は呉須釉と鉄釉による2色で描く。182の灰釉は沸騰気味で、焼成やや不良である。183の内面には輪状に直接重ね焼きの痕跡が残る。

185～203は陶器での壺・鉢類であるが、甕と呼称してもよいものや甕との区別が困難なものもあるものの、ここでは鉢とした。ただし、192は仏飯具、

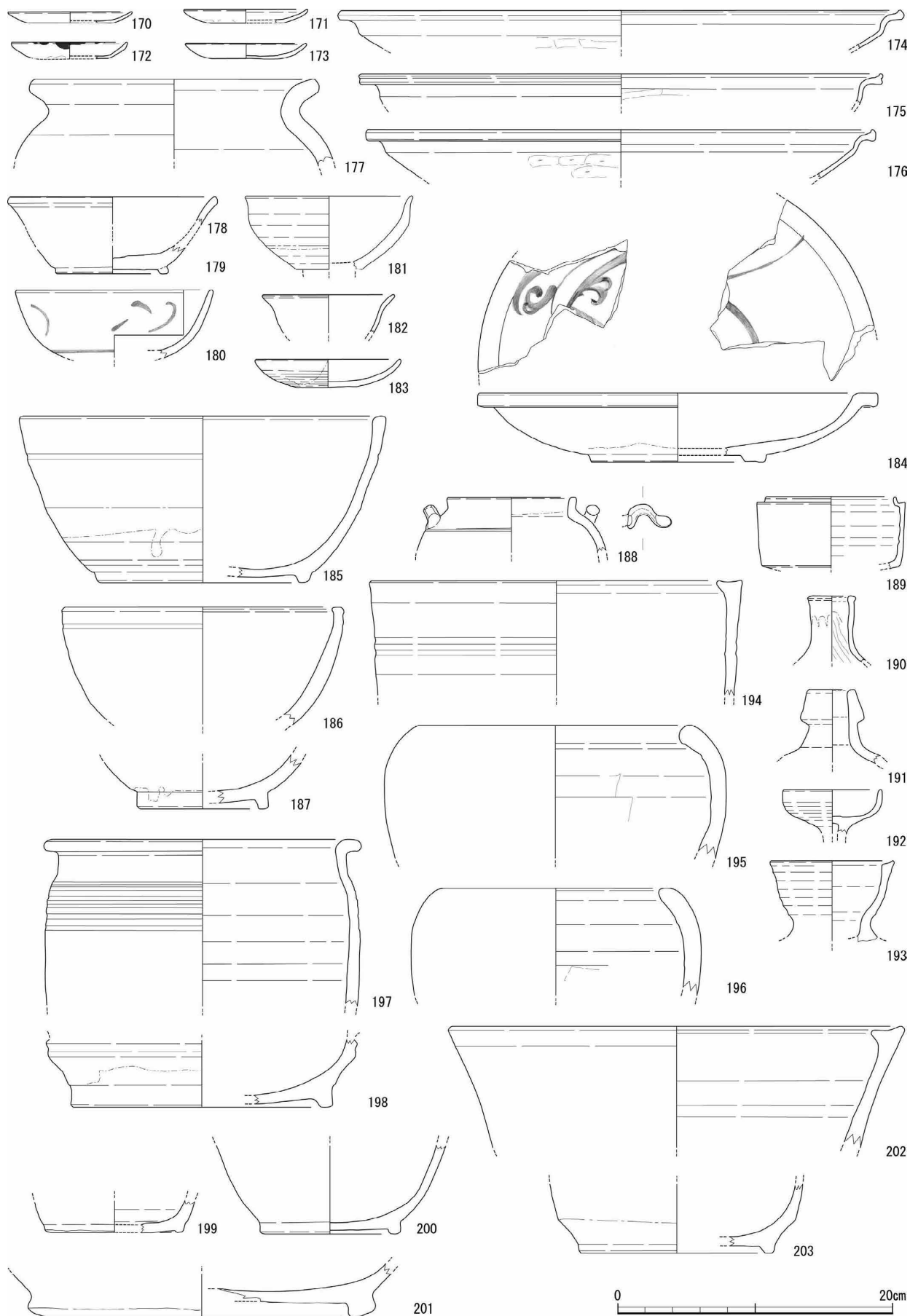


第145図 第7次調査SK7011出土遺物 (1:4)

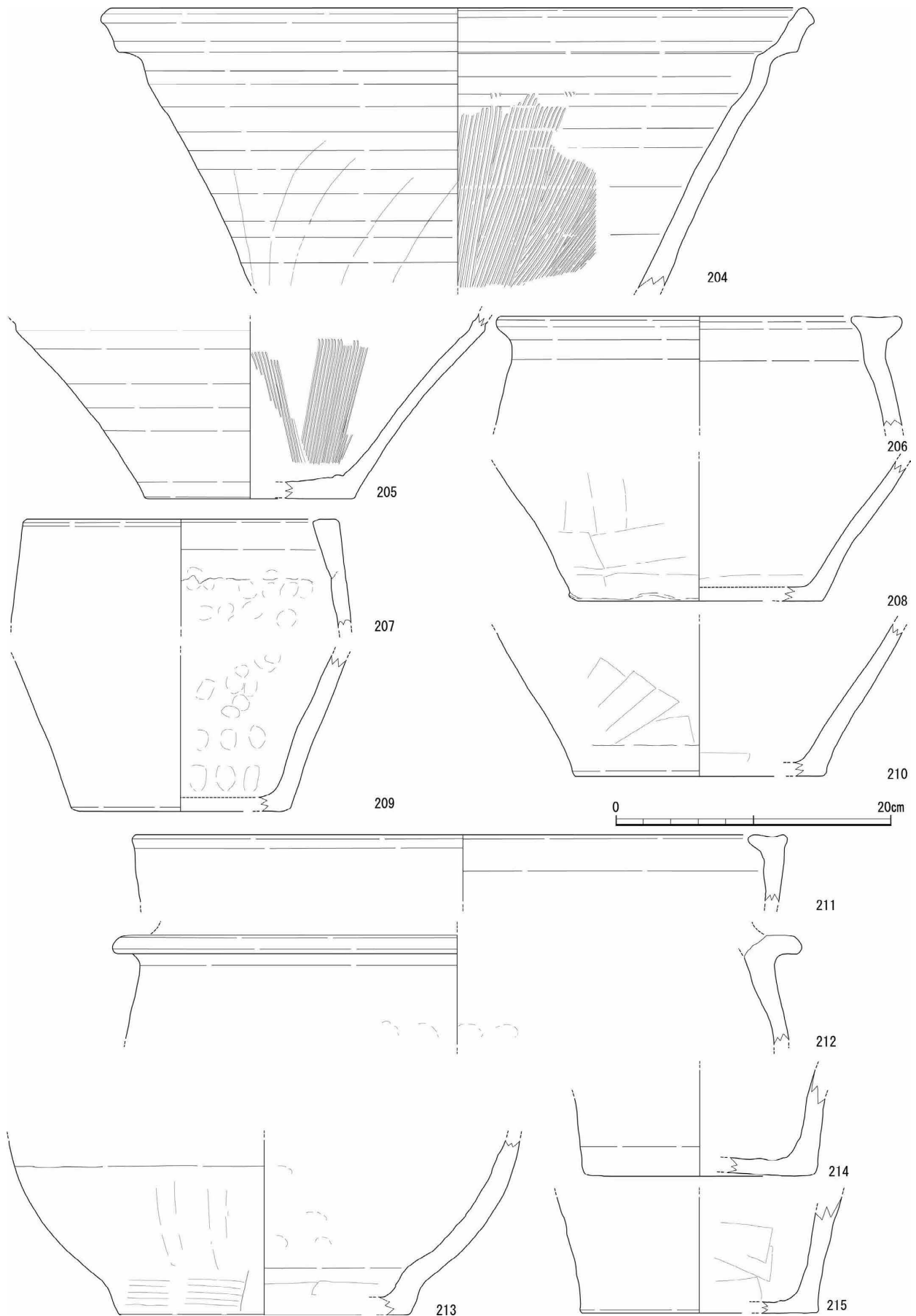




第146図 第7次調査SK7012出土遺物 (1:4)



第147図 第7次調査SE7013出土遺物① (1:4)



第148図 第7次調査SE7013出土遺物② (1:4)

193は灯明皿台で、下半を欠損している。剥離面は糸切痕が明瞭な疑口縁となっている。196を除き、灰釉系か鉄釉系で施釉されるが、189は口縁端部が露胎となる。また、底部外面が露胎となるものが多いが、201は底部外面まで施釉が及ぶ。しかし、刷毛痕が明瞭な斑のある程度である。

204・205は播鉢である。両者とも泥漿が施されるが、204は非常に厚いものである。

207～215は陶器の甕で、無釉である。口縁部に縁帯をもつもの（206・211・212）と、そのまま直立するもの（207）がある。後者は、鉢とすべきかもしれない。内面に付着物があるものがあり、210・213は濁白色、215は暗茶色を呈する。

216～231は磁器で、大半が染付である。比較的瀬戸・美濃系のもが目立つ。五弁花文のなかで228はコンニャク印判の可能性はあるが、216・219・222は手描きである。223・226は釉が沸騰気味で、良好な発色が得られていない。

232は陶器であるが、筒状を呈する。筒状の容器とした場合には、口縁端部内側が豪快なヘラケズリでの荒い調整のままであり、疑問が残る。したがって容器とは考えられず、土管としておく。

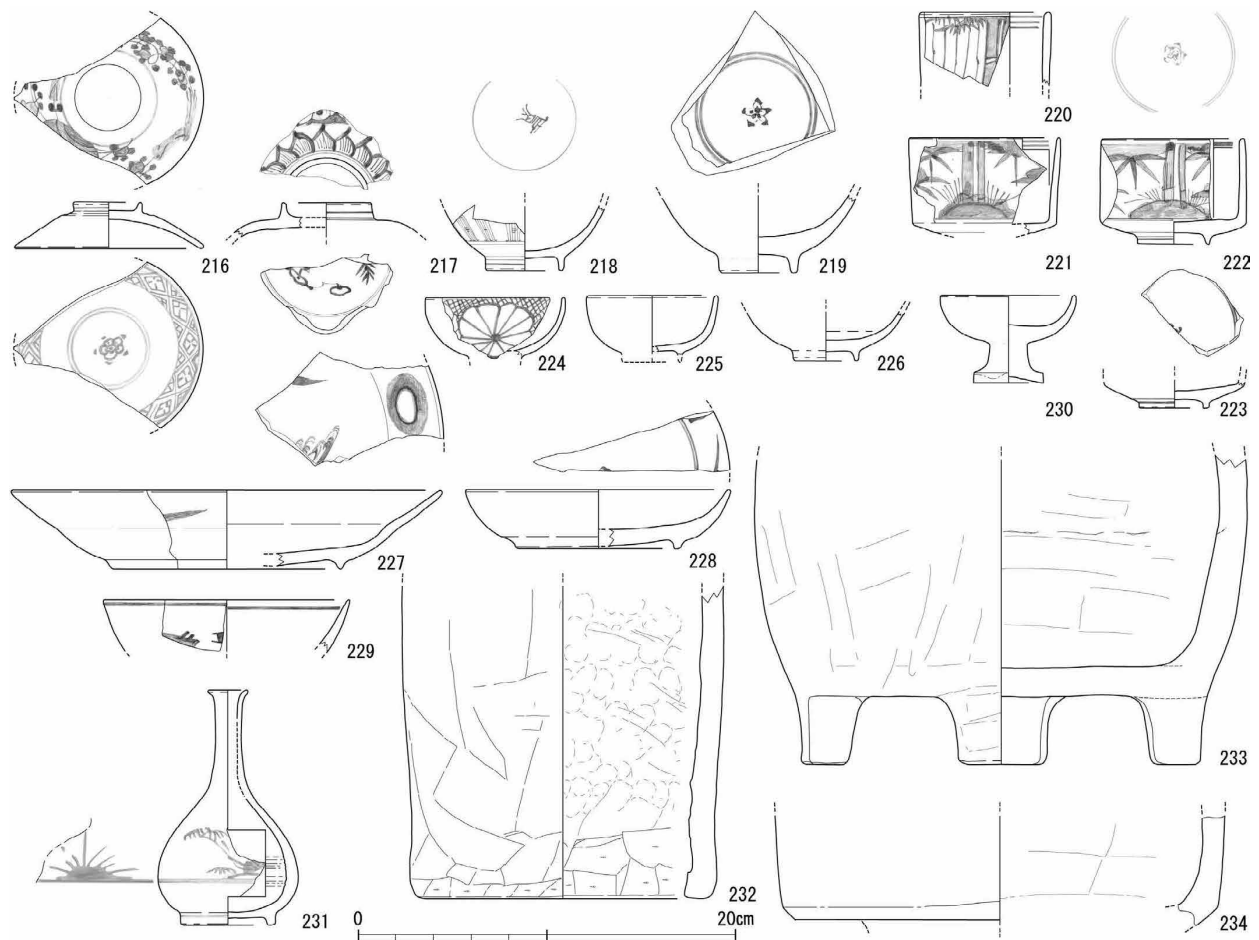
233・234は瓦質土器で、両者とも火舎と思われる。

233は4方に脚が付くが、234は脚の剥離痕を認めるに止まる。

235～248は瓦である。235～239は丸瓦で、237は軒丸瓦である。巴文であるが内圏線はない。丸瓦の内面には板状工具によるタタキ痕が明瞭なものがある。240は棧瓦、241は平瓦、242～248は袖瓦である。袖瓦は小片のため、左右を判別し難い。袖の内側には櫛による深い沈線が波状や格子状に刻まれている。これらの瓦類には燻不良のため茶褐色を呈するものが散見される。

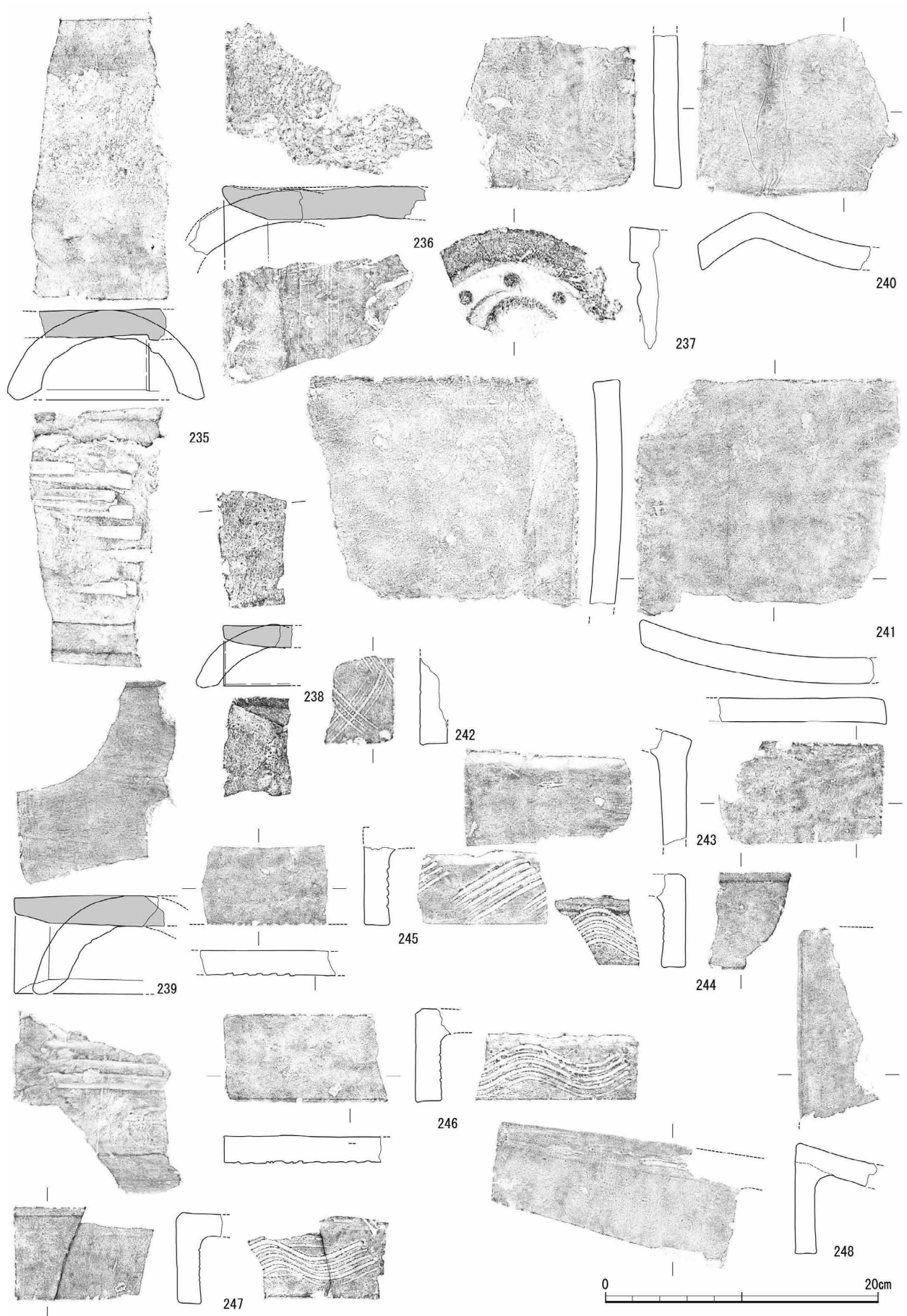
#### (6) 7区出土遺物 (第151図)

若干の陶磁器類が出土し、陶器磁器を問わず瀬戸・美濃系である。249の内面には重ね焼きの痕跡が残



第149図 第7次調査SE7013出土遺物③ (1:4)





第150図 第7次調査SE7013出土遺物④ (1:4)

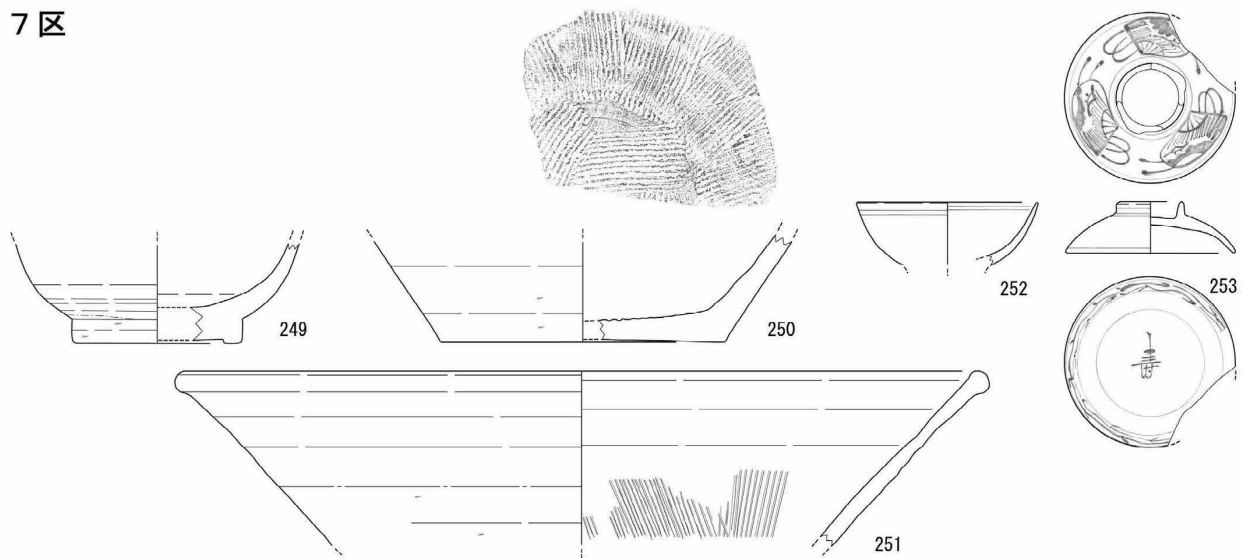
るが、小さく判然としない。252は染付であるが、  
 圏線の他には絵柄はない。

(7) 8区出土遺物 (第151図)

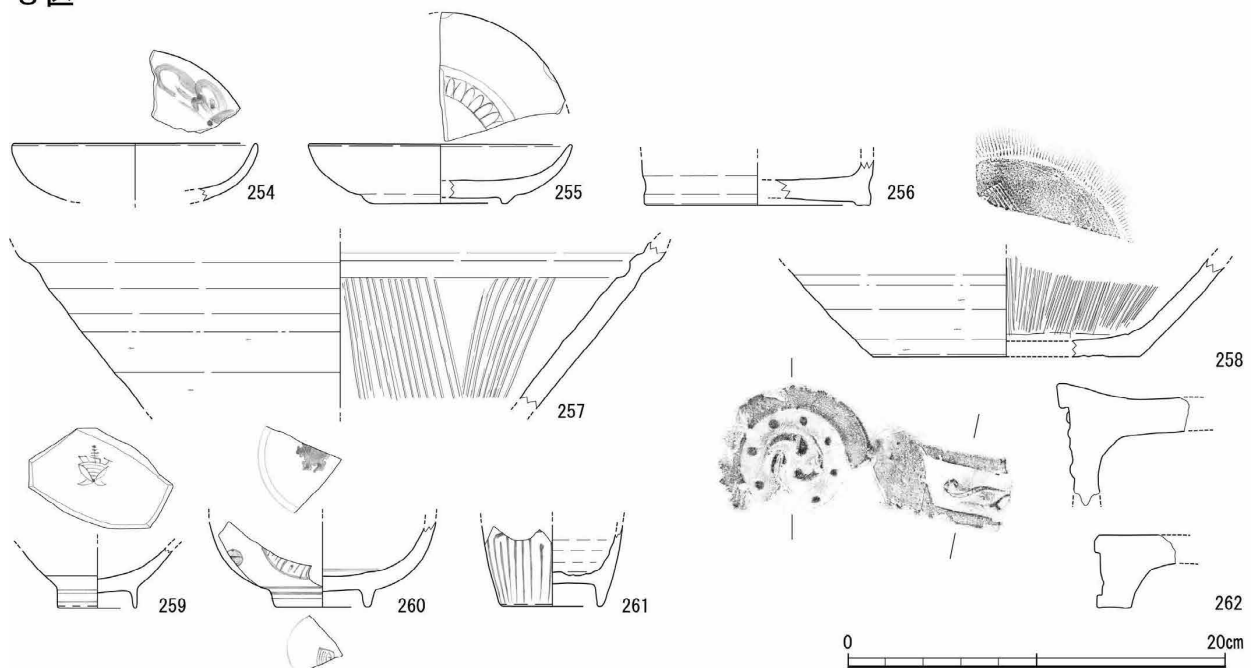
陶磁器類を中心に出土がある。254は陶器の染付、  
 255は磁器の色絵で、赤色と暗茶色を呈する。しか  
 し、内面は蛇ノ目釉剥ぎとなっているが、その部分  
 に連弁状の絵柄があり、暗茶色の発色を呈している。  
 したがって、この暗茶色は本来の発色ではないかも

しれない。256は徳利とも思われるが、底部内面ま  
 で施釉されることから鉢としておく。257・258は播  
 鉢であるが、258は精緻に焼成され、赤茶色を呈す  
 るが、泥漿等は施されていないようである。259～2  
 61は磁器の染付、262は軒棧瓦である。見込みの絵  
 柄は、259は昆虫状、260はコンニャク印判による五  
 弁花文である。260には裏銘があり、「朱」の変形文  
 字を囲っているが、二重囲いには見えない。

7区



8区



第151図 第7次調査7区・8区出土遺物 (1:4)

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	032-01	陶器 (常滑)	甕	1区		造成土	口縁部 1/12	35.8	—	—	橙2.5YR6/6	
2	032-05	磁器 (肥前)	蓋	1区		褐色シルト (黒直上)	5/12	9.8	幅み 5.5	3.1	白9/	染付。外面に木賊文、内面に圏線。
3	032-04	土師器	皿	3区		造成土(砂)	小片	—	—	—	橙5YR6/6	
4	033-03	陶器	椀	3区		造成土(砂)	底部 完存	—	高台 3.8	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。底部露胎。
5	031-03	陶器	鉢	3区		造成土	口縁部 3/12	14.6	—	—	褐灰7.5YR5/1	口縁下部に頸部に沈線2条。
6	035-01	陶器	甕	3区		造成土(砂)	底部 9/12	17.0	高台 11.0	—	灰白5Y8/1	鉄釉。底部露胎。
7	034-05	磁器 (肥前)	椀	3区		造成土(砂)	底部 6/12	—	高台 5.8	—	灰白8/	染付。外面に二重網目文。
8	031-02	磁器 (肥前)	椀	3区		造成土 下水支線	口縁部 3/12	10.6	—	—	白9/	染付。外面に丸+幾何学文。
9	032-02	青磁	皿	3区		造成土 下水支線	底部 3/12	—	底部 21.0	—	白9/	
10	027-02	陶器	壺	3区		SK702	底部 1/12	—	底部 15.4	—	灰N6/	鉄釉?
11	027-01	陶器	壺	3区		SK702	底部 7/12	—	底部 5.8	—	灰黄2.5Y7/2	鉄釉。
12	029-05	陶器	椀	3区		SK703	口縁部 3/12	13.2	—	—	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
13	029-02	陶器	鬚罎	3区		SK703	5/12	短径 3.0	3.8	—	灰白2.5Y7/1	灰釉。
14	029-01	陶器	椀	3区		SK703	口縁部 1/12	8.4	—	—	灰白2.5Y7/1	蓋物。灰釉。外面に鉄釉で草花文。
15	028-03	陶器	挿鉢	3区		SK703	2/12	—	11.6	—	灰白2.5Y8/2	挿目18条。内外面弱く泥漿。
16	027-03	陶器 (常滑)	甕	3区		SK703	底部 1/12	—	21.0	—	褐7.5YR4/3	
17	029-04	磁器 (肥前)	椀	3区		SK703	底部 完存	11.6	高台 5.6	6.0	白9/	広東椀。染付。風水文+貝?
18	037-01	瓦	平瓦	3区		SK703	底部 完存	—	谷深 1.8	—	橙5YR7/6	酸化焼成。
19	028-01	瓦	箱冠瓦	3区		SK703	2/12以下	—	2.6	—	にぶい、橙7.5YR7/4	酸化焼成。
20	028-02	瓦	平瓦	3区		SK703	1/12以下	—	谷深 1.2	—	にぶい、黄2.5Y6/3	酸化焼成。
21	027-05	瓦	丸瓦	3区		SK703	1/12以下	—	3.6	—	にぶい、黄橙10YR6/4	
22	027-04	瓦	棧瓦	3区		SK703	1/12以下	—	—	—	橙5YR6/6	酸化焼成。
23	036-01	瓦質製品	塼?	3区		SK703	1/12以下	—	—	—	灰N6/	
24	029-03	石製品	砥石	3区		SK703	1/12以下	—	—	—	灰褐5YR5/2	粘板岩。
25	006-02	土師器	皿	4区		近世造成土	1/12	9.4	—	1.1	橙2.5YR6/6	
26	007-01	陶器 (京都・信楽)	椀	4区		近世造成土	5/12	12.0	高台 4.0	5.1	灰黄2.5Y7/2	
27	006-05	陶器	土瓶	4区		近世造成土	注口部ほぼ完存	—	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
28	006-04	陶器	挿鉢	4区		近世造成土	底部 2/12	—	14.0	—	浅黄橙10YR8/3	挿目10条/3.2cm。
29	006-01	陶器	火舎	4区		近世造成土	口縁部 1/12	24.0	—	—	にぶい、橙7.5YR7/4	口縁部内面に煤付着。
30	009-01	陶器	鉢	4区		SZ7008	口縁部 1/12	27.0	—	—	灰白2.5Y7/1	
31	006-03	磁器 (肥前)	鉢	4区		近世造成土	口縁部 1/12	22.8	—	—	白9/	染付内面青磁。草木文。
32	030-01	土師器	蓋	4区		SK7005	口縁部 2/12	8.9	—	1.55	にぶい、橙7.5YR6/4	
33	022-05	土師器	皿	4区		SK7005	口縁部 3/12	8.0	—	1.0	橙2.5YR6/6	
34	022-06	土師器	皿	4区		SK7005	口縁部 3/12	7.8	—	—	橙7.5YR7/6	
35	023-03	陶器	蓋	4区		SK7005	完形	5.0	—	1.4	灰白N8/	灰釉。
36	022-04	陶器 (京都・信楽)	椀	4区		SK7005	底部 2/12	—	高台 2.8	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
37	023-02	陶器	鍋	4区		SK7005	口縁部 3/12	14.9	—	—	灰白N8/	鉄釉。
38	023-01	陶器	鉢	4区		SK7005	底部 1/12	—	高台 13.6	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
39	035-02	陶器 (常滑)	甕	4区		SK7005	底部 2/12	—	16.0	—	浅黄橙7.5YR8/4	
40	030-02	磁器 (肥前)	椀	4区		SK7005	口縁部 3/12	10.0	—	—	白9/	染付。七宝文。
41	030-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SK7005	口縁部 2/12	8.6	—	—	灰白N8/	染付。外面雲文、内面四方禰文。
42	030-05	磁器 (瀬戸・美濃)	猪口	4区		SK7005	底部 4/12	—	高台 4.2	—	白9/	染付。草花文。
43	030-04	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	4区		SK7005	口縁部 1/12	13.8	—	—	灰白N8/	染付。蔓草文。
44	023-04	磁器 (肥前)	皿	4区		SK7005	底部 3/12	—	高台 9.0	—	灰白N8/	染付。雲文。
45	026-01	瓦	丸瓦	4区		SK7005	4/12	—	幅 12.4	6.8	黄灰2.5Y5/1	
46	025-01	瓦	軒丸瓦	4区		SK7005	3/12	—	—	7.4	黄灰2.5Y6/2	瓦当剥離。
47	038-01	瓦	平瓦	4区		SK7005	3/12	—	谷深 1.6	—	黒N1.5/	
48	011-06	土師器	皿	4区		SE7007	1/12	9.0	—	0.8	にぶい、黄橙10YR6/3	

第44表-1 第7次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
49	011-05	土師器	皿	4区		SE7007	3/12	9.2	—	—	にぶい 橙7.5YR6/4	
50	010-02	土師器	土瓶	4区		SE7007	3/12	鏝 18.4	—	—	にぶい 褐7.5YR5/3	外面に煤付着。
51	021-03	土師器	焙烙	4区		SE7007	口縁部 1/12	41.8	—	—	褐灰7.5YR4/1	
52	008-01	土師器	焙烙	4区		SE7007	口縁部 1/12	38.0	—	—	にぶい 褐7.5YR6/3	
53	021-04	土師器	焙烙	4区		SE7007	口縁部 1/12	35.4	—	—	にぶい 褐7.5YR6/3	
54	010-01	土師器	焙烙	4区		SE7007	口縁部 1/12以下	34.0	—	—	にぶい 褐7.5YR5/4	
55	022-01	土師器	焙烙	4区		SE7007	口縁部 1/12以下	32.3	—	—	にぶい 褐7.5YR6/3	外面に若干煤付着。
56	021-02	陶器	蓋	4区		SE7007	口縁部 1/12	19.4	—	—	灰白5Y8/1	灰釉。
57	004-02	陶器	蓋	4区		SE7007	4/12	—	—	—	灰白N8/	灰釉。
58	015-01	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	4区		SE7007	ほぼ完形	7.6	最大径 11.3	4.6	灰白5Y8/1	柿釉。
59	007-07	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	4区		SE7007	口縁部 3/12	8.8	—	—	灰白5Y8/1	灰釉、鉄釉塗り分け。
60	020-05	陶器	皿	4区		SE7007	底部 3/12	—	5.0	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
61	015-04	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	4区		SE7007	底部 3/12	—	高台 3.6	—	灰白2.5Y8/1	柿釉。
62	015-02	陶器	椀	4区		SE7007	底部 5/12	—	高台 4.3	—	にぶい 黄橙10YR7/2	鉄釉。
63	015-07	陶器	椀	4区		SE7007	底部 4/12	11.0	高台 3.5	5.7	浅黄2.5Y8/3	鍍椀。灰釉、鉄釉塗り分けするが、 発色不良。
64	007-05	陶器 (京都・信楽)	椀	4区		SE7007	底部完存	9.0	高台 3.1	5.9	灰白2.5Y8/1	灰釉。
65	013-04	陶器	皿	4区		SE7007	底部 4/12	10.4	4.0	2.0	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
66	008-03	陶器	皿	4区		SE7007	6/12	9.9	4.9	1.9	灰黄2.5Y7/2	灯明受皿。鉄釉。
67	010-04	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿台	4区		SE7007	底部完存	—	6.4	—	灰白2.5Y8/2	灯明受皿。黄瀬戸釉。
68	015-06	陶器	仏飯具	4区		SE7007	口縁部4/12 欠損	6.4	4.2	4.8	灰白2.5Y8/2	灰釉。
69	015-05	陶器 (瀬戸・美濃)	乗燭	4区		SE7007	口縁部4/12 欠損	6.1	4.1	6.1	灰白10YR7/1	鉄釉。
70	005-01	陶器	鉢	4区		SE7007	底部完存	16.7	高台 7.9	8.7	灰白2.5Y8/2	灰釉、発色やや不良。
71	004-01	陶器	鉢	4区		SE7007	底部 7/12	—	高台 12.0	—	灰白N8/	鉄釉。
72	018-02	陶器	鉢	4区		SE7007	口縁部 3/12	20.5	—	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
73	013-01	陶器	鉢	4区		SE7007	口縁部 1/12	15.2	—	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
74	014-03	陶器	鉢	4区		SE7007	底部 5/12	—	高台 13.4	—	灰白N8/	灰釉。内面に付着物。
75	019-01	陶器	鉢	4区		SE7007	底部 8/12	—	高台 12.6	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
76	003-02	陶器	鉢	4区		SE7007	口縁部 2/12	26.0	—	—	褐灰10YR5/1	鉄釉。
77	020-02	陶器	鉢	4区		SE7007	口縁部 1/12	22.8	—	—	浅黄橙10YR8/3	鉄釉。
78	021-01	陶器	鉢	4区		SE7007	口縁部 1/12	21.2	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
79	015-03	陶器	鉢	4区		SE7007	底部 4/12	—	28.0	—	浅黄2.5Y7/3	鉄釉。
80	020-04	陶器	鉢	4区		SE7007	底部 3/12	—	10.0	—	灰白5Y8/1	
81	024-01	陶器 (瀬戸・美濃)	水甕	4区		SE7007	底部 2/12	—	28.0	—	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
82	012-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鍋	4区		SE7007	底部 4/12	—	9.6	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。外面に煤付着。
83	025-02	陶器	風炉	4区		SE7007	底部 2/12	—	17.0	—	にぶい 橙7.5Y7/4	
84	022-03	陶器	土瓶	4区		SE7007	口縁部 3/12	10.2	—	—	淡黄2.5Y8/3	鉄釉。
85	024-02	陶器	土瓶	4区		SE7007	口縁部 4/12	9.8	—	—	灰白5Y8/1	鉄釉。外面に煤付着。
86	022-02	陶器	土瓶	4区		SE7007	口縁部 2/12	12.2	—	—	灰白N8/	鉄釉。外面に煤付着。
87	026-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	4区		SE7007	口縁部 6/12	33.0	—	—	灰褐5YR4/2	播目18条/4.6cm。鉄釉。
88	020-03	陶器	播鉢	4区		SE7007	底部 2/12	—	14.0	—	灰白2.5Y8/2	播目14条/3.7cm。鉄釉。
89	005-02	陶器	播鉢	4区		SE7007	底部 3/12	—	15.0	—	淡黄2.5Y8/3	播目18条/4.4cm。鉄釉。
90	018-01	陶器 (常滑)	甕	4区		SE7007	口縁部 1/12	32.0	—	—	にぶい 赤褐2.5YR5/4	
91	014-01	陶器 (常滑)	甕	4区		SE7007	口縁部 1/12	28.0	—	—	灰赤2.5YR5/2	内面に付着物。
92	014-02	陶器 (常滑)	甕	4区		SE7007	口縁部 1/12	26.0	—	—	褐灰10YR4/1	
93	008-02	陶器 (常滑)	甕	4区		SE7007	底部 1/12	—	27.4	—	にぶい 赤褐5YR5/3	内面に付着物。
94	020-01	陶器 (常滑)	甕	4区		SE7007	底部 1/12	—	21.0	—	橙7.5YR7/6	
95	003-01	陶器 (常滑)	甕	4区		SE7007	口縁部 1/12	37.6	—	—	にぶい 橙5YR6/4	
96	012-05	磁器 (肥前)	蓋	4区		SE7007	口縁部 1/12	11.0	—	—	灰白2.5Y8/1	染付。外面籠目文、内面四方禰文。

第44表－2 第7次調査出土遺物観察表



遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
97	017-02	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	10.2	高台 4.0	5.0	灰白N8/	染付。外面二重網目文。
98	007-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	口縁部 1/12	9.4	—	—	白9/	染付。外面二重網目文。
99	012-02	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	口縁部 2/12	10.4	—	—	灰白2.5Y8/1	染付。外面井桁文。
100	018-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	12.8	高台 5.0	6.7	灰白N8/	染付。外面丸文、内面四方襷+五 弁花文。裏銘。
101	017-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	—	高台 4.0	—	白9/	染付。内面菊花文。
102	019-02	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	11.2	高台 4.0	6.2	白9/	染付。外面井桁文+菊花文、内面 圈線+菊花文。
103	007-06	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	9.4	高台 3.8	4.9	灰白N8/	染付。外面蔓草文。裏銘。
104	013-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	口縁部 1/12	11.8	—	—	灰白5Y8/1	染付青磁。内面四方襷文。
105	013-02	磁器	椀	4区		SE7007	底部 7/12	—	高台 4.8	—	灰白5Y8/1	染付。外面葉文、内面十字花文。
106	007-04	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	口縁部 1/12	8.3	—	—	灰白N8/	染付。外面放射状文。
107	013-06	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部 1/12以下	—	高台 3.4	—	灰白10YR8/1	染付。外面竹文。
108	013-05	磁器	椀	4区		SE7007	底部 5/12	—	高台 5.6	—	灰白5Y8/1	染付。外面山水文。
109	019-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	11.8	高台 6.2	6.0	灰白N8/	広東椀。染付。外面草花文、内面 変形花文。
110	011-04	磁器	椀	4区		SE7007	底部完存	—	高台 4.0	—	灰白2.5Y8/1	広東椀。染付。内面草花文。
111	010-03	磁器	椀	4区		SE7007	口縁部 3/12	11.6	—	—	灰白5Y8/1	染付青磁。内面四方襷文。
112	010-05	磁器	椀	4区		SE7007	底部 3/12	—	高台 4.4	—	灰白5Y8/1	染付青磁。内面五弁花文。
113	011-03	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	—	高台 3.8	—	灰白5Y8/1	染付。内面五弁花文。
114	012-04	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部完存	7.2	高台 3.5	5.8	灰白2.5Y8/1	染付。外面菊花文、内面四方襷文 +五弁花文。
115	016-02	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部 4/12	—	高台 4.9	—	白9/	染付。外面草花文、宝文。
116	016-04	磁器 (肥前)	椀	4区		SE7007	底部 6/12	7.3	高台 3.0	3.7	白9/	染付。外面雲文。
117	012-03	磁器	壺	4区		SE7007	底部 6/12	—	高台 4.8	—	灰白N8/1	染付。外面篋文、内面露胎。
118	007-02	磁器 (肥前)	皿	4区		SE7007	底部 4/12	13.2	高台 7.0	3.2	灰白N8/	染付。外面蔓草文。
119	016-03	磁器 (肥前)	皿	4区		SE7007	口縁部 4/12	13.8	高台 8.6	3.7	灰白N8/	染付。外面飛雲文、内面竹文+五 弁花文。裏銘。
120	017-01	磁器 (肥前)	皿	4区		SE7007	口縁部 3/12	13.2	高台 7.5	3.8	灰白N8/	染付。外面飛雲文、内面蔓草文+ 五弁花文。
121	011-02	磁器 (肥前)	皿	4区		SE7007	底部 2/12	14.0	高台 7.8	4.4	灰白N8/1	染付。外面飛雲文、内面草花文。 裏銘。
122	011-01	瓦	小菊瓦	4区		SE7007	瓦当 6/12	8.5	—	—	灰N5/1	巴文。
123	016-01	瓦	熨瓦	4区		SE7007	3/12以下	—	—	—	灰N4/	釘穴あり。
124	004-03	瓦	棧瓦	4区		SE7007	2/12以下	—	—	—	灰N3/	
125	002-02	木製品 (スギ)	木札	4区		SE7007	完形	縦 4.7	横 4.2	厚 0.8	—	両面墨書。
126	002-03	木製品 (スギ)	箸	4区		SE7007	11/12以下	0.7	—	残長 21.4	—	
127	034-06	土師器	皿	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	3/12	8.8	5.0	1.3	にぶい、橙5YR7/4	
128	034-02	土師器	鍋	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	口縁部 1/12	27.0	—	—	にぶい、橙5YR6/4	
129	033-02	陶器	壺	5区		オリープ褐色シルト (砂礫直下)	口縁部 1/12	14.7	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	
130	034-03	陶器	壺	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	底部 5/12	—	9.4	—	灰白5Y8/1	灰釉。
131	042-01	陶器	鉢	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	底部 2/12	—	12.4	—	灰白5Y8/1	灰釉。
132	034-01	陶器	蓋	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	6/12	11.5	—	2.4	灰白2.5Y8/1	鉄釉。
133	033-01	陶器	鉢	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	口縁部 1/12	25.6	—	—	灰白N8/	灰釉。
134	031-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	5区		造成土 路床直下	口縁部 3/12	34.4	—	—	灰白2.5Y8/2	播目4本/1cm。
135	033-04	磁器 (肥前)	椀	5区		造成土 路床直下	口縁部 1/12	10.0	—	—	灰白10Y8/1	染付。外面蔓草文。
136	034-04	磁器 (肥前)	猪口	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	底部 2/12	—	高台 4.1	—	白9/	染付。
137	033-05	磁器 (肥前)	壺	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	底部 2/12	—	高台 5.4	—	灰白N8/	徳利。染付。
138	030-06	瓦	軒丸瓦	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	瓦当 6/12	8.0	—	—	灰N5/	巴文。
139	039-01	瓦	軒平瓦	5区		黒赤シルト(赤ブロッ ク泥)・近現代造成土	瓦当 6/12	—	—	—	灰N4/	水返し付。均整唐草文。
140	058-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	6区		造成土	口縁部 1/12	11.6	—	—	灰白5Y8/2	塗り分け椀。灰釉+鉄釉。
141	058-04	陶器	皿	6区		造成土	底部 3/12	—	高台 5.6	—	灰白5Y8/1	銅緑釉。蛇ノ目釉刺。
142	058-06	磁器 (肥前)	椀	6区		造成土	底部 3/12	—	高台 3.8	—	灰白N8/	染付。外面蔓草文。
143	052-02	土師器	鍋	6区		SK7011	口縁部 1/12	30.0	—	—	暗灰黄2.5Y5/2	
144	043-04	陶器	壺	6区		SK7011	口縁部 3/12	7.4	—	—	灰白5Y7/2	灰釉。

第44表-3 第7次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
145	042-03	陶器	土瓶	6区		SK7011	口縁部 2/12	9.2	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
146	047-02	陶器	土瓶	6区		SK7011	口縁部 1/12	10.0	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。底部外面に煤付着。
147	052-03	陶器	鉢	6区		SK7011	底部 4/12	—	高台 14.0	—	灰白2.5Y8/1	柿釉。胎土目。
148	047-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	6区		SK7011	口縁部 1/12	36.0	—	—	淡黄2.5Y8/3	摺目14本/3.6cm。
149	052-01	陶器	甕	6区		SK7011	口縁部 1/12	30.2	—	—	灰白N8/	鉄釉化粧掛け。
150	055-03	陶器	甕	6区		SK7011	口縁部 1/12	39.2	—	—	褐灰5YR4/1	
151	043-01	陶器	鍋	6区		SK7011	口縁部 1/12	30.8	—	—	灰黄褐10YR6/2	6区SK7011出土の可能性あり。
152	043-03	磁器 (肥前)	皿	6区		SK7011	底部 2/12	13.8	高台 8.8	7.4	灰白2.5GY8/1	染付。内面草花文。
153	053-02	瓦	軒棧瓦	6区		SK7011	1/12以下	—	—	—	暗灰N3/	巴文。
154	053-01	瓦	軒平瓦	6区		SK7011	瓦当 3/12	—	—	—	灰白2.5Y7/1	唐草文。
155	060-01	瓦	丸瓦	6区		SK7011	2/12以下	—	—	7.6	灰N4/	
156	049-01	瓦	角棧伏間 瓦	6区		SK7011	4/12以下	—	—	5.2	暗灰N3/1	
157	002-01	木製品	加工材	6区		SK7011	ほぼ完形	縦 18.5	横 11.0	厚 1.4	—	
158	053-05	陶器	蓋	6区		SK7012	ほぼ完形	8.4	4.6	2.2	浅黄2.5Y7/3	無釉。
159	053-03	陶器	椀	6区		SK7012	口縁部 4/12	12.2	—	—	灰5Y6/1	灰釉。鉄銹。
160	053-04	陶器	壺	6区		SK7012	底部 8/12	—	高台 7.4	—	灰白2.5Y8/1	黄瀬戸釉。
161	048-01	陶器 (常滑)	甕	6区		SK7012	底部 4/12	—	16.2	—	にぶい・橙7.5YR6/4	
162	044-01	陶器	甕	6区		SK7012	底部 2/12	—	高台 26.2	—	灰5Y8/1	鉄釉。砂目。
163	053-06	磁器 (肥前)	椀	6区		SK7012	口縁部 1/12	10.3	—	—	灰白N8/	染付。外面網目文。
164	045-01	磁器 (肥前)	椀	6区		SK7012	底部完存	11.6	高台 4.6	6.4	灰白N8/	染付。外面丸文、内面五弁花文。 裏銘。
165	053-07	磁器 (肥前)	椀	6区		SK7012	底部 10/12	7.4	高台 4.0	5.4	灰白2.5GY8/1	染付。外面竹文、内面五弁花文。
166	045-02	瓦	棟込瓦	6区		SK7012	瓦当部完存	13.8	—	—	暗灰N3/	菊花文。
167	046-01	瓦	丸瓦	6区		SK7012	2/12以下	—	—	—	灰N4/	釘穴。
168	001-01	木製品 (クリ)	下駄	6区		SK7012	ほぼ完形	長 20.8	幅 8.6	厚 4.4	—	表面に漆。
169	050-01 051-01	陶器 (常滑)	井戸枠	6区		SK7012	底部 3/12	—	52.0	—	橙7.5YR7/6	
170	062-04	土師器	皿	6区		SE7013	口縁部 3/12	8.8	—	0.8	にぶい・黄橙10YR6/4	焼成不良。
171	062-03	土師器	皿	6区		SE7013	口縁部 2/12	9.0	—	1.0	にぶい・橙5YR6/4	
172	062-05	土師器	皿	6区		SE7013	口縁部 2/12	8.4	—	1.2	橙5YR6/6	口縁部に煤付着。
173	062-06	土師器	皿	6区		SE7013	口縁部 3/12	8.6	—	1.1	橙5YR7/6	
174	063-01	土師器	焙烙	6区		SE7013	口縁部 1/12	40.6	—	—	にぶい・黄橙10YR7/3	
175	055-01	土師器	焙烙	6区		SE7013	口縁部 1/12	37.6	—	—	にぶい・赤褐5YR5/4	
176	063-02	土師器	焙烙	6区		SE7013	口縁部 1/12	36.6	—	—	灰黄褐10YR6/2	
177	062-01	陶器	壺	6区		SE7013	口縁部 3/12	20.0	—	—	橙7.5YR7/6	無釉。
178	068-01	山茶椀	椀	6区		SE7013	口縁部 1/12	14.8	—	—	灰白5Y7/1	
179	068-02	山茶椀	椀	6区		SE7013	底部 6/12	—	高台 7.9	—	灰白5Y7/1	
180	056-02	陶器	椀	6区		SE7013	口縁部 4/12	14.2	—	—	灰白N8/	染付。外面雲文。
181	056-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	6区		SE7013	口縁部 1/12	12.0	—	—	灰白N8/	鉄釉。
182	056-03	陶器	椀	6区		SE7013	口縁部 3/12	9.4	—	—	暗灰N3/	灰釉。焼成やや不良。
183	058-03	陶器	皿	6区		SE7013	7/12	10.4	4.4	2.1	黄灰2.5Y6/1	鉄釉。
184	065-01	陶器	皿	6区		SE7013	3/12	28.8	高台 12.4	5.0	灰白5Y8/2	染付。呉須釉+鉄釉で蔓草文。
185	059-01	陶器	鉢	6区		SE7013	底部 3/12	26.0	高台 14.8	12.1	浅黄2.5Y7/4	鉄釉。
186	059-03	陶器	鉢	6区		SE7013	口縁部 3/12	19.6	—	—	灰白2.5Y8/1	灰釉。
187	068-03	陶器	鉢	6区		SE7013	底部 2/12	—	高台 4.6	—	灰白5Y8/1	灰釉。
188	056-01	陶器	土瓶	6区		SE7013	口縁部 4/12	9.2	—	—	灰白N8/	灰釉。焼成やや不良。
189	058-01	陶器	鉢	6区		SE7013	口縁部 2/12	9.3	—	—	灰白N7/	灰釉。
190	065-02	陶器	壺	6区		SE7013	口縁部完存	2.8	—	—	黄灰2.5Y6/1	鉄釉に黄瀬戸釉を化粧掛け。
191	065-03	陶器	德利	6区		SE7013	口縁部完存	3.2	—	—	黄灰2.5Y7/1	灰釉。
192	056-05	陶器	仏飯具	6区		SE7013	口縁部 3/12	7.0	—	—	灰白N8/	灰釉。

第44表－4 第7次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
193	058-02	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿台	6区		SE7013	口縁部 3/12	8.8	—	—	灰白2.5Y7/1	鉄釉。
194	066-03	陶器	鉢	6区		SE7013	口縁部 4/12	26.8	—	—	にぶい黄橙10YR7/2	鉄釉。
195	079-01	陶器 (常滑)	鉢	6区		SE7013	口縁部 2/12	20.0	—	—	灰黄褐10YR4/2	口縁部外面に炭化物、内面に白色 付着物あり。
196	077-03	陶器 (常滑)	鉢	6区		SE7013	口縁部 1/12	15.0	—	—	灰黄2.5Y6/2	
197	080-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	6区		SE7013	口縁部 3/12	21.0	—	—	灰白10YR7/1	鉄釉。
198	067-02	陶器	鉢	6区		SE7013	底部 3/12	—	高台 9.3	—	灰白10YR8/2	鉄釉。
199	063-03	陶器	壺	6区		SE7013	底部 2/12	—	高台 9.0	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
200	059-02	陶器	鉢	6区		SE7013	底部完存	—	高台 9.7	—	灰白10YR8/1	黄瀬戸釉。直接重焼。
201	067-01	陶器	鉢	6区		SE7013	底部 3/12	—	高台 11.3	—	灰白8/	柿釉。
202	055-02	陶器	鉢	6区		SE7013	口縁部 1/12	30.6	—	—	灰白N8/	灰釉。
203	067-03	陶器	鉢	6区		SE7013	底部 2/12	—	高台 6.9	—	灰白5Y7/1	鉄釉。砂目。
204	071-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	6区		SE7013	口縁部 1/12	50.2	—	—	灰白2.5Y8/2	挿目14本/4.5cm。厚い泥漿。
205	069-01	陶器 (瀬戸・美濃)	挿鉢	6区		SE7013	底部 1/12	—	14.9	—	灰白2.5Y8/2	挿目5本/1cm。泥漿。
206	081-02	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	口縁部 1/12	29.4	—	—	灰褐5YR6/2	
207	062-02	陶器	甕	6区		SE7013	口縁部 2/12	22.4	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	
208	076-02	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	底部 2/12	—	18.0	—	にぶい赤褐5YR5/4	
209	076-01	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	底部 2/12	—	16.0	—	にぶい褐7.5YR5/3	
210	079-02	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	底部 1/12	—	18.0	—	にぶい褐7.5YR6/3	内面白色物付着。
211	068-04	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	口縁部 1/12以下	47.4	—	—	橙2.5YR6/8	
212	080-01	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	口縁部 1/12	50.0	—	—	にぶい橙5YR6/4	
213	081-01	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	底部 2/12	—	20.7	—	にぶい黄橙10YR6/3	内面白色物付着。
214	073-01	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	底部 3/12	—	16.5	—	にぶい褐7.5YR5/4	
215	077-01	陶器 (常滑)	甕	6区		SE7013	底部 2/12	—	17.0	—	橙7.5YR6/6	
216	057-04	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	6区		SE7013	摘み完存	9.8	摘み 3.5	2.4	灰白8/	染付。外面蔓草文、内面四方禪文 +五弁花文。
217	064-04	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	6区		SE7013	摘み 4/12	—	摘み 4.6	—	灰白8/	染付。外面連弁文、内面草木文。
218	054-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	6区		SE7013	底部完存	—	高台 4.0	—	灰白8/	染付。外面菱形文字連続文、内面 菱形文字。
219	064-02	磁器 (肥前)	椀	6区		SE7013	底部完存	—	高台 3.8	—	灰白8/	染付青磁。内面五弁花文。
220	054-03	磁器 (肥前)	椀	6区		SE7013	口縁部 3/12	6.7	—	—	白9/	染付。外面竹文。
221	057-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	6区		SE7013	口縁部 2/12	7.8	—	—	灰白8/	染付。外面竹文。
222	054-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	6区		SE7013	底部完存	7.4	高台 3.7	5.6	灰白8/	染付。外面竹文。内面五弁花文。
223	063-04	磁器 (肥前)	椀	6区		SE7013	底部 5/12	—	高台 3.6	—	灰白8/	染付。内面五弁花文。焼成やや不 良。
224	057-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	6区		SE7013	口縁部 3/12	7.2	—	—	灰白N8/	小杯。染付。外面菊花文。
225	054-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	6区		SE7013	口縁部 2/12	6.8	—	—	白9/	小杯。白磁。
226	064-05	磁器 (肥前)	椀	6区		SE7013	底部 7/12	—	高台 3.2	—	灰白5Y7/1	透明釉。焼成やや不良。
227	054-05	磁器 (肥前)	皿	6区		SE7013	口縁部 1/12	22.6	高台 12.0	4.2	灰白N8/	染付。内外面山水文。
228	064-03	磁器 (肥前)	皿	6区		SE7013	口縁部 1/12	13.8	高台 6.6	3.1	灰白2.5GY8/1	染付。内面草文+五弁花文。
229	064-01	磁器 (肥前)	皿	6区		SE7013	口縁部 1/12	13.0	—	—	灰白2.5GY8/1	染付。
230	056-06	磁器 (瀬戸・美濃)	仏飯具	6区		SE7013	脚部完存	7.0	3.7	4.6	灰白N8/	透明釉。
231	057-01	磁器 (瀬戸・美濃)	瓶	6区		SE7013	口縁部 8/12	2.0	高台 4.6	12.4	灰白N8/	染付。外面山水文。
232	070-02	陶器 (常滑)	土管	6区		SE7013	6/12以下	17.0	—	—	橙7.5YR7/6	
233	082-01	瓦質土器	火舎	6区		SE7013	底部 3/12	—	21.8	—	灰N4/	
234	077-02	瓦質土器	火舎	6区		SE7013	底部 2/12	—	21.0	—	灰N5/1	
235	070-01	瓦	丸瓦	6区		SE7013	3/12以下	幅 14.4	—	6.4	にぶい橙7.5YR6/4	
236	074-01	瓦	丸瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	灰5Y4/1	
237	078-01	瓦	軒丸瓦	6区		SE7013	瓦当 3/12	—	—	—	灰5Y4/1	巴文。
238	078-02	瓦	丸瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	灰5Y4/1	
239	060-02	瓦	丸瓦	6区		SE7013	2/12以下	—	—	6.9	灰白2.5Y7/1	
240	061-01	瓦	棧瓦	6区		SE7013	3/12以下	—	—	—	灰5Y5/1	

第44表－5 第7次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
241	072-01	瓦	平瓦	6区		SE7013	3/12以下	—	—	谷深 2.8	にぶい、橙5YR6/4	
242	066-01	瓦	右袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	灰4/	
243	075-03	瓦	右袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	にぶい、褐2.5YR6/3	
244	066-02	瓦	右袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	灰白5Y7/1	
245	075-01	瓦	左袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	灰5Y6/1	
246	075-02	瓦	左袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	にぶい、黄橙10YR7/2	
247	069-02	瓦	左袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	灰白5Y7/1	
248	073-02	瓦	左袖瓦	6区		SE7013	1/12以下	—	—	—	黒5Y2/1	
249	041-03	陶器	鉢	7区		造成土 クラッシャー直下	底部 4/12	—	高台 8.6	—	灰白2.5Y8/1	灰釉。
250	041-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区		現代造成土	底部 4/12	—	15.0	—	にぶい、黄橙10YR7/7	播目16本/4.3cm。泥漿。
251	040-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	7区		造成土 クラッシャー直下	口縁部 1/12	42.0	—	—	淡黄2.5Y8/3	播目13本/2.5cm。泥漿。
252	042-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	7区		造成土 クラッシャー直下	口縁部 3/12	9.4	—	—	灰白N8/	染付。
253	042-05	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	7区		造成土 クラッシャー直下	口縁部 10/12	8.8	摘み 3.4	2.7	灰白N8/	染付。外面宝文、内面雲気文+寿。
254	042-04	陶器	皿	8区		路床 現代造成土	口縁部 2/12	12.8	—	—	灰白2.5Y8/2	染付。内面雲気文。
255	043-02	磁器 (肥前)	皿	8区		路床 現代造成土	口縁部 3/12	13.8	高台 7.0	3.1	灰白10Y8/1	染付。色絵。
256	032-03	陶器	鉢	8区		路床 現代造成土	底部 2/12	11.7	—	—	灰白7.5Y7/1	
257	040-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区		路床 現代造成土	1/12	—	—	—	浅黄橙10YR8/3	播目14本/5.2cm。泥漿。
258	041-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	8区		路床 現代造成土	底部 3/12	—	14.0	—	にぶい、赤褐2.5YR5/4	播目9本/1.2cm。
259	043-05	磁器 (肥前)	椀	8区		路床 現代造成土	底部 2/12	—	高台 4.0	—	灰白N8/	染付。内面に昆虫状絵柄。
260	043-06	磁器 (肥前)	椀	8区		路床 現代造成土	底部 3/12	—	高台 4.8	—	灰白N8/	染付。外面丸文、内面五弁花文。 裏銘。
261	041-04	磁器 (瀬戸・美濃)	徳利	8区		路床 現代造成土	底部 6/12	—	高台 5.2	—	にぶい、赤褐2.5YR5/3	染付。外面木賊文。
262	044-02	瓦	軒棧瓦	8区		路床 現代造成土	1/12以下	—	—	—	灰N4/	巴文+唐草文。

第44表-6 第7次調査出土遺物観察表

No.	品名	樹種
168	下駄(連歯)	ブナ科クリ属クリ
125	木札	スギ科スギ属スギ
126	箸	スギ科スギ属スギ

第45表 第7次調査木製品同定表

### 3. 木製品の樹種調査

#### (1) 試料

試料は三重県松坂城下町遺跡から出土した服飾具1点、食器具1点、文房具1点の合計3点である。

#### (2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### (3) 結果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)  
(遺物No. 125, 126) (写真図版110)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

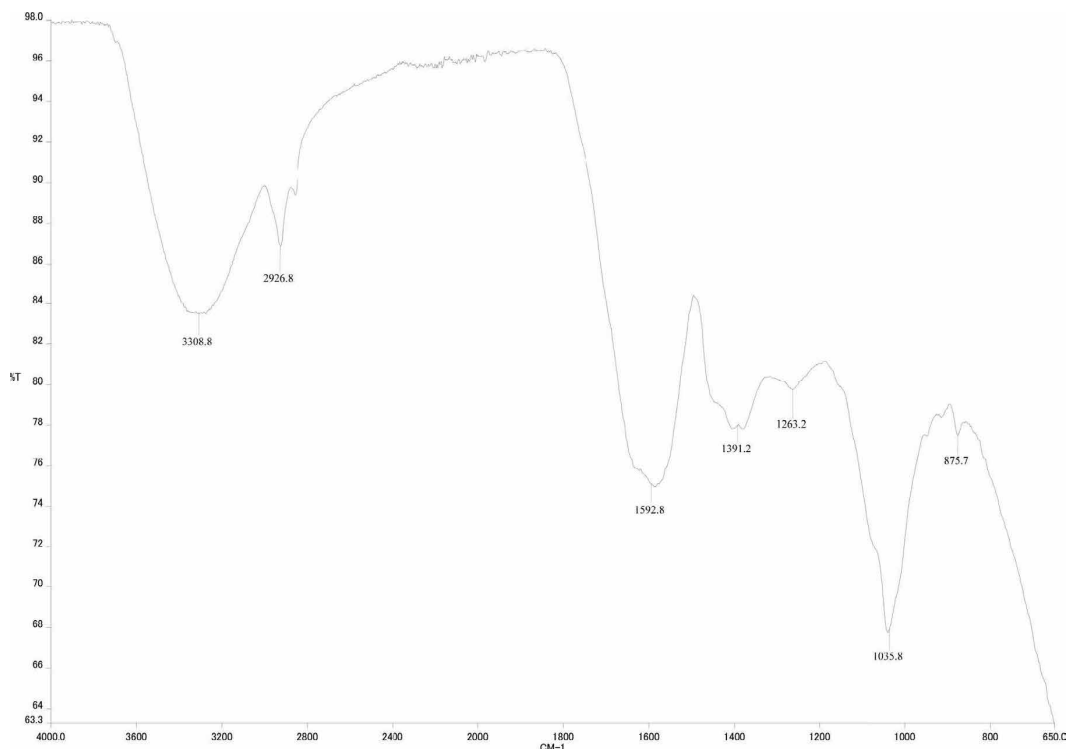
ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (遺物No. 168) (写真図版110)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管(~500μm)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きき

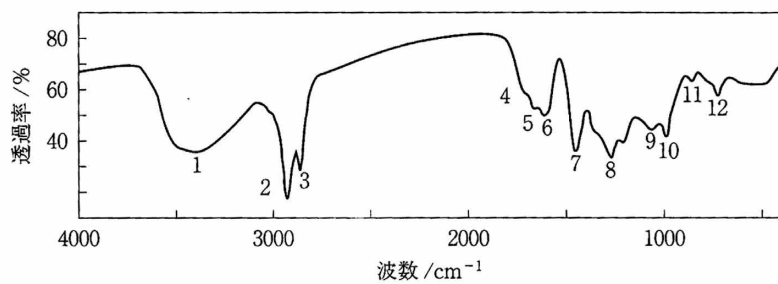


No.	保存処理No.	品名	概要
168	1	下駄	黒色の塗料が部分的に遺存する下駄。

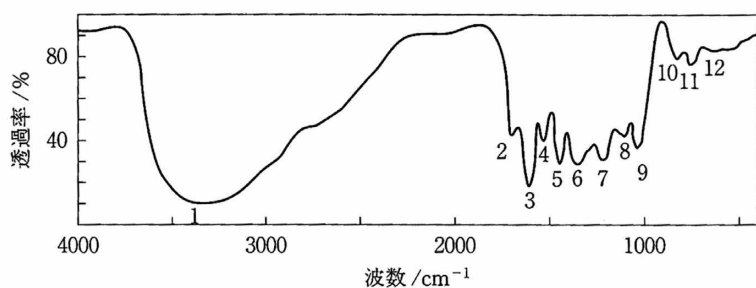
第46表 第7次調査調査試料



第152図 第7次調査調査試料



第153図 比較資料：漆（「うるしの科学」より）



第154図 比較資料：柿渋（「うるしの科学」より）

を減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。（榎吉田生物研究所）

#### [参考文献]

- ・ 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所（1991）
- ・ 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）
- ・ 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）
- ・ 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
- ・ 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
- ・ 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

#### [使用顕微鏡]

Nikon DS-Fi1

## 4. 塗膜調査 1

### （1）はじめに

三重県に所在する、松坂城下町遺跡から出土した塗膜を伴う製品 1 点について、その塗膜を構成する物質を明らかにする為に機器分析を行った。物質は赤外線照射すると、構成する分子構造に因って物質ごとに特有の赤外線吸収スペクトルを示す。その調査が行える赤外分光（FT-IR）分析を行ったので、以下にその結果を報告する。

### （2）調査資料

調査した資料は、第46表に示す近世の下駄 1 点である。

### （3）調査方法

第46表の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の

破片を採取して、パーキンエルマー社製、FT-IR分析装置Spectrum Oneを用いて、塗膜の材質を調査した。

### （4）調査結果

分析データを示し、比較資料の漆と柿渋と比較検討を行い、その結果を記す。

調査試料の塗膜は、波数：3308.8、2926.8、2860、1592.8等の赤外吸収領域に特徴的な透過率の変化が確認される。比較資料との検討の結果、比較資料：漆の赤外吸収領域の位置やスペクトルとも近似を示している。このことから調査試料は漆膜と推察される。（榎吉田生物研究所）

#### [参考文献]

- ・ 小川俊夫 「うるしの科学」 共立出版 2014

## 5. 塗膜調査 2

### （1）はじめに

三重県に所在する、松坂城下町遺跡から出土した漆製品 1 点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

### （2）調査資料

調査した資料は、第46表に示す近世の下駄 1 点である。

### （3）調査方法

第46表の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

パーキンエルマー社製、FT-IR分析装置Spectrum Oneを用いて、膠着剤の材質を調査した。

### （4）調査結果

**断面観察** 塗膜断面の観察結果を、第47表と以下の文章に示す。

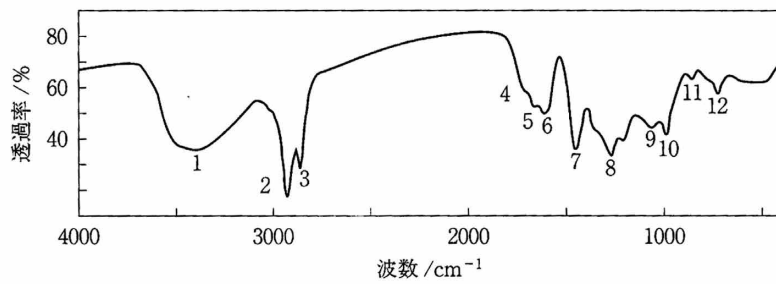
塗膜構造：下層から、木胎、下地、漆層が観察された。

下地：木胎の上に、柿渋に炭化物を混和した炭粉渋下地がみられた。

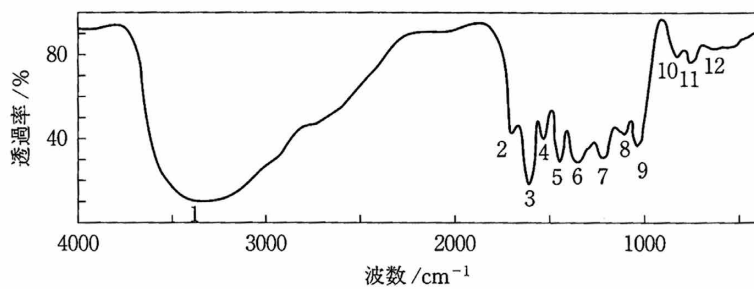
漆層：下地の上に淡黄褐色を呈する透明漆 1 層が重ねられていた。顔料などは混和されていない。



第155図 第7次調査黒色部のスペクトル



第156図 比較資料：漆（「うるしの科学」より）



第157図 比較資料：柿渋（「うるしの科学」より）

**赤外分光分析** 第155図に分析データを示し、その結果を記す。

分析の結果は、比較資料の漆（第156図）と柿渋（第157図）との比較検討の結果、漆のデータに近かった。

**（５）摘要**

松坂城下町遺跡から出土した下駄について塗膜断面を調査した。

下地、塗膜という構造が観察された。

柿渋に炭化物を混和した炭粉渋下地の上に、顔料を混和していない淡黄褐色を呈する透明漆1層が重ねられていた。

赤外分光分析の結果から、分析データは漆のスペクトルに近かった。（榎吉田生物研究所）

**6. 小結**

第7次調査は大きく2ヶ所に分かれる。その内、伊勢街道が交わる本町交差点付近は立会調査範囲が極めて限られた狭小なものであったため、地表下1mで安定した層の存在を確認したに止まり、詳細は不明とせざるを得ない。

一方、博勢町に相当する本町東交差点付近では、多数の井戸や土坑を検出した。これらは大手筋から離れる方向の調査区北西側に集中しており、大手筋側での検出は皆無である。

さて、北西側に集中する遺構群であるが、その大半は井戸や土坑である。土坑は全て大型のもので、規模において井戸と格差のないものもある。SK7012からは陶製の井戸枠と考えられるものが出土しており、SK7011の150も陶器の甕としたが、陶製井戸枠の上端部の可能性もある。このように、これらの土坑の中には井戸であったものが含まれる可能性があり、少なくとも井戸に密接に関わる遺構であるものと思われる。ただし、3区のSK702と5区のSK7009は層位的に近代以降に下るものである。

位置的には重複関係にあり、両者は不整形な形状の一連の廃棄土坑であったものであろう。SK7005は層位的にやや上位で、他のものより若干時期が下る。これらを除く土坑については、層位的な時期差は認められない。

SE7007出土遺物では、登窯V期<sup>(1)</sup>にみられる塗り分け椀や鎧椀、18世紀に盛行する染付青磁やコンニャク印判<sup>(2)</sup>等があり、18世紀のものが中心である。しかし、染付椀100の裏銘では、変形文字を囲う二重四角が省略気味で、19世紀に下る<sup>(3)</sup>可能性がある。陶器水甕81は、瀬戸・美濃第9～10小期のもの<sup>(4)</sup>と酷似する文様形態である。他に広東椀や瀬戸・美濃系の染付椀も散見されることから、SE7007の存続時期は18世紀から19世紀に及ぶものと考えられる。さらに、SE7013出土遺物も同様な状況である。

この様に調査区北西部の4区から5区の周辺は、約10m範囲内に2基の井戸や井戸に関連する土坑が密集する特異な場所と言える。（森川）

**【註】**

- (1) 田口昭二『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社 昭和58年11月10日
- (2) 野上建紀「磁器の編年（色絵以外）」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000年2月
- (3) 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 平成元年10月5日
- (4) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別冊 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県 平成19年3月31日

No.	器種	写真No.	塗膜構造（下層から）			
			下地		漆層構造	顔料
			膠着剤	混和材		
168	下駄	2	柿渋	炭化物	透明漆1層	—

第47表 第7次調査漆製品の断面観察結果



## X. 第8次調査

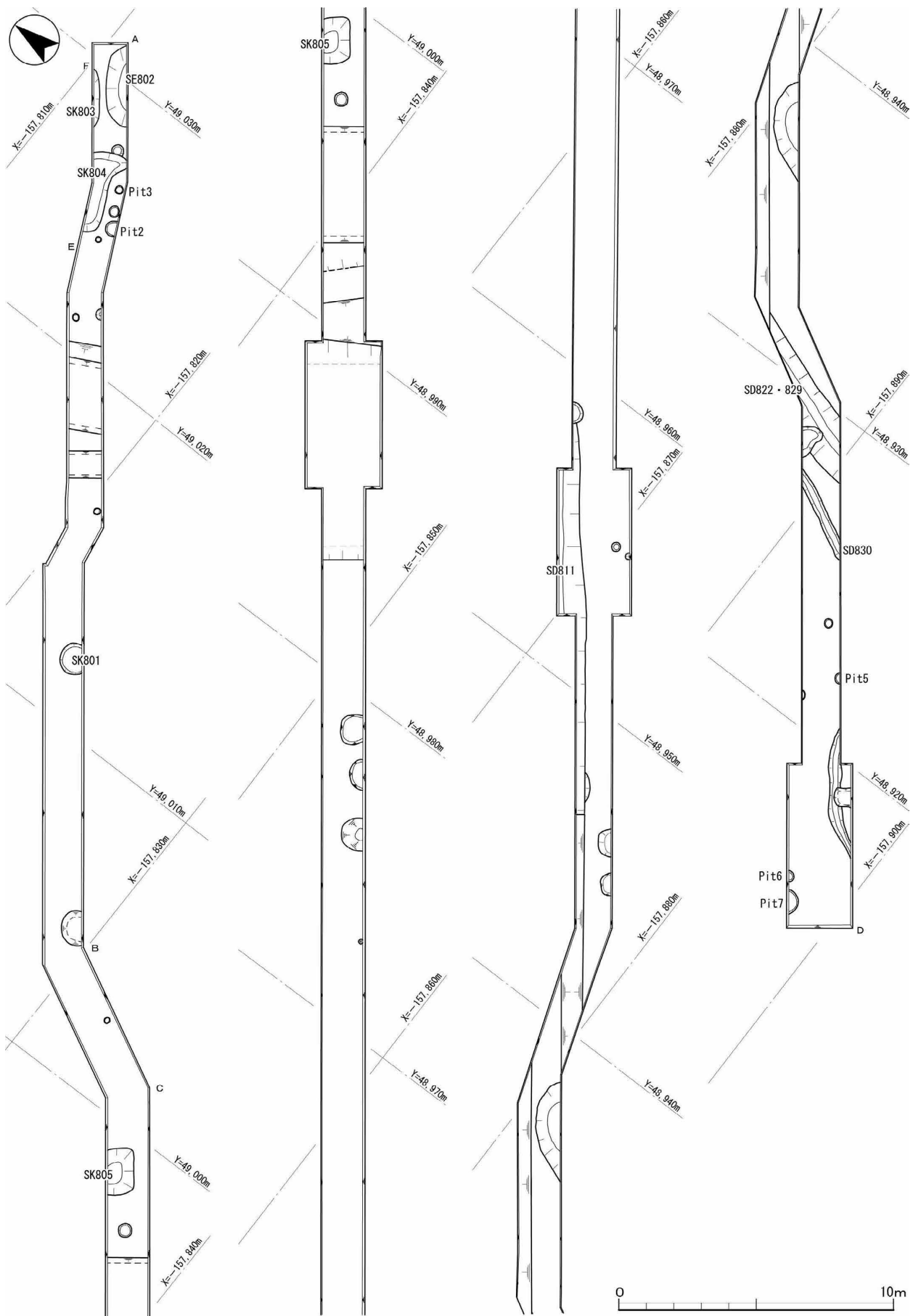
調査地は、本町東交差点から本町交差点へ向けて大手筋に沿って延びる1区と、本町東交差点から松阪駅方面へ延びる2～4区に分かれる。「松坂町絵図」によれば、前者は湯屋町から大手町、後者は袋町の範囲に該当する。

### 1. 遺構

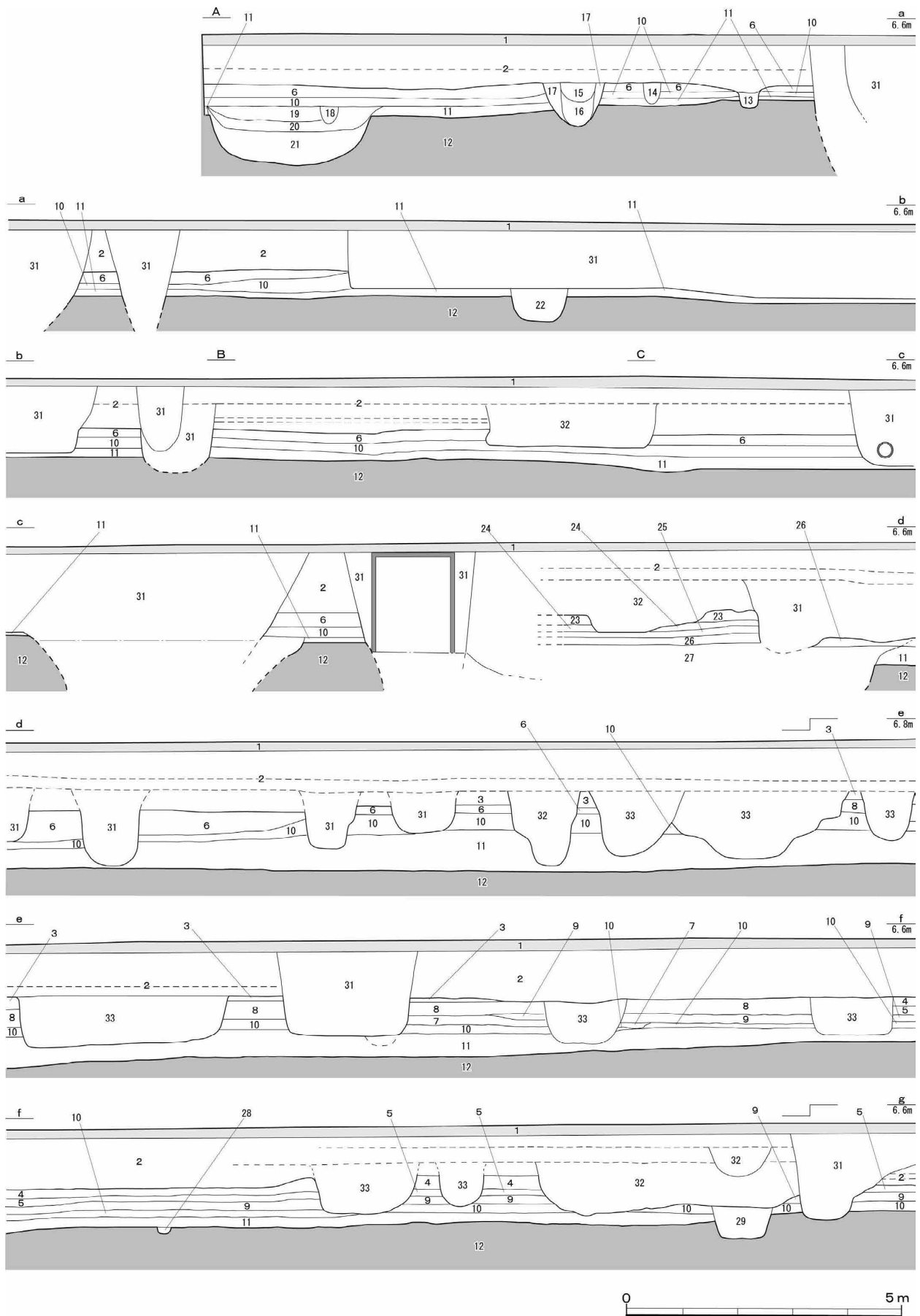
現況は歩道及び道路である。アスファルト下は近代以降の厚い造成が行われており、特に1区は厚さ1.6mを測る。造成土下に、灰オリーブ色系のシル



第158図 第8次調査区位置図 (1:1,000)



第159図 第8次調査1区平面図 (1:200)



第160図 第8次調査1区土層断面図① (1:100)

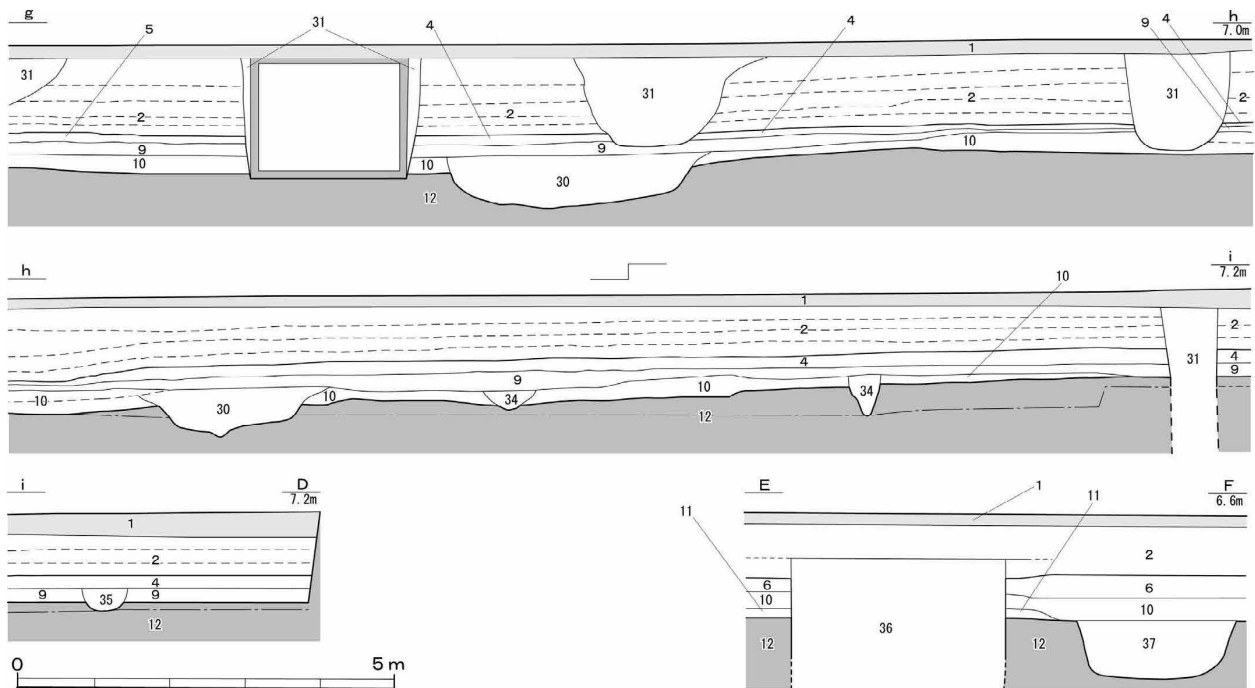
ト層及び黒褐色系のシルト層（遺物包含層）がある。この黒褐色系のシルト層は、後述する第9次調査の中世包含層に相当する可能性もあるが、第8次調査記録等における錯誤が無いとすれば、中世に限定できる状況にはない。その下は、褐色系の安定した粘土層である。アスファルトからこの粘土層までは1～2mを測るが、1区では松坂城へ向けて順次浅くなる傾向にある。2・3区では本町東交差点から松阪駅方向へ順次深くなり、交差点から20m前後で急激に深さを増す。4区に至っては深さ3mに至っても粘土層に到達できず、全体的に沼地状の様相を呈する。

遺構は溝・土坑・柱穴が確認され、多くは18世紀

～19世紀にかけてのものであるが、平安時代末～鎌倉時代に遡るものも確認された。

1区（第159図） 幅1m未満、延長150mに及ぶ溝状の調査区である。S D822・829、S D830は平安時代末～鎌倉時代に遡る溝で、南北方向に延びる。両者は2m間隔で並走するが、平面形や断面形に不整形な要素があり、自然流路あるいは排水溝的なものであろう。その他は18世紀を中心とする近世のもので、大型の土坑が散在する。

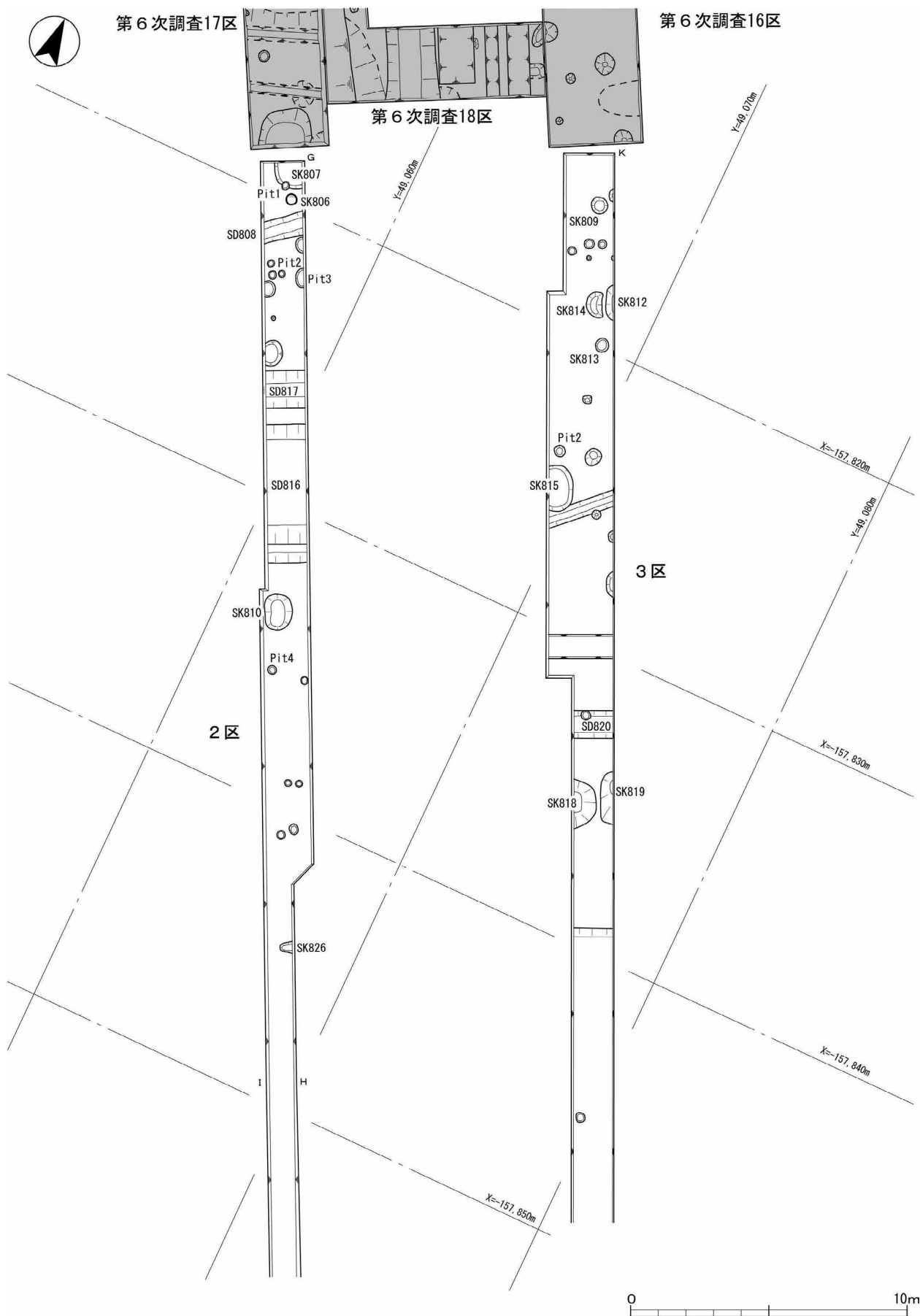
大型の土坑は、調査区北東端で3基が集中する。S K804は焼土を多く含み近世の遺物が出土している。しかし、造成土の上位から切り込んでおり、近世とするには疑問も残る。S K802からは出土遺物



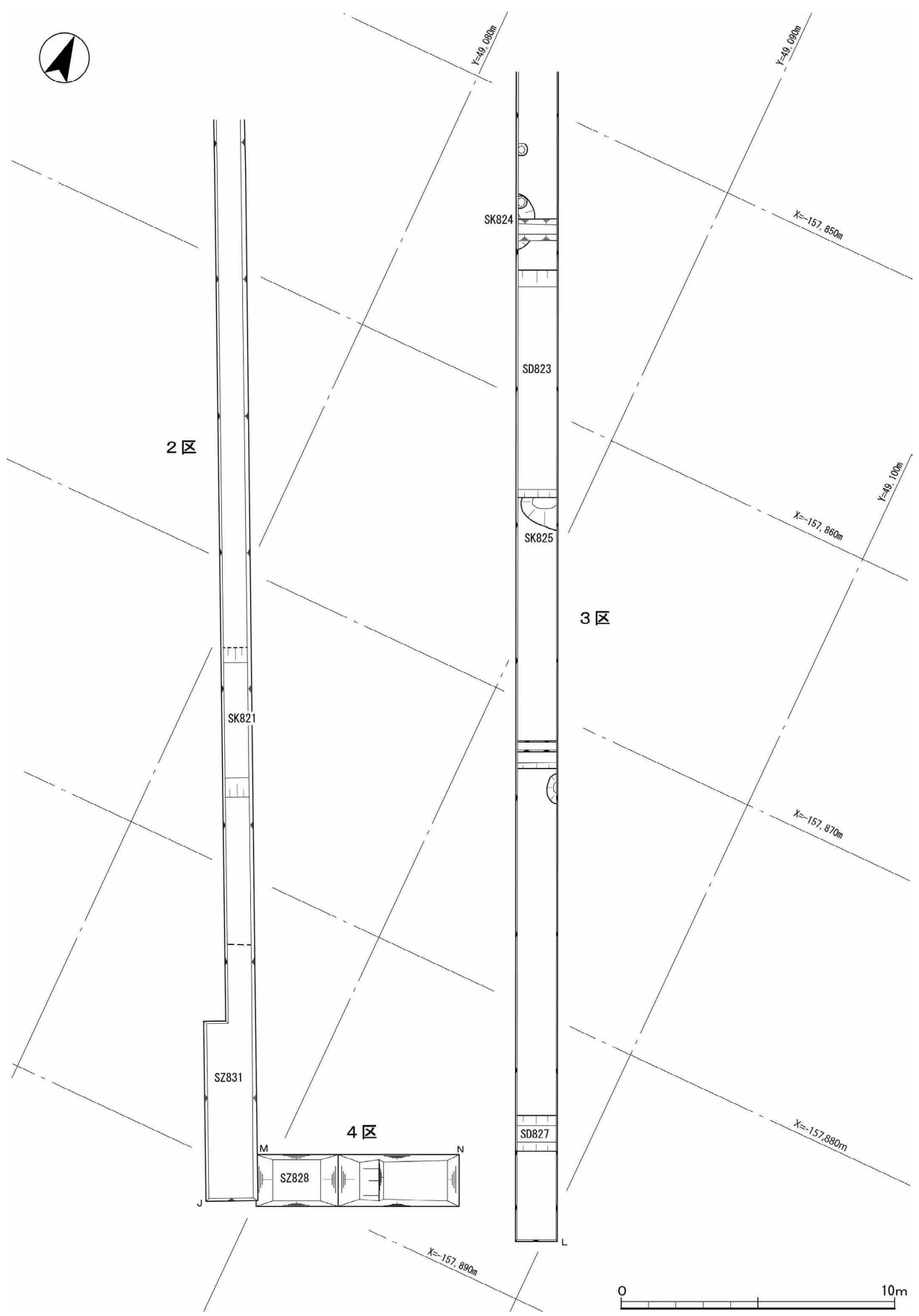
1. アスファルト
2. 造成土
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂
5. 10YR4/3 オリーブ褐色極細砂
6. 10Y3/1 オリーブ黒色シルト
7. 2.5Y5/6 黄褐色シルト
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
9. 10YR4/2 灰黄褐色粘土～シルト
10. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
11. 10YR3/1 黒褐色シルト<近世包含層>
12. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土
13. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト～極細砂
14. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト（黄褐色粗砂含）
15. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土（黒褐色粘土若干含）
16. 2.5Y3/1 黒褐色粘土
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土（黒褐色シルト若干含）
18. 10YR2/1 黒色シルト
19. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト（炭化物含）
20. 5Y3/2 オリーブ黒色シルト
21. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト（黄褐色シルト塊多含）
22. 5Y3/2 オリーブ黒色粗砂（オリーブ褐色粗砂塊・鉄分含）<SK801埋土>
23. 7.5Y2/1 黒色シルト（締まる）
24. 2.5Y4/6 オリーブ褐色中砂（暗オリーブ褐色シルト含）
25. 7.5GY3/1 暗緑灰色極細砂（鉄分の浸透あり）
26. 5Y2/1 黒色シルト
27. 2.5Y7/6 明黄褐色粗砂（金雲母含・湧水）
28. 10YR3/1 黄褐色シルト
29. 2.5Y2/1 黒色粘土
30. 7.5YR2/1 黒色シルト<SD829埋土等>
31. 攪乱
32. 攪乱（焼土多含）
33. 焼土
34. 7.5YR2/1 黒色粘質土<SD830埋土等>
35. 10YR2/3 暗褐色粘質土
36. 7.5Y2/1 黒色極細砂（焼土多含）<SK804埋土>
37. 7.5Y3/1 黒褐色シルト（オリーブ褐色シルト塊・炭化物含）<SK803埋土>

第161図 第8次調査1区土層断面図②（1:100）

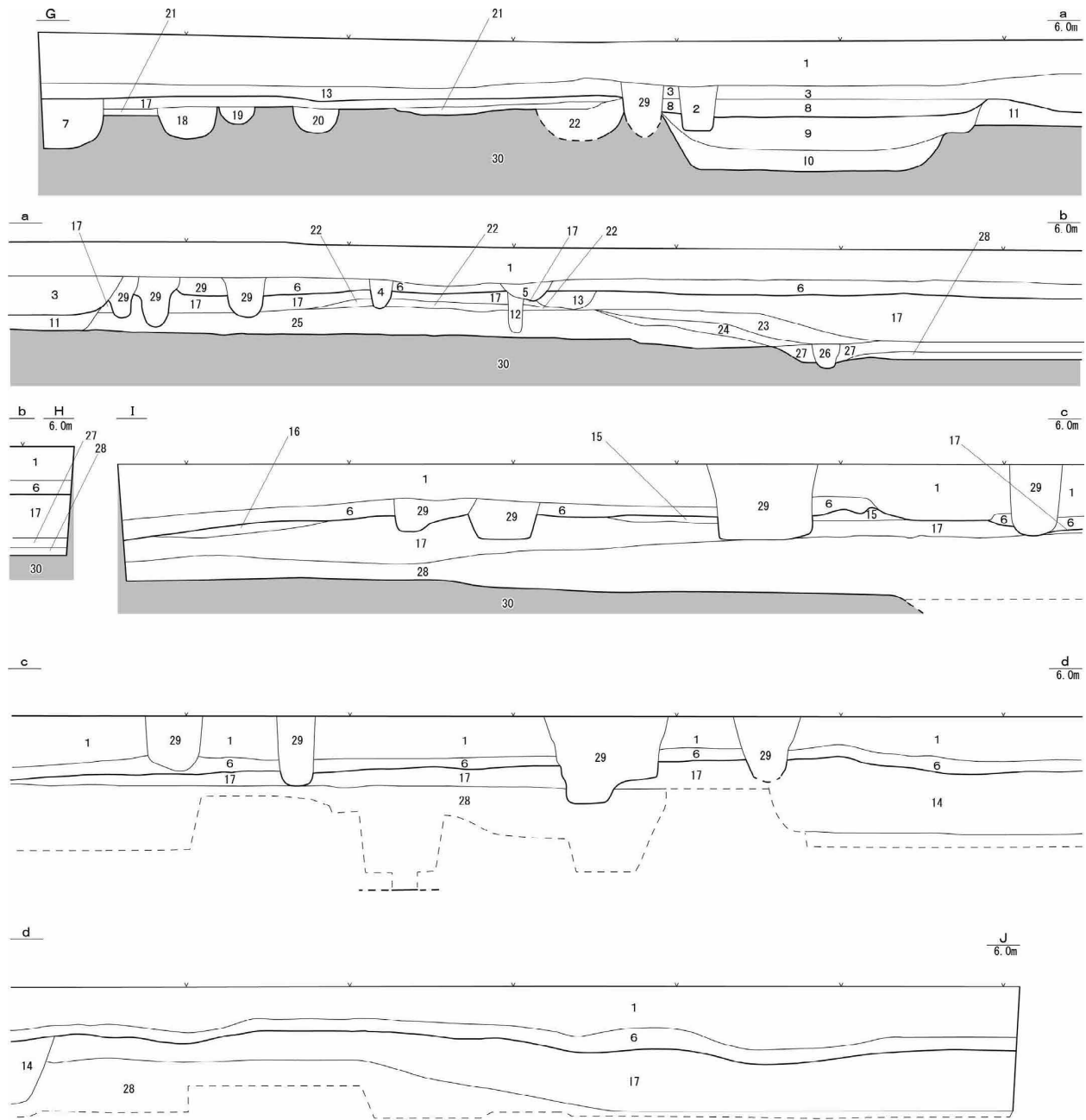




第162図 第8次調査2区・3区平面図 (1:200)



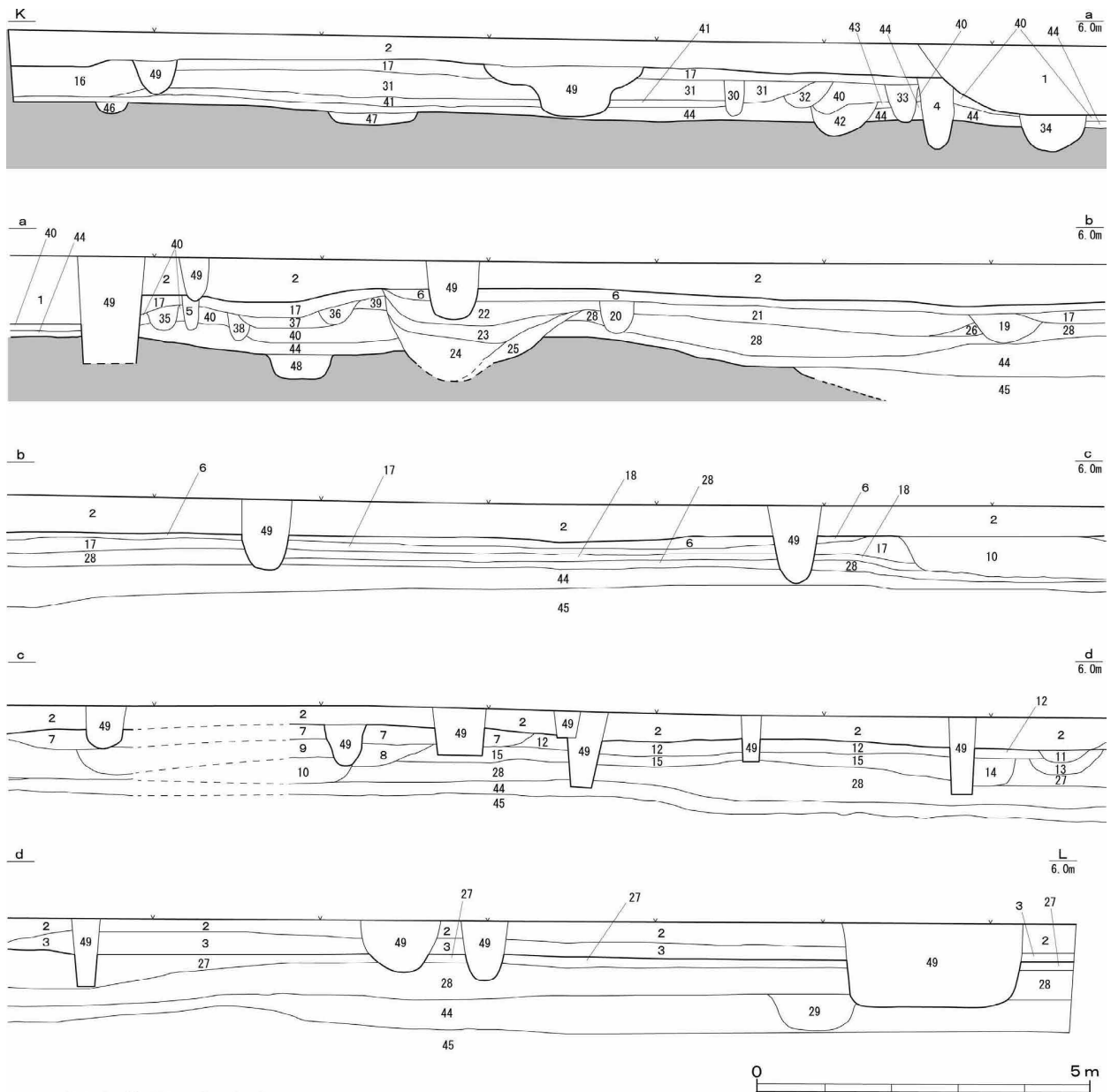
第163図 第8次調査2区・3区・4区平面図 (1:200)



1. 碎石 + 現代造成土
2. 近現代木製桶
3. 造成土
4. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
5. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粗砂
6. 7.5Y3/1 オリーブ黒色極細砂
7. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト + 10YR4/4 褐色粘土塊 5% <SK807 埋土>
8. 造成土
9. 2.5Y2/1 黒色シルト <SD816 埋土>
10. 5Y3/1 黒褐色シルト <SD816 埋土>
11. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
12. 10YR3/1 黒褐色シルト + 有機物を少量含む
13. 5Y5/4 オリーブ色中砂 + 7.5Y3/1 オリーブ黒色極細砂 5%
14. 2.5Y2/1 黒色粘土 ~ シルト + 有機質と貝を多量含む <SK821 埋土>
15. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細砂 + 粗砂多量 + 有機物と貝を少量含む
16. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細砂 + 粗砂 + 有機物と貝を少量含む
17. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色極細砂 + 有機物と貝を少量含む <SZ831 埋土等>

18. 10YR2/1 黒色シルト <SD808 埋土>
19. 10YR2/1 黒色シルト + 炭化物少量含む
20. 10YR2/2 黒褐色シルト <Pit3 埋土>
21. 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂
22. 2.5Y3/2 黒褐色粘土 ~ シルト <SD817 埋土>
23. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト ~ 極細砂
24. 2.5Y3/2 黒褐色シルト ~ 極細砂
25. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
26. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト <SK826 埋土>
27. 2.5YR2/3 極暗赤褐色粘土 ~ シルト
28. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
29. 攪乱
30. 2.5YR2/1 赤黒色シルト (粘性弱い)

第164図 第8次調査 2区土層断面図 (1:100)



1. 現代土坑（陶磁器を多く含む）
2. アスファルト+砕石または造成土
3. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～極細砂
4. 10YR3/2黒褐色シルト+10YR3/1黒褐色シルト
5. 5Y3/1オリーブ黒色シルト
6. 10YR3/3暗褐色シルト+焼土と炭化物を含む
7. 7.5YR4/4褐色シルト+焼土と炭化物を含む
8. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～極細砂+炭化物を少量含む<SK825埋土>
9. 10YR4/2灰黄褐色シルト
10. 7.5Y3/2オリーブ黒色極細砂<SD823埋土>
11. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト+炭化物を多量含む
12. 2.5Y4/1黄灰色シルト+炭化物少量含む
13. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
14. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
15. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
16. 2.5Y3/2黒褐色シルト～極細砂
17. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～極細砂
18. 10YR3/3暗褐色シルト
19. 7.5Y2/2オリーブ黒色シルト1
20. 2.5Y3/1黒褐色シルト
21. 2.5Y5/6黄褐色シルト
22. 10YR3/2黒褐色シルト+貝殻を多量含む<SK819埋土>
23. 7.5YR6/8橙色シルト+貝殻を多量含む<SK819埋土>
24. 2.5Y5/3黄褐色シルト～極細砂<SK819埋土>
25. 10YR1.7/1黒色シルト+繊維を多量含む<SK819埋土>
26. 2.5Y4/1黄灰色粗砂
27. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
28. 2.5Y5/6黄褐色シルト
29. 5Y3/1オリーブ黒色粘土～シルト<SD827埋土>
30. 10YR3/4暗褐色極細砂
31. 2.5Y6/6明黄褐色粗砂
32. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～極細砂
33. 10YR4/2灰黄褐色シルト
34. 2.5Y3/2黒褐色極細砂
35. 10YR3/3暗褐色シルト～極細砂
36. 10YR3/3暗褐色シルト+焼土と炭化物を少量含む
37. 2.5Y3/1黒色シルト
38. 2.5Y3/2黒褐色シルト
39. 10YR3/2黒褐色シルト
40. 10YR3/2黒褐色シルト+炭化物を少量含む
41. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト
42. 10YR3/2黒褐色極細砂
43. 10YR3/2黒褐色シルト
44. 10YR2/1黒色シルト
45. 2.5Y3/1黒褐色粘土
46. 10YR3/1黒褐色シルト
47. 10YR3/1黒褐色粘土<SK812埋土>
48. 10YR3/1黒褐色シルト<SD820埋土>
49. 攪乱

第165図 第8次調査3区土層断面図 (1:100)



が皆無であるが、切り込む層位はS K803と同じであり、同様な時期であろう。そのS K803からは土師器、陶磁器、木製品が比較的まとまって出土しているが、ウリの種やカヤの種皮も出土している。S D811は調査区北西端を延びるものである。調査区端のため規模や形状は不明であるが、大手筋に沿う方向である。

その他、土層観察等で、焼土を含む多数の土坑を認めているが、その大半は造成土中からの切込みである。

**2区**（第162・163図） 3区と8mの間隔で並走する幅1m未満、延長80mの調査区である。遺構は北西側に集中する傾向にあり、調査区中ほどから南東端では沼地状を呈するためか、遺構の検出はない。この沼地状地帯をS Z831とした。明確な範囲を特定できていないが、北西端はS K821から南東へ5mで地層の傾斜が始まっており、このあたりと思われる。4区のS Z828とは一体のもの可能性が高いが、3区では不明瞭である。

S K806は曲物が正立状態で埋没する様相を見せ、井戸を想定したが、掘形は検出できなかった。掘削の結果、曲物は腐食が激しく、側板は土質がその痕跡を示す程度であった。このため井戸と断定できず、正立状態は埋没時の偶然による可能性もある。

S D817、S D816は調査区を横断する溝である。両者は近接して並走する。S D817からは江戸時代の陶磁器等が出土し、S D816はS D817と同様な層位から切り込んでいるため、両者は同様な時期と考えられる。S D816は、幅5m、深さ1mを測る大規模なもので、断面形も逆台形を呈する整った形状である。しかし、この溝の延長上にある3区ではS D817と共に検出されておらず、疑問である。直角に屈曲して第6次調査18区のS D6053に至る可能性もあるが、確証に欠ける。この溝より北西側では柱穴状の小穴を多数検出し、Pit 2では角材（236）が突き刺さる状態で出土している。しかし調査区が狭

小なため、建物として確定できない。柱とすれば、建築部材を転用したものとなるが、別目的で立てられた可能性も考慮に入りたい。

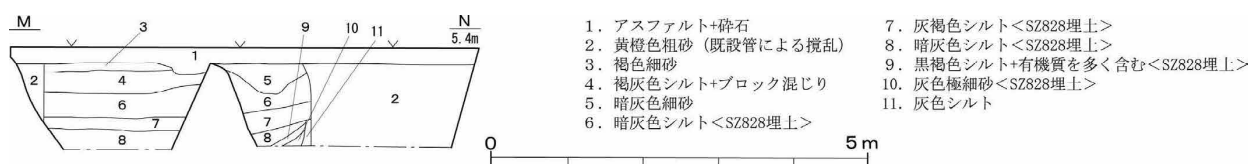
2区では、時期が特定できない遺構が多いが、貝を多く含むS K821の最終埋没が近代に及ぶ他は、層位からみて江戸時代とみて良いであろう。

**3区**（第162・163図） 2区の北東側に8mの間隔で並走する。調査区の形状は2区と同様であるが、平安時代末～鎌倉時代に遡る遺構が目立つ。大型の土坑と溝があるが、S D820は幅1m、深さ30cmを測る整った形状を呈するが、延長上の2区では検出できていない。S K812・815・824は円形の土坑であるが、深さは多様である。これら以外は時期決定が困難なものを含め、近世に相当するものと考えられる。

S K819は直径3m、深さ1mを測る不整円形の大形土坑であるが、壁面は緩やかで底面積は小さい。埋土は下層が極細砂、上層がシルト系の2層に大きく分かれるが、上層には貝殻を多量に含んでいる。また、イネ科の瘦果や炭化した木綿の布も出土している。

溝も3条検出しているが、2区と連絡する様子はない。特にS D823は幅8mに対し、深さは60cm程度の浅いもので、溝というよりは窪地状のものかもしれない。S D827からは陶器の大皿や漆器の椀等の木製品、アンズやウメの種が出土している。

**4区**（第163図） 2区と3区を連結する幅1m未満、延長4mの狭小な調査区である。現道を横断する設定のため、交通への配慮から南西部と北東部に分けて掘削した。調査区の北東側は大きく攪乱されて不明である。深さ3mまで掘削したものの安定した地層には至らず、暗灰色系のシルト層が続き湿地状を呈している。この湿地状遺構をS Z828とした。隣接する2区のS Z831と同一の可能性が高いが、埋土の層序は3区へ向けて上昇傾向を示す。このため、3区には及ばないといえることができる。（森川）



第166図 第8次調査4区土層断面図 (1:100)

調査区	遺構名	種別	計測値 (m)			時代	遺物	備考
			長さ 長径	幅 短径	深さ			
1区	SK801	土坑	1.1	0.8以上	0.60	18世紀	陶器・磁器・瓦・部材	
1区	SE802	土坑	3.0以上	0.7以上	1.10	18世紀	土師器・陶器	土坑の誤認
1区	SK803	土坑	2.1以上	0.20以上	0.80	18世紀	土師器・陶器・磁器・木製品	SE802と同層位
1区	SK804	土坑	2.90	0.6以上	1.3以上	19世紀	陶器・椀瓦・金属製品	
1区	SK805	土坑	1.70	0.9以上	0.60	江戸時代	陶器	
2区	SK806	土坑	0.4	0.4	0.20	江戸時代	陶器・木製品	
2区	SK807	土坑	0.9	1.0	0.7	江戸時代	陶器	6次17区SK6052と同一遺構か
2区	SD808	溝	1.4以上	0.9	0.5	江戸時代	陶器	
3区	SK809	土坑	0.5	0.5	0.30			
2区	SK810	土坑	1.0	1.3	0.3	江戸時代	陶器・磁器	SD816と同層位
1区	SD811	溝	14.2以上	1.0以上	0.2以上	江戸時代	土師器・山茶椀	土層
3区	SK812	土坑	1.2以上	0.3以上	0.20	平安末～鎌倉時代	山茶椀・陶器	
3区	SK813	土坑	0.5	0.5	-	18世紀	土師器・陶器・瓦	深さ不明
3区	SK814	土坑	0.8	0.6	0.10			
3区	SK815	土坑	1.7	0.8以上	0.70	鎌倉時代前	土師器・山茶椀	
2区	SD816	溝	1.4以上	5.0	1.10	江戸時代	土師器・陶器・漆器	
2区	SD817	溝	1.4	1.3	0.4	江戸時代	土師器・陶器・磁器	
3区	SK818	土坑	1.8以上	0.8以上	1.30	江戸時代	土師器・瓦	
3区	SK819	土坑	3.0以上	0.4以上	1.0以上	江戸時代	陶器・瓦・貝・穀物・繊維製品	
3区	SD820	溝	1.4以上	1.0	0.30	平安末～鎌倉時代	山茶椀	
2区	SK821	土坑	5.5	0.7以上	1.40	江戸時代～明治	陶器・磁器・木製品	貝を多く含む
1区	SD822	溝	2.0以上	1.6	0.6	鎌倉時代前		SD829と同一遺構
3区	SD823	溝	1.4以上	8.3	0.60	江戸時代		
3区	SK824	土坑	2.0以上	0.6以上	0.30	平安末～鎌倉時代	山茶椀	
3区	SK825	土坑	1.3以上	1.0以上	0.40	19世紀	土師器・陶器・磁器	SD823より古い
2区	SK826	土坑	0.4	0.4	0.3			
3区	SD827	溝	1.4以上	1.1	0.50	江戸時代	焙烙・陶器・木製品	漆大皿など出土
4区	SZ828	沼地	3.9以上	1.5以上	0.4以上	19世紀	陶器・磁器・木製品	欠番から変更20190108および20190109
1区	SD829	溝	2.0以上	1.6	0.6	鎌倉時代前	土師器・山茶椀	SD822と同一遺構
1区	SD830	溝	3.0	0.8	0.2	鎌倉時代前	土師器・山茶椀	
2区	SZ831	沼地	—	—	—	19世紀	陶器・磁器・木製品	

第48表 第8次調査遺構一覧

## 2. 遺物

### (1) SK801出土遺物 (第167図)

1～3は磁器、4は丸瓦、5・6は部材である。磁器の内、1・2が肥前系の染付で蔓草や草花を描く。3は肥前系とする確証はなく、皿としたが、蓋とすべきかも知れない。5は板材でアスナロ属、6は角材でマツ属である。一部に樹皮が残る。両者とも用途は不明である。

### (2) SE802出土遺物 (第167図)

図示できたものは土師器の皿(7)と天目茶椀(8)で、両者とも掘形からの出土である。7は口径8cm程度で、底部と口縁部の境が不明瞭、凹凸の多い器壁である。8は鉄釉を化粧掛ける。

### (3) SK803出土遺物 (第168・169図)

土師器、陶磁器、木製品が多量に出土している。**土師器** 9～14は皿、15は茶釜、16・17は焙烙である。皿の口径は7～11cmまで多様で、11のように底部と口縁部の境が明瞭なもの13のように丸味をも

つものがある。器高は1.1cmの低いもの(9・14)とから1.9cm程度を測る比較的深いもの(11・13)に分かれる。11は完形で出土し、底部に穿孔がある。13は口縁部下端の外面にヘラケズリを施す特異な調整である。茶釜や焙烙には煤が付着し、16は内面にも及ぶ。

**陶器** 18～24は施釉陶器の椀で、21は天目茶椀である。鉄釉や灰釉を施すが、22は発色不良、24は内面が黒斑状になる焼成や不良品である。瀬戸・美濃系が多いが、20は京焼風陶器で山水文を描く。

25は捏鉢、26～29は挿鉢、30は壺、31は甕である。挿鉢は瀬戸・美濃・信楽、他は常滑と思われる。30は壺としたが、口縁端部内面に煤の付着がある。

**磁器** 陶器に比べ少ない出土で、図示できたものは32の皿、33の猪口に止まる。両者とも蔓草や草花を描く染付で肥前系のものである。

**木製品** 42は曲物、34・41も曲物の底板と思われる。材質は34がスギ、他はヒノキである。34には木釘が残存しており、41には漆が施される。39は漆器の椀

で、トチノキを用いている。38は残存が劣悪であるが、杓子としておく。他は明確な用途が不明なものである。36は篋とした。釘穴が7ヶ所確認でき、結び紐の痕跡がある。37にも結び紐の痕跡がある。4ヶ所に孔があるが、径が異なり、穿孔の目的を違えるものと思われる。木札とした。35は板材の小片、40・43は角棒材としたが、40は一端を尖らせている。

(4) SK 804区出土遺物 (第170図)

層位的に近代以降に下る可能性も残る遺構であるが、近世の陶磁器類や瓦等が出土している。

44・45は陶器の甕であるが、口縁部の形状が異なる。46・47は陶器で両者とも灰釉を施す。47は壺としたが、底部内面まで施釉が及んでおり、鉢とすべきかも知れない。48は磁器の皿で肥前系の染付である。格子文を描く。49は刃物の小片、50～53は瓦の小片である。52が水返し付の平瓦、他は棧瓦であるが、全て酸化焼成で燻は認め難い。

(5) S D 822・829出土遺物 (第170図)

図示できたものは山茶碗 (54・55) である。いずれも口縁部及び底部の小片であるが、54の口縁端部に外反はみられない。

(6) S D 830出土遺物 (第170図)

図示できたものは、土師器の皿 (56) と山茶碗 (57) である。土師器皿は口径に比べ高い器高を呈する。山茶碗の口縁端部に外反はみられない。

(7) Pit 2 出土遺物 (第170図)

図示できたものは陶器の碗 (58) のみである。灰釉を施すが、沸騰気味で良好な発色が得られていない。

(8) 1区包含層出土遺物 (第171図)

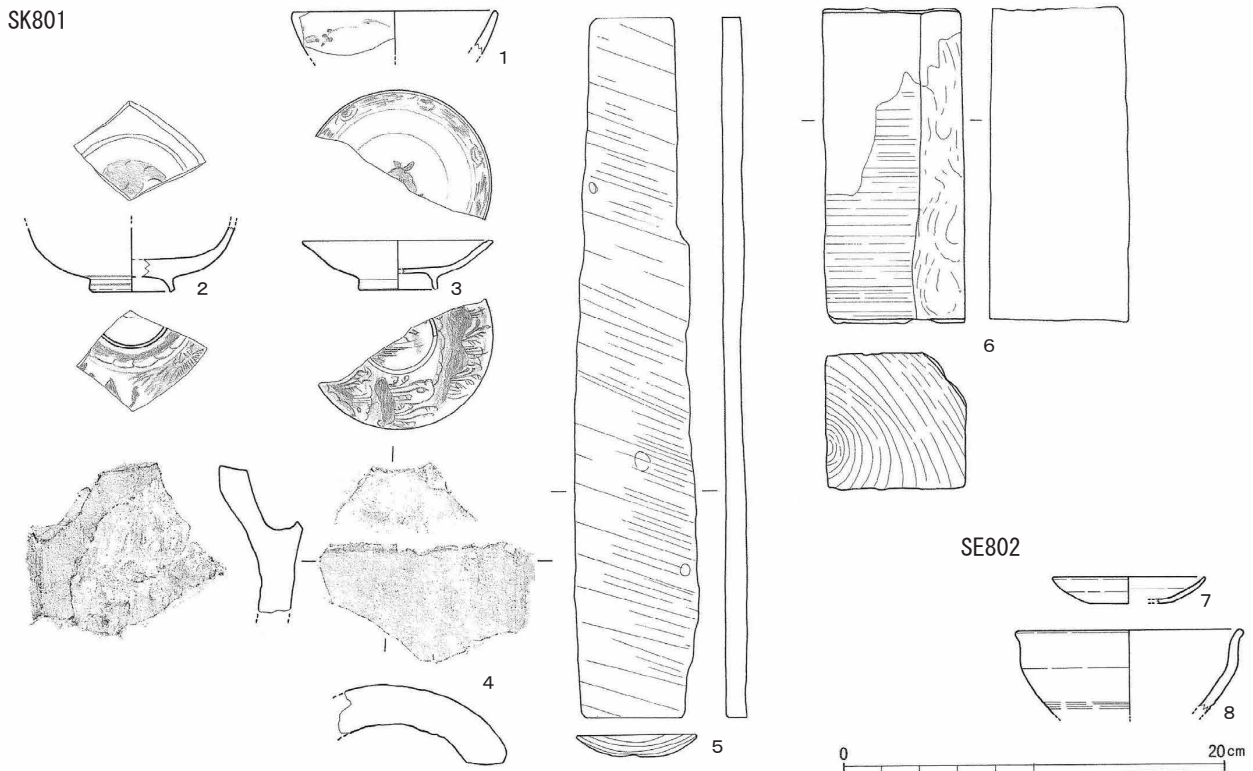
**山茶碗** 59～62があるが、いずれも口縁部の小片である。口縁端部は外反の傾向を僅かに残す。

**土師器** 図示できたものは63のみである。器高が非常に低い扁平な形態で灰白色を呈する。

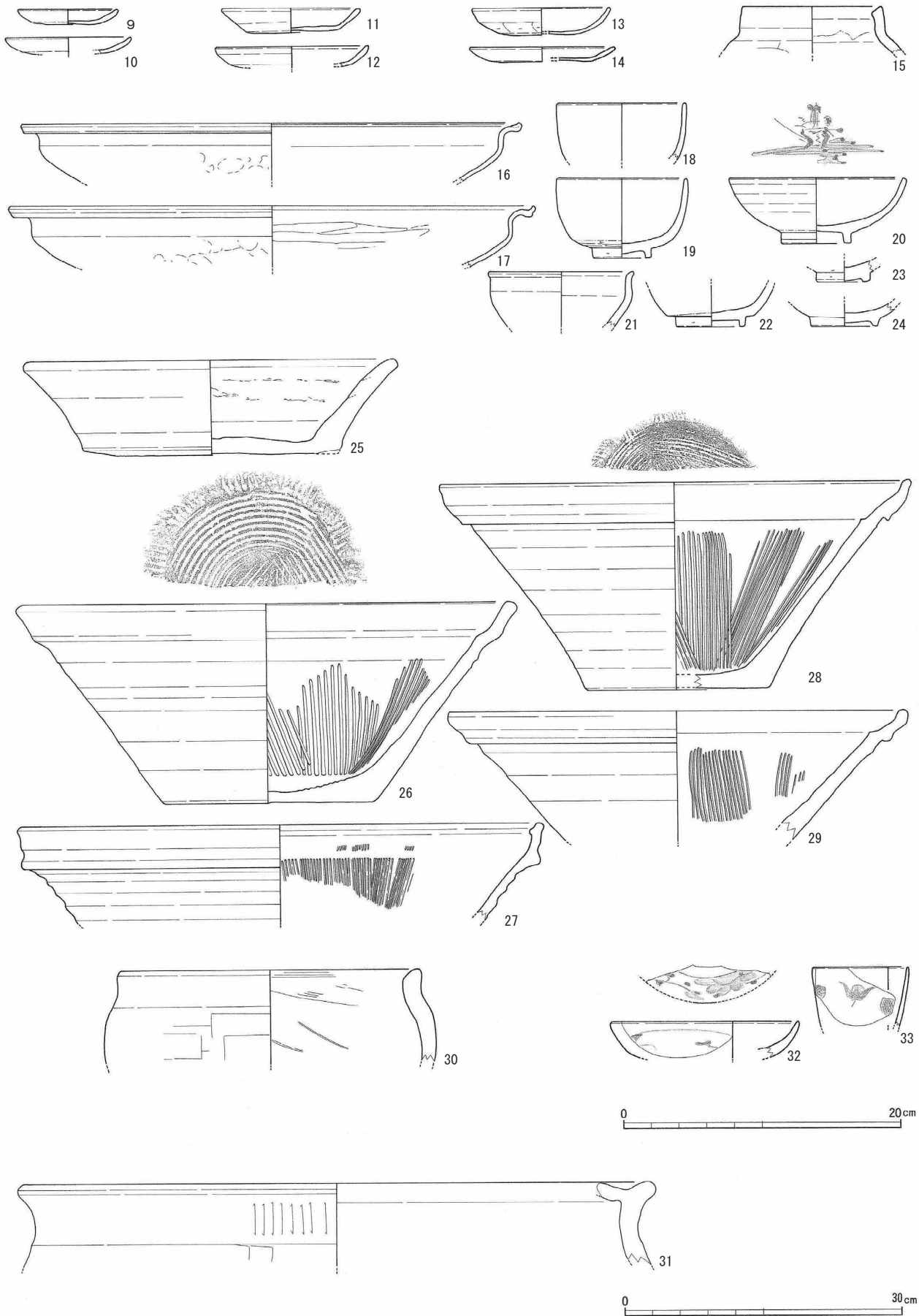
**陶器** 64は天目茶碗、65は皿である。65は流水系の絵柄を描く。66は陶器の壺、67は鉢、68は播鉢、69・70は甕で、播鉢以外は常滑である。67には短い雑な脚が付くが、小片のため3足に仮定して図化している。68の播鉢も高台をもつ。

**磁器** 図示できたものは肥前系の71のみである。染付の碗で文字「壽」を絵柄としている。

**瓦** 72～74は平瓦の小片、76は瓦当が剥離した軒丸



第167図 第8次調査SK801、SK802出土遺物 (1:4)



第168図 第8次調査SK803出土遺物① (31=1:6、他は1:4)



瓦で、74は燻が不足気味である。75は板状であるが、小片のため全体の形状は不明である。瓦としては厚く、直径1cmの釘穴をもつ。一応、瓦磚としておく。

**木製品** 77はマツ属の角材、78はヒノキの小片である。78は先端を尖らせた細い札状のもの、77は残材であろうか。

**石製品** 79のみで、灯籠の宝珠と思われる。砂岩と思われるが、石灯籠の材質に多い花崗岩ではなく、灯籠の宝珠かどうか疑問が残る。

(9) 1区造成土・焼土坑等出土遺物(第172図)

80は土師器の茶釜、81~86は陶器、87~91は磁器、92は圏線が焼失した巴文軒丸瓦、93は金属製品で織機の部品か。

陶器には天目茶椀、椀、鉢があり、鉄釉や灰釉を施す。85はたたら成形の鉢で青織部、86には片口が付く。

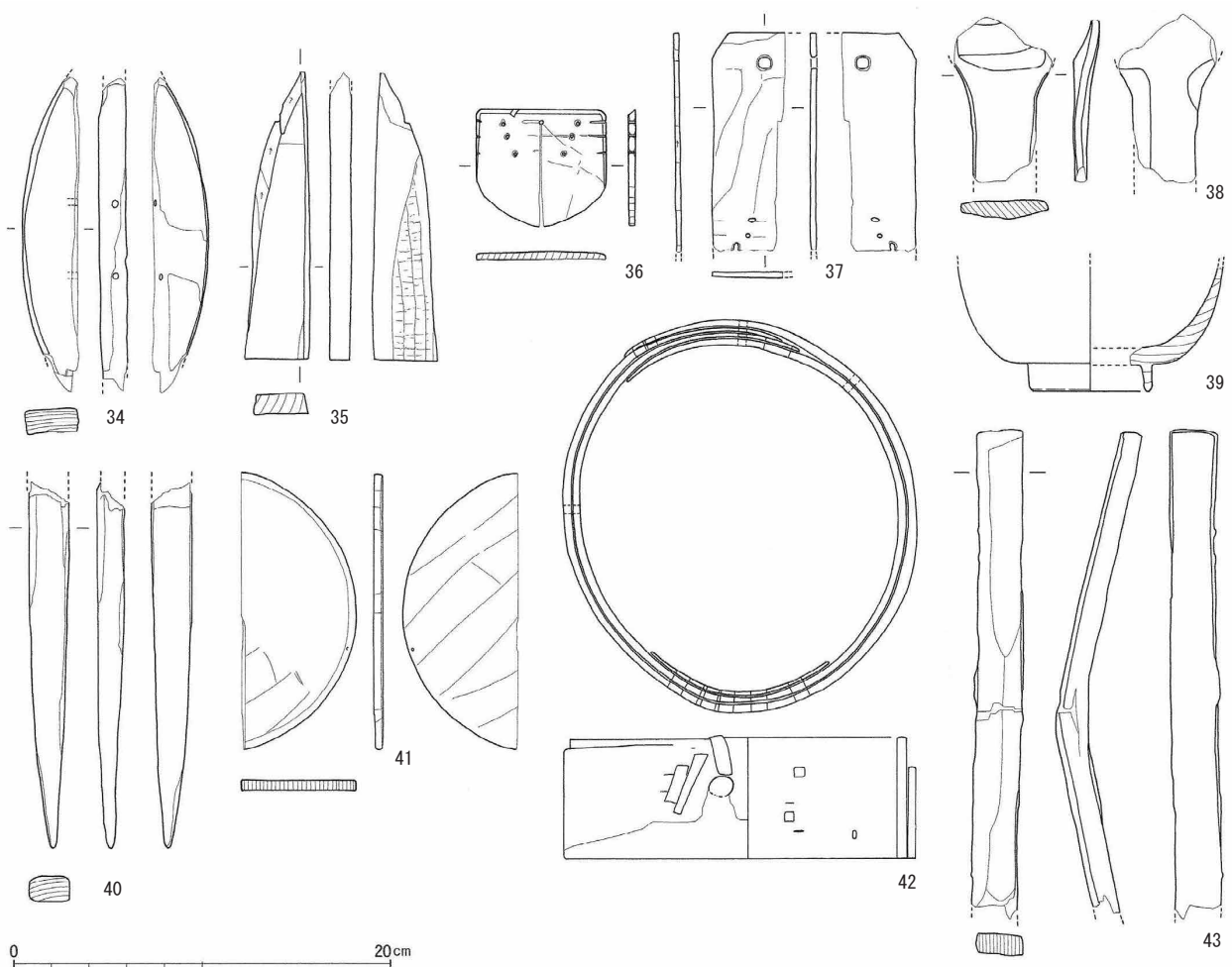
磁器は全て椀で肥前系の染付である。88・89は広東椀で、89には鏤文が描かれる。見込みにも絵柄が配されるが詳細不明、底部外面には「上」と書かれているが、文字か記号状のものか判然としない。88の見込みには蝶が描かれる。他の椀にも草花や蔓草が描かれているが、87は底部外面にも草花を図案化したようなものを描く。

(10) S D 816出土遺物(第173図)

94・95は土師器で、94は皿、95は鍋である。94は中世に遡るものかも知れず、口縁端部に煤が付着する。灯明皿として使用されたものであろう。95の外面にも煤が付着し、使用の痕跡を止める。

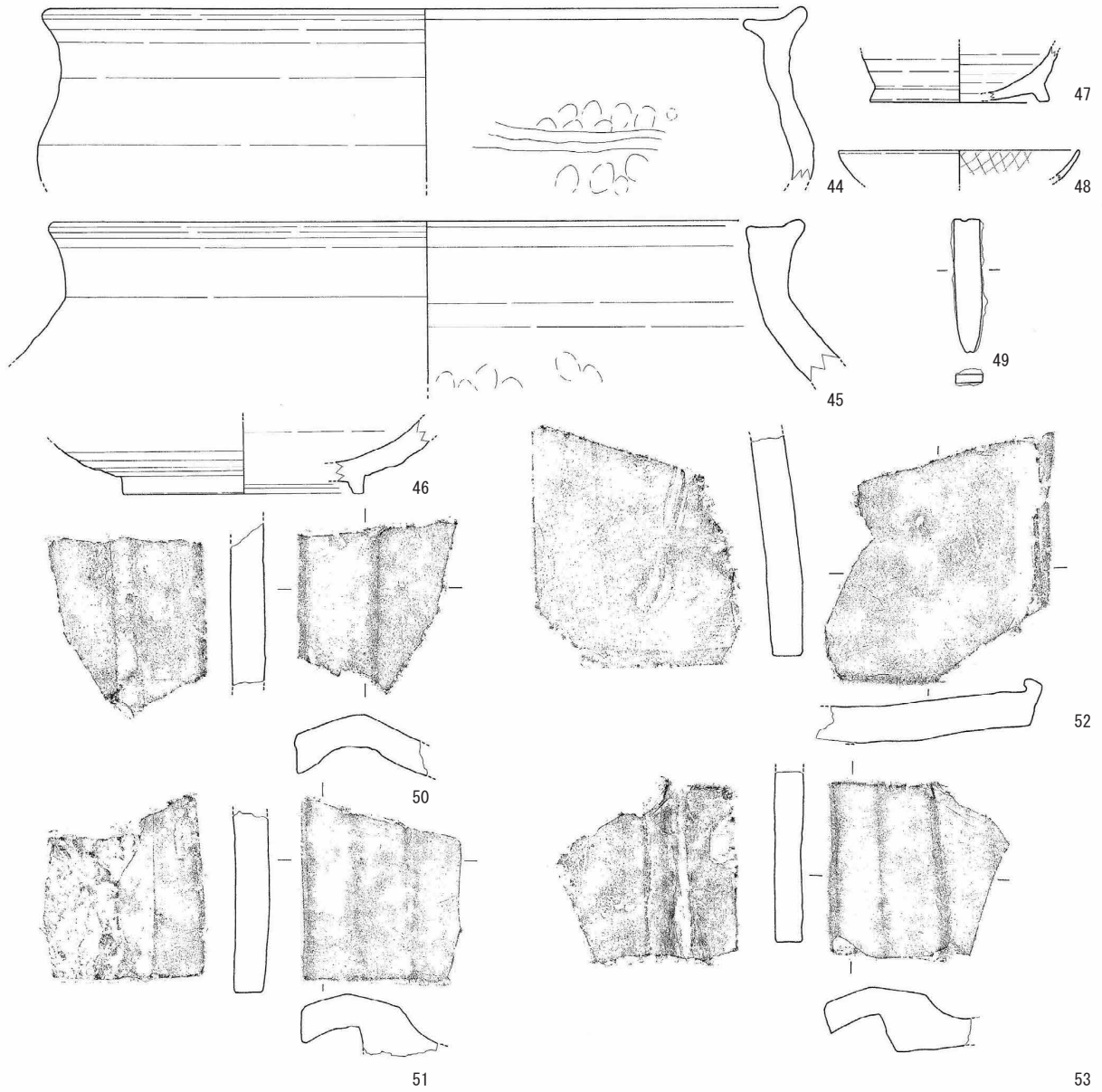
96~99は陶器で、96は瀬戸・美濃系の皿である。灰釉を施すが、若干氷割文を呈する。97・98は風炉と思われる。97は口縁部から体部に掛けて切欠きを設ける。

99は漆器の椀で、材質はトチノキである。全体に

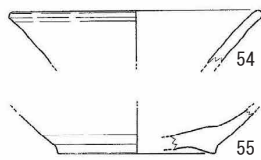


第169図 第8次調査SK803出土遺物②(1:4)

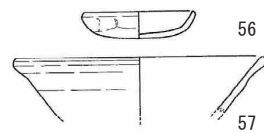
SK804



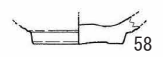
SD822・829



SD830



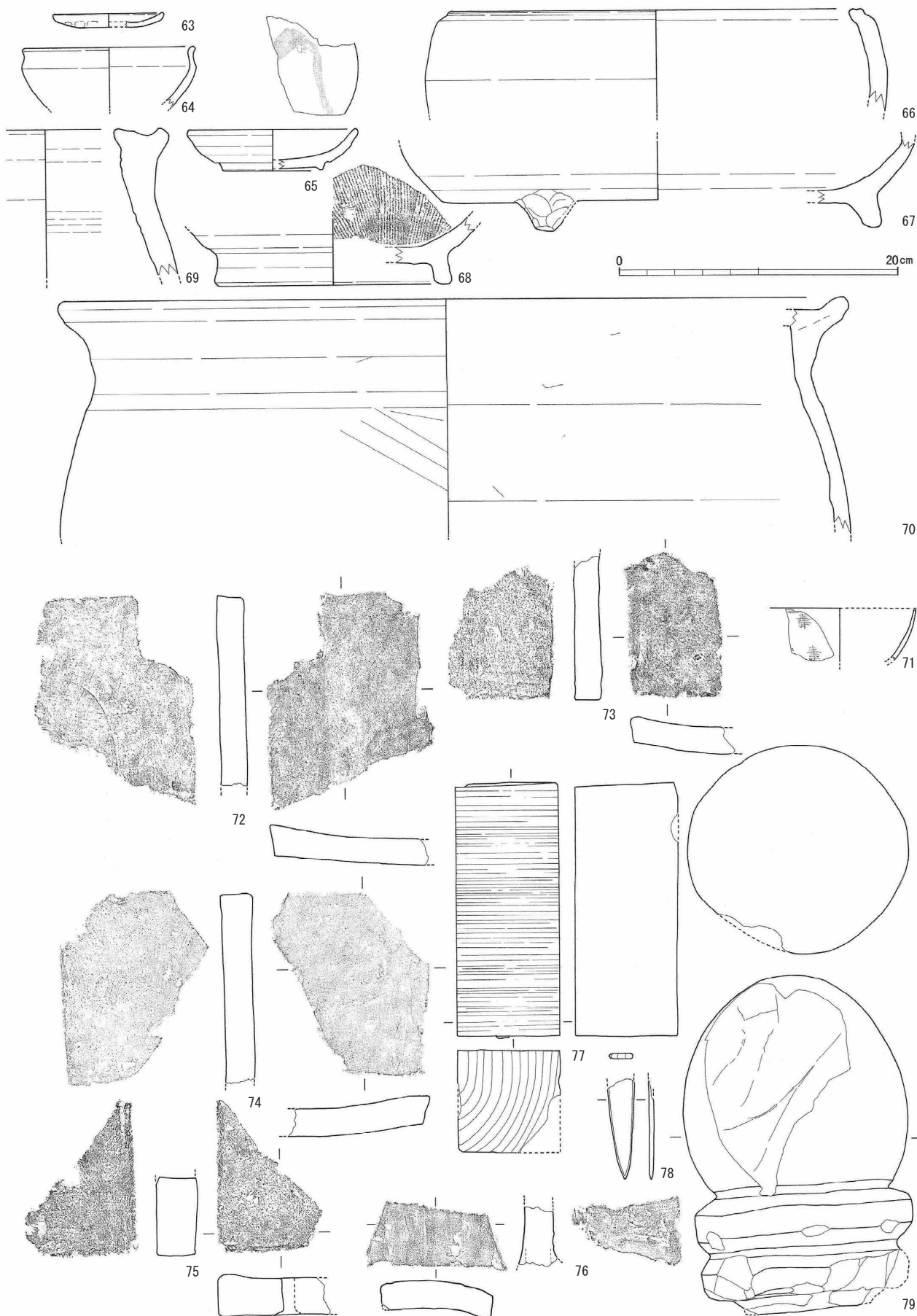
Pit 2



包含層



第170図 第8次調査1区遺構、包含層出土遺物 (1:4)



第171図 第8次調査1区包含層出土遺物 (1:4)



黒漆を施すが、外面に赤漆で桐文を描く。

(11) S K 806出土遺物 (第173図)

図示できたものは陶器の鉢 (100) と木製品の底板 (101) である。100は内面に煤が付着し、火鉢として使用されたものか。101は底板で、出土状況から曲物と思われる。材質はスギである。

(12) S D 808出土遺物 (第173図)

図示できるものは陶器の捏鉢 (102) のみである。常滑のもので、中世に遡る可能性もある。

(13) S D 817出土遺物 (第173図)

土師器、陶器、瓦があるが、多くは土師器である。103は土師器の皿で、灯明皿として利用されたようである。104は焙烙、105は鍋、106は羽釜である。105には煤が付着するが、他は認められない。106の鏝は非常に短いものである。

107・108は陶器の椀である。107は京焼風陶器で、内面に山水文を描く。108は京都・信楽系で、外面に針葉樹の葉のようなものを描き、底部外面に記されるのはカタカナ文字であろうか。

109は瓦当が剥離した軒丸瓦である。

(14) S Z 831出土遺物 (第174～178図)

明確な遺構として検出できたものではないため、包含層出土として扱ったもののうち、該当箇所ものをここで扱う。出土遺物の大半は陶器であるが、磁器や木製品も一定量を占める。

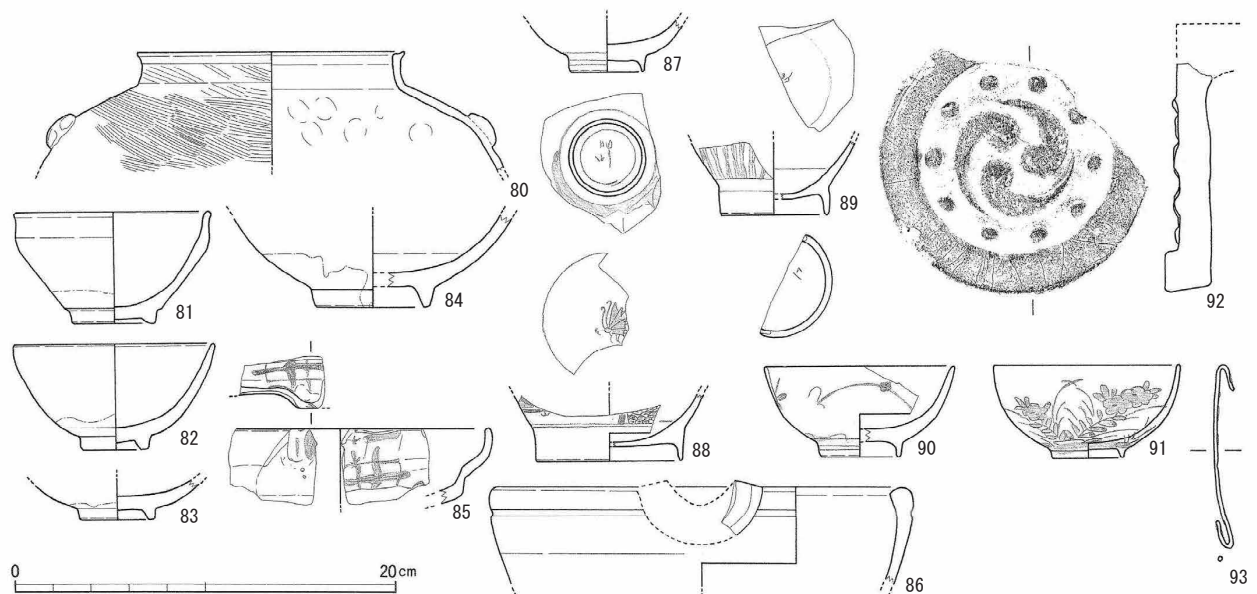
土師器 図示できたものは皿 (110) のみである。油煙の付着は確認できない。

陶器 111・112・165・166は皿で、111は灯明皿受、112は高台をもつものと思われる。灰釉が施されるが、口縁部に煤が付着する。165・166は大型の皿で、165は馬目皿、166には灰釉が施される。

113は仏花器で銅緑釉を施し、172も花瓶と思われる。

114・116・118～120・139は椀で、116は筒形椀、120は広東椀と称されるものである。114・116・119は灰釉を施すが、114の内外面は氷割文を呈する。118・120・139は陶胎染付で、118は梅花文、139は放射文を描き、120は花文を四方に配置する。119の底部には穿孔があり、焼成後に内から外に向けて穿孔している。

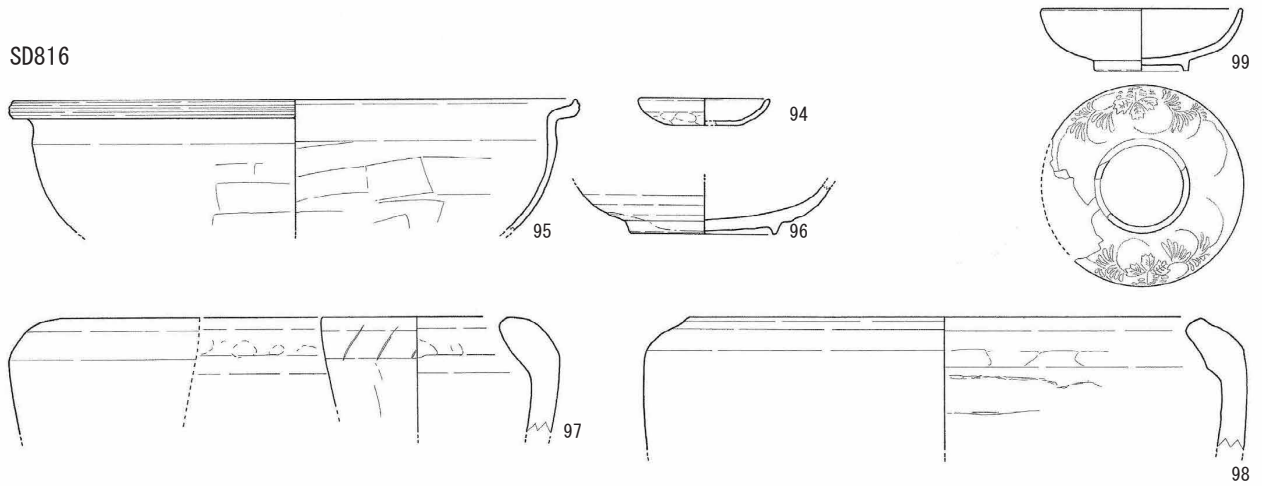
121～127・134・140・145～148・167は蓋である。121～127は落し蓋の形式で、図示できていないものも含め中央に摘みが付く。121は鉄釉、他は灰釉を施すが、126は発色不良で白色を呈する。また、124は氷割文となっている。134は内面にかえりをもち、色絵で葉文を描く。145～148は鍋の蓋と思われるが、輪台状の摘みが付く。灰釉を施すが、147は柿釉とすべき発色、146は沸騰し白色細粒を呈している。145は鉄釉で文字状の柄を描く。167は小片であるが、一応蓋としておく。銅緑釉を施し、浮彫にした葉文



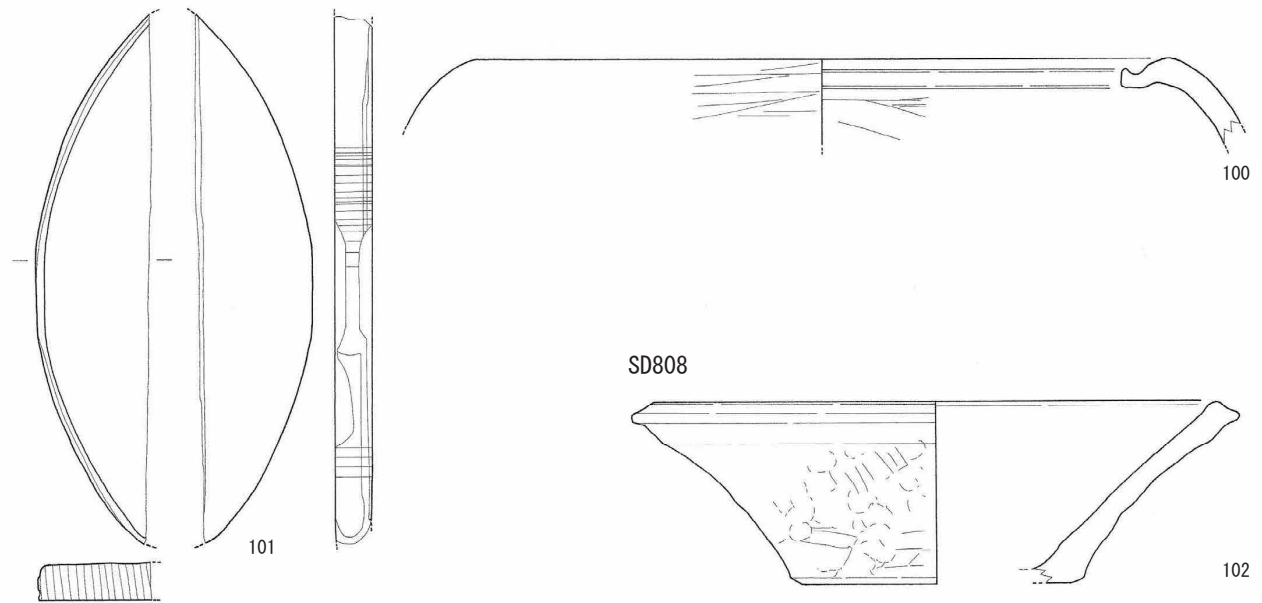
第172図 第8次調査1区造成土、焼土抗等出土遺物 (1:4)



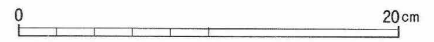
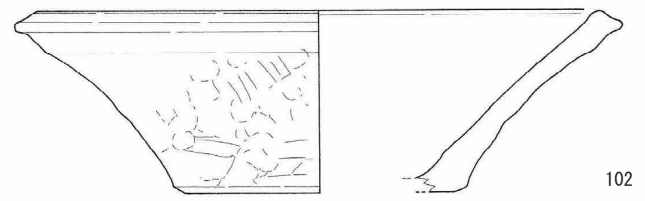
SD816



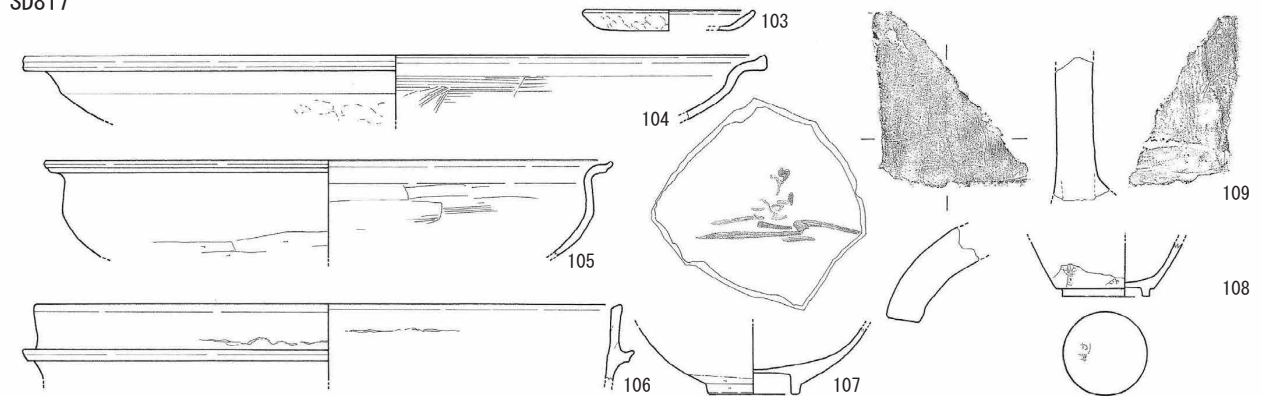
SK806



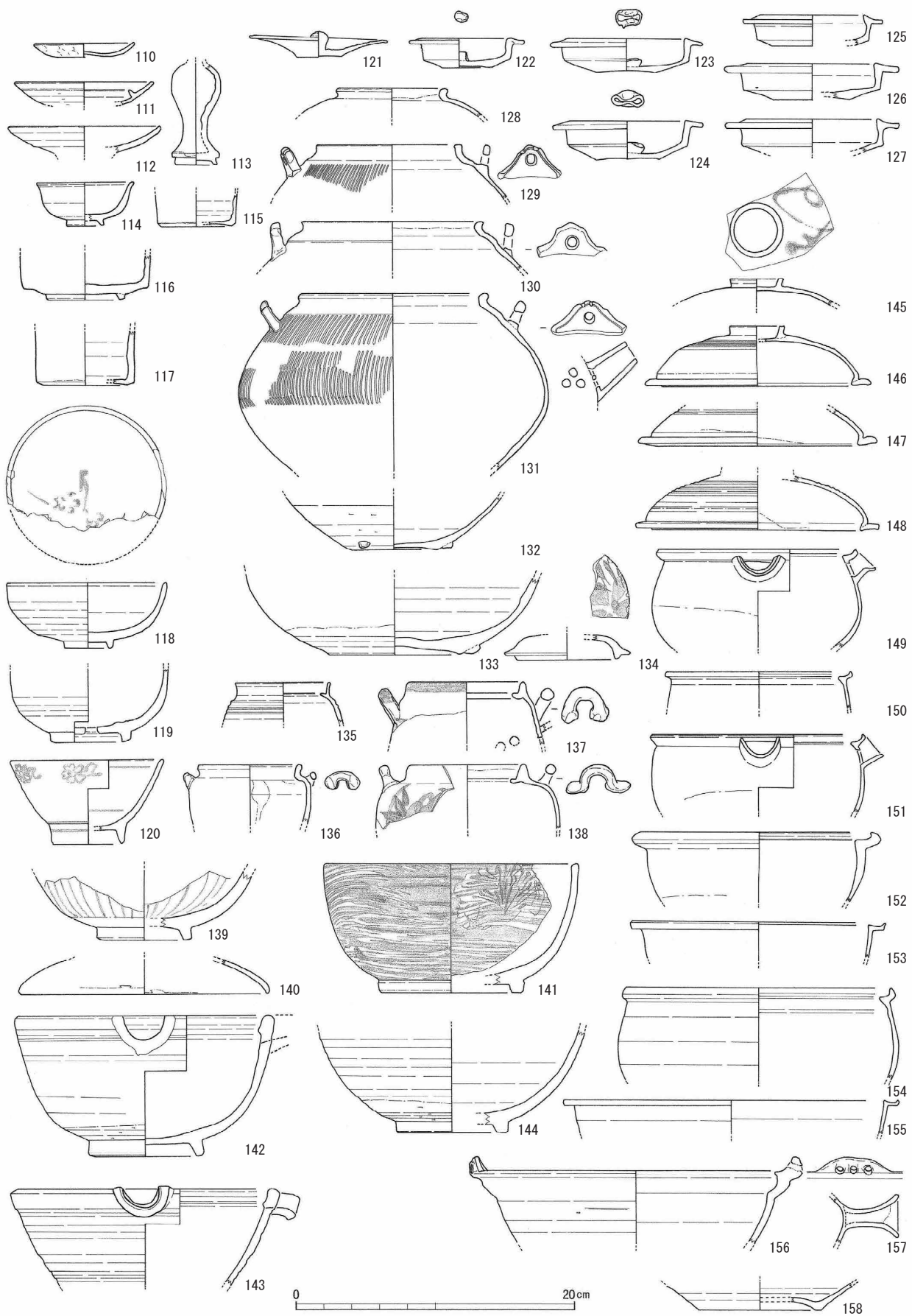
SD808



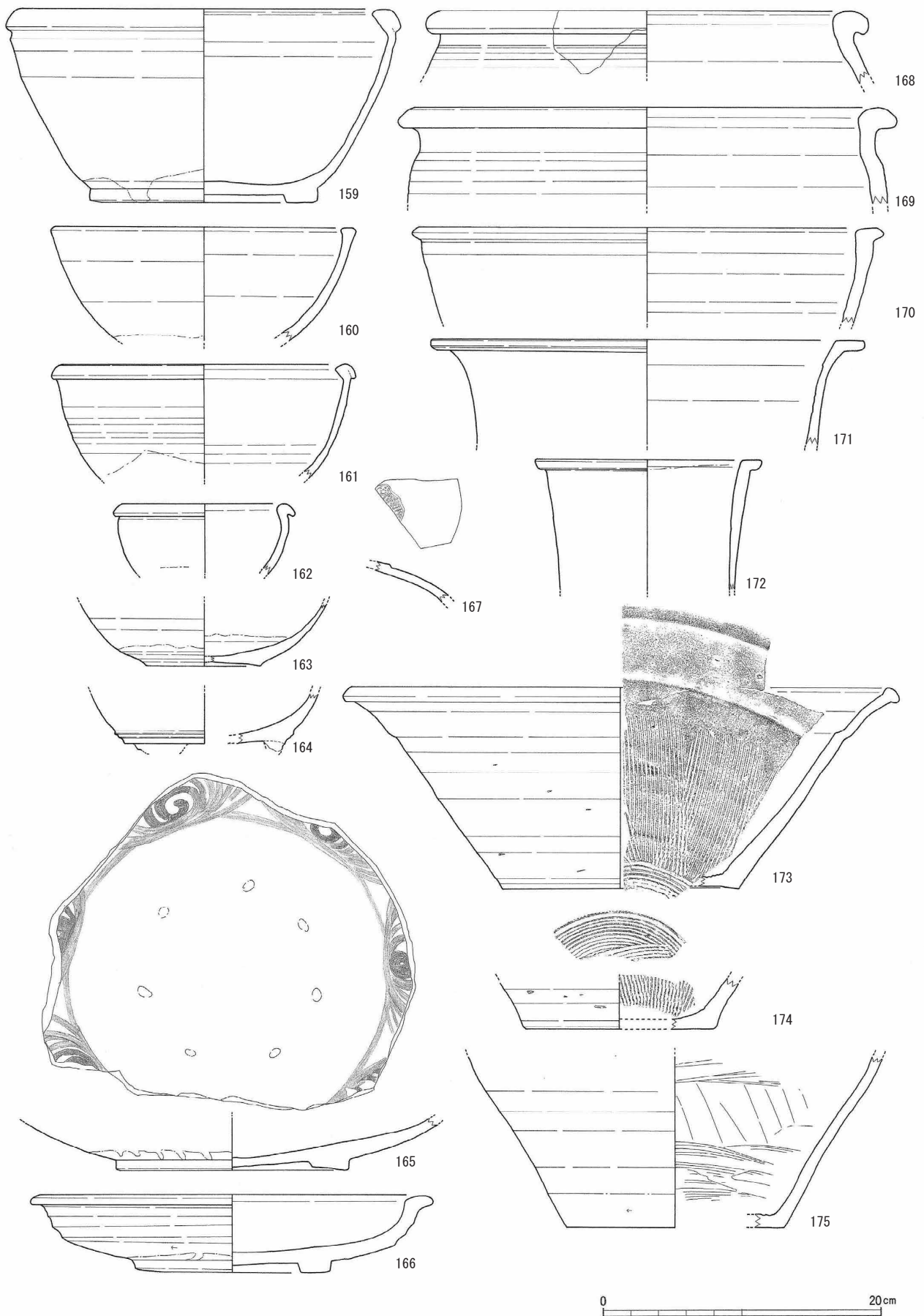
SD817



第173図 第8次調査2区遺構出土遺物 (1:4)



第174図 第8次調査SZ831出土遺物① (1:4)



第175図 第8次調査SZ831出土遺物② (1:4)

に金箔を施している。

甕等と迷うものもあるが、115・117・141～144・152・159～164・169～172・177・180～182・189～191は鉢である。115・117は筒状の体部を呈し、115は透明釉、117は灰釉を施す。141は大型の椀状の形態を呈する。銅緑釉に白泥の刷毛目を施す。142・143は片口の付く鉢、144も同様と思われる。灰釉を施すが、142は黄瀬戸釉とすべき発色である。159は大型の鉢で、内面には5ヶ所に蛤状の重焼痕を残す。164は短い脚が3方に付くものであるが、脚に漆が付着している。180～182は大型の鉢で、180には装飾性の強い把手を付ける。181は筒状の形態で半胴と称されるものである。189・190は植木鉢状の形態を呈するもので、190には焼成前の穿孔がある。両者とも灰釉に鉄絵を描く。191も大型の鉢であるが、159と同様に蛤状の重焼痕を残す。

135は鉄釉が施された茶入れ、128～131は土瓶で132・133も土瓶の底部と思われ、器の安定に寄与するためか豆状の脚を付ける。132は3方、133は2方しか確認できない。灰釉または透明釉を施し、伊賀または信楽のものを含む。136～138も小型の土瓶であるが、136の灰釉は沸騰気味である。137・138は色絵で、138は葉文を描く。157は把手のみの残存であるが、急須のものと思われる。

149～151・153～155は行平鍋、158も底部片ではあるが、行平鍋の底部と思われる。156は吊手を有する鍋で、吊手には3つの孔を開ける。行平鍋の灰釉に対し、鉄釉を施す。

173・174は播鉢、168・179は甕、175・178は底部片であるが甕と思われる。168は鉄釉、179は無釉で常滑、175は信楽である。

183は徳利、185～188は通徳利で、184も通徳利の底部と思われる。通徳利は町名または屋号を記し、徳利には鉄絵で山水を描く。

176は風炉とした。波状文を描き、火口は口縁部から大きく挟り込む不定形なものである。192は小片であるが、隅丸方形を呈する火鉢と考えらえる。青海波文や唐草文、雷文で隙間なく装飾し、鉄釉を施している。

**磁器** 193～203・218は椀で、193は小杯とすべき小型のもの、218は近代に下る混入品の可能性がある。

瀬戸・美濃系が多い。195には裏銘があり、二重四角に変形文字を記す。染付で、山水や草花を描くものが多いが、197は寿に蝙蝠、198は放射文、202は多数の宝文を配置する。201は釉下に赤絵を描き、網目文を染め付ける。接合補修されている。

204は鉢とした。大型の端反椀状であるが、波状口縁を呈する。

205・206は猪口、207は仏飯具である。205の裏銘は二重四角に「福」であろうか。206は蝶を染め付け、207は赤絵を描く。

208～215は皿で、椀と異なり肥前系がやや多い。210は菊皿、211は12角形を呈する。染付で唐草や草花を描くが、209は赤絵である。212は波状口縁を呈する他のものより薄手の皿である。文様構成も特異であり、裏銘に「宣徳年製」と記し、輸入品と思われる。208にも裏銘があるが、二重四角に「福」である。

216・217は合子で、透明釉を施した紅入れである。

220は青磁で六角形を呈する。脚が付き装飾的な火口を空ける。一応、香炉としておく。

**瓦** 221は軒棧瓦であるが、巴文ではなく、円弧を重ねた文様である。219は瓦質製品であるが、用途不明である。硯状の形態を呈する。

**木製品** 223はヒノキの杓文字、226～228は曲物の底板、235は側板である。材質は底板が全てスギ、側板はヒノキ属である。227には側の4ヶ所に木釘が残るが、表面にも1ヶ所認められる。

222・224・225・229～234は用途不明の部材である。222は正方形にちかい形態で中心に釘穴がある。230は細長い角材状の部材であるが、17cm間隔で釘穴が並ぶ。

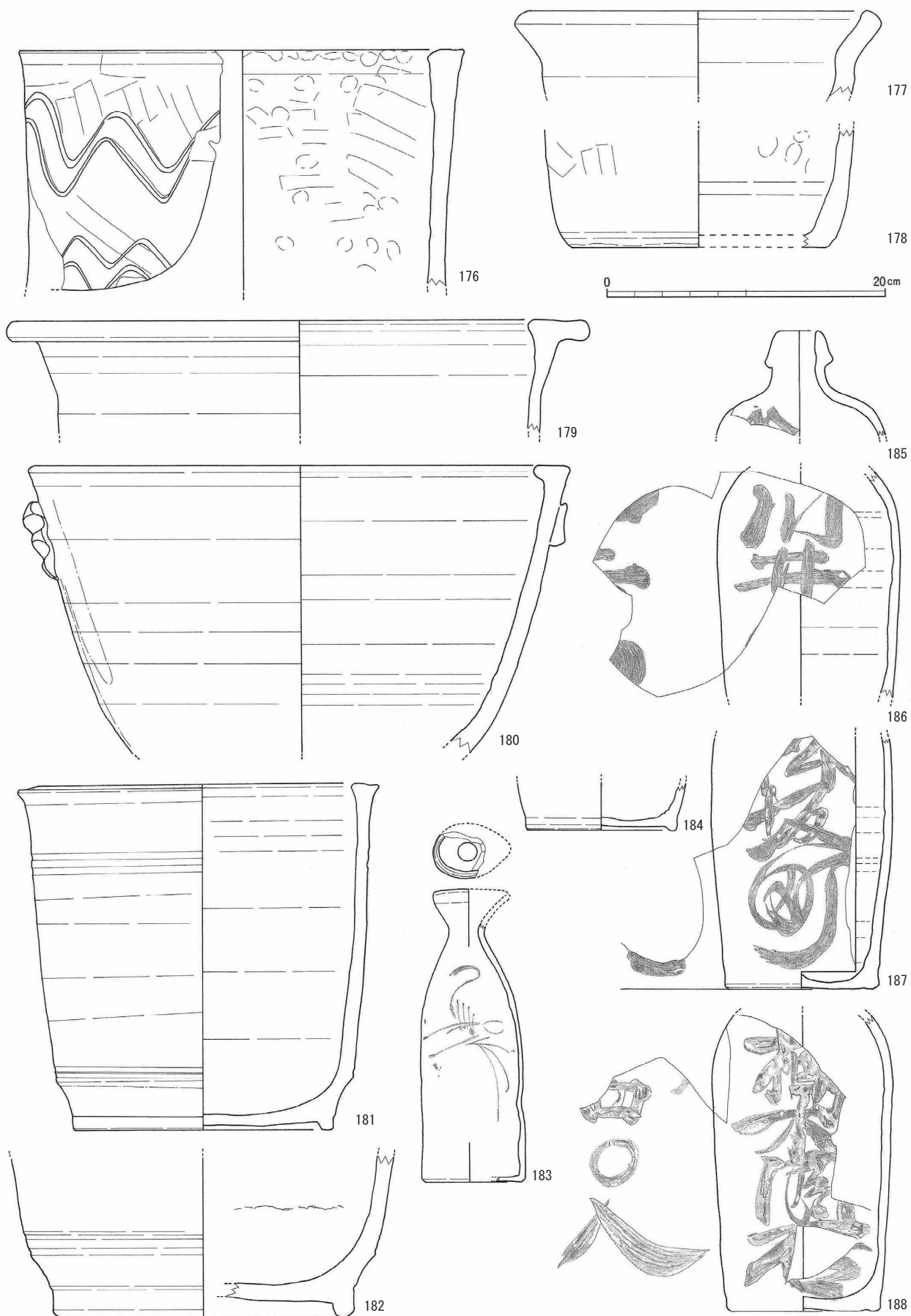
#### (15) 2区小穴出土遺物 (第179図)

236はPit 2に突き刺さる状態で出土した木製の部材である。モミ属の角材で柄穴が空けられており、貫板が十字に連結できる仕様となっている。

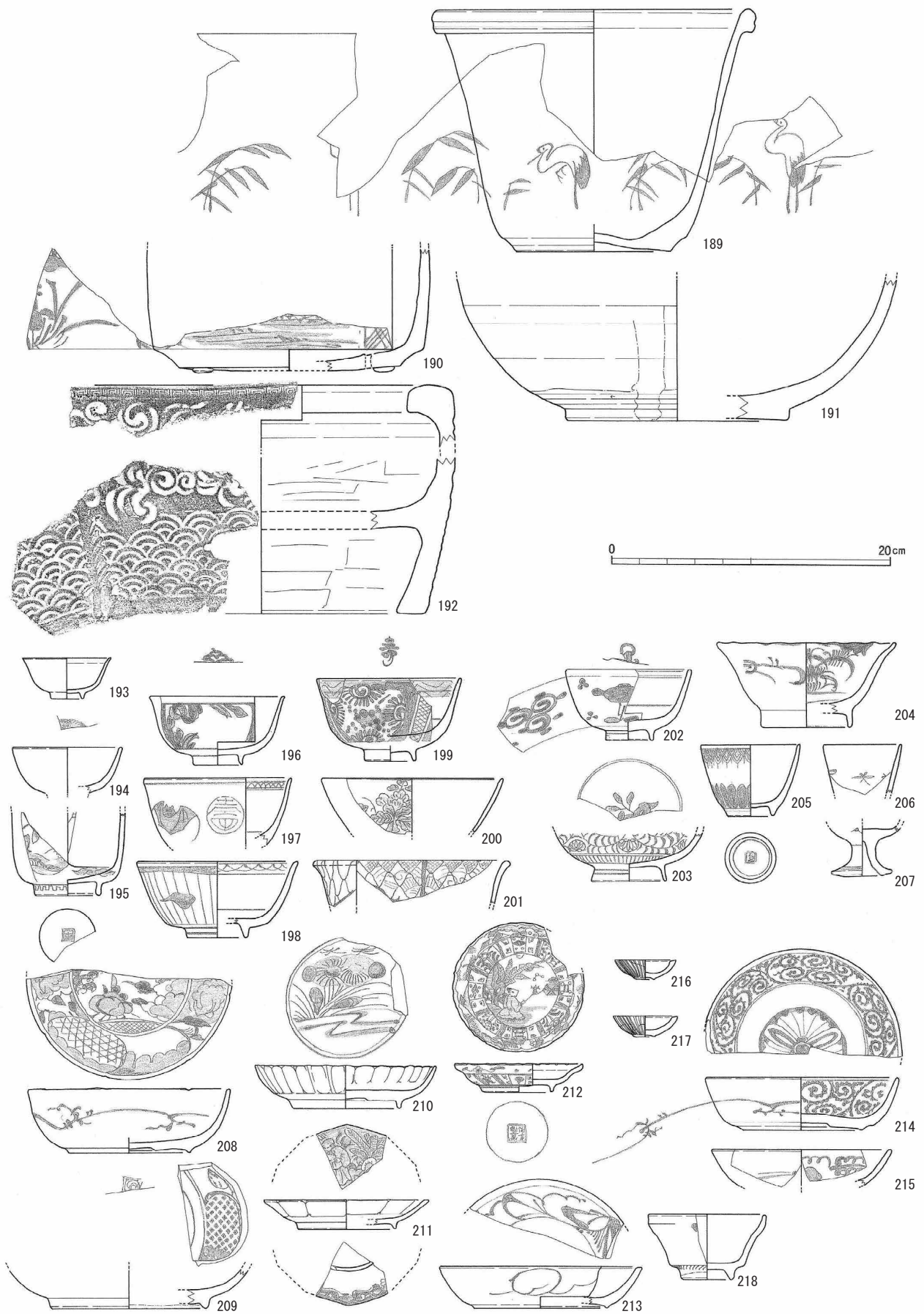
237・238はPit 3から出土した。237は土師器の皿、238は山茶椀である。237は薄手で、にぶい橙色を呈し良好な焼成である。近世に下る可能性が高く238とは大きな時期差がある。

239はPit 4から出土した山茶椀である。口縁端部は外反の名残を残す。

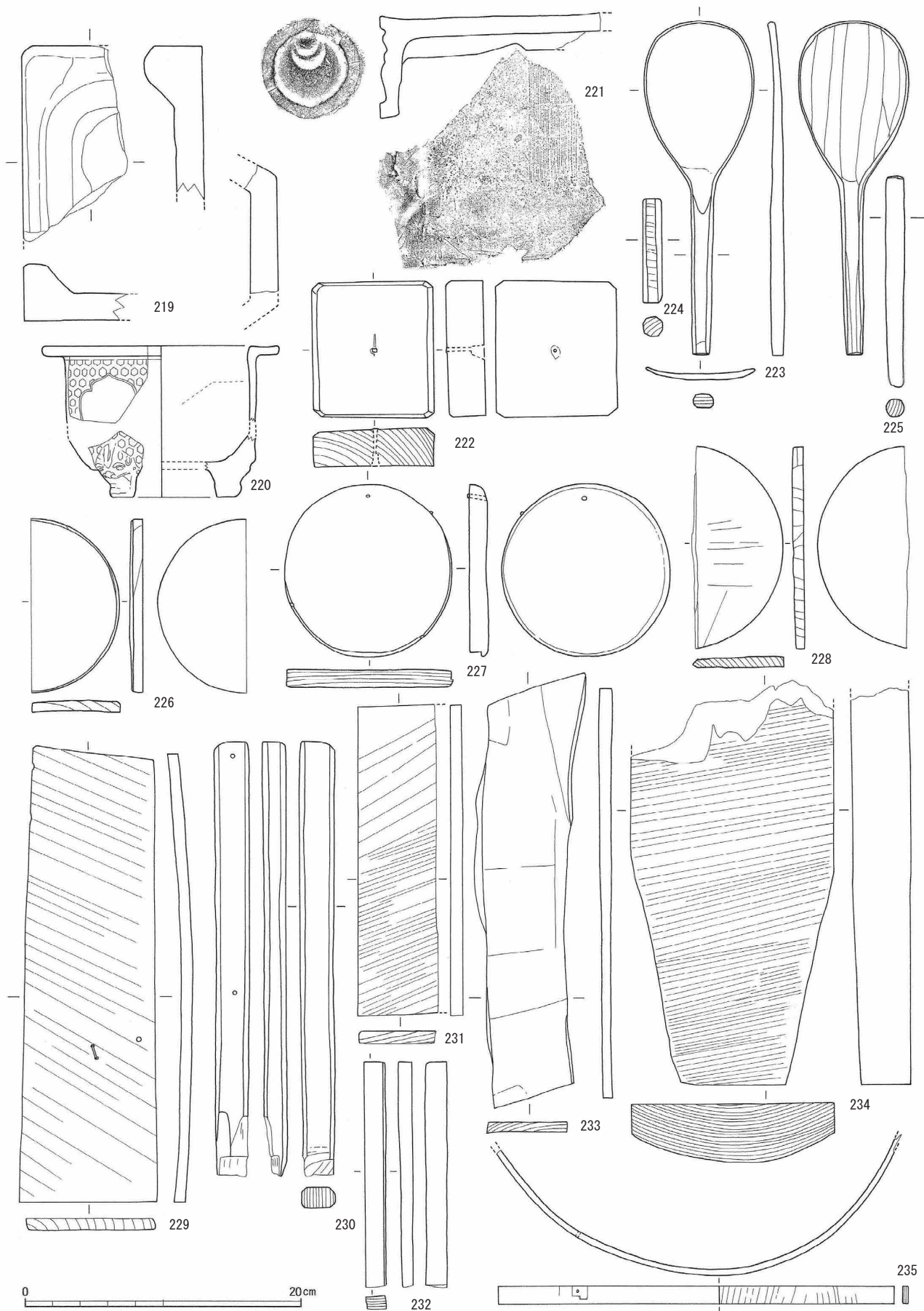




第176図 第8次調査SZ831出土遺物③ (1:4)



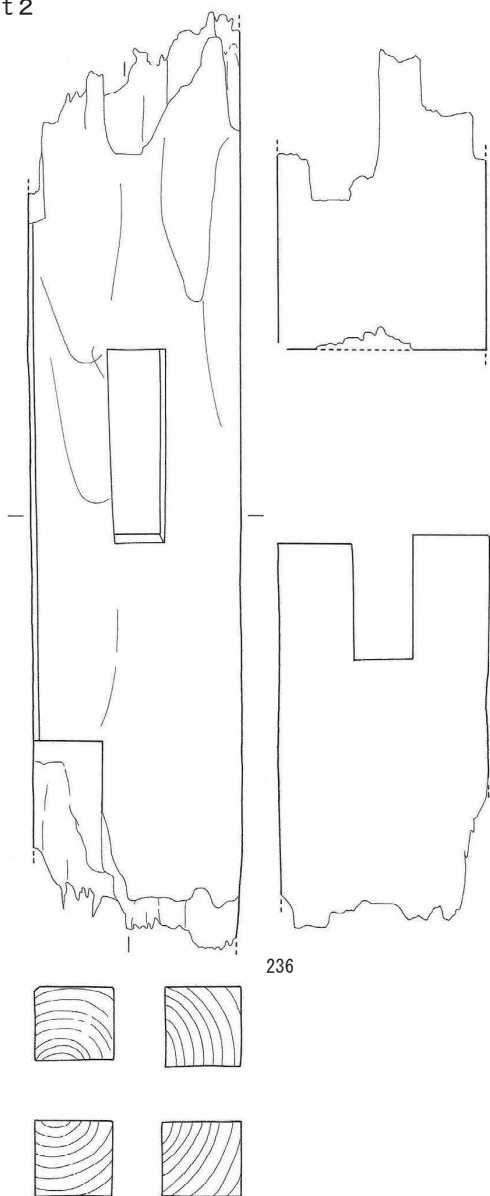
第177図 第8次調査SZ831出土遺物④ (1:4)



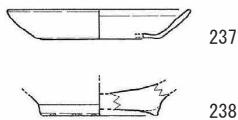
第178図 第8次調査SZ831出土遺物⑤ (1:4)



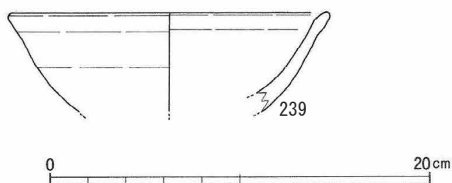
Pit 2



Pit 3



Pit 4



第179図 第8次調査2区小穴出土遺物 (1:4)

(16) 2区包含層出土遺物 (第180・181図)

**土師器** 図示できたものは土師器の皿のみである。241は高温で焼成されており、近世に属する。240・242は比較的器壁が厚く中世に遡る。

**山茶椀** 図示できたものは243のみである。体部に丸味を残し、高い高台を貼り付ける。

**陶器** 244～247・252～255は椀である。249は小型の椀で小杯とした。248は図示できた唯一の皿で、口縁部を欠損しているが、菊皿と思われる。244は鉄釉に白泥の化粧掛けを行い、246は腰鏝茶椀である。252・253は京都・信楽系で、252は山水、253は針葉樹の葉を描く。245・255も蔓草や梅花を描く陶胎染付である。

251は筒形椀に類似した器形であるが、鉄釉を施し文様帯を巡らすこともあり、鉢とした。鉢は他に261・266・269がある。261は図示していないが、片口が付くと思われる。266は蛤状の重焼痕を5ヶ所に残す。蛇ノ目凹形高台の高台部を故意に削り取り、偏平な底部に近づけている。269はやや瓦質に焼成されており、内面には炭化物が付着する。

256・257は鍋とした。256は器高に対し口径が小さいが、灰釉を施し行平鍋と思われる。257も同様なものと思われるが、灰釉よりも透明釉にちかく、鉢とすべきかも知れない。

250は脚がないが、底部中央の構造から乗燭であろう。258・259は蓋で、259には鉄絵が施される。260は播鉢、262は壺の口縁部片であるが口縁部内面に「汜」とも思われる文字が線刻される。

263～265・267・268は甕であるが、263は口縁部に棒状工具で押圧したような刻目を設けている。

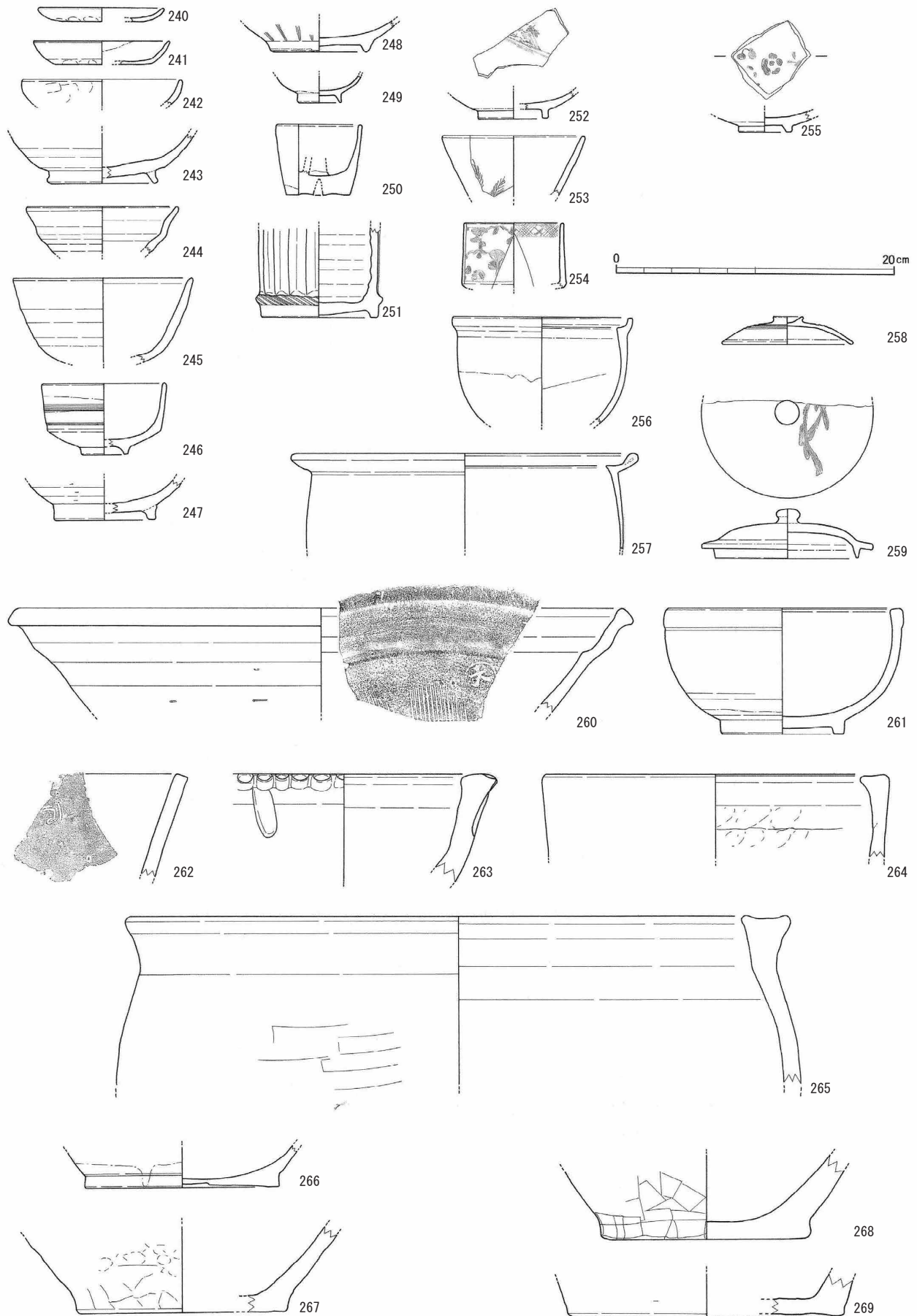
**磁器** 270～272は染付の皿であるが、272は近代に下る。

273～281は椀で、279を除き染付で、279には鉄釉が施される。273・276は筒形椀、278は端反椀、280・281は広東椀と称されるものである。草花や草木を描くものが多いが、273は楼閣または東屋、276は変形文字、278は草花に加えて文字、277は宝を描く。産地は、肥前系と瀬戸・美濃系が混在する。

282は蓋、283は猪口、284は仏飯具で、全て染付である。草木を描くが、283は蛸唐草である。

**木製品** 285は栓、286は和傘の轆轤、287は底板、2





第180図 第8次調査2区包含層出土遺物① (1:4)

88・289は下駄である。材質は286がエゴノキ属の他はスギである。下駄は288が右近下駄、289が連齒下駄で、288は全体に熱を受けている。

(17) 2区造成土出土遺物 (第182~185図)

**土師器** 図示できたものは土師器の鍋 (290) のみである。内外面に煤が付着する。

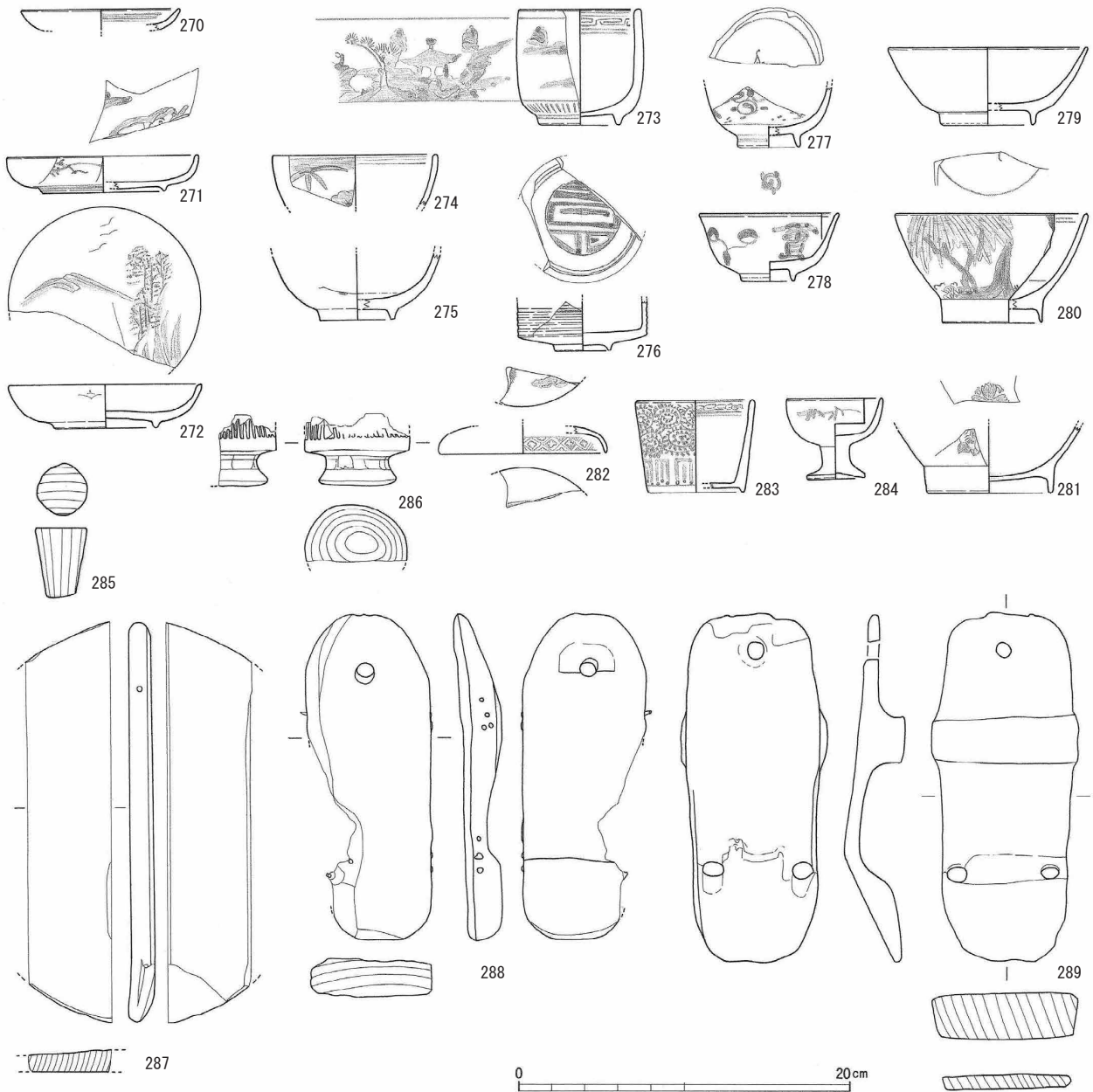
**陶器** 291~294・319は皿である。319は馬目皿、291・292は菊皿で、291には針葉樹の葉が描かれる。293・294も陶胎染付で梅花を描くが、293は発色不良である。

295・298・301・302は椀で、灰釉または鉄釉を施

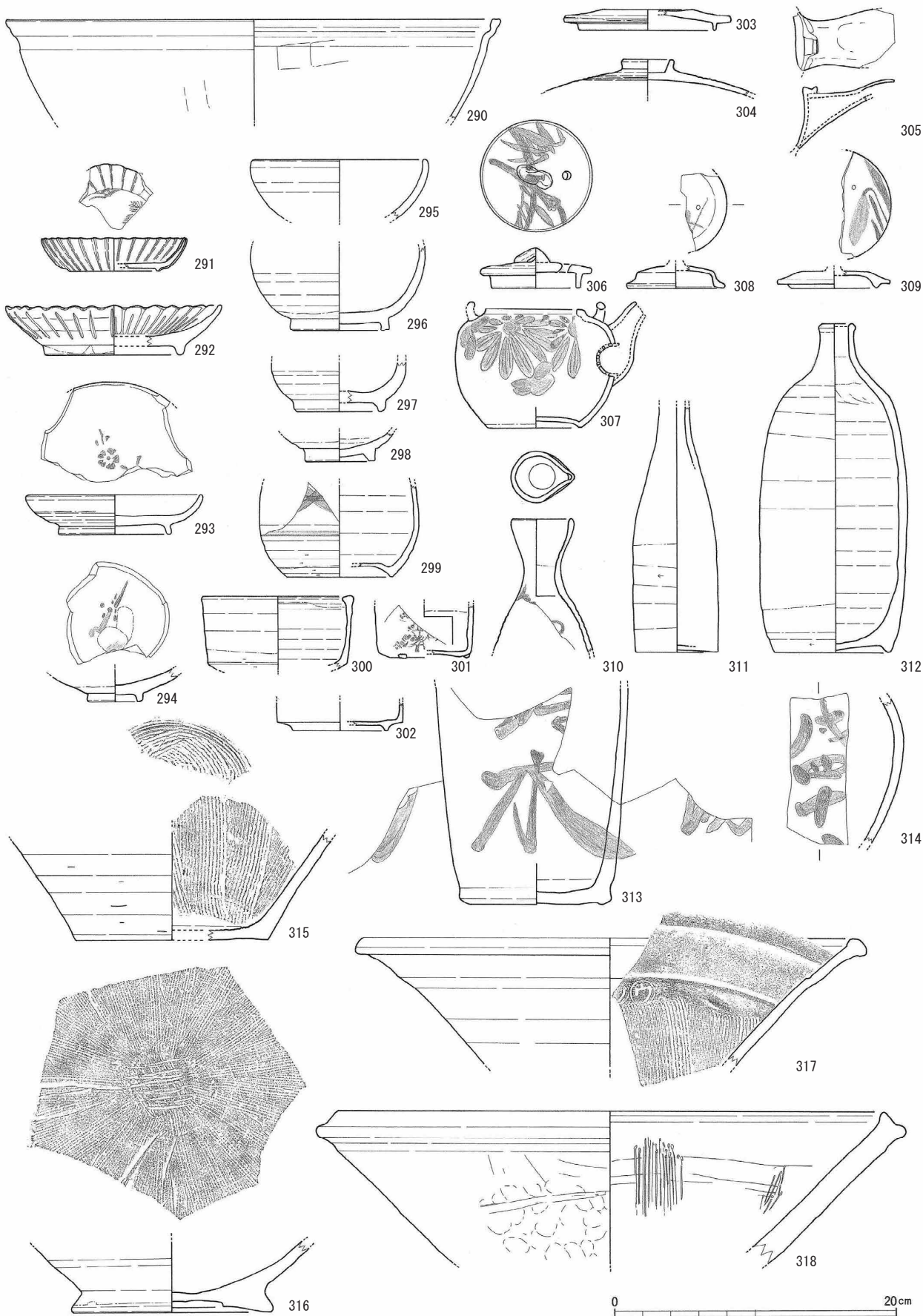
すが、295は沸騰気味である。298の鉄釉は化粧掛け、301は鉄絵で松を描く。301・302は小型の筒形椀状の形態であるが、301は豆状の脚を貼り付けており、鉢とすべきかも知れない。

296は椀形態であるが、大型で器壁も厚いため鉢とした。鉄釉を施す。321~328も鉢である。灰釉または鉄釉を施すが、325・326には蛤状の重焼痕が残る。また、326の外面には「小豆」と墨書される。323の灰釉は濃淡があり化粧掛けの様相を示す。

329・330は水甕である。文様を印刻し、灰釉に濃淡を示し、329は鉄釉を化粧掛けする。



第181図 第8次調査2区包含層出土遺物② (1:4)



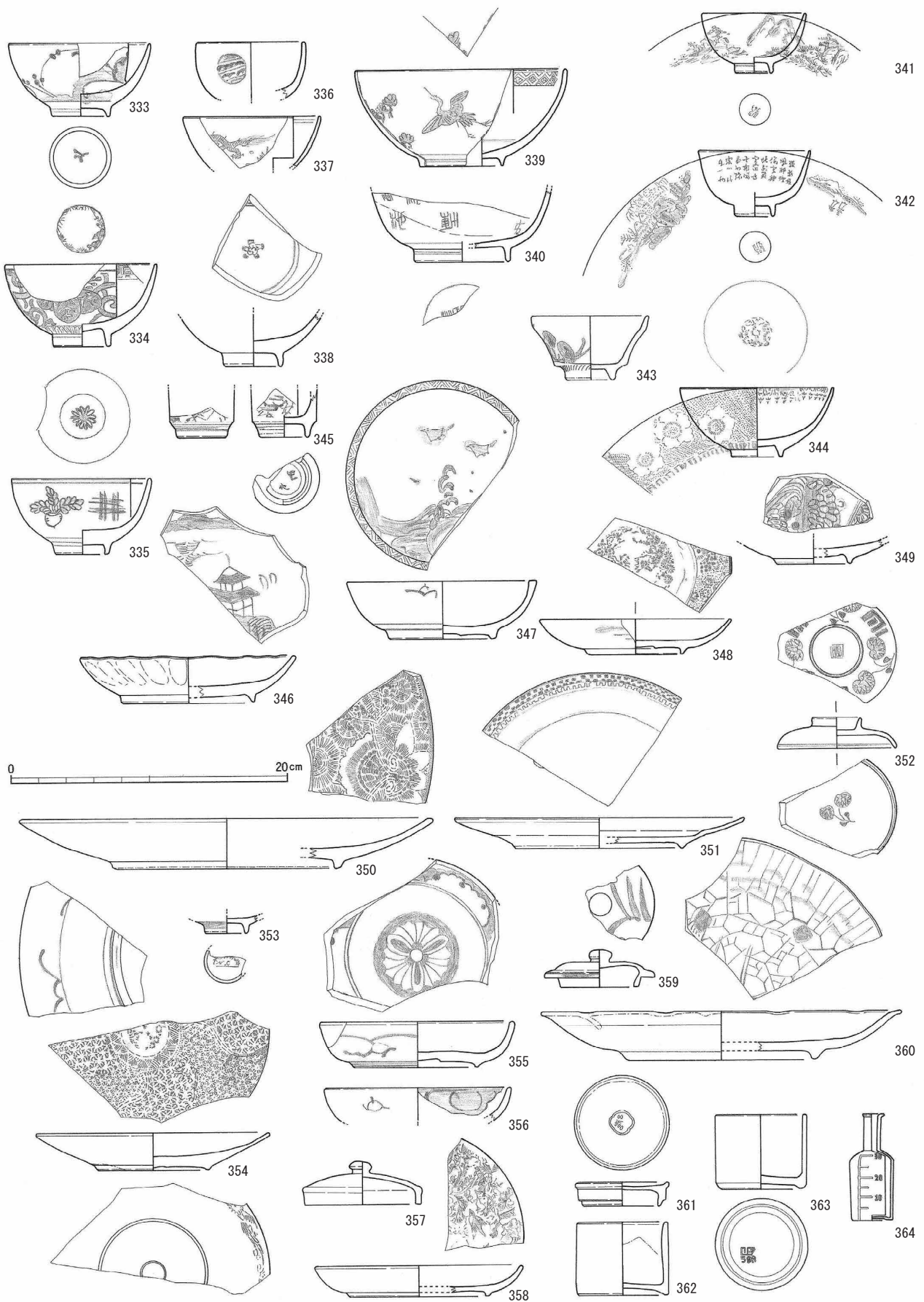
第182図 第8次調査2区造成土出土遺物① (1:4)



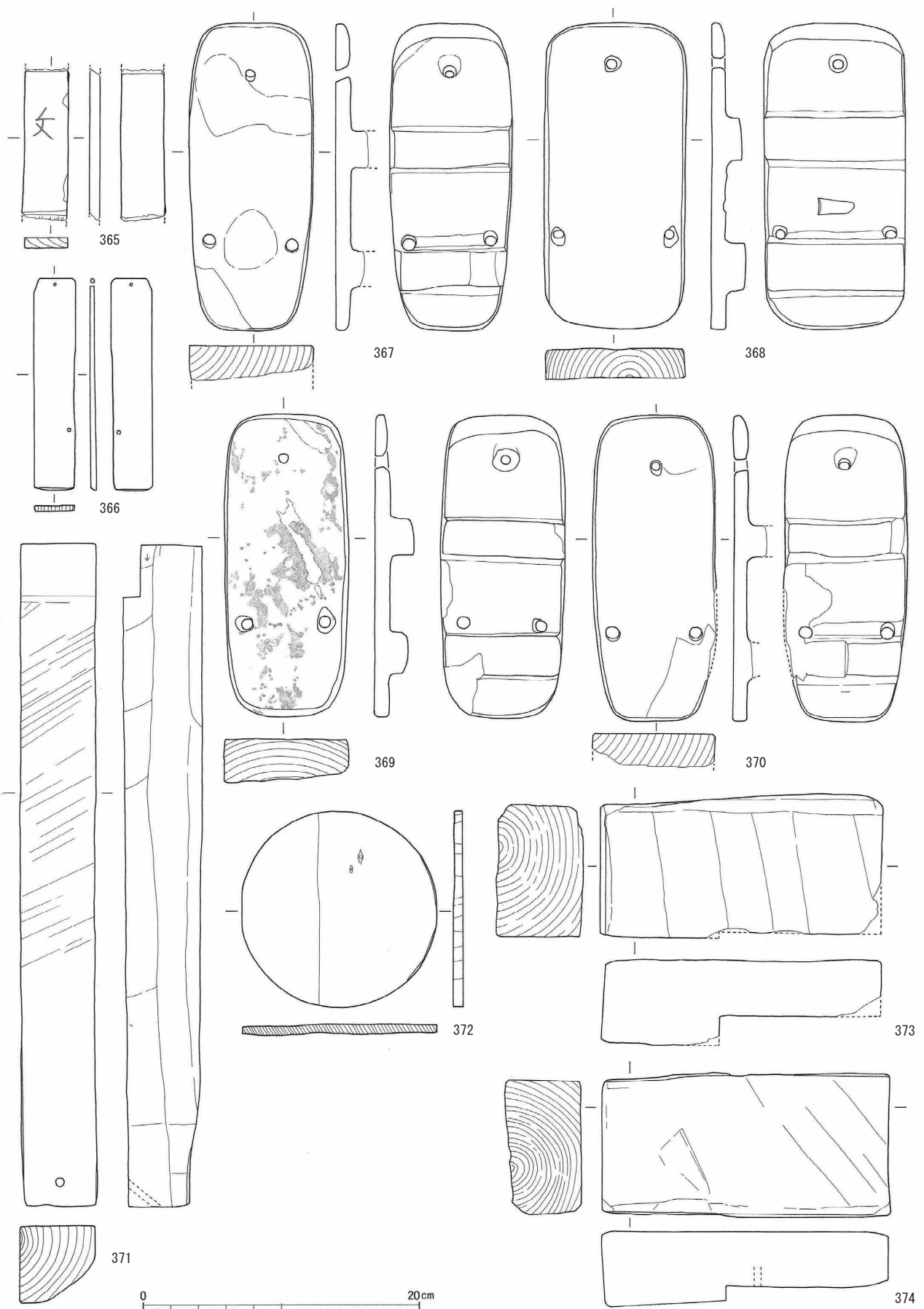


第183図 第8次調査2区造成土出土遺物② (1:4)





第184図 第8次調査2区造成土出土遺物③ (1:4)



第185図 第8次調査2区造成土出土遺物④ (1:4)

303・304・306・308・309は蓋で、308・309は色  
 絵で草花文を描く。凶化していないが、303にも摘  
 みが付くものと思われる。

310～314は徳利で、313・314は通徳利、297は壺の  
 底部、299・307は土瓶、300は火入である。土瓶は  
 両者とも絵柄を配し、307は色絵で草花文、299は呉  
 須釉と鉄釉で幾何学文を描いている。近世より下る  
 かもしれない。305は把手であるが、行平鍋のもの  
 と思われる。

315～317・318は播鉢、331・332は甕である。317  
 にはカタカナの刻印が複数刻まれる。

**瓦質土器** 図示できたものは320の鍋のみであるが、  
 口縁部の小片である。

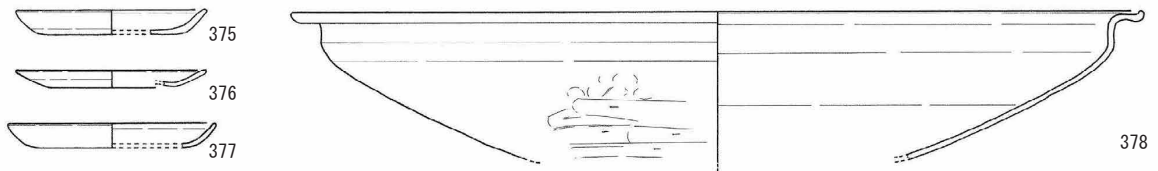
**磁器** 333～344・353は染付碗であるが、341～345・

353は近代に下る。338は染付青磁で、それ以外のもの  
 に蔓草や草花を描くものは少なく、335はカブと  
 井桁、336は丸文、337は龍、339は鶴、340は文字を  
 配置し、340は接合補修を行っている。

346～351、354～356・358・360は皿であるが、347・  
 348・350・351・358は近代に下る。346は輪花皿で  
 楼閣を描く。360も輪花皿であるが、輪花は間隔が  
 広く弱いものである。内面全面に氷割状の幾何学文  
 を施す。354・355は蛇ノ目凹形高台で、354は花詰  
 め、355は花と雲気を描く。

352・357・359・361は蓋であるが、361は近現代  
 に下るもので、363の蓋になるものである。357は透  
 明釉が施されるが、絵柄はない。359は陶胎染付の  
 可能性もあるが、磁器とした。

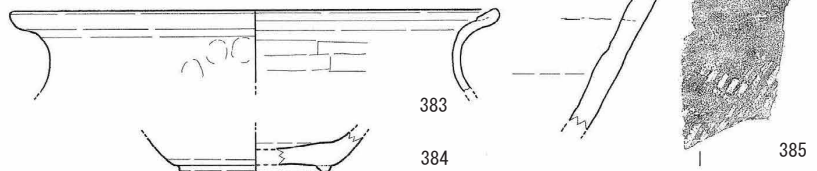
SK813



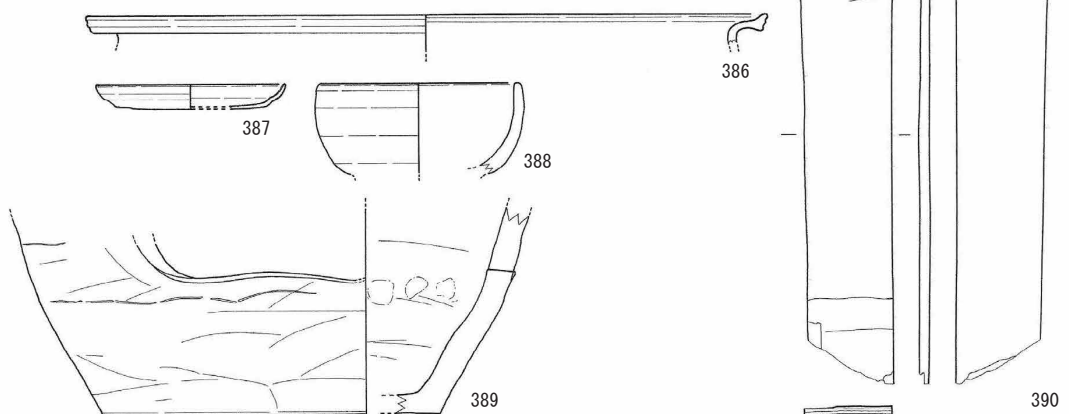
SD820



SK815



SK818



第186図 第8次調査3区遺構出土遺物 (1:4)

345は猪口、362は鉢であるが、345は近代に下り、362もその可能性が高い。

**硝子** 364は薬瓶と思われ、近代以降に下るものである。

**木製品** 365・366は木札、367～370は下駄、372は曲物の底板、371・373・374は用途不明の角材である。371の端に釘穴があるが、斜方向に空いている。釘穴は366にもあり、365には「文」と刻書される。下駄は全て連歯下駄であるが、材質はサワラとスギが混在する。368には鼻緒が残存し、369には漆彩色が残る。

(18) S K 813出土遺物 (第186図)

土師器の皿 (375～377)、焙烙 (378)、陶器の甕 (379) がある。土師器皿はいずれも小片で、詳細は不明である。378の外面上には煤が付着し、379の外面上には1条の沈線が刻まれる。ヘラ状工具で下から上に掻き上げているが、記号とするほどのものではない。

い。

(19) S K 825出土遺物 (第186図)

380は陶器、381は磁器である。両者とも椀で、380は陶胎染付、381も染付の広東椀である。両者とも底部片のため絵柄は不明である。

(20) S D 820出土遺物 (第186図)

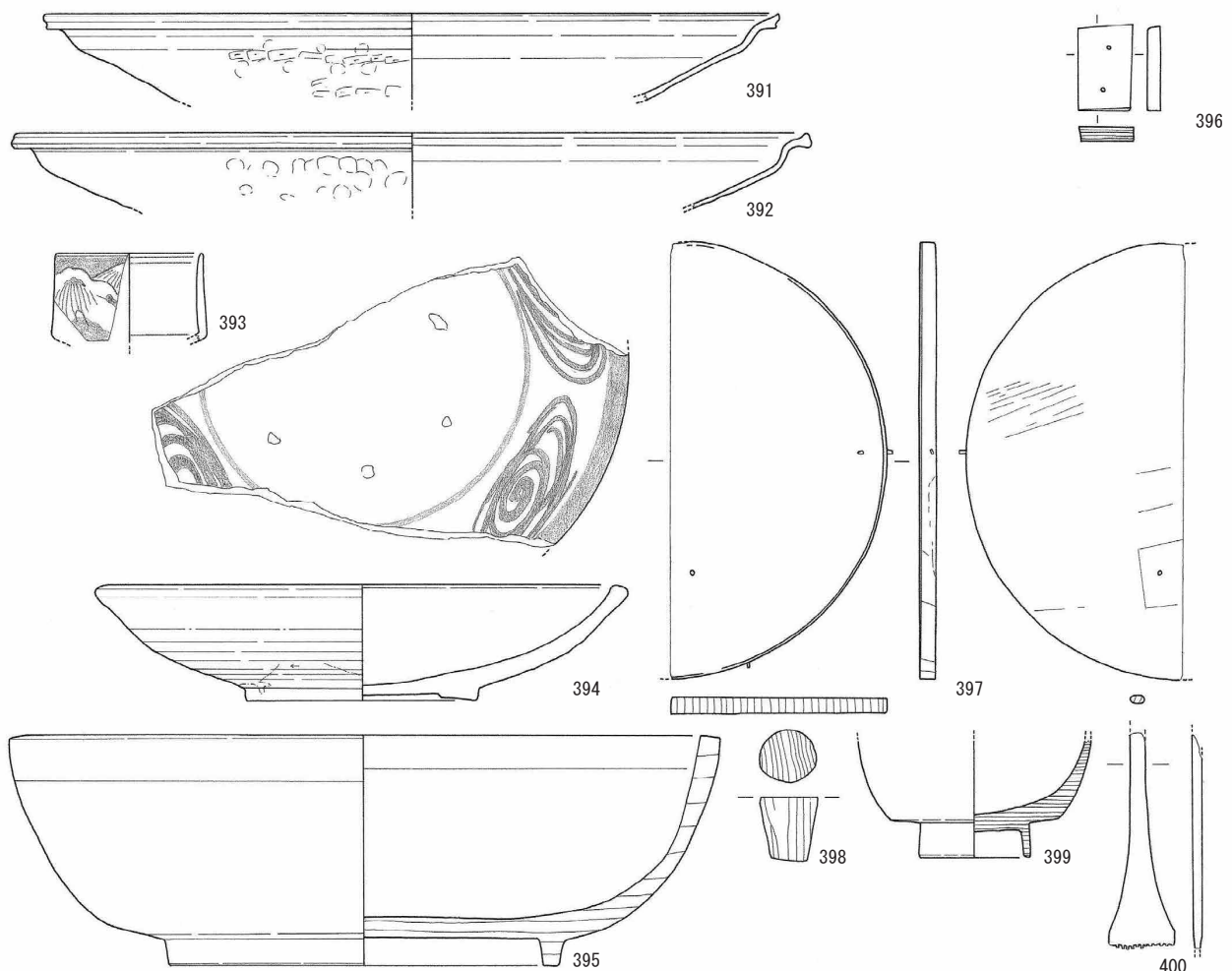
図示できたものは山茶椀 (382) のみである。高台は比較的整った形状を呈するが、高さを減じている。

(21) S K 815出土遺物 (第186図)

383は土師器の鍋、384は山茶椀、385は陶器の甕である。383は口縁端部を折り返し、その上面を強くヨコナデする中世に特徴的な形状を示す。384の高台も低いものである。

(22) S K 818出土遺物 (第186図)

土師器の皿 (387)、焙烙 (386)、陶器の椀 (388)、風炉 (389)、スギの板材 (390) がある。焙烙と風炉には煤が付着し、風炉には雲形の火口を設けてい



第187図 第8次調査SD827出土遺物 (1:4)



る。

### (23) S D 827出土遺物 (第187図)

391・392は土師器の焙烙で、両者とも煤が付着し使用の痕跡を止める。394は陶器の大型の皿で馬目皿と称されるものである。393は磁器の染付碗で草木を描く。

395～400は木製品である。395・399は漆器で、395は大型の皿である。材質は両者で異なり、395はクリ、399はトチノキである。397は曲物の底板、398は栓、400は櫛払いであるが、396は用途不明の板材である。板の小片で2ヶ所に釘穴が残る。

### (24) 3区包含層等出土遺物 (第188～190図)

**土師器** 401は茶釜、402～406は皿である。406は底部の小片であるが、墨書がある。確認できる範囲では内面に「獺」、外面には人物を描いている。

**土製品** 407は小片のため詳細は不明であるが、人形の体部片と思われる。

**陶器** 409～428は碗皿類である。408・409・421は陶胎染付で、409は梅花文、408も梅花状の絵柄を描く。421は長方形の皿で松枝を描いている。410・411は灯明受皿で鉄釉が施される。415は菊皿、420は端反碗で両者とも灰釉を施すが、420は白泥による梅花文を外面に配置する。この白泥は内面全面にも及んでいる。413は鉄釉を施す皿であるが、口縁端部に一對の耳状の把手を付ける特異な形態である。把手は、偏平にした粘土塊を無造作に貼り付けたものである。414は口鏝、416は灰釉に鉄釉を化粧掛けし、417・423は灰釉を施すが、氷割文を呈する。

431～434は蓋で、432・433は落蓋型式、430には輪状の摘みが付き、434も欠損しているものの同様と思われる。434には紋章状の絵柄がある。

429・430・437・441は鉢である。429は鉄釉を施し、430は口縁部ちかくが内に屈曲する。対応する蓋があるものと想定される。底部外面にカタカナを墨書する。441の底部外面にも墨書があり、「里」であるか。437は無釉で、内面に波状の工具痕が残るが、意図するところは不明である。

435・436は土瓶、442は徳利、438～440は播鉢、443～445は甕である。436には墨書があるが、「刈」または「八二」とも読め、判然としない。443の甕は直立の口縁部であるが、これを下端とする井戸枠

の可能性もある。口径が小さいため、ここでは甕として扱う。444は無釉で甕としたが、波状文で装飾している。

**瓦** 446は軒棧瓦、447・448は丸瓦の小片である。446の瓦当は無文で、不整六角形を呈する。

**磁器** 449は合子の蓋、450は仏飯具で、両者とも染付であるが、欠損のため描かれているものは不明である。

451～470は碗皿類で、その多くは肥前系である。455・466は透明釉が施され、466には朱の裏銘がある。それ以外は全て染付である。458は端反碗、462は広東碗、465は筒形碗、469は小杯または猪口で、467は波状口縁を呈する。また、454は蛇ノ目釉剥ぎ、464は蛇ノ目凹形高台を呈する。絵柄は蔓草や草花を描くものが多いが、457は亀甲、459は唐子、462は青海波、467は幾何学、469は山水楼閣である。見込みには463が「寿」、465は梅花、451・468は五弁花文を施すが、451はコンニャク印判による。

**木製品** 471～474があるが、472が杭と思われる他は、用途不明の部材である。473は角材であるが、釘穴が4ヶ所縦列に並ぶ。

**金属製品** 475～477は釘、478は鍬先で、内側に木質が残存する。

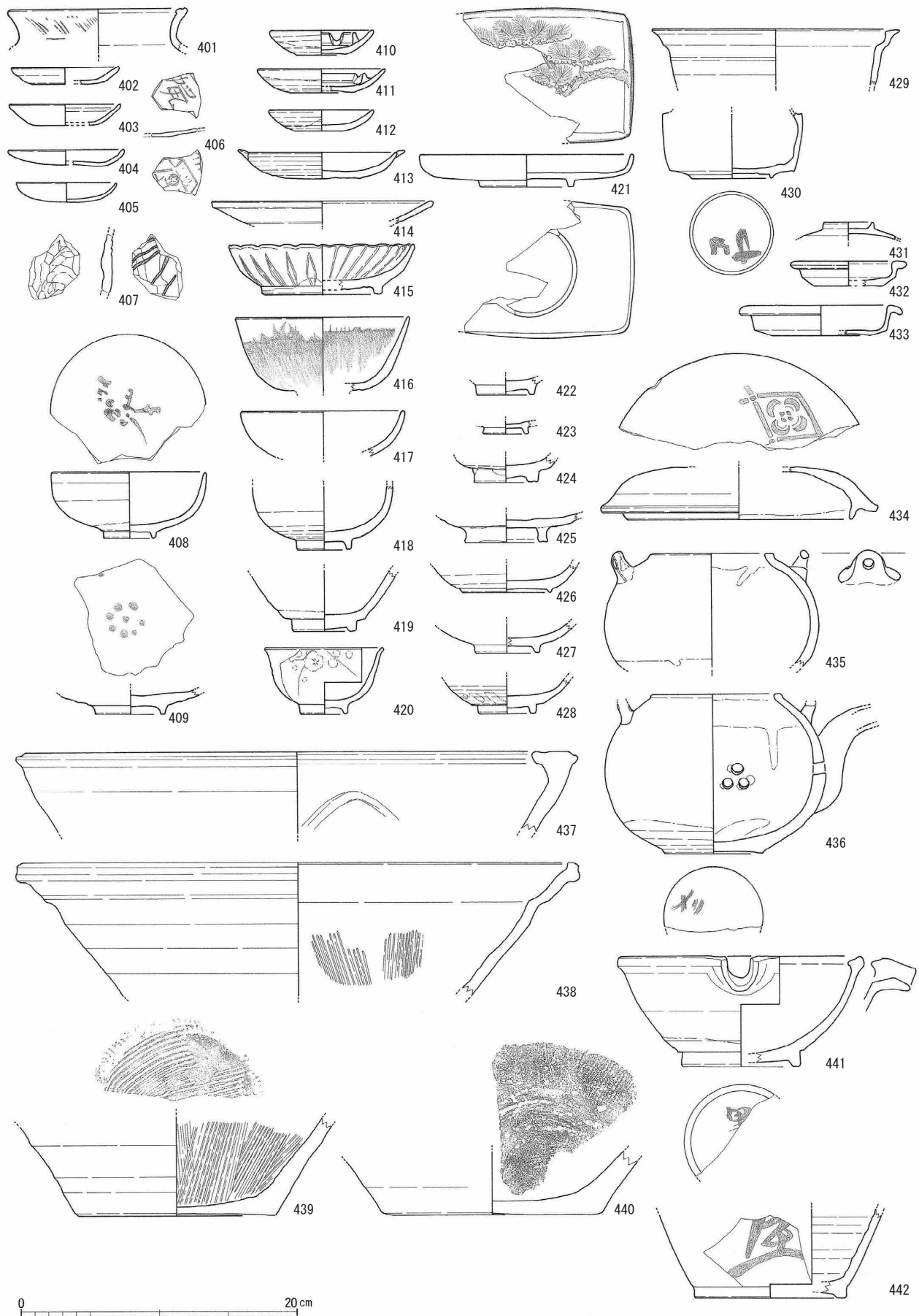
### (25) 3区造成土等出土遺物 (第191～195図)

**土師器** 479は蓋、480・481は焙烙、482は小型の壺である。479は五角形を呈する特異な形態で、中央に宝珠形の摘みが付く。焙烙は両者とも内面に煤または炭化物の付着がある。482は粗製で塩壺と思われる。

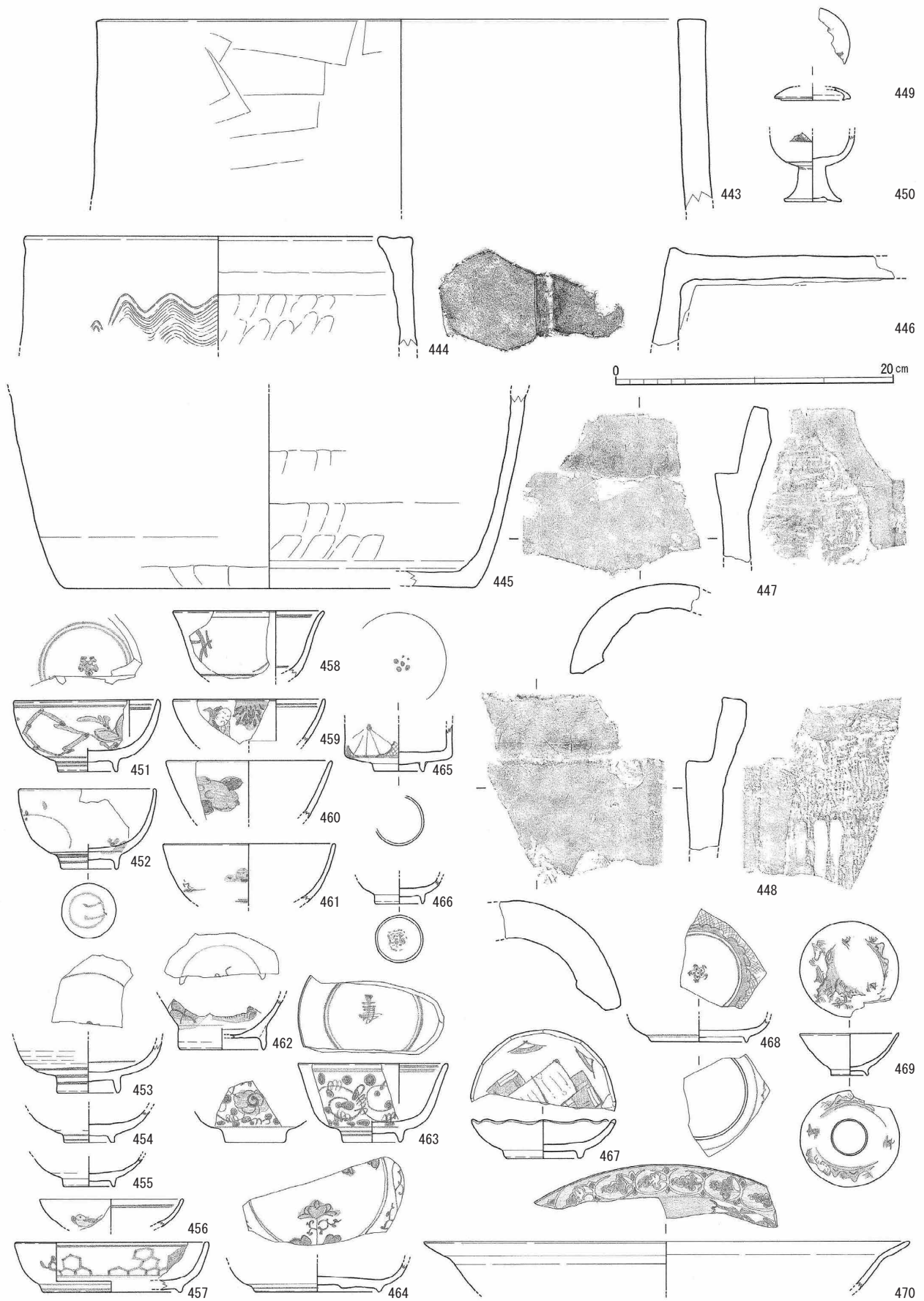
**陶器** 483は無釉の甕、488は鉄釉を化粧掛けする甕である。484～487は播鉢で、484には「大」の刻印がある。485は泥漿の溜りや垂がみられる。489は水甕で、文様を印刻し灰釉を施す。

490～492は皿で灰釉を施す。しかし、490には油煙が付着し、灯明皿として利用されたようである。494・495・496は碗で、494は陶胎染付、他は鉄釉を施す。493は円形の火口を空ける香炉で、高台が欠損している。498も香炉であるが、火口は雲形で、豆粒状の脚を3方に付ける。

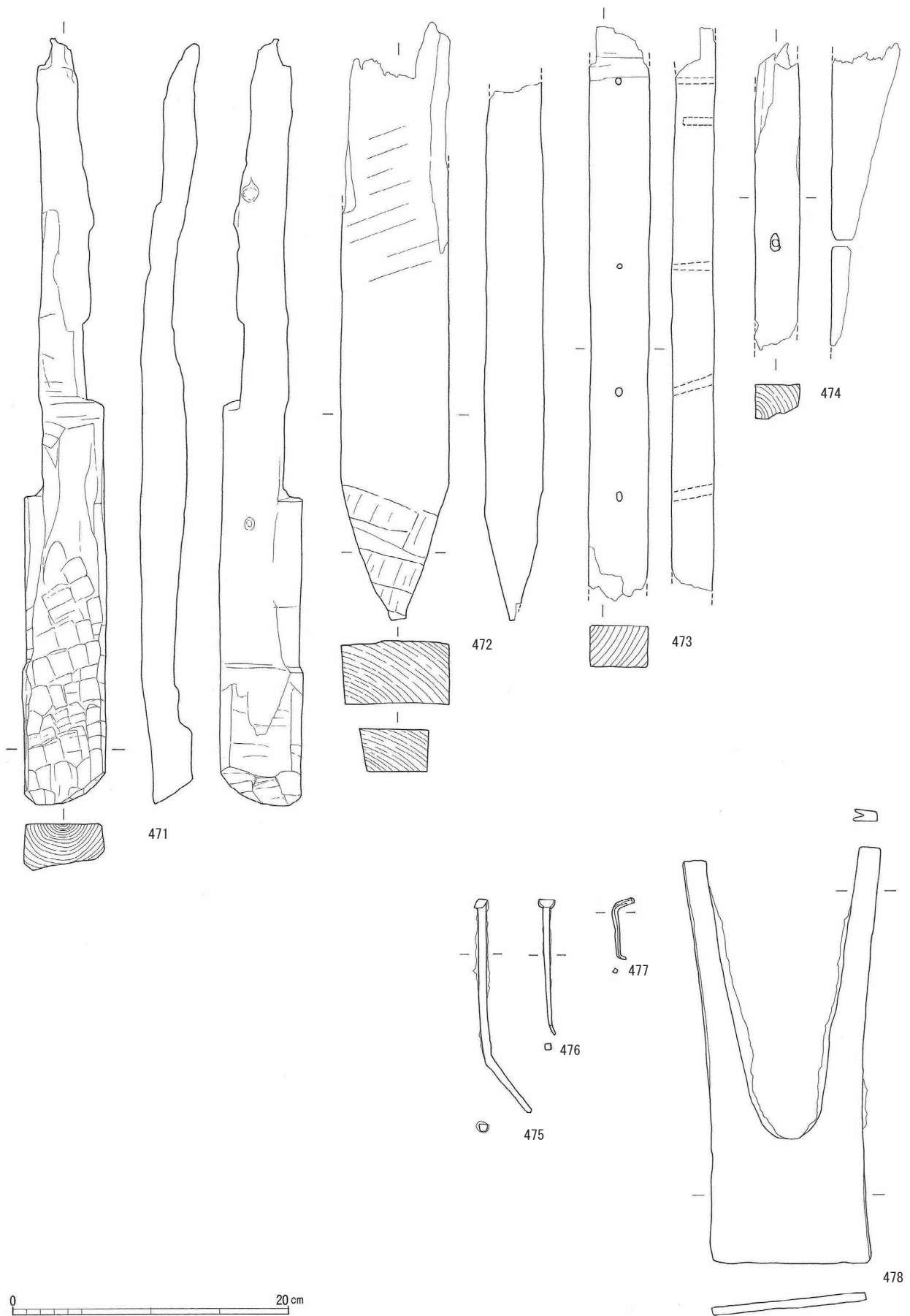
501～503は鍋の蓋で、灰釉が施されるが、502はやや沸騰気味で発色が悪い。512～516・522・523は



第188図 第8次調査3区包含層等出土遺物① (1:4)

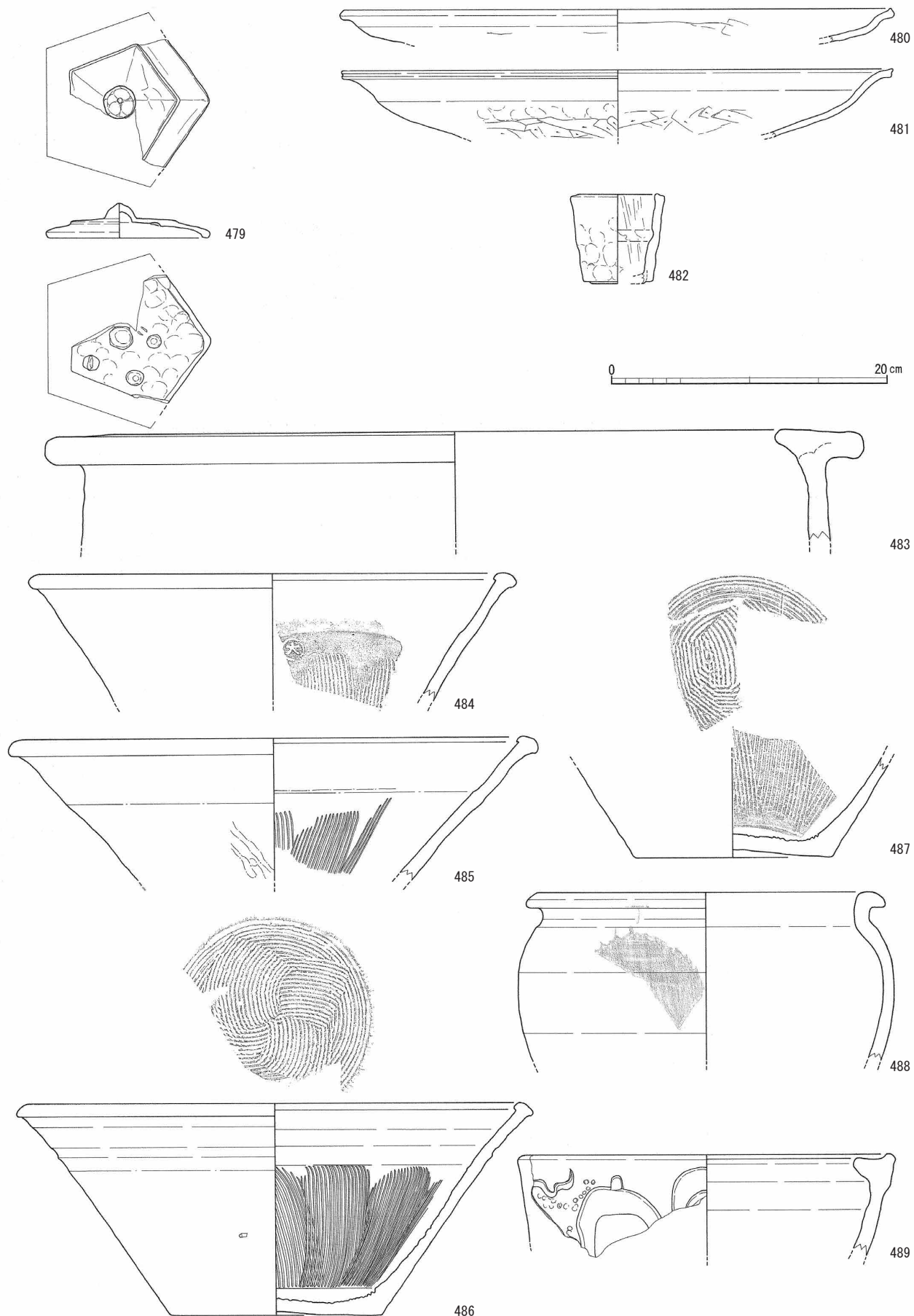


第189図 第8次調査3区包含層等出土遺物② (1:4)

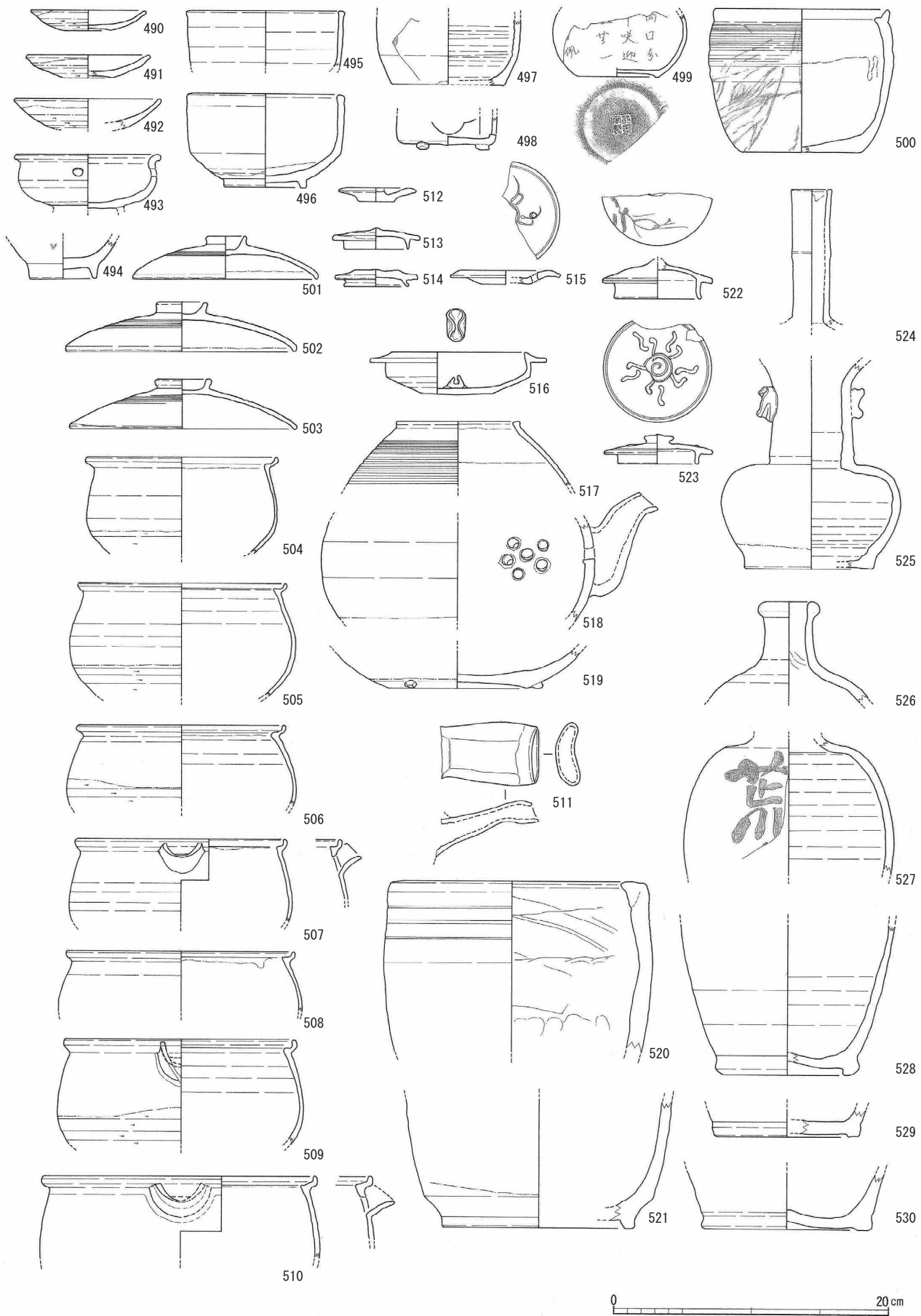


第190図 第8次調査3区包含層等出土遺物③ (1:4)

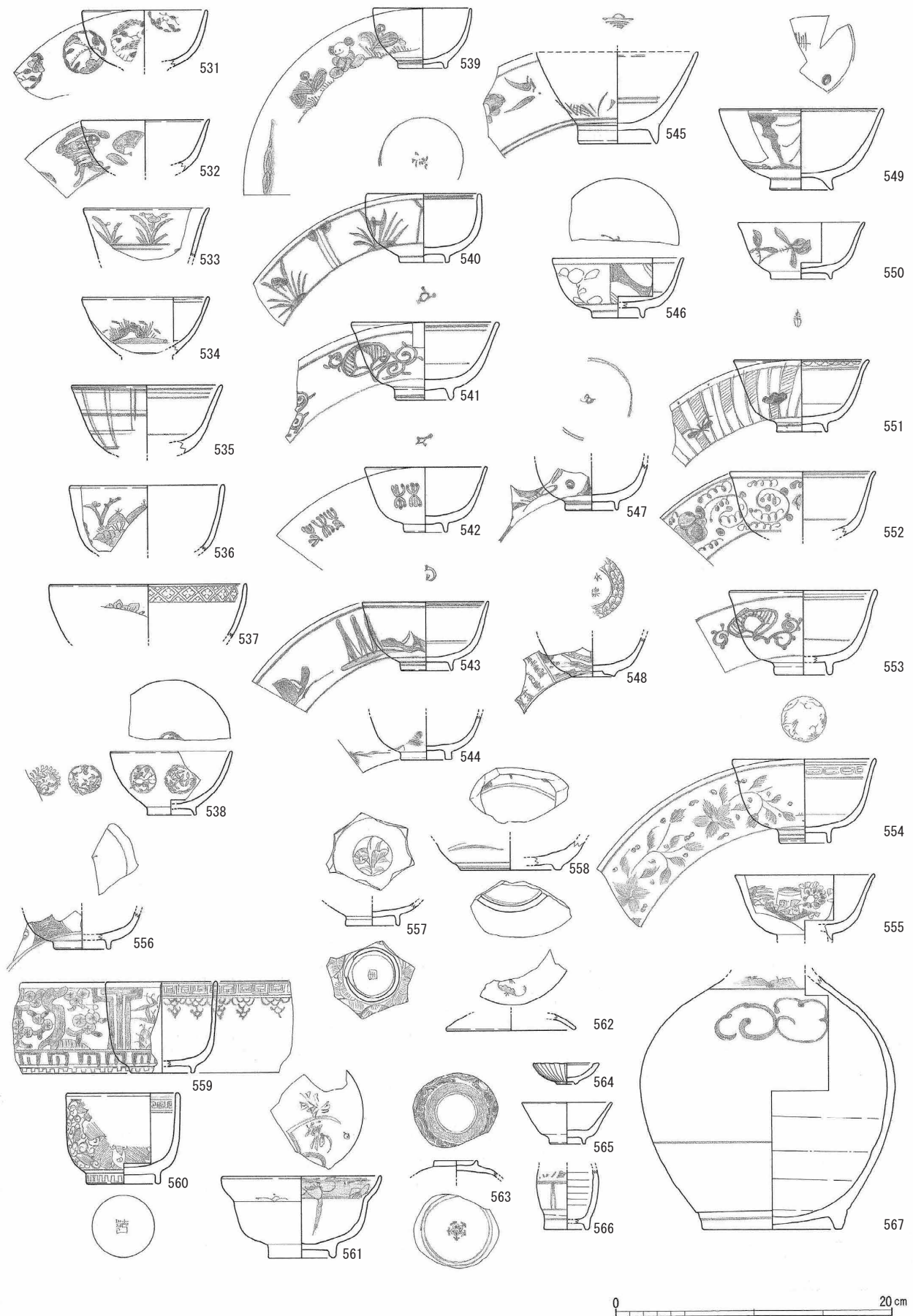




第191図 第8次調査3区造成土等出土遺物① (1:4)

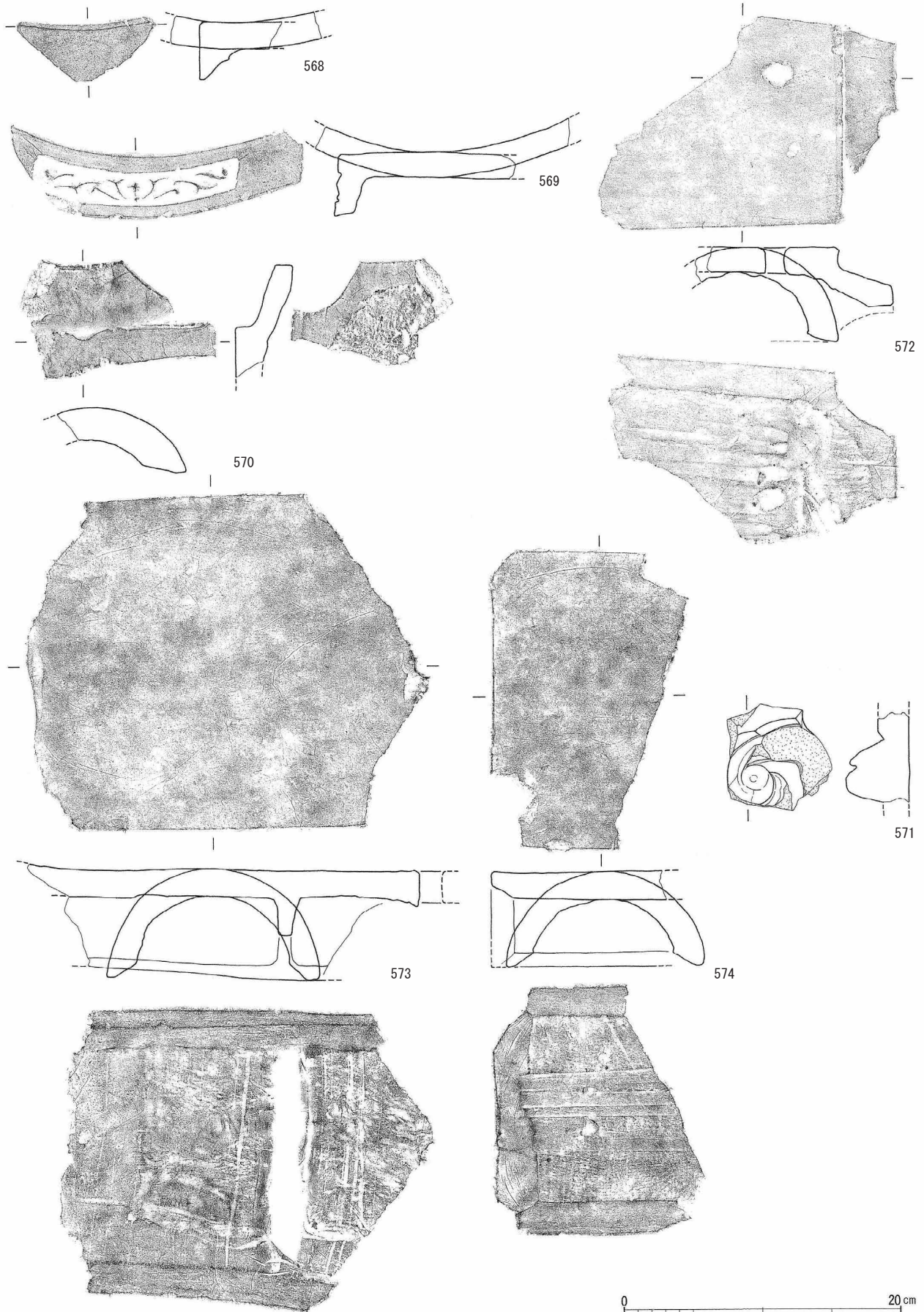


第192図 第8次調査3区造成土等出土遺物② (1:4)



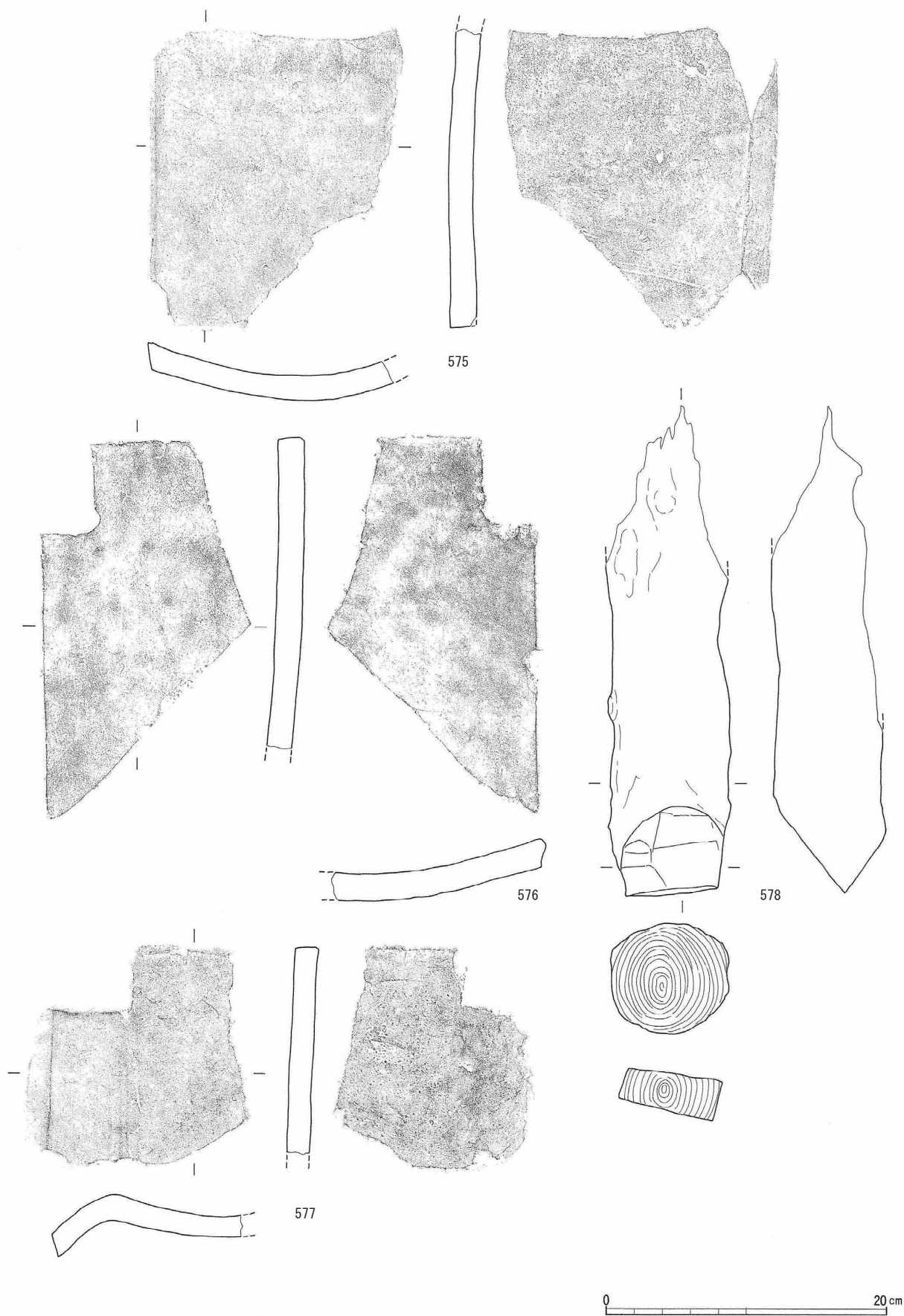
第193图 第8次調査3区造成土等出土遺物③ (1:4)



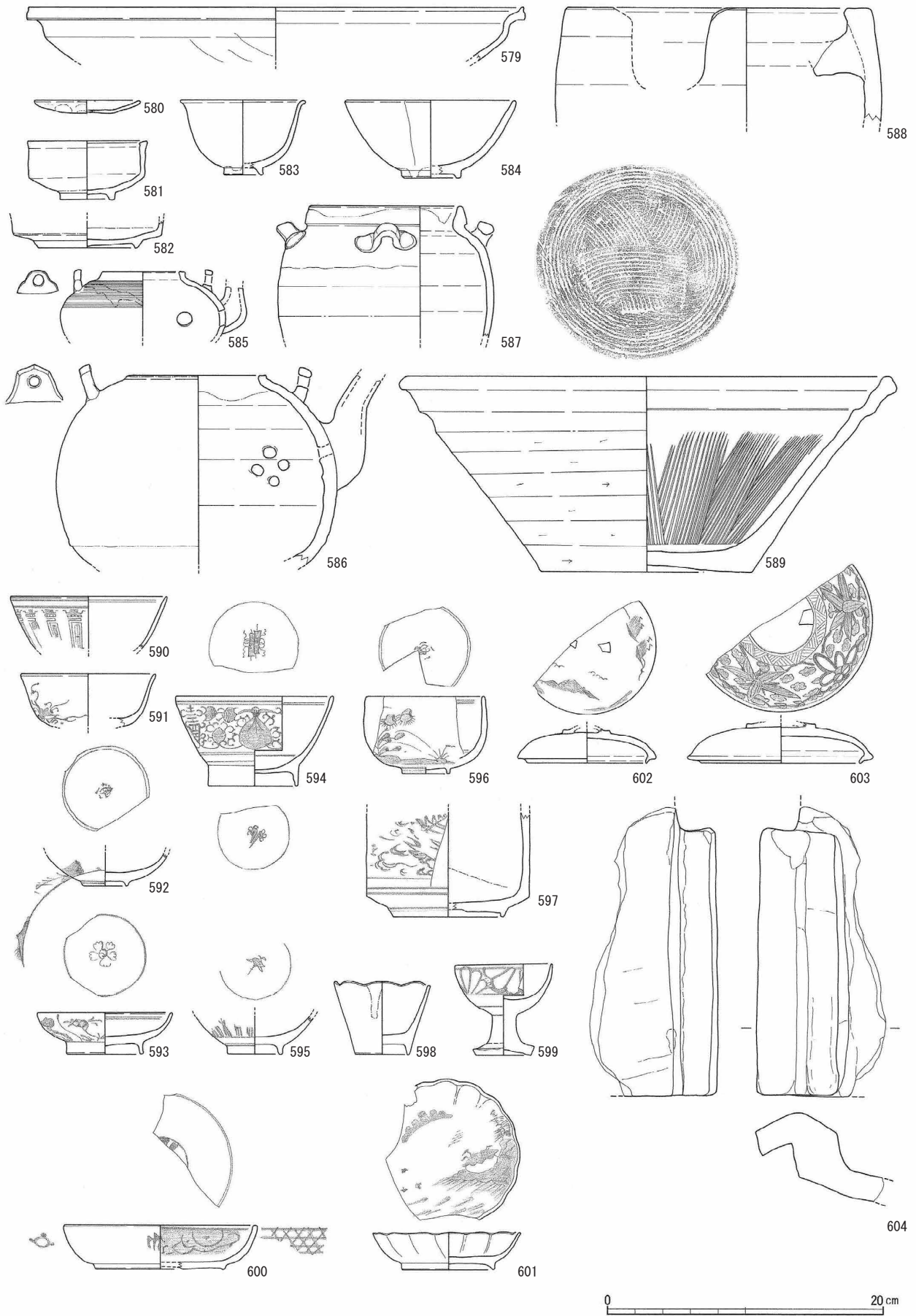


第194図 第8次調査3区造成土等出土遺物④ (1:4)



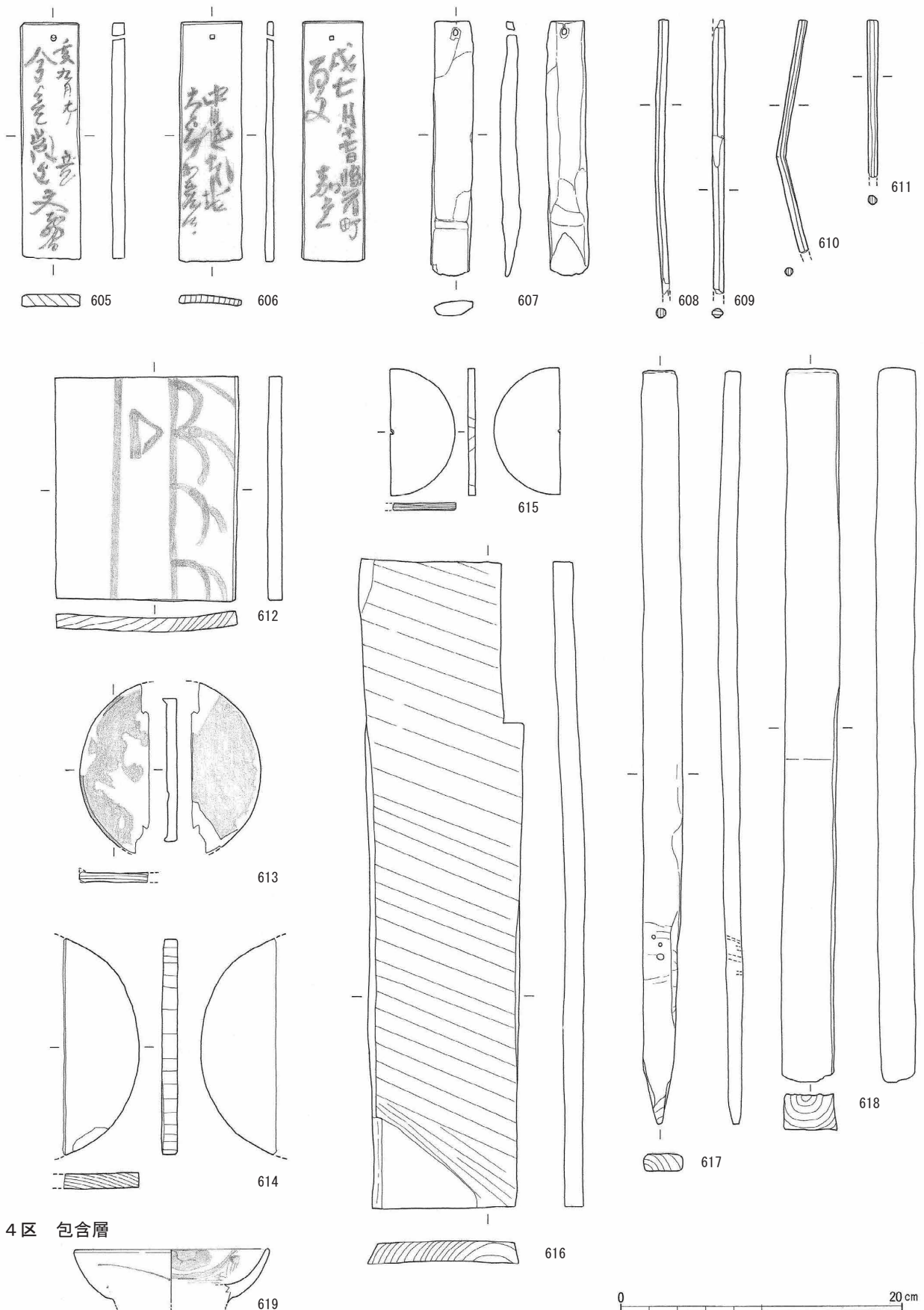


第195図 第8次調査3区造成土等出土遺物⑤ (1:4)



第196図 第8次調査SZ828出土遺物 (1:4)

SZ828



第197図 第8次調査SZ828、4区包含層出土遺物 (1:4)



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
1	131-01	磁器 (肥前)	椀	1区	-	SK801	口縁部1/12	10.6	-	-	灰白N8/	染付。蔓草文。
2	133-05	磁器 (肥前)	椀	1区	-	SK801	底部3/12	-	高台 4.2	-	灰白N8/	染付。草花文。
3	130-04	磁器	皿	1区	-	SK801	底部5/12	9.8	高台 4.0	2.6	灰白N8/	蓋の可能性あり。補修痕。
4	128-01	瓦	丸瓦	1区	-	SK801	1/12以下	-	-	4.2	灰N4/	
5	020-03	木製品 (アスナロ属)	板材	1区	-	SK801	完存	幅 6.6	厚 1.1	長 37.0	-	
6	025-04	木製品 (マツ属)	角材	1区	-	SK801	完形	一边 7.3	-	長 17.7	-	樹皮残存。一部腐食。
7	141-06	土師器	皿	1区	-	SE掘形	口縁部1/12	7.8	-	1.4	にぶい橙 7.5YR7/4	
8	140-03	陶器	天目茶椀	1区	-	SE掘形	口縁部1/12	11.6	-	-	灰白2.5Y7/1	鉄釉化粧掛け。
9	122-03	土師器	皿	1区	-	SK803	口縁部4/12	7.0	-	1.1	橙7.5YR6/6	
10	121-06	土師器	皿	1区	-	SK803	口縁部3/12	8.9	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	
11	121-05	土師器	皿	1区	-	SK803	完形	9.8	-	1.8	にぶい橙 7.5YR6/4	底部穿孔。
12	121-04	土師器	皿	1区	-	SK803	口縁部2/12	11.0	-	-	明黄褐 10YR6/6	
13	122-01	土師器	皿	1区	-	SK803	口縁部2/12	9.8	-	1.9	にぶい橙 7.5YR5/4	口縁部下端ヘラケズリ。
14	122-02	土師器	皿	1区	-	SK803	口縁部3/12	10.3	-	1.1	橙 7.5YR6/6	
15	121-03	土師器	茶釜	1区	-	SK803	口縁部4/12	9.8	-	-	にぶい橙 10YR6/4	外面煤付着。
16	121-02	土師器	焙炉	1区	-	SK803	口縁部1/12	35.8	-	-	灰黄褐 10YR5/2	内外面煤付着。
17	121-01	土師器	焙炉	1区	-	SK803	口縁部1/12	37.4	-	-	灰黄褐 10YR6/2	外面煤付着。
18	122-07	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	1区	-	SK803	口縁部3/12	9.2	-	-	灰白5Y8/1	鉄釉。
19	122-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	1区	-	SK803	底部完存	9.2	高台 4.0	5.8	灰白7.5Y8/1	鉄釉。
20	123-05	陶器 (京都・信楽)	椀	1区	-	SK803	底部完存	12.5	高台 4.9	4.7	灰白2.5Y8/2	灰釉。山水文。
21	123-01	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	1区	-	SK803	口縁部1/12	10.3	-	-	灰白5Y7/1	鉄釉。
22	123-02	陶器	椀	1区	-	SK803	底部完存	-	高台 4.8	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。発色不良。内外水割文。
23	122-06	陶器	椀	1区	-	SK803	底部完存	-	高台 3.6	-	灰白2.5Y8/1	鉄釉。
24	122-08	陶器	椀	1区	-	SK803	底部完存	-	高台 4.7	-	灰白2.5Y8/1	灰釉。内面黒斑状。
25	144-01	陶器 (常滑)	捏鉢	1区	-	SK803	口縁部4/12	26.0	18.6	6.8	灰黄2.5Y6/2	
26	143-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区	-	SK803	底部4/12	35.0	15.0	14.5	灰白2.5Y8/2	播目13本/5.2cm。
27	139-01	陶器 (信楽)	播鉢	1区	-	SK803	口縁部1/12	37.2	-	-	灰白2.5Y8/1	播目8本/1.6cm。
28	139-02	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区	-	SK803	底部5/12	33.8	12.8	15.0	灰白2.5Y8/2	播目13本/4.1cm
29	140-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	1区	-	SK803	口縁部1/12	32.8	-	-	淡黄2.5Y8/3	播目16本/4.3cm。
30	140-02	陶器 (常滑)	壺	1区	-	SK803	口縁部1/12	21.4	-	-	橙7.5YR7/6	広口壺。口縁部に煤付着。
31	138-01	陶器 (常滑)	甕	1区	-	SK803	口縁部1/12	68.2	-	-	にぶい赤褐 5YR5/3	
32	123-03	磁器 (肥前)	皿	1区	-	SK803	口縁部3/12	13.4	-	-	灰白N8/	染付。外：蔓草文、内：草花文。
33	123-04	磁器 (肥前)	猪口	1区	-	SK803	口縁部1/12	6.8	-	-	白N9/	そば猪口。染付。花文。
34	008-03	木製品 (スギ)	底板	1区	-	SK803	ほぼ完存	幅 3.0	厚 1.5	残長 16.7	-	木釘2ヶ所。
35	009-01	木製品 (アスナロ属)	板材	1区	-	SK803	小片	幅 3.4	厚 1.2	残長 15.4	-	
36	008-04	木製品 (ヒノキ)	篋	1区	-	SK803	完形	幅 7.0	厚 0.4	長 6.2	-	釘穴7ヶ所。結び紐痕。
37	008-02	木製品 (ヒノキ)	木札	1区	-	SK803	10/12以下	幅 4.0	厚 0.3	残長 11.7	-	孔4ヶ所。結び紐痕。
38	001-03	木製品 (ブナ)	杓子	1区	-	SK803	2/12以下	柄幅 5.1	柄厚 1.1	残長 8.9	-	
39	028-06	木製品 (トチノキ)	椀	1区	-	SK803	底部2/12	-	高台 6.2	-	-	漆器。
40	001-01	木製品 (ヒノキ属)	角棒材	1区	-	SK803	小片	幅 2.2	厚 1.4	残長 19.5	-	
41	028-05	木製品 (ヒノキ)	曲物	1区	-	SK803	完存	幅 7.1	厚 0.5	長 14.7	-	漆。
42	003-01	木製品 (ヒノキ)	曲物	1区	-	SK803	ほぼ完存	長径 21.0	短径 18.8	6.5	-	本鉢孔3個、本体内側線刻8本、本体たがに 穴(約1cm)1個。
43	001-02	木製品 (ヒノキ属)	角棒材	1区	-	SK803	小片	幅 2.4	厚 1.1	残長 26.1	-	
44	124-01	陶器 (常滑)	甕	1区	-	SK804	口縁部1/12	44.0	-	-	にぶい赤褐 5YR5/4	
45	124-02	陶器 (常滑)	甕	1区	-	SK804	口縁部1/12	44.0	-	-	灰黄褐 10YR4/2	
46	129-01	陶器	鉢	1区	-	SK804上層	底部2/12	-	高台 14.0	-	浅黄2.5Y7/4	灰釉。
47	129-02	陶器	壺	1区	-	SK804上層	底部4/12	-	高台 10.4	-	灰7.5Y5/1	灰釉。
48	129-03	磁器 (肥前)	皿	1区	-	SK804上層	口縁部2/12	14.0	-	-	灰白2.5Y8/2	染付。格子文。
49	030-06	金属製品	刃物	1区	-	SK804上層	6/12以下	-	厚 0.9	長 7.8	-	
50	127-01	瓦	棧瓦	1区	-	SK804	2/12以下	-	-	-	にぶい黄橙 5YR7/4	酸化焼成。
51	126-02	瓦	棧瓦	1区	-	SK804上層	2/12以下	-	-	-	橙5YR7/6	酸化焼成。
52	125-01	瓦	平瓦	1区	-	SK804	3/12以下	-	-	-	にぶい赤褐 5YR5/3	水返し付き。酸化焼成。

第49表-1 第8次調査出土遺物観察表



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
53	126-01	瓦	棧瓦	1区	-	SK804	2/12以下	-	-	-	にぶい赤褐 5YR5/3	酸化焼成。
54	141-02	山茶椀	椀	1区	-	SD829	口縁部1/12	13.0	-	-	灰白N7/	
55	141-03	山茶椀	椀	1区	-	SD822	底部1/12	-	高台 8.0	-	灰白N8/	
56	141-07	土師器	皿	1区	-	SD830	口縁部3/12	5.8	-	1.4	灰黄2.5Y7/2	
57	141-01	山茶椀	椀	1区	-	SD830	口縁部1/12	13.0	-	-	灰白N8/	
58	141-04	陶器	椀	1区	-	Pit2	底部6/12	-	高台 4.7	-	灰白N8/	灰釉沸騰。
59	130-03	山茶椀	椀	1区	-	包含層	口縁部小片	-	-	-	灰白2.5Y7/1	
60	129-04	山茶椀	椀	1区	-	黒褐色土	口縁部1/12	15.7	-	-	灰黄2.5Y7/2	
61	138-03	山茶椀	椀	1区	-	褐色土	口縁部1/12	13.4	-	-	灰白5Y8/1	
62	138-02	山茶椀	椀	1区	-	溝 (黒褐色土)	口縁部1/12	16.2	-	-	灰白5Y7/1	
63	130-02	土師器	皿	1区	-	褐色土	口縁部2/12	7.8	-	-	灰白10YR8/2	
64	118-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	1区	-	黒褐色土	口縁部3/12	12.0	-	-	灰白2.5Y7/1	鉄軸。
65	120-03	陶器	皿	1区	-	黒褐色土	底部5/12	12.0	高台 6.8	3.0	にぶい黄橙 10YR7/2	
66	134-02	陶器 (常滑)	壺	1区	-	包含層	口縁部2/12	29.4	-	-	灰白10YR8/2	広口壺。
67	136-01	陶器 (常滑)	鉢	1区	-	包含層	底部1/12以下	-	31.3	-	褐灰7.5YR4/1	3足に仮定。
68	134-01	陶器	描鉢	1区	-	上層	底部1/12	-	高台 16.2	-	橙5YR6/6	描目5本/1cm。
69	134-03	陶器 (常滑)	甕	1区	-	上層	口縁部小片	-	-	-	橙5YR7/6	
70	135-01	陶器 (常滑)	甕	1区	-	暗灰褐色土	口縁部1/12以下	55.2	-	-	赤灰2.5YR4/1	
71	131-02	磁器 (肥前)	椀	1区	-	黒褐色層	口縁部小片	-	-	-	灰白7.5Y8/1	染付。文字文。
72	137-01	瓦	平瓦	1区	-	包含層	2/12以下	-	-	-	浅黄橙 7.5YR8/3	燻不良。
73	136-03	瓦	平瓦	1区	-	包含層	1/12以下	-	-	-	暗灰N3/	
74	136-02	瓦	平瓦	1区	-	包含層	2/12以下	-	-	-	浅黄橙 10YR8/3	燻不良。
75	137-02	瓦	瓦磚	1区	-	包含層	1/12以下	-	-	-	浅黄橙 10YR8/2	穿孔あり。
76	122-04	瓦	棟丸瓦	1区	-	包含層	2/12以下	幅 8.0	-	-	灰N4/	瓦頭剥離。
77	025-03	木製品 (マツ属)	角材	1区	-	黒赤色粘土層	完形	一边 7.4	-	長 18.4	-	
78	028-03	木製品 (ヒノキ)	加工材	1区	-	1層	小片	幅 1.9	厚 0.4	長 7.2	-	
79	142-01	石製品 (砂岩)	灯籠	1区	-	包含層	宝珠ほぼ完存	最大 16.3	-	24.7	にぶい橙 7.5YR7/4	7kg。
80	130-01	土師器	茶釜	1区	-	攪乱	口縁部4/12	14.0	-	-	灰白10YR8/2	
81	133-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	1区	-	排土	底部6/12	10.0	高台 4.0	5.9	灰白2.5Y8/2	鉄軸。
82	133-02	陶器	椀	1区	-	排土	底部5/12	10.4	高台 3.4	5.6	灰白2.5Y8/2	鉄軸。
83	133-04	陶器	椀	1区	-	排土	底部完存	-	高台 3.4	-	淡黄5Y8/3	灰軸。
84	132-03	陶器	鉢	1区	-	排土	底部3/12	-	高台 5.8	-	にぶい黄橙 10YR6/3	鉄軸。
85	132-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	1区	-	排土	小片	-	-	-	浅黄2.5Y7/3	青織部。たたら成形。
86	133-01	陶器 (瀬戸・美濃)	片口鉢	1区	-	排土	口縁部2/12	21.0	-	-	淡黄2.5Y8/4	灰軸。
87	132-02	磁器 (肥前)	椀	1区	-	排土	底部完存	-	高台 3.8	-	灰白N8/	染付。草花文。
88	131-04	磁器 (肥前)	椀	1区	-	造成土	底部3/12	-	高台 7.6	-	灰白N8/	広東椀。染付。
89	131-05	磁器 (肥前)	椀	1区	-	造成土	底部5/12	-	高台 5.6	-	灰白N8/	広東椀。染付。銘文。
90	131-03	磁器 (肥前)	椀	1区	-	造成土	底部5/12	9.8	高台 4.0	4.8	灰白7.5Y8/1	染付。蔓草文。
91	141-05	磁器 (肥前)	椀	1区	-	焼土下層	口縁部4/12	17.6	高台 3.6	4.9	灰白N8/	染付。草花文。
92	132-01	瓦	軒丸瓦	1区	-	排土	瓦当7/12	瓦当 14.0	-	-	灰白5Y7/1	巴文、珠文10個。
93	030-05	金属製品	織機部品	1区	-	焼土下層	ほぼ完形	0.2	-	長 9.7	-	
94	101-04	土師器	皿	2区	-	SD816	口縁部3/12	7.0	-	1.4	にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁端部に煤付着。歪みが激しい。
95	105-01	土師器	鍋	2区	-	SD816	口縁部3/12	29.6	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	外面煤付着。
96	105-02	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	SD816	底部10/12	-	7.4	-	灰白10Y7/2	灰軸。若干氷割文。
97	101-02	陶器	風炉	2区	-	SD816	口縁部1/12	23.5	-	-	にぶい橙 10YR6/4	煤付着。
98	101-03	陶器	風炉	2区	-	SD816 最下層	口縁部2/12	27.0	-	-	灰白2.5Y8/1	煤付着。
99	012-01	木製品 (トチノキ)	椀	2区	-	SD816	9/12	10.4	高台 4.8	3.3	-	漆器。黒漆+赤漆桐文。
100	102-01	陶器 (常滑)	鉢	2区	-	SE806	口縁部1/12以下	32	-	-	暗赤褐5YR3/3	内面煤付着。
101	002-01	木製品 (スギ)	底板	2区	-	SE806	完存	幅 5.9	厚 2.0	長 27.9	-	
102	101-01	陶器 (常滑)	捏鉢	2区	-	SD808	口縁部2/12	29.6	14.0	9.6	にぶい黄橙 10YR6/3	
103	103-02	土師器	皿	2区	-	SD817	口縁部4/12	9.0	-	1.1	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁端部に煤付着。
104	102-03	土師器	焙炉	2区	-	SD817	口縁部1/12	39.0	-	-	にぶい橙 10YR7/3	

第49表-2 第8次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
105	102-02	土師器	鍋	2区	-	SD817	口縁部3/12	29.8	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	外面に煤付着。
106	102-04	土師器	羽釜	2区	-	SD817	口縁部2/12	30.8	鈔 32.0	-	橙7.5YR6/6	
107	103-03	陶器	椀	2区	-	SD817	底部完存	-	4.8	-	灰黄2.5Y6/2	京焼風陶器。山水文。
108	103-04	陶器 (京都・信楽)	椀	2区	-	SD817	底部完存	-	高台 4.6	-	灰白5Y8/1	葉文。底部外面に墨書。
109	103-01	瓦	軒丸瓦	2区	-	SD817	2/12以下	-	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	
110	090-03	土師器	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	7.0	-	1.0	橙5YR6/6	
111	090-05	陶器	灯明皿受	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	9.8	-	-	にぶい黄褐 10YR5/3	
112	089-02	陶器	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	10.7	-	-	灰白7.5Y7/2	灰釉。口縁部に煤付着。
113	091-01	陶器	仏花器	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	-	高台 3.0	-	にぶい黄橙 10YR6/3	銅緑釉。
114	091-05	陶器	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	6.8	高台 2.6	3.1	灰白N8/	灰釉。内外面水割文。
115	088-06	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	5.6	-	灰白5Y8/1	透明釉。
116	158-03	陶器	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部7/12	-	高台 5.4	-	灰白8/	筒形椀。灰釉。
117	088-05	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	7.0	-	灰白5Y8/1	灰釉。
118	169-01	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部6/12	11.4	高台 3.3	4.7	灰白5Y8/1	陶胎染付。梅花文。
119	171-02	陶器	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	-	高台 5.2	-	灰白5Y8/1	灰釉。焼成後底部穿孔。
120	169-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部6/12	11.0	高台 5.0	6.0	灰白5Y8/1	広東椀。陶胎染付。花文。
121	088-04	陶器 (京都・信楽)	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	9.9	3.2	1.8	灰黄2.5Y7/2	鉄釉。
122	087-05	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部11/12	6.1	3.6	2.1	灰白10YR8/1	灰釉。
123	088-02	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	ほぼ完形	8.35	4.3	2.95	灰白2.5Y8/2	灰釉。
124	087-04	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	ほぼ完形	8.3	4.5	2.85	灰白10YR8/1	灰釉。水割文。
125	087-06	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	7.4	6.0	2.25	灰白2.5Y8/2	灰釉。
126	088-01	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	9.0	5.4	2.65	灰白10YR8/2	灰釉だが、発色不良で白色を呈する。
127	087-07	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	9.3	-	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。
128	089-01	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	7.6	-	-	灰白5Y8/2	透明釉。
129	161-02	陶器 (伊賀・信楽)	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部7/12	10.2	-	-	灰白N8/	灰釉。
130	089-05	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	13.0	-	-	灰白5Y7/1	灰釉。
131	161-01	陶器 (伊賀・信楽)	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部7/12	13.0	-	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。
132	086-02	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	底部9/12	-	6.2	-	灰白5Y8/2	灰釉。
133	085-01	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	底部7/12	-	9.4	-	灰白5Y8/1	外：鉄釉、内：泥漿。
134	108-03	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	7.1	-	-	灰白2.5Y8/2	色絵葉文。
135	090-07	陶器	壺	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部4/12	6.8	-	-	黄褐2.5Y5/3	茶入れ。鉄釉。
136	089-04	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	7.4	-	-	灰白2.5Y7/1	灰釉。沸騰気味。
137	108-05	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	8.3	-	-	灰白5Y7/1	色絵。
138	108-02	陶器	土瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部4/12	8.2	-	-	灰白2.5Y8/2	色絵葉文。
139	109-01	陶器	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	高台 6.8	-	灰白5Y8/1	陶胎染付。放射文。
140	089-03	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12以下	19.9	-	-	灰白10YR8/2	灰釉。
141	109-04	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	18.3	高台 10.4	9.25	橙色5YR6/6	刷毛目椀。銅緑釉。
142	149-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部11/12	18.0	高台 8.2	10.1	灰黄2.5Y7/2	片口鉢。黄瀬戸釉。
143	170-03	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部6/12	19.0	-	-	浅黄5Y7/3	片口鉢。灰釉。
144	176-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部4/12	-	高台 7.8	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。
145	088-03	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	摘み完存	-	摘み 3.8	-	灰黄2.5Y7/2	灰釉+鉄絵。
146	087-01	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	摘み3/12	16.1	摘み 3.9	4.3	灰白10YR8/2	灰釉だが沸騰し、白色細粒を呈する。
147	087-03	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12以下	14.5	-	-	浅黄2.5Y8/3	柿釉。
148	087-02	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12以下	15.0	-	-	にぶい橙 7.5YR6/4	灰釉。
149	171-01	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部5/12	14.0	-	-	淡黄2.5Y8/3	行平鍋。灰釉。
150	172-02	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	13.0	-	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。灰釉。
151	171-03	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	15.0	-	-	灰白2.5Y8/1	行平鍋。灰釉。
152	171-05	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	16.2	-	-	灰白10YR8/2	鉄釉。
153	172-03	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12以下	18.0	-	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。灰釉。
154	172-01	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	17.0	-	-	灰白8/2	行平鍋。灰釉。
155	172-04	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12以下	24.0	-	-	にぶい黄 2.5Y6/4	行平鍋。灰釉。
156	083-02	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	23.0	-	-	灰白5Y8/2	鉄釉。

第49表-3 第8次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
157	154-02	陶器	把手	2区	-	SZ831 近世包含層	把手完存	最大 3.1	-	長 4.0	淡赤橙 2.5YR7/4	急須把手。透明釉。磁器の可能性あり。
158	085-03	陶器	鍋	2区	-	SZ831 近世包含層	底部4/12	-	8.8	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。
159	173-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部ほぼ完存	26.8	高台 15.1	14.0	灰白5Y8/1	灰釉。蛤痕5ヶ所。
160	166-03	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	21.4	-	-	灰白5Y8/1	鉄釉。
161	169-03	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	21.0	-	-	オリーブ褐色 2.5Y4/3	灰釉。
162	171-04	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	13.0	-	-	灰白5Y8/2	灰釉。
163	085-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部4/12	-	8.2	-	灰白5Y8/2	
164	012-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部4/12	-	高台 11.6	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。3足、脚に漆。
165	181-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	-	高台 16.2	-	灰白N8/	馬目皿。内面若干水割文。胎土目。
166	175-01	陶器	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部6/12	27.8	高台 14.0	5.6	灰白5Y8/2	灰釉。
167	086-03	陶器	蓋	2区	-	SZ831 近世包含層	小片	-	-	-	淡黄2.5Y8/3	銅緑釉+金箔。
168	167-01	陶器	甗	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	29.6	-	-	灰白5Y8/1	鉄釉化粧掛け。
169	165-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	33.0	-	-	灰白2.5Y8/1	鉄釉。
170	170-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	34.0	-	-	灰白7.5Y7/2	灰釉。
171	170-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	31.0	-	-	灰白5Y7/2	灰釉。
172	169-04	陶器 (瀬戸・美濃)	花瓶	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	16.0	-	-	灰白7.5Y8/2	鉄釉。
173	165-01	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	38.6	-	-	にぶい黄褐 10YR7/3	描目19本/5.2cm。
174	166-02	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	13.6	-	灰白5Y8/2	描目4本/1cm。
175	163-02	陶器 (信楽)	甗	2区	-	SZ831 近世包含層	底部2/12	-	15.8	-	にぶい黄褐 10YR5/4	
176	083-01	陶器 (常滑)	風炉	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	31.8	-	-	橙色7.5YR7/6	波状文。不定形火口。
177	090-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部1/12	24.4	-	-	にぶい黄 2.5Y6/3	
178	084-02	陶器 (常滑)	甗	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	16.0	-	橙5YR6/6	
179	084-01	陶器 (常滑)	甗	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	40.4	-	-	橙2.5YR6/6	
180	182-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	38.2	-	-	灰白2.5Y8/1	裝飾把手。灰釉、濃淡あり。
181	183-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	完形	22.6	高台 18.4	30.0	浅黄2.5Y7/3	半胴。鉄釉。
182	176-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	高台 20.0	-	浅黄10YR8/3	鉄釉。
183	176-03	陶器 (京都・信楽)	德利	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	頸部2. 6	6.8	22.2	灰白5Y8/2	灰釉。鉄絵山水。やや発色不良。
184	160-02	陶器	德利	2区	-	SZ831 近世包含層	底部2/12	-	11.6	-	灰白2.5Y7/1	透明釉。
185	158-01	陶器	德利	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部完存	2.6	-	-	灰白N8/	透明釉。
186	158-02	陶器	德利	2区	-	SZ831 近世包含層	体部6/12	-	13.1	-	灰白5Y7/1	透明釉。「川井口」。
187	160-01	陶器	德利	2区	-	SZ831 近世包含層	底部6/12	-	14.0	-	灰白5Y8/	透明釉。「口坂町」。
188	159-01	陶器	德利	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	-	高台 10.4	-	灰白7.5Y8/1	透明釉。鉄釉文字発色不良。
189	184-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	22.6	11.2	17.5	灰白2.5Y8/2	灰釉。鉄絵、鶴+草木。砂目。
190	185-01	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部4/12	-	16.0	-	灰白2.5Y8/2	のうふ釉。鉄絵、草木。焼成前穿孔。
191	175-02	陶器	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	底部4/12	-	高台 15.8	-	灰白5Y8/1	灰釉。軸垂あり。蛤痕。
192	167-02	陶器	火鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	小片	-	-	-	灰黄褐 10YR5/2	隅丸方形。鉄釉。青海波文+唐草文+雷文。
193	108-04	磁器 (瀬戸・美濃)	小杯	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	6.3	高台 2.3	2.9	白9/	透明釉。
194	155-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	7.8	-	-	白9/	染付。
195	155-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部9/12	-	高台 4.5	-	白9/	染付。山水文。裏銘。
196	111-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部6/12	9.8	高台 3.6	5.0	灰白N8/	染付。色絵草花文。
197	155-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部4/12	10.5	-	-	白9/	染付。外：壽+蝙蝠、内：連弧文。
198	154-06	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部5/12	11.5	高台 4.2	5.5	灰白N8/	染付。放射文+連弧文。
199	155-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部10/12	10.3	高台 3.5	6.0	白9/	染付。花詰文+寿。
200	154-04	磁器 (肥前)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	13.0	-	-	白9/	染付。花文+口鏝。
201	154-03	磁器 (肥前)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	13.8	-	-	白9/	釉下採+染付。釉下赤絵+網目文。接合補修あり。
202	156-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部9/12	8.9	高台 3.2	5.1	灰白N8/	端反椀。染付。宝文。
203	155-04	磁器 (肥前)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	底部10/12	10.3	高台 3.5	6.0	白9/	染付。草花文。
204	108-01	磁器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	12.9	高台 6.6	7.1	白9/	波状口縁。染付。草花文。
205	156-01	磁器 (瀬戸・美濃)	猪口	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部6/12	7.0	高台 3.2	5.2	白9/	染付。鍋+連弁文。裏銘。
206	154-01	磁器 (肥前)	猪口	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	5.5	-	-	白9/	染付。蝶文。
207	108-07	磁器 (瀬戸・美濃)	仏飯具	2区	-	SZ831 近世包含層	脚部完存	-	4.4	-	白9/	赤絵。
208	157-04	磁器 (肥前)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部6/12	14.0	高台 8.6	4.7	白9/	染付。外：唐草文、内：草花文。裏銘「福」。

第49表-4 第8次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
209	108-06	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	-	高台 11.4	-	灰白N8/	赤絵。
210	157-03	磁器 (肥前)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	底部完存	13.0	高台 7.5	3.1	白9/	菊皿。染付。草花文。
211	156-04	磁器 (肥前)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	底部3/12	11.8	高台 7.0	2.1	灰白N8/	12角形皿。染付。人物+草花文。
212	157-01	磁器 (中国)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部10/12	9.2	高台 5.0	2.1	灰白N8/	染付。裏銘「宣徳年製」。
213	156-02	磁器 (肥前)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部3/12	14.5	高台 9.5	3.0	灰白7/	染付。蔓草文。
214	157-02	磁器 (肥前)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部5/12	13.8	高台 8.5	3.8	灰白N8/	染付。外：蔓草文、内：蛸唐草文。
215	154-05	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	12.8	-	-	白9/	染付。蔓草文。
216	091-07	磁器 (肥前)	合子	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部8/12	4.4	高台 1.4	1.4	白9/	紅入れ。透明釉。
217	091-06	磁器 (肥前)	合子	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部9/12	4.6	高台 1.5	1.5	白9/	紅入れ。透明釉。
218	109-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部5/12	8.5	高台 3.8	4.7	白9/	染付。
219	166-01	瓦質製品	硯	2区	-	SZ831 近世包含層	小片	-	-	-	灰白N4/	
220	086-01	青磁	香炉	2区	-	SZ831 近世包含層	口縁部2/12	16.8	-	-	灰白N8/	六角形鉢。
221	168-01	瓦	軒棧瓦	2区	-	SZ831 近世包含層	4/12以下	瓦当 7.4	-	-	灰4/	
222	005-01	木製品 (スギ)	角材	2区	-	SZ831 近世包含層	完存	幅 8.8	厚 2.8	-	-	中心に釘。
223	018-01	木製品 (ヒノキ)	杓文字	2区	-	SZ831 近世包含層	完形	最大幅 7.9	柄径 1.0	長 24.3	-	
224	004-04	木製品 (ヒノキ属)	棒材	2区	-	SZ831 近世包含層	完存	1.4	-	長 7.6	-	多面体に面取り。先端圧痕。
225	004-03	木製品 (ヒノキ属)	棒材	2区	-	SZ831 近世包含層	完存	1.4	-	長 15.3	-	
226	005-02	木製品 (スギ)	曲物底板	2区	-	SZ831 近世包含層	完存	幅 6.4	厚 0.9	長 12.6	-	
227	006-01	木製品 (スギ)	曲物底板	2区	-	SZ831 近世包含層	完存	12.1	厚 1.3	-	-	木釘側に4ヶ所、表面に1ヶ所。
228	007-02	木製品 (スギ)	曲物底板	2区	-	SZ831 近世包含層	完存	幅 6.6	厚 0.8	長 14.7	-	
229	024-02	木製品 (スギ)	板材	2区	-	SZ831 近世包含層	完形	幅 10.0	厚 0.8	長 33.3	-	釘穴。
230	004-01	木製品 (アスナロ属)	棒材	2区	-	SZ831 近世包含層	小片	幅 2.6	厚 1.5	残長 31.7	-	17cm間隔に釘穴。
231	024-01	木製品 (スギ)	板材	2区	-	SZ831 近世包含層	10/12以下	残幅 5.9	厚 0.9	長 22.7	-	
232	004-02	木製品 (ヒノキ属)	角材	2区	-	SZ831 近世包含層	完形	幅 1.6	厚 1.0	長 16.4	-	
233	026-02	木製品 (スギ)	板材	2区	-	SZ831 近世包含層	完形	幅 7.2	厚 0.9	長 31.7	-	
234	019-02	木製品 (マツ属)	加工材	2区	-	SZ831 近世包含層	10/12以下	幅 14.7	厚 4.2	残長 24.4	-	樹皮剥ぎ取り。
235	026-03	木製品 (ヒノキ属)	曲物	2区	-	SZ831 近世包含層	4/12以下	-	厚 0.4	0.7	-	
236	026-01	木製品 (モミ属)	部材	2区	-	Pit2	10/12以下	一辺 11.1	-	残長 49.5	-	?穴。
237	104-01	土師器	皿	2区	-	Pit3	口縁部2/12	9.6	-	1.55	にぶい橙色 7.5YR7/4	
238	104-02	山茶椀	椀	2区	-	Pit3壁	底部2/12	-	高台 6.0	-	黄灰色 2.5Y5/1	
239	104-03	山茶椀	椀	2区	-	Pit4	口縁部1/12以下	16.6	-	-	黄灰2.5Y6/2	
240	080-01	土師器	皿	2区	-	包含層	口縁部2/12	9.0	-	1.0	にぶい橙 10YR7/4	
241	080-02	土師器	皿	2区	-	包含層	口縁部3/12	9.7	-	1.7	橙7.5YR6/6	
242	095-05	土師器	皿	2区	-	黒褐色土	口縁部1/12	11.4	-	-	にぶい橙色 10YR7/3	
243	082-01	山茶椀 (渥美)	椀	2区	-	黒褐色シルト	底部3/12	-	高台 7.4	-	黄灰2.5Y6/1	
244	092-04	陶器	椀	2区	-	近世包含層	口縁部2/12	10.8	-	-	灰黄2.5Y7/2	鉄釉+白泥化粧掛け。
245	080-07	陶器	椀	2区	-	包含層	口縁部2/12	12.8	-	-	灰7.5Y6/1	灰釉。
246	093-03	陶器	椀	2区	-	黒褐色粘質土	口縁部4/12	8.7	高台 5.1	5.1	灰白2.5Y8/1	腰錯茶椀。灰釉+鉄釉。
247	080-06	陶器	椀	2区	-	-	底部4/12	-	高台 7.1	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。
248	081-03	陶器	皿	2区	-	包含層	底部4/12	-	高台 6.8	-	灰白2.5Y7/1	菊皿。灰釉。
249	094-05	陶器	小杯	2区	-	黒褐色粘質土	底部完存	-	高台 2.9	-	灰白N7/	灰釉。
250	090-06	陶器	乗燭	2区	-	近世包含層	底部完存	6.0	4.6	5.1	灰白2.5Y8/2	灰釉。
251	096-03	陶器	鉢	2区	-	包含層	底部11/12	-	高台 8.2	-	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
252	081-07	陶器	椀	2区	-	包含層	底部4/12	-	高台 5.0	-	灰白5Y7/1	灰釉+鉄絵。京焼風陶器。山水文。
253	081-01	陶器 (京都・信楽)	椀	2区	-	包含層	口縁部2/12	10.0	-	-	灰白5Y8/1	綾杉椀。灰釉+鉄絵。
254	091-09	陶器	椀	2区	-	近世包含層	口縁部2/12	7.0	-	-	灰白5Y8/1	陶胎染付。外：蔓草文、内、四方禪文。
255	081-02	陶器	椀	2区	-	包含層	底部完存	-	高台 3.6	-	灰白2.5Y8/2	陶胎染付。
256	080-05	陶器	鍋	2区	-	包含層	口縁部3/12	12.8	-	-	浅黄2.5Y7/3	行平鍋。灰釉。
257	090-04	陶器	鍋	2区	-	近世包含層	口縁部1/12	24.2	-	-	浅黄2.5Y6/3	透明釉。
258	091-04	陶器	蓋	2区	-	近世包含層	口縁部4/12	9.3	幅 2.0	2.0	灰白2.5Y8/2	灰釉。
259	091-08	陶器	蓋	2区	-	近世包含層	口縁部6/12	10.2	鏝 12.4	3.6	灰白2.5Y8/1	灰釉+鉄絵。
260	099-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区	-	包含層	口縁部1/12	43.4	-	-	灰黄2.5Y7/2	播目14本/4cm。刻印。

第49表-5 第8次調査出土遺物観察表



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
261	096-02	陶器	鉢	2区	—	黒褐色粘質土	底部完存	16.6	高台 8.6	9.1	灰黄2.5Y7/2	片口鉢。灰軸。
262	095-04	陶器	壺	2区	—	黒褐色粘質土	小片	—	—	—	浅黄2.5Y7/3	口縁部内面に線刻文字。
263	093-05	陶器 (常滑)	甕	2区	—	黒褐色粘質土	小片	—	—	—	明赤褐 2.5YR5/6	口縁部に指による刺突文。
264	090-01	陶器 (常滑)	甕	2区	—	近世包含層	口縁部1/12	24.4	—	—	にぶい赤褐 5YR5/4	
265	098-01	陶器 (常滑)	甕	2区	—	包含層	口縁部2/12	47.4	—	—	にぶい橙 7.5YR7/4	
266	094-01	陶器	鉢	2区	—	近世包含層	底部完存。	—	13.8	—	灰白2.5Y8/1	灰軸。蛇ノ目凹形高台を故意に削り取る。
267	080-03	陶器 (常滑)	甕	2区	—	包含層	底部2/12	—	15.0	—	橙5YR6/6	
268	152-01	陶器 (常滑)	甕	2区	—	—	底部7/12	—	15.0	—	明赤褐 2.5YR5/6	
269	080-04	陶器	鉢	2区	—	包含層	底部2/12	—	19.0	—	灰黄2.5Y7/2	やや瓦質焼成。内面炭化物付着。
270	081-05	磁器 (肥前)	皿	2区	—	包含層	口縁部2/12	9.5	—	—	白9/	染付。
271	095-02	磁器 (肥前)	皿	2区	—	黒褐色粘質土	底部2/12	11.5	高台 7.4	2.2	灰白N8/	染付。外：蔓草文、内：雲文。
272	098-02	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	—	包含層	口縁部7/12	11.6	高台 6.0	2.6	灰白N8/	転写。
273	092-02	磁器 (肥前)	椀	2区	—	近世包含層	口縁部7/12	7.2	高台 4.8	7.0	白9/	筒形椀。染付。外：楼閣山水文、内：雷文。
274	092-03	磁器 (肥前)	椀	2区	—	近世包含層	口縁部2/12	9.8	—	—	灰白N8/	染付。草花文。
275	081-06	磁器 (肥前)	椀	2区	—	包含層	底部4/12	—	高台 4.5	—	灰白5Y8/1	染付。蛇ノ目軸刺。
276	094-03	磁器 (肥前)	椀	2区	—	黒褐色粘質土	底部完存	—	高台 3.0	—	灰白N8/	筒形椀。染付。変形文字。
277	095-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	—	黒褐色粘質土	口縁部5/12	—	高台 3.6	—	灰白N8/	染付。宝文。
278	091-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	—	近世包含層	口縁部11/12	8.3	高台 3.2	4.1	白9/	端反椀。染付。文字+草花文。
279	098-03	磁器	椀	2区	—	包含層	口縁部5/12	11.8	高台 5.4	4.7	灰白N8/	鉄軸。
280	092-01	磁器 (肥前)	椀	2区	—	近世包含層	口縁部4/12	11.4	高台 5.8	6.6	白9/	広東椀。染付。草木文。
281	091-03	磁器 (肥前)	椀	2区	—	近世包含層	底部3/12	—	高台 7.4	—	白9/	広東椀。染付。見込みに五弁花文。
282	081-04	磁器 (肥前)	蓋	2区	—	包含層	口縁部2/12	10.0	—	—	白9/	染付。外：草木文、内：四方禪文。
283	092-05	磁器 (肥前)	猪口	2区	—	近世包含層	口縁部3/12	7.0	高台 5.8	5.6	白9/	染付。外：唐草文、内：雲気文。
284	094-04	磁器 (瀬戸・美濃)	仏飯具	2区	—	黒褐色粘質土	口縁部8/12	5.6	3.4	4.8	灰白N8/	染付。葉文。
285	028-02	木製品 (スギ)	栓	2区	—	近世包含層	完形	3.0	—	4.2	—	
286	009-04	木製品 (エゴノキ属)	傘口クロ	2区	—	黒褐色粘質土	3/12以下	6.1	—	残長 4.5	—	和傘部材。
287	002-02	木製品 (スギ)	底板	2区	—	暗オリーブ褐色 極細砂	ほぼ完存	幅 5.0	厚 1.4	長 24.2	—	
288	007-01	木製品 (スギ)	下駄	2区	—	黒褐色シルト	10/12	幅 7.6	長 19.7	2.6	—	右近下駄か。全体に被熱。
289	006-02	木製品 (スギ)	下駄	2区	—	黒褐色シルト	ほぼ完存	幅 8.9	長 21.1	2.6	—	連雷下駄。
290	093-01	土師器	鍋	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部1/12	35.0	—	—	灰白10YR7/1	内外面煤付着。
291	107-02	陶器	皿	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部2/12	10.2	高台 6.4	2.4	灰白5Y8/1	菊皿。灰軸。葉文。
292	174-01	陶器	皿	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部3/12	15.0	高台 9.8	3.5	灰5Y6/1	菊皿。灰軸。
293	106-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部5/12	12.2	高台 7.8	2.8	灰白5Y8/1	陶胎染付。梅花文、発色不良。
294	105-05	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部6/12	—	高台 3.6	—	灰白5Y8/1	陶胎染付。梅花文。
295	106-03	陶器	椀	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部2/12	12.0	—	—	灰白5Y8/1	灰軸沸騰気味。
296	106-02	陶器	鉢	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部7/12	—	高台 6.4	—	灰白N8/	鉄軸。
297	174-02	陶器	壺	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部5/12	—	高台 6.0	—	灰白5Y8/1	灰軸。
298	093-04	陶器	椀	2区	—	暗オリーブ褐色 極細砂	底部11/12	—	高台 4.8	—	灰白2.5Y8/2	鉄軸化粧掛け。
299	082-03	陶器	土瓶	2区	—	攪乱	底部4/12	—	7.6	—	灰黄2.5Y7/2	うのふ軸に呉須軸と鉄軸で描画。
300	082-02	陶器	火入	2区	—	攪乱	口縁部4/12	10.6	—	—	灰白2.5Y7/1	灰軸。
301	107-05	陶器	椀	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部3/12	—	5.0	—	赤10R5/6	灰軸。鉄絵。松文。
302	107-04	陶器	椀	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	底部3/12	—	高台 6.8	—	灰白N7/	灰軸。
303	105-04	陶器	蓋	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部2/12	9.6	鏝 11.9	1.5	灰白2.5Y8/2	灰軸。摘みが付く可能性あり。
304	105-03	陶器	蓋	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	摘み完存	—	摘み 3.6	—	灰白2.5Y8/2	灰軸。
305	107-03	陶器	鍋	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	把手ほぼ完存	—	—	—	灰白5Y8/1	行平鍋。透明軸。
306	082-04	陶器	蓋	2区	—	攪乱	完形	6.3	鏝 8.0	2.9	浅黄2.5Y7/3	灰軸に緑軸と鉄軸で描画。
307	097-02	陶器	土瓶	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	ほぼ完形	6.9	6.7	8.5	灰白2.5Y8/1	透明軸。色絵草花文。
308	110-01	陶器	蓋	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部3/12	7.0	—	—	灰白2.5Y8/2	陶胎染付。色絵草花文。
309	110-02	陶器	蓋	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	4/12	6.0	鏝 8.0	—	灰白2.5Y8/2	陶胎染付。色絵草花文。
310	107-01	陶器	徳利	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部完存	4.1	—	—	灰白10YR8/1	灰軸。
311	149-02	陶器	徳利	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	体部完存	—	5.7	—	浅黄2.5Y7/3	黄瀬戸釉化粧掛け。
312	149-03	陶器	徳利	2区	—	オリーブ黒色 極細砂	口縁部5/12	2.0	高台 8.2	23.5	黄褐10YR5/6	鉄軸化粧掛け。

第49表-6 第8次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
313	097-01	陶器	德利	2区	-	近世包含層	底部完存	-	高台 9.5	-	灰白8/	灰軸。鉄絵「口木」。
314	105-06	陶器	德利	2区	-	オリープ黒色 極細砂	小片	-	-	-	灰白2.5Y8/2	灰軸。鉄絵「戊四十口」。
315	100-03	陶器	播鉢	2区	-	近世包含層	底部3/12	-	13.6	-	灰白5Y8/2	播目16本/3.6cm。
316	162-01	陶器	播鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部完存	-	14.0	-	灰白2.5Y8/2	播目16本/2.5cm。
317	100-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区	-	近世包含層	口縁部2/12	35.2	-	-	灰白2.5Y8/2	播目22本/5cm。刻印。
318	164-01	陶器 (常滑)	播鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	39.0	-	-	橙5YR6/6	弱い播目。
319	174-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	34.0	-	-	灰白5Y8/1	馬目皿。
320	106-01	瓦質土器	鍋	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	34.4	-	-	暗灰N3/	
321	177-01	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部2/12	23.0	-	-	灰白5Y8/1	長石軸。
322	177-02	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	23.6	-	-	灰白5Y8/1	灰軸。
323	179-01	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	33.0	-	-	灰白2.5Y8/2	灰軸。濃淡あり。
324	096-01	陶器	鉢	2区	-	近世包含層	底部6/12	-	19.4	-	灰白2.5Y8/1	鉄軸。
325	173-02	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部9/12	-	高台 13.7	-	灰白5Y8/1	灰軸。始痕5ヶ所。
326	179-02	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部5/12	-	13.0	-	灰白2.5Y8/2	灰軸。始痕。底部外面に墨書「小豆」。
327	164-02	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部1/12	-	25.6	-	灰白N8/	鉄軸。
328	093-02	陶器	鉢	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部4/12	-	12.6	-	灰白2.5Y8/2	鉄軸。
329	178-01	陶器 (瀬戸・美濃)	水甕	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部5/12	19.0	高台 16.4	14.5	灰白2.5Y8/2	灰軸濃淡あり、鉄軸化粧掛け。底部外面に墨書。
330	180-01	陶器 (瀬戸・美濃)	水甕	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部5/12	-	高台 20.0	-	灰白5Y8/2	灰軸。濃淡あり。胎土目。
331	162-02	陶器 (常滑)	甕	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部3/12	-	19.0	-	にぶい赤褐 5YR5/4	
332	163-01	陶器 (常滑)	甕	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	44.0	-	-	黄灰2.5Y4/1	
333	150-01	磁器 (肥前)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部11/12	10.2	高台 4.0	5.3	灰白N8/	染付。蔓草文。
334	096-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	近世包含層	底部完存	10.9	高台 4.0	6.0	白9/	染付。蔓草文。
335	150-02	磁器 (肥前)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部9/12	10.0	高台 3.8	5.5	灰白N8/	染付。カブ+井桁。
336	145-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部2/12	7.7	-	-	灰白N8/	染付。丸文。
337	145-06	磁器	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部2/12	9.8	-	-	灰白N8/	染付。龍文。
338	145-03	磁器 (肥前)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部10/12	-	高台 4.0	-	灰白N8/	染付青磁。五弁花文。
339	150-04	磁器	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部3/12	15.0	高台 6.0	7.0	白色9/	染付。外：松+鶴、内：四方博文。
340	145-01	磁器 (肥前)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部5/12	-	高台 6.7	-	灰白N8/	染付。文字文。接合補修。
341	111-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	完形	7.6	高台 2.8	4.4	白9/	湯呑。染付。山水楼閣文。
342	111-02	磁器	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部11/12	8.1	高台 2.9	4.75	灰白5Y8/1	湯呑。染付。漢詩+山水文、発色不良。
343	109-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部完存	8.5	高台 3.6	4.65	灰白5Y8/1	色繪染文。
344	151-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	造成土	底部完存	11.0	高台 3.6	5.0	灰白5Y8/1	転写。
345	145-05	磁器 (瀬戸・美濃)	猪口	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部4/12	-	高台 3.4	-	灰白N8/	染付。草文。
346	149-04	磁器 (肥前)	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部5/12	15.5	高台 9.4	3.4	灰白N8/	輪花皿。染付。楼閣文。
347	100-02	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	近世包含層	口縁部8/12	13.6	高台 6.4	4.2	灰白N8/1	転写。
348	109-02	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	近世包含層	底部5/12	13.9	高台 6.9	2.55	灰白N8/	転写。蛇ノ目凹形高台。
349	146-01	磁器 (肥前)	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部1/12	-	高台 5.2	-	灰白N8/	染付。鯉文。
350	110-03	磁器	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部1/12	30.0	高台 16.6	3.6	灰白N8/	転写。
351	095-01	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部3/12	20.8	高台 12.1	2.2	灰白N8/	転写。
352	094-02	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部3/12	8.4	高さ 3.4	2.2	灰白N8/	染付。草花文+変形文字。
353	082-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区	-	攪乱	底部5/12	-	高台 3.0	-	白9/	
354	153-01	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	造成土	底部6/12	16.8	高台 8.0	2.7	灰白2.5Y8/1	染付。花詰め文。蛇ノ目凹形高台。
355	150-03	磁器 (肥前)	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	底部9/12	15.0	高台 6.0	7.0	灰白N8/	染付。外：蔓草文、内：花文+雲気文。蛇ノ目凹形高台。
356	145-02	磁器 (肥前)	皿	2区	-	オリープ黒色 極細砂	口縁部2/12	13.3	-	-	灰白N8/	染付。外：宝文、内：雲気文。
357	151-03	磁器 (瀬戸・美濃)	蓋	2区	-	造成土	完形	8.4	-	3.1	灰白5Y8/1	透明軸。
358	151-04	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	2区	-	造成土	口縁部3/12	15.0	高台 10.0	2.2	灰白5Y8/1	転写。
359	151-02	磁器	蓋	2区	-	造成土	3/12	8.0	-	-	灰白2.5Y8/2	急須蓋。銅緑軸の葉文。陶器の可能性あり。
360	099-02	磁器 (肥前)	皿	2区	-	近世包含層	口縁部2/12	26.0	高台 13.4	3.5	灰白N8/	染付。幾何学文。
361	152-03	磁器	蓋	2区	-	造成土	小片	5.5	高さ 6.8	1.7	灰白2.5Y8/1	資生堂商品の蓋。陶器の可能性あり。
362	152-04	磁器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区	-	造成土	ほぼ完形	6.4	高台 6.4	5.3	灰白N8/1	透明軸。
363	153-02	磁器	鉢	2区	-	造成土	完形	6.4	高台 5.8	5.3	灰白5Y8/1	透明軸。統制陶器(岐598)。
364	152-02	硝子	薬瓶	2区	-	造成土	ほぼ完形	1.5	3.0	7.7	青色(透明)	

第49表-7 第8次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
365	009-02	木製品 (スギ)	木札	2区	-	オリーブ黒色 極細砂	小片	幅 3.2	厚 0.8	残長 11.0	-	刻書「文」。表面黒漆、背面赤漆。
366	004-05	木製品 (スギ)	木札	2区	-	オリーブ黒色 極細砂	完存	幅 3.0	厚 0.5	長 15.4	-	木釘2ヶ所。
367	014-01	木製品 (サワラ)	下駄	2区	-	造成土	ほぼ完存	幅 8.9	長 22.3	2.5	-	連歯下駄。付着物。
368	016-01	木製品 (スギ)	下駄	2区	-	造成土	ほぼ完存	幅 10.2	長 22.3	2.5	-	連歯下駄。鼻緒残存。
369	017-01	木製品 (スギ)	下駄	2区	-	近代 桶	ほぼ完存	幅 9.0	長 22.0	2.9	-	連歯下駄。漆彩色。
370	015-01	木製品 (サワラ)	下駄	2区	-	造成土	ほぼ完存	幅 8.9	長 22.2	2.4	-	連歯下駄。付着物。
371	019-01	木製品 (アスナロ属)	角材	2区	-	オリーブ黒色 極細砂	完存	幅 5.5	厚 5.7	長 48.1	-	釘穴1ヶ所。
372	029-01	木製品 (スギ)	曲物底板	2区	-	オリーブ黒色 極細砂	完存	径 14.2	厚 0.7	-	-	
373	025-02	木製品 (クリ)	角材	2区	-	オリーブ黒色 極細砂	完形	幅 10.5	厚 6.4	長 20.4	-	
374	025-01	木製品 (クリ)	角材	2区	-	オリーブ黒色 極細砂	完形	幅 10.5	厚 5.5	長 20.8	-	
375	035-03	土師器	皿	3区	-	SK813	口縁部2/12	9.8	-	1.3	橙色7.5YR7/6	
376	036-04	土師器	皿	3区	-	SK813	口縁部1/12	10.0	-	0.9	橙色5YR6/6	
377	035-04	土師器	皿	3区	-	SK813	口縁部1/12	10.8	-	1.3	にぶい橙色 7.5YR	
378	035-02	土師器	焙烙	3区	-	SK813	口縁部4/12	44.6	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	外面煤付着。
379	037-01	陶器 (常滑)	甕	3区	-	SK813	底部2/12	-	12.8	-	暗赤褐色 5YR3/2	外面にヘラ沈線1条。
380	037-04	陶器	椀	3区	-	SK825	底部完存	-	高台 3.2	-	灰白5Y7/2	陶胎染付。
381	037-03	磁器	椀	3区	-	SK825	底部4/12	-	高台 5.8	-	灰白N8/	広東椀。染付。
382	036-05	山茶椀	椀	3区	-	SD820	底部4/12	-	高台 6.6	-	灰白色 10YR7/1	
383	036-03	土師器	鍋	3区	-	SK815	口縁部1/12	25.4	-	-	灰黄色 2.5Y6/2	
384	037-02	山茶椀	椀	3区	-	SK815	底部5/12	-	高台 7.6	-	灰白10YR7/1	転用硯。
385	037-07	陶器 (常滑)	甕	3区	-	SK815	小片	-	-	-	灰褐色 7.5YR5/2	
386	036-02	土師器	焙烙	3区	-	SK818	口縁部2/12	35.8	-	-	灰黄褐色 10YR5/2	全体に煤付着。
387	035-05	土師器	皿	3区	-	SK818	口縁部1/12	10.0	-	1.3	橙色5YR7/6	
388	037-06	陶器	椀	3区	-	SK818	口縁部2/12	10.4	-	-	灰白7.5Y8/1	灰釉。
389	046-01	陶器	風炉	3区	-	SK818	底部3/12	-	17.8	-	橙色5YR6/8	煤付着。
390	008-01	木製品	板材	3区	-	SK818	小片	幅 5.1	厚 0.6	残長 25.2	-	スギ。
391	036-01	土師器	焙烙	3区	-	SD827	口縁部1/12	39.2	-	-	灰黄褐色 10YR6/2	口縁部に煤付着。
392	035-01	土師器	焙烙	3区	-	SD827	口縁部4/12	42.4	-	-	灰黄褐 10YR6/2	外面煤付着。
393	037-05	磁器 (肥前)	筒形椀	3区	-	SD827	口縁部2/12	7.8	-	-	灰白2.5GY8/1	筒形椀。染付。草木文。
394	047-01	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区	-	SD827	底部7/12	25.2	高台 12.3	6.2	灰白5Y8/1	馬目皿。
395	027-01	木製品 (クリ)	皿	3区	-	SD827	口縁部4/12	36.2	高台 20.8	12.4	-	漆器。
396	027-03	木製品 (モミ属)	板材	3区	-	SD827	完形	幅 2.9	厚 0.8	長 4.6	-	釘穴2ヶ所。
397	027-02	木製品 (ヒノキ)	曲物底板	3区	-	SD827	完存	幅 11.6	厚 0.9	長 23.5	-	木釘5ヶ所。
398	028-01	木製品 (スギ)	栓	3区	-	SD827	完形	3.0	-	3.4	-	
399	005-03	木製品 (トチノキ)	椀	3区	-	SD827	底部4/12	-	高台 5.8	-	-	漆器。
400	028-04	木製品 (ヤブツバキ)	樽掛い	3区	-	SD827	10/12以下	幅 3.5	厚 0.5	残長 11.7	-	
401	077-02	土師器	茶釜	3区	-	中世包含層	口縁部3/12	6.3	-	-	灰白5Y7/2	
402	147-06	土師器	皿	3区	-	灰色シルト層	口縁部3/12	7.6	-	1.2	橙5YR6/6	
403	041-03	土師器	皿	3区	-	包含層	口縁部3/12	8.0	-	1.5	にぶい黄褐色 10YR6/3	
404	147-05	土師器	皿	3区	-	灰色シルト層	口縁部8/12	8.2	-	1.2	橙5YR7/6	
405	041-04	土師器	皿	3区	-	Pit3	口縁部4/12	7.2	-	1.4	にぶい黄褐色 10YR7/4	
406	034-04	土師器	皿	3区	-	灰色(包含層)	小片	-	-	-	橙色5YR6/6	墨書、外：絵画、内：「狽」。
407	077-05	土製品	人形	3区	-	沼	小片	-	-	-	にぶい橙 5YR7/4	
408	075-03	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	包含層	底部完存	11.0	3.5	4.7	灰白5Y8/1	灰釉。陶胎染付。
409	038-04	陶器	皿	3区	-	包含層	底部完存	-	高台 5.0	-	灰白2.5Y8/1	陶胎染付。梅花文。
410	148-04	陶器 (瀬戸・美濃)	灯明皿受	3区	-	灰色シルト層	口縁部10/12	7.3	3.6	1.8	灰白5Y8/1	鉄釉。
411	148-05	陶器	灯明皿受	3区	-	灰色(包)	口縁部3/12	9.0	4.6	1.7	灰黄2.5Y7/2	鉄釉。
412	148-03	陶器	皿	3区	-	灰色シルト層	完形	7.4	3.7	1.5	灰白N7/	鉄釉。直接重焼痕。
413	042-03	陶器	皿	3区	-	近世包含層	底部8/12	10.8	5.4	1.8	にぶい黄褐色 10YR7/3	鉄釉。把手付。
414	147-04	陶器	皿	3区	-	褐色(包)	口縁部1/12	15.6	-	-	灰白2.5Y7/1	灰釉+口錆。
415	045-03	陶器	皿	3区	-	近世包含層	底部3/12	13.2	高台 8.2	3.6	灰白N8/	菊花形皿。灰釉。
416	146-05	陶器	椀	3区	-	灰色シルト	口縁部2/12	12.4	-	-	灰白N7/	灰釉+鉄釉化粧掛け。

第49表-8 第8次調査出土遺物観察表

遺物番号	実測番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
417	077-01	陶器	椀	3区	-	近世包含層	口縁部3/12	11.6	-	-	灰白5Y7/2	灰釉。水割文。
418	043-05	陶器	椀	3区	-	包含層	底部7/12	-	高台 3.8	-	灰白5Y8/2	透明釉。
419	043-04	陶器	天目茶碗	3区	-	包含層	底部完存	-	高台 4.4	-	灰白5Y8/1	底部に煤付着。
420	045-04	陶器	椀	3区	-	近世包含層	底部7/12	8.4	高台 3.2	4.8	灰黄2.5Y7/2	端反椀。灰釉。白泥による梅花文。内面白泥。
421	079-04	陶器	皿	3区	-	灰色シルト	底部5/12	-	高台 3.3	2.35	灰白2.5Y8/2	長方形皿。陶体染付。松枝文。
422	040-03	陶器	椀	3区	-	包含層	底部10/12	-	高台 4.2	-	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
423	147-03	陶器	椀	3区	-	灰色(包) ※貝層	底部6/12	-	高台 3.2	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。水割文。
424	040-04	陶器	椀	3区	-	包含層	底部10/12	-	高台 4.6	-	灰黄2.5Y6/2	鉄釉。
425	039-02	陶器 (伊賀)	椀	3区	-	包含層	底部完存	-	高台 5.9	-	灰白2.5Y8/1	灰釉+鉄釉+鉄釉。
426	043-02	陶器	皿	3区	-	包含層	底部完存	-	高台 6.2	-	灰白2.5Y8/1	灰釉。
427	043-03	陶器	椀	3区	-	近世包含層	底部7/12	-	高台 4.5	-	灰白N8/	透明釉。
428	042-02	陶器	椀	3区	-	近世包含層	底部11/12	-	高台 4.0	-	灰白5Y7/1	鉄釉。
429	148-02	陶器	鉢	3区	-	灰色シルト層	口縁部1/12	17.8	-	-	灰白N8/	鉄釉。
430	079-03	陶器	鉢	3区	-	灰色シルト	底部完存	-	高台 5.7	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。底部外面に墨書「コヤ」。
431	041-05	陶器	蓋	3区	-	包含層	摘み完存	摘み 3.6	-	-	橙色7.5YR6/6	灰釉。
432	041-01	陶器	蓋	3区	-	包含層	口縁部2/12	8.4	-	1.8	灰黄2.5Y7/2	鉄釉。
433	147-02	陶器	蓋	3区	-	灰色シルト	底部4/12	11.8	7.0	2.2	灰白N8/	透明釉。
434	075-02	陶器	蓋	3区	-	包含層	口縁部3/12	16.0	鏝 20.0	-	灰白2.5Y8/2	灰釉。
435	079-01	陶器	土瓶	3区	-	灰色シルト	口縁部2/12	8.2	-	-	灰白5Y8/1	鉄釉。
436	075-01	陶器	土瓶	3区	-	近世包含層	底部6/12	9.1	7.0	11.6	灰白5Y8/1	鉄釉。底部外面に墨書「八二」。
437	073-01	陶器 (常滑)	鉢	3区	-	包含層	口縁部1/12	39.3	-	-	橙7.5YR7/6	内部に工具痕
438	073-03	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	-	近世包含層	口縁部1/12	39.6	-	-	灰白2.5Y8/2	播目12本/3.4cm。
439	074-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	-	近世包含層	底部5/12	-	14.0	-	灰白2.5Y8/2	播目13本/4.1cm。
440	043-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	3区	-	包含層	底部2/12	-	14.2	-	灰白2.5Y8/2	摩滅激しく内外ともに不明瞭。
441	078-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	3区	-	灰色シルト	口縁部6/12	17.3	高台 8.4	8.0	浅黄2.5Y7/3	片口鉢。灰釉。底部外面に墨書。
442	045-05	陶器	徳利	3区	-	近世包含層	底部1/12	-	高台 10.8	-	灰白2.5Y8/2	
443	039-01	陶器 (常滑)	甕	3区	-	Pit2	口縁部1/12	43.4	-	-	橙色7.5YR7/6	陶製井戸枠下端部の可能性あり。
444	073-02	陶器 (常滑)	甕	3区	-	近世包含層	口縁部1/12	27.6	-	-	橙色7.5YR7/6	外面に波状文。
445	042-01	陶器 (常滑)	甕	3区	-	包含層	底部1/12	-	29.4	-	橙色2.5YR6/6	
446	078-01	瓦	軒棧瓦	3区	-	灰色シルト	4/12以下	-	-	-	暗灰N3/	瓦当無文。
447	074-02	瓦	丸瓦	3区	-	包含層	2/12以下	-	-	6.5	暗灰N3/	
448	076-01	瓦	丸瓦	3区	-	包含層	2/12以下	-	-	7.9	暗灰N3/	
449	040-02	磁器	蓋	3区	-	Pit4	口縁部3/12	4.4	-	-	灰白5Y8/1	合子。染付。
450	038-01	磁器 (肥前)	仏飯具	3区	-	包含層	裾部11/12	-	4.0	-	灰白5Y8/1	染付。
451	044-02	磁器 (肥前)	椀	3区	-	包含層	底部8/12	10.3	4.2	5.1	灰白N8/	染付。外：幾何学文、内：五弁花文。
452	044-01	磁器 (肥前)	椀	3区	-	近世包含層	底部11/12	9.7	4.8	3.9	灰白N8/	染付。蔓草文。
453	045-02	磁器 (肥前)	椀	3区	-	包含層	底部5/12	-	高台 4.4	-	灰白N7/	染付。
454	041-02	磁器 (肥前)	椀	3区	-	包含層	底部7/12	-	高台 3.6	-	灰白2.5Y8/1	染付。蛇ノ目軸刺。
455	042-04	磁器	椀	3区	-	近世包含層	底部9/12	-	高台 3.7	-	灰白N8/	透明釉。
456	044-04	磁器 (肥前)	皿	3区	-	包含層	口縁部3/12	10.2	-	-	灰白N8/	染付。
457	044-05	磁器 (肥前)	皿	3区	-	包含層	口縁部3/12	13.8	高台 9.8	3.6	灰白N8/	染付。亀甲文。
458	146-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	灰色シルト	口縁部1/12	10.8	-	-	灰白N8/	端反椀。染付。
459	146-04	磁器 (肥前)	椀	3区	-	灰色シルト	口縁部2/12	10.8	-	-	灰白N8/	染付。唐子文。
460	044-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	近世包含層	口縁部1/12	11.8	-	-	灰白N8/	染付。花卉文。
461	039-03	磁器	椀	3区	-	包含層	口縁部3/12	12.4	-	-	灰白5Y8/1	染付。山水文。
462	044-06	磁器 (肥前)	椀	3区	-	包含層	底部5/12	-	高台 6.0	-	灰白N8/	広東椀。染付。青海波文。
463	146-02	磁器 (肥前)	椀	3区	-	褐色(包)	底部9/12	10.6	高台 4.1	5.7	灰白N8/	染付。蔓草文+寿
464	079-02	磁器 (肥前)	皿	3区	-	灰色シルト	底部6/12	-	8.8	-	灰白N8/	染付。草花文。蛇ノ目凹形高台。
465	038-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	包含層	底部8/12	-	高台 3.6	-	灰白2.5Y7/1	筒形椀。染付。外：花文、内：梅花文。
466	040-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	包含層	底部10/12	-	高台 3.5	-	灰白5Y8/1	透明釉。朱の裏銘。
467	045-01	磁器	皿	3区	-	近世包含層	口縁部6/12	10.2	高台 5.4	2.8	灰白N8/	波状口縁。染付。幾何学文。
468	038-02	磁器 (肥前)	皿	3区	-	包含層	底部5/12	-	高台 6.8	-	灰白5Y8/1	染付。草木文、五弁花文。

第49表-9 第8次調査出土遺物観察表



遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
469	148-01	磁器 (瀬戸・美濃)	小杯	3区	-	灰色(包)	口縁部10/12	7.0	高台 2.6	3.0	灰白N8/	染付。山水楼閣文。
470	147-01	磁器 (肥前)	皿	3区	-	灰色(包)	口縁部2/12	34.8	-	-	灰白N8/	染付。
471	021-01	木製品 (クリ)	角材	3区	-	黒褐色土	10/12以下	幅 12.0	厚 6.6	残長 110.7	-	
472	020-01	木製品 (トガサワラ)	杭	3区	-	灰色(包)	10/12以下	幅 7.8	厚 4.3	残長 43.5	-	
473	022-01	木製品 (ツガ属)	角材	3区	-	黒褐色土	10/12以下	幅 4.3	厚 3.1	残長 41.6	-	釘穴4ヶ所。
474	022-02	木製品 (カツラ)	加工材	3区	-	黒褐色土	10/12以下	幅 3.2	厚 5.0	残長 22.3	-	
475	030-02	金属製品	釘	3区	-	包含層	完形	一辺 0.8	-	長 15.5	-	
476	030-03	金属製品	釘	3区	-	-	完形	一辺 0.5	-	長 9.8	-	
477	030-04	金属製品	釘	3区	-	黒褐色土	ほぼ完形	一辺 0.2	-	長 4.4	-	
478	030-01	金属製品	鍬先	3区	-	-	ほぼ完存	-	-	長 30.2	-	木質あり。
479	067-01	土師器	蓋	3区	-	造成土	5/12	11.5	-	2.5	浅黄7.5YR8/4	五角形
480	077-03	土師器	焙烙	3区	-	-	口縁部1/12	39.6	-	-	オリーブ黒 5Y3/1	内面に煤付着。
481	063-01	土師器	焙烙	3区	-	造成土	口縁部1/12	39.8	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/3	炭化物付着。
482	063-02	土師器	壺	3区	-	造成土	口縁部3/12	4.7	3.8	6.5	にぶい黄橙 10YR6/3	塩壺。
483	048-01	陶器 (常滑)	甕	3区	-	造成土	口縁部1/12	48.0	-	-	橙2.5YR6/8	
484	050-01	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	3区	-	造成土	口縁部1/12	35.3	-	-	灰白2.5Y8/2	描目16本/4.3cm。一部に泥漿のたまり、垂れあり。刻印「大」。
485	050-02	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	3区	-	造成土	体部3/12	38.3	-	-	灰白2.5Y8/2	描目16本/4.3cm。一部に泥漿のたまり、垂れあり。
486	049-01	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	3区	-	造成土	底部6/12	37.4	15.2	15.4	にぶい赤褐 5YR4/4	描目19本/5.3cm。
487	051-02	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	3区	-	造成土	底部3/12	-	14.0	-	灰白10YR8/2	描目19本/6cm。
488	060-01	陶器 (瀬戸・美濃)	甕	3区	-	造成土	口縁部2/12	23.6	-	-	灰白2.5Y8/2	鉄軸。化粧掛け。
489	031-02	陶器 (瀬戸・美濃)	水甕	3区	-	攪乱	口縁部3/12	26.2	-	-	灰白2.5Y8/1	灰軸。
490	063-06	陶器	皿	3区	-	造成土	ほぼ完形	8.1	3.3	1.5	淡黄2.5Y8/3	灰軸。油煙付着。
491	063-07	陶器	皿	3区	-	造成土	底部4/12	8.8	3.6	1.7	灰白2.5Y8/2	灰軸。
492	063-08	陶器	皿	3区	-	造成土	口縁部2/12	10.4	-	-	灰白5Y7/1	灰軸。
493	063-04	陶器	香炉	3区	-	造成土	口縁部3/12	10.1	-	-	灰白5Y8/1	鉄軸。体部上端に円形窓。
494	033-05	陶器	椀	3区	-	攪乱	底部3/12	-	4.6	-	灰白2.5Y8/1	陶体染付。
495	033-01	陶器	椀	3区	-	攪乱	口縁部4/12	10.7	-	-	灰白2.5Y8/2	鉄軸。
496	078-03	陶器	椀	3区	-	-	底部完存	10.6	高台 2.9	6.7	灰白2.5Y8/2	鉄軸。
497	077-04	陶器	鉢	3区	-	-	底部1/12	-	8.0	-	灰白N8/	鉄軸化粧掛け。
498	061-03	陶器	香炉	3区	-	造成土	底部完存	-	6.2	-	白9/	3脚。体部下端に窓。
499	032-03	陶器 (万古)	急須	3区	-	造成土	底部9/12	-	5.8	-	にぶい赤褐色 5YR4/3	外面に漢詩、裏銘。
500	062-02	陶器	鉢	3区	-	造成土	口縁部2/12	12.3	8.3	10.4	にぶい赤褐色 2.5YR5/2	鉄軸。火障。
501	066-03	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部3/12	13.2	摘み 2.8	3.1	灰白2.5Y8/2	土鍋蓋。灰軸。
502	066-02	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部4/12	16.4	摘み 3.4	3.6	灰白10YR8/2	土鍋蓋。灰軸(沸騰気味)。
503	066-01	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部10/12	16.3	摘み 3.8	3.6	灰白2.5Y8/2	土鍋蓋。灰軸。
504	064-04	陶器	鍋	3区	-	造成土	口縁部3/12	13.6	-	-	淡黄2.5Y8/3	行平鍋。灰軸。
505	064-05	陶器	鍋	3区	-	造成土	体部2/12	14.9	-	-	淡黄2.5Y8/3	行平鍋。灰軸。
506	064-02	陶器	鍋	3区	-	造成土	口縁部4/12	15.0	-	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。灰軸。
507	065-01	陶器	鍋	3区	-	造成土	口縁部3/12	15.0	-	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。灰軸。
508	064-01	陶器	鍋	3区	-	造成土	口縁部4/12	16.4	-	-	淡黄2.5Y8/3	行平鍋。灰軸。
509	064-03	陶器	鍋	3区	-	造成土	体部3/12	16.5	-	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。灰軸。
510	065-02	陶器	鍋	3区	-	造成土	口縁部1/12	19.6	-	-	灰白2.5Y8/2	行平鍋。灰軸。
511	065-04	陶器	鍋	3区	-	造成土	把手完存	最大幅 4.5	高 1.5	長 8.0	灰白2.5Y8/1	灰軸(沸騰気味)。
512	034-03	陶器	蓋	3区	-	攪乱	口縁部11/12	5.6	2.5	-	灰白10YR8/2	灰軸。
513	066-04	陶器	蓋	3区	-	造成土	完形	4.6	-	1.5	灰黄2.5Y7/2	灰軸。
514	066-05	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部3/12	4.6	-	1.2	灰白N8/	灰軸。
515	067-05	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部4/12	8.0	-	3.0	にぶい黄橙 10YR5/3	灰軸。白泥イッチン技法で施文。
516	067-02	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部2/12	9.8	罎 12.8	3.0	灰白2.5Y8/1	灰軸。
517	065-03	陶器	土瓶	3区	-	造成土	口縁部7/12	8.8	-	-	灰白10YR8/2	灰軸。
518	031-01	陶器	土瓶	3区	-	攪乱	体部3/12	体部 20.0	-	-	灰白2.5Y8/1	鉄軸。
519	031-03	陶器	鍋	3区	-	攪乱	底部2/12	-	10.0	-	灰黄2.5Y7/2	灰軸。脚3方は仮定。
520	061-02	陶器 (常滑)	鉢	3区	-	造成土	口縁部3/12	16.7	-	-	黄灰2.5Y4/1	口縁部外面に沈線。

第49表-10 第8次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
521	062-01	陶器	鉢	3区	-	造成土	底部2/12	-	6.9	-	淡黄2.5Y8/3	鉄軸。
522	067-04	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部4/12	6.0	銚 8.0	-	にぶい橙 7.5YR7/4	灰軸+鉄絵。草木文、一部発色不良。
523	066-06	陶器	蓋	3区	-	造成土	口縁部9/12	5.7	-	2.2	灰白2.5Y7/1	鉄軸。白泥イッチン技法で施文。
524	063-03	陶器	花器	3区	-	造成土	口縁部完存	2.8	-	-	灰白7.5Y8/1	一輪差し。鉄軸化粧掛け。
525	062-03	陶器	花瓶	3区	-	造成土	底部完存	-	9.2	-	灰白2.5GY8/1	鉄軸。
526	032-01	陶器	徳利	3区	-	造成土	口縁部完存	3.5	-	-	灰白N8/	灰軸。
527	032-02	陶器	徳利	3区	-	造成土	肩部3/12	肩部 5.0	-	-	灰白5Y8/1	灰軸。
528	061-01	陶器	徳利	3区	-	造成土	底部6/12	-	9.0	-	灰黄2.5Y7/2	外：灰軸、内：泥漿。
529	063-05	陶器	徳利	3区	-	造成土	底部2/12	-	高台 10.2	-	灰5Y6/1	灰軸。
530	060-02	陶器	徳利	3区	-	造成土	底部完存	-	11.7	-	灰白2.5Y8/2	灰軸。
531	070-01	磁器	椀	3区	-	造成土	口縁部4/12	8.8	-	-	灰白5Y8/1	染付。丸文。
532	069-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	口縁部4/12	9.2	-	-	灰白5Y8/1	端反椀。染付口鏝。寶文。
533	032-04	磁器	椀	3区	-	造成土	口縁部3/12	9.0	-	-	白N9/	染付。草花文。
534	033-02	磁器 (肥前)	椀	3区	-	攪乱	口縁部3/12	9.0	-	-	白N9/	染付。草木文。
535	068-01	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	口縁部3/12	10.8	-	-	灰白5Y8/1	端反椀。染付。格子文。
536	033-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	攪乱	口縁部3/12	10.8	-	-	白N9/	染付。草木文。
537	034-01	磁器	椀	3区	-	攪乱	口縁部5/12	14.0	-	-	白N9/	染付。外：草花文、内：四方襷文。
538	033-06	磁器	椀	3区	-	攪乱	4/12	8.8	3.3	4.6	白N9/	染付。丸文。
539	071-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部完存	7.0	高台 3.4	4.4	灰白5Y8/1	染付。草花文。
540	070-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部完存	8.2	高台 3.4	5.0	灰白2.5Y8/1	端反椀。染付。草木文。
541	072-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部9/12	10.5	高台 4.0	5.6	灰白2.5Y8/1	端反椀。染付。蔓草文。
542	070-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部7/12	8.7	高台 3.0	4.7	灰白2.5Y8/1	染付口鏝。
543	069-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部6/12	9.2	高台 3.7	5.0	灰白5Y8/1	端反椀。染付。山水文。
544	068-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部7/12	-	高台 3.6	-	灰白2.5Y8/1	染付。松文。
545	068-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部完存 8/12欠け	10.8	-	-	灰白7.5Y8/1	広東椀。染付。草花文。
546	067-03	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	口縁部5/12	8.4	3.6	4.3	白N9/	赤絵上絵付。草花文一部剥脱。
547	071-04	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部8/12	-	高台 3.6	-	灰白5Y8/1	染付。草木文。
548	068-06	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部5/12	-	高台 3.0	-	灰白5Y8/1	染付。赤壁賦文。
549	071-01	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部6/12	11.6	高台 4.4	5.8	灰白2.5Y8/1	染付。見込みに「壽」。
550	069-01	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部7/12	9.0	高台 4.2	4.1	灰白7.5Y8/1	端反椀。染付。草花文。
551	072-01	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部完存	9.6	高台 3.6	5.0	灰白2.5Y8/1	端反椀。染付。外：日足文+蝶文、内：二重連弧文。見込みに「壽」。
552	069-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	口縁部4/12	10.4	-	-	灰白2.5Y8/1	端反椀。染付。蔓草文。
553	071-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部6/12	10.4	高台 4.0	6.1	灰白2.5Y8/1	端反椀。染付。蔓草文。
554	069-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部完存	10.2	高台 3.5	6.1	灰白2.5Y8/1	端反椀。染付。草花文。
555	067-06	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	口縁部3/12	10.0	-	-	白N9/	端反椀。赤絵上絵付。草花文。
556	072-02	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部2/12	-	高台 4.0	-	灰白5Y8/1	赤絵上絵付。一部剥脱。
557	034-02	磁器	椀	3区	-	攪乱	底部9/12	-	3.7	-	白N9/	染付。外：花文、内：草花文。裏銘。
558	032-05	磁器 (肥前)	椀	3区	-	焼土坑	底部3/12	-	7.2	-	灰白N8/	染付。蔓草文。
559	057-03	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	口縁部5/12	7.8	高台 4.4	13.8	灰白N8/	染付。外：梅花文、内：雷文+連弧文。
560	070-05	磁器 (肥前)	椀	3区	-	造成土	底部完存	8.0	高台 5.2	6.6	灰白2.5Y8/1	染付。外：蔓草文、内：雷文。裏銘。
561	072-04	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	3区	-	造成土	底部完存	11.3	高台 4.6	5.9	灰白2.5Y8/1	赤絵上絵付。一部剥脱。
562	033-04	磁器	蓋	3区	-	攪乱	口縁部3/12	9.2	-	-	白N9/	染付。
563	078-04	磁器	蓋	3区	-	-	摘み完存	-	摘み 3.1	-	白N9/	染付。金爛手。漆接合痕あり。
564	070-04	磁器 (肥前)	皿	3区	-	造成土	底部完存	4.8	高台 1.4	2.0	灰白2.5Y8/1	合子紅皿。透明軸。菊花文型成形。
565	068-04	磁器 (瀬戸・美濃)	小杯	3区	-	造成土	底部6/12	6.4	高台 2.4	3.0	灰白5Y8/1	透明軸。
566	068-02	磁器 (肥前)	徳利	3区	-	造成土	底部6/12	-	3.1	-	灰白5Y8/1	御神酒徳利。染付。
567	051-01	磁器 (肥前)	徳利	3区	-	造成土	底部完存	-	高台 10.0	-	灰白N8/	染付。雲文。
568	057-01	瓦	甍面戸	3区	-	造成土	2/12以下	-	-	垂長 4.1	灰5Y4/1	
569	059-01	瓦	軒棧瓦	3区	-	造成土	4/12以下	-	-	垂長 4.4	灰N4/	均整唐草文。
570	059-02	瓦	丸瓦	3区	-	造成土	1/12以下	-	-	-	灰N4/	
571	057-02	瓦	鬼瓦	3区	-	造成土	小片	-	-	-	灰N4/0	
572	054-01	瓦	丸瓦	3区	-	造成土	6/12以下	-	-	7.0	灰N4/	釘穴。

第49表-11 第8次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
573	055-01	瓦	軒丸瓦	3区	-	造成土	8/12以下	幅 15.4	-	8.1	灰7.5Y6/1	釘穴、引掛け突起。
574	053-01	瓦	丸瓦	3区	-	造成土	5/12以下	-	-	7.0	灰N4/	
575	056-01	瓦	平瓦	3区	-	造成土	4/12以下	-	-	谷深 2.2	灰2.5Y7/1	
576	052-01	瓦	平瓦	3区	-	造成土	3/12以下	-	-	谷深 2.4	灰N4/	
577	058-01	瓦	棧瓦	3区	-	造成土	3/12以下	-	-	-	灰N4/	
578	020-02	木製品 (クリ)	杭	3区	-	-	10/12以下	径 8.7	径8.7	長 34.8		腐食進む。
579	115-01	土師器	焙烙	4区	-	黒褐色土	口縁部2/12	35.6	-	-	褐灰7.5YR4/1	外面煤付着。
580	115-04	土師器	皿	4区	-	黒褐色土	口縁部5/12	7.5	-	0.9	橙5YR7/6	口縁端部に煤付着。
581	116-02	陶器 (京都・信楽)	椀	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部10/12	8.6	高台 3.9	4.2	灰白2.5Y7/1	灰釉沸騰。内外水割文。
582	116-03	陶器	椀	4区	-	黒褐色土	底部4/12	-	高台 7.0	-	灰白2.5Y8/2	筒形椀。灰釉。
583	114-02	陶器 (京都・信楽)	椀	4区	-	暗灰色粘質土	底部3/12	8.9	高台 2.5	5.4	灰白2.5Y7/1	端反椀。灰釉。内外水割文。
584	114-03	陶器	椀	4区	-	黒褐色土	口縁部5/12	12.2	高台 3.8	5.6	灰白2.5Y7/1	灰釉。
585	115-03	陶器	土瓶	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部4/12	5.5	-	-	灰白2.5Y7/1	鉄釉+灰釉化粧掛け。
586	113-01	陶器	土瓶	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部完存	9.0	-	-	灰白2.5Y8/1	鉄釉。
587	116-01	陶器	四耳壺	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部5/12	11.0	-	-	灰黄2.5Y7/2	灰釉。
588	115-02	瓦質土器	焜炉	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部3/12	18.6	-	-	灰N4/	
589	112-01	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	4区	-	暗灰色粘質土	底部完存	34.6	15.0	14.2	灰白2.5Y8/2	描目15本/4.3cm。
590	119-02	磁器 (肥前)	椀	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部5/12	11.2	-	-	灰白5Y8/1	染付。連続文。
591	119-04	磁器 (肥前)	椀	4区	-	黒褐色土	口縁部3/12	9.6	-	-	灰白2.5Y8/1	染付。蔓草文。
592	119-05	磁器 (肥前)	椀	4区	-	黒褐色土	底部完存	-	高台 3.2	-	灰白2.5Y8/1	染付。草花文+五弁花文。
593	120-01	磁器 (肥前)	皿	4区	-	暗灰色粘質土	底部4/12	9.6	高台 5.4	3.0	灰白2.5Y8/1	蓋の可能性あり。染付。草花文+五弁花文。
594	117-01	磁器 (肥前)	椀	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部6/12	11.3	高台 6.3	6.5	白N9/	広東椀。染付。宝蔓草文。
595	118-01	磁器 (肥前)	椀	4区	-	暗灰色粘質土	底部7/12	-	高台 3.8	-	灰白5Y8/1	染付。放射文、発色やや不良。ひび割れあり。
596	117-03	磁器 (肥前)	椀	4区	-	黒褐色土	底部8/12	8.4	高台 3.4	5.6	白N9/	染付。草花文+五弁花文。
597	118-02	磁器 (肥前)	椀	4区	-	暗灰色粘質土	底部2/12	-	高台 8.0	-	灰白2.5Y8/1	筒形椀。染付。飛雲文。蛇ノ目凹形高台。
598	119-03	磁器 (瀬戸・美濃)	猪口	4区	-	暗灰色粘質土	底部完存	高台 3.8	5.3	灰白N8/1	波状口縁。透明釉。釉が厚く垂れる。	
599	117-02	磁器 (肥前)	仏飯具	4区	-	暗灰色粘質土	底部完存	6.9	4.0	6.6	にぶい橙 5YR7/4	染付。菊花文。
600	120-02	磁器 (肥前)	皿	4区	-	暗灰色粘質土	底部4/12	13.8	高台 9.6	3.2	灰白2.5Y8/1	染付。外：宝文、内：雲文+格子文。蛇ノ目凹形高台。
601	118-03	磁器 (肥前)	皿	4区	-	暗灰色粘質土	口縁部6/12	10.5	高台 6.6	2.7	灰白2.5Y8/1	輪花皿。染付。山水文。発色やや不良。
602	120-04	磁器 (肥前)	蓋	4区	-	黒褐色土	口縁部5/12	8.5	鏝 10.0	3.2	灰白2.5Y8/1	染付。山水文。
603	119-01	磁器 (肥前)	蓋	4区	-	暗灰色粘質土	7/12	11.4	鏝 13.3	-	灰白2.5Y8/1	染付。草花文。
604	114-01	瓦	棧瓦	4区	-	暗灰色粘質土	3/12以下	-	-	-	灰N4/	
605	013-01	木製品 (スギ)	木札	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 4.3	厚 0.9	長 16.7	-	釘穴1個。墨書。 「亥九月元□立利合□□老歩八促元本丸屋」
606	013-02	木製品 (スギ)	木札	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 4.5	厚 0.6	長 16.9	-	釘穴1個。墨書。 「中□通本□地大上□□庄江」 「戌七月十七日博勞町百文嘉呂久」
607	010-05	木製品 (タケ亜科)	木札	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 2.8	厚 1.2	残長 18.0	-	
608	010-01	木製品 (スギ)	箸	4区	-	暗灰色粘質土	10/12以下	0.7	-	残長 19.4	-	
609	010-02	木製品 (スギ)	箸	4区	-	暗灰色粘質土	10/12以下	0.8	-	残長 19.3	-	
610	010-04	木製品 (アスナロ属)	箸	4区	-	暗灰色粘質土	10/12以下	0.6	-	残長 16.4	-	
611	010-03	木製品 (アスナロ属)	箸	4区	-	暗灰色粘質土	6/12以下	0.8	-	残長 11.1	-	
612	013-03	木製品 (スギ)	板材	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 12.9	厚 1.0	長 15.9	-	墨画。
613	011-02	木製品 (ヒノキ)	曲物底板	4区	-	暗灰色粘質土	ほぼ完存	幅 4.9	厚 1.0	残長 11.9	-	漆器。漆塗布。
614	011-01	木製品 (ヒノキ)	曲物底板	4区	-	暗灰色粘質土	完存	幅 5.3	厚 1.1	残長 15.2	-	
615	013-04	木製品 (ヒノキ)	曲物底板	4区	-	暗灰色粘質土	完存	幅 4.6	厚 0.5	長 9.0	-	
616	023-02	木製品 (スギ)	板材	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 11.3	厚 1.5	長 46.0	-	
617	023-01	木製品 (スギ)	杭	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 2.9	厚 1.3	長 47.7	-	釘穴3ヶ所。
618	023-03	木製品 (スギ)	角材	4区	-	暗灰色粘質土	完形	幅 4.1	厚 2.8	長 50.5	-	
619	118-05	磁器 (瀬戸・美濃)	皿	4区	-	灰褐色粘質土	口縁部2/12	13.6	-	-	灰白2.5Y8/1	染付。外：蔓草文、内：草花文。

第49表-12 第8次調査出土遺物観察表

土瓶等の蓋で、512・515・516は落し蓋形式である。523が鉄釉の他は灰釉を施すが、515・523は白泥イッチン技法で曲線を放射状に施文する。522も鉄釉で草木を描くが、一部発色不良となる。

499は急須、517・518は土瓶で、499は漢詩を刻む。504～510は行平鍋である。511もその把手と思われ、底部片519も同様であろう。釉は全て灰釉である。

497・500・520は鉢としておく。497・500は鉄釉、520は無釉であるが、497は化粧掛け、500は外面に火襷が残る。

524・525は花瓶、526～528は徳利、底部片529・530も徳利の底部と思われる。524は鉄釉を化粧掛けし、一輪差しの壺か。528の高台には重ね焼きの胎土目が残る。

**磁器** 531～561は椀、562・563は蓋、564は皿、565は小杯、566・567は徳利であるが、558は皿とすべきかも知れない。564は合子の紅皿で、菊花文成形の後、透明釉を施す。徳利は両者とも染付で、小型の566は御神酒徳利と思われる。対して567は大型の徳利で雲文を描く。

545は広東椀、532・535・541・543・550～555は端反椀で、端反椀が目立つ。546・555・556・561は赤絵上絵付で草花等を描くが、一部が剥離するものが多い。他は染付であるが、532・542は口鏝である。ここでも蔓草や草花を描くものが多いが、531・538は丸文、532は「寶」を大きく配置する。535は格子文、551は日足に蝶を重ねる。542は特異な記号を配置している。548は漢詩の赤壁賦文を、見込みには永楽□□と4文字配置するようである。また、底部は露胎となる。

**瓦** 568は甍面戸、569は軒棧瓦で均整唐草文を飾る。571は小片であるが、鬼瓦と思われる。570・572・574は丸瓦で、572には釘穴がある。573は瓦当が剥離しているが、軒丸瓦で、引掛け突起と釘穴をもつ。575・576は平瓦、577は棧瓦である。

**木製品** 578の杭のみである。材質はクリであるが、腐食が進んでいる。

#### (26) S Z 828出土遺物 (第196・197図)

**土師器** 579は焙烙、580は土師器の皿で、579は外面、580は口縁端部に煤が付着する。

**陶器** 581～584は椀、585・586は土瓶、587は四耳

壺、589は播鉢である。583は端反椀、582は底部片ではあるが、筒形椀と考えられる。椀は全て灰釉を施すが、581・583は内外とも氷割文を呈する。

**瓦質土器** 588のみである。小片ではあるものの焜炉と考えられる。

**磁器** 590～592・594～597は椀、593・600・601は皿、602・603は蓋、598は猪口、599は仏飯具である。598が瀬戸・美濃系で無文である他は、肥前系の染付である。594は広東椀、597は筒形椀で、598の口縁は猪口としたが、波状口縁を呈している。601は輪花皿、600は蛇ノ目凹形高台を呈する。草花を描くものが多いが、590は文字を変形させた放射文、597は飛雲文、600は宝文、601・602は山水文である。595は発色がやや不良で、器にもひび割れがある。

**瓦** 604は棧瓦で、小片である。角張った仕上げになっている。

**木製品** 605～607は、釘穴をもつことから荷札と考えられる。605は片面、606は両面に日付等の文字が書かれているが、607は破竹等のタケ垂科で文字も書かれていない。

608～611は箸としたが、材質はスギとアスナロ属がある。613～615は曲物の底板と考えられ、全てヒノキである。613には漆が塗布されている。617は杭、612・616・618は用途不明の板材または角材である。612には墨で幾何学模様が描かれている。

#### (27) 4区包含層出土遺物 (第197図)

図示できたものは磁器の皿(619)のみである。瀬戸・美濃系の染付で、蔓草や草花を描く。(森川)

## 3. 塗膜分析

### (1) はじめに

漆器製品の塗膜について、断面の顕微鏡観察、蛍光X線分析を行い、その構造より製作工程の考察を行う。

### (2) 方法

#### A. 断面観察

蛍光X線分析を行った後、包埋し、厚さ数 $\mu\text{m}$ になるまで#80、#120、#240、#1500、#4000、#10000の耐水紙やすりで研磨した。なお、包埋およびプレパラートへの接着は高透明エポキシ樹脂(ボンドEセット:コニシ株式会社製)で行った。完成した試料を光学顕微鏡(OPTIPHOTO-2: Nikon)およ



び落射顕微鏡 (OPTIPHOTO-2 : Nikon) で観察した。

## B. 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器はOLYMPUS製ハンドヘルド蛍光X線分析装置 DELTA DP-2000 Premiumを使用した。測定条件は励起用X線ターゲットが Rh、管電圧および管電流はSoilモードでビーム1が40keVおよび60 $\mu$ A、ビーム2が40keVおよび40 $\mu$ A、ビーム3が15keVおよび25 $\mu$ A (軽元素測定時は15keV)、Miningモードのビーム1が40keVおよび100 $\mu$ A、ビーム2が10keVおよび200 $\mu$ Aである。装置の測定部径は9mm、計測時間はSoilモードが90秒、Miningモードが60秒で、大気雰囲気下で、ワークステーション (卓上式装置) を用いて測定した。原子番号12番のMg (マグネシウム) 以上の元素の検出が可能である。

### (3) 結果

#### A. No.39漆椀 R028-06

漆椀は外側は黒色、内側は赤色の塗膜である。また漆の剥離部は黒色を呈する。

##### 1) 断面観察

漆膜断面の顕微鏡観察を漆椀の外側と内側の両方で行った。

外側：木胎の上に下位より下地層1層、漆層2層が観察できた。下地層は層厚69~87 $\mu$ mであり、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察された。漆層Iは層厚12~25 $\mu$ mであり、粒子のない透明な層ある。なお、漆層Iの上面は平坦である。漆層IIは層厚20 $\mu$ mであり、鉍物などは確認されないが有色である。

内側：下地層1層、漆層1層、赤色漆層1層が観察された。下地層は層厚18 $\mu$ mまでが観察でき、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察された。漆層は層厚3~5 $\mu$ mととても薄く、下位の炭粉粒子が僅かに混入している。なお、漆層の上面は平坦である。赤色漆層は層厚20 $\mu$ mであり、赤色の鉍物粒子が観察でき、空隙には漆が観察された。鉍物粒子は径1 $\mu$ m程度の大きさである。

##### 2) 蛍光X線分析

外側の黒色部と内側の赤色部で分析を行った。の黒色部で分析を行った。

外側：鉄 (Fe)、カルシウム (Ca) のピークが高く、硫黄 (S)、ケイ素 (Si)、マンガン (Mn)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

内側：鉄 (Fe) のピークが高く、硫黄 (S)、ケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、マンガン (Mn)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

#### B. No.41底板 R028-05

底板は全面に赤色塗膜が観察できる。また、漆の剥離部でも赤色が確認できる。

##### 1) 断面観察

木胎の上に下位より赤色漆層1層、漆層2層が観察できた。赤色漆層は層厚2~10 $\mu$ mであり、赤色鉍物が観察された。鉍物粒子は1 $\mu$ m以下で極めて細かく空隙は少ないが、僅かな空隙と木胎との接地面で漆が観察できる。漆層Iは層厚3~5 $\mu$ mととても薄く、粒子は無いが色調がオレンジ色で有色である。漆層IIは層厚16~21 $\mu$ mで、粒子の無い透明な層である。漆層IIの上面は平坦である。

##### 2) 蛍光X線分析

鉄 (Fe) のピークが高く、硫黄 (S)、カルシウム (Ca)、マンガン (Mn) が検出された。

#### C. No.99漆椀 R012-01

漆椀は外側は黒色に全面を塗った後、赤色で彩色がなされている。内側は黒色のみである。

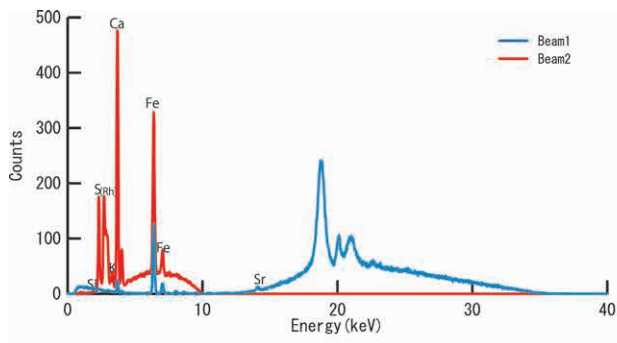
##### 1) 断面観察

漆膜断面の顕微鏡観察は蛍光X線では外側と内側の黒色部が同様な結果であったため、外側の彩色のある赤色部より試料を採取して行った。

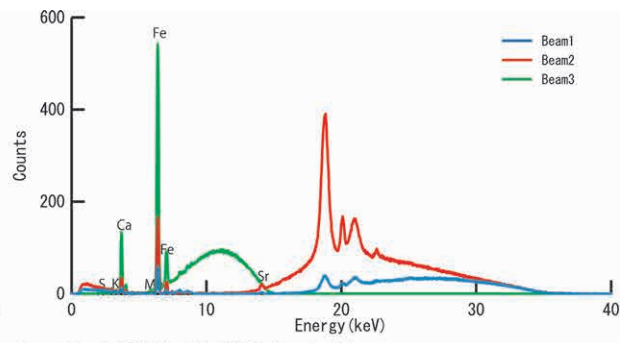
木胎の上に下位より下地層2層、漆層1層、赤色漆層1層が観察できた。下地層Iは層厚23~53 $\mu$ mであり、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。なお、炭粉の空隙には漆が観察された。下地層IIは層厚23~53 $\mu$ mであり、下位の炭粉下地層に比べると粒子の極めて細かな炭粉が観察され、空隙が少ないが僅かに見られる空隙には漆が観察される。漆層は層厚69~92 $\mu$ mであり、粒子の無い透明な層である。赤色漆層は層厚21~32 $\mu$ mであり、赤色の鉍物粒子が観察される。鉍物粒子は径1 $\mu$ m程度の大きさである。

##### 2) 蛍光X線分析

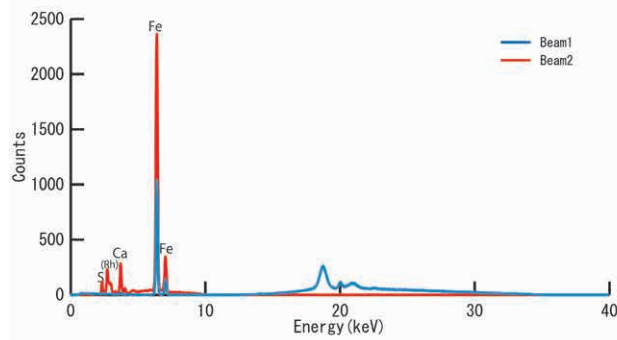
外側、内側の黒色部と外側の彩色された赤色部で



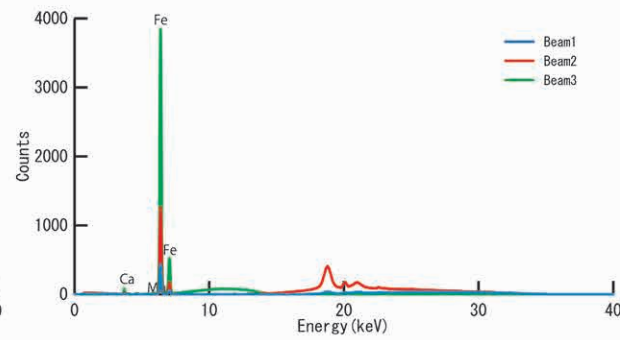
1 No. 3 漆椀 外側黒色 Mining



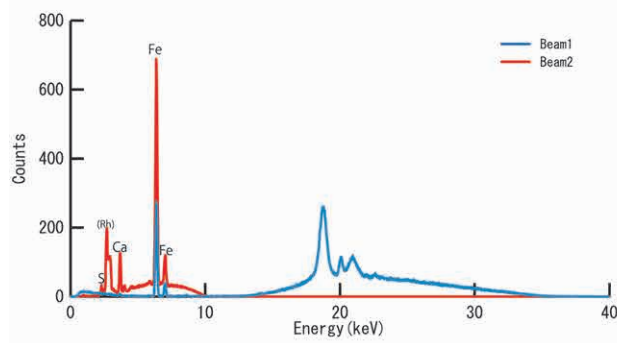
2 No. 3 漆椀 外側黒色 Soil



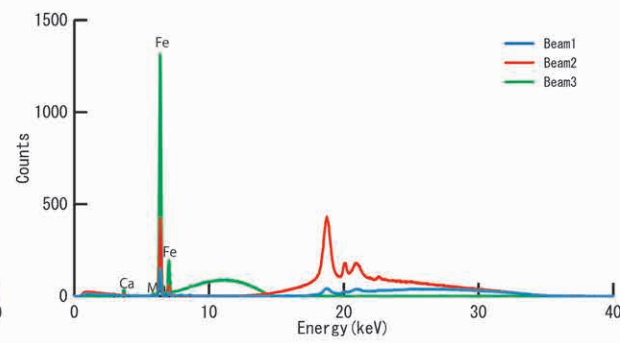
3 No. 3 漆椀 内側赤色 Mining



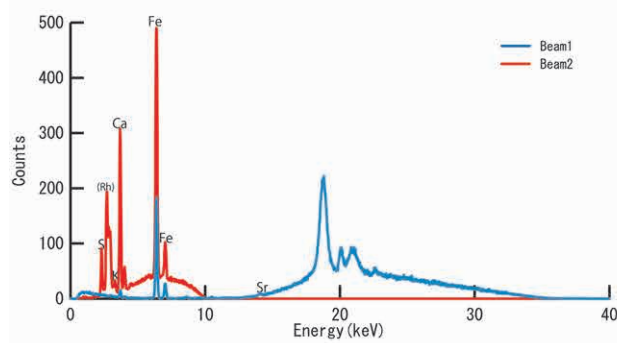
4 No. 3 漆椀 内側赤色 Soil



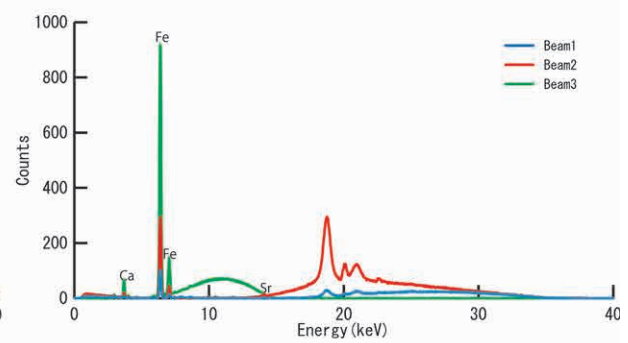
5 No. 4 底板 赤色 Mining



6 No. 4 底板 赤色 Soil

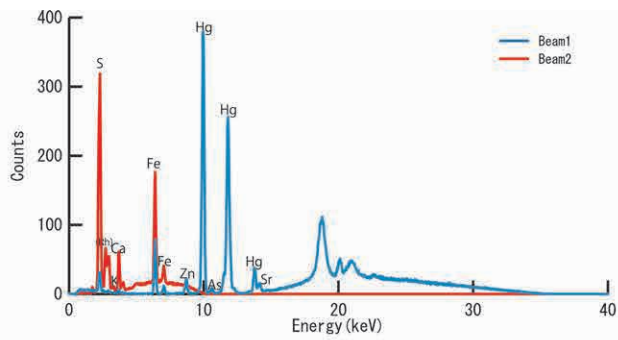


7 No. 9 漆椀 外側黒色 Mining

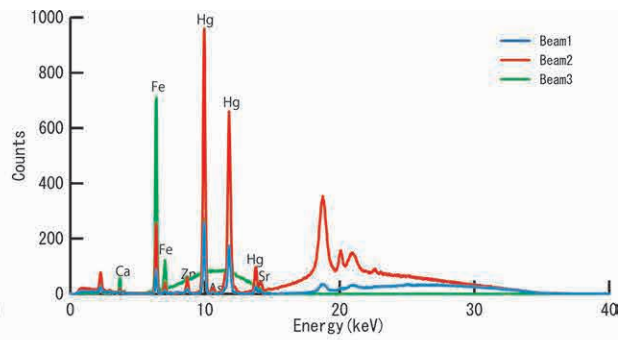


8 No. 9 漆椀 外側黒色 Soil

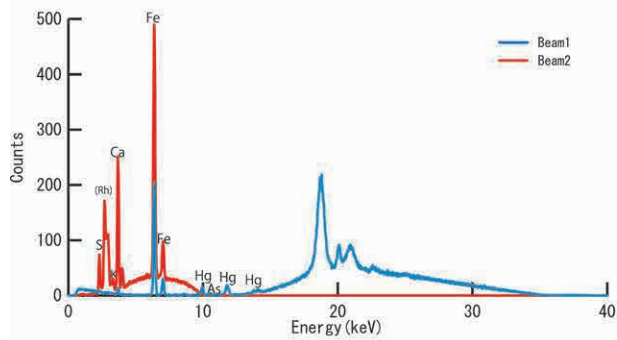
第198図 第8次調査蛍光X線分析結果 I



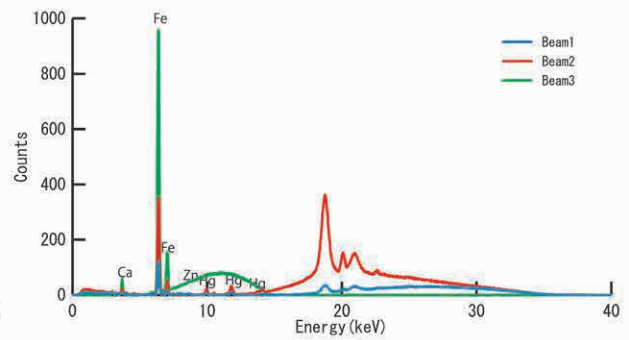
9 No.99 漆碗 外側赤色 Mining



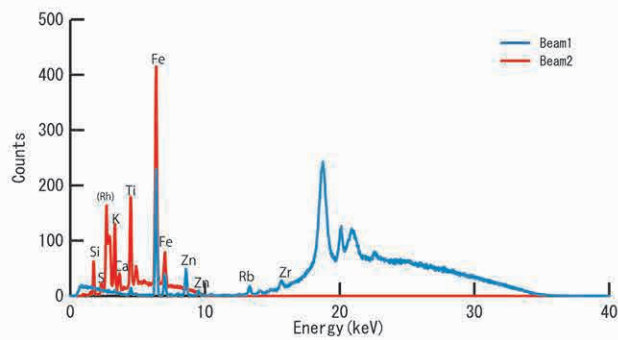
10 No.99 漆碗 外側赤色 Soil



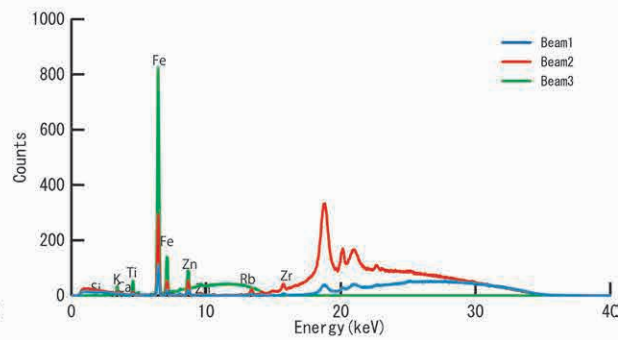
11 No.99 漆碗 内側黑色 Mining



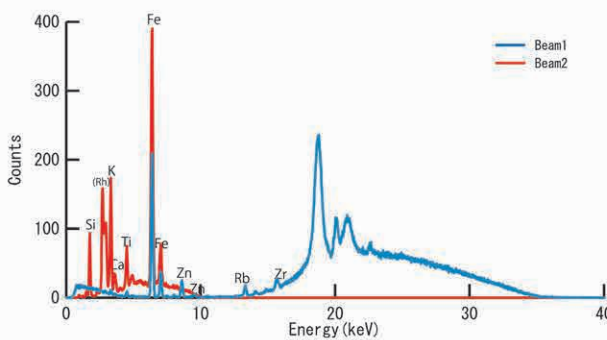
12 No.99 漆碗 内側黑色 Soil



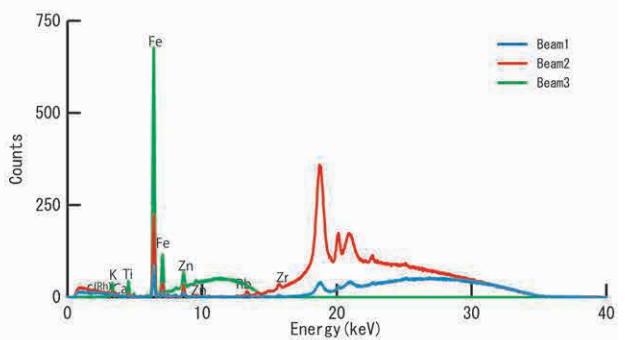
13 No.369 下駄 黑色 Mining



14 No.369 下駄 黑色 Soil

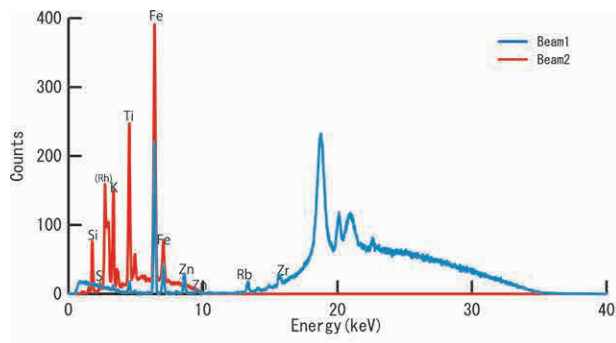


15 No.369 下駄 赤色 Mining

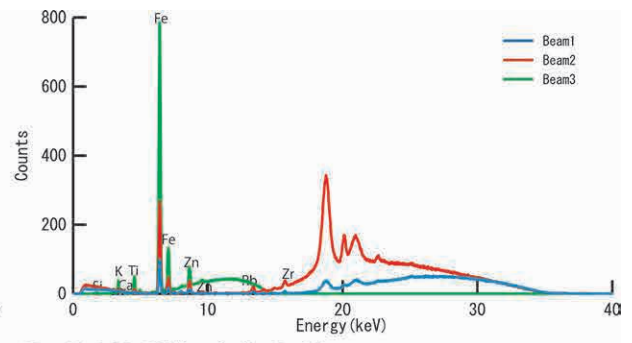


16 No.369 下駄 赤色 Soil

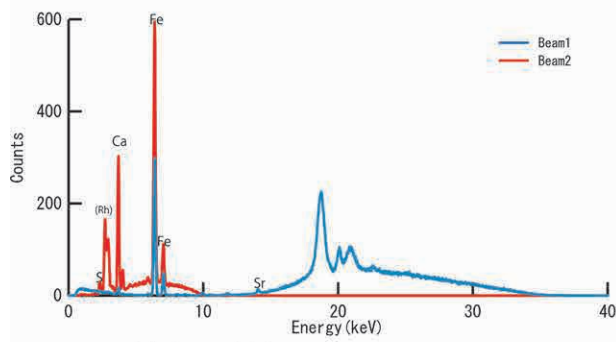
第199図 第8次調査蛍光X線分析結果Ⅱ



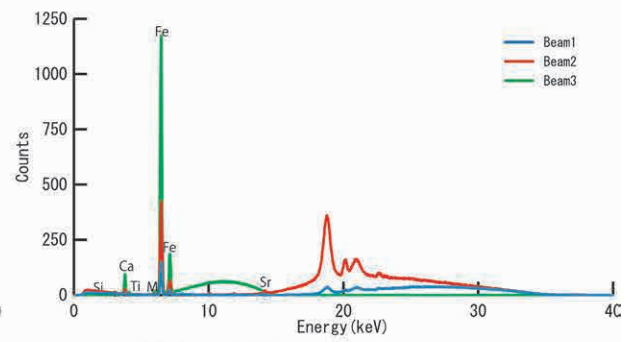
17 No.369 下駄 白色 Mining



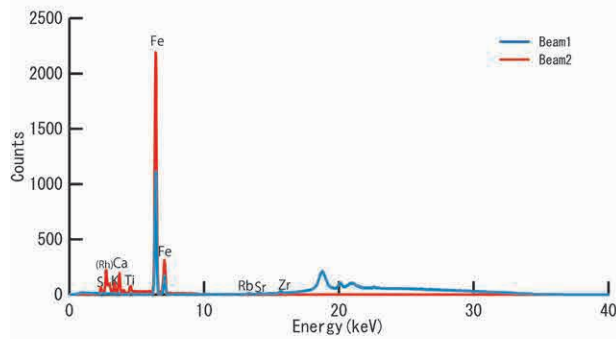
18 No.369 下駄 白色 Soil



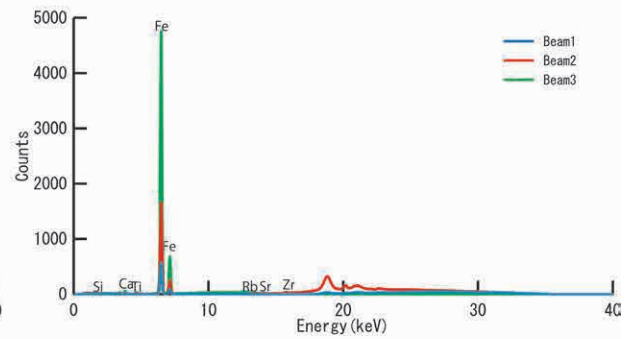
19 No.395 漆大皿 黒色 Mining



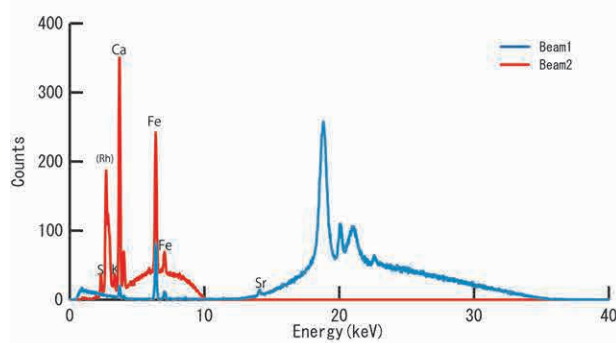
20 No.395 漆大皿 黒色 Soil



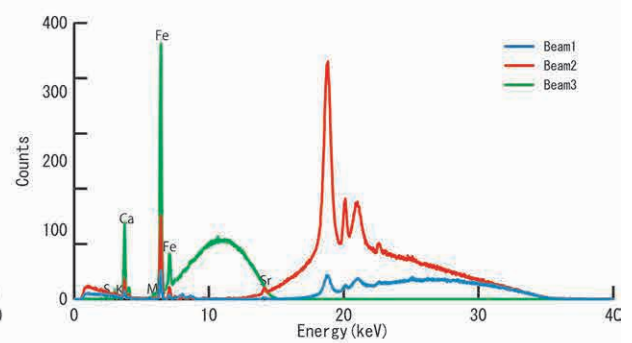
21 No.395 漆大皿 赤色 Mining



22 No.395 漆大皿 赤色 Soil



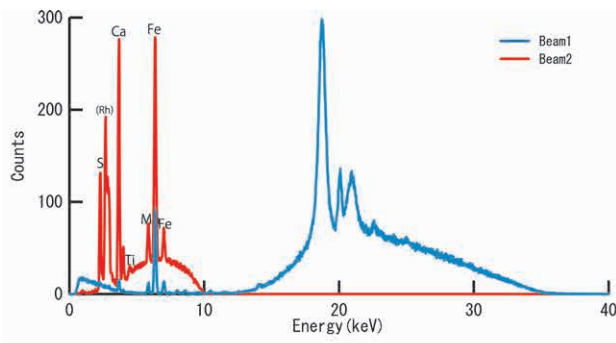
23 No.399 漆椀 黒色 Mining



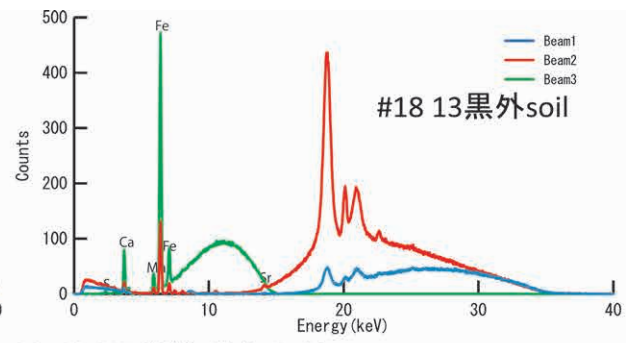
24 No.399 漆椀 黒色 Soil

第200図 第8次調査蛍光X線分析結果Ⅲ

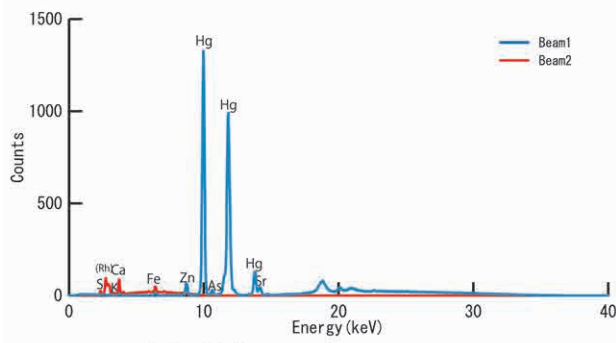




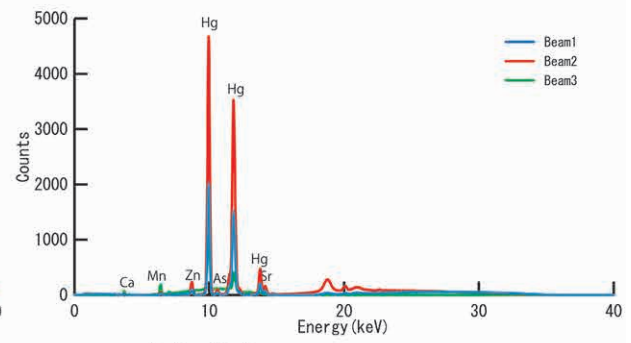
25 No.397 底板 黑色 Mining



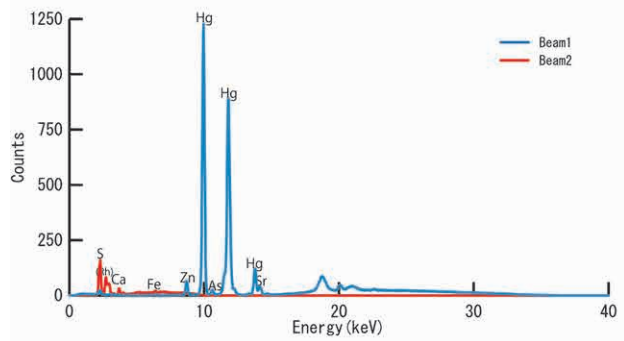
26 No.397 底板 黑色 Soil



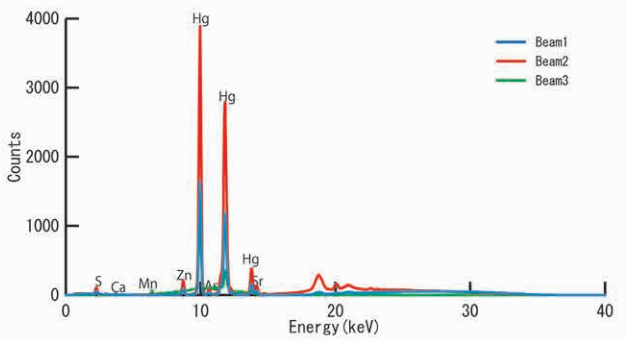
27 No.365 木札 黑色 Mining



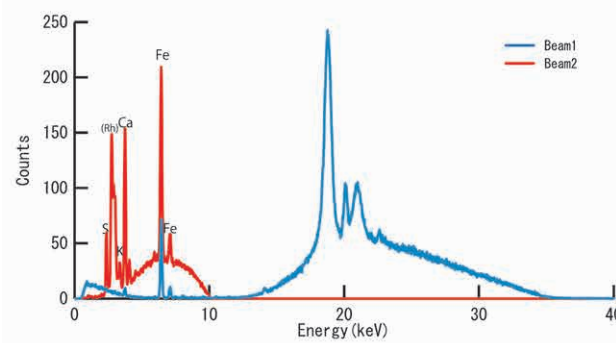
28 No.365 木札 黑色 Soil



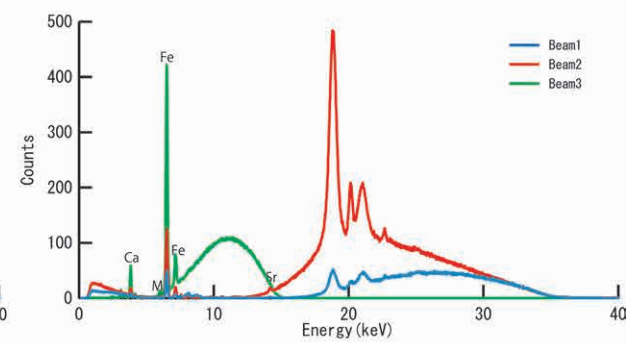
29 No.365 木札 赤色 Mining



30 No.365 木札 赤色 Soil



31 No.613 底板 外側黑色 Mining



32 No.613 底板 外側黑色 Soil

第201図 第8次調査蛍光X線分析結果IV

分析を行った。黒色部は共に同じ結果であり、鉄 (Fe) のピークが高く、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、ストロンチウム (Sr) が検出された。なお、内側では水銀 (Hg) が検出されている。赤色部では水銀 (Hg) のピークが高く、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、亜鉛 (Zn)、砒素 (As)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

#### D. No.369下駄 R017-01

下駄は台の天にあたる部分に赤色、白色で模様が描かれている。

##### 1) 断面観察

彩色部の白色が用いられる部分で試料採取を行った。

木胎の上に下地層1層、赤色層1層、白色層1層が観察できた。下地層は層厚63~96 $\mu\text{m}$ であり、1 $\mu\text{m}$ 程度の鉱物粒子が見られるが、空隙には漆が観察されない。赤色層は層厚48~98 $\mu\text{m}$ であり、赤色の鉱物粒子が観察され、粒子は1 $\mu\text{m}$ 以下できわめて細かい。なお、赤色層に空隙が少ないが僅かに見られる空隙には漆が観察されない。白色層は層厚12~18 $\mu\text{m}$ であり、白色の鉱物粒子が観察でき、鉱物粒子は1 $\mu\text{m}$ 以下のきわめて細かい粒子である。粒子の無い透明な層である。白色層には空隙がほとんど見られず、僅かに見られる空隙には漆が観察されない。

##### 2) 蛍光X線分析

下地が見られた黒色部、彩色された赤色部、白色部で分析を行った。いずれも同様の結果であり、鉄 (Fe) のピークが高く、ケイ素 (Si)、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、亜鉛 (Zn)、ルビジウム (Rb)、ジルコニウム (Zr) が検出された。

#### E. No.395漆大皿 R027-01

漆大皿は外側、内側が黒色、口縁が赤色の塗膜である。

##### 1) 断面観察

赤色部から試料採取を行った。

木胎の上に下位より、下地層1層、漆層1層、赤色漆層1点が観察できた。下地層は層厚29~54 $\mu\text{m}$ であり、1 $\mu\text{m}$ 以下の鉱物粒子が見られるが、空隙には漆が観察されない。漆層は層厚0~13 $\mu\text{m}$ であり、上部は平坦である。赤色漆層は層厚33~40 $\mu\text{m}$

であり、赤色の鉱物粒子が観察でき、鉱物粒子は径1 $\mu\text{m}$ 程度である。なお、赤色漆層の空隙には漆が観察される。

##### 2) 蛍光X線分析

外面と内面の黒色部で分析を行った。ともに鉄 (Fe)、カルシウム (Ca) のピークとともに、ケイ素 (Si) が検出された。

#### F. No.399漆椀 R005-03

漆椀は外側内側ともに黒色の塗膜である。

##### 1) 断面観察

木胎の上に下位より、下地層2層、漆層1層が観察できた。下地層Iは層厚32~61 $\mu\text{m}$ であり、細い棒状と粗い多角形の炭粉粒子が見られる。炭粉の空隙には僅かだが漆が観察できる。なお、下地層Iの上部は平坦である。下地層IIは層厚9 $\mu\text{m}$ であり、粗い多角形の炭粉粒子が見られる。漆層は35~40 $\mu\text{m}$ であり、粒子の無い透明な層である。

##### 2) 蛍光X線分析

鉄 (Fe) のピークが高く、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

#### G. No.397底板 R027-02

底板は上面下面が黒色の塗膜である。

##### 1) 断面観察

木胎の上に下位より漆層2層が観察できた。漆層Iは層厚38~76 $\mu\text{m}$ であり、木胎に染みこむような形で観察でき、不定形である。漆層IIは層厚63~226 $\mu\text{m}$ であり、有色で不均一な層であり、漆と他の液体が混ざっているような印象を受ける。

##### 2) 蛍光X線分析

鉄 (Fe) のピークが高く、硫黄 (S)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

#### H. No.365木札 R009-02

木札は一方が黒色、一方が赤色の塗膜である。

##### 1) 断面観察

木胎の上に下位より漆層2層、赤色漆層1層が観察された。漆層Iは層厚65~75 $\mu\text{m}$ であり、粒子の無い透明な層である。漆層IIは層厚60~72 $\mu\text{m}$ であり、粒子の無い透明な層である。赤色漆層は42 $\mu\text{m}$ であり、径1 $\mu\text{m}$ 程度の赤色の鉱物粒子が観察され

る。鉱物粒子の空隙には漆が観察される。

## 2) 蛍光X線分析

黒色部と赤色部で分析を行った。ともに水銀 (Hg) のピークが高く、硫黄 (S)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe) 亜鉛 (Zn)、砒素 (As)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

### I. No.613底板 R011-02

底板は黒色の塗膜である。

#### 1) 断面観察

木胎の上に下位より下地層、漆層が観察された。下地層は層厚15~52 $\mu\text{m}$ であり、木胎の細胞に入り込んでいるように観察でき、僅かな空隙には漆が観察できた。粒子がcaろうじて観察できたため、きわめて細かい炭粉である。漆層は層厚55 $\mu\text{m}$ であり、粒子の無い透明な漆層である。

#### 2) 蛍光X線分析

鉄 (Fe) のピークが高く、硫黄 (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、マンガン (Mn)、ストロンチウム (Sr) が検出された。

#### (4) 考察

1) 本遺跡では漆器の下地層は炭粉下地および、鉱物下地であった。なお、No.369下駄、No.395漆大皿が鉱物下地であった。漆層は赤色漆層を合わせて、1層から3層まで観察できた。

2) 本遺跡における漆器の下地は、4点において炭粉を利用して下地塗りが行われており、2点において鉱物を利用して下地塗りが行われている。なお、No.41底板、No.397底板、No.365木札は下地がない。

炭粉を利用する場合に、用いる下地結合剤には漆液を利用する炭粉漆下地と、柿渋を利用する炭粉渋下地が主流である。炭粉に漆液を混ぜる炭粉漆下地は古くは縄文時代から用いられてきた技法である。平安時代中頃までは主流であったが、平安時代後期からは工程を大幅に簡略化し簡便な漆器を製作する中で、炭粉に柿渋を混ぜた炭粉渋下地の登場により、安価な漆器製作が行われるようになった。以降、主に見られる下地は炭粉渋下地にとって代わられた(四柳2002)。本遺跡の漆器では下地の炭粉の空隙には漆が見られるものばかりであったため、炭粉漆下地によって下地塗りが行われている。しかし、漆と炭粉の比率は試料によって異なり、炭粉漆下地が2

層確認できたNo.399漆椀では炭粉漆下地 I は漆液の観察が困難なほど炭粉が多かった。また、No.613では観察された炭粉がきわめて細かく、また木の細胞の中へ入り込んでいるのが観察されるため、炭粉漆下地ではなく油煙のような煤を利用した下地だった可能性が考えられる。

下地に鉱物を利用しているものは2点あるが、下地に鉱物粒子を利用する場合珪藻土からなる地の粉また地の粉をより細かく砕いた砥の粉に下地結合剤として漆液を混ぜるものがあるいわゆる砥の粉漆下地と呼ばれるものである。しかし、本試料はいずれも下地結合剤に漆液を利用しておらず、柿渋や膠などの土中で分解される有機質を利用していただけと考えられる。なお、観察された鉱物粒子は1 $\mu\text{m}$ 程度ときわめて細かく砥の粉と考えられる。

3) 下地層の次にほとんどの場合は漆層があるが、漆層の上面または下面が平坦になっているものがほとんどである。No.39漆椀、No.395漆大皿、No.365木札は下地層の次の漆層の上面が平坦である。No.99漆椀、No.399漆椀では下地層の上面が平坦である。これらは木胎や下地から出てくる表面の凹凸を緩やかにするために下地固めをした段階で平坦に削ったか、または下地塗りの仕上げに透き漆を塗った段階で平坦に削ったかの違いである。No.395漆大皿では、透き漆を塗った段階で削るもしくは研磨を行ったが、凹凸が大きすぎたのか、もしくは技法なのか下地層に達するまで削られている。なお、下地がないNo.365木札は漆層 I の上面が平坦であるため、漆を一度塗って乾かした段階で表面を平坦に削ったと考えられる。

4) 色調に関しては、赤色の表現では全て赤色鉱物粒子が観察された。光学顕微鏡下でいずれも赤色に観察されるが、No.39漆椀、No.41底板、No.395漆大皿では鉄 (Fe) が検出され、No.99漆椀、No.365木札では水銀 (Hg) と硫黄 (S) が検出される。前者は土や辰砂を産出する山から流れる川などから採取される酸化鉄から作られるベンガラに展色剤として漆液を混ぜた赤漆を利用しており、後者は水銀朱(辰砂などを砕いた顔料)に展色剤として漆液を混ぜた朱漆を利用していることがわかった。黒色の表現は漆製作の中で3種類あり、漆そのものの色合いで黒色漆とするものの他に、炭粉を混ぜた黒色漆、鉄粉

を混ぜ酸化させることで黒色に布で漉して鉄粉を回収した黒色漆があり、炭粉や鉄粉を添加することで漆黒になるとされている。本遺跡では黒色を示す漆器の漆層は粒子のない透明な漆であるが、他の試料と異なりNo.39漆椀、No.399漆椀、No.397底板では比較的強く鉄（Fe）が検出されている。黒色の表現には漆そのものの色合いで黒色を表現したものと、鉄粉を混ぜて酸化させ漆黒にして表現したものとがあると考えられる。白色はNo.369下駄でのみ確認できるが、カルシウム（Ca）、亜鉛（Zn）の値が高くなく、鉛（Pb）の検出もなかったため胡粉、亜鉛華、鉛白では無い。他の試料に比べるとルビジウム（Rb）、ジルコニウム（Zr）の検出があるが、黒色部、赤色部を分析した際にも検出されているため、これらは下地の鉱物由来の可能性が高い。鉱物粒子であることは間違いなく、カオリン、白雲母、シリカなどの鉱物由来の白色顔料と考えられる。なお、チタン（Ti）の検出が他の試料と比べると比較的高いが、チタン白は20世紀に開発された白色顔料であるため当てはまらない。

5) No.41底板は特殊で、下地は無く木胎に直接赤色漆を塗り、一度とても薄く漆を塗った後に透き漆を塗布し、その後に削って制作を終わらせており、削った跡が肉眼でも観察できる。

6) No.369下駄では、下地層から彩色の全てにおいて漆が利用されていない。

7) No.397底板は下地がなく、漆を塗布した後に見られる凹凸を緩やかにする削りや研磨の痕跡が見られず。また漆層Ⅱには漆液に他の液体を混ぜたように見えるが不均一である。製品に漆液を塗布し、また十分に混ざりきっていない有色の漆液をその上に塗布していると考えられる。

#### （5）まとめ

本遺跡の漆器は木胎を製作したのち、ほとんどの場合炭粉に漆液を混ぜた炭粉漆下地で下地塗りを行い、漆（漆層Ⅰ）を1層塗布し、下地塗りの後または漆層Ⅰを塗った後に表面の凹凸を削って緩やかにし、仕上げの漆（漆層Ⅱ、赤色漆層）を塗布して制作されている。中世以降の漆器製品は下地に炭粉を用い、漆の塗りが1・2回と少なくすることで安価で作業工程を簡略化させ、下地の炭粉の色彩を利用

し漆層に黒漆と同じ効果を得るなどの方法が各地に広がり多くなる。本遺跡の漆器でも同様の物が見られたが、大半は鉄粉を漆に混ぜ酸化させた後漉して鉄粉を回収して製作された黒漆を利用している。赤色はベンガラと水銀朱のいずれも利用されている。なお、砥の粉下地を用いた製品もあるが、下地結合剤には漆を利用せず、膠や柿渋などの分解されてしまうものを利用したと考えられる。

木胎や下地から出てくる凹凸を削る作業が下地層の上面と漆層Ⅰの上面で見られるのは、制作した職人やその地域性が異なるためと考えられる。また、下地のないものや通常の製造工程と異なる漆器や漆を利用していない下駄などがあり、松阪に留まらず多くの地域から人が集まるため、多様な技法を用いた製品が共に持ち込まれたと考えられる。

（金原裕美子（一社）文化財科学研究センター）

#### 【参考文献】

- ・ 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p. 449.
- ・ 岡田文男（1995）古代出土漆器の研究－顕微鏡で探る材質と技法－。京都書院，191p.
- ・ 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.
- ・ 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.
- ・ 島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，p. 176.
- ・ 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296.
- ・ パリノ・サーヴェイ（2000）宮沢中村遺跡，山梨県埋蔵文化財センター，p. 208-213.
- ・ パリノ・サーヴェイ（2002）木製品・種子製品の同定，桑名城下町遺跡発掘調査報告書 萱町93（法盛寺）地点，桑名市教育委員会，p. 57-60.
- ・ パリノ・サーヴェイ（2008）天の川遺跡理化学分析について，天の川遺跡 平成15～17年度（国）150・473号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 牧之原市文化財調査報告第1集，静岡県牧之原市教育委員会，p. 270-294.
- ・ 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第1号，植生史研究会，p. 242.



- ・ 四柳嘉章 (2002) 漆の技術と文化—出土漆の世界—。あらたな世界へ いくつもの日本Ⅱ, 岩波書店, p. 249-267.
- ・ 四柳嘉章 (2006) 漆Ⅰ, ものと人間の文化史131-I。法政大学, 252p.
- ・ 四柳嘉章 (2006) 漆Ⅱ, ものと人間の文化史131-II。法政大学, 435p.

## 4. 樹種同定 1

### (1) はじめに

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して

移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

### (2) 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス(Mount-Quick" aqueous": 大道産業)で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡(OPTIPHOTO-2: Nikon)によって40~1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### (3) 結果

表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

No.	器種	実測番号	出土遺構	結果(学名/和名)	その他
36	篋	R008-04	SK803	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
37	木札	R008-02	SK803	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
38	杓子	R001-03	SK803	<i>Fagus crenata</i> Blume ブナ	
39	漆椀	R028-06	SK803	<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ	漆
41	底板	R028-05	SK803	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	漆
42-1	曲物	R003-01	SK803	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
42-2	付け木	R003-01	SK803	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	柁目のみ
78	斎串	R028-03	1区包含層	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
99	漆椀	R012-01	SD816	<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ	漆
101	底板	R002-01	SE806	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	漆?
223	杓子	R018-01	2区近世包含層	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
226	底板	R005-02	2区近世包含層	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
227	底板	R006-01	2区近世包含層	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
228	底板	R007-02	2区近世包含層	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
285	栓	R028-02	2区近世包含層	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
286	傘部材	R009-04	2区黒褐色粘質土	<i>Styrax</i> エゴノキ属	傘ロクロ
287	底板	R002-02	2区オリーブ褐色極細砂	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
288	下駄	R007-01	2区黒褐色シルト	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	右近下駄に似る、釘
289	下駄	R006-02	2区黒褐色シルト	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	連歯下駄(駒下駄)
365	木札	R009-02	2区オリーブ黒色極細砂	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	漆
366	木札	R004-05	2区オリーブ黒色極細砂	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
367	下駄	R014-01	2区造成土	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ	連歯下駄(駒下駄)、付着物あり
368	下駄	R016-01	2区造成土	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	連歯下駄(駒下駄)
369	下駄	R017-01	2区近代桶	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	漆?、彩色、連歯下駄(駒下駄)
370-1	下駄	R015-01	2区造成土	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ	連歯下駄(駒下駄)、付着物あり
370-2	下駄付着物	R015-01	2区造成土	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	柁目のみ
372	底板	R029-01	2区オリーブ黒色極細砂	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
395	漆大皿	R027-01	SD827	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	漆
397	底板	R027-02	SD827	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	漆
398	栓	R028-01	SD827	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
399	漆椀	R005-03	SD827	<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ	漆
400	櫛払い	R028-04	SD827	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ	
605	木札	R013-01	4区暗灰色粘質土	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	墨書
606	木札	R013-02	4区暗灰色粘質土	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	墨書
607	木札	R010-05	4区暗灰色粘質土	Bambusoideae タケ亜科	ハチク or マダケ
612	板材	R013-03	4区暗灰色粘質土	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	墨書
613	底板	R011-02	4区暗灰色粘質土	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	漆
614	底板	R011-01	4区暗灰色粘質土	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	
615	底板	R013-04	4区暗灰色粘質土	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ	

第50表 第8次調査木製品樹種同定表①

1) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科  
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

2) ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。

3) サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型であるがスギ型の傾向を示すものもあり、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面で放射組織は単列の同性放射組織型を呈する。

以上の特徴からサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。

4) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。

5) ブナ *Fagus crenata* Blume ブナ科

小型でやや角張った道管が、単独あるいは2~3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られ、単列のもの、2~数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の特徴からブナに同定される。ブナは北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20~25m、径60~70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。

6) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2~数個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなる単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。放射断面では放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

以上の特徴からトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15~20m、径50~60cmに達する。

7) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいである。放射組織は、異性放射組織型で、1~3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5~10m、径20~30cmである。

8) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに

2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の特徴からエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。

#### 9) タケ亜科 Bambusoideae イネ科

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。放射断面及び接線断面では柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。試料は節の冠は2つ確認され、復原径は10cm程度と考えられ、ハチクまたはマダケである。

#### (4) 所見

同定の松坂城下町遺跡の木製品はスギ18点、ヒノキ11点、サワラ2点、クリ1点、ブナ1点、トチノキ3点、ヤブツバキ1点、エゴノキ属1点、タケ亜科1点であった。

最も多く同定されたスギは木簡、木札、栓、底板、下駄、下駄付着物、板材に利用されている。スギは軽軟であるが強靱な材で加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。木簡、木札、底板、板材などの板状の木製品には比較的よく利用される樹種である。また耐水性があることから栓や下駄などに適材である。なお、栓に用いられる樹種は全国的には針葉樹よりも広葉樹の方が多い印象を受ける。また針葉樹の中ではヒノキやサワラ、アスナロなどの水実に良く耐えるヒノキ科が散見されるが、スギを用いた例は少ない。静岡県では天の川遺跡（古墳時代末期から平安時代）からスギを用いた栓の報告例がある。下駄付着物は下駄の天の部

分に鉋屑程度の薄さの木質の付着であり、No.367、No.370の下駄に見られた。なお、いずれの下駄も樹種はサワラである。下駄の天に竹皮を編んだものをつけた畳表や烏表などの表付下駄は格式の高い下駄として知られるが、スギをつけた類例は見られない。ヒノキが次に多く木札、齋串、籠、杓子、曲物、底板、付け木に利用されている。ヒノキは木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽・耐湿性も高く、特に保存性が高い材である。加工工作が容易な上、広汎な用途に用いられる。木札、齋串、曲物、底板などには比較的良く用いられる樹種であり、耐湿性の高さから曲物の他に杓子には適材である。また薪炭材として見たとき、針葉樹は火付きの良さや瞬発的な火力の強さがあり、付け木に適材である。なお律令期以降、ヒノキは瀬戸内から東海地方では、流通しよく用いられる材である。サワラは下駄に利用されている。サワラは、ヒノキより軽軟でもろいが木理通直、肌目緻密であり、水湿によく耐える材であり、下駄に有用で三重県内でも桑名城下町遺跡などの報告例がある。

クリは漆大皿に利用されている。重硬で耐朽性が高く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。容器としては椀などに利用された例は散見するが、大型の容器としては弥生時代や古墳時代の槽の例を見るに留まる。ブナは杓子に利用されている。強さは中庸で、切削・加工も中庸であるが、弾性と従曲性に富む材である。中世および近世では挽物の漆椀の木地に用いられることが多く、他の用途はあまり見られない。杓子の利用はめずらしいが、No.38杓子は製品の表面が薄茶色をしており、何かが塗布されていたようである。彩色したのみの可能性もあるが、杓子として耐水性を向上させるための工夫があったのではないかと考えられる。トチノキは漆椀に利用されている。材は耐朽・保存性が低いが、軟らかく緻密であり、椀などの容器に用いられることが多い。ヤブツバキは櫛に利用されている。強靱、堅硬な良材で、切削・加工は困難である。同様に硬く加工が困難なツゲやイスノキなどは櫛に利用されることが多いが、ヤブツバキの報告例は比較的少ない。しかし、鳥浜貝塚など古くからヤブツバキの櫛は出土しており、めずらしい利用例ではない。エゴ

ノキ属は傘部材（傘ロクロ）に利用されている。やや堅硬であるが、切削・加工は容易である。エゴノキ属の中でもエゴノキは現在岐阜県などで製作される和傘の傘ロクロの素材である。エゴノキの別名はロクロギと言われ、轆轤細工に用いられる木という意味があり、非常に緻密で粘り強く、傘ロクロのような細かい切れ込みを入れても折れにくい材である。なお、山梨県の宮沢中村遺跡（18世紀後半から19世紀後半）では傘の一部としてエゴノキ属の報告例がある。タケ亜科は木札に利用されている。タケ亜科の材は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え割烈性に富み、また細工が容易であるので、さまざまな素材として利用される。タケ亜科にはマダケ、ハチク、ヤダケが古くから日本で利用され、モウソウチクが庭木として17世紀後半または18世紀前半に日本本土へ植栽された。No.607は節が2冠で復原径が10cm程度であり、ハチクもしくはマダケである。

同定された樹種は冷温帯から暖温帯のやや広い分布域に生育する樹木が多かった。スギ、ヒノキ、ブナは湿潤な環境を好み冷温帯から温帯の山野に生育する。サワラ、トチノキはより湿潤な溪流や谷沿いを好み、またサワラは中部山岳地帯を中心に分布する。ヤブツバキ、エゴノキ属、タケ亜科は温暖な温帯下部の暖温帯を好み、エゴノキ属、タケ亜科は日常の燃料材を伐採するような里山などに分布していた可能性がある。またヤブツバキは海岸から河川の沿岸に生育する樹木である。これらの樹木は当時遺跡周辺にも分布する樹木だが、サワラなど中部山岳地帯を主に分布する樹木が含まれており、また温帯に留まらず冷温帯や暖温帯に分布する気候がやや異なる樹種も見られ、流通によって製品が本遺跡にもたらされたと推測される。

（金原美奈子、金原裕美子（一社）文化財科学研究センター）

## 5. 樹種同定 2

### （1）試料

食事具3点、容器2点、土木具2点、建築部材27点の合計35点である。

### （2）観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目

（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

### （3）結果

樹種同定結果（針葉樹7種、広葉樹2種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### 1) マツ科トガサワラ属トガサワラ (*Pseudotsuga japonica* Beissn.)

（遺物No. 472）

（写真図版150No. 472）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材へ移行は甚だ急であった。垂直樹脂道は単独、ときに連続する。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型が主で、まれにトウヒ、スギ型が2～4個ある。放射柔細胞の隔壁は数珠状である。放射仮道管には鋸歯状突起と有縁壁孔、螺旋肥厚が見られる。年輪界に軸方向柔細胞がある。板目では放射組織は単列のもの、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。放射柔細胞の細胞壁は厚い。トガサワラは本州（奈良、和歌山）、四国（高知）の山間部に分布する。

#### 2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

（遺物No. 236, 396）

（写真図版148No. 236, 396）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### 3) マツ科ツガ属 (*Tsuga* sp.)

（遺物No. 473）

（写真図版150No. 473）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はスギ型、ヒノキ型で1分野に2～4個ある。細胞壁には数珠状末端壁がある。上下両端には放射仮道管がある。板目では放射組織はすべて単列であった。ツガ属はツガ、コメツガがあり、本州、四国、



九州に分布する。

4) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.)

(遺物No. 77, 6, 234)

(写真図版145・147No. 77, 6, 234)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のもの、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

5) スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D. Do

n)

(遺物No. 34, 222, 229, 231, 233, 390, 608, 609, 616～618)

(写真図版145・146・147・149・151・152No. 34, 222, 229, 231, 233, 390, 608, 609, 616～618)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

6) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

(遺物No. 40, 43, 224, 225, 232, 235)

(写真図版145・146・147・148No. 40, 43, 224, 225, 232, 235)

No.	実測番号	品名	樹種
5	020-03	板材	ヒノキ科アスナロ属
6	025-04	角材	マツ科マツ属 [二葉松類]
34	008-03	底板	スギ科スギ属スギ
35	009-01	板材	ヒノキ科アスナロ属
40	001-01	角棒材	ヒノキ科ヒノキ属
43	001-02	角棒材	ヒノキ科ヒノキ属
77	025-03	角材	マツ科マツ属 [二葉松類]
222	005-01	角材	スギ科スギ属スギ
224	004-04	棒材	ヒノキ科ヒノキ属
225	004-03	棒材	ヒノキ科ヒノキ属
229	024-02	板材	スギ科スギ属スギ
230	004-01	棒材	ヒノキ科アスナロ属
231	024-01	板材	スギ科スギ属スギ
232	004-02	角棒材	ヒノキ科ヒノキ属
233	026-02	板材	スギ科スギ属スギ
234	019-02	加工材	マツ科マツ属 [二葉松類]
235	026-03	曲物	ヒノキ科ヒノキ属
236	026-01	角材	マツ科モミ属
371	019-01	角材	ヒノキ科アスナロ属
373	025-02	角材	ブナ科クリ属クリ
374	025-01	角材	ブナ科クリ属クリ
390	008-01	板材	スギ科スギ属スギ
396	027-03	板材	マツ科モミ属
471	021-01	加工材	ブナ科クリ属クリ
472	020-01	杭	マツ科トガサワラ属トガサワラ
473	022-01	加工材	マツ科ツガ属
474	022-02	加工材	カツラ科カツラ属カツラ
578	020-02	杭	ブナ科クリ属クリ
608	010-01	箸	スギ科スギ属スギ
609	010-02	箸	スギ科スギ属スギ
610	010-04	箸	ヒノキ科アスナロ属
611	010-03	箸	ヒノキ科アスナロ属
616	023-02	板材	スギ科スギ属スギ
617	023-01	加工材	スギ科スギ属スギ
618	023-03	板材	スギ科スギ属スギ

第51表 第8次調査木製品樹種同定表②

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

#### 7) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.)

(遺物No. 230, 371, 610, 611)

(写真図版146・148・151No. 230, 371, 610, 611)

木口は採取出来なかった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

#### 8) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物No. 373, 374, 471, 578)

(写真図版148・149・150No. 373, 374, 471, 578)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管(～500 $\mu$ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

#### 9) カツラ科カツラ属カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)

(遺物No. 474)

(写真図版150No. 474)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管(～100 $\mu$ m)がおおむね単独または2～3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有

面積は大きい。軸方向柔組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物(チロース)がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ～900 $\mu$ mからなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### (4) まとめ

試料35点は針葉樹材30点、広葉樹材5点であった。いずれも近世の木製品で、針葉樹材にはマツ科のトガサワラ1点、モミ属2点、ツガ属1点、マツ属[二葉松類]3点、ヒノキ科のヒノキ属6点、アスナロ属6点、スギ科のスギ11点である。広葉樹材には落葉樹材のブナ科のクリ属クリ4点、カツラ科のカツラ1点がある。

本遺跡付近の周辺には、マツ属[二葉松類]の二次林が広がり、その中に陽樹のクリなどの混じった明るい落葉樹林が形成されていたと推測する。また、モミ属、ツガ属、トガサワラは紀伊山系の照葉樹林帯と落葉広葉樹林帯の中間地帯に優占する森林があったと推測される。カツラはそれらに至る冷温な沢沿いに分布する。建築材などにする為のヒノキ、アスナロ属やスギを産出する針葉樹林も維持していたのであろう。(汐見 真(株) 吉田生物研究所)

#### [参考文献]

- ・ 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所 (1991)
- ・ 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)
- ・ 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
- ・ 北村二郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)
- ・ 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)
- ・ 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

[使用顕微鏡]

Nikon DS-Fi1

## 6. 植物遺体同定

### (1) 調査した試料

調査したのは水漬けの植物遺体6グループである。

### (2) 調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄 (1994年)、大井 (1978年)、北村・村田 (1979年)、中山・井之口・南谷 (2000年) を参照した。

### (3) 結果

木本4種、草本5種の種実類が認められた。写真を示し、同定結果を表52表に記す。和名の順位、学名は北村・村田 (1979年) によった。

(汐見 真 (榊吉田生物研究所))

### [参考文献]

- 石川茂雄 (1994年) 『原色日本植物種子写真図鑑』、石川茂雄図鑑刊行委員会
- 大井次三郎 (1978年) 『改訂増補新版日本植物誌 顕花編』、至文堂
- 北村四郎・村田 源 (1964年) 『原色日本植物図鑑 草本編』上、中、下保育社
- 北村四郎・村田 源 (1979年) 『原色日本植物図鑑 木本編』I、II保育社
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 (2000年) 『日本植物種子図鑑』、東北大学出版会

- 牧野富太郎 (1989年) 『改訂増補牧野新日本植物図鑑』、北隆館

## 7. 材質調査

### (1) 資料

調査した資料は表53表に示す1点である。

### (2) 観察方法

資料本体から採取した数mm四方の有機質の試料をエポキシ樹脂に包埋した。そして研磨して、薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察した。

### (3) 分析結果

顕微鏡写真を示し、以下に観察結果を記す。

- 布の経糸横断面 (写真図版153・154写真3~5) : 経糸の横断面と、緯糸の縦断面が一部観察された (写真3)。経糸の横断面は単体の繊維細胞が多数集まって円形を呈している。この円形が1本の経糸横断面で、斜め方向に点線状に見られるものが緯糸の繊維縦断面である (写真4)。経糸を構成する繊維細胞は単体で存在し、その横断面は楕円形を呈する (写真5)。このことから、経糸の材質は木綿である可能性が高い。
- 布の緯糸横断面 (写真図版154写真6~8) : 緯糸の横断面と、経糸の縦断面が途切れながら波線状に走る様子が観察された (写真6)。緯糸の横断面は単体の繊維細胞が多数集まって円形を呈している。この円形が1本の緯糸横断面で、点線状に続き全体として大きくうねるものが経糸の繊維縦断面で

No.	出土地点	個数	和名	科名	学名	種類	部位
36	1区 SK803	3	ウリ	ウリ科	<i>Cucumis melo</i> L.	草本	種子
		1	カヤ	イチイ科	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	木本	種皮
37	2区 オリーブ黒色極細砂	1	トチノキ	トチノキ科	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	木本	堅果皮
38	2区 近世包含層	1	ウリ	ウリ科	<i>Cucumis melo</i> L.	草本	種子
		1	マメ科	マメ科	Leguminosae	草本	莢
		5	有機質	-	-	-	-
39	3区 SK819 貝層2	4	コメ	イネ科	<i>Oryza sativa</i> L.	草本	瘦果
		6	オオムギ	イネ科	<i>Hordeum vulgare</i> L. var. <i>vulgare</i>	草本	瘦果
		8	オオムギ	イネ科	<i>Hordeum vulgare</i> L. var. <i>vulgare</i>	草本	瘦果
		18	コムギ	イネ科	<i>Triticum</i> sp.	草本	瘦果
		4	有機質	-	-	-	-
40	3区 SD827	1	アンズ	バラ科	<i>Prunus Aameniaca</i> L.	木本	核
1		ウメ	バラ科	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	木本	核	
41	4区 暗灰色粘質土	7	ウリ	ウリ科	<i>Cucumis melo</i> L.	草本	種子

第52表 第8次調査植物遺体同定結果

ある（写真7）。緯糸を構成する繊維細胞は単体で存在し、その横断面は楕円形を呈する（写真8）。このことから、緯糸の材質は木綿である可能性が高い。

○ 縫い糸の横断面（写真図版154写真9～11）：糸横断面が全体として円形ではなく、三つの円がぎゅっと集まったような形状を呈する。3本の細い糸が撚られて1本になった糸の可能性もある（写真9,10）。繊維細胞は単体で存在し、その横断面は楕円形、太いC字状を呈する（写真11）。このことから、縫い糸の材質は木綿である可能性が高い。

#### （4）摘要

やや炭化したような布で、糸で二枚が縫いつけられている。

布の経糸、緯糸ともに材質は木綿の可能性が高い。縫い糸は3本の木綿糸を撚り合わせている可能性が高い。（汐見 真（株）吉田生物研究所）

## 8. 小結

今回の調査では、1区と3区において中世に遡る遺構が確認された。しかし、良好な一括資料には恵まれておらず、時期決定には不確定な要素を含む。出土した山茶碗は底部片や口縁部片ではあるが、高台は低くなっているものの形状は整っている。口縁部は直線的もしくは外反の名残を止める程度である。このことからⅢ段階－6型式<sup>(1)</sup>に並行するものと考えられる。SK815では山茶碗と土師器鍋が相伴している。鍋は口縁部を内に折り返す形態で、第1段階<sup>(2)</sup>に相当し、山茶碗の時期と矛盾はない。このことからSK815、SD820・822・829・830の時期を13世紀初頭の鎌倉時代前半とすることができる。なお、包含層からはⅡ段階<sup>(3)</sup>に遡る山茶碗の出土もあり、他の中世の遺構については、平安時代末～鎌倉時代とやや幅をもたせておく。

次に、近世の遺構であるが、1区ではSK803か

ら比較的まとまった遺物の出土があった。播鉢は赤津村の第6小期～第7小期、瀬戸村の第10小期<sup>(4)</sup>のものがあり、18世紀前半と19世紀中頃となる。相伴する甕はB～C類<sup>(5)</sup>で18世紀前半、磁器に瀬戸・美濃系のものは無く、SK803の時期を18世紀前半として良いのではないだろうか。SK804からも同様な甕が出土し、SK802では土師器皿が口径8cm程度で、皿C<sup>(6)</sup>に分類され、比較的器高を保っている。これらについても、18世紀前半の時期を与えて良いであろう。このように1区の遺構は18世紀前半のものが中心である。

2区は詳細な時期が不明確なものが多いが、SZ831出土の陶器の甕はE～F類<sup>(7)</sup>で19世紀、磁器にも瀬戸・美濃系のものが多く含まれ、最終埋没は19世紀に下るものと考えられる。

3区のSK813の土師器皿は口径10cm程度で、皿Dに分類<sup>(8)</sup>される。器高の状況から18世紀とすることができる。一方、SK825からは広東椀が出土しており、19世紀に下る<sup>(9)</sup>可能性がある。

4区のSZ828からも広東椀の出土があり、同一の可能性のある2区のSZ831と時期的な矛盾はない。

この様に、近世の遺構は1区で18世紀中心、2～4区では19世紀に下るものが主体となりそうである。

また、今回の調査では木製品が多く出土しており、SD827をはじめ、漆を塗布した木製品が散見される。しかし、塗膜分析で明確になったように塗布材の成分や塗布作業、下地のないもの、通常の製造工程と異なる漆器や漆を利用してない下駄等、多様であった。多様な技法を用いた製品が持ち込まれていることは、多くの地域から人が集まる城下町の特性を示しているものと考えられる。

また、貝類の出土も目立つ。アサリ・ハマグリ・ウミニナ・アカニシ・マガキ・アワビの仲間・サザエ・コシキヌタ・ホタテがあり、この内、アサリ・

No.	資料No.	写真No.	資料名	出土地点	概要
1	42	写真図版153 No. 1, 2	繊維製品	3区 SK819 最下層	柔軟性は残っているが、全体的に黒くやや炭化した布片。二枚が糸で縫いつけられている状態である。布の経糸の横断方向と、緯糸の横断方向、そして縫い付けている糸の横断方向を観察できるようにサンプリングした。

第53表 第8次調査材質調査資料の概要



ハマグリ・ウミニナ・アカニシは近隣の海岸で採取可能なものである。マガキ・アワビの仲間・サザエ・コシキヌタは志摩半島で採取できるが、ホタテは、東北から北海道にかけて分布しており、松阪近郊で採取することはできない。アサリ・ハマグリはサイズの小さなものも多く、当時の海岸には砂が少なく、砂利が多かった可能性もあるものの、小型のアサリであっても食用にするほど乱獲が進んでいた可能性も考えられる。ホタテは大きく、現在ではなかなか見ることのできない大きさである。見た目が美しく、装飾目的、または、安産祈願など食用以外の用いられ方をしたことが想定される。一方、近世の絵画資料などでは、ホタテ、アワビの貝殻が猫のエサ用の皿として描かれており<sup>(10)</sup>、松坂城下町における飼い猫に関する資料となる可能性もある。また、松阪近郊で比較的容易に採取可能なシジミがまったく見られないことから、松坂城下町の人々は、おいしい貝を選び食べていたのではないかとも思われる<sup>(11)</sup>。

(水谷・森川)

#### [註]

- (1) 藤澤良裕『瀬戸古窯跡群 I』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
- (2) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990.5
- (3) 前掲(1)に同じ
- (4) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別冊 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県平成19年3月31日
- (5) 東京都新宿区教育委員会『自證院遺跡』1987
- (6) 伊藤裕偉『高河原遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2015.3
- (7) 前掲(5)に同じ
- (8) 前掲(6)に同じ
- (9) 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 平成元年10月5日
- (10) 歌川国芳の浮世絵『其のまま地口猫飼好五十三疋』等に描かれている。
- (11) 貝に関しての大半は、中野環(三重県総合博物館)氏の御教授による。

# XI. 第9次調査

調査は、幅1.5m、総延長140mの範囲で行った。また、所々でボックスカルバートや特殊マス等の埋設予定地については幅2.2mで調査を行った。調査区は、本町東交差点の南東方面に1-1・1-2区を設定し、本町東交差点より北西方面に2～4区を設定した（第202図）。調査区幅が狭小であったこともあり、遺構の全体像が把握できるものはほとんど存在しなかったが、土坑・井戸・溝・柱穴などの遺構を確認することができた。

## 1. 基本層序

第9次調査では、1-1区・1-2区では、遺構形成面まで掘削が及ばなかったため、基本層序は不明であるが、2～4区においては共通する基本層序を確認

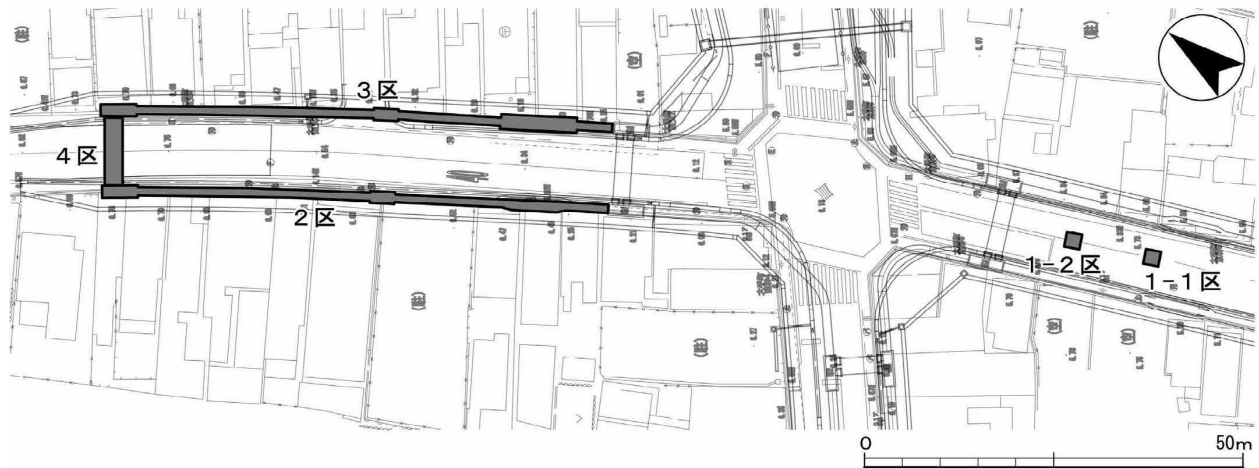
することができた。基本層序となるのは以下の4層である。

I層は、現道舗装のアスファルト及びそれに伴う碎石層である。碎石層の厚さは場所によって異なるものの、20～70cmである。

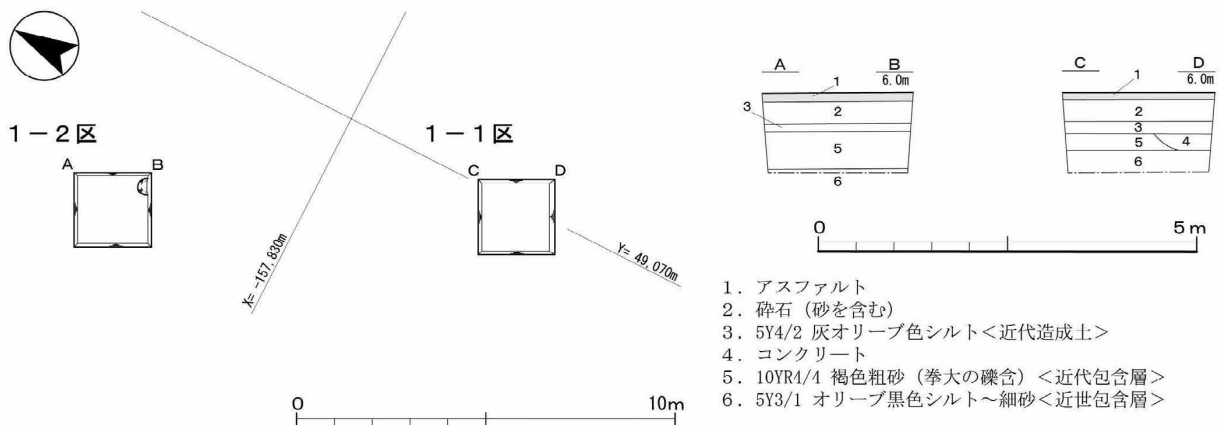
II層は、にぶい黄褐色シルト～黒褐色シルトで近世の整地層と考えられる。厚さは約40～60cmである。

III層は、黒褐色シルトで中世以降の耕作土層である。山茶碗など中世以前の遺物包含層である。厚さは約10～20cmである。

IV層は、黄褐色シルトまたは粘土で、基盤となる層である。中世の全ての遺構はIV層から切り込む形で形成されている。現況が調査区北西端の4区に向けて高くなる傾向にあるが、IV層の標高は5m前後



第202図 第9次調査区位置図（1:1,000）



第203図 第9次調査区1区平面図（1:200）、土層断面図（1:100）

で推移する。

## 2. 遺構

Ⅲ層の黒色シルト層上面以上で検出したものを上層検出遺構、Ⅳ層黄褐色シルト層上面で検出したものを下層検出遺構として扱う。前者は主に近世、後者は中世のものである。

### (1) 上層検出遺構

**SE901** 2区で確認された円形の井戸で規模は直径約1.0m以上、深さは地表下2.1mまで掘削したところで、湧水が激しく掘削を断念した。埋土は黄褐色粗砂で、ピンポールを差し込んだところさらに50cm以上砂地が続くことが確認された。土師器(皿・焙烙)・山茶碗・陶器・磁器が出土している。

**SK902** 2区で確認された円形の土坑で、規模は長径2.3m以上、深さ0.8mである。土坑はⅡ層より切り込み、遺物は土師器片が出土している。

**SK904** 2区で確認された円形の土坑で、規模は直径0.8m、深さ0.4mである。遺物は土師器の皿・焙烙、陶器の碗・皿、磁器の碗等が出土している。

**SE905** 2区で確認された円形の井戸で、規模は長径1.1m以上、深さ0.9m以上である。井戸放棄時の最終堆積層と考えられる浅黄色粗砂より遺物が出土している。さらに下層には、木質を多く含む暗灰色シルトの堆積が確認されたが、激しい湧水のため掘削は行わなかった。遺物は土師器の皿・鍋、陶器の碗・皿、磁器の碗等が出土している。

**SD906** 2区で確認された溝で、規模は幅1.0m、長さ1.4m以上、深さ0.8mである。遺物は山茶碗の

小片が1点出土しているが、遺構の切り込み面がⅡ層で、他の江戸時代の遺構と同一であることから江戸時代の遺構と考えられる。

**SK907** 2区で確認された円形の土坑で、規模は直径0.8m以上。土坑の中心部分は、調査区外にあり、埋土の下層は湧水によりグライ化していた。遺構はⅡ層より切り込む。

**SE909** 3区で確認された円形の井戸で規模は直径1.4m、深さは1.4m。上層は井戸廃棄時の埋め戻し土と考えられる中砂が堆積しており、下層に有機物を多く含むシルトの堆積が確認された。下層埋土中には、拳大から人頭大の礫が多数あり、石組井戸であった可能性がある。また、下層埋土中より出土した石臼は、石組井戸の部材として転用されていた可能性がある。瀬戸焼の播鉢・常滑焼の甕などが出土している。

**SK910** 3区で確認された円形の土坑で、規模は直径1.1m以上、深さ0.6mである。遺構はⅡ層より切り込む。

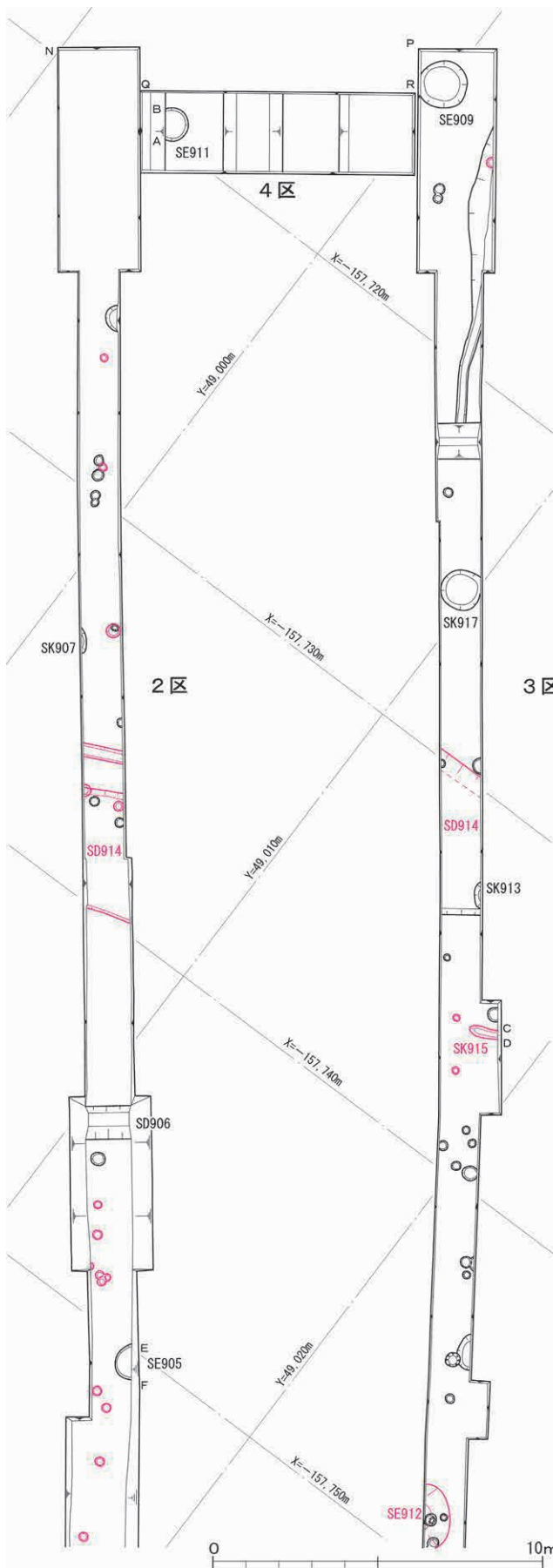
**SE911** 4区で確認された円形の井戸で規模は直径1.0m以上、深さは1.2mである。土師器・陶器・磁器・瓦などが出土している。

**SK913** 3区で確認された円形の土坑で、規模は直径0.8m以上、深さ0.3mである。遺構はⅡ層より切り込む。

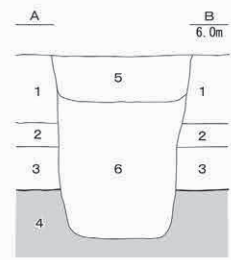
**SK916** 3区で確認された円形の土坑で、規模は直径1.2m、深さ1.0mである。瀬戸焼の施釉陶器など江戸時代の遺物が多く含まれるが、近代から現代のガラス瓶も含まれており、現代に埋没した遺構と

遺構名	調査区	種別	計測値 (m)			時代	主な出土遺物
			長さ・長径	幅・短径	深さ		
SE901	2区	井戸	1.0m以上	—	1.5m以上	江戸時代	土師器・山茶碗・陶器・磁器
SK902	2区	土坑	2.3m以上	—	0.8m	江戸時代	土師器
SK903	2区	土坑	2.6m	—	0.5m	平安時代末～鎌倉時代初頭	ロクロ土師器
SK904	2区	土坑	0.8m	—	0.2m	江戸時代	土師器・陶器・磁器・瓦
SE905	2区	井戸	1.1m以上	—	0.9m以上	江戸時代	陶器・磁器・瓦
SD906	2区	溝	1.4m以上	1.0m	0.8m	江戸時代	山茶碗(混入)
SK907	2区	土坑	0.8m以上	—	0.8m	江戸時代	瓦
欠番							
SE909	3区	井戸	1.4m	—	1.4m	江戸時代	陶器・瓦・石臼・曲物
SK910	3区	土坑	1.1m以上	—	0.6m	江戸時代	陶器
SE911	4区	井戸	1.0m以上	—	1.2m	江戸時代	土師器・陶器
SE912	3区	井戸	2.0m以上	—	0.7m	平安時代末～鎌倉時代初頭	山茶碗
SK913	3区	土坑	0.8m以上	—	0.3m	江戸時代	陶器
SD914	3区	溝	12m以上	5.1m	0.5m以上	平安時代末～近世初頭?	山茶碗
SK915	3区	土坑	0.9m以上	0.3m	0.2m	平安時代末～鎌倉時代初頭	ロクロ土師器
SK916	3区	土坑	1.2m	—	1.0m	近代～現代	陶器・ガラス瓶
SK917	3区	土坑	1.2m	—	0.2m	江戸時代	陶器・曲物

第54表 第9次調査遺構一覧

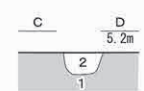


SE911



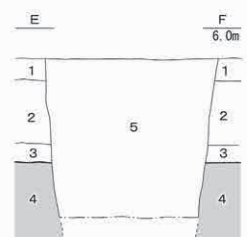
- 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
- 2. 2.5Y3/2 黒褐色シルトに3が混じる
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 4. 10YR4/6 褐色シルト
- 5. 10YR2/2 黒褐色シルト(焼土多含) <SE911埋土>
- 6. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト(礫多含) <SE911埋土>

SK915



- 1. 10YR4/6 褐色シルト
- 2. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト <SK915埋土>

SE905



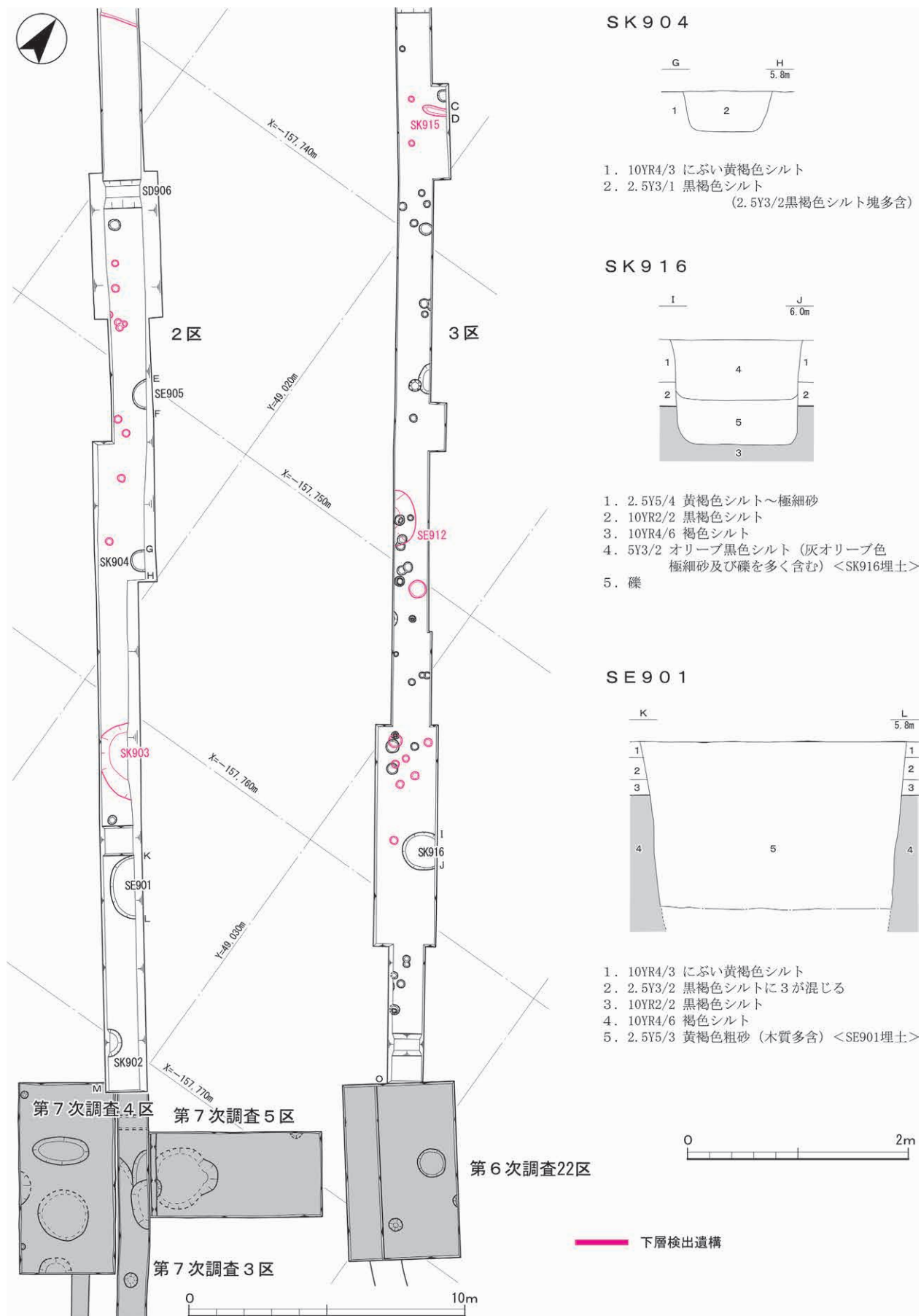
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- 2. 2.5Y3/2 黒褐色シルトに3が混じる
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト
- 4. 10YR4/6 褐色シルト
- 5. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂 <SE905埋土>

下層検出遺構



第204図 第9次調査2～4区平面図① (1:200)、SE911・SK915・SE905断面図 (1:50)





第205図 第9次調査2～4区平面図② (1:200)、SK904・SK916・SE901断面図 (1:50)

考えられる。遺構の形状から井戸または便所の可能性が想定される。

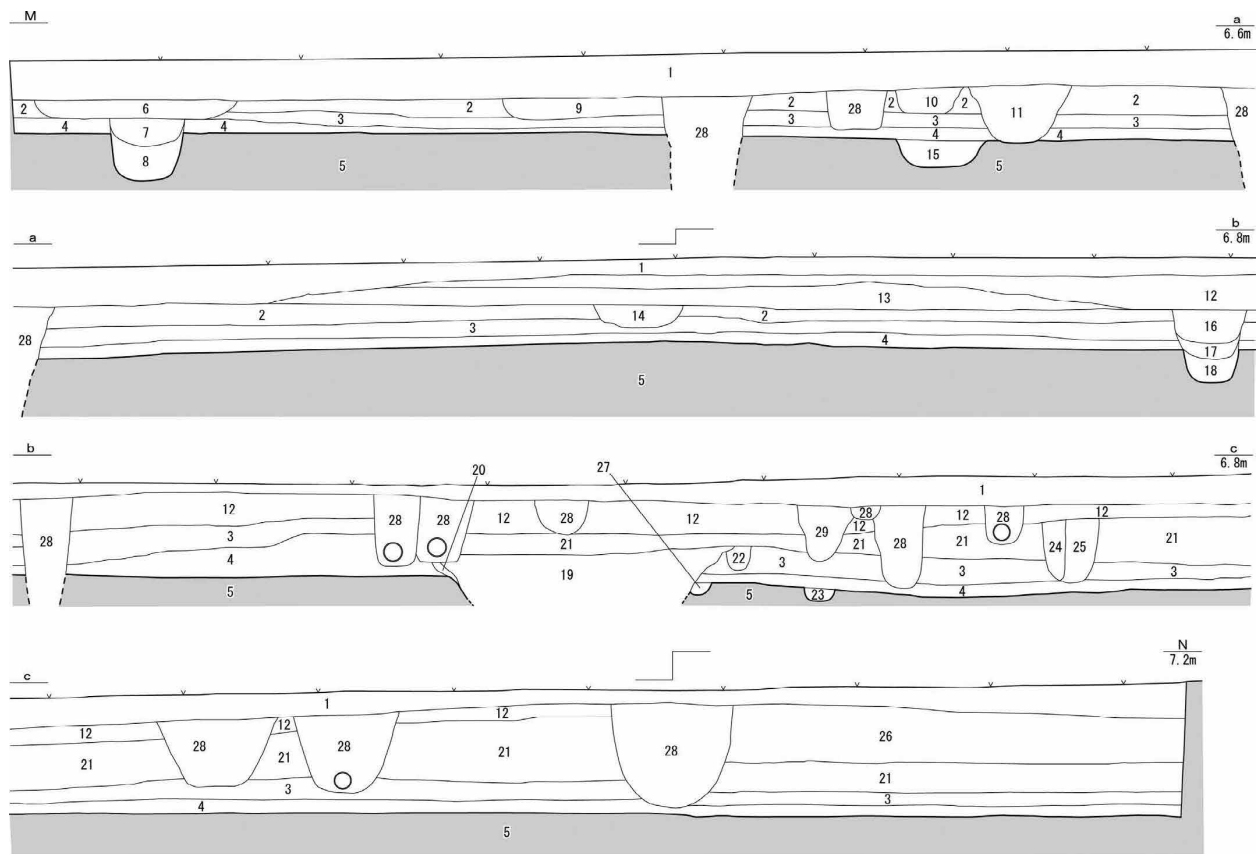
**SK917** 3区で確認された円形の土坑で、規模は直径1.2m、深さ0.2m。遺構はII層より切り込む。

(2) 下層検出遺構

**SK903** 2区で確認された円形の土坑で、規模は長径2.6m、深さ0.5mである。遺構はIV層から切り込み、遺物はロクロ土師器の皿が出土していることから、平安時代後期の遺構の可能性が考えられる。

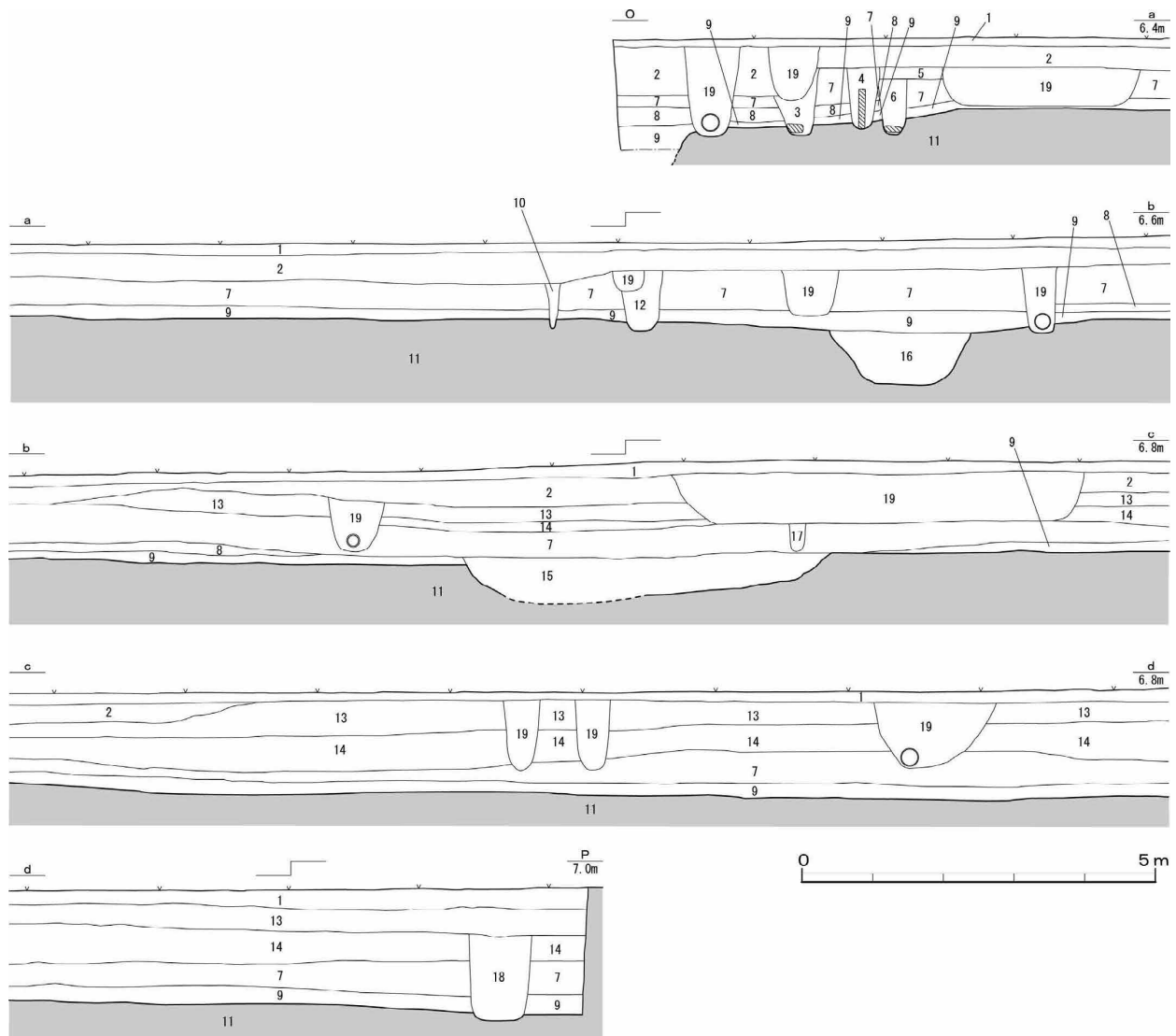
**SE912** 3区で確認された円形の井戸で規模は直径2.0m以上、深さは0.7mである。山茶碗が出土しており鎌倉時代の遺構と考えられる。

**SD914** 2区及び3区で確認された溝で、規模は幅5.1m、長さ12m以上、深さ0.5m以上である。埋土及び、規模の共通性が高いことから2区、3区で確認された溝が同一のものであると判断した。遺物は、3区で山茶碗が出土している。2区の土層観察では、II層下部を切り込んでおり、下層には中世のPitが存在することから、鎌倉時代から近世にかけ



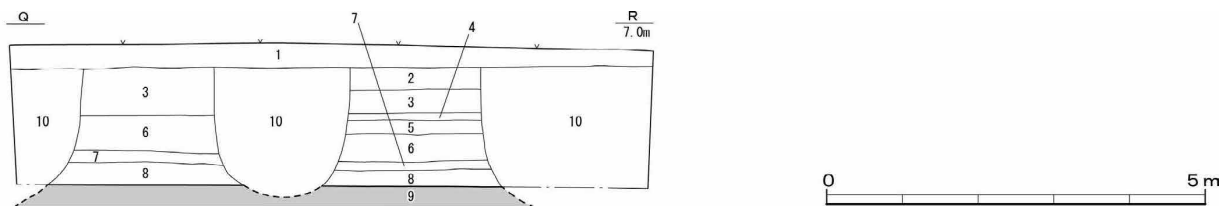
- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. アスファルトと砕石</li> <li>2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト</li> <li>3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト (4を含む)</li> <li>4. 10YR2/2 黒褐色シルト</li> <li>5. 10YR4/6 褐色シルト</li> <li>6. 7.5YR4/3 褐色シルト (焼土多含)</li> <li>7. 2.5Y3/2 黒褐色シルト &lt;SK902埋土&gt;</li> <li>8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト (明黄褐色シルト塊含) &lt;SK902埋土&gt;</li> <li>9. 7.5YR4/3 褐色シルト (焼土多含)</li> <li>10. 2.5Y3/2 黒褐色シルト (貝多含)</li> <li>11. 7.5YR4/3 褐色シルト (焼土多含)</li> <li>12. 近現代造成土 (焼土多含)</li> <li>13. オリーブ褐色中砂 (大礫含) &lt;整地層?&gt;</li> <li>14. 2.5Y5/3 黄褐色中砂</li> <li>15. 10YR2/1 黒色シルト &lt;SK903埋土&gt;</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>16. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂 &lt;SD906埋土&gt;</li> <li>17. 5Y3/2 オリーブ黒色シルト &lt;SD906埋土&gt;</li> <li>18. 2.5Y3/1 黒褐色シルト &lt;SD906埋土&gt;</li> <li>19. 10Y3/1 オリーブ黒白シルト～極細砂 &lt;SD914埋土&gt;</li> <li>20. 10Y3/1 オリーブ黒色シルト～極細砂 (黒褐色シルト含) &lt;SD914埋土&gt;</li> <li>21. 5Y4/2 灰オリーブ色中砂 (大礫多含)</li> <li>22. 5Y3/1 オリーブ黒色極細砂</li> <li>23. 2.5Y2/1 黒色シルト</li> <li>24. 2.5Y5/6 黄褐色粗砂 &lt;SK907埋土&gt;</li> <li>25. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト &lt;SK907埋土&gt;</li> <li>26. 現代造成土</li> <li>27. 2.5Y2/1 黒色シルト</li> <li>28. 攪乱</li> <li>29. 焼土</li> </ul> |
|--|--|

第206図 第9次調査 2区土層断面図 (1:100)



- |                       |                          |                                    |
|-----------------------|--------------------------|------------------------------------|
| 1. アスファルト             | 8. 2.5Y3/2 黒褐色シルト (9を含む) | 14. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細砂            |
| 2. 碎石                 | 9. 10YR2/2 黒褐色シルト        | 15. 5Y3/1 オリーブ黒色極細砂～細砂 (有機物多含)     |
| 3. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト    | 10. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト      | <SD914埋土>                          |
| 4. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト  | 11. 10YR4/6 褐色シルト        | 16. 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト～極細砂<SE912埋土> |
| 5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト  | 12. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト      | 17. 5Y4/1 灰色シルト                    |
| 6. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト    | 13. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト      | 18. 2.5Y6/4 にぶい黄色中砂<SE909埋土>       |
| 7. 2.5Y5/4 黄褐色シルト～極細砂 | (黒褐色シルト、礫、焼土多含)          | 19. 攪乱                             |

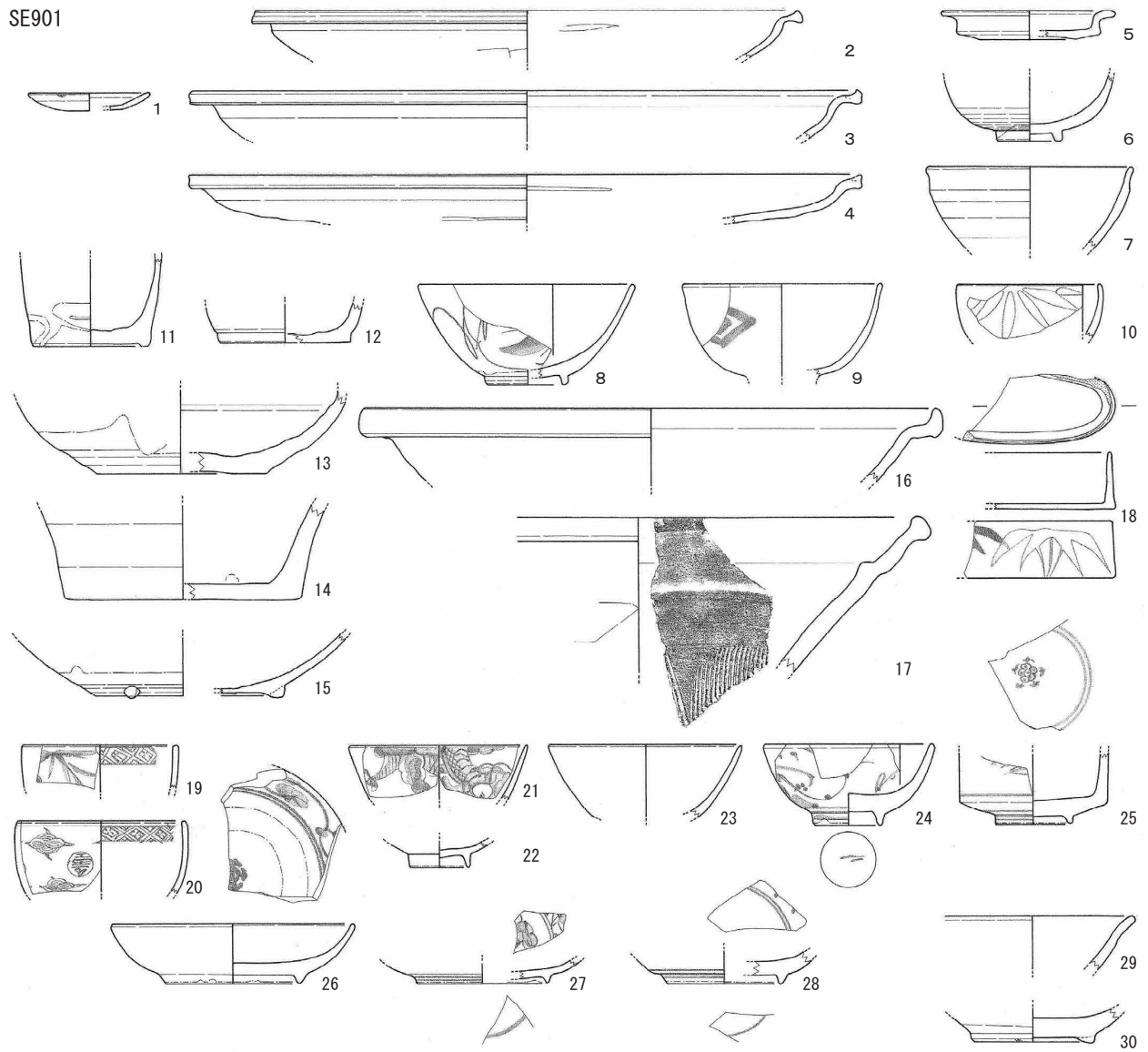
第207図 第9次調査3区土層断面図 (1:100)



- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. アスファルトと碎石             | 6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト     |
| 2. 近現代造成土                | 7. 2.5Y3/2 黒褐色シルト (8を含む) |
| 3. 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂       | 8. 10YR2/2 黒褐色シルト        |
| 4. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト       | 9. 10YR4/6 褐色シルト         |
| 5. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト～極細砂 | 10. 攪乱                   |

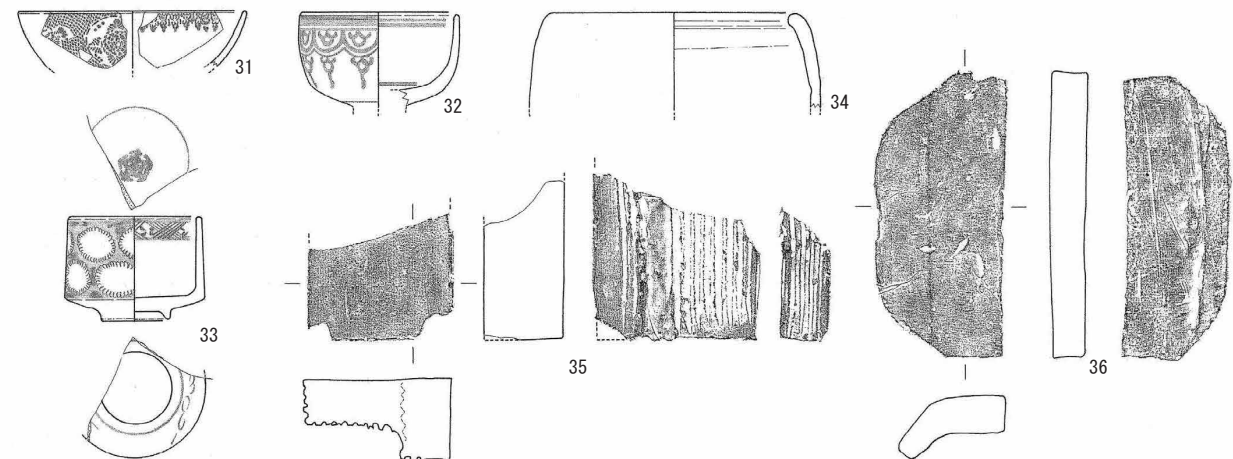
第208図 第9次調査4区土層断面図 (1:100)

SE901



0 20cm

SE905



第209図 第9次調査SE901、SE905出土遺物 (1:4)



て埋没したものと考えられる。

**S K 915** 3区で確認された楕円形の土坑で、規模は長径0.9m以上、短径0.3m、深さ0.2mである。ロクロ土師器が出土しており、平安時代後期に遡る可能性のある遺構である。(水谷)

### 3. 遺物

#### (1) S E 901出土遺物 (第209図)

土師器から陶磁器まで比較的多くの遺物が出土している。

1～4は土師器で、1は皿、2～4は焙烙である。1の口縁部には煤が付着し、灯明皿として利用されたようである。焙烙の外面にも煤は付着し、使用の痕跡を示している。

5～18は陶器で、椀、鉢、挿鉢等多様な器形があり、瀬戸・美濃系が主体である。5は蓋、6～9は椀である。7は天目茶椀であるが、明茶色を発色する。8・9は染付で、蔓草文や菱文を描いている。10も椀である。上絵付で葉文を描くが、剥離している。11は一応瓶としておく。灰釉を施すが、底部ちかくは釉を削り取っている。しかし、その削り取りは雑なもので、帯状に釉が残る。文様として意識したものかどうかは不明である。12・13は鉢、14は甕であるが、14の内面には炭化物が付着している。炭壺として使用されたものであろうか。15は、体部細下端に豆粒状の脚を備え、器の安定に寄与している。1ヶ所しか残存しないが、3ヶ所と仮定して図化している。行平鍋と思われる。16・17は挿鉢、18は鬚盥である。瀬戸・美濃系が主体のなかで、18は京都・信楽系である。赤絵で葉文を上絵付するが、隣接の葉文は全て剥離しており、本来は異なる釉で別の発色を示していたものであろう。

19～28は磁器で、判別できるものは全て肥前系である。草木系の文様を描くが、20は円形の枠に寿を描き、その周囲に配置されるのは宝文であろうか。25・26の五弁花文は、25が手書き、26がコンニャク印判による。

29・30は山茶椀で、明らかに混入遺物である。

#### (2) S E 905出土遺物 (第209図)

若干の陶磁器や瓦が出土している。

34は陶器の鉢、31～33は椀である。31の絵柄は転

写で、近代以降に下る混入遺物である。32は幾何学的な連続文を描くが、全体的に釉が沸騰気味である。33の五弁花文はコンニャク印判による。

35・36は道具瓦であるが、35は箱熨斗瓦、36は面戸瓦としておく。35の内面には滑り止めのためか、櫛による深い平行沈線が施される。

#### (3) S E 909出土遺物 (第210図)

若干の陶器、瓦、木製品、石製品が出土している。

37・39～41は陶器である。37は天目茶椀、39は鉢、40・41は甕である。39～41の内面には若干炭化物が付着するが、使用の痕跡かどうかは不明である。42は曲物底板の部材で2ヶ所に木釘孔を設ける。材質はスギである。43・44は石臼、45は平瓦である。44は上臼で、引手孔や挿入孔が残存する。

#### (4) S E 911出土遺物 (第210図)

図示できたものは土師器、陶器の4点である。

46は土師器の焙烙であるが、外面に煤の付着はない。47～49は陶器である。47の鉄釉は内面まで及ぶが、口縁部片であることを考慮して小型の火入としておく。48は鉄絵で葉文を描くが、絵柄の一部が沸騰し本来の発色を呈しない。49は内傾する口縁部の小片であるが、外端面に棒状工具による緩慢な刺突文を巡らす。

#### (5) S K 904出土遺物 (第211図)

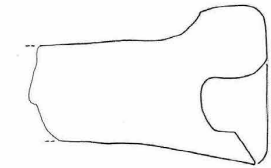
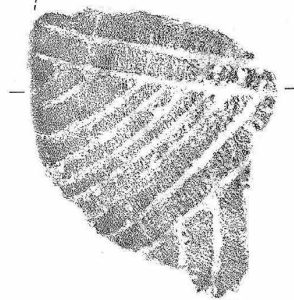
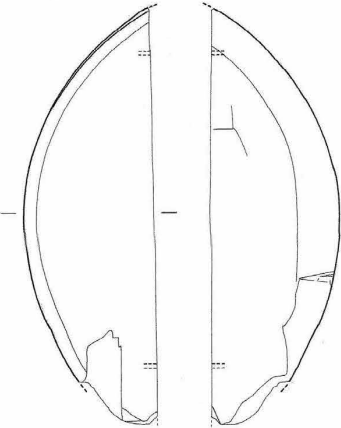
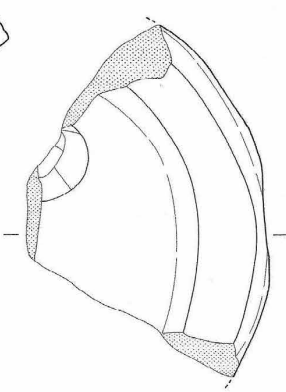
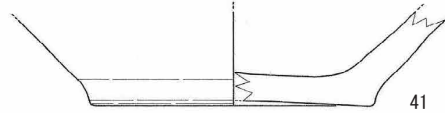
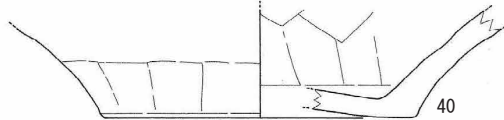
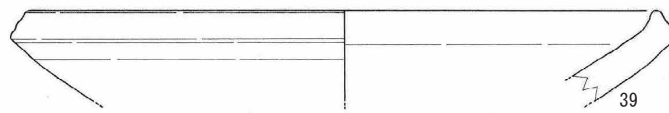
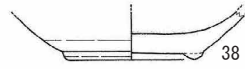
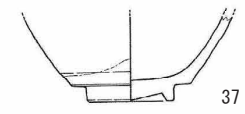
土師器、陶磁器類を中心に比較的多く出土があった。

50～57は土師器で、50～53は皿、54は土瓶、55～57は焙烙である。これらの土師器は52を除き、煤の付着が認められ使用の痕跡を残す。53の煤は底部外面に付着し、灯明皿とは言い切れない。

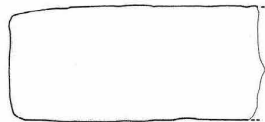
58～67は陶器で、瀬戸・美濃系が主体である。灰釉が施されるが、61・62は染付である。氷割文を呈するものもあり、64・65は絵柄が無く氷割文のみである。63は上絵付で葉文または雲気文を描くが、釉の多くは剥離等により本来の発色を示していない。発色部分では赤と緑の2色が確認できる。66の見込みは蛇ノ目釉剥となる。

68～70は磁器、71は丸瓦である。68は一見肥前系であるが、断面に艶がみられる部分があり、瀬戸・美濃系とした。しかし確証はない。

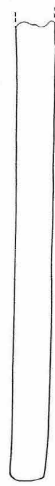
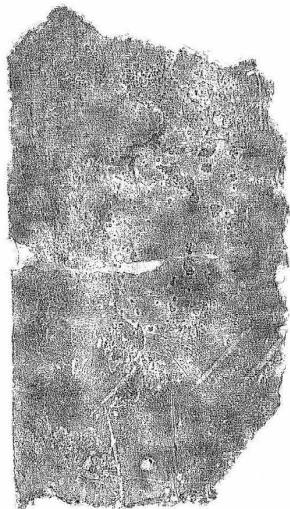
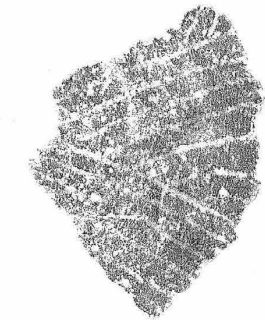
SE909



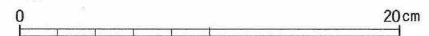
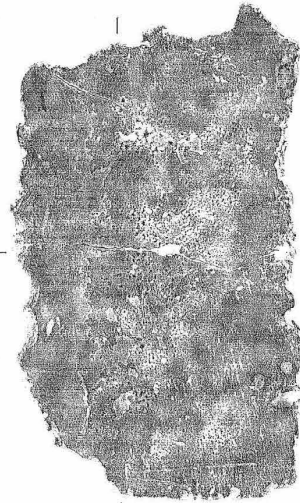
44



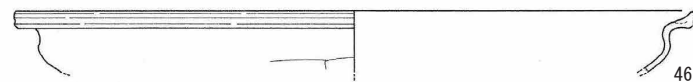
43



45



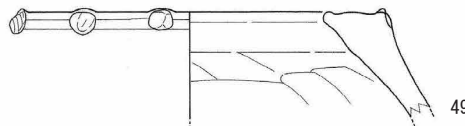
SE911



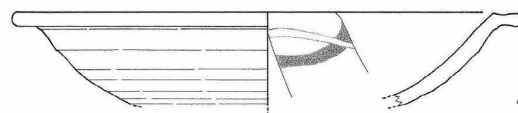
46



47



49



48

第210図 第9次調査SE909、SE911出土遺物 (1:4)

(6) SK916出土遺物 (第211図)

図示できたものは陶器3点のみである。72は天目茶碗、73は鉢、74は鍋または急須と思われる。全て瀬戸・美濃系で、73の内外面は氷割文を呈する。

(7) SK917出土遺物 (第211図)

図示できたものは陶器と木製品の2点である。75は陶器の皿で灰釉を施すが、見込みは蛇ノ目釉剥となる。76は曲物の蓋板で材質はヒノキ、表面に付着物が確認できる。

(8) 包含層他出土遺物 (第212図)

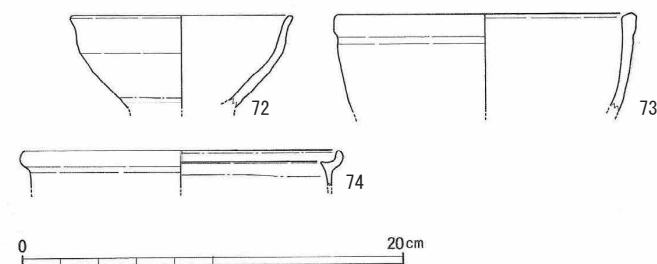
近世のものが大半であるが、鎌倉時代に遡るものが一定量あり、平安時代末頃や室町時代のものが散見される。

77~87は土師器で、77~82は皿である。77は他のものより法量が大きく器壁も厚い。鎌倉時代まで遡る可能性がある。他は近世のもので、78の口縁部には煤が付着する。83・84は茶釜、85~87は焙烙で、煤の付着するものが多く、使用の痕跡を伝える。

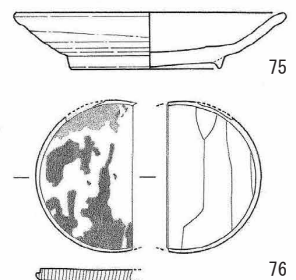
SK904



SK916

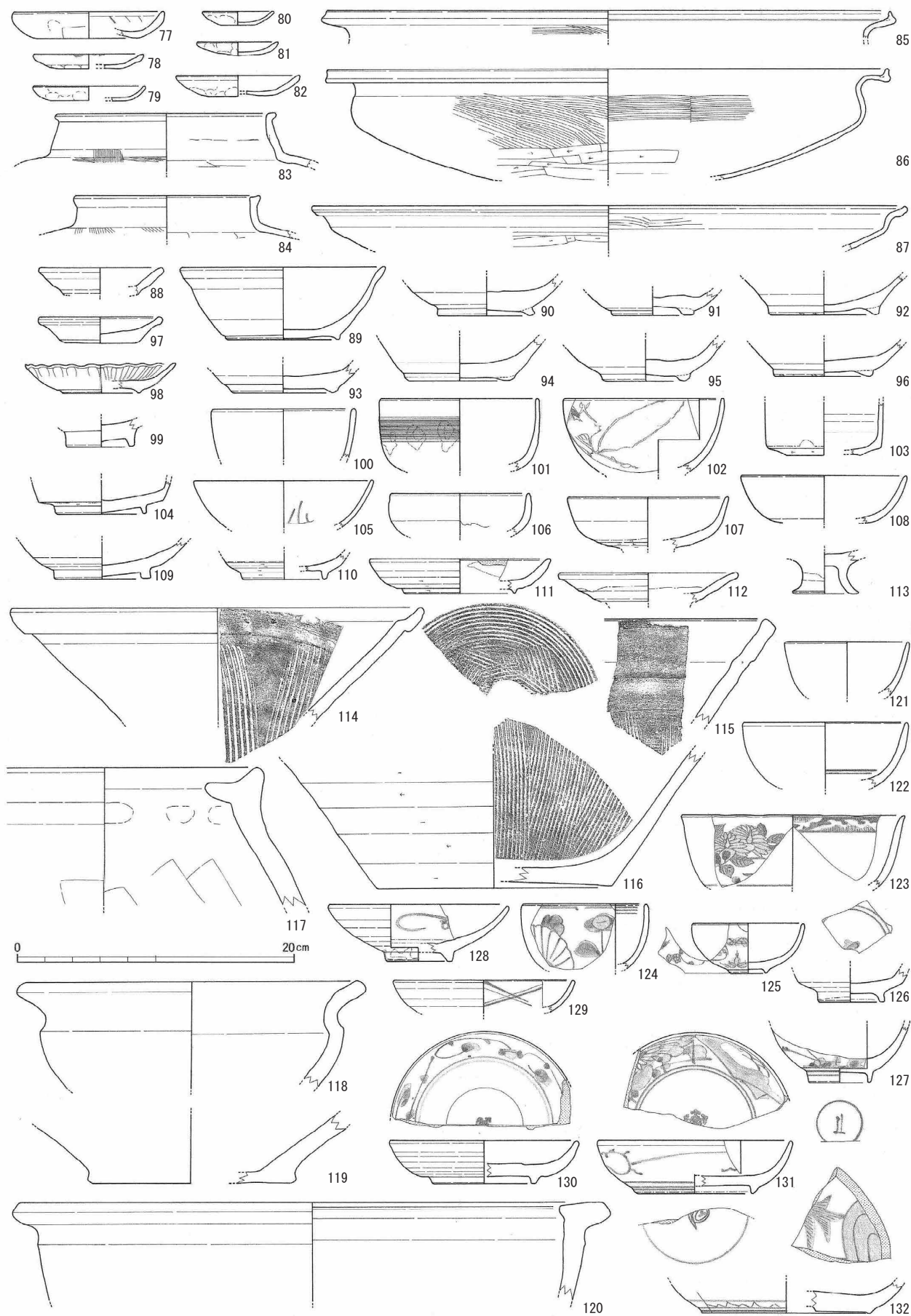


SK917



第211図 第9次調査SK904、SK916、SK917出土遺物 (1:4)





第212図 第9次調査包含層他出土遺物 (1:4)



88はロクロ土師器、89～96は山茶椀、97は山皿である。山茶椀の高台接地面は、砂痕のものと粗殻痕のものが混在する。98は施釉陶器の菊皿で室町時代に遡る大窯期のものである。焼成不良のためか、釉が沸騰し白濁化している。

99～120は陶器である。椀皿類及び播鉢は瀬戸・美濃系、甕類は常滑系が占めるが、105は京・信楽系である。101は灰釉と鉄釉の塗分けに加え、櫛描横線を巡らせた上に灰釉を化粧掛けする。109の見込みには3ヶ所にトチン痕が残る。102は上絵付である。焼成不良のためか多くが剥離しているが、赤と緑の発色が確認できる。

121～132は磁器で、確認できたものの全てが肥前系である。染付で絵柄を描くものが大半で、122と126は染付青磁椀である。123の口縁部は僅かな波状を呈する。126・130・131には五弁花文が施される。126のものは潰れが酷く、明らかにコンニャク印判によるものである。131も比較的端整ではあるものの、130も含めコンニャク印判によるものと思われる。127・

131には裏銘がある。127は3本の線で表現しているが、意味するところは不明である。131は「福」の変形文字と思われる。

(9) SE912出土遺物 (第213図)

図示できたものは全て山茶椀である。135の口縁部は外反し、133もその傾向が残る。136の高台は整ったものであるが、133は潰れ気味である。136の底部外面には墨書で「〇」が描かれる。

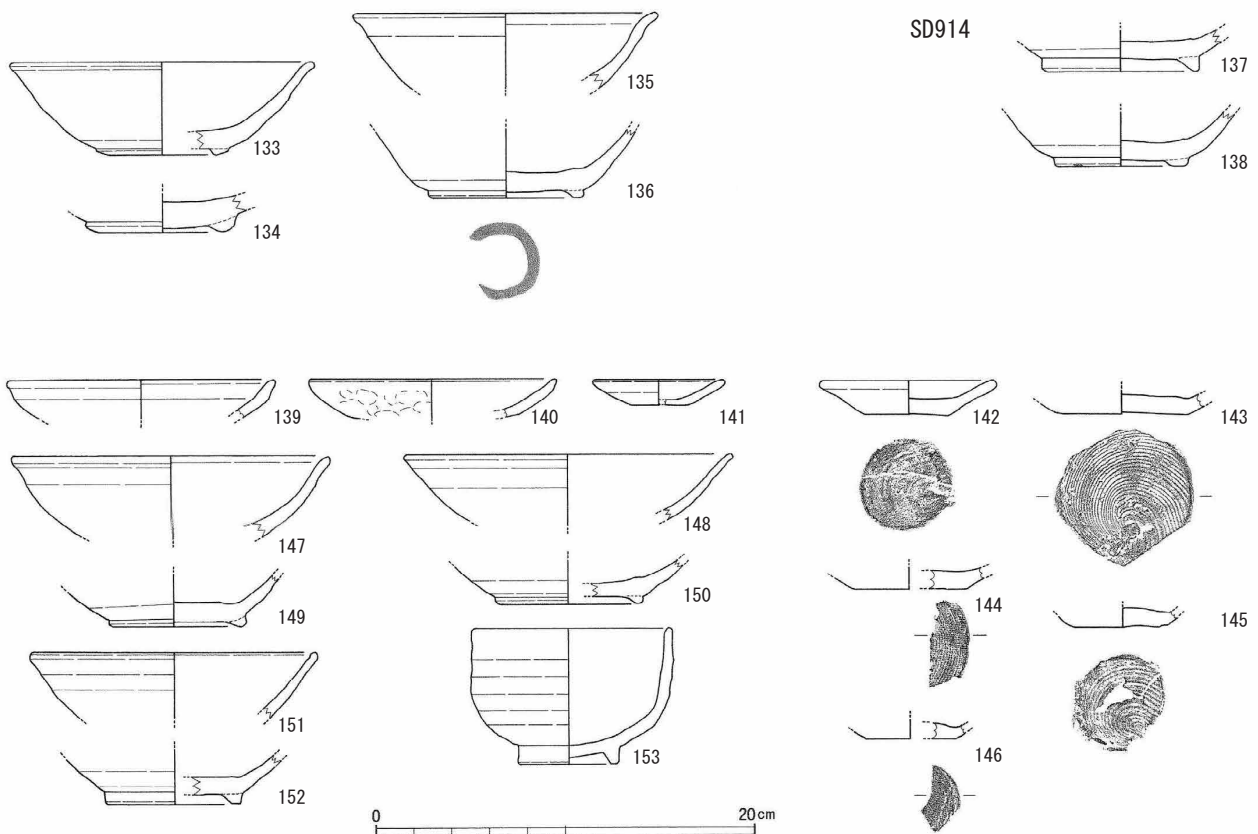
(10) SD914出土遺物 (第213図)

図示できたものは山茶椀2点である。137の高台は高く整ったものであるが、138は低く潰れた形態である。前者には砂痕、後者には粗殻痕が認められる。両者とも硯に転用された痕跡を示す。

(11) 黒褐色シルト層他出土遺物 (第213図)

平安時代末から鎌倉時代のものであるが、153は近世の施釉陶器であり、出土した小穴は上層で検出されるべきものと考えられる。

139～141は土師器の皿である。139・140は口径13cm前後を測るもので、ヨコナデは口縁端部に止まる。



第213図 第9次調査下層出土遺物 (1:4)

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項	
								口径	底径	器高			
1	001-04	土師器	皿	2区		SE901	口縁部 3/12	6.8	1.0	—	橙5YR7/6	口縁部に煤付着。	
2	001-03	土師器	焙烙	2区		SE901	口縁部 1/12	31.4	—	—	橙7.5YR7/6	外面に煤付着。	
3	001-02	土師器	焙烙	2区		SE901	口縁部 1/12	38.4	—	—	橙5YR6/6	外面に煤付着。	
4	001-01	土師器	焙烙	2区		SE901	口縁部 1/12	38.8	—	—	橙5YR6/6	外面に煤付着。	
5	004-06	陶器	蓋	2区		SE901	口縁部 4/12	9.2	5.8	1.6	灰白2.5Y8/1	灰軸。	
6	004-04	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SE901	底部 3/12	—	高台 3.6	—	灰白2.5Y8/1	灰軸。	
7	002-03	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	2区		SE901	口縁部 1/12	11.8	—	—	灰白2.5Y8/2	柿軸。	
8	004-01	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SE901	底部 3/12	12.4	高台 4.4	5.8	灰白N8/	陶胎染付。蔓草文。	
9	004-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SE901	口縁部 1/12	11.4	—	—	灰白N8/	陶胎染付。菱文。	
10	004-03	陶器	椀	2区		SE901	口縁部 2/12	8.0	—	—	灰白2.5Y8/1	上絵付。絵付大半が剥離。	
11	004-05	陶器	瓶	2区		SE901	底部 5/12	—	高台 6.6	—	灰白N8/	灰軸。	
12	002-05	陶器	鉢	2区		SE901	底部 2/12	—	7.4	—	灰白N7/	鉄軸。	
13	002-04	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区		SE901	底部 3/12	—	9.8	—	灰白2.5Y8/2	鉄軸。	
14	002-02	陶器 (常滑)	甗	2区		SE901	底部 4/12	—	10.8	—	赤10R5/6	内面に炭化物付着。	
15	003-02	陶器	鍋	2区		SE901	底部 2/12	—	10.0	—	灰白5Y7/1	行平鍋。灰軸。豆粒状の脚。	
16	002-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区		SE901	口縁部 1/12	33.0	—	—	灰白2.5Y8/2		
17	003-01	陶器 (瀬戸・美濃)	播鉢	2区		SE901	口縁部 小片	—	—	—	灰白2.5Y8/2	播目17本/4.1cm。	
18	003-03	陶器 (京都・信楽)	鬘盥	2区		SE901	7/12	—	—	3.3	灰白2.5Y8/2	上絵付。絵付一部剥離。	
19	005-02	磁器 (肥前)	椀	2区		SE901	口縁部 1/12	8.8	—	—	白N9/	染付。外面竹葉文、内面四方禪文。	
20	005-04	磁器 (肥前)	椀	2区		SE901	口縁部 3/12	9.6	—	—	白N9/	染付。外面丸文、内面四方禪文。	
21	005-08	磁器 (肥前)	椀	2区		SE901	口縁部 2/12	10.3	—	—	白N9/	染付。内外面草花文。	
22	005-06	磁器	椀	2区		SE901	底部 4/12	—	高台 3.4	—	白N9/	透明軸。	
23	005-01	磁器 (肥前)	椀	2区		SE901	口縁部 2/12	11.1	—	—	白N9/	染付。内面圏線。	
24	005-07	磁器 (肥前)	椀	2区		SE901	底部 9/12	9.6	高台 3.9	4.7	白N9/	染付。外面蔓草文。	
25	005-03	磁器 (肥前)	椀	2区		SE901	底部 完存	—	高台 4.3	—	白N9/	筒形椀。染付。外面草木文、内面五弁花文。	
26	005-05	磁器 (肥前)	皿	2区		SE901	底部 3/12	14.0	高台 7.8	3.4	白9/	染付。内面蔓草文+五弁花文。	
27	006-02	磁器 (肥前)	皿	2区		SE901	底部 1/12	—	高台 7.3	—	白N9/	染付。内面草花文。	
28	006-01	磁器 (肥前)	皿	2区		SE901	底部 1/12	—	高台 6.6	—	白N9/	染付。内外面圏線。	
29	001-06	山茶椀	椀	2区		SE901	口縁部 小片	—	—	—	灰白N8/		
30	001-05	山茶椀	椀	2区		SE901	底部 1/12	—	高台 6.8	—	灰白N7/		
31	006-05	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SE905	底部 2/12	12.0	—	—	白N9/	転写。	
32	006-03	磁器 (肥前)	椀	2区		SE905	口縁部 3/12	8.2	—	—	白N9/	染付。外面幾何学文。	
33	006-04	磁器 (肥前)	椀	2区		SE905	底部 8/12	6.8	3.5	5.5	白N9/	筒形椀。染付。外面雪輪文、内面四方禪文+五弁花文。	
34	007-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区		SE905	口縁部 1/12	13.0	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄軸。	
35	007-03	瓦	箱熨斗瓦	2区		SE905	5/12以下	幅 7.7	—	4.2	黒N2/		
36	007-02	瓦	面戸瓦	2区		SE905	完形	幅 5.5	長 15.0	3.3	オリーブ黒 5Y3/1		
37	012-04	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	3区		SE909	底部 11/12	—	高台 4.3	—	灰白2.5Y8/2	鉄軸。	
38	012-05	山茶椀	椀	3区		SE909	底部 7/12	—	高台 6.5	—	灰白N7/	転用硯。	
39	012-01	陶器 (常滑)	鉢	3区		SE909	口縁部 1/12	33.0	—	—	灰褐2.5YR6/2		
40	012-03	陶器 (常滑)	甗	3区		SE909	底部 2/12	—	16.4	—	にぶい赤褐 2.5YR5/4	真焼。	
41	012-02	陶器 (常滑)	甗	3区		SE909	底部 2/12	—	14.6	—	橙5YR7/6		
42	030-01	木製品 (文芸)	曲物	3区		SE909	底板部材 ほぼ完存	14.0	—	厚 1.1	—	—	木釘穴2ヶ所。
43	013-01	石製品 (砂岩)	石臼	3区		SE909	2/12	25.4	—	厚 6.2	灰白5Y7/1	下臼。播目8分割9本。	
44	014-01	石製品 (花崗岩)	石臼	3区		SE909	2/12	24.0	—	厚 8.5	灰5/	上臼。引手孔。播目8分割7本以上。	
45	015-01	瓦	平瓦	3区		SE909	4/12	—	—	谷深 2.9	にぶい黄橙 10YR7/2	二次被熱。	
46	020-01	土師器	焙烙	4区		SE911	口縁部 1/12	35.8	—	—	明赤褐5YR5/6		
47	019-05	陶器	火入	4区		SE911	口縁部 5/12	6.8	—	—	灰白N7/	鉄軸。	
48	021-01	陶器 (唐津)	皿	4区		SE911	口縁部 1/12	26.6	—	—	灰N6/	透明軸。鉄絵葉文。	
49	019-02	陶器 (常滑)	甗	4区		SE911	口縁部 小片	—	—	—	橙2.5YR6/6	真焼。口縁部に刺突文。	
50	009-09	土師器	皿	2区		SK904	口縁部 3/12	8.2	—	1.0	にぶい橙 5YR7/4	口縁部に煤付着。	
51	009-08	土師器	皿	2区		SK904	口縁部 3/12	8.9	—	1.1	橙5YR6/6	口縁部に煤付着。	

第55表-1 第9次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
52	009-07	土師器	皿	2区		SK904	口縁部 5/12	9.6	—	1.3	橙5YR7/6	
53	009-06	土師器	皿	2区		SK904	口縁部 7/12	9.4	—	1.4	橙5YR6/6	底部外面に煤付着。
54	011-02	土師器	土瓶	2区		SK904	体部 4/12	9.5	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	外面に煤付着。
55	010-01	土師器	焙烙	2区		SK904	口縁部 3/12	41.4	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面に煤付着。
56	010-02	土師器	焙烙	2区		SK904	口縁部 1/12	35.6	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	外面に煤付着。
57	010-03	土師器	焙烙	2区		SK904	口縁部 1/12	35.5	—	—	にぶい橙 7.5YR6/4	外面に煤付着。
58	008-05	陶器 (瀬戸・美濃)	蓋	2区		SK904	口縁部 5/12	8.2	—	—	灰白5Y8/1	灰軸。
59	008-04	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	口縁部 2/12	9.6	—	—	灰白N8/	灰軸。
60	008-06	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	底部 完存	8.8	高台 3.9	5.4	灰白2.5Y8/1	灰軸。
61	009-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	底部 完存	9.7	高台 3.2	5.3	灰白N8/	陶胎染付。蔓草文。
62	009-01	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	底部 完存	10.0	高台 3.8	5.6	灰白N8/	陶胎染付。花草文。
63	009-04	陶器	椀	2区		SK904	口縁部 5/12	9.5	高台 2.8	5.6	灰白5Y8/1	上絵付。葉文。
64	008-02	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	口縁部 2/12	13.8	—	—	灰白N8/	灰軸。
65	008-03	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	口縁部 2/12	12.4	—	—	灰白N8/	灰軸。
66	008-01	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	2区		SK904	底部 完存	—	高台 7.8	—	灰白5Y8/1	灰軸。
67	011-01	陶器 (常滑)	壺	2区		SK904	底部 4/12	—	18.8	—	黄灰2.5Y4/1	真焼。
68	008-07	磁器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		SK904	口縁部 2/12	13.4	—	—	灰白N8/	染付。雲気文。
69	009-02	磁器 (肥前)	椀	2区		SK904	口縁部 2/12	9.6	—	—	灰白N8/	染付。蔓草文。
70	009-03	磁器 (肥前)	椀	2区		SK904	口縁部 9/12	9.8	高台 4.0	4.9	灰白N8/	染付。弧状地+桜花文。
71	011-03	瓦	丸瓦	2区		SK904	2/12以下	幅 11.6	—	5.3	黄灰2.5Y2/1	
72	027-06	陶器 (瀬戸・美濃)	天目茶椀	3区		SK916	口縁部 1/12	11.4	—	—	灰白2.5Y8/2	鉄軸。
73	027-03	陶器 (瀬戸・美濃)	鉢	3区		SK916	口縁部 1/12	15.6	—	—	灰白2.5Y8/1	灰軸。
74	027-02	陶器 (瀬戸・美濃)	鍋	3区		SK916	口縁部 1/12	16.6	—	—	にぶい黄橙 10YR6/3	鉄軸。
75	027-05	陶器	皿	3区		SK917	底部 9/12	14.2	高台 7.8	3.0	灰白5Y8/1	灰軸。
76	030-02	木製品 (ヒノキ)	曲物	3区		SK917	蓋板部材 ほぼ完存	8.0	—	厚 0.6	—	蓋板に付着物。
77	028-03	土師器	皿	3区		P4	口縁部 2/12	10.8	—	1.9	浅黄橙 7.5YR8/4	
78	022-07	土師器	皿	3区		包含層	口縁部 4/12	8.0	—	1.1	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部に煤付着。
79	018-05	土師器	皿	2区		焼土坑	口縁部 2/12	8.0	—	1.05	にぶい橙 10YR7/4	
80	020-02	土師器	皿	2区		包含層	口縁部 2/12	5.0	—	1.0	浅黄橙 7.5YR8/3	
81	022-05	土師器	皿	3区		攪乱層	口縁部 10/12	5.8	—	1.0	橙2.5YR6/6	
82	022-06	土師器	皿	3区		包含層	口縁部 2/12	8.9	—	1.5	にぶい橙 7.5YR7/4	
83	022-04	土師器	茶釜	3区		攪乱層	口縁部 2/12	15.7	—	—	橙7.5YR6/6	口縁部に煤付着。
84	028-02	土師器	茶釜	3区		包含層	口縁部 1/12	13.2	—	—	浅黄橙 10YR8/3	
85	023-01	土師器	焙烙	3区		包含層	口縁部 1/12	40.8	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部に煤付着。
86	028-01	土師器	焙烙	3区		包含層	口縁部 1/12	45.0	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	外面煤付着。
87	023-02	土師器	焙烙	3区		包含層	口縁部 1/12	43.0	—	—	にぶい橙 2.5YR6/4	外面煤付着。
88	017-07	ロクロ土師器	皿	2区		包含層	口縁部 5/12	8.8	—	2.0	橙2.5YR6/6	
89	026-06	山茶椀	椀	3区		P4	底部 9/12	14.7	高台 8.0	5.3	灰白N8/	
90	024-02	山茶椀	椀	3区		包含層	底部 3/12	—	高台 6.9	—	灰白2.5Y7/1	
91	024-01	山茶椀	椀	3区		包含層	底部 3/12	—	高台 5.8	—	灰白2.5Y7/1	
92	019-04	山茶椀	椀	2区		包含層	底部 3/12	—	高台 7.6	—	灰白N7/	内面に付着物。
93	026-07	山茶椀	椀	3区		P4	底部 11/12	—	高台 7.2	—	灰白N7/	
94	019-03	山茶椀	椀	2区		包含層	底部 5/12	—	高台 7.3	—	灰白2.5Y7/1	
95	028-05	山茶椀	椀	3区		包含層	底部 完存	—	高台 5.6	—	灰黄2.5Y7/2	
96	024-03	山茶椀	椀	3区		包含層	底部 完存	—	高台 6.9	—	灰黄2.5Y6/1	
97	024-04	山茶椀	皿	3区		包含層	底部 10/12	8.7	5.1	1.9	灰白2.5Y7/1	
98	028-06	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	3区		包含層	口縁部 3/12	10.8	高台 5.2	2.2	灰白5Y8/2	菊皿。灰軸。
99	024-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	3区		包含層	底部 9/12	—	高台 4.8	—	灰白5Y8/2	灰軸。
100	017-06	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		包含層	口縁部 1/12	10.2	—	—	灰黄2.5Y7/2	灰軸。
101	020-06	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		包含層	口縁部 1/12	11.4	—	—	灰白N8/	塗分椀。鉄軸+灰軸。
102	022-01	陶器	椀	3区		造成土	口縁部 3/12	11.4	—	—	灰白5Y8/2	上絵付。

第55表-2 第9次調査出土遺物観察表

遺物 番号	実測 番号	種類 (産地・系統)	器種	調査区	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			色調 (外面)	特記事項
								口径	底径	器高		
103	018-03	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		包含層	体下部 2/12	—	—	—	灰黄2.5Y7/2	透明釉。
104	017-08	陶器 (瀬戸・美濃)	瓶	2区		包含層	底部 8/12	—	高台 6.3	—	灰白5Y8/1	透明釉。
105	027-04	陶器 (京都・信楽)	椀	3区		P9	口縁部 1/12	12.8	—	—	灰白2.5Y8/2	木賊文。
106	017-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		包含層	口縁部 3/12	10.0	—	—	灰白2.5Y8/2	透明釉。
107	018-06	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		焼土坑	口縁部 3/12	11.5	—	—	灰白10YR7/1	灰釉。
108	020-04	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	4区		焼土坑	口縁部 2/12	11.8	—	—	灰白N8/	透明釉。
109	029-05	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	3区		包含層	底部 7/12	—	高台 6.8	—	灰白N8/	灰釉。
110	018-01	陶器 (瀬戸・美濃)	椀	2区		包含層	底部 3/12	—	高台 6.0	—	灰黄2.5Y7/2	透明釉。
111	018-04	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	2区		包含層	口縁部 1/12	13.0	—	—	灰白2.5Y7/1	灰釉。
112	020-03	陶器 (瀬戸・美濃)	皿	4区		焼土坑	口縁部 1/12	12.6	—	—	灰白2.5Y8/2	灰釉。
113	022-02	陶器	仏飯具	3区		造成土	脚部 完存	—	4.6	—	灰白2.5Y8/2	鉄釉。
114	029-01	陶器	描鉢	3区		P11	口縁部 1/12	29.8	—	—	浅黄橙 10YR8/3	描目9本/3.2cm
115	017-04	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	2区		包含層	口縁部 小片	—	—	—	浅黄橙 10YR8/3	描目5本/1cm
116	025-03	陶器 (瀬戸・美濃)	描鉢	3区		包含層	底部 3/12	—	16.0	—	にぶい黄橙 10YR7/4	描目17本/4.5cm
117	019-01	陶器 (常滑)	甕	4区		包含層	口縁部 小片	—	—	—	橙2.5YR6/8	赤物。
118	029-02	陶器 (常滑)	鉢	3区		包含層	口縁部 1/12	24.0	—	—	灰褐5YR4/2	
119	029-03	陶器 (常滑)	甕	3区		P14	底部 2/12	—	14.2	—	橙5YR7/6	
120	023-03	陶器 (常滑)	甕	3区		包含層	口縁部 1/12	42.3	—	—	褐灰10YR5/1	
121	020-05	磁器	椀	2区		包含層	口縁部 2/12	8.8	—	—	灰白N8/	透明釉。
122	025-02	磁器 (肥前)	椀	3区		包含層	口縁部 3/12	11.8	—	—	灰白2.5Y7/1	染付青磁。
123	021-03	磁器 (肥前)	椀	2区		包含層	口縁部 1/12	16.0	—	—	灰白N8/	端反椀。染付。外面菊花文、内面唐草文。
124	025-01	磁器 (肥前)	椀	3区		包含層	口縁部 2/12	8.8	—	—	灰白5Y8/1	染付。草花文。
125	021-04	磁器 (肥前)	椀	2区		包含層	底部 5/12	8.0	高台 2.6	3.6	灰白N8/	染付。花唐草文。
126	022-03	磁器 (肥前)	椀	3区		攪乱層	底部 5/12	—	高台 4.6	—	白N9/	染付青磁。五弁花文。
127	018-07	磁器 (肥前)	椀	2区		焼土坑	底部 3/12	—	高台 4.3	—	灰白7.5Y8/1	染付。蔓草文。裏銘。
128	018-02	磁器 (肥前)	皿	2区		包含層	底部 3/12	13.0	高台 4.7	4.1	白N9/	染付。葉文。
129	018-08	磁器 (肥前)	皿	2区		焼土坑	口縁部 2/12	13.0	—	—	白N9/	染付。葉文。
130	021-05	磁器 (肥前)	皿	2区		造成土	口縁部 2/12	13.6	高台 7.4	3.1	灰白N8/	染付。蔓草文+五弁花文。
131	024-06	磁器 (肥前)	皿	3区		包含層	口縁部 4/12	14.0	高台 8.2	3.9	灰白N8/	染付。外面蔓草、内面草花文+五弁花文。 裏銘。
132	021-02	磁器 (肥前)	皿	2区		包含層	底部 2/12	—	高台 12.2	—	灰白N8/	染付。鋸歯文、内面草花文。
133	026-02	山茶椀	椀	3区		SE912	底部 2/12	15.6	高台 5.6	4.9	灰白10YR7/1	
134	026-03	山茶椀	椀	3区		SE912	底部 8/12	—	高台 6.6	—	灰白N8/	内面に煤付着。
135	026-04	山茶椀	椀	3区		SE912	口縁部 2/12	15.6	—	—	灰白N8/	
136	026-01	山茶椀	椀	3区		SE912	底部 4/12	—	高台 7.8	—	灰白N8/	外面に墨書。
137	027-01	山茶椀	椀	3区		SK914	底部 7/12	—	高台 7.6	—	灰白N8/	転用碗。
138	026-05	山茶椀	椀	3区		SD914	底部 5/12	—	高台 6.6	—	灰白N7/	転用碗。
139	016-04	土師器	皿	2区		黒褐色シルト層	口縁部 1/12	13.9	—	—	淡黄2.5Y8/3	
140	016-03	土師器	皿	2区		P2	口縁部 1/12	12.8	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	
141	027-07	土師器	皿	3区		SK915	口縁部 2/12	6.8	—	1.3	浅黄橙 7.5YR8/4	
142	016-06	ロクロ土師器	皿	2区		黒褐色シルト層	底部 完存	8.8	4.5	1.9	灰白2.5Y8/1	内外面煤付着。山茶椀か。
143	016-05	ロクロ土師器	皿	2区		黒褐色シルト層	底部 10/12	—	6.8	—	にぶい黄橙 10YR6/4	
144	016-07	ロクロ土師器	皿	2区		黒褐色シルト層	底部 3/12	—	6.0	—	にぶい黄橙 10YR7/3	
145	010-04	ロクロ土師器	皿	2区		SK903	底部 10/12	—	5.0	—	橙7.5YR6/6	
146	016-02	ロクロ土師器	皿	2区		P1	底部 3/12	—	4.8	—	にぶい橙 2.5YR7/4	
147	016-01	山茶椀	椀	2区		P1	口縁部 1/12	16.4	—	—	灰白2.5Y7/1	
148	016-08	山茶椀	椀	2区		黒褐色シルト層	口縁部 2/12	17.0	—	—	灰白2.5Y6/1	
149	028-04	山茶椀	椀	3区		黒褐色シルト層	底部 3/12	—	高台 6.7	—	灰白N8/	
150	017-03	山茶椀	椀	2区		黒褐色シルト層	底部 3/12	—	高台 7.6	—	灰5Y6/1	
151	017-01	山茶椀	椀	2区		黒褐色シルト層	口縁部 1/12	14.8	—	—	灰白2.5Y7/1	
152	017-02	山茶椀	椀	2区		黒褐色シルト層	底部 4/12	—	高台 7.0	—	灰10YR7/1	
153	029-04	陶器	椀	3区		P18	底部 ほぼ完存	10.2	高台 5.1	7.2	灰白2.5Y8/2	灰釉。

第55表-3 第9次調査出土遺物観察表



141は小型のものであるが、底部から直線的に開く口縁部をもつ。

142~146はロクロ土師器の皿としたが、143・144は椀の可能性もある。

147~152は山茶椀である。147の口縁端部は外反傾向を残すが、148・151は直線的である。152の高台は整った高いものであるが、150は低く潰れ気味である。149には砂痕、150には靨殻痕が認められ、151・152の内面は使用のためか平滑である。(森川)

## 4. 樹種同定

### (1) はじめに

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

### (2) 試料と方法

試料は、SE909より出土した曲物底板、SK917より出土した曲物蓋の2点である。試料の詳細は結果表に記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス(Mount-Quick" Aqueous": 大道産業)で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡(OPTIPHOTO-2: Nikon)によって40~1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### (3) 結果

表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

42 スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科  
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成され

る針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

76 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。

### (4) 所見

同定の結果、松坂城下町遺跡の木製品はスギ1点、ヒノキ1点であった。

曲物底板はスギであった。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。耐朽・保存性は心材において中庸、辺材において低いが、調湿性に優れており曲物によく利用される。曲物蓋はヒノキであった。ヒノキは木理通直で大きな材が取れる良材であり、耐朽・耐湿性も高く、特に保存性が高い。加工工作が容易であり、建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられ、曲物によく利用される。曲物は古くから水気のあるものを入れる木製の容器として利用されてきており、用材は加工および供給が容易で水湿に耐える樹種が多い。全国的に見て、スギおよびヒノキは曲物に最も多く利用される樹種であり、底板のみを見ると比較的ヒノキの方が多く見られる。

同定されたいずれの樹種も温帯を中心に分布する針葉樹であった。スギは特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成し、湿潤な環境を好む。ヒノキは適潤

No.	器種	R	出土遺構	結果(学名/和名)
42	曲物 底板	9次30-1	SE909	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don スギ
76	曲物 蓋	9次30-2	SK917	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl. ヒノキ

第56表 第9次調査樹種同定結果

性であるが乾燥した環境にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にも生育する。いずれの樹種も当時遺跡周辺に生育していたか、あるいは流通によって製品がもたらされたと考えられる。

((一社)文化財科学研究センター 金原裕美子)

#### [参考文献]

- ・ 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学, 雄山閣, p. 449.
- ・ 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.
- ・ 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.
- ・ 島地謙・伊東隆夫 (1982) 図説木材組織, 地球社, p. 176.
- ・ 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p. 296.
- ・ 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p. 242.

## 5. 小結

今回の調査区の主体を成す2区～4区は、享和以後(19世紀)の「松坂町絵図」によれば博労町に相当し、大手筋から北西方向に離れていく。比較的安定した土層を呈し、大手筋から離れるほどに標高も高まる傾向にある。他の調査区と異なり、湿地帯の様相は少ない。このためか、近世検出面の下位から中世の検出面を確認できた。

中世検出面では井戸(S E 912)が検出されており、中世の集落跡の存在を示している。出土した山茶碗は口径15.6cmを測り、体部の丸味や口縁端部の外反を残す。しかし高台は低く潰れた傾向にあり、第Ⅲ段階第5型式<sup>(1)</sup>を遡ることは困難で、12世後半から末頃か。他の遺構等からは土師器皿、ロクロ土師器、山茶碗が出土しているが、山茶碗はS E 912と同様な特徴を示している。斎宮ではロクロ土師器が13世紀に入ると急速に消滅に向う<sup>(2)</sup>ため、12世紀を下らない可能性が高い。土師器皿の形状も合致しており、これら中世の遺物は12世紀後半～末頃に集約されそうである。この様に、松坂城下町の下層に

は平安時代末～鎌倉時代初頭の集落跡を確認するという成果を得た。

さて、近世の遺構であるが、井戸、土坑、溝を検出している。土坑は井戸状の大型のものが多く、S D 914は平安時代末～鎌倉時代の幅5mを測る大規模なものであるが、最終埋没が近世まで下る。平面形が不定形なものであるため、自然流路の可能性もある。一方、S D 906は幅1mの整った形状で人工掘削と思われる、真直ぐ伸びる様相を示すものの延長上にある3区では検出されず疑問を残す。

S E 901及びS K 904からは、土師器・陶器・磁器が比較的まとまって出土している。18世紀に盛行する五弁花文<sup>(3)</sup>や煎茶碗等が見られるが、17の播鉢は第10小期<sup>(4)</sup>の特徴を示し、19世紀に下る。68は端反碗で瀬戸・美濃系である。包含層等からの出土遺物をみてもコンニャク印判を主体とする五弁花文や染付青磁碗等18世紀のものが主体を占める一方で、端反碗等19世紀に下るもの<sup>(5)</sup>が散見されるという同様な傾向を示す。したがって、これら近世の遺構の多くは18世紀のもので、その多くが19世紀まで継続するという城下町としては当然の状況を示している。

なお、3区では多くの小穴を検出しているが、建物としてまとまるものは無かった。しかし、3区の南東端ちかくでは底に扁平な石を据えるものが複数あり、掘立柱建物の根石とみるのが妥当である。詳細な時期は不明であるものの、博労町では近世に至っても掘立柱建物であったことを示している。(森川)

#### [註]

- (1) 藤澤良裕『瀬戸古窯跡群Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
- (2) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月
- (3) 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 平成元年10月5日
- (4) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別冊 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県平成19年3月31日
- (5) 野上建紀「磁器の編年(色絵以外)」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会2000年2月

## XII. 総 括

### 1. 城下町の変遷と古環境

#### (1) 松坂城下町遺跡（東外縁部）の層序区分

まず、3次・5次調査の基本層序区分を基軸として、調査地全体の様相をまとめる（第214図）。

**I：現代整地層・構造物** アスファルト・碎石等。

**II：近代整地層** 炭や焼土、壁土等の細かい夾雑物が多く混じる灰黄色系砂質土。明治以降の遺物含む。

**III：近世整地層①** 炭や焼土などの夾雑物を含む灰黄色系砂質土で、町屋の機能面（三和土や硬化面）を挟み、度々整地されている。層中に19世紀前半までの遺物を含み、層上・層間に近世の遺構が認められる。また、18世紀後半から19世紀初頭の遺物を含む局所的な整地層（粗砂）がある。近現代の改変により削平されている地点が多い。

**IV：近世整地層②** 洪水堆積である均質な砂や砂質シルト、またはそれを母材とした整地層である。博労町・外博労町付近では湿地状地であるS Z 550埋没後に積層し、18世紀中葉から後半の遺物を含む。本層上で焼土土坑・ピットを多数検出している。

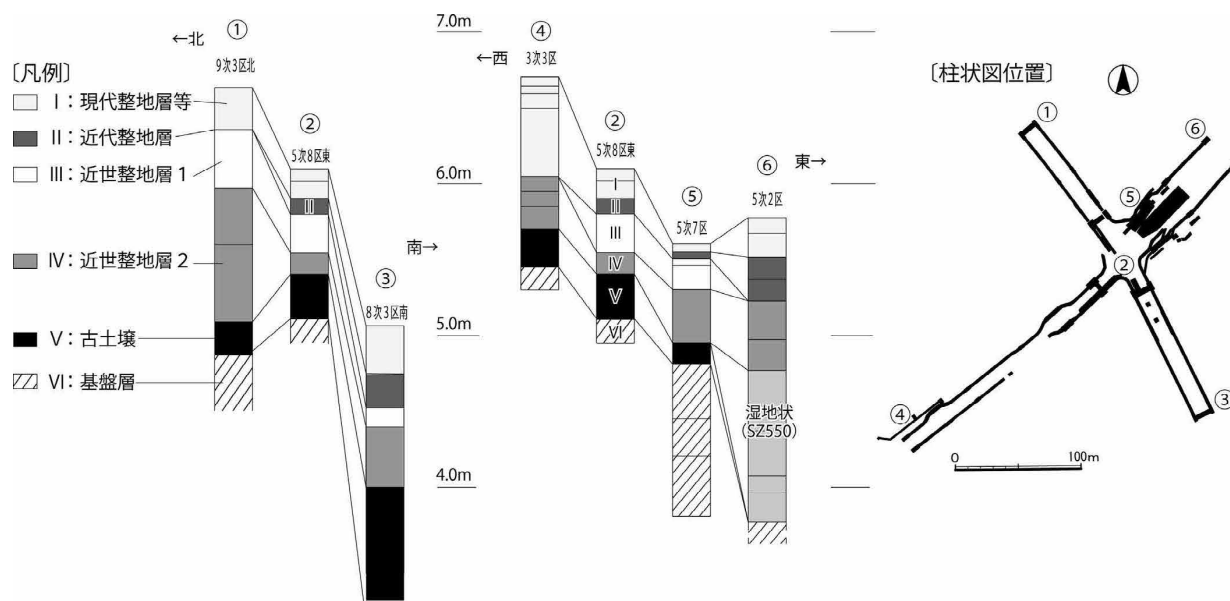
袋町付近では5次S Z 551・8次S Z 828・831埋没後に積層し、層中・層間に18世紀後半～19世紀初頭の遺物を含む。

**V：城下町形成前の古土壤** 締まりのない黒色土で、高燥地では黒ボク状、低地は泥質の粘土質シルトとなり、神通川に近い8次2～4区では層厚が1mを超えまだ深く続く。調査地の地形は南北方向では阪内川堤防から神通川へ、東西方向では松坂城側から外博労町方向へ低くなるが（第II章）、V層上面の段階では阪内川堤防一大手道間の高低差はなく、むしろ阪内川側が低い地点さえある。このように、近世以降、特に18世紀中葉以降に阪内川堤防付近の高上げが急激に進んだ点は重要である。

土壌分析の結果、阪内川堤防側はやや乾燥した草地環境で、アカマツ二次林形成前の古土壤であったことが示唆された。9次調査では、V層を切り込む中世遺構があり、V層形成は中世を通じて進行したと考えられる。中世および近世古相の遺構は有機物の多い黒色土で埋没するが、V層が埋土の母材となったことに一因があろう。

**VI：基盤層** 人為物を含まない軟弱な黄褐色・緑灰色系粘土質シルト～粘土で、阪内川の氾濫堆積物である。表層以外は阪内川の伏流水で強グライ化し、水分を多く含み極めて軟弱である。

8・9次調査では、本層上を平安～鎌倉時代の遺構検出面としている。



第214図 基本層序と調査地の微地形（柱状図1:50）

## (2) 城下町形成前の中世集落と古環境

8次、9次調査では平安末から鎌倉時代のピットや土坑・溝などがみられた(第X・XI章)。湿地状である外博労町付近では遺構は認められず、元々希薄だったか城下町造成時の地形改変により滅失したと推測される。また、基本層序V層が深く落ち込んでいく8次調査2・3区南側も遺構は希薄である。

現状、平安末～鎌倉期の遺構は、阪内川沿いから松坂城三の丸付近の段丘上に認められ、周辺遺跡の分布から、阪内川対岸の川井町付近にも集落が広がる可能性が高い。なお、14世紀～16世紀中葉の遺構はなく、近世遺構中に伝世品とみられる戦国期の常滑甕がある程度に過ぎない。室町以降、元龜・天正年間までは集落の空白期だったとみられる。

基本層序V層の花粉分析結果(第VII章5節)から、調査地は雑草や竹笹類が生育するやや乾燥した草地と推定された。周辺には乾燥を好む落葉広葉樹と照葉樹の二次林が分布し、アカマツ二次林は未成立であることから、後背に控える四五百森の開発もまた、元龜・天正年間まで低調だったといえよう。

## (3) 城下町期の古環境と堆積環境

5次調査花粉分析の結果、城下町期には周辺地域でアカマツ二次林が成立し、丘陵の荒廃ないし裸地化が進んだとみられる。他にコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属の二次林が分布する。また、キク亜科等の乾燥を好む畑や集落域の草本、道沿いや林縁の環境を示唆するツユクサ属がみられ、遺跡付近では樹木種実のモチノキ、センダン、コナラ属コナラ亜属などの生育や植栽が想定される。

一方、5次S Z 550は陸生珪藻が優占する湿地環境であった。スゲ属、ミゾソバ、タデ属サナエタデ節の水生植物が生育する湿潤環境であり、寄生虫卵が密度高く検出され、食用・薬用植物の残滓とみられる草本花粉が主要をなし、糞便ないしその成分が流れ込む状況であったとみられる。また、珪藻から塩分を含む生活排水の流れ込みが考えられた。

このように、城下町期以降、自然環境への負荷が格段に増大したことが明らかになった。

## (4) 城下町の総堀と下水・上水

**総堀の概要と位置** 今回の調査では、城下を囲む総堀の一端を明らかにすることができた。

正保城絵図において、城下の総堀は主要な排水路である神道川と同幅に描かれ、他の背割下水とは明確に区別される(巻頭図版1)。伊勢街道・和歌山街道との交差点には橋が描かれるが、その他地点は陸橋となり堀は途切れている。出入口には柵形はない。内側には土塁が存在したとみられるが、絵図提出時には既に田開(空地)となっている。

正保城絵図からみた総堀推定位置は、御厨神社裏ー博労町背割下水ー「どぶ町」背割下水ー継松寺裏の街路を結ぶラインである(第215図)。今回の調査では、1次溝状遺構、5次S Z 550の一部・S D 554、6次S D 6001・S K 6028がみられた。

**規模** 正保城絵図には総堀の規模に関する注記がない<sup>(1)</sup>。1次溝状遺構は幅約15m、深さ1.2m以上で、6次S D 6001・6次S K 6028は2遺構で幅13～15m、深さ1.1m以上を測る。5次S D 554は上面で幅約20m、深さは1m以上あり、6次S D 6001・1次溝状遺構とL字状になる可能性が高い。

一方、大手道の北側は5次1区S Z 550の底面付近が二股状で、付近を肩と仮定すると幅約15m程となり、西岸がL字形に屈曲している。これらから、総堀の規模は概ね幅15m前後、深さ1m強に復原され(第216図)、その幅は、継松寺・竜華寺等の背後側街路幅、一部街路化した神道川の旧幅に近く、正保城絵図の表現と比べても違和感はない。

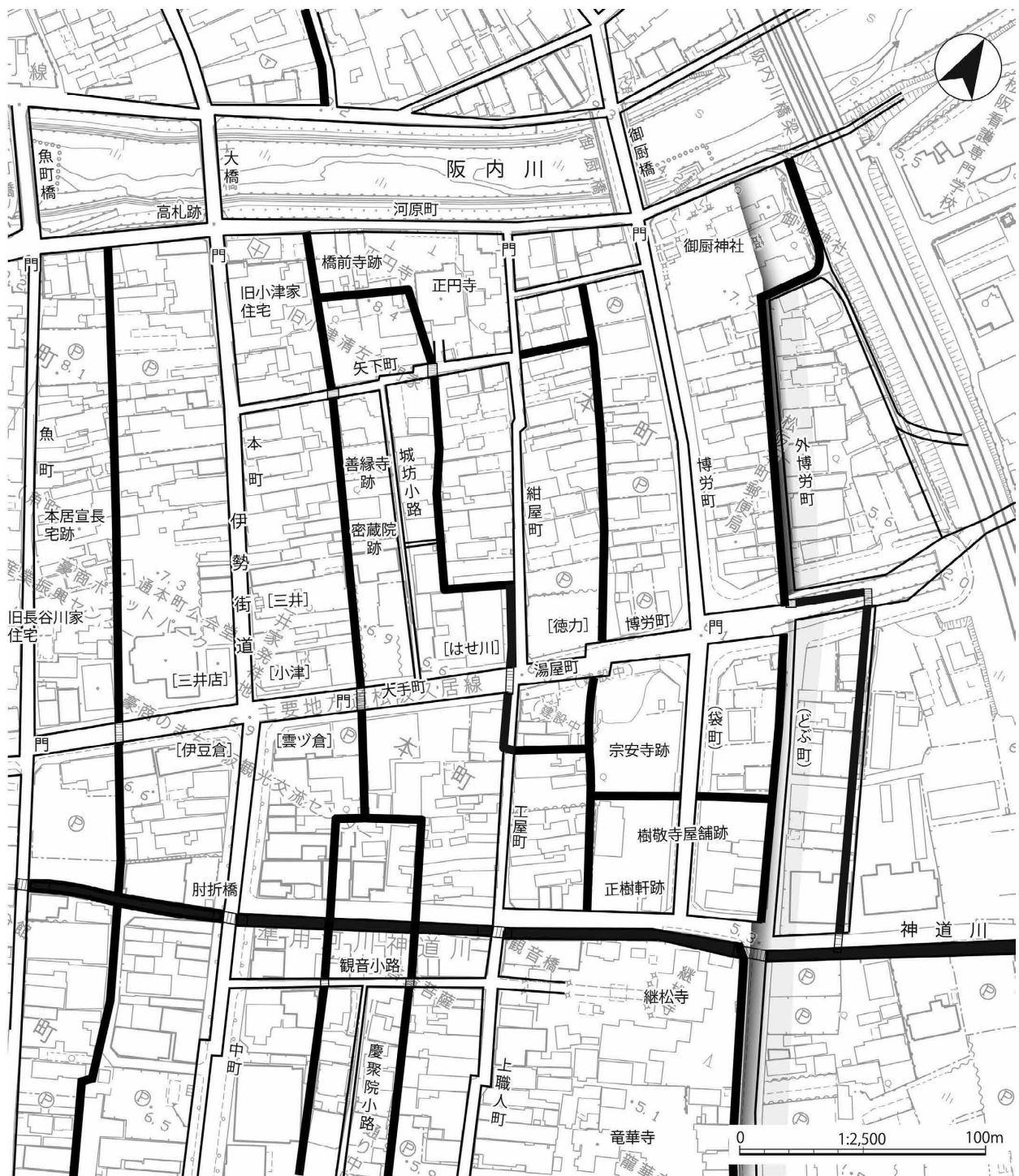
なお、松坂城の堀の規模と比較すると、正保城絵図の注記で幅16～30m、水深1～3.3mとあり、城堀規模の最小値と総堀規模がほぼ近いといえる。

総堀付近で土塁の痕跡は確認されなかった。

**消長** 元禄～元文の「伊勢松坂城下図」では、既に総堀は大きく改変され、大手道に平行して屈折する博労町の背割下水となっている(第215図)。また、享和以降の町絵図(巻頭図版2)では、神道川・愛宕川がより強調されるようになり、門の位置も博労町街路と大手道の交差点付近に変わっている。

総堀関連遺構の出土遺物を総覧すると、1次溝状遺構は上層に19世紀初頭の肥前磁器を含むが、上層は再掘削されている。5次S Z 550・S D 554は17～18世紀前半の遺物とともに、18世紀後葉～末の遺物を含むが、後者は「どぶ町」付近一帯の埋没・整地に伴うものとみられる。また、S D 554の上面には





三重県共有デジタル地図(2017)に加筆。松阪市市街図(昭和25年)の街路・背割下水をベースとし、右記絵図の街路・背割下水を累代的に加えて作成した。

〔凡例〕	
	下水
	正保城絵図の総堀推定線
[ ]	『宝暦咄し』記載江戸店持ち商家(一部)
( )	『宝暦咄し』記載町名

- 松坂古地図 元禄3年以前
- 勢州松坂之図 元禄~元文頃
- 松坂町絵図 元禄~享和頃
- 松坂図(松坂権輿雄集絵図) 宝暦2年
- 松坂絵図 安永8年
- 松坂町之図 享和3年
- 松坂町絵図 享和以後
- 松坂町絵図 天保~嘉永頃
- 安政三年辰春全図 安政3年
- 松坂町絵図 慶応2年

第215図 松坂城下町東外縁部の町割と背割下水・総堀 (1:2,500)

18世紀中葉以降の町屋関連遺構がみられる。6次SD6001は露卯下駄など17～18世紀前半の遺物がみられるが、6次SK6028は18世紀後葉～末の遺物が主体で、時期差が明確である。このように、総堀付近では17～18世紀前半の遺物と、やや間を挟んで18世紀後葉～19世紀の遺物がみられ、前者が総堀の存続期間、後者が背割下水としての再掘削や町屋関連遺構に伴うと考えられる。

調査区の制約等により、規模や開削時期、消長に関する基本的なデータ不足は否めない。特に、総堀が蒲生～藩政期のどの段階で開削・整備されたかは今後も引き続き検討していく必要がある。

**背割下水** 今回検出した遺構で背割下水に対比できるものは、5次SD502（外博労町裏）程度で、18世紀前半以前の背割下水は明確でない。現在まで踏襲された背割下水が多かったとみられる。

2次調査では、本町－大手町間の近現代背割下水の下層で、貫の枘穴をもつ角柱材を確認した（第19図）。当地付近は背割下水が大手道を横断し、正保城絵図以降の絵図には板橋が描かれている。享和以後の松坂町絵図には、背割下水に隣接する門がみられる。この橋脚や門の部材の可能性があろう。

**上水と井戸** 今回の調査では、江戸時代の上水道に関する導水管や継手はみられず、上水は阪内川の伏

流水を利用した井戸水が主体だったと考えられる。

井戸やそれに類する円筒形土坑は、博労町街路から大手道の付近で多く確認された。当地は阪内川堤防ないし自然堤防の縁辺で、基本層序V層の堆積が厚い低地部との境目にあたり、袋町付近に比べると湧水を得やすい場所だったといえる。一般的な町屋では、主屋背後の裏庭等に井戸がみられることが多いが、9次調査SE911などの例から、街路沿いなし街路上にも井戸があったと推察される。井戸形式は結桶や常滑製井戸側を積み上げたものがみられた（第146図）。

### （5）延宝・元文の大火

松坂城下では放火や失火により度々火災が発生しており（第II章）、調査地の付近では、矢下町から紺屋町が類焼した延宝8年（1680）、大手町・博労町・紺屋町が類焼、御厨神社・惣安寺が焼失した元文元年（1736）の大火が遺構・遺物の年代的定点となりうる。特に元文大火は、近世松坂最大の火災とされ、発掘調査において極めて重要である。

ところが、今回の調査では広域鍵層となりうる江戸時代の火災層（炭・焼土層）は検出されず、その上下で遺構の時期を把握できる状況はなかった。このため、遺構・遺物の様相から、ある程度推測を交えつつ大火の状況を復原したい。



第216図 総堀推定復原図（1:400）

**延宝大火** 矢下町や紺屋町など主に調査地の北西側が被災している。紺屋町付近の調査区ではこの時代の遺構が明確でない。より東側の5次S Z 550は17世紀代の遺物を含み、若干の被熱瓦・陶磁器、熱で発泡した硯などの遺物が認められるが、層中には焼土や炭化材をあまり含まない。また、基本層序V層上の遺構にも塵芥処理坑などは認められない。

これらから、S Z 550埋没は博労町付近が被災した元文大火の前であり、埋土には延宝大火の遺物が若干混じる程度だったと考えられる。

**元文大火** 文献によれば調査地の周囲一帯が被災したという。外博労町の5次上層遺構には塵芥処理坑や被熱陶磁器・瓦を含む土坑・ピットが多くみられる。被熱した陶磁器は肥前磁器、特に波佐見の輪禿皿（1730～60年代）が多い。また、これら遺構は18世紀後半から19世紀初頭の遺物を含む局所的な整地層（黄色系粗砂）に切られており、18世紀中葉から後半の遺構群と考えられ、元文大火の関連遺構が含まれよう（第Ⅶ章、第91図）。

博労町・紺屋町付近の7・8・9次調査では、調査区断面で焼土土坑を多数確認した。これらは、基本層序IV層を基盤とした近世遺構の可能性があるが、厳密な時期把握は困難であった。現代整地層直下で検出したものは19世紀～近代に降る可能性があるが<sup>(2)</sup>、時期不明のものも含めて焼土土坑の分布域を示し、注意喚起しておきたい（第218図）。

なお、袋町付近の8次2～4区では焼土土坑を確認していないが、これは次項に述べる18世紀後半以降の水害と整地が影響したかもしれない。

焼土土坑は、大火以外の小規模火災や、竈や鍛冶関連遺構の塵芥処理で生じた可能性もある。大火の痕跡は、今後も追及していく必要がある。

#### （6）水害と復旧

調査地付近では、基本層序IV層、特に2次下層、3次下層に流理の明瞭な砂・シルトや砂礫層があり、17～18世紀を通じて洪水や破堤堆積による埋積が度々生じたこと、この間に地盤高が1m近く上昇したことを確認できた。基本層序III層に至ると整地層の上昇は緩やかになり、顕著な洪水砂層も介在しないことから、19世紀以降、現在にほぼ近い地盤ができたようである。

河川堆積はリッジ（微高地）を生むとともに、低地部の排水不良と湿地化を生じさせ、その復旧・整地は阪内川沿いの諸町で度々問題化したと推測される。5次S Z 550の状況から、低地部には総堀や背割下水、便槽の汚水などが流れ込むとともに、埋積の過程で塵芥が投棄されていたであろう。

袋町・どぶ町の町屋付近にみられる5次S Z 551や12区3層の一部、8次S Z 828・831は浅い湿地状堆積で18世紀後葉～末頃の遺物を多く含むが、17世紀以来町屋化した場所に恒常的な湿地・沼地が存在したとは考えにくく、ある時期の洪水イベントにより生じた、排水不良地の埋積と復旧に伴う整地層とみる方が理解しやすい。これらの埋没後、5次S K 542・543・548、S D 538など、19世紀初頭までに局所的な粗砂の整地がみられ、基本層序III層上で町屋関連遺構が把握できるようになる。

18世紀中葉から末には、延享4年（1747）、安永2年（1773）、寛政4年（1792）と約20年間隔で阪内川の大洪水が起きていることも調和的である（第Ⅱ章）。『宝暦咄し』は、その後19世紀初頭に「一統ふしんをする事大はやり」と伝える。

#### （7）城下町期の土地変遷史

以上を元に、城下町東外縁部の土地変遷史を大きく5期に区分し、第217図にまとめた。遺構の変遷はより大まかに3期に分けて第218図に示す。

##### ①城下町1期（16世紀末～17世紀前半）

当該期の遺構は明確なものが少ない。伊勢街道に近い本町付近の2次・3次下層で、基本層序V層の上部が湿地状を呈し、中世末の遺物がみられる。また、不定形な溝や落ち込みが各所にみられる。

正保城絵図作成時には、外博労町・「どぶ町」・袋町を除く基本的な町割、総堀は完成しているとみられるが、総堀の開削時期はなお検討を要する。

##### ②城下町2期（17世紀後半～18世紀前葉）

基本層序V層上ないしIV層上の遺構で、明確なものが少ない。総堀関係遺構、5次S Z 550が存続する他、17世紀代の常滑甕がみられた3次S X 301・S K 302などはこの時期の可能性もある。将来的には延宝大火の前後で細分できる可能性がある。

これ以降、本町付近では近世遺構を確認できていないが、享保頃には土蔵の建築が付近で相次いでお



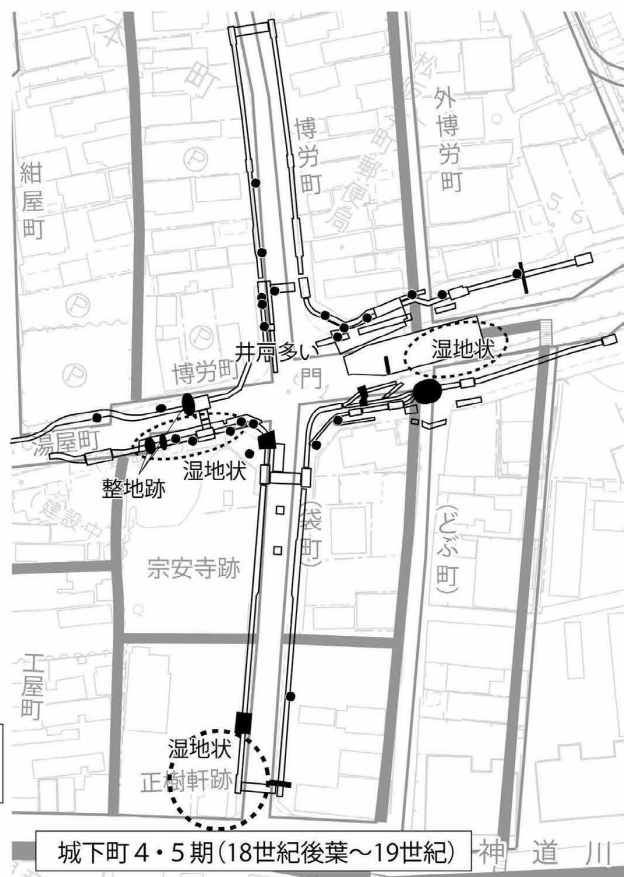
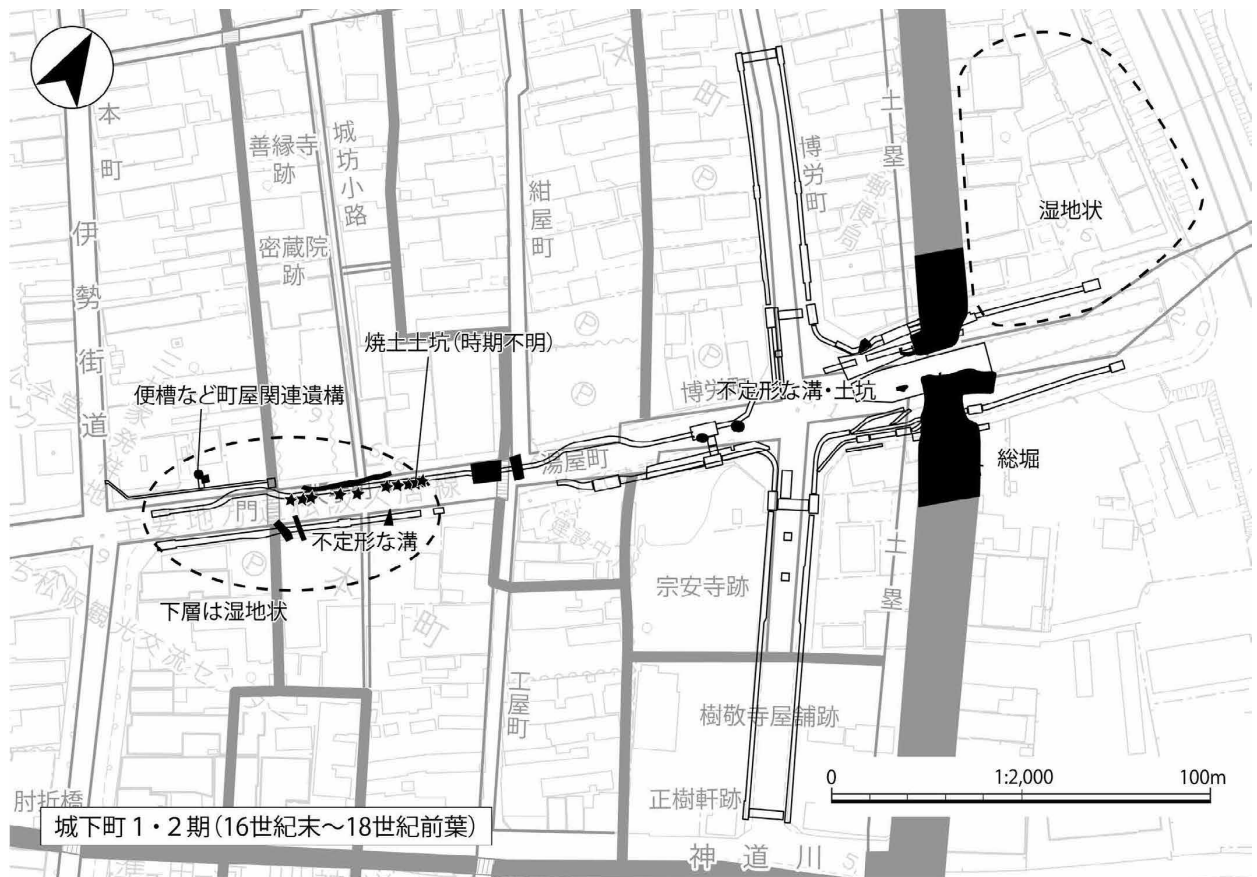
西暦	時期区分	基本層序	←西 本町・大手町	紺屋町・湯屋町・工屋町・袋町	博労町・外博労町 東→
1200		VI		8・9次下層中世遺構	9次下層中世遺構
		V	古土壌形成 (乾燥した草地)、凹地に黒色土埋積、	6・7次井戸等に15世紀代の常滑甕若干あり (伝世品?)	マツ二次林未成立
1588 1600	城下町 1期				周辺でマツ二次林が成立
	2期	IV	慶安伊勢国大洪水 (1650) 延宝大火 (1680) 貞享大風雨 (1687)		[総堀] 1次溝状遺構 (下層) 5次 SZ550・SD554 6次 SD6001
1700			3次 SK302 3次 SX301		亀屋徳兵衛控地 (外博労町) に 水車屋初めて建つ (1711)
	3期		元文大火 (1736)	5次8区5-7層間焼土?	
			延享洪水 (1747)	5次 SK529・531 等 (火災後の塵芥処理坑)	5次 SK506・508・509・536 等 (火災後の塵芥処理坑) 5次 SK533・SE535
	4期		安永大洪水 (1773) 寛政大洪水 (1792)	5次 SZ551 (湿地状) 8次 SZ828・831	6次 SK6028・6057 7次 SE7007・7013 9次上層土坑・井戸
1800			一統ふしんをする事 大はやり (1811)	5次 SK542・543・548 ・553 (局所的な整地層)	5次 12区 3層の一部 (湿地状)
	5期	III		6次 SK6056 (鍛冶炉?) 6次鍛冶滓廃棄土坑 8次 SK801	1次溝状遺構 (上層再掘削) 5次 SD538 (局所的な整地層)
1850			安政地震 (1855) 安政五曲口洪水 (1856)		5次 SZ552 5次 SK513
1868					
1900		II	明治大火 (1893)		6次4区上層土坑
		I			

※網掛けは遺構、大火の破線は文献にある被災範囲を示す。

文献の災害記事等は左寄せとし、旧町が限定できるものは当該町の欄に記した。

第217図 松坂城下町東外縁部の土地変遷史





第218図 松坂城下町東外縁部の遺構変遷図 (1:2,000)

り、町屋の普請は盛んであったようである。

### ③城下町3期（18世紀中葉）

基本層序IV層上の近世遺構。将来的には元文大火の前後で細分できる可能性がある。紺屋町付近の5次SK529・531等、外博労町・「どぶ町」付近の5次SK506・508・509・536がある。これらは5次SZ550や総堀の埋没後に形成され、外博労町・「どぶ町」の町屋化が一定進んだ。元文大火後の塵芥処理坑・ピットなどが含まれる。

基本層序IV層の堆積量は多く、延享4年洪水の影響も今後の検討課題である。元禄～元文の「伊勢松坂城下図」では、後の外博労町らしき町屋が確認でき、総堀は町屋地や背割下水等に変わっている。

### ④城下町4期（18世紀後葉～19世紀初頭）

外博労町・博労町付近に井戸および円筒形土坑が多くみられる。袋町・「どぶ町」付近では、8次SZ828・831、5次SZ551、5次12区3層の一部など、遺物や貝を多く含む湿地状の浅い堆積が複数あり、その埋没後、5次SK542・543・548、SD538など、局所的な粗砂の整地跡がみられる。

この時期の湿地状堆積と整地の背景に、安永・寛政の大洪水とその復旧、『宝暦咄し』にある19世紀初頭の「一統ふしん」が想定される。

享和以降の「松坂町絵図」（巻頭図版2）の時期にあたり、袋町はその名が示すようにこの頃まで宗安寺、樹敬寺家舗前の袋小路であった。

### ⑤城下町5期（19世紀前葉～中葉）

基本層序III層上の遺構であるが、近代以降の攪乱や削平により明確なものは少ない。5次SK513、SZ552などで、6次SK6039等（鍛冶滓廃棄土坑）もこの時期とみられる。また、将来的には安政地震後の片付け関連遺構が確認できる可能性があるだろう。

天保～嘉永頃の松坂町絵図では、袋町の街路が神道川まで達し、安政三年辰春全図では神道川沿いの街路がみられ、町屋化が一層進行している。

**まとめ** 調査地全体で17世紀代の遺構が希薄であること、18世紀中葉以降、町屋関連の遺構が明確になることが指摘できる。また、18世紀後半～19世紀初頭には、各所で湿地状地が形成され、埋没と整地を経て現地表に見る城下町の景観が出来上がった。

なお、文献や絵図から、17世紀には各町とも街路

沿いが町屋化しているとみられるが、遺構や整地層の空白については、大きく二つの要因が考えられる。第一は空間的な空白で、今回の調査地は街路ないし町屋のうち街路に面した主屋部分にあたるため、通り庭や三和土、礎石などが遺構の主体であり、竈や塵芥処理坑など比較的検出が容易な遺構は敷地内側（背割下水側）に偏っていると予想される。第二は人為的な空白で、大火や洪水後の大規模な整地により、特定時期の遺構や整地層・焼土層が欠落する事例が他県の城下町遺跡にもみられる<sup>(3)</sup>。

今回把握した土地の変遷過程を踏まえることで、今後、遺構の分布や消長をより効率的に把握していくことができよう。

## 2. 出土遺物の特徴

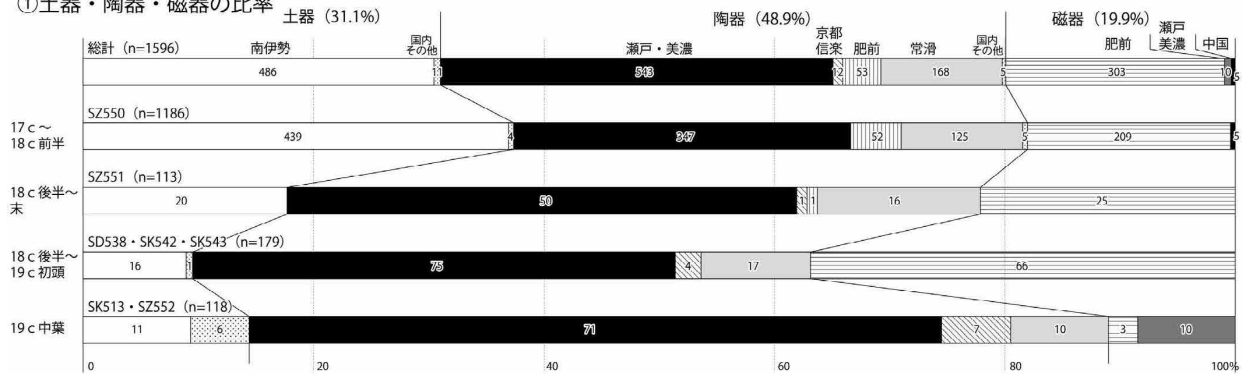
### (1) 土器・陶磁器の組成と変遷

5次調査でまとまった量の遺物が得られており、これで基本的な組成や変遷を示す（第219図、第57表）。欠落した内容は、整地層の遺物で補足したい。組成算出対象遺構は5次SZ550（17～18世紀前半）、5次SZ551（18世紀後半～末）、5次SD538・SK542・543（18世紀後半～19世紀初頭）、SK513・SZ552（19世紀中葉）である。カウントは接合後破片点数とし、参考にA遺物（報告書掲載遺物、口縁部・底部中心）とB遺物（不掲載遺物）ごとの点数も示した。接合後破片点数による理由は、口径の小さな瓶・徳利類の数量が明確になる、比較的少量の遺物でも組成イメージが得られるためである。

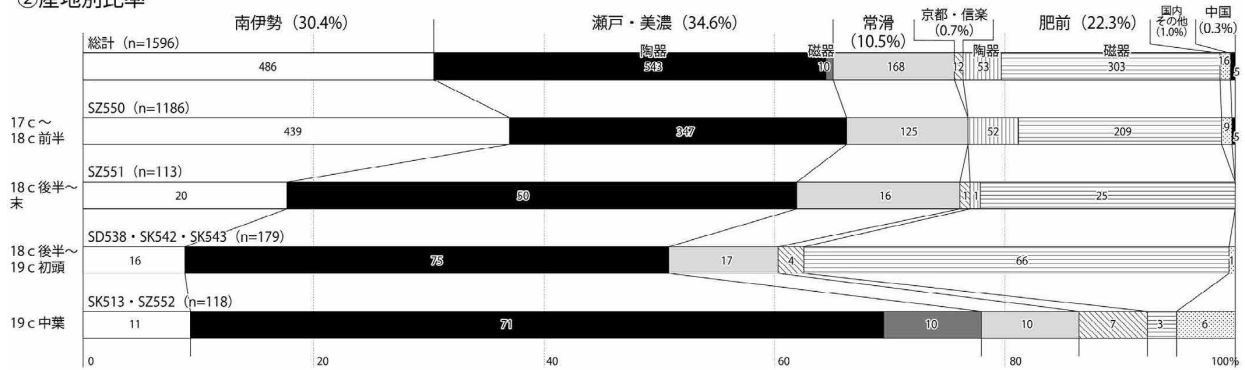
これらは用途毎に器種を大別し、土器・陶器・磁器の別、陶磁器の産地系統を示した。なお、土師器皿は供膳具以外にも灯火具など多様な機能が想定されるが、便宜上供膳具として示す<sup>(4)</sup>。

産地別の集計においては、19世紀以降増加する伊賀・信楽産の鍋類や小物は「京都・信楽系」に含めた。なお、伊賀・信楽の鍋類は、小片では瀬戸・美濃との厳密な区別が困難で、釉の透明度が高いものや焼成堅緻なものを伊賀・信楽と判定した。よって実数はさらに増える可能性がある。今後、生産地の伊賀地域で胎土分析も交え、瀬戸・美濃との比較を進める必要があるだろう。他に焼締陶器の小物小片が若干あり（備前産などか）、ごく少量であるため産地

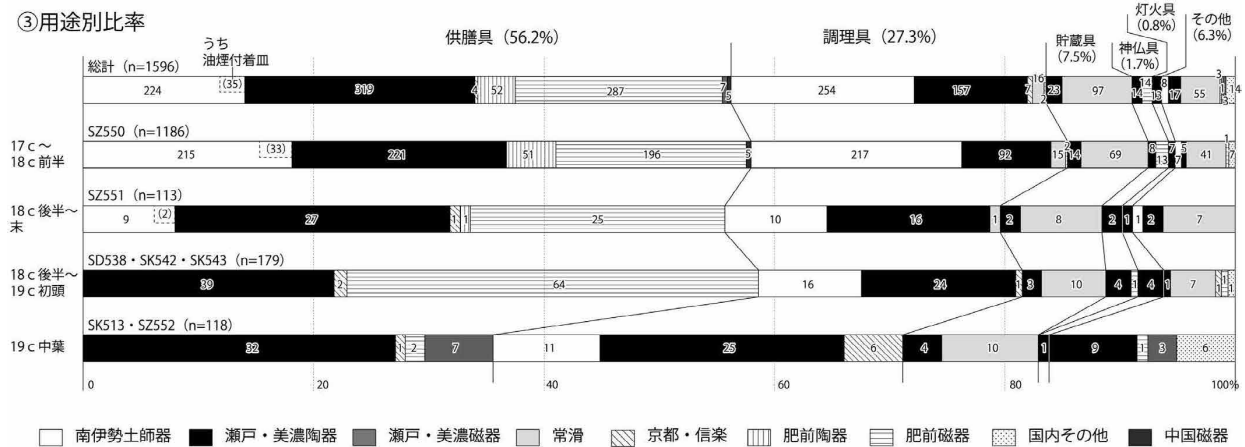
①土器・陶器・磁器の比率



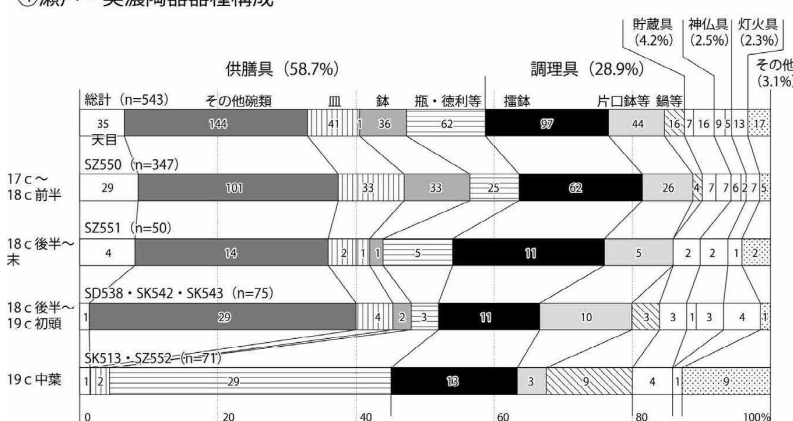
②産地別比率



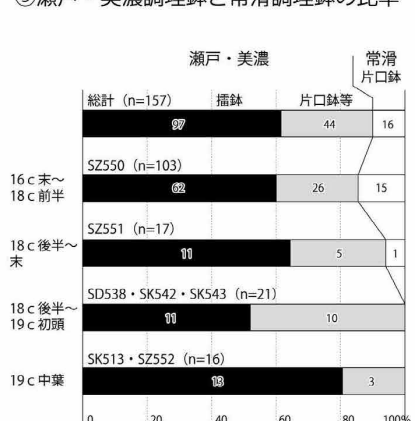
③用途別比率



④瀬戸・美濃陶器器種構成



⑤瀬戸・美濃調理鉢と常滑調理鉢の比率



第219図 土器・陶磁器の組成

種別	産地系統	用途	器種	遺構の時期		17C～18C前半										計	産地計
				遺構名		SZ550 1区		SZ550 2区		SZ550 3区		SZ550 5区		SZ550 12区			
				A	B	A	B	A	B	A	B	A	B				
				A：報告書掲載 B：未掲載													
土器	南伊勢	供膳具	皿（灯明皿含）	27	33	11	4	33	20	27	18	29	13	215	439		
		調理具	鍋釜・十能	7	17	7	10	6	17	16	29	44	64	217			
		その他	その他			1		2		2		2		7			
	瓦質土器	その他	火鉢・焜炉・五徳			1					1		1		3	3	
			風炉												0		
			その他（燭台等）												0		
	その他	その他	焼塩壺							1					1	1	
その他														0			
陶器	瀬戸・美濃陶器	供膳具	碗・小杯 天目	1	4	2	2	2	2	1		10	5	29	347		
			その他碗類	7	5	1	1	9	3	19	7	35	14	101			
			皿 小・中皿					2		5		23	3	33			
			大皿・盤											0			
			鉢（鉄絵鉢・向付）			1	1	2	1	3	1	14	10	33			
		瓶・徳利・汁注		3		1		2	3	2	5	9	25				
		調理具	播鉢	3	3	3	2	3		11	10	17	10	62			
			片口鉢・練鉢	3		2	3			4	1	9	4	26			
			鍋・土瓶							2	1		1	4			
		貯蔵具	壺（有耳壺・茶壺）	1						2		3	1	7			
			甕（半胴甕、水甕）			1				1	1	2	2	7			
		神仏具	香炉	1				1				4		6			
			仏飯器									2		2			
	灯火具	灯火具（灯明皿・平仄）	2		1		1		1		2		7				
	その他	その他（鬚盥、植木鉢、花入等）					1		1	1		2	5				
	京都・信楽	供膳具	碗・小杯											0	0		
			皿											0			
			鉢											0			
		調理具	鍋・土瓶											0			
		灯火具	灯火具											0			
		神仏具	神仏具											0			
		その他	その他											0			
	肥前陶器	供膳具	碗	1	1			10		7	4	8		31	52		
			皿	6		1		2		1	2	1		13			
			鉢			1		2		2		2		7			
		その他	その他								1		1				
	常滑	貯蔵具	甕	2	1	2			4	8	16	14	22	69	125		
調理具		片口鉢・捏鉢				4		1		6	4	15					
その他		火鉢・火消壺・炉	1	3	2	1	3		4	1	16		31				
その他	その他		2	2		1		1		1	3	10					
明石・堺備前	調理具	播鉢						1		1		2	2				
その他陶器									2		1	3	3				
磁器	肥前磁器	供膳具	碗・小杯	11	7	1	4	12	4	21	13	43	29	145	209		
			皿	2		3		6		8		8	4	31			
			鉢	2			1	1		1	1	5	1	12			
			瓶・徳利	2	1			1					4	8			
		神仏具	香炉									7		7			
			仏飯器								1	2	3	6			
	その他	その他											0				
	瀬戸・美濃磁器	供膳具	碗・小杯											0	0		
			皿											0			
		その他	その他											0			
	中国磁器	供膳具	碗・小碗											0	5		
			皿				2					3		5			
	その他	その他											0				
その他磁器												0	0				

接合後破片点数、個体識別できるものは合わせて1個体としてカウント  
「総計」は集計遺構の総計である  
蓋の用途が判別できない場合、その他に含めた  
転用品（加工円板）は数に含まない

第57表 第5次調査出土土器・陶磁器集計表



種別	産地系統	用途	器種	遺構の時期		18C後半			18C後半～19C初頭				19C中葉			総計				
				遺構名		計	産地計	SD538		SK542・543		計	産地計	SK513			SZ552		計	産地計
				A	B			A	B	A	B			A	B		A	B		
A: 報告書掲載 B: 未掲載																				
土器	南伊勢	供膳具	皿(灯明皿含)	4	5	9	20				0	16			0	11	486			
		調理具	鍋釜・十能	4	6	10		3	2	6	5	16			11	11				
		その他	その他	1		1						0				0				
	瓦質土器	その他	火鉢・焜炉・五徳			0	0			1		1	1	3	1	4	5	9		
			風炉			0						0			1	1				
			その他(燭台等)			0						0				0				
	その他	その他	焼塩壺			0	0					0	0			0	1	2		
その他					0						0		1		1					
陶器	瀬戸・美濃陶器	供膳具	碗・小杯 天目	3	1	4	50		1		1	75		1	1	71	543			
			その他碗類	8	6	14		1	2	21	5	29				0				
			皿 小・中皿	2		2		2	1	1		4		1	1	2				
			大皿・盤	1		1						0				0				
			鉢(鉄絵鉢・向付)	1		1		2				2				0				
			瓶・徳利・汁注	1	4	5		1		2		3		7	9	8	5	29		
		調理具	播鉢	5	6	11		2		6	3	11		7	4	1	1	13		
			片口鉢・練鉢	3	2	5		1		6	3	10		2		1	3			
			鍋・土瓶			0				2	1	3		1	1	3	4	9		
			貯蔵具	壺(有耳壺・茶壺)			0					0					0			
		神仏具	甕(半胴甕・水盥)		2	2				2	1	3		1	2	1	4			
			香炉	1	1	2		1				1					0			
	灯火具	仏飯器			0				2	1	3					0				
		灯火具(灯明皿・平仄)	1		1				4		4			1		1				
	その他	その他(鬚盥、植木鉢、花入等)	1	1	2			1			1		1	1	2	5	9			
	京都・信楽	供膳具	碗・小杯		1	1	1	1	1		1	2	4			0	7	12		
			皿			0						0			1	1				
			鉢			0						0				0				
		調理具	鍋・土瓶			0				1	1		1	3	2	6				
		灯火具	灯火具			0					0					0				
神仏具		神仏具			0					0					0					
肥前陶器	供膳具	碗	1		1	1				0	0				0	0	53			
		皿			0					0					0					
		鉢			0					0					0					
	その他	その他			0					0					0					
常滑	貯蔵具	甕	5	3	8	16			7	3	10	17	3	7	10	10	168			
	調理具	片口鉢・捏鉢	1		1					0					0					
	その他	火鉢・火消壺・炉	3	3	6			3	2	5					0					
明石・堺備前	調理具	その他			1	1				2	2				0					
		播鉢			0	0					0	0			0	0	2			
その他陶器				0	0					0	0			0	0	3				
磁器	肥前磁器	供膳具	碗・小杯	10	7	17	25	4	4	31	11	50	66		1	1	3	303		
			皿	8		8				5	2	7				0				
			鉢			0				4		4		1		1				
			瓶・徳利			0			1		2	3				0				
		神仏具	香炉			0						0				0				
			仏飯器			0				1		1				0				
	その他	その他			0				1	1			1		1					
	瀬戸・美濃磁器	供膳具	碗・小杯			0	0				0	0	5	2		7	10	10		
			皿			0					0					0				
		その他	その他			0					0		1	2		3				
	中国磁器	供膳具	碗・小碗			0	0				0	0				0	0	5		
			皿			0					0					0				
その他	その他			0					0					0						
その他磁器				0	0					0	0			0	0	0				

総計 1596

特定は避け「その他」に含めた。

#### ①土器・陶器・磁器の比率（第219図①）

算出遺構全体では、土器約31%、陶器約49%、磁器約20%である。18世紀後半に土師器（特に皿）が減少し、肥前磁器が量的なピークを迎える。瀬戸・美濃産磁器が普及する19世紀中葉には、肥前磁器が大幅に減少した結果、陶器の比率が高くなっている。瓦質土器が一定残っている点も注目される。

#### ②産地別比率（第219図②）

算出遺構全体では、南伊勢系土師器（30.4%）、瀬戸・美濃産陶磁器（30.4%）、肥前産陶磁器（22.3%）、常滑産（10.5%）、京都・信楽系（0.7%）、その他（1.0%）で、景德鎮など中国産磁器も若干みられる。肥前陶器は18世紀前半を境に減少し、18世紀後半から京都・信楽系陶器がみられるが、増加するのは19世紀中葉頃である。

後述のように、19世紀前半までの京都・信楽製品の少なさは松坂城下町遺跡の特徴のひとつである。また、明代青花や明末～清初の中国産磁器がみられる点も、今回得られた新知見である。

#### ③用途別比率（第219図③）

算出対象全体では供膳具56.2%、調理具27.3%、貯蔵具7.5%、神仏具1.7%、灯火具0.8%である。灯火具が少ないが、グラフには油煙付着の土師器皿点数を付記した。少なくとも土師器皿のうち3割程度は灯火具として用いられている。仮に、松坂城下町の土師器皿を全て灯火具とみなすと、供膳具41.4%、灯火具14.8%となり、名古屋城三の丸遺跡<sup>(5)</sup>の供膳具45.0%、調理具8.0%、貯蔵具10.3%、灯火具22.4%、その他12.8%に概ね近くなる。名古屋城三の丸遺跡に比べると、調理具の比率が高い。

土師器皿は近世を通じて減少しつづけ、19世紀中葉には陶磁器製灯火具・供膳具に完全に交替した。

この他、算出遺構で少ない瀬戸・美濃産の植木鉢や磁器端反碗、伊賀・信楽産の鍋・土瓶は、6次、8次調査の表層付近に多くみられ、19世紀中葉までに増加していったとみられる。なお、19世紀末以降の土坑資料にも瀬戸・美濃産の鍋・土瓶が一定みられ、明治以降も伊賀・信楽製品のみが鍋・土瓶の需要を満たすという状況ではなかったらしい。

#### ④瀬戸・美濃陶器の器種構成（第219図④）

瀬戸・美濃製品では天目茶碗が減少し、その他碗類に変わっていく。碗類は、湯呑形態の小振りの碗が多い点が特徴である。御室茶碗はみられない。

19世紀中葉以降、陶器碗類は姿を消し、磁器製に交替していく。19世紀中葉の瓶・徳利類、雑器類の増加も顕著で、生産地の動向が反映されている。

#### ⑤瀬戸・美濃、常滑調理鉢の比率（第219図⑤）

中世に盛行する常滑片口鉢は、伊坂城跡（四日市市、古瀬戸後IV～大窯期、屋敷地）<sup>(6)</sup>では瀬戸・美濃播鉢1：常滑片口鉢1の比率である。今回の算出資料では17世紀以降、瀬戸・美濃播鉢が主体となる（瀬戸・美濃播鉢5：常滑片口鉢1）。常滑片口鉢は18世紀まで姿を消し、常滑製品は火鉢等の雑器や貯蔵具に特化していくことが明確になった。

### （2）陶磁器の様相比較

#### ①既往の調査との比較

当遺跡では、市調査で殿町（侍屋敷）、魚町（町人地）の陶磁器組成や器種構成が示されている<sup>(7)</sup>。殿町（原田二郎旧宅）出土遺物は幕末～昭和にかけて松坂城搦手口付近の堀へ廃棄されたものである。18世紀後半やそれ以前の遺物も含み、瀬戸・美濃産陶器、肥前磁器、京都・信楽系、伊賀・信楽製品、備前播鉢などがみられる。

魚町出土遺物（18世紀後半中心）は陶磁器の産地組成が示されており、瀬戸・美濃約30%、肥前約20%、伊賀・信楽3%、京都・信楽1%という。魚町は碗・皿・湯呑等で50%弱を占め、殿町では陶器鍋類がやや多いというが、これは幕末以降の伊賀・信楽製品を含むためであろう。

基本的な器種構成や産地組成は、今回の調査結果と概ね類似しており、侍屋敷と町人地で遺物構成がさほど変わらない点は注目してよいだろう。

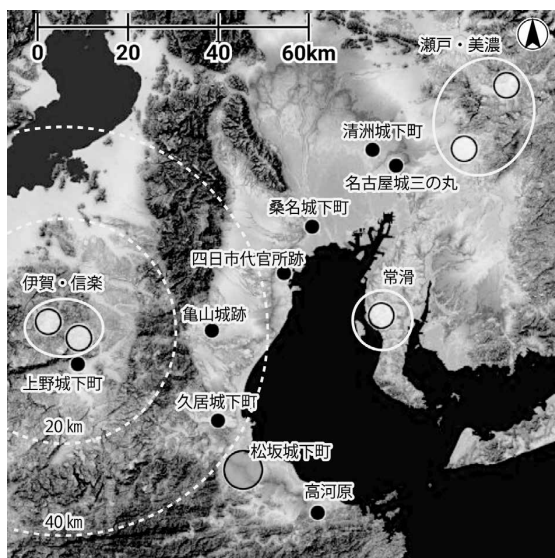
#### ②県内他遺跡との産地組成比較

北勢 桑名城下町遺跡（桑名市）は、弘化2年（1845）を下限とする廃棄資料の集計で、陶器は瀬戸・美濃が約57%、常滑約24%、京都・信楽系約5%という<sup>(8)</sup>。京都・信楽系が少ない点は松坂城下町と類似している。四日市代官所跡（四日市市）は一時信楽代官の統治下に置かれ、また八風街道等を通じて近江に親しいこともあり、信楽製品や尾張産炮烙が一定みられる<sup>(9)</sup>。亀山城跡（亀山市）二之丸御

殿SK173は肥前磁器V期の広東碗・端反碗を含む19世紀前半の廃棄土坑<sup>(10)</sup>。伊賀・信楽の京焼風小物(特に平碗と土瓶)が大量に出土し、播鉢は信楽産や堺・明石・備前が一定ある。土師器は中北勢系。加太・鈴鹿峠を介した伊賀・信楽や西の影響が強い。**伊賀** 上野城下町遺跡(伊賀市)5次調査(農人町)は18世紀後半～19世紀前半の遺構が多い<sup>(11)</sup>。碗・皿、灯火具は伊賀・信楽産、播鉢はすべて信楽産である。火道具は瓦質ないし軟質土器が多く、常滑製品はあまりみられない。土師器炮烙は在地産とみられる。土師器皿の出土量は少ない。

**中・南勢** 伊勢神宮外宮の門前、山田に所在する高河原遺跡<sup>(12)</sup>(伊勢市)では、17世紀～18世紀前半の遺物があり、瀬戸・美濃陶器、肥前陶磁器、南伊勢系土師器を中心とした遺物組成がみられる。久居城下町遺跡<sup>(13)</sup>(旧久居市)は侍屋敷地の18世紀後半～末の遺構(SK2)で、肥前磁器、瀬戸・美濃、常滑産陶器、南伊勢系土師器が主体である。京都・信楽系は約3%にとどまり、瀬戸・美濃産磁器を含む19世紀前半の遺構(SZ3)でも、伊賀・信楽製品は10%に満たず、劇的に増える様子はない。両遺跡とも大枠は松坂城下町と共通するといえよう。

伊勢街道沿いの市場庄遺跡では景德鎮製品が散見され<sup>(14)</sup>、国産磁器の本格普及前は、松坂城下や伊勢街道沿いに中国産磁器が流入していた。



第220図 主要陶器産地と消費地

(国土地理院基盤地図情報5mメッシュを「カシミール3Dスーパー地形」で作図)

### ③伊勢湾西岸の陶磁器流通

19世紀前半までの県内近世遺跡の土器・陶磁器産地組成は、大消費地の需要に呼応して三都へ大量に京焼風小物を供給した京都・信楽系陶器の動向が大きく影響し、産地からの距離による同心円状でなく、より複雑な流通のあり方をみせる(第220図)。

松坂城下町遺跡は、雲出川以南の中・南勢地域に共通した土器・陶磁器様相をみせ、京都・信楽系陶器が客体的である。伊勢湾西岸域でも桑名を除く北勢地域との差が大きいが、その背景には同じ紀州藩統治下の伊勢大湊や山田を介した南方面からの陸運、桑名等を介した名古屋方面からの海運により、競合する瀬戸・美濃産の京焼風製品がより流入しやすかった等が考えられよう。

### ④土器・陶磁器の様相区分(第221図)

以上から、土器・陶磁器の様相区分を行い、江戸遺跡の東大構内編年(堀内1997)との対応を示す。

#### 様相1(16世紀末～17世紀前葉)

瀬戸・美濃大窯4期から登窯第1段階の天目茶碗や灰釉丸皿、常滑12型式の甕や片口鉢、中世末期の南伊勢系鍋類を主体とする。志野・織部は全調査合わせても数点に留まり、桃山茶陶のまとまった出土は現状確認できないが、志野大鉢など優品もみられる(写真図版117)。肥前陶器の動向も不明である。一方で明代青花が少量ある。資料としては5次SZ550の一部、2次・3次下層(基本層序V層上部)など断片的である。東大構内編年のI期に相当する。

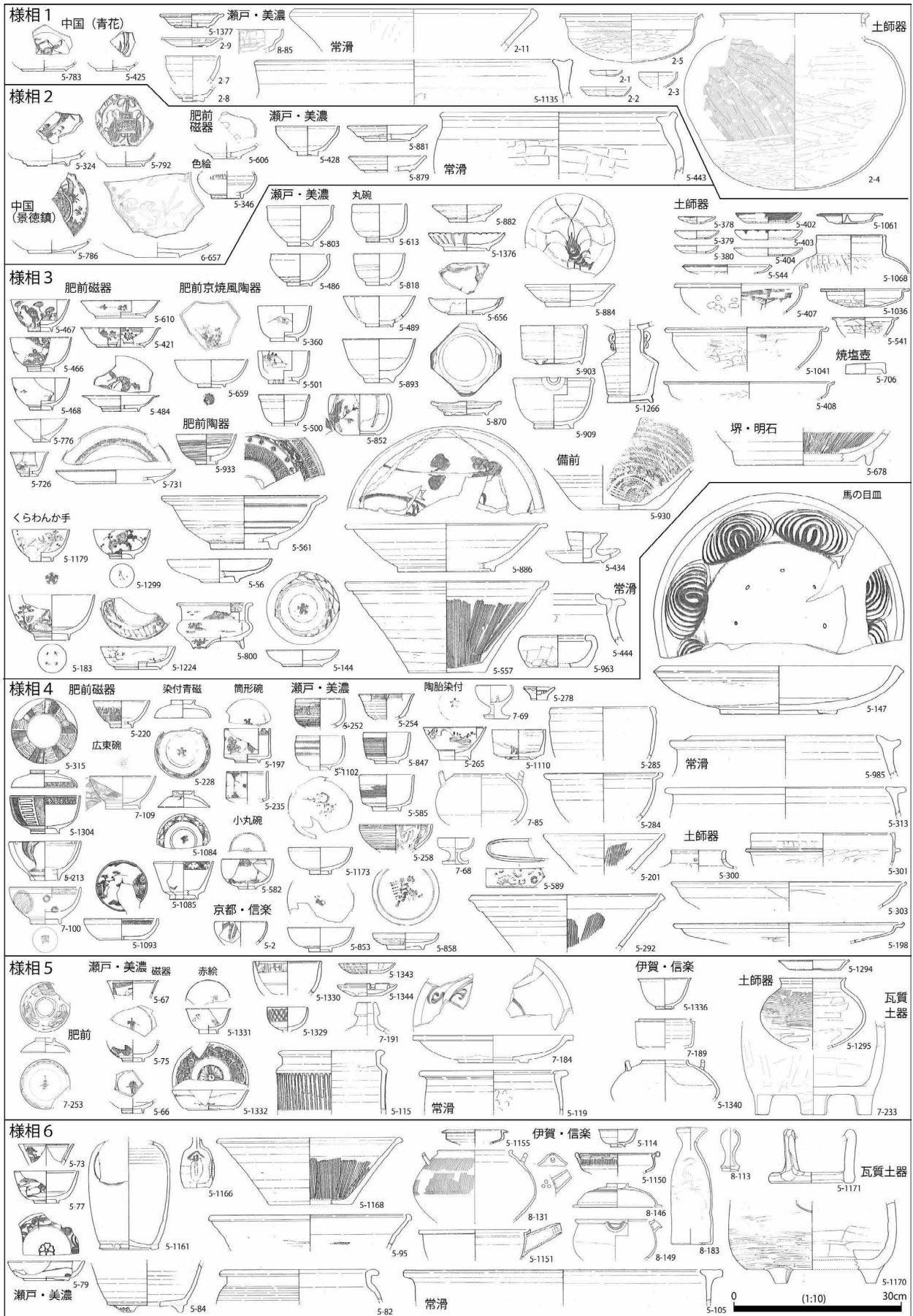
#### 様相2(17世紀中葉)

磁器は初期伊万里や初期の色絵など肥前II期の国産磁器に、明末清初の景德鎮が伴う。陶器は、登窯第1段階の天目茶碗や輪禿皿・反り皿などがある。常滑片口鉢で摺目や櫛目をもつものはこの頃までか。資料としては5次SZ550の一部があるが断片的である。東大構内編年のII・IIIa期に相当する。

#### 様相3(17世紀後半～18世紀初頭)

瀬戸・美濃第2段階(17世紀後葉～18世紀前半)の陶器、肥前III期～IV期初め(17世紀後半～18世紀初頭)の磁器がある。磁器丸碗や中皿には上手のもの、径8寸以上の大皿が一定みられる。色絵は少ないが、白磁(色絵素地)がみられる。くらわんか手や粗製の輪禿皿は18世紀中葉～後半の遺構に多い。





第221図 松坂城下町遺跡土器・陶磁器の変遷 (1:10)



肥前陶器は瀬戸・美濃の登窯第2段階の湯呑形態の丸碗・腰鍔茶碗が非常に多い。肥前陶器は刷毛目碗や二彩・三島手・刷毛目の皿・鉢、肥前陶器Ⅲ～Ⅳ期（17世紀後半～18世紀）、特に内野山北窯Ⅲ期（17世紀末～18世紀前半）の製品<sup>(15)</sup>がみられる。京焼風陶器は印銘のある17世紀代のものと、印銘がない湯呑形態のものがある。

常滑製品は甕B・C類の他、火鉢などいわゆる赤物が普及し、中世以来の片口鉢は減少傾向にある。

資料としては5次S Z 550の大半や6次S D 6001が量的にまとまっている。東大構内編年のⅢb～Ⅴa期にわたり、細分は今後の課題である。

#### 様相4（18世紀後半～19世紀初頭）

肥前磁器Ⅳ期後半（1740年頃～）以降の筒形碗・小丸碗、Ⅴ期（1780年頃～）の広東碗を主体とする。瀬戸・美濃は磁器を含まず、陶胎・炆器質の広東碗や皿がみられる。他に登窯第8～9小期頃の馬の皿や黄瀬戸香炉、播鉢などがみられる。京都・信楽系は半球碗が若干ある程度で、土瓶はまだ瀬戸・美濃製品が多い。土師器炮烙は器高の低いものが現れる。

5次S K 542・543・548、S D 538、7次S E 7007・7013が良好な資料で、他にS Z 551、5次12区3層の一部、8次S Z 828、S Z 831の一部がある。東大構内編年のⅥ～Ⅶ期に相当する。

#### 様相5（19世紀前葉）

現状で良好な遺構出土資料がなく、基本層序Ⅲ層中の遺物が該当する。瀬戸・美濃磁器は染付端反碗のほか、赤絵も普及している。信楽製品は端反碗や土瓶が主で、江戸などで大量に出土するいわゆる小杉碗は全調査合わせて1～2点しかない。土師器は球胴形・厚手の羽釜が特徴的で、南伊勢系土師器が衰退しつつある段階と考えられる。

東大構内編年のⅧ期の大半に相当する。

#### 様相6（19世紀中葉）

5次S K 513、S Z 552が良好な資料で、他に、6次・8次の表層付近の整地層中に瀬戸・美濃磁器や信楽製品が多くみられる。瀬戸・美濃製品はコバルト・クロム、型紙摺りなど1870～80年代の製品を含まない段階。東大構内編年のⅧ期末に相当する。

### ⑤その他遺物

**茶道具** 既往の研究では、伊勢国内における茶の湯

は、概ね18世紀中葉以降、伊勢商人や神宮の御師を中心に普及していくとされ<sup>(16)</sup>、松坂の三井家は表千家、長谷川家・小津家等は裏千家と交流し、伊勢商人の文化サークルを介し浸透していった。

出土遺物では、杉形茶碗、沓掛茶碗、瓦質土器風炉、茶の湯の灰道具を描く柄鏡（5次1563）などがみられ、17～18世紀前半までには町人層に茶の湯が一定浸透していたとみられる。一方で、城下町1期の桃山茶陶の広がりは今のところ不明である。

**瓦** 全体的に瓦の出土量は少なく、瓦葺き屋根の普及過程を反映していると推測される。18世紀前半までの遺構出土瓦は本瓦葺きの丸瓦・平瓦が大半である。18世紀後半～19世紀頃（基本層序Ⅲ層と前後の遺構）から棧瓦がみられ、7次S E 7013は町屋への棧瓦や袖瓦の普及過程を示す良好な資料である。

町屋建築のうち、現存する江戸店持ち商人の土蔵は享保前後（18世紀前葉）が多く<sup>(17)</sup>、旧長谷川家住宅大蔵（享保6年（1721）棟札）は本瓦葺であるが、他は棧瓦葺である。町屋主屋では、旧小津家住宅が文政年間（1818-1830）に主屋を大改造し、その際に板葺から棧瓦葺に改めている。町屋では土蔵で棧瓦が先行して採用され、『土層咄し』が伝える19世紀初頭の「一統ふしん」の中で、他の一般建築にも棧瓦が浸透していったことがうかがえる。

軒平瓦の文様<sup>(18)</sup>では、いわゆる東海系（尾張・三河）の均整唐草文はやや少なく、関西系に類似した唐草文が多い印象をうける。津城下町、久居城下町遺跡では東海系の唐草文が散見される<sup>(19)</sup>。松坂付近では伊勢山田の瓦生産が著名であり、その影響が想定されるが、工人の追求は今後の課題である。

**木製品** 大量の白木の箸をはじめ、ヒノキ製品の利用が盛んである。他にスギ、耐湿性の高いサワラが多く用いられ、漆器碗や櫛などを除けば、保存性が高く加工が容易な針葉樹を中心とした樹木利用が主体となっている。県内の中・近世遺跡の木製品では、中世後期以降にヒノキ製品の利用度が高まる傾向がみられ<sup>(20)</sup>、近世城下町においては流通網や職人層の確立により、それが一層進んだものと考えられる。

### （3）自然遺物からみた城下町の食性

動植物遺体や花粉・寄生虫卵等の分析から、町人の食性が明らかになった。概して、食用価値が高い

ものが選択的に消費され、生食を含む多様な調理法で摂食されたようである。

### ①植物遺体

花粉分析から、イネ、アブラナ科の野菜類、他にソバ属、ササゲ属（アズキ、ササゲなど）の利用が考えられる。種実同定では穀類はイネ、ムギ類、ソバ、野菜類はウリ類、ナス、トウガン、カボチャ、ヒョウタン類などがみられる。樹木種実も食用が多く、香辛料としてのサンショウ、栽培樹木ではモモ、ウメ、ヤマモモ、オニグルミ、サクラ属サクラ節、ブドウ属、カキノキ属などが摂食された。

### ②動物遺体

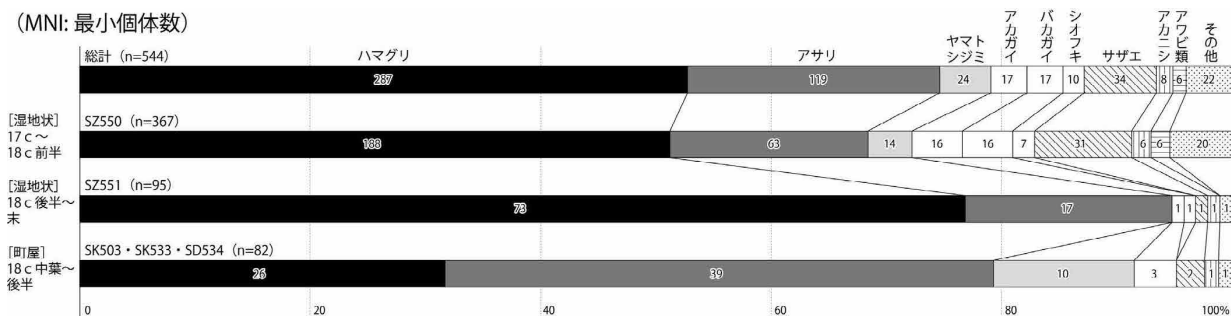
**魚類** 内海で産するコチ科、アジ科、タイ科、サワラ、ヒラメ等以外に、大型外洋魚のカジキ類、マグロ類がみられ、食用価値が高いものが流通、選択的に消費された。また寄生虫卵から、沿岸の海水魚またはアユやシラウオの生食ないし不完全調理の摂食が示唆された。コイ科はほとんど食用とされない。

**貝類** 最小個体数（MNI）による5次調査の貝組成を示す（第222図）。算出遺構全体では、内湾砂底性のハマグリとアサリが多く8割弱を占め、特にハマグリが多い。汽水性のヤマトシジミ、外海岩礁性のサザエやアワビ類が続き、内湾泥底性のアカガイ、アカニシ、ツメタガイも一定みられた。アカニシ・

アカガイは殻に穿孔したものがみられ、貝柱を除去し生食したと考えられる（写真図版45）。アカニシは比較的大型の個体に解体痕があり、小型の個体は解体痕がないことから、小型は塩茹で等の加熱調理で摂食されただろう。アカガイは殻頂付近の他に、殻中央への打撃による径1cm弱の穿孔（ツメタガイの食害痕とは明らかに異なる）がある。

なお、巻貝のうちアワビ類、マガキは殻の残りが極めて悪く個体数が少ないが、アワビ類は破片が一定量あり、6次調査では殻長15cmほどの大型もみられたことから、巻貝ではサザエに次いでアワビ類の利用度が高かったと考えられる。サザエは被熱した個体が複数あり、焼貝にもしている。

松坂城下町遺跡の貝構成は、名古屋城三の丸遺跡<sup>(21)</sup> や清洲城下町遺跡<sup>(22)</sup> に類似する（第58表）。いわゆる三都との比較では、大阪湾岸はアサリが枯渇しているとされ<sup>(23)</sup>、京都の武家屋敷が近い様相を示す<sup>(24)</sup>。アカガイは漁法の改良により、京都などで選択的に消費されるようになる。三渡川河口部の市場庄遺跡（松阪市）ではアカガイ殻の集積遺構が確認されており<sup>(25)</sup>、18世紀頃には『三重県水産図説』『三重県水産図解』（明治16年）にある「マグワ」（馬歯把）を用いた底曳漁で、内湾泥底の貝を大量に獲得していたと推測される<sup>(26)</sup>。



第222図 第5次調査出土貝の構成

遺跡名	所在地	種別	時代	貝の様相	文献
名古屋城三の丸遺跡	愛知県名古屋市	城館	江戸	ハマグリ主体、ヤマトシジミ・アサリ・アカニシ・サザエ・マガキ・アカガイ等	註21
清洲城下町遺跡	愛知県清須市	城下町	戦国～江戸	ハマグリ主体、アカニシ・アワビ・サザエ・ヤマトシジミ・マガキ等	註22
桑名城下町遺跡	三重県桑名市	城下町	江戸	ハマグリ・シジミ・マガキ主体、アカニシ	註8
四日市市代官所跡	三重県四日市市	代官所	江戸	アワビ・アカニシ・サルボウ・バイ	註9
龜山城二之丸御殿跡	三重県龜山市	城館	江戸	ハマグリ主体、マダカアワビ・アカガイ・サザエ・アカニシ・ヤマトシジミ・バイ等	註10
市場庄遺跡	三重県松阪市	集落	江戸	アカガイ集積	註14
伊坂城跡	三重県四日市市	城館	戦国	ハマグリ主体、アカニシ・シオフキ・バイ等	註29
赤堀城跡	三重県四日市市	城館	戦国	ハマグリ・サルボウ・ヤマトシジミ・サザエ・アカニシ・マダカアワビ	註30
志知南浦遺跡	三重県桑名市	集落	鎌倉	アカニシ	註28
堀町遺跡	三重県松阪市	集落	戦国	アカニシ	註31

第58表 伊勢湾沿岸の主な貝出土例

伊勢湾に接し、江戸店持ちの豪商が集住した松坂では、町人地においても京都の武家屋敷や名古屋城と遜色ない貝類利用が可能であったといえよう。

出土貝を遺構別・時期別にみると、城下町東外延部の湿地状地S Z 550（17～18世紀前半）では、ハマグリ、アサリの他にも先述の多様な貝がみられる。一方、外博労町が町屋化した18世紀中葉以降の土坑・溝では、アサリ、ヤマトシジミの比率が高まり、小型の貝が消費の中心となっている。このように、城下町外縁部に投棄された貝と、外博労町の町屋で日常消費された貝の組成差は注目される。ただし、博労町付近の7次SE7007（18世紀後半～19世紀初頭）にもアワビがみられる。

なお、アサリの積極利用は近世遺跡の特徴であるが、伊勢湾西岸の城郭・城下町では中・近世を通じてアサリの利用例が乏しい（第58表）。桑名城下町遺跡では木曾三川河口部のハマグリ・シジミ・カキが主体であり、武士の日記からもこれらが好まれていたようである<sup>(27)</sup>。四日市代官所跡や亀山城跡二之丸御殿は、より食用価値が高い貝を選んでいる。

貝利用には地域性や階層性がよく表れており、当遺跡の貝類は伊勢湾岸における近世城下町遺跡の基準資料となろう。（櫻井）

#### （4）近代の遺物

調査のなかで、近代遺物に関する知見も得られた。ここでは特徴的な遺物のみ取り上げるが、今後は、陶磁器組成を明らかにするなど、松阪の文化史的特徴を明らかにしていくことが求められる。

**土器・陶磁器** 陶磁器は瀬戸・美濃産陶磁器を主体として伊賀・信楽製品が伴う。土師器は19世紀中葉には南伊勢系土師器の焙烙がみられるが、瀬戸・美濃の銅板転写・吹絵製品を含む明治後～末期頃の一括資料（6次4区上層土坑、第106図）では、南伊勢系土師器はなく、灯火具はすべて信楽産である。南伊勢系土師器は近代に生産縮小し昭和初期に途絶えたといいい<sup>(32)</sup>、当調査でもその一端がうかがえた。

**汽車土瓶** 6次調査の汽車土瓶176は近代信楽製品のひとつで、主に鉄道駅で駅弁とともに販売された茶の容器である（第106図）。この土瓶は信楽の小川5号窯で明治30年頃～大正10年頃に製造されていた<sup>(33)</sup>。側面には「山田」、「小川」とある。参宮鉄

道山田駅は明治30年（1897）年に設置、昭和34年（1959）に国鉄伊勢市駅に改称され現在に至る。したがって、この「山田」は駅名として相違ない。一方、「小川」については、当時山田駅付近で駅弁を製造・販売した小川旅館（現小川ビル）であろう。県内では、安濃津遺跡群で亀山駅と駅前の伊藤食堂を示す「かめやま」・「伊藤」と記された汽車土瓶が出土し、その他には、「四日市」・「よっかいち」、「つ」と駅名が記された例がある<sup>(34)</sup>。

汽車土瓶は、再利用のため駅で回収され、使用に堪えないものはまとめて廃棄されたが<sup>(35)</sup>、車窓から投げ捨てられることも多かった<sup>(36)</sup>。出土地点は旧参宮鉄道線路に近い位置にある。津方面へ向かう上り列車の乗客が山田駅で購入した駅弁を車内で食べ終わるのに松阪駅は適当な距離と思われ、本例も車窓から投げ捨てられた可能性がある。

**アジア・太平洋戦争下の遺物** 昭和13年以降の陶製化粧品容器、昭和16年以降の美濃統制陶器のクリーム・糊等の容器が一定量ある（第223図）。

このうち、5次調査のランランノイポマード1448は、出土品としては珍しいもので、新聞広告から京阪神-名古屋間が主な商圈だったとみられる。ランランポマードは、当時東京などで流行したメヌマ、柳屋ポマード等に比べマイナーな商品だが、昭和初



第223図 近代の化粧品容器・統制陶器（1:4、Bは縮尺不同、A・Bの出土は註38参照）

期の阪神間モダニズムを牽引したデザイナー、今竹七郎が広告・容器デザインを担当したことで知られ<sup>(37)</sup>、間接的ながら阪神間モダニズムの影響をうかがわせる資料である。当初は金属蓋・乳白色ないし無色透明ガラス瓶であったが、昭和13年発売のランランノイポマードより陶製となった<sup>(38)</sup>。

昭和13年（1938）は国家総動員法公布、日本硝子工業組合連合会が設立され板ガラス以外のガラス製品が統制<sup>(39)</sup>、三重県下歓楽街で自粛申し合わせ、物資統制のため松阪にも各種商工業組合が結成された<sup>(40)</sup>。これらの遺物群は、物資統制、自粛一色に染まった戦時下の世相を示す。（櫻井・渡辺）

### 3. 松坂城下町遺跡の特質

今回の調査成果は以下のようにまとめられる。

- ①阪内川の自然堤防・低位段丘に挟まれた凹地に大手道沿いの諸町が展開する。
- ②阪内川の洪水による堆積・浸水（湿地化）と復旧・整地が城下の各所で繰り返された。
- ③城下を囲む総堀は、18世紀前半までに埋没し、町屋、街路、背割下水に変わる。
- ④現状、天正後期～17世紀代の遺構が希薄。地点差の他、大火・洪水後の整地による消失も一因とみられる。
- ⑤南伊勢系土師器、瀬戸・美濃、常滑産陶器、肥前磁器を基本とした土器・陶磁器組成。伊賀・信楽製品の本格的な普及は幕末頃か。
- ⑥侍屋敷（殿町）と町人地の陶磁器組成の類似。茶道具や香炉の優品も一定みられる。
- ⑦貝の構成は名古屋城三の丸跡や三都の武家屋敷に類似。食用価値の高いものを選択的に利用した。
- ⑧下層に平安末～鎌倉時代の集落が存在する。

### 4. 今後の課題と展望

#### （1）遺構検出の方法

工事立会という制約下での調査にも関わらず、整地層や遺構・遺物に関する多くの知見が得られた。一方で、近世遺構の多くを基本層序Ⅵ層の上面で検出したため、基本層序Ⅳ層ないしⅢ層上の遺構に関する情報が失われたところがある。調査区の狭小さや削平・攪乱の多さからこうした措置もやむを得な

いが、今後調査を実施する際には、予め基本層序や下層遺構の遺存状況を詳細に把握し、層位的な調査の計画を立てる必要がある。

なお、今回の調査では、均質な砂やシルトからなる基本層序Ⅳ層上で18～19世紀の遺構が良好に検出できる地点が複数あり、Ⅳ層上・Ⅵ層上の上下2面ないしⅢ層を加えた3面で遺構を捉えるのが有効と考えられる。今後の本格調査の参考とされたい。

#### （2）整地層と大火・水害痕跡の把握

旧微地形を反映して整地層や遺構の遺存状況は地点ごとに大きく異なっていた。

今回の調査を通じて、阪内川堤防付近や段丘面上は遺構の埋没深度が浅く、整地層や遺構が削平されやすいが、外博労町のような外縁や神道川に近い低地部では整地層や堆積土が厚く、遺構や整地層の変遷を捉えやすいことが判明した。

各地点の調査成果を総合した結果、年代の定点となる大火や洪水の影響が示唆され、文献との対応もある程度までは可能であることもわかってきた。

これらの結果を踏まえ、今後、大火の影響がより強い阪内川以北の川井町・西町や、大手道以南の中町などの調査にあたっていく必要がある。

#### （3）遺構空白期の実態解明

16世紀末～17世紀代の遺構・遺物は全体的に希薄であった。地点による偏りや、大火や洪水後の整地により消失した可能性などが考えられるが、この空白が生じた原因は、今後も多角的に検討していく必要がある。また、城下を囲む総堀の開削年代についても明確にできていない。天正後期から正保城絵図作成までのどの時期に総構えの整備が進んだのか、さらなる追求が必要である。

あわせて、遺構一括資料による遺物様相の細分など、残された課題は多い。

以上、足掛け約10年にわたる調査を総括したが、予想以上の情報量があり、調査時の記録不備や事前の文献調査不足などから欠落したり報告書に盛り込めなかったりした事項は多い。松坂城下町遺跡の調査は途に就いたばかりである。調査の成果以上に反省点は多いが、それらが多少なりとも今後の調査の糧となれば幸いである。（櫻井）



[註]

(1) 佐賀藩が記録した正保城絵図の作成指示では、城下の通町脇町まで記すこと、惣構の堀は広さ深さを書けるよう指示されている(千田嘉博「正保城絵図の製作と特色」『図説正保城絵図』新人物往来社、2001年)。

なお、松坂城・城下の正保城絵図は「古城之図」として提出されており、紀州藩政下で城・城下の軍事上の重要度が低下していることは考慮する必要がある。

(2) 明治26年大火は魚町二丁目を火元とし、中町から愛宕町にかけて南東方向へ延焼した(好墨堂主人「伊勢松阪大火実況録」『松阪市史』第15巻・第十章 災害、松阪市 昭和58年)。一方、昭和26年大火は湊町の旧第二小学校を火元とし、愛宕町にかけて延焼した(消防研究所「松阪市の大火調査報告」『消防研究所報告』3-2、1952年)。

今回の調査地付近は直接被災していないが、魚町付近の瓦礫処理が他町の街路や空地で行われた可能性は考えられる。なお、2次・3次調査で確認した近代遺物を含む焼土・炭層がこれに該当する可能性がある。

(3) 例えば、富山城下町遺跡(富山県富山市)では「浜田焼き」後の片付け・整地により遺構が消失した可能性が考えられている(納屋内高史「出土資料から見た近世富山城下町の食文化」『関西近世考古学研究』26、関西近世考古学研究会、2019年)。

(4) 江戸遺跡では、灯明皿としての土器皿は専用器と認識され(江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房、2001年)、愛知県名古屋城三の丸遺跡でも、土師器皿は灯明皿として扱われている(愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡』4、1993年)。今回出土した南伊勢系土師器の皿は、口径に関わらず油煙が付着しており、その数は報告書掲載遺物(A遺物)の約3割に及ぶ。ただし、南伊勢系土師器の土師器皿は、中世後期土師器の系譜上にあり、灯明皿専用器として分離成立したものではない。墓の供献土器や神仏具にも用いられ、陶磁器の需要の隙間を埋める汎用具であったとみられる。

(5) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡』4、1993年。

(6) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003年。

(7) 松阪市文化財センター『氏郷の城と町ー松阪の誕生と発展』2016年。

(8) 須藤梢・斉藤理「桑名城下町の食を考えるー土器と植物遺体の検討からー」『関西近世考古学研究』26、関西近世考古学研究会、2019年。

(9) 四日市市教育委員会『四日市代官所跡』2000年。

(10) 亀山市『亀山市史』考古編、2011年。

(11) 三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡(第5次)発掘調査報告』2014年。

(12) 三重県埋蔵文化財センター『高河原遺跡発掘調査報告』2015年。

(13) 三重県埋蔵文化財センター『久居城下町遺跡・東鷹跡古墳』2008年。

(14) 三重県埋蔵文化財センター『市場庄遺跡発掘調査報告』2017年。

(15) 佐賀県教育委員会『内野山北窯』1996年。

(16) 門暉代司「長谷川家史料からみた松坂城下の茶の湯」『長谷川家資料調査報告書』松阪市教育委員会、2018年。

(17) 旧長谷川家住宅は米蔵：切妻造棧瓦葺、明和5年(1768)棟札、大蔵：切妻造本瓦葺、享保6年(1721)棟札、新蔵：切妻造棧瓦葺、享保20年(1735)棟札、西蔵：切妻造棧瓦葺、江戸時代後期(推定)である。旧小津家住宅内蔵、前蔵はそれぞれ元文3年(1738)以前、前蔵は享保14年(1729)以前の建築である(松阪市教育委員会『旧長谷川家住宅調査報告書』2014年)。

(18) 金子智「江戸遺跡出土資料にみる近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』101号、早稲田大学考古学会、1996年。

(19) 津市教育委員会『津城下町遺跡調査報告』2015年および註13前掲。

(20) 三重県埋蔵文化財センター『中坪遺跡(第1次)発掘調査報告』2017年。

(21) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡』3、1992年/愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡』8、2008年。

(22) 愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡8』2002年/『清洲城下町遺跡11』2013年/新美倫子・鈴

木正貴「清洲城下町遺跡出土の動物遺体」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第15号、愛知県埋蔵文化財センター、2014年。

(23) 池田研「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室、2005年。

(24) 丸山真史「近世、京都の魚食文化の特徴—近世京都の魚貝類の比較を通じて—」『動物考古学』30、動物考古学研究会、2013年。

(25) 註14前掲。

(26) (財)東海水産科学協会・海の博物館『合冊三重県水産図解』光出版印刷、1984年/同『影印三重県水産図説』光出版印刷、1985年。

(27) 註8前掲。

(28) 三重県埋蔵文化財センター『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008年。

(29) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡(第4～7次)発掘調査報告』2019年。

(30) 四日市市教育委員会『赤堀城跡』1986年。

(31) 三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡(第5次)発掘調査報告』2016年。

(32) 中世以来、南伊勢系土師器を生産していた有爾郷(現在の多気郡明和町・玉城町)のうち、菘村の本郷地区では、大正時代には炮烙生産は数件、昭和初期には3件に減り、その後廃業したという(明和町『明和町史』史料編第1巻、2004年)。

(33) 畑中英二編『信楽汽車土瓶』サンライズ出版、2007年。汽車土瓶は明治20年前後に現れ、初期の汽車土瓶は山水や梅絵が施された。その後、側面に駅名や販売店の屋号を文字で記したものに变化する。大正末期にはガラス製茶瓶が現れ陶製土瓶が一時衰退、昭和に入り復活するものの、昭和30年代以降にポリエチレン容器が導入され、昭和40年代半ばに消滅した。

一般的な土瓶の生産地は、信楽、益子を筆頭に、常滑、瀬戸、美濃などの主要な窯場であるが、駅で販売される汽車土瓶は、西日本は信楽、東日本は益子と分布が二分されていた(豊田市民芸館『変わりゆく旅の器たち 汽車土瓶』1998年)。

(34) 三重県埋蔵文化財センター『安濃津』1997年。

(35) 旧新橋駅(汐留遺跡)など駅・操車場内の調査で

は、汽車土瓶の廃棄土坑が見つまっている(福田敏一『新橋駅発掘 考古学からみた近代』雄山閣、2004年)。

(36) 汽車土瓶には、「容器を車窓外に捨てることは危険です」と型抜き表示がみられる例がある。また、滋賀県唐橋遺跡では、車窓から投げ捨てられた汽車土瓶が線路沿いの調査区から出土している(註33前掲)。

(37) 今竹七郎(1905-2000年)は日本のモダンデザインの先駆者と称され、昭和11年(1936)からランランポマードの容器・広告宣伝に至るまですべてのデザインを一任された。新聞広告(第35図)にも今竹のサイン「CICH」があり、ランランノイポマード発売時も引き続き広告等を担当している(今竹七郎の記録編集委員会編『今竹七郎とその時代』誠文堂新光社、2003年/西宮市大谷記念美術館『今竹七郎 近代日本デザインのパイオニア』2020年)。

(38) 第223図Aは報告者所蔵品を実測、昭和8年頃の新聞広告と字体が共通している。Bはインターネットブログ「むかしの装い」([http://blog.livedoor.jp/mukashi\\_no/](http://blog.livedoor.jp/mukashi_no/))の「戦前の油性整髪料、ポマード・チックなど」(2015年12月11日記事)掲載写真等を参照し新たに作図。今竹七郎デザインの広告に同型品が描かれており、昭和11年頃と判断される。これらから、乳白色ガラス、無色ガラス、陶器代用品という容器素材の変遷を追うことができる。

(39) 桜井準也『ガラス瓶の考古学』六一書房、2006年。

(40) 松阪市『松阪市史』別巻2(索引・年表)、1985年。

#### [その他参考文献]

久世兼由『松坂権輿雑集』/森壺仙『宝暦咄し』(松阪市『松阪市史』第9巻史料編、1981年所収)。

松阪市『松阪市史』別巻1(松阪地図集成)、1983年。

松阪市『松阪市史』別巻2(索引・年表)、1985年。





調査前風景一本町東交差点から松坂城方面（南方）を望むー（北東から）



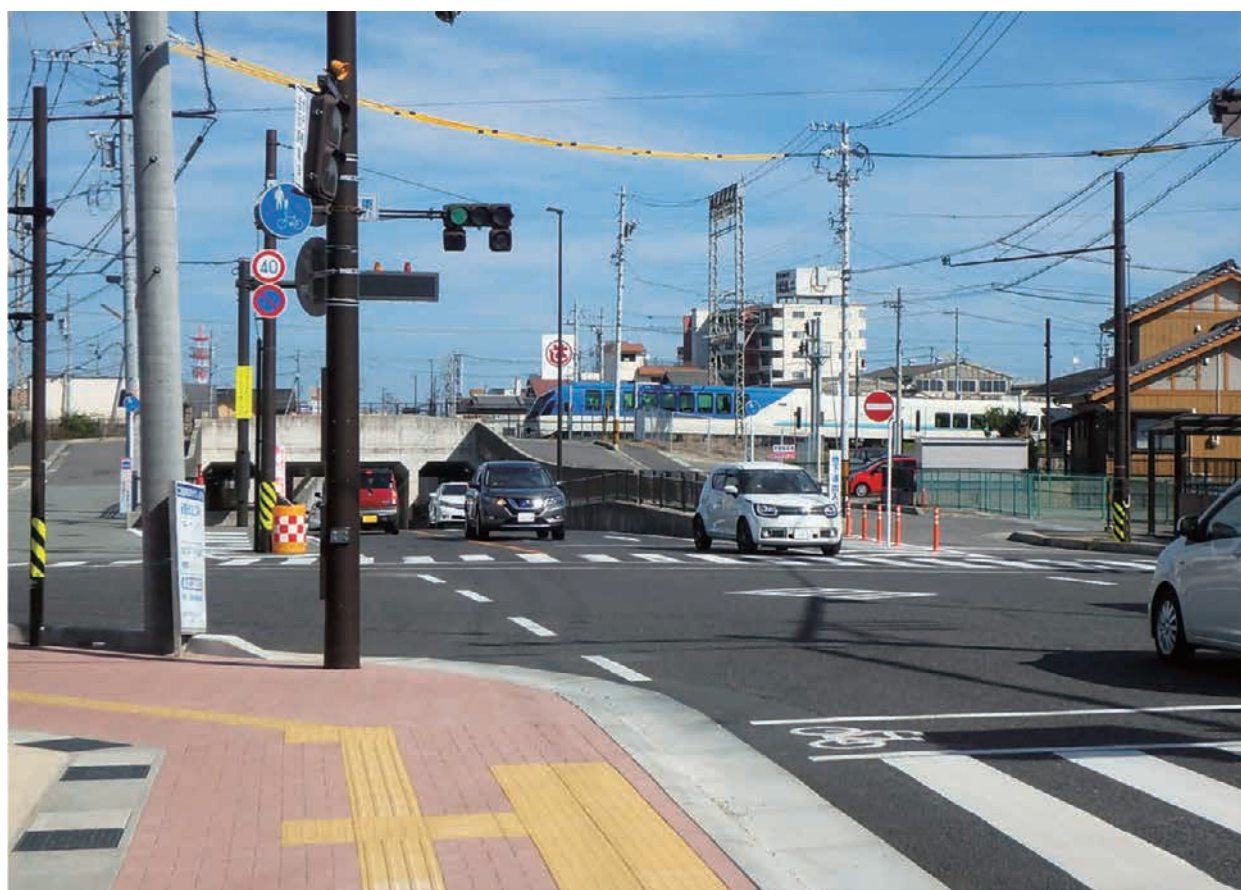
調査後（現状）風景一本町東交差点から松坂城方面（南方）を望むー（北東から）



写真図版 2



調査前風景一本町東交差点から御厨神社方面（西方）を望む一（南東から）

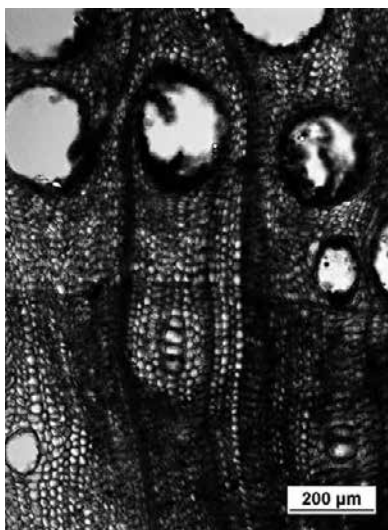


調査後（現状）風景一本町東交差点から北方を望む一（南西から）





T 4 全景 (北東から)



13 木口

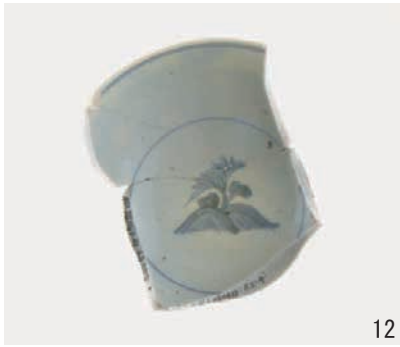
木製品顕微鏡写真



13 柁目



13 板目



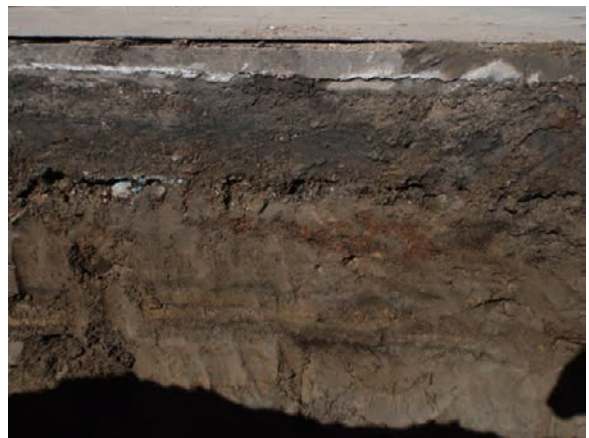




立会調査風景（南から）



15・16出土状況（東から）



土層（南東から）



1



2



20



6

土師器







調査前風景 (北東から)



上：1区全景 (北西から) 下：1区東壁 (西から)



2区東側調査状況 (南西から)



2区中央北壁 (南東から)

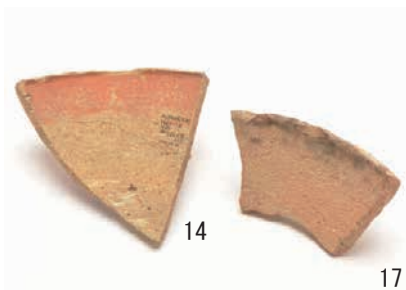


3区S X 301検出状況 (北から)



3区東壁 (西から)

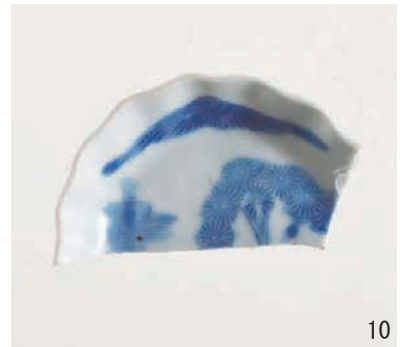
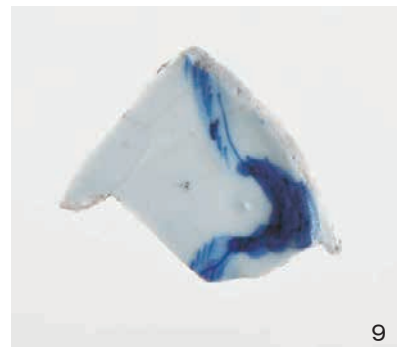






No. 1 (東から)

No. 7 (北から)







1区全景 (東から)



2区土層断面 (南から)



2区調査地全景 (南西から)



3区調査状況 (北東から)



2区全景 (南から)



3区SD507・SK508 (南から)





3区SK506 (南東から)



3区SK505検出状況 (南東から)



3区SK503貝出土状況 (南から)



3区SK509 (東から)



3区SZ550遺物出土状況 (北東から)



3区P3



3区P1





4区全景（南から）



4区土層断面（北から）



4区SK511検出状況（北から）



4区SK511完掘状況（北から）



5区SK512（南から）



5区南側土層断面（北から）





8区全景（北東から）



8区東側土層断面（北から）



8区SZ551貝出土状況（北から）



8区西側土層断面（南東から）



8区SK545（北西から）



8区SK542検出状況（南西から）



8区SK521鉄滓出土状況（北から）

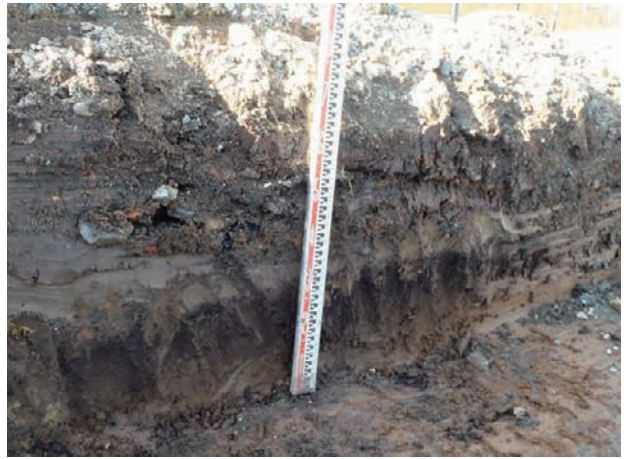


8区SK523（南西から）





9区調査状況（南から）



9区土層断面（南から）



10区土層断面（南から）



10区SK527（南西から）



11区全景（北から）



11区SK530（東から）



11区SK529断面（北から）





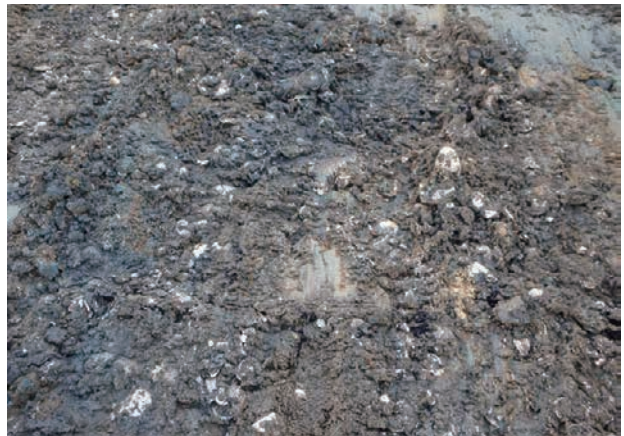
12区全景（南西から）



12区SZ550検出状況（南西から）



12区SE535付近遺構検出状況（北西から）



12区SZ550貝出土状況



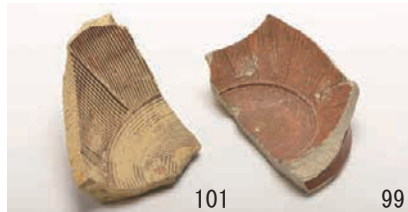
12区SK536検出状況（南西から）



12区路床改良時立会状況（西から）











111



114



147



112



124



147墨書



121



144



150



115



137



129

126

130

127



122



139

140

141

138



153



118

117

116

119



149



154

155

156







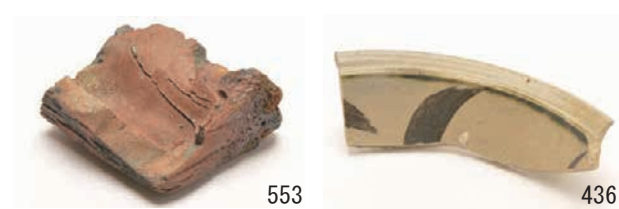






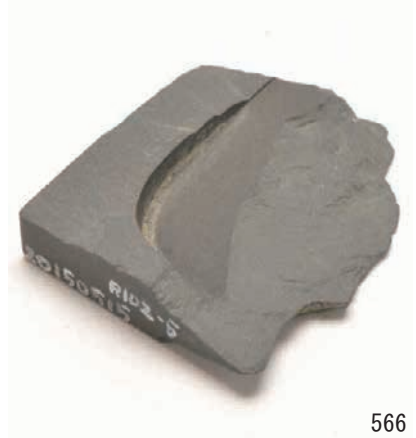






















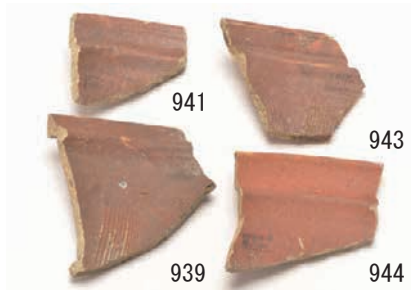
























1120



1141



1150

1156

1154

1158

1151

1155



1161

1162

1159

1160



1147



1153



1170



1166



1167



1171



1168



1172







1260



1274



1296



1276



1275



1296底



1276印銘



1262



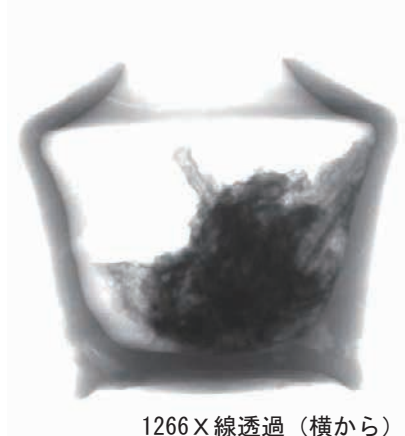
1268



1284



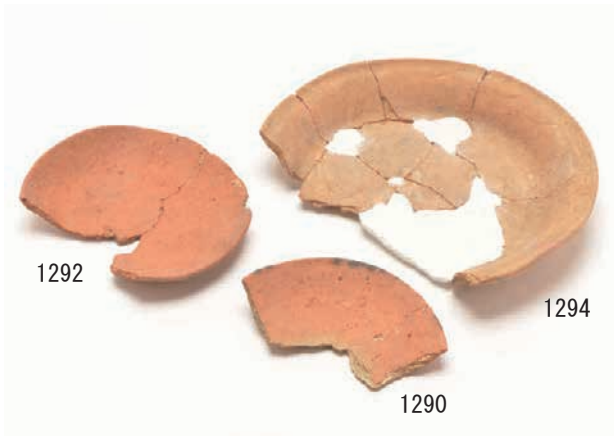
1266



1266 X 線透過 (横から)



1266 X 線透過 (上から)



1292

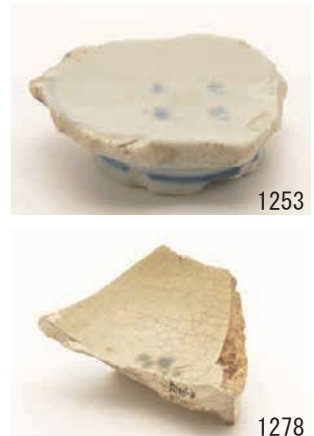
1294

1290



1297

1297

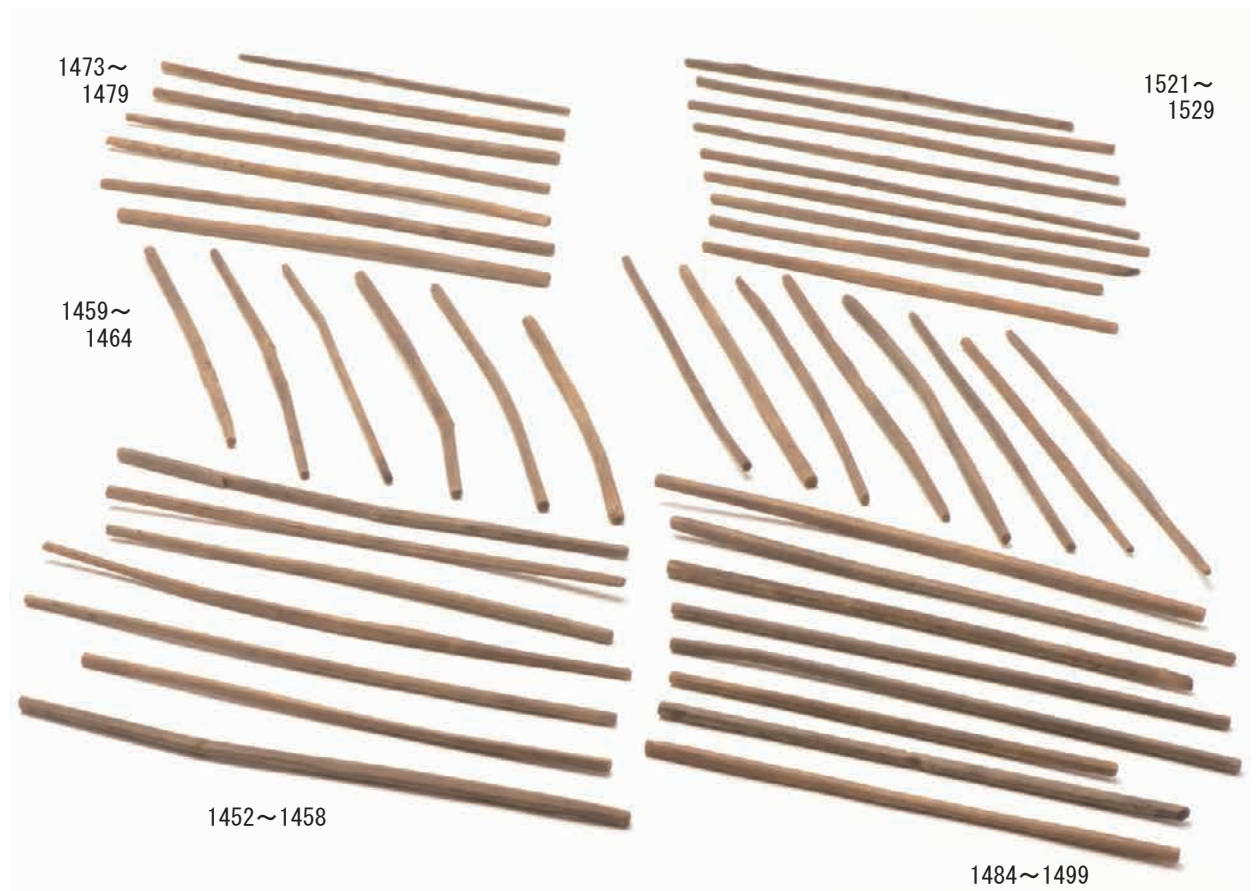


1253

1278















1536



1540木釘穴



1542



1555



1512



1511



1551



1553



1467



1552



1555



1554



1547



1537



1569

1570

1571

1572

1573

1574



1563



1565

1566



1564



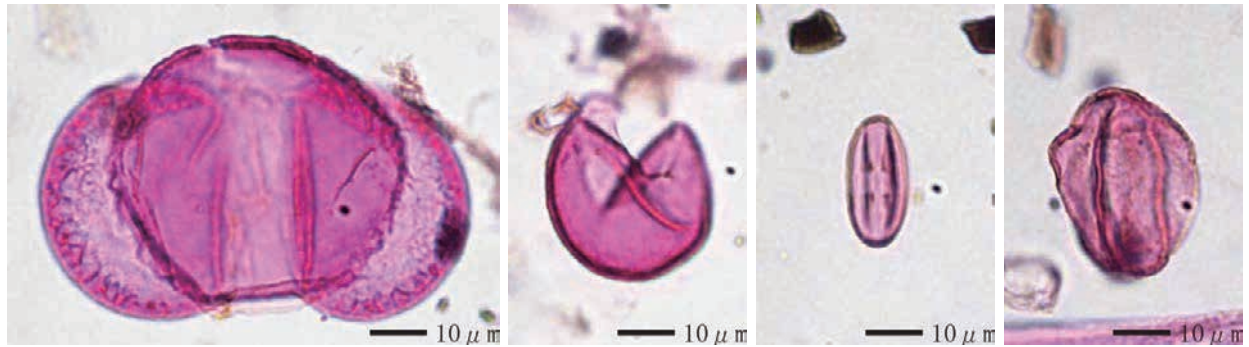
1568

1562

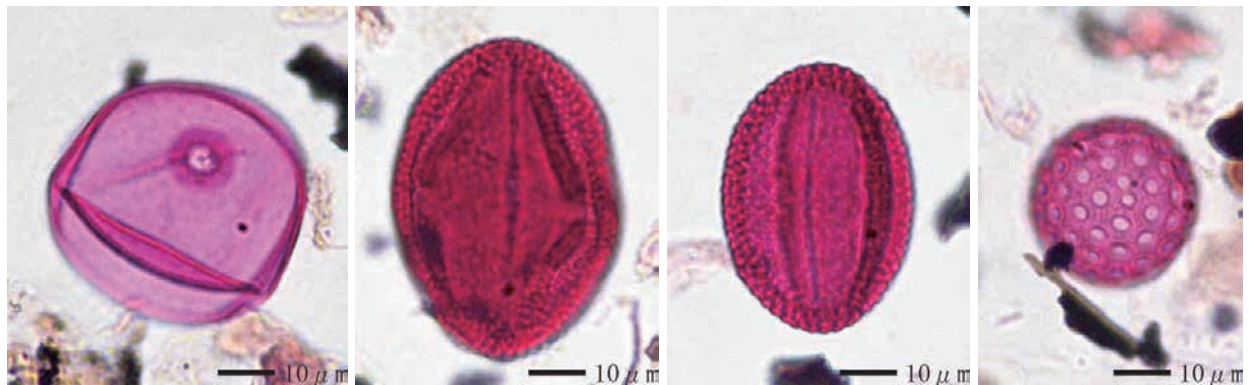




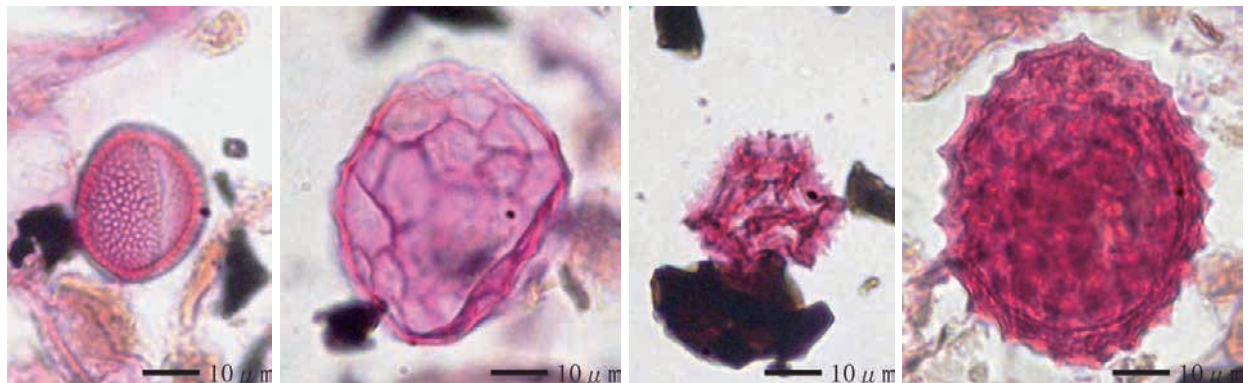




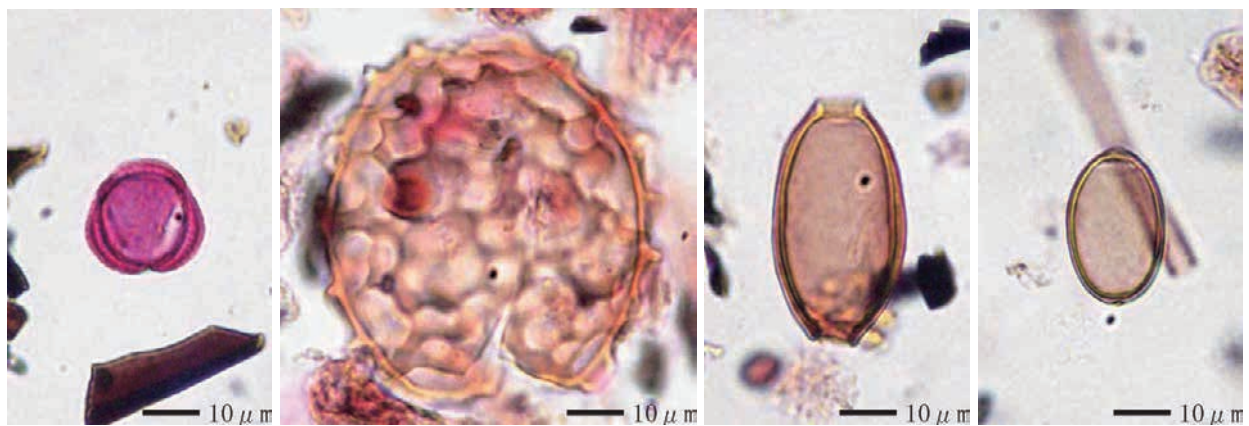
1 マツ属複雑管束胚属 2 スギ 3 シイ属 4 コナラ属コナラ胚属



5 イネ属 6 ソバ属 7 ソバ属 8 アカザ科-ヒユ科



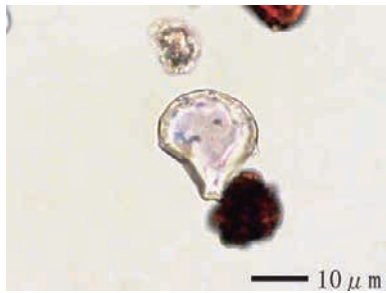
9 アブラナ科 10 ササゲ属 11 タンポポ胚科 12 ベニバナ



13 ヨモギ属 14 回虫卵 15 鞭虫卵 16 異形吸虫類卵

1. 2. 4-10. 12. 14-16 : 8区7層より検出、3. 11. 13 : 1区5層〔SZ550〕より検出

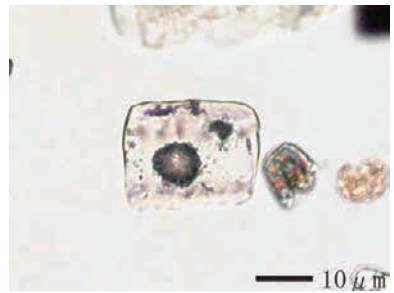




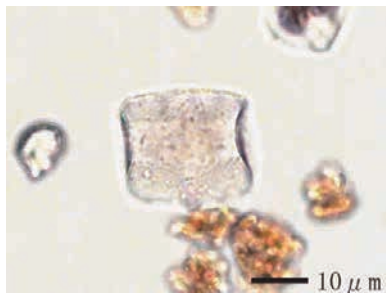
1 イネ



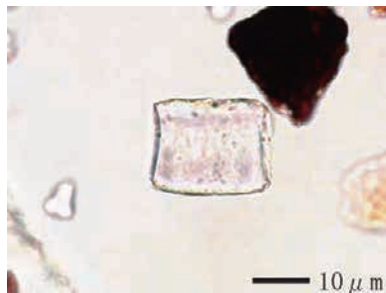
2 イネ



3 イネ (側面)



4 ススキ属型



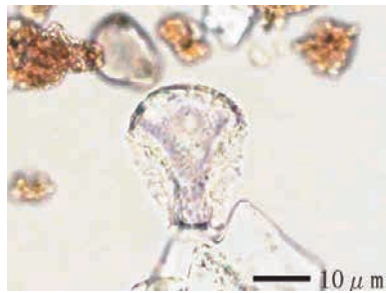
5 ウシクサ族A



6 シバ族型



7 メダケ節型



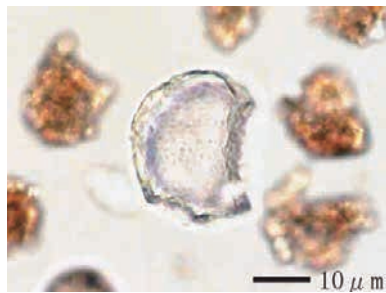
8 メダケ節型



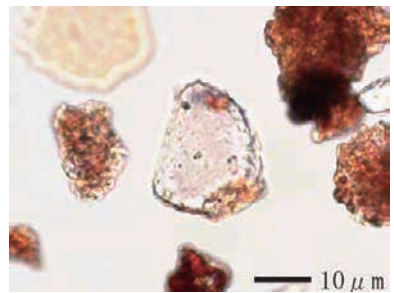
9 ネザサ節型



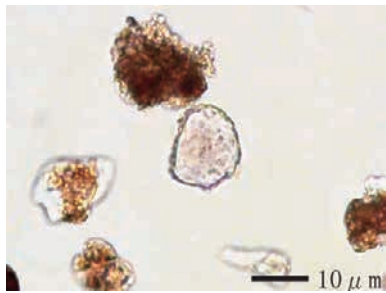
10 ネザサ節型



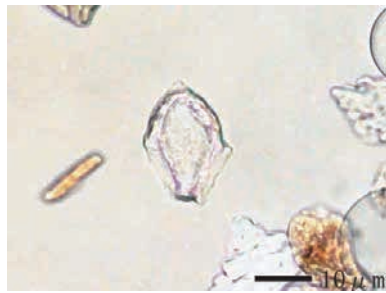
11 チマキザサ節型



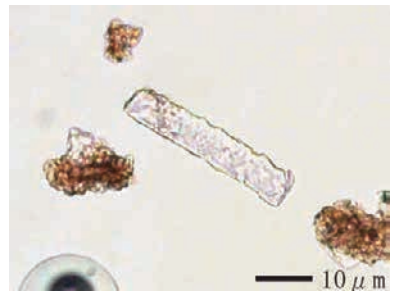
12 チマキザサ節型



13 ミヤコザサ節型

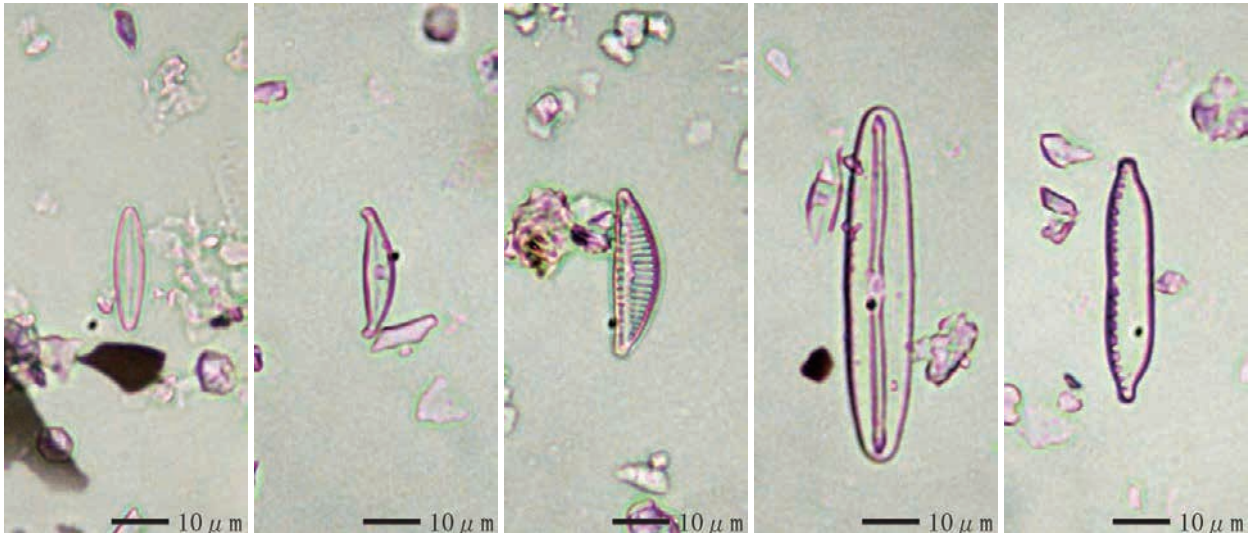


14 マダケ属型

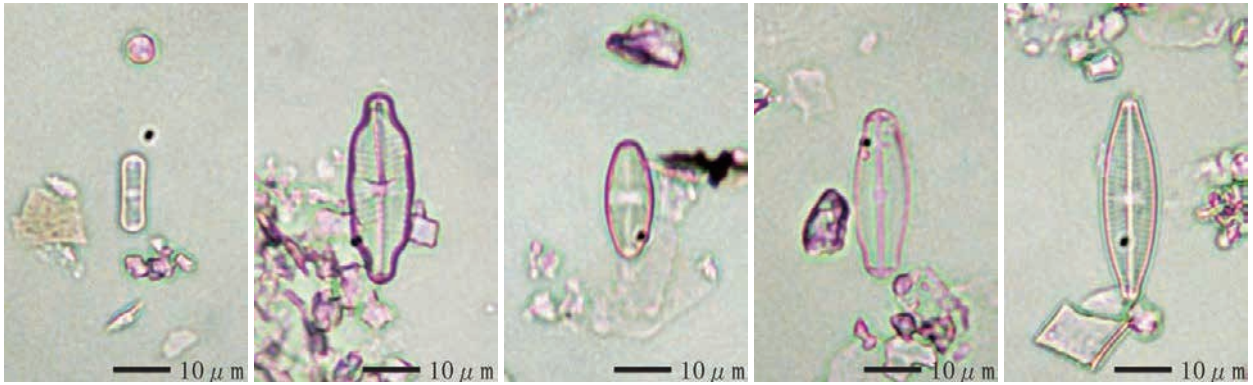


15 棒状珣酸体

4. 6. 7. 9. 10. 13. 15 : 8区7層より検出、1-3. 5. 8. 11. 12. 30 : 1区5層〔SZ550〕より検出



1 *Achnanthes minutissima* 2 *Amphora montana* 3 *Cymbella silesiaca* 4 *Frustulia vulgaris* 5 *Hantzschia amphioxys*



6 *Navicula contenta* 7 *Navicula elginensis* 8 *Navicula mutica* 9 *Navicula pupula* 10 *Navicula veneta*



11 *Nitzschia debilis* 12 *Nitzschia palea* 13 *Pinnularia borealis* 14 *Rhopalodia gibberula* 15 *Surirella ovata*

1-12, 15 : 1区5層 [SZ550] より検出 8, 9 : 8区7層より検出



※()内は、検出箇所



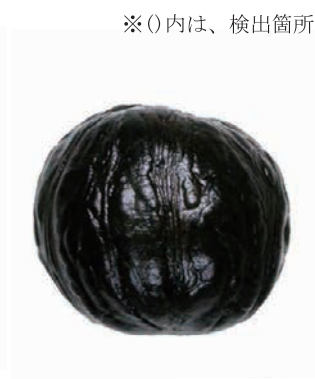
1 カヤ種子(破片)  
(5区) No.22  
5.0mm



2 マツ複維管束亜属毬果  
(5区) No.22  
5.0mm



3 ヤマモモ核 (3区) No.25  
1.0mm



4 オニグルミ核  
(5区) No.22  
5.0mm



5 コナラ属コナラ亜属幼果  
(5区) No.22  
1.0mm



6 ウメ核 (5区) No.22  
5.0mm



7 ウメ核 (5区) No.22  
5.0mm



8 モモ核 (3区) No.24  
5.0mm



9 サクラ属サクラ節核  
(5区) No.22  
1.0mm



10 サンショウ種子  
(5区) No.22  
1.0mm



11 サンショウ種子  
(5区) No.22  
1.0mm



12 センダン核 (5区) No.22  
5.0mm



13モチノキ種子  
(3区) No.25  
1.0mm



14 ブドウ属種子  
(5区) No.17  
1.0mm



15 カキノキ属種子  
(5区) No.22  
5.0mm



16 カキノキ属種子  
(5区) No.22  
5.0mm

※()内は、検出箇所



17 オオムギ炭化果実 (5区) No.17



18 同左

1.0mm



19 コムギ炭化果実 (5区) No.17



20 同左

1.0mm



21 ソバ果実 (5区) No.17

1.0mm



22 ミゾソバ果実 (5区) No.17

1.0mm



23 イヌホウズキ種子 (5区) No.17

1.0mm



24 ナス種子 (5区) No.17

1.0mm



25 ナス種子 (5区) No.17

1.0mm



26 トウガン種子 (5区) No.22

1.0mm



27 カボチャ種子 (5区) No.22

1.0mm



28 ウリ類種子 (5区) No.22

1.0mm



29 ウリ類種子 (5区) No.22

1.0mm



30 ヒョウタン類種子 (5区) No.22

1.0mm



31 ベニバナ種子 (5区) No.22

1.0mm



32 ベニバナ種子 (5区) No.22

1.0mm





1 ウマ肩甲骨  
— 1.0cm



2 ウシ大腿骨  
— 1.0cm



3 イヌ橈骨  
— 1.0cm



4 カジキ類腹椎 1.0cm



7 サワラ椎骨 0.5cm



5 マグロ属椎骨 1.0cm



6 コチ科前鰓蓋骨 1.0cm



8 ヒラメ前上顎骨 0.5cm



1 サザエ  
——1.0cm



2 タニシ科  
——1.0cm



3 アカガイ (右)



——1.0cm



4 バカカイ (右)  
——1.0cm



5 シオフキ (左)  
——1.0cm



6 ヤマトシジミ (右)  
——1.0cm



7 アサリ (左)  
——1.0cm

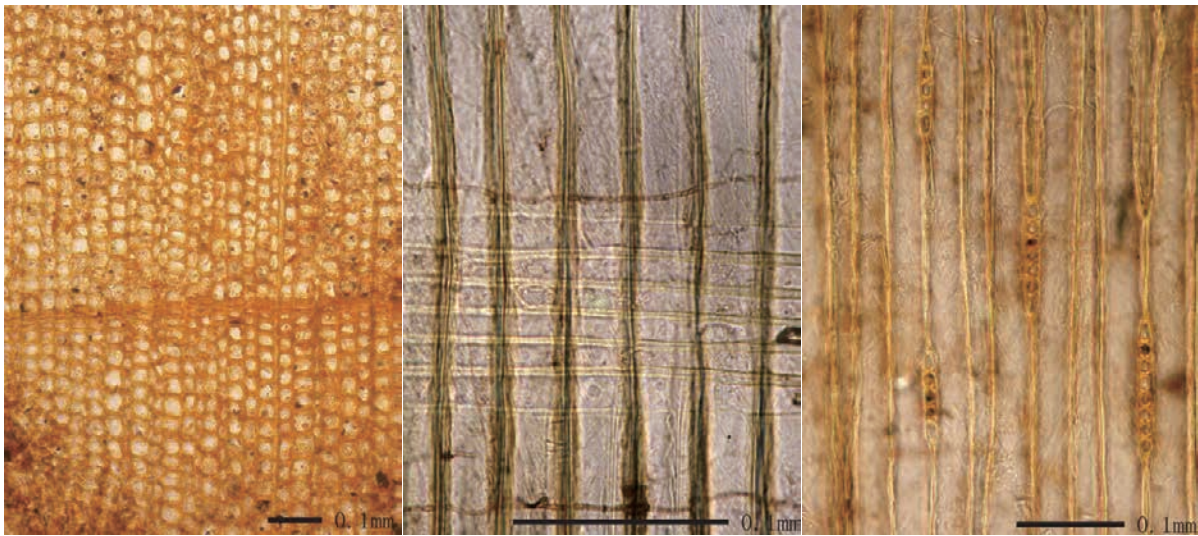


8 ハマグリ (同一個体)



——1.0cm

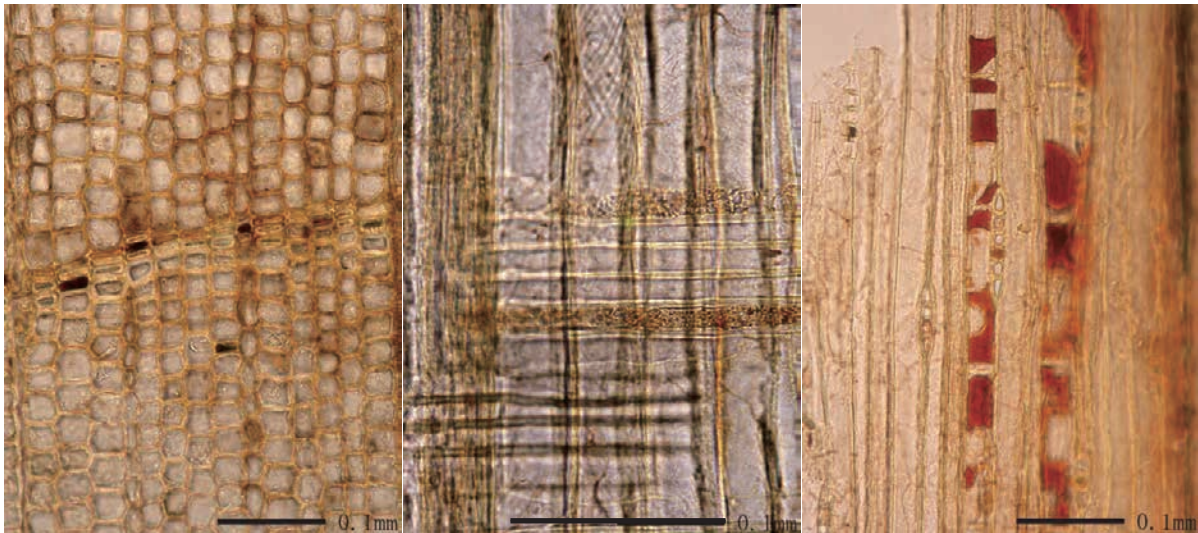




横断面  
樹種No.1 ヒノキ 箸 遺物番号1484

放射断面

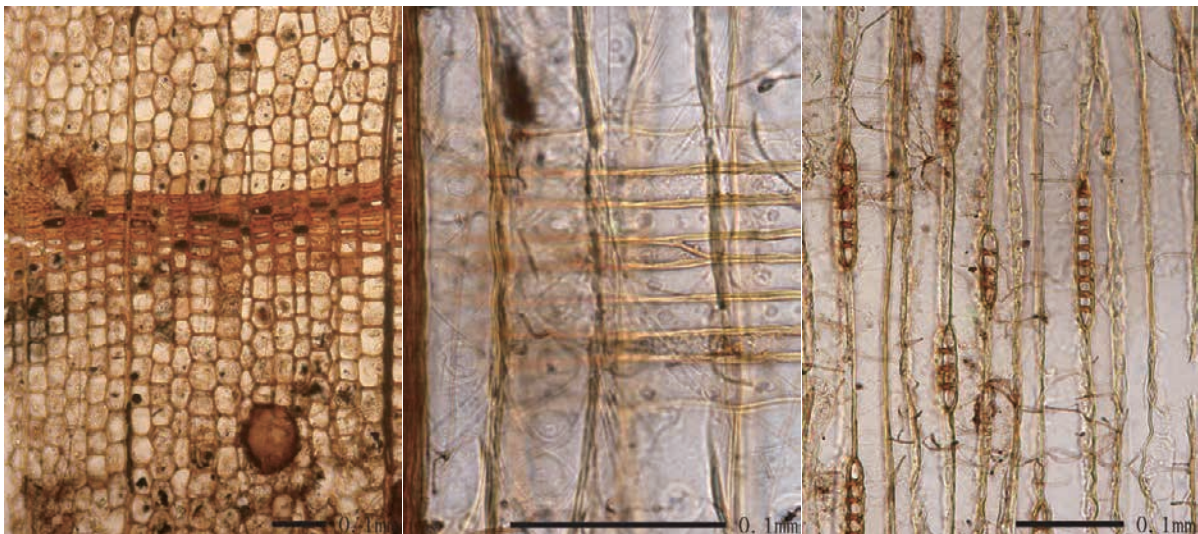
接線断面



横断面  
樹種No.2 ヒノキ 箸 遺物番号1485

放射断面

接線断面

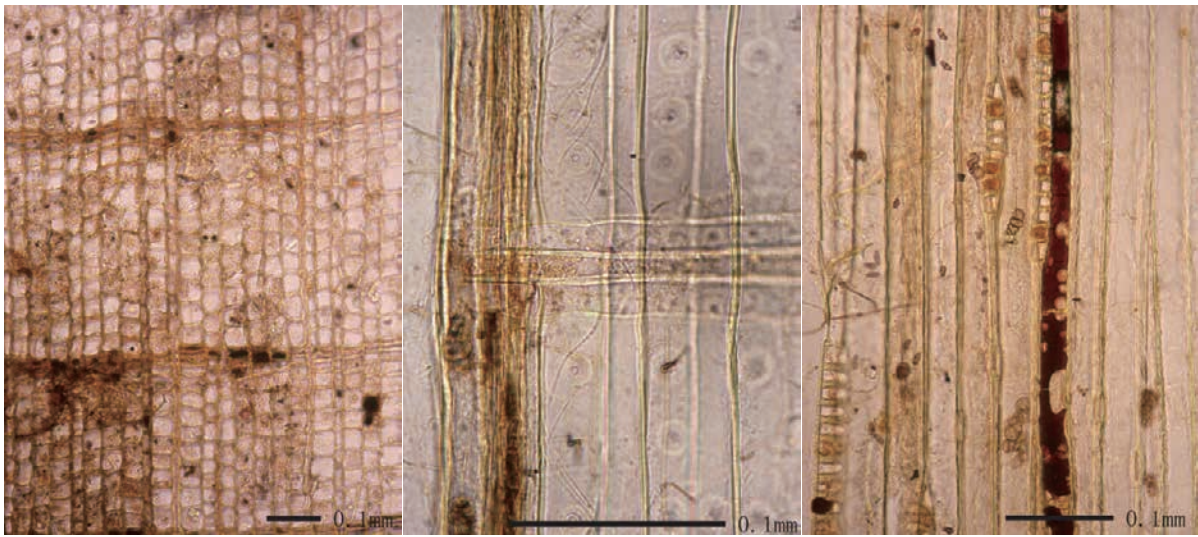


横断面  
樹種No.9 スギ 箸 遺物番号1489

放射断面

接線断面





横断面  
樹種No.17 ヒノキ 箸 遺物番号1473

放射断面

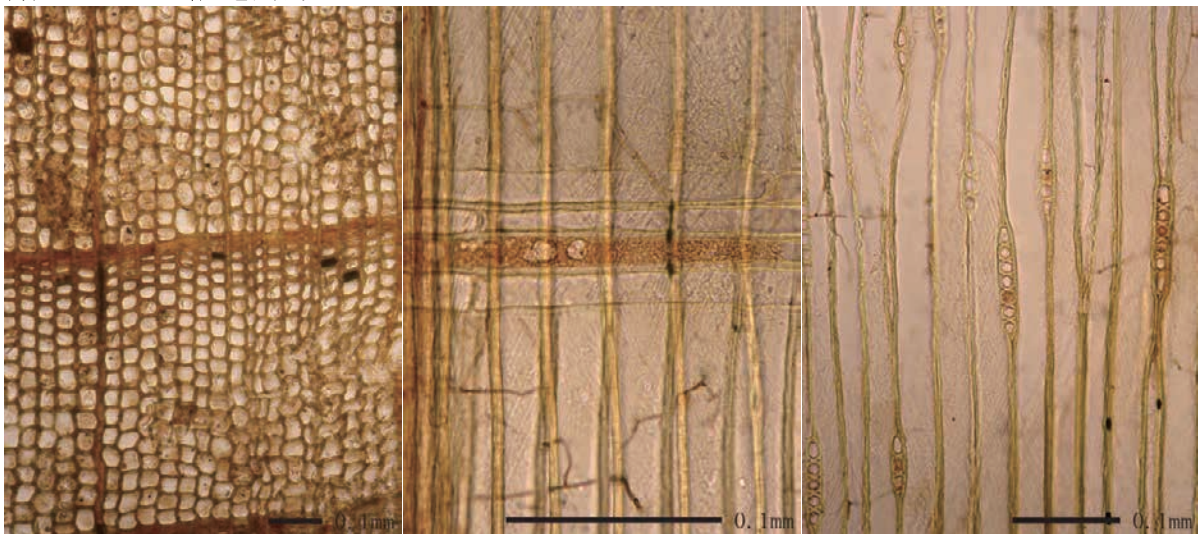
接線断面



横断面  
樹種No.30 スギ 箸 遺物番号1521

放射断面

接線断面

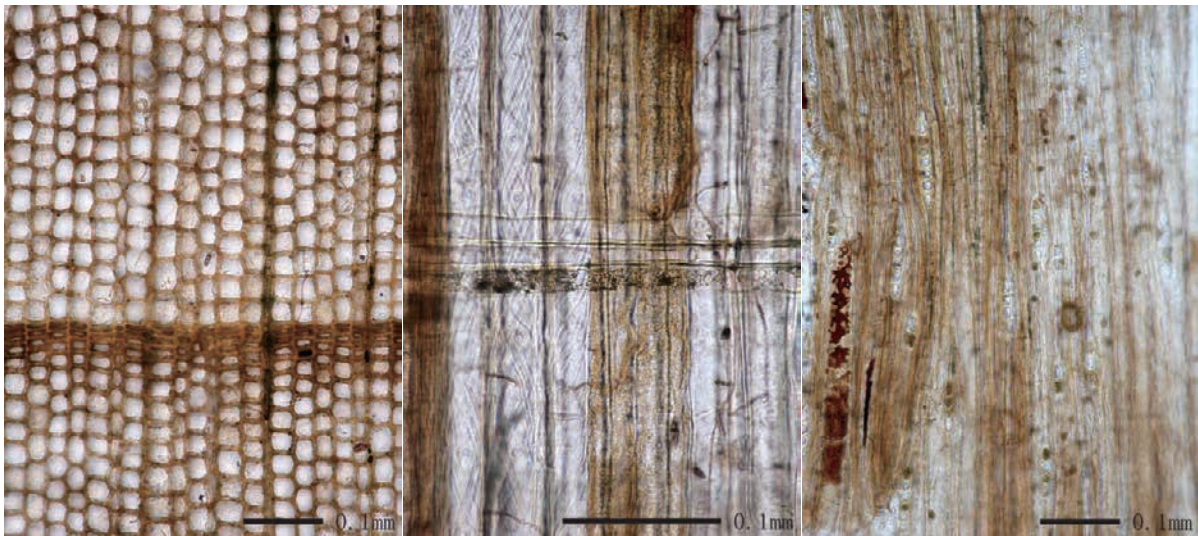


横断面  
樹種No.34 ヒノキ 箸 遺物番号1453

放射断面

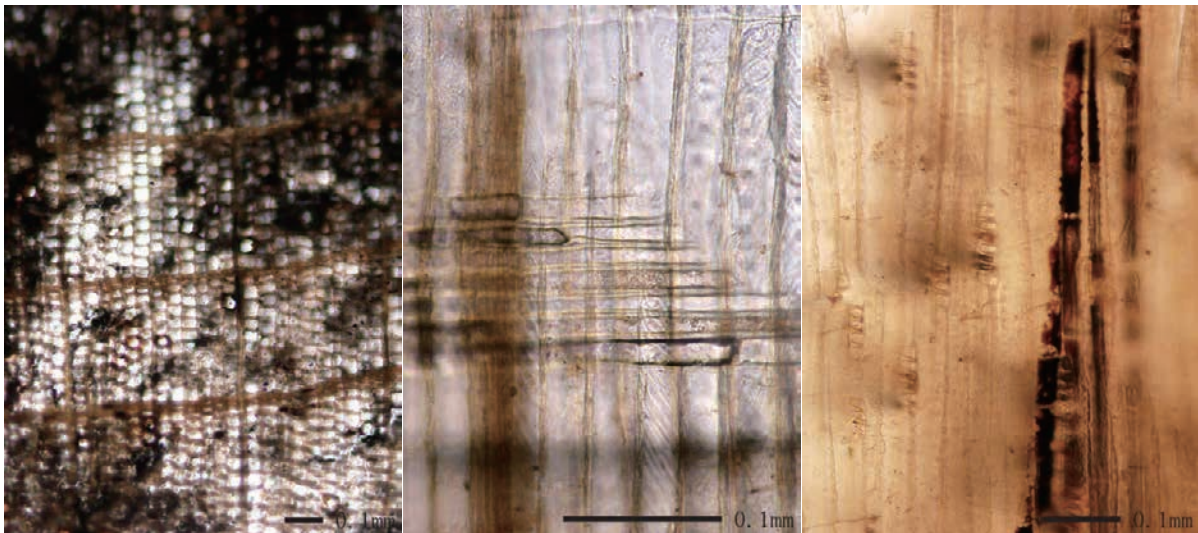
接線断面





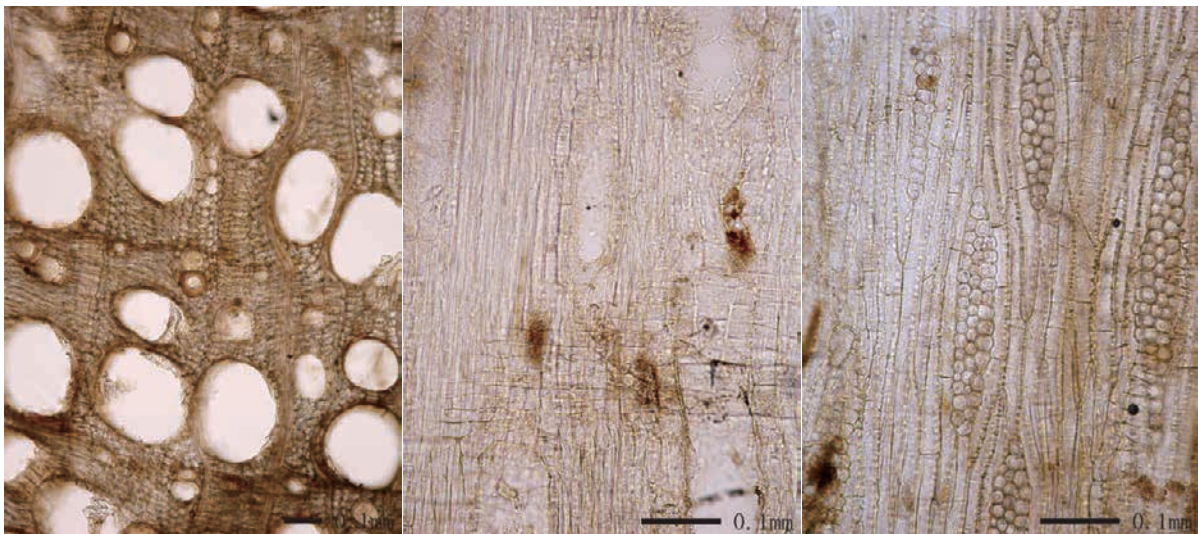
横断面  
樹種No.2 ヒノキ科 下駄 遺物番号1502

接線断面



横断面  
樹種No.10 ヒノキ 鏡箱底板 遺物番号1559

接線断面

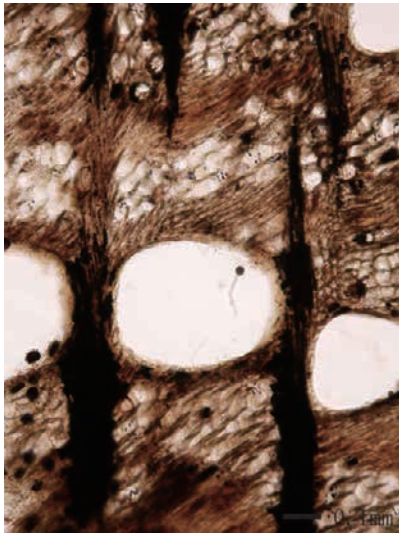


横断面  
樹種No.12 トネリコ属 刳物皿 遺物番号1508

接線断面

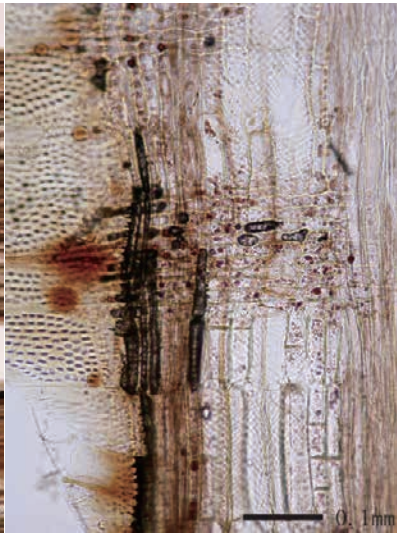
樹種同定② 顕微鏡写真 I (抜粋)





横断面

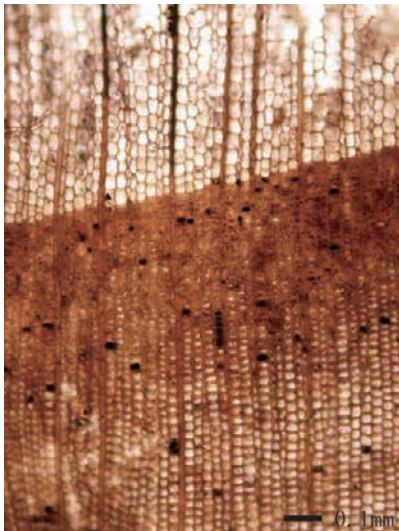
樹種No.13 ケヤキ 漆器碗 遺物番号 3次-16



放射断面



接線断面



横断面

樹種No.14-1 スギ 花形飾り(丸)



放射断面

遺物番号1483

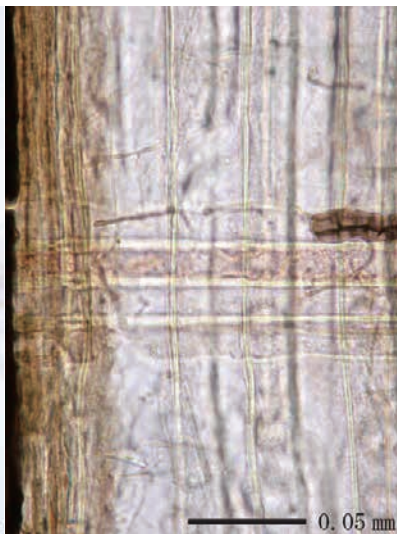


接線断面



横断面

樹種No.14-2 ヒノキ 花形飾り(花)



放射断面

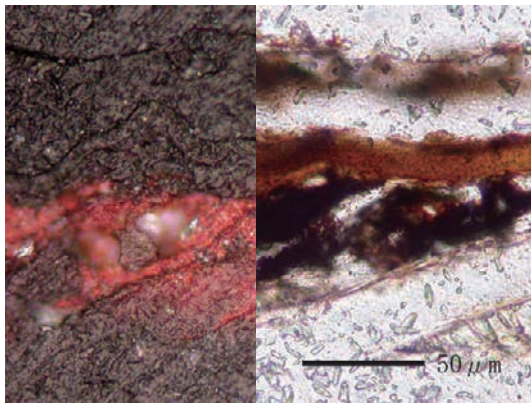
遺物番号1483



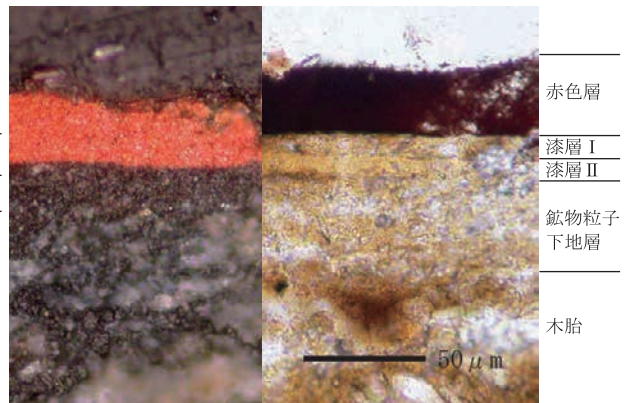
接線断面

樹種同定② 顕微鏡写真Ⅱ (抜粋)

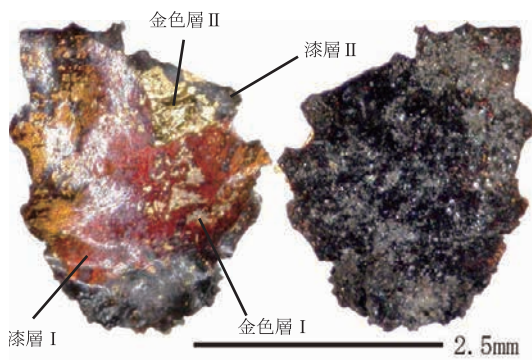




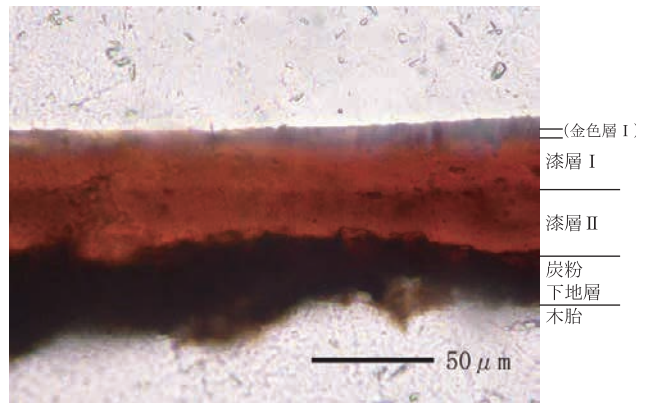
1 10鏡箱底板



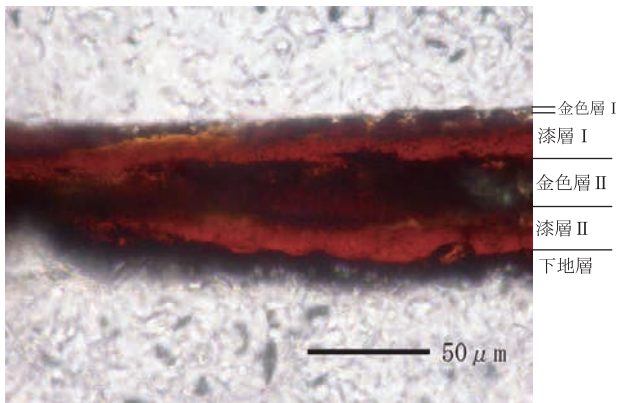
2 13漆椀



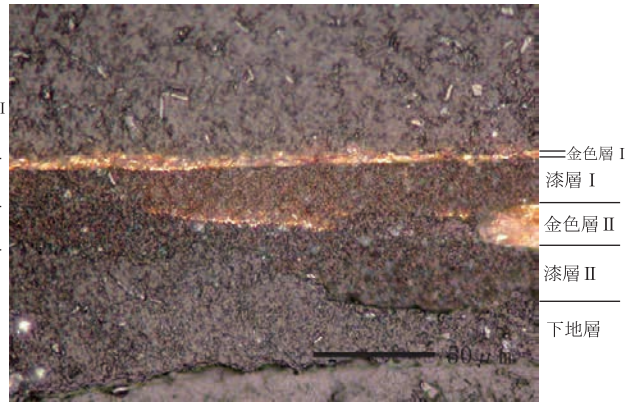
3 14花形飾り



4 14花形飾り



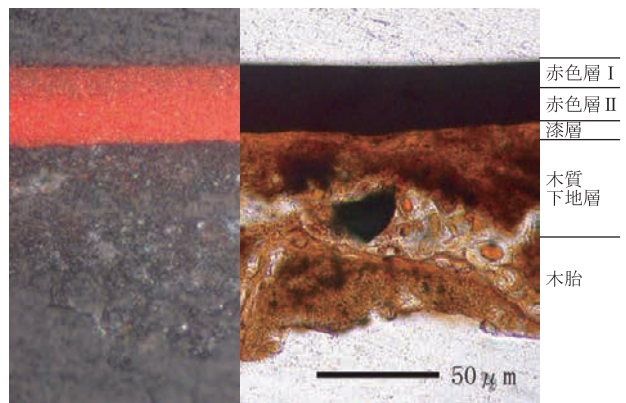
5 14花形飾り (光学顕微鏡)



6 同左 (落射顕微鏡)

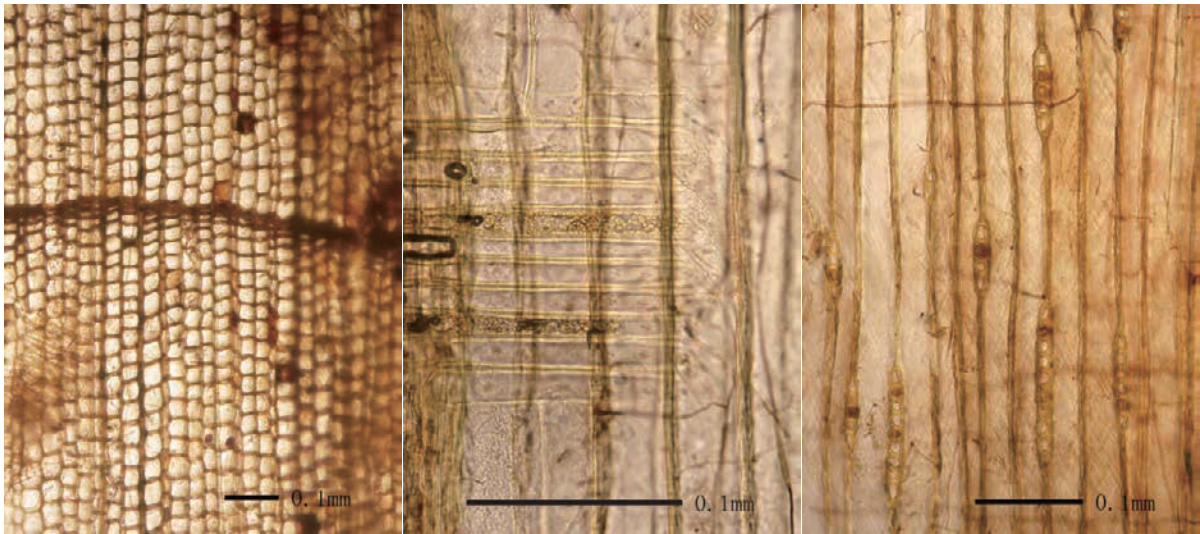


7 14花形飾り側面赤色部

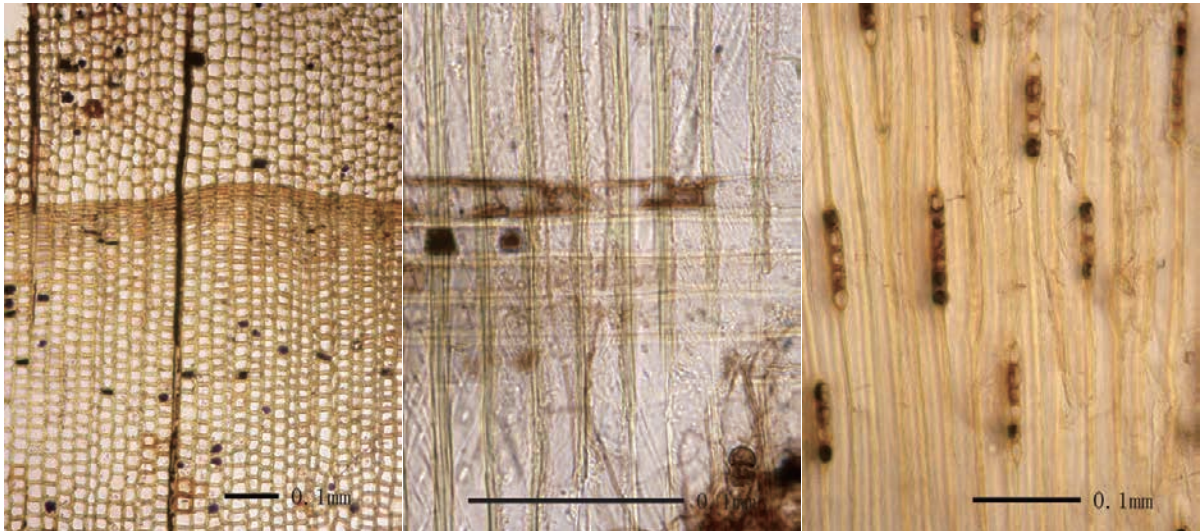


8 14花形飾り側面赤色部





横断面 放射断面 接線断面  
 樹種No.3 ヒノキ 曲物蓋 遺物番号1467



横断面 放射断面 接線断面  
 樹種No.7 ヒノキ 曲物側板 遺物番号1558



横断面 放射断面 接線断面  
 樹種No.16 コウヤマキ 曲物底板? 遺物番号1466

樹種同定③ 顕微鏡写真 I (抜粋)

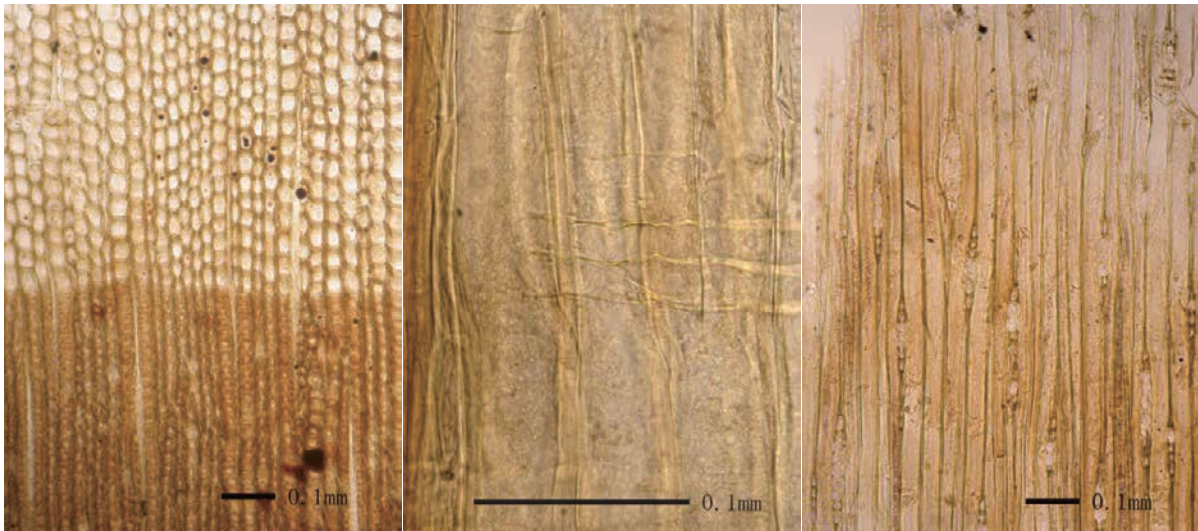




横断面  
樹種No.27 モミ属 楔 遺物番号1481

放射断面

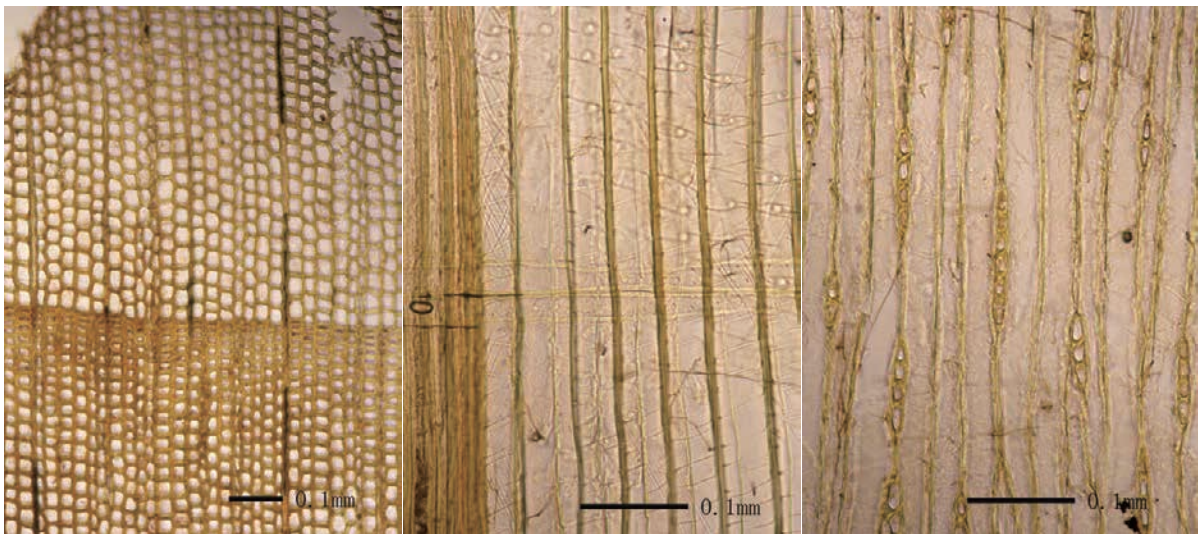
接線断面



横断面  
樹種No.33 マツ属 棒 遺物番号1519

放射断面

接線断面

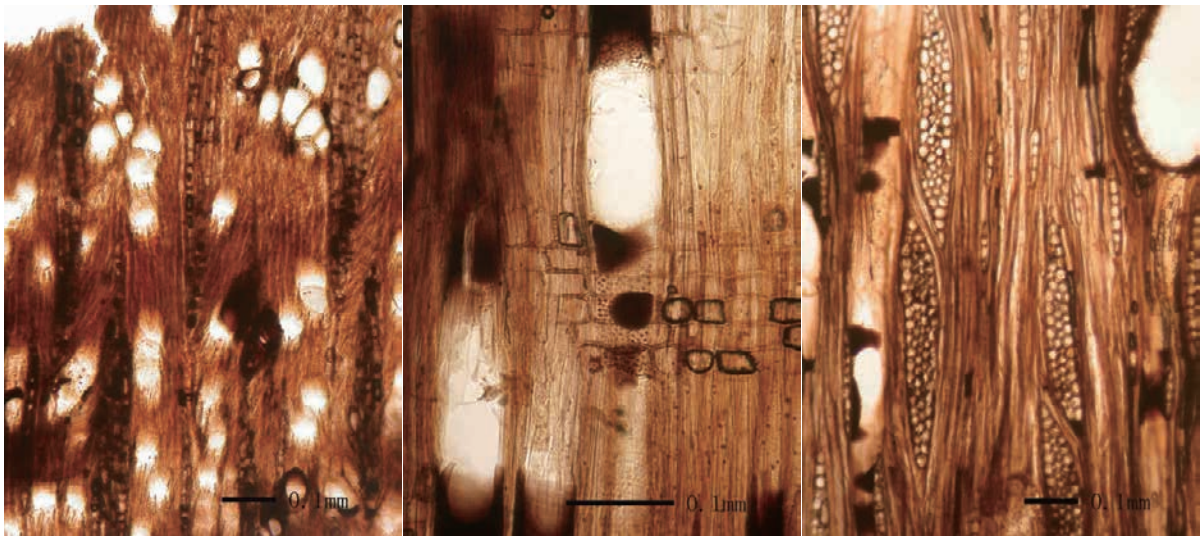


横断面  
樹種No.34 カヤ 建築部材? 遺物番号1546

放射断面

接線断面





横断面  
樹種No.42 サクラ属 漆器碗 遺物番号1544

放射断面

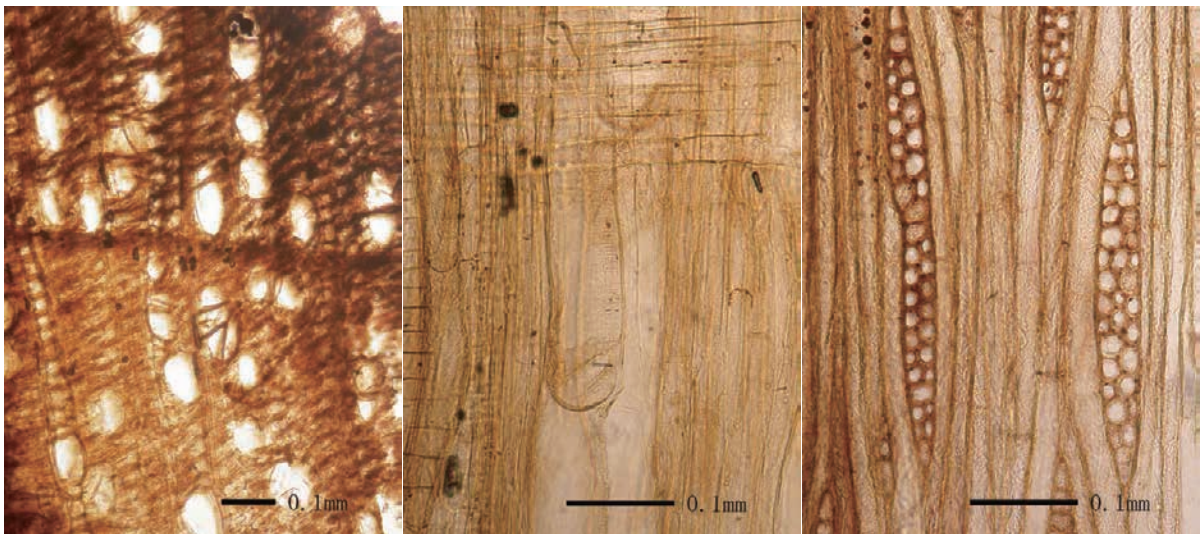
接線断面



横断面  
樹種No.43 トチノキ 漆器碗蓋 遺物番号1530

放射断面

接線断面



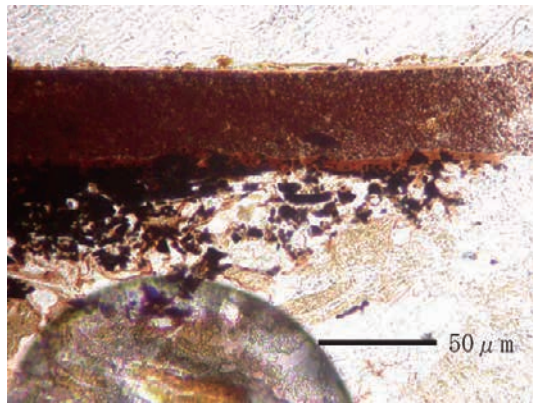
横断面  
樹種No.44 モクレン属 漆器碗 遺物番号1531

放射断面

接線断面

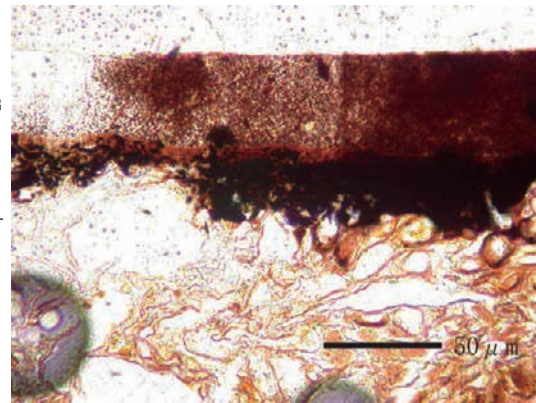
樹種同定③ 顕微鏡写真Ⅲ (抜粋)





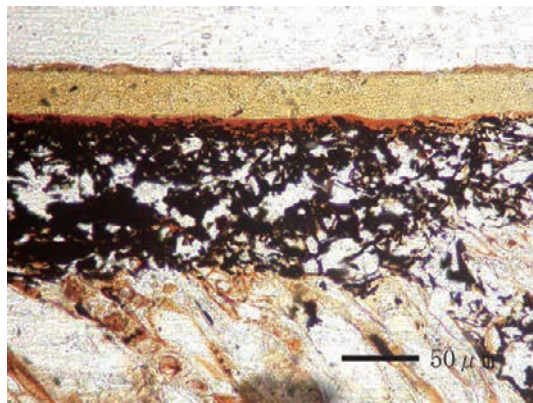
— 漆層 I  
— 赤色漆層  
— 漆層 II  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

1 遺物番号1544 42漆器碗外面



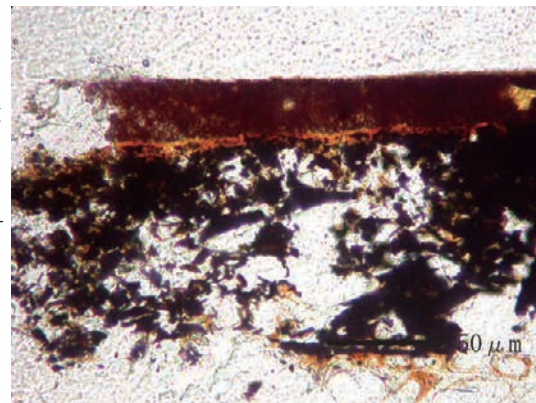
— 赤色漆層  
— 漆層  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

2 遺物番号1544 42漆器碗内面



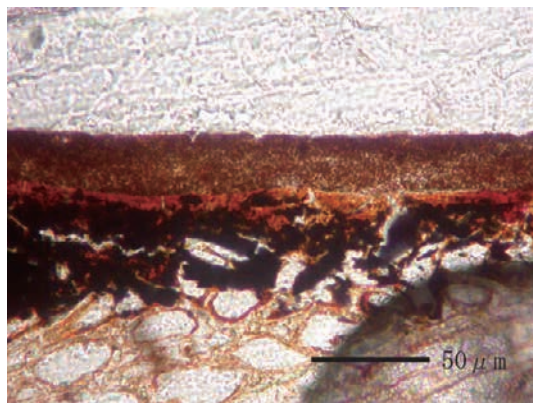
— 漆層 I  
— 漆層 II  
— 漆層 III  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

3 遺物番号1530 43漆器碗蓋外面



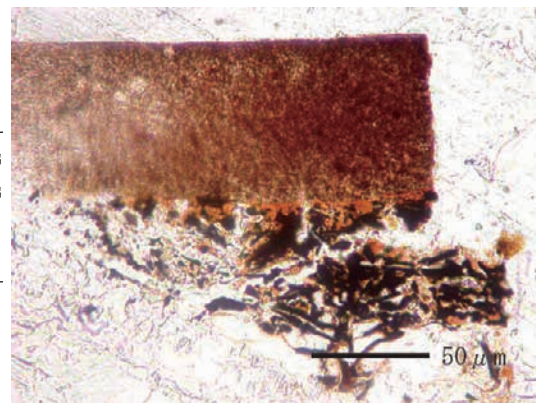
— 赤色漆層  
— 漆層  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

4 遺物番号1530 43漆器碗蓋内面



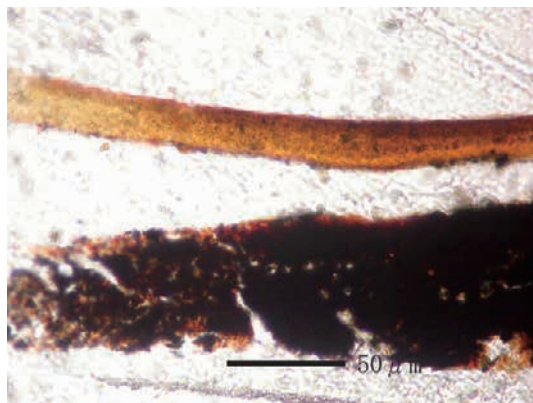
— 赤色漆層  
— 漆層  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

5 遺物番号1531 44漆器碗外面



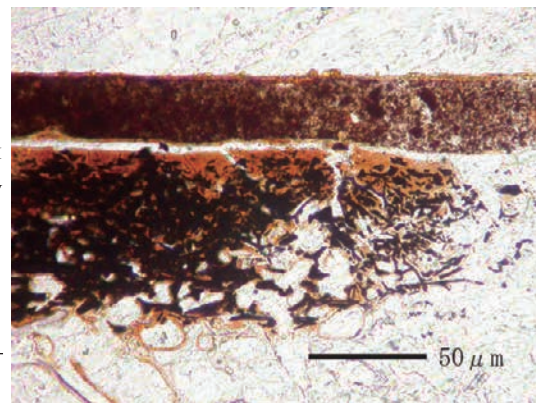
— 赤色漆層  
— 漆層  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

6 遺物番号1531 44漆器碗内面



— 漆層 I  
— 漆層 II  
— 漆層 III  
— 漆層 IV  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

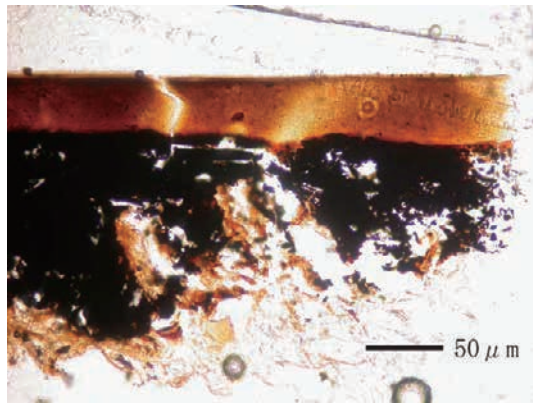
7 遺物番号1560 45漆器碗外面



— 漆層 I  
— 赤色漆層  
— 漆層 II  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

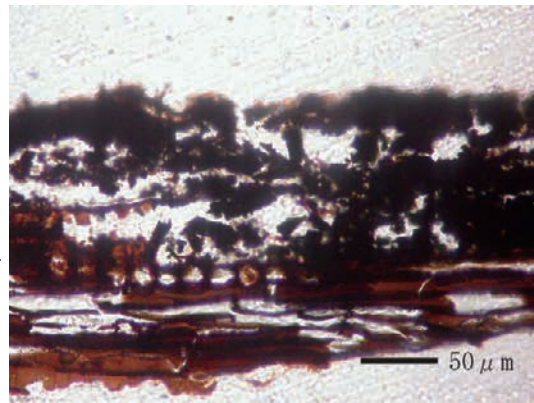
8 遺物番号1560 45漆器碗内面





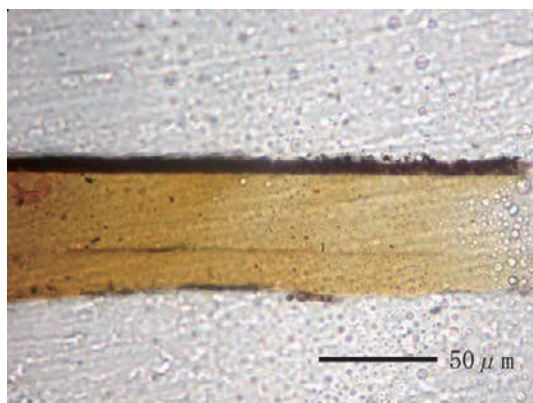
— 漆層 I  
— 漆層 II  
— 漆層 III  
— 炭粉  
— 下地層  
— 木胎

9 遺物番号1545 46漆器碗外面



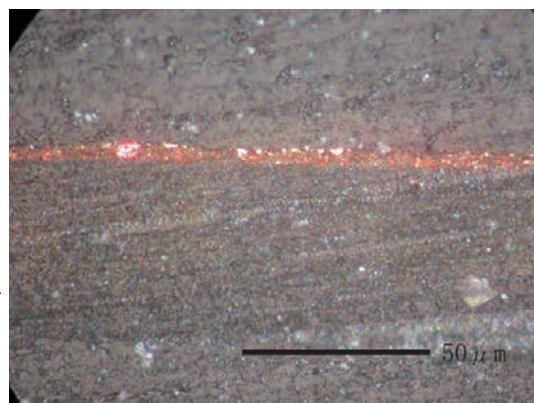
— 炭粉  
— 下地層?  
— 木胎

10 遺物番号1545 46漆器碗内面



— 金色層  
— 赤色  
— 漆層  
— 漆層 I  
— 漆層 II  
— 木胎

11 遺物番号1500 47指物部材  
(光学顕微鏡)



— 金色層  
— 赤色  
— 漆層  
— 漆層 I  
— 漆層 II  
— 木胎

12 遺物番号1500 47指物部材  
(落射顕微鏡)

樹種同定③ 塗膜断面観察写真Ⅱ





5区SZ6020検出状況（北西から）



7区調査状況（南西から）



14区SK6036断面（北西から）







22



472



100



252



101



267



266



268



331



534



152



598



594



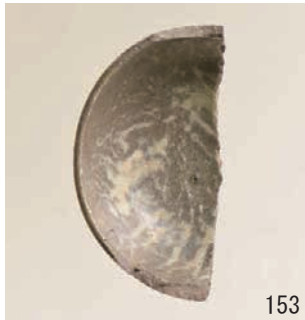
399



425



272



153



368



438



153

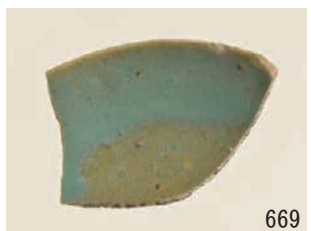
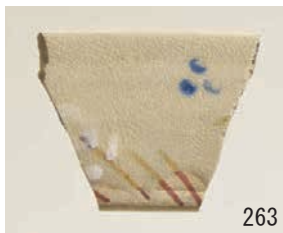
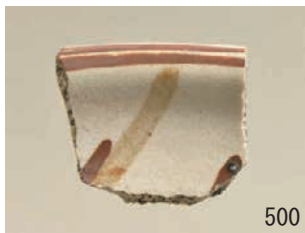


154



409









187



188



189



192



194



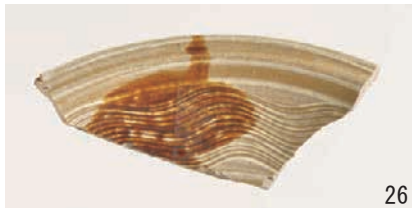
195



197



273



26



264



446



23



51



181



324



17



18



330



578



102



386



28



670



428



552



554



367



277



599



596



466



556



276



513



325



657



474



473



625



176



176



549



410



550



24

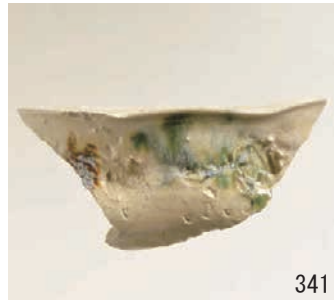




557



282



341



479



38



656



126



486



437



178



581



580



161



33



430



339



536



527



340

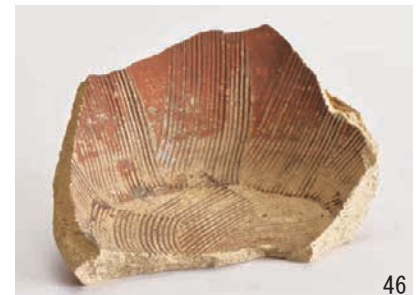
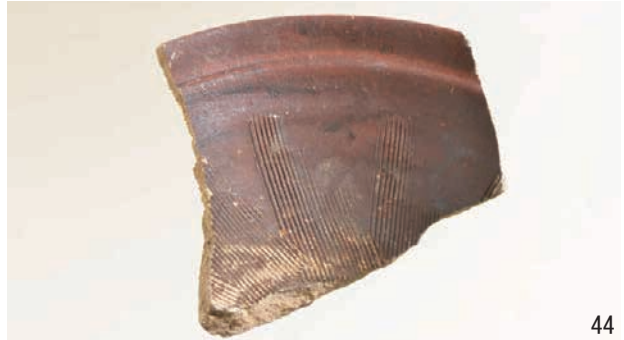
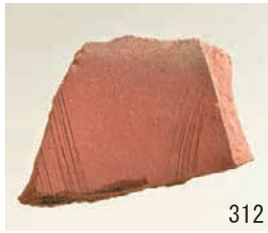


515



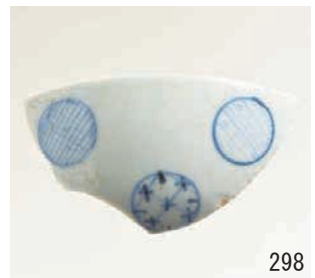
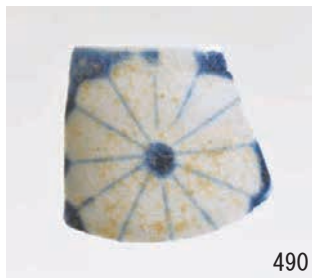
316











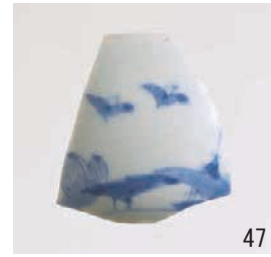




664



299



47



452



663



375



394



489



636



496



471



304



640



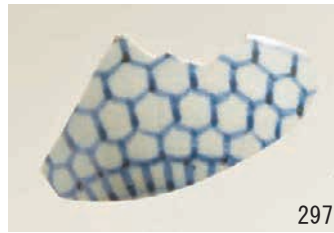
49



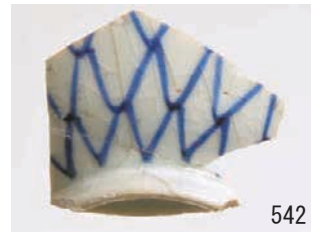
543



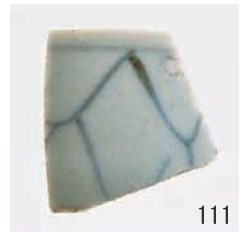
296



297



542



111



620



407



230



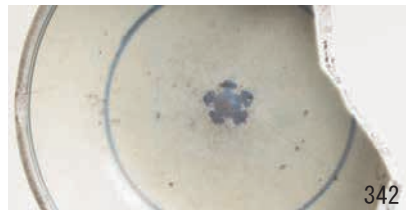
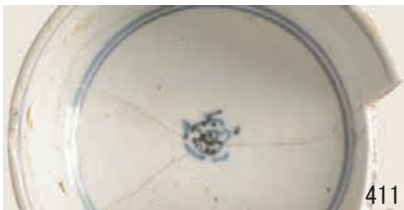
620

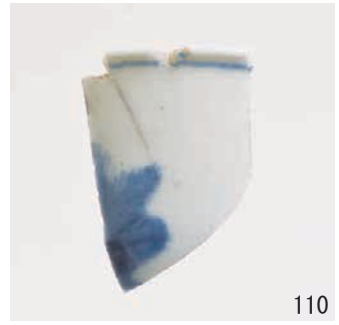
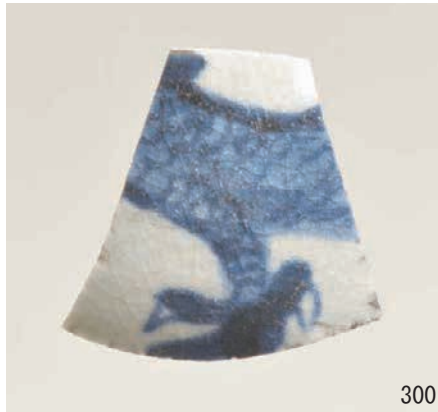
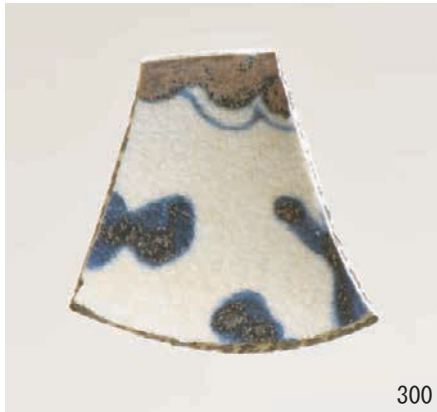


407

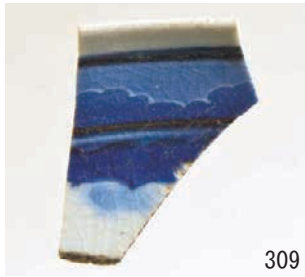


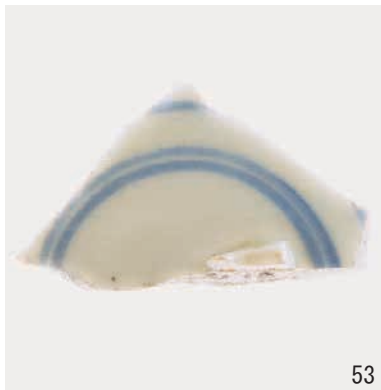
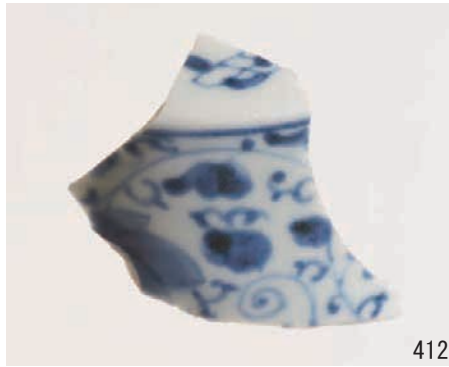
320



















509



377



497



521



521



574



118



173



346



63









71



71



77



75



347



128



65



67



68



69



66



175



70



126



498



127



SD6050 イヌ科



SD6050 ネコ



348



年輪

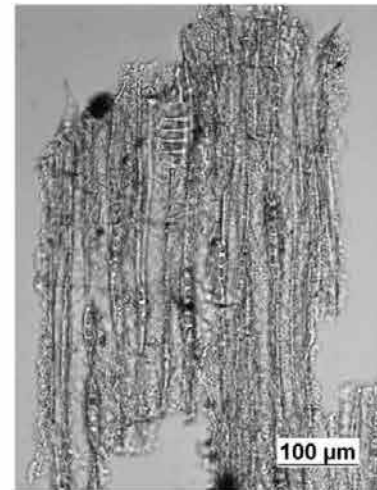


板目

No. 77 ヒノキ科ヒノキ属



年輪



板目

No. 347 ヒノキ科ヒノキ属



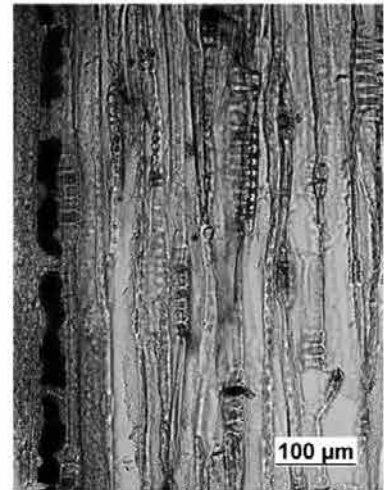
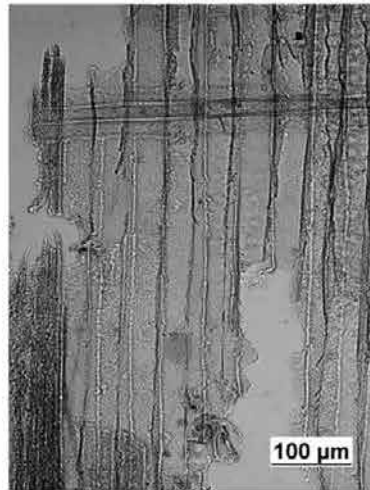
年輪



板目

No. 348 ヒノキ科ヒノキ属

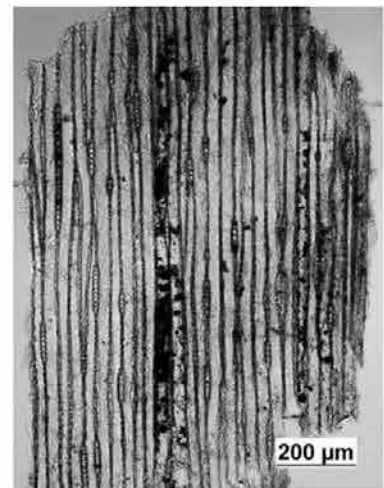
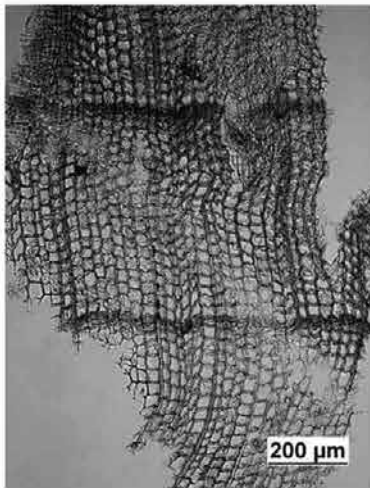




No. 349 ヒノキ科アスナロ属

柱目

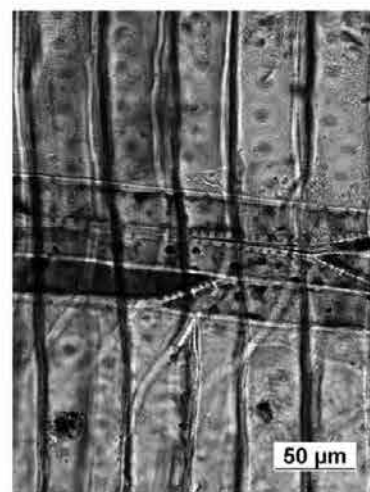
板目



No. 350 木口  
ヒノキ科ヒノキ属

柱目

板目



No. 353 マツ科ツガ属

柱目

板目



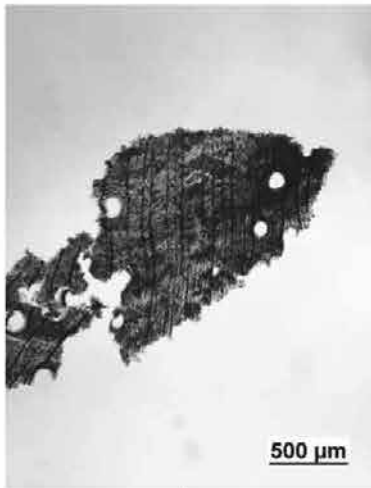


年輪

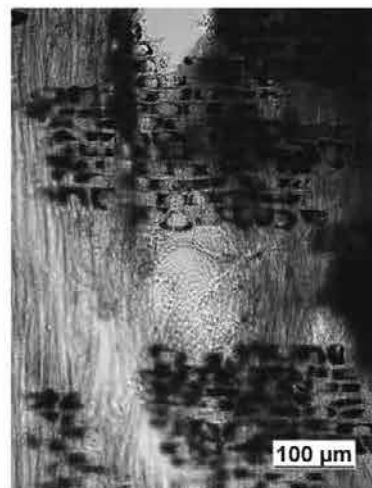


板目

No. 413 ヒノキ科ヒノキ属



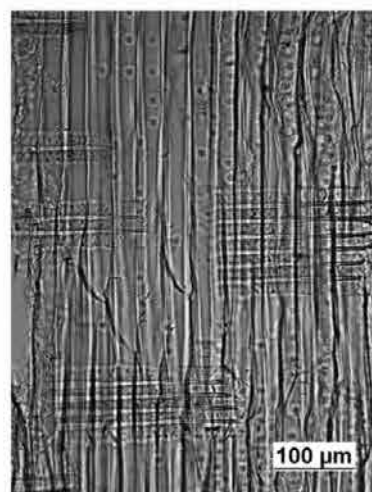
木口  
No. 414 ブナ科コナラ属アカガシ亜属



年輪



板目



年輪



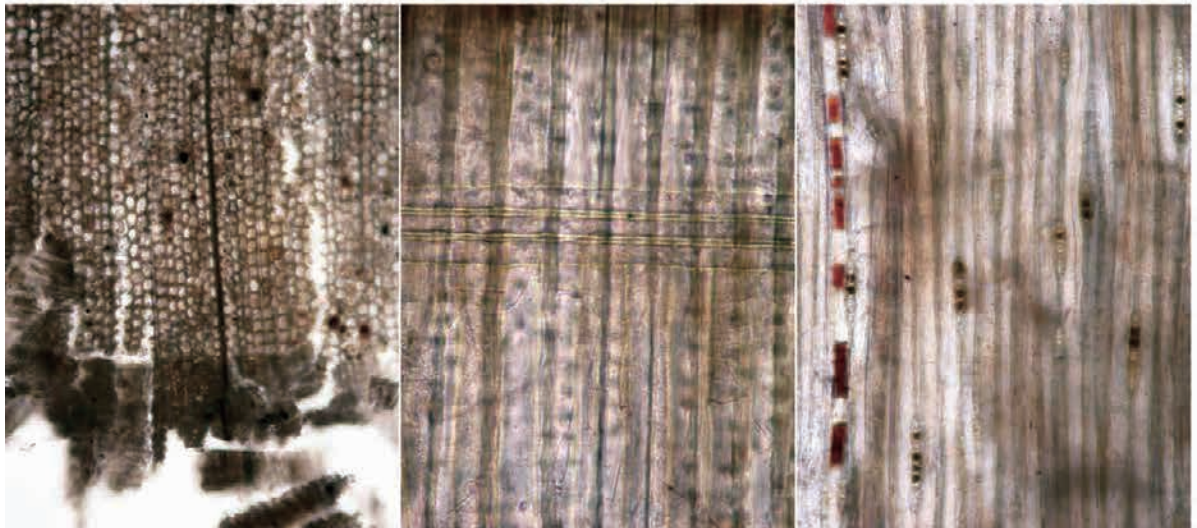
板目

No. 647 ヒノキ科アスナロ属





横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.66 ヒノキ 箸

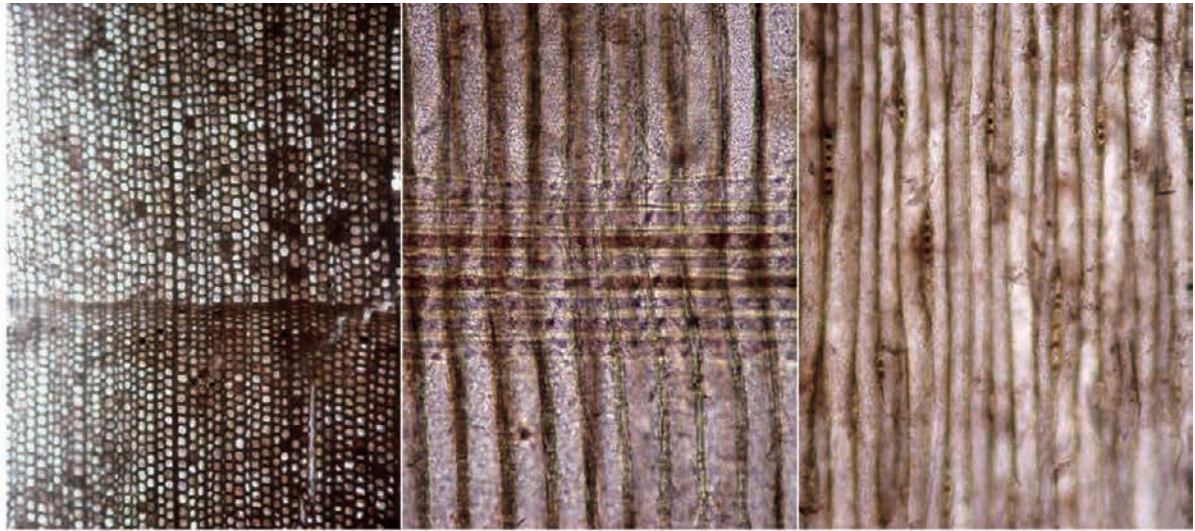


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.67 ヒノキ 箸



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.68 ヒノキ科 箸

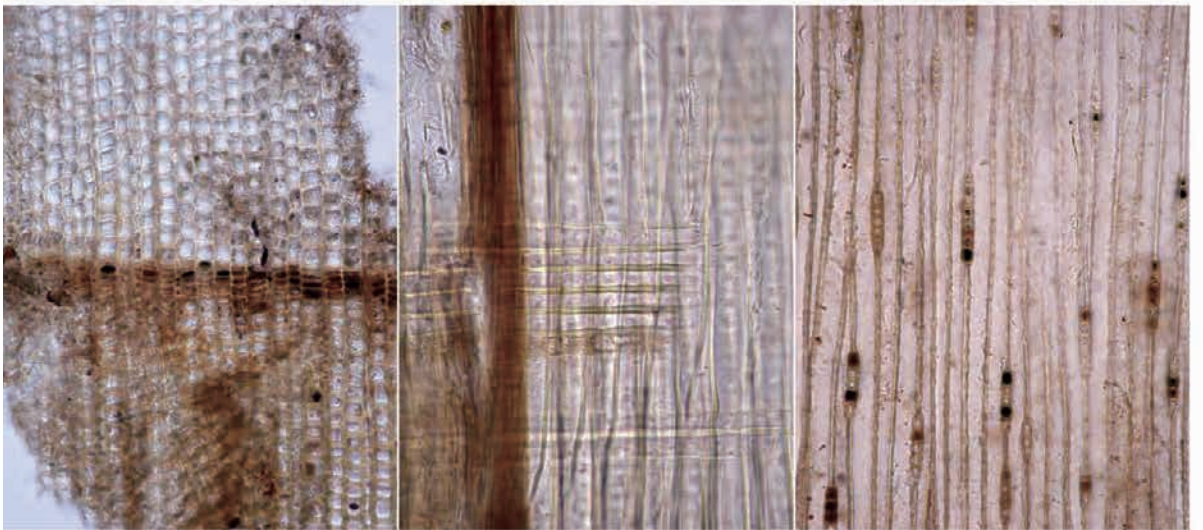




横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.69 ヒノキ 箸

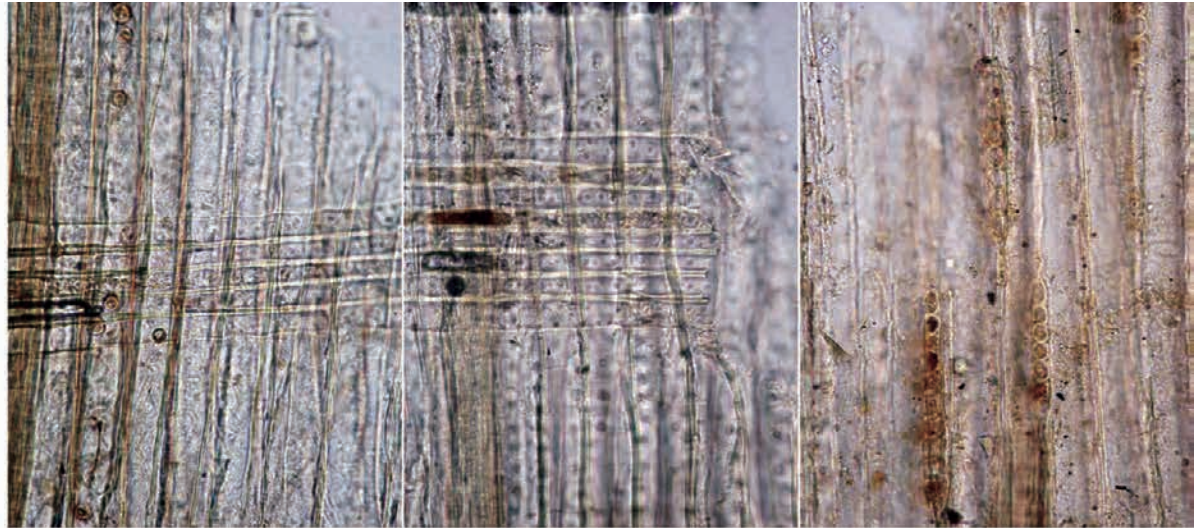


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.172 ヒノキ 箸



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.71-1 ヒノキ 下駄 台



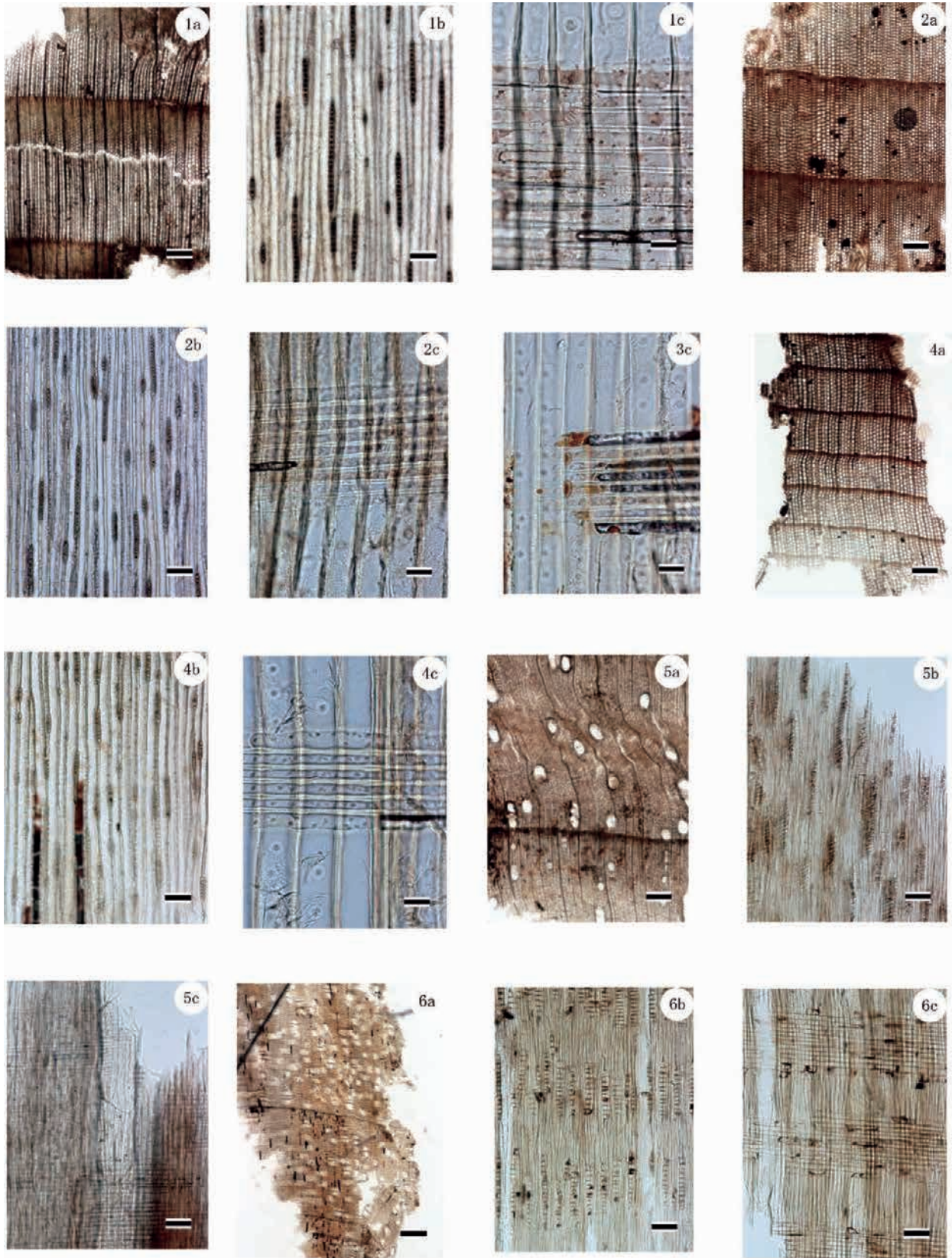


放射断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.71-2 ヒノキ 下駄 差歯(前) 樹種No.71-3 ヒノキ 下駄 差歯(後)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
樹種No.128 サワラ へら

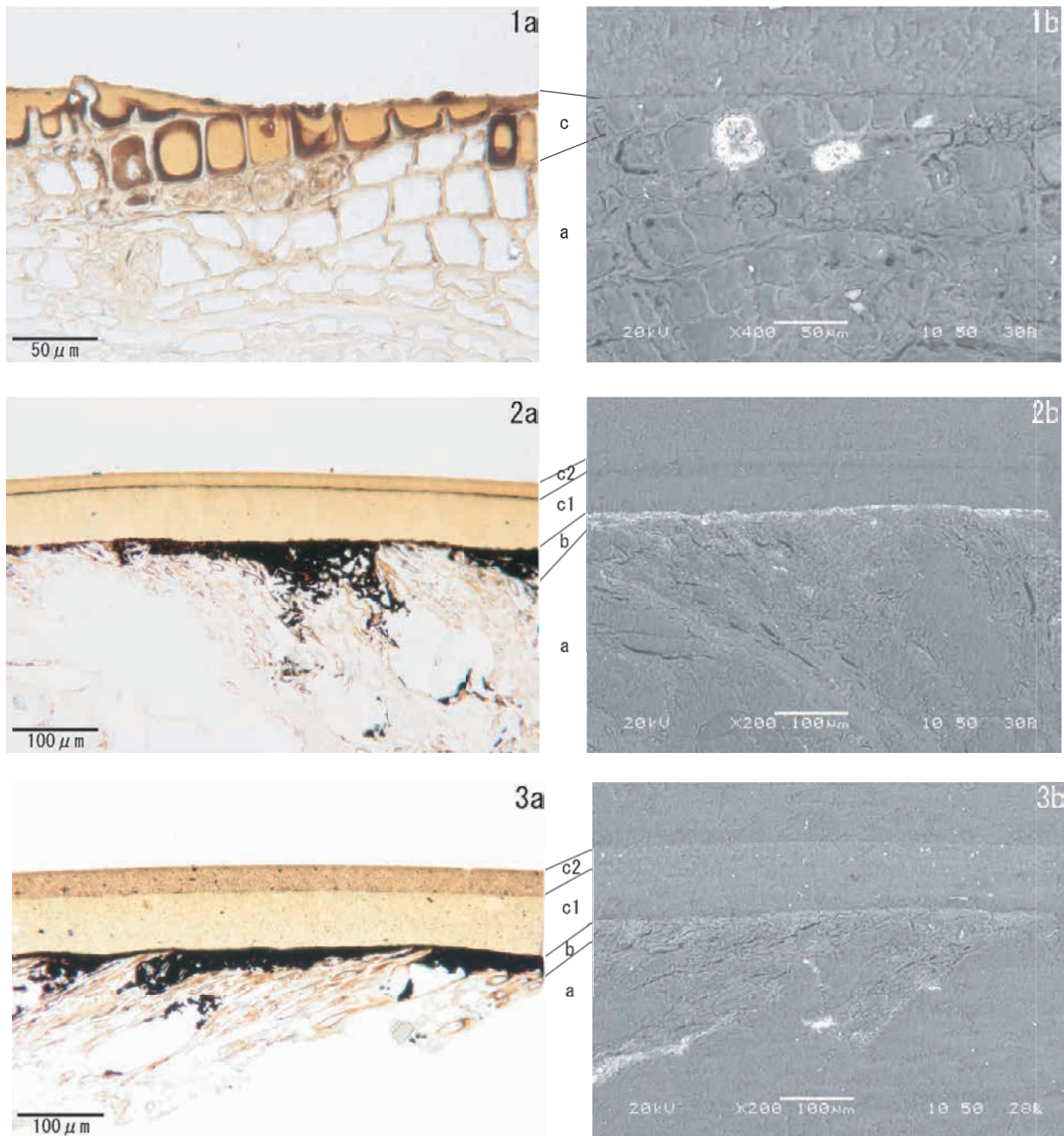




1a-1c (No. 90) 、 2a-2c (No. 76)、 3c (No. 83)、 4a-4c (No. 82)、 5a-5c (No. 129)、 6a-6c (No. 171)

a : 横断面 (スケール=250 $\mu$ m) 、 b : 接線断面 (スケール=100 $\mu$ m) 、 c : 放射断面 (スケール=1-4 : 25 $\mu$ m・5-6 : 100 $\mu$ m)

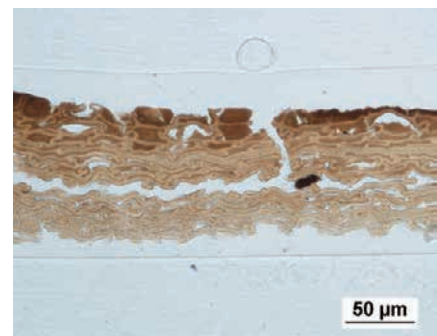




1. 試料No.79曲物底板黒色塗膜    2. 試料No.174椀内面黒色塗膜    3. 試料No.174椀外面赤色塗膜  
漆製品の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b)

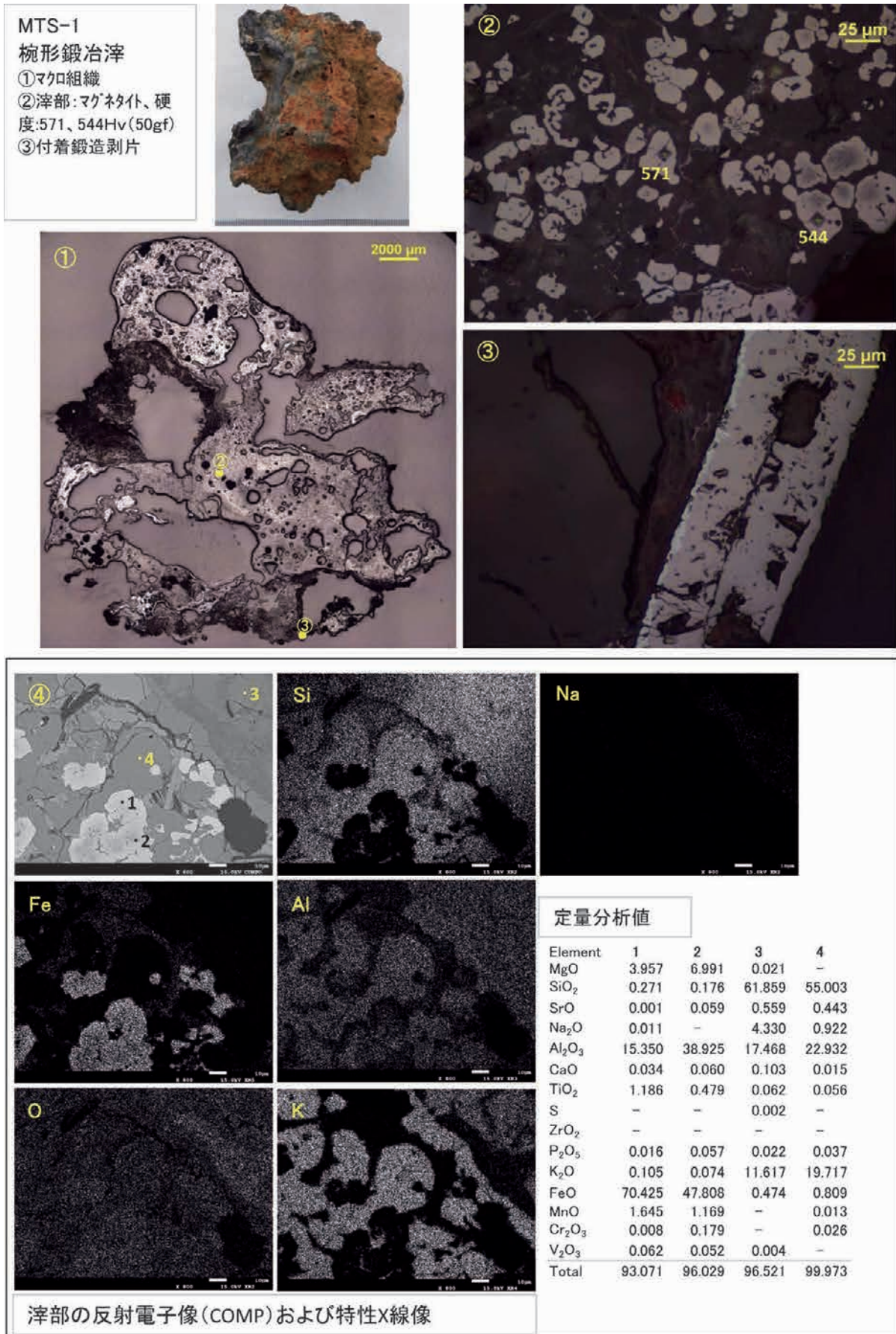


試料No.349



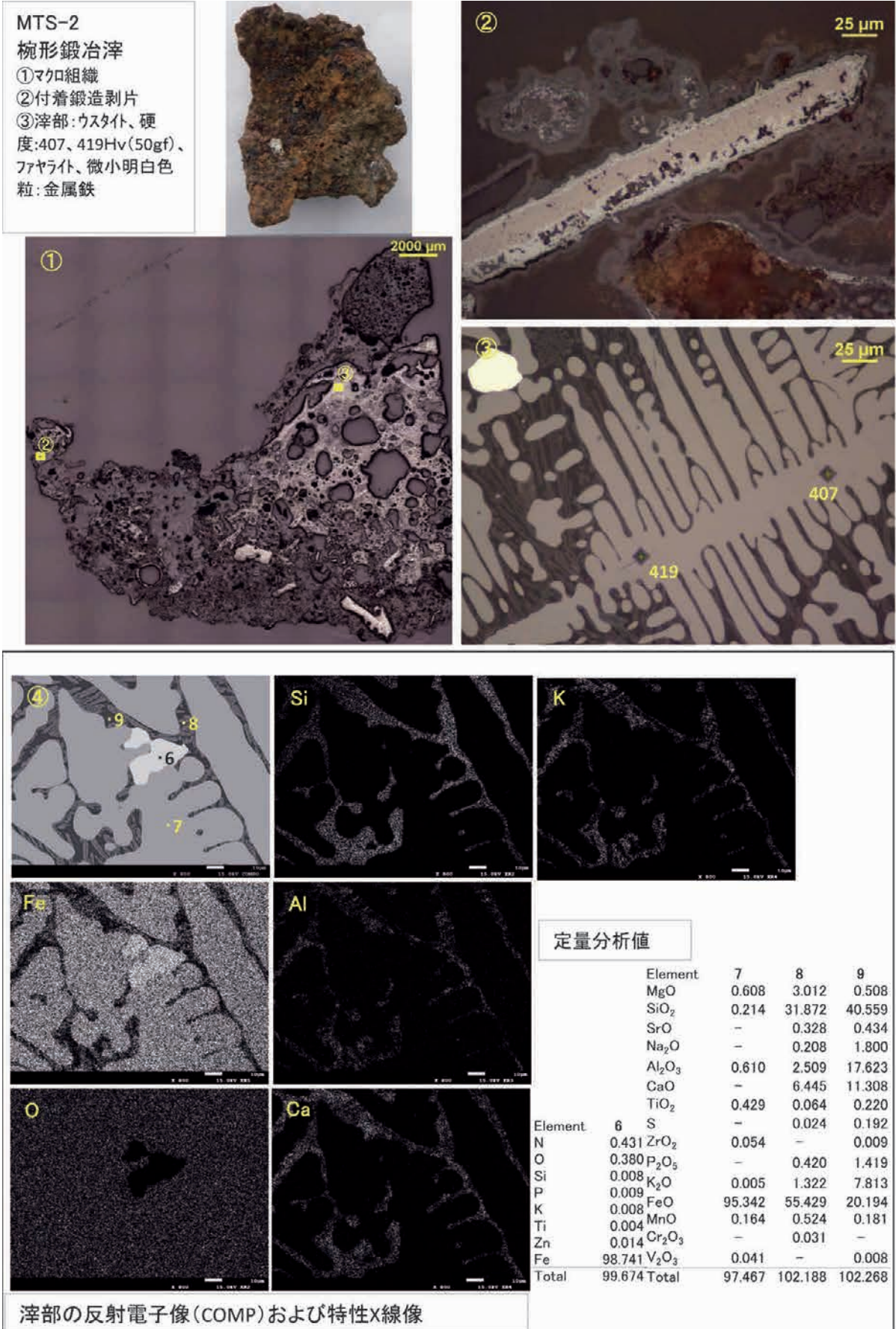
No. 349付着部の断面





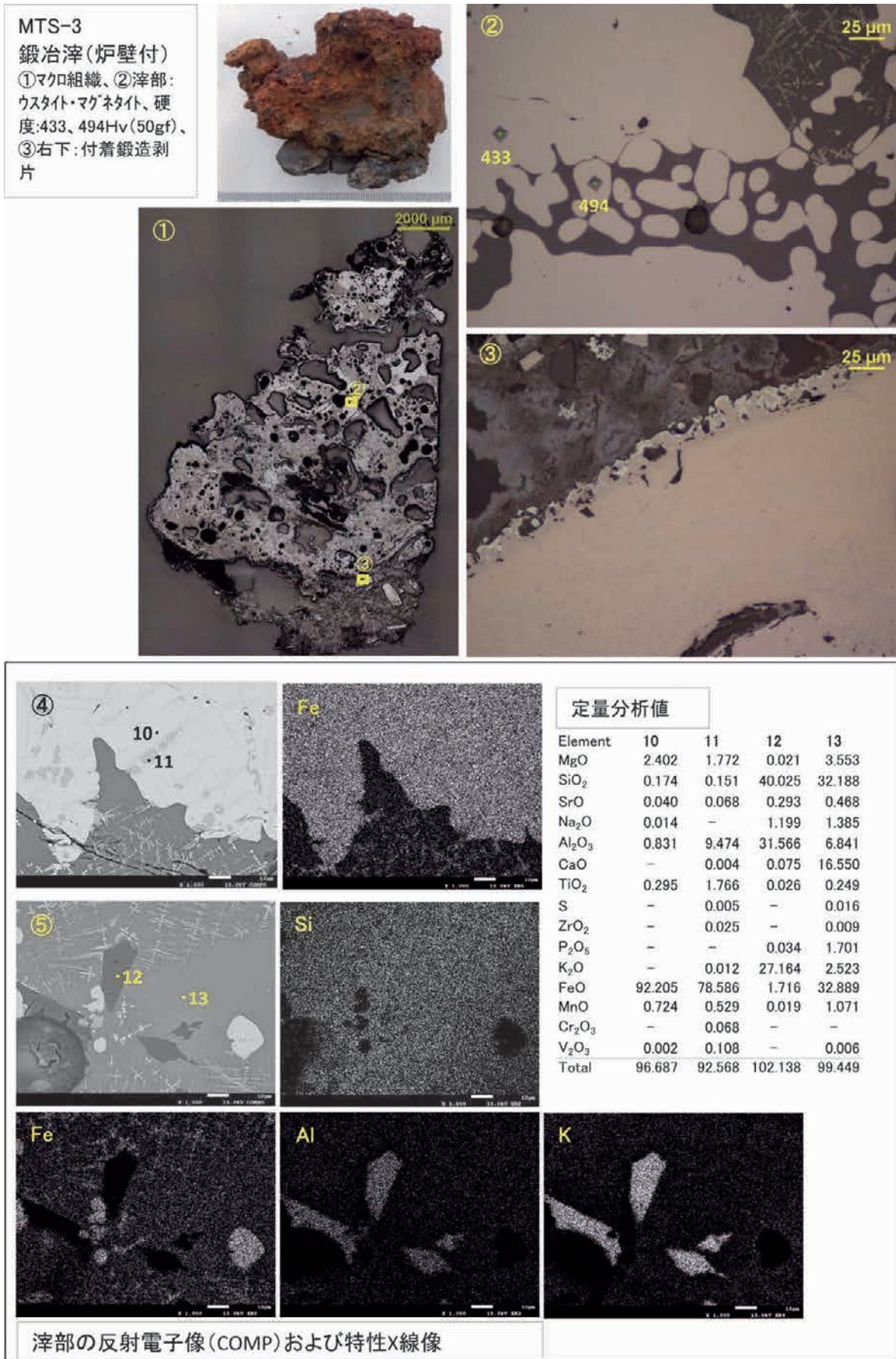
椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果





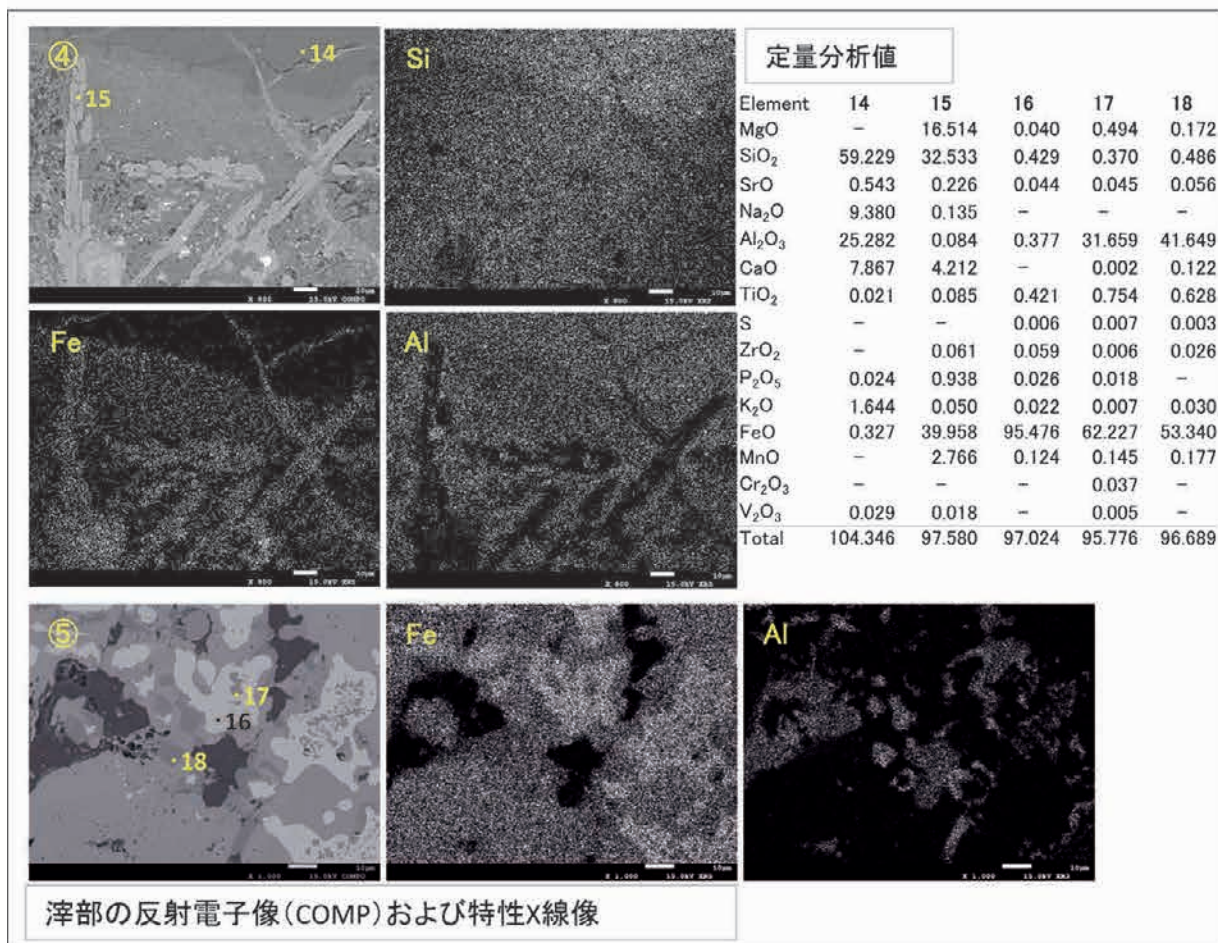
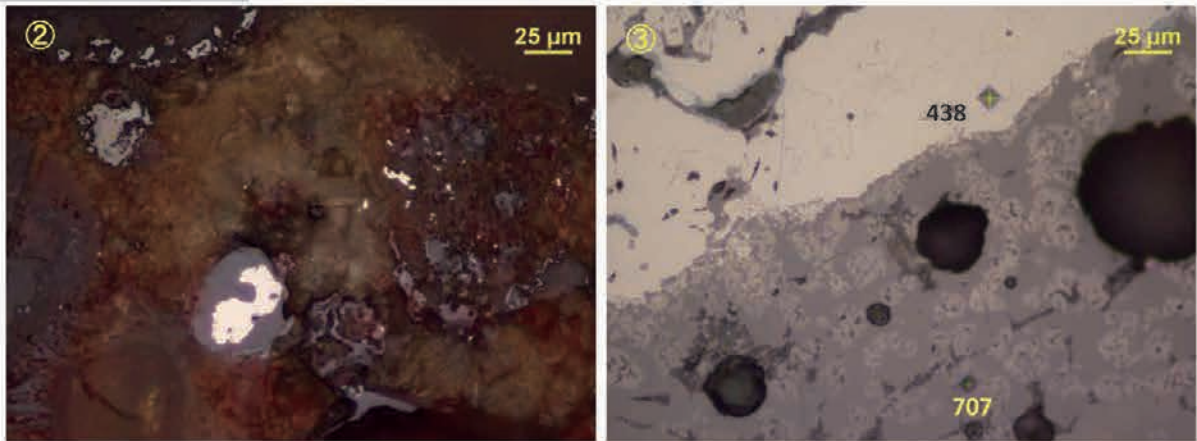
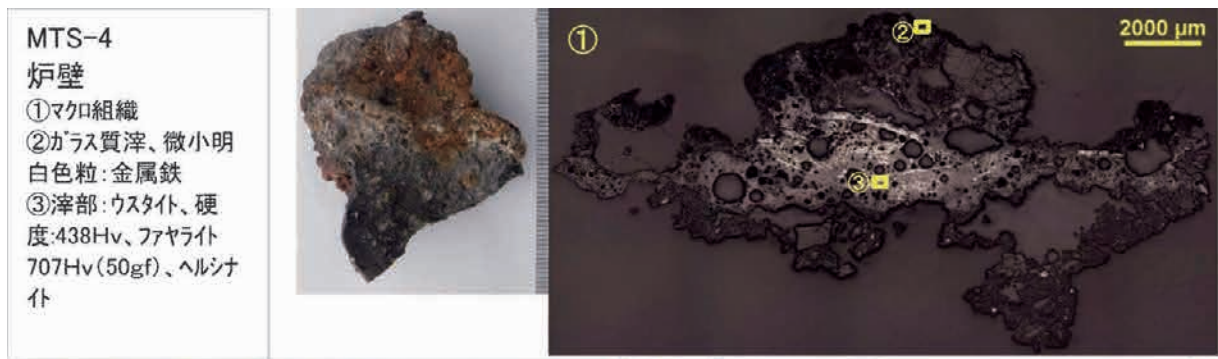
椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果



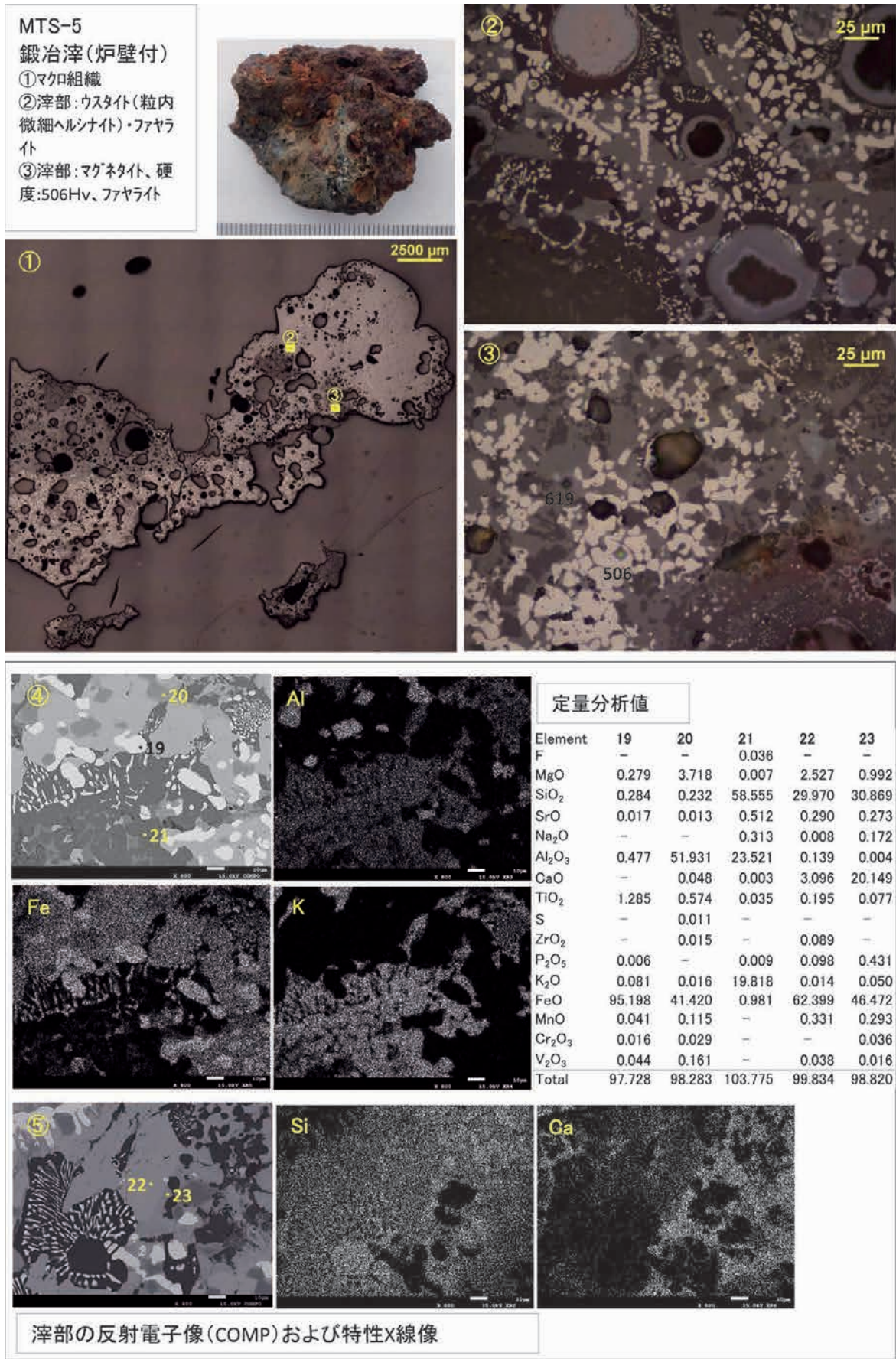


鍛冶滓(炉壁付)の顕微鏡組織・EPMA調査結果



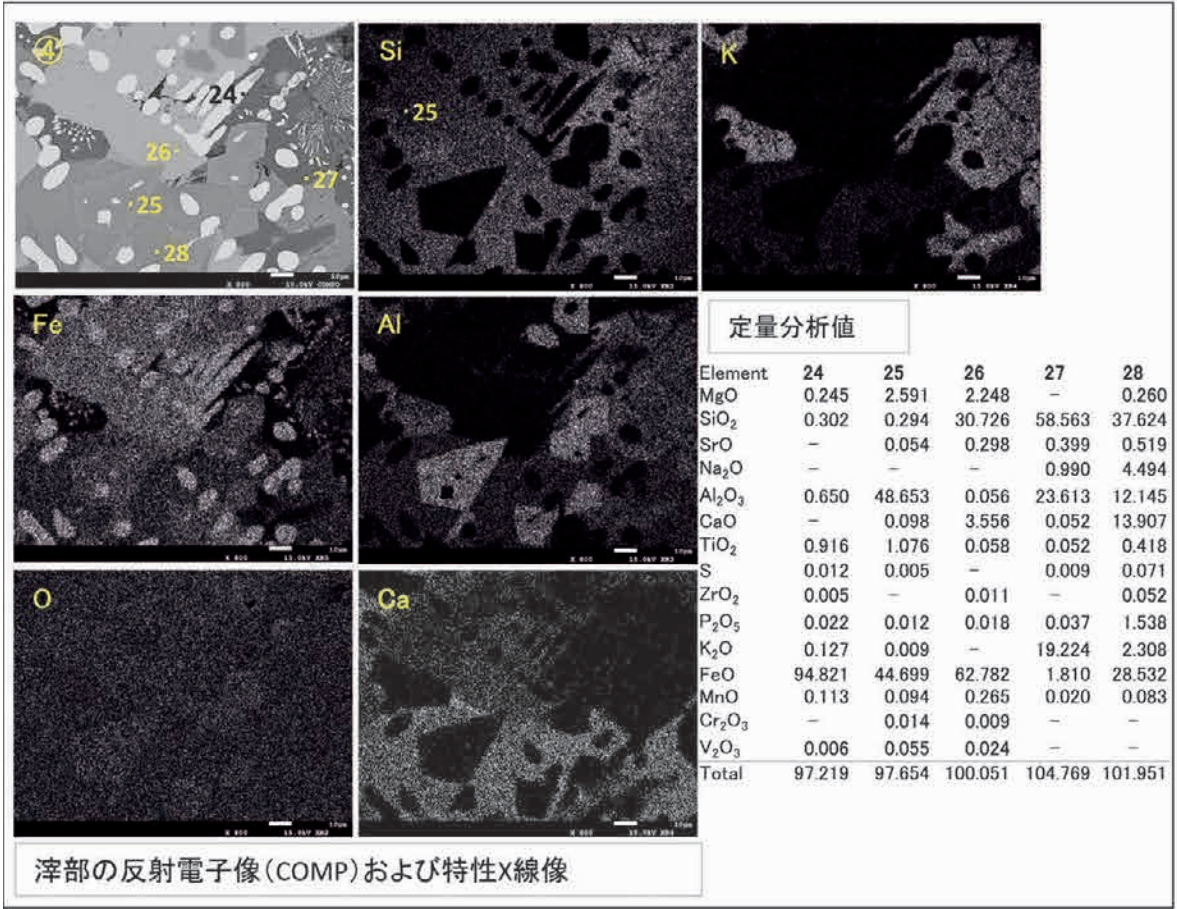
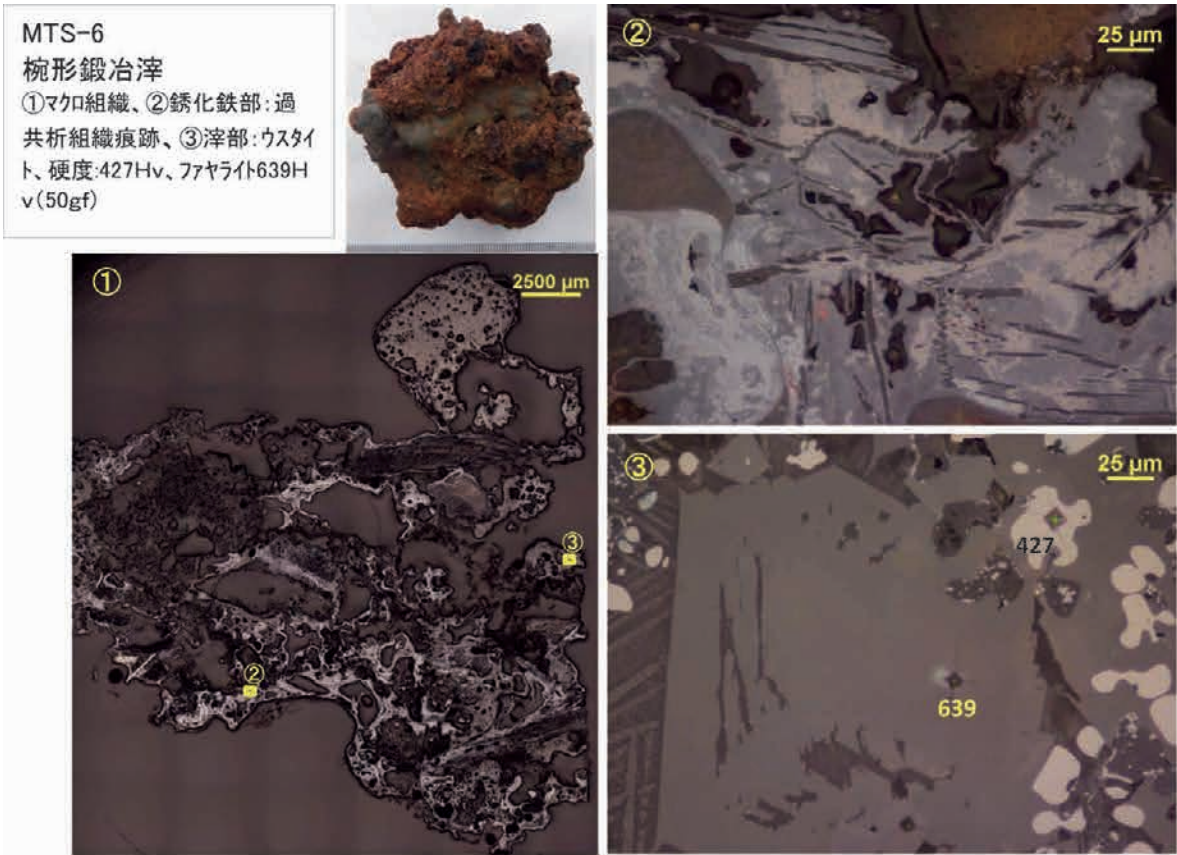






鍛冶滓(炉壁付)の顕微鏡組織・EPMA調査結果





椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果





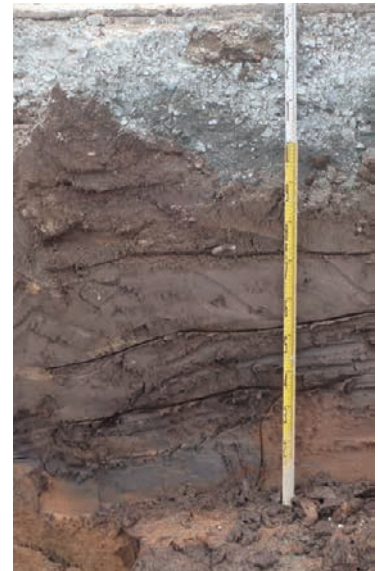
1区土層 (南東から)



2区立会風景 (北西から)



3区焼土層 (北西から)



4区土層 (北東から)



5区土層 (北西から)



6区遺構検出状況 (北から)





7区立会風景（北西から）



8区土層（南西から）



33



172



34



173



127



50



143



132



58



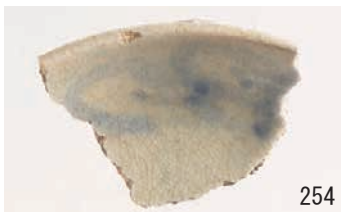
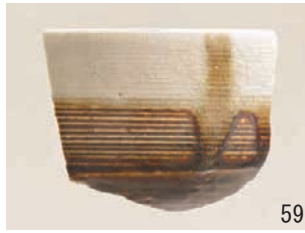
57



35



158









37



194



149



197



162



78



79



198



147



201



6



185



71



6









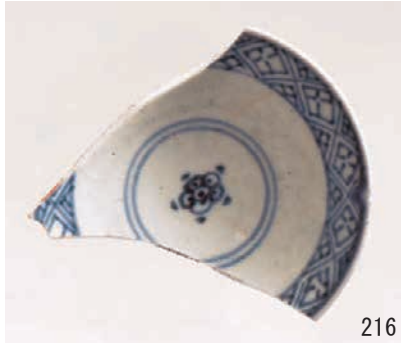
216



253



217



216



253



217



2



108



96



102



103



40



99



8



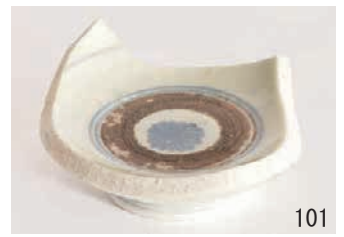
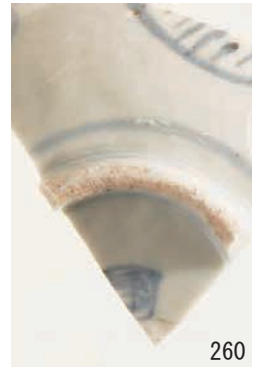
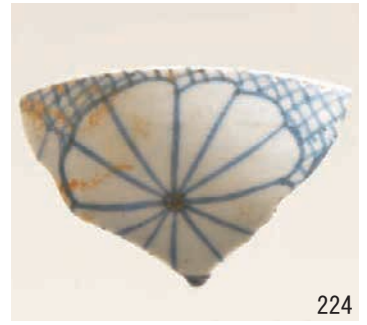
102

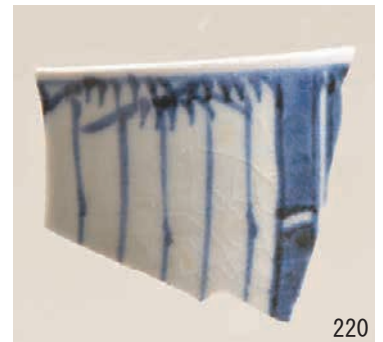


103



104









43



43



118



44



119



152



120



121



227



255



9



225



261



31



42

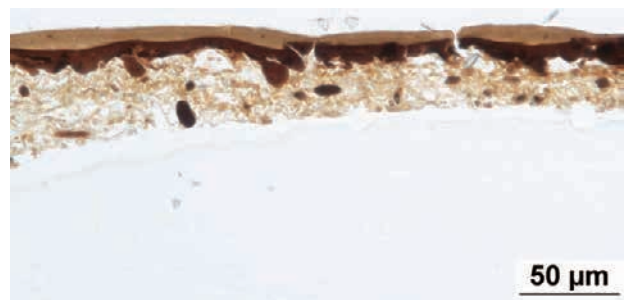


230



231





瓦・瓦質製品・石製品・木製品

塗膜断面 (168)

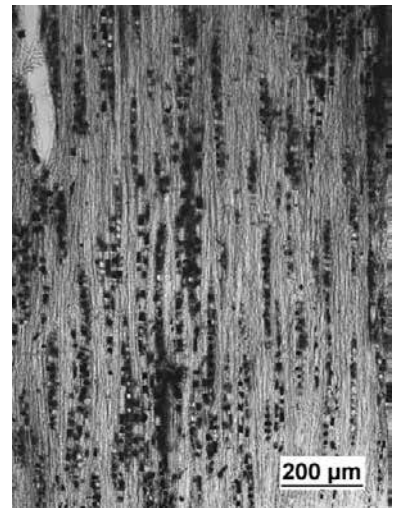




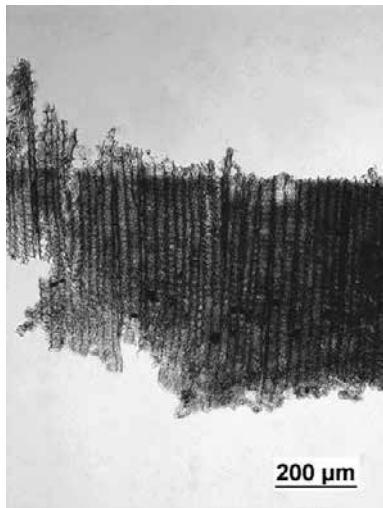
No. -168 木口  
ブナ科クリ属クリ



柁目



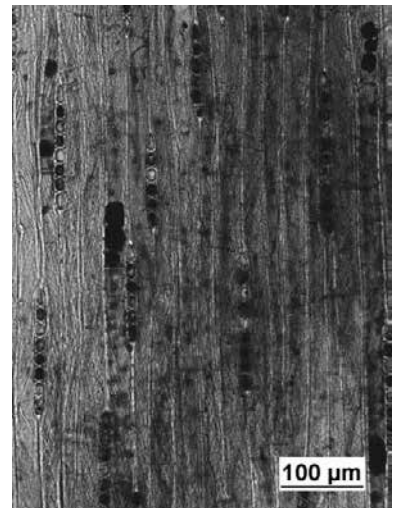
板目



No. -125 木口  
スギ科スギ属スギ



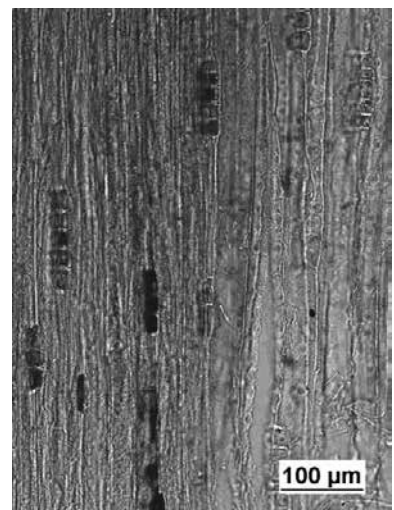
柁目



板目



柁目



板目

No. -126 スギ科スギ属スギ  
木製品顕微鏡写真





1区調査風景（北から）



1区（北東から）



SD822・829検出状況（北西から）



1区層序（北西から）



SZ828断面（南東から）



63



56



404



11



241



9



14



580



405



110



80



103



17



406



482



167



121



145



434



501



258



502















参考



498



301



85



85



416



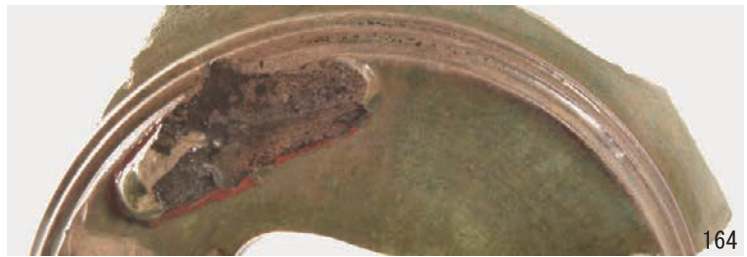
141



430



525



164



262



113



312



311



183



185



526



528



527



186



442



314



188



188



187



313



149



507



133



132







326



159



326



256



190



266



325



191



489



189



330



142



441



182



328



296



488



324



180

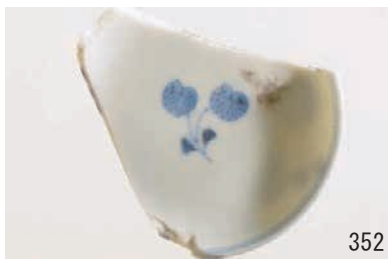


181













335



91



280



335



277



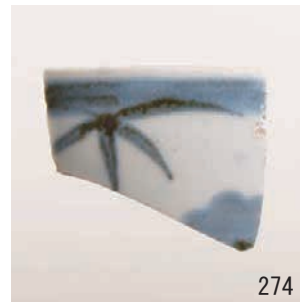
202



451



339



274



469



334



200



203



334



343



199

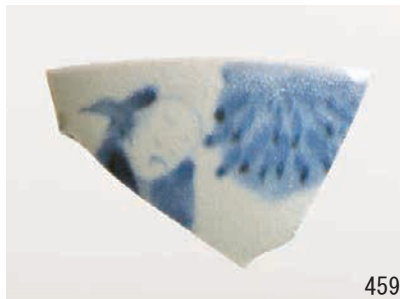


195



88

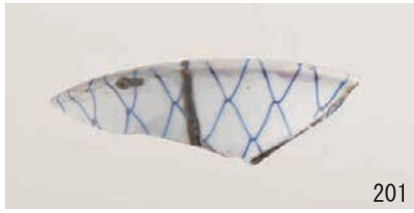












201



201



48



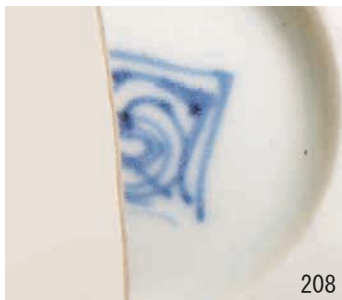
208



213



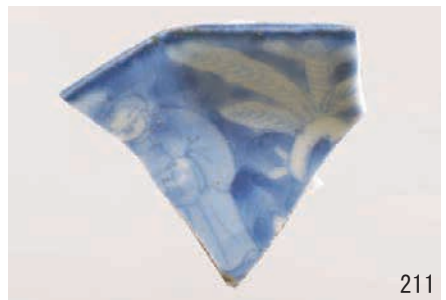
213



208



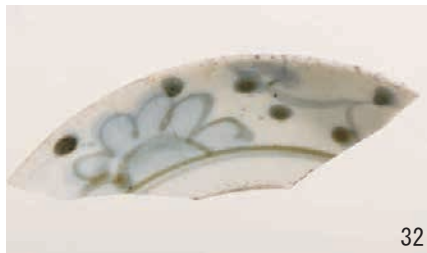
355



211



349



32



356



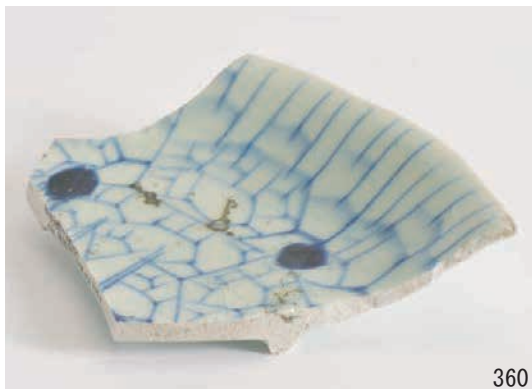
210



346



214



360

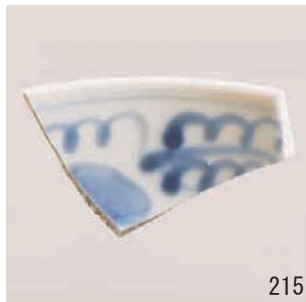
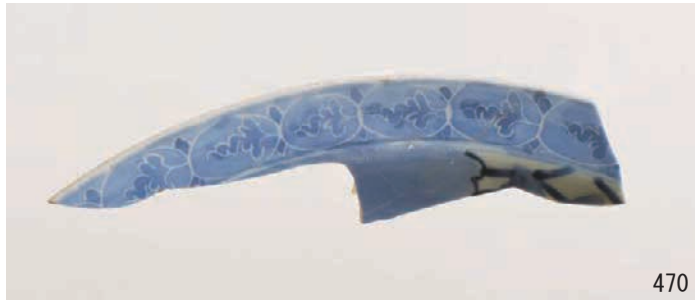


467



468









92



573



221



572



574



446



571



75



569



219



407



79





286



286



370



288



367



289



369



368





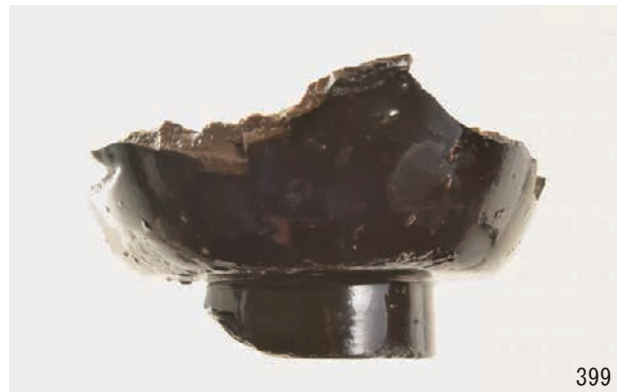
36



39



395



399



400



398



285



608

609

611

610



396



222



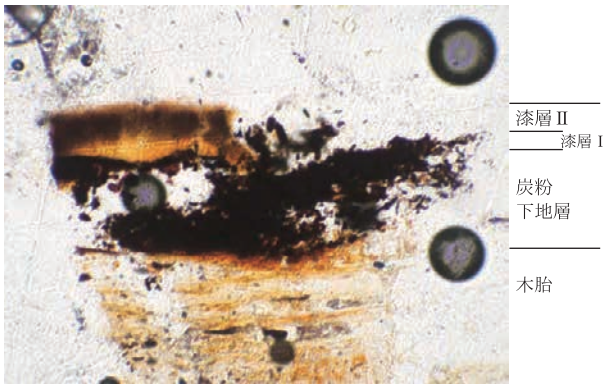
374



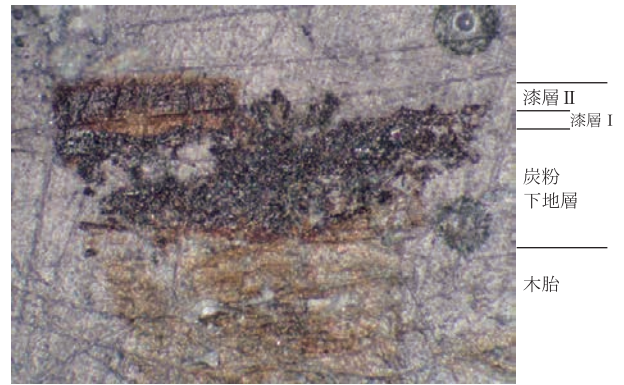




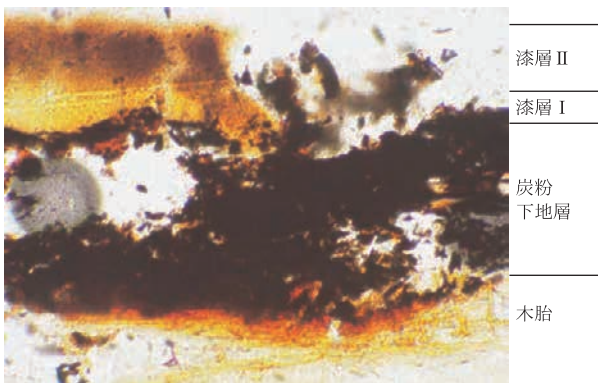




1 No.39漆碗 外側黒色 50 μ m



2 No.39漆碗 外側黒色 50 μ m



3 No.39漆碗 外側黒色 50 μ m



4 No.39漆碗 内側赤色 50 μ m



5 No.39漆碗 内側赤色 50 μ m



6 No.39漆碗 内側赤色 50 μ m



7 No.41底板 赤色 50 μ m

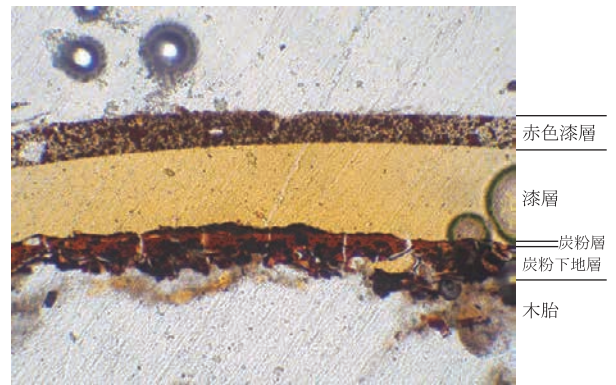


8 No.41底板 赤色 50 μ m

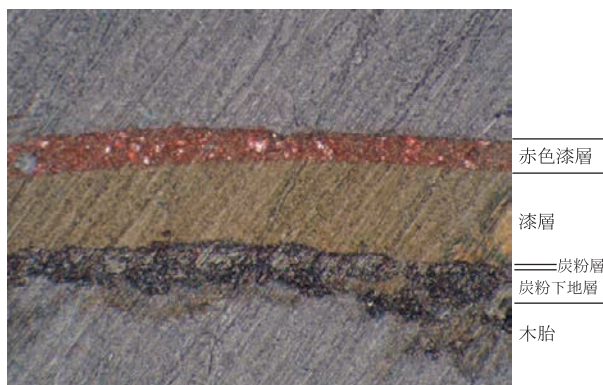




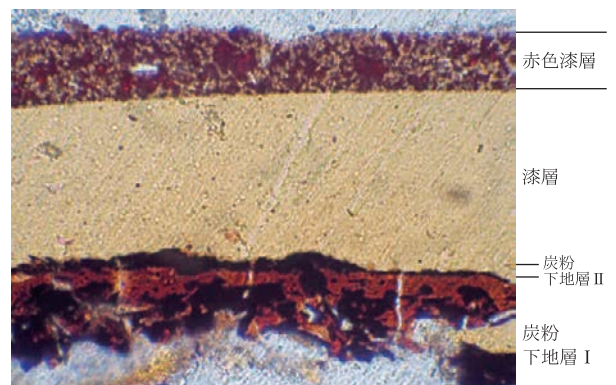
9 No.41底板 赤色 50 μm



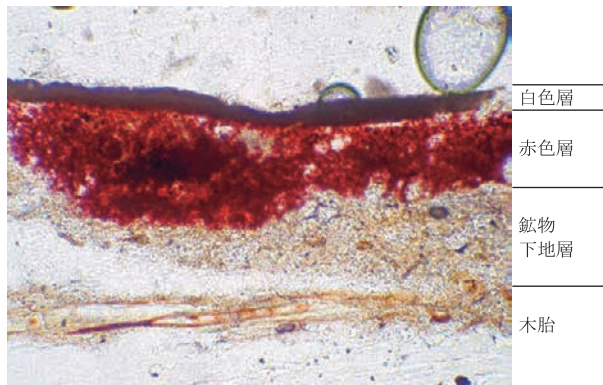
10 No.99漆碗 模様部 50 μm



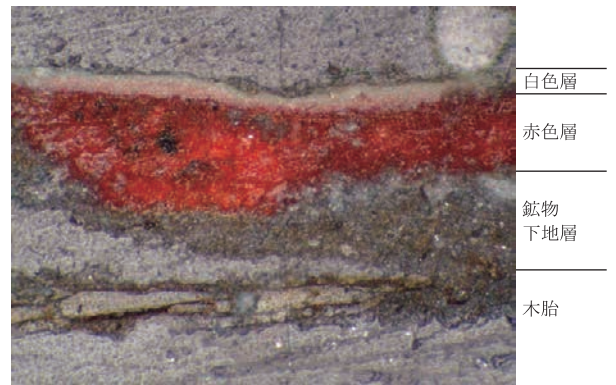
11 No.99漆碗 模様部 50 μm



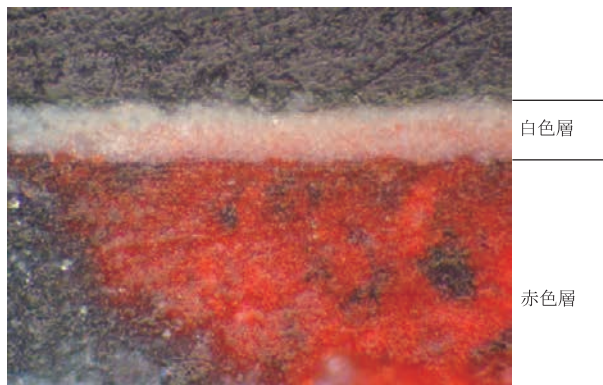
12 No.99漆碗 模様部 50 μm



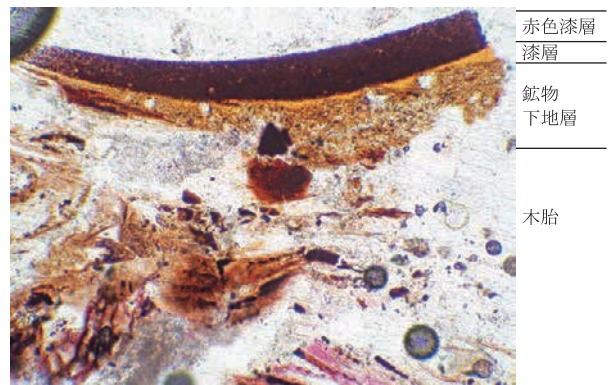
13 No.369下駄 彩色部 50 μm



14 No.369下駄 彩色部 50 μm



15 No.369下駄 彩色部 50 μm



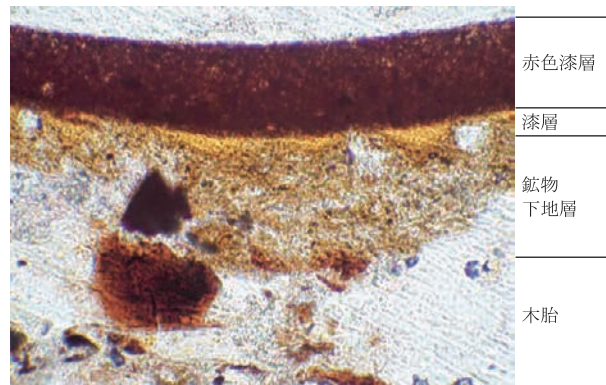
16 No.395漆大皿 赤色 50 μm





赤色漆層  
漆層  
鉄物  
下地層  
木胎

17 No.395漆大皿 赤色 50 μm



赤色漆層  
漆層  
鉄物  
下地層  
木胎

18 No.395漆大皿 赤色 50 μm



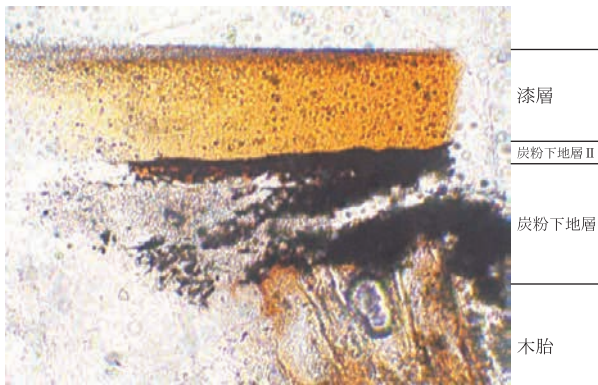
漆層  
炭粉下地層 II  
炭粉下地層 I  
木胎

19 No.399漆椀 黒色 50 μm



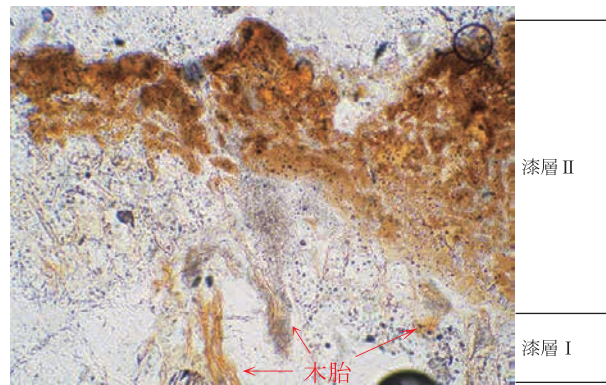
漆層  
炭粉下地層 II  
炭粉下地層 I  
木胎

20 No.399漆椀 黒色 50 μm



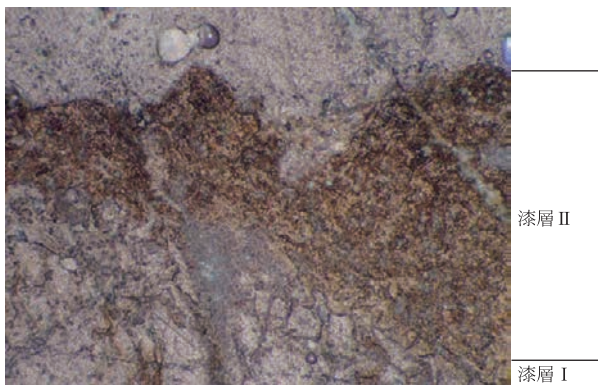
漆層  
炭粉下地層 II  
炭粉下地層 I  
木胎

21 No.399漆椀 黒色 50 μm



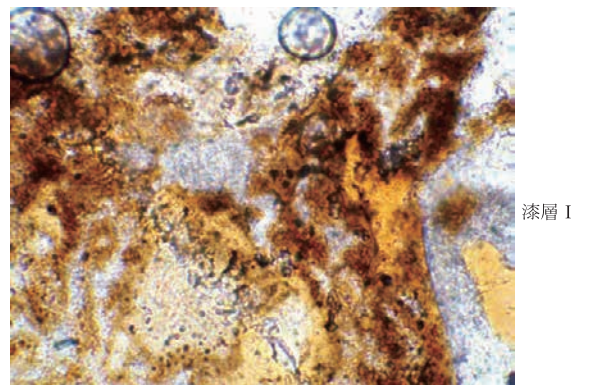
漆層 II  
漆層 I  
木胎

22 No.397底板 塗膜 50 μm



漆層 II  
漆層 I

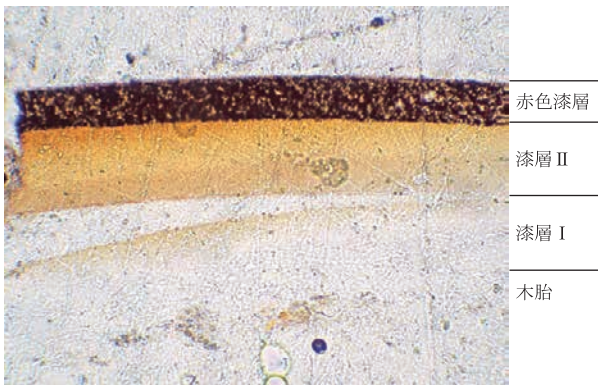
23 No.397底板 塗膜 50 μm



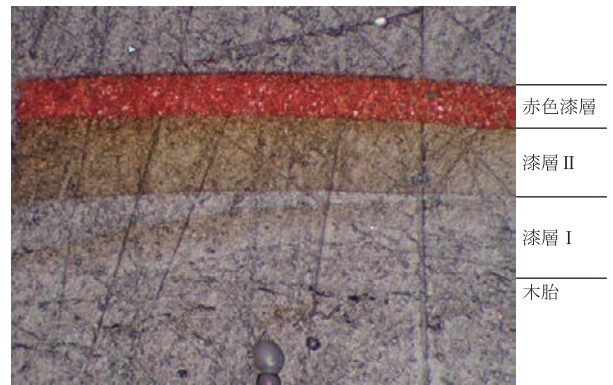
漆層 I

24 No.397底板 塗膜 50 μm

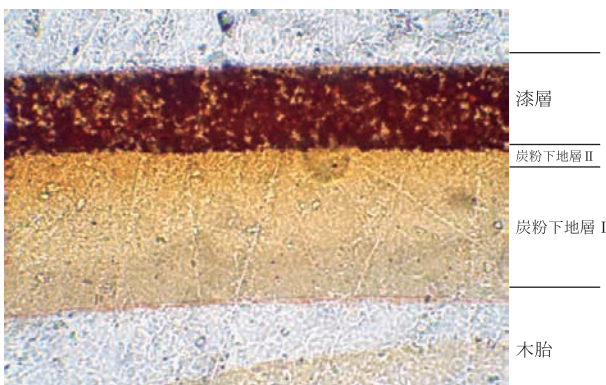




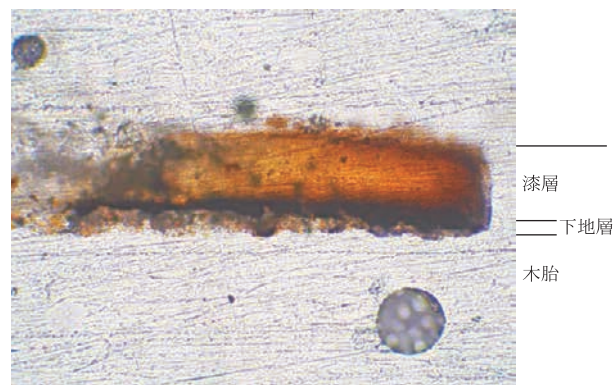
25 No.365木札 塗膜 50 μm



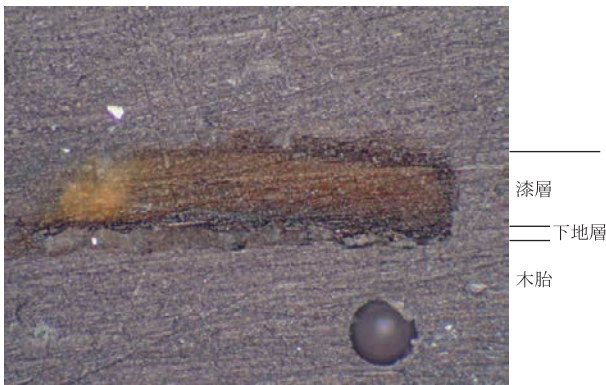
26 No.365木札 塗膜 50 μm



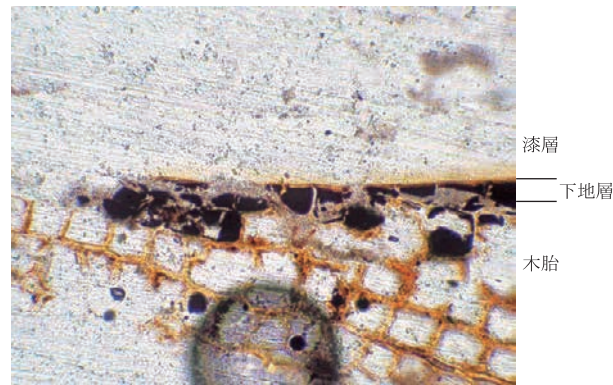
27 No.365木札 塗膜 50 μm



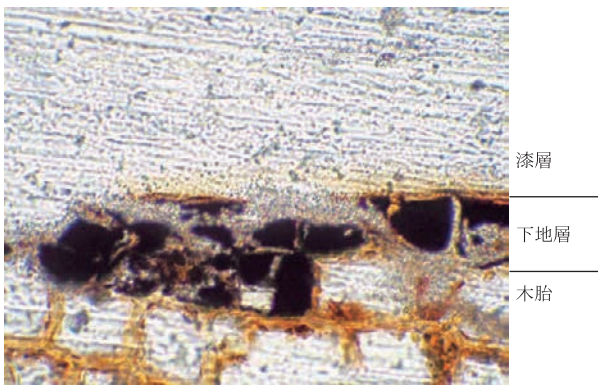
28 No.613底板 塗膜 50 μm



29 No.613底板 塗膜 50 μm

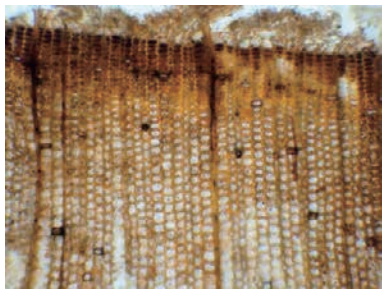


30 No.613底板 塗膜 50 μm

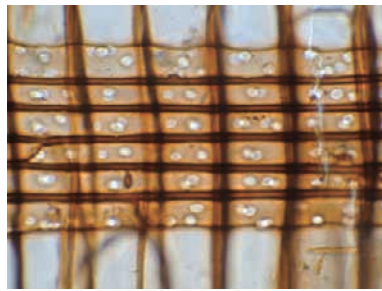


31 No.613底板 塗膜 50 μm





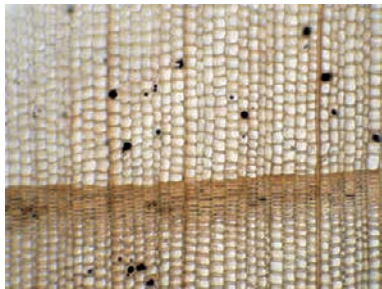
横断面 0.1mm  
1. スギ No.288 下駄 R007-01



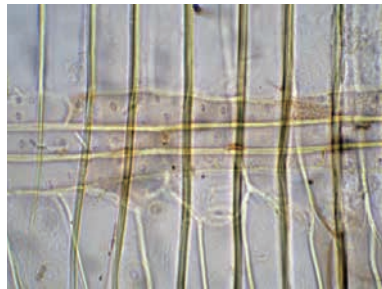
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



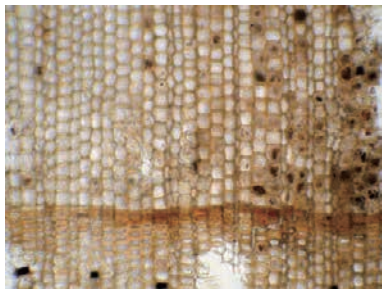
横断面 0.1mm  
2. スギ No.372 底板 R029-01



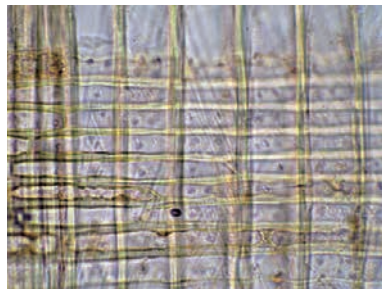
放射断面 0.1mm



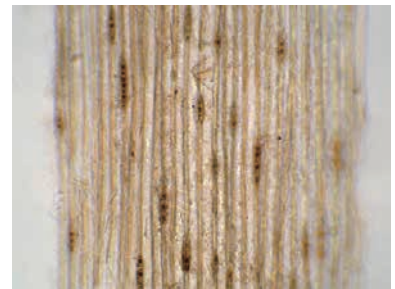
接線断面 0.1mm



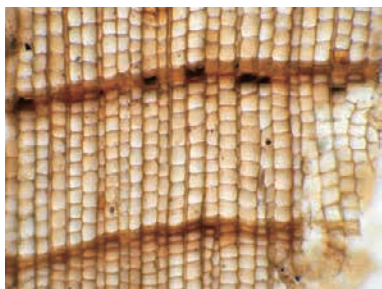
横断面 0.1mm  
3. ヒノキ No.223 杓子 R018-01



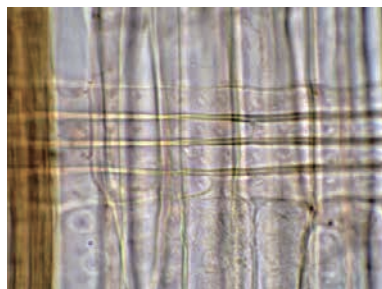
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



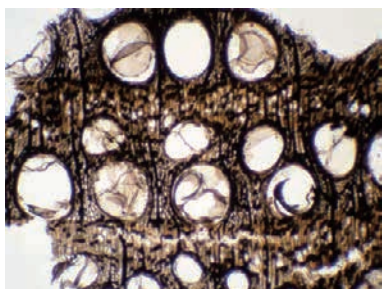
横断面 0.1mm  
4. サワラ No.370-1 下駄 R015-01



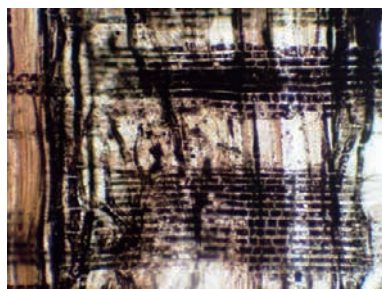
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm  
5. クリ No.395 漆大皿 R027-01

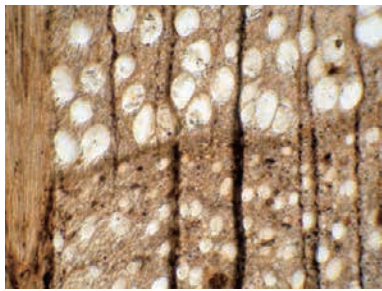


放射断面 0.1mm

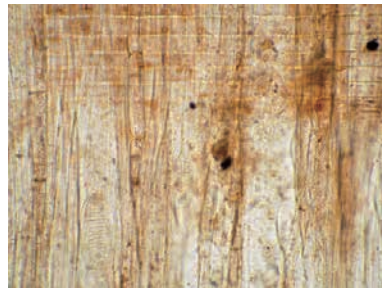


接線断面 0.1mm

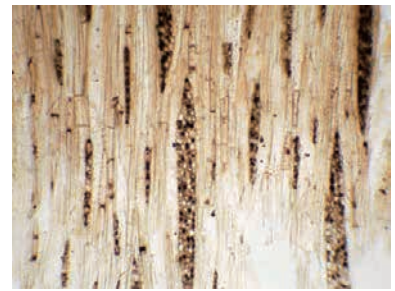




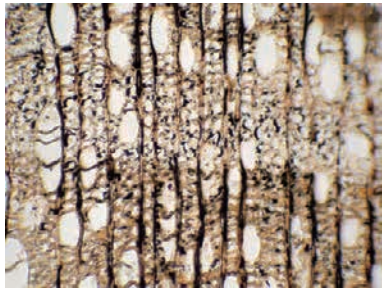
横断面 0.1mm  
6. ブナ No.38 杓子 R001-03



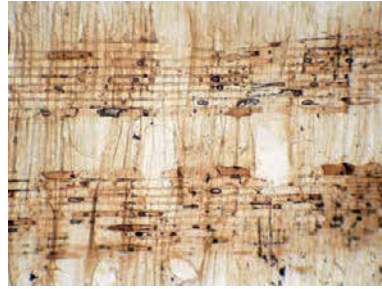
放射断面 0.1mm



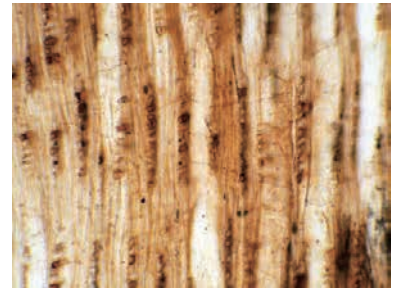
接線断面 0.1mm



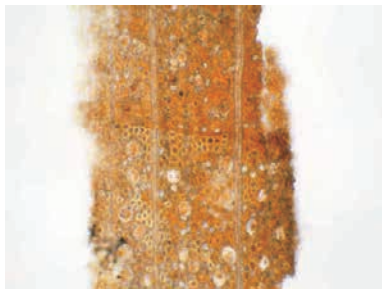
横断面 0.1mm  
7. トチノキ No.39 漆碗 R028-06



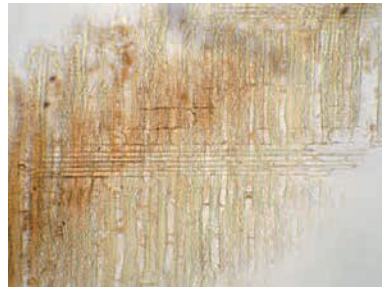
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm  
8. ヤブツバキ No.400 櫛 R028-04



放射断面 0.1mm



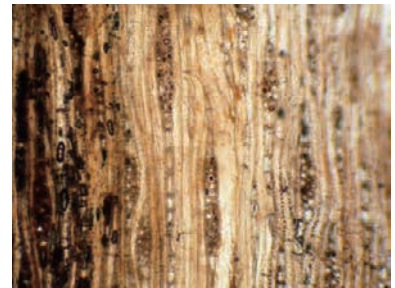
接線断面 0.1mm



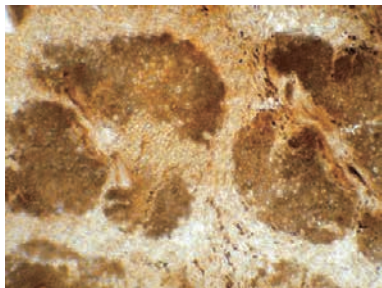
横断面 0.1mm  
9. エゴノキ属 No.286 傘部材 R009-04



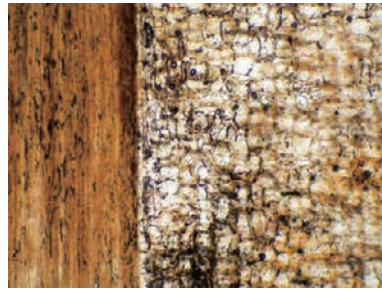
放射断面 0.1mm



接線断面 0.1mm



横断面 0.1mm  
10. タケ亜科 No.607 木札 R010-05



放射断面 0.1mm

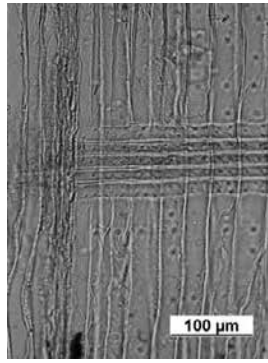


接線断面 0.1mm

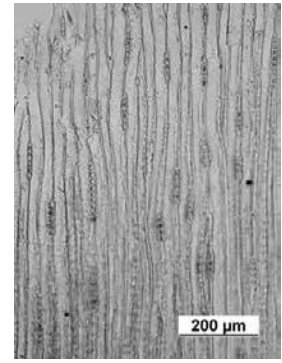




小口  
No. -40 ヒノキ科ヒノキ属



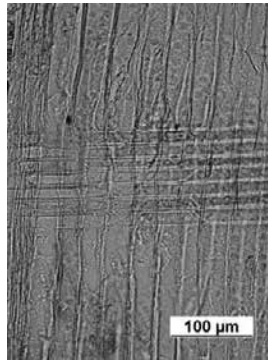
柀目



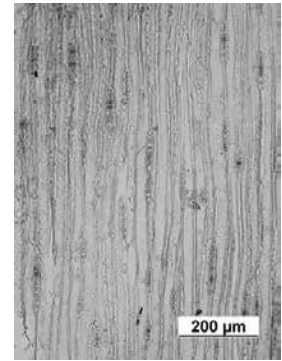
板目



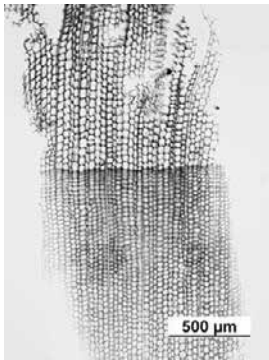
小口  
No. -43 ヒノキ科ヒノキ属



柀目



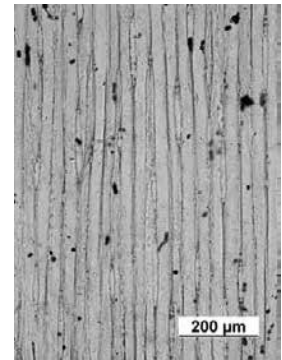
板目



小口  
No. -77 マツ科マツ属[二葉松類]



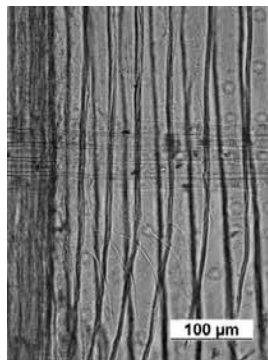
柀目



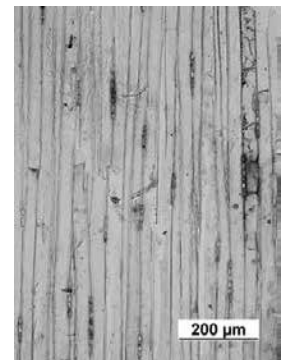
板目



小口  
No. -222 スギ科スギ属スギ

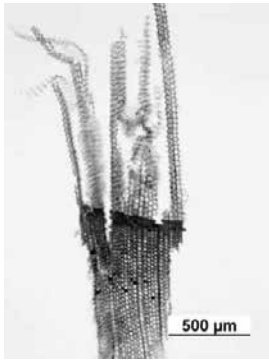


柀目

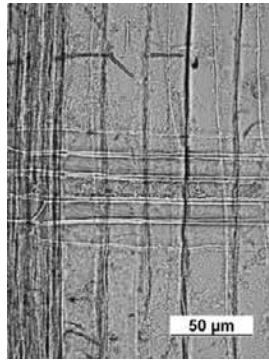


板目

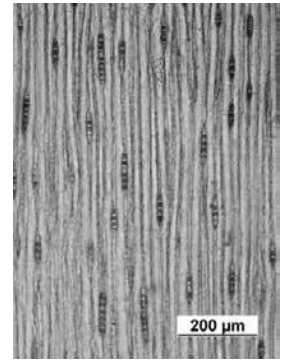




小口  
No. -224 ヒノキ科ヒノキ属



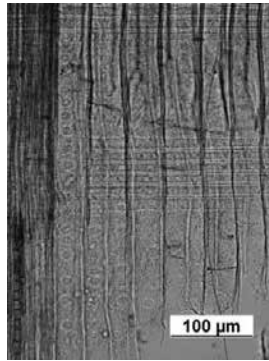
柀目



板目



小口  
No. -225 ヒノキ科ヒノキ属



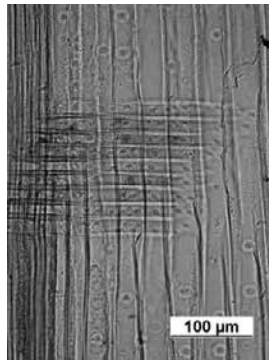
柀目



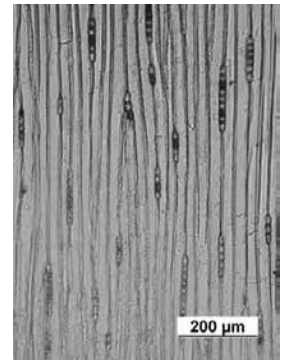
板目



小口  
No. -229 スギ科スギ属スギ



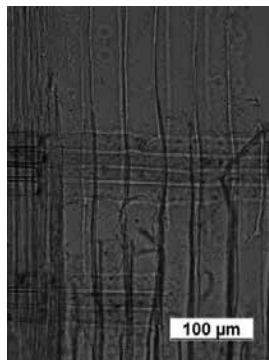
柀目



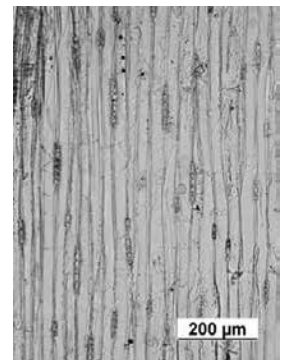
板目



小口  
No. -230 ヒノキ科アスナロ属



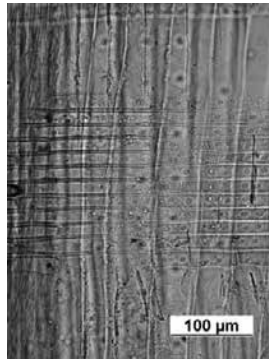
柀目



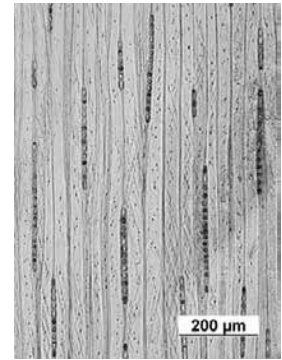
板目



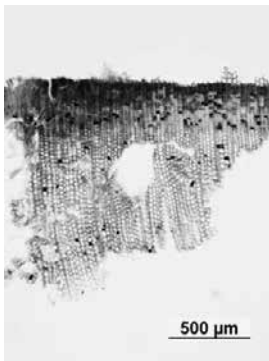
小口  
No. -231 スギ科スギ属スギ



柁目



板目



小口  
No. -232 ヒノキ科ヒノキ属



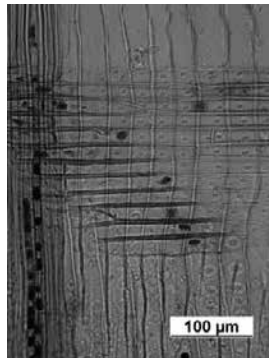
柁目



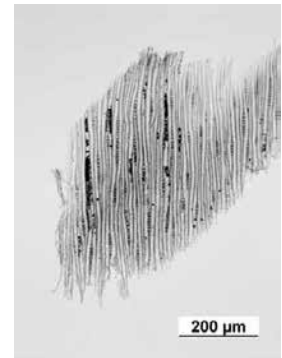
板目



小口  
No. -233 スギ科スギ属スギ



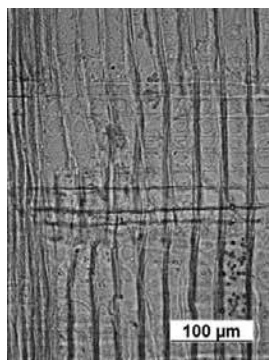
柁目



板目



小口  
No. -234 マツ科マツ属[二葉松類]

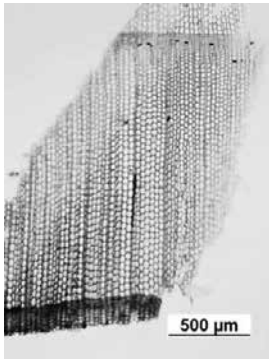


柁目

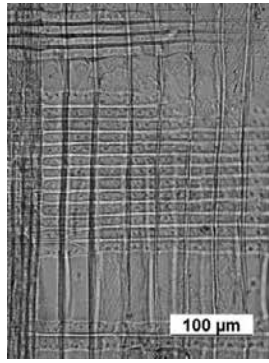


板目

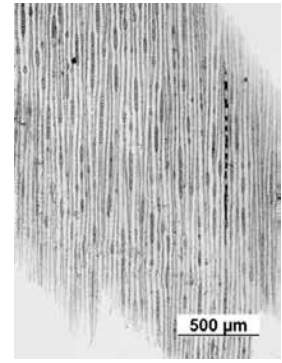




小口  
No. -235 ヒノキ科ヒノキ属



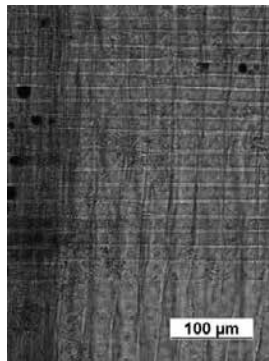
柁目



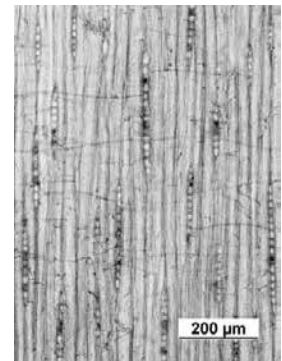
板目



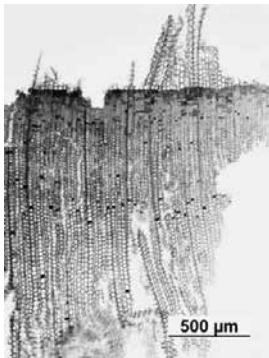
小口  
No. -236 マツ科モミ属



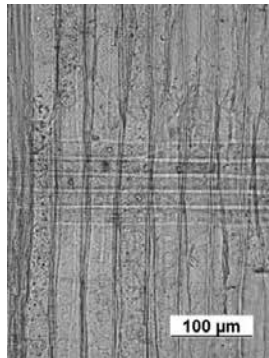
柁目



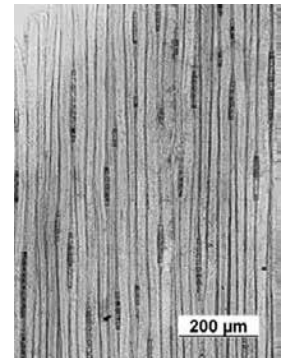
板目



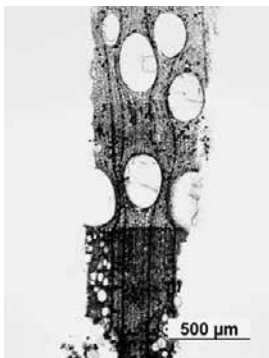
小口  
No. -371 ヒノキ科アスナロ属



柁目



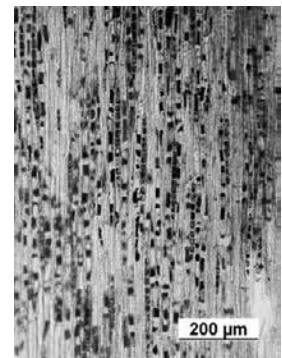
板目



小口  
No. -373 ブナ科クリ属クリ

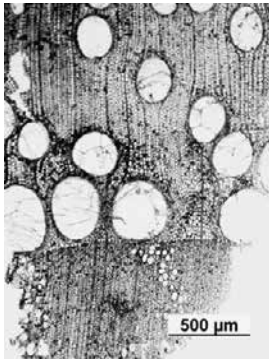


柁目



板目

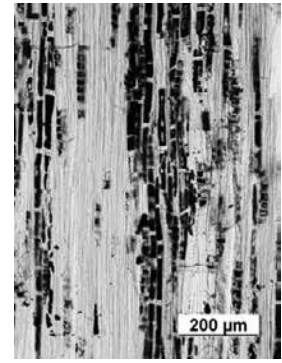




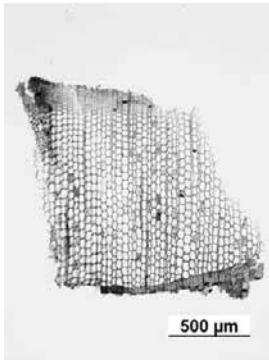
小口  
No. -374 ブナ科クリ属クリ



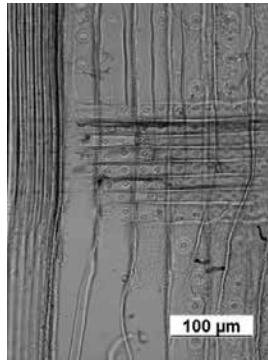
柀目



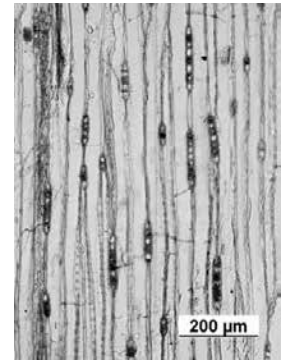
板目



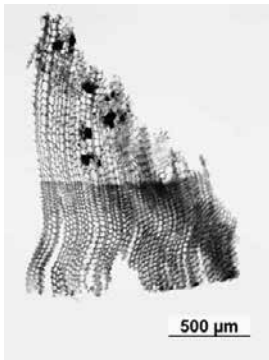
小口  
No. -390 スギ科スギ属スギ



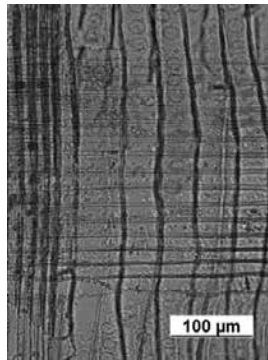
柀目



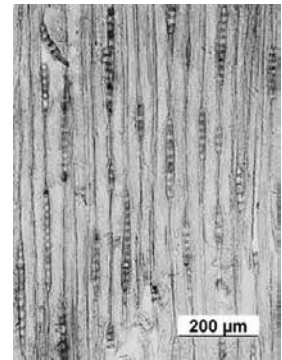
板目



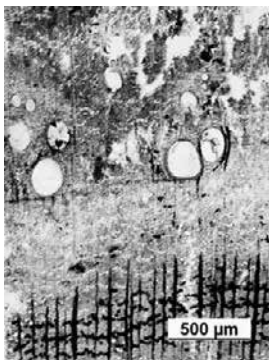
小口  
No. -396 マツ科モミ属



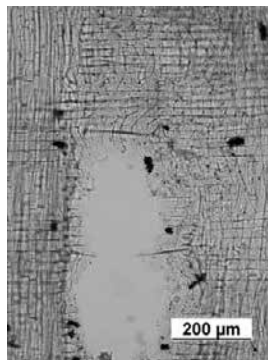
柀目



板目



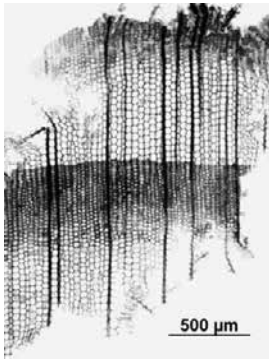
小口  
No. -471 ブナ科クリ属クリ



柀目

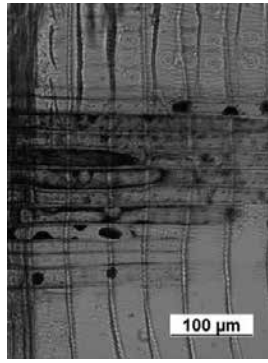


板目

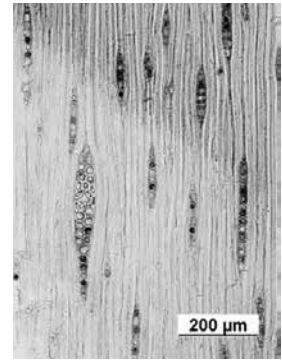


小口

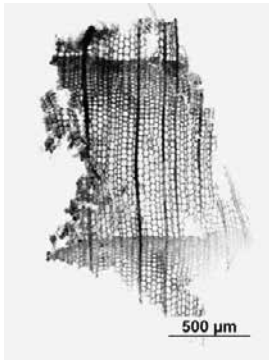
No. -472 マツ科トガサワラ属トガサワラ



柀目

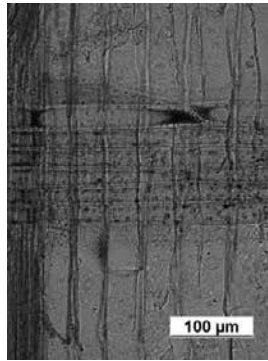


板目

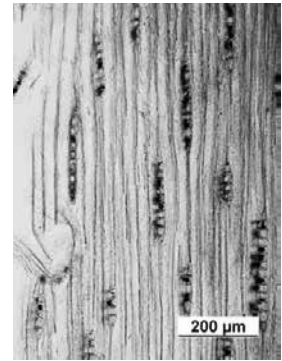


小口

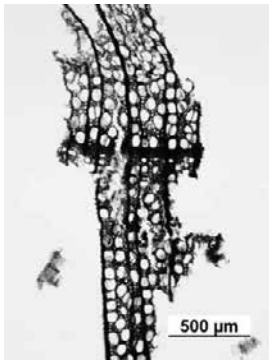
No. -473 マツ科ツガ属



柀目



板目

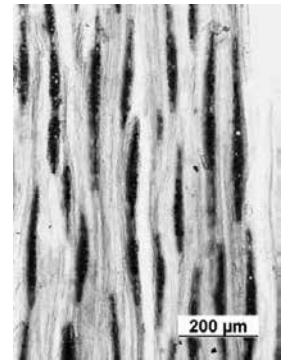


小口

No. -474 カツラ科カツラ属カツラ



柀目

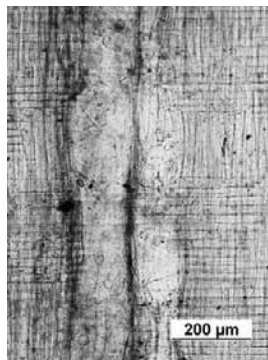


板目

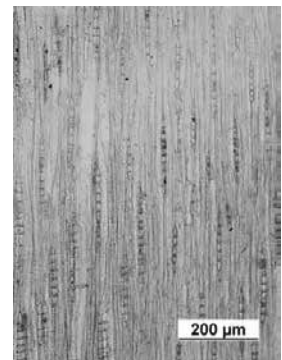


小口

No. -578 ブナ科クリ属クリ

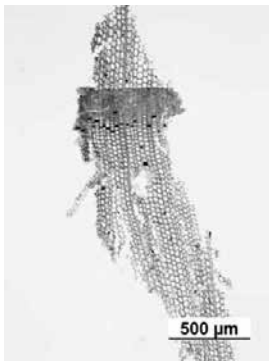


柀目

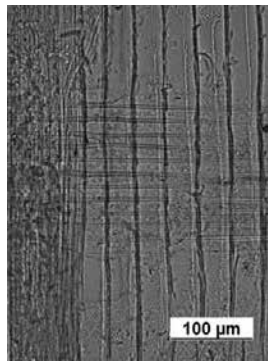


板目

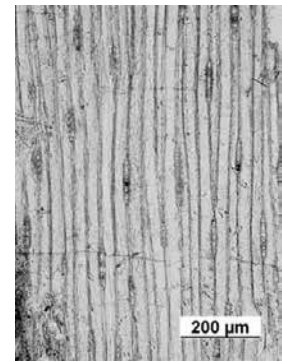




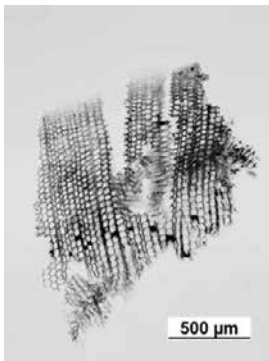
小口  
No. -608 スギ科スギ属スギ



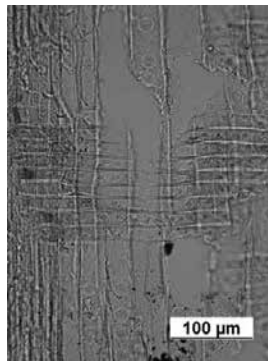
柁目



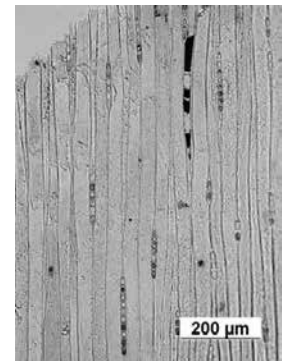
板目



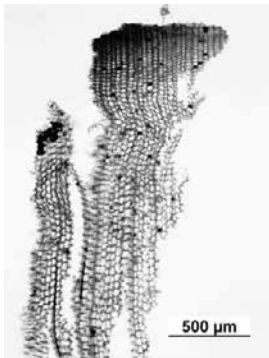
小口  
No. -609 スギ科スギ属スギ



柁目



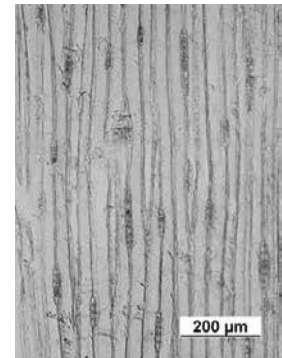
板目



小口  
No. -610 ヒノキ科アスナロ属



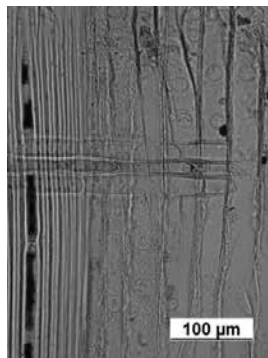
柁目



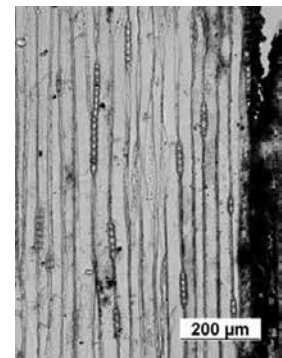
板目



小口  
No. -611 ヒノキ科アスナロ属

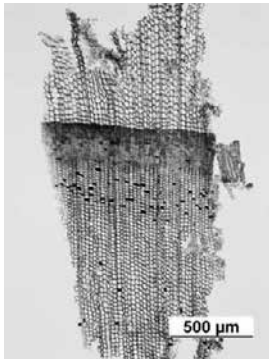


柁目

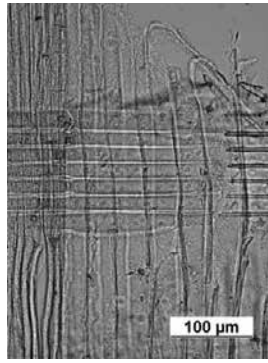


板目

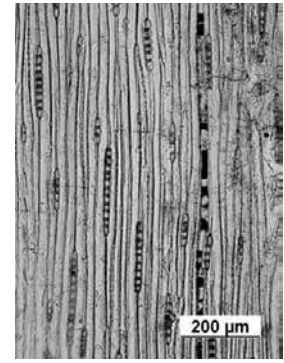




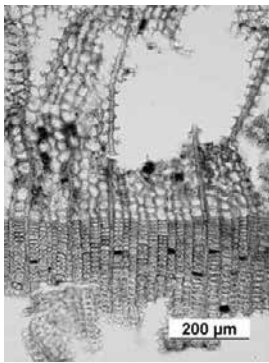
小口  
No. -616 スギ科スギ属スギ



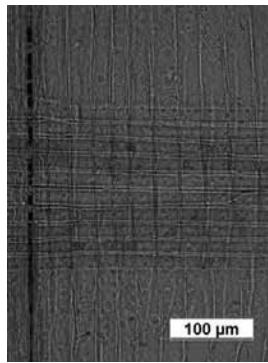
柀目



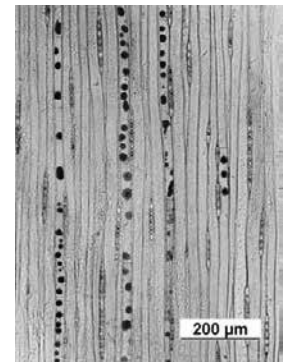
板目



小口  
No. -617 スギ科スギ属スギ



柀目



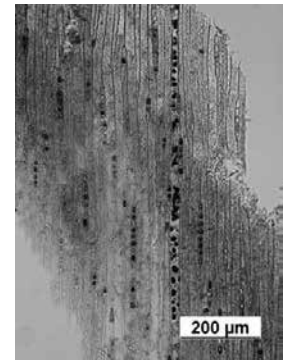
板目



小口  
No. -618 スギ科スギ属スギ



柀目



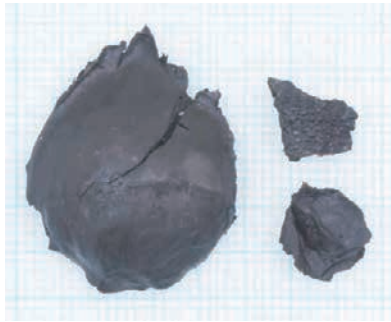
板目



1 ウリの種子



2 カヤの種子



3 トチノキの堅果



4 ウリの種子



5 マメ科の莢



6 有機質



7 イネの種子



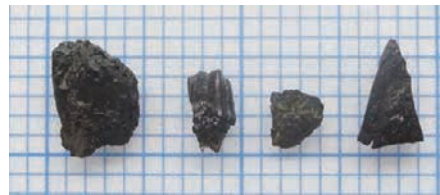
8 オオムギの瘦果



9 オオムギの瘦果



10 コムギの瘦果



11 有機質



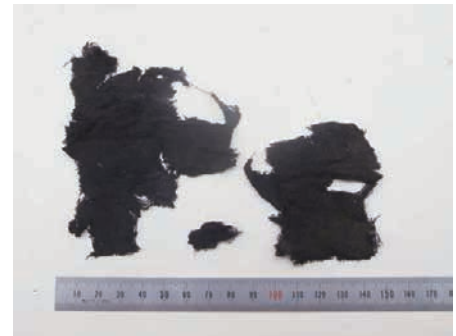
12 アンズの核



13 ウメの核



14 ウリの種子写真



1 資料全体



写真2 資料拡大  
種子・繊維製品

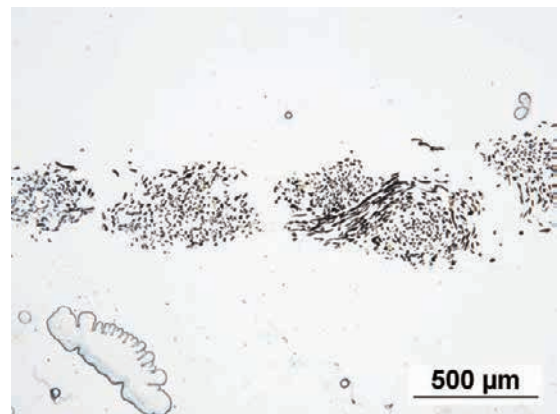


写真3 布の経糸横断面



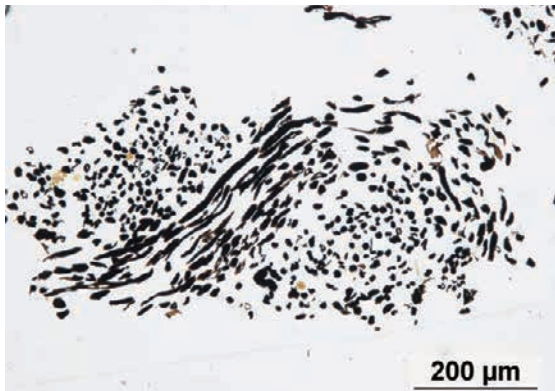


写真4 布の経糸横断面

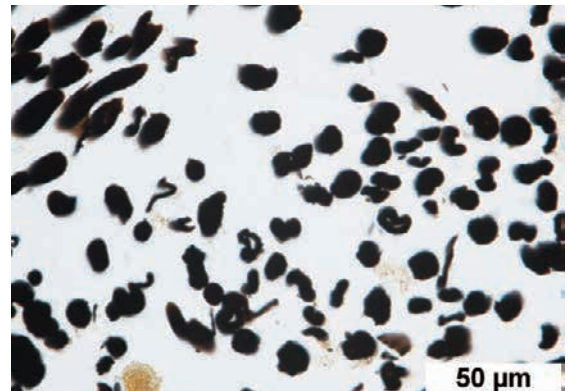


写真5 布の経糸横断面

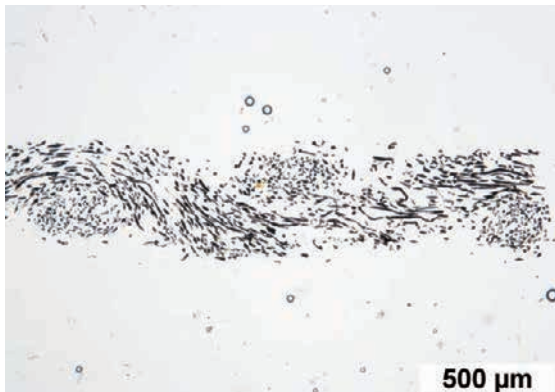


写真6 布の緯糸横断面

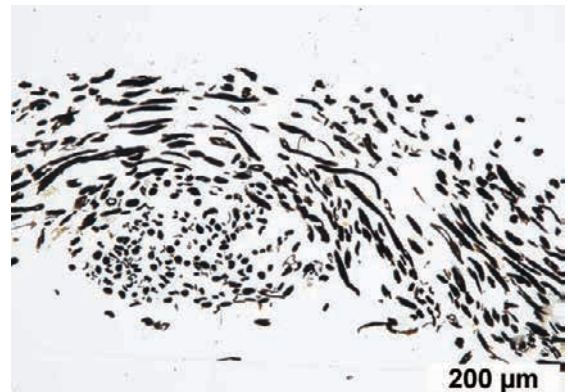


写真7 布の緯糸横断面

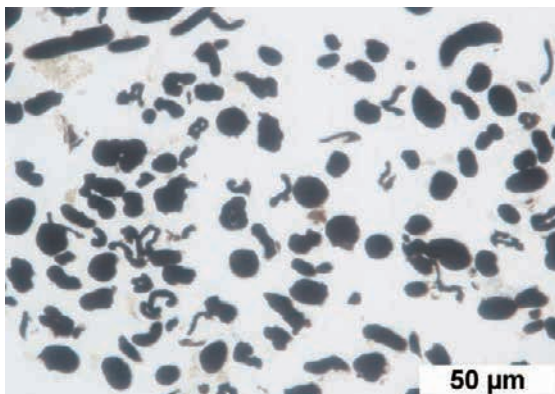


写真8 布の緯糸横断面

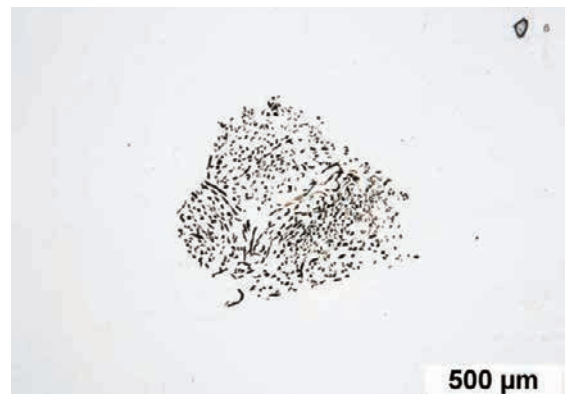


写真9 縫い糸の横断面



写真10 縫い糸の横断面

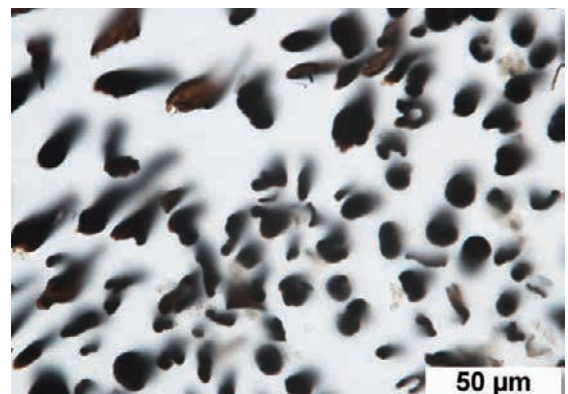


写真11 縫い糸の横断面





1-1区土層（南西から）



2区土層（東から）



2区調査風景（南東から）



SK902検出状況（北東から）



SK902断面（北東から）



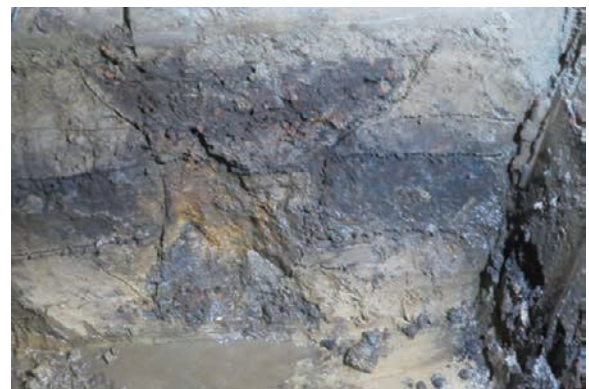
3区調査風景（北西から）



3区土層（北東から）



SE911検出状況（北西から）



SE911断面（北東から）

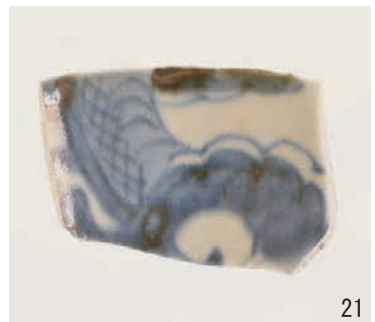
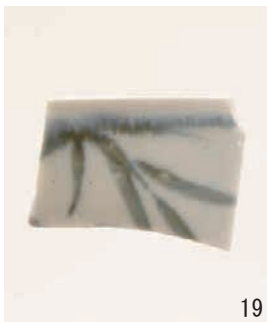
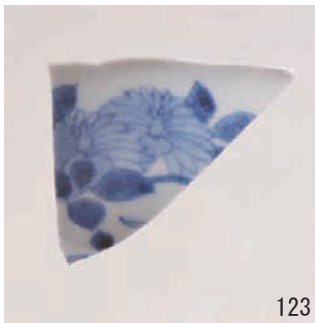


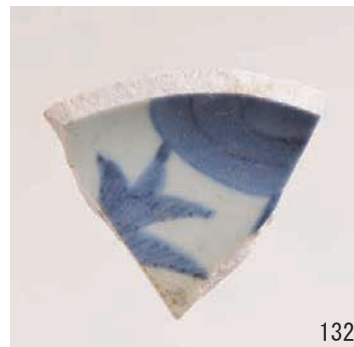
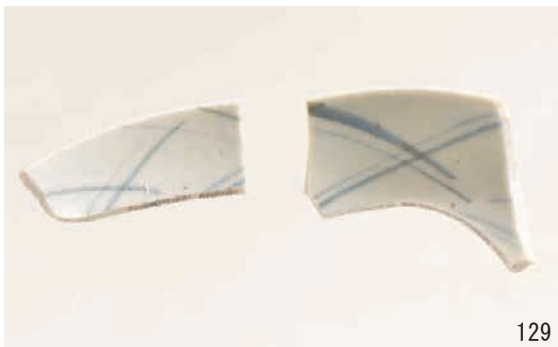
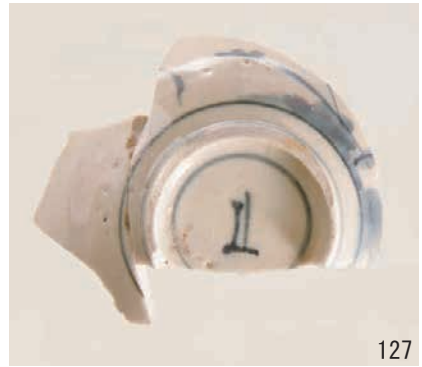


















42



76



76



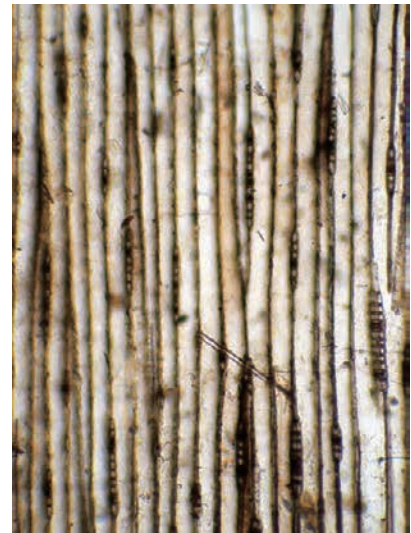
横断面  
スギ No.42 曲物 底板 9次30-1 SE909

0.1mm



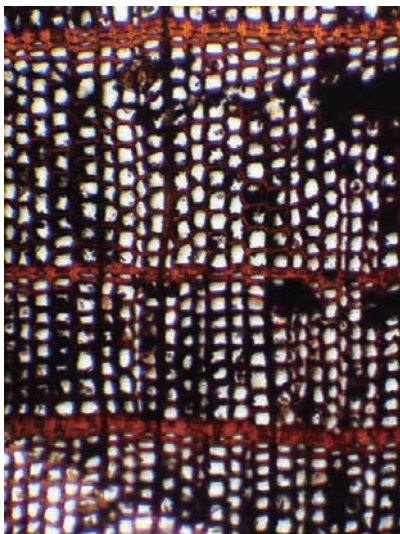
放射断面

0.1mm



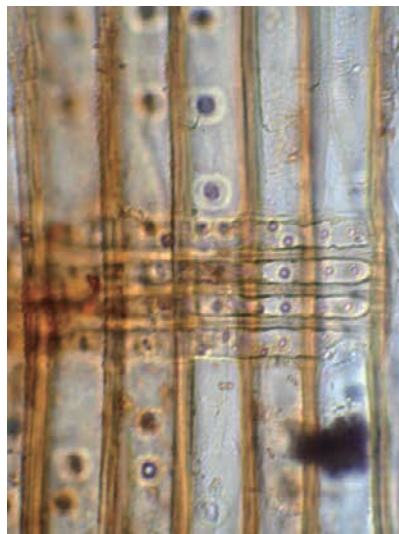
接線断面

0.1mm



横断面  
ヒノキ No.76 曲物 蓋 9次30-2 SK917

0.1mm



放射断面

0.1mm



接線断面

0.1mm



# 報告書抄録

ふりがな	まつさかじょうかまちいせき (だい1～9じ) はくつちょうさほうこく							
書名	松坂城下町遺跡 (第1～9次) 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	400							
編著者名	森川常厚 (編)、櫻井拓馬、水谷侃司、渡辺和仁							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2021 (令和3) 年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつさかじょうかまちいせき 松坂城下町遺跡	まつさかしほんまち 松阪市本町	24204	a769	34度 47分 47秒	136度 31分 55秒	20080414 ～ 20200325	2,270㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
松坂城下町遺跡	城下町	平安～江戸		土坑・井戸・溝 ピット 湿地状堆積		土器・陶磁器・瓦 木製品・金属製品 動植物遺体		城下町の総堀を確認
要 約	<p>松坂城下町は、天正16年 (1588)、蒲生氏郷が松坂城築城に際し松ヶ島城下から移転整備した城下町である。城下には伊勢街道が引き込まれ、江戸店持ちの伊勢商人が集住し商都として栄えた。</p> <p>調査地は、大手道に沿った城下町東外縁部で、旧町名では本町・大手・紺屋・工屋・袋・湯屋・博労・外博労町にあたる。道路建設や電線共同溝工事等に合わせて工事立会・発掘調査を実施し、城下を囲む総構えの堀 (総堀)、江戸時代の整地層や井戸・便槽等の町屋関連遺構を確認した。また、湿地状堆積から、動植物遺体や木製品など多くの遺物が得られた。総堀と湿地状堆積は18世紀前半までに埋没し、以後、町屋や街路・下水路に変わったとみられる。</p> <p>出土土器・陶磁器は、南伊勢系土師器、瀬戸・美濃や常滑産陶器、肥前陶磁器を中心とし、侍屋敷 (殿町) と類似した陶磁器組成がみられる。茶道具や香炉の優品も一定みられた。木製品は白木の箸や曲物片などである。動物遺体は貝類が多く、その構成は名古屋城三の丸跡や三都の武家屋敷に類似しており、食用価値の高いものを選択的に利用したと考えられる。</p> <p>動植物遺体の同定や古土壌・湿地状堆積の土壌分析により、城下町形成前・形成後の古環境に関する資料を得た。</p> <p>なお、下層には平安末～鎌倉時代の遺構がみられ、阪内川周辺の自然堤防から松坂城三の丸周辺の段丘上に当該期の集落が存在するとみられる。</p>							



---

三重県埋蔵文化財調査報告 400

松坂城下町遺跡（第1～9次）発掘調査報告  
～松阪市本町～

2021（令和3）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 共立印刷株式会社

---









